

steam and gunpowder
smoke chronicles

張り子のキメラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目覚めたら見知らぬ森に倒れていた主人公は、そこがかってプレイしたゲーム『ポンコツ浪漫大活劇バンピートロット』の世界だと知る。

ゲーム本編開始までの時間を考えると、全ての不幸の連鎖を断ち切ることはできないが、せめて愛着のある登場人物たちを救いのある結末に導いてやりたい。

そんな原作知識のある転移者が、時には原作キャラと肩を並べて戦い、時には影ながら助けてハッピーエンドを目指すお話。

目次

第1章 プロローグ

1話	転移	1
2話	盗賊のアジトに潜入1	5
3話	盗賊のアジトに潜入2	14
4話	盗賊のアジトに潜入3	23
5話	盗賊のアジトから脱出	30
6話	ピジョン牧場に到着	39
7話	ナツメツグ博士に相談1	
8話	ナツメツグ博士に相談2	
56		
9話	初めてのネフロ	66

10話	穏やかな日常1	75
11話	穏やかな日常2	88
12話	穏やかな日常3	99
13話	穏やかな日々の終わり	
112		
14話	挑戦状	122
15話	シユナイダー戦	131
16話	開発の進捗	143
17話	もう一人の師	152
18話	潜水艦狩り	167
19話	僻地1	179
20話	僻地2	188
21話	大都会	197

22話	エルダー戦	210
23話	墓前	221
24話	仮面	232
25話	そして、物語は静かに動き出す	246
第2章 本編		
26話	伝説の幕開け	256
27話	ストーリー裏	270
28話	ドン・エレファント戦	282
29話	ネフロに帰還	291
30話	野外ライブ襲撃	300
31話	暫しの別れ	314

32話	ピジョン牧場	328
33話	予兆	340
34話	蚊帳の外	351
35話	解放	361
36話	凱旋	372
37話	一時帰宅	382
38話	トンネル事故発生	395
39話	画家と逃亡者	405
40話	廃屋のシスター、そしてレイ ブン砦に到着	415
41話	砂漠の商人と暗殺の準備	426
42話	暗殺	439

4 3 話	サブイベント完了×3	454	5 4 話	セントジョーンズ病院 前編	581
4 4 話	牙を研いで……	466	5 5 話	セントジョーンズ病院 後編	593
4 5 話	ヒンヤリ遺跡1	476	5 6 話	港町スームスームへ	605
4 6 話	ヒンヤリ遺跡2	486	5 7 話	船上コンサート	617
4 7 話	ヒンヤリ遺跡3	497	5 8 話	脅迫	628
4 8 話	砂漠1	509	5 9 話	情報収集 前編	636
4 9 話	砂漠2	518	6 0 話	情報収集 後編	649
5 0 話	砂漠3 (サンド・キャツスル 戦)	532	6 1 話	鉛玉の応酬	659
5 1 話	砂漠4	545	6 2 話	一件落着	669
5 2 話	到着、大都会	558	6 3 話	再会 前編	683
5 3 話	定期演奏会	570	6 4 話	再会 後編	696

72話	782	71話	771	70話	756	69話	746	68話	735	67話	66話	65話
ピジョン牧場へ帰還1		帰り道、そして少し寄り道		砂塵のキャンバス 後編		砂塵のキャンバス 中編		砂塵のキャンバス 前編		エレキギター開発の進捗	依頼完了報告	長い一日の終わり
											722	710
80話	1	79話	78話	77話	843	76話	827	75話	74話	802	73話	792
ピークルバトルーナメント		ピークルバトルーナメント	共に砂漠を超えて	出立の日		マルガリータの居る日常		ナツメツグ邸にご招待	ミームー村へ小旅行		ピジョン牧場へ帰還2	
	882		867	855					815			

2	81話	ビークルバトルトーナメント	894
3	(サフラン戦)	——	904
4	82話	ビークルバトルトーナメント	915
5	83話	ビークルバトルトーナメント	928
6	(シユナイダー戦)	——	943
7	(バナラ戦 前編)	——	958
8	86話	ビークルバトルトーナメント	972
8	(バナラ戦 後編)	——	1088
9	87話	ビークルバトルトーナメント	986
9	88話	ビークルバトルトーナメント	997
10	(エルダー戦)	——	1026
1043	89話	祝勝会 前編	1016
	90話	祝勝会 後編	1016
	91話	ウズラ山トンネル 前編	1055
	92話	ウズラ山トンネル 後編 (ス チーム・ハムレット戦)	1071
	93話	再びスームスームへ	1055
	94話	セントジョーンズ父子	1055

1205	103話	ガラガラ砂漠決戦2	1341
1195	102話	ガラガラ砂漠決戦1	1328
	101話	開戦へ	1315
	100話	コンドル砦で再会	1299
1153	99話	一時帰宅からの……	1282
	98話	市民軍	1269
	97話	油田占拠	1255
1115	96話	ナツメツグ邸の1コマ	1244
	95話	団欒	1227
	104話	ガラガラ砂漠決戦3	
	105話	家族のもとへ	
	106話	裏方	
	107話	山狩り	
	108話	紅い疾風 前編	
	109話	紅い疾風 後編	
	110話	砂漠の掟	
	111話	廃坑の街、そして最も厄介な敵	
	112話	ホトトギスの森は朱に染ま	
	113話	合流	

114話 潜入！ グランドファイナー

レ | 1355

115話 銃身は赤熱し……

1370 | 116話 生還 | 1391

117話 迫りくる脅威 | 1403

118話 襲撃の後 | 1413

119話 我が家へ…… | 1423

120話 内助の功 | 1434

121話 大空へ | 1447

122話 空中決戦！ グランドファイ

ナーレ1 | 1463

123話 空中決戦！ グランドファイ

134話 結婚式4 | 1630

ナーレ2 (ベルガモット戦) | 1475

124話 黒幕 | 1490

125話 追撃と包囲網 | 1504

126話 白い悪魔1 | 1517

127話 白い悪魔2 | 1530

128話 野望の終焉1 | 1546

129話 野望の終焉2 | 1561

130話 出航 | 1578

第3章 エンディング後

131話 結婚式1 | 1593

132話 結婚式2 | 1602

133話 結婚式3 | 1616

134話 結婚式4 | 1630

2話	愛機	前編	1769
1話	月日は巡り		1756
第4章 2プロローグ			
141話	あれから1年経つて……		1741
140話	紅の美女		1726
139話	確執と隔意		1708
138話	母親と弟子		1691
137話	地下にて		1677
1664	魅惑のスパイス	後編	
1648	魅惑のスパイス	前編	

3話	愛機	後編	1781
4話	再会		1789
5話	宵の口		1804
6話	召喚状		1814
7話	船旅		1826
8話	艦載ビークル		1841
9話	釣りと襲撃者		1854
10話	侵入者		1866
11話	王都ナツメツグ邸		1881
12話	商談と弊害		1893
13話	ガレージの語らい		1907
14話	王都観光	前編	1916
15話	王都観光	中編	1927

16話	王都観光	後編	1935
17話	謁見当日		1945
18話	孤児院		1955
19話	水力発電所		1969
20話	強敵(とも)との闘い		1981
21話	飛行テスト	前編	2001
22話	飛行テスト	後編	2010
23話	射撃場	前編	2042
24話	射撃場	後編	2037
25話	ネフロ闘技場支配人デーノ		2047
26話	夏の休息1		2062
	の憂鬱		

27話 夏の休息2

第1章 プロローグ

1話 転移

「(ハハ)は……」

都会では馴染みのない土と草の匂いで目を覚ました。

真っ先に俺の目に飛び込んできたのは、空を覆う背の高い木々だった。

視界と背中に伝わる固い感触から、俺は地面に直接寝ているのだと理解する。

「どうなってんだ、こりゃ……」

上体を起こして辺りを見回してみても、近くにテントやキャンプ用品の類は見つからない。

こんな森の中で拠点も拵えず、シートすら敷かず地面に寝っ転がるなど、現代人の感覚では考えられないことだ。

一体全体、俺は何故こんな場所に居るのか？

俺の最後の記憶といえ、久々の休日を昼間から惰眠を貪ることで堪能していたものだ。

ブラック企業に入社して数年、家でゲームをする時間を捻出することが最大の関心事である代わり映えない日常だった。

今の俺は気付いたら突然どこかの山の中に倒れていたことになる。

非日常への憧れから、長野県かどこかの山奥にまでやって来たのではないかとも考えたが、その可能性は限りなく低いという結論に至った。

何故なら、俺の服装がどう考えてもこの場に相応しい恰好ではないからだ。

着ているものは部屋着のパーカーにスウェット。

さしてファッションに興味が無い人間とはいえ、外出時にこの格好はないだろう。

部屋着にもかかわらず靴下とスニーカーを履いているところが妙だが、それでも山歩きを前提とした装備ではない。

キャンプ場の拠点から離れた場所で、頭を打って記憶が混乱しているパターンは無くなったな。

そもそも、キャンプやアウトドア系の趣味など俺には無かったはずだ。

そうなるかと誘拐か？

CIAの特殊部隊が自宅で寝ていた俺を拉致して山奥に……無いな。

こんな回りくどい始末をされるような覚えは無い。

「とりあえず移動するか」

ここに突っ立っていても始まらない。

俺は背中や尻の土を掃って歩き出した。

普通の遭難と違い、自分が来た道も街の方角など最低限の地理情報も不明なので、方向は完全に運任せだ。

移動中の俺はキャンプ中の記憶喪失と誘拐以外に、もう一つ夢のある可能性について考えていた。

俺くらいの歳ごろならば、誰でも一度は夢見たことがある異世界転移である。

小声で「ステータスオープン」やら「ファイヤーボール」やら言っていたのは見なかったことにしてもらいたい。

「まあ、そう都合よく異世界なんて無いよな……」

しかし、そんな俺の落胆は思いがけない形で裏切られることになる。

しばらく森を歩いたところで、俺は切り立った岩山の影に小規模な集落を見つけた。数軒の木造の小屋だけでなくトタンの建物もある。

建造物の周辺には金属のスクラップが散乱している。

中世に近い剣と魔法の世界ならこういったものにはお目にかかれないう。

「まあ、そうだろうね……」

ここが現代の地球であるという確信を強めながら集落に近づいた俺だったが、次の瞬間、俺は慌てて近くの木陰に身を隠した。

「っ！」

重厚な音を響かせながら、トタンの建物から二つの金属の塊が歩み出てきたのだ。

そう、文字通り歩いて出てきた。

自動車のボディに手足を付けたような高さ約四メートルのロボット。

あの物体には見覚えがある。

「トロットトビークルだと……」

2話 盗賊のアジトに潜入1

二〇〇五年にアイレムソフトウェアエンジニアリングから発売されたPS2のゲームソフト『ボンコツ浪漫大活劇バンピートロット』。

知る人ぞ知る名作だ。

産業革命期のパラレルワールドが舞台で、このゲームの世界では汽車や自動車の他にトロットビークルという二足歩行の乗り物が普及しており、戦闘、土木、農業、警察、消防とあらゆる局面で活躍している。

バンピートロットはそうした機械技術の発展に翻弄される人間たちのドラマを描いた作品だ。

主人公は自らのトロットビークルを駆り、仲間たちとの出会いやトラブルを経て激動の時代を駆け抜けることになる。

そんなゲームの中でしか目にしたことの無いロボットが、俺の目の前を闊歩しているのだ。

これは異世界転移の線が濃厚になってきたぞ。

確かに、トロットビークルのような四メートルの搭乗型ロボットを作ることは、現代

の地球の技術でも可能だろう。

バランスや立体的な挙動においてある程度のクオリティを確保するためには、機体のあちこちにセンサーやら何やらを搭載してコンピュータで制御することが必要だろうが、それでもあの大きさの重機と考えれば現代の科学で実現不可能な代物ではないはずだ。

しかし、現行の車両と重機の性能を鑑みれば、どう考えてもわざわざロボット型の汎用重機を製作する意味は無い。

二足歩行の乗り物の開発と重機の量産ではノウハウの蓄積量が違う。

コスパが段違いなのだ。

あんなものが二台も目の前に居る以上、これはバンピートロットの世界かそれに似た異世界に飛ばされたと考える方が自然だろう。

つい流れて身を隠してしまったが、このまま隠れていても始まらないな。

ビークルに乗っている彼らに話しかけてみるべきだろうか？

バンピートロットの世界はヨーロッパ風の街並みだったが、英語なら通じるかな。

生憎、日本語と英語が通じなかったらお手上げだ。

いや、待てよ。

バンピートロットの世界はRPGとはいえ魔物は居ない。フィールドの敵は全て盗賊団のビークルだった。

こんな山奥の集落に住んでいる彼らは、果たして日向を歩いている人間だろうか？ 奴らが盗賊だった場合、接触すれば俺は確実に詰む。

何せこつちはスウェットにパーカーの丸腰だからな。

まずはビークル乗りたちの話が聞こえないか試してみよう。

俺は木の陰に隠れながらゆつくりと集落の方に近づいた。

「なあ、お頭はまた寝てんのか？」

「ああ、相変わらずだ。まあ、ここ最近はいい獲物が掛かってねえからな。頭領もやる気も起きねえんだろうよ」

「そうだなあ。たまにはガツンと稼いでみてえ。ネフロに向かう商隊でも通らねえかな」

「無理だろ。俺たちはそういう競争率の高いところは避けてんだ。一回の襲撃の実入りが少ないのは、今に始まったことじゃねえだろ」

「だよなあ。その割に、痕跡を消せだの何だのとお頭はうるせえし……」

「馬鹿！ そりやお前、生存戦略だ。うちみたいな看板の無い弱小が、襲った奴を生かして帰してみろ。あつという間に警察に潰されるぞ」

何故かはわからないが、この世界の公用語は日本語のようだ。

それにしても……今の会話だけでもわかったな。

こいつらは盗賊だ。

バンピートロットに登場する盗賊団の中には、キラーエレファント団然りデザートホーネット団然り、主人公が友誼を結ぶ連中も居ることには居るが、こいつらに話を通じる可能性はゼロに近い。

何せ、襲った相手を皆殺しにしているような奴らだからな。

そもそも、トロットビークルの存在やゲームに登場した街ネフロの名前は確認できたものの、どこまでが原作と同じか分からない状態だ。

知っている盗賊団でも、問答無用でぶつ殺すことを前提に動かないと、こちらが危機に陥る可能性がある。

さて、どうするか？

丸腰の俺が突っ込んで返り討ちに遭うのは確実だ。

一旦、森から脱出して警察に応援を頼むか？

いや、原作では警察にも色々と腐ったところがあつた記憶が……。

そもそも、盗賊団はビークルでアジトの周辺を巡回している。

果たして見つからずに離脱できるかどうか……。

発見されて追われたら確実に捕まる。

何せこっちは徒歩だ。

しばらく思案に耽った俺は、とりあえず盗賊のアジトに潜入してみることに決めた。何も盗賊全員を暗殺する必要は無い。

周辺の地図と食料物資でも調達できれば幸いだ。

あとできれば武器の一つでも欲しいところだ

可能ならばビークルを一台、無理ならナイフの一本でも分捕ればそれでいい。まず手始めに手前の木造の小屋に侵入しよう。

窓から覗いた木造家屋の中は、どうやら食堂かラウンジのようだ。

大きめのテーブルが二脚に椅子が十数脚、薄汚れたキッチンが奥に見える。

椅子の数から察するに、盗賊の規模は十数人か。

多いのか少ないのかわからんな。

ダイニングに居るのは一名。

髭面のいかにも盗賊といった風貌の男だが、どうやら休憩中のようだ。椅子に座って居眠りをしている。

俺は先ほど拾ったこぶし大の石を握り締め、慎重に家屋に忍び込んだ。

建てつけが悪いのか、扉はドアノブを捻る必要も無く簡単に開いた。

そのまま足音を立てないように身を滑り込ませるが……。

……キィ。

「んあ？」

「っ！」

ドアが閉まる拍子に軋んだことで、眠っていた盗賊が目を覚ましかけた。

まずい。

俺は覚悟を決め、身を起こして盗賊に襲い掛かった。

「なっ！ てめっ……！」

そのまま椅子ごとひっくり返す勢いでタックルをぶちかまし、喉を掴んで後頭部を床に叩きつける。

幸い、体格は俺の方が上だ。

マウントポジションを取れば、そう簡単に状況は覆されない。

「ヴェ……！」

そのまま首を絞めながら、既に後頭部から大量の血を流している盗賊に追い打ちを掛ける。

俺は石を握った右手を盗賊の頭に向かって何度も振り下ろした。

「うぎっ！ かつ、やめっ……」

殺さなければ自分が殺される。

そう自分に言い聞かせて恐怖を原動力に殴り続けたものの、さすがに現代の日本で生きてきた人間だけに、すぐに適応することはできない。

無我夢中で殴り続け、盗賊の頭が原型を留めない状態になっても、さらに石を振り下ろし続けた。

「くっ……はあ……はあ……」

ようやく、盗賊の全身から力が抜けたことに気が付いた。

完全に死んでいるはずだが、警戒を解くのは怖い。

俺は右手で石を握りしめたまま、どうにか左手を盗賊の喉から外す。

首を絞めて押さえつけることに集中し過ぎたせいで、引き千切ってしまった喉の肉塊が手に付いてきた。

「……………うえ」

派手に吐くのは堪えたが、俺はしばらく血の匂いに酔ったように茫然とした。

気を取り直して家探しを始めた俺は、まずはキッチンを探った。

食料は意外と充実している。

商人から奪ったのか、森の恵みなのか……。

とりあえずは日持ちのする干し肉と固く焼しめたパンを中心に貰っていこう。果物ばかり詰めて、森を出る前に腐ったら元も子もない。

同じ家屋内で拾った鞆にいっぱいになるまで詰める。

マツチと金属製の水筒と錆びた包丁を失敬して、最低限の物資は手に入れた。

「さて、これでおさらばしてもいいんだが……」

あとは清流を見つけることができれば、野垂れ死には避けられるはずだ。

しかし、肝心の地図が無い。

確かに、これ以上アジトに居続けるのは危険だろう。

侵入がバレる前に離れた方がいいのはわかっている。

しかし、人里の方角すら分からずに森へ戻るのは不安すぎるのだ。

窓の外に見える一番立派な家屋が頭領の居る建物だろう。

地図やこれ以上に有用な物資があるとすればあそこだ。

しかし、潜入には大きなリスクが伴う。

「……いや、やるしかない」

俺は既に盜賊の仲間を殺している。

報復の危機を避けるためにも、可能ならば頭を始末しておいた方がいいだろう。

他に見張りが居たら諦めればいい。
とりあえずは偵察だ。

3話 盗賊のアジトに潜入2

俺の心配は杞憂だったようだ。

頭領の家には見張りも居らず、簡単に侵入できた。

先ほど話を盗み聞きした盗賊も言っていたように、ここら辺は競争率が低く無法者とはいえ腑抜けが多いのだろうか？

襲った連中から奪ったと思わしき貴金属や貨幣が、家の一階にちよいちよい放置されている。

盗賊のアジトにしてはシケてるな。

足音を立てないように家の奥へ進み、デカイ軒が聞こえる部屋に慎重に近づく。

包丁を構えてドアをゆっくりと開けると、ベッドの上で闖入者に気付く素振りも見せず呑気に大軒をかいて眠る男を発見した。

この男が盗賊のボスだろう。

足音と気配を殺して頭領の部屋に侵入した俺は、迷うことなく頭領の心臓に包丁を突き立てた。

「っー…ぶぐうー！」

ベッドの近くにあったクッションを顔に押し付け、俺自身も馬乗りになって頭領の動きを封じる。

「ぶえーばお……」

しばらくは弱々しくもがいていた頭領だが、包丁をさらに捻じると全身の力が抜けた。

念のため傷を広げながら包丁を引き抜き、男をひっくり返して延髄を抉っておく。

「さて、地図は……」

二回目ともなると、俺の復帰も早かった。

睨んだ通り、頭領の家からは周辺地図が見つかった。

ビークルに乗った盗賊の話にもあった通り、ここはネフロネフロの街の近くの森林地帯らしい。

厳密に言うと、ネフロの東にあるワグテール渓谷、その東のピジョン牧場のさらに東の森だ。

ゲームではピジョン牧場より東のエリアへは行けなかった。

ここは原作の舞台から僅かに外れた位置にある森ということだな。

バンピートロットのゲームは主人公がネフロ西のウミネコ海岸に漂着したところか

ら物語が始まる。

ネフロはRPGで言うところの『さいしよのまち』だ。

大都会には程遠いが、ここら辺一帯では一番大きな設備の揃っている歴史のある街である。

まずは森から脱出してネフロを目指すか？

いや、普通の人間ならそのルートを取るだろうが、俺にはバンピートロットをやり込んだ経験がある。

目的地はピジョン牧場だ。

ただ近いからというわけではない。

あそこには、トロットビークルを発明した世紀の天才、ナツメツグ博士が居る。

彼なら俺の状況について何かわかるかもしれない。

原作でそれほど叡智チートや世界の理から外れた知識の描写があつたわけではないが、少なくともこの世界で一番頭がいい人物なのは確かだ。

何せ、紙飛行機からプロペラ機ビークルを発明してしまう人だからな。

よし、アジトを漁ったら西へ向かうとしよう。

「おつ、これは……」

頭領の部屋では思いもよらぬ収穫があった。

机を漁っていたら、引き出しから重量感のある金属の塊が出てきた。

黒光りする筒に回転弾倉、クルミ材のような硬質の木製グリップはよく手に馴染む。

リボルバー拳銃だった。

バレルの長さは約四インチ。

シリンダーをスイングアウトさせるサムピースが前に押し出す形状だったことからS & W社製のリボルバーと同じ機構の銃だと思われる。

「全体的な形状で、一番近いのはS & W M10かな」

S & W M10はミリタリー&ポリスなどとも称され、ダブルアクションの現代リボルバーの原点となった拳銃だ。

原作では、ビークルの武装に関してはミサイルからガトリングまであったが、人間が携行する銃器はデリンジャーくらいしか登場しなかった。

このリボルバーが小型の銃器として最新のものかどうかは分からないが、少なくとも今の俺にとっては懐にあってこれほど心強いものは無い。

「いただきだ」

引き出しの中にあつた弾丸をシリンダーに込めなおした。

「さて……」

「ボス！ 大変です、エミリオの奴が食堂で……」

「っ！」

突如、家に踏み込んできた盗賊と俺はしばし見つめ合う形で固まった。

家の入り口からは頭領の死体が横たわるベッドは見えないだろうが、この状況を口八丁で乗り切るのは無理か。

「おい！ 誰だ、てめ……」

俺は覚悟を決めて、男に向かってリボルバーを発砲した。

両手でグリップをがっちり握り締めて、相手の胴体に向かって二発。

人間を確実に無力化する基本的な射撃動作だ。

「……………」

血を吐きながら倒れた男に近づき、頭にもう一発撃ち込んでとどめを刺した。

閉鎖空間で銃を発砲したためちよつと耳が痛い、俺は堪えて拳銃をリロードする。

サムピースを押してシリンダーをスイングアウトし、エジエクターロッドを押して机の上に弾丸をばら撒いた。

震える手でどうにか空薬莖を除けて、弾頭の付いている弾丸を拾い、再度シリンダーに弾を込めなおしてゆく。

「ああ、くそっ！」

手が滑って弾丸を床に落としてしまいが、どうにか引き出しの弾丸をさらにつかみ出してリロードを終えた。

「逃げなきゃ……」

そのまま走って飛び出そうとするが、先ほど銃声で盗賊の仲間が集まってきている可能性を思い出し、どうにか思い留まった。

俺の武装は拳銃一丁に先ほど頭領の部屋から持ち出したちよつと品質の良さそうなナイフが数本。

どう考えてもビークル相手に正面から戦えるものではない。

その時、俺は頭領の机の隅に一つの鍵を見つけた。

「車のキー、いやトロットビークルのキーか」

俺は何を考えているんだ？

確かに、こちらにもビークルがあれば装備の上では互角だ。

しかし、俺がビークルを操縦したのはゲームの中での話だ。

いきなりの戦闘、それも荒事に慣れている盗賊団相手にどうにかなるものなのか？

逃げるにしたって、まともにビークルを操縦できなかつたらお終いだ。

「おい、今のは……」

「何が起こっている!？」

「っ! 死んでる! 撃たれてるぞ」

「誰がやった!？」

いや、やるしかない。

ここに居たら、どちらにせよ捕まって殺される。

ビークルの場所は確認してある。

この家に入る前に、裏に停めてあるのを確認した。

きつと、あれが親分のビークルだろう。

俺はせめてもの時間稼ぎに部屋のドアに鍵を掛けると、ビークルのキーを引っ掴んで窓を開けて家の外に飛び出した。

頭領のトロットビークルはゲームでも慣れ親しんだ汎用型のものだった。

四足や車輪を装備したものや超大型や船型のマシンもビークル扱いされることがあるのだが、一番普及しているのはラズベリーリーフ社製『カモミールⅡ』の二足歩行タイプだ。

この『カモミールⅡ』は代表的な汎用ビークルで、ボディパーツとレッグパーツを基礎に、左右のアーム、ブレスト、バック、風防の七種類のパーツの結合規格が統一され

ており、それぞれのパーツを組み合わせてカスタマイズできる。

ゲームでは主人公はもちろん、主要な登場人物のほとんどがこの『カモミールⅡ』をベースにしたビークルに搭乗している。

しかし、フィールドの盗賊団の敵ビークルは、ほとんどが独自に改造した規格で生産しているのだ。

例えば、ネフロ周辺のキラエエレファント団のビークル『ルースター』は、砲台と簡易シールドのみを装備した低コストでの大量生産を優先した規格で配備されている。

実際に『カモミールⅡ』ベースのビークルに搭乗しているのは、ゲーム内の決闘システムのようなものであるビークルバトルで戦える親分のみである。

この世界がどこまで原作に沿っているかはわからないが、少なくともこの盗賊団は汎用型ビークルを使用しているようだ。

トタンの建物から出撃してきたビークルも全て汎用タイプだ。

こいつらは他の仕事に従事していたビークル乗りの寄せ集めの盗賊団ということかな。

「どっ!？」

「侵入者を探せ!」

俺はブレストパーツに足を掛けてよじ登りコクピットに潜り込むと、先ほどかっぱ

らったキーを捻った。

重厚なエンジン音が鳴り響き、ついにトロットビークルが稼働した。

4話 盗賊のアジトに潜入3

エンジンを掛けたビークルに搭乗した俺は、まずコクピットのわかりやすさに驚いた。

目の前にあるハンドルの下にはトリガーとボタン付きのレバーが二本、足元にはペダルが二つだ。

他にも小さいレバーやスイッチはあるが、とりあえずはこの目立つ装置が基本になるようだ。

原作でのビークルの操縦は、PS2コントローラーの二本のスティックを使って移動させる。

開発者インタビューで、ワンレバーでは操作が表現しきれず、昔のラジコン戦車から着想を得たと言っていたな。

実際にハンドルを動かしてみるが、操作はかなり原作に近い。

前進後退と左右への平行移動は、原作では両スティックの同じ方向への入力だが、このビークルはハンドルの前後左右への移動だ。

旋回は左右のスティックを逆方向へ入力——右旋回なら左スティックを前に右ス

ティックを後ろに——だったが、これはハンドルを切れば同様に動く。

スティック片方入力は、基本的にゆっくり移動する動作なので、これはハンドル移動を浅くすれば再現できる。

「わかりやすいな」

さすがにのロックオンは現実のビークルでは不可能だが、それは仕方ないだろう。

因みに、ハンドルを引き上げたり押し込んだりすることで、ビークルの上体を上下に傾けることができた。

旅客機の操縦桿と同じか。

原作では、ロックオンした敵に自動で視点を合わせる動き以外での上下の視点移動は、×ボタンでその場から動けない見回しモードにする必要があったが、そういうところも現実では対応されている。

基本的な移動操作は理解した。

ペダルも左がダッシュで右がジャンプなので、原作のL2ボタンとR2ボタンと同じように対応している。

次はアームの操作だな。

アームパーツはハンドルの下に突き出ている二本のレバーを使って操作するようだ。

原作では、ロックオンしてR1とL1でそれぞれのアームの武装を使用するか、ス

ティック押し込みで敵や物体を持ち上げて投げればよかったが、現実ではそうもいかない。

二つのレバーで精密に操作する必要があるようだ。

トリガーが発砲なのは分かるが、親指で操作するスイッチは……ああ、手の開閉か。物を掴む練習も必要だな。

しかし、このビークルは右に砲弾アームのような射撃武器、左にはシールドを装備している射撃型のビークルだ。

原作ではあまり使わなかったパターンだ。

果たしてうまく操れるかどうか。

「おい、家の裏だ！ ビークルの音だぞ！」

「サツか!？」

どうやら敵は待つてはくれないようだ。

ビークルの足音は一大や二台じゃない。

外に出ていた奴らも戻って来たと見るべきだろう。

家の中には先ほど踏み込んできた男たちの様子が窓から見える。

奴らがビークルに乗ったら面倒だな。

俺は右のレバーで砲弾アームを動かしてトリガーを引いた。

次の瞬間、想像していたよりも軽い発射音とともに砲弾が飛び出し、原作よりも遙かに速いスピードで飛翔した。

砲弾アームはビークルの武装としては最下級の射撃武器だが、人間が携行する銃器に比べれば遥かに大口径の火砲だ。

少なく見積もっても口径は四センチある。

現代なら簡易的な迫撃砲として使われるグレネードランチャーの口径だ。

40×46mmグレネードよりは内蔵する爆薬の問題で火力は落ちるだろうが、それでも生身の人間が食らって無事でいられるものではない。

着弾点の近くに居た盗賊たちは、爆風と家屋の床の破片などを全身に受けて、ほとんどが死ぬか重傷を負うかして無力化された。

「裏だ！ 裏に回れ！」

発砲音を聞きつけて頭領の家の横から回ってきたビークルが角から顔を出した瞬間、俺はそのビークルのコクピットを撃ち抜いた。

「くっ！」

砲弾は風防パーツのロールバーを吹き飛ばしたただけで終わったので、俺は慌てて二発目の引き金を引いた。

しかし、砲弾の発射は一瞬遅れてしまい狙いが逸れた。

原作の砲弾アームは一本の筒で構成されており、二十五発の装弾数とは裏腹に弾倉はどこにも無い。

しかし、現実ではそうもいかないわけで、アームとボディの後ろに弾薬ボックスが装備されている。

この装填装置の限界が発射速度になるわけだ。

どうやら原作よりもさらに発射速度は遅いようで、今の射撃はミスってしまった。

「ぐわっ！」

しかし、運よく命中したのは燃料タンクだったようで、爆炎は近くに居た他の盗賊のビークルの操縦手も巻き添えにした。

「囲め、囲むんだ！」

迫り来る数機のビークルに不利を悟った俺は、爆炎で顔を焦がした操縦手の乗るビークルに左のアームを伸ばした。

そのまま片方のアームで敵のビークルを引っ掴んだ状態のまま、俺は自分のビークルを横移動させて敵から見て後ろ側に回る。

「くそがつ！」

まだ生きている仲間を盾にされた盗賊は、やけくそ気味に砲弾アームを発射するが、

狙いは逸れて俺の後ろに着弾した。

こちらの砲弾は既に装填し終わっている。

俺は右のアームを操作して狙いを定め、またしても相手のコクピットを狙って砲弾を発射した。

今度は綺麗に命中した。

爆風と操縦席の破片で、乗っていた盗賊は重症だ。

「ひいー」

怯んでいる盗賊から確実に狙う。

相変わらず顔を焼かれてもがいている盗賊のビークルを盾にしながら横滑りに移動し、続けて二台のビークルも操縦手を撃ち抜くことで沈黙させた。

「死ねえー」

最後の一人は蛮勇を振るって跳躍しながら俺に接近し、空中でソードアームを振り下ろしてきた。

ソードアームもゲームでは最初期に登場する攻撃用パーツで、名前の通り近接攻撃用のアームパーツだ。

俺は先ほどまで盾にしていたビークルを手放すと、勢いよく左のペダルを踏みこんだ。

スラスターが作動し、横合いから接近する最後の盗賊のビークルに向かって、ボディパーツから衝突する。

俺のビークルにもかなりの衝撃を受けたが、空中でバランスを崩された相手のビークルは着地と同時に横倒しになる。

「がつー！ 野郎……」

どういわけかビークルには自動で立ち上がるシステムが組み込まれているらしく、敵ビークルは自動で立ち上がろうとするが、それを待つほどお人よしじゃない。

俺は眼下の盗賊に対して左のシールドアームを振りかぶった。

「つー！ やめっ」

原作ではシールドアーム自体の攻撃力など無いも同然だったが現実では違う。

俺が振り下ろしたシールドは高重量の打撃武器となり、コクピットの男を無残に叩き潰した。

5話 盗賊のアジトから脱出

トロットビークルに乗って一通り集落を見て回り、隠れている者が居ないのを確認した俺は、拳銃を握り締めてさらに一つ一つの家屋の中を検めた。

生存者は居ない。

どうやら、先ほど頭領の家の中で止めを刺した奴で最後だったようだ。

まあ、もつと離れた場所に他の仲間が居ないとも限らない。

ありつたけの物資を掻っ攫ったら、早めに逃げた方がいいな。

まずはビークルの整備場と思わしきタン小屋の中身を持ち出すことにした。

中で最初に目に付いたのは、手入れの行き届いた四台のトロットビークルだ。

恐らく、頭領の家の中でくたばった連中か食堂で始末した奴のビークルだろう。

今、俺が乗っているのは先ほどの戦いに使い、ソードアームの攻撃をボディに受けて

傷ついているものだ。

うん、乗り換えよう。

問題はどれを選ぶかだが、すぐに決めることができた。

何故なら、整備場内のビークルの内三台は両腕が砲弾アームか、もしくは武器パーツを装備しているのは片腕だけだったからだ。

俺のゲームでのスタイルは右手に近接武器で左手に射撃武器。

右にソードアームで左に砲弾アームを装備したビークルが、ゲームで使っていたビークルの感覚に近い。

整備場内で見つけたキーを使ってエンジンをかけ、俺は新しいビークルに乗って、建物内の物資を運び出した。

トロットビークルが手に入ったので、遠慮なくアジトのほとんどの物資を頂戴した。

俺が搭乗できるビークルは一台なので、さすがに全ての物資を積み込むのは厳しいかと思っただが、整備場で牽引用のアタッチメントを手に入れたのだ。

無人のビークルの脚を車輪付きの台に載せて、連結して俺が搭乗するビークルで引く装置だ。

これを使えば他のビークルも全て引つ張って行くことができる。

燃料タンクを撃ち抜いて大破させたビークルを除いて、新品のビークルを三台、血塗れだが損傷が軽微なビークルを五台、それに先ほどまで乗っていた頭領のビークル。

俺が乗るやつ以外に九台のビークルがあるので、積める荷物も相当な量になる。

まず、整備場内の資材と燃料は全ていただいた。

これだけあればピジョン牧場に着くまでにガス欠になることはないだろう。

大破したビークルの残骸も勿体ないので、無人ビークルのキャリアーに積んでいこう。

次に食堂の建物にあった食料と食器に調理器具、あとは頭領の家とそれぞれの家屋にあつた金品を頂戴した。

盗賊のアジトにしては、金銀財宝の類はそれほど見つからなかったが、貨幣はある程度まとまった額が手に入ったと思う。

バンピートロットの世界の貨幣はUR（ユーロッチ）という何ともシユールなネーミングセンスを感じる単位の通貨が流通しており、パンが大体10URだったことを考えれば1UR＝10円ほどだと思う。

しかし、ビークルのパーツが数百URを相場にして、最高クオリティの武器アームが数千URだと言うのだから謎の単位だった。

これは銅の剣や鉄の剣が数千円で、天〇の剣が数万円で買えるのと同じだ。

普通に考えてあり得ない話だろう。

この世界ではどうなっていることやら……。

まあ、少なくとも銀貨に1000URと書いてあり、これが百枚以上あるので、たと

え金以外の戦利品が相応な額で処分できなくても、しばらくは生活するのに困らないはずだ。

あと……気は進まないが盗賊の死体も運ばないとな。

懸賞金が出るのか不明だが、もしも奴らの首に賞金が付いているのなら逃すのは惜しい。

疫病対策の観点から言うときつささと燃やしてしまいたいが、討伐が確認できない状態で報酬を払ってもらうことは難しいだろう。

この世界の懸賞金のシステムがわからないからな。

首だけ持って行けばいいのか、指紋を取る指だけ持って行けばいいのか……。

そこら辺が不明な以上、全身を持って行くしかあるまい。

せめて要らない樽や木箱に詰めよう。

盗賊団のアジトからある程度離れた森の中の川辺で、俺はビークルを停泊させてキャンプを張った。

マッチがあるので火熾しにそれほど苦労しなかったのが幸いだ。

奪った調理器具と食材で簡単なスープを作り、パンを浸して平らげた。

鞆一つ分しか持ち出せなかったら、硬い干し肉だけの飯だったこともあり得る。

厨房の中身を丸々持ち出せたのも幸運だったな。

生鮮食品から消費するべきだと自分に言い訳し、人参や玉ねぎにベーコンらしき生に近い干し肉を使ったスープはなかなか美味しく美味だった。

食事を終える頃には、すっかり日も暮れてしまった。

今日はもうこれ以上の移動はできないだろう。

一度煮沸した湯をカップに入れて飲みながら、俺は今日のことを思い返した。

森の中で倒れていることから始まり、盗賊団を一つ壊滅させて皆殺しに、ここがバンピートロットの世界だとあたりを付けて、稀代の天才ナツメッグ博士の居るピジョン牧場を目指している。

日本に居た頃の俺に話したところで、まあ信じるわけがない荒唐無稽な話だ。

二十一世紀の若者として人並みに異世界転生への憧れは持っていたが、まさかスチームパンクのゲームの世界とはな。

とにかく、今はナツメッグ博士に接触することが最優先だ。

彼と話せば元の世界のことかわかるかもしれないし、これからの身の振り方を考えるためにも彼の意見を聞いておきたい。

分捕ったビークルや資材もナツメッグ博士のところに持って行けば何かに役立ててくれるかもしれない。

まずはナツメツグ博士をはじめとして、バンピートロットの主要人物との接触を始めるべきだな。

ゲーム本編に対して今がどの時期なのか不明だが、もしもエンディング前なのであれば、これからバンピートロットの登場人物を中心に、この世界には激動の時代が訪れることになる。

生き抜いていくためには、彼らとの縁も必要になってくるだろう。

しかし、俺は本当に元の世界に戻れるのだろうか？

魔法的な要素をほとんど含まない作品の世界という時点で、その難易度は既に数段上である気がする。

いや、そもそも俺は本当に戻りたいのか？

今の俺は、原作の知識を生かして、この世界でどう生き抜こうかを考えている。大好きでやり込んだゲームの世界。

どうやら俺に膨大な魔力やチートは無いようだが、それでも俺はゲームの経験を活かして、日本でブラック企業に勤め続けるよりは幸せな人生を送れる気がする。

まあ、既に原作とは違う要素に直面して死にかけているわけだが……。

ゲームのフィールドの外のエリアに放り出され、原作では全く登場しなかった敵と紙一重の殺し合いをするハメになった。

この世界で生きていくのは簡単なことではない。

俺は、どうするべきなんだ……？

「うっ……朝か」

ビークルのコクピットで毛布に包まり夜を明かした俺は、何事もなく朝を迎えられたことに安堵した。

シートの下に隠していた拳銃も無事だ。

一度シリンドラーを開いて軽くチェックして鞆に予備のナイフと一緒に納める。

親分の家から根こそぎ持ちだした十数発の予備の弾丸も、布で包んで鞆に仕舞ってある。

どちらも即応性に欠ける装備の仕方だ。

「弾丸は最悪ポケットでもいいが、ホルスターは欲しいな」

皮革加工の店や職人がピジョン牧場に居ないものか。

無理ならネフロで探すしかないな。

牽引していたビークルにも変わった様子は無い。

盗賊の生き残りが追って来るのではないかと心配していたが杞憂だったようだな。

もしかしたら、アジトには残党が戻ってきている可能性もあるが、さすがにこれ以上

は一人で危険を冒すのは勘弁だ。

川の水で顔を洗い、焚火でお湯を沸かしてこれも盗賊のアジトから持ってきたタオルで体を拭く。

「はあ……石鹸が欲しい」

当然、盗賊のアジトにそんな気の利いたものはあるはずもなく。

ナツメツグ博士は作れるだろうか？

「あと……街に行ったら、まずは服を新調しないとな」

俺の恰好は相変わらずスウェットにパーカー、スニーカーだ。

汚れの少ない布切れを再度洗ってタオル代わりにするのならともかく、盗賊の服を奪う気にはなれなかった。

家探しをしても、予備の服はほとんど見つからず、あってもボロボロで臭くて着れたものではなかったのだ。

ナツメツグ博士に会ったら、一刻も早くネフロで服を買わないと。

牽引するビークルを全て確認した俺は、自分が搭乗するビークルのエンジンをかけた。

静寂の森に響く鋼鉄の稼働音が心地いい。

まあ、環境には悪いことをしているわけだが、スチームパンクはいつまで経っても男

のロマンなのですよ。

「さて、行くか」

念には念を入れて地図を確認した俺は、ビークルのハンドルを握り締め、ピジョン牧場への移動を始めた。

6話 ピジョン牧場に到着

トロットビークルで森を歩き続けること数日。

ピジョン牧場の標識を見つけた。

街道に出してしばらく進むと、広大な牧草地に数軒の農家、丘の上にはゲームで見た通り実験工房を隣接した家が見えた。

あれがナツメツ博士の家か。

やはり、現実でもナツメツ博士の家は、一目でトロットビークル開発者の家だとわかる。

実験工房のデザインがモロにトロットビークルっぽいのだ。

手足の付いた工房などほかに無いだろう。

実は、あの実験工房自体が本物の大型ビークルになっており、飾りだと思っていたレッグパーツとアームパーツが起動して移動や戦闘が行えるのだが、ゲームでそれを知るのとは相当後の話だ。

「駅は……まだ無いな」

ゲームで初めてビジョン牧場を訪れるタイミングでは、ネフロから伸ばした線路の建設途中で、作業に従事する土木ビークルは居るものの、駅舎はどこにも無い。

ゲームを進めて中盤でもう一度訪れるとビジョン牧場駅は完成している。

今はネフロから伸びる線路すらどこにも見えない。

ということは、今はゲーム本編開始前ということか？

とにかく、とりあえずの目標であるビジョン牧場への到達は叶った。

早速、ナツメッグ博士に会いに行こう。

「ちよいと！ オットー、ウイリー。羊の世話はどうするんだい！」

「いいじゃないか、お袋。力仕事なら終わらせたぜ」

「僕たちが修理したビークルだね。んじや、エリツヒ。あとはよろしく」

「わかりました、兄さんたちも頑張ってください」

「あ、待ちなよ！」

一番大きな農家から出てきた連中には見覚えがあつた。

羊の酪農を営んでいるメリー乳業の一家だ。

あそこの親父さんが作るチーズは、ゲーム内では絶品とのことだったな。

子どもは三人兄弟で、上からオットー、ウイリー、エリツヒ。

一番下のエリツヒは幼いながらも真面目に羊の世話をしているしつかりものだ。

オットーとウイリーはトロットビークル弄りに夢中で、母親は上の二人には弟を見習ってほしいなどとよく愚痴をこぼしている。

あの一家の事情を簡単に説明するとそんなところだが、実はゲーム本編でもあの兄弟は重要な役割を担うことになる。

パイロットのオットーとメカニックのウイリーは、オーベルとウイルバーのライト兄弟よろしく、トロットビークルで空を飛ぼうとしているのだ。

彼らが繰り返していた飛行実験に関しては空回り感が強いが、ストーリー終盤では彼らの存在がキーになる。

ゲームで初めてピジョン牧場を訪れたときには、ちょうど飛行実験の真つ最中で、彼らのビークル「フラップフライヤー」が事故って主人公のビークルに衝突してくるのだ。

もう実験は始まっているのかな？

「ウイリー、行くぞ。俺たちの大空へ！」

「兄さん、まだ羽アームすら完成してないよ」

どうやら、「フラップフライヤー」の試作機はまだ出来ていないようだな。

「ん？ よう、そこの変な服の旦那。やけに大所帯だけど、羊のミルクの買い付けかい

「？」

「いやいや、兄さん。ピークル乗りでここに来るのは、ほとんどナツメツグ博士に用がある人だろ」

ナツメツグ博士の家に向かう途中で、オットーとウイリーが声を掛けてきた。

この二人の青年の見た目はゲームとほとんど変わらないな。

彼らの年からゲーム本編の時間とのずれを探るのは無理か。

オットーの言う大所帯とは、牽引している九台のピークルのことだろう。

まあ、無人とはいえこれだけのピークルを引き摺っていたら、ミルクの大量発注に来た商人にも見えるかもな。

つてか、変な服とは何だ!?

スウエットにパーカーと言えば、由緒正しき部屋着の王様だぞ。

……やめよう。部屋着で出歩いていることを意識し過ぎて恥ずかしくなってしまうた。

「ええ、ナツメツグ博士に相談したいことがありましたね」

「おいおい、旦那。そんな堅苦しいのはやめてくれって。俺はオットー、こっちは弟のウイリーってんだ」

「どうも」

「ああ、よろしく。俺は……グレイだ」

ここに来るまでに考えていた偽名を口にした。

バンピートロットの主要人物はハーブの名前が多く使用されており、この世界でも馴染みやすい名前を用意していたのだ。

トロットビークルがカモミールなので、紅茶繋がりでアールグレイから伯爵のアールを抜いてみた。

もし、元の世界に戻れなければ、俺は一生グレイとして生きていくことになるのだろう。

「おう、よろしくな」

「よろしく」

「で、グレイの旦那。ナツメッグ博士に用事はわかったが、その大荷物は一体何だい？」
「ああ、ちよつと盗賊団を潰したんでね。これは別件」

まあ、場合によってはナツメッグ博士に相談するが。

戦利品のビークルやスクラップの扱いに……どうにか腐らせずに持ってきた盗賊の遺体の始末についても聞かなければ。

「へえ〜！ 旦那、強いんだな〜」

「こりやたまげた」

俺はウイリーの後ろにある整備途中のビークルに視線をやった。

「ところで、二人は何を？」

「よくぞ聞いてくれた！ 俺たちは！ この大空へ羽ばたこうと思っているんだ!!」

「まあ、端的に言うのとトロットビークルに羽を取り付けて空を飛べないかなって考えているわけで……まだ、パーツも開発途中なんだけどね」

興奮して端折りまくるオットーにウイリーが補足した。

「そういえば、ゲームで最初にオットーとウイリーに会ったとき、「フラップフライヤー」は鳥の羽のようなパーツを付けて羽ばたいて飛ぼうとしていた。」

当然、そんな力で鉄の塊のトロットビークルが空を飛ぶことなど不可能なわけだが。

「グレイさんも、無理だと思ukai?」

何気ないウイリーの質問だったが、俺は慎重に言葉を選んだ。

結論から言うと、ゲーム終盤で最終的に飛行ビークルは完成する。

しかし、そのイベントにはラスボスとの最終決戦が関わっている。

ゲーム本編の終盤で主人公たちが対峙することになる巨悪は、潤沢な資金にも関わらせてグランドフィナーレという絶妙な名前の付いた巨大兵器、地球でいうところの飛行船を開発するのだ。

射程外の上空からの攻撃に成す術が無いところ、主人公陣営は空飛ぶビークルを完成させて立ち向かうことになる。

そうなると、無闇に技術を伝えるのは危険だ。

最悪、オットーとウィリー兄弟やナツメッグ博士などより早く、敵に技術を利用されることになるだろう。

「いつかは可能になるだろうな。君たちの研鑽は無駄にはならないだろう」

「そっか、ありがとう」

もしかしたら、彼らの技術と試行錯誤がナツメッグ博士のプロペラ機ビークルの開発に役立っていたのかもしれない。

俺には航空工学なんてさっぱりだからな。

彼らの墜落を無駄と決めつけるのは早計だろう。

「おお、話が分かるじゃねえか！ 旦那！」

オットーの奴は能天気だな。

頼むから苗字はリリエンタールにならないでくれよ。

ナツメッグ博士の家の前にビークルを駐機し、俺は扉をノックした。

当然、答えは返ってこない。

「予想はしていたけどな……」

俺は失礼とは思いながらも、扉を開いて家に足を踏み入れた。

見た感じ、ゲームよりも家の間取りは広そうだ。

それはそうか。

何故かゲームでは博士の家には作業室しかなかった。

ベッドもトイレも風呂も、キッチンすら無かったのだ。

あれではさすがに生活できないだろう。

玄関から入ると壁と廊下が見えたので、奥に向かって再度声を掛ける。

「ごめんください」

またしても返事は無い。

デジャヴだ。

原作でも主人公が訪れたときは作業の真つ最中だった。

今回も目の前のことに集中しすぎて来客を無視しているのだろうか。

仕方なく廊下を進むと、すぐに壁一面に設計図が貼られて、床にスクラップが散乱している部屋を見つけた。

気配を感じて奥を見ると、小柄な老人が作業机に向かって黙々と手元を動かしている。

ゲームで見た通りのナツメッグ博士だった。

俺は三度声を掛けようとしたが、博士の手元を見た瞬間、口を噤んだ。

博士が組み立てていたものは、俺にとっても非常になじみの深い品だったのだ。

「アルトサックス……」

俺の眩きに博士の動きが止まった。

博士はゆっくりと視線を上げて俺を見据える。

「……お前さん」「外で待っておりませう。先にそれを完成させてください」

一方的に告げて、俺はナツメッグ博士の家の外に向かった。

7話 ナツメツグ博士に相談1

ナツメツグ博士は機械工学のみならず医学にも明るく楽器製作もこなす天才という設定だった。

まあ、イメージとしてはダヴィンチもどきといったところか。

確か、原作で主人公がここに来たときも、ナツメツグ博士はトランペット製作の真っ最中だった。

博士は楽器を作っているときに限って初対面の奴が訪ねてくるジंकクスでも持っているのかね。

バンピートロットのミニゲームの一つに楽器の演奏がある。

主要人物のほとんどがトロット楽団という人気バンドのメンバーなのだから、当然ライブ演奏がゲームのシステムに深く関わってくるわけで、主人公も色々な楽器を演奏できる。

主人公の仲間たちの人数として、バンドがちょうどいいのでは、と製作が思ったことがきつかけだったそうだ。

バンドメンバーが居るのだから当然のことながら演奏も、となる。

そして演奏できる曲が素晴らしい。

トロット楽団で演奏できる曲は、ナディア・ギフォードをボーカルに据えたバラードを主としたものが五つも用意されている。

当時のゲームの挿入歌としては破格のクオリティーだ。

それにしても、あのナツメグ博士が作っていたアルトサックスは見事だったな。

装飾も無ければ、さして特徴のある仕掛けや素材でもない。

しかし、ごく平均的な構成でありながら、大量生産品には無い仕上げの丁寧さと熟練の職人の手を介した品に特有の気品があった。

シンセサイザーのシールドに例えるのなら、カ〇レの純粹な音をそのまま伝達する性能を、プロ〇デンスの精密さで作り上げたもの、とでも言うべきか。

俺はどちらかと言えばサックスよりもピアノの方が得意なのだが、あのナツメグ博士のアルトサックスには感じるものがあった。

単純かつ質のいい楽器は、技量への自信と表現したい感情が釣り合えば釣り合うほど、演奏者にとって最適なツールとなり得る。

ゲームで主人公がナツメグ博士のところを訪れたときには、度々声を掛けたりその場に立ち尽くしたりで博士の集中力を欠いた結果、その時に組み立てていたトランペットがお釈迦になってしまう。

あのサククスにそういった末路を迎えさせたくなかったから、俺はすぐに退出したわけだ。

もし、俺もこの世界で楽器を演奏する余裕があるのなら、ナツメグ博士の作ったものが欲しいな。

「いくら積めば売ってくれますかねえ?」

「お前さん、サククスに興味があるのか?」

つい先ほど家から出てきたナツメグ博士は、俺の疑問に答えることなく質問してきた。

「ええ、まあ。興味というか、昔ちよつと吹いたことがあるというか。ピアノの方が得意なんですけどね」

「そうか」

そう言つて、博士は俺に先ほどのサククスを手渡してきた。

「……いいんですか?」

「まずは吹いてみい」

それでは、お言葉に甘えて……。

リードが木製の消耗品なのは同じだが、こんな色の木つてあったかな?

続いて、簡単にチューニングする。

日本ならメトロノームまで付いたデジタルチューナーがあるが、ここには無いので感
覚で済ませるしかない。

「では……」

俺は記憶を探り、サククス単体でパフォーマンスして、最も受けが良かったフレーズ
を吹いてみた。

ポール・デスモンドの『Take Five』のメロディーだ。

五拍子の曲と言われて、地球ならほとんどの人が最初に思い浮かべるほど有名な曲
だ。

意識の中で感じるリズムがスイングし過ぎないように注意して、音の切れ目をクール
に落とし込むように霞ませる。

本物に比べれば紛い物もいいところだが、この世界では知られていない曲なので勘弁
してもらえないものか。

益体も無いことを考えながら、俺はワンコーラス吹き終えた。

「ふむ、一昔前に流行ったジャンルじゃな。生憎、わしは聞いたことが無い曲じゃが」
「でしようね。実はこれ、異世界の曲なんですよ」

「ほう……少し、中で話さんか？ 診てやるぞい」

「誤字じゃないんでしようね……まあ、ちょうどいいです。元々、その件を博士に相談し

ようと思って来たわけですから」

俺は完全に精神病扱いされたことに若干の悲しみを覚えながらも、博士の後を追って家に入った。

「……すると何か？ お前さんは気づいたら森のど真ん中にその変な服で倒れていて、来た道も方角も分からず、どうにか盗賊団のアジトを見つけたので殺して奪って、どうにかわしの所へ辿り着いたと」

「そういうことです。俺はここに来るまでは、別の世界に居ました」
「……別の世界とはまた面妖なことを言いおる」

まあ、別世界という単語だけ聞いても遠い国と区別はつかないよな。

この世界に転移してからの経緯は簡単に話したが、さて肝心のところをどう説明したものか？

そして、どこまで伝えたものか？

「ナツメッグ博士、あなたはパラレルワールドや異世界についてご存知ですか？」

「並行世界のことか？ 今存在する世の中とは別の選択をした結果、進むはずだった世界が存在するという理論は、どこかの学者が発表しておったな」

なるほど、どうやら全く概念が無いわけではなさそうだ。

「似たようなものですね。ただ、俺の場合はもう少し複雑でして……。簡単に言うと、俺が数日前まで居た世界は、トロットビークルは普及せずこの時代から百年以上が経った世界になります。ビークルの代わりに自動車と電車の性能が大きく向上して人間の輸送を担い、建築や土木や農業に利用される機械も自動車をベースにした重機が普及しています。まあ、他にも工業やインフラや生化学にナノテクノロジーの劇的な発達など、ここと違う点は色々ありますが、俺の生きてい場所の百年前の歴史と大きく違うのは、トロットビークルが存在しないことです」

「ふむ、トロットビークルが無くても成り立つ世界か……。自動車や電車の発展はエンジンの品質が上がったことや新しい燃料の発見などで説明がつくがの。トロットビークルのような汎用型の機械が無いということは……。それぞれの作業に特化した自動車、いや個別の機械の製造技術とコストパフォーマンスが大きく向上したということか」

「その通りです」

俺の自動車をクローズアップし過ぎた拙い説明を、補足する形で理解してくれた。やはり、ナツメグ博士はただ者じゃないな。

工業や建築技術の発展に関しても、大量生産や高層ビルに触れて軽く説明したが、メガネで表情が見えないので博士の心情まではわからない。

「……わしとしてはあまり嬉しくないことなんじゃが、ビークルはその汎用性ゆえに戦

闘にも頻繁に投入される。お前さんの世界では、そこら辺はどうなんじゃ？」

「そうですね。戦車は発展しましたよ。大型の自動車に装甲版を貼り付けて、砲台や機関銃を搭載した兵器になりました」

この世界では恐らく最後の戦車は馬車かそこらだろう。

砲塔付きの装甲車としての戦車があつたとしても、この世界は火砲の精度が引きそうなので、地球のような戦車の需要は無さそうだ。

「しかし、俺の時代になると戦闘はもつと両極端な形で展開がされていきましたね。少人数の歩兵による隠密工作か、超遠距離からのピンポイント攻撃か範囲攻撃。小火器の威力や装弾数や発射速度も向上しましたが、大規模な紛争ではミサイル——長距離キャノンアームの大型版——が使われていましたね。ネフロから撃ってビジョン牧場の人間を皆殺しにできる兵器です。一発でハッピーガーランドを灰でできる核兵器はさすがに使用が自粛されていましたが」

「何とまあ……突拍子もない話だけに逆に信憑性があるの。お前さん、そんな殺伐とした世界で生きてきたのか」

俺の居た日本は、表面上は平和な国ですけどね。

これ以上、兵器の知識をひけらかしても始まらないので、航空技術の話はまた今度にするか。

「で、博士、もう一つ厄介な事情がありましたね」

「ほう、お前さんが未来から来た可能性だけでも頭が痛くなる話だというのに、まだあるのか？」

「ええ、実はこれが本題です。俺がここをただの過去ではなく別世界と断じた一番大きな理由です」

ナツメッグ博士は黙って耳を傾けている。

「俺は、ピジョン牧場のことも、ナツメッグ博士のことも、ネフロの街の存在も、この世界に来る前から知っていました」

「……未来や異国の人間でも、わしやネフロのことくらいは知っていてもおかしくは無いが、お前さんがそこまで異世界と決めつけるからには、何か確固たる別の根拠があるんじゃない？」

「ええ、俺はこの世界の存在を知っていました……いえ、正確には、架空の存在としてナツメッグ博士やネフロを知っていたのです」

8話 ナツメッグ博士に相談2

「架空の存在、じゃと？」

「はい、俺の世界のゲーム……映画と同じような、娯楽作品の物語に登場する架空の人物や舞台として描かれていたのです。俺の居た世界にはネフロもピジョン牧場も実在しません」

ナツメッグ博士は顎に指を当てて考え込んだ。

「わしらが架空の存在じゃと……？」

「いえ、そうとは限らないでしょう。俺は博士やこの地のことを架空の存在だと思っていましたが、今や俺自身がこうしてピジョン牧場に居て、博士と言葉を交わしています。俺が夢を見ているか、どこかで頭を打って元の世界こそ本物と妄想しているのでなければの話ですが」

博士はまたしばらく眉間にしわを寄せて唸りながら口を開いた。

「むう……わしとしてはお前さんの頭がどうかしている場合の方が楽に説明がつくが、それにも反論できるのじゃろ？」

「ええ、そうですね。この服と靴だけなら異国や未来の品ということでも納得できたかもしれませんが、俺はこの世界の出来事を一部ですが詳しく知っています。それこそ、遠く離れた地や後世に伝えられるほどではない話まで、ね」

「一部？」

「ゲーム……映画を見たのは何年も前なので忘れかけのこともありますが、俺が目覚めた東の森は原作には登場しなかったエリアです。全てが原作の通り進むわけではない。しかし、ある程度のイベントは同じだと思おうのですよ」

俺は部屋の棚の上に視線をやった。

そこには一つの古びた写真が飾られてあった。

ゲームでは主人公がウミネコ海岸に漂着したときに小屋で手に入れられる、コニーとダンデイリオンとチコリの写った写真だ。

「博士、あの写真の男の子二人はダンデイリオンとチコリの兄弟ですね。博士が引き取って援助した」

「……うむ、そうじゃ」

「最初にお聞きしたいのですが……チコリ君はもう亡くなっていますか？」

「……ああ、三年前にな」

ゲーム開始時点ではチコリが死んでから五年だった。

では、今は本編開始の二年前ということか。

「確か、チコリ君の死因は……コニーとの待ち合わせで彼女の乗った汽車が遅れ、ハッピーガーランド駅前で待っていたときに、街の有力者セントジョーンズ卿の息子マーシユが持ち物を取り上げてからかかっていたところ、あやまって車道に飛び出して車に撥ねられた。街の人間はセントジョーンズ卿の不興を買うことを恐れ、チコリ君を助けることなく放置し、警察もまともな捜査をしなかった。トロット楽団のリーダーだったダンディリオン氏も、楽団から身を引いてしまった。コニーも未だにそのことを引き摺って……」

「もうよいー！」

ナツメツグ博士の身体から尋常でない怒気が溢れ出ている。

今までの冷静な態度とは打って変わった態度だ。

ゲームの主要人物の中では年配のキャラだったこともあり、原作ではこのように声を荒げるシーンは無かったが、どこの馬の骨ともわからない人間にトラウマを掘り返されればいい気はしないだろう。

博士だって、息子か孫のように可愛がっていたチコリを喪い、愛弟子のダンディリオンの人生を滅茶苦茶にされたのだ。

「失礼しました。ですが、俺も彼らの事情は理解しています。そのことを伝えておきた

かったのぞ」

未来に關しては、残念ながらそれほど衝撃的なことは言えなかつた。

ピジョン牧場に鉄道が通ることは既に話には上がつており、主人公の話も二年後に彼らの運命を大きく変える少年が現れるなどと言つたところで実感は湧かないだろう。

飛行ビークルに關しても成功することも一応言つてみたが、博士の返答は「頭の片隅に置いておこう」だつた。

まあ、原作でも實際に飛行しているグランドファイナーレ（敵の飛行船）を見たうえで、紙飛行機——ゲーム中では紙トンビ——を見て飛行ビークルを開発したのだ。

俺が紙飛行機を作つて見せただけでは厳しいだろう。

「ふむ……まあ、お前さんがただのほら吹きでないことは何となくわかつたわい。詐欺師ならこんな回りくどいことをせんじやろう。異国風を装つたり、ダンディリオンの事情に妙に詳しかつたり……。お前さんがこの世界の運命を知つてゐるといふことは話半分に理解しておこう」

「ええ、そうしてください。我ながら、自分で言つてて自信が無い部分もありますから。既に原作と違ふところで実害を受けて、死にかけていますからね。俺もゲームの知識を盲信するつもりはありません」

原作ではダンディリオンによるチコリの復讐がストーリーの肝になってくるのだが、こちらの世界ではダンディリオンにまだ会っていないからな。

ゲームと全く同じルートを迎ると決めつけるのは早計だ。

「それで、グレイ。お前さんはこれからどうするつもりじゃ？」

「元の世界に戻る方法……はわかりませんよね」

「当たり前じゃ。自分が行ったことの無い並行世界への行き方なんぞ知らんわい」

やはり、ナツメッグ博士に頼つても無理か。

そうなると、期間がどれくらいになるにしろ、身の振り方を考えないとな。

ゲームの主人公が来て物語が動き出すまで二年。

俺ができることは何だろうか？

既にチコリの事故が起こってしまった以上、そこから阻止することは不可能だ。

砂漠の盗賊デザートホーネット団はゲームの三年前にブラッディマンティス——ダンディリオンが復讐のために作った、最終局面で主人公陣営と対立する秘密結社——に警察の討伐から助けられたことで縁を結ぶ。

これを別ルートで処理すれば、デザートホーネット団の協力によるブラッディマンティスへの情報提供を阻止することができると思っただが、この討伐作戦は今から一年前の出来事だ。

既に手遅れである。

そうなると、俺にできるのは主人公には出来る限り原作の善人ルート——ゲームで主人公はルート選択でブラッディマンティス側に付くこともできる——を進んでもらい、俺も影ながらその活躍を手助けすることだ。

失敗はできない。

ここがバンピートロット世界とはいえ、さすがにゲームオーバーになつてもリトライができるということは無いだろう。

盗賊が血を撒き散らしながら死んだように、俺も一歩間違えば挽き肉だ。

主人公が悪人ルートへ行ったり、負けたりするようなことがあれば、この世界はヤバいことになる。

しかし、世界の心配の前に自分のことをどうにかしないと。

「グレイ、物は相談なんじゃが……お前さん、わしの弟子にならんか？」

悩む俺に、ナツメツグ博士から突拍子もない提案が来た。

正直、この世界では原作の知識があるだけで身分も後ろ盾も無いので願っても無いことなのだが……。

「……何故、俺を？」

正直、先ほどの拙い説明と到底足りない説明材料で信用してもらえない理由が分からな

い。

詐欺師になるほど弁が立つわけではないことは理解してもらえたかもしれないが、それでも俺が得体の知れない怪しい男なのは間違いないだろう。

「お前さんの人となりは何となくわかった。とりあえず、むしろを騙したり陥れたりするつもりは無さそうじゃ。まあ、完全な善人かと言われれば、そんなこともなさそうじゃがのう……」

まあ、確かに。

この世界に来て早々に人殺しもしていますからね。

「何となくじゃが、お前さんは手元に置いておいた方がいい気がするんじやよ。味方にするという意味でも、下手に一人で行動させて、何かとんでもないことを引き起こすのを抑止するという意味でものう」

返す言葉もございません。

盗賊の時点で、俺は現代人にあるまじきとんでもないことをやらかしているのは確かだ。

「お前さんの未来の知識にも興味はあるしのう。あと、楽器のことがわかるのもよい。どうじゃ？ その物語が動き始めるとかいいう二年後のためにも、わしのところで色々準備をした方が、お前さんにとっても都合がいいじやろうて。もちろん、わしの仕事も

手伝ってもらおうが」

確かに、知識や製造チートをやるのなら、ナツメツグ博士の協力は必要不可欠だ。

俺が自分のビークルの改良をしたり力を付けたりするうえで、ナツメツグ博士は強力な味方になってくれるだろう。

断る理由など無い。

「博士、感謝します。これからよろしくお願いします」

「うむ」

ここに相談に来てよかった。

早くも、俺はこの世界における何よりも強力な後ろ盾を手に入れたわけだ。

「あ、そうだ。博士、ちょっと聞いておきたいことがあるのですが……」

「ん？ 何じゃ？」

俺は戦利品として分捕ってきた盗賊団のビークルと財宝、それに死体の扱いに関してナツメツグ博士に聞いてみた。

「そういえば、表にはお前さんが引き摺ってきたものが山と積みあげてあったの。あれが、盗賊討伐の戦利品か……」

「ええ、この国の盗賊の討伐の確認方法と略奪品の扱いがわかりませんので、とりあえず

全て持ってきました」

ネット小説にありがちな中世の冒険者ならば、盗賊狩りの戦利品は自分のもので、盗賊の首を持って行けば賞金が貰えたりする。

しかし、原作のバンピートロットでは普段の戦闘がそんなにダークでシリアスな路線ではないので、死体や戦利品に関しては全く描写が無い。

盗賊のピークルを破壊すれば金と燃料がドロップし、搭乗していた盗賊は逃げて行くだけで終わりだ。

しかし、現実では都合よく金とアイテムがドロップしたりしない。

そのあたりの扱いが現実では全く不明だったのだ。

「死体まで持ってきたか……。お前さんの故郷は随分と野蛮な国なんじゃない」

「いや、日本では一般人が盗賊を殺すなんてこと滅多にありませんから」

一応、言い訳しておこう。

「生け捕りにできず死んだ盗賊は、盗賊団のマークや持ち物でも持って行けば大丈夫じゃ。戦利品は基本的に討伐したピークル乗りのものじゃが、美術品や一点ものの宝飾品は持ち主に渡して謝礼を貰うのが一般的じゃな。ネフロの警察署に行けば手配してくれるじやろう。さほど珍しくもない貴金属や宝石も業者価格で引き取ってもらえるぞ。ピークルのパーツはうちの工房の裏にでも保管して、お前さんが使ったらどうじゃ

「？」

「どうやら、それほど理不尽な目に遭わなくて済みそうだな。奪った銀貨百枚、10万URは俺のものにして良さそうだ。

宝飾品はそれほど高そうなものは無いが、適正価格で買い取ってもらえるのならば小遣いの足しにはなるだろう。」

「じゃあ、近いうちにネフロに行きます」

「……わしも行くぞ」

「え？ 博士も？」

「思いがけない言葉に俺は驚くが、博士は何故か呆れ顔だ。」

「はあ……お前さん、そんな珍妙な恰好で街をぶらつく気か？ 案内してやるよつて、まずは仕立屋に寄つてからじゃ」

「ああ」

「言われてみれば、俺はスウェットとパーカーのままだった。」

「出発は明日の朝じゃ。お前さんのビークルで行くから、運転は任せるぞ」

「わかりました」

「泊めてもらったナツメツグ博士の家では、久しぶりに石鹸つきのシャワーを堪能した。」

9話 初めてのネフロ

翌日、俺はビークルの助手席にナツメッグ博士を乗せて、ネフロの街を目指して出発した。

ビークルに積み込む荷物は戦利品の宝飾品と盗賊のワッペンだけだ。

死体は燃やして埋めた。

荷物はどうにかビークルのバックパーツのキャリアーに載せた箱に収まった。

「グレイ、昨日は聞きそびれたが……お前さん、ビークルの操縦は前世のゲームとやらで覚えたんかの？」

「ええ、コントローラー……ハンドルのようなものの構造は違いますが、挙動が似ているので助かりました」

「まったく……初めて乗ったビークルで盗賊ビークルを五台も六台も相手にするとは、本当にイカれた奴じゃ」

ナツメッグ博士に呆れられながらも、俺たちは化石の採掘場であるワグテール溪谷を抜けてビークルを歩かせる。

「盗賊、居ませんね」

ゲームではこの採掘場には『ハンドレッド』というムカデのような形をした盗賊ビークルが居るのだが、現実ではお目にかかれない。

「街道だから。警備がここまで侵入を許すはずがなからう」

原作ではネフロからピジョン牧場へ至る線路の上を『ハンドレッド』が堂々と走っていましたが何か？

ネフロの街は城壁に囲まれた如何にもヨーロッパ風の街並みだ。

ピジョン牧場方面から来たので南東の門から入り、そのまま西に進んで行く。

南西部に商店や人通りが集中しているのはゲームと同じだ。

もともと、PS2のゲームのデザインに比べれば現実の街はもっと広く、建造物ごとの違いも顕著だ。

「あそこに停めるんじゃない」

博士からの指示通り、駐車場にビークルを止めてエンジンを切った。

ビークルから降りると、先に立って歩くナツメグ博士の後を追う。

駐車したビークルに盗賊団の戦利品を残していくのが不安だったが、この町でナツメグ博士の乗っていたビークルから盗みを働くような奴は居ないのだろう。

見れば、街行く人々は皆ナツメッグ博士に会釈して通り過ぎていく。やはり、トロットビークル開発者の知名度と地位は相当なものだな。

博士の右後ろ——銃を抜いて構えやすい護衛の立ち位置——を追従する俺にも様々な視線がぶつけられる。

「邪魔するぞ」

「いらつしや……まあ！ ナツメッグ博士ではありませんか」

博士に連れられて入ったのは、ゲームでも登場したネフロの街のブティック『ファッシュョン・ロンド』だ。

出迎えた女主人はやはりナツメッグ博士の顔を知っている。

「礼装をお買い求めでしょうか？」

「いや、今日はこっちの助手の服が欲しくての」

「あら、新しくお弟子さんを？ ……変わったファッシュョンでいらつしやるのね」

さすがに接客業の女性だけあって不躰にじろじろと見るような真似はしないが、やはり俺のスウェットとパーカーは珍しいようでも視線は感じる。

「見ての通り、異国から来た奴じや。悪目立ちしない服を見繕ってやってくれんかの？」

「よろしくお願ひします」

「畏まりましたわ。こちらにいらしてくださいな」

身長やら肩幅やら胴回りをメジャーで測った女主人が、意味不明な数字をメモに記入していく。

そのメモを持って近くの棚や奥の倉庫から服を出してくるのかと思いきや……。

「あの、失礼ながら……既成品ですと、こちらの労働者向けのシャツとジャンパーに作業ズボンしかサイズの合うものがございませんわ。お客様はかなり大柄でいらつしやいますので……」

まあ、確かに百八十を優に超える身長に百キロ近い体躯の俺は、バンピートロットの世界だと船乗りや肉体労働者でしか見ないサイズだろう。

ナツメツグ博士の身内ということで、店主はもつと上品なスーツを用意しよう思っていたようだが、当然ながら特注でないと無理だな。

とりあえず、今ある服がこのタイプしか無いというので試着させてもらう。

「少しはマシになったではないか。そのけつたいな寝間着よりもな」

博士はご機嫌なのでこの服でいいか。

動きやすそうだし。

服の代金は博士が出してくれた。

さすがに原作通り服が数百URということではなく、銀貨4枚の4000UR——日本円で四万ほど——だった。

日本ならこのクオリティの服など一万円もしないが、まあ昔は服が高価だったことくらい知っているので仕方ないな。

「博士、ありがとうございます」

「気にするでない」

労働者風の頑丈な服に着替え、拳銃の入った鞆を持ち直したところで、俺は銃のことを思い出し店主に聞いてみた。

「マダム、一つお聞きしたいのですが、こちらでホルスターは扱っていますか？」

「ホルスター、ですか？」

「ええ、このサイズの銃を持ち歩くのに」

俺は鞆からリボルバー拳銃を出して見せた。

「お前さん、まだそんな物騒な物を持ち歩いていたのか？」

「丸腰は不安なので」

ナツメッグ博士は呆れているが、実際にこの銃は盗賊を殺すのに役立つた。

「博士、聞きそびれていましたが……これ持っているだけで捕まったりしませんよね？」

「そんな法律は無いがの。あまり言いたくはないが、わしの弟子だと言えば警察に武装解除されることもまず無いはずじゃ」

何だかんだで銃規制のことを聞きそびれていた自分のマヌケさに気がつくが、問題な

いようで何よりだ。

しかし、そうなると実質俺は武装が許されたことになるわけか。

さすがにナツメグ博士の七光りは凄いな。

「皮革加工の職人に発注するオーダーメイドになりますので、少々お時間が掛かります。見積価格は……：銀貨7000URほどに」

資料を確認した店主が告げてくるが、盗賊から奪った金が10万URあるので普通に
出せる額だ。

「じゃあ、これで」

「ありがとうございます、承りました」

街に出ても浮かない服装に着替えた俺は、ナツメグ博士と連れだって今度は警察署
に向かった。

博士に付き従い受付に進むと、やけに張り切った敬礼とデカイ声が特徴の警察官が声
を掛けてきた。

「何かありましたか!?!」

「こんなキャラも居たな。」

「うちの助手が盗賊団を一つ壊滅させての。グレイ」

「はー」

博士に促された俺は、盗賊の死体から引っぺがしたワツペンを受付に置いた。

「お、これは！ ピジョン牧場の東の山を拠点とする、最近出てきた小規模の盗賊団のものですね。被害件数も少ないが、なかなか尻尾を捕まえられなかつたしぶとい連中です。討伐されてしまうとは、さすがであります」

さすがに熱血警官、よく知っている。

「ええ、恐らくその一味で間違いないでしょう。構成員はほとんど死亡しました。ため込んでいた宝飾品も持ってきたので、処理したいのですが」

奥からさらに二人の警官が出てきて手を貸してくれた。

俺のビークルから宝飾品の詰まった箱を下ろし、署内で鑑定してもらおう。

やはり所有者の特定が困難なありきたりな品や、持ち主が現れなかつた物品は、質屋や古物商のような業者にまとめて卸すようだ。

あまりにも高額な戦利品は持ち主との直接交渉も可能らしいが、今回の戦利品にはそれほど特徴的な富裕層の持ち物は無かつたので、このまま警察に任せて最低限の卸価格だけ貰えればいいか。

警察にも恩を売っておこう。

それでも懸賞金と合わせて20万U近くになった。

俺の所持金の合計は30万Uほどか。

ケチな盗賊団でも丸々潰せば一気に年収が稼げるのか。

もつとビークルの腕を上げたら、二回目も挑戦したくなるかもしれないな。

「ご協力感謝します。さすがはナツメツグ博士の助手ですね。小規模とはいえ、盗賊団を根こそぎ壊滅してしまうとは」

「いえ、運が良かっただけです。まだまだ博士から学ぶべきことの多い、浅学の身です」

懸賞金を受け取って警察署を後にしたところには、既に日が傾いていた。

その日は博士の案内でネフロの街の高級宿である『ホテル・ジャコウジカ』に泊まった。

ゲームではイベントの都合で一度も泊まらない宿だ。

現実でゲーム以上の経験ができるとはツイている。

因みに、ホテルの地下のバー・アフロディーテには労働者や修理工などの客層も居るが、宿泊客はほとんどが上流階級感を漂わせる連中ばかりだ。

まあ、宿泊料が他の宿に比べて段違いに高いので仕方ないか。

ナツメツグ博士ほどに顔の売れていない俺は、レストランで気取った連中にジロジロと見られることになる。

何がいけないのかって、どうせこの武骨なジャンパーを見下しているのだろう。

日本人の性で不躰な視線が気になる俺は、当然ながらこだわりがあるわけでもない服装を貫けるはずもなく、帰りにファッション・ロンドでスーツを注文することになった。

いいんだ、一着3万URくらいなら出せるから。

後日、スーツを取りに行つてびっくりした。

落ち着いたチャコールグレーの色合いとは裏腹に、サイズも少しゆとりがあつて動きやすい。

ポケットが多く、水洗いもできるといふ、機能性も兼ね備えた逸品だ。

俺が半ば冗談で言つた無理難題を全て解決してくれた。

この時代背景で達成できるとは驚きだな。

地球とは違う素材があるのだろう、きっと。

出来栄えに満足して、二着目のジャケットとベスト、替えのズボンとシャツをまとめて買いつてしまったのも問題ない。

あの女店主は商売がうまいな、本当に。

……しかし、普段は使いもしないネクタイと、ただの革靴を予備も含めて二足も買つてしまったのは無駄だったかもしれない。

10話 穏やかな日常1

ナツメツグ博士のところまでピークルの整備と操縦を学び始めて一か月ほど経ったあの日のこと、俺は博士から使い走りを命じられた。

「そろそろローズマリーの薬が切れる頃じゃ。グレイ、ネフロに行くついでに、この薬も持って行ってくれ。届け先はこの家じゃ」

博士に渡されたのは紙袋と住所が書かれた一枚の紙きれ。

ネフロには何度か買い出しに行っているの、この紙一枚でも目的地に到達する分には問題ない。

しかし、ローズマリーか……。

ゲームのヒロインであるコニーの母親で、最近は呼吸器系の病気で寝込んでいるはずだ。

「ん？ どうしたんじゃ？」

「いえ、ローズマリーさんのことですが……」

「っ！ まさか、お前さんの見た運命では、死ぬのか!？」

「え!?! いやいや！ 死にませんけど……ただ、排ガスで悪化する呼吸器系の疾患だっ

たと思います。薬で対症療法をするよりは、早めに田舎で療養させた方がいいのでは？」

原作では終盤になってローズマリーを故郷の田舎に運ぶイベントがある。

もしも、彼女の疾患が同じならば、早めに手を打っておきたいところだが……。

「……いや、まだ駄目じゃ」

「何故です？」

「わしも一番可能性が高いと思っているのは肺の病じゃ。しかし、確定診断がつかないことには軽々しく移動させることはできん。下手に振動を与えようものなら死に至る病もあるからの」

ああ、脳血管系か。

「今、異国からその診断のための器具を取り寄せておる。到着するのに何年かかるか分からん代物なので、しばらくローズマリーには対症療法を続けなければいかん」

「わかりました。確実に原作と同じとも限らないので、今は薬の投与を継続しましょう」

「そうしてくれ。わしもお前さんを信用していませんわいわけではないのじゃが……」

「いえ、今回の件はナツメツ博士が正しいです。脳出血に繋がるような病気に罹患していた場合、ビークルに乗せて揺らした瞬間お陀仏です。では、薬を届けてきます」

「頼んだぞ」

ネフロに着いた俺は、まず初めに買った出しを済ませた。

細々とした雑貨や嗜好品を商店街で購入し、ビークルに積み込んで固定する。

こういう雑用も俺の役目だ。

まあ、普段の俺がナツメツグ博士に払っている対価といったら、未来の知識を紙にまとめて提出することと、料理に洗濯に掃除くらいだ。

博士がそれほど食事や部屋の清潔さにこだわる人じゃないので、家事は大した手間でもない。

このくらいの雑用を言いつけられたところで苦ではないさ。

そろそろネフロの店の連中にも顔と名前を覚えられてきたようだ。

ファッション・ロンドの女主人もタイミングよく、本当に何故かタイミングよく店外に出て俺に声を掛けてきたが、今の俺に追加に必要な服は無い。

普段着のスーツもどきにネクタイを付ければ一応の正装にはなるし、予備もあるし下着も買った。

さすがにもうカモられはしないさ。

買い物を終えた俺は、前にナツメツグ博士とネフロに来たときと同じ駐車場にビークルを止めた。

博士に預かった薬を手にも、コニーとローズマリーの家を目指す。

商店街の裏にあるアパートが連なった地区に足を踏み入れ、博士のメモに書かれたアパートを見つけた。

階段を上って二階のフロアを進むとメモにあつた番号の部屋だ。

「ここか……ごめんくだ「ちよつと、あんた！ 誰だい!」」

いきなり後ろから大声で怒鳴られた。

気配と音で人が居るのはわかっていたが、別の部屋の住民だろうと思ひ気にしていなかったたので、この剣幕には驚いた。

「俺は……あつー!」

念のためシオルダーホルスターの拳銃を抜けるように警戒しながら振り返つた俺は、見覚えのある声の主に驚愕の声を上げてしまった。

手にはフライパン、エプロンを付けた恰幅のいい中年女性。

ローズマリーに度々食事を差し入れしている隣のおばさんだ。

コニーの家の隣人である。

つてか、本当に外出時もフライパンを持ち歩くんだな。武器か……?

食材が満載の袋を抱えて、どう見ても買い物帰りなのだが……。

「あんた、一体誰なんだい? コニーの追っかけかい? 家まで押しかけてくるなんて、

最近の若いもんは本当に礼儀知らずだねえ」

「どうやらおぼさんは盛大に誤解しているようだ。」

「いえ、私はナツメッグ博士の使いです。最近、博士の助手になりましたグレイと申します」

「ナツメッグ博士の？」

胡散臭げに俺を見てくるおぼさん。

しかし、俺が抱えている薬の袋を見たら、幾分か目つきは穏やかになった。

「そうかい。確かに、そいつはローズマリーがいつも博士から貰っている薬だね」

彼女の薬は一度に長い日数分をまとめて渡しているようで紙袋が満杯だ。

前回まではピジョン牧場の人間がネフロに行くついでに届けていたそうだから、彼らはおぼさんとも面識があつたのだろう。

まあ、今回から宅急便は博士の助手になった俺の役目だろうな。

「一応、あたしも同席するよ。女二人の家に若い男が訪ねるんだ。文句はないだろ？」

「ええ、構いませんけど……」

俺ってそんなに若くはないだろ。

さすがにおぼさんよりは年下だが、俺も今年で25歳だ。

主人公はゲーム開始時点で確か17歳、主要人物もほとんどが主人公の同年代から二

十代前半だ。

それが二年後の話なので、その時の俺は27歳になる。

主要人物たちより一回りおっさんなわけだな。

何か、落ち込んできた。

「ほら、さっさと行くよ。コニー、ローズマリー。入るよ」

「あ、おばさん」

「コニー、邪魔するよ」

おばさんの後を追って、俺もバンピートロットのヒロインであるコニーの家に足を踏み入れた。

悪いね、主人公君。

先に入ってしまったって。

「失礼します」

「あら、そちらの方は？ お知り合いですか？」

家の中に居たのは、やはりゲームで見た覚えのあるコニーとローズマリー親子だ。

確かに、コニーは原作の印象より少し子どもっぽいか？

彼女が主人公と同一年だと仮定したら今は15歳か。

ローズマリーの違いはわからないな。

原作と同じく三十代の美魔女だ。

「初めまして、ローズマリーさんですね？ ナツメック博士の助手のグレイと申します」

「まあ、ナツメック博士の」

「ん？ 博士、助手なんて居た？」

俺は疑問を発するコニーの方に向き直って答えた。

「一か月前に助手になったんだよ」

「あ、そうなんだ。あたしはコニー。トロット楽団のボーカルなの。よろしくね、グレイ」

「

ああ、よろしく」

さすがにヒロインは可愛いな。

服装はゲームと同じように、赤系統の明るいデザインでまとめられている。

ポニーテールも彼女の活動的ながら女の子らしい魅力を引き立てている。

まあ、さすがに主人公からNTRするつもりは無いけど。

そもそも25歳が15歳に手を出したら犯罪だ。

「ローズマリーさん、今回のお薬です」

「ありがとう」

その後はローズマリーに簡単な問診をして、おばさんが夕食の準備をしようと言い出したのをきっかけに俺も退出した。

「じゃあね、グレイ」

「また、いつでも来てちょうだい」

「ああ、それじゃ。お大事に」

コニーの家を出てしばらく考えたが、やはりローズマリーは呼吸器系の疾患だろう。

咳と痰に息苦しき。

薬が無いと息をするたびにゼエゼエと音がするという。

喘鳴が出ていることを考えれば、喘息か下手をすればCOPDだ。

しかし、博士の危惧していた絶対安静が必要な病気——俺としては脳血管系の疾患くらいしか思いつかないが——を併発しているかどうか調べる術が俺には無い。

脳血管障害といえば麻痺だが、手足の感覚があるからといって大丈夫と決めつけていいのかはわからない。

「……やはり、ナツメッグ博士の機械を待つしかないのか」

俺はローズマリーの救済を早める策を諦めると、今夜の宿であるホテル・ジャコウジカに向けて歩き出した。

宿泊手続きは恙なく進んだ。

今回は俺一人だが、受付の人はナツメツグ博士の助手だということを覚えていたらしく、笑顔で鍵を渡してくれた。

ボーイが飛んできて、俺の着替えが入った鞆を運んでくれる。

ナツメツグの威を借る俺様、最強である。

ボーイにチップをやって部屋から追い出し、ソファーに寝転んで一休みしたら、ホテルのレストランで食事を摂る。

仕立てのいいスーツを着て、今はネクタイもしているので、お高く留まった連中にジロジロと見られることは無かった。

それどころか避けられているな。

俺が通路を歩いてレストランの入り口まで行く途中、前を歩いていたチャラそうなボンボンが端に避けたのだ。

まあ、上流階級の優男か中年太りした連中に比べれば、俺の筋肉質な労働者体型の男は怖く見えるのか。

それが下層階級の間人ではなく、自分たちと同じような仕立てのいいスーツを着ているとあっては、暴力でも勝てなければ金や権力を使っても簡単に踏みつぶすことができない、確実に勝てる保障の無い厄介な相手というわけだ。

俺は若干の居心地の悪さを感じながら食事を終えた。

「さて、まだ寝るには早いな」

部屋に戻って手持ち無沙汰になった俺は、何と無しにサックスを手に地下のプールバーに下りてみた。

前に博士と来たときは色々雑用が立て込んでバーまで回る時間が無かったので、ここに来るのは今日が初めてだ。

客には労働者や修理工の他にも、ネフロの西のウミネコ海岸に至るシラサギ河周辺を縄張りとする盗賊キラーエレファントの団員と思わしき連中も居る。

一瞬、懐の拳銃を探りそうになるが、彼らも公衆の面前で騒ぎを起こすほど馬鹿じゃないだろう。

こちらから絡まなければ問題は起きないと信じよう。

「いらつしやい。おや、流しですか」

バーのマスターが俺のサックスのケースを見ながら言った。

「いや、飛び入りセッションでもやっていたら参加しようかと思っただけで……。ワインとこのサメの唐揚げをお願いします」

「畏まりました」

メニューにサメの料理があるのを見て思わず頼んでしまった。

このバーにはゲームの序盤で本当にお世話になった。

ウミネコ海岸でただで手に入れられるサメを一匹202URほどで買い取ってくれるのだ。

キャリアアーWのバックパーツで積めるサメは八尾。

燃料代や修理代を差し引いても、一回の往復で1000UR以上、1500URほどの儲けになるのだ。

十回も繰り返し返せば1万Uを普通に超える。

現実では簡単にサメを捕まえることはできないかもしれないが、原作ではお世話になった金策だ。

これをやると、その先の冒険で金に困ることが一切無くなる。

初見プレイヤーの多くが所持金を数千UR単位で、酷いところになると数百URでやり繰り返しているのです、この金策のバランスブレイカーぶりがよくわかる。

「サメ、お好きなんですか？」

代金を受け取ったマスターが聞いてきた。

「いや、特には。でも、こいつは美味しいですね。もつと臭みがあるのを想像していましたが、ホロっと崩れてさっぱりして……」

「恐縮です」

俺がサメ料理に舌鼓を打っていると、ステージに流れのギタリストっぽい男が上がった。

続いて、ギタリストの知り合いらしき男がドラムに座り、ウツドベースを運んでいる男もステージに上がる。

「お、バンドが来たのか」

どうやらこれから演奏を始めるらしい。

ステージにはマイクこそあるが、アンプどころか弦楽器の音を出力する装置も無いので、完全に生音での演奏だ。

ドラマーがスティックを鳴らしてカウントを取り、ベースの重低音が響く。

そこにギターのテーマが被さり、ドラムがハイハットで拍を刻み始める。

バンドが演奏している曲は聞いたことが無かったが、曲調は完全にジャズだった。

4ビートのスイングだ。

「おいおい、何だその曲は？ 古いぞ」

「ぎゃはは！ 俺の爺様の時代の曲じゃねえか！」

「そんなつまんねえ曲やってないで歌え！」

どうやら時代はジャズではないようで、聴衆からの評価は厳しい。

ナツメツグ博士も俺の『Take Five』のフレーズを聞いて、一昔前に流行った曲だって言っていたな。

11話 穏やかな日常2

「下っ手くそ〜!」

心無い酔っ払いの客の誰かが物を投げた拍子に、バンドメンバーが楽器ケースのところにまとめていた予備のスコアが飛び散る。

中世と違い、紙がそれほどの貴重品というわけではないだろうが、それでも酔っ払いどもに踏みつけにされるのは見ていて不愉快だな。

俺は自分の近くに滑ってきたスコアを拾い上げた。

コードと基本のメロディーしか書いていない。

よくあるジャズの譜面だ。

ここでギターのソロが最終コーラスを迎えたようで、譜面に書いてあるテーマにかなり近いフレーズをなぞる。

ギタリストの目線から察するに、次はベースのソロか。

で、最後はドラムソロかベースを経ての、あのバンドの編成だとギターが最後にテーマを演奏して終わりだろう。

「辞めちまえ〜！」

ステージに近いテーブルに座る酔客がジヨッキの中身をぶちまけ、ステージ前に置いてあるウッドベースのケースが酒でびしょ濡れになる。

「…………ちっ」

俺はワインを飲み干すと無言で席を立ち、アルトサクスのケースを開いてストラップを首に掛けた。

「お、お客さん」

「ちよつと行つてくる」

マスターに一声掛けて、サクスの持つて先ほど酒をぶちまけた男に近づく。

「失礼…………」

「んあ！ 何だあ…………っ！ ……何でしょう…………？」

上から見下ろして睨む俺に、小柄な酔っ払いの男は徐々に語尾を小さくしていった。

「通してくれ」

「へい…………」

先ほどまでバンドをデイスっていた他の酔っばらいも、いきなり不機嫌な表情の大男が近くに現れたのでビビっているようだ。

まあ、客全体を見回してみても、俺と同等の体格を持つのは、肉体労働者風の男二人

だけなのだから、目の前の小男にしてみれば途轍もなく怖いよな。

委縮した男と戸惑いっつも演奏を続けるバンドの面々を尻目に、俺は一旦ケースにサックスを戻すとスコアをピアノの譜面立てに置いて鍵盤を弾いた。

今はベースソロの真っ最中だ。

低音のスパイスになるように、ごく控え目な打ち込みでピアノを響かせる。

ベースの早弾きのフレーズの来そうな雰囲気を読んで、少し前から俺のピアノは一步引いてソリストを目立たせる。

フレーズの終わりは、逆に俺が前に出て煽るようにバッキングをする。

最初は戸惑っていたバンドメンバーも、覚悟が決まったのかやけくそか、既に演奏に意識を戻していた。

やがて、ベースのソロが終盤に近付き、最後のコーラスではテーマに近いフレーズを引き始めた。

ベースストだけでなく全てのメンバーが俺に視線を送る。

俺がソロを弾くかどうか判断がつかないのか。

「ワンモアツ」

俺は自分を指差して、もうワンコーラス要求した。

問題ない、ジャズのセッションは同じコード進行を繰り返すこともあり、先ほどギタ

リストが弾いたテーマも頭にある程度残っている。

これならソロもどうにかなるだろう。

メンバーが了承したのを確認し、俺は急いでサックスを拾い、ストラップを装着して、アウフタクトで前乗りしてソロを取った。

俺の飛ばしたソロの後は、ギタリストの男が見事に引き継いだ。

ギターリストはドラマーとの4バースを演じ、最後はピアノに戻っていた俺のバッキングでテーマに収束させ、完璧なエンディングを飾った。

ジャズ研のノリだが、さすがに暴走し過ぎた感がある。

しかし、これだけ派手な演奏をすれば飽きっぽい聴衆にも響くものがあったのだろう。

演奏が終わった直後は拍手喝采だ。

おひねりも大量の銅貨が飛んできた。

「ふう……ま、こんなもんだろ」

ふと、こちらの方を熱心に見据える視線を感じた。

バーのカウンターに目をやると、そこにはまた見覚えのある人物が二人も腰掛けていた。

「あ……」

「よう！ 兄ちゃん、あんた凄えなあ！」

俺はカウンターに向かおうとしたが、先ほどまで一緒に演奏をしていたバンドメンバーに引きとめられてしまった。

声を掛けてきたのはギタリストの男だ。

「え？ あ、ああ……」

「まさかネフロにこれほどのサックス奏者？ ピアニスト？ が居たとはな」

「いやいや、俺はミュージシャンじゃないから」

「何だつて!? そりゃ、勿体ない。あんたほどのプレイヤーなら頂点を狙えるつてのに」

ドラマーの男が捲し立てるが、そりゃ買い被りつてものだ。

「……いや。そもそも、俺たちのような一昔前の曲をやるバンドでは、頂点は取れない。飛ぶ鳥を落とす勢いで売り出し中のトロット楽団には及ばない。彼の派手なサックスソロも、演出とタイミングで受けただけだ。ああ、別にあんたを悪く言っているわけじゃない。申し訳ないな」

ベースリストの男はよくわかつているな。

その通り。

トロット楽団は世界中で人気を博すバンドになる。

「でもよ、ロン。こいつが俺たちのバンドに入ってくれれば……」

「いや、ソニー。彼にはそんな暇は無いだろう」

「ん、ロンはこの兄ちゃんを知っているのか？」

「ああ、リー。俺も小耳に挟んだ程度だが……」

ドラマーはソニーでベーシストはロンでギタリストはリーか。

名前負けしすぎている連中だが、こんなキャラは原作では見なかったぞ。

「あんた、グレイさんだろ。ナツメッグ博士の助手の」

「ナツメッグ博士の……」

ソニーは少々委縮してしまっている。

こういう反応をされると、ナツメッグ博士の威光も考え物だな。

「うん、まあ、そういうことだ。今は博士のところでは色々と学ばなければならぬ時期なんだね。今のところ楽団に所属してあちこちを回る余裕は無いんだ。今回のことは、君たちのやる曲のジャンル自体にケチを付けられて、頭に血が上ってしまっただけだ。余計な手出しだったな」

「いや、そんなことはない。助かったよ。……下手をすれば、俺たちは最後まで演奏を続けられなかった」

まあ、ロンは自分の楽器ケースに酒をぶちまけられるという実害を被っているからな。

「まあ、何だ。 그레이の兄ちゃん。今日は本当に助かったぜ。縁があつたら、またバンド組もうぜ。……その時まで、うちが活動できているかわからないけどな」

「ああ、そうだな。……あと、俺が口を出すようなことじゃないかもしれないが……」

前置きをしたにもかかわらず、全員が俺の言葉に耳を傾けている。

「今後、大衆を相手にした音楽ライブは、トロット楽団のようなポピュラーなバンドと、革新的な音楽をやるバンドに食われていくだろう。ジャズ……君たちのような一昔前の曲をやるのなら、そういう音楽を聴きたくて来る専門のバーやコンサート会場、最低でもクールな雰囲気似合う高級な酒場でやった方がいい」

日本では、ジャズはどちらかというとポピュラー音楽というよりも最早クラシックに近く、ちよつと特殊なジャンルと認識される傾向が強い

ジャズを聴きたい人間は、基本的にジャズフェスなどのイベントやジャズバーに赴くのだ。

この世界でも、当たれば一種の高級感を伴うジャンルの音楽として確立していけるだろう。

「頑張れよ」

「ああ、色々ありがとな。グレイさん」

「それじゃ、失礼しまつす」

「またな、兄ちゃん」

おひねりはジャズトリオに全て譲った。

今後、この世界でジャズが消えるかどうかは彼らの双肩にかかっている……かもしれない。

「なあ、ちよつといいか？」

バンドメンバーと別れた直後、俺に声を掛けたのは、先ほどの演奏が終了してからどうにか接触しようとしていた人物だった。

向こうから来てくれるとは都合がいい。

振り向いた先に居たのは、逆立てたオールバックにサングラスの男と、胸元が大きく開いたパーティードレスのような服を着たブロンドの美女だ。

フェンネルとセイボリーだ。

ゲーム本編に登場するトロット楽団のメンバーである。

この二人のコンビとは、しかもネフロドとは珍しいな。

「お前、ナツメツグ博士の助手なんだって？」

「ちよつと、フェンネル！いきなりお前、なんて失礼よ」

突っかかるように俺に迫るフェンネルを、セイボリーが慌てて宥める。

まあ、フェンネルが悪い奴じゃないのは俺も知っているので問題ない。

「すまん、悪気があつたわけじゃない」

さすがに前のめり過ぎたことに気が付いたのか、フェンネルは素直に謝った。

「いや、構わないよ。俺はグレイだ」

「フェンネルだ」

「私はセイボリー。トロット楽団のコーラスを担当しているわ。フェンネルはギターね」

知っているが、ここは初対面の体だ。

「ああ、よろしく。ご存知のようだが、先月からナツメツグ博士の助手をしている。なあ、とりあえず座って話さないか？」

いつまでもステージを占領しているのもなんだと思い、空いているテーブルを示すが、フェンネルは収まらないようだ。

「それよりも教えてくれ。さっきのサクスの即興フレーズ。曲も雰囲気も完全に時代遅れなのに、革新的な音楽に裏打ちされたセンスと、俺が求めて止まないパワフルさがあつた。あれは……一体何なんだ？」

革新とパワフルね。

確か、フェンネルはゲーム本編で、その革新的なパワーのある音楽を作りたくて、トロット楽団を抜けてしまうのだったな。

結果的に、主人公がサブイベントでエレキギターを造り、それを渡してフェンネルとロッキンロールするわけだが……。

まあ、俺のセンスに革新的な何かとパワフルを感じたのは、ジャズでもエレキを使うのが珍しくない時代だったのと、サクサスの音色に関してもパワフルで派手なプレイヤーとしてトム・スコットの演奏を聞いた経験があるからだろう。

「そうだな……強いて言うなら、新しいジャンルの音楽や画期的なサウンドが、必ずしも古典的な音楽と無縁ではないということだ。まあ、言葉で説明してどうにかなるものはないが……」

「そうか……」

フェンネルは難しい顔で何やら考え込んでいる。

まあ、はつきり言って現代の音楽のセンスがあるのは他人の作品の功績だ。

俺に期待されても困る。

「……とにかく、チャレンジしてみるしか無いってことか」

「まあ、焦ることは無いさ。まずは今のバンドの編成と曲でできる限界まで、自分の楽器

の可能性を試してからでも遅くはないだろう」

「……わかった」

フェンネルのトロット楽団脱退に関しては、俺が今から誘導してどうこうするべきじゃないだろうな。

脱退の時期を大幅に早めさえしなければ、それでいいだろう。

「それにしても、グレイ。あなたの腕は大したものね。サククスもそうだけど、ピアノだって私より……」

セイボリーはフェンネルが落ち着いていつも通り寡黙になったところで、俺に水を向けてきた。

美人に褒められて嫌な気はしれないが気を付けなくてはならない。

何せ、セイボリーはゲームの準ラスボスなのだ。

「あなたなら、トロット楽団にすぐに入団できると思うわ」

「いや、俺は今ナツメツグ博士のところの仕事で忙しいから」

それから俺とフェンネルとセイボリーは、コニーのことなど他愛もない話をしてから、各自解散となった。

12話 穏やかな日常3

ナツメツグ博士の助手になってから半年ほどが経った。

今日も間借りしている博士の家の一室で目を覚ます。

普段の俺の仕事場は当然ながらナツメツグ博士の工房なので、こうして博士の家の空き部屋の一つに家具と私物を持ち込んで俺の私室として居るのだ。

俺が来てから、博士の家の家事は料理から掃除まで俺がやっているので、今の部屋の生活で不便は無い。

通勤時間がゼロだからな。

しかし、最近ではぼちぼちこの部屋を片付けて、引っ越しの準備を進めている。

何故かと言えば、俺は近いうちに隣の家に移るからだ。

隣と言っても、この家とはドア一つで行き来できる、二世帯住宅のような場所になる。

当然、設計者はナツメツグ博士である。

暇潰しにと言つて、彼は俺の家も空き時間で設計してくれたのだ。

今はまだ土台しか出来上がっていないが、俺の家の建設は着々と進んでいる。

家の増設が終わったら、俺はそちらに住むことになるわけだ。

ここまで世話を焼いてくれるとは、博士には本当に頭が上がりません。そんなわけで、最近の俺は部屋の私物を整理して、すぐに部屋を移れるよう準備している。

まあ、荷物はそれほど多くは無いです。

恐らく、破門でもされない限り、博士の家の家事はこれから先も俺がやるだろうし、助手である以上は作業場も一緒だ。

俺の家にも新たにキッチンや工房を付ける予定は無い。

新居に持つて行くのは、着替えとネフロで買ったベッド、それに机に設置した銃弾のローディングキットくらいだろう。

机の上には追加で作製したりボルバアの弾とライフル弾が散乱しているので、これはいつか片付けないとな。

「ふあ〜」

ベッドから上体を起こし、まずは洗面所で顔を洗う。

ピジョン牧場に上下水道が通っているのもナツメグ博士によるものだ。

クローゼットを開けていつもの機能重視のスーツもどきに替える。

普段は作業やビークルの操縦の邪魔になるのでネクタイはせず、まだ残暑が厳しいの

でジャケットは着ていない。

護身のリボルバーをぶち込んだショルダーホルスターを装備した上にベストを着る。

ベストのポケットに自作したスピードローダーに詰めた予備の弾丸6発とナイフを入れて身支度は完了だ。

キツチンへ向かい、エプロンを着けたら朝飯の支度を始める。

これも助手である俺の役目だ。

俺のモットーは栄養バランスがよく、飽きさせないメニュー。

かつてのナツメグ博士の食卓のような乾きものばかりの献立など以ての外だ。

今日の朝のメインは、前に俺が森で仕留めた猪のベーコンにしよう。

ブロックごと保存しているので、贅沢に厚切りだ。

焔炉の火にフライパンを掛け、ベーコンをこんがりと色が付くまで焼く。

薄いベーコンならパリパリになるまで焼くところだが、こいつは周りに焦げ目が付き中に熱が通ったところで火から下ろした。

同時にメリー乳業からいただいたチーズを炙って溶かしておき、これは切った全粒粉のパンに乗せる。

泡立ったチーズがパンの上に広がり、僅かに皿に零れ落ちた。

この光景だけで食欲が刺激される。

玉ねぎと人参のサラダにオレンジを添えて、紅茶を入れれば完成だ。

「おはようさん」

「おはようございます」

博士が起きてきたので、テーブルに朝食を運び、男二人の飾らない食事の時間だ。

この半年で、俺はナツメツグ博士からトロットビークルの整備と操縦の手ほどきを受け、実戦経験もそれなりに積んだ。

相変わらず、東の森には盗賊団が蔓延っており、戦いの相手には事欠かない。

とはいえ、この世界に来て最初に潰した盗賊団のように、根こそぎ壊滅できるパターンは稀だ。

基本的には、街道から逸れた場所を探し回って、こちらが包囲されるような不利な状況を避けつつ、根気よく潰していくしかない。

その過程で、俺は東の山の中に遺跡のダンジョンを発見した。

ゲームで入れるダンジョンは、入る度に地形が違うのの中に居る敵は盗賊ビークルという、魔法の概念があるのか無いのかよくわからない仕様だったが、現実でも同様だったのにはびっくりだ。

ゲームでは行けないエリアなので、当然ながらこのダンジョンの予備知識は無い。君子危うきに近寄らず。

はたまた虎穴に入らずんば虎児を得ず。

悩む俺だったが、そこで協力してくれたのがネフロ警察署の面々だ。

俺が警察署に報告に行くと、ダンジョンの偵察や周辺の警備に、警察ビークルを投入してくれたのである。

ピジョン牧場の東は国の中心部へ至る道である。

ナツメッグ博士の弟子であり、街道の厄介な盗賊団の討伐に大きく貢献している俺は、ついに警察が一声で支援してくれるまでの人物になったのだ。

……実際は、国に報告しなければならぬから、調査の人員を送っているだけですけどね。

それでも現場の警官は概ね俺に好意的だ。

中には腐敗した奴も一定数居るであろうが、少なくとも腕の立つビークル乗りでナツメッグ博士の後ろ盾がある俺の不利になるようなことを表だつてするような奴らじゃない。

盗賊ビークルの殲滅は手伝ってくれるし、警察のビークル隊から貰った情報にも今のところ悪意を感じるようなものは無い。

おかげで、俺は他のビークル乗りが集結する前にダンジョンから大量の戦利品を手に入れた。

しかし……。

「ほう、グレイ。いいものを手に入れたの。ミスリルに黒鉄にオリハルコンか」

どれもドクエやネット小説ではおなじみの伝説の金属だが、まさかバンピートロットの世界に存在するとは思わなかった。

ゲームではそんなアイテム無かったぞ。

いや、ビークルバトルトーナメントの総合チャンピオンのエルダーが装備する近距離武器のアームパーツであるエクスカリバーアームは、謎の超合金で作られているとか何とか言っていたな。

あれも、こういった魔法金属的な物質が原料なのかな。

「グレイ、この金属はどれもビークルの強化に使えるのじゃ。それに、ミスリルを使った合金は装甲としても優秀じゃが、導電性にも優れていて精密機器にも必要不可欠での。これはもつとたくさん欲しいものじゃが……」

博士のパシリで、俺はしばらくの間ダンジョンで働き詰めだった。

おかげで今の内の工房には魔法金属が大家族の冷蔵庫のように詰め込まれている。

おかげで盗賊ビークルの残骸など価値の低い物は、工房の外に放り出されて野晒し

だ。

「博士、魔法金属って……」

「ふむ、古代文明の遺産か、はたまたお前さんのように別世界から紛れ込んだか。いずれは科学で解き明かされるやもしれんが、とりあえずは使い方次第で有用な物資になる。今のところそれ以上でもそれ以下でもない」

「はあ、そういうもんっすか」

俺のビークルの説明をしよう。

かつては盗賊団の整備場から奪った、何の変哲もないソードアームと砲弾アームを装備した汎用ビークルだったが、今やそんなありきたりなビークルの姿は見る影もない。

何せ、俺には百年後の知識があり、世界中のビークルパーツの知識とチート級の生産能力を持つナツメツ博士が同居しているのだ。

さらに、損傷の少ないビークル九台と整備場から根こそぎ奪った資材があり、ダンジョン探索や盗賊討伐に行けばビークルパーツや金属資源は増える一方だ。

潤沢な資源に任せて色々と強化した結果、俺のビークルは機動性や燃費などのエンジン系、装甲などの耐久系、さらには武装に關しても大幅な進化を遂げた。

まずはエンジン系統だが、これにはダンジョンで採掘したミスリルを使って、電気

モーターとガソリンエンジンの小型ハイブリッド低燃費エンジンを搭載している。

俺はハイブリッド車の説明を軽く紙に——ブレーキ時など無駄なエネルギーを電力に変換し、高出力が必要なときにガソリン系も稼働することくらい——書いた程度だが、ナツメツグ博士は従来のビークルとは比べ物にならない性能のものを開発してしまった。

もちろん、これにもある程度まとまった量のミスリルが必要なので量産は難しい。

この特製のエンジンが、ミスリル装甲をコーティングした耐水ボディL——Hほどのが大きくなく、Mと形状は似ているが積載量で遥かに勝り装甲も厚い——などという原作ブレイカーな性能のボディパーツに収まっているのだ。

装甲を張った増設燃料タンクに、補助エンジンも小型化したのでバックパーツにはみ出すことなくボディに収まった。

ボディには傾斜装甲を採用しており——爆発反応装甲は、安全性と敵の攻撃が火砲に限らないことを考慮して不採用——生半可な攻撃では傷もつかない。

ブレストパーツも整備箱を収納した装甲ブレストだ。

風防パーツもコクピットの防御を重視した形状になっている。

ゲームではイベントをこなさないと手に入られない、積載量とダッシュ強化による機動力を兼ね備えたレッグパーツ、人脚ノーマルM強化型も博士の協力で製作できた。

これだけでも最終兵器レベルの性能だ。

肝心の武装だが、右には近接武器で左には射撃武器のスタイルは変わらず、しかしどちらもありきたりなパーツだったソードアームと砲弾アームに比べると大幅に強化された。

右手に装備するのは強化ブレードアーム。

ゲームに登場するブレードアームは他の打撃武器と同じモーションでありながら動きが素早く攻撃力も高い優秀なアームパーツで、俺はゲーム中盤で手に入れてから最後まで愛用していた。

単純に攻撃力がブレードアームより高い近接武器ならアックスアームがあり、エンディング後にはエクスカリバーアームが手に入る。

ブレードアームと同じ時期に入手できるトライデントアームは、火力で言えばブレードアームと同じ程度で、敵の動きを止める連続攻撃が放てる刺突武器だ。

しかし、エクスカリバーは一撃が重い代わりに動きが遅く、トライデントもモーションの問題でこちらの足も止まってしまう——ジャンプを活用すれば移動しながらの攻撃も一応放てるが——のでタイマンには強いが一对多には不向きだ。

操作に慣れたプレイヤーなら、間違いない他の近接アームと同じモーションで動きの

速いブレードアームを好むはずだ。

現実でも、俺は近接武器にソードアームを使っていたので、やはり慣れたモーションで使いやすいブレードアームを選んだ。

これの作成にも博士は協力してくれたわけだが、どうやら俺がダンジョンから持ってきた黒鉄とオリハルコンを使つて、従来のブレードアームより耐久力と切れ味を数段上げてあるようだ。

このダヴィンチもどきは刀鍛冶までできるのか……。

しかし、これだけの性能のブレードなら、一撃の威力においても最早エクスカリバーアームに引けを取らないのではないか？

ナツメツグ博士曰くエクスカリバーアームにもオリハルコンが使われている可能性があるとのこと、やはり切れ味においてはほとんど変わらないらしい。

因みに、エクスカリバーアームはビークルバトルーナメントのチャンピオンであるエルダーの武装で、情報などほとんど出回っていないはずだが、ビークルパーツに関してはナツメツグ博士にはお見通しのようなうだ。

何せ、博士は古今東西あらゆるパーツに精通しているからな。

左の射撃武器はゲームには無かった新しいアームだ。

最強の射撃系アームであるガトリングアームを改良したチェーニングアームだ。チェーニングガンを開発するには、博士の説得に少々苦労したな。

原作の最強の射撃武器は、スペックで言えばフェンネルのビークルのトレードマークでエルダーも装備している長距離キャノンアームだ。

百年前の時代設定なのに何故かミスリルを撃てる謎武器なのだが、どうやらこの世界では『魔銀』とかいうミスリルのなり損ないだかミスリルの加工の際に大量に出る副産物を使って、ビークルのエンジンの熱を追尾するシステムを組み込んでいるらしい。

確かに、長距離キャノンアームは一撃の威力が高く一対一のビークルバトルでも強力な武器となるだろう。

しかし、プレイヤーにとつての最強の射撃武器は長距離キャノンアームではない。何故かと言えば、装弾数が十発と全射撃武器の中で一番少ないのだ。

一対一のビークルバトルではよくても、フィールドやダンジョンでは心許ないだろう。

一方のガトリングアームは長距離キャノンアームよりも弾速が速い強力な銃弾を連射できるうえに、装弾数も五十発——射撃動作の一回で六発放つので、厳密には三百発——と全武器中で最多だ。

ビークルバトルにおいても最強クラスの敵に普通に通用するうえに、フィールドやダ

ンジョンにおいても火力と長時間戦闘に対応できる装弾数を併せ持つ最強の武器なわけだ。

ガトリング系の武器は砂漠の盗賊デザートホーネット団の武器で、頭領のノーラのピークルもガトリングアームを装備している。

主人公は彼女のイベントをこなすことでガトリングアームを貰える。

俺はこのガトリング系のアームがどうしても欲しかった。

盗賊の討伐やダンジョンなど、持久戦や集団戦に対応するためには、やはり掃討用の射撃武器が欲しい。

最悪、デザートホーネット団のピークルを闇討ちでもして鹵獲してこようと思ったが、ここもさすがのナツメツグ博士、既にガトリングの知識はあったので助かった。

俺は多銃身ではなく単銃身にすることで軽量化を図り、チェーンガンのシステムでガトリングに引けを取らない発射速度を持ち、クロームモリブデン鋼とミスリルで銃身を作ることで過熱を抑制する機構をナツメツグに提案した。

完全に効率よく人を殺すための武器だ。

博士も少々躊躇していたが、俺が罪の無い人間からの略奪や快樂殺人に手を染めないことを何度も確認し、ようやく開発に着手してくれた。

地球でチェーンガンといえば攻撃ヘリのアパッチに搭載されているM230が有名

だが、ビークルに搭載するものはもっと小型になる。

結果、完成したのがガトリングアームと同じ弾薬を使用し、発射速度も引けを取らない、チェーンガンアームだ。

ガトリングアームより単純な構造で軽量化されているので、弾薬ボックスのスペースが広くとれるため、装弾数もほぼ倍になっている。

「まったく……臆面もなくわしに大量破壊のための兵器を作れなどと、よく言えたもんじゃない。そんな弟子はお前さんで最後にしたいものじゃ」

「いいじゃないですか。その武器のおかげで盗賊討伐ができて牧場周辺も安全になったし、ダンジョンの探索が捗って鉱物もこんなに手に入ったんですから」

「ふん、その分わしをビークルの修理で扱き使ったではないか。とんとんじゃ」
そりや、仕方ないですぜ。

これだけ汎用型と差があるビークルになると、俺が完全に理解して修理することは不可能だ。

最近になって、ようやく最低限のエンジン系統とチェーンガンの射撃システムの修理を覚えたのだ。

まあ、いつでもナツメック博士に整備してもらえとも限らないので、大破するような目に遭わないことを祈ろう。

13話 穏やかな日々の終わり

「グレイ、今日はどうするんじや?」

「そうですね、今日はネフロの闘技場に行こうかと」

原作でも各街には必ず闘技場があり、ピークルバトルという一対一の決闘システムによる対戦バトルが楽しめる。

バトルライセンスというものが発行されており、これのDからSのランクが一つの強さの指標になるのだ。

ゲームでは主人公もネフロで初めてバトルライセンスを貰い、それ以降は闘技場でバトルに出場することができるようになり、自身が出場するだけでなく他のバトル同士との戦いの賭けに参加することもできる。

俺も少し前からバトルライセンスを取得してバトルに出場し、腕を磨いていたのだ。

今の俺はAランク。

キラーエレファント団の親分と同じランクだ。

ゲームではストーリーを進めないで闘技場には姿を現さない彼だが、何故か今は出場

していたのだ。

申し訳ないが、彼を何度も下すことで実績を作り、俺もAランクまで上り詰めさせてもらった。

まあ、本人は「若いの！ わしを倒すとは、なかなかやりおるのお！」とご機嫌だったのでよしとするか。

ネフロにはSランクのシュナイダーというピークル乗りが居り、彼を倒せば俺もSランクへの道が開けるだろう。

「ふむ、お前さんもそろそろSランクかのか？」

「いや……どうでしょうね……」

実は、俺は未だにシュナイダーには挑戦していない。

何せ、彼はネフロの英雄とよばれる男で、ネフロの街においてはただのピークルバトラーに収まらない人気者なのだ。

俺はたったの数か月でAランクに上り詰めたことがあり、それだけでも目立ちすぎた感がある。

唯一無二の英雄であるシュナイダーを俺が下したときの影響は計り知れない。

そうなると、少し躊躇してしまうのだ。

Sランクのライセンスがあればハッピーガーランドに居るピークルバトルトーナメ

ントチャンピオンのエルダーに挑戦できる。

ゲーム本編開始の前にエルダーの強さを見ておく意味でも、一度挑戦しておきたい。シユナイダーを倒せば、地道にAランクを倒し続けて実績を積むよりも早くS級ライセンスが手に入るだろう。

そうすれば、エルダーへの挑戦も容易になる。

しかし、シユナイダーとネフロのことを考えると、どうにも踏み切れないのだ。

「ふむ、まあビークルバトルの話はなるようになるじゃろ」

「何だか適当ですね」

ナツメツグ博士にエルダーのことを言うのは考えものだな。

実は、エルダーはダンディリオンの仮の姿で、ビークルバトルチャンピオンとして資金を稼ぎつつ、秘密結社ブラツティマンティスを創設し、死んだ弟チコリの復讐として、世界と機械文明を破壊しようとする目論む。

それがゲーム終盤のストーリーになってくるわけだが、現実でダンディリオンと会っていない以上、原作とどこまでが同じなのかわからない。

俺は未だにハッピーガーランドに足を踏み入れてすらいないのだ。

「別にAランクでも困ることは無いじゃろ？ まあ、お前さんがもつと金が欲しいと言

うのならば止めはせんが……」

「いや、そういうわけでは……」

実は、ビークルバトルではフアイトマネーが出る。

原作ではエルダーの創設資金やら何やら話に聞くだけで、主人公がビークルバトルをしてもパーツと交換できるメダルが貰えるだけであり——交換したパーツを売っても半額になるので大した儲けにはならない——闘技場で金を稼ぐという感覚はあまり無い。

まあ、ハッピーガーランドでは闘賭博でかなり稼げるのだが……。

しかし、現実ではAランクのフアイトマネーは相当なものになる。

俺は既に数十万URを闘技場で稼いでいる。

またしても片手間のバイトで年収を稼いってしまったな。

「まあ、とにかく夕方にはネフロに行きます。支配人から、できれば今日来てほしいと言われてるんで」

「うむ、わかった」

ネフロ闘技場の支配人ディーノは、端的に言えばゲイツっぽい奴だ。

まあ、ライセンスは迅速に発行してくれたし、主人公も彼からライセンスを貰うこと

になるのだから、敢えて喧嘩を売る必要は無いのだが……どうにも苦手だ。

幸い受付嬢とのガールズトークで「グレイも悪くはないけど、大柄で武骨であたしの趣味じゃないわ〜」などと言っていたので俺の尻は今のところ安全だろう。

まあ、それでも半径五メートル以内に近寄りたくないのは仕方ない。

さて、今日の用はSランクの昇格がらみなのかどうか……。

「おお、そうじゃ。グレイ、お前さん、今日の午前中は暇じゃな？ ならばメリー乳業のところへ行つてやつてくれんか？」

「ええ、それは大丈夫ですが……何か、トラブルですか？」

「いや、牧羊地と畑を広げるらしいんじゃよ。お前さんに開墾の手伝いを頼みたいらしい」

それは大歓迎だ。

メリー乳業とピジョン牧場の農家の皆さんの生産力が高まれば、俺や博士も美味しいチーズや作物に家畜の肉が食えるからな。

普段、お裾分けを貰っている以上、こういう手伝いは積極的にやらないと。

この辺りは、何だかんだで山や森の自然も多く、ちよつとやそつと開墾したくらいで環境破壊にはならない。

「わかりました。早速、行ってきます」

「頼んだぞ」

ビークルの強化ブレードアームを工房から引つ張り出したノコギリアームに置換し、俺は丘の麓の農家のもとへ急いだ。

「おお、グレイ。よく来てくれたね」

「よう、グレイの旦那。災難だったな、こんな野望用に巻き込まれちゃって」
「助かるよ」

「グレイさん、わざわざご足労いただきまして、ありがとうございます」
最初に顔を会わせたのはメリー乳業の男衆だ。

「いえいえ、俺もいつもお世話になっていきますから」

「何言ってるんだい。お前さんには鹿や猪も分けてもらっているし、乳清チーズの製法まで教えてもらったんだ。こうしてお前さんの手を煩わせておいてなんだけど、この借りはきちんとチーズで返すからな」

「ありがとうございます。そいつには期待しておきます」

乳清チーズに関しては、俺がリコッタチーズを食べたくなつたのと、メリー乳業で余ったホエーを廃棄していたのを見て、テレビで見たうる覚えの製法を教えただけだ。

羊乳のリコッタは初めてだったが、なかなか美味かった。

今後も期待したいものだ。

野生動物の肉に関しては完全に成り行きだ。

時々、俺は山に入って畑の作物を荒らす鹿や猪を駆除している。

そもそも何故、俺が野生動物の駆除をすることになったかというところ、ちょうどピジョン牧場では老齢に差し掛かっている狩人が多く、彼らの引退で狩人が減ってしまったからだ。

害獣駆除のペースが一気に落ちると被害が酷いことになる。

ピジョン牧場の面々はビークルで害獣を駆除することも考えていたそうだが、さすがにジビエの肉を大口径の火砲で潰してしまうのは勿体ないと思い、俺は小火器で仕留めることにしたのだ。

引退した元狩人の爺さんからは、彼の愛用していたライフルを譲り受けた。

何の変哲も無いボルトアクションライフルだったが、俺は銃身と擦り減ったパーツを交換し、ナツメツグ博士に手伝ってもらい製作したスコープを装着した。

ビークルで獲物を追い、ライフルで仕留める。

このコンボがなかなか強力で、俺は結構な数の野生動物を無駄にすることなく確保できているのだ。

当然、俺とナツメツグ博士の二人だけでは食い切れないわけで、そういった余剰の獲

物はピジョン牧場の連中にお裾分けしている。

「さ、とにかく作業を始めましょう。まずは森の伐採と岩山や切り株の除去からですね」
「おう、俺も手伝うぜ、旦那」

伐採した木材をまとめるところまで手伝い、俺の仕事は終わりだ。

牧場の連中に一声かけた俺は、一度ナツメツグ博士の工房に戻ってノコギリアームを強化ブレードアームに付け替え、俺はネフロの街に出発した。

ネフロ闘技場に入ると、いつもは選手控室に居る支配人の姿が見えなかった。

控室にはいつも通りDランクのチャッキーにイザベル、CランクのルーニーにAランクのエレファント親分、さらに何とSランクのシユナイダーが居た。

腰抜けジミーは居ないな。

彼は原作で主人公がネフロ闘技場を訪れたとき、ちょうど逃げ出した直後だったが、現実ではまだこの闘技場に所属していないのか。

今はまだ無名なジミーだ。

既にビークル乗りになっているのかどうかもわからんな。

「ああ、 그레이さん。お疲れ様です。弾薬の補充は？」

「いや、今日は撃ってないから大丈夫。駆動のチェックだけ頼めるかい？」

「わかりました」

闘技場では古今東西のあらゆる弾薬が揃う。

ネフロの闘技場も例外ではなく、ガトリングアームや俺のチェーニングアームの弾薬をストックしてあるのだ。

俺はいつもここで弾薬を購入しているので、修理工とは顔なじみだ。

以前、工房に置いておく分もまとめて一万発ほど購入したこともあったからな。

あれなら顔も覚えられるというものか。

「支配人は？」

「上です」

整備代を払いながらついでに聞いてみると、デイーノは上に居ることがわかった。

さて、呼ばれていることだし、さっさと会いに行くか。気は進まないけど。

「……………」

選手たちが思い思いに寛ぐなか、俺に鋭い視線を送るシュナイダーが気になったが、俺は気づかないふりをして階段を上がった。

「支配人」

受付の近くで支配人のデイーノを見つけたので声を掛けた。

「あら、グレイ。来てくれたのねえ、嬉しいわ！」

そういう誤解を招く言い方はやめてほしい。

つてか、俺は好みじゃなかったはずだろ。

何故、こうも距離が近いんだ？

至近距離まで接近されると、身長之差で俺がデーノを見下ろすことになる。

一応、闘技場内においては彼が上司なので、この体勢は居心地が悪いし、何より俺はノーマルだ。勘弁してもらいたい。

「支配人、何かご用があるとのことでしたか？」

「もう……いい・け・ず。相変わらず、せっかちなんだから」

あんと同じ空気を少しでも長く吸いたくないんですよ。

「支配人、事務室の方にお通ししては？」

受付嬢が俺に追い打ちをかけてきやがった。

「あ、そうね。それがいいわ。グレイ、行きましょ」

俺は目で受付嬢に助けを求めるが、冷笑で拒否されてしまった。

覚えてろよ……。

もしもケツの穴に危機が及ぶようだったら、遠慮なく銃を乱射するからな。

14話 挑戦状

「マジか……」

闘技場の対戦表には、はつきりとした筆跡で俺の名前が書かれている。

“ネフロの英雄” シュナイダー 【マキシマム】

vs

“ナツメツグ博士の右腕” グレイ 【ジャガーノート】

ライセンス登録するのに便宜上付けたピークル名の恥ずかしさが気にならないくらい、この対戦表の内容は衝撃的だ。

観客席への入り口を見れば、客の入りは上々どころか完全にキャパオーバーだ。当然だろう。

突如、彗星のように現れて数か月でAランクに上り詰めた超腕利きのピークル乗りにしてナツメツグ博士の助手だという男と、希少なSランクのピークルバトラーにしてネ

フロの街の英雄が対決するのだ。

今まで一度も組まれたことが無い、まさに夢の対戦だ。

年一回のビークルバトルトーナメントならば、シユナイダーとKランク——トーナメントチャンピオンの方に与えられる特殊なSランク、キングのK——のエルダーの対戦が見られる。

しかし、今のネフロにおいては、俺とシユナイダーのマッチこそ、一番見ごたえのある勝負に違いない。

あれだけ迷っていたのに、何故その日のうちにシユナイダーと対決することになったのか？

話はデイーノに闘技場の事務室に連れ込まれたときまで遡る。

「シユナイダーから、対戦の申し込み、ですか？」

「そうなのよ。彼がアタシに直接頼んできたの。やあねえ、まったく。普段は寡黙な男にあんな真剣な表情で迫られたら、断れないじゃないのお」

俺は気持ち悪い仕草をするデイーノから目を逸らして考え込んだ。

俺としては、シユナイダーを倒した方が早くランクが上がるので嬉しい。

しかし、シュナイダーにとってはどうだろう？

彼はSランクで俺はAランク。

ポイントを稼いだところで、シュナイダーのランクにこれ以上の昇格は無い。

彼がさらに上を目指すとするればそれはKランク、ビークルバトルーナメントで優勝するしかない。

正直、格下の俺に負けるリスクを背負ってまで挑戦する意味は無いのだ。

シュナイダーの敗北はネフロの英雄が下されることを意味する。

本人もそのデメリットは十分わかっているはずなのだが……。

「支配人、シュナイダー本人に再度確認を「俺は問題ない」」

振り返ると、事務室のドアから一人の男が顔を覗かせていた。

鍛え上げた体躯に短髪、顔の傷。

間違いない。

彼がシュナイダーだ。

扉が開く音がしたのは気づいていたが、まさか本人が来るとは思ってもみなかった。

「……「ナツメック博士の右腕」グレイ。お前に対戦を申し込む。ファイトマネーが不足だと言うのなら……金なら払う」

「いや、金に不満があるわけじゃない。ただ、事情を聞かせてもらっても？」

シュナイダーはしばらく不機嫌そうに黙っていたが、どうやら面倒くさいのではなく、口下手なりに言葉を選んでいるようだ。

「俺は、二年前から『白い悪魔』に負け続けている。お前が用いるのは超合金の剣と強力な射撃武器を使い分けた戦術。だから、お前と戦いたい」

二年前か。

チコリが死んだのが三年半ほど前。

今年のトーナメントはもう終わっているはずだから、シュナイダーは今回で三連敗か。

この調子だとゲーム本編までに四連敗、ゲームの主人公がトーナメントでシュナイダーに勝つまで進出できなかった場合は、シュナイダーはエルダーに五連敗を喫することになる。

それを考えると、ダンディリオンは凄いな。

たった一年で、ネフロの英雄と呼ばれたSランクのビークル乗りが逆立ちしても敵わない強さを手に入れたわけか。

さぞ凄まじい復讐心なのだろう。

思考が脱線したが、シュナイダーの言わんとすることは理解した。

「……要は、エルダーと似た武装やスタイルで戦う俺を使って練習したいと？」
「そうだ」

シュナイダーは悪気も無く肯定するが、はつきり言って失礼な話だ。

人にピークルバトルの決闘を挑んでおいて、それをもつと高みに居る奴との戦いに備えた練習だと言っているのと同じである。

俺じゃなかったら、馬鹿にするなどキレていてもおかしくはない。

しかし、それ以前にシュナイダーは自分の立場が分かかっていないのか？

「シュナイダー、わかっていないのか？ “ネフロの英雄” はただのピークル乗りじゃない。この街の人々の心の拠り所だ。もし、俺に負けたら……色々と軋轢が生まれる」

「……戦う前から負けることを考えるピークル乗りは居ない」

シュナイダーは俺に勝つつもりでいる。

原作ではエルダーに連敗する情けない奴といった印象があったが、どうやら現実ではそこまで腑抜けではないらしい。

至近距離から伝わる自信と闘気には、他のピークル乗りや盗賊とは一線を画すものがある。

しかし、シュナイダーは自分とピークルバトル以外のことには気を配れる性格ではない。

これは、色々と面倒だ。

俺が調整しないといけないのだろう。

「条件があります」

「……………」

「条件？ 何かしら？」

俺はシユナイダーとデイーノを見回して、ゆつくりと口を開いた。

「支配人、俺が勝ったらSランクにしてください。あとこれも俺が勝ったらの話ですが……次々回のビークルバトルトーナメントまでシユナイダーとの対戦はなしです」

「えく!? 再来年まで試合を組めないって、それはちよつと酷くなく「受けよう」ちよつとー!」

デイーノはグググチ言っていたが、シユナイダーは即決した。

「お前を倒せないようでは、エルダーには届かん」

「じゃあ、そういうことで」

「ちよつとー! アタシ抜きで話を進めないでー!」

そんなわけで、俺とシユナイダーの対戦カードは生まれ、俺たちはリングに上がるこ

とになったわけだ。

まあ、正直なところ事を急ぎ過ぎた感がある。

たとえば、俺がシユナイダーに勝っても、それが一回だけなら、数年もすれば人々は他の追隨を許さないシユナイダーを英雄として扱い続けるだろう。

俺はゲームの主人公たちのために色々と先回りして準備しておきたいのであって、シユナイダーに取って代わってネフロの期待を背負いたいわけではない。

正直、他に手っ取り早くSランクになる方法があるのならば、わざわざネフロの象徴たるシユナイダーを倒して注目を浴びようとは思わない。

まあ、既にナツメツグ博士の弟子という時点で目立ってはいるし、それこそトーナメント外であってもエルダーを倒せば悪目立ちはするだろうが、それでも街の代表レベルのネームバリューは足枷となり得る。

何せ、英雄つてのはプライベートの一挙一動まで人々の期待に応えなくてはならないからな。

シユナイダーのように素でできる奴は別だが、俺には無理な話だ。

「グレイさん、入場をお願いします」

「了解」

係員の誘導で、俺はリフトに乗ってコロシウムに入場した。

リフトの稼働する音がやけに遠く感じる。

ゲームでは何度も対戦したシュナイダーだが、それ故に彼が如何に強敵かわかっている。

以前に観戦したシュナイダーの戦いと、俺のピークルの動きを脳内でシミュレートすれば勝率は高いが、それでも油断はできない。

シュナイダーも普段通りでは俺に勝てる可能性が低いことは何となくわかっているはずだ。

さて、試合はどう転ぶか……。

やがて、俺のピークルが地面から顔を出したところで、俺の耳を凄まじい勢いの歓声が貫いた。

「「「わあああああああ!!!」」」

対面のリフトからはシュナイダーが入場してくる。

寿司詰め状態の客席からは相変わらずやかましい声が届くが、俺たちは無言だ。

ここまで来たら、前口上や何やらは無い。

ラウンドガールが横切って退場したのを確認し、あとは開始の合図を待つ。

この時間だけは観客も無言だ。

俺とシュナイダーも張り詰めた緊張感のなか、ピークルのハンドルに手を掛けて睨み

合う。

「っ！」

号砲の合図で一斉にビークルを加速させ、俺たちは初撃を繰り出した。

15話 シュナイダー戦

シュナイダーのビークル「マキシマム」は、金棒アームとオリジナルのアームパーツであるシールドアームSSを装備した接近戦仕様だ。

原作ではとにかく闘技場にあるものを持ち上げて投げつけ、プレイヤーのビークルにも投げ攻撃を仕掛けてくる。

ゲームにおけるシュナイダーの攻略法は二つ。

一つは正攻法の殴り合いだ。

シュナイダーが物を持っていないときに接近し、一発打撃を食らうのを覚悟でR3とL3を連打してこちらが先に持ち上げ投げける。

投げた後は確実に打撃を二発入れるようにすれば、どうにか削り切れるはずだ。

もう一つは裏技的な戦術だが、これが一番簡単で有効だ。

岩やバスなどの大型オブジェクトを持ち上げたところを射撃武器で狙い撃ちすれば、運がいいとノーダメージで倒せる。

何せゲームではシュナイダーを操作するのはAIだ。

何度撃たれようとも、愚直に物を掴んで投げてくるのだ。

ガトリングアームかその劣化版のボウガンアームで撃てば、闘技場内のオブジェクトが切れる前に簡単に倒せる。

原作でシュナイダーと戦うのは、普通のペースで攻略すればビークルバトルーナメントが最初なので、やり方次第でボウガンアームもガトリングアームも手に入る。

そんなわけで、Sランクに恥じない強さを持っているシュナイダーにも、ゲームではどデカい欠陥があるのだ。

「っー」

シュナイダーは俺のチェーンガンの早撃ちを横ダツシユで躲しながら一気に接近した。

広大なフィールドならこちらも離脱しながら射撃を続けられるが、そこは狭い闘技場内。

接近を許してしまった。

シュナイダーの「マキシمام」のアームに掴まれるのを回避した直後、コクピットの前を金棒アームの打撃が通り過ぎた。

やはり現実ではゲームのようにワンパターンでは攻略できない。

シユナイダーは格闘系の接近攻撃を主に仕掛けてくるが、大きめのオブジェクトを見境なく掴むような真似はしない。

そんなことをすれば、俺のチェーニングで撃ち抜かれるのがわかってるからだ。

俺もシユナイダーのレバー操作と同時に放たれる金棒アームの打撃と掴もうと伸ばしてくるアームの先端を避け、時には打ち合いながら強化ブレードアームを振るう。

ブレードが「マキシマム」のブレストパーツを掠めた。

シユナイダー自慢のオリジナルブレストパーツ、スパイクブレストSの破片が飛び散る。

「くっー！」

体勢を崩したところを一気に畳みかける。

ダツシユで接近しながら、強化ブレードアームを真っ直ぐに突き出し、「マキシマム」のボディに向かって刺突を放った。

「ぐおー！」

間一髪、シユナイダーはビークルを斜め後ろに後退させながら俺のブレードに金棒アームを打ち付けた。

シユナイダーの卓越した反射神経と操縦技術でのエンジンの大破は防いだものの、「マキシマム」のボディには深い傷跡が刻まれた。

「ちっ」

俺はチェーンガンを掃射しつつも、一度「ジャガーノート」を後退させた。

強化ブレードアームは無事だった。

刀身の横合いから金棒アームを打ち付けられた。

普通のソード系アームなら真つ二つに折れていてもおかしくないだろう。

黒鉄とオリハルコンの強化はさすがだ。

ブレードには傷一つ付いていない。

「待てやー」

ブレードの状態を確認しつつも、俺は大型オブジェクトを遮蔽物にして身を隠す「マキシマム」をチェーンガンで狙い撃った。

数発ずつバースト射撃のように打ち出される大口径の銃弾が廃車のバスを貫通し、ついには後ろに隠れた「マキシマム」を捉えた。

シュナイダーは再び「マキシマム」を転進させ、別の遮蔽物に逃げ込もうとする。

「逃がすか……っ！」

俺は一瞬、遮蔽物の影まで深追いしそうになったが、慌てて後方にダッシュして距離を取った。

嫌な予感は正しかった。

先ほどまで俺が顔を出していた位置に、大岩が投げ込まれたのである。

あれが当たれば、さすがの「ジャガーノート」も質量をもろに受けて大きくバランスを崩してしまうところだった。

最悪、そのまま立ち上がれずにタコ殴りだ。

「いやらしいことを……」

遮蔽物で俺の視線を遮り、うまいこと大質量の投擲物を用意して、引きつけたところ
でぶつける。

なかなかいい手だ。

「……………」

シユナイダーは無表情を装っているが、今の奇襲を躲されたのは予想外だったよう
だ。

いつもより表情が歪んでいる。

横にダツシユで回り込んでチェーンガンで撃とうとする俺に対し、エルダーの戦闘ス
タイルを研究し対策を立てつつつけてきたシユナイダーは見事に回避しつつける。

これだけ弾速の速い掃討用の射撃武器を、現実でこうも躲し続けるとは、その技量は

賞賛に値する。

「だが……これで、終わりだ」

シュナイダーの「マキシマム」は、今度は堂々とバスの残骸を持ち上げた。

そのままチェーンガンの狙いを定めると、円を描くように遮蔽物の裏に移動した。

「どうやら、あの大きなスクラップを投げつけるのとともに決着をつけるつもりらしい。」

普段の盗賊討伐なら、そんな挑発に乗ることは無いが、これはビークルバトルだ。

受けて立とうじゃないか。

俺は盾にしていた大岩の影から徐々に顔を出した。

そのままシュナイダーの隠れた遮蔽物に回り込んで近づく。

観客も固唾を飲んで見守っており、会場には「ジャガーノート」の僅かな駆動音のみが響く。

「っー」

上方から大きなスクラップの塊が投げ込まれた。

シュナイダーの攻撃だ。

俺のチェーンガンでズタボロになったバスの残骸だが、近距離から覆いかぶさるように投げられたので、ダッシュでの回避は間に合わない。

「せいー！」

俺の操作で強化ブレードアームが一閃し、かつては車のボディだったジユラルミンの板を真つ二つに切り裂いて叩き落す。

「なっー！」

しかし、次の瞬間、俺は驚くべき光景を目にした。

何と、残骸の奥からシユナイダーの「マキシマム」が姿を現し、真つ直ぐに突っ込んできたのだ。

側面から回り込んでくると思っていたので虚を突かれた。

急いでチェーンガンを連射するが、弾丸は「マキシマム」の前面に突き出されたシルドアームSSを穴だらけにしてズタボロにしただけだった。

満身創痕の「マキシマム」が金棒アームを振りかぶる。

完全に上を取られた攻撃なので、打撃力は相手の方が圧倒的に勝る。

「もらったー！」

「ヤバっ」

俺は咄嗟にハンドルを操作してビークルのボディを上方に向けた。

ビークルのコクピットを上から叩き潰そうと打ち下ろされた金棒は、「ジャガーノート」のボディの装甲を斜めに叩く。

普通のビークルならばボディをペしゃんにされて大破、良くても大ダメージを受けていただろう。

しかし、ミスリル合金の傾斜装甲を装備した俺のビークルは、そんな攻撃ではほとんどダメージを受けない。

「何っ!?!」

驚くシュナイダーを尻目に、千載一遇のチャンスを得た俺は、そのまま強化ブレードアームを「マキシマム」のエンジンに刺し込み、ダッシュで体当たりして引き離した。

「があー!」

衝撃に呻き声をあげるシュナイダーに、レッグパーツから崩れ落ちる「マキシマム」。

黒煙を吐き出していた「マキシマム」もついには動かなくなつた。

俺は油断なくチェーンガンを向け続ける。

「が、はあー! くそっ……!」

シュナイダーの戦闘継続が不可能だと判断した運営が試合終了を宣言した。

俺の勝利だ。

会場はその日一番の歓声に包まれた。

「はい、これがS級バトルライセンスよ」

試合終了後、ビークルを修理工に預けて簡単なメンテナンスと弾の補給を頼んだ俺は、すぐに支配人のディーノのもとを訪れていた。

彼は約束通り、俺にS級のバトルライセンスを渡し、シユナイダーとの試合を次々回のビークルバトルトーナメントまで行わないことを記した書類にサインした。

「あとこれ、今回のファイトマネーね。今回だけの特別マッチだから、報酬も特別よん」
ディーノは俺に10万URを渡した。

今回の対戦は、その希少性ゆえに大幅な観客増が見込めたのだ。

プロボクシングなら日本タイトルマッチ並みの金の動きだが、まあシユナイダーと俺の対戦ならこんなものか。

「どうも。それじゃあ、俺はこの辺で」

「ああくん、もう行っちゃおうの〜?」

俺はディーノがまた面倒なことを言い出す前に、そそくさと事務室を退出した。

選手控室に戻ると、既に俺のビークルの修理は終わっていた。

煤や土埃は綺麗に取り払われ、一目では先ほどビークルバトルに出場したとは思えない状態だ。

「いやあ、相変わらずグレイさんの「ジャガーノート」は凄いですねえ。あんな激闘だったのに、装甲もほとんど傷ついていないし、エンジン系統にも何もトラブルは起こっていない。とりあえず燃料と弾薬の補給、それに駆動部のメンテナンスはやっておきましたよ」

「ありがとう」

本当にナツメック博士さままだな。

Sランクバトラーとド突き合いをして、装甲にもブレードにもほとんど消耗が無い。

一応、博士のところに戻ったら診てもらおうと思っているが、大したトラブルは無さそうだ。

それよりも、シュナイダーの「マキシマム」の方が問題だろう。

事実、整備場の隅にはズタボロになった「マキシマム」が置かれている。

「シュナイダーは？」

「あ、先ほど怪我の治療が終わってお帰りになりました」

自力で帰ったか。

怪我が軽いようで何よりだ。

「それにしても……シュナイダーさんの奥さんって美人だったなあ。でも、どつかで見ただことあるような……それにシルヴィアって名前もどこかで……」

「へえ、奥さんが迎えに来てたのか？」

「そうなんですよ！ でも、シユナイダーさんは一人で帰れるのだ、余計なお世話だの、そっけない態度で……」

確か、シユナイダーの彼女のシルヴィアは、『ホテル・ジャコウジカ』地下の『バー・アフロディーテ』のウエイトレスだったな。

実は彼女はミニゲームのビリヤードで対戦できる相手だったりする。

しかも腕前は……。

「それじゃ、俺はそろそろ失礼するよ」

「あ、はい。次はいつごろお越しでしょうか？」

「いや、ちよつとわからないな……。もう少ししたらハッピーガーランドの方に行くかもしれないし」

「え？ そうなんですか？ せっかく、シユナイダーさんに勝つてSランクにもなったのに……。このまま何戦かこなして街の人にさらに顔を覚えてもらえば、間違いなくグレイさんは英雄ですよ」

それがマズいからしばらく闘技場と距離を置こうかと思っているんだよ。

まあ、闘技には出たとしてもだ……。シユナイダーとの対戦はしばらくの間は絶対にならないからな。

しかし、思った以上にビークルバトルというのは難しいものだ。

ハッピーガーランドに行くのはいいが、やはりエルダーと戦うのはもう少し経験と鍛錬を積んでからにしようかな。

16話 開発の進捗

Sランクのバトルライセンスも手に入れ、ビークルの強化も一通り済んだ。

そろそろハッピーガーランドに行ってみてもいいのだが、まだまだナツメツグ博士のものでできることは多い。

博士に未来の知識を伝授して、製作では雑用を手伝い、飯を作って家の掃除と片付けをする。

そんな日々を過ごしている今日この頃だが、意外なことにそれなりの進展があるのだ。

博士の脳みそはまさにダヴィンチのノートと同じで、同時並行でビークルのパーツ開発から研究に俺の家の設計や楽器製作をこなし、たまに何に使うのか訳の分からない機械を作りはじめる。

そんな中で、最近になって試作品が完成したのが洗濯機だ。

手回し式の洗濯機はこの世界にも存在している。

しかし、電動の全自動洗濯機はナツメツグ博士に聞いたところ王都にすら無いこのこ

となので、二十一世紀の洗濯機をレポートに書いて説明した。

すると博士は次の日には電動の洗濯機の試作品を完成させ、最近では博士レベルの技術屋が居なくても量産できるモデルの設計が終わったのだ。

これは大勢の労働者を抱えており洗濯物の数も尋常ではない工場や鉄火場、それに大勢の使用人を抱える富裕層の家向けに販売するらしい。

富裕層や旧貴族を中心に普及率が上がれば、次は庶民の家庭の番だ。

「グレイ、こいつはもしかするとトロットビークル並の発明やもしれぬぞ」

「ええ？ まさかあ……」

「確かに、従来の手回し式の洗濯機ありきのもので、ビークルほど特許料が莫大な額になる代物でもない。しかしの、早いところ生産体制を整えないと注文が殺到して大変なことになるのは確実じゃ」

結果、ピジョン牧場以外へ販売する電動洗濯機は、ハッピーガーランドの工場へ生産を委託することに決まった。

今後、ネフロなんかでも電力需要が飛躍的に高まりそうだけど、大丈夫だよな……。

「それよりも、お前さんは身を持ち崩さんようにの」

「え？ トロットビークルの特許料などに比べれば、うちの取り分は微々たるものなのでは？」

「それでも相当な需要が見込める品じゃ。お前さんが今まで見たことも無いような額が舞い込むぞ」

「それって……闘技場でビークルバトルに打ち込むよりも、つてことですか?」

「当たり前じゃ。お前さんが言ったように、わしと山分けにしても……恐らく生産ラツシュが落ち着くまでに1億URは超えるの」

10億円以上か。

それはヤバいな。

Sランクの俺は闘技場でファイトマネーを稼ぎまくるだけでも日本円にして数千単位単位の年収が稼げる。

何せ、現代のボクサーなどと違って、怪我などの不慮の事故を除き、ビークルの整備さえしつかりしていれば、年に百試合ほどはこなせるのだ。

これだけでも高給取りだが、さすがにここまでの額になると喜びより不安の方が大きい。

「どうした? わしと折半するのが惜しくなったか?」

「いえ。しかし、そうなるとうちのセキュリティが心配ですね」

「ふむ、まあ金が入るのはもつと先の話じゃ。くれぐれも浮かれて豪遊などするでないぞ」

「ええ、気を付けます」

洗濯機つながりで進展があつた開発といえば、異世界ものの定番である石鹼類とリンスだ。

石鹼自体はこの国でも量産されており、疫病対策に庶民も手洗いや入浴、それに洗濯に利用されている。

現在、俺は自分用のシャンプーとして、石鹼と薔薇やラベンダーのような花から採つた精油、それにジメツト湿地奥のミツバチ園の農家から買った蜂蜜を少量混ぜたものを使っている。

小説で見た製法だが、やはり日本のドラッグストアやド○キで手に入る一般的なシャンプーとは違う。

石鹼とは別の界面活性剤を使用した洗剤やシャンプーは、異国にはあるがこの国では手に入れるのが難しいとのこと。

しかも、そのシャンプーに含まれる界面活性剤というのが、健康に全く悪影響の無い代物ではないらしい。

それではだめだ。

どうか博士を説得して、シャンプーの開発にも着手してもらつた。

博士は何故俺がこうも別種の界面活性剤にこだわるのか理解できない様子だったが、俺が調合したリンスを見て態度を改めた。

柑橘類の果汁を水で薄めただけの代物——俺の場合はレモンの皮を使う——だが、石鹸や石鹸系の自作シャンプーで髪を洗った後にこれを付けるだけで、髪の手やが段違いなのだ。

特に喜んだのは、まずはピジョン牧場の奥様方だ。

ネフロでもコニーとローズマリー親子にフライパンのおばさん、それに何故かディーノが感激していた。

……ひよつとすると、俺の知識で一番人に感謝されたのって、このリンスじゃないか？

「なるほどの。髪は女の命とも言う。それで洗髪のための専用石鹸にあればどこかわっていたんじゃない。やはり、お前さんはまだまだ儲け足りんのか？」

「いやいや。リンスは特許でもないですし、ピジョン牧場の面々からお裾分けが増えたこと以外は、俺に得なんて無いですよ。無料奉仕じゃないですか」

「しかし、これを布石に洗髪石鹸を売りさばくんじゃろ？」

「……まあ、いずれは」

「ほれ見たことか！」

別にいいじゃないですか。

金はあればあるほどいいんだし。

洗濯機の件で色々吹っ切れたよ。

「まあ、わしがお前さんの知識をもとに界面活性剤の質を向上させるのはまだ先じゃ。量産できるようにするなぞ、もっと先の話じゃ。くれぐれも、まだ見ぬ金の夢に踊らされて、散財などするでないぞ」

本当にナツメグ博士は俺を何だと思っているのでしょうか？

「つてか、利益は折半なんですから、俺が案を出せば出すほど博士も儲かるでしょう？ そんなこと言つて、本当は博士こそ小遣いが増えて小躍りしそうになっているんじゃないですか？」

「わしはお前さんのように、銀貨や金貨を机に積み上げて気色悪い笑みを浮かべたりはせんわい」

「なっ!? 見てたんですか……」

軽い嫌味のつもりが、見事に反撃を食らってしまった。

だって、仕方ないじゃないの。

日本ではこんな額の金なんて縁が無かったんだから。

ピークルバトルのファイトマネーと盗賊討伐の戦利品だけで、日本での俺の貯金なん

て目じやない額が貯まったのだ。

少しくらい、ニヤけても罰は当たらないと思うのですよ。

「ところで、博士。前から気になっていたんですが、このピジョン牧場の電力供給ってどうなっているんです？ 上下水道くらいなら博士が片手間に整備してしまえばいいんですけど、さすがに田舎の農村にしては電気系統の便が良すぎるような……」

「何じゃ、知らなかったのか？ 裏の山の川から水路を引くついでに、水力発電機を設置しておる。それに風通しのいいところには風車をいくつも設置してあるからの」

驚いたな。

電気は自然のエネルギーで賄っているのか。

「いや、全てではないぞ。各家庭の灯りとビークルの整備くらいなら問題ないが、わしの研究のためには、たまに心許ないときもあるからの。ジェネレーターは用意しておる」

まあ、それは当然だろう。

一度に高出力が必要な研究や作業で同じラインからの供給に頼っていては、下手をすれば博士の研究のせいで牧場全体の電気がダウンすることもあり得る。

「いずれは、もっと環境や自然への影響が少ないエネルギーに変えていきたいものじゃな」

「……博士、一つ俺の世界にあった発電方法でここには無いものを知っているのですが……」

「何じゃと!？」

博士が凄いい勢いで食いついてきた。

いや、核は教えないよ。

ナツメツグ博士ならいざ自力でアインシュタインのところまで到達するかもしれないが、俺は核兵器の開発を早めるつもりは無い。

今回教えるのは太陽光発電だ。

ただ、一つ問題がある。

「博士、この発電方法は俺の居た世界でも一番クリーンなエネルギーの一つとして重要視されていたのですが……ここでやるには問題があります」

「何じゃ?？」

「俺の居たところで思ったほど普及しなかった理由は……まあ、俺の知るかぎりでは最新技術であるが故のコストです。もし、博士が実用化にこぎつけたとしても、生産に高い技術力を必要とする以上、真っ先に量産体制を確立するのは豊富な資金力を持つ巨悪です」

「……………」

実際のところ、原作ではブラッドイマンティスという最終局面で対立することになる強大な敵が、ナツメック博士の想像すら超える飛行船グランドファイナーレを開発した。

ソーラーパネルは汎用的なエネルギーである電力を生み出す。敵からしても、非常に有用な技術だろう。

この技術が敵に渡ったりしたら、それこそグランドファイナーレや強力な兵器の強化に使われてしまうかもしれない。

事実、ブラッドイマンティスはナツメック博士の工房から最新内燃機関の設計図を盗むという、罰当たりな行為を犯す。

これは主人公が悪人ルートに進んだときに見られる話だ。

この世界では俺が居るので、博士の工房に滅多なことをさせるつもりは無いが、それでもこのセキュリティは十分とは言えない。

「ソーラーパネルは洗濯機やリンスとは次元が違います。博士に知らせないのは世界の損失ですからお話ししますが、研究するにしても極秘でお願いします。量産はもう少し待つていただきたい」

「あい分かった。工房で試作品を作るにとどめておこう」

ブラッドイマンティスのことが全て片付いたら、ソーラーパネルはガラガラ砂漠にでも敷き詰めて運用したいものだ。

17話 もう一人の師

俺はネフロの街の地下道を訪れていた。

駅前広場と駅裏の資材置き場を繋ぐ道だ。

原作よりも幾分か複雑な造りになっており、ビークルも車両も通れない狭い通路には人っ子一人いない。

左手に提げたランプで通路を照らしながら、右手はいつでも拳銃を抜けるようにして地下道を進む。

何故、俺がこんな場所を訪れているかというところ、ここに目当ての人物が居るからだ。

誰かといえば、ビークルバトルトーナメント初代チャンピオンのジンジャーである。

原作では、主人公がサブイベントを進めてジンジャーの情報を手に入れると、彼に話しかけたときに選択肢が表示されて、現チャンピオンのエルダーの師であった話などを聞ける。

さらに、ビークルバトルを教えてくださいと言えば、主人公もジンジャーに挑めるのだ。

初代チャンピオンだけあってジンジャーはなかなか強い。

初見で且つ装備の整っていない序盤で挑むと、かなりの割合でプレイヤーは敗れるのではないだろうか。

この世界のジンジャーがどれほどの強さなのかはわからないが、少なくとも最強無双の保証があるわけではない俺にとって、関わって時間が無駄になる相手ではないはずだ。

俺は彼に教えを乞うてみるつもりだ。

「さて……どこにいる？」

ジンジャーも人間なので、ゲームのように地下道へ行けばいつでも会える、などということは無いだろう。

それでも、街の噂からここを探せばジンジャーが見つかる可能性が高いことは承知済みだ。

最悪、ジンジャーが姿を現すのを待てばいい。

しかし、こんな暗くて見通しの悪い場所に長居したいかと問われれば、答えは確実にノーだ。

鼠や虫が溢れかえる不潔な下水道でないのは救いだが、単独で踏み込むのが危険なのは明らかだ。

どんな奴が居るかわかったものじゃない。

最悪、強盗に襲われる可能性もある。

「っ！」

突如、通路の角から一人の男が現れた。

男が全身を晒すより早く、俺のシヨルダーホルスターから拳銃を抜いて構える。

左手はランプで塞がっているの、拳銃のグリップを支えるのは右手だけだ。

「……その物騒なものを仕舞ってくれないか？ 私はずただの日雇い労働者だ」

油断はできない。

この至近距離に現れるまで、男は足音も気配も俺に捉えさせなかった。

ランプの光で照らされた男は、髭面に粗末な服の上下、ビークル乗りにも使う者が多

い飛行帽のような帽子を被っている。

俺は引き金に指を掛けたまま尋ねた。

「あなたが、ジンジャーか？ 初代チャンピオンの」

「……そうだ。私を殺しにきたのか？」

ジンジャーは諦めたような安堵したような表情だ。

いや、違うから……。

俺は銃をホルスターに仕舞った。

「失礼しました。何分、物騒な場所に見えたもので。俺はナツメツグ博士の助手のグレ

いと申します」

地下道の隅にあるジンジャーの寢床に招かれた。

一応、寝具と拾い物らしき家具はある。

「えつと……いいネグラで？」

「グレイだったな。ナツメツグ博士の身内が私に何の用だ？」

俺の冗談は綺麗にスルーされた。

「個人的に頼みたいことが二つありましてね。もちろん報酬は出します。しかし、それよりも先に……あなたに狙われる覚えがあるのなら、そっちの処理が先でしょう。事情を話してもらえますか？」

「……私のことはどこまで知っている？」

「初代ビークルバトルーナメントチャンピオンで、現チャンピオンのエルダーの師。弟を喪い失意の底にあったエルダーにビークルの扱いを伝授し、彼はメキメキとビークルバトルの腕を上げたが、彼は前を向くことなく復讐心に囚われ続けた。あなたが彼の心の闇に気付いたときには、既に止められる存在ではなくなっていた。つてところで」

「……まるで見てきたかのように詳しいな」

ジンジャーは俺を胡散臭げに睨むが、まあ俺が怪しいのは今に始まったことじゃない。

「こちらにも事情がありましてね。口先だけであなたの味方だと言い張るつもりはありませんが、エルダーと奴の操る反社会的な組織の敵であることは確実です」

「……そうか」

「で、あなたを狙うのはブラッディマンティス……エルダーの手先ですか？」

ジンジャーはエルダーの正体がダンディリオンであることを知っているはずだ。

口封じにかつての師匠を抹殺しようとするパターンはあり得る。

「ああ、奴は私が仲間にならないとわかると簡単に切り捨てた。夜中に街からビークルで出立するところを襲われたりもした。いずれここも突き止められるかもしれない。正直、もう疲れた……」

それで銃を向けられたときは簡単に諦めたのか。

まあ、長きに渡り一人で追っ手を退け、ネフロに隠れ住んでいたのだから、その心労は相当なものだったはずだ。

いくらジンジャーが腕利きのビークル乗りでも、生身で撃たれれば死ぬ。

「ネフロに来てからは奴らの襲撃は無い。エルダーを止める力も無く、戦う意志も捨ててしまった私に、奴はもう興味が無いのかもしれない」

それならそれで結構なことだが、警戒は怠らない方がいいだろう。

「それで、私に頼みというのは？」

「ピークルバトルを教えていただきたい。俺と一人の少年に。あ、少年が来るのは一年ちよつと先になります」

「……君は何のために強くなりたい？」

この頼みは予想していたようで、ジンジャーは原作と同じ問いを俺に投げかけた。

答えは俺なりのものでいいだろう。

「仲間を守るためです。強大な敵が立ち塞がることは、ほぼ確定しているのですね」

「……強敵に襲われることがわかっていいるのなら、逃げればよいのではないか？ ましてや、守るべきものが居るのならば、雁首揃えて危険に突っ込んでいくことなど愚の骨頂だ」

突っ込まれたのは予想外だな。

原作ならば、今の答えの時点でジンジャーはバトル指南を引き受けてくれる。

「逃げられない奴が居るんですよ。それこそ、あなたの始末が後回しになるほどエルダーたちに執拗に狙われる奴がね」

「……………」

エルダーことダンディリオンの弟のチコリが死亡する直接の原因となった資産家の少年マーシユ。

エルダーの手先であるブラッディマンティスはマーシユを終始追い回し、マーシユから預かったペンダントを持つ主人公もトラブルに巻き込まれる。

ゲーム本編の時期に、ジンジャーの情報がネフロでそれなりに出回っているにもかかわらず彼が直接狙われなかった理由は、マーシユたちの件による多忙さが原因ではないか。

確実ではないが、少なくともダンディリオンにとってはジンジャーの口封じよりもマーシユや主人公の始末の方が重要なはずだ。

「……君は、人を殺めているな」

「っー」

唐突に言われたので、一瞬だが俺の表情は強張った。

確かに、俺は盗賊を何人も殺している。

ジンジャーなりの勘か洞察力なのだろうが、よくそんなことまでわかるものだ。

「……まあ、盗賊との戦いで躊躇なんてしたら自分が危険ですから」

「君は仲間のために人殺しの業を背負うつもりか？」

「……………」

今度は俺が黙りこくる番だった。

俺は主人公たちを影ながら助けるためには、拳銃や刃物で敵を暗殺することも視野に入れていた。

ジンジャーは盗賊云々ではなく、そういった俺の心構えのことを言っているのだろう。

「君にとつても、仲間にとつても、それは引け目となり溝になる。いずれ絆に綻びが生まれるぞ」

確かに、俺は原作の雰囲気と主人公たちの年齢を考え、自分だけが手を汚すつもりでいたのかもしれない。

しかし、現実では戦闘のはずみで主人公たちが盗賊を殺すことも、ブラッディマンティスとの戦争で兵士が死ぬ可能性もある。

下手をすれば、主要人物が犬死にする可能性もあるのだ。

どうも俺は、この世界での生死を軽く考えすぎていたのかもしれない。

「ちよつと勘違いをしていたようです。ですが、俺は必要とあらばこの先も人を撃ちます」

今後の方針は変わらない。

俺だけが手を汚しているなどという考えを捨てること。

必要なのはそれだけだ。

ジンジャーはしばらく俺を見つめていたが、やがて俺の答えに納得したのか、椅子を引いて立ち上がった。

「うむ、まあ君にも色々と考えるところはあるだろう。存分に悩むといい」

ジンジャーは部屋の奥を探ると、粗末な紙きれに描かれた地図を渡してきた。

「今夜、ピークルに乗ってここに来なさい」

「では……」

「ああ、バトルを教えてやろう」

どうやら合格のようだ。

クオリティの低い地図だが、どうにか解読できた。

場所は地下水路の予備の貯留槽だ。

普段は使用されていない、雨水を一時的に誘導し排出するための設備だ。

よかった、不潔な下水道じゃない。

かといって上水道でも問題だ。

水路でピークルバトルなんぞして、これから人の口に入る水を汚すのは憚られる。

豪雨のときの排水設備か。いい場所だ。

夜、ネフロ地下水路の貯水槽に俺のビークル【ジャガーノート】の姿はあった。

目の前ではブレストパーツからライトがもぎ取られ弾痕の目立つ黒と紫のビークル【ブラックオデッセイ】が黒煙を上げていた。

「見事だ。私では手も足も出ない。衰えたとはいえ、私も初代チャンピオン。誇つていい」

「……………」

「どうした？」

「いえ、これほどの損傷を受けたのは初めてだったので」

「ふむ……………まあ、賛辞と受け取っておこう」

俺の【ジャガーノート】のミスリルを使った装甲ブレストは、今まで見たことが無いほどの凹みを作り、プロテクター風防も一部が大きく歪んでいた。

ジンジャーのビークル【ブラックオデッセイ】は足ヒレ付きのレッグパーツを装備し、トライデントアームとブーメランアームを装備した、水上戦を想定したようなビークルだ。

ゲームではこの貯水槽に浅く水が溜まっているのでジンジャーのダッシュ速度は速く、硬直時間が長いはずのブーメランをダッシュの合間に上手く投げってくるので隙が無

く戦いにくい。

火力は高くないので強引に近づいて投げて確実に追撃をすれば勝てない相手ではないが、初見のまともに追尾できないプレイヤースキルでは一方的にボコられることになる。

現実のジンジャーも、予想以上に隙の少ない戦い方をする、練達のビークル乗りだった。

俺の「ジャガーノート」が受けたダメージも、今までの戦闘で一番大きなものだった。プレストパーツの凹みはジンジャーのトライデントアームによる傾斜装甲にも拘わらず芯を捉えた刺突をモロに食らったもの、風防パーツはブーメランアームの攻撃によるものだ。

俺のチェーンガンアームの攻撃を掻い潜ってこれだけの反撃をしてきたのだ。

やはり元チャンプは侮れない。

機体の性能差でこれだけ軽微なダメージで済んだが、同じ条件のビークルならばもっと厳しい戦いになっただろう。

「さて、これで大丈夫なはずです」

「うむ、すまん」

ジンジャーのビークルに簡単な修理を施し、俺は整備道具を片づけ始めた。

俺の方はブレストの装甲と風防が歪んだだけなので移動に支障は無い。

牧場に帰ってからナツメツグ博士に診てもらえばいいだろう。

しかし、チエーンガンの弾丸をモロに撃ち込まれたジンジャーのビークルはそうもいかない。

俺が博士仕込みの拙い修理技術でどうにか通常動作に支障がない程度にまで応急処置をしたのだ。

「……君の【ジャガーノート】は素晴らしいビークルだな。防御力が高く高出力ながら非常に駆動がスムーズで機動力も高い。そのマシンガンアームのような武器の射撃も正確だ。君ならば、エルダーを倒せるかもしれないな」

ほとんどが機体の性能に対する褒め言葉だな。

まあ、操縦スキルに関しては俺もまだまだだ。

仕方ないか。

「ところで、俺の戦い方にアドバイスは？」

「……君は変わった男だな。負けた私に助言を求めるのかい？」

ジンジャーは不思議そうな顔をするが、俺にとっては大して違和感を覚えるような話じゃない。

優秀な教官や指揮官が必ずしも優秀な兵士とは限らないことくらい知っている。

まあ、学校の教師——特に公立——に関しては、拘束時間と給料が釣り合わないことから優秀な人材を確保できず、そういったブラックな仕事を選ばざるを得ない無能ばかりが集まるという別の面からの悪循環があるわけだが……。

少なくとも、ジンジャーの洞察力と知識は確かだ。

「そうだな……一つ確認するが、バトル全体を通しての戦いやすきでは、私よりもシユナイダーの方が厄介だったのではないか？」

「……言われてみればそうですね。確かに、あなたとの戦いの方がビークルのダメージは大きい。しかし、終始戦いが自分の土俵外というか、力を発揮できない状況化での戦闘を余儀なくされたのは、シユナイダーの方だった気がします」

「そうだ。私の戦術は、ブーメランアームによる中距離攻撃と、トライデントアームを用いた格闘の使い分け。距離を取っての戦闘ならば、武器の性能差だけでなく技量でも君の方が圧倒的に上だ。しかし、近距離での格闘に関して、君は少々忌避する感覚があるようだね」

確かに、生身で銃とナイフを所持していたら銃を使うのが当たり前だ。

現実の人間は多少鍛えたところでテイーズやF〇の世界の住民のような動きはできないし、鋼鉄より硬い皮膚など手に入らない。

リーチの長さは大きな武器だ。

遠距離を攻撃できる火器には大きな信頼を寄せている。

鋼鉄の塊でスラスタードッシュによる瞬発的な挙動が可能なピークルは、生身での戦いとは色々事情が違うわけだが、やはり俺の感覚としては遠距離からの射撃に勝る武器は無い。

「なるほど。それで格闘タイプのピークルのシュナイダー相手では、思ったよりもやりにくかったわけですか」

「その通り。だから私も、途中からは接近戦を主体に切り替えた。まあ、「ジャガーノート」相手ではブレストの装甲を凹ませるのが精一杯だったが」

傾斜装甲にまともに衝撃を伝える刺突をぶち込めるあたり、明らかにジンジャーの技量は近接においても優れている。

しかし、彼の真骨頂は中距離戦だ。

定石を外した戦法でダメージを与えられた以上、俺に弱点があることに言い訳はできないだろう。

よくよく思い出せば、風防にブーメランを食らったのも接近した状態からの引き撃ちでやられた。

「要は近接が弱点ってことですか」

「いや、近距離武器の扱い方が悪いわけではない。相手のビークルの駆動部やエンジンを正確に狙いすました一撃、カウンターでのブレードの振り方、どちらも申し分ない。問題は射撃武器から近接武器への思考の切り替えにラグがあることだ。はつきり言っ
てしまえば、踏み込んでブレードを振るう際の思い切りが良くない」
なるほど。

早急に対処する必要があるな。

「こう言っただけは何だが、ブレードアームによる攻撃が失敗したところで君の腕が切断されるわけではないのだ。躊躇うなよ」

「わかりました。訓練と実戦で慣れていきます」

ジンジャーとの特訓はなかなかためになったな。

18話 潜水艦狩り

「巨大魚じゃと？」

「はい……そういう報告でして……」

ピジョン牧場駅の建設が大幅に遅れるという話を聞いて、俺とナツメツグ博士はネフ口駅に顔を出していた。

説明する駅の職員も、未確認の突拍子も無い話に歯切れが悪い。

ピジョン牧場にあるスキートル湖は、牧場の船着場から遊覧船も出ている観光名所だ。

酪農とナツメツグ博士の家くらいしか名物の無いピジョン牧場において、貴重な客寄せパンダもとい客寄せ湖である。

そんなスキートル湖に船を転覆させる巨大な魚が出現した。

幸い、被害に遭ったのは小型の作業船で遊覧船と乗客に被害は出ていないらしいが、脅威度を鑑みて遊覧船の運行は中止された。

そんな事情があつて、観光地としての価値が無くなったピジョン牧場への路線の延長と駅の建設が先延ばしになったのである。

「もちろん、ピジョン牧場駅の建設はペンシル鉄道本社が一度決めた方針ですので覆りません。ただ、現状ですと作業班の再編成や再度の安全確認の必要性などから、延期は避けられない状況でして……」

それでゲーム本編までピジョン牧場駅は完成していなかったのか。
本編開始は一年以上も先だ。

相当な影響だな。

「で、巨大魚の正体は何なんじゃ？」

「そ、それが……決死の確認作業にもかかわらず、確認は取れず仕舞いで……」
俺は気の毒な駅職員の弁明が終わったのと同時に口を開いた。

「博士、恐らく潜水艦の……水中に潜行できるタイプの盗賊ビークルでしょう」

「ほう……」

ナツメツ博士は俺の表情を察し、原作で事情を知っていることに思い当たったようだ。

その通り。

この巨大魚のイベントは原作ゲームに出てくる。

巨大魚の正体は『デーパーアングラー』という潜水艦型の盗賊ビークルだ。

主人公が湖に入れるのは、イベントで耐水ボイムを手に入れてからなので、こいつ

と戦えるのはストーリー中盤以降になる。

そうなる、俺が動かなかった場合『デーパーアングラー』は一年以上も放置されることになるのか。

ところで、俺のビークルのボディは耐水仕様だ。

単に水に濡れても故障しないだけでなく、ボディパーツを水に浮かせることができるのだ。

装甲のミスリルは頑丈さの割に軽いので、このような地球ではあり得ない代物が出来るわけだ。

耐水テストついでに『デーパーアングラー』を討伐してみてもいいかもしれない。

それに、スキートール湖を渡った先にはミームー村という辺境の村がある。

原作では、ピジョン牧場のすぐ対岸にある割に、住民がトロットビークルの存在を知らないほど田舎であるという謎設定だったが、現実ではどうなっているのだろうか？

少なくとも、牧場からそれらしき場所は見えなかったが……。

ミームー村へのルート開拓のためにも、俺が一肌脱いでおこうか。

「では、グレイ。気を付けてな」

「ええ、行ってきます」

数日後、俺の「ジャガーノート」は一時的に水上戦用のパーツを取り付けられ、スキートル湖に入水した。

普段と違う装備といえば、バックパーツを水上での機動のための装置に付け替えたくらいだ。

原作でも、フロートというバックパーツが、水上でもダツシユができるようになるアイテムとして登場する。

今回、ナツメツグ博士が用意してくれたのは、フロートの大型版ともいえる、スクリューとウォータージェット付きのバックパーツだ。

どういう仕組みやプログラムでビークルの操作と連動しているのかはわからないが、陸上での移動と同様にハンドルを操作した方向とは逆側へジェットが噴射し、非常にわかりやすい形で推進力を高めてくれる。

こいつは便利だ。

しかし、『ディープアングラー』を討伐するには移動だけできても仕方ない。攻撃して沈めなければならぬのだ。

爆雷なんて気の利いたものは無いし、さすがのチェーンガンアームも水中で撃つことは想定していない。

小火器でもグロックや特殊部隊御用達のHK416などはともかく、昔のM16ライ

フルなんかは銃を逆きにして振っても水が抜け切らずに銃身炸裂を起こしたことがあるそうだ。

同じ運命は辿りたくないな。

ビークルに搭載するサイズの火器が詰まって銃身炸裂など起こしたら悲劇だ。

とはいえ、ロシア製の某水中銃の仕組みなど俺にわかるはずもない。

博士はチェーリングガンの銃身や機関部周りを改良して水が零れ落ちて抜けやすいようにはしてくれたが、水中で発砲するのは避けた方が無難だな。

どうにか左アームが水に浸からないように掲げたまま、俺はスキートール湖の中心に向かって移動を続けた。

湖は原作の感覚より遙かに広い。

ゲーム内では数分も掛からずビークルの立ち泳ぎで横断できるが、現実の湖がそのようなサイズのわけがない。

随分と沖に出て、ピジョン牧場の様子も見えないほどになっているが、まだミームー村の存在さえ確認できない。

どうやら完全な対岸ではないようだ。

岩場の構造も原作より複雑だ。

「はあ、これ見つかるのかね……」

【ジャガーノート】は低燃費のハイブリッドエンジンを搭載しているうえに増設燃料タンクまで積んでいるが、それでも一度の航続距離に限界はある。

何も今日中に『ディープアングラー』を倒さなければならぬわけではない。

「今日は帰るかな……」

次回は暇潰しに釣り竿でも持ってこよう。

そんなことを考えていたが、次の瞬間、俺はビークルに強かな衝撃と揺れを感じた。

「ぐっ！ 何だ!？」

一瞬、敵の攻撃を疑ったが、爆発や鋭い衝撃ではなかったことを思い出す。

ビークルの制御をどうにか取り戻しながら水面を見ると、穏やかな湖とは思えない荒波が渦巻いていた。

俺のビークルはあの急激な波にさらわれてバランスを崩したようだ。

「くそっ、どこに……っ!？」

水中を見回すと、先ほどまで何もなかった岩山の底から、巨大な影が見えた。

間違いない。

『ディープアングラー』だ。

確かに、潜水艦を知らない連中が見たら巨大な魚に見えるだろう。

「出やがったな」

まさか搜索一日目にして遭遇するとは。

『ディープアングラー』は俺に狙いを定めたらしく、ゆつくりと艦首をこちらに向けて迫ってきた。

徐々に浮上し、水面から顔を出す寸前の浅い場所を走り、俺のビークル目掛けて特攻してくる。

俺はバックパーツのスクリューとウォータージェットをフル回転させて回避行動を取った。

原作の『ディープアングラー』は魚雷による攻撃が主だったが、現実のこいつはその大質量を以って押しつぶす攻撃もしてくるようだ。

俺は平行移動で突進を躲すと、チェーンガンをフルオートで連射して水面越しに艦首から艦尾にかけて銃弾を撃ち込む。

水面越しだったことで、銃弾の多くは軌道が逸れて貫通力も失い『ディープアングラー』のボディを貫けない。

「ちっ」

俺がチェーンガンを引くのと同時に、今度は敵の魚雷が発射された。

数発の魚雷が不気味な泡の尾を引きながら、こちらに迫ってくる。

「おおおー！」

再びチェーリングンを構えた俺は、一番嫌な軌道で接近してくる魚雷に向かってチェーリングンを乱射した。

運よく一発が魚雷に命中し、魚雷は目標を捉えることなく爆散する。

破片が装甲ブレストに跳ね返される音が不快だ。

再び、魚雷が水を切って接近する嫌な音が聞こえた。

俺は水中に散らばる破片の一群を盾にするように「ジャガーノート」を移動させ、第二陣の魚雷の一斉射撃をやり過ぎした。

「ふう……ぬおー！」

急にビークルの足元に衝撃を感じるのと同時に、「ジャガーノート」はバランスを崩して倒れ込んでしまう。

下を見てみると、先ほどまでの水面ではなく鉄の地面だ。

いつの間にかすぐ近くに接近していた『デーブアングラー』が、俺のビークルもろとも浮上したようだ。

今の俺は敵のビークルの船体の上に居ることになる。

どうやら魚雷のコンボに続けて俺のビークルを鹵獲し止めを刺そうとしているよう

だ。

そびえ立つ艦橋から稼働音が聞こえると同時に、いくつもの銃眼が現れて小口径の砲身が俺に向けられる。

「待て！ 奴は健在……」

「構わねえ！ やれ！」

「とどめだ！」

俺はチェーンガンで撃ち返そうとしたが、ビークルは崩れた体勢を立て直している最中だ。

反撃が間に合わない。

こちらが撃つ前に蜂の巣にされてしまう。

いや、あの程度の火砲であれば「ジャガーノート」のコクピットの下に身を隠せば耐えられるか？

しかし、万が一にも俺自身に銃弾が当たったらお陀仏だ。

「くっ！」

ビークルが立ち上がる途中の不自然な姿勢にもかかわらず、俺はショルダーホルスターから拳銃を抜いた。

コクピットは水を被っているが、運のいいことに俺の上半身はあまり濡れていないの

で、ホルスターからの抜き撃ちはスムーズだ。

「うわっ！」

「撃ってきやがった！」

六発の拳銃弾を全て銃眼の辺りに叩き込み、制圧射撃で時間を稼ぐ。

「野郎！」

銃座に戻った盗賊が俺に狙いを定めるが、その時には俺もビークルの座席の後ろからライフルを取り出していた。

銃座に取り付く盗賊の頭をスコープ越しに捉え、そのまま引き金を絞り落とす。

盗賊の頭がザクロのように弾け飛んだときには、俺のビークルの体勢も立て直されていた。

慌てて他の盗賊が銃座に戻ろうとするが、今度は俺のチェーンガンアームが先に火を噴く。

続けざまに撃ち込まれる大口徑の弾丸で、装甲の開いた銃座と中に居た連中はズタズタに切り裂かれた。

「うらあ！」

一通り銃座にチェーンガンの弾を撃ち込んだ俺は、強化ブレードアームを振りかぶって艦橋に突っ込んだ。

そのまま銃座にブレードを刺し込んで切り開く。

魔法金属で強化したブレードアームは、装甲の薄い銃眼を簡単に引き裂き、ビークルが侵入できるほどの穴が開いた。

再度、アームを振るって瓦礫を弾き飛ばし『ジャガーノート』は『ディープアングラー』の内部に侵入した。

「や、やめろ！　がつ……」

艦橋とは別の場所にあったブリッジに侵入した俺は、最後の生き残りと思わしき盗賊を強化ブレードアームで斬り殺した。

真つ二つになった盗賊の胴体が床に叩きつけられて湿った音を立てる。

少々、オーバーキルかもしれないが、ここは敵の腹の中だ。

生身で歩く度胸は無い。

『ディープアングラー』は俺との戦いによって艦橋に大きな損傷を負い、既に浸水が始まっている。

今すぐに沈没する雰囲気ではないが、この文明の時代に何重もの隔壁やら安全対策やらがあるとは思えない。

「ちよつと急ぐか……」

まずは先ほどチェーンガンで撃ち殺した幹部クラスと思わしき連中の服からワツペンを切り取った。

続いて、ブリッジの操舵席つぼい場所に近づき、潜望鏡を頼りに水面を確認して大雑把にピジョン牧場へ進路を取る。

潜水艦の操舵方法など俺にわかるわけがないが、どうにか舵らしきパーツで向きを調節して牧場方面に艦首を向けた。

最悪、この潜水艦の残骸は湖に沈むことになるが、貧乏性の俺としてはできれば帰りたいところだ。

艦内を再度検めて残党が居ないことを確認した俺は、浸水の恐怖に耐え切れず外に飛び出した。

19話 僻地1

「ふむ、こんなもんかの」

「お疲れ様です、ナツメツグ博士」

電気冷蔵庫の奥に仕舞っておいた、とっておきのフルーツブランデーをグラスに注いで、ナツメツグ博士に示した。

冷凍庫というか製氷機のようなものは都会には普及しており、氷を入れた冷蔵庫はそこそこの数が普及しているが、凍らせることなく適温で保存できる電気冷蔵庫があるのはうちの工房くらいだ。

生鮮食品は保存料の無い世界の習慣で冷蔵庫はあまり必要にならない頻度で買い出しに行くので、冷蔵庫の本来の用途である冷蔵保存での出番は少ないのだが、こういう酒を冷やすときには便利だ。

「ふん！ 本当にお疲れじゃわい。まったく」

湖畔に設置したクレーンから降りた博士は、俺が運んで来たトレイからグラスを引っ手繰ると、中身を一気に飲み干した。

「かゝつ！ 仕事の後の一杯は効くの〜」

俺が乗組員を皆殺しにした後、ピジョン牧場に引つ張つてきた『ディープアングラー』は、どうにか牧場近くの浅瀬に辿り着いた。

そのあとはネフロの警察官を呼びつけて、盗賊の死体と戦利品の回収を行い、巨大魚の正体は正式に盗賊ビークルだと証明された。

これでピジョン牧場駅の建設は原作よりも早まるだろう。

俺が適当に進路を設定して乗り捨てた『ディープアングラー』が、船着場にでも突っ込んで物を壊すことが無かったのも幸いだ。

しかし、仕事はこれで終わりじゃない。

上陸した部位の他に、浅瀬に散らばった『ディープアングラー』の残骸はかなりの量に上つたのだ。

急遽、ナツメツグ博士が組み立てたクレーンで浅瀬の残骸は引き揚げられることになり、今ようやく後始末が終わつたところだ。

「さ、オットーとウイリーも。皆さんもどうぞ」

「お、悪いね、旦那」

「ありがと、グレイさん」

上陸した『ディープアングラー』の解体にと引き揚げた物も含めて残骸の運搬には、

オットーとウィリーはじめピジョン牧場のビークル乗りが協力してくれた。

うちの工房周辺に収まり切らないほどのスクラップだ。

片付けには相応の労力が必要になる。

こんな酒とつまみで協力してくれるのなら安いものだ。

山盛りで持ってきたドライソーセージを頬張るウィリーを見ながら、俺も酒に口を付けた。

「で、このガラクタの山はどうするんじゃ？」

博士が山と積まれた資材を見て疑問を投げかけてきた。

確かに、巨大な潜水艦ビークルだけあって『デープアングラー』の残骸はかなりの量だ。

「すぐには言いませんが、このビークルの残骸は丸々片付くことになると思いますよ」

「ほう、それもお前さんの知る『運命』かの」

「いや、原作ではスクラップとの関連は無いのですが、まあ似たようなもんです」

翌日、俺は再びスキートル湖にビークルを浮かべていた。

今日も沖に向かって進むが、目的地は『デープアングラー』と戦った場所のさらに先の対岸だ。

原作ではミームー村がある場所だ。

スクリューとウオーターージェットのバックパーツのおかげで、通常の帆船などとは比べ物にならない速度が出ているはずだが、それでも目的地のミームー村は影も形も無い。

こういうときにヒロインが助手席に座っていたら退屈しないんだろうな。

この単調さでは瞼が重力に抗えなくなりそうだが、一度も通ったことの無い道で気を抜くことはできない。

盗賊が『ディープアングラー』だけとは限らないからな。

原作では、水上にも普通にアメンボ型の盗賊ビークルが出現した。

見える範囲に敵影は無いが、油断して奇襲を受けてお陀仏になるのはご免だ。

やがて、本格的に眠気が襲ってきそうになったところで、岩場を抜けた先に海辺の村を発見した。

湖畔には木造のボートが停泊している。

あれが、ミームー村だろうか？

村の船着場に近づくと、陸地の様子も見て取れるようになった。

どうやら村中の人間が集まっているようだ。

こちらを指差しているの、近づいてくる俺のトロットビークルを発見したのだらう。

「(何だい、あれは……)」

「(船じゃないわ。でも、人が乗っているわよ)」

「(僕、聞いたことある！ 山の向こうでは、あんな機械に乗った人たちがたくさん居るんだって)」

「どうやら驚愕や戸惑いの声が大多数のようだ。」

「無邪気なのは子どもだけか。」

船着場の漁船にはエンジンを搭載しているものもあるので、全く外部との接触が途絶えているわけではないだろう。

「燃料や金属資源は外部から入手する必要があるはずだ。」

しかし、このように周囲を切り立った崖と険しい山に囲まれている、村に来る商人なんかも馬やラクダを使用する者が大半で、トロットビークルを見る機会など無いだろう。

「浅瀬から村に上陸すると、村人たちのざわめきはより大きくなった。」

「おお、凄え！ 下はあんな形になっているのか！」

「人間みたい！」

「大きい〜!」

村の入り口のところまで行くと、一人の老人が進み出てきた。

恐らく、彼が村長のマルローだろう。

「ちよつと、あんた! これは、一体? この機械は何なんじゃ?」

「これはトロットビークル。今や世界中で輸送、土木、農業、警察、消防とあらゆる業務に使用されている機械です」

「へえ〜! トロットビークル! 外の世界にはこのようなものが……」

どこかで聞いたような会話をマルローと交わす。

俺は彼の招きに応じて、大きな平屋の家にお邪魔した。

「何と!? では、グレイ殿のお師匠様が、このトロットビークルの開発者なのですか?」

「ええ、そうですね。まあ、俺がナツメグ博士に師事したのは最近のことですが」

そういうえば、まだ一年も経っていないんだよな。

俺はミームー村の住民全てが収まる平屋で、村の特産である魚料理とワインの歓待を受けて住民たちと歓談した。

原作のようにこの家で村民全てが共同生活を送っているわけではなさそうだが、それでもこの建物が村で唯一の公共建造物のようだ。

見たところ、村長の自宅と村役場と公民館と迎賓館と食堂を兼ねる場所のようだ。やはり裕福とは程遠い生活をしている村のようだな。

綺麗な言い方をすれば自然が豊かな場所だが、少なくともこの規模の人間たちが居住地とするには不便すぎる。

「そんなお方が湖を渡つてまで我が村にいらつしやるとは……」

「まあ、こちらも湖に用事があつたんでね。ここに来たのはついでみたいなものなんです」

原作ではミームー村のサブイベントを進めると湖沿いの岩山を切り開き、ピジョン牧場駅からさらに鉄道を伸ばしてミームー村にも駅が出来て外部との交流が生まれる。

ゲームではこの村を発展させないと手に入らないパーツや交易品があつた。

ブレードアームとボウガンアーム、トリユフがそうだ。

俺の場合はこの村の発展が必須というわけではないし、トリユフならば今も言えば売ってもらえるだろう。

しかし、折角ここまで来た以上、ミームー村の発展イベントも進めておきたいな。

「しつかしあのトロットビークルってのは凄え乗り物だな。マルガリータにも見せてやりてえ」

漁師らしき住民の男の言葉が耳に入った。

そういえば、この村で唯一トロットビークルを整備できるのは、船大工のマルガリータという女性だったな。

今も食堂に姿は見当たらないし、先ほどの村の住民が集まってきたときにも、それらしき女性は見かけなかったな。

聞いてみると、今日は船で沖に出ているらしい。

「また、怪物の正体でも確かめに行つたんだろう」

「大丈夫なのかねえ……あれでも女の子だよ」

「まあ、下手な男衆より度胸もあるし、昨日も一昨日も無事に戻つてきたんだ。心配するだけ無駄だろうよ」

「違えねえ」

怪物というのは聞き捨てならないな。

つて、湖の怪物つてことは『ディープアングラー』か？

「もしや……怪物つてのは巨大魚では？」

「お、何だグレイの旦那。知っているのかい？」

聞けば、この村の漁獲量が最近減つており、岩場を抜けて沖まで調べに行つた漁師が消息を絶つたそうだ。

恐らく、魚の減少は『ディープアングラー』の湖の盗賊団による乱獲、漁師の命は盗賊に奪われたつてとこだろう。

事情を話すかどうか少し悩んだが、結局のところ俺は巨大魚の正体が巨大な潜水ビークルだったことと討伐済みであることを伝えた。

「そうかあ。じゃあ、グレイさんは俺たちの仲間の仇を討ってくれたつてことだな」
「ありがとう」

逞しい住民たちで助かった。

どうやら悲嘆に暮れるよりも喜んでくれるようだ。

「マルガリータという女性にも戻ったら伝えてください。もう、奴を警戒する必要はありません」

20話 僻地2

「で、村長。ここからが本題なのですが……」

ミームー村への駅開通イベント。

これをこなすと村は外部との交流によって発展し、ゲームでは他で手に入らない貴重なパーツが手に入る。

まあ、俺にとっては今のところ必須の準備ではないが、顔を繋いで周りを整備しておくことが、今後の戦いや世界情勢と主人公たちを取り巻く環境にどう影響してくるかわからない。

敢えてミームー村だけ放置しておく理由が無い以上、早めに動いておいた方がいいだろう。

それに、『ディープアングラー』のスクラップの件がある。

俺はこの鉄材をミームー村への開拓に提供するつもりでいる。

「村長、あなたは周辺を開拓して外部との接触を増やし、この村を発展させたいと思っているのでは？」

「確かに、その通りです。先ほど住民に聞いたら、燃料や金属を運んでくる行商人から聞いて話でトロットビークルの存在を知っている者は居ました。しかし、実物を見たのは今日が初めてです。わしらは、さすがに時代に取り残されすぎた」

村長のマルローに話を聞くと、やはり既にゲームでも登場したネフロ駅長への手紙は用意していた。

原作ではこの村を訪れるのはピジョン牧場駅が完成した後なので、牧場から路線を伸ばす依頼をネフロ駅長のもとに届けることになる。

ゲームでは何故か一晩で湖沿いの岩山が切り開かれて線路が開通するが、現実ではそうもいかない。

今からペンシル鉄道に話を持って行って、ゲーム本編までに開通するかは微妙だな。

「二応、俺の方から鉄道会社に話は持っていきましよう」

悪路を走破するはずのトロットビークルすら立ち入らない辺境の地。

山の向こうにある、都会からすれば既にそこがド田舎である村の行商人が唯一の外部との接触。

それがミームー村だ。

村を出ていくこともできないような環境は、さすがに子どもや若者にとつては辛いものだろう。

村長のマルローは欲と卑しきもある男だが、少なくともミームー村の開発自体はメリットの方が大きいはずだ。

「よろしく願います。この話にはミームー村の未来が掛かっているんです」

「私は反対だ！」

突如、テーブルの端に座っていた男が立ち上がり怒声を上げた。

ミームー村の住民たちよりも幾分か都会っぽい仕立てのいい服を着た男だ。

「ミームー村はこの豊かな自然にこそ価値がある。開拓して鉄道など通したら、その美しさは永遠に失われてしまう」

「ゲーブル、もう決まったことじゃ」

原作でも登場したゲーブルという男は、自然豊かなミームー村を気に入り定住した、余所者のナチュラリスト的な人物だったな。

村を發展させたい村長に真っ向から反対し、結局サブイベントを進めて村に鉄道が通ると、その線路が通るルート上にあつたゲーブルの家は取り壊されてしまつたりと、踏んだり蹴つたりな目に遭うのだ。

さて、現実ではどんな感じなのやら……。

「マルロー村長！ あなたは一時の金儲けに目が眩んでいるのではないか？ 鉄道が

通つて外部の人間が訪れられるようになって、人の手が入っていない自然の恵みと美しさを失えば、すぐに人々はこのような辺境には来なくなるのだぞ。採取し尽くし、荒らされた田舎の村に価値など無いからな」

「しかし、今のままではその自然の恵みを有効活用する手段が皆無ではないか。魚も森の恵みも、取り過ぎなければいいんじゃないや。それに、外の物資が手に入れば皆も喜ぶ」

「……富を分かち合うつもりなど無いだろう。あなたは独占しようとするはずだ」

「なっ!? わしは、そんな……」

まあ、この村長は村で採れるトリユフが高値で売れると知ると、独占して自分の家だけを個室にしたりして、住民には散々恨まれる奴だからな。

少し、釘を刺しておいた方がいいか。

しかし、環境問題は色々デリケートな案件だ。

ナチュラリストや活動家といった類の連中の多くは、私腹を肥やすことかヒステリーの言い訳に環境問題や動物愛護を使って八つ当たりをすることが目的の気違いだが、ケーブルがどういう人間なのかはこれだけではわからない。

慎重に見極める必要がある。

「ゲールさん、環境保護の大切さは俺もナツメツグ博士も承知しています。いずれはピークルや自動車産業も、ガソリンエンジンだけでなく環境に配慮したクリーンなエネ

ルギーを用いた動力源の開発などが必要になってくるでしょう」

「いや、私が言っているのはそういうことではなく、この自然の美しさをです……」

この反応は現代なら人の話に耳を傾ける気が無いヒステリーで確定だが、この世界では理解できないだけの可能性もあるな。

「まあ、とにかく。この村単位の問題としては、次世代も育まれているそれなりの規模の村という時点で、開拓や利便性の追求より環境保全を優先するメリツトが無いということです」

金でも貰えれば森番や管理人をやる奴くらいいるだろうけどな。

この時代に、国が環境保護のために助成金など出すわけがない。

「もしも、あなたが本気で人の手が入っていない自然が好きだというのなら、他の場所を探した方が賢明だと思いますよ」

ぶっちゃけ、この世界には未開地が結構多い。

ハッピーガーランドやネフロ周辺は開発が進んでいるというだけで、開拓自体が環境問題というほどではないのだ。

そこも原作と違う点かもな。

「……わかりました」

どうやらゲールは原作と同じくこの村を出ていくことになりそうだ。

確か、ミームー村の駅が開通した後はハッピーガーランド近くのゴールドーン村で働いていたな。

まあ、そこまで未開地が好きなら勝手にするといひ。

……幼い息子を自分の不便な生活に付き合わせるのはどうかと思うけどな。

「村長、この村の特産になり得るものを調べさせていただきたい。鉄道会社に路線延長のメリットを説明する上で説得材料になるので」

「ええ、ええ。それはもう……」

マルローは満面の笑みだ。

「住民の皆さんにも暫定の調査結果は伝えます。これは決定事項です。妙なことはなさらないように」

「は、はい……」

俺が軽く殺気を滲ませて睨んだだけで、マルローは泣きそうな表情で震え始めた。

まあ、トリユフの価値を他の住民が理解しておけば、マルローが利益を独占することにはならないだろう。

ミームー村には伝書鳩を託し、ネフロ駅長には村長マルローの手紙を渡して鉄道延長の件はペンシル鉄道に通したので、この一件はしばらく俺の手を離れるだろう。

まずはピジョン牧場駅の建設だが、それが終わればミームー村への路線延長が本格的に始まる。

その際には俺が『ディープアングラー』のスクラップや積んであった資材を提供するという話も通した。

巨大ビークルとはいえ、長い線路を作るのにあの量の鉄材で賄えるのは微々たるものだろうが、俺が後押しする事業ということでナツメツグ博士の肝煎りであるという箔が付く。

こういう時には名前を大いに利用させてもらおう。

ところで、ミームー村に預けた伝書鳩はいわゆる往復鳩だ。

どういう技術なのかはわからないが、この先もミームー村とネフロ駅間では最低限の連絡がつく。

あとは勝手に進めてもらいたい。

俺が出張るのは、村長のマルローがおかしな欲を出して妙なことを始めた場合だけだ。

「ふむ、お前さんが巨大魚などという与太話の段階から妙に湖の件に執心だった理由は……これか？」

ナツメツグ博士は俺が作ったパスタをフォークで持ち上げながら聞いてきた。

今日のメニューはニジマスのような魚のムニエルとトリユフ入りのチーズソースをかけたパスタだ。

魚もトリユフもミームー村から買ってきたものである。

マルローに公正な取引と利益を独占しないことを約束させた手前、俺も適正価格で買う必要があったので、トリユフは結構なお値段になった。

小さな籠一つ分の食料で銀貨がいくつも飛ぶなど初めての経験だ。

しかし、それだけの金を出す価値は十分にある。

前世では本物のトリユフなど食べたことは無いが、こいつは得も言われぬ美味さだ。

「まあ、トリユフの美味さは予想以上でしたがね。ついでですよ、ついで」

「ふん、まあよい。お前さんの『運命視』で唯一信頼できるのが、事の重大さだけじゃ 아니라」

確かに、ダンディリオンの事情や巨大魚が盗賊の潜水ビークルであることなど、最重
要な事柄や脅威度が高いことほど詳しく覚えている。

何だかんだで、ナツメグ博士も俺のことは信用してくれているようだ。

まあ、度々やらかす記憶が曖昧な点や現実との齟齬を認識できていないところで、
ちよいちよい信用は失っているのかもしれないが。

例えば、先日のミームー村行きでも、現実の湖の規模に思い至らず、日帰りで行ける

と思っっていたりとかな。

実際は、向こうで一泊する羽目になった。

「そういえばグレイ、そろそろじゃな」

「……そうですね」

急に博士が真面目な雰囲気になった。

この世界に来てからもうすぐ一年が経つ。

最近は眼鏡越しでも博士の表情が何となくわかるようになった。

大きな進歩だ。

「お前さんがハッピーガーランドで何をしようとしているのかは聞かん。じゃが、くれ

ぐれも気を付けるのじゃぞ」

「ええ」

「……うむ、まあ四六時中狙われるお尋ね者になったわけではないんじや。休暇を楽し

んでくるといふ」

「は」

後日、俺は荷物をまとめてネフ口駅に向かい、ハッピーガーランド行きの電車に乗り

込んだ。

21話 大都会

原作ゲームのエリア内で最大の都市であるハッピーランドに到着した。

ネフロに比べると、数十年は技術レベルが進んでいるような街だ。

建物から漏れる光の量が多く、路面電車の線路が街中に敷かれている。

近代化が凄まじい勢いで進んでいるようだな。

駅を出てすぐ右にある建物は闘技場だ。

Sランクの俺は今すぐにでもエルダーに挑戦できるのだが、さすがに今日の宿も決まっていないうちからバトルに出場する気にはなれない。

とりあえずはトロット楽団メンバーの定宿であるロブスター亭に行こう。

金があるのでステーションホテルかりバーサイドホテルに泊まってもいいのだが、あの二つのホテルでは支配人同士が見栄を張り合っていて鼻持ちならないほど気取っている。

ゲームでも、主人公が訪れると予約でいっぱいなのだと知られて宿泊を断られるのだ。

実際には、経営は火の車状態で完全な赤字だ。

ナツメック博士の身内である俺ならば、普通に部屋を借りられる可能性もある。恐らく、有力者や有名人の宿泊は断らない。

ゲームではフェンネルも普通にステーションホテルに泊まっているからな。

しかし、原作での印象の悪さから、どうしても敬遠してしまうのは仕方ないだろう。

それこそ、俺がどちらのホテルに泊まったかで面倒事が起きる可能性もある。

大人しくロブスター亭に泊まろう。

ゲームのように客室が二部屋だけなんてことは無いはずだ。

ロブスター亭の駐機場場にビークルを止め、シートの下からスーツケースと楽器ケースを引っ張り出した俺は、ロブスター亭に足を踏み入れた。

「いらっしゃい」

迎えるのは小太りの宿の主人ダステインだ。

原作では、玄関から入ってすぐステージ付きの食堂があり、ダステインはバーテンのクリスと一緒にバーカウンターの前に居たのだが、現実では構造も多少違っているようだ。

入り口の受付からは階段が見えるが、食堂とは壁で仕切られているのでステージの様

子は見えない。

「お泊りかい？ 食事だけかな？」

「部屋をお願いします。とりあえず一週間で」

「はいよ」

台帳に記入すると、店主は驚いた表情で俺の顔を凝視した。

「グレイ……黒髪の大男。もしかして、コニーちゃんたちが言ってた、ナツメツグ博士の助手ってのは……」

どうやらトロット楽団の面々から俺のことが伝わっていたようだ。

「まあ、そうですね。コニーとフエンネルとセイボリーとは面識がありますよ」

「こりやたまげた。てつきり、あんたはステーションホテルかりバーサイドホテルに泊まるものだと思っていたよ」

「ええ、それも考えていたのですが……ちよつと、向こうに泊まると面倒な事情がありますね」

そんな会話をダスティンとしていると、見知った顔が階段から下りてきた。

「あ、見て！ グレイよ」

「あら、グレイ。久しぶり。ハッピーガーランドに来ていたの？」

「セ、セイボリー？ 知り合いなのかい？」

「グレイ？ ああ、前にコニーたちが言ってた、ナツメツグ博士の助手の？」
「……よう、久しぶりだな」

ゲーム主人公が入団する前のトロット楽団メンバーが勢揃いしていた。

「じゃ、改めてよろしく。僕はマジヨラム。トロット楽団のドラマーで、マネージャーみたいなこともやっているんだ。あ、グレイと同じくサックスも吹くよ」

「僕はバジル。……ねえ、グレイ。君はセイボリーとはどんな関係なんだい？」

部屋に荷物を置いた俺は、食堂でトロット楽団の面々と顔を会わせていた。

会って早々セイボリーとの仲を邪推するとは……バジルのそういうところは原作通りか。

「ああ、よろしく。マジヨラムにバジルとは初対面だったな。あと、セイボリーとはフェンネルと一緒にネフロのバーで会ったんだよ。俺が演奏しているときにさ。それ以来だな」

「そ、そうなんだ……ほっ……」

ネタバレしてしまうと、バジルの思いは永遠に届かないんですけどね。

「それで、グレイはどうしてハッピーガーランドに来たのかしら？ 観光？」

セイボリーの問いに俺は微妙な表情をした。

「うん、まあ、休暇も兼ねているんだけど……ナツメッグ博士の使い走りの仕事もあつてね」

オイルモーレ工場に製造を委託した洗濯機の件でも、一度は俺が視察に行つて話を詰めなければならぬ。

これはナツメッグ博士から任せられた大切な仕事だ。

個人的な用事の方も、闘技場でエルダーと対戦して、チコリの件を改めて調べて、ブラッディマンティスの情報を集めなければ。

可能ならばゴールドーンにも顔を出しておきたいな。

あそこの温泉は整備しておきたい。

やることは山積みだ。

「何だか、忙しそうだね」

「いえいえ、楽団のマネジメントを一手にこなしているマジヨラム君には敵いませんよ。」

「そういえば、お前Sランクになつたらしいな。闘技場には出るのか？」

フェンネルは自身がAランクのピークルバトラナーなのもあつて、俺がシユナイダーに勝つてSランクになつた話も知っているようだ。

「時間があるときには出ようと思つてるよ。エルダーと一度は手合わせしてみたいから

な」

チラッとセイボリーの方を盗み見るが、彼女の仕草や表情には何の変化も無かった。さすがにボロは出さないか。

彼女はエルダーことダンディリオンの代理でブラッディマンティスを仕切っており、言わば真の総帥といった立場にある。

長いこと秘密結社を裏で操ってきた女傑だ。

俺のカマかけに反応してしまうほどの未熟者ではないだろう。

「そうか。できれば、俺とも手合わせを頼む。ネフロの英雄シュナイダーに勝つほどのビークル乗りだ。きつと相当な腕なんだろう?」

「ああ、ご期待に添えるかはわからないが、機会があつたら頼むよ」

「ねえ、グレイ。前にセイボリーとフェンネルから聞いたんだけど……」

俺たちはコニーに向き直った。

「グレイって、サックスとピアノが凄く上手なんだって?」

本職の彼らを前にして肯定することなどできないが、俺が困った顔をしているとセイボリーとフェンネルが揃って口を開いた。

「ええ、そうよ。ピアノの技術に関しては、私よりも上でしょうね」

「ああ、サックスの腕前も大したもんだ」

「へえ！ そうなのかい？ セイボリーはともかく、フェンネルが褒めるなんて珍しいね」

馬鹿正直なバジルの物言いにフェンネルの眉間に皺が刻まれるが、セイボリーはさらに尻馬に乗って茶化す。

「ふふつ、確かにそうね。珍しいわね」

「……俺は事実を言っているだけだ」

フェンネルが不機嫌に鼻を鳴らし、俺が返答に困る中、マジヨラムは落ち着いて口を開いた。

「この二人がそこまで言うなら間違いないな。グレイ、もしよかつたらトロット楽団に入ってくれないか？ 今は定期演奏会のための練習と調整の期間だから、次の公演には十分間に合うはずだ」

正直、この話は予想外だ。

まさか、楽団メンバーの方から勧誘があるとは。

しかし……こんなザルな審査でいいのだろうか？

いや、それ以前の問題として今からメンバー入りするのはスケジュール的にキツイのではないだろうか。

「マジヨラム、ありがたい申し出けど……俺にもナツメック博士の助手の仕事がある。君たちと常に同行するのは無理だ。悪いが……」

「あら、それなら助っ人になってもらえばいいんじゃない？」

断ろうとした俺に、セイボリーが待ったをかけた。

「助っ人？」

「そう。グレイの楽器はサククスとピアノよ。彼がサククスを吹いてくればマジヨラムもドラムに集中できるでしょう？ それに……私が私用で出られないときに、ピアノを代わりに弾いてもらえるのなら助かるわ」

普段の担当がサククスならば、居なくなってもバンドが成立しなくなるパートじゃないのか。

そういえば、ゲームではロブスター亭の定期演奏のときは、ドラマーのはずのマジヨラムがサククスを演奏することが多かったな。

現実でどういう構成にするつもりだったのかはわからないが、少なくとも俺が居ればドラムとサククスの両方が欠けることなく演奏できるわけか。

しかし、最後のは少し引っ掛かる。

セイボリー不在時の代理ということとは、俺が居ることで彼女がブラッディマンティスの活動により多くの時間を割けるようになるだろう。

……いや、もし俺が彼女を疑っていることを承知しているのならば、こんなあからさまな真似はしないか。

俺を代理に立てて姿を消せば、今まさに怪しいことをしています、尻尾を掴んでください、と言っているようなものだ。

結局のところ、俺は助っ人を引き受けることになった。

バラードメインのポップスを演奏する楽団なので、サクソスパートが居なくなっても曲の構成全体に大きな影響は無く、ピアノもセイボリー不在時の補欠だから常に必要とされるわけではない。

これなら、ゲーム本編開始までの時間を多少は楽団に割いても大丈夫だろう。

「ありがとう、グレイ。それじゃあ、次の合わせ練習から来てくれるかな?」

「ああ、わかった。……もし、俺の力量が足りないと思ったら、遠慮なく言ってくれ。先に言い訳しておくが、トロット楽団の曲は俺の専門ジャンルじゃないからな」

「ははは、そんなことにはならないと思うけどね」

いや、マジでそれは心配なんだ……。

マジヨラムから受け取った譜面は、意外なことに「Fly me to the moon」そっくりの譜面だった。

コード進行がほとんど同じなのは助かった。

これならやりやすい。

まだ本編の楽曲はダンディリオンから来ていないようだ。

後日、俺はトロット楽団の練習に参加することになったのだが、マジヨラムたちからの反応を見る限りどうやら合格のようだ。

よかった。

ナツメツグ博士の楽器に感謝だな。

夜、ロブスター亭の俺の部屋に来客があった。

「ん、バジルか。どうしたんだ？」

「うん、ちよつとグレイに聞きたいことがあるんだ……」

何やら思い詰めた表情だ。

彼がこういう顔をするのはセイボリー絡みだろう。

俺と彼女の仲を邪推するのは終わったはずだが……。

「最近さ、セイボリーの髪が凄く綺麗になったじゃない」

「いや、知らんけど……」

しかしバジルは止まらない。

「もちろん、あのキラキラした金髪は前から綺麗だったけど、最近は……何かこう艶が出てきてさ。それに、凄いいサラサラに纏まっているんだ。風に靡いたときなんて、太陽の光を反射して女神のようだった。あ、セイボリーが言うにはコニーの髪も綺麗になっただらいいんだよ。まあ、セイボリーが一番だけどね」

これ……最後まで聞かないやダメか？

「どうやら最近あちこちで流行っているリンスとかいう化粧品を使っているらしいんだけど……セイボリーが言っていたんだ。グレイのおかげ、って」

まあ、この国でリンスを最初に開発したのは俺だからな。

因みに、一般に広く使われているリンスは柑橘類の果汁や皮で作る簡単に自作できるものだが、一部では蒸気で薔薇などから精油を抽出して香りづけに使った高級リンスも販売している。

ナツメツグ博士経由で精油の抽出法を確立し、高級品として売り出したのだ。

富裕層向けの限られた商売だが、小遣い稼ぎには十分すぎるほどの金が舞い込んでいる。

コニーはともかく、セイボリーが使っているリンスは恐らく高級な方だろう。

有名人のセイボリーが使ってくれれば、宣伝効果で売り上げもアップするということものだ。

ありがたいことで。

「リンスとグレイに何の関係があるの?」

バジルはそこら辺の事情を知らないようだな。

しかし、そんなことを聞くためだけにわざわざ俺のところに来たのか……。

セイボリーとコニーに聞けばいいのに。

まあ、セイボリー絡みだとバジルはおかしくなるので仕方ない。

「リンスは俺とナツメツグ博士で開発したものだよ。どうやら、男性にはまだあまり定着していないみたいだけどな。基本的なリンスなら自宅でも作れるが、富裕層の女性向けに香りにこだわった高級品も売っているんだ」

「あ、そういうことか……」

バジルは納得したようだ。

「よかった……てつきり、グレイがセイボリーに……」

勘弁してくれ。

最終的には敵対する可能性のある相手だぞ。

彼女と深く関わるつもりは無いさ。

しかし、こんな心配をしても、セイボリーの心の中にバジルは居ないんだよな。

何せ、彼女がブラッディマンティスの側に付くのは、愛するダンディリオンの復讐に

協力するためなのだから。

可哀想だからこれは伝えないでおこう

22話 エルダー戦

ガーランド闘技場にビークルを乗り入れて、俺は選手控室で一人の男の姿を探していた。

大都市の闘技場だけあって選手控室も豪華だ。

ネフロとは大違いだな。

ビークルの待機場を横切ってしばらく歩くと、目当ての人物を見つけた。

白いスーツの仮面を被った男が、闘技場のホールを見下ろしている。

彼がビークルバトルトーナメントチャンピオンにして「白い悪魔」の異名を持つ最強のビークルバトラー、エルダーだ。

仮面の下の正体は、ナツメツグ博士の養子でこの国で屈指のバイオリニストにして元トロット楽団のリーダー、ダンディリオンだ。

「……何か用か？」

俺の気配と視線に気付いたららしいエルダーはそのままの体勢で声を掛けてきた。

「あなたがエルダーだな。俺は「知っている」」

エルダーは俺の言葉を遮ってから振り返った。
数歩前に出て、俺との距離を縮めてくる。

背丈は俺より数センチ低い程度。

この世界の基準で言えばかなりの長身だ。

豪華なスーツで着痩せしているのかもしれないが、それでも戦いに身を置いているようには見えない細身の優男だ。

しかし、纏う気配には尋常ではない覇気と研ぎ澄まされたナイフのような冷たい殺気が混じっている。

なるほど、危険な男だ。

「「ナツメツグ博士の右腕」グレイ。そろそろ来る頃だと思っていたよ」

「……………」

これは、新たにSランクになったビークルバトラーとして挑戦しにくることを予想していたって話かな？

それとも、ブラッディマンティスの手先に俺を監視させているという意味か？

まあ、ここで問いたただす意味は無いだろう。

「今日は私の対戦枠も空いている。手合わせしないか？」

「……………ああ。俺もそのつもりで来た」

まさかエルダーから対戦を提案されるとは思ってもみなかったな。
まあいい。

俺の心構えも、ビークルの整備も万全だ。

「受付に申請してくる」

「うむ」

ガーランド闘技場はその日一番の熱狂に包まれていた。

有望な新Sランクバトルラーの俺とチャンピオンのエルダーの対戦である。

年に一度のビークルバトルトーナメントではないので、俺が勝ったとしてもチャンピオンの称号やKランクライセンスが手に入るわけではない。

エルダーにしても、負けたからといってランクが降格されるようなこともない。

要はエキシビションのようなものだが、それでも俺とエルダーの対戦カードはスポーツ誌に取り上げられてもおかしくないほどの注目度だ。

「さて、行くか」

俺は闘技場の係員の誘導に従い、ビークルをリフトに移動させた。

“白い悪魔” エルダー 【ホワイトレクイエム】

V S

“ナツメツグ博士の右腕” グレイ 【ジャガーノート】

エルダーのビークル【ホワイトレクイエム】は、長距離キャノンアームとエクスカリバーアームという、どちらも数値上では最高スペックを持つ遠距離武器と近距離武器で武装している。

レッグパーツも強化型なのでダッシュのスピードも速い、タイマン勝負では最強のビークルだ。

ゲームでは、エルダーの戦法はダッシュで後退しながら長距離キャノンアームを撃ち、近づくときエクスカリバーアームで斬りつけるというものだった。

ゲーム内ならば長距離キャノンアームを撃たれてから横ダッシュで躲すことも難しくなく、接近してエクスカリバーのラッシュをモロに食らう前に持ち上げて投げ、追撃を加えれば普通に削り切ることができた。

しかし、現実の戦いはゲームとは違う。

長距離キャノンアームから発射されるミサイルは、簡単に躲せるなんてことはないだろうし、当たり所が悪ければ一発で俺のビークルはお釈迦になってしまっただろう。

エクスカリバーの脅威も、ブレードアームやアックスアームより一、二段上のダメージを食らうというだけでは足りないだろう。

何せ魔法金属を使った超合金の大剣である。

最悪、ビークルのボディごとコクピットの俺が真つ二つだ。

現実にはHP制じやない。

一撃で乗り手がくたばることもあり得る。

「っ！」

開始の合図と同時に「ホワイトレクイエム」の長距離キャノンが発射された。

あの武器の弾は、ミスリルのなり損ないだか副産物の『魔銀』を加工して弾頭に搭載し、熱源からビークルを探知して追尾する、対空ミサイルの基本形のような構造だ。

ミサイル型の飛翔体なので、弾頭に詰められている炸薬も多く、平行移動で遮蔽物の合間を縫って回避行動を取っていた俺の近くで激しい爆発を起こすと、瓦礫の破片が飛び散って視界を覆う。

俺も負けじとチェーニングガンを打ち返すが、向こうも遮蔽物の使い方を熟知している。命中弾は無かった。

「おっと」

エルダーの長距離キャノンで吹き飛ばされた遮蔽物から飛び出し別の場所に移ったことで、偶然にも俺とエルダーを阻む壁はスクラップのバスだけとなった。

いつ接近戦に突入してもおかしくない距離だ。

ジンジャーとの特訓で培った近距離武器と射撃武器のスムーズな切り替えが役に立ちそうだ。

バス越しに隙間から狙いを定め、エルダーの「ホワイトレクイエム」のボディ横にチエーンガンを撃ち込む。

「っー」

突如、エルダーはエクスカリバーの巨大な刀身を掲げ、俺の銃撃を凌ぐとそのまま剣を振り下ろしてきた。

俺のバックステップが間に合ったので、エルダーのエクスカリバーはバスを真つ二つに断ち切っただけで終わった。

俺はカウンターで右のアームの強化ブレードを突き出す。

攻撃モーシヨンの直後で伸び切ったエクスカリバーアームの接合部を狙った。

金属を打つ鈍い音が闘技場に木霊する。

俺はこの攻撃で有効打を与えたかと思った。

しかし、エルダーは巧みなハンドルさばきでビークルの上半身を反転させて、俺のブレードの切っ先のクリーンヒットを避ける。

「ホワイトレクイエム」のエクスカリバーを搭載したアームには深い傷が入るが、大破には至っていない。

失敗だ。

「くっー！」

一旦、落ち着いて仕切りなおすつもりだった俺は、予想外のエルダーの行動に一瞬だけ判断が遅れてしまう。

俺に向かって真っ直ぐな向きで対峙していてエルダーは、敢えてダッシュで接近し、ブレストパーツのスパイクで正面から突進してきたのだ。

ミスリルの装甲ブレストと傾斜装甲のおかげで「ジャガーノート」に目立った損傷は無いが、流し切れなかった衝撃に一瞬だけ息が詰まる。

背筋に感じた寒気に従い、俺は急いでビークルを後退させたが、次の瞬間、「ジャガーノート」の装甲ブレストに大きな亀裂が入った。

体勢を立て直しながら見ると、「ホワイトレクイエム」はエクスカリバーアームを大きく振り抜いた後だった。

どうやらざっくりとブレストパーツの装甲を斬られたようだ。

「危ねえ……」

回避が間に合わなければ、俺は完全に相手の斬撃に捉えられていた。

チャンピオンの名は伊達じゃない。

エルダーのバトルのセンスには、神があったものがあるようだ。

「……………」

【ホワイトレクイエム】のエクスカリバーアームからは不自然な火花が噴き出している。

どうやら俺の強化ブレードアームで軽くないダメージを受けたところに、無理なモーシヨンで攻撃を繰り返したため、まともに剣を振ることはできないようだ。

仮面で表情が読めず無言のエルダーだが、気配からは焦りと若干の諦めが見て取れる。

悪いが、同じ土俵に立っている以上、このチャンスを逃すつもりは無い。

俺はペダルを踏みこんで【ジャガーノート】を加速させると、エクスカリバーの攻撃範囲を警戒してアウトレンジで戦う場合よりも近い距離を保ち、確実にボディにチェーングンの弾を撃ち込んでいく。

エルダーは苦し紛れにエクスカリバーアームを振るうが、質量だけの攻撃ではスピードの面で遥かに俺のブレードには及ばず、出力の伝達に問題がある以上はパワーにおいても完全に【ジャガーノート】に劣る有様だった。

結果、強化ブレードアームと打ち合っただけで簡単に弾かれたエクスカリバーアームは、その衝撃が致命傷になったのか完全に動かなくなる。

長距離キャノンを使えない接近戦の中、左アームの手の部分を用いた格闘でもエルダーは一定の力量を示したが、シユナイダーで接近戦タイプの敵に慣れていた俺には通用しない。

亀裂はあるものの健在な装甲ブレストで突進を繰り返し、「ホワイトレクイエム」がバランスを崩したところでレッグパーツの関節部をチェーニングで撃ち抜いた。

足を奪われた「ホワイトレクイエム」では戦闘の継続は不可能だ。

審判が俺の勝利を告げた。

「ジャガーノート」のブレストパーツの応急修理を闘技場の整備士に頼み、ファイトマナーを受け取った俺が控室に戻ると、そこにはフェンネルが居た。

「よう、グレイ。見てたぜ、エルダーとの試合。凄えじゃねえか、チャンピオンに勝っちゃうなんてよ」

「どうやらフェンネルは俺の後に闘技場にやって来て、俺とエルダーの対戦を観ていたようだ。」

「ああ、フェンネル。どうにか勝てたよ。まあ、通常対戦の結果としては上々だろう。ちよつとブレストパーツのダメージが大きかったけどな」

既にジンジャーを相手取ったときに装甲ブレストを凹まされるという経験がある。

それなのに、今回は躲しきれないどころかぎっくりと切り裂かれてしまった。

ジンジャーが知ったら呆れるかもしれないミスだ。

「まったく、とんでもねえな。こりや、今年のビークルバトルトーナメントには一波乱ありそうぞぞ」

「……あゝ、フェンネル。今年のトーナメントには俺は出ないと思う」

「そうなのか？」

もうすぐ、毎年恒例の世界中の有名なビークル乗りが集められて勝敗を競う大会、ビークルバトルトーナメントが開催される。

しかし、ゲーム本編開始と主人公の到着まであと一年ほど。

ナツメツグ博士の助手の仕事の傍ら、本編時期への準備とトロット楽団の助っ人をこなす俺に、今年のトーナメントに出場しているほどの時間と余裕があるとは思えない。

既に、ガールランド闘技場の受付からも俺に出場要請が来る可能性については聞いていたが、こればかりは仕方ない。

今年の出場は見送らせてももう方向で伝えてある。

「そいつは残念だ。お前には観客だけでなく多くのビークル乗りも期待しているんだけどな」

「すまんね。次回は出られる……と思う」

そんな何気ない会話をフエンネルとしながら、俺は自分のピークルの応急修理が終わるのを待っていたが、ふと控室の隅で目にした光景に目を見張った。

「エルダーは……何をしているんだ？」

「ん？ ああ、あいつは整備士に頼らない。「ホワイトレクイエム」には一切触らせないんだ。バトルで傷ついたときも控室に機材を広げて自分で修理するし、バトル前も外で万全の準備を期してから闘技場に姿を現す。恐らく、整備士経由でピークルの情報が漏れるのを防ぐためだろう」

そんなに秘匿したところで何になるのかな？

長距離キャンオンアーム含め、基本的な「ホワイトレクイエム」のパーツは強力だがそれほど珍しいものではない。

エクスカリバーアームには謎も多いだろうが、見る人が見れば大体の性能の予想はつく。

それこそ、うちには世界中のピークルパーツの知識があるナツメツグ博士が居るので、そんな小細工など意味が無いものに思えてしまう。

「今日はお前に散々壊されたからな。修理に苦労しているみたいだ」
なるほど、そいつはお気の毒様だ。

23話 墓前

エルダーとのビークルバトルに勝利してから数日。

俺は当初の予定通り、ハツピーガーランドで鉄工業を中心に営むオイルモーレ工場を視察して洗濯機の製造委託に関する商談、新聞社で資料を借りてチコリの事件を調べた。りした。

ブラッディマンティスからの接触は無い。

ゲームの主人公はビークルバトルーナメント終了後にブラッディマンティスの者に勧誘される。

エルダーに勝利して腕つぶしを示し色々が目立った俺には接触があるかもしれないと警戒していたのだが、どうやら杞憂になりそうだ。

やはり、ナツメツグ博士の弟子ということで、既に靡く可能性が無いことを予想しているのかもしれない。

しかし、そうなると今度はヒットマンや監視への対策が心配だな。

俺は常に拳銃を手放さず武装しているが、十分な防御策には程遠い。

念のため、ゲームでも終盤のブラッディマンティスとの戦いで主人公陣営を率いることになるガーランド警察のファーガスン警部にも会ってみた。

ナツメツグ博士の名前をガッツリ使って、ブラッディマンティスの最近の動向などを聞いてみたのだが、大して有益な情報は得られなかった。

これ以上ブラッディマンティスへの対策を進めるのは現時点では無理そうだな。他のことを進めよう。

トロット楽団の練習の無い日に、俺は一つ遠出の予定を立てた。

ハッピーガーランド北部の山道に俺のビークルの姿はあった。

この道の先にあるのはダンデイリオンの楽器工房、それにゲームでも度々イベントで訪れることになる寂れた鉱山の村ゴールドーンだ。

既に鉱石の産出量は落ち、廃坑には盗掘目的の盗賊団が徘徊する、かつての活気はどこにも無い田舎町だ。

ここの鉱山を所有するモツカラン鉱山は上場企業だが、人海戦術の鉱石掘りに従事する職員は数を減らし、利益は微々たるものになっている。

ゲームではこの現状を打破するために、モツカラン鉱山の職員から新聞社への広告の掲示を頼まれたりする。

しかし、この村とモツカラン鉱山に大きな変革をもたらすのは、残念ながら鉱石事業ではない。

温泉だ。

原作では、主人公が度々遭遇してトラブルになる荒くれビークル乗りダッドリーとの戦闘のはずみで、ゴールドーンの木造の櫓が崩れた拍子に岩盤が破壊され温泉が噴き出す。

この温泉の発見と銭湯のオープンで、モツカラン鉱山は新たな事業を手に入れて株価が上昇するのだ。

所詮、田舎に名物が一つ増えるだけ。

目に見えてゴールドーンの景気や人の入りに違いは見えないが、元々がただ死を待つのみといった様相の町である。

僅かな発展でも現在の株価と比べれば上昇率は相当なものだろう。

俺は早速、ハッピーガーランドの証券取引場に赴き、モツカラン鉱山の株を購入した。因みに、証券取引場ではバジルを見かけた。

どうやらこの頃から取引ではよく損をしているようだ。

これ……トロット楽団の稼ぎは全部ギャンブルに消えているのと同じじゃないか？

まあいい。

本人が決めたことだ。
何も言うまい。

「いやあ、まさか本当に温泉が湧き出るとは。さすがはナツメツグ博士の右腕と言われる方だ」

鉱山職員の男は必死に俺の機嫌を取った。

最初のマイナスポイントを取り返そうと必死だ。

この男は、俺が村に現れたときに、あからさまに不審者扱いしてきたのだ。

まあ、俺が怪しいのは今に始まったことではないが、こいつの態度はいただけくない。

まずは温泉を掘り当てた後の管理業務の委託に関する契約書を交わそうと思っただけだが、この男は俺を無視して取り合わなかった。

おまけにナツメツグ博士の名前を出して名乗っても、俺を気違い扱いして事務所から追い出したのだ。

さすがに腹が立った俺は、当初の鉱山職員の意見を聞きながら採掘する気も失せ、岩盤をチェーンガンで掃射してやった。

結果的には、見事に温泉が噴き出したことで男は態度を改めたわけだ。

村の中でいきなり発砲した俺にビビった可能性もあるが、知ったことではない。

とりあえず、温泉の管理責任を負う連中が確保できればいいのだ。

「それじゃあ、運営の方は任せても大丈夫ですね？ 銭湯を建てるための木材はホトトギス林業に注文してありますので」

「はい。必ずや、ご期待に沿える結果を」

ところで、ストーリー終盤で、コニーの母親ローズマリーは生まれ故郷であるこのゴールドーンに戻ってくる。

ビークルや自動車が少なく排ガスの影響があまり無い場所で療養するためだ。

一瞬、温泉が営業を開始すればこの村へのビークルの立ち入りは少々増えるかもしれないことを考えたが、まあこんな山奥の村が彼女の呼吸器に悪影響を及ぼすほどビークルで埋め尽くされることは無いだろう。

逆に、温泉の一つくらいなら村が豊かになって物資が増え、ローズマリーが暮らしやすくなるはずだ。

この村での仕事は終わった。

「そうだ、展望台への道ってわかりますか」

「展望台ですか？ ああ、伐採地区の奥にあるやつですね」

俺の質問に職員は簡単な地図で答えてくれた。

「ありがとう、助かりました」

「いえいえ。しかし、こんな場所に何を……あつ」

職員は急に気まずそうな表情になった。

この展望台近くにはダンディリオンの弟チコリの墓がある。

チコリの死因と事件に関しては、ハッピーガーランドの住民ならば誰でも知っている話だ。

この職員の年齢ならば、四年前の事件を覚えていないなどということは無いだろう。

恐らく彼も、チコリがマーシユのせいで命を失ったとき、マーシユの父親セントジョーンズ卿を恐れて足早に去っていき、見て見ぬふりをした住民の一人だ。

ダンディリオンと同じくナツメッグ博士の弟子である俺がチコリの墓参りに行くのも自然だ。

そこら辺を瞬時に悟ったのだろう。

「気にしないでください。個人的な用事なので」

「はい、お気を付けて……」

展望台に到着した俺は、早速チコリの墓を探した。

幸い、途中でホトトギス林業のピークル乗りに会ったので、ここまで道に迷うことは無かった。

「あれか……」

ピークルを降りて歩を進めると、隅の方にひっそりと建てられた簡素な墓を見つけた。

ハッピーガーランドを覆う石堀よりも高い、大都会を一望できる場所だ。

遠目にも中世の馬車の時代とは一線を画す技術革新のもとに成り立っている都市であることがわかる。

チコリの墓参りに来るたび、ダンディリオンは何を思っていたのだろうか？

既にダンディリオンはエルダーとして地位を固めている。

俺が彼に会ったのは対戦前の控え室と試合場だけだ。

果たして、まだダンディリオンが戻れるのか、それとも既に復讐心に吞まれた鬼と化しているのかはわからない。

……いや、第一印象で感じた冷たい殺気を鑑みるに、既にダンディリオンとしての彼とエルダーの一面は一体となっている。

あの状態から前向きになる可能性は低いだろう。

俺はこのバンピートロットの世界に生きているからこそ、世界の破滅を願うダンディリオンとは敵対せざるを得ないが、彼の気持ちが変わらないことはない。

もしも俺が彼の立場だったら、間違いなく復讐を望んだはずだ。

少なくとも、加害者とそれに加担した主要な人物と官憲を皆殺しにする程度には。

チコリがダンデイリオンを止めてほしいなどと考えるタイプの人間だったとしても、俺の思考回路から出る言葉では復讐に囚われた人間を思い留まらせることはできないだろう。

「……あまり、期待しないでくれよ」

せめて死者への弔いくらいはしておこう。

ハッピーガーランドの住民が今なおチコリの件から逃避し続けるのなら、花くらいは俺が持つてきてやる。

俺は街で買ってきた地味な花束をチコリの墓に手向けた。

「ん？　そこに居るのは……？」

後ろから声を掛けられた俺は慌てずに振り向いた。

足音で徒歩の人間が近づいてきたのはわかっていた。

目の前に現れたのは、エルダーと同じくらいの長身で金髪の青年だった。

まあ、彼がエルダーの正体なわけだが……。

ダンデイリオンだ。

彼の右手にも、華やかな色の少ない花束が握られている。

「初めて見る顔だけど……チコリの知り合いかい？」

初対面の体だが、ダンディリオンとは彼がエルダーだったときに会話を交わしている。

白々しい挨拶だ。

しかし、今のダンディリオンからはエルダー時のような覇気や殺気は微塵も感じない。

普通は変装したり正体を隠したりしていても、纏う雰囲気にはある程度の共通点があるものだ。

それがどうだ？

ダンディリオンとエルダーはまるで別人じゃないか。

ここまで変われるというのも、既に彼の心が壊れている証拠か。

「いや、チコリ君と面識は無い。俺はナツメツグ博士の助手のグレイ。あなたが、ダンディリオンかな？」

「そうか、ナツメツグ博士の……。うん、改めてよろしく。確かに、僕がダンディリオンだ。今はその楽器工房で主に弦楽器の製作をしている」

こうして見ると、やはりダンディリオンは最強のピークル乗りといった風貌ではない。

身長こそ俺と数センチしか違わないのでかなりの長身だが、肩幅や腕周りは完全に荒事が苦手な人間のものだ。

しかし、指先や爪には僅かに黒いオイルの汚れがあった。

あれは頻繁にビークルの整備をする者の特徴だ。

楽器職人の手ではない。

「ところで、グレイ。あの花は君が？ 弟とは面識がないって言っていたけど……」

「うん、まあ偶然にも君たちの事情を知る機会があつてね。同じナツメグ博士に師事する者として、近くに來たついでに花くらいはつて思ったんだ。もし、気分を害したのなら申し訳ない」

「いや、そんなことないよ。こうして気にかけてくれる人間がいるのはありがたいことさ。……君が初めてだよ。僕以外でここに、墓参りのために足を延ばしてくれたのは」ダンディリオンの声にあるのは憂いだけで、怒りや殺気などは微塵も感じられなかった。

「じゃあ、グレイ。僕はもう行くよ」

「ああ、気を付けて」

俺の花束の隣に自分の花束を置いたダンディリオンは、踵を返すと工房方面に歩いて

行った。

俺はしばらくその後ろ姿を見送っていたが、再度チコリの墓に向き直る。

「……悪いな。こりや本当に何もできないかもしれないかもしれん」

ダンディリオンは壊れている。

彼の中にあるエルダーとダンディリオンの人格は完全に分離している。

そのうえで、ダンディリオンは一人の人間として存在しているのだ。

ダンディリオンとしての振る舞いは完璧だ。

エルダーの人格を捨てるか呑み込むかして再びダンディリオンとして立ち直ることは叶わないだろう。

そうなると、彼は死ぬまで止まらない。

結局、物語通りか。

もしかしたら最終的には俺がダンディリオンを殺す必要が出てくるかもしれない。気が滅入る話だ。

24話 仮面

ナツメッグ博士の助手の仕事をこなしつつ、トロット楽団の助っ人として定期演奏会に出演する日々を過ごし始めてから一年弱。

もうそろそろゲーム本編が始まる兆候があってもいいはずだ。

最近の大きな出来事としては、ついにビジョン牧場駅と俺の家が完成したことだ。

牧場まで路線が伸びたことで、俺はハッピーガーランドとナツメッグ博士の工房の行き来が今までよりも容易になった。

ゲームよりも前倒しでの工事終了だ。

これは主人公たちにとっても大きな利益となるだろう。

俺の家はナツメッグ博士が設計した最新式のデザインで、俺の個人的な研究室にピアノとドラムを設置した音楽室、大きめのベッドを置いた寝室、それに俺が設計に口を出しまくった浴室で構成されている。

食事は博士と一緒に摂るので、キッチンと食堂は今まで通り博士の家でこと足りる。

工房も俺が補佐をしながら博士が作業をして、というパターンがほとんどなので、わ

ざわざ俺の家には作っていない。

博士の家と俺の家はドア一つで行き来できるので、現代でいうところの二世帯住宅のようなものになったわけだ。

因みに、浴室には俺が細かく口を出して、広めの洗い場と排水溝に向かって傾斜を付けた床、大きめのバスタブと換気扇の設置、石鹸やシャンプーやリンスを置くための棚を追加したので、ナツメツグ博士も驚きの快適空間になっている。

現代人の風呂への執着を舐めてはいけない。

俺の口出しに不可解な顔をしていたナツメツグ博士も、今や自分のところのシャワー室を使わず俺の家に来るくらいだ。

ハッピーガーランドのオイルモレー工場を訪れていたある日、最近では珍しいことにちよつとした諍いがあった。

今日は洗濯機の話ではなく、ミームー村への鉄道開通のための資材発注に関する話で来たのだ。

巨大な潜水艦ビークル『デープアングラー』のスクラップと中に貯め込んでいた資材があるとはいえ、大型の湖を迂回する鉄道ルートを作るほどの資源には到底足りない。

「こういう根回しも必要である。

「んじゃ、よろしくお願ひしますよ」

「はい、今日はありがとうございます」

担当者との話し合いが終わり、ロボスター亭に戻ろうとしていたところで、俺は工場の敷地の隅に人影を見つけた。

あそこはスクラップ置き場だ。

奥の方に人が居ることなど珍しい。

つい興味本位でそちらに足を延ばしてしまう。

「ん？」

複雑に詰みあがったスクラップの奥に、一台のビークルが隠されるように駐機されているのを発見した。

どう見ても通常仕様のビークルではない。

戦闘用のカスタムだ。

「【ステイル・モラル】か」

ビークルバトル仕様ではあるが、強力な武装であるウィップアーム以外は装飾重視だ。

ガーランド闘技場には俺も何度か出場しているので、このビークルの持ち主を見たこ

とがあるし、対戦したこともあれば言葉を交わしたこともある。

“女帝”の異名を持つAランクバトルのサフランだ。

昼間の彼女は眼鏡を掛けた地味な工具ビスカスとして働き、夜には仮面で顔を隠した妖艶なピークルバトルのサフランとして闘技場に出場している。

そういえば、原作では彼女は借金のある男を匿ってピークルバトルで稼いだ金を貢いでいたな。

サブイベントの結末としては、最終的に男に金を持ち逃げされてしまう。

サフランも騙されていることには気が付いていたが、嘘でも優しくしてくれる男に……的な内容だった。

「(なっ！ 何で居るんだ!?)」

「(っ！ リッキー！ どこへ行くつもりなの?)」

原作でのシナリオを思い出していると、先ほど人影が見えた奥の方から声が聞こえてくる。

この距離からでも緊迫した怒声だとわかる。

これは無視できない面倒事になりそうだ。

俺はショルダーホルスターの拳銃を確かめると、サフランのピークルから離れて声のした方向に足を進めた。

サフランの家はオイルモーレ工場のスクラップ置き場にある掘っ立て小屋だ。

Aランクバトラーに相応しくない暮らしぶりだが、これもヒモ男のリッキーを目立たない住居の地下に匿うためだ。

声の主を追うと、案の定ゲームで見たのと同じ汚い小屋が目に入った。

小屋の前では一組の男女が口論している。

「くそっ！ ビスカス、何でこの時間に……」

「き、今日はたまたま試合が組まれた時間が早かったのよ。だから……」

「ちっ、そういうことかよ……。あゝ、わざわざありがとう。でも、俺はちよつと野暮用があるんだ。すぐ戻るよ」

「な、何を言っているの!? 捕まってしまうわ！ リッキーは家の中に「うるせえ！」っ
！」

サフランことビスカスがヒモ男のリッキーに突き飛ばされた。

鈍い音がして、サフランは地面に倒れ込む。

彼女の荷物鞆も手から投げ出され、中身がこぼれ落ちた。

その中には闘技場で見慣れた仮面もあった。

「へ、へへっ、何だよ……。凄腕のビークル乗りでも、生身じゃただの弱つちい女じゃ

ねえか……」

「リツキー……何故……？」

「何故？ お前も気付いていたんだろ。俺がお前を騙していることによ」

「っ！」

「まあいい。これだけありや、借金を返してもかなり残るな」

リツキーは近くにあった金属パイプを持ち上げるとサフランに近づぐ。

「へへっ、悪く思うなよ。追ってこられると面倒だから……」

マズいな。

まさかここまでの急展開になるとは。

俺は物陰から出ると拳銃を抜いてリツキーに鋭く警告した。

「動くな！」

「っ！」

俺の銃の照準はリツキーの眉間にぴったりと合わされている。

距離は五メートル以内。

絶対に外さない距離だ。

リツキーは慌てて鉄パイプを捨てた。

「ま、待て！ 金ならある！ 借金は、今返すから……」

「あなた……グレイ？」

リツキーは俺を借金取りだと思ったようだが、サフランはすぐ俺に気が付いた。

まあ、闘技場では何度も顔を会わせているからな。

それに俺は別に変装なんかしていないし。

「くっ、お前……ピスカスに雇われたのか？ いや、こいつの男か？ 畜生！ 俺以外に

男が居たなんて聞いてないぞ!!」

今度はゲスな勘繰りか。

救い難い奴だな。

「リツキー、両手を上げて地面に伏せろ」

「か、金を山分けしないか!? ピスカスが欲しいんなら、あんたにやるから……」

俺は拳銃のハンマーを起こした。

こんな動作を戦闘中にすれば、狙いがブレるうえに撃鉄を親指で操作している間は引き金を引いて撃つことができない。

隙を作らないためには本当はやりたくないのだが、シリンダーが回りハンマーが後ろにロックされる金属の音はそれだけで人間を委縮させるのに効果的だ。

「ひっ」

「二度は言わん」

リツキーは金の入ったバッグを放り出すと、両手を高く上げて膝をついた。

そのまま頭を下げて地面にうつ伏せになろうとするが……俺はリツキーの側頭部を蹴り飛ばした。

「びえぶっー！」

回し蹴りがクリーンヒットし、俺の体重が転化された衝撃をモロに食らったリツキーは、地面を転がりながら吹き飛んだ。

小柄な優男のリツキーが俺の手加減無しの蹴りを食らえば、こうなるのも当然だ。

リツキーはサフランの小屋の壁に背中からぶち当たった。

頭から血を流して呻いている。

俺は撃鉄とフレーム内のファイアリングピンの間に指を挟んで、慎重に拳銃をデコックしてホルスターに仕舞った。

そのまま頭を押さえて蹲るリツキーに歩み寄る。

「や、やめてー！」

サフランは俺を止めようとするが、このままリツキーを放置するのは危険だ。

とりあえず後ろからリツキーの首根っこを掴んで地面に押し倒すと、リツキーの右腕を踏みつぶして関節を破壊した。

「ぎゃああああああ!!」

これでリッキーは利き手が使えない。

凶器を出して反撃してくる可能性は、ほとんど無くなったと見ていいだろう。

「サフラン、大丈夫か？」

「……ええ」

俺はリッキーに突き飛ばされて腕を痛めたサフランを助け起こすが、彼女は俺と目を合わせようとはしなかった。

その弱々しさからは仮面の女帝バトラーの姿は想像もつかない。

「サフラン、言っておくが……こいつの思惑がはつきりしてしまった以上、今までの関係に戻ることはできないぞ」

「わかってる……」

ヒステリーな女なら俺を責めてもおかしくないが、さすがは女帝サフラン。

強い女だな。

こういう部分を見ると、衣装は違っても確かに彼女がサフランなんだと確信できる。

「ぐっ……いてえ……。ビスカス……お前、強いんだろう……？ あの化け物を殺してくれよお……」

今も痛みに呻きながら無責任なことを言うリッキーに僅かに視線を送るサフラン。

彼女も既に後戻りできないことはわかっているはずだが、やはり自分から決別の言葉を口にするにはできないようだ。

「おい」

「や、やめてくれ！ 何が欲しいんだ？ ビスカスならやるって……」

「まだ言うか、ゲス野郎！」

正直、こんな奴とはもう話したくないが尋問はしなければ。

リッキーが借金をしているのは本当らしい。

そいつらが非合法的な組織なのであれば、その情報は役に立つはずだ。

「お前が借金をした相手はどこのだいつだ？ 吐け」

「そ、それを言ったら……逃がしてくれるのか？」

俺はサフランの方に一瞬だけ視線をやるが、彼女はこちらを見ようとはしない。

さすがにリッキーと話す気力は残っていないようだ。

俺が片付けさせてもらおう。

「ああ。さっさと吐いて失せろ」

「へへっ……ありがてえ……」

リッキーは闇金組織と取り立て屋の名前を吐いた。

この情報だけではブラッディマンティスや盗賊団との関係はわからんな。

「あと、もう一つ。お前、サフランのビークルに関して、どこかに情報を流したか?」
「? そんなことしてねえ。俺はビークルとかバトルのことなんて全然わかんねえよ」

サフランの方を確認すると僅かに頷いた。

リッキーがブラッディマンティスや何かの手先でサフランの情報を探らされている可能性は低いか。

サフランのビークルのパーツ情報を手に入れても、そもそもビークルに関する知識が無いリッキーではまともに伝達できないだろう。

「よし、もういいぞ。消えろ」

「あ、足が……」

「両手両足を切り落とすか?」

俺がナイフを取り出すと、リッキーは脂汗を流しながらも立ち上がって走り出した。

「……………」

「あく、すまなかつたな。君の稼いだ金は奴が持ったままだ」

「ううん、いいの。ファイトマネーは元々リッキーのために稼いでいたものだし……」

何ともまあ……。

Aランクバトラーのファイトマネーなら、それだけで小金持ちの生活ができる。

そいつを全部あのヒモに食い潰されたわけか。

「生活費は……？」

「こんな場所に勝手に住み着いて潜伏しているのよ。目立たないためには、お金があっても最低限の食料くらいしか買えない……。工員の給料だけでもお釣りが出るわ」

重い、重いよ。

「……バトルには、もう出ないのか？」

「わからない……でも、しばらくは……無理かも……」

まあ、そうだろうな。

Aランクのビークルバトラーといえど誰でもなれるわけではない。

彼女も血の滲むような努力の果てに、今の強さとライセンスを手に入れたはずだ。

そうして手に入れた財産を全てリッキーに捧げてきた。

その献身を全面的に否定された彼女の心情は如何なるものか？

おまけにあのゲス野郎は、自分が助かるためにサフランを犠牲にしようとした。

本人の前で二回もサフランを俺にくれてやるなどと言ったのだ。

正直、あれには俺も腸が煮えくり返る思いだ。

「しばらくは休むといい。リッキーのことを忘れちまえなどとは言えないが、早いところ復帰するこったな。君の出場を心待ちにしている連中が居る。観客も、対戦相手も」

「うん……」

「俺も相談とか愚痴くらいなら聞くからさ」

「うん……」

しばらくはサフランの心の傷は開いたままだろうが、彼女はそれで自殺を考えるようなタマじゃないだろう。

時間が解決してくれるはずだ。

俺は地面に落ちたサフランの仮面を拾って手渡す。

「それじゃ、俺はこれで」

「うん……ありがとう」

俺は踵を返してサフランのもとを辞した。

それにしても展開が速かったな。

まさか主人公が来る前に、サフランのトラブルがクライマックスを迎えるとは。

原作知識が当てにならない部分なのか、俺の行動によって変わった部分なのか……。

因みに、リッキーを尾行して彼と接触した借金取りをボコって尋問したところ、出てきた闇金組織はケチな弱小だった。

念のためガーランド警察のファーガスンに情報を流して強制捜査に踏み切ってもらったが、ブラッディマンティスとの金の流れなどは掴めなかった。

思いもよらぬところに手掛かりが、つてのを期待していたわけだが、そう簡単に尻尾を掴ませてはくれないか……。

25話 そして、物語は静かに動き出す

トロット楽団にダンディリオンから新曲が届けられた。

待ちに待ったゲーム本編で最初に登場する曲『In Your Voice』だ。

俺も当然ながらサックスで参加する。

練習も順調だ。

マジヨラムの仕切りで合わせのスケジュールが生まれ、トロット楽団のレパートリーとして着々と仕上がっていく。

フェンネルの調子があまり良くなさそうなこと以外は特に問題ない。

……そろそろフェンネルは脱退のことを考えているのかな。

彼は従来のアコースティックギターや電気を使わない古典的な楽器でやる音楽に限界を感じ、もつとパワフルな音楽を求め始める。

最近、フェンネルがよくファンキーな見た目の連中——恐らくベンジャミンとフランクリン——と話している様子を見かけることから、そこら辺は原作通り動いていると見て間違いは無いだろう。

これに関しては俺がどうこう干渉すべき話じゃない気がする。

「皆、ちよつといいかい？」

いつもの合わせ練習の後、マジヨラムが楽団メンバーを集めて話し始めた。

『In Your Voice』のお披露目だけど、最初の公演はネフロの駅前広場になる予定だよ」

来た。

ついにゲーム本編だ。

ゲーム開始時に主人公はウミネコ海岸で目を覚まし、コニーはじめネフロに来ていた楽団メンバーと友誼を結ぶ。

このネフロ公演に行つたときから、物語は動き始めるのだろう。

「へえ、ネフロかあ。コニーの地元だね」

「うん！ 久しぶりに、お母さんに会えるよ」

コニーは喜んでいるな。

「前日入りして『ホテル・ジャコウジカ』に泊まって、当日にステージの設営。ライブは夜からだ。皆、ビークルのステージ装備を忘れないでね」

俺もバックパーツをステージバックに換えておかないとな。

ナツメツグ博士特製のステージを展開するバックパーツは、キャリアーバックの上にアタツチメントとして装着できるので、付け替えはすぐに終わる。

「じゃあ、そういうことで。皆、よろしく」

出発当日の朝。

俺は皆より早めに宿を出て、弾薬の補充のためにガーランド闘技場に寄った。

駅はすぐそこなので、余裕の無い寄り道ではない。

軽く対戦表を見ると、昨日からエルダーが出場していなかった。

恐らく、既にネフロへ向かっている。

今日の夜にウミネコ海岸近くでジュニパーベリー号を襲撃するのだろう。

ジュニパーベリー号にはダンディリオンにとってチコリの仇であるマーシユと、その友人であるゲームの主人公が乗っている。

この襲撃のせいでマーシユは重症を負い、主人公は記憶を失ってウミネコ海岸に漂着することになるのだ。

未然に防げるものなら防ぎたいが、俺にはジュニパーベリー号のルートを調べる術も、エルダーの居場所を詳細に知る術も、付近のブラッディマンティスの伏兵の情報を得る術もない。

ぶっちゃけ、こういった情報を得るにはブラッディマンティスのような組織の力が必要不可欠なのだ。

今回に限っては、俺に不利すぎる土俵である。

腹立たしいことだが、ジュニパーベリー号の襲撃までは指を咥えて見ているしかあるまい。

汽車に乗ってネフロに到着すると、既に街はトロット楽団の到着に歓迎ムードだった。

駅前広場には多くの住民が詰め寄せ、俺たちのビークルが搬出されるのを眺めている。

トロット楽団は俺がこの世界に来たときからそれなりに知名度のあるバンドだったが、この数年でまさかこれほどの人気になるとは思いもしなかった。

これはゲームの中ではわからなかった感覚だ。

説明書やゲーム中の説明で人気バンドと言われても実感など湧かない。

しかし、まさか自分がフィクションの世界のバンドに所属して、こうして脚光を浴びることになるとは。

「「「「「コニーちゃん!!」」」」」

「「「セイボリー!!」」」

やはりこの二人のファンが圧倒的に多いな。

因みに、男性陣はビジュアル面でフェンネルの圧勝だ。

べ、別に悔しくなんかないんだからね。

俺のファンだって一定数は存在するらしい。

人数は……まあ、マジヨラムやバジルとどっこいかな？

俺は正式なメンバーではなく、いわばトラ——エキストラ——だ。

仕方ないさ……。

急に降り出した雨に慌てつつも、俺たちは『ホテル・ジャコウジカ』の駐機場にビークルを停めて、各自スーツケースと楽器類を運び込んだ。

「ひゃく、ツいてないや。何で僕たちが楽器を運び込み終わるまでの数分を待ってくれないんだよ」

「はは、まあそんなこともあるさ」

バジルとマジヨラムが連れ立って現れたのを最後に、楽団メンバーが全員ラウンジに集まった。

マジヨラムは全員がその場に居ることを確認すると口を開く。

「会場の設営は明日からだから。とは言っても、肝心のステージが僕たちの場合はトロットビークルだからね。ビークルを並べてステージを作るのはリハ直前になるし、会場全体の大まかな準備はもう出来ている」

ぶつちやけ、マネージャーのマジヨラム以外は開演直前のリハースルまでやることがほとんど無い。

それまでは自由時間だ。

明日の夕方まで暇になる。

「何度も確認するけど、ライブは明日の夜まで続くからね。皆、今日はしっかり体を休めておくように」

「わかったわかった」

「マジヨラムは心配性だな」

母親のような言い方をするマジヨラムを軽くあしらうフェンネルに調子のいいバジル。

いつもの構図だ。

「それじゃあ、私はお母さんに会いに行つてくるね」

コニーはローズマリーのところに行くようだ。

バジルはセイボリーと二人つきりになれる時間を狙うのかな。

フエンネルは一人で飲みにも行くのだろうか。

俺は……今はエルダーとブラッディマンティス相手にできることも無いし、楽器の手入れでもしておくか。

どちらにせよ、この天気じゃあ出掛ける気にはならない。
そうしてトロット楽団のライブ前日の夜は更けていった。

同日、午後11時。ウミネコ海岸沖、ジュニパーベリー号にて。

「キャプテン、もうそろそろ到着じゃねえんですかい？」

「ああ、この半島を迂回するように沖合を進んだところにある港町がスームスームだ。もう一息だぞ」

ジュニパーベリー号の女船長キャプテン・シブレットは、いざ到着というタイミングで見舞われた時化に顔を顰めつつも、ここまで無事に到達できたことに胸を撫で下ろした。

アルバトロス港で拾った密航者の少年二人。

シブレットは密航の罪を見逃す代わりに、彼らを船員として雇う契約を結んだ。

この国はその少年の片割れマーシユの故郷なのだ。

船乗りは危険な仕事である。

正直、少年たちを故郷まで無事に送り届けられる保証はどこにも無い。

だからこそ、ハリケーンに海賊の襲撃に、幾多の脅威を退けここまで無事に船を進められたことを、シブレットは神に感謝した。

厳格な雰囲気と冷徹な判断から一見すると恐れられがちなシブレットだが、実際には同じ船に乗る者を家族同然に扱う情に厚い人物なのだ。

「ミゲール、私は今の内に仮眠をとる。指揮を引き継げ」

この程度の荒波であれば、精鋭ぞろいのジュニパーベリー号の乗組員に凌げぬものではないだろう。

シブレットはそう考え、到着まであと少しとなりつつも、最後まで気を抜かず冷静さを保つために船長室に戻った。

キャプテン・シブレットは船長室で日課の航海日誌に記入を始めた。

古びた表紙の日誌帳の残りページは少ない。

恐らく、今日がこの日誌に書き込まれる最後の日だ。

明日にはスームスームに到着する。

ジュニパーベリー号が次の航海に出るのがいつかは決まっていなくても、陸に着けばあ

らゆる物資を補給できる。

この日誌帳も買い替え時だ。

シブレットの頭の中の買い物メモに、新しい日誌帳が加えられた。

ふと、シブレットが窓の外を覗くと、波の間に何かを発見した。

「漂流物か？」

窓に叩きつける雨水のせいで、はつきりと見えない。

物体は徐々にジュニパー号に接近している。

シブレットは些細なことでも、航海日誌には余さず記入する。

今見えている光景に関しても、日誌に次々と記載していった。

「あれは……っ！」

シブレットが漂流物を純白のトロットビークルだと判断すると同時に、ジュニパーベリー号をかつて無いほどの衝撃が襲った。

「エルダー様」

「……どうした？」

「ジュニパーベリー号の被害状況の調査と報告の集計が終わりました」

「うむ、読め」

「はっ！ 船体の被害状況は大破。ジュニパーベリー号はウミネコ海岸に座礁した模様です」

「……………」

「続けます。一部の乗組員がビークルや小型艇で脱出。人数は総乗組員の半数ほどと見られる。スームスーム方面に向かったとのことですよ」

エルダーの何人たりとも逃さない狩人のような目線が報告者の男を捉える。

「……………悪い知らせは？」

「は、はっ！ 少年が一名、海を漂流しウミネコ海岸に漂着した模様とのことですよ」

「何っ!？」

「ひっ」

突如、激昂して身を乗り出すエルダーに、報告者は書類をばら撒いて腰を抜かした。

「もういい、下がれ」

「はっ……………」

男が退出するのを遠ざかる足音で確認し、エルダーは頭を抱えた。

「しくじったか……………くっ、【ホワイトレクイエム】は荒れた海上での無理な運用のせいで故障中だ。何か、手立てを……………」

第2章 本編

26話 伝説の幕開け

ライブ当日の朝はトラブル続きだった。

コニーがウミネコ海岸に薬草を採りに行くと言ったのはまだいい。

ローズマリーの具合が芳しくないこととともに、前日の夜には楽団メンバーに伝えられていた。

「気を付けてね。ボーカルマイクのセットくらいなら、こつちでやっておくから大丈夫よ」

「うん。ありがとう、セイボリー」

しかし、問題は続けざまに発生する。

「ああ！ ドラムが！」

マジヨラムのドラムにもトラブルだ。

フロアタムの足がポツキリと折れ、スネアのスナッピーは断裂、タムホルダーも一部の部品が無くなっている。

「うわあ、何これ!? どうしたらドラムがこんなことに……」

「……汽車の貨物室での固定が悪かったな」

俺はバジルの疑問に自分の予想を伝えた。

「どうやらマジヨラムも同じ見解のようだ。」

「これは部品をはめ直せば修理できる状態じゃないな。ナツメツグ博士にでも診てもらいたいところだけど……」

さすがにそれは時間が足りなさすぎる。

原作と違いピジョン牧場駅が既に開通しているので、今日中に行って帰ってくるというだけなら今から出ても問題ない距離だが、ドラムの修理を待つてなおかつ夕方のリハーサルまでに戻るのはキツイ。

どこか近くに修理を請け負ってくれる店があればいいのだが……。

「ハヤブサジユウタン工場に行ってくるよ。あそこの親父さんは機械いじりが得意で、簡単な部品作りや溶接ならできると思うんだ。ジユウタン工場ならピジョン牧場より近いしね」

「どうやらここで原作と繋がるようだ。」

コニーはマジヨラムのドラムの梱包を手伝っているのはバスに間に合わないの、先にウミネコ海岸方面に出かけて行った。

「おい！ グレイ！」

路地裏から鋭く名前を呼ばれて、俺はつい拳銃に手をやりながら慌てて振り返った。ネフロの建物と建物の間。

最早、道と言つていいのかすらわからない場所に、一つの人影があった。

見覚えの無い男が……よく見ると覚えがある。

髭面に鋭い目は服装が違つても変わらない。

「(ジンジャー！ こんなところで何を……)」

「(どういうことだ!? エルダーのビークルを見たぞ)」

ジンジャーは俺を遮つて質問してきた。

そういえば、エルダーが来ていることは話してなかったな。

スマホのラインどころか携帯のメールすら無いので不便だ。

「(前に話した少年が今日現れるはずです。エルダーは彼と恨みのある少年の友人が乗った船を襲撃したのでしょうか)」

「(……)」

「(ジンジャー。俺はエルダーの動向を追います。次に接触する相手はわかっているの
で)」

エルダーはジュニパーベリー号を「ホワイトトレクイエム」で襲撃した後、ダンディリオンの姿でフェンネルのビークル「ブルー・サンダー」を借りて、長距離キャノンアームでウミネコ海岸の崖上の岩を撃ち落として主人公を襲撃する。

だから、次に接触があるのはフェンネルだ。

「(何故、わかる?)」

「(ジンジャー、「ホワイトトレクイエム」はどんな具合でしたか?)」

質問を質問で返した俺にジンジャーは一瞬訝しげな顔をするが、すぐに真剣にエルダーのビークルの様子を思い出し教えてくれる。

「(故障しているようだった。恐らく、完全な耐水仕様でないのに、ボディ全体が水を被るような運用をしたのだろう)」

なるほど、フェンネルのビークルを借りたのはそういう理由だったのか。

確かに、水に浸かって故障中であれば、わざわざ人のビークルを使った理由も頷ける。

俺は簡単にエルダーの次の行動をジンジャーに伝えた。

「(敵の動きはわかっています。エルダーは明日の朝の列車でハッピーガーランドへ帰るでしょう。ジンジャーはそれまで姿を見られないように気を付けてください)」

「(……わかった)」

マジヨラムが会場運営の人たちと軽く言葉を交わし、ジユウタン工場行き準備を整えている間、俺も野暮用があるということにして会場の中心から離れていた。

そろそろ、色々と動き出す連中が居るだろう。

案の定、まずはセイボリーがバジルを呼びつけていた。

「ねえ、バジル。ちよつとお願いがあるんだけど……」

「なにになに？ セイボリーのお願いなら何だつて聞くよ！」

軽く承諾してしまう緑のチビ眼鏡。

相変わらずだ。

「マジヨラムがハヤブサジユウタン工場に行くつて言っていたでしょ。あなたも彼について行ってほしいのよ」

「構わないけど、何で？」

「あのジユウタン工場の裏なんだけど、キラエエレファント団のアジトになっているらしいの。マジヨラム一人だと危ないし……頼りになるバジルがついていってくれれば安心だと思って」

「うん、わかった。僕に任せて」

「お願いね。あ、キラエエレファント団のアジトは工場裏の梯子を下りたところから入るらしいの。もし、できたら……そつちの様子も調べてみてほしいなあ」

「おーけーおーけー。僕にドンと任せてくれよ」
手玉に取られるバジルだった。

やはり、初対面のバジルがキラエエレファント団を探っているのは、エンディング後のバジルの話通りセイボリーの差し金なのか。

「あ、マジヨラム。僕もついていくから乗せて〜」

マジヨラムがジユウタン工場に向かったタイミングで、一旦俺は駅前広場の近くまで戻った。

そろそろダンデイリオンがフェンネルからビークルを借りるために接触するはずだ。
フェンネルは……居たな。

駅前広場の隅で楽器の手入れをしている。

ポツチ飯を連想して物悲しくなりそうな光景だが、フェンネルだと様になるな。

イケメンは逝つてよし。

「さて、どこから監視するか……」

辺りを見回すが、身を隠すのにちょうどいい路地など都合よく見つからない。

ジンジャーに裏道を聞いておけばよかった。

「んっ」

ふと、教会と博物館の間くらの場所に、イーゼルだか画架だかいうスタンドに絵を固定し、真剣な表情で筆を握っている青年を見つけた。

ネフロに本格的な画家とは珍しいが、あのベレー帽はゲームでも見た覚えがある。貧しい画家のポールだ。

彼のサブイベントは原作でも世話になった。

ポールの物語は、ゲーム序盤のネフロから始まり、主人公がハッピーガーランドに到着した後も続く、サブイベントの中でもかなりの長編だ。

ネフロで売れない絵描きをやっていた時代に主人公が安い絵を購入することで始まり、攻略を進めるとガーランド大学の美術部の教授に就任し、贋作疑惑で解任され、最後にはもう一度絵を描こうとして訪れた砂漠で息絶えてしまう。

なかなか報われないストーリーだ。

しかし、ポールのサブイベントはゲームでは絶対にこなしておきたい話の一つだ。

ポールがガーランド大学の教授に就任したタイミングと、贋作疑惑が晴れた死後は、彼の作品全ての価格が高騰するのだ。

タイミングよく売れば、その価値は数十万URになる。

原作ではこのサブイベント以上にまとまった金を稼げるチャンスは無い。

まあ、今の俺にとって金はそれほど問題じゃないから、転売目的で買う必要は無いん

だけだな。

しかし、原作の知識がある状態で動ける俺なら、ポールの運命を変えられるかもしれない。

「……あつ、すみません。ここ、邪魔ですか？」

ついポールの様子を眺めていたが、向こうも俺の視線に気付いたようだ。

「ああ、いや。そんなことはない。気を散らして悪かったね」

俺は思わずポールの前を立ち去ろうとしたが、すぐに彼の事情を思い出して足を止めた。

「君は、画家なのかい？」

「はい。……とは言っても、全然売れないんですけどね」

やはりネフロにポールの絵を購入する者は居ないようだ。

原作でも彼はネフロではまったく稼げず、日々の糧にも苦しむほどの生活を送っていた。

確かに、よく見るとポールの頬はこけており、明らかにやつれている。

これはどう見ても食えなくて痩せているパターンだ。

「絵描きになるって言って、実家を飛び出したのはいいんですが……」

ポールの実家は原作だとハッピーガーランドから行けるイワツバメの滝の農家だったな。

現実ではハッピーガーランドの中心部から結構な距離があったので、足を延ばしたことは無かった。

「別の町でインスピレーションを得れば、もつといい絵が描けると思って、ネフロまで来たんです。でも、売上は見ての通りで……つて、すみません。自分のことばかり。僕はポールつて言います。あなたは？」

「俺はグレイ。ナツメツグ博士の助手をしている。一応トロット楽団のエキストラもやっついて、今日はそのライブでネフロに来ているんだ」

「ナツメツグ博士の!?! それにトロット楽団!?! はあく、凄いですね、グレイさんつて……」

俺はポールのキャンバスを覗き込んだ。

風景画か。

ネフロの街並みがリアルに描かれている。

「これ、売ってもらえるかな?」

「つ! 買っていただけるんですか!?! あ、でもこれは、まだ完成してなくて……」

確かに、キャンバスの絵にはよく見ると空白の箇所がある。

未完成なら仕方ない。

今は諦めよう。

「じゃあ完成するまで待とう。他の絵は？」

「すみません……キャンバスや絵の具も買えなくて、自画像しか……」

ポールは横の壁に立てかけてあつた絵を示した。

「そいつを買おう」

「あ、ありがとうございます！ 15URで「1000URでどうだ？」っ！」

ポールは俺が提示した金額に言葉を失っている。

正直、俺に美術品のことはわからないが、少なくとも150円なんて価値じゃないことくらいはわかる。

まあ、いきなり何百万もの大金を持たされても困るだろうし、俺から提示するならこの辺が妥当な値段ではないかね。

「そっちの風景画も予約しておこう。1万URくらいかな？」

「そ、そんな大金……」

「今のポールが無名であることなども考慮しての値段だ。最低でもそれだけの価値があると俺は判断した」

俺は硬直するポールを尻目に、彼の手に11枚の銀貨を握らせた。

「明日の朝にネフロ駅から発つから、風景画の方はそれまでに持ってきてくれ。ああ、完成しなかったら、受け渡しはまた今度でもいい。まずは、その金で少しまともな飯を食え」

「……はい、ありがとうございます！」

ポールと会話しつつも何気なくフェンネルの様子を窺っていると、ついにダンディロンが現れた。

エルダー衣装ではなく普段のダンディロンだ。

どうやら俺は路地の入り口で絵描きとの会話に夢中で、向こうには気付いていないと思っっているようだ。

ポールの存在に助けられたな。

俺はポールの仕事を見ているふりをしながら、フェンネルとダンディロンの会話に聞き耳を立てた。

「(フェンネル)」

「(ん？ ダンディロンじゃないか。何故、ネフロに……ああ、ライブを聞きにきたのか)」

「(いや、ちょっと野暮用があつてね。それで、フェンネルに一つ頼みがあるんだけど

……」

「何だ？」

「君のビークルを貸してほしいんだ」

「ビークル？ 『ブルー・サンダー』をか？」

「ああ」

フェンネルは訝しげな表情だったが、ポケットからキーを取り出した。

「ほらよ。ライブまでには戻してくれよ」

「助かるよ。出先の用が済んだら、すぐに返すから」

ダンディリオンはフェンネルから「ブルー・サンダー」のキーを受け取ると、そそくさとその場を立ち去った。

「グレイさん、こちらになります」

「ああ、ありがとう」

俺は梱包されたボールの自画像を受け取りビークルに積み込むと、エンジンを起動して「ブルー・サンダー」に乗ったダンディリオンを尾行し始めた。

「さてと、薬草は……あれ？」

バスを降りてウミネコ海岸に足を踏み入れたコニーは、見慣れたはずの廃港の様子に違和感を覚えた。

スームスームが港町として栄え始めてからというもの、ウミネコ海岸は貿易拠点としての機能を失って久しい。

今ではコニーのように葉草を採りに訪れる人が散見されるくらいだ。

設備の撤去された船着場に砂浜のウミガメが唯一の住民である。

しかし、今日は妙に瓦礫や漂着物が多い。

これだけなら夕べの嵐の影響ということに納得できただろう。

しかし、沖を見れば木造の大型船が黒煙を上げて座礁している。

さすがに難破船は廃港とはいえ異質の存在だ。

そして、ついにコニーは最大の異変に気付いた。

「っ！ あの人、倒れてる!？」

コニーは砂浜に打ち上げられたと思わしき金髪の少年に駆け寄った。

「あの！ 大丈夫、ですか？」

コニーは少年を揺さぶろうとするが、ナツメツグ博士から聞いた医療の初歩の話を思い出し、強く揺するのを思い留まる。

コニーはしばしの躊躇の後、少年の肩を湿気の残る衣服越しに叩きながら、声を掛け

続けた。

少年は一見したところ死んでいるかのように身動き一つしないが、コニーは諦めない。
い。

しばらく呼びかけを続けると、ついに少年は目を細く開けた。

「うっ、まぶしい……」

「あ、気が付きました？」

27話 ストーリー裏

フエンネルの「ブルー・サンダー」に乗ったダンディリオンは、真つ直ぐにウミネコ海岸方面の街の出口へ向かった。

俺も自分の「ジャガーノート」を駆り、ダンディリオンと一定の距離を開けて追跡する。

ダンディリオンがネフロの街を出てシラサギ河の中流域に差し掛かったところで、俺は水路の淵からシラサギ河に飛び込んだ。

街中なら他の自動車やビークルも居るので俺が発見される可能性は低かったが、街を出ればビークルの数は極端に少なくなる。

真後ろから追跡などしたら、たとえ物陰に隠れながら移動したところで、エンジン音と足音で尾行がバレてしまう。

シラサギ河は街の近くでは水路が整備されており、橋の下や水門からは激しい水の音がするので俺のビークルも隠れやすい。

耐水仕様で良かったな、本当に。

やがてダンディリオンのビークルはジュウタン工場のあるハヤブサ台地に差し掛か

り、道を逸れて雑木林を進み始めた。

「……仕方ない」

ここからはビークルは使えない。

人工物の音などほとんど無い雑木林では、近くにビークルが居たら絶対に気付く。

俺は木の陰に「ジャガーノート」を隠してエンジンを切ると、スコップ付きのボルトアクシオンライフルを座席の後ろから取り出し、徒歩でダンディリオンを追った。

ビークルに搭乗せず生身で森を歩くのは久しぶりだ。

ピジョン牧場周辺の山でも、鹿などの臆病な動物に接近する際は、ビークルを降りて徒歩で狙撃地点まで移動することはあった。

しかし、大抵の場合はビークルで動物を探し回り、見つけたら徒歩で接近して撃つ、というパターンだ。

今回は失敗できない追跡なので、雑木林にビークルで踏み込むこと自体を控えた。

ここからウミネコ海岸の崖上まではそれなりに距離がある。

今回の追跡は少し長丁場になりそうだ。

木々の間に身を隠しつつ、しかし常に高所を取るよう移動する。

人間は得てして目線より高い位置には注意が向きにくいものだ。

途中、ダンディリオンはキラエレファント団の斥候と思わしき二台のビークルに遭遇した。

アームパーツを省略し、滑腔砲と簡素なシールドを装備した『ルースター』は、キラエレファント団が配備している標準的なビークルで、複雑な機構の省略により低コストでの大量生産を可能にしている。

原作では最初に登場する盗賊ビークルで、RPGに例えるならゴブリンのような存在だ。

はつきり言って戦闘能力はお察しである。

機動力も無ければ耐久力も低く、現実ではゲームのように砲撃がヒヨロヒヨロのヘナチヨコ弾ということは無いが、それでも戦闘用ビークルとしては本当に最低限の性能だろう。

大勢で迫られるとウザいが、数台程度なら高ランクバトラーにとっては羽虫同然の相手だ。

「ん？ おい、止まれ！」

キラエレファント団にあっさりと発見されたものの、ダンディリオンは「ブルー・サnder」をスラスターダッシュで木々の間に滑り込ませ、僅かな隙間から長距離キャノンアームを発砲し、一撃で『ルースター』を撃破した。

長距離キャノンアーム自体は「ホワイトレクイエム」も装備しているので、ダンディリオンが操作に慣れていたこともあるだろうが、それでも今の盗賊ピークルを一撃で仕留めた動きは見事だ。

「なっ!?!」

驚愕の表情を顔にへばりつけているもう一人のキラエエレファント団員も、ダンディリオンが続げざまに放ったキャノンのロケット弾で、ピークルを木端微塵に砕かれ火に包まれた。

破片で体の数十か所を貫かれ、火だるまになった盗賊の生存は絶望的だ。

原作ではこのようなエグい描写は無いが、大口径の火砲をまともに食らえば、このようなのも当然だろう。

あらためて、トロットピークルを用いた戦いは、常に命がけの攻防であることを再認識させられた。

やがて、ダンディリオンのピークルはウミネコ海岸の崖の上に到達し、ゆっくりと木々の間から岸壁に顔を出す。

「ふ……間に合ったな」

俺も近くの木の影から「ブルー・サンダー」のкокピット上のダンディリオンにライフルの狙いを定めながら、ウミネコ海岸の様子を確認した。

海岸には二つの人影が見える。

一人は俺も先ほどまで顔を会わせていたコニーで、もう一人も原作で見た覚えのある金髪の少年だ。

彼がゲーム本編の主人公だ。

主人公が海岸に打ち上げられ、コニーに助け起こされたところでゲームは始まる。

主人公の設定としては、チコリの仇としてダンディリオンに狙われるマーシユが留学先で知り合った友人だ。

彼は船が撃沈されたときのシヨックで記憶を失くしているが、そんなことは知らないダンディリオンはこのウミネコ海岸で彼の排除を企むのだ。

しかし……。

「コニー……何故、ここに……？」

ダンディリオンはコニーがウミネコ海岸に来ていることを知らず、いざ主人公を始末する段になって、彼女の前で人を惨殺することを躊躇する。

さて、ここからが問題だ。

このまま原作通り、岸壁の岩を撃ち落として道を塞ぐだけならいい。

しかし、もしもダンディリオンが現実では主人公を本気で排除しにかかるのなら、こ

の場で狙撃することも選択肢に入れなければならない。

原作のルートを通りつつブラッディマンティスを壊滅させることはできなくなるが、背に腹は代えられない。

強力な戦力でノーマルルートでは心強い味方になる主人公を失うくらいなら、ここでダンディリオンを殺して色々と運命を狂わせてしまうのも致し方ないことだ。

「くっ！ あいつ……」

ダンディリオンは慌てて長距離キヤノンアームの引き金を引いた。

海岸を見ると、主人公はコニーが薬草を探る様子をしばらく眺めていたが、どうやら何の気なしに海岸の入り口に足を進めたようだ。

それを見たダンディリオンは焦って発砲してしまったようだ。

キヤノンのミサイル砲弾が着弾した岸壁の岩が、ゆつくりと崩れ落ちて海岸から戻る道を塞ぐ。

「……くっ、撤退だ」

ダンディリオンは踵を返して岸壁からビークルを引いた。

俺は海岸の主人公とコニーの無事を確認すると、ライフルを下ろした。どうやら、ここは原作通りの展開になるようだな。

海岸からネフロ方面に戻る道を塞がれたコニーは、主人公と協力して脱出する方法を探す。

古びた漁師小屋の影に、ジュニパーベリー号から投げ出されたオンボロビークルを見つければ、主人公の操縦で岩をどかして脱出するのだ。

先ほど確認したところ、ゲームで見た通りの濃黄色のビークルはきちんとなったので問題ないだろう。

主人公はきちんとなんを送る……よな？

ジュウタン工場への道で絡まれる、キラエエレファント団の『ルースター』との戦闘は、心配といえば心配だ。

何せ初めて扱うビークルで盗賊団との戦闘……いや、主人公が記憶を失っていることを考えれば、ジュニパーベリー号での航海中にビークルの操縦と戦闘の経験があったのかもかもしれないな。

しかし、主人公が原作通り盗賊に勝利できる保証は無い。

ダンディリオンの監視と、どちらを優先するべきだろうか？

正直、主人公が殺されなかつた段階で、ダンディリオンの追跡は切り上げてもいいわけだが……できればゲームでは描かれていなかったダンディリオンの動向を追いたい。

「くそっ、くそお！ 僕の、計画ミスだ……」

ダンディリオンは悪態をつきながらも、雑木林の来た道を猛スピードで戻って行く。ちよつと徒歩で追うのはキツイな。

平地と違いまっすぐにスピードの出せない場所とはいえ、人間の足に比べればビークルは格段に早い。

林の入り口に停めてある「ジャガーノート」に着く前までに振り切られてしまうかもしれない。

しかし、前方に思わぬ来客が現れたことで、俺の心配は霧散した。

「見つけたぞー！」

「やっぱり来やがった。うちの奴がやられた場所から海岸にビークルが向かった形跡があつたから、いつかは戻ってくると思つてたぜ」

「よくも俺の仲間を……」

待ち構えていたのはキラエエレファント団だ。

先ほどダンディリオンに撃破された斥候の二人の残骸を見つけたようで、仇が戻ってくるのを待っていたようだ。

「ん？ その青いビークル……まさか！　　『青い稲妻』のフェンネルか!!」

「なっ!?　高ランクバトラーだぞ」

「い、いや、待て！ フェンネルは黒髪にサングラスをかけた男だぞ。金髪じゃない」
「え？ じゃあ、あの男は……？」

ダンディリオンは黙ってビークルを進めて通り過ぎようとした。

「なっ！ 待て、ため「邪魔を……」あ？」

ダンディリオンがゆっくりと振り向いた。

「邪魔をするなあ！」

突如、ダンディリオンは「ブルー・サンダー」の左アームを振り回し、目の前の『ワイルド・ルースター』を投げ飛ばす。

キラエレファント団の戦闘用ビークル『ワイルド・ルースター』は通常仕様の『ルースター』の改良型で、スパイクつきのシールドとミサイル弾を放つ長砲身を装備し、本体の耐久力も僅かに高い。

原作では、普段はフィールドで湧かないが、イベントでは何度か戦う羽目になる。

言わば上位種や亜種のような扱いだ。

ダンディリオンを待ち受けていた三人のうちの一人は、この『ワイルド・ルースター』を駆るエリートのようなのだ。

しかし、そんな高性能の機体を与えられる団員でも、ダンディリオンの前には無力だった。

流れるような動作で横にダッシュした「ブルー・サンダー」は、走り抜けざまに一台の『ルースター』を長距離キャノンアームで撃ち抜く。

「ひっ」

続いて、硬直した盗賊の乗る『ルースター』に接近し、左のノーマルアームを振りかぶった。

そのまま下に叩きつけるが、正面から滅茶苦茶に殴っただけなので、打撃はシールドの一部を吹き飛ばしただけで終わった。

「ちっ！ さっさと死ねよ！ 僕の、邪魔をするなっって言ってるんだよ！」

ダンディリオンは続けざまに『ルースター』のコクピットを殴り、ついにアームは盗賊の身体を捉えミンチにした。

「くそが……死ねえ！」

苛立ちで冷静さを失っていたダンディリオンだが、復帰した『ワイルド・ルースター』がミサイル弾を放つと瞬時に反応した。

ダンディリオンのハンドルさばきで急激に向きを変えた「ブルー・サンダー」は、長距離キャノンアームの銃身を流すように振ってミサイル弾を撃ち出す。

交差した二つのミサイル弾は、空中で正面から衝突して爆散した。

「なっ！」

間髪入れずにダンディリオンが放った二発目のキャノンで、『ワイルド・ルースター』も爆炎に包まれて葬られた。

「はあ……まったく、クズどもが……」

暴れたことで少し冷静さを取り戻したダンディリオンは、キラエエレファント団員の死体に一瞥をくれると、今度は落ち着いてピークルを発進させた。

俺もダンディリオンがキラエエレファント団と小競り合いをしている間に、どうにか距離を詰めて高所を確保した。

あとはこのままフェンネルにピークルを返して、明日の朝にはエルダー衣装でトロット楽団の面々と同じ列車に乗り、何食わぬ顔でハッピーガーランドに戻るであろう。それにしても驚きだ。

まさか主人公がネフロの入り口に来るまでの間に、裏でこのような出来事が起こっていたとは。

原作では、こちら辺の事情が聴けるのはエンディング後で、なおかつダンディリオンではなくフェンネル視点の情報だけだからな。

「さて……このまま一旦『ジャガーノート』を……ん？ あれは……」

何気なくハヤブサジュウタン工場の方を向いた俺の目には、シラサギ河下流域からハ

ヤブサ台地へと至る坂道が映った。

そこに居たのは、紛れもなく砂浜に打ち捨てられていた主人公のピークルだ。

そして、俺の目が確かなら、今まさに主人公は最初の敵であるキラエエレファント団の『ルースター』を撃破したところだ。

ライフルのスコープで確認すると、スクラップと化した『ルースター』から盗賊が這い出て、ハヤブサ台地の方へ逃げていくのが見える。

「どうやら、杞憂だったようだな」

主人公の強さは本物のようだ。

さすがは主役補正だ。

援護の必要が無かったことに安堵しながら、俺は雑木林を脱出するダンディリオンを追いかけ、木陰に隠した「ジャガーノート」に飛び乗った。

28話 ドン・エレファント戦

「何だつて？ 街外れに俺のビークルを置いただど？」

「ああ。すまない、フエンネル。ちよつと、急用が入ってしまった。とりあえず、街の西にある出張修理屋の近くの駐機場に停めてきた」

ネフロに到着したダンディリオンは、街の外にビークルを停めると、駅前広場でフエンネルにキーを返して報告した。

ここから街の外までは徒歩だとそれなりに時間が掛かる。

フエンネルにしても迷惑な話だろう。

「それじゃあ、僕は行くよ。フエンネル、今日は色々と面倒をかけて悪かった。この埋め合わせは必ずするから」

立ち去るダンディリオンにフエンネルはしばらく首をかしげていたが、やがて立ち上がってギターをケースに片づけると、街の外に向かって歩き出した。

「……はあ。仕方ねえ」

フエンネルが出掛けるのを確認した俺は、すぐに「ジャガーノート」を駆ってネフロの街を飛び出した。

ダンディリオンをこれ以上追うのは危険だ。

これからしばらくはトロット楽団の面々から身を隠すだろうし、その間にブラッディマンティスの連中と接触するのであれば、俺が鉢合わせた場合は確実に戦闘になる。

相手が多ければ当然ながら俺の命の保証は無いし、何よりトロット楽団のライブを聞きに大勢の人が集まっている今のネフロで総力戦の衝突などしたら、巻き込まれて犠牲になる人間は相当な数に上ることだろう。

ブラッディマンティスはそれだけ危険な相手だ。

それに、そろそろ主人公たちと合流した方がよさそうだ。

この世界の事情は原作と完全に同じというわけではない。

もしかしたら、俺の介入が無ければ主人公が大事な戦いで敗北してしまうこともある。得る。

幸い、一戦目で雑魚に負けることは無かったが、ジュウタン工場でマジヨラムとバジルに会った主人公とコニーは、ネフロに向かう途中でとんでもない敵と相對することになるのだ。

どこのどいつかと言えば、キラーエレファント団の巨大移動要塞『ドン・エレファン

ト』だ。

原作では大型の割に大した脅威でもなく、攻略法さえ分かっていたらノーダメージで一方的に撃破することもできる相手だ。

しかし、現実ではそう簡単に事は運ばないだろう。

小規模勢力とはいえ、荒事に慣れている盗賊団の新兵器が相手だ。

相応の苦戦をするはずだ。

案の定、シラサギ河の中流域に差し掛かると、大砲の連続発射音とともに重厚な振動と地響きを感じた。

既に『ドン・エレファント』は出撃しているようだ。

急がなくては……。

シラサギ河中流域の側道を進み、ハヤブサ台地の入り口あたりに差し掛かると『ドン・エレファント』の巨体が目に入った。

どうやらジュウタン工場の下のシラサギ河へと至る水門から出てきたらしく、一番デカイ鉄格子が開いている。

主人公たちは……居た。

遮蔽物を使って『ドン・エレファント』の砲撃をやり過ぎしながら、バジルが同乗す

るマジヨラムのビークル〔イエローベア〕は時折前面に出て防御を、コニーが助手席に乗る主人公の濃黄色のビークルは砲弾アームを放っている。

いいフォーメーションだが、どうやら劣勢のようだ。

それも仕方ないことだろう。

原作では『ドン・エレファント』は最初のボスで、耐久力もそれほど高くない、言わばボス戦のチュートリアルだ。

しかし、現実では盗賊団の巨大ビークルの脅威はそんなものではない。

さらに、遭遇したのは決して戦闘に特化しているわけではないマジヨラムのビークルと、野晒しになっていた主人公のオンボロビークル。

汎用ビークルがベースでも、俺の〔ジャガーノート〕レベルの武装をしていれば互角以上の戦いができるが、あの二人の装備ではまず無理な話だ。

主人公のビークルはソードアームと砲弾アームを装備しているようだが、さすがに序盤から怪物じみた強さを発揮しているようなことはない。

「バニラ！ どうにかなりそうかい!？」

「ダメだ！ 全然、効いてる様子が無い!」

マジヨラムの問いかけに返答しながら主人公の少年は砲弾アームを撃つが『ドン・エレファント』の固い装甲に弾かれ、再び砲撃の嵐を受ける。

主人公は何とか岩の影に退避したが、着弾した場所から飛んだ破片が、ピークルのボディに傷をつける。

「コニー！ 大丈夫!？」

「う、うん。何とか。でも、どうすれば……」

これは、放置するわけにはいかないな。

俺は『ジャガーノート』の出力を利用して崖をよじ登り、高台を確保すると『ドン・エレファント』の甲板に向かって一気に飛び降りた。

そのまま空中でチェーリングガンアームの狙いをつけ、砲台の下あたりに次々と銃弾を撃ち込む。

砲塔の内側の弾薬に命中したようで、俺が狙った砲台は閃光とともに爆散した。

「な、何だ!？」

落下してきた俺のピークルに気付いた盗賊がこちらを向くが、俺はその男がしがみ付いている座席に向かって強化ブレードアームを振るう。

「ぎゅ……」

鮮血が舞い上がり、無防備にも体を晒していた盗賊は真つ二つになった。

ピークルの武装による攻防は、言わば重機同士のぶつかり合いだ。

そんな用途に用いられる近接武器の直撃は、到底人間が耐えられるものではない。座席ごとブレードに叩き切られた男が絶命するとともに、『ドン・エレファント』の動きが一瞬だけ停止した。

どうやら俺が仕留めた男の担当は、駆動系の一部のようだ。

残った連中が体勢を立て直そうとするが、巨大ビークルの甲板はバランス悪く傾いている。

「マジヨラム！ 一旦離れろ！」

「グレイ！ 来てくれたんだね！」

「助かった〜」

「バナラ！ 彼は味方よ！」

マジヨラムたちが茫然としていた主人公に俺が知り合いだと伝え、二台のビークルは『ドン・エレファント』から離脱していった。

「ありがとう、助かったよ」

ビークルの一部が『ドン・エレファント』の砲撃で破壊された濃黄色のビークルから、主人公が俺に向かって礼を言った。

俺は金髪の少年に頷き返し、再び『ドン・エレファント』の中心に向き直る。

「くそっ！ 何なんだよ……。『ドン・エレファント』の試運転のはずが、何だつてこんな……」

「泣き言を言うな！ そのための武装だろうが！」

甲板に近距離用の銃座が向けられ、俺の「ジャガーノート」を小口径の砲弾が襲うが、俺は甲板上の起伏を利用してやり過ぎた。

なるほど、ここでの『ドン・エレファント』との遭遇はテスト走行だったか。

キラールエレファント団の『ドン・エレファント』は兵器としての運用を狙ったビークルではない。

ゲームの攻略を進めると明らかに彼らの『夢』を実現するための機械なわけだが……まあ、実際に高い戦闘能力を有しネフロや近隣住民の脅威となることに違いはない。

残念だが、『ドン・エレファント』はここで破壊させてもらう。

俺は砲台の周辺の予備弾薬庫と思わしき場所にチェインガンを撃ち込む。

完全な戦闘用のビークルであれば、弱点となる火薬庫の場所を晒すことなどあり得ないので、これも本来の用途から出来たスキなのだろう。

「ぐわっ！」

「あいつ、弾薬庫を……」

甲板や装甲が次々吹き飛び、巨大ビークルの内部が剥き出しになる。

奥に盗賊が見えたら、さらに容赦なくチェーンガンを撃ち込んでくと、今までとは比べ物にならない一際大きい爆発が起こった。

凄まじい衝撃に俺のビークルもバランスを崩して甲板から滑り落ちる。

「おっとー！」

どうにか体勢を立て直し、レッグパーツのサスペンションで衝撃を殺して着地した。

顔を上げて『ドン・エレフアント』の様子を見ると、どうやら機関部で爆発が起こったようで、駆動の制御を完全に失っている。

燃料にも引火したらしく、火だるまになった盗賊が次々と『ドン・エレフアント』から脱出して河に飛び込んでいる。

そろそろこのデカブツもお終いだな。

「つらあー！」

ダッシュ移動で「ジャガーノート」を『ドン・エレフアント』の脚部に滑り込ませた俺は、その勢いのまま強化ブレードアームを振り抜く。

的確に巨大な関節の間を捉えた太刀筋は、それ自体が汎用ビークルほどの太さを持つ脚部を分断した。

ただでさえバランスの悪い『ドン・エレフアント』は、脚を一本失っただけでも簡単

に崩れ落ちた。

重厚な落下音とともに水飛沫が飛び散る。

数人の盗賊が残骸の下敷きになったが構うことは無い。

高出力で巨体を支える『ドン・エレファント』は、濃密な排気ガスを吐き出しながらどうにか起き上がって体勢を立て直そうとするが、さすがに損傷が激しいらしく首を垂れるように再び崩れ落ちた。

「終わりだー！」

最後に俺のブレードが頭部を模したパーツを胴体部から斬り落とし、燃料に引火した火が巨大要塞を包んだところで『ドン・エレファント』は完全に活動を停止した。

29話 ネフロに帰還

「よし、これでいいだろう。あとはネフロの修理工場にでも行って、燃料補給ついでに細かく診てもらおうといい」

「ありがとう」

俺はバニラのオンボロビークルに応急処置を施し、最低限の修理を済ませた。

ナツメツグ博士の弟子としては、この程度では恥さらしもいいところかもしれないが、俺のビークル整備や工作の才能は、博士曰く中の上程度なのだからあまり期待しないでもいい。

まあ、この世界で生き抜くためには、射撃とビークルの扱いの才能があっただけでも感謝すべきだな。

「それじゃあ行くこうか」

マジヨラムの声掛けで、三台のビークルはネフロの街に向かって、再び歩き出した。

主人公の名前はバニラビーンズ。

ゲームでのデフォルト名と同じだった。

開発やユーザーからの愛称はバニラで、この世界でも皆は彼のことをバニラと呼んでいる。

先ほど、攻撃を担当していたことで損傷を受けたバニラのピークルを修理する際に、彼の紹介と事情はあらかた聞き終えた。

やはり、原作と同じく記憶を失くしており、ウミネコ海岸に座礁していたジュニパーベリー号という大型帆船に乗っていたのかもしれない、とのことだ。

物語の主人公だけあって、彼の活躍はストーリーの核を担う重要なものだ。

バニラがノーマルルートへ進みトロット楽団メンバーと協力してブラッツダイヤモンドを倒すか、悪人ルートで俺たちと敵対する存在となるのかは重要だ。

俺としては、どうかノーマルルートの善人であるかはいわけた、

しかし、目的ははっきりしていても手段が確定しない。

何せ、バニラの奴は記憶を失くしている。

原作では、名前を変えられる主人公でありプレイヤーの分身という点、それに開発元であるアイレム特有の会話イベントにおける選択肢が膨大なこともあり、いわゆる無個性タイプの主人公だった。

正直、現実であつても思考や好みが読めない以上、バニラを確実にこちらに引き込む

手段が見つからない。

とりあえずは、俺が色々と便宜を図って世話を焼き、仲間意識や恩義で縛る。

あとは、ヒロインのコニーとくっ付けるように配慮するくらいしか、俺にできることは無いか。

「いや、それにしても……グレイが来てくれて助かったよ。あ、でも僕のビークルがあつたら、そんなの必要なかったけどね」

「ちよつと、バジル！ わざわざ助けに来てくれたグレイに失礼だよ。グレイ、本当にありがとうね」

バジルは相変わらずだな。

しかし、コニーはできればバナラに集中してくれた方がいい。

俺に感謝してくれるのも結構だが、彼女はバナラをたらし込む重要な役割を担っているのだ。

「ところで、グレイはどうして街の外に？」

マジヨラムが水を向けてきた。

「何だか嫌な予感がしたんでネフロから出てみたんだが……そうしたら巨大ビークルの音が聞こえてね。一応、ネフロとピジョン牧場周辺の盗賊討伐や治安維持には協力する立場をとってきたわけだし、マジヨラムたちがジユウタン工場に居るのは知っていたか

らさ。さすがにあんな化け物が出てくるとは思わなかったけど」

「そうだったんだ。おかげで本当に助かったよ。グレイが来てくれなかったら、どうなっていたことか……」

「気にすんなって。まあ、借りだと思ってくれるんなら、今日のセッティングは任せてもいいかい？ ネフロ警察にさっきのキラエレファント団の巨大ビークルのことを報告に行ってくるから」

「わかったよ。ステージの準備は任せておくれ。コニーもローズマリーさんのところに寄るでしょ。来るのはゆっくりで大丈夫だからね」

「うん。ありがとう、マジヨラム」

ネフロの街の入り口で、俺たちはフェンネルを見つけた。

どうやら、今「ブルー・サンダー」を取ってきたところのようだ。

「おい、フェンネル！」

マジヨラムが声を張り上げてフェンネルを呼び止める。

「おう、遅かったじゃないか」

「どこか出かけてたの？」

「まあな。それより、早く行くぞ」

フェンネルはさつきと街に向かってしまった。

「ああ」

マジヨラムは俺とバナラのピークルに向き直る。

「ほら、皆も行こう」

しかし、コニーは一瞬だけ顔に迷いを浮かべてから口を開いた。

「マジヨラム、グレイ。悪いけど、先に行つてて」

マジヨラムはバナラにピークルを止めさせたコニーに首をかしげるが、フェンネルが既に街に入っていく様子を見ると頷いた。

「わかったよ」

「ああ」

俺とマジヨラムはフェンネルの後を追ってピークルを進ませた。

コニーはフェンネルのピークルのことが気になるのだろう。

原作でも、バナラから聞いた「青い物体」が岩を撃ち落としたという話で、フェンネルの「ブルー・サンダー」に疑念を抱いた描写がある。

「(さつき、海辺で『青い物体がミサイルで岩を落とした』って……)」

後ろでコニーとバナラの会話が僅かに聞こえる。

フェンネルを疑うのは見当違いなのだが、今ここで真実を言うわけにもいかないか。

ダンディリオンがバナラを狙ってきたなど、なおさら信じ難い話だ。

「なあ、グレイ。さっき、慌てて街から飛び出していくお前の【ジャガーノート】を見た気がしたんだが……」

フェンネルが俺に疑問を投げかけてきた。

意外と目敏いな。

ダンディリオンの追跡が終わった直後とはいえ、フェンネルの前に出ていったわけではないぞ。

「ああ、嫌な予感がしてね。行つて正解だった。キラエエレファント団の巨大ビークルだったよ。まるで移動要塞だ」

俺はフェンネルに『ドン・エレファント』の話を一通り話して聞かせた。

「そうか……キラエエレファントの連中は、そんなもんを作ってたのか」

「あれは本当に危なかったな。グレイが来てくれて助かったよ」

「凄かったんだよ！ グレイがこう……ばんつ、つて飛び降りて、ズガガガ、つて撃ちまくつて、大型ビークルがドカンつ、つて木端微塵になったんだ」

バジルの擬音語ばかりの説明にフェンネルは呆れ顔だ。

「はあ、もういい。行くぞっ」

俺たちはフェンネルに続いてネフロの街の門を潜った。

ネフロ警察への『ドン・エレファント』の件の報告はすぐに終わった。

元々、ナツメツグ博士の部下として盗賊討伐でも活躍しており、警察からの信頼もある俺の言葉なのですぐに調査隊が組まれた。

取り立てて惜しい資料などは無かったので、『ドン・エレファント』と戦闘になった現場は適当に片付けてくれればいい。

まあ、結局のところ俺が報告したところで警察にできることというのはそのくらいで、特に話し合う必要のある事柄が無かったから、これだけ早く解放されたわけだな。

現代の日本なら、警察は被害者や目撃者も何らかの形で加害者に仕立て上げようとしてきてもおかしくはない。

今回の件は物騒な時代であることが珍しくいい方向に働いているわけだ。

期待以上に早く解放された俺は、駅前広場に向かいマジヨラムたちのセッティングを途中から手伝った。

とはいえ、会場の基礎は出来上がっているんで、あとは俺のビークルのバックパーツからステージを展開して楽器を用意するだけだ。

全ての準備が終わって、各自が自分の楽器を思い思いに調整しているとそこにコニーが戻って来た。

「ごめん！ 皆、お待たせ」

「お疲れさん。まだ合わせは始まらないから、しばらく休むといい」

俺はコニーにアウトドア用のコップを差し出した。

中身はジメット湿地奥のミツバチ園産の蜂蜜を使った蜂蜜水だ。

暖かくなってきたので、そろそろ冷たい飲み物で喉を潤したくなる季節だが、ライブ直前のボーカリストに冷水はよくない。

まあ、冷蔵庫自体がナツメツグ博士の工房に戻らないと無いし、この世界では水といえば湯冷ましか常温なので、コニーも特に飲みにくいという事は無いようだ。

俺がトロット楽団に入団してから、ハッピーガーランドのロブスター亭以外でライブをする際には、必ずこの常温の蜂蜜水を用意していた。

「うん。ありがとう、グレイ。あ、そうだ。バナラも後で聞きにくるって」

どうやらバナラとローズマリーたちの顔合わせは済んだようだ。

しばらくすると、マジヨラムがメンバー全員に声を掛ける。

「それじゃあ、そろそろ音合わせを始めようか。皆、準備はいいかい？」

メンバーはそれぞれのポジションについて、自分の楽器を用意し始めた。

俺も珍しくネクタイを締めて、ステージに立ちサックスをストラップに掛けた。

「始めよう。まずは『In Your Voice』から」

さて、ライブがキラーエレファント団の襲撃で台無しになるとわかつている俺としては微妙な気持ちなのだが、やるからには全力で演奏しないとならないな。

30話 野外ライブ襲撃

音合わせが終わったところには、日も完全に落ちていた。

いつもはガス灯が頼りなく辺りを照らす駅前広場だが、今日はステージのライトが遠くからでも見える眩い光を放っている。

観客もかなりの数が集まった。

野外ライブなので、バンドメンバーは全員ビークルのバックパーツから展開したステージの上だ。

視線が高いと集まった人数の凄まじさがよくわかる。

会場の収容人数ギリギリのようだな。

「うわあ、凄い人だね。何だか、ここ最近で一番の歓迎じゃないかな」

「ふふっ、バジルったら緊張しているの?」

「そ、そんなことないよ! セイボリーこそ、大丈夫かい?」

「ええ。気遣ってくれて、ありがとうね」

「い、いやあ……へへっ」

相変わらず手玉に取られる緑のちんちくりん。

いつもの光景だ。

「コニーの地元だからな。それに、グレイの存在も大きいだろう」

フェンネルの言葉で思い出したが、確かに俺もネフロにはよく買い出しに来ており、街の住人に顔を覚えられている。

原作よりも客の入りがいいのは、俺が原因でもあるのか。

ところで、コニーはといえば……。

「バニラ……来るかな……？」

彼女の視線は落ち着きなく客席の辺りを彷徨っている。

出会って間もないのにもう惚れたのかと思っただが、今はまだ少し気になる存在といったところか。

「さ、そろそろ開演だよ。皆、準備はいいね？」

マジヨラムの合図で、俺たちは各自ステージのポジションにつき、各々の楽器を手にした。

現代なら、アコースティックギターやウッドベースをジャズで使用するときですら、スピーカーへの出力は常識だが、この時代はアンプなどの出力機器が無いので、フェンネルのギターもバジルのウッドベースも直前のセッティングなど無い。

この広い会場で生音とマイクだけのライブなど、はつきり言って現代人の俺には物足

りないが、無い物ねだりをしたところで仕方ないだろう。

「みんなー！ 今日私は私たちの演奏を聴きに来てくれて、ありがとう！」

ボーカルのコニーが観客に声を掛けると、ライブ会場は一斉に湧いて、歓声が轟いた。

ステージの下を見ると、ちょうど会場に走ってきた金髪の少年が目に入る。

バナラもぎりぎり間に合ったようだ。

「それでは聴いてください」

演奏が始まり、俺もサックスのリードに口を付けた。

一曲目の『In Your Voice』の演奏が中盤に差し掛かったとき、俺の目はネフロ南部から接近するビークルを捉えた。

キラーエレファント団の『ワールド・ルースター』を中心とした編隊だ。

ネフロ警察には『ドン・エレファント』の件を報告して、最近になって活発に動いているキラーエレファント団への警戒を強めるように進言したが、やはり街への侵入と襲撃は防げなかったか。

原作でも、ここで奴らの襲撃がありトロット楽団と協力して撃退することになる。

「(グレイ！)」

集中が乱れたことで僅かにリズムが狂った俺を、フェンネルが小声で注意する。

しかし、キラールエレファント団の攻撃が今にも始まる可能性がある以上、俺は演奏に集中することはできなかつた。

俺は敵が展開している場所に視線を巡らせ、盗賊ビークルの数を探る。

駅前広場を包囲するように展開しているのは約十台。

警察や街の住民の目を潜り抜けて潜入してきたにしては大した数だが、大規模な街の襲撃と考えれば戦力が少なすぎるな。

この段になると、フェンネルも街に出現した通常仕様とは違うビークルの存在に気付く。

そして次の瞬間、ネフロの街に轟いた砲撃音が闇を引き裂いた。

一斉に発射されたキラールエレファント団のビークルによる砲弾は、ネフロの街のあらゆる建造物に着弾して瓦礫の雨を降らす。

そこかしこで上がる悲鳴に子どももの泣き声。

街は一瞬で阿鼻叫喚の地獄と化した。

「きゃあああああ！」

「助けてくれええ！」

「キラールエレファントだー！」

「うわああああー！」

「うえーん！」

俺がステージから飛び降りて「ジャガーノート」を起動した。

トロット楽団のステージ付近にも、敵の砲弾やミサイルは飛んできている。

何発かは駅前広場に着弾した。

俺に続いてフェンネルも「ブルー・サンダー」に搭乗してバックパーツのステージを収納する。

真つ先に戦闘準備を整えた俺は、再び群衆に向けて砲台を発砲しようとしていた『ワイルド・ルースター』に向けて、チエーンガンを連射した。

「げあつー！」

マズルフラッシュユがネフロの街に煌めき、付近一帯ごと掃射された盗賊ビークルは機体を貫かれて沈黙した。

どうやらコクピットの盗賊ごと撃ち抜いたようだ。

距離が開いているので、一発も命中しないのではないかと心配だったが、俺の射撃センスも捨てたものではなかったな。

「グレイ、正面は任せたぞ！ マジヨラムは防御を固めろ！ バジルは左を頼む！ セイボリーはコニーを連れて後ろへ！ くそつ、奴らどうやって入ってきやがった！」

言われるまでもない。

俺は長距離キヤノンアームを構えるフェンネルに領き返し、スラスターを起動して飛び出した。

敵の数は最初に撃ってきた連中だけで全てじゃない。

まずは正面から押し寄せてくる連中を食い止めて、最終的には本隊を叩かなければ。

しかし、コニーはフェンネルのビークルの前に立ち塞がった。

「フェンネル、やめて！　ここで戦ったら街が壊れちゃうよ」

「何を言ってる！　奴らを放っておいたら、それこそ街が潰れるぞー！」

まあ、フェンネルが正論だな。

俺は後ろに聞こえる声を無視して、正面からブースト装置を使って突っ込んできた『ワイルド・ルースター』に強化ブレードアームの一振りをくれてやる。

シールドごとエンジンを切り裂かれて破壊された『ワイルド・ルースター』は崩れ落ち、燃料に火花が引火したのか火だるまになった。

視界の隅にバニラがコニーに駆け寄るのが見える。

次の瞬間、どこからか飛んで来たミサイル弾がバジルの乗る『グリーン・リーフ』に向かった。

「まずい！」

そういえば、バジルはこのキラエルフアント団の襲撃でビークルをぶつ壊されて負傷するのだった。

セイボリーに手玉に取られる様子を見て呆れてばかりで、そのことをすっかりと忘れていた。

原作では、バジルは怪我をするだけで死にはしないが、現実では何が起こるかわからない。

「バジル！ 伏せろ！」

俺はペダルを踏みこんで空中に躍り出ると、チェーングンをバジルの「グリーン・リーフ」すれすれの位置に向かって連射した。

撃ち落とせる確率は低いが、やらないよりはマシだ。

本当に運のいいことに、俺の放った銃弾は『ワイルド・ルースター』のミサイル弾と衝突し、バジルに向かったミサイルは空中で爆散した。

「うわあ！」

「「バジル！」」

バナラとコニーは「グリーン・リーフ」に駆け寄る。

「バジル、大丈夫か!？」

「マジヨラム！ フォーメーションを崩すな！」

「……わかったよ」

フェンネルは隙を見せずに長距離キャノンアームの狙いを定め、連続で四発ほど発砲する。

熱源を捉えて飛翔するキャノンのミサイル弾が飛び出し、キラエエレファント団のビークルが続げざまに撃破された。

「だ、大丈夫……。グレイ、ありがとう」

どうやらバジルは原作のように大怪我をすることは無かったようだ。

「グリーン・リーフ」を見ると破片にボディを貫かれ、かなりの損傷を受けてはいるが、完全な大破には至っていない。

まあ、ミサイルの直撃を食らって吹き飛ばされた原作に比べれば、ダメージは明らかに少ないだろう。

しかし、レッグパーツとの接合部などには相当な衝撃を受けたようで、バジルのビークルは脚から崩れ落ちてしまった。

「あ、あれ？ ……駄目だ、ちよつと限界みたい」

まあ、バジルのビークルは、規格で言えばノーマルサイズながらも、軽量化による機動力を重視したタイプだ。

耐久力が低めなのは仕方ないか。

「まったく、驚かせやがって」

フェンネルは悪態をつきつつも安心した表情だった。

「コニー、ここに居ては危険だ！ 僕についてきて」

「だけどバジルが……」

早速、バニラが主人公しているな。

コニーはバジルの身を案じるが、今回はそれほど怪我ではないぞ。俺のおかげで。

「コニー、僕の方は大丈夫だから。早くバニラのピークルに避難を」

バジルの怪我は軽いが、彼のピークルは原作通り戦力外になってしまった。

敵の数はまだ多い。

せめて駅前広場の安全を確保する戦力がもう一人欲しい。

このままでは俺がここから離れられないので、バニラには早めに戦闘に参加してもらいたいところだ。

「おい！ あれ、お前のトロットピークルだろ？」

俺と同じことを考えていたフェンネルがバニラに声を掛けた。

フェンネルが示した駅前広場の駐機場には、バニラの乗ってきた【カモミール・タイプII】がある。

どうやらネフロモーターズで修理をしたようだ。

俺の応急処置よりも格段にいい状態までボディは輝きを取り戻している。

「お前もビークル乗りなら、奴らをぶっ潰すの、手伝え」

バナラはフェンネルの言葉に一瞬面食らったようだが、すぐにコニーを促して駐機場へ向かった。

俺はバナラのビークルが停めてある駐機所への道に現れた『ルースター』を、チエーンガンの射撃で撃ち抜く。

続けざまに着弾しシールドを割って貫通した銃弾は、エンジンから燃料タンクを撃ち抜いたようで『ルースター』は火だるまになる。

「バナラ！ 今だ、行くんだ！」

「っ！ わかった」

俺の声に答えたバナラは、コニーの手を掴んで走り出し、駐機場のビークルに乗り込んだ。

「撤退だ！」

「野郎ども！ 引き上げるぞ！」

俺の「ジャガーノート」が押し寄せるキラエレファント団のビークル部隊を突破し、

ウミネコ海岸方面の出口に近い場所まで進軍すると、キラエエレファント団は一斉に撤退し始めた。

バナラが駅前広場の戦力に加わったので、俺はトロット楽団のメンバーを任せて敵に突撃してきたのだ。

ゲームだとまだ序盤だというのに、バナラの戦闘の手並みは大したものだった。

既に平均的なBランク以上の腕はあるだろう。

さすがは主人公。とんでもない補正が掛かっている。

俺もここに来るまでに三十機以上の敵ビークルを破壊した。

街の各所で警察ビークルと戦っていた連中も、パラパラと退き始めている。

正直、敵の増援にそれなりの被害を出すまで退かないと思っていたので、この展開には些か拍子抜けだ。

しかし、その理由はすぐにわかった。

スクラップが散乱する街の入り口で見つけたビークルには見覚えがある。

搭乗するのは相変わらず傷のある顔を不機嫌に歪めているように見える不愛想な男だ。

「ネフロの英雄」の異名を持つSランクバトラーのシュナイダーである。

ビークルは彼の愛機「マキシマム」だ。

ボデイにはところどころ浅い傷痕が増えている。
俺が近づくとシユナイダーもこちらに気付いた。

「……グレイか」

「シユナイダー、一応聞いておくが……ここに居た敵の増援は？」

「追い返した」

まあ、彼を見たときから確信していた。

この狭い街の出入りに密集していたところを、格闘戦に秀でたSランクバトラーのシユナイダーに突撃されたのだ。

敵も尻尾を巻いて逃げるしかなかっただろう。

「……全滅させるのは無理だった」

シユナイダーは不満そうだが、そいつは高望みというものだ。

「いや、おかげで助かったよ。じゃあ、俺は駅前に戻るから」

「……ああ」

俺たちの会話はそれだけで十分だった。

駅前広場に戻ると、戦闘は既に決着がついており、どうにか敵を殲滅したトロット楽団の面々が駅前広場に集まっているところだった。

マジヨラムはバジルの手当てを終えたようだ。

バジルの怪我は原作よりも軽いので、軽く消毒をして包帯を巻いただけで済んだ。バナラとコニーがバジルに歩み寄り、ピークルから降りたフェンネルがため息をつく。

「はあ……何とか片付いたようだな」

駅前にも既に警察のピークルが盗賊の残党を探しに巡回してきており、当面の脅威は去つたと見ていいだろう。

しかし……。

「だけど、こんなに壊れちゃって……。ひどいよ……」

コニーの言う通り、ネフロの街はとんでもない規模の被害を受けた。

駅前の建造物では今も火の手が上がり、瓦礫がそこかしこに散乱している。

俺たちが泊まっていた『ホテル・ジャコウジカ』も、上階部分が大きく崩れていた。

今夜の宿は無しか……いや、ピークルを片づけたり荷物を回収したりしていれば、夜が明けてしまいうるさな。

マジヨラムは立ち上がって口を開いた。

「皆、悪いけど明日には出発するよ。ロブスター亭での定期演奏会もあるからね。それまでに各自、準備を済ませておいて」

慌ただしいことだが、こればかりは仕方ない。

俺はマジヨラムに頷いて、コニーに向き直った。

「コニー、さつき確認したときは着弾した形跡は無かったが、一応ローズマリーさんのところに顔を出した方がいい」

「うん、そうする……」

「バナラ、コニーを送ってくれるか？」

「ああ、任せてくれ」

31話 暫しの別れ

消耗の激しいバジルをビークルのシートに寝かせ、マジヨラムはバジルの体調を心配して彼に付き添った。

まあ、原作でもバジルは次の日の朝には全快していたから大丈夫だろう。

フェンネルは弾を補給すると言って闘技場の整備室へ向かった。

「弾切れ？ 戦闘中にか？」

「ああ、しくじったよ（まったく……使ったんなら使ったと言えよ。ダンディリオンの奴……）」

俺はバニラが戦闘に参加した後すぐに駅前広場を離れてしまったので見なかったが、どうやらフェンネルは最初の四発で撃ち止めだったようだ。

原作でも、このキラールエレファント団襲撃イベントで、フェンネルが早々に弾切れになる描写があった。

そういえば、昨日ダンディリオオンが「ブルー・サンダー」を借りたとき、途中のキラールエレファント団との戦闘にウミネコ海岸に、長距離キャノンアームは何度も放たれてい

た。

よくよく考えれば、フェンネルのような高ランクバトラーが弾切れなんてハマをするのは不自然だ。

こういう事情だったんだな。

セイボリーはマジヨラムたちと一緒に。

ここで怪しい動きは無いな。

俺も瓦礫の撤去と負傷者の搜索を少し手伝い、ピークルのシートで休憩を取った。

ローズマリーの無事を確認したバニラとコニーが戻り、メンバー全員が『ホテル・ジャコウジカ』に置いていた荷物を回収したところには、既に夜が明け始めていた。

翌朝、俺たちはネフロ駅に集まった。

バニラも俺たちとコニーを見送りに来ている。

トロット楽団はロブスター亭で定期演奏会を控えているので、ハッピーガーランドに戻らなければならない。

セイボリーは少し遅れて俺たちのところへやって来た。

原作では、ここでダンデリオンがエルダー衣装で仮面をして堂々と列車に乗り込むのだが、さすがに現実ではそんなことは起こらなかった。

俺とはエルダー時に闘技場で顔を会わせているし、Aランクバトラーでガーランド闘技場に出場しているフエンネルも、エルダーの顔は当然ながら知っている。

エルダーが目の前に現れれば、彼がここに居るのがおかしいことくらい気付くだろう。

どうやらエルダーは俺たちと鉢合わせないように、別のルートを使ったか、他の場所から列車に乗り込んだようだ。

「昨日は、本当に大変だったね」

「町はところどころ壊れてしまったけど、怪我をした人が居なくてよかったよ」
「そっだよね」

厳密に言えば、軽傷者はそれなりの数に上り、警察官には重傷者も出た。

しかし、民間人に死者や重傷者が出なかつたのは幸いだ。

あれだけの戦闘が街中で起こっていた状況下で、これは奇跡と言ってもいい。

「（あら、コニーつたら……）」

セイボリーの眩きに彼女の視線を追ってみると、コニーとバナラは人目も憚らず手を握り合っている。

これだけなら原作でも見た光景だが、二人の顔の近さから察するに、なかなか進展が早いようだな。

まあ、その一因には俺が昨日の夜に誘導したこともあるか。

彼女がローズマリーのところへ様子を見に行くとき、バニラと二人つきりになるように仕向けたからな。

「二日だけの付き合いだったけど、いろいろありがとう」

「こちらこそ、友達が出来てよかつたよ。ありがとう」

一応、二人の関係はまだ友達止まりか。表面上は。

ただ、バニラの様子からもコニーを好ましく思っている様子は見て取れる。

これは順調に事が運びそうだ。

「あ、そうだ。ピジョン牧場っていうところに、ナツメツグ博士という名のおじいさんが住んでいるの。グレイの先生よ。で、そのおじいさん、お医者さんでもあるのよ。君、海辺で倒れていたんだから、一度おじいさんに診てもらったらどうかしら。この手紙を見せれば、診てもらえるからね」

コニーはバニラに手紙を渡した。

博士の診察なら俺も紹介状を用意しているが、コニーの気遣いの方が嬉しいだろうと思つたので、俺は何も言わない。

「うん、ナツメツグ博士に診てもらおうよ」

バニラの表情も心なしか浮かれているように見える。

まあ、俺みたいな野郎に心配されるより、ヒロインの方が嬉しいよな。

「それじゃ、元気でね」

「元気でね」

トロット楽団のメンバーは汽車に乗り込んでいった。

「コニー……」

コニーも汽車に向かうが、バナラが呼び止める。

「また、いつか会えるといいね」

「うん、そうだね。きつと会えるよ」

コニーが振り返り、寂しくも甘い空気が漂い始めた。

「あ、そうだ……」

コニーは急に何かを思い出したように鞆を探り、バナラの元へ戻る。

「君、ハーモニカ持ってたよね。次に会うときまでに、これ練習しておいてね。それじゃ、さようなら」

コニーはバナラに『In Your Voice』の譜面を渡して汽車に駆け込んだ。

さて、俺も用を済ませないとな。

最後に話すのがヒロインじゃなくて悪いけど。

「ん？ グレイ、どうしたんだい？」

「バナラ、俺からも渡す物がある」

俺はバナラに手紙入りの封筒を二つと紙束を渡した。

「封筒にナツメツグ博士と書いてある方は俺からも博士への紹介状だ。診察に関することなんかを書いてあるから、博士に渡してくれ。あと、そっちの紙束には君の今後に関して必要なことが書いてある。必ず目を通してほしい。もう一つの手紙の使い道も書いてあるから」

「今後って……?」

「見ればわかる。悪い話じゃない」

「……わかった」

バナラは完全には納得していない表情だったが、最終的には頷いてくれた。
必ず読んでくれよ。

この世界を効率的に攻略してもらうのに必要だからな。

ついでに口にしたくないことも書いて済ませたが。

「グレイ! 何してるの?」

「もう汽車が出るよ」

バジルとマジヨラムが俺を呼んでいる。

「おっと、それじゃ、俺も行くよ」

「うん、また」

俺は踵を返すと、楽団の皆が待つ汽車に乗り込んだ。

「ねえ、グレイ。バニラと何を話していたの？」

汽車に乗り込み楽団のみんなと同じコンパートメントに座ると、早速、俺はコニーの詰問を受ける羽目になった。

いや、俺はノーマルなんで腐の疑惑は勘弁。

「ああ、俺からもナツメツグ博士への紹介状を渡しておいた。俺なりの所見とカルテも入れてある。診察に役立つだろう」

「あ、そうなんだ。ありがとう」

「一応、俺も博士の助手だからね」

コニーは納得したようだ。

これに関しては俺も嘘はついていない。

ただ、バニラが前に話したこの世界の運命を大きく動かす少年で、記憶喪失に関することを当たり障りのない範囲で少々記載し、博士にビークルのメカニズムや操作に関する指南してくれるように頼んでおいただけだ。

「ふふつ、コニーったら随分バニラのことが気になるみたいね？」

「え!? ち、違うよ! ただ、海辺で倒れていたから、身体を悪くしていないか心配で……」

生暖かい微笑みを送るセイボリーに、必死になって否定するコニー。

この光景がまさか現実で見られるとは、ゲームをプレイしていたときには夢にも思わなかった。

しばらくは顔を赤くして必死に捲し立てていたコニーだったが、やがて隣に座るセイボリーに頭を預けて寝息を立て始めた。

コクリと船を漕いだ拍子にコニーの前髪が目にかかり、セイボリーが細い指先で後ろに流してあげている。

「疲れていたみたいね」

「(当然だろう。夜明け近くまで、あんな騒ぎだったんだ)」

セイボリーもフェンネルも、コニーを起こさないように小声で囁くようにして話している。

よく見ると、マジヨラムとバジルもシートに深く体を埋めて寝息を立てていた。

バジルは負傷して消耗しているし、マジヨラムも看病で疲れているはずだ。

今は寝かせておこう。

バジルは起きたら残念がるかもしれないな。

コンパートメントでは俺とフェンネルとマジヨラム、コニーとセイボリーとバジルで別れて座ったのだ。

念願のセイボリーの隣に座れたのに、汽車に乗っている間ずっと寝ていたなんて、バジルにとっては悔やんでも悔やみきれないことだろう。

俺は大丈夫だよな？

何か忘れて後悔するようなことは……。

ん？

本当に、何か忘れてしているような……。

「あつ」

「どうした？」

「ポールの絵、受け取れなかったな……」

まあ、あんな騒ぎがあつた後では仕方ないか。

原作の時間軸的にポールの絵は完成しているはずだが、受け取るのは次回でもいいか。

「よろしく願います。ようし、それでは建物の修理に取り掛かろう」

「はいっ」

ネフロ駅前で博物館の学芸員と館長を見送った後、バナラは自分のピークルに戻ってグレイから渡された紙束を開いた。

バナラが記憶を失った状態でこの地に流れ着いて、まだ一日しか経っていない。

たった一日で、彼の周囲は目まぐるしく動いた。

トロット楽団メンバーとの出会いは、帰る場所も頼る人も居ないどころか、自分が何者かもわからないバナラにとって、この不安な状況下で大きな心の支えになったのは間違いない。

その中でも、海岸で自分を助け起こしたコニーという可憐な少女に、バナラは感謝や友情とともに僅かな恋心を抱いていた。

一番長い時間を共に過ごしたこともあるが、彼女に惹かれるのは運命と言ってもいいくらい、自分にとって自然なことのように感じる。

そして、グレイという青年。

楽団メンバーの中では最年長で、今のバナラでは逆立ちしても敵わないほどのピークルの操縦技術を持つ、黒髪の大柄な男だ。

『ドン・エレファント』との戦闘で、バナラはグレイの卓越したピークルの操縦技術とその機体の性能に驚愕した。

バナラは彼に何か感じるものがあつた。

自分とは二回り以上も違う体格と戦闘能力から来る迫力だけではない。

どこか、人を見通すような印象を受ける、僅かに警戒心を含んだ、自分を案じるような目。

初対面のはずだが、グレイはバナラのことをよく知っているような雰囲気だつた。

バナラにとつて、グレイはそんな不思議な存在だつた。

だから、バナラはグレイに託された文書をできるだけ早く読もうと思つたのだ。

グレイが文書に書き起こした内容は、本来の歴史のバナラをかなり先取りして強化するものだつた。

まずは、汽車に乗つて一刻も早くナツメグ博士のところに行くこと。

そして次は、ネフロに戻つたら駅下の地下道に居るジンジャーを訪ねて、ピークルバトルの指南を受けるよう書かれていた。

書類を読み進めると、博士への手紙にはバナラの事情が書いてあり、ジンジャーには話を通してあるとのことだつた。

それ以上の説明は無い。

『そこから先の出来事では、自分で考えて道を選べ』つて……どうということだろう？

グレイには、何か起こることが、わかっているのか……?」

グレイの書いたメッセージはそこで終わっており、二枚目の紙にはジンジャーの住処の地図、あとの紙には注意すべき盗賊団の情報が書き込まれている。

本来なら、ここでのバナラは先ほどネフロ博物館の連中に頼まれた化石発掘と闘技場で旅費を貯め、ビークルに乗ってピジョン牧場へ向かう。

しかし、グレイが先回りしてピジョン牧場駅の建設を終えているので、わざわざビークルで歩いて行く必要は無い。

グレイから博士への手紙には、ビークルの扱いの基礎やメカニズムを教えてやってほしいと書いてある。

さらに、グレイは博士の工房でバナラの「カモミール・タイプII」の総メンテナンスをするように頼んである。

これだけでもバナラの戦闘能力は格段にアップすることは確かだ。

元ビークルバトルチャンピオンで、現在はエルダーの手を逃れてネフロ地下道に潜伏し、日雇い労働者としてその日暮らしをしていたジンジャーは、グレイの支援でバナラを受け入れる態勢を整えた。

ジンジャーの住処は、今や下手な宿よりも住みやすいスイートルームへと大変身を遂げている。

グレイが小分けにして持ち込んだ家具や雑貨、食料に冷蔵庫まであるので、長期間の潜伏でも快適に過ごせるのだ。

資材も大量に持ち込んだので、ビークルの修理に困ることは無い。

その居心地の良さは、ジンジャー曰く、墮落して危機感が鈍るのが心配になるほどだそう。

これならバナラも修行に集中できることは間違いない。

本来なら、ジンジャーの指南はもつとストーリーを進めないと発生しないサブイベントなのだが、グレイがフラグを無視して根回ししたのだ。

もちろん化石発掘と闘技場にも少しは行ってほしいと思っっているので、グレイにしてもバナラに完全にジンジャーとの修行漬けの日々を送らせるつもりは無かった。

しかし、たとえ一時とはいえ、宿代と食事代にも事欠くような生活を送るはずだったバナラにとって、このグレイの根回しは非常にありがたいものとなる。

何せ、闘技場のビークルバトルは低ランクではファイトマネーなど高が知れているし、化石発掘も慣れるまでが大変で、新人の稼ぎなど雀の涙だ。

グレイにしてもゲームでは化石発掘でホイホイ稼げていた印象があるので、これを知ったときには大層驚いた。

現実にはゲームではないので、化石堀りも闘技場も楽な仕事ではない。

それが、ジンジャーの住処に行けば、最低限の生活には困らないのだ。

別にグレイはバナラを蝶よ花よと育てたいわけではないが、どうせ苦勞するならば自身の強さや自分への恩として還元される方がいいとグレイが考えた結果だ。

そんな事情はバナラが知る由も無いが、この文書が自分に悪意を持って書かれたわけではないことくらいは読み取れる。

「グレイ、あなたは一体……？」

バナラは読み終わつた紙を仕舞おうとして、最後の紙に短く書かれた一文を見つけた。

「えつと……『もし、闘技場でライセンスの発行が滞りなく進まないようだったら、受付や職員に話を通じないようだったら、どうしても他に手段が無かったら、二つ目の封筒の手紙を支配人に渡せ』、か。何で、こんな最後の手段みたい……？」

ネフロ闘技場の支配人といえばデイナー。

グレイが敵の陣営以外で最も苦手とする人物である。

バナラが事情を理解するのは、もう少し先の話。

3 2 話 ビジョン牧場

「はあ……」

ハッピーガーランドに戻ってからというもの、コニーはずっとこの調子だ。

テーブルに突っ伏して、時々顔を上げたかと思うと、ため息をついてまた腕に顔を埋めてしまう。

練習のときは別人のように気合が入るが、それ以外の時間は抜け殻のように無為な時間を過ごしている。

まあ、コニーの頭の中にあるのは十中八九バナラのことだろうな。

彼女がバナラと再会するのは、キラーエレファント団にネフロが占領されて、バナラが街を解放した直後の話だ。

ネフロ占領の報を耳にして、彼女は单身ネフロに戻る。

しかし、同時にウズラ山トンネルも盗賊に占拠され——最初は事故扱い——汽車でハッピーガーランドに戻れなくなったところで、バナラはコニーをピークルに乗せ、ガラガラ砂漠を渡ってハッピーガーランドまで送り届ける。

途中、二人は砂漠の盗賊デザートホーネット団に誘拐されたり、巨大な砂に潜行する

要塞に襲われたりしながら、何とか危機を乗り越えてハッピーガーランドに到着する。そんな吊り橋効果が満載のイベントまで、コニーはハッピーガーランドで寂しい日々を過ごすのだ。

しかし……。

「はあ……バナラ……」

俺が居ることにも気づかないコニーの様子は、まさに恋煩いそのものだ。

これはもう完全に惚れているな。

俺が入れる空気じゃない。

しばらく、そっとしておいてやるか。

恋の病は医者にも草津の湯にも治せない、時間が解決してくれるのを待つべし、つてね。

しかし、そこに空気を読まない闖入者がやって来る。

「ねえ、皆！ この前のキラエレファント団のことが、もう新聞に載ってるよ。トロット楽団が撃退に成功だつて。あれ、コニー？ セイボリーは？」

俺は騒がしい緑のちんちくりんの頭に空手チョップを落とす。

バナラはグレイの忠告通り、ピークルバトルのライセンス登録と初陣だけ済ませて千URほどのファイトマネーを受け取ると、次の日にはビジョン牧場へやって来た。

昨日までのバナラは無一文だった。

ゲームでは敵を倒すと金を落とすので、ゲーム開始からネフロに着くまでに数百URは手に入るのが普通だ。

『ドン・エレファント』は倒せば300URを落とすし、甲板の宝箱を撃破前に開ければ合計200URになる。

これだけでも500URが手に入るわけだ。

『ルースター』を撃破すると落とす40URを余さず回収し、駐機場でのハーモニカ演奏やバーでのピアノ演奏などでお試しがてらおひねりを集めれば、初日だけでも1000UR近い稼ぎになる。

さらに、これは裏技に近いが、ネフロでコニーたちのライブを聞きに行く直前に、ウミネコ海岸に戻るとサメを獲れる。

このサメはいわゆる交易品で『バー・アフロディーテ』では一尾202URで買い取ってくれる。

満杯までサメを積んでから売ると、バックパーツがキャリアーWなら一度に八尾積めるので、一回の収入は1616URだ。

燃料代を差し引いても1500URほどの稼ぎになる。

これを数回繰り返せば、序盤にもかかわらず1万UR以上の額を簡単に手にすることができるのだ。

ゲームでは街に入ったり闘技場でバトルや賭けに参加したりしてから街に出ると時間が経過する。

しかし、夜から朝の時間は、宿屋に泊まったり仮眠を取ったりしなければ進まない。

夜のサメ狩りはこの仕様を利用した稼ぎというわけだ。

俺も二回目以降のプレイでは金策として世話になった。

しかし、現実とは違う。

盗賊団のビークルを破壊しただけで金は手に入らず、宝箱なんてものも存在しない。

ライブ直前にウミネコ海岸とネフロを往復するなんて真似はできるはずもなく、結局

バナラは昨日一日を無一文で過ごすことになったのだ。

グレイもそれを知っていれば銀貨の数枚くらいバナラに持たせただろうが、そういうところに気が付かないあたり、グレイも少々抜けている。

バナラはお約束のオットーとウィリーの「フラップフライヤー」との衝突事故を起こし、二人の強烈な個性に圧倒されながらも、ナツメッグ博士の工房に到着した。

ビークルをどうにかして飛ばそうという二人の試みは、最初はバナラの目にも奇異に映ったものだが、グレイが彼らに言ったという言葉や聞くと不思議と応援する気持ちが強くなった。

ウィリー曰く、グレイは「いつかは可能になる」と言ったそう。

それを聞くと、バナラもいざれトロットビークルで空を飛べる日が来るのではないかと考えてくる。

グレイの言葉と忠告は信憑性が高く役に立つ。

バナラは経験上それを知っていたからだ。

闘技場でも、彼の文書に従って手紙をオネエの支配人に渡したら、すぐにライセンス発行を済ませてくれた。

本当は、ディーノの好みであるバナラが、ライセンスを貰えないなんてことはあり得ないわけだが。

「さて……ここがナツメツグ博士の家か」

バナラの目に映るのは、一目でビークル関係の人間が住んでいるとわかる住居だ。

手足の付いた特徴的な工房に、最近になって増築したと思われる広めの家が隣接している。

よく見ると、繋がってはいるものの住居自体は二つ並んでいるような構造を取ってい

ることがわかった。

「そういえば、グレイも普段はここに住んでいるんだっけ。なら、この新しい方がグレイの家かな」

バニラは玄関前にビークルを停めると、家の扉をノックした。

「留守……？」 いや、奥から物音が聞こえる」

バニラは扉に手を掛けて、内側に押し開いた。

廊下を進んだバニラの目に、ガラクタが散乱した部屋の奥で何やら作業をしている老人が映る。

黙って作業していた老人が急にボヤクように喋り出す。

「まったく、グレイが居らんのがこんなに不便だとは思わなかったわい。部屋はすぐに散らかるわ、ベッドのシーツも不快だわ、飯も不味いわ……。おまけに研究では準備と片付けに時間が取られて作業も捗らん……」

それも当然だ。

グレイがナツメグ博士の助手になってから、ここの家事は全て彼が片付けている。

部屋は一日の終わりにグレイが数分で片付ける。

ベッドのシーツも、数日に一回はグレイが洗濯物と一緒に洗っている。

当然、食事の質もグレイが来てから一気に上がった。

メリー乳業のチーズと狩りの獲物、ネフロで仕入れた新鮮な生鮮食品やパン、ミームー村の魚やトリユフにミツバチ園の蜂蜜など、あらゆる高品質な食材でグレイが工夫を凝らした料理を供するのが常だった。

素材があつても、博士一人ではパンとチーズを切つてそのまま食べられる野菜や果物を添えるのが関の山だ。

グレイが食糧庫に保存している肉を焼ければ上等だろう。

極めつけは、博士の研究がある程度は理解できるグレイ——本人はそう思っていないが、この世界ではこれ以上ないくらいの理解度——が、今までは最低でも一週間の半分は補佐にしていたことだ。

トロット楽団のエキストラになってからグレイはナツメツグ邸を留守にすることが増えたが、それでも博士が一人で研究を続けなければならないほど、長期間この工房を空けたことは無い。

グレイが居れば、研究に必要な資料と資材は伝えておくだけで事前に博士の席に用意され、作業中も博士が席を離れずとも言いつけるだけで物が届き、作業終了後も用済みの品だけが片付けられる。

何だかんだで、博士にとつてもグレイの存在が当たり前前になっていたのだ。

「はあ……昔に戻っただけだというのに……」

「あの……」

博士が一通り愚痴をこぼし終わったところで、後ろから声が欠けられる。

声の主は当然バナラだ。

「……………」

「すみません！」

「うるさい！ そんなに大声を出さずとも聞こえておるわ」

バナラが訪ねたときのナツメツグ博士は新しいトランプペットの製作の真つ最中だった。

グレイが初めてナツメツグ博士のもとを訪れたのも、博士がサクスを組み立てていたときだ。

奇しくも同じ状況、グレイ曰くジンクスである。

「今は手が放せんのじゃ。見てわからんのかね」

博士は不機嫌な表情になりながらも作業を続けようとするが……。

「ああ、バルブがダメになってしまった……」

トランプペットのバルブは不自然な力の掛かり方で歪んでしまった。

こうなってしまうては、そのままパーツとして使うことはできない。

部品の準備は一からやり直した。

博士が振り返り、頭をかく金髪の少年を見据える。

「何なんじゃ、お前さんは？ 勝手に入ってきおつて」

不機嫌な博士の問いかけに、バニラは慌てて自己紹介をした。

そして、コニーとグレイから預かった手紙のことを思い出し、ポケットから二つの封筒を取り出す。

「ふん、まあよい。……ん？ 何じゃ、その手紙は？」

バニラから手紙を受け取った博士は、差出人の名前を見比べる。

「ほう、こっちは不肖の弟子グレイからかの。こっちは……おお、コニーからか。久しぶりじゃなあ。あの子は元気にやっとなるか？」

他愛のない話をしつつ、博士は二つの手紙を読み進めていった。

「トランペットを一つくれてやれじゃと？ まったく、あの馬鹿弟子は訳のわからんことを……」

「あの、博士……」

「おまけにビークルの扱いとメカニズムの基礎を教えてやれなどと、師を使い走りのよ

うに……」

グレイの手紙を読み進めるごとに眉間の皺が深くなるナツメツグ博士。

バナラはその様相に一抹の不安を抱いていた。

「(グレイ……本当に大丈夫なんだろうね……?)」

やがて二つの手紙を読み終わったナツメツグ博士はバナラに顔を向けた。

「さて……お前さん、砂浜で倒れていたのか。それまでのことを何も覚えたら……とな。なるほど(グレイとは少々事情が違うようじゃな)」

「え? 何ですか?」

「いや、いいんじゃない」

ナツメツグ博士は気づいたら森の中に倒れていたというグレイの話を思い出したが、グレイの話す突拍子も無い別世界の知識やら何やら、バナラと違う点の数々に考えが及ぶと、二人が同じ世界の人間という説は頭の中で否定した。

「ふむ、では診察をしよう。ん? 何じゃその不安げな顔は? こう見えてわしは、医術にも明るいんじゃないぞ。では、今のお前さんの状態について……」

バナラの身体の調子と記憶に関する簡単な問診が終わった。

今回は身体面での後遺症が無いことが確認できた以上の収穫は無かった。

途中、オットーとウイリーの「フラップフライヤー」が事故る音に驚かされる一幕はあったものの、これでバナラの最低限の用事は済んだ。

「さて診察はこれで終わりじゃが……もう少し付き合え」

「え？ 付き合うって……？」

「ん？ 何じゃ、グレイからは何も聞いておらんのか？」

バナラが頷くと、博士は呆れたように顔を覆った。

「はあ……まったく、あ奴は……。今からわしがビークルの扱いを直々に教えてやる。まあ、この短時間でどの程度のものになるかはわからんが……」

バナラはナツメグ博士の弟子であるグレイの強さを思い出して目を輝かせた。

「言っておくが、わしが教えられるのはビークルのメカニズムと、その知識に関連した効率的な動かし方や扱い方だけじゃぞ。グレイのようになれると期待されても困る。彼奴の射撃センスと戦闘能力は、彼奴自身の才能と研鑽によるものじゃからな」

それでも、ナツメグ博士による数時間の講習はバナラのビークル操縦の能力を格段に進歩させた。

座席に放置されていた操作マニュアルと感覚に頼ってビークルを扱っていたバナラにとつて、ビークルの開発者であり機構を熟知した博士の教えは、別の側面からビークルを理解するのに最適だったわけだ。

訓練ついでに、バナラの「カモミール・タイプⅡ」は博士の工房で擦り減った部品や錆びついたパーツを交換され、駆動部には油を注ぎ込まれ生まれ変わった。

因みに、修理とメンテナンスの際に使われた資材は、グレイが鹵獲した盗賊ビークルのパーツやアジトから分捕ったものだ。

要はグレイのヘソクリ資材である。

そして、日が傾くまで行われた博士の講習は終わりを告げ、トランペットを土産のようになされたバナラは帰路についた。

「具合が悪くなったら、また来なさい。次からは紹介状は要らんよ。おお、そうだ。ついでに、これを持って行ってくれ。ローズマリーの薬じゃ。いつもはグレイに頼んでおらんじゃが、生憎奴は出ておるのでな」

バナラは博士から薬の入った袋を受け取った。

「ではコニーよろしくな。たまには顔を見せろと伝えとくれ」

33話 予兆

「え!? フェンネルが来ない!?!」

ラウンジにバジルの素っ頓狂な声が響いた。

ハッピーガーランドのロブスター亭で、俺たちはトロット楽団が次の定期演奏会で使用する曲『Impossible』の練習予定を立てていた。

マジヨラムが練習用のスタジオの予約を取り、合わせ練習の日程を決めてきた矢先のことである。

珍しいことに、フェンネルが練習の欠席を申し入れてきたのだ。

「理由については、フェンネルは何て?」

「それが……どうにも気分が乗らないとしか……」

俺の問いかけにマジヨラムは答えるが、トロット楽団の面々は首を傾げたままだ。

フェンネルは寡黙だが誰よりも練習熱心で音楽に対しては妥協をしない男である。

それが怪我でも病欠でもなく、気分が乗らないという理由で不参加を決めるなど、今までには一度も無かったことだ。

「珍しいね。フェンネルがそんなあやふやな理由で休むなんて……」
「そうねえ……何かあったのかしら？」

バジルもセイボリーもフェンネルの事情については想像がつかないようだが、俺には何となく理由がわかった。

ついに、フェンネルのトロット楽団脱退が近づいたか。

こればかりはどうしようもない。

フェンネルは新しいパワフルな音楽を求めて、悩んだ末にトロット楽団を抜けて、ファンキーな連中と組んで自分のバンドを始める。

トロット楽団も従来通りの楽器を使うバンドとしては、最先端の流行のジャンルを扱うバンドであり、当然ながら人気に相応しいだけの実力があるグループだ。

それでも、フェンネルが現状に満足できない以上、無理に引き留めることはできないだろう。

経営方針や雇用条件の改善でどうにかできる問題ではないのだ。

「やっぱり、皆もフェンネルからは何も聞いていないのかい？」

「うん、全く」

「ええ、私も知らないわ」

「俺も聞いてないな」

ここで俺が事情を暴露したところで何の役にも立たないので、マジヨラムの質問は軽く流した。

嘘はついていない。

この世界で、俺が直接フェンネルから事情を聞いたわけではないからな。

「大丈夫かな？ この後は定期演奏会で新曲のお披露目だし、もうすぐダンディリオンからさらに次の曲も来るんですよ？」

バジルが言う次の曲とは、バナラがハッピーガーランドに来てから手に入り、スームスーム港町のライブから演奏することになる『I Cry』だろう。

「スタジオの予約は取っちゃったからね。もう皆の予定に合うように調整しちやっただし、フェンネルには最後のリハでどうかしてもらえないかな」

マジヨラムが締めくくった。

これもフェンネルなら少なくとも個人練習は怠らないだろうと信頼してのことだな。

まあ、結局のところ直前になって困るわけだが、それに関してはどうしようもない。

バナラを楽団に誘う理由になるのだから、ここは手を出さないでおこう。

「じゃ、コニー。そういうことだから」

「……………」

「コニー？」

「えっ？ あ、うん。大丈夫」

マジヨラムに話しかけられるまで、コニーはまたしても抜け殻のようにボーっとしていた。

大丈夫かね、この娘は……。

ピジョン牧場からネフロに戻ったバナラは、宿屋には向かわずそのままジンジャーの許へ足を延ばした。

グレイから渡された地図に従い地下道の脇道を進むと、徐々に人の手が入り整備された場所に出る。

そのまま進むと、家具や雑貨に資材が持ち込まれた部屋が目に入った。

バナラにしてみれば、ビークルどころか人すらまず入らない地下道の奥に、こんな空間があったことが驚きだ。

崩れかけた壁の簡単な補修と電源系統を引く際の簡単な整備をグレイが施したのだが、かつてジンジャーが潜伏していたときは、この隠れ家の快適さは雲泥の差だ。

水道まではグレイには弄れなかつたので、駅裏の資材置き場の放置されたプレハブのものを借用しなければならぬが……。

バナラが足を踏み入れると、奥で一つの人影が蠢いた。

「誰だ？」

顔を出したのは当然ジンジャーだ。

飛行帽と髭面は相変わらずだが、グレイが生活雑貨をまとめて押し付けたので、服は以前のボロよりはマシな労働者風のシャツとジーンズに変わっている。

「あなたが、ジンジャー？」

「っ！ ビークル乗りの金髪の少年……君がグレイの言っていた子か」

バナラは自分の知人の名前が出たことで安心して名乗った。

「はい、グレイからあなたの指南を受けるよう言われました」

「……………」

「あの……何か？」

ジンジャーはバナラをじっと見つめて思案に耽るような表情をしていたが、居心地の悪さを感じたバナラは堪らず声を出す。

しかし、ジンジャーはバナラの質問には答えず、ゆっくりと口を開くと目の前の少年に向かって疑問を投げかけた。

「……君も、『白い悪魔』を倒したいのか？」

「// 白い悪魔……って?」

「ん? グレイから何も聞いていないのかい?」

バナラはつい先ほどのナツメツグ博士のときと同じ展開に既視感を覚えながらも頷いた。

「なら、私の事情を先に話しておこう」

ジンジャーはエルダーの事情や彼の師であったこと、それにグレイが彼らの野望を阻止するために動いていることを簡潔に説明した。

「敵の敵は味方。グレイが私にここまで便宜を図ってくれるのも、そういうわけだ」

「なるほど、ジンジャーとグレイの関係は何となくわかりました。でも、何でグレイは僕にまでこれだけ世話を焼いてくれるんでしょう?」

「君に強くなつてほしいからだろう。確かに、君には才能があるからな。エルダーは強大な存在だ。戦うにはそれなりの戦力が要る」

そう言われても、バナラにはピンとこなかった。

この国のウミネコ海岸に流れ着いてから、必要に迫られて盗賊と戦ったり闘技場でバトルに出たりはしたが、自分より遥かに強いグレイが期待をする理由などわかるはずもない。

当然、自分がキーパーソンであることなどバナラには知る由もない。

「とにかく、グレイは君に私のビークルバトルを仕込んでほしいと頼み、私はそれを引き受けた。昼間は君も仕事があるだろうから、夜に地下水路に来るといい。ああ、宿の心配も要らないぞ。グレイがここで君も生活できるように準備したからな。水回りは駅の資材置き場のものを借りなければならぬから、少々不便かもしれないが」

当然、グレイは寝具も二人分用意し、食料を補給するための資金もバナラの授業料の名目でジンジャーに渡してある。

「わかったな?」

「はい……」

こうして、バナラの修行の日々が始まった。

昼はネフロ博物館の依頼で化石採掘をこなし、たまに闘技場に出場してDランクやCランクの選手とバトルをこなす。

これだけ見れば、ごく普通のビークル乗りの生活だ。しかし、バナラが最も消耗するイベントは夜にある。

ジンジャーによるビークルバトルの指南は苛烈を極めた。

彼は前にグレイとバトルをした貯水槽にバナラを呼び出すと、まだ装備も整っていないバナラのビークルをブーメラナムで翻弄し、死角から急接近しては投げ飛ばし、

立ち上がる前にコクピットヘトライデントアームを突き付けた。

「もう一度だ」

「くっ……」

最初のころは、バナラのビークルは転がされたばかりだった。

現実のバナラは繰り返しゲームを遊んだプレイヤーではない。

今のバナラのビークルバトルの腕では、初代チャンピオンのジンジャーに到底敵わないのも当然だ。

ジンジャーにビークルをボコボコにされ、そのまま地下道に引き上げてジンジャーの住処で寝る日々が続いた。

バナラのビークルは彼が寝ている間にジンジャーが修理する。

ジンジャーの整備の腕は並程度だが、お釈迦になったパーツを交換してボルトを締め直すくらいなら、時間を掛ければジンジャーにもやってやれないことはない。

修理用の資材もグレイが持ち込んだものが大量にある。

しかし、数日も経つと、バナラは機体の性能差をもともせず、バトルにおいて終始ジンジャーを上回るようになった。

これにはさすがの初代チャンピオンも驚愕した。

グレイはジンジャーの前に姿を現したときには既にある程度完成した操縦技術と戦

闘スキルを持つていたが、バナラは圧倒的な経験不足を感じさせる腕でありながら着々と技術を吸収する。

当初は翻弄されるだけだったジンジャーの攻撃にも、最近では的確にカウンターを合わせて刃を交差させていた。

そしてついに、ジンジャーの「ブラックオデッセイ」はバナラの「カモミール・タイプII」のソードアームで機関部を打ち壊されて膝をついた。

「見事だ……」

バナラは初代チャンピオンを下せる実力を身に着けたのである。

事件は唐突に起こった。

バナラがジンジャーの住処で朝食を終え、これからの予定を話し合っていたときだ。
「んっ？」

「どうしました、ジンジャー？」

「……何だか、街がきな臭い」

ジンジャーは長きに渡りエルダーの手から逃れて潜伏を続けていた経験もあり勘が鋭い。

ネフロの街を覆う異質な空気をいち早く察知した。

残念ながら、バナラにはそこまでの危機感知能力は備わっていない。

「なら、僕がちよつと見てきますよ」

「……わかった。気を付けろよ。いくらビークルバトルの腕が上がったとはいえ、至近距離から大勢に包囲されては成す術は無いからな。……グレイほどの腕ならどうにかしてしまいかもしれないが」

数秒ほど悩んだジンジャーだったが、このまま引き籠ついても状況は変わらないと判断し、バナラを地下から送り出した。

バナラはビークルに乗ると、いつものルートでネフロの街の地上へ向かう。

修行場所の貯水槽を通り抜け、地下水路を通つて街の外周を進んだ。

頭上から聞こえるビークルや車の音がいつもより少ないことに違和感を覚えたが、それだけでは引き返す理由には足りない。

ついに、バナラはネフロ北西の水路への降り口に到着した。

そして、水路の入り口から地上に出ると……。

「おい！ 止まれ！」

「動くな！」

「まだ、隠れてやがったか！」

バナラのビークルは突然キラエレファント団の『ルースター』と『ワイルド・ルー

スター』十数台の編隊に包囲された。

至近距離からキャノンの照準がバナラに合わせられる。

周囲に一般車や一般市民の乗るビークルの姿が見えない時点で異変は察したものの、ネフロを制圧し街中に配備された盗賊ビークルが集結するのは早かった。

バナラは慌てて引き返そうとしたが、この距離で包囲されてはそれも叶わない。

「この街は、俺たちキラエレファント団が占拠した。俺たちが許可しない限り、車もビークルも使用禁止だ。まさか知らないはずは無いよな？」

「いや、こいつ水路から出てきたぜ」

「あん？ 何だ、つてことは水道工事の作業員か？」

「とにかく、お前のビークルは没収させてもらう」

「逆らうんじゃねえぞ！」

奇しくもジンジャーが言ったのと同じ絶望的な状況に置かれ、バナラは投降してビークルを降りることになった。

34話 蚊帳の外

「え!? ネフロが、占領……」

「ああ」

ネフロの街がキラエエレファント団に占領されたという報が、今日になってハッピーガーランドに届いた。

俺はコニーに答えつつアーバン新聞の夕刊をテーブルの上に広げる。

コニーとマジヨラムとセイボリーが覗き込んだ。

第一面を見たときのコニーの驚きようは相当なものだった。

それまでのバナラへの懸想で色ボケした表情とは打って変わって、顔を蒼白にしている。

「あそこには、お母さんと、バナラが……」

「コニー！ しつかりしなさい！」

ふらつくコニーをセイボリーが支えた。

「街の人たちはビークルや車を没収されただけって書いてある。一部のビークルバト

ラーや警察官は軟禁状態みただけどね」

「そう。それなら、ローズマリーは無事ね」

新聞にざっと目を通したマジヨラムに応じて、セイボリーはコニーに言い聞かせた。

「でも、バニラは……」

キラエエレファント団によるネフロ占領イベントは、原作ではナツメツグ博士のところから帰ってきたときに起きる。

占領下のネフロからの情報漏洩の難度と、この世界の情報の拡散速度を考えると、ネフロの襲撃があったのは数日前だろう。

バニラが俺の忠告通り動いたとしたら、彼はナツメツグ博士によるピークルの教練は既に終わらせており、ジンジャーからのピークルバトルの指南もある程度受けているはずだ。

少なくとも、キラエエレファント団の下っ端に撃破されるようなことはないだろう。

余程の多勢に無勢で距離を詰められたら降伏するしかないだろうが。

もしも原作通りバニラが拘束されたのなら、今頃はキラエエレファント団に仮入隊をして親分に話を付けに行っているはずだ。

……原作通りにバニラが行動すればの話であるが。

「皆、大変だよ！ ネフロの街がキラエエレファント団に……」

「今、その話をしてるところだ」

ようやくバジルがロブスター亭に駆け込んできた。

「今のところ、街の人間は人質に取られている状態だが、死者は出ていないようだ。キラエレファント団の襲撃は明け方だったらしい。民間人は寝ているところを、警察も当直の係しか起きていないところを襲撃されて、一気に街の全域が制圧されたようだ」
原作では、主人公がピジョン牧場へ行って帰ってきてネフロに入ると、街はつい先ほどキラエレファント団に占領された、というイベントの進み方をする。

ゲームのシステムでは街に入ると時間が進むので、必然的に主人公の帰還は昼から夜になり、襲撃時間は朝か昼過ぎか夕方に限られる。

やはり現実がゲームとは違うな。

効率的な襲撃なら明け方というのは常識だ。

現実では定石に従っている。

「なら、ローズマリーは無事だろう。奴らの目的は住民を殺すことじゃねえようだ」

「じゃあ、バニラは……?」

いつの間にか現れたフェンネルの一言に、コニーは縋るように質問する。

「それは、わからん。あいつはなかなかセンスのいいピークル乗りだが、バトルライセン

スを取得していたとしても、まだ日が浅い。低ランクバトラーが見せしめに殺されることはないだろうが、もし襲撃時に敵と衝突していたら、無事では済まないだろうな」

「そんな……」

フェンネルの言うことは配慮に欠けているかもしれないが事実だ。

セイボリーはフェンネルに責める視線を送るが、コニーに間違つた認識が植え付けられるよりはいい。

「ガーランド警察は動けないだろう。ネフロの人間が一人でも殺されたことが明らかになれば、強行策も本格的に検討されるだろうし、国軍の出撃要請も視野に入れられるはずだ。しかし、今現在わかっているのは住民全員の命がキラエルフアント団に握られていることだけだ。刺激は禁物。できることといえば、出撃に備えた突入部隊の編成と、ネフロ内部からキラエルフアント団に働きかけて解放されることを期待するくらいだ」

結局、トロット楽団としては休演期間を延長することをマジヨラムが決め、俺たちは各自解散した。

まあ、ネフロの件が与えた衝撃はハッピーガーランドにも強く影響しており、定期演奏会のムードではなくなってしまうた今の状況では妥当な判断かもしれない。

震災時の日本の自粛ムードほどではないが、やはり身近な危機を再認識させられる事

件があると、俺たちのような娯楽系の商売の客足は鈍るものだ。

翌日、俺が外出先である用事を済ませてからロブスター亭に戻ると、ラウンジではコニーが何やら捲し立てていた。

「だから！ それを承知でお願しているの！」

「あわわ……コニー、落ち着いて」

「コニー、今ネフロに戻るのには危険すぎるわ。わかるでしょう？」

「でも！ バニラが……」

オロオロと慌てふためくバジルに、心苦しそうな表情でコニーを押し留めるセイボリー。

マジヨラムは落ち着いているように見えるが、あの難しい表情は相当な困難に直面したときの顔だ。

「あ、グレイ！ 君からも何とか言ってくれよお」

「どうした？」

こちらに気付いたバジルが俺に水を向けてきた。

大体の事情は想像がつくが、一応何があったか聞いてみた。

「コニーがネフロに行くって言って聞かないんだよ。今、向こうはキラエエレファント

団の占領下だろ。とてもじゃないけど、行かせるわけにはいかないよ」

「そうよ、コニー。ネフロの人たちが心配なのはわかるけど……」

俺はマジヨラムに視線を向けた。

「当然、僕の意見もコニーがネフロに行くのは反対だ。でも、何かネフロの情報が手に入る手段がないものか……」

マジヨラムはせめてコニーのためにネフロ内部の情報を入手できる手段を考えているようだ。

まあ、この世界の情報伝達速度では、ネフロが解放されたとしても、ハッピーガーランドにその知らせが届くのは、早くても数日後だな。

「そうだー。なら、 그레이に確かめに行ってもらえばいいんじゃないかな？ 그레이ならキラーエレファント団のビークルなんて軽くぶっ飛ばしちゃうだろうし」

確かに、バジルの言うことは一理ある。

普通に考えれば、俺がネフロに向かうのが最も効率的だろう。

ネフロを探りに行った先で戦闘になっても、俺ならよほどのミスをしないうり限り盗賊ビークルを蹴散らして撤退できるし、上手くやれば闘技場と警察署を解放して、俺一人の襲撃でも街からキラーエレファント団の勢力を一掃することも可能だろう。

しかし、コニーは首を横に振った。

「私だって、それが一番なのはわかってるよ。でも！　ここで行かなかつたら、二度とバナラに会えない気がして……」

……そうか。

コニーとバナラの再会は、バナラがキラエエレファント団のアジトに乗り込んでネフ口を解放して戻って来たときに、ローズマリーのところで顔を会わせる予定だ。

そして、翌朝コニーがハッピーガーランドに戻ろうとしたとき、ウズラ山トンネルの事故で汽車が出られなくなり、バナラがコニーを送っていくことになる。

このイベントが無ければ、確かにバナラとコニーが今後も絡むことは無くなるかもしれない。

何せ、今のバナラはネフロでピークル乗りとして生活しているのだ。

コニーの頼みごとが無ければ、彼がハッピーガーランドに行く理由も、コニーに楽器の腕を披露してトロット楽団へスカウトされる機会も無くなる。

下手をするとフラグが潰れていたわけか。

原作通りのシナリオを外れたこの世界がどう動くか俺にはわからない。

もしかしたら、結構危なかったのかもしれないな。

さすがはヒロインの修正力。

助かった。

「だからお願い。行かせて……」

「……仕方ないわね」

「これは、止めても無駄じゃない？」

「そっか。コニーはそこまで……」

コニーの強い意志が伝わったのか、トロット楽団の面々も渋々ながら彼女の言うことを受け入れた。

マジヨラムまでもが折れてしまった。

しかし、俺はコニーの申し出をそのまま呑むことはできなかった。

「それは……無理だ」

コニーは信じられないものを見る目で俺を見てきた。

慌てなさんな。

今説明してやつから。

「コニー、俺が今どこに行つてたかわかるか？ ハッピーガーランド駅だ」

「駅……？」

バジルは首をかしげるが俺は続けた。

「今、ネフロに向かう汽車は全て運休だ。ネフロ近郊の路線がキラエエレファント団に

封鎖されているんだ。列車は街に近づくことすらできないだろう」
「っ！ そんな……」

俺はコニーがネフロに戻ることを知っていたが、一つ気掛かりなことがあった。

それは、ネフロが封鎖されているのに、何故コニーは戻ってくることでできたのか、という点だ。

原作では、主人公がキラエエレファント団のアジトに出向いて親分に話をつけると、ネフロに戻って来たときには既に占領部隊に伝書鳩が届いており、街は解放済みでコニーもローズマリーのもとに居る。

ゲームでは、ストーリーの都合上、このように淀みなくイベントが進行するわけだが、現実では街が解放されてすぐに列車の運行が確保されることは考えにくい。

そうなると、この世界ではコニーがネフロに行けるのは、もつと時間が経って街が復旧してからになるはずだ。

もしかしたら、ここが原作通り事を運ぶために、俺が介入しなければならないところなのかもしれない。

バジルに提案されるまでもなく、既に俺は自分がネフロに行くことを視野に入れていた。

しかし、誰がネフロに向かうにしろ、肝心の移動手段が動いていない。

今の時期に汽車でネフロに行くのは、ハナから不可能だったわけだ。

「じゃあ、グレイが行くのも無理なの？」

「いや、バジル。確かに、汽車でネフロに向かうのは無理だが、方法が無いわけじゃない」

俺の言葉にコニーが顔を上げて表情を輝かせる。

「さつき、駅で話を聞いてきた。汽車を貸し切るのは無理だが、工事用の運搬トロッコなら動かせるらしい」

原作でウズラ山トンネルを占拠した盗賊ビークル『スチーム・ハムレット』を倒しに行くときに乗ったあれだ。

似たような小型駆動機つきの作業用トロッコがあり、これを一台借りられることになったのだ。

もちろん、壊したら弁償だが……。

まあ、俺なら普通に用意できる額だな。

これで俺と「ジャガーノート」のネフロまでの運搬手段は確保できたわけだ。

「じゃあ、このことはグレイに任せて解決だ！ よかったね、コニー」

しかしコニーはバジルの言葉に反応せず、俺をジッと見据えた。

まあ、彼女の口から出る言葉は予想がつくさ。

「グレイ、私も連れてって」

35話 解放

俺はウズラ山トンネルの直前でトロッコを止め、「ジャガーノート」の助手席に乗る人物に声を掛けた。

「ここからは、いつ敵が出てきてもおかしくない。ネフロ近郊は完全にキラエエレファントの勢力下だ」

「うん」

引き返すか確かめる意味も含めての確認だったが、帰ってきたのは力強い返答だった。

俺は小さくため息を吐いて続けた。

「仮にネフロ駅まで順調に進んだとしても、駅構内へ入った途端に戦闘になる可能性がある。コニー、バナラと合流するか街全域の秩序が回復するまで、絶対に俺から離れるな」

「うん、わかってる」

俺は再度レバーを倒してトロッコを発進させた。

結局、俺はコニーの申し出を受け入れてネフロへの同行を許した。

後から考えれば、バナラをハッピーガーランドに連れてくる理由なんていくらでも作れる。

それこそ、俺が誘えばいいだけの話だ。

しかし、やはりバナラを案じてハッピーガーランドからネフロに駆けつけるコニーという存在は、バナラにとって非常に重要なものだろう。

今回は多少の危険を冒しても原作に近い状況を作ることを優先したのだ。

上手くすれば、俺たちがネフロに着くころには、バナラが全てを片づけており、街はいつもの活気を取り戻していることだろう。

それでも、ゲームと現実の差異が、そして俺の過去の行いが、シナリオにどう影響しているのかわからない。

最悪、ネフロの街では抵抗勢力とキラエレファント団が血を血で洗う抗争を繰り広げて地獄絵図、なんてこともあり得るわけだ。

できればコニーにそんな状況は見せたくないな。

ネフロ駅に到着したのは深夜のことだった。

可能な限りトロツコの稼働音を抑え、汽車の停車位置まで侵入する。

俺の【ジャガーノート】もいつでも飛び出して敵を迎撃できるよう準備していたが、城壁の内外にも駅周辺にも盗賊ビークルの姿は見当たらなかった。

ここに留まっても始まらないので、俺は極力ビークルの足音が響かないように注意しながら駅を出た。

しかし、駅前広場にもキラエエレファント団の姿は無い。

「……どういふこと？」

「静かにっ）」

コニーは慌てて口を塞ぎ、戸惑ったように辺りを見回した。

コニーは未だに誰の姿も確認できないようだが、俺の目は駅前の教会の裏から発進する『ルースター』を捉えた。

黒塗りの【ジャガーノート】の姿は夜の闇に紛れて彼らの目には映っていないようだ。

「まったく、せつかく街が俺たちのものになったつてのに……」

「ふんっ、親分の器に感謝するんだな」

二台の『ルースター』は街の出口に向かっていく。

俺は静かに狙いを付けていたチエーンガンアームを下ろした。

「(どうやら、街は今まさに解放されているようだな)」

「(あ、あそこ！ 教会から人が出てきたよ)」

俺がコニーの指差した方に視線を向けると、ちょうど教会から見覚えのある連中が出てくるところだった。

後ろに街の住民を庇うように先陣を切って出てきたのは、髭を蓄えた長身の男だ。

俺も何度か見たことがある、ネフロ教会の神父だ。

「……皆さん、駅前には盗賊ビークルは居ません。もう大丈夫です」

神父の落ち着いた渋い声に応えて、教会の中から次々と軟禁されていた住民が姿を現した。

俺が自画像を購入し、ネフロの街の風景画を予約したポールも居る。

博物館の学芸員のベルモンドとは話したことが無いが、あのゲームで見た通りのハンチング帽を被った青年がそうだ。

俺のビークルが住民たちの方へ近づくと、ポールがこちらに気付いた。

「あ、グレイさん！ こんなところで何を？ ハッピーガーランドに行ってしまったんじゃないや……」

ポールの声で神父や他の住民たちも俺の存在に気付いて振り返る。

「おお！ あなたがグレイさんですか。っ！ コニーも居るんですね」

「ああ！ あなたが……」

ポールと神父とベルモンドがこちらにやって来た。

ちようどいいから彼らに聞いてみよう。

「キラーエレファント団はどうなりました？ 見たところ撤退しているようですが」

「ええ、街を占拠していた無法者たちは、次々とビークルに乗って引き揚げています。どうやら、彼らの頭領から街を解放するように指示があったようですが……」

「彼ですよ！ バニラさんです！ キラーエレファント団の親分のところに、話しをつけに行くって言ってましたから」

「え!? バニラが……?」

ベルモンドの言葉にコニーはかなり動揺している。

彼女がネフロに來た一番の目的はバニラなのだから当然か。

そして、建物内に軟禁されていた人たちが次々と俺たちの周りに集まる。

「なあ、街を抜け出してキラーエレファント団のボスの所へ話をつけにいった奴が居たよな?」

「確か……バニラとかいうビークル乗りだろ」

「ええ。そして、ネフロの街は今まさに解放されているわ」

「つてことは、説得は成功したのか?」

「何でも、キラーエレファント団のボスを倒したらしいぜ」

「何だって!？」

「団員がボヤいていたのを聞いたんだが……ボスが強さと度胸を認めて、街から手を引けっという要求を呑んだって話だ」

「本当か!？」

「凄えぞ!」

彼らの話で大体のところはわかったな。

どうやらバナラは原作のシナリオ通りキラエエレフアント団のアジトに向かい、ボスとの対決などをこなして街の解放に成功したようだ。

本当に勝ったのかどうかはわからないが、少なくともバナラは俺の介入なしでも原作通りの活躍をしてくれた。

俺がわざわざトロッコを借りてまでネフロに來たのは無駄な労力だったが、このことが確認できただけでも収穫だな。

「あの……グレイさんは、もしかして僕たちを助けに?」

「……まあ、そのつもりでビークルの武装は整えてきたが、無駄骨になったな」

俺は熱狂する住民たちを尻目に声を掛けてきたポールに答える。

結局、俺は一発も撃たなかった。

しかし、ポールは首を横に振った。

「いえ、グレイさんは何の見返りも無く、危険なネフロに単身乗り込んできてくれたんです。確かに、街を解放したのはバナラかもしれないませんが、僕はあなたにも感謝します」
そう言うのとポールはしっかりと梱包された絵を俺に差し出した。

「グレイさん、長らくお待ちして申し訳ありません。ご予約いただいた風景画です」
そういえば、ポールに1万UR渡して風景画を完成前から予約していたな。

街が占領下にあるときも肌身離さず持っていたのか。

律儀なことだ。

「ああ、確かに受け取った」

「コニー、今日はもう遅い。家まで送るよ」

「うん……」

コニーはまだバナラのことか心配でならないといった表情だが、だからといって彼女を徹夜で街に出口で立たせるわけにもいかない。

「明日いつばいはネフロに居るんだろ？　なら、バナラには明日家に来てもらえばいい」

「うん、わかった……」

「ベルモンドさん、神父さん。バナラが帰ってきたら、コニーの家に来るように伝えてくれませんか？」

「わかりました。お任せください」

「ええ、ローズマリーも彼のことを心配しているでしょう」

俺は未だに表情の優れないコニーを促して、ローズマリーの待つ彼女の家に向かった。

いつも通りネフロベーカーリー前の駐機場に「ジャガーノート」を停め、路地を歩いてアパートの立ち並ぶ住宅地に入る。

キラエエレファント団の残党が潜んでいるかもしれないので、俺はいつでもシヨルダーホルスターのS&W M10を抜けるように準備しつつ、ポケットのフォールディングナイフも確認した。

しかし、そんな心配は杞憂に終わり、無事コニーのアパートに到着した。

「さて、護衛の真似事はこちら辺で十分かもしれないが……一応、俺もローズマリーさんに挨拶させてもらってもいいかい？」

「うん、もちろん」

俺はコニーに続いて彼女の家に足を踏み入れた。

「お母さん」

「え？ まあ、コニー！ あなた、ハッピーガーランドに居たんじゃ……」

「おやまあ！ グレイも一緒かい」

「お邪魔します」

コニーの家には隣のフライパンのおばさんも居た。

「どうしたんだい？ キラーエレファント団は撤退を始めたって聞いたけど、まだ鉄道は復旧してないだろ？」

「まさか……ハツピーガーランドから助けが？」

二人の疑問にはコニーが答えた。

「ううん、私がどうしてもネフロに行きたいって言ったから、グレイが小型トロツコにビークルを乗せて、ここまで送ってくれたの」

「何だつて!? じゃあ、あんたたち二人で来たつてのかい？」

おばさんは一瞬だけ俺を責めるような表情をしたが、まあ仕方ないよな。

下手をすれば駅についた途端に戦闘になっていた可能性もある。

そんな状況で足手纏いの少女を連れて来るなど、並みのビークル乗りであれば自殺行為である。

俺が危険を承知でコニーを連れてきたのは事実だ。

たとえ、警察や軍の増援が共に来ていたとしても、コニーと一緒に連れてくるのは普通に考えて十分に危険な行為だろう。

これがいい大人ならコニーの判断に関して俺を責めるのは筋違いだが、日本人の俺の基準でもコニーは未成年でギリ子どもだ。

「いいのよ。コニーなら、きつと一人でもネフロにやつて来たでしょう？ グレイ、コニーのことを守ってくれて、本当にありがとう」

「……そうさね。あんたを責めるのもお門違いな話か」

この二人は思った以上にコニーに対して理解があるようだ。

まあ、この世界は何だかんで現代日本よりも厳しい環境だ。

コニー自身も歌手として独立して身を立っている以上、立派な大人扱いされるのも納得できる。

「いえ、まあ、勝算はありましたが、危険が無かったと言えば嘘になります。本当なら、俺だけが警察や軍と一緒に来るべきだったのは事実です。申し訳ありません」

しかし、俺は気遣いのできる日本人。

こういうところでは気配りしておかないとな。

俺はコニーに向き直った。

「じゃ、俺は行くから。今日はゆっくり休みな。どうせ、バナラが帰ってくるのは明日になるだろうし」

「うん。グレイ、色々ありがとう」

「いえいえ。あ、それと……」

「ん？ 何？」

「俺はナツメツグ博士のところにも寄るから、ハッピーガーランドに戻るのは少し遅れるかもしれない」

「あ、そうなんだ……。でも、仕方ないよね。グレイには手が空いているときにトロット楽団を手伝ってもらって約束だったし」

「悪いな。それじゃ」

俺はコニーのもとを辞した。

36話 凱旋

さて、ネフロとハッピーガーランド間はもう汽車で移動するのは不可能だな。

コニーがハッピーガーランドに戻ろうとするころには、ウズラ山トンネルは盗賊団に占拠されていることだろう。

明後日の朝には完全に通行止めだ。

いや、もう日付は変わっているので明日か。

既に敵の布陣は整っているかもしれない。

ピジョン牧場駅は既に建設が終わっており、ネフロ駅に汽車は格納されている。

ネフロとピジョン牧場間の路線はすぐに復旧するかもしれないが、ハッピーガーランドへのルートが潰されることは免れない。

ここでコニーがハッピーガーランドに戻るのにバナラを頼れば、二人の関係は原作通りの流れだ。

俺がわざわざコニーに同行せずピジョン牧場に帰るのは、そういった理由もあつてのことだが、ついでに博士とも一度話しておこう。

そのために、鉄道が復旧していない状態で、わざわざピークルでピジョン牧場まで歩いて行く羽目になったわけだが致し方ない。

俺はネフロベーカーリー前の駐機場に停めた【ジャガーノート】を起動した。

そのまま城壁の東出口へ向かおうとしたが、ふと街の南西が騒がしいことに気付いた。

あちらはウミネコ海岸方面の出口だな。

ちよつと見に行ってみよう。

街の出入り口には大勢のネフロの住民が集まっていた。

「初めて見たときから、タダ者じゃないと思ってたよ！」

「あなたは私たちの英雄よ」

「こうしちゃいられない！ 皆にこのことを教えないと」

街に入ってきたピークルを取り囲んできたネフロの住民が引いたことで、輪の中心に居る濃黄色のピークルと、それに搭乗する金髪の少年が目に入った。

バナラが街に戻ってきたようだ。

「ああ、そうだ。グレイさんに言付けを頼まれていたんです。帰ってきたら、ローズマリーさんの家に顔を出してほしいそうですよ」

「え？ グレイがネフロに？」

「はい、先ほど到着されたようです。私からもお願いします。ローズマリーさん、ずっとあなたのことを心配していたようですから」

闇に紛れた俺の黒塗りの「ジャガーノート」は、バニラの目からは見えていないようだ。

ようやく主人公殿が戻ってきたのだから、俺も少し話しておこう。

俺はベルモンドと話すバニラのもとにビークルを進めた。

「あ、噂をすれば、グレイさんがいらっしやいましたよ。それでは、私はこれで」
ベルモンドはうきうきとした足取りで去っていく。

彼も今夜はバニラの活躍の噂を着に飲んで盛り上がるんだろう。

「グレイ……」

俺はバニラの方に振り返った。

「バニラ、無事で何よりだ。思ったよりも早かったな」

「あ、うん。キラエエレファント団の親分は泊っていきつつあったんだけど、さすがにそこまでは……パーツは売ってもらったし、夕食はご馳走になったけど……」

「そうか。まあ、君にも親分にも立場があるからな」

どうやら、バニラは原作通りエレファント親分に認められて彼と友誼を結んだよう

だ。

正々堂々ビークルバトルをして拳で語り合い、腕つぶしのみならず度胸や人格を評価されたわけだ。

俺には無理なコミュニケーションだな。

そもそも、俺は『ドン・エレファント』戦のときに大勢のキラエエレファント団のメンバーを容赦なく惨殺している。

彼らにとつても、俺は今更仲良くできる相手ではないだろう。

闘技場の選手としてなら、親分はギリギリ口をきいてくれるかもしれないが、他の団員にとつては無理な話のはずだ。

「で、親分には勝つたのか?」

「うん、どうにか……」

そいつは凄いい。

キラエエレファント団の親分のバトルライセンスはAランクだ。

ネフロ解放の際の親分との戦闘は、クリア済みでもなければ時期的にかなりの強敵で、初見プレイヤーでは敗北する者も多い。

この段階で勝てるということは、どうやらバニラの強化作戦が成功したようだな。

「そうか。頑張ったな」

「ナツメツグ博士とジンジャーの教えが役に立ったよ。あ、もちろん二人を紹介してくれたグレイにも感謝してる」

それは何よりだ、

二人に頼んだ甲斐があったというものだ。

「それに……ジンジャーには他にも色々と助けられた」

話を聞いてみると、ネフロから抜け出してハヤブサ台地のキラエエレファント団のアジトに向かう際に通ったシラサギ河では前線基地が建設され、キラエエレファント団の戦闘用ビークルが集結していたらしい。

ゲームでも『キラエエレファント前線基地』という簡易要塞のような敵が、このネフロ占領からアジトに向かう途中のシラサギ河に出現する。

基地の詳細も原作と違うようだが、バナラの話で何より驚いたのは、そこを突破するのに水路から抜け出したジンジャーが手伝ってくれたことだ。

確かに、俺はジンジャーにバナラの面倒を見てくれるように頼んだが、まさかそのままですでくれるとは。

これはジンジャーに追加報酬でも出さないとイケないかな。

今度、酒でも持って行ってやろう。

バナラの「カモミール・タイプII」を見ると、以前より明らかに強化されている。ナツメック博士の手入れで消耗したパーツの交換やメンテナンスが施されており、アームパーツの武装も以前とは違う物だ。

見たところ、バジルの「グリーン・リーフ」と同じクローアームを右腕に、キラージェリアント団の親分のビークル「マッドエレファント」が両腕に装備するスパイク鉄球アームを左腕に装備している。

これは俺もゲームで長いこと愛用した組み合わせだな。

鉄球アームはキラージェリアント団のアジトのショップで購入でき、クローアームはこれからコニーをハッピーガンランドまで送る際に通る、砂漠の手前のレイブン砦のビークル整備場で買うことができる。

この鉄球アームとクローアームを組み合わせることで、RPGで言うところの武器合成———することで、スパイク鉄球アームは完成する。

このスパイク鉄球アームはイガイガを付けて攻撃力を上げた、鉄球アームと同じ挙動———鎖に繋いだ鉄球を撃ち出す———の中距離武器だ。

ソードアームより攻撃力が一段階上のクローアームに、砲弾アームとほぼ変わらない射程で、弾数制限が無く耐久力もそれなりに高いスパイク鉄球アーム。

この便利な組み合わせは、ゲーム中盤の長いスパンで通用する。

いい武器を手に入れたな。

「あ、これはキラーエレファント団の調達係の人に売ってもらったんだ」

「……そのスパイク鉄球アームを、売っていたのか?」

「え? うん、そうだけど……。それがどうかしたのかい?」

「ああ、いや……。何でもない。良かったな、いい装備が手に入って」

俺の視線がビークルの装備を見ていることに気付いたバナラが説明してくれた。

どうやら、装備の入手方法も原作とは異なっている部分があるようだな。

スパイク鉄球アームを既製品で売ってくれる店は、ゲームには存在しない。

まあ、親分が愛用している武装なのだから、現実ではキラーエレファント団のアジトで調達できてもおかしくないか。

「ところでグレイ。コニーの家に寄るようになって、君が言っていたらしいけど……」

「ああ。でも、今日はもう遅いから無理か。ローズマリーさんたちも寝ているだろう。

明日中に顔を出すようにしてくれ」

「わかった」

もう少し事情を聞かれるかと思ったが、バナラはあっさり納得してくれた。

バナラはコニーが来ていることを知らないはずだが、どうやら俺に対する信頼度が高くなっているようだな。

同性を攻略して喜ぶ趣味は無いが、バナラの信頼を得られるのは悪いことじゃない。

「じゃあ、僕はもうジンジャーのところに行つて休むことにするよ。グレイは？」

「俺は、ナツメツグ博士のところに戻る」

「今から？」

正直、俺もネフロの街の中にあるジンジャーのアジトに泊まった方が楽だが、コニの出発まで一日ちよつとしかない。

早めにピジョン牧場に戻らなければ。

「ああ、久しぶりに顔を見せてくる」

「そっか。それじゃ、僕は行くよ」

バナラを見送つた俺は、久しぶりにピジョン牧場方面のワグテール溪谷に続く街の出口を潜つた。

ピジョン牧場の自宅に着いたときには、もうほとんど夜が明けていた。

メリー乳業の家では、さすがにまだ羊の放牧は始まつていないが、窓の奥に小さな人影が動いているのが見える。

恐らく、羊の世話を誰よりも真面目にこなしている末っ子のエリツヒが起きてくるどころなのだろう。

あの少年のおかげで俺も良質なチーズが常に手に入るのだ。
感謝しないと。

ビークルの騒音をできるだけ抑えながらピジョン牧場を移動し、ようやくナツメツグ博士の家に辿り着く。

懐かしの我が家だ。

手足の生えたビークル型の工房に、隣接した実用性の高い質実剛健な住居、さらには横には俺のために博士が増築してくれた居住スペースがある。

空けたのは数週間なので、日本にある実家に比べれば大した期間ではないが、この世界に来てから留守にした時間としては最長だ。

何だか、ナツメツグ博士がゴミ屋敷で孤独死していないか心配になってくる。

「(ただいま……)」

俺は音を立てないように、ゆっくりと扉を開けた。

家の中はしんと静まり返っている。

どうやら博士はまだ寝ているようだ。

廊下を進むと、俺が居たときよりも埃が溜まり、僅かに散乱するスクラップが増えた部屋が目に入る。

思ったよりゴミ屋敷になっていなくて安心した。

「(起こしちまっても悪いな)」

俺は踵を返すと、増設された自分の居住スペースに向かった。

この世界の俺の根城だ。

住み始めてまだ大した日数は経っていないが、この空間がひどく懐かしく感じる。

寝室に足を踏み入れ、ベストとS&W M10がぶち込まれたシヨルダーホルスターを椅子に掛けた。

ポケットのフォールディングナイフと、スピードローダーに入った予備の拳銃弾は机の上に置く。

「はぁ……」

シャツのボタンを外してベッドに座ると、急に眠気が襲ってきた。

よくよく考えれば、一睡もしていないのだから当然か。

このまま出先に居れば違うかもしれないが、ここは安心して眠ることができる我が家だ。

わざわざ徹夜をする意味はない。

ベッドに体を預けると、すぐに意識は薄れていった。

37話 一時帰宅

目を開けると、そこがロブスター亭の部屋ではないことに違和感を覚えた。

しかし、すぐにナツメツグ邸の自宅に戻っていたことを思い出す。

夜明けに寝始めたので昼過ぎまで爆睡してしまったのかと思つたが、どうやら午前中には起きられたようだ。

昨日はそのまま寝てしまったので、まずは風呂に向かった。

頭と体をいつもより丁寧に洗い、汚れを念入りに落とす。

シャワーを浴びる間に湯を張っておいたバスタブへ体を沈めると、全身から疲労の元が溶け出して抜けるような感覚を味わった。

「はあ……生き返るな……」

ハッピーガーランドにも上下水道は通っているので、ロブスター亭でもシャワーを浴びることはできるが、あれは簡素な欧米のシャワー室といった風情だ。

シャンプーやリンスくらいは個人で持ち込めばいい話だが、バスタブが無いのはどうしようもない。

しかし、この自宅の浴室は俺のアイデア満載で博士が設計した傑作だ。

回復量で言えば、薬草とエリクサーくらいの違いがある。

久しぶりの快適な風呂でリフレッシュした俺は、体を拭くと上機嫌で部屋に戻った。

新しいシャツとズボンに着替え、シヨルダーホルスター入りのS&W M10を装備する。

スピードローダー入りの弾とナイフをポケットに仕舞い、脱いだ服を持って部屋を出る。

手に持った服を洗濯機にぶち込み、俺はナツメツグ邸の食堂に向かった。

「ようやく起きてきたの」

食堂のテーブルには既に博士が座っていた。

顔を会わせるのも久しぶりだ。

「ええ、ただいま戻りました」

お互いの無事を確認できたことで、自然と表情は緩む。

俺としてもネフロ占領の影響がここまで及んで博士に危害が加えられないか心配だったし、博士にしても俺が巨悪との対決が避けられない運命にいることは凡そ知っている。

こうして師弟が無事に再会できたことは喜びだ。

「腹が減った。久しぶりにまともな飯が食いたい。話は食いながらじゃ」
「はい、博士」

俺が居ない間のナツメック博士は、本当に簡単な料理しか食べていなかったよう。

パン以外で減っている食料といえど……切るだけで食べられるオレンジにハードチーズ、ベーコンが少し切り取られて焼かれたくらいだ。

チーズや干し肉は大丈夫だが、ハーブ類は枯れかけており、玉ねぎもこれ以上は持たないな。

ジャガイモも芽が出そうだ。

冷凍室の生肉も消費された様子は無いし、卵も数日前のものに手が付けられていないようだ。

トマトソースとジャムにリコッタチーズも、瓶に詰めて置いていったのに使われていない。

どうやら使い方がわからなかったようだ。

ナツメック博士は万能だが、生活能力まで全般的に高い超人かといえど、決してそのようなことは無い。

「よし、たまには少し手の込んだ料理にするか。……とは言っても、残った食材だけで作

るから、選択肢は結構限られているんだけどな」

まあ、ちょうど昼時だ。

少し重めでもいいだろう。

まずは玉ねぎをスライスする。

玉ねぎをフライパンで念入りに炒めてから、鍋に取って白ワインを加えた。

次にコンソメを加えるのだが、少し迷った末に俺は熊の干し肉を選んだ。

これは博士一人ではどうやって食べればいいのかわからない代物だろう。

熊肉には少々土臭いような独特の匂いがあるが、その個性も色んな食材の旨味が複合するような料理でなければ際立って邪魔に感じることは無い。

熊肉を使ったスープを玉ねぎに加え、一緒にローリエを短く煮込んで香りをつける。

最後にチーズを乗せてオーブンにぶち込めば、オニオングラタンスープの準備は完了だ。

次は、手が付けられた形跡の無いハムを使おう。

猪のモモ肉を加工したハムを薄くスライスして、何層にも重ねた。

薄切りハムの間にはオニオングラタンスープで使ったものとは別のチーズを挟む。

全体に軽く小麦粉をまぶし、溶き卵に浸け、タイムを混ぜたパン粉に潜らせ、煮立た

せた油に投入する。

キツネ色に揚がった平べったい円形から立ち上る食欲をそそる匂いが、俺の鼻を暴力的に刺激した。

数枚のチーズ入りハムカツを油から取り出し、皿に並べてレモンを添える。

続けて、俺は細くスライスしたジャガイモを油に投入した。

ハムカツの旨味が溶け出した油が、再びいい匂いを発しながら跳ね躍る。

やはり、揚げ物の付け合わせにはフライドポテトが無いとな。

全てのジャガイモを油から引き揚げると、今度はオレガノをパラパラとかける。

最後に、オニオングラタンスープの入った深皿と、フライドポテトを添えたハムカツ

の皿の横にリコッタチーズとジャムを置いて完成だ。

リコッタチーズとジャムは余ったパンに乗せてもいいし、そのままスプーンで掬って

舐めるように口に入れてもデザートになる。

「よし。残り物にしては上出来だろう」

彩りを考えるのならばサラダを足したいが、他に生野菜が無いので仕方ない。

俺は料理を食堂に運んだ。

「…………げつぶ。久しぶりの美味しい飯で、少々食い過ぎたの。……さて、グレイ。ネフロで

は大変なことが起こっていたみたいじゃの」

食事が一段落したところでナツメツグ博士が口を開いた。

「ええ、まあ。博士の方には何の影響もなかったんですか？」

「うむ、牧場の人間がネフロに行こうとしたときに、ただ事ではない雰囲気を感じ取ったそうじゃ。その後、街の様子をワグテール渓谷の高台から遠目に探つたらしくての。ネフロが盗賊団に占拠された情報は、ピジョン牧場にはすぐに入ってきた。おかげで、不用意に街に入つて拘束された人間は居らんかった」

「どうやらネフロ占領による実害はピジョン牧場に及ばなかったようだ。」

「こういう事件に関しては俺一人が予言して触れ回つたところでもならない。」

正直なところ俺は傍観者に近い状態だったわけだが、バナラが早急に解決してくれたように助かった。

「聞くところによると、大きな被害は出ていないそうじゃな。グレイ、お手柄じゃ」

「俺が来たときには、バナラが全て解決した後でしたけどね」

「ふむ……確かに、盗賊団に占拠された街を解放するとは、あの少年はお前さんの言うように傑物らしいの。しかし、お前さんも裏で色々と動いていたのじゃろうて」

博士は色々とお見通しのようにだ。

まあ、ジンジャーの隠れ家に持ち込む電源系統と冷蔵庫を作ったのは博士だ。

そこらへんの事情も承知済みか。

「そういえば、バナラにビークルの操縦の指南をしてくれたようですね」

「うむ、お前さんの手紙に書いておったからの」

「……で、見込みはどうでした？」

俺はバナラのビークルバトルの腕について、エレファント親分に勝ったことしか知らない。

「この短期間で主人公の彼はどれだけ成長したのだろうか？」

「……ははあ、気になるのかの？」

「何でそんなに面白そうなんですか……」

博士は俺が嫉妬か焦りでも感じていると邪推しているようだが、別に俺はバナラの敵でも恋敵でもない。

「わしの所に来たときは、お前さんの足元にも及ばない初心者じゃった。わしの教えを徹底的に受けたところで、お前さんに勝てるほどの力を手に入れるのは不可能じゃろう。わしは直接的な戦闘技術を指南できるわけではないからの。しかし……」

博士は続けた。

「バナラの奴はわしの教えをスポンジのように吸収しよった。少なくとも、ビークルの駆動部や各部のパーツに負担をかけず円滑な動作をする技術に関しては、あの一瞬で飛

躍的に向上しておる。今も研鑽を積んでいるとしたら、いずれグレイに並び立つほどのピークル乗りになるやもしれぬの」

……大丈夫かな？

ジンジャーにもバナラの指南を頼んだので、バナラの戦闘能力はさらに向上しているだろう。

いや、俺もエルダーに勝てるだけの力はあるし、ピークルの機体性能も原作の枠を超えたチート級ハイスペックなものだ。

何より、俺だってピークルの技術は常に向上している。

主人公だからといって、負けてやるつもりは毛頭ない。

……もう少し、自分の修行にも力を入れようかな。

「ま、何はともあれ、後は鉄道が復旧すればネフロ近郊は元通りじゃな」

「ええ、まあ……」

すぐにウズラ山トンネルのトラブルが起きて、今度はハッピーガーランドとネフロ間が本格的に封鎖されてしまうんですけどね。

「ところで、ミームー村への鉄道の開通工事はどんな具合です？」

鉄道で思い出したが、夜明けにピジョン牧場に戻って来たときは、薄暗いこともあつ

て路線の先はよく見えなかった。

以前と比べれば、山が切り崩されてかなり工事が進んだように見受けられるが、実際のところどうなのだろう。

「もうすぐ完成するらしいぞ。整地とトンネル工事はもう終わっておる。最近では、トロットビークルを買いにミームー村から出てくる者が多いらしいの」

なるほど、線路沿いの道からピジョン牧場やネフロに出て、トロットビークルを買い付けに来るわけか。

俺の計らいで、トリユフを始めミームー村の産業になる物資から得られる収益は、村の住民にある程度は正當に分配されているはずだ。

汎用のトロットビークルを購入するくらいなら問題ないだろう。

「前にお前さんが撃破した潜水ビークルのスクラップと積んであった資材、それにハッピーガーランドから送られた鉄骨と木材のおかげで、作業は順調だそうじゃ。建設業者がお前さんに礼を言っておったぞ」

「そうですか。根回しが役に立ったようで何よりです」

俺が討伐した『ディープアングラー』の資材だけでは到底足りない。

ハッピーガーランドのオイルモレー工場に発注しておいて正解だったな。

もし準備が後手に回っていたら、今頃ネフロ占領の影響で資材の搬入から工期と連鎖

的に遅れが生じていただろう。

昼食を済ませた俺は、軽くナツメグ博士の家を掃除すると、ビークルに積んだ荷物を整理して、旅支度を整えなおした。

ポールから買った絵画をビークルから下ろして家に仕舞い、スウィーツケースと雑貨入れの鞆の中身を詰めなおす。

スウィーツケースに着替えを詰め込み、鞆に石鹸やシャンプーとリンスなどの消耗品を補充し、ビークルのシート下に積み込んだ。

「慌ただしいのう。もう出るのか？」

「ええ、今日中にネフロに戻っておきたいんで」

「コニーは明日の朝の列車で発つ。」

まあ、その電車はウズラ山トンネルのトラブルで出ないのだが……。

「博士、食糧庫の中身ですが、ベーコンのほかに簡単な調理で食べられるソーセージなどをメモしておきました。調理法も書いておきましたが、ほとんどが焼くだけか茹でるだけなので、俺が居なくても調理できるはずですよ。あと、生や茹でるだけで食べられる野菜も書き出しておきました。作り置きトマトソースとジャムも食べ方をメモに書いてあります。ここら辺の食材のレシピにも手の込んだ調理法は含まれていませんの

で「ご安心を」

例えば、仔牛のソーセージには茹でてマスタードを付けるように書いたメモを一緒に置いてある。

野菜もメモがあれば博士にも何を買えばいいかわかるだろう。

これなら俺が留守の間も博士の食糧事情が著しく悪くなることは無いはずだ。

前回は博士の生活能力の低さを甘く見積もっていたからな。

これで万全だ。

「じゃ、俺はもう行きます」

「うむ、気を付けるのじゃぞ」

俺は「ジャガーノート」に乗って、博士の見送りでネフロの街に向かって歩き出す。

「ん？ あれは……」

何気なくピジョン牧場から伸びる線路に目を向けた俺だが、線路沿いの道を走る荷馬車が目に入った。

どうやら、あれが鉄道の開通を待ちきれないミームー村の住民たちのようだ。

馬車のそれも人間よりも荷物の運搬に重きを置いた馬車とは、今時では余程の辺境の地に行かなければ目にするには無いだろう。

「っー」

不意に、荷馬車に上の一人と目が合った。

ラフなシャツに分厚い前掛けをした、少し大柄な女性だ。

服装から察するに、職人が整備工のようだが、俺はミームー村で彼女には会ったことが無い。

あんな美人は一度見たら忘れるわけがない。

原作キャラだとすると、恐らく彼女がミームー村の船大工のマルガリータか。

驚いたな。

実物は原作よりも遥かに美人だ。

向こうも俺に気付いたようで、馬車から乗り出してこちらをジッと見つめている。

「(マルガリータ、どうかした?)」

「(……ううん。別に、何でもない)」

馬車はそのままネフロ方面に向かっていった。

しばらく呆然としていたが、俺は「ジャガーノート」で後を追おうかと思い、再びハンドルに手を掛けた。

しかし、ここで思わぬ邪魔が入る。

「おお、グレイの旦那じゃないか!? 戻って来てたんだな! 聞いてくれよ、ネフロが占領されたときに……」

オットーをここまでウザく思ったのは今日が初めてだ。

38話 トンネル事故発生

ネフロの街の北西に建つ宿屋『ジエームズ・イン』に泊まった俺は、早朝にジンジャーのアジトに向かった。

この街で夜を明かすのなら、俺が匠の技で快適な居住空間に変身させたジンジャーの住処が一番なのだが、昨日はバニラが泊まっていたはずだ。

三人でも寝られないことはないが、バニラとジンジャーの師弟二人で積もる話もあるだろうから、昨日は俺が遠慮したわけだ。

今日は俺がジンジャーとサシで話をさせてもらおう。

……おっさんに会うのに順番待ちだなんて、何だか悲しくなるな。

「ジンジャー、居ますか？」

俺は地下道を進むと、ジンジャーの住処に向かって声を掛けた。

「む、グレイか」

奥から相変わらず飛行帽に髭面のジンジャーが出てきた。

服はさすがにもうボロ布を卒業したようだが、やはり堂々と表通りを歩いている人間

には見えない。

「君と会うのはトロット楽団とかいう連中のイベント以来か。バナラの話で君が無事なのは聞いていたが、少々心配したぞ」

ジンジャーから心配なんて言葉が出るとは珍しいな。

「二応、俺もトロット楽団のメンバーみたいなのでしてね。あの襲撃のあとはずぐにハッピーガーランドに戻らなければならなかったので」

「そうか」

ジンジャーは一拍おいて口を開いた。

「イベントの日、私と別れた後のエルダーの動向は？」

俺はダンディリオンの見た目でフェンネルにピークルを借り、バナラたちを殺そうとしたことを伝えた。

トロット楽団の面々には今の段階で暴露したところでどうしようもないので、ここら辺の事情を教えていないが、そのこともジンジャーは了承済みだ。

「なるほど、あの青いピークルを使ったのか。あのピークルの持ち主もなかなかいい腕を持った若者だったな」

ジンジャーはフェンネルのことは知らないようだが、キラエエレファント団の襲撃があつたライブの日にフェンネルの戦いぶりは少し見ていたようで、彼のピークル乗りと

しての腕を評価した。

「彼もこちら側の人間です。エルダーとブラツディマンティスとの戦いでは、心強い味方となってくれるでしょう」

初見プレイでは海岸でフェンネルのビークルに攻撃されたことから猜疑心を持ってしまいが、事情を知っていればフェンネルが敵側の人間でないことはわかる。

俺というイレギュラーの介入で、ジンジャーは原作よりも俺たちに深く関わっている。

説明不足でジンジャーが見当違いな疑いを持ってしまったら大変なので、こういう情報は確実に伝えておかないとな。

「ところで、ジンジャー。バナラには結構いい感じにビークルバトルを指南してくれたみたいですね」

「ああ、彼は素晴らしい才能を持ったビークル乗りだ」

「どうやらジンジャーもバナラを気に入ったようだ。」

「そういえば、わざわざ危険を冒してまで水路から出て、キラエエレフアント団の前線基地の壊滅にも力を貸してくれたそうで」

ジンジャーには以前からいつか現れる少年にも指南してほしい旨を伝えていたが、ま

さかここまでの助力が得られるとは思ってもみななかった。

「君に託された少年だからな。彼が盗賊団に拘束されたときは焦った。バニラのビークルが盗賊団の占領部隊のビークルに包囲されたときは、すぐに飛び出して助けようかとも思った。しかし、彼は黙って監禁されるようなタマではない。結果的に、バニラが街を自力で出るのを待つて正解だった」

「それに関しては感謝の言葉もありません」

俺が留守の間、キラエエレファント団との戦いにおいても、ジンジャーはずっと子守をしてくれていたようなものだ。

「……で、バニラの腕は？」

「ふふつ、やはり気になるのかね？」

ジンジャーも博士と同じ反応だ。

そんなに俺はバニラに嫉妬しているように見えるのだろうか。

「ああ、すまない。何だか……子どもの成長を気にする父親のようだと思ってな」

「父親……。俺まだ結婚もしてないんですけど……」

「おや、そうなのかい」

ジンジャーは一通り俺を茶化して満足したのか、真面目な表情で俺を見据えた。

「君は私が最後に稽古をつけたときからエルダーに勝つほどの強さを有していた。あれ

から君もさらに研鑽を積み、もつと強くなつただろう。もう私では手も足も出ないほどに。しかし、才能でいえばバナラも君に匹敵するほどのものを持っている」

俺は冷静にジンジャーの言葉に耳を傾けた。

「機体の性能差と経験の差、それに君の方が圧倒的に勝る射撃武器の扱いで、今は君の方がバナラより圧倒的に強いだろう。しかし、バナラの成長速度は驚異的だ。彼は既に私を超えた」

これには俺も驚いた。

バナラのビークルは俺のようなチート級の性能どころか、一般的な『カモミールII』にも劣るかもしれないスペックだ。

機体のコンディション上の問題が全てナツメツグ博士により解決したとしても、武装などの面でバナラの機体の現在の性能はジンジャーの「ブラックオデッセイ」に未だ劣る。

その状態で、僅か数日の修行期間でジンジャーを超えていくとは……さすがに主人公補正はチートだな。

うかうかしていると俺は軽く追い抜かれてもしまつてもおかしくないわけか。

機体のスペックとチェーニングによる正確な射撃が無ければ、俺は今のバナラ相手でもかなり苦戦するだろう。

「くくつ、君も油断せずに精進することだ」

ジンジャーは上機嫌だが俺が気でない。

今のところバニラは俺たちを信頼しているが、彼は下手をするとブラッディマンティス側につくからな。

そんな危険な才能の塊を敵に渡さないためにも、俺が色々と動いていかなければならない。

「さて、これからどうするんだ？」

俺は今後の予定とバニラがしばらくネフロを離れる旨をジンジャーに伝えた。

ウズラ山トンネルの件を既に俺が知っていたことに関しては、ジンジャーも何かを探るような目で俺を見ていたが、今まで積み上げた信頼からか納得してくれたようだ。

「と、いうわけです。とりあえず、ジンジャーの力がどうしても必要なのはこれで一旦終了です。もしかしたら、ブラッディマンティスが本格的な攻勢に出たときに力を借りに来るかもしれませんが、それまではここで息抜きをしてください」

「わかった。もしできたら、バニラと君の方針が決まったら、一度は連絡してくれ」

「ええ」

そういえばスマホが無いんだった。

バナラが砂漠を渡ってコニーを送り届けることに決めたら、もう一度ここに顔を出さなければならぬ。

俺はジンジャーのもとを辞して、コニーが始発に乗ろうとするネフロ駅に足を向けた。

俺が駅に到着すると、改札口では駅員に詰め寄る客が目に入った。

このイベントはコニーがハッピーガーランド行き汽車に乗ろうとしたところで、途中のウズラ山トンネルで事故があったらしく列車が出せないという情報が入る。

乗客たちの様子からすると、既にウズラ山トンネルのトラブルに関して説明があったようだ。

一部は踵を返して駅を後にしているが、納得しきれない者は駅員を罵倒し続けている。

さて、コニーは今頃バナラにハッピーガーランドに送ってくれるよう頼んでいるはずだが……。

「うん、いいよ。一緒に行こう」

「よかった！　ありがとう！」

駅の構内で二人と博物館の学芸員ベルモンドを見つけた。

「どうやら、バニラはコニーの頼みを快く引き受けたようだ。」

「あ、そうだ。グレイに声を掛けないと。ナツメツグ博士のところまで少し遅れるって言ってたけど、一応伝えておいたほうがいいよね」

「うん、そうだね。あと、僕はジンジャーにもこのことを伝えないと……」

俺は二人に近づいて口を開いた。

「話は聞こえたよ」

「「グレイ（さん）！」」

バニラとコニーにベルモンドが一斉に振り向いた。

俺はバニラたちの横を通り、駅の職員と向かい合う。

「事情は俺も理解した。駅員さん、ウズラ山トンネルのトラブルが、盗賊がらみにしろ落盤事故にしろ、そちらで対処したとして、どれだけの時間が掛かる？」

「そ、そうですね……場所が場所ですから、原因解明と安全確認だけで合わせて二週間ほどは……」

やはり無理だな。

マジヨラムが次シーズンのロブスターでの公演開始を遅らせたとはいえ、二週間後ではちょうど演奏会が始まっている時期だ。

「おまけに肝心の盗賊の処理に……もしくは復旧工事なら週単位で時間が掛かると」

「そ、その通りです」

どう考えても間に合わない。

俺はウズラ山トンネルのトラブルが盗賊団による占拠だとわかっているのに、敵を排除すれば解決のように思えるが、鉄道会社としてはそれだけで終わるわけにはいかない。

事前の調査と開通前の安全確認は怠れないだろう。

もし俺が強引にトロッコを出させて盗賊団を排除しても、戦闘の影響で破壊されたトンネルの修繕と安全確認にも時間が掛かる。

やはり、今ハッピーガーランドに行くためには、ガラガラ砂漠を渡るのが現実だ。

ゲームでは耐水ボディならスキトール湖を渡ってイワツバメの滝を飛び降りれば、ハッピーガーランドまでの道をショートカットできるが、現実ではスキトール湖からハッピーガーランドまでの距離はそれなりに遠く、何よりあの高さの滝を飛び降りるなんて正気じゃない。

俺のビークルは耐水仕様だが、イー〇ルダイブ機能など付いていないのだ。

現実でそんな危険は冒せない。

「バニラ、ビークルバトルライセンスは持っているな？」

「あ、うん。Cランクだけだ」

「どうやらこの短期間でも一ランク昇格したようだな。」

「ならアレハーテ丘陵からガラガラ砂漠へ向かう道も通行許可が出るはずだ。ネフロ北西出口から出て、アレハーテ丘陵を通ってレイブン砦へ向かえ。砦で消耗品や雑貨の補充など準備を整えてから砂漠に出るといい。ジンジャーには俺から伝えておく」

「ああ、わかったよ」

「グレイはどうするの?」

俺はコニーに向き直った。

「俺もガラガラ砂漠からハツピーガーランドに行くよ。ただ、ちよいと野暮用があるんでね。レイブン砦で合流できるかもしれないけど、先に行つてくれ」

39話 画家と逃亡者

ネフロの街の北西出口に向かったバナラとコニーを見送った俺は、改めて地下道のジンジャーにバナラがしばらくネフロを留守にすることを伝え、ビークルのバックパーツに水の入った大型タンクを固定して、二人の後を追った。

保存食はレイブン砦の方が砂漠の環境に適した加工品が手に入る可能性が高いが、水は砂漠の近くで買っても高くつくだけだ。

自分一人で飲む分なら、砂漠に出てオアシスに到着するまで、シートの下的小型タンクの容量でも充分なので、この量は多すぎないように思えるが、この大樽の水を使う用事は別にある。

当然、原作の知識があるからこそできる準備だ。

「そっか、えいば……ポールもこれから砂漠に行くんだよな」

原作ではネフロで絵を買ってから、ガラガラ砂漠に行けるようになる、北西出口から出たすぐの所の停留場にポールが居る。

彼もまたレイブン砦が目的地で、バックパーツの人員輸送パーツに乗せて送ることでサブイベントは進行するのだ。

しかし、現実ではポールが四六時中バス停に立っているわけもない。

彼のイベントを進めるには、どうにか見つけ出して話さなければならぬ。
さて、どうしたものか……。

「あれ、そのビークルはグレイさん」

俺が街の出口のところまで悩んでいると、後ろから声を掛けられた。

見ると旅支度をして大荷物を持ったポールがそこに立っている。

「ポール！　もしかして、君もガラガラ砂漠に？」

「あ、はい。灼熱の砂漠をキャンバスに収めてみたくて……」

まさかここでポールに会えるとはな。

タイミングがいいにもほどがあるが、今はただ幸運に感謝だ。

「ポール、俺もこれから砂漠に行く予定なんだ。もしよかったら、レイブン砦まで乗って
いくか？」

「いいんですか!?　あ、でも……グレイさんほどのビークル乗りを雇えるお金は……」

「いや、君から金を取る気なんて無いから」

そもそも今ポールのポケットにある金だって、元はといえば俺が買った絵の代金だ。

「バックパーツには荷物があるから、助手席に乗ってくれ。あと、途中で少し寄り道もしたいんだけど……それで良ければ乗ってくれ」

「はい、大丈夫です！　ありがとうございます！」

ポールは助手席の下に荷物を押し込み、入らない分はボディパーツの斜め後ろ辺りに引っ掛けた。

「(何とも都合がいい……)」

「え、何です？」

「いやいや。砂漠の絵、楽しみにしているよ」

「はい！」

俺はポールが座席に座るのを確認すると「ジャガーノート」を発進させた。

アレハート丘陵はネフロの街からガラガラ砂漠の入り口のレイブン砦までの間にあ
るフィールドだ。

砂漠にほど近い地域で開拓に伴う伐採を無計画に行ったため、一帯は砂嵐をモロに被
り乾燥した荒野へと変貌したらしい。

「この辺には商人を狙う盗賊ビークルが出没するそうですね。何でも、レイブン砦の市
場やキャラバンに納入する商品を中心に狙っているとか」

ポールの言う通り、原作でもこの丘陵には旅の商人を捕えて拷問にかける盗賊団が出
没する。

ここで登場する敵のビークルは、移動できない固定要塞『アビ・Qカーン』だ。

盗賊の搭乗する要塞部分の中心に、棘の付いた大きな車輪を回転させているだけの、遠くから物を投げるなり射撃武器で撃つなりすれば簡単に倒せる。

車輪に触れないようにタイミングを計って接近して殴っても問題ない。

はつきり言つて雑魚だ。

さらに、倒すと車輪に括りつけられていた商人が礼に宝箱を置いていくという、非常においしい獲物だ。

まあ、現実はそのなに都合のいい敵しか居ないわけではないだろうな。

襲撃には別の機動力のあるビークルが向かってくるはずだ。

「でも、僕たちが襲われる可能性は低いでしょうね。完全な戦闘用ビークルに乗るグレイさんを襲うほど、奴らも馬鹿ではないでしょう」

ポールの言う通り、本当に俺の目的地に着くまで、アレハーテ丘陵で盗賊に襲われることは無かった。

まあ、襲われなかった理由は、俺のビークルの武装だけでなく、ポールが一見ただけで貧乏人とわかる出で立ちだったせいもあるだろう。

「じゃ、すまないが、ちょっと行ってくるよ」

「はっ」

俺はアレハーテ丘陵の岩場の隅に建てられた廃屋の前にビークルを停めた。

ここが俺の野暮用の目的地だ。

素通りしてもおかしくない場所だが、ここには二種類のサブイベントが存在する。

一つは廃屋の住民関連だが、もう一つはここまで逃げてきて廃屋の前庭のベンチで夕方暮れている男のイベントだ。

「さて、まずウラジミールは……」

ぐるりと見回すと、廃屋の影に隠れるようにして、中年の男がこちらを窺っていた。

さすがに二十四時間ベンチに座っているわけではないか。

いや、どうやら俺の姿を見て離脱しようだ。

「ひっ」

目が合うと、男は後退りして逃げようとする。

「お、おい！ 待て待て。俺は追手じゃない」

「な、何故、私が追われていることを……？」

俺は両手を広げて敵意が無いことを示しながら、ゆっくりと近づいた。

「ええつと、あなたがウラジミールさんですね？」

「あ、ああ……」

俺が目の前に立つと、ウラジミールは何やら諦めたような表情で頷いた。

俺は敵じゃないって言ったのにな。

初っ端からこんなに警戒されるとは思ってもみなかった。

まあ、小柄な少年のバニラに比べれば、俺の方が恐ろしくも見えるか。

「早速ですが……黒づくめの男に追われていたりしませんか？」

「っ！ 何故、それを……？」

「そいつは俺の敵の一味の可能性があります。そいつの人相と、居場所に心当たりがあれば、教えていただけますか？」

ウラジミールはしばらく俺をじつと見据えていたが、やがて観念したかのように話し出した。

「人相はサングラスを常にかけていたのでよくわからない。ただ、最近ハッピーガーランドでよく目にするという秘密結社のような黒づくめのスーツを常に身に着けている。今も居るかはわからないが、私の経営している不動産屋の目の前にある『ジェームズ・イン』のバーから、うちの店を見張っていた」

「参考までに聞きますが、あなたが追われている理由は？ 何を見てしまったので？」

先ほどよりも長い時間迷った末に、ウラジミールは口を開いた。

「トロット楽団の野外ライブの前日の話だ。あの日はうちの不動産屋が定休日だね。翌日のライブ当日も街はお祭り騒ぎで、不動産屋に客なんて来やしないだろうから、まとめて連休にしたんだよ。久しぶりの休日だ。天気も良かったので、私はシラサギ河沿いの土手に釣りに出かけたんだが……」

前置きが長いが、正確に状況を把握するためだ。

我慢しよう。

「夕方になって急に天気が崩れて雨が降り出した。先ほどまでの快晴が嘘のような嵐がやって来たので、私は急いで釣り道具を片づけて、ネフロに取って返そうとしたのだが……雨風の勢いがあまりにも強く、私は近くの洞窟で雨宿りをする羽目になった。その時……」

俺やトロット楽団のメンバーはちょうど『ホテル・ジャコウジカ』に荷物を運び入れているときだな。

その数時間後には、ウミネコ海岸沖でバナラたちが乗るジュニパーベリー号がエルダーに撃沈される。

「豪雨と防風の向こうに見えたのだ。巨大な長距離キャノンアームを装備したビークルが、海の方に向かっていくのを！」

ウラジミールが見たのはそれだけだった。

確かに、彼が見たビークルはエルダーの「ホワイトレクイエム」で、ジュニパーベリー号を襲いに行く真つ最中だ。

しかし、彼の証言はエルダーの違法性に直結する内容ではない。

この話をどこかで口に出してしまい、ブラッディマンティス構成員も耳に入れてしまったのだろう。

ウラジミールも迂闊だが、こんな話でウラジミールを追う黒い服の男もいい面の皮だ。

そもそも「長距離キャノンアームを装備したビークル」という表現自体がややこしい。長距離キャノンは高価で強力なビークル用の武装だが、それほど珍しいパーツでもない。

ハッピーガンランドでは普通に流通しているし、原作キャラでもエルダーの他にフェンネルが愛用している。

むしろ、長距離キャノンアームはフェンネルの愛機「ブルー・サンダー」の代名詞だ。プレイヤーはウミネコ海岸ではフェンネルの「ブルー・サンダー」に襲撃されたことがあるので、余計に混乱するのだ。

エルダーの「ホワイトレクイエム」は長距離キャノンアームよりもう一つの武装エクスカリバーアームの方が目立つはずだが……。

一応、決定的な差となる情報を聞いておくか。

「ウラジミールさん、そのビークルは何色でしたか？」

「色？ 確か、白かったな」

ウラジミールが見たビークルは「ホワイトレクイエム」で確定だ。

「さて、知っていることは全部話した。君は、やはり私を殺すのかね？」

ウラジミールは寝ぼけたことを言っているが、これだけ聞けば俺の方も方針は決まった。

「ウラジミールさん。今すぐとは言えませんが、例の黒ずくめの男は俺がネフロに戻ったらいでに処理しておきます。始末がついたらもう一度ここに来るので、それまでは身を隠しておいてください」

「……ほ、本当に、私の味方なのかね？」

ウラジミールはまだ俺をブラッディマンティスの殺し屋と勘違いしているようだ。

「口で言つて納得してもらうのは難しいですけどね。あなたと顔を会わせたことはありませんし」

博士の家に住んでいる俺に、ネフロの不動産屋との接点などあるはずも無い。

「でも、例えば……俺の名前はあなたも聞いたことがあるんじゃないですか？」

「ん？ 有名人なのかい？」

「自分で言うのもなんですが、まあ最近ではそれなりに」

トロット楽団にも入ったし、ナツメッグ博士の弟子にしてSランクピークルバトラーの俺は、ネフロでは前からそこそこの有名人だ。

「俺はグレイといいます。ナツメッグ博士の助手です」

ウラジミールは目を見開いて俺を凝視した。

俺の顔を知らなくても、名前は聞いたことがあるらしい。

「あなたが……」

「先ほども言いましたが、その黒ずくめの男は我々の敵の一味です。処遇は俺に任せていただきますが、あなたの前に二度と姿を現さないように対処するつもりです」

ウラジミールはしばらく呆けていたが、やがて深々と頭を下げた。

「よろしく願います」

俺はウラジミールに強く頷いた。

さて、これでアレハーテ丘陵の雑用は一つ片付いた。

早速、次のイベントに行こう。

とはいっても、二つ目の要件もこの廃屋にあるんだけどな。

40話 廃屋のシスター、そしてレイブン砦に到着

俺は「ジャガーノート」のバックパーツに固定しておいた、水の入った大樽を下ろす。ポールは手伝いを申し出たが、丁重に断った。

彼の細腕では大した助けにはならない。

何より、絵描きが手を怪我でもしたら大変だ。

ビークルのバックパーツに積む樽は百キロ以上あるので、俺でも抱えて持ち上げるのは一苦勞だ。

気の利いた持ち手も無いので、下手をすれば落とす危険もある。

俺は安全のためにバックパーツの高さを下げて、地面を転がすようにして大樽を家の前まで運んだ。

一度ビークルに戻った俺は、ビークルのボディの横に引掛つてあつたキャンバスバッグを手取る。

中身は自分の分とは別に持ってきた保存肉だ。

これも手に持って廃屋の玄関に戻った。

「さて、居るかな……ごめんくださいー！」

俺は廃屋のドアをノックすると、奥の方から人の足音が近づいてくるのが聞こえた。

廃屋の扉が細く開き、頬がこけた修道服の女性が姿を現した。

不健康な目元と顔色は初めて会ったときのポールといい勝負だな。

彼女はこの廃屋で身寄りの無い子どもたちを世話している修行中のシスターだ。

彼女はここで三人の子どもたちの面倒を見ている。

孤児院と言うにはあまりにもポロい劣悪な環境だが、前の持ち主が残っていたベッドや家具があるだけ、この世界ではマシな方なのかもしれない。

「どちら様でしょうか……？」

シスターはかなり警戒している。

それも当然か。

ここには女性と子どもしか居ない

俺のような大柄な男が盗賊だったら一巻の終わりだ。

幸い、この世界に奴隷制度は無いようだが、それでも違法な人身売買が皆無というところはないだろう。

シスターにしてみれば、ここを訪ねる男は猛獣よりも危険な存在というわけだ。

「失礼、驚かせてしまいましたね。俺はナツメック博士の助手でグレイという者ですが、ここはあなたの孤児院で間違ひありませんか？」

俺はできるだけ穏やかな表情で話しかけた。

「……孤児院ではありません。私は、たまたま知り合つた身寄りのない子どもたちの面倒を見ているだけです。いえ、面倒を見るだなんておこがましい。こんな環境しか子どもたちに用意してあげられない、ただの無力な修道女でございます」

確かに、こんな水にも苦勞するような場所を拠点にするのはいただけいな。

恐らく、水や食料などの物資はシスターが徒歩で調達に行くのだろう。

荒野を何キロも歩いて。

「それで、今日はどういったご用件でしょうか？ 孤児院としての機能を期待なさつているのですしたら、これ以上の子どもを受け入れは不可能でございます。私たちもつい最近ここに住み着いたばかりですし、何より……」

「いや、そういった話ではありません」

正直、どんな形であれ宗教関係者とはあまり関わりたくないのだが、原作でも目にしたサブストーリーである以上、見て見ぬふりをするのは目覚めが悪い。

それに、この廃屋の子どもたちは、原作通りならば主人公がストーリー上で縁を結ぶ人や場所に引き取られていく。

何となく、処理しておいた方がよさそうな案件なのだ。

今までのこの辺りは訪れる機会が無くて放置していたが、砂漠行きのついでに多少は手を出してもいいだろう。

「シスター、まずはこれをお渡ししておきます」

俺は保存肉が入ったキャンバスバッグを差し出した。

「つー！ いただけるのですか!？」

「ええ、そのズタ袋の中身は干し肉や燻製の類です。あと、外に水も運んでおきました」
シスターは扉を先ほどより大きく開くと、玄関前に置いてある大樽を目にして信じられないといった表情を浮かべた。

「あと、少ないですが、とりあえずはこれだけ……」

俺はシスターに銀貨や銅貨で合わせて1万URほど入った袋を押し付けた。

「ああー！ 何と慈悲深い……。あなたは神が遣わした救い主だったのですね」

残念ながら、俺の神に対する好感度はどちらかと言えばマイナスよりなただけだな。

チートも安全策も無く異世界に放り出してくれやがったことは決して忘れない。

「グレイ様。先ほどの無礼な言動、平にご容赦を。神の代理人に向かって、私は何という

……」

「あ、いや……。そういうのは勘弁……」

「もし、許していただけるのでしたら、このような場所で恐縮ですが、誠心誠意、歓待させていただきますので……」

「っ！」

シスターはやつれてはいるものの若い年ごろの女性だ。

そんな人が頬を赤らめながら俯いて緊張に手を震わせている。

彼女の言う歓待が何を意味しているかは明らかだ。

「……いや、それは結構」

「わ、私ではご不満ですか……？　でも、他に差し出せる人間は……」

うん、まあ……正直、修道服の上からでもわかる痩せすぎの身体にはご不満だけど、それを口に出すほどクズじゃない。

「子どもたちも居るでしょう？　さすがに見られて喜ぶ趣味は、俺には無いんですよ」

「っ！　そ、そうですね……。すみません、私ったら、はしたないことを……」

どうにか失礼なことを言わずに躲けたな。

まあ、こんな娯楽も刺激も無い辺鄙な場所に住んでいれば、シスターとしても色々溜まるだろうが、そこは頑張って自分で処理してほしい。

水の入った樽を家に運び込み、ようやく俺は「ジャガーノート」に戻って、レイブン

砦への旅を再開した。

あの後、シスターに許可をもらって、子どもたちとも話をさせてもらった。

子どもたちの詳細はほぼ原作と同じで、ピークルバトラー志望のわんぱく少年リック、読書好きの秀才少年ロバート、花が好きな少女フローラの三人だ。

この三人の子どもたちは、主人公の仲介でそれぞれの場所へ旅立って行く。

彼らを引き取ってくれる人物と縁を結ぶためには、フローラ以外は原作のシナリオをもう少し進めなければならない。

リックの行き先はスームスームだし、ロバートの場合もハッピーガーランドと往復する必要があるのだ。

そうなると今は時期が悪い。

どちらにせよ、もう少しストーリーを進めないとな。

俺が渡した金と物資で、しばらくの間は彼らも食うに困らないだろう。

時間が取れたときには、俺も様子を見に行くようにしよう。

「ここがレイブン砦ですね」

「ああ」

隣の助手席に座るポールに返事をしつつ、俺は砦を眺めた。

そういえば、ゲームではバナナがレイブン砦に到着するのと同時に、アウトローの

ビークル乗りダッドリーに喧嘩を売られるんだったな。

もうバナラが制圧したのだろうか？

「……グレイさん？　どうかしましたか？」

「ん、いや、何でもない。入るぞ」

「はい」

俺はビークルを進めて砦の扉を潜った。

次の瞬間……。

「てめえ!!　何だ、その目は!？」

「うわわわ!　僕なんにもしてないですよ……」

「黙れや!　腰抜けの癖に、調子乗ってんじゃねえぞ、オラア!!」

赤い四足タイプのレッグパーツを装備したビークルが、緑のビークル目掛けてソード

アームを振り下ろすところが目に入った。

轟音と共に弾け飛んだビークルの破片が、砦の敷地内に散乱する。

砦の中の人々は盗賊ビークルが侵入できない安全圏であるはずの砦内で起こった惨劇に言葉を失っている。

レイブン砦はガラガラ砂漠の入り口に位置する交易拠点であり、近くには遺跡のダン

ジョンも存在する最前線だ。

当然、砦には荒つぽいビークル乗りや労働者が日常的に出入りし、人間同士にビークル同士の喧嘩も絶えない。

しかし、砦のど真ん中で派手にやらかせば、騒動に慣れた人々もさすがに足を止めて注目する。

「う、あ……」

緑のビークルに搭乗する人物から呻くような声が聞こえた。

彼の名は腰抜けジミー。

バナラがネフロ闘技場で代役を頼まれたときの、本来出場するはずだったビークルバトラーで、バナラがレイブン砦に来たときにちょうどダッドリーにボコられていたビークル乗りだ。

ジミーの視線は目の前にばら撒かれた大量の破片に向けられている。

そう、大量の赤い（・・・）破片に。

先ほど、俺が咄嗟にチェーランガンアームを起動し、ダッドリーのビークル【レッドタランチュラ】のアームパーツの付け根を狙って掃射したのだ。

「くそっ！ 誰だ!?!」

ソードアームを失った【レッドタランチュラ】を立て直しながらダッドリーが吠える。

しかし……。

「ぐおー！」

ダッドリーの「レッドタランチュラ」はバランスを崩して再び体勢を崩した。当然だ。

先ほどソードアームの付け根を吹き飛ばした後、続けざまにレッグパーツも撃ち抜いたからな。

「レッドタランチュラ」のレッグパーツは四足なので立っていられるが、二足歩行タイプならば既にひっくり返っている。

シユナイダーのレベルなら俺の放った弾丸を躲けていただろうが、ダッドリー程度のビークル乗りならこのザマだ。

「てめえ……」

「ダッドリー！ まだ懲りないのか!？」

ビークルの損傷を無視してダッドリーは俺に向かってきたが、そこに一台のビークルが近づいてきた。

バナラの「カモミール・タイプⅡ」だ。

搭乗するバナラは珍しく険しい表情だ。

先ほどの怒声もバナラの声だったが、彼がここまで声を荒げる場面なんて初めて見た

な。

「ちきしょう……覚えとけよ！」

ダッドリーは壊れたレッグパーツをどうにか動かして、野次馬の中心から去って行った。

「助かりました。お二人とも、ありがとうございます。バナラさんには、二度もご迷惑をお掛けして……」

「いやいや。ジミー、君が無事で何よりだよ」

「ああ、俺の方は実害が無かったから、気にしないでいい」

ジミーの礼に軽く返し、俺はバナラに向き直る。

「どうやら、さっきのビークル乗りはバナラが既に痛い目に遭わせたようだな」

「うん。砦に入ったら、いきなりジミーが吹き飛ばされてきて、僕もダッドリーにビークルバトルを仕掛けられたんだ。こっちはコニーも乗ってるっていうのに……」

それで先ほどのバナラはいつもよりキレていたのか。

まあ、同乗者を危険に晒されればムカつくよな。

俺ですら、今はポールを乗せているので荒事は最小限にしたい。

ましてや、バナラのビークルの助手席に乗っているのは、彼の運命の相手であるコ

ニーだ。

そりや、同乗者への危険もお構いなしにバトルを挑んできたダッドリーへの印象は最悪だろうな。

「凄かったんですよ。バナラさん、終始ダッドリーを圧倒して……」

どうやらジンジャーの教えは活きているようだ。

ダッドリーなどナツメグ博士とジンジャーの指南でパワーアップしたバナラの敵ではない。

ここでバナラはようやく俺とジミーの面識が無いことを思い出したようで、改めて紹介を始めた。

「グレイ、彼はジミーといって、ネフロの闘技場のビークルバトル選手だったんだ」

うん、知ってる。

今はまだ、ジミーが本当に腰抜けだということも知っている。

しかし、ジミーは俺のことを知らないはずなので自己紹介しておこう。

「俺はグレイだ。ナツメグ博士の助手をやっている」

「え、グレイって……まさか、Sランクの!？」

ジミーもネフロ闘技場の選手だけあって、同じ街でSランクに認定された俺のことは知っていたようだ。

4 1 話 砂漠の商人と暗殺の準備

ジミーとポールと別れた俺たちは、砦の隅の駐機場で今後の予定を話し合うことになった。

「それにしても、グレイは思ったよりも来るのが早かったね。野暮用とやらは終わったのかい？」

「まあ、一段落はした。一応、これからこの砦で準備を整えて、俺も砂漠に出ようと思っているよ」

俺がバナラに答えると、今度はコニーが疑問を投げかけてきた。

「それで、グレイが合流できたってことは、ここからは一緒に行くの？」

「いや、恐らく、君たちとは別のルートになるだろう」

悪いが、俺にはやらなければならないことがある。

生身で砂漠を渡ろうとするポールのお守りもそうだが、他にもバナラたちより先回りして片付けたい案件があるのだ。

「そっか……」

「ああ。それで、ハッピーガーランドへ向かうルートなんだが……」

ここからハッピーガーランドへ行くには、砂漠を超えてオアシスを経由し、コンドル砦を通る必要がある。

原作では、ガラガラ砂漠のマップは円形のような四角形っぽい形で、カワセミオアシスは砂漠のど真ん中に位置する。

ここレイブン砦とハッピーガーランド方面に続くコンドル砦の位置関係は、大体隣りの頂点同士——弧で言う九十度——だ。

ゲームで初めて砂漠を超えるストーリーイベントは、一旦オアシスのある砂漠の中心に向かい、翌日にオアシスを出発してコンドル砦に向かう、というルートだ。

普通に考えてマップの端を通って真っ直ぐコンドル砦に向かった方が早い。

オアシスを経由するルートが砂漠マップの半径 r を往復して $2r$ の距離を移動するのに対し、砂漠マップ外周を通る場合の移動距離は直径 $\times \pi$ の四分の一、すなわち $1.5r$ ほどだ

しかし、現実の砂漠がどれだけ歪な地形をしているか全く予備知識が無いうえに、砂漠の盗賊団デザートホーネット団以外にもどんな危険が潜んでいるかわかったものではない。

初めてガラガラ砂漠に足を踏み入れるのならば、砂漠地帯での行動に慣れた案内があ

り、既に開拓されているルートを通ることが望ましい。

俺のビークルは低燃費で増設燃料タンク付きなので、多少の道草で遭難したりはしないだろうが、汎用ビークルに乗るバナラたちは別だ。

彼らは砂漠で立ち往生などしたら命取りになる。

俺は原作知識の件は伏せて、案内人の必要性をバナラとコニーに伝えた。

「——そんなわけで、単身で砂漠に乗り込むより、どこかのキャラバンに同行した方がいい。せめて君たち二人だけでも」

「それはわかったけど……でも、そう都合よく案内してくれる人なんて……」

「なあに、すぐ向こうから寄ってくるさ。何せ、君はあのダッドリーを見事に下したんだからな。ほら、噂をすれば……」

俺たちが休憩するベンチに、いかにも砂漠の民といった風情の装束を着た小太りの男が近づいてきた。

「き、君！ さっき、そこで見事なバトルをしていたビークル乗りだろ。うちのキャラバンを護衛してくれないか？」

小太りの男の名はデルセン。

つい最近に起業した、砂漠を渡るキャラバンを所有する、デルロツチ貿易の社長だ。

ゲームでは、彼のキャラバンの護衛を引き受けて、砂漠の商人プレートを購入してビークルに装備しないと、レイブン砦から砂漠に出ることができない。

二回目以降は単身でも別のプレートを装備していても出られるので、完全にストーリー進行の都合で作られたイベントだ。

現実では、そんな護衛依頼などの事情が無くても砂漠には出られるはずなので、別にバナラがコニーも乗っている状態で危険な仕事を引き受ける必要は無い。

しかし、ガラガラ砂漠はゲーム内の描写よりも広大で、初めて足を踏み入れるとなれば想像以上に過酷な場所になる可能性がある。

護衛を引き受ければ、デルセンたちはバナラにとっては有能な案内人となるだろう。

「君みたいなビークル乗りに出会えるとは、チャンスのお女神は私を見放してはいなかった！」

デルセンは一人で舞い上がって続ける。

「砂漠を超えてコンドル砦へ行きたいんだが、無事に送り届けてくれたら……」

デルセンの提示した報酬は、現実のこの世界の相場と照らし合わせても、決して理不尽なものではなかった。

「でも、何で僕に？ グレイの方がずっと強いけど……」

「あ、いや……私もグレイさんに頼めるものなら頼みたいけどね……」

デルセンは俺の方をチラ見しながら言葉を濁したが、敢えて俺に護衛を依頼しない理由は明らかだ。

俺はナツメツグ博士の身内でSランクビークルバトラー——トーナメント外だがチャンピオンを下した経験もある——にして、盗賊の討伐においてもこの近辺どころか国全体でも屈指の功績があるビークル乗りだ。

デルセンも部下に聞いたのか俺のことを知っているようだ。

はつきり言つて、俺は上場して間もない中小企業の貿易会社だが、キャラバンの護衛などに専属で雇えるレベルのビークル乗りではない。

俺に護衛を依頼して元を取るためには、この数倍の規模の編隊での取引が必要だろうな。

俺はデルセンに向かって意味ありげに微笑み、バニラに助言した。

「バニラ、引き受けるといい。どちらにせよ、俺は用事があるから別行動になる。コンドル砦で合流できるかもしれないが、それまでは別のルートだ。デルロツチ貿易のキャラバンについていけば、砂漠で迷うことも無いし、小遣い稼ぎにもなるだろ？」

「……そうだね、わかった。コニーもいいかい？」

「うん」

バナナはデルセンの方へ向き直った。

「デルセンさん。護衛の話、引き受けます」

「本当かい!?! いやあ、助かるよ。おい、出発の準備だ！ 各自、商品の積み込みを開始しろー！」

デルセンは小躍りしながら喜んだ。

「では、出発は六日後だ。それまでに、各自装備を整えてくれ。うちのキャラバンもそれまでには商品の選別と積み込みは終わるだろう」

さすがに現実ではゲームのようにその日のうちに出発はできないか。

まあ、デルセンたちもいつ砂漠に出られるかわからない状況だったのだから当然だな。

商品だけビークルに積み込んだところで、護衛が見つからず足止めを食らい続けたら、品物がダメになってしまう。

「ヤッ……」

俺はデルセンに近づくと、小声で耳打ちした。

「(デルセンさん、バナナの腕は保証しますよ。何せ、俺と同じ師に教えを受けたビークル乗りですから)」

「(そ、そうだったんですか……)」

「バナラもナツメツグ博士とジンジャーにビークルの指南を受けているので嘘はついていない。」

まあ、詳しく説明するつもりはないけどな。

特に、ジンジャーに関しては極秘事項だ。

「(それで、ものは相談なんですが……)」

「(は、はい!)」

デルセンは脂汗を流して緊張している。

大方、俺が弟子も同然のビークル乗りを融通してやった見返りに、何を要求されるのか警戒しているのだろう。

確かに、俺の要求は簡単に呑める類のものではないな。

「(砂漠の横断ルートの情報を手に入れてもらえませんか? キャラバンの使う各ルートと、徒歩やラクダで砂漠を超えるルート、その両方が記された地図などあれば最高ですね。あと、デザートホーネット団のアジトへのルートも欲しい)」

「(なっ?!) そ、それは……)」

ポールにも六日後まで砂漠に出るのは待つように伝えてある。

遠慮するポールに強引に滞在費を押し付け、レイブン砦の宿泊所に泊まらせた。

何故かといえば、六日後にはデルセンのキャラバンだけでなく、ほかの商隊もコンドル砦に向かって出発するのだ。

ガラガラ砂漠はデザートホーネット団の庭だ。

単体のビークルならまだしも、大所帯のキャラバンは気づかれずに通り抜けることはほぼ不可能だ。

それならいつそ、同業者と示し合わせて同時に出発し、別ルートを行くことで襲撃してくる盗賊の戦力を分散させ、近い場所と同業者が襲われていたらお互いに援護し合うというが、砂漠の商人たちの盗賊対策らしい。

商売ではライバルでも、盗賊団は彼らにとつて共通の敵だ。

砂漠の商人に、この協定を破る者は居ない。

ポールもできることならその波に乗った方がいい。

一応、バナラたちと別行動する俺はポールを護衛してやるつもりだが、さすがに生身でデザートホーネットに襲われる奴を守るのは簡単じゃない。

少しでもリスクを減らした方がいいだろう。

「先に言っておきますが、俺は皆さんと競合する気はありません。盗賊団に対して優位に立つために利用したいのですよ」

「(……………)」

「(見返りは、六日後の旅路がより『蜂』の少ない快適なものになることですね)」

「(……ほかの商人に相談してもよろしいでしょうか?)」

「(もちろん。いい返事を期待しますよ。ただ、地図に関しては一般ルートとデザートホーネット団の砦へのルートは絶対条件です)」

「(わかりました)」

これならデルセンや他の商人たちも受け入れやすいだろう。

万が一、バナラたちが窮地に陥ったときのために、キャラバンのルートも把握しておきたいが、主語はポールが使う予定の一般ルートとデザートホーネット団のアジト方面へのルートだ。

さて、ハッピーガーランドの定期演奏会のお披露目まで二週間。

順調にいけば十日ほどでハッピーガーランドに着くだろう。

ギリギリだが、どうにか間に合いそうだな。

そして、出発までの六日間。

何もせずにレイブン砦で時間を潰すのは勿体ないと思い、俺は早速ネフロ近辺のイベントを片づけることにした。

「じゃ、俺は明日には一旦ネフロに戻るから」

「わかった」

「うん、行つてらっしゃい」

砦に一泊した俺は、バナラとコニーに見送られてレイブン砦を出た。

最初の仕事はウラジミールを追うブラッディマンティスの処理だ。

ウラジミールを追っているブラッディマンティスの男は、不動産屋の向かいにある宿『ジエームズ・イン』に泊まっている。

男は大抵宿の一階の酒場スペースに入り浸っており、いつウラジミールが帰ってきてもいいように張り込みをしている。

とはいえ、奴も四六時中同じ場所で張り込んでいるわけではない。

単独での行動である以上、切れ間なく監視することはハナから諦めているようで、深夜を過ぎれば寝室に戻るはずだ。

今もどこかに出かけているようで、ウラジミール不動産周辺に黒ずくめの男の姿は無かった。

何だか、執拗にストーカーしている割にはザルだな。

まあ、俺にとっては都合がいい。

「いらっしゃい。おや、 그레이さん。お泊りですか？」

俺が宿に入ると、主人のジエームズが声を掛けてきた。

どうやらブラッディマンティスの男は居ないようだ。

黒い服を着た男はどこにも見当たらない。

「いや、今日はちよつと頼みがありましたね」

「はいはい、何なりと」

俺は気のいい主人に耳を寄せるように言い、カウンター越しに顔を近づけて密談をする。

「最近、酒場に黒ずくめの男が居座っているでしょう?」

「ああ、はい。あのずつと飲んでるお客さんですね。お知り合いですか?」

あいつ、見張り中にずつと酒を飲んでいたのか。

本当にポンコツだな。

「ああ、まあね。あいつが迷惑を掛けて、申し訳ない」

「いやいや。まあ、確かに、あの不穏な風貌で居座られると、他のお客さんが飲みにくくはなりますが……それでも、毎晩お酒を注文していただいているので……」

そうでしょうね。

たとえチンピラのレベルだったとしても、ヤクザ者と言うのは善良な一般市民にとつて恐ろしい存在だ。

「で、頼みというのは、あいつのことなんだが……」

「何です？」

俺はジエームズの前に銀貨をジャラジャラと押しやった。

カウンターに小山を作る銀貨は、どう見ても俺が今注文する酒代の量ではない。

「えつと、グレイさん？　このお金は……？」

「あんなナリをしているが、あいつは女に振られてヤケ酒をしているただの可哀想な男でしてね。何も言わず、強くて酔える酒を出してやってくれませんか。迷惑料も兼ねて、これで……」

「なるほど。承りました」

ジエームズはあっさりと言葉を信じた。

これであの黒ずくめの男は確実に今夜ベロベロになる。

最悪、強襲することも視野に入れていたが、できれば穏便に拘束と誘拐を済ませたい。

我ながらいい案だろう。

そして金の力は偉大だ。

「ああ、俺のことは伝えなくてください。あいつ、酔いが醒めると妙に義理堅くて……気を遣わせてもやりにくいんで……」

「はい、わかりました」

さて、黒ずくめの男が戻ってくるまで待つか。

この計画が上手くいけば、俺は友達想いのいい男という評判のまま、ブラッディマン
ティスの手先を一人暗殺できる。

4 2 話 暗殺

俺はウラジミールを追う黒い服の男を排除する作戦を実行に移した。

ゲームでは明言されていないが、この男はブラッディマンティスの構成員で間違いない。
い。

奴はウラジミールがエルダーの「ホワイトレクイエム」について何か知っているのではないかと思つてつけ回している。

ウラジミールは嵐の日にウミネコ海岸方面に向かう「ホワイトレクイエム」を見ただけで、違法性を立証するような情報は持つていない。

しかし、彼はどこかで口を滑らして「長距離キャノンアームを装備した恐ろしいビークル乗りが……」などと語つてしまい、その話を耳にしたブラッディマンティス構成員に目を付けられることになったのだ。

不幸な行き違いだが、あのブラッディマンティスの下っ端に説得が通用すわけがない。
い。

原作のウラジミールのサブイベントの進め方次第では、黒ずくめの男がウラジミール

を尋問して誤解を解くルートもあるが、現実では馬鹿がどうエスカレートするかわからないので、そんな危険は冒せない。

俺が表立って堂々とブラッディマンティスと対話を試みるなんてのもバカげた話だ。黒ずくめの男は排除させてもらおう。

これは決定事項だ。

原作の一般的なルートでは、ウラジミールの前に黒ずくめの男が姿を現したところで、ウラジミールの妻の通報で駆けつけた警官の横槍が入り、男は捨て台詞を吐いて退散する。

ゲームでは、ウラジミール関連のサブイベントはこれで終了するが、現実ではそれで済む保証など無い。

後顧の憂いを断つためにも、黒ずくめの男の暗殺は必須だ。

できれば始末する前に拷問して情報も取りたい。

まあ、ボスの情報が漏洩するかもしれない状況で呑気に酒を飲んでいる下っ端が、どれほどの有益な情報を持っているかを考えると、高望みしない方がよさそうだが……。

宿屋の主人ジェームズには、黒ずくめの男は俺の知り合いだと偽って、多額の金を渡して強い酒を出してやるように頼んだ。

泥酔した黒ずくめの男が、酔い覚ましに散歩にでも出れば、こつちのものである。

そのまま拘束して、後は煮るなり焼くなり、いくらでも拷問と隠蔽ができる。

顔見知りのジェームズを何も知らせないまま利用するのは少々気が引けたが、彼に事情を話したところでどうしようもない。

危険に巻き込むだけだ。

その日の夜、俺はウラジミール不動産の横の路地から『ジェームズ・イン』の一階の酒場を窓から監視した。

現代のように区画が厳密に管理されたうえで建てられたわけではない街並みは、ビークルどころか徒歩でも歩きにくい道があったりして不便なこともあるが、ちよつとした隙間に身を隠すことができるという利点もある。

俺はウラジミール不動産の店舗と隣の建物の中に身を潜めるようにしているので、ほとんどの通行人は俺に気付かず去ってゆく。

たとえ俺の姿が目に入ったところで、懐中時計を時々確認しつつ壁に背を預けて立つ男を気にする人間は少ないだろう。

しかし、長いことここに居座るのも不自然だ。

何より暇すぎるな。

喫煙者なら煙草をふかしていればいくらでも時間を潰せるのだろうが、残念ながら俺

は吸わない。

この調子で待ち続けられるのは二日が限度だな。
できれば今日中にターゲットを始末したいものだ。

「くう！ 飲み過ぎた……」

俺の祈りが通じたのか、黒づくめの男は飲み始めるとすぐに宿屋から出てきた。

どうやらジエームズは彼にとびきり強い酒を勧めてくれたようで、男は俺に気付くことなく千鳥足で水路の方へ向かう。

どうやら夜風に当たりに行くようだ。

「つと、その前に……」

「つー！」

男は急に方向転換して、俺が居る路地の方に歩いてきた。

一瞬、監視がバレたのかと思いき、俺はシオルダーホルスターの拳銃を抜きかけた。

この時間は人通りが少ないとはいえ、街中で銃をぶつ放せば騒ぎになつて警官が駆けつける。

しかし、背に腹は代えられない。

相手はブラッディマンティスだ。

向こうも武装している可能性があり、手加減などしてはこちらの命の保証が無い。

秘密裏に始末することはできなくなるが、それなら覚悟を決めて堂々と撃ち殺すしかないだろう。

俺はリボルバーのグリップに手を掛けて、男が近づくのを待った。

しかし、男は俺に気付かず路地の横の排水溝の傍に立つ。

ゴソゴソと布の擦れる音が聞こえ、次いで水音が路地に響いてきた。

どうやら男は立ち小便をしているようだ。

チャンスだ。

男は酔いが回っており、さらに気が抜けている。

俺は拳銃から手を放し、慎重に男の後ろへ忍び寄った。

向こうは俺に気付く様子はない。

普通なら気配で気付く距離だが、男はベロベロに酔っぱらっているので、今も呑気に口笛を吹いている。

俺は一瞬だけ攻撃手段の選択で迷った。

可能ならば男は生け捕りで拘束し、始末する前にブラッディマンティスの情報を吐かせたい。

しかし、現実では首筋に手刀を落としたりとところで人間は簡単に気絶などしないし、意打ちで頭を思い切り殴るのも考えものだ。

興奮状態でなければ頭部への衝撃で気絶する可能性はあるが、一撃で上手くいかなければ何度も殴る必要がある、その場合は男が死んでしまうこともあり得る。

そうになると、一番効果がありそうなのはスリーパーホールド——いわゆる裸絞め——だが、上手く頸動脈を絞められないと手際よく気絶させることはできない。

そもそも、後ろからとはいえ、相手に接近して攻撃を仕掛けるのは危険だ。

わざわざ銃で武装しているアドバンテージを捨てる必要は無いのではないか？

「さて……」

男がズボンをずり上げて振り返ろうとした。

俺は先ほどまでの逡巡を頭から追い出し、一気に接近して男の首に腕を巻き付けた。

「なん……ヴえー！」

左腕を男の喉に回し、左手で右の上腕を掴んで男の首を締め付ける。

男の脚を後ろから蹴り下ろして膝をつかせた。

正面からなら逆関節で膝を破壊できたが、今のはせいぜいダイナミックな膝カックンなので、抵抗する男の機動力と体の安定を奪っただけだ。

「ぐ……ヴお……」

俺の柔道の経験など学校の体育の授業程度なので、当然ながら頸動脈だけを綺麗に締め付けて落とす技術など無い。

とにかく首の横と気管を同時に絞め上げる。

もつと力を込めれば首の骨など折れそうだが、それをやったら危険を冒してまで接近して生け捕りを試みたのが台無しだ。

「が……げはっ！」

やはり俺の技術では頸動脈を上手く絞められなかつたらしく、男は未だに意識を失わずに咳き込んだ。

このままでは埒が明かない。

俺はこれ以上同じ体勢で密着し続けることに危険を感じ、男の尾骶骨に膝蹴りを叩き込んだ。

「ぎっ……」

僅かに骨を砕いた嫌な音が俺の耳にも届く。

そのまま首を絞めていた腕を外し、男が逃れようとする前に頭を掴むと、横の建物の壁に叩きつけた。

「べあっ……やめ……」

あまりやりすぎても男が死んでしまう。

二、三回叩きつけたところで頭部への攻撃をやめると、俺は男を地面に引き倒し、右手を踏みつぶした。

「ぐぎえあー！」

痛みよりも自分の骨が砕かれる音に恐怖した男は、喉から絶叫を絞り出す。

あまり騒がれて警官が駆けつけても面倒だ。

俺には身元の保証と警察にも無視できない功績があるので、その場で逮捕されることは無いだろう。

しかし、さすがに人を拷問して撃ち殺すことが容認されるかといえは難しい。

「くそっ……うるせえ」

男を黙らせる効果的な方法は思いつかなかったものの、頭を蹴飛ばしてやったら男の抵抗と絶叫はピタリと止んだ。

どうやら、今の蹴りがラッキーな一撃となって気絶したようだ。

男の意識は完全に刈り取られたらしく、サングラスと帽子が飛ばされた顔は目が閉じたままだった。

「はあ……手間取ったな」

こんなことならスタンガンでも作っておくんだった。

これから先も今日のような敵を生け捕りにしたいシチュエーションに遭遇するかはわからないが、いざというときのためにナツメツグ博士に頼んでおいた方がいいかもしれない。

気を取り直して、俺は男の背広を脱がし、腰回りや足首からズボンの裾の折り返しの裏に至るまで、綿密にボディチェックを行った。

拳銃やナイフが出てくるかと思つたが、そのようなガチな武装の類は無く、ズボンのポケットにプラスチックが入っていただけだ。

まあ、これも立派な凶器ではあるが、どちらかというところチンピラが喧嘩で使うものだ。この男の階級は予想よりもさらに下なのかもしれない。

俺は一度ビークルに戻り、事前に準備してあつた細いチェーンで男を縛り上げた。

両足を縛って芋虫にしたら、両手を後ろに回して手首の部分にチェーンを巻き付ける。

発見できていない武器が残されている可能性を考慮し、男の上半身は全て脱がせた。傍から見れば、俺はホモの変質者だな。

不名誉な評判が立つ前にこの場を去ろう。

俺は男に巻き付けたチェーンの部分を持つと、気絶した男の体を手に提げてビークルに向かった。

男をビークルのバックパーツに括りつけて向かったのは、街外れのごみ集積場だ。ゴミの運搬と処理のときのブルドーザーの役割も、この世界ではトロットビークルが担っているが、この時間は作業員もビークル乗りも見かけない。

人目に付かないように男を拷問して死体を処理するにはうってつけというわけだ。俺はビークルから未だに意識を取り戻していない男を下ろすと地面に投げ捨てた。その程度の衝撃では意識を取り戻さなかったので、背中を蹴って喝を入れる。

「ゴあつー！ ゴホつ……」

黒ずくめの——今は武装解除のため上半身裸——男は咳き込みながら意識を取り戻した。

「……は……？ つー」

男は俺の顔よりも手に持ったナイフを見て声にならない悲鳴を上げた。

後ろから制圧したので俺の顔はほとんど見ていないはずだが、俺の雰囲気と刃物が向けられていることで、自分の味方ではないことを悟ったのだろう。

「どうやら喋る元気はありそうだな。手間を掛けさせるなよ」

俺がナイフの刃先を喉に向けると、男はコクコクと頷いた。

「お前はブラッディマンティスの構成員だな？ 階級は？」

「じ、上級社員だ」

原作通りなら、下から二番目だ。

どうやら本当に小物だったようだな。

しかし、俺は男を煽ててみる。

「ほう、昇進したのか。実績があつたのか？」

「いや、俺は……入社したのが結構早かつたから……」

「昇進したのはいつだ？」

「……つい最近だ」

それで一階級だけとは、やはり無能の匂いがする。

しかし、それではこいつがエルダーのピークルを知っている理由の説明がつかない。

エルダーはブラッディマンティスの裏の総帥であるセイボリーのさらに上位の存在、いわば黒幕で影の支配者だ。

その存在を知っているものは、結社の中でも多くはないだろう。

こいつはエルダーと彼のピークル「ホワイトレクイエム」が自分たちの関係者であることを知ったうえで行動していた。

下っ端の中でも最低ランクのこいつが、何故にエルダーのことを知っているのやら。

「何故、ウラジミールを追っていた？」

「それは……」

男は口籠ったが俺は続ける。

「質問を変えよう。何故、お前は『ホワイトレクイエム』のことを知っている？」

「っ！ あなたは、もしや……」

男は急に態度を変えて蒼白になった。

「も、申し訳ありません！ 自分は、立ち聞きなどするつもりはなく……」

「どうやらこの男は俺もブラッディマンティスの関係者で、上層部の情報を不正に入手した自分を肅清に来たものだ」と勘違いしているようだ。

都合がいいので、このまま話を合わせてみよう。

「お前はエルダー様のことを知っていい立場ではないな？」

「はい……ですが、わざとではないのです」

「とりあえず、聞いてしまった内容といきさつを全て話せ。正当な事情があれば、肅清は勘弁するよう上に掛け合つてやろう」

俺の空約束で男の目に光が戻った。

「はい、ありがとうございます！ ……ベルガモット様のお部屋の前を通つたときに聞こえたのです。どうやら総帥はコンフリー参謀とお話しされているようでしたが、そ

ここでエルダー様が我が結社の協賛者のような立場であるという話が聞こえました。自分がエルダー様とわが社の関係を知ったのはその時です。ですから、自分はおの方に関して不利な情報を握っている者を調べようと……」

何となく読めてきたぞ。

こいつは階級の低さとは関係なく、偶然にもマヌケなお飾り総帥ベルガモットの話を立ち聞きし、エルダーがブラッディマンティスの上層部と繋がりがあつたことを知つた。

それでエルダーに関する情報を持っていると思わしきウラジミールを調べて、功績にしようと企んだわけか。

まあ、どちらにせよウラジミールは有益な情報を持っているわけではないので、ハナから当ては外れているんだけどな。

「そうか、お前は結社に害を成そうとしたわけではないのだな？」

「それはもちろん！」

男は媚びるような笑みを浮かべた。

その後は今のブラッディマンティスの活動内容に関して男が知っていることを聞きだしたが、特に真新しい情報は無かつた。

ゲームをプレイ済みで事前に展開が読んでいる俺としては、期待外れもいいところ

だ。

やはり、下つ端ではこのくらいが限度か。

エルダーのことを知っていたのは本当は偶然なのだろう。

「あの……一つお聞きしたいのですが……」

「……………」

俺は沈黙で答えるが、男はお構いなしに言葉を続けた。

「何故、こんなに質問を？ あなたは上層部のヒットマンか死刑執行人では……」

「……お前がブラッディマンティスを裏切っていないか確かめるためだ」

そろそろ限界かな。

こいつは俺の素性に疑いを持ち始めている。

痛み慣れて時間が経ったことで、冷静に考える余裕が出てきているのだ。

俺は最後の質問をすることにした。

「ネフロでお前の他に活動しているブラッディマンティス構成員は？」

男は突如奇声を上げて飛び掛かってきた。

やはり、もう無理か。

「騙したな！ やはりお前は……っ！」

街外れの暗闇をオレンジ色の閃光が切り裂いた。

静まり返った無人のゴミ捨て場に、破裂音が僅かに尾を引いて響き渡る。

俺の手には一瞬でシヨルダーホルスターから抜き出された拳銃が握られていた。

銃口から薄く立ち上る白煙が風に吹かれて霧散する。

ブラッディマンティスの男は、俺の手の拳銃を凝視し、次いで力を失くした視線を足元に落とした。

「あ……」

銃声の木霊が完全に消えるのと同時に、ブラッディマンティスの男は崩れ落ちた。

男の額には黒い穴が空いており、後頭部は一部が消失している。

俺の拳銃はリボルバーで使用弾薬は現代でいうところの38スペシャル弾に似た弾だ。

こいつは軍用ライフル弾や自動拳銃のメタルジャケット弾と違い、弾頭には柔らかい鉛が露出しているホローポイント弾だ。

人体に打ち込まれた弾頭は内部で潰れ、組織を滅茶苦茶に破壊する。

拳銃弾の中でも現代なら威力は決して大きくない部類の弾だが、それでも至近距離から頭に打ち込まれれば、これだけの破壊を齎すことはできるのだ。

「はあ……まあ、これだけ聞き出せれば上出来か」

俺は男の死体を一瞥すると、拳銃をシヨルダーホルスターに戻した。

4 3話 サブイベント完了×3

翌日、俺はビークルでアレハーテ丘陵の廃屋に来ていた。

昨日は夜遅くまでドタバタしていたので疲れているが、キャラバンがレイブンを咎を出発するまであと四日。

無駄にできる時間は無い。

まずはウラジミールに男が消えたことを報告だ。

「そ、それでは！ 本当に、あの黒い服の男を追い払ってくれたんですか!？」

「ええ、もう奴がネフロに現れることは無いでしょう」

「あ、ありがとうございます！ 何て、お礼を言ったらいいか……」

ブラッドディマンティスの男は郊外のゴミ捨て場で撃ち殺し、死体は燃えるゴミと一緒に処理したが、生々しい話まで伝える必要は無いだろう。

ウラジミールは俺が男を説得したか権威をチラつかせて黙らせたかと思っているかもしれないが、そういった認識でも特に問題は無い。

目の前の男はごく普通の不動産屋で堅気だ。

今後、彼を必要とする場面は無い。

原作では、彼のサブイベントをクリアすることがジンジャーのサブイベントを始めるフラグになるが、俺はとうの昔にジンジャーと接触しており、既にバナラとも引き合わせている。

ブラッディマンティスの下っ端の始末が終わった以上、このおっさんは用済みだ。

「さ、早く奥さんに無事な姿を見せてあげるといい」

「はい。それでは、失礼します。このお礼は、いつか必ず」

ウラジミールは人前でエルダーのピークルに関してこぼしてしまう間抜けだが、彼の妻が居れば大丈夫だろう。

原作でも、ウラジミール不動産に黒ずくめの男が乗り込んできたときには、彼女はいち早く警察官を呼んで男を退散させていた。

このゲームに酷似した現実世界では、ウラジミールが今後絶対に安全である保障は無いが、少なくとも黒ずくめの男を始末したことで後顧の憂いを断つことには成功した。いずれ、暇が出来たらウラジミールの妻には事情を話してやるかな。

さて、この後はレイブン砦に戻ってもいいのだが……廃屋の子どもたちの件を少しでも片付けておくか。

廃屋でシスターと暮らす三人の子どもたちは、ゲームを進めるとバナナが知己を得ることになる人などに引き取られていく。

その中で、ネフロ周辺で話が済むのは、花が好きなメルヘン少女フローラだ。

彼女が引き取られるのはアレハーテ丘陵とピジョン牧場・ワグテール溪谷の間にあるジメツト湿地の奥に位置するミツバチ園だ。

ここでは小さな花畑農家が養蜂を営んでいる。

この農家からは俺も定期的に蜂蜜を大瓶で買っているので顔見知りだ。

原作では、フローラが今まで育てていた花が枯れていることを告げ、ミツバチ園の少女から花の種を貰い、フローラに種と水を届け、花が咲くまで待つて、手紙を届けて……と言った具合に、フローラが引き取られるまでの過程が非常に面倒くさい。

そこで俺は、この面倒なプロセスを省略することを考えたわけだ。

……まあ、実際には蜂蜜とミードを買いに行ったときに、農家の親父さんと世間話のついでに彼らの事情を聞いておいたただけだ。

親父さんはまだ小さな娘に同年代の友達が居ないことを心配していた。

もう一人、兄弟姉妹が居たらよかった、なんてことも農家の親父さんはこぼしていた。

まだるっこしいやり取りをしなくても、フローラが一度ミツバチ園を訪れてみればいいのではないか？

それで向こうがフローラを気に入れば解決だ。

俺は早速シスターにミツバチ園の農家のことを伝えた。

「そんなわけで、一度フローラちゃんにミツバチ園を見せてみたらどうでしょう?」

「なるほど……お話は分かりました。確かに、花が好きなフローラにとってミツバチ園は楽園でしょうね。しかし、ジメット湿地には恐ろしい盗賊団が出没するという話ですが……」

盗賊が出るのはこの廃屋の周辺も同じだが、シスターとしては我が子のように育てている子どもたちの遠出が心配なのも当然だろう。

「その点はご心配なく。フローラちゃんは俺のビークルに乗せて行きます。ただ……俺もこの件に何日も関わっていられるわけではないので、ミツバチ園に移住するかどうかは今日中に決めていたいただきたいのですが……」

一日くらいなら付き合えるが、それ以上は無理だ。

こちらでも早くレイブン砦に戻りたい。

「今日中ですか? それはまた随分と急な……。私はフローラ自身が納得できるのならばよいのですが、先方の都合は大丈夫なんでしょうか?」

「まあ、そこら辺はうまくいくと思いますよ。向こうの家の事情もあるんで」

ミツバチ園の農家の娘が同年代の友達を欲している事情もそうだが、最近あの農家は

花畑の面積を増やした。

その裏には、蜂蜜酒の品質向上とローヤルゼリーやプロポリスの生産量を増やしてもらうために、俺がビークルを使って花畑の拡張に手を貸していた過程があるわけだが。

農家としても、花畑の世話に積極的なフローラは、是非とも招きたい存在なわけだ。

数年後には、フローラが花畑の管理を任せられることになるかもしれない

俺としても、さらに美味しい酒が手に入り、貴重な生薬であるローヤルゼリーやプロポリスを博士に供給できるわけだ。

「……わかりました。 그레이さんを信じましょう。すぐにフローラの荷物をまとめます」

シスターが俺の提案を受け入れ、フローラのミツバチ園行きが決まった。

しかし、最初から片道が前提で話されると、さすがに俺が困惑してしまう。

「いいんですか？ 一往復くらいなら付き合いますよ」

「ええ、 그레이さんにはフローラがミツバチ園で幸せに暮らせるという確証があるのでしょう？ ならば問題ありません。あなたを信用していますから」

「……恐縮です」

フローラの私物は袋一つに納まる量だったので、引越しの準備はすぐに終わった。

シスターが檻樓切れから縫い直したと思わしき、着替えというにはあまりにも粗末な

装束と、スクラップから作った歪な形の小さなシャベルと如雨露、それに空のプランターだけだ。

プランターの中身の枯れた花も持つて行くと言うかと思つたが、どうやら死んでしまった植物は土に返すと自分で決めたようだ。

自分が飲む分の水をケチつて花にやっていたかと思えば、この物分かりの良さだ。

どうにも思考回路が理解できないが、まあ俺が気にしても仕方ないな。

ピークルのバックパーツにちよこんとフロローラの荷物を載せ、フロローラ自身は助手席に座つてもらい、俺はミツバチ園に向かった。

「では、よろしくお願いします」

「いやいや、こちらこそお世話になりっぱなしで……」

連れ立つて花畑の方へ向かったフロローラと農家の娘を見送つた俺は、養蜂家の親父さんにフロローラのことをくれぐれもと頼み、自分のピークルに戻つた。

あの調子ならフロローラもすぐにミツバチ園に馴染むだろう。

フロローラはミツバチ園に着くと、ピークルから荷物を下ろすのも忘れて花畑に駆けて行つた。

プランターの一輪の花さえ咲かない砂漠の近くに比べて、この湿地帯のすぐ近くの森

ではいくらでも植物が育つ。

まさに、フロローラにとつては夢のような光景だったはずだ。

彼女はミツバチ園の娘ともすぐに打ち解けた。

お互いに年齢の近い同性が近くに居らず退屈していたのだ。

やはり面倒な文通のパシリなどする必要は無かったな。

これでフロローラの件は体よくまとまった。

「さて、シスターに報告して、レイブン砦に戻るか」

俺は「ジャガーノート」のハンドルを操作し、ミツバチ園の出口に向かって歩を進めた。

しかし、農園を出て湿地に差し掛かったところで、俺は前方から接近するビークルに顔を顰めた。

「あれは……」

虫型四足のレッグパーツに赤いペイントの大型ビークル。

ミツバチ園にやって来たのは、レイブン砦のチンピラにして荒くれビークル乗りダッドリーが搭乗する「レッドタランチュラ」だ。

アームパーツの武器は前回見たときと違って火炎放射アームを装備している。

俺はようやくダッドリーのサブイベントを思い出した。

レイブン砦でダッドリーと初対面を果たしてからミツバチ園を訪れると、プレイヤーが到着したときには、ダッドリーは花畑と農家に火を放っている。

サブイベントの内容としては、ビークルバトルでダッドリーを撃退し、農家の連中を救出するというものになる。

しかし、ゲームの性質上どうやっても主人公がサブイベントを開始したときには、既に農家が半壊しているのだ。

俺が居るときにダッドリーが訪れるとは運がいい。

花畑に入る前にぶちのめさせてもらおう。

「くっそー……むしゃくしゃするぜ！ 砦のど真ん中で大恥をかかせやがって……」

「そりゃ、相手の力量を測らずに喧嘩を売ったお前さんが悪いな」

「なっ、てめえは！」

奇襲を仕掛けようかと思ったが、ダッドリーは本気で闇に葬って殺すべき相手ではないので、堂々と姿を現すことにした。

何だかんだで、ダッドリーはバニラのライバルとしてだけでなく、ストーリー終盤で力になってくれることもあるのだ。

まあ、俺だったらこんな面倒な奴と関わるのはご免だが、そこはバニラとダッドリー

の関係なので仕方ない。

それにしても、原作でダッドリーがミツバチ園で暴れていたのはこういう理由か。

今回は俺が原因だが、本来の展開ならバナラに負けて恥をかけたので、憂さ晴らしに弱い者いじめをしに来た、と。

「てめえ、グレイ！ あの時によくもやつてくれたな！ てめえのせいでレッグパーツの修理代が嵩んでスツカラカんだ！ 畜生!!」

「ははは、レッグパーツだけに足が出たってか」

現実のビークルバトルの野試合は、ゲームのようにクラッシュしてもバトルが終われば元通り、というわけにはいかない。

喧嘩っ早いビークル乗りがエキサイトしてビークルバトルの野試合を始めた場合、機体に損傷を負ったとしても、近くの整備場で金を払って修理してもらうしかないのだ。

俺のように最低限の修理技術を持っていればまだマシだが、ほとんどのビークル乗りが自分の機体の整備すらできない。

当然、ダッドリーもバナラとのバトルや俺の狙撃で負った機体のダメージは、レイブン岩内か近くの整備場で修理したはずだ。

こいつに修理代など余裕で出せるほどの稼ぎなどあるわけもなく……。

「くっそー！ もう、許さねえ！ この火炎放射アームで何か燃やしてやるつもりだっ

たが、てめえから先に片づけてやる！」

ダッドリーは湿地の泥を跳ね散らかして俺に突っ込んできた。

面倒くさいが、ミツバチ園がターゲットにならなくて助かったな。

「ぐ……畜生……」

ダッドリーとの勝負は一瞬で決着が付いた。

ミツバチ園を背後に庇うように立ち塞がる俺に、ダッドリーは火炎放射アームを起動させながら真っ直ぐ突っ込んできた。

当然、火炎放射器よりも俺のチェーンガンの方が初撃の速さは上だ。

そして、市販品の火炎放射アームはかなり単純なつくりをしており、燃料タンクが剥き出しになっている。

俺の真骨頂はチェーンガンによる正確な速射だ。

真っ直ぐに突撃してくるダッドリーはいい的だった。

こいつには学習能力が無いのかね？

レイブン砦で俺の武装と精度はよくわかったはずだが……。

俺のチェーンガンが火を噴けば、撃ち抜かれた火炎放射アームのタンクは爆散し、高熱の炎と破片は「レッドタランチュラ」自身のボディパーツを貫いてエンジンを大破さ

せた。

奇跡的にダッドリーは無傷だったが、ビークルは完全に立ち往生だ。

牽引用の装置を使えば人力でもビークルは引き摺ることができるとは、この湿地から運び出すのは大変だぞ。

いい気味だ。

「そのザマではここから先の上り坂は移動できないだろう。諦めて引き返すんだな」

「この野郎……」

ダッドリーは傾いたコクピットからこちらを睨みつけてくるが、俺は無視して「ジャガーノート」を発進させた。

ダッドリーはクラッシュした「レッドタランチュラ」を再起動させようと四苦八苦し
ている。

「おい、待てよー！」

「俺は次のキャラバンの出発と同時に砂漠を渡る。お前のビークルは……それまでに修理が間に合うかな？」

「くっ……」

こういう挑発をしておけば、ダッドリーは意地を張って俺たちを追いかけ、真っ直ぐに砂漠を超えてくるだろう。

もうミツバチ園には向かわないはずだ。

ダッドリーがミツバチ園を襲う可能性が無くなったので、俺は悠々と「レッドタランチュラ」の横を通り過ぎてアレハーテ丘陵の方へ向かった。

さて、ミツバチ園の件は全て片付いたことだし、廃屋のシスターに報告したら、一度バナラとコニーの居るレイブン砦に向かおう。

4 4 話 牙を研いで……

フロラーの件をシスターに報告した俺は、すぐにレイブン砦へ向かった。

喜ぶシスターの顔をもう少し見ていたかったが、せっかくフロラーのことが片道で済んだのだ。

早いところレイブン砦へ行つてバナラに合流しよう。

俺が砦の扉を潜りビークルを進ませると、入り口付近に居たビークル乗りのみならず市場の方からもこちらに注目する視線を感じる。

どうやら、先日のダッドリーの件の熱が未だに醒めないらしい。

俺もダッドリーをぶちのめした一人なので、こうして注目されるわけか。

しばらく周辺を見回していると、整備場の方からバナラのビークルがやって来た。

「グレイ、戻ってきたんだね」

「ああ、用は済んだ。コニーは一緒じゃないのか？」

「うん、コニーは市場を見に行つてる」

「おいおい……そこは荷物持ちで同行して、ついでに何かデートの記念に買ってやると

ころじやないのか？

まったく、これだから若いもんは……。

「ところで、ダッドリーを見なかった？ レッグパーツを修理すると、武装を変えて皆から出て行ってしまったんだけど……」

どうやらバナラはミツバチ園でダッドリーと遭遇しない運命だったようだ。

俺の介入によってなのか、そもそもこの世界が原作と完全に同じではないからなのかはわからない。

しかし、結果的には俺がダッドリーの蛮行を未然に防ぐことができたので、あのミツバチ園が火炎放射されるサブイベントへの対処は、最良の結果になったと言える。

「ああ、ジメツト湿地奥のミツバチ園で会った。花畑で悪さをしようとしていたから、とっちめてやったぞ」

「そうだったんだ。さすがだね、グレイ」

バナラの賛辞に俺の口元は自然と緩んだ。

自分自身が満足できる成果を褒められるのは、やはり心地いいものだな。

「ところで、バナラ。その装備なんだが……一体、何があつた？」

俺はバナラのビークルを見ながら疑問を発した。

装備しているパーツ自体は前と同じだが、クローアームは刃部分を丹念に磨かれており、ボディは装甲を中心にメンテナンスが施されたばかりのようだ。

俺は専門の修理工や博士ほどの観察眼は無いので、どこに傷が増えたとか、どれだけ戦闘をしたとかはわからない。

しかし、今の「カモミール・タイプⅡ」が完全な臨戦態勢になっているのは確かだ。

まだ、砂漠に出るのは先のはずだが……。

「うん、ちよつと……」

バナラは言い淀んだ。

彼の顔を見る限り、深刻なトラブルに直面しているというわけではなさそうだが……

何というか、きまりが悪いような情けないような表情だ。

「……コニーと、何かあったのか？」

このタイミングで生じるバナラの悩みの種といえは、どう考えてもコニー絡みだろう。

しかし、バナラは慌てて首を横に振った。

「い、いや！ 別に、そういうわけではないんだ」

わかりやすい……。

この話は聞き出さないとならない。

せつかく、この二人がくっ付くようにお膳立てしてきたのに、俺が知らない間に二人の仲が険悪になっていたりしたら、全ての苦勞が水の泡だ。

俺は自分でもわかるくらい険しくなった表情でバニラに詰め寄った。

「何をやらかした？ 強引に迫ったのか？ それとも、踊り子に鼻の下でも伸ばしたか？」

「そ、そんなんじゃない！ ただ……」

俺は距離を詰めつつも、黙ってバニラの言葉に耳を傾ける。

「ただ……コニーにプレゼントを買うのに、懐に余裕が……」

一瞬、俺は目が点になったが、よくよく考えれば何もおかしなことはない。

ここはかつてプレイしたゲームの世界に酷似しているが、バニラはゲームの裏技など使えない。

俺もバニラには色々と根回しをしてやっているんで、他のビークル乗りと比べれば彼の生活状況には余裕があるだろうが、それでもバニラはバトルライセンスで言えばクラック。

ようやく駆け出しを卒業したルーキーにすぎないのだ。

俺のようにナツメグ博士の後ろ盾があるわけでもなく、稼げるビジネスも持ってい

るわけでもないのに、コニーに服の一つでも買ってやりたいのなら稼がなければならぬ。

「グレイのおかげで、ネフロに居る間の宿代とか食事代は節約できたけど、砂漠に行くための必需品をかうと……」

どうやらバナラはコニーが目を奪われていた高い装束を買ってやりたいらしい。

現実の店では、ゲームのように女性用の砂漠の民の装束が一種類なんてことは無いよな、そりゃ。

実用性の面を考えて普通の動きやすい装束を買ったようだが、やはりコニーも年頃の女性だ。

華やかな衣装には人並みに興味があるのだろう。

しかし、この世界の服の値段はそれなりに高い。

労働者の服でも数千URはする。

何のお洒落要素も無い作業ズボンとシャツとジャンパーが数万円だ。

俺のスーツも機能性を重視した素材とはいえ、ブランドやデザインにはこだわっていないにもかかわらず3万URだ。

原作では、大抵の服は数百URの設定だったが、一つだけ1万Uを超えるドレスがあったな。

これがお洒落な女性ものの服だったら、どれだけの値段になるか想像もつかない。
「……すまん、ちよいと無神経に踏み込み過ぎたな」

バニラも男だ。

甲斐性を疑われるようなことは、自分の口からは言いにくいよな。

「いや、グレイが謝ることじゃないよ。元々、このことに関する話でグレイに相談する予定だったから、事情は話す必要があつたし。僕の方こそごめん。こんな情けない話を……」

「いやいや、そいつはいいんだが。で、相談つてのは？」

バニラは一呼吸おいて話し始めた。

「実は、ヒンヤリ遺跡に行こうと思ってるんだ」

原作では、レイブン砦内にヒンヤリ遺跡という何とも雑なネーミングのダンジョンの入り口がある。

ここがゲーム内で初めて潜れるダンジョンステージになるのだ。

「ナツメック博士から聞いたんだけど、グレイはダンジョンに潜った経験があるんだよね？ だから、行く前に意見を聞いておこうと思って」

バンピートロットのダンジョンは、敵こそ盗賊ピークルであるものの、潜る度にマツ

プが変わり、三段階で階層ごとのレベルがあつて、広さや宝箱の数に敵の強さが違う、といった具合だ。

内容としては他のRPGと変わらないような仕様だ。

原作と一部に違いはあるが、この世界でもダンジョンが存在することは俺も確認済みだ。

俺が潜つたのは、原作にはなかったエリアの山の中のダンジョンだったけどな。

どうやらこのスチームパンクな世界にも魔力的な要素はあるようで、潜る度に姿を変えるのはゲームと同じだ。

こちらの世界でもダンジョン内にモンスターこそ確認されていないものの、先に潜っていた他の探索者や盗賊と鉢合わせることもあり、場合によつては殺し合いになる。

思った以上にヤバい場所だ。

コニーを連れて行かずに待たせておくのは正しい判断だが、やはりバニラ一人で潜らせるのは危険だ。

「なるほど、その武装はそういうわけか。まあ、出発までにできることと言ったら、ダンジョンくらいしかないか」

「うん、それなりの危険は伴うけど、上手くやれば稼げるらしいからね」

とはいえ、ダンジョンの経験はバニラにとつても有用なものになるだろう。

金稼ぎ以上に貴重な実戦経験をバナラに積ませることができる。
出発は四日後。

前日は砂漠行きの準備を整えるのに使い、今日はもう遅いから休むとして、明日と明日後はダンジョンに行く時間に充てても大丈夫だろう。

「よし、なら明日からダンジョンに潜ってみよう。俺も同行する」

「え、グレイも一緒に？ いいのかい？」

「ああ、ジンジャーとの修行の成果も確認したいからちようどいい。バナラがどこまで強くなったか見せてくれ」

「……そういうことか。わかった、頑張るよ」

バナラは何かを決意した表情で頷いた。

うん、やる気があるのはいいことだ。

とりあえず、今日はレイブン砦で軽く遺跡の情報を集めたら休むことにした。

翌日、俺が宿泊所で目を覚まし、身支度を整えて外に出ると、バナラが真剣な表情で「コニーと話していた。」

砂糖の結界に阻まれて接近できないかと思いきや、どうも甘い雰囲気は欠片も無い。

「えっと……とりあえず、今日はグレイと出掛けてくるってことだよな？」

「うん……今日中に、それに無事に帰ればだけど……」

「わ、わかった。その……頑張つてね?」

バナラは何やら悲壮な覚悟をしているようだ。

いや、そんなに危ない状況だったら助けるし引き返してもらおうから!

いくらコニーへのプレゼントが大事だからって、キャラバンの護衛もあるのに、そこまでダンジョン探索にのめり込むことは許さんぞ。

「バナラ、用意は出来ているのか?」

「あ……グ、グレイ! 大丈夫、です」

緊張しているのか、バナラの表情は強張っている。

そんな調子だと途中で息切れしそうだが、こればかりは自分で折り合いをつけて慣れてもらうしかない。

まあ、今回のダンジョン探索では俺が近くに居る。

少しのミスならフォローしてやるさ。

「じゃあ、コニー。今日はバナラを借りていくぞ」

「う、うん。お手柔らかに、ね」

「?」

コニーが引き気味に返事をするが、バナラの奴は何を言ったんだ?

僅かな疑問を残しつつも、俺は「ジャガーノート」を起動し、バナラを連れて遺跡に向かった。

45話 ヒンヤリ遺跡1

ゲームのストーリー進行上、ヒンヤリ遺跡は最初に入ることができるダンジョンで、遭遇する敵の耐久力が低く、難易度も比較的低い。

しかし、現実では、ダンジョンで遭遇する敵のビークルが、全てゲームと同じだという保証は無い。

他の探索者のビークル乗りも、魔が差せば他人の収穫を横取りしようとして襲ってくる可能性もある。

そもそも、ダンジョン自体が規制や管理に難がある存在なのだ。

俺がピジョン牧場近郊で攻略していたダンジョンのように、発見間もないダンジョンであれば、脅威度の推定のために警察や公権力が介入することもあるが、一般的な遺跡は無法地帯に他ならない。

盗賊もチンピラのようなビークル乗りも野放しだ。

原作のヒンヤリ遺跡に関する知識は、あまり通用しないと思った方がいいだろう。

たとえ原作と同型のビークルでも、運用方法に関しては別物で狡猾に襲ってくる

思っておいた方がいいだろう。

「よし、まずは連携してこの遺跡を少し探索してみよう。一つの階層を数回ずつだ。とりあえず、敵の傾向と資源の状態をある程度理解しないとな」

「わ、わかった」

「そう緊張するな。まずは俺が先行する。最初は俺の真似をして、周辺の警戒をしてくれればいい。とはいっても、俺も経験を語れるほどキャリアがあるじゃないけどな」

「……………」

俺がこの世界に来たのは約二年前。

ジンジャーなんかには比べれば、俺のビークル歴などたかが知れている。

そもそも、トロットビークル自体が今も存命のナツメツグ博士によって、近年に開発されたものだ。

その道一筋ウン十年の職人の技などと比べるべくもない。

「それに、こういった長きに渡り盗賊が巢食うダンジョンに来たのは俺も初めてだ。俺がピジョン牧場近郊で出入りしたのは出来立ての……発見間もないダンジョンだからな。いいか？ もし、俺がヤバくなったら、すぐに自分の判断で身を守れ」

「……………わかった」

早速、敵のビークルの待ち伏せを受けた。

通路の角から現れたのは『ビスモールGT』。

車の鼻先に車体より遙かに長いドリルを付けたようなビークルで、そのドリルを使って突進するのが唯一の攻撃だ。

予想に反して、ビークルの概要も登場エリアも原作通り。

ゲームと違うのは、ドリル部分をタケノコのように突き出して車体を地面に埋め、敵が接近したら飛び出して攻撃、という運用をしていない点だ。

まあ、あの戦術は現実では謎過ぎる。

隠れるなら、もつとわからないようにした方がいい。

恐らく、ここでは盗掘作業に使われる作業用ビークルなのだろう。

後ろに回り込むなり、正面に立たずにコクピットを撃ち抜けば瞬殺できる相手だ。

しかし、俺は回り込んで有利な位置取りをしようとし始めたバナラを手で制した。

「(グレイ、どうしたの……っ！)」

一瞬遅れて『ビスモールGT』の後ろから現れたのは『ファイバーフロッグ』だ。

これもゲームではヒンヤリ遺跡に登場した敵で、火炎放射アームを装備した戦闘用ビークルだ。

ここでは採掘ビークルの護衛かパトロールとして運用されているのだろう。

こういうところが、現実の厄介な部分だ。

恐らく、あの二台のビークルは連携を取ってくる。

ゲームでは各個撃破して進めばいいだけだったが、こういう状況を目の当たりにするとやはり自分は慢心しているのだと思えてくる。

「(グレイ、どうする?)」

「『ビスモール』を……ドリルの付いたビークルをやれ。前からは攻撃するな。正面に捉えられている間は距離を保って回避に専念しろ。奴が俺の方を向くようなら、そのままケツを攻撃するんだ」

「(わかった)」

俺はチェーンガンアームの狙いを『フィーバーフロッグ』につけ引き金を引いた。

薄暗いダンジョンの闇と静寂を、銃口から吐き出されたオレンジ色の閃光が舌なめずりするように切り裂き、『フィーバーフロッグ』の火炎放射アームの燃料タンクは点射で放たれた数発の弾丸に貫かれる。

「ぐわっ！」

当然ながら、タンクには火炎放射器に使われる可燃性の物質が満載だ。

数発の弾丸が吸い込まれた直後、『フィーバーフロッグ』は爆散した。

チエーンガンの弾丸とビークルのパーツが衝突して発生した火花が、内部の火炎放射燃料に引火したのだ。

搭乗していた盗賊も、あの爆発では無事では済まないだろう。

「くっ……くっ……」

俺が『ファイバーフロッグ』を片付けている間に、バニラは『ビスモールGT』の前をスラストスターダッシュで派手に横切り、注意を引き付けていた。

ついとばかりに、バニラは「カモミール・タイプII」の左に装備したスパイク鉄球アームからモーニングスター状の射出体を飛ばし、『ビスモールGT』のドリルの付け根部分を攻撃する。

距離を取っていたこともあり、バニラの中距離用の打撃武器はそれほど大きなダメージを与えられていない。

一瞬で戦闘用ビークルの護衛を吹き飛ばした俺を危険視してこちらに向き直ろうとしていた『ビスモールGT』は、両側から敵に挟まれたことで動転し動きを止めた。

俺から見ると『ビスモールGT』はちょうど横向き。

高ランクのビークル乗り相手では致命的な隙となる。

俺はペダルを踏みこんで「ジャガーノート」を加速させると、右のアームを稼働させて強化ブレードを振り抜いた。

「ひ……ぎっ！」

『ビスモールGT』に搭乗する盗賊は俺に気付いたが、既に眼前まで俺のブレードが迫っているは成す術がない。

コクピットと駆動部を深く切り裂かれた敵のビークルは、鈍い金属音を響かせながら部品をばら撒き沈黙した。

「やった……」

「っ！ バニラ、動くな！」

「え!? グレイ！ 何を!？」

俺は戦闘が終わって気を抜きかけたバニラに鋭く警告する。

俺の「ジャガーノート」のチェーンガンは、一見するとバニラのビークルに向けられている。

しかし、よく見れば僅かに右に狙いを付けているのがわかるはずだ。

銃口の先は、先ほど俺たちが入ってきた通路だ。

暗くて何も見えず、通路の先に何かあるのか定かではないが、暗闇の向こうから僅かに聞こえる機械の稼働音は、唯一の手掛かりとなつて俺たちに他のビークルの存在を知らせている。

レッグパーツの稼働音から察するに、恐らく俺たちのカモミール系統の汎用ビークルとは異なる、もっと大型のビークルだ。

このヒンヤリ遺跡で運用されている盗賊ビークルが原作通りだとすると、敵は『モテマザウルス』あたりか？

この段になると、バニラも俺が警戒する存在に気づいた。

「ゆつくり下がれ。俺の後ろに」

「う、うん」

バニラは自分のビークルから出る稼働音と地響きに注意しながら、慎重に平行移動して俺の近くに寄った。

俺はしばらく大型ビークルの音に向かってチェーングンを構えていたが、やがて音は遠ざかっていく。

向こうが俺たちの存在をどこまで把握していたのかはわからないが、とりあえず接近してくることは無いようだ。

ビークルが離れていったことが確認できたので、俺はチェーングンアームを下した。

「バニラ、敵は常に決まった場所にしか居ないわけじゃない。盗賊団の中で決まったポジションはあるかもしれないが、こちらの進軍に合わせて部屋のだ真ん中で待ち構えているパターンの方が稀だろう。先ほどのように、通路の角や部屋の隅の死角に隠れてい

ることもあれば、こちらが消耗した隙を狙って第二陣が襲ってくることもあり得る。気を抜くなよ」

「わ、わかった」

説教じみたことを言ってしまったが、これがゲームと現実の大きな違いだ。

ダンジョンを進めば一匹ずつ敵に遭遇するなどと言う、昔のRPGのようなシステムではないのだ。

徒党を組んで襲ってくることもあれば、こちらの隙を突いてくる可能性もあり、戦闘自体に関しても敵ビークルの操縦者が人間である以上は駆け引きもしてくる。

それに……今のところ出会っていないが、盗賊以外の敵に遭遇することもあり得る。

漁夫の利を狙うハイエナ野郎に、とりあえず突つかかってくるダッドリーのような連中だ。

こういった手合いとダンジョン内で鉢合わせない保証は無い。

やれやれ……。

俺もバナラを常に庇うほど余裕があるわけじゃないんだけどな。

しかし……ダンジョンとはいえ、ゲームのように撃破した敵ビークルが金や燃料をドロップすることは無かったな。

「あ、グレイ！ あそこー！」

バナラが指差した方向に目を向けると、そこにはくすんだ緑色の箱が置かれていた。宝箱だ。

なるほど、一攫千金狙いの連中が集まるわけだ。

地球なら、盗掘で一山当てられる確率など極端に低いので、ツルハシを担いでいつまでも徘徊する諦めの悪い連中など一握りだ。

しかし、この世界のダンジョンでは、壁や地面を掘る以外にも、こうして向こうからお宝がやってくる可能性がある。

要は、費やす労力と時間に対するリターンが大きいのだ。

まあ、リターンの割合は宝箱の中身にもよるが……。

「バナラ、君が見つけた宝箱だ。開けてみる」

「わかった」

バナラはビークルのアームを伸ばして宝箱のロックをずらした。

有名なRPGならミミックだったり罠が仕掛けてあったりするが、この世界にモンスターは居ないようだし、ビークルに乗った状態なら罠も大丈夫だろう。

「っ！ これは……！」

「ほう、ダイヤモンドか」

バナラは一発目で宝石を引き当てた。

原作でも、ヒンヤリ遺跡で手に入れられる宝石の一つで、売値も一番高価なものだ。とはいえ、ゲームでの売値は400URだったが……さすがに現実で四千元ということはないはずだ。

宝箱から出てきたダイヤモンドはそれなりの大きさなので、これを持ち帰ってデルロッチ貿易に売り払うだけでも、バナラが買いたいコニーの服には十分だろう。

しかし、バナラはここで引き返す気は無いようだ。

「グレイ、次行こうか（こんなんじゃ、認めてくれないだろ）」

「お、おう」

バナラは何やら呟いていたが、残念ながら俺には聞こえなかった。やる気があるのはいいが、盛大にコケないでくれよ。

46話 ヒンヤリ遺跡2

宝箱を回収しつつ、しばらく進んだところで、俺たちはこの階層の最奥辺りに到達した。

狭い部屋に通路が入り組んだエリアだ。

部屋の中を見ると、そこには一台のビークルが待ち構えていた。

しかし、レッグパーツの稼働音が響いているにもかかわらず、敵の姿は地面には無い。

「っ！ 上か！」

思いも寄らぬ敵の居場所に、バニラはつい声を出してしまう。

それが原因で、こちらに気づいた敵のビークルは通路の奥に退いて行った。

「くっ」

バニラは慌てて追いかけようと飛び出しかけたが、どうにか冷静さを保ち、無計画に突っ込むことはしなかった。

それで正解だ。

第一階層の最奥に居たのは『ウォーキングバット』。

ゲームでは第一階層と第二階層のボスとして登場する敵だ。

天井に張り付いて移動し、全方向に火の玉をばら撒いて攻撃してくる。

ゲームでは、接近して下に潜り込んでからジャンプ攻撃で殴り続けられれば簡単に倒せる敵だが、現実の人間が搭乗している以上、そう簡単に仕留めさせてはくれない。

恐らく、あのままバナラが突っ込んでいたら、機動力を發揮できない狭い通路に誘い込まれ、回避もままならず集中砲火を浴びていただろう。

「グレイ、あいつを倒すんだよね？」

「……ああ」

正直、強力な敵との戦闘を避けてお宝だけ持って帰れるならそれでいい。

しかし、俺たちは既にこの階層をほとんど探索した。

ゲームでは、次の階層に進むにはボスの討伐が必要不可欠だったが、現実ではどうだろうか？

このヒンヤリ遺跡は妙にゲームと似通った環境だ。

宝箱の出現など、誕生して間もないピジョン牧場近くのダンジョンでは無かったシステムである。

やはり、少しでもこのダンジョンについて知るためにも、『ウォーキングバット』は撃破してみるべきだろう。

「行くぞ、敵は回転式の射撃武器を搭載しているようだ。弾幕に注意して、自分がカバーできなくなる位置取りはするなよ」

「わかった」

チエーンガンを構えて慎重に角を曲がる俺にバナラが続き、俺たちはこの階層のボス『ウォーキングバット』と相対した。

黒い塊が通路に飛び出すと同時に『ウォーキングバット』の砲台が稼働して火の玉を連続で吐き出し始める。

三百六十度に弾幕を張れる砲台による一斉射撃だ。

通路は一瞬で炎の雨に包まれる。

敵の眼前を横切ろうとした黒い塊は一瞬で火炎弾に吞まれた。

「ぐ、グレイ……」

「今だ、行け！」

「っ！ このお！」

当然ながら、黒焦げになったのは「ジャガーノート」ではない。

薄暗いダンジョンなので敵もビークルと見間違えてくれたが、あれは先ほどの部屋の隅にあった岩だ。

デコイとして俺が投げ込んだのだ。

投擲物で視界を塞ぎ接近攻撃を仕掛けるシユナイダーの戦法の応用だ。

バナラは弾幕に一瞬たじろいだだが、敵の攻撃を完全に逸らしたことで、接近する隙は十分に生じた。

暗闇から放たれたチエーンガンの点射が天井ごと敵ビークルを薙ぎ払った直後に、バナラの「カモミール・タイプⅡ」のクローアームが『ウォーキングバット』の中心部を切り裂く。

俺のチエーンガンで機動力を完全に封じられたところに、研ぎ澄まされた大型の爪の一撃だ。

『ウォーキングバット』は砲台のパーツを軋ませながら分解して天井から落下した。

しかし、階層のボスとして君臨する『ウォーキングバット』は大破して落下してなお、砲台を稼働させて火炎弾を乱射しようと試みる。

「バナラ！」

「大丈夫！」

これはゲームではあり得なかった状況なので、俺の方が面食らってしまった。

しかし、敵に近い位置にいるバナラは油断などしていなかった。

追い打ちとばかりに再度クローアームを振るい『ウォーキングバット』に爪を叩きつ

ける。

今度こそ、完全に敵のビークルは沈黙した。

「グレイ、倒したよ」

「……ああ」

いかな。

今回は俺の方が先入観で判断を誤りかけた。

確かに、俺自身は止めを刺したと思われる敵と一定以上の距離を保ち、いつでもチエーンガンで迎撃できる態勢を整えていた。

しかし、ヒンヤリ遺跡の第一階層と第二階層のボス『ウォーキングバット』の行動を、俺はどこかでゲーム内のアクションしか想定していなかった。

一歩間違えれば、バニラは反撃を食らってお陀仏だ。

……俺の方こそ、気を引き締めなければならぬ。

「あ、あれは……」

バニラが指差す方に目を向けると、そこには先ほどまで影も形も無かった扉が現れていた。

ボスビークルを倒して現れたということは、あれが遺跡の入口に戻るドアか？

ゲームでは、各階層のボスピークルを倒すと、数秒後に選択肢が表示される。

そのまま同じエリアの探索を続けるか、再び階層を選んで別のエリアのダンジョンに挑戦するか、それとも遺跡から出るかを選ぶ。

ボスを倒せば出口が出現するという話は、俺もレイブン砦で小耳に挟んではいた。さすがに現実ではワープはできないようだが……なるほど、こういうシステムか。

「グレイ、ジミーから聞いたんだけど……ボスのピークルを倒したときに現れる扉を潜ると、遺跡の入口に戻れるそうだよ。本人が見たわけじゃないらしいけど」

まあ、この時のジミーは自分からダンジョンに潜るタマじやないよな。

しかし、ヒンヤリ遺跡自体に関しては、バナラの奴もすっかりリサーチしているじゃないか。

こりや、本当に俺は戦闘の援護以外に役に立たないかもしれないな。

いや、戦闘に関しても、本来ならバナラ自身の強化を最優先しなければならない。

俺は既にピークル乗りとしての戦術が固まってきているので、今後において必要なのは、射撃精度をさらにコツコツと向上させるなどの細々とした研鑽だ。

しかし、バナラはまだピークル乗りとしての経験が浅く、今が伸びしろの大きい時期である。

……次のチャレンジからは、バナラに先行させてみるか。

俺も先入観に捕らわれず敵を観察し戦闘をシミュレートする訓練をしながらな。

「ほら、グレイ。行こう」

「ああ」

俺たちは扉を潜って、ヒンヤリ遺跡の入口に戻った。

遺跡の入口には、またしても先ほどは存在しなかった扉が増えている。

あれが第二階層へ向かう道か。

しかし、まだ先に進むには早い。

「もう一度、だね」

「そうだな。情報通りなら、もう一度同じ階層に潜れば、また同じレベルの敵と遭遇するはずだ。俺もまだこの遺跡に慣れていないし、さっきの探索も百点満点とは言い難い。慎重に行った方がいいだろう」

「わかった。それじゃあ、第一階層の扉を潜るよ」

俺たちは、再び最上層のエリアに足を踏み入れた。

予想通りと言うべきか、再び潜った第一階層は、マップのデザインこそ変わっているものの、広さや宝箱の数も大体同じだった。

俺たちは再びボスの『ウォーキングバット』を倒し、またしても現れた扉を潜ってダ

ンジョンに挑戦し続ける。

「不思議だ……扉をくぐるたびに、道が変わるなんて……」

バニラはこの摩訶不思議な空間に感動しているが、俺は別のことを考えていた。

今のところ、このヒンヤリ遺跡に出現する敵は、原作ゲームと同じ構成だ。

階層のレベルごとに敵が決まり、それこそ意図的にゲーム的なダンジョンを構成しているかのように編成されている。

第一階層なら『ビスモールGT』や『フィーバーフロッグ』などの雑魚が複数、『ウォーキングバット』がボスとして一機。

この構成が、何度入りなおしても、一回の挑戦エリアごとに繰り返される。

これは盗賊団のビークル分隊の編成と戦術がゲームと似ているだけでは説明がつかない。

『ウォーキングバット』をリーダー機とする分隊ごとに散開して遺跡内を徘徊しているにしても、直で他の分隊に遭遇できない以上、やはり存在する意思が盗賊団の物だけとは思えないのだ。

何故なら、たとえばどこかの隠し通路などで他のエリアに内部で繋がっていたとしても、一つのエリアに固まっている盗賊の戦力は少なすぎる。

『ウォーキングバット』はそこそこの腕を持つビークルバトラーなら撃破できる程度

の性能であり、周囲に散らばる雑魚を含めても、包围されなければ大した脅威ではない。自分たちが生き残ることを少しでも考えているのなら、馬鹿でもあの二倍の規模の編隊を組んで行動するだろう。

第一階層の『ウオーキングバット』一機をボスとする構成では、腕利きのビークル乗りと本気でやり合うことはまず不可能なのだ。

自らダンジョンに潜る時点で、ここに来るビークル乗りはそれなりの腕自慢だ。

そういう連中を相手にする覚悟がある盗賊とはとても思えない。

だとすると、ダンジョン本体の意思が敵を割り振っている……？

第一階層までは、トレジャーハンター紛いの大した腕を持ち合わせていないビークル乗りでもそれなりに戦えるレベルに抑えているという可能性がある。

それなら盗賊以外の他のビークル乗りと未だに鉢合わせしないことも納得がいくが……ダンジョンから見れば俺たちも盗賊と変わらないだろう。

別に正規のトレジャーハンター資格を持っているとかではないしな。

俺たちと盗賊、侵入者がお互いにやり合うよう調整しているのだとしたら、ダンジョンは相当な知能を持った存在ということになる。

宝箱が出てくるメカニズムも謎だ。

今のところほぼ妄想の類だが、恐らくダンジョンはビークルを呼び込みたいのではな

いか？

排気ガスを食べっているのか、流行りの小説の設定で解釈すれば、生命体が内部で活動することでダンジョンにとって有益なポイントになっている可能性がある。

残念だが、俺の知識ではそこら辺を説明することはできないな。

ナツメツ博士に聞いてもはつきりとした答えは返ってこないだろう。

以前、俺のビークルのボディや武装にも使われたミスリルや黒鉄やオリハルコンなど魔法金属について聞いたが、博士自身も使い道に関すること以外は大きくはわからないと言っていた。

魔法金属は全てダンジョンから産出したものだ。

ダンジョンは、この時代の科学では簡単に説明できないのだろう。

「(グレイ)」

「(ああ、居るな)」

バナラもダンジョンの環境に慣れていたようで、俺から数秒も遅れることなく部屋の隅の隅を発見した。

「(援護する)」

「(わかった)」

バナラがスパイク鉄球アームの射出体を振りかざしながら飛び出すのと同時に、俺も

チエーンガンを構えてビークルを横向きに滑らせた。

そうして、俺たちは順調に敵を撃破し、宝箱の中身を回収しつつ、ダンジョンの探索を進めていった。

47話 ヒンヤリ遺跡3

遺跡内部は意外に狭く、ゲームと同じくらいの広さと構成だったので、今日一日で各階層を数回は巡ることができた。

今さっき、本日数回目の第三階層のボス『ダルマイオー』を撃破したところだ。ここが最終階層だ。

『ダルマイオー』は移動ができない設置型で、ビークルと言っているのかすら疑問だが、狭いダンジョンの部屋で拠点のように運用するのはありだな。

開けた場所ではただの的でも、狭い通路を塞ぐように鎮座されると、かなり厄介な簡易要塞に早変わりだ。

俺たちは遠距離から撃破したが、接近戦を得意とするビークル乗りには面倒な相手だろう。

ゲームでは、三段に別れた構造の一番上だけを撃破すればいいなど、それなりに攻略の近道はあったが。

「やして……」

ベストのポケットから出した懐中時計を確認すると、既に夕方を過ぎていた。遺跡の外はもう日が沈んでいるだろう。

「そろそろ戻るか」

「……え？」

俺の言葉にバニラは意外そうに顔を向けてくる。

「発掘品と宝石はそれなりに手に入れたろ？ 今日はいくらにして、休んだ方がいいんじゃないか？ 余り遅いと夕食を食い逃すぞ」

俺たちのビークルのバックパーツには、ズタ袋に入れて一纏めにされた戦利品がどつさりと積まれている。

骨董品っぽいナイフにサイコロ、彫刻のある中世の盾にベルベットのマントと錫杖。

ネフロ博物館の学芸員のベルモンドが見たら、扱いが雑だと怒るかもしれないが、一番価値が高そうな王冠は布で梱包したから勘弁してもらいたい。

どれもゲームで見たアイテムだが、これだけあればバニラにとつても相当な臨時収入になったことだろう。

宝石に琥珀もある。

……この時代の琥珀は今よりも価値が低かったのかな？

ゲームでは100URと千円にしかならなかったが……もう少し高値で売れること

を祈ろう。

しかし、バナラは今も戸惑ったままだ。

俺は何か変なことを言ったか？

収穫は十分で時間も時間だから戻ろうと提案しただけなのだが。

「えつと……僕は、これで帰れるの？」

「？ 何を言っているんだ？」

「いや、てつきり……『コニーが欲しければ、俺を倒してみろ』とか言われる感じか？
……」

一瞬、俺は目が点になった。

こいつの言うことには驚かされてばかりだが……今回は特大だな。

「何でそうなるんだ……？」

「だって……あんな言い方をされたら、そう思うじゃないか」

バナラが言うには、俺が「どこまで強くなったら見せてくれ」などと言ったから、修行の題目で俺とビークルバトルの試合をさせられると思っただけらしい。

なるほど、俺は頑固親父ばりにバナラの前に立ちはだかり、「軟弱な男にコニーはやらん！」と怒鳴りつけ、そのまま制圧した遺跡の中でバナラをボコボコに……。

盛大な誤解だ。

そもそも、俺はコニーの親父ではないし、危険なダンジョン内でビークルバトルをする馬鹿など居るか!?

そういうえば、遺跡に入る前、バナラは何やら妙に悲壮な覚悟を決めたような雰囲気醸し出していたな。

……俺が悪いのか？ これ。

「いやいや！俺は何もそういう意味で言ったんじゃない。ただ、同じナツメグ博士とジンジャーに教えを受けた者としてだね……キャラバンの護衛なんかもあるし、ダンジョン探索はいい経験になるだろうから、ついでに手伝ってあげようと思っただけだよ。まあ、兄弟子のお節介みみたいなものさ」

「そ、そうなんだ……じゃあ、敵の集団に放り込まれて、一人で倒してみろなんてことは……」

「さつきも二、三機くらいなら集団戦の訓練も兼ねてバナラ一人でやらせたが、それ以上の数が集まってきたときに、俺の援護が無かったことがあったか？」

「確かに……」

俺は別にバナラをいびるつもりなど無い。

下手のことをして、バナラが敵側に付いてしまったら厄介だ。

「えつと……グレイはコニーが好きなんてことは……？」

「ない。いや、楽団のメンバーとして、友人としては大切に思っているが……俺は、バニラとコニーの仲は応援している」

「そうか……そうなんだ………つて、ええ？　僕とコニーの仲って……」

はいはい、今更今更。

まったく、バニラは何を考えていたのだから……。

二人をくつつけるために、俺が今までどれだけ手間を掛けてきたと思っているのだ？　まあ、バニラ本人に俺のスタンスを伝えられたのは収穫か。

そもそも、俺はコニーより十歳も上だ。

バニラが居なかったところで、俺はさすがに年が離れすぎだろう。

「バニラ、コニーはいい子だろう？」

「え？　どうしたの、いきなり？　そりゃ……可愛くて優しくて行動力もあって、素敵な女の子だと思っけど……」

おうおう、手放しじゃないか。

聞いてるこつちが砂糖を吐きそうだよ。

「俺はトロツト楽団では最年長だが、メンバーになったのは一年くらい前のことだね。はつきり言って、コニーたちとの付き合いは俺が一番短い。だが、それでもメンバーの気質はある程度わかるつもりだ。コニーは……俺たちの前だと、少し無理をして明るく振舞おうとする節がある」

「無理をして……？」

マーシユとチコリの件など、詳しいことは本人からある程度聞いてからの方がいいだろう。

俺が事情を把握していることについては、ナツメツ博士から聞いたことにでもしてしまえばいいが、バニラに予め伝えておくとなると、色々と予定が狂ってしまうかもしれない。

「誰にだって事情はある。問題は、コニーにとつて素のままに接することができる相手が居ないことだ。まあ、バンドのボーカルとしての使命感が先に立つのと、年の離れている俺なんかには遠慮があると捉えてくれればいい。彼女には、年の近い気の置けない友人が必要だ」

「グレイ……」

「だから、バニラにはコニーの理解者になつてもらいたい。彼女との付き合いが俺よりもさらに短い君に頼むのも、おかしな話かもしれないけどさ」

「……ははっ、そういうえば、同じことをローズマリーさんにも言われたな。うん、わかったよ」

そういうえば、バナラが初めてネフロにやつて来てコニーの母親と対面したとき、彼女からそんな風に言われるイベントがあつたな。

まあ、結果的にチコリとダンデイリオンと昔から親交のあるメンバーではないバナラが、柵が無くてちようどいい人選なわけだ。

身も蓋も無い言い方をすれば。

俺は多少ボカして、肝心のチコリの死に対する負い目については話さなかった、いずれバナラも知ることになるだろう。

「だから、君が道を誤らない限り、俺はコニーのことを君に任せるつもりでいる。……何か、結局は父親みたいなこと言っちゃまってるけどな」

「道……？」

つと、少し喋り過ぎたな。

まあ、今から下手にネタバレをして、運命に狂いが生じるのは避けたい。

予防線を張つたつもりで、肝心の俺が原作のシナリオを参考にした立ち回りが出来なくなつては、色々と準備してきたものが水の泡だ。

この世界にリトライは無い。

慎重に行かなければ。

「とにかく、コニーのことを大切につてことさ。友人以上の関係になっても、俺としては構わないからな」

「わかった……つて、えええ!! 友人以上つて……」

バナラは完全には納得していないようだが、とりあえずは頷いてくれた。

まあ、バナラがノーマルルートかブラッディマンティスルートの選択という大きな岐路に立つのは、もう少し先のことだ。

今はまだ、目の前のことに集中してもらおう。

ヒンヤリ遺跡を出てレイブン砦に戻ると、宿泊所のあるバザーの区画でコニーに出くわした。

どうやら、彼女も今帰ってきたところのようだ。

「あ、バナラ! お帰り」

「うん。ただいま、コニー」

早速、新婚のような雰囲気醸し出す二人に俺は再び砂糖を吐きそうになるが、まあダンジョン探索という危険な仕事を終えた後なので大目に見てやるか。

「えつと……大丈夫、だった?」

「うん。グレイが色々と助けてくれたから」

「そうなんだ。あつ、グレイもお帰りなさい」

「ああ」

コニーはようやく俺の方に向き直った。

別に慌てて俺なんぞに構わなくてもいいのよ。

バナラがへそを曲げたら困る。

まあ、既にバナラ本人にはコニーとの仲は応援すると伝えているので、これ以上変な勘繰りをされる心配は要らないか。

「ところで、コニーもどこか出かけていたみたいだけど、何かあったの?」

「ううん、特に用事があったわけじゃないの。バザーも一通り見て回っちゃったから、ちよつと他の人の邪魔にならないとこに行つて、歌の練習をしていただけだよ。今頃、ハッピーガーランドの皆は練習しているだろうから、私もちゃんとしないと……」

コニーは皆の外れの方を示しながらバナラに答えた。

なるほど、こんな時も自主練とは真面目なことだ。

「グレイは大丈夫? 『Impassible』のお披露目は、次の定期演奏会だよ」

「……ははっ」

確かに、ここからハッピーガーランドに戻つてからだと、練習に充てられる日数はそ

う多くないな。

新曲の『Impossible』は何気に俺の出番が多い。

特にイントロはサクスのソロパートなので、ここをミスりでもしたら大目玉だ。

……明日はネフロ博物館に戦利品を持っていく時間も必要だから、丸一日ダンジョンに潜ることにはならないはずだ。

午後は少し楽器の練習に充てるか。

そして、夕食を終えた俺たちは、宿泊所の前で別れて各々の部屋に向かう。

……さすがに、バナラとコニーを押し込む壁の厚い二人部屋は無かったな。

コニーは女性用の天幕に引き上げていった。

「それじゃ、おやすみ」

「あ、待ってグレイ。発掘品とか分けないと」

「ん？ 俺は別に要らんぞ」

「え？ でも……」

バナラは自分の都合でダンジョン探索に俺を付き合わせたと思っっているから、何か礼をしないと気が済まないのだろう。

でも、ぶつちやけ欲しい物なんて無いんだよな……。

宝石に興味など無いし、発掘品もナツメツグ博士のお土産にするには微妙な品ばかりだ。

考古学的な価値はあっても、博士はそういったものに食指が動くタイプではない。

魔法金属でも発掘できれば別だが……。

「じゃ、貸しイチだ」

「貸し……？」

適当な物を貰ってもいいが、そろそろ未来のことも本格的に考えていかないとな。

今までは、コニーとくっ付けることでバナラを俺たち側に縛る方針で来たが、俺個人が恩を売れるのならばそれも構わない。

「でも……今までもグレイには色々とお世話になって……」

「そう思ってくれているなら、俺が困ったときに手を貸してくれ。俺はナツメツグ博士の助手で、博士はこの国有数の偉大な研究者だ。悪党が寄ってくることは往々にしてある。そんな時、決して敵側に立たないでほしい」

「そりゃあ、そんなことするつもりは無いけど……」

「重要なことだ。くれぐれも、俺たちやコニーの味方でいてくれ」

「……わかったよ」

バナラも俺が何かを予見していることは気づいているだろうが、俺としてもここで問

い詰められたからと言って全てを話すわけにはいかない。

ブラッディマンティスの背後にダンディオンとセイボリーが関わっているので、奴らを単純に滅ぼせばいいというだけではない。

この物語は少々複雑なのだ。

俺という大して器用ではない人間が介入する以上、やはり原作と大きくシナリオを外すのは得策ではないだろう。

「まあ、今はそこまで深刻に考えなくてもいい。とりあえず、明日もダンジョンだろ？ 今日よりは短くなるかもしれないが」

「……そうだね」

「早いところ休め。それとも……俺とピークルバトルの修行をするか？」

「あははっ、それは勘弁」

俺たちは各々の部屋に戻り、ようやく眠りについた。

48話 砂漠1

デルセンのキャラバン一行やポールが出発する前日。

俺は一人〔ジャガーノート〕を駆ってガラガラ砂漠に足を踏み入れていた。

昨日のヒンヤリ遺跡攻略の二日目も探索は順調に進んだ。

バナラに戦闘の経験を積ませるということに関しては、凡そ俺の計画通りだ。

簡単な見立てだが、恐らく今のバナラなら、Sランクバトラーのシユナイダーも工夫次第で倒せる。

……まだ、バナラの腕はその程度だ。

精々、一年半ほど前の俺と同じくらい。

俺とやれば、まずこちらが負けることは無いだろう。

……少しほっとしたのは内緒だ。

記憶をなくす前の分も含めてバナラがピークル乗りとして初心者ならば、彼はほんの数週間で俺の半年近くの研鑽に追いついたことになる。

俺もこの国ではトップクラスのピークルの腕を持っているはずだが……本当に、主人

公補正は凄まじいな。

まあ、何はともあれ、あれならキャラバンの護衛も問題ないだろう。

俺が色々と介入してしまった分によるバニラの経験不足は、ジンジャーの修行とダンジョン探索で相殺できたと見ていいだろう。

今日のバニラは待機の最終日、ピークルの整備の最終確認と、消耗品の調達のためバザーに行っている。

昨日の午後後ネフロへ戻って博物館に発掘品を売り払ったので、懐は温かいだろう。今頃は、コニーに高い砂漠の装束をプレゼントしているはずだ。

あの二人の外堀を埋めるのは十分だ。

やり残したことは……大丈夫、無いはずだ。

商人に金を握らせて、ポールには少々年を食った安い駱駝を売ってもらった。

ピークルに乗る俺たちよりは遅くなるだろうが、これでポールも砂漠を渡ってハッピーガーランドに到達できるはずだ。

後は、念のため駱駝のルート周辺も盗賊を減らしてやればいいだろう。

俺の旅支度も何度も確認済みだ。

予備のタンクで水を多めに持ち、食糧も余裕を持たせてピークルに積み込んだ。

砂嵐避けのスクーフと、日差し対策にアラブっぽい頭巾——クーフイーヤとかいうや

つ——も買った。

いざとなったらレイブン砦に退却するので、方角も常に意識して行動する。

準備は完璧だ。……恐らく。

さて、レイブン砦から商人や砂漠を渡る連中が出発するのは明日なのに、俺が何故このような場所に居るかといえば、当然ながら先回りしてデザートホーネット団を掃討するためだ。

デルセン経由で商人連中から貰った地図は想像以上のクオリティだった。

ガラガラ砂漠全域の地形が把握でき、ハツピーガーランド方面のコンドル砦だけでなくデザートホーネット団のアジトに油田の位置や距離も正確に読み取れる。

駱駝で砂漠を渡る際のルートはもちろん、キャラバンのルートも十通り以上が記載され、別紙にはここ最近で不審な消息の絶ち方をしたビークルの情報などが時間や場所付きで細かく書かれている。

はつきり言つて、最後の情報は企業秘密に近いものだろう。

「まったく、抜け目ない……」

俺はこの地図を二つの仕事と引き換えに要求した。

一つはデルセンへのバナラの紹介というか身元の保証というか微妙なものだが、もう

一つは俺が事前にデザートホーネット団へ攻撃を仕掛けて盗賊ビークルの数を減らすというものだ。

これだけの物を受け取っては、俺もナツメッグ博士の助手という立場がある以上、中途半端な仕事はできない。

恐らく、デルセンから話を聞いた商人たちは、それを見越して敢えてこれだけの代物を寄越したのだ。

「とりあえず、バニラが居るデルセンのキャラバンと離れているルートから掃討していくか」

今回はどちらにせよデザートホーネット団への攻撃は計画していたので、俺の要件のついでに済みそうな話だが、これ以上は砂漠の商人と係わるのは避けた方が無難かもな。

回数を重ねるごとに、押し付けられる面倒事のレベルが上がりそうだ。

キャラバンのルート沿いを進んでいると、砂漠の向こうに鈍く光る金属の塊が横切った。

デザートホーネット団のビークル『イエロー・ワスプ』だ。

長いレッグパーツで砂に足を取られることなく高速で砂漠を駆け、ガトリングによる

遠距離攻撃を仕掛けてくる厄介な敵だ。

ゲームでは、砂漠地帯ではこちらのビークルの移動速度が低下することもあり、厄介な敵として印象に残ったプレイヤーも多いだろう。

編隊を組んで包囲してから射撃してくるので、一体を追いかけまわしていたら背後から連射を食らうなんてのも珍しくない。

俺にとつては初めての砂漠、敵にとつては自分の庭、さらに向こうは五機の編隊でこつちは一人だ。

少しでも戦闘が長引くようだったら撤収するつもりでいたが……デザートホーネット団の掃討は思いのほか順調だった。

この世界のビークルの火器は、射程距離と精度において地球のものを大きく下回っているのだ。

ビークルに搭載するサイズの武装は、前世なら車載武器にあたるので、最低でも50BMG弾を使うM2ブローニングの有効射程二キロメートルなんてものが基準になる。

迷彩で砂漠の砂に紛れて数キロ先から狙撃などされたら、元軍人などではない俺は簡単にお陀仏だろう。

しかし、デザートホーネット団が使うガトリングは、まともに命中させるためにはかなりの近距離まで接近する必要があった。

もちろん、標的が人体ではなく鋼鉄のボディを持つトロットビークルなので、制圧するためには何発も命中させる必要があるという事情も存在するのだが……。

とにかく、敵の戦術はこちらを数十メートルか百メートルの距離で包囲して銃撃戦を挑んでくるというものなので、俺としては非常にありがたい状況になるわけだ。

俺の視界の外から狙撃を食らうことは無い。

こちらが視認できる距離まで向こうから近づいてくれるので、次は必然的に距離を保ちながらの撃ち合い、銃撃戦というよりは間合いを測りつつ剣で切り結ぶ感覚に近い状況になる。

遮蔽物が無いだけで、いつもやってきた盗賊討伐やビークルバトルと同じだ。

直線移動の巡航速度においてはレッグパーツの構造上【ジャガーノート】は『イエロー・ワズプ』に遥かに劣るが、中距離の戦闘における機動力ならこちらも負けていない。

「ぐわっ！」

「くそっ……」

さらに、『イエロー・ワズプ』のガトリングよりも俺のチェーングンアームの方が精度は上だ。

俺は敵のガトリングの射線を意識しながらスラストスターで【ジャガーノート】を滑らせ、

包圍網に割り込んで敵ビークルを盾にする位置取りをしながら、次々とデザートホーネット団のビークルをチェーンガンで撃ち抜いていく。

「や、やめ……がつー！」

最後に残った一機に搭乗する盗賊は、迫れば降伏したかもしれないが、残念ながら俺に容赦をする余裕は無い。

そのままコクピットごと強化ブレードアームで叩き斬った。

「悪いな」

デザートホーネット団は義賊のような面もある組織だが、こちらを襲ってくる以上は情けなど掛けられない。

一人も殺さず無力化することを狙うなど、俺の命の方が危険だ。

一部だけ殺さずに逃がしても、仲間を殺られた盗賊は復讐心を抱くことになるだろう。

下手の生きたまま帰して、根に持つ奴につけ狙われでもしたら厄介だ。

バナラは彼らと友誼を結ぶことになるが、俺が同じような関係を築ける保証は無い。

盗賊団との関わりは、その地域で襲ってきた奴を殲滅する以外、俺は構築することが難しいわけだ。

なら、最初から容赦せずに殲滅した方がいい。

「……よし、追い剥ぎだ」

撃破したデザートホーネット団のビークルから使える物資をかき集める。

砂漠の盗賊団だけあって遭難にも備えているらしく、『イエロー・ワズプ』には水筒と食糧が常備されていた。

元々、今この辺りに展開されているデザートホーネット団のビークルは、キャラバンを襲う本隊ではなく偵察部隊なのだろう。

その証拠に、分隊指揮官が搭乗する複座型の高性能機体『クリムゾン・ホーネット』は見当たらない。

食糧物資が充実しているのは、強襲ではなく偵察任務による長時間の遠征を想定しているためもあるのだろう。

俺も自分の食い物や水はビークルに積んであるが、敵から奪ったものも備蓄しておけば余裕が出るので、残骸の中で無事だったものは遠慮なく頂いた。

彼らのガトリングの弾は俺のチェーニングと共通なので、弾薬も貰っておこう。

チェーニングアームの弾倉に補弾し、余った分は弾薬箱ごと奪って【ジャガーノート】のバックパーツに積む。

燃料タンクを破損させずに倒したビークルからは、タンクごと取り外して燃料も奪

う。

バックパーツにはまだ余裕があるので、敵ビークルの残骸からガトリングも一つ頂戴しようか迷ったが、これは利用法が無いのでやめておいた。

予備部品として使うにしても、初めて触るパーツなので、俺ではまともに分解することができない。

使いたければ、博士の工房で一度じっくり解体して分析する必要があるだろう。

これからしばらくナツメツグ邸に戻る予定はないので、予備パーツの現地調達はあきらめた方が良さそうだ。

コンドル砦やハッピーガーランドに持ち帰って武器として売り払えば小遣いの足しにはなるかもしれないが、はした金のために積載物の重量を増やして攻撃を食らったりしたら馬鹿を見る。

「さて、次だ」

俺は「ジャガーノート」を軽く点検して準備を整えると、次の獲物を求めて再び砂漠にビークルを進めた。

49話 砂漠2

キャラバンのルート周辺に居るデザートホーネット団を掃討した次の日、俺は駱駝や一般人が砂漠を超えてコンドル砦へ向かうのに使うルート周辺へビークルを向かわせた。

昨日一日でデザートホーネット団は大きな損害を受けたはずだ。

何せ、俺は片っ端からデザートホーネット団のビークルを撃破し、一機たりとも逃がさず仕留め続けてきたのだから。

しかし、分隊を十個ほど撃破した頃には、キャラバンのルート周辺の『イエロー・ワズプ』は密度を一気に減らしていた。

恐らく、何らかの方法で襲撃を受けていることを察知し、他の偵察隊を引き揚げさせたのだろう。

もしかしたら、こちらの視界のアウトレンジから攻撃できる手段は無くても、観測する術くらいは持っているのかもしれない。

それでも、俺が数十機のデザートホーネット団のビークルを破壊したのは事実だ。

明日の商人への攻撃能力は大きく落としているに違いない。

これで、砂漠の商人たちへの借りは返した。

こちらの要求以上の地図をくれた分の仕事はしたと言っただろう。

昨日はバナラの護衛するデルセン一行が使うものとは別のキャラバンルート周辺を掃除した。

今日の目標は、ポールが通る予定のルート周辺のデザートホーネット団を掃討すること、あとは『サンド・キャッスル』の撃破だ。

今日の夜中、オアシスで休息を取っているコニーがデザートホーネット団に誘拐される。

バナラはコニーを助けに向かい、最終的にコニーたちは解放され彼らと友誼を結ぶことになる。

その帰り道、デザートホーネット団のアジトとオアシスの中間くらいに出現する、砂漠に潜航する巨大な移動要塞が『サンド・キャッスル』だ。

あれは危険だ。

俺が先回りして撃破する。

連日の働き詰めだが、昨日の夜はレイブン砦の近くまで引き返してからビークルを駐機して休息を取ったので、すぐに退却できる場所である程度は安全が確保された環境の

もと眠ることができた。

集中力を欠くほど疲労が蓄積されているわけではないので大丈夫だろう。

「…………やるか」

早速、砂丘の向こうに僅かに見える敵ビークルの影を視認した俺は、チェーンガンのトリガーに指をかけたまま、砂嵐に紛れるようにしてビークルを進めた。

「や、うわあああああああああー！」

俺のチェーンガンが分隊で最後の生き残りである『イエロー・ワスプ』の燃料タンクを撃ち抜き、敵のビークルは全て無力化された。

爆発の衝撃で機体が大破したことにより、バランスを崩して倒れ伏すビークルのコクピットから搭乗していた盗賊が投げ出されて砂地に叩きつけられる。

「がっ…………うぐっ…………」

奇跡的に爆発による火傷は無いようだが、全身を強く打ち付けたうえに地面に落下した盗賊は、しばらくは這うこともできずに苦悶の息を漏らした。

「…………少ないな」

デザートホーネット団の標準ビークル『イエロー・ワスプ』で構成された部隊をいくつか撃破したところで、俺はこのエリアが妙な状態であることに気付いた。

デザートホーネット団のビークルがやけに少ないのだ。

確かに、キャラバンのルートに比べて一般人が多く通るルートは儲けが多くないので、展開している部隊が少ないこと自体は何もおかしくはない。

しかし、昼まで探し回ったにもかかわらず、遭遇したデザートホーネット団のビークルは数える程度。

さすがにこの数の少なさでは、エリア全域に目が確保できず、偵察の意味すら成していない。

昨日のキャラバンルート付近では、途中で付近の別動隊に俺の襲撃の存在が察知され、正体不明の敵により多大な存在を被っていることを把握し、早めに戦力を退いた可能性もある。

しかし、今日の俺が攻撃を仕掛けているのは一般人が通るルートなので、昨日とは完全に別のエリアだ。

対応が早すぎる。

「くそつ、『ナツメッグ博士の右腕』か……」

地面を見ると、先ほどまで搭乗していた『イエロー・ワズプ』が大破して投げ出されたデザートホーネット団の男が、片腕を押しえながらこちらを見上げていた。

俺はシオルダーホルスターから拳銃を抜き、男の眉間に照準を合わせる。

「くっ……」

ゴーグルと覆面で表情は見えないが、体から力を抜いて項垂れたことから察するに、もうほとんど抵抗を諦めているようだ。

しかし、今回は俺がすぐに引き金を引くことは無かった。

今までなら余計なことはずせ盗賊はすぐに始末していた。

目の前の男の仲間もそうだ。

全員がピークルに搭乗したまま俺のチェーンガンに撃ち抜かれるか爆発に巻き込まれて息絶えている。

それも当然の話だ。

盗賊に襲われて死ぬ者も多いので、こちらが盗賊を殺すのもお互い様だ。

下手に生かしたまま帰らせても、その男は再び盗賊行為を働く。

次の被害者を出さないためにも、普通なら見逃すのは無した。

逆に拷問もしない。

生き残った仲間に俺が盗賊を非道に痛めつけて殺したことがバレたら、俺に待っているのは凄まじい復讐という名の拷問死だ。

生身の俺は普通の人間なので、ピークルから降りているところを数十人に囲まれたら

普通に捕まってしまう。

生皮を剥がれて一寸刻みにされるのはご免だ。

だから、今までは遭遇した盗賊は極力その場で殺し、情報を仲間のところに持ち帰らせることを阻止して、死体にも拷問の形跡を残さず、復讐心を抱かれるリスクを可能な限り回避してきたのだ。

しかし、今度ばかりはそうも言っていられない。

ポールの通るルートで敵に遭遇できないことは、都合よく解釈すれば敵を追い払ったことになるが、悪い想定が当たっていればデザートホーネット団は一時撤退して戦力を集結している状態だ。

最悪の場合、ポールが出てきた直後に敵が大挙して押し寄せることになるわけだ。

このままではマズい。

何せ、このままサーチアンドデストロイを繰り返すだけでは、ポールの件に対応できないかもしれないのだ。

何か、対策を取らなければ。

最低限、情報は手に入れなければならない。

「俺のことを知っているのか？」

「……………」

盗賊の男は答えない。

相変わらず顔を隠しているので表情は見えないが、恐らく何を喋ってもどうせ殺されると考えているのだろう。

「質問を変えよう。俺のことを、お前たちデザートホーネット団はどう認識している？」
「……………」

男は沈黙を保ったままだ。

このまま引き金を引いて片腕でもぶち抜いてやりたくなくなるが、ここで拷問するわけにはいかないのでぐつと堪える。

普段なら、死体を処理してしまえば拷問の事実はいかにもバレないかもしれないが今回は別だ。

俺の存在をデザートホーネット団がいち早く察知したことからの推測に過ぎないが、敵にはこちらを遠くから観測する手段があるかもしれない。

何せ、ここはデザートホーネット団の庭だ。

今この場面を見られているとしたら、後で死体を始末しても拷問した事実は隠せない。
い。

だから、こいつにはできるだけ素直に色々と吐いてほしいのだ。

少なくとも、向こうの観測状況くらいは知りたい。

「おとなしく質問に答えてくれたら殺さない。見逃してやる」

「……信用できるかつ」

ようやく口を開いて男から発せられたのは、吐き捨てるような拒絶の言葉だった。

まあ、そりゃそうでしょうよ。

「俺の目的はお前たちの壊滅などではない。今回は仕事だったからキャラバンのルート周辺を掃除したが、俺は長くてもあと数日でガラガラ砂漠から消える。今ここに留まっているのは、駱駝に乗って砂漠を渡っている貧乏な画家の友人を守りたいからだ」

俺にとって、砂漠の商人は絶対的な正義でも庇護下にある連中でもないから、彼らがデザートホーネット団とどういう関係なのか厳密には知らない。

もしかしたら、砂漠の民を襲撃しても命は取らないという密約などがあるのかもしれない。

あつたとしても、どれほど重いものなのか、どこまで脆弱なもののかも知らない。知らないことに、深く首を突っ込もうなどは考えないさ。

それに、デルセン一行を守るのはバニラの役目で、バニラとコニーがデザートホーネット団の頭領ノーラに会わないとゲーム通りのイベントが進まない。

原作のシナリオに沿ってもらうためだ。

そちらには可能な限りタッチしないようにした方がいいだろう。

「質問に関しても、お前たちの内部情報を吐けなどとは言わん。ただ、俺についてどこまで知っているか、どこまで監視しているか、それと『サンド・キャツスル』の……ブラッディマンティスの潜航要塞について話してくれればいい」

デザートホーネット団の男はしばらく俺の拳銃の銃口を見て迷っていたが、やがて諦めたように口を開いた。

「……昨日から現れた黒いビークルが我々を潰しまわっているという情報は既に回っている。観測した者の話では、そのビークルは高い機動力と射撃能力を持ち、俺たちを徹底的に殲滅する容赦の無い奴とのことだった。そして、恐らくその正体は『ナツメツグ博士の右腕』と呼ばれる凄腕のビークル乗りだろうと」

やはり、遠くから俺のビークルの姿は見られていたか。

どんなに小細工をしたところで、所詮はデザートホーネット団の視界の中だっただけだ。

恐らく、今もどこかから俺たちの様子を観察している奴が居るのだろう。

見られている以上、下手に拷問や惨殺ができないことは確定した。

俺の身分をどこから知ったのかは謎だが……そういえば、こいつらはレイブン砦周辺

に住む砂漠の民とのルートを持っている。

レイブン砦ではダッドリーやジミーとの件で、俺に関する噂はド派手に流れているはずなので、俺の情報を集めるのはそう難しいことではないだろう。

「俺の正体を知ったのは、レイブン砦の堅気からの情報でか？」

「……………」

男は再び黙りこくった。

まあ、この件に関してはあまり突っ込まなくてもいいだろう。

下手に執着しているように取られて、情報を流した民間人を俺が殺すと思われるも厄介だからな。

死を覚悟しても罪なき民を守ろうとするとは立派なものじゃないか。盗人だけど。

「ブラッディマンティスの移動要塞については？」

『サンド・キャツスル』だったか？ そのようなものは知らん。ブラッディマンティスの奴なら、数日前にノーラ様のところへ来たが、すぐに帰ったぞ」

「そいつの話の内容は？」

「知らない。ノーラ様の機嫌が悪そうだったのは覚えている。あの調子では、側近も根掘り葉掘り聞けないだろうな」

まあ、そうか。

デザートホーネット団の頭領ノーラは、借りがあるからブラッディマンティスに協力してはいるが、さすがにゲームのように自分たちの砦の目の前に巨大な移動要塞が来るのは許容できないだろう。

恐らく、あれはノーラに話を通さず、ブラッディマンティス側が勝手にやったことだ。デザートホーネット団から直接『サンド・キャッスル』の情報を得るのは無理だな。

ここは、原作通りオアシスとデザートホーネット団のアジトの間まで進んで、そこで待ち構えるしかないか。

しかし、この男もブラッディマンティスにあまりいい感情を抱いていないようだな。奴らに関しては何も言ってくれない。

現状について『サンド・キャッスル』に関して把握できるだけの情報を手に入れた以上、もうこいつに用は無いな。

いつもなら始末するところだが、今回は監視の目もありそうなので却下だ。

「最後に一つだけ聞いておこう。仲間の仇として、俺をしつこく追いかけてくる奴は居るか？」

「……あなたはハッピーガーランドに行くのだろうか？ 我々に砂漠の外での狼藉は許されない。盗賊行為の最中に戦死した仲間の復讐は……殺した相手を追うのは掟に反す

る」

はつきり言って、信用できる話ではないな。

だが、ブラッディマンティスとの縁が出来るきっかけにもなった三年前の警察の手入
れで、デザートホーネット団が活動地域を近場の砂漠のみに定めたというのはあり得る
話だ。

それに、たとえ俺を追ってくる奴が居たとところで、今の段階でできることは少ない。
既に俺の姿は見られており、デザートホーネット団の本部にこちらの正体が知られて
しまっているのだ。

一人残らず始末して俺の情報が渡らないようにする手はもう使えない。

俺にできることは、少しでも貸しを作って、頭領や盗賊団の総意として俺に対する悪
意レベルを下げるだけだ。

当然、確実に復讐を思い留まってくれる保証は無い。

まったく、面倒な……。

金輪際、盗賊とそういった関係を持つのは遠慮したい。

俺は水筒を一つ男に投げ渡した。

今までに撃破したデザートホーネット団のピークルから奪ったうちの一つだ。

この男も砂漠に生きる人間だ。

これだけの水さえあれば、ビークル無しでも生きて仲間の元まで辿り着けるだろう。

「行け。二度と俺の前に面を出すな」

「……本当に見逃してくれるのか？」

男は半信半疑といった様子だが、俺は快樂殺人犯でもデザートホーネット団に親を殺された復讐の鬼でもない。

今回は容赦なく処刑した方がデメリットは大きそうなので、こいつは逃がしてやることに決めた。

「次に会うことがあったら殺す。あと、ノーラに伝えておけ。俺はブラツディマンティスの起動要塞を潰したらガラガラ砂漠を出ていく。俺を襲ってきた奴は殺す。今、一般ルートで砂漠を超えている俺の友人の画家が被害を受けたら、デザートホーネット団のアジトを吹き飛ばす。だが、それ以外なら何をしよう構わんし、そっちの予定を変更する必要も無い、とな」

「……わかった」

ノーラやデザートホーネット団がどう行動を変えるかはわからない。

俺との衝突が得策ではないと判断してくれば、今回の砂漠越えをする連中が渡り切るまで一般ルートは安全だろうし、バニラたちも原作通りの展開を迎えるはずだ。

彼らのプライドが想像以上の代物で天邪鬼だったら、ポールたちは襲われてバニラたちのイベントにも狂いが生じる。

だが、残念ながら今の俺にできるのはこれだけだ。
必要なことは伝えた。

「失せろ。俺の前から永久にな」

「わかってる。あんたとやり合うのはもう」免だ」

デザートホーネット団の男は、痛む体をどうにか起こして、足を引き摺りながら去っていった。

男の姿が見えなくなったところで、俺も拳銃をショルダーホルスターに仕舞う。

「さて、もうひと踏ん張りだ」

一息つきたいところだが、状況はこちらを待つてはくれない。

早速、俺は撃破したデザートホーネット団のビークルの残骸を漁り始めた。

今回は簡単にチェーニングガンの弾薬と燃料を補充するだけで済ませ、俺は再び「ジャガーノート」のハンドルを握る。

「よし、行くか」

次はいよいよ『サンド・キャッスル』の討伐だ。

50話 砂漠3 (サンド・キャツスル戦)

俺が『サンド・キャツスル』を自ら撃破しに行く理由は三つある。

巨大な要塞である以上、バニラが単独で挑むのが危険だというのが一つ。

バニラの腕は問題なくても、助手席のコニーが危ない。

二つ目は、ゲームでは『サンド・キャツスル』のHPを削り切っても撃破できず逃げられてしまうということ。

実際、ストーリーが進むと、ブラッディマンティスが占拠した油田基地でその姿を見ることが出来る。

奴らに巨大要塞の戦力は残したくない。

あと三つ目は、上手くいけばブラッディマンティスの社員を捕まえて尋問できるかもしれないという点だ。

俺だけが手を汚すなどという思い上がりはもう無いが、やはりこういった仕事では、俺が先回りして手を下した方がいいだろう。

拷問はもちろんのこと、容赦なく敵を殲滅することに關しても、コニーを助手席に乗

せたバナラでは思い切り戦えないので厳しいはずだ。

俺はビークルをデザートホーネット団のアジトとオアシスの間くらいの場所まで進ませた。

原作で『サンド・キャツスル』と遭遇した場所だ。

少々急ぎ気味で来たが、もう日は落ちかけている。

俺の目的の『サンド・キャツスル』もそろそろこの辺りに来ていてもおかしくない。「さて、どこだ……」

ライフルのスコープを使って、俺は敵の影を探し続ける。

数日前にブラッディマンティス社員が頭領ノーラに面会したことは聞いたが、その時にどのような会話が交わされたのかは、俺が尋問したデザートホーネット団の男も詳しく知らなかった。

まあ、ノーラからマーシユのペンダントを持った男を近いうちに捕らえると聞いたか、それともブラッディマンティス側からマーシユのペンダントを持つ男を捕らえろという指示が出たか、そのどちらかだろう。

どちらにせよ、デザートホーネット団はペンダントからバナラをマーシユと勘違いして捕らえる。

何故か、巻き込まれ体質のコニーが先に攫われ、バニラは彼女を助け出すべく自らデザートホーネット団のアジトに潜入することになるわけだが……。

とにかく、バニラとコニーは人違いであったことが判明し、デザートホーネット団から解放される。

その帰り道、二人は謎の巨大要塞『サンド・キャッスル』に遭遇するわけだ。

推測に過ぎないが、恐らく『サンド・キャッスル』にはマーシユの護送の任でもあるのだろう。

マーシユの引き渡しの話が事前にデザートホーネット団へ通っており、彼らが『サンド・キャッスル』の存在を知っていたのなら、話はまた違ったはずだ。

その場合は、ノーラは事前に人違いだったことなどブラッツデイマンティス側に報告し、バニラが『サンド・キャッスル』と遭遇することにはならないだろう。

しかし、『サンド・キャッスル』の存在がデザートホーネット団に無断でブラッツデイマンティスから送られたものである以上は、そういった展開に持つていくことは難しい。

このままではバニラとコニーは『サンド・キャッスル』と戦闘になる。

阻止するには、この場所で先回りして迎え撃つしかない。

最初はデザートホーネット団から『サンド・キャッスル』について何らかの情報を引き出せると期待していたが、奴らが知らない以上はどうしようもない。

こちらから捜索に出るのは下策だ。

すれ違いになったら、この広い砂漠で一体の敵を探すのは困難だ。

結局、直前で網を張る羽目になってしまった。

しかし、残された時間は少ない。

デルセンのキャラバンはもう砂漠のオアシスに到着しているはずだ。

コニーが誘拐されるのは今日の夜。

「現れてくれよ。せめて、日が沈む前に……っ！」

俺の願いが通じたのか、耳を澄ますと地面から断続的な振動とともに大型の機械の稼働音が聞こえてくる。

ようやく来たか。

ゲームでは、『サンド・キャツスル』は砂漠の砂に潜航する要塞だった。

浮上せずに航行しているとすれば、本体は砂の中か。

「潜望鏡は……っ！」

しかし、そのような物の姿は砂地のどこにも無かった。

スコープ越しにかなり遠くまで見てみるが、地面から突き出した金属の管は発見できない。

やはり、ゲームのように都合よくはいかないか。

しかし、いくらスチームパンクな技術力で砂漠に潜航できる潜水艦を作ったとしても、砂の流動性は水より小さいはずなので、巻き上げられた砂埃などは目視できるはずだ。

砂地とはいえ地盤の固い場所なら尚更……ということは、もつと地面の緩い場所に居る………？

「そつちか」

俺は音を頼りに「ジャガーノート」を進め、砂丘を登っていく。

ビークルのレッグパーツが取られて機動力を確保できないが、今は我慢するしかない。

「どこだ？ どこに……うわー！」

突如、俺の目の前に砂丘の中から巨大な要塞が姿を現した。

「来やがったな……」

重低音を響かせながらゆっくりと砂から浮上してきた青みがかったメタリックな装甲を持つ要塞は、間違いなく『サンド・キャッスル』だった。

砂埃を巻き上げながら巨大な機動要塞が迫ってくる姿は、現実ではなかなか迫力があるものだ。

敵は俺に完全に狙いを定めて、全速力でこちらに向かっている。

ゲームでは、『サンド・キャッスル』は砂漠の砂地で潜航と浮上を繰り返し、周囲に機雷をばら撒いて攻撃してくるフィールドボスだった。

見た感じ、砂丘のようになっていて地帯に半ば埋もれながら移動しているようだ。

恐らく、流動性の大きい砂が高く積もった場所を通っているのだ。

なるほど、そういう仕組みか。

周囲に気取られず砂漠を移動し、こうして邪魔者が目の前に現れたら浮上して攻撃するのだ。

こいつが今後もブラッディマンティスによって運用されるとなると、こちら側としてはなかなかの脅威だ。

それに、移動するたびに砂漠の砂地をぐちゃぐちゃにかき混ぜる要塞の存在は、砂漠の民的にも許容できない環境破壊かな？

さて、シナリオ的には、バナラたちが遭遇した時点ではまだブラッディマンティスのことなど一言もイベントには出ておらず、完全に正体不明の敵という扱いである。

だが、俺はこいつがブラッディマンティスに所属する要塞だということも、奴らが今後敵になることも知っている。

案の定、『サンド・キャッスル』の側面に装備された機雷型の砲弾を打ち出す砲台の後

ろには、ブラッディマンティスの軍服を着た男が僅かに見えた。

「くたばれ」

俺のチェーンガンが火を吹き、砲台の僅かに横辺りに着弾した弾丸は、火花を散らしながら薄い装甲を貫通する。

砲台の後ろに居た男は、ビークル搭載サイズの武装をまともに食らって挽き肉になった。

しかし、要塞の中では僅かにパニックになったものの、すぐに別の人間が砲手を交代したようで、反撃とばかりに機雷をばら撒き始める。

「おっと」

俺は慌ててペダルを踏み込み、スラスタードッシュでビークルを後退させた。

なかなかに対応が早い。

『サンド・キャッスル』に搭乗するブラッディマンティス社員はそれなりにエリートのようなのだ。

砲台から撃ち出されて砂地を転がり時間差で起爆する大質量の爆弾を躲し、俺はチェーンガンを『サンド・キャッスル』の側面に撃ち込んでゆく。

現実であの大きさの爆弾を食らったらヤバいので、俺は攻撃よりもむしろ回避を優先

していた。

しかし、このままでは突破口は掴めない。

ゲームでは、『サンド・キャツスル』は一定時間ごとに潜航と浮上を繰り返し、浮上している間だけ砲撃してくるといふパターンがあったので、攻略には近道があった。

潜航した際に潜望鏡にぴったりとビークルを寄せ、浮上した際に甲板の上に出ることが出来るポジションを取れば、そのまま攻撃に晒されること無く要塞の中心部を殴れる。

ところが、現実では敵ビークルを操っているのはP S 2時代のNPCではなく人間だ。

俺のチェーンガンが分厚い装甲に阻まれて『サンド・キャツスル』に有効打を与えられていない以上、向こうが攻撃の手を緩めて退く理由はない。

だが、俺もいつまでも無為に劣勢になっているわけではない。

無駄弾を使わされた借りは返してやる。

「そっだ」

俺は砲台の発射レートのリズムを観察し、次弾が装填されたと思わしきタイミングでチェーンガンの引き金を引いた。

砲口とその周辺に向かって。

「ぐわっ!」

「っ! あいつ! 砲口に……がっ!」

点射で撃ち込んだチェーンガンの弾丸のうちの一発が砲台を正面から撃ち抜き、装填されていた機雷が衝撃で起爆した。

砲台の近くに居た乗組員は、閉所で爆発に晒されて甚大な被害を受けたことだろう。

砲身とその周辺も、弾薬がまとめて誘爆したことでボロボロになって大破している。

「撤退! 撤退だ!!」

逃がすか。

ここで退却を許したら、原作のバナラたちと戦った場合と同じになってしまう。

俺は吹き飛んだ砲台の横辺りを、右のアームパーツに装備した強化ブレードで斬りつけた。

数回ほど斬撃を打ち込むと、既にズタボロになっていた装甲版が千切れ飛び、『サンド・キャッスル』の側面には「ジャガーノート」が通れる程度の穴が開いた。

「早く! 潜航し……ぎえああ!」

どうにか、要塞全体が砂に沈み込む前に、俺は「ジャガーノート」を内部に滑り込ませることに成功した。

目についた乗組員のブラッディマンティス社員を、至近距離から強化ブレードを振

るって斬り殺す。

生身の人間がこの世界の重機であるトロットビークルの出力で放たれた攻撃に耐えられるわけがない。

スキートル湖の『ディープアングラー』のときと同じ戦法だ。

そして、俺は要塞の中に居るブラッディマンティス社員を、片っ端から処刑しながら、『サンド・キャッスル』の中心部を目指した。

「終わったか……」

全部で四つある砲台の内部を破壊し尽くし、ブリッジにチェーングンの弾をたっぷりと撃ち込んだところで、潜航要塞『サンド・キャッスル』は活動を停止した。

内部から食い破るように破壊されては、巨大な移動要塞も一巻の終わりだ。

駆動系が完全に停止しているので、もし生き残りが居ても再び要塞を動かすことは叶わないだろう。

俺は破壊工作を一時中断して要塞内部の生存者の捜索に移った。

しかし……搭乗していたブラッディマンティスの社員は全員が息絶えている。

残念だ。

ブラッディマンティスの人間が一人でも生き残っていれば、少しは何か聞き出せたか

もしれないのに……。

まあ、やっちゃまったものは仕方ないな。

俺も『サンド・キャッスル』を逃がさないように、自分が撃破されないように必死だった。

確実に破壊できただけでもよしとしよう。

俺は鉄くずの塊と化した要塞から脱出するために、壁に向かって強化ブレードアームを振るった。

黒鉄とオリハルコンを用いて稀代の天才ナツメグ刀匠によって造られた刃は、足場も体勢も安定している状態で放たれたことで、その切れ味を十全に示す。

『サンド・キャッスル』の装甲はぱっくりと割れ、四角形に切り取られた要塞の壁が床に落ちる。

しかし……。

「わっぷー！」

同時に要塞の内部に砂がなだれ込んできた。

「くそっ……」

戦闘でも俺と【ジャガーノート】はガラガラ砂漠の乾いた砂を存分に浴びる羽目になったが、またしても砂まみれだ。

俺は悪態をつきながらビークルを進め、要塞から這い出す。

上手い具合に、出口はそれほど深く埋まっていないようだ。

気が付けば、外では既に日が沈んでおり、砂丘の向こうには明るい月の姿がはつきりと見えていた。

「少し、急ぐか……」

このままのんびりしては、コニーを攫いに行くデザートホーネット団か彼女を助け出すためにオアシスを飛び出したバナラと鉢合わせしてしまう。

俺は少々駆け足気味に弾薬庫から機雷をいくつか運び出し、要塞の各所に転がしてから、残ったいくつかを先ほど開けた出口付近に設置する。

そして、数十メートルほど『サンド・キャツスル』の残骸から離れ、チェーンガンの照準を機雷に合わせた。

そして、静かにアームパーツの武装を稼働させるトリガーを引き絞る。

次の瞬間、眩い爆炎とともに、先ほどまで砂漠の地中を駆けていた起動要塞は轟音を発して爆散した。

「汚ねえ花火だ」

誘爆した機雷の爆発で、『サンド・キャツスル』は完全に修理が不可能なまでに破壊された。

「はあ……これで本当に任務完了、だな」

俺は休息を求める体に鞭打って、「ジャガーノート」のハンドルを握って移動を始める。

もうひと踏ん張りだ。

夜通しビークルを運転し続けることになるかもしれないが、俺はこのままコンドル砦に向かう。

何はともあれ、ガラガラ砂漠で俺ができることは全て終わった。

次は、コンドル砦でバニラたちと合流だ。

「はあ……疲れた……」

さっさとこの忌々しい砂漠からおさらばしよう。

もう二度と……そういえば、次にネフロに帰るときはまだ鉄道が復旧していないので、また砂漠を通ることになるのだった。

さらに、ゲームとしては大分先だが、ブラッディマンティスが油田を占拠した際の戦争で、この砂漠にはもう一度足を踏み入れることになる。

気が滅入る話だ。

51話 砂漠4

深夜、デザートホーネット団のアジトにて。

コニーの独唱による『Improbable』のお披露目が終わった。

荒くれの盗賊たちが歌声の余韻に浸る中、頭領のノーラがコニーの前に進み出る。

「ありがとう。いい曲だねえ。とつてもいい気分だよ」

彼女もまた、灼熱の砂漠とは別の世界の文化に触れる機会は少なく、コニーの歌声に酔いしれる者の一人だった。

しかし、次の瞬間には、ノーラは表情を引き締めて厳しい目をコニーに向ける。

「それじゃ、今日はこれで帰りな。それと、一つ言っておくよ」

緊張感のある空気に包まれたことで、すぐ近くに居たバナラも固唾を飲んで彼女の言葉に耳を傾けた。

「盗賊はアタシたち、先祖代々の生業だ。次に砂漠で会ったら、遠慮なく狙わせてもらうから、そのつもりでね」

彼らは砂漠の盗賊団。

縄張りを通る者を襲い、金品を奪うことで生活を成り立たせている。

場所が場所だけに、もうしばらくはそういう時代が続くだろう。

技術が発展しても、馬と槍がビークルとガトリングに変わったただけだ。

だが、ノーラも今の一言で示しはついたと判断したのか、今度は二人に笑顔を向けた。「でも、この砦までたどり着いたら、その時は客として迎えるよ。これは歌のお礼だ」

張り詰めた緊張感のある空気が霧散したことで、バナラはほっと安堵の息を吐き出す。

「ついでにその……マーシユ……じゃない」

ノーラはコニーの横に立つバナラに声を掛ける。

マーシユと間違えて捕まえられたが人違いだと分かり、解放されたものの自己紹介がまだだったことを思い出したバナラは改めて名乗った。

バナラの挨拶を受けたノーラは、振り返って一人の部下を呼び止める。

「おいー！」

「へい頭領！」

ノーラに呼ばれた部下を見たコニーは、そこであることに気付く。

「あ、この人！ デルセンさんのキャラバンの……？」

「いや、すみません……」

「こいつはアタシたちの仲間さ」

コニーが攫われた際にバニラをデザートホーネット団のアジトまで連れてきた人物。

それは、デルセンの助手を務めていた男だった。

ノーラの一言で、全てに納得するバニラだった。

「お客さんのお帰りだ。オアシスまできちんと案内してあげな」

「わかりました」

「すみません、人違いだったようですね。頭領はある人を捜しているらしいんですが……」

デルセンのキャラバンに潜入していたデザートホーネット団の男の案内で、バニラとコニーがオアシスに向けて出発したのを確認すると、ノーラは普段の定位置であるアジトの二階に戻る。

彼女は再び頭領の顔に戻ると、側近たちを呼び出した。

「それで？」

「はい。夕刻に我々の砦の近くで起きた爆発に関しては、確認に向かわせた者から既に報告が上がっています。ノーラ様の読み通り、ブラッディマンティスの要塞で間違いありませんでした。巨大ビークルの残骸から、奴らのワツペンや制服の切れ端が見つかつ

たそうです」

「ふん、やはりな。大方、マーシユの受け渡しの際に追加報酬やら何やらゴネられるとも思つたのだろう。アタシたちへの脅しも兼ねての巨大要塞か……。敢えて事前に話を通さず来たのも、自分たちが上だと誇示するためだろうね」

「黙つて従え、と？」

「弱い犬ほどよく吠えるつてことさ」

樂觀的に嘲笑する別の側近を、ノーラは厳しい目で睨みながら鋭く咎める。

「調子に乗るんじゃないよ！ ブラッディマンティスの力は侮れない。余裕と油断は違
うよ」

「っ！ はっ！ 申し訳ありません」

硬直して姿勢を正した男に、他の側近メンバーが呆れたような視線を送った。

空気の悪さを感じ取ったノーラは、話題を変えるように口を開いた。

「まあ、最終的に砂漠に朽ち果てているんじゃないや、世話あないけどね。……やったのは、
ナツメツグ博士の右腕”かい？”」

「はい。観測手によると、今日の夕刻から日没にかけて、例の黒いビークルが巨大要塞と戦闘を行ったそうです。結果は偵察部隊の報告通り。搭乗員は皆殺しで、要塞が鉄クズ同然になるまで破壊し尽くす徹底ぶりです」

グレイの戦いぶりとビークルの性能は、『イエロー・ワズプ』との戦闘においても彼らは報告を受けている。

彼のチェーリングガンが自分たちの同志に向けられた例も、実際に体験しているのだ。

ノーラの側近の何人かは、珍しくブラッディマンティスに同情したい気分になった。

「ノーラ様、よろしかったのですか？ ブラッディマンティスの潜航要塞は数日前にも観測されているので、我々はその位置を把握していました。『ナツメツグ博士の右腕』が潜航要塞を狙っているという話を伝えれば、あの者たちへ恩を売れたはず……」

「ふむ、どうやってだい？」

「は？」

おずおずと質問した側近に、ノーラはとぼけた様子で言葉を返す。

「『ナツメツグ博士の右腕』がブラッディマンティスの潜航要塞を狙っている話をアタシたち知ったのは今日の夕刻。奴のビークルと交戦して一時捕虜になった者が帰って来た後の話だ。そこから、どこでコンタクトを取れるかわからないブラッディマンティスに半日足らずで連絡する。現実的じゃないよ」

先ほど要塞の位置は把握していたという話を聞いたうえで、ノーラの言葉だ。

側近たちはその意図を完全には把握しかねて首をかしげる。

「そもそも、アタシたちは潜航要塞のことなんて知らない。情報を伝えようにも、相手がどこに居るのか知らないんじゃないかねえ……」

「え？ しかし……」

「知らないんだよ、アタシたちは。ブラッドダイヤモンドがロクでもない代物を砂漠で運用していたことも、うちの縄張りに我が物顔で侵入していたことも」

知らなかったという建前。

ここまで言われれば、察しが悪い者もノーラの意図を悟った。

『サンド・キャッスル』はもう無い。

今更、ブラッドダイヤモンドが舐めた真似をしたことを騒いでも、血気盛んな下っ端が跳ねるだけだ。

デザートホーネット団とブラッドダイヤモンドの関係を、表面上の同盟に至るまで、いたずらに悪化させることになる。

既に『サンド・キャッスル』を問題にするメリットが無いのだ。

要は、この一件に関しては、側近たちの腹の中だけに収めておけという話である。

「それに……」

「それに？」

「気に入らない話だが、奴はアタシたちの仲間を一人見逃してくれた。生殺与奪の権を

握り、そのうえで盗賊を……アタシたちの仲間を逃がしてくれた。むしろ奴にブラッディマンティスの要塞の情報を流してやりたかったくらいさ」

「ノーラ様、それは！」

グレイが聞いていたら、手土産を山ほど持ってノーラのもとを訪ねて来そうな話だが、側近は焦ったように窘めた。

ブラッディマンティスに恩があり、グレイに同志を多数葬られた手前、既にデザートホーネット団が彼と友誼を結ぶことは不可能だ。

仲間を何十人も殺された蟠りは、そう簡単に捨てられるものではない。

少なくとも、上に立つ者として取れる態度ではない。

「わかってるよ。そもそも、要塞の目撃情報自体がデザートホーネット団の中でも一部でしか共有されていなかったし、あれが本当にブラッディマンティスの連中の物か確認も取れていなかったからね。ただの愚痴さ」

ノーラがこれ以上の罵詈雑言を吐かなかったことで、側近は安堵の息を漏らした。

必要とあれば同志に対しても口を閉ざしノーラの意思のみを優先する、彼らの腹心という立場を鑑みれば、不用意な発言は控えてほしいと思うのも当然だ。

そもそも、要塞のことを知らなかったという建前を、ノーラ自らぶち壊す物言いだ。

「それはそうと、最近は何やらトラブルがあったおかげで、実働部隊が甚大な被害を受け

ているね。このままでは総合戦力の低下が避けられない。ビークル部隊を再編成する必要がある。一般人の砂漠越えルート周辺に展開している奴ら呼び戻しな」

「ノーラ様……」

「車輪式の高機動ビークルの実戦投入の予定もある。早い方がいい。大至急、所要の措置を取りな！」

「……はっ！」

そして、グレイが解放した捕虜経由で伝えた内容にも、ノーラはさりげなく配慮をすることを怠らない。

これで、凶らずもグレイが懸念したポールの安全は確保された。

「『ナツメツグ博士の右腕』グレイか……」

ノーラは月の見えるバルコニーに進み出て再び呟く。

「一体、どんな男なのやら……」

「ん……(´・ω・´)は……?」

見慣れない場所で目が覚めたので、つい警戒しながら周囲を窺う。

自分の体が横たわっていたのはビークルのシートではなく簡易的なベッドだが、天幕の外から僅かに聞こえる音はレイブン砦のバザーの喧騒には程遠い。

「そうか、コンドル砦か」

昨日の夜、『サンド・キャツスル』を破壊した俺は、そのままビークルを走らせて、夜が明けた頃にコンドル砦へ到着した。

夜通しハンドルを握り続けた疲れもあつたので、昨日はそのまま宿泊所に向かった。

またしても自宅のベッドには程遠い環境での休息だが、昨日はレイブン砦に近い砂漠でビークルのシートに体を埋めて夜を明かしたので、それに比べれば今日はマシだ。

コンドル砦にはデルロツチ貿易以外のキャラバンも集まるので、商店や売り場の規模こそ大きくないが、砂漠を超えて来た者が休憩できる設備はそれなりに整っているのだ。

しかし、予想以上に短い行程だったな。

ほぼ徹夜したとはいえ、実質、一日と少しで砂漠を渡れたことになる。

大所帯で速度よりも積載量と安全を重視するキャラバンも、オアシスで一泊して二日の旅だ。

駱駝だとの何倍も……ポールが来るまであと数日は掛かるだろう。

時代背景が現代の地球よりかなり前の世界とはいえ、やはり内燃機関とトロツトビー

クルは革新的な発明だな。

「ヤッ……」

懐中時計を見ると、既に昼を回っていた。

随分と寝坊をしてしまったようだ。

俺は身支度を済ませて宿泊所を出ると、自分のビーグルを一度確認した後、数少ない商店のエリアに足を向けた。

しかし、デルロツチ貿易本店の辺りを見ても、デルセン一行のキャラバンやバナラの【カモミール・タイプⅡ】は見当たらない。

デルロツチ貿易の店員に聞いてみると、キャラバンの到着は夕方近くになることが多いそうだ。

彼らが来るまで、そう時間は掛からなそうだな。

予想通り、整備場で「ジャガーノート」の修理や補給を済ませ、砂埃を取り払って点検をし終わったところで、皆にデルセンのキャラバンが入ってきた。

見たところ、キャラバンに損害はほとんど無いようだ。

デルセンが上機嫌でバナラに護衛の報酬を渡し、話が終わったところで俺は声を掛けた。

「やあ、二人とも。お疲れさん」

「グレイ！ もう到着してたんだね」

「あ、早かったね」

まあ、こっちは一人でしたからね。

「無事に砂漠を渡れたようだな」

「うん。何度か、デザートホーネット団の襲撃はあったけど」

見ると「カモミール・タイプⅡ」にはレイブンを居たときには無かった傷が増えている。

心なしか、バニラの顔つきが少し逞しくなった気がする。

コニーは……洒落たエスニックな装束を着ているな。

バニラのプレゼントの効果がいかほどのものか、今後が楽しみだ。

「それはそうと……二人とも、少し疲れているようだな」

「うん、ちよつと……」

「あんまり……眠れなくて……」

確かに、夜中にデザートホーネット団に誘拐されて大騒ぎでは、まともな休息は取れないだろうな。

「まあ、ここからハッピーガーランドまではそう遠くないからな。もうひと踏ん張りだ。」

少し休憩したら出発するぞ」

「うん」

「安心しろ。今回は、道中の警戒は俺が引き受ける。バニラは事故にだけ気を付けなければいい」

「わかった。ありがとう、グレイ」

バニラが整備場へ行つて「カモミール・タイプⅡ」の修理と点検をしている間、俺は再びデルロッチ貿易本店の方へ行き、社長のデルセンに声を掛ける。

「デルセン社長」

「は、はい」

何故か怯えられているが……もしかしたら、他のキャラバンからルート上に転がっているデザートホーネット団のピークルの残骸や死体の話でも聞いたのだろう。

俺は注文以上の品を受け取ったから、体裁のために酷く徹底した仕事をする羽目になっただけ。

デルセンは俺が腹いせにぶん殴るとでも思っているのだろうか？

ビビるくらいなら、最初から欲をかかなければいいのに。

「別件で仕事の依頼です。旅客ピークルの予約をしたい」

デルセンの表情は緊張したままだが、幾分か警戒レベルが下がったようだ。

「ポールという画家が、近いうちに駱駝で砂漠を超えてきます。出発したのはあなた方と同じ日なので、遅くても数日中に」

「ポール……？ ああ！ あなたがレイブン砦に連れてきた」

「そうです。料金は前払いしておくので、旅客ビークルを一台確保して、彼をハッピーガーランドまで送ってください」

「畏まりました。それで、お代の方ですが……」

デルセンが提示した金額は、労働者の日当が数日分だった。

ある程度は盗賊に対処できるビークル乗りを雇うのだから、まあ妥当な金額か。

「じゃ、これで」

「ありがとうございます。確かに、承りました」

俺がデルセンにポールのタクシー代を渡し終えたところで、バナラが整備場から出てきた。

「さ、行こうか」

「うん」

そして、俺たちはコンドル砦を後にして、ハッピーガーランドに向けてビークルを進めた。

5 2話 到着、大都会

申し出通り、コンドル砦からハッピーガーランドに向かう道中、盗賊への対処は俺が引き受けた。

ゲームでは『デビルホッパー』と『ビッグフット』が必ず出現するエリアだが、現実ではフィールドの敵が全てゲームシステムと共通というわけではない。

運よく、今回は盗賊に遭遇することなくハッピーガーランドに到着した。

睡眠不足で集中力少々問題がある状態のバナラにとつても、【カモミール・タイプII】の助手席で舟を漕いでいるコニーにとつても、トラブルが無いのはいいことだ。

「遅くなっちゃったね。ここが大都市ハッピーガーランドだよ」

夕刻を知らせる鐘の音ではっと目を覚ましたコニーが、バナラに声を掛けた。

ハッピーガーランドの南西の出入り口を潜ったときには、既に日が落ちかけていたが、一週間で到着したのだから上出来だろう。

十日くらいは掛かると踏んでいたが、嬉しい誤算だ。

『ロブスター亭』っていう宿屋さんのところで降ろしてね」

俺のピークルが先を歩いているので道を間違えることが無いと安心しているためか、

バナラの視線は都会的な建造物を絶え間なく行き来している。

わき見運転で事故らなければ問題ないので、俺は何も言わずにオイルモータレ工場とシティーモーターズを通り過ぎ、東地区の商店街までビークルを進めた。

「駐機場はここだ」

俺の案内に従い、バナラも【ジャガーノート】の隣に自分の【カモミール・タイプⅡ】を停めてエンジン停止させる。

「楽団の皆が待つてるはずなんだ。ここちだよ」

ビークルから降りると、早速とばかりにコニーがバナラを促した。

俺が居なければ、手を引いていたかな？

原作より二人の仲は進展しているようだし。

「ここがロブスター亭。さあ、入ろう」

商店街沿いの正面口に回り、コニーが先に立って扉を開ける。

バナラが彼女に続き、俺も後を追う形で久しぶりにロブスター亭のエントランスを潜った。

真つ直ぐにロブスター亭の食堂に入ると、セイボリーが真つ先にこちらに気付いた。

「あつ……ねえ、バジル、マジヨラム！」

「あつ!」

「コニー! それにグレイも! よかった、無事だったのかい?」

「ごめん、みんな。迷惑かけて……」

俺たちがステージの近くまで足を進めると、安堵の表情を浮かべていたマジヨラムが疑問を発する。

「列車事故があつたんだろ? どうやってここまで来たんだい?」

「彼のビークルに乗せてもらったの。ガラガラ砂漠を渡つて……」

「ガラガラ砂漠!? へえ! 凄いや!」

コニーが示したバナラに全員の視線が注がれた。

しかし、バジルは何かを閃いたような仕草とともに口を開く。

「あ、でもそうか。グレイが居たんなら、砂漠の盗賊団なんてへっちゃらか」

どうやら、バジルは俺がずっと二人のお守りをしていたと思っっているようだ。

今回の俺はバナラたちに直接何かしてやったわけではないので、俺は首を横に振って答えた。

「いや、俺は砂漠では別の用事があつたからな。コニーを守り通したのはバナラだよ」

「そうなのかい! バナラ、僕からも礼を言うよ。ありがとう」

バナラはマジヨラムの言葉に照れ臭そうに頭を掻いた。

立派にコニーの騎士の任を全うしたのだから、そこは誇るがいいさ。

ここで、コニーが違和感に気付いた。

「……あれ？ フェンネルは？」

確かに、トロツと楽団のメンバーが勢揃いしているこの場にフェンネルが居ない。

何気ないコニーの一言だったが、セイポリーたちは一様に歯切れが悪くなって言い淀む。

「どうしたの？ みんな……？」

俺は事情を知っているが、ここは口を噤んだ。

皆の視線が遠慮がちに注がれたマジヨラムが、代表して口を開く。

「フェンネルなら出てったよ。もう僕たちとバンドを組みたくないんだって」

「えっ!？」

コニーの驚愕の声に、バジルがマジヨラムの言葉を継ぐ。

「前から様子が変だったんだよ。でも、コニーが居なくなってから……」

「私が勝手にネフロに帰ったから……」

前からと言っているのに、コニーはバジルの言葉が聞こえていないかのように呟いた。

様子が変なのは、新曲の練習にフェンネルが来なかったことなど、コニーも知っているはずなのに……ああ、バニラへの恋煩いで、腑抜けていたときか。

俺たちがフェンネルのことを話していても、耳に入っていなかったな。

だが、いざ実際にトラブルが起こってみると、コニーの判断は素早く行動力の高さを発揮した。

「私、フェンネルのところに行ってくる」

「説得しても無駄だと思うよ。僕らも何度も行っただけど……」

「でも……直接会って謝りたいし……」

マジヨラムもコニーの気質は理解しているため、それ以上は引き止めなかった。

「そうかい……それでコニーの気が済むなら……。フェンネルはステーションホテルに居るよ」

「うん、じゃあ行ってくる」

コニーは小走りでロブスター亭を後にした。

俺は口を開きかけたセイボリーに先んじてバニラに声を掛ける。

「バニラ、すまんがコニーの様子を見て来てくれないか？」

「わかった、行ってくるよ。僕も心配だからね」

即決だな。

まあ、バナラが常にコニーのことを気にしてくるのは悪い傾向じゃない。

「頼むよ。思い詰めやすいタイプだから、せめて傍に居てやってくれ」

ステーションホテルの場所を教えると、バナラも急ぎ気味にロブスター亭を出ていった。

……実は、セイボリーが頼む場合だと、主人公バナラのセリフの選択肢にセイボリーとのデートを条件に引き受けるというものがあるので、俺の行動にはその展開を予防したという意味もあるのだが。

無いと思うが、この二人の距離を近づけるのは避けたい。

バナラヒロインはコニーだからな。

セイボリーの色気にバナラが鼻の下を伸ばす可能性もゼロではない。

「グレイ、お疲れ様」

「ん？」

突然、マジヨラムから労りの言葉を掛けられたので、俺は怪訝な表情で振り返った。

「バナラとコニーのこと、ずっと守ってくれたんでしょ」

「いや、俺がお守りしたのはネフロまでで、ここまでコニーを乗せてきたのはバナラ

……」

「じゃあ、コニーたちを影ながら守ってたってわけだ。あとは、助けが必要なタイミングを見計らっていたとか……」

まあ、『サンド・キャツスル』を先回りして撃破したことは、陰ながら守るうちに入るのかな。

タイミングを見計らうなんて高度な真似はしていないが、バナラたちが疲弊しているコンドル砦からハッピーガーランドまでの道のりを俺が護衛したことは、いいタイミングだったと言えるか？

さすがにマジヨラムの言葉は俺を買いかぶり過ぎだと思うが……。

「グレイは……どこか僕たちを気に掛けて、さりげなく助けてくれることが往々にしてあるからね。君がそれだけ消耗しているのは、例の『別の用事』だけではないんだろ？」
俺は苦笑いしながら手を上げて降参の意を表した。

「はあ……マジヨラムは何でもお見通しか」

「いや、何でもじゃないさ。ただ、メンバーの体調や様子なんかには気を付けるようにしているからね。……フェンネルの件では、役に立たなかったみたいだけど」

目の前の状況に話題がシフトしたことで、自然と俺に関する話は終わった。

「ところで……グレイはフェンネルの件、知っていたのかい？」

当然、フェンネルの件とは彼がトロット楽団を抜ける話だ。

「うくん、知っていたわけではないな。直接、本人から脱退を考えている話を聞いてはいないし」

「そっか。確かに、フェンネルはそういうことを人に相談するタイプじゃないかな」

「ああ、彼がもつと革新的でパワフルな音楽に憧れていたのは、それこそ俺と会うより昔からのことだろ？　ただ……」

「ただ？」

「……フェンネルの目指す音楽には、やはり既存の楽器……今のギターだけでは到達できないのかな、と。俺も薄々そう感じていた」

フェンネルの話は、その後サブイベントとして進行する。

バナラがこの先のストーリーで訪れる場所のイベントをこなすことで、この世界で初のエレキギターを作るのに役立つパーツが集まり、フェンネルはエレキを使ったバンドを立ち上げるのだ。

エレキの発想が、電車のみみたいなデカイものを動かせるパワーを持つ電気をどうにかして楽器に使う、というものだったのはアレだが……。

とにかく、フェンネルのバンドはこの世界初のエレクトリックバンドとなる。

イメージとしてはベンチャーズかビートルズあたりか？

実際、エレキギターは偉大な発明だ。

最初こそ、マイクをアコースティックギターの近くにに向けて設置する代わりに、音量増幅機としての使い道しか考えられなかったようだが、それもエフェクターの技術の発展でより一層の音楽の革新を齎すことになる。

優れた発明だったがゆえに、日本では流行自体が気に入らない老害が挙って批判を始めたそうだが……。

俺の祖父母の時代には、馬鹿の巣窟の典型である教育委員会やら教師やらが、エレキの迫害に熱心だったらしい。

「じゃあ、コニーの説得も……」

「あまり、期待はしない方がいいかもな」

「……そうだね」

成功するビジョンのあるものを、俺に止める気が無いというのも理由だけだね。

コニーとバナラは揃って戻ってきた。

原作では、先に出ていったコニーの後を主人公が追う形だったが、現実のバナラはきちんとコニーに寄り添っているじゃないか

「コニー、どうだった？」

「ダメ……やっぱり、戻る気は無いみたい」

コニーは首を横に振りながらバジルに答える。

「フェンネルは、今までの音楽とは根本的に違うものを作りたいたんだ。あれだけの情熱を見えられたら、僕も軽々しく戻ってくれとは言えないかな……」

バナラはフェンネルのやりたい音楽に關してもしつかりと聞いてきたようだ。

ということは、バナラは先にコニーをステーションホテルのレストランから出し、帰る途中でコニーに追いついたのかな？

そんな益体も無いことを考えていると、バジルがボヤクように呟いた。

「どうしよう……フェンネルが居なくちゃ、ギターが……」

「……ギターは、私が弾くわ」

「本当かい？ 頼むよ、コニー」

コニーの言葉にマジヨラムは一瞬だけ驚いた表情を見せたが、すぐにその提案を受け入れた。

確かに、それが一番無難な選択だな。

ギターはセイボリーも弾けるが、そうなるとピアノを俺が弾くことになりサククスが抜ける。

ゲームでは、ロブスター亭の演奏はマジヨラムがサククスを吹きドラムが空席なのだが、現実では考えにくい編成だ。

まあ、それを言ったら、アコースティックギターこそバンドに必須となる状況は少ないのだが……。

「もう時間が無いわ。早く練習を始めましょう」

セイボリーのセリフはリハーサルではなかった。

それもそうか。

さすがに到着してその日にお披露目は無理だ。

次の定期演奏会は一週間後。

これから始まるのは、追い込みで各自の個人練習と合わせ練習だ。

「待って！」

唐突に声を上げたコニーに全員の視線が集まる。

「新曲には、彼も参加してもらおうと思うんだけど……」

バナラを示しながら言ったコニーの一言に、一瞬の静寂の後、バジルが素っ頓狂な声を上げた。

「えーっ!？」

「……そうね。もう一つ楽器があった方がいいかもしれないわね」

セイボリーは人を貶めない大人なので、コニーの判断ならとすぐに賛同したが、バジルは素直に疑問を呈する。

「でもコニー、大丈夫なの？」

「大丈夫。彼、すつごく上手いのよ」

「どうやら、オアシスでバナラがコニーに披露した演奏は、及第点を大きく上回っていたようだ。」

ナツメツグ博士のトランペットをくれてやった甲斐があつたな。

コニーに聞かせたのはハーモニカの方かもしれないけど。

何はともあれ、コニーの保証により、バナラがトロット楽団に参加することが決まつた。

53話 定期演奏会

一週間後。

とうとう、定期演奏会の日がやって来た。

曲目は『Imposable』に『In Your Voice』。

フェンネルが抜け、代わりにバナラが加入した新生トロッツ楽団の初お披露目だ。

原作と違う点は、俺が居ることか。

その影響で、マジヨラムはサククスではなく本業のドラムを演奏する。

コニーは原作通りギターの練習を詰め、ボーカルと兼業でギターを演奏する。

バナラは……トランペットを使うようだ。

練習は順調だった。

コニーも空いた時間で練習していたし、俺もどうにか勘を取り戻して後れを取らないように努めた。

強いて言えば、一番ヤバかったのは、トラブル続きで集中力を欠いていたバジルか。

ウツドベース自体の調子もあまり良くないみたいだが、練習が手につかなかったこと

も影響しているだろう。

まあ、それでもバンドとして形になる程度には仕上がった。

今日という日のためにできることはやった。

あとは、練習の成果を発揮できるよう、全力を尽くすだけだ。

「ああつ、ここのステージも久しぶりだなあ」

「ふふつ……バジル、緊張しているの？」

「ぜ、全然だよ！ セイポリーこそ、大丈夫かい？」

「ええ。心配してくれて、ありがとね」

「いやあ……」

この二人はいつも通りか。

あと、バジル。

お前さんはワンパターンだな。

二人に続いて控えエリアまで行くと、ロブスター亭の食堂には、俺たちのステージの開演を待つ客が大勢詰め寄せているのが見える。

因みに、客席にはポールも居た。

一昨日、ハッピーガーランドに到着したポールが向こうから俺に挨拶しに来たのだ。

要件はコンドル砦からハッピーガーランドまでの旅客ビークルの礼だった。

俺が忙しくて迎えに行けないため人を雇っただけだが、ポールにしてみれば何から何まで世話になったという認識のようで、俺に砂漠の絵を渡してきた。

代金を頑として受け取らなかったのも、俺はトロット楽団の定期演奏会に招待したのだ。

まったく、芯が強いのはいいが、芸術家なら自発的なパトロンにくらい甘えてしまえばいいと思うのだが……。

生活が苦しい割にこういうところが頑固なので、やはり彼を大学の教授に推薦する話は早く進めないとな。

「さ、開演だよ」

マジヨラムの合図で、メンバーそれぞれが各配置に散っていく。

俺はトランペットを片手に強張った表情を浮かべるバナラの肩を叩いた。

「落ち着いて、練習通りにやればいい」

「グレイ……」

「君の位置はコーニーの向かって左……ちようど彼女の真横だ。（少しでも気を引けるよう、頑張るんだな）」

「なっ?!? 僕は、そんな……」

「はははっ、幸運を祈る」

俺はバニラを軽く茶化すと、自分の立ち位置に向かった。

「(ん?) バニラ、どうしたの?」

「(な、コニー!?! 何でもない……)」

青春だねえ。

俺は後ろに聞こえる二人の会話にほくそ笑みながら、サックスのポジションであるドラムの前まで進み、ストラップを首に装着した。

ロブスター亭の食堂からほとんどの客が退出し、街に明るい照明が灯る。

先ほどまで喧騒に包まれていた会場は、僅かな酔客を残すのみとなった。

俺たちもステージを軽く片付けて控え場所に戻る。

記念すべき、トロット楽団の定期演奏会の第一回目は無事に終了した。

大絶賛の嵐とともに。

「でも、何とか無事に終わってよかったよ。ありがとう」

急遽、助っ人になってくれたバニラにバジルが礼を述べる。

最初はバニラの演奏技術に懸念を隠しきれなかったバジルだが、実際に公演が終わっ

てみれば何の蟠りも無く彼を楽団の一員と認めた。

まあ、バジルは素直なだけで、新参者や下の人間に当たる奴じゃないので心配はして
いなかったさ。

しかし、バニラと話していたバジルは急に訝しげな表情を浮かべ、またしても素っ頓
狂な驚愕の声を上げる。

「あれっ……そのペンダント！ そうだ！」

「えっ？ ああっ！」

釣られてバニラの方を向いたマジヨラムも珍しく大声を上げるが、コニーが気づいて
訂正した。

「違うの！ そのペンダントは友達に貰ったんだって」

「じゃあ、その友達がマーシユなのかもしれないだね」

バニラの記憶喪失に関しては、コニー経由で楽団メンバーもとつくに承知している。
しかし、このバニラにはある程度の記憶が臙げに残っているみたいだな。

バジルはもう少し根掘り葉掘り突っ込みたそうにしていたが、コニーへ一瞬だけ視線
をやったセイボリーがインターセプトした。

「マーシユのことは、また今度にしなない？」

「そうだね。せつかく無事にライブが終わったことだし……」

マジヨラムは珍しく少々慌てたように相槌を打つ。

多少苦しい言い訳だったのを自覚しているのか、マジヨラムはそのままバジルに向き直り、強引に話題を変えた。

「でもバジル。ベースが何だか調子悪そうだったね」

「そうなんだ……。明日、ダンディリオンの工房に行くよ」

バジルは目先の重要な要件に話題がシフトしたことで、自然とそちらに意識を移動させた。

「皆も行くだろうか？」

「僕は次の公演の手配をしなきゃいけないからなあ……」

「私も約束があるから行けないわ」

馬の合うマジヨラムと憧れのセイボリーが不参加と知り、バジルは残念そうな表情を浮かべたが、順番に予定を聞いていく。

「コニーは？」

「……私もやめとく。ギターの練習もしたいし……」

確かに、フェンネルが抜けた穴を埋める意味でもコニーは忙しいだろうが、やはりダンディリオンには会えにくいだろう。

ここで俺が介入して無理に連れていくのも、今更何の意味も無い。

「グレイはどうするんだい?」

「すまん。俺も野暮用があつてな」

マジヨラムの問いにはこう答えたが、嘘はついていない。

ポールの件を進めておきたいのだ。

そうしていると、皆の視線はバナラに移った。

「君はどうするの?」

バジルの質問に、バナラはどう答えていいかわからないような表情だ。

そういえば、バナラはコニーの事情でハッピーガーランドまでやって来て、そのまますぐにトロット楽団のライブのために練習漬けだった。

いざ公演が終わってみると、バナラに次の予定など無いよな。

しかし、そんなバナラにマジヨラムは何かを思いついたと言わんばかりの表情で頼み込む。

「そうだ君、バジルを送っていつてくれないかな? 工房の近くにも、盗賊が出るって話だし。ネフロのライブで壊されてから、バジルのビークル、調子が悪いんだ。君のに乗せていつてくれないかな」

さすがはできる男マジヨラム。

バジルの腕自体を貶めることなく適当な理由を付けて誘導した。

これならバジルも変な意地を張ることはあるまい。付き合いが長い故か、緑の気質をよく理解している。

バナラも快く承諾してくれた。

「ちえつ。僕は一人だつて大丈夫だよ」

「バジル、無理しないの」

空気を読まない緑のちんちくりんの背伸びは、大人の女性セイボリーによつて軽く窘められた。

翌日、ダンディリオンの工房に向けて出発したバナラとバジルを見送り、俺はガーランド大学まで来ていた。

ポールを美術科の教授に推薦する話の続きだ。

ポールがハッピーガーランドに到着したのを確認した後、定期演奏会の前には既に推薦の手続きは済ませている。

今日は直接大学に赴いて色々と根回しをする予定だ。

サンプルとして用意した絵は、何故かURも払うことなく手に入れてしまった『砂

漠』だ。

大荷物でわざわざ足を運ぶ羽目になり、面倒なことこのうえないが、こういった閉鎖的で前近代的な組織では、手順を簡略化しようとする余計に面倒なことになる。

しかし、完全に都合が悪いかといえばそんなことはない。

例えば、俺の後ろ盾であるナツメツ博士の威光は、教授の推薦という話において絶大な効力を発揮することだろう。

俺が正式に話を通し、大学の上の方の人間がその話を公式に聞けば、それだけでポールの招致がほぼ決定事項になるのだ。

そんなわけで、俺は大学のお偉いさんにアポイントを取って、こうして自ら大学を訪れた。

全てはポールのサブイベントのために。

「おお！ グレイ君ではないか！」

声を掛けられて振り向くと、そこに居たのは、いかにも研究者然とした初老の男だ。

ガーランド大学の科学科の教授だ。

「例の問題の答えが出たのかね？」

「いえ、別件です」

「では、他に何か面白い話は？」

「特に」

「ふむ、そうか。ではな」

教授はさつきと立ち去ってしまった。

実は、あの教授にも定期演奏会の前に空いた時間で行っている。

ガーランド大学の科学科といえ、教授がどこの文献から拾って来たのかわからない難解な問題を前に唸っていて、それをアレハート丘陵の廃屋に住む子どもたちの一人ロバートに解いてもらい、彼が大学に飛び級で入学するというサブイベントだ。

あれの準備のために、そろそろ問題が出ていると思われる時期に、科学科を訪れてその難問とやらを見せてもらったのだ。

自分の研究分野以外に興味が無さそうなあの変人の教授とはその時に会った。

因みに、問題自体は数ⅡBの知識で解けるものだったが、この時代背景なら地球でも最先端の数学だったのかな……？

とにかく、俺は無事にロバートが大学に招かれる下地をせっせと準備しているわけだ。

彼が問題を解く前に、他の誰かが片付けてしまわないことが条件だが……。

しかし、困ったのは俺自身があの教授に興味を持たれてしまったことだ。

あのおっさんは権威にもブランドにも媚びない根っからの研究者だ。

俺のナツメツグ博士の助手という肩書きにも無反応だったため、こちらも雑談ついでに気楽に話してしまっただが……今思えば、微分積分とグラフの関係を軽く話したこととは軽率だったかもしれない。

現代なら、教科書レベルでわかりやすく視点を変えて説明している内容も、この世界なら目から鱗の内容らしい。

それ以来、俺はあの教授に妙にロックオンされてしまった。

俺がナツメツグ博士の助手だと思えば、こちらの専門を自然科学や工学だと勝手に決めつけ、何か興味深い話をしろと常に揺すってくる。

あのタイプの研究者は、自分の興味が最優先なので、周りの迷惑を鑑みることなく危険な実験を強行したりする。

俺は今のところナツメツグ博士以外に未来の知識の沙汰を託すつもりは無い。

もっと安全なことに興味を持ってくれればいいのだが……。

「……ロバート君の解答に期待するか」

俺は一旦マッドサイエンティストのことは棚上げにし、本来の要件を片付けるために理事たちの待つ部屋に足を向けた。

54話 セントジョーンズ病院 前編

俺がロブスター亭に戻ると、ちょうどエントランスの近くに居たマジヨラムが声を掛けてきた。

「お帰り、グレイ。ん？ 何か増えてない？」

マジヨラムの視線は俺が抱えている絵画に固定されている。

確かに、大学のお偉いさんに見せるために俺が持つて出た絵は一枚で、今は二枚に増えている。

「ああ、鼻屑にしてる画家が新しい絵を完成させたんでね。その場で買った」

実は、ガーランド大学から帰る途中、北地区の記念公園で画架を立てているポールを発見したのだ。

何とも都合がいいことに、彼は新たな絵『予感』を描き終えたところだった。

俺はその場で財布の中身をひっくり返し、約10万URをポールに押し付けて即買いました。

おかげでスツカラカンだ。

現金は部屋の金庫に保管しているので、後で財布に補充しないと。

「ところで、バニラとバジルはもう帰って来たのかな？」

「うん、結構前にね」

俺の私用がごちゃごちゃと長引いてしまったからな。

ダンデイリオンの楽器工房はそう遠くない。

バジルのウッドベースを直す時間を入れても、二人はとっくに戻っているだろう。

「あ、そうだ。バニラのことなんだけど……」

どうやら、帰ってきて早々にバニラはセイボリーと食事の約束を交わしたらしい。

バニラはセイボリーの誘いを快諾したようだが、その程度なら大目に見てやってもい

いか。

このイベントは原作では必ず起こるものであり、二人が食事をしたリバーサイドホテ

ルのレストランでは、その次の重要なイベントのフラグが立つ。

で、二人が約束を交わしたのはバジルが自分の部屋に引っ込んだ直後の出来事だった

が、一階に居たマジヨラムは二人の声を聞いていた、と。

当然、その場に居た宿の主人ダステインとバーテンダーのクリスマスも、事の顛末は承知

している。

ダステインとクリスマスの方を見てみると、何とも微妙な苦笑いを浮かべている。

「まあ、そういう事情なわけさ。だから、ね。グレイもこのことをバジルには……」

マジヨラムの言わんとしていることを理解した俺は頷いた。

わざわざバジルが騒ぐ原因を作ることはない。

しかし、そんな俺たちの目論見は、次の瞬間には盛大にぶち壊されることとなる。

「あれ、皆どうしたの？ ……セイボリーは？」

ちようど、バジルが二階から降りてきてしまった。

「セイボリー、どこに行っただらろう……？」

俺とクリスは必死に表情筋を動かさないようにしてポーカーフェイス作るが、人のいいマジヨラムとダステインは苦笑いを浮かべながら頭を掻いてしまう。

「マジヨラム、ダステイン。何か知っているんだね？ グレイとクリスの様子もおかしい……」

こういう時だけは妙に勘のいい奴だから困る。

「ダステイン！ 隠し事なんて、らしくないじゃないか！」

バジルは小型犬のように喚きながらダステインに詰め寄った。

しかも、人は良くても冷静さに定評があつてそれなりに弁が立つマジヨラムではなく、俺たちより年を食っていることも影響して鷹揚なダステインを狙う狡猾さ。

本当に、無駄な悪知恵は回る。

「えつとだね……セイボリーはバナラとデートに行っているはずだよ」

「な、何だつてーっ!？」

しかし、根負けしたダステインは口を割ってしまった。

面倒なことになったな……。

俺がため息を吐くのと同時に、クリスはそそくさとバーの奥へ引っ込んで酒の仕込みを始め、マジヨラムはわざとらしく咳払いをする。

「コホン……：そういうえば、スームスーム公演の書類が来るんだった。ちよつと、駅まで受け取りに行つてくるよ」

マジヨラムは俺たちに面倒の種を押し付けて堂々とロブスター亭を出ていった。

あの野郎、自分のヘマが原因のくせに……：意外といい性格をしてやがる。

「セイボリーが……：デート……？ ……何で？ バナラは……：コニーとじゃ……」

「あく……：バジル、二人は食事に行つただけだ。新人のバナラの歓迎も兼ねて、年長者のセイボリーが連れて行つたんだろう」

バジルは顔を上げると真つ直ぐに俺を見据えた。

耳に入らず無視されると思つていただけに、予想外の反応とバジルの迫力に、俺は僅かにたじろいでしまう。

「僕は……」

「ん？」

「僕は信じないからなーっ！」

「ああつ、くそ！ 結局、こうなるのか……」

バジルを落ち着かせるまでには、かなりの時間を要した。

セイポリーとバナラが居るリバーサイドホテルに突撃するほどの行動力は、バジルも持ち合わせていないと思うが、万が一ということもあるので、俺とダステインとクリスは夕食時を過ぎるまでバジルの相手をして引き止める羽目になった。

マジヨラムの奴め……。

しかし、原作ではこのような展開になることは無かったはずだ。

珍しく、俺が居ることによって悪い方向に流れたパターンだ。

……気を付けないとな。

俺が絵を片付けてロブスター亭を出ることには、既に日が沈んでいた。

因みに、マジヨラムはバジルが諦めた頃にちやつかりと帰ってきて、次回の公演が港町スームスームで決まったことを伝えてきた。

ロブスター亭からオイルモレー工場やシテイモーターズがある南地区方面にしばらく歩き、警察署の隣にあるセントジョーンズ病院までやって来た。

バナラはセイボリーと食事を共にしたりバーサイドホテルのレストランでセントジョーンズ卿を見かけ、セイボリーの言葉で彼がマーシユの父親だと知る。

彼女の勧めもあり、バナラはセントジョーンズ卿に会うため病院を訪れるはずだ。

セントジョーンズ卿が暇人でないことはバナラにもわかるはずなので、明日以降に持ち越すことも無いだろう。

バナラが真っ直ぐロブスター亭に帰っているようなら、面会の約束だけ取り付けてからバナラを連れてくればいい。

バジルのことが無ければ、俺がリバーサイドホテルの近くまで行ってバナラに合流してもよかったのだが、あの緑の阿保のせいで時間が押してしまった。

逆にバナラの方が先に来ている可能性があるのです、病院の受付係にセントジョーンズ卿への取り次ぎを頼むついでに先客の有無を聞こうかと思っていたのだが……ちょうどバナラも病院に来たところのようだ。

病院のエントランスの目の前で合流できた。

「あれ、グレイ？　こんなところで何してるの？」

「ああ、バナラ。ちょうどよかった。昨日、ライブの後で話に出たマーシユだが、彼の父

親というのがこの院長でな。君に紹介しようと思つて、話を通しに来たんだ」

「あ、そうなんだ。僕もさつきセイボリーから聞いてきたんだ。リバーサイドホテルのレストランでセントジョーンズ卿を見かけたんだよ」

「お、今ハッピーガーランドに居るのか、セントジョーンズ卿。ちょうどいいな」

事前に考えていた言い訳がすらすらと出てくるが、俺も慣れたものだな。

「グレイはセントジョーンズ卿と知り合いなの？」

「いや、俺は会つたことが無い。まあ、ここまで来ちまつたからな。せつかくだから俺も同行しよう」

バニラはすんなりと俺の提案を受け入れた。

まあ、お偉いさんに会うとなれば、俺の肩書きが役に立つ可能性もあるので、バニラにも特に反対する理由は無いだろう。

俺は病院に入る前に、もう少しだけバニラを引き留めていくつか確認した。

「マーシュとチコリの件については、聞いているか？」

「あ、うん……。コニーから聞いたんだけど、マーシュが昔ダンデイリオンとチコリに意地悪ばかりしてたって……」

砂漠のオアシスのイベントか。

夜にコニーといちやいちゃ雑談するイベントだな。

「あと、チコリがもう亡くなっていることはダンディリオンから聞いたよ」

「ダンディリオンから？」

俺は思わず聞き返した。

ゲームでも、ダンディリオンから登場人物に関する話を聞ける。

昔から付き合いのある楽団メンバーにローズマリー、それにナツメツグ博士について思いついた話を語ってくれるのだ。

当然、チコリのことでも質問できるのだが、彼はダイレクトに死んだなどとは言わなかったはず……。

「グレイの話になって、その時にね。付き合いは長くないけど、律儀にチコリの墓参りに来てくれる数少ない人間の一人だって」

どうやら、俺の存在がシナリオに影響しているようだ。

まあ、俺とダンディリオンの関わりで一番大きいのは、チコリの墓にちよいちよい花を持っていくことくらいだからな。

そういう話に派生するのも、おかしなことではないのか。

しかし、バナラの理解がそこまでなら、改めて事情を話しておいた方がいいだろう。

「バナラ、調べればわかることだから言うが——」

俺は五年前の事件の顛末をバナラに語った。

ダンディリオンの誕生日プレゼントを買うために、コニーとチコリが待ち合わせをしていたこと。

コニーの汽車が遅れ、駅前で待っていたチコリの荷物をマーシユが取り上げてからかい始め、はずみで車道に投げ出された荷物をチコリが拾おうとして車に撥ねられたこと。

コニーは、自分が遅れなければと、今でも自分を責めていること。

全て話した。

「そんなことが……」

「俺は当事者ではないし、ナツメツグ博士が酔ったときにポロツと漏らしたのを聞いただけだ。だから、事情を余さず知っているわけではない。だが、コニーに関しては、バナラにも心当たりがあるだろ？」

「うん……チコリのことを言い淀んでいたのは……」

「まあ、事の顛末に関してはそういうわけだ。コニーのためにも、ある程度は過去の事情を理解しておいてくれ」

「……わかった」

俺たちはようやくセントジョーンズ病院に足を踏み入れ、セントジョーンズ卿への面会を申し込むため一階の受付に向かった。

この世界では、受付嬢が事務員ではなく看護師なので、現代の病院の看護師の忙しさを知っている俺としては、治療のこと以外で声を掛けるのは憚られる。

しかし、他に人が居ない以上は仕方ない。

カウンターの前まで進むと、俺が声を掛ける前に、向こうから事務的で無機質な声が発せられた。

「こんにちは。今日はどうなされ……えっ?！」

しかし、看護師は途中でセリフを止めて硬直した。

俺の顔を見て。

「どうやらマニュアルが頭から吹っ飛んでしまったようだが……俺、何かしたか?」

「俺は怪しい者では……」

「あの! グレイ様ですか?! Sランクバトラーの!」

言い訳をする前に、看護師はカウンターから身を乗り出して俺に詰め寄る。

「ええ、まあ……」

「やっぱり! エルダー戦、私も観たんですよ!」

「どうやら、俺もそれなりに有名人らしい。」

待合室に居た患者たちも俺の方をジロジロと見ているが、結構な人数が俺を知っているようだ。

一応、トロット楽団のメンバーでもあるしな。エキストラだが。

「あ……申し訳ありません」

しかし、この段になると看護師も俺の身分を大声で放送した失態に気付いたのか、顔を赤くして謝ってきた。

まあ、待合室に居るのは暇な年寄りがほとんどなので、わざわざ文句を言うほどのことでもない。

俺が気にするなと伝えると、看護師はほつとした様子で改めて俺の要件を聞いてきた。

「それで、今日はどうなされましたか？」

「セントジョーンズ卿にお会いしたい。アポイントは取っていないのですが、大丈夫ですか？」

「はい。院長は三階の院長室に居ります」

さすがに案内に人手を割けるほど暇ではないらしい。

しかし、元貴族で街の名士にしては随分と不用心なことだ。

俺はナツメツ博士の助手という立場で信用があるかもしれないが、原作でバナラが

すんなりとセントジョーンズ卿に会えたのは謎だ。

いや、院長室には護衛が隠れているのかな？

とにかく、物語を進めるうえで重要な人物であるセントジョーンズ卿に接触できるのは大事なイベントだ。

俺は幾分か緊張した面持ちで、バナラを引き連れて階段を昇って行った。

55話 セントジョーンズ病院 後編

院長室の扉をノックして入室すると、高そうなスーツを着た中年男性が、部屋の中を落ち着きなくウロウロとしていた。

ロマンズグレーに片メガネとはいかにも上流階級だ。

彼がセントジョーンズ卿で間違いないだろう。

セントジョーンズ卿はドアが開いてもこちらに気付く様子は無い。

入る前に声は掛けたんだけどな

しばらくすると、俺たちを視界の隅で捉えたらしく、ようやくセントジョーンズ卿はこちらの存在に気付いた。

「むっ？ 誰だね？ 君たちは……おや、確かナツメッグ博士の……」

「ん？ 私のことをご存じで？」

「ああ。以前、闘技場で君の試合を観たよ。グレイ君だったね」

一階の看護師といい、この病院にはピークルバトルファンが多いようだな。

原作でも、セントジョーンズ卿はピークルバトルトーナメントを観戦に来る。

個人の趣味というより付き合いの可能性もあるが。

「では、改めまして。ナツメツグ博士の助手を務めておりますグレイと申します」

俺の促しでバニラも少々慌てて自己紹介をした後、俺は彼の言葉に補足した。

「バニラは、ご子息のマーシユ君の友人です」

「マーシユの……？ そうか、いやこれはこれは……。折角、来てもらって悪いのだが、マーシユは今居ないのだ……」

セントジョーンズ卿は俺の訪問が本題だと思っていたようだが、バニラのことを説明するとそちらに向き直った。

そして、次の瞬間、セントジョーンズ卿は顔色を変える。

彼もはつきりとバニラの胸元に輝く派手なペンダントを視認したようだ。

「ん？ 君、そのペンダント！ それは私がマーシユにプレゼントしたものでないか！ キ、君！ それをどこで手に入れたのだ!？」

案の定、セントジョーンズ卿は取り乱してバニラに詰め寄る。

バニラは一瞬だけ驚いた表情を見せるも、真剣に記憶を掘り起こして答えた。

「友達に貰ったような……」

「友達？ まさか、その友達が……」

しかし、本来ならここでセントジョーンズ卿はマーシユの事情を語り始めるのだが、彼はハツと何かに気付いたように俺とバナラを見比べると、前のめりだった体を引いた。

「すまない。見苦しいところを……」

セントジョーンズ卿は、まだ少年といえる年頃のバナラだけでなく俺も居たことで、冷静に振舞う余裕を取り戻したようだ。

これは、自分からは事情を語ってくれない展開か？

しかし、こちらが何も聞かずにマーシユの状況を一から十まで知っているのも変なので、原作通りの話くらいはしてもらいたい。

そうでないと、話が進まないからな。

「セントジョーンズ卿、先ほどはマーシユ君が居ないと仰いましたが、我々はそこら辺の事情を詳しく把握していません。何があつたのか、できれば最初から説明していただけないでしょうか？」

「……うむ」

セントジョーンズ卿は語り始めた。

「マーシユは……五年前、色々あつてね。今は海外留学に行っているのだ。それが久し

ぶりに帰ってくるようになった。先月届いた手紙には『ジュニパーベリー号で帰る』と、そう書いてあった。しかし、予定の日に船は来なかった。今日になっても、港にその船が到着した様子は無い」

セントジョーンズ卿は一拍置いて、肩を落としながら絞り出すように言葉を続ける。「……ああ！ しかも、私の調べさせたところでは、その船が難破したかもしれないという。マーシユに万一のことがあつたら……！」

俺はセントジョーンズ卿がマーシユの事情を一通り話し終わったところで口を開いた。

「事情は大体わかりました。では、今度はこちらからもいくつか情報を。今のお話で色々繋がつた部分もありますので、少しは進展と言えるはずですよ」

セントジョーンズ卿は俺を真っ直ぐに見据えて領いた。

「ジュニパーベリー号が難破したのは事実です。今はウミネコ海岸に座礁しています。スームスームへ向かう途中の沖で、何らかの事故かトラブルが発生し大破したのでしよう。そして、ここに居るパニラは、ご息と一緒にジュニパーベリー号に乗っていた可能性が高いのです。いえ、ほぼ確実に乗っていた」

「な、何とー！」

ほぼ確実にどこか確定なのだが、ここではバナラから初対面のときに聞いた話とセントジョーンズ卿が語った内容を繋ぎ合わせた設定だ。

「バナラは数週間前にウミネコ海岸の砂浜で倒れているところを、私の友人によって発見されました。状況から見て、バナラはジュニパーペリー号が沈没した際に海に投げ出され、そのままウミネコ海岸に漂着したと思われるです」

「そ、それでは！ マーシユのことは……」

「残念ですが、そう都合よく事は運びません。バナラは事故のショックで記憶を失っています。ご子息からペンダントを預かったことを臆げに覚えている辺り、一部の記憶は生きています」

「記憶を……そうか、それほどの事故ならば……」

セントジョーンズ卿はしばらく思案に耽っていたが、やがて覚悟を決めたような表情で顔を上げ、俺に疑問を投げかけた

「その事故で、生き残ったのがバナラ君だけという可能性も？」

「いえ、その可能性は低いでしょう。バナラ、ジュニパーペリー号は船の全容が把握できる程度には原型を留めているのだったな？」

「う、うん！ 真ん中に大穴が開いていたけど、普通に大型の帆船だということはわかるし、船名も見えたよ」

俺はバナラに頷き言葉を続けた。

「船は大破とはいえ海岸に漂着する程度には原型を留めている。他に海岸へ流れ着いた者の話も無い。もちろん、近くに死体も……無かったよな？」

「そ、そんなものは、見た覚えが無いよ」

「と、いうことです。恐らく、他のクルーたちはビークルやランチで脱出したのでしよう。むしろ、逃げ遅れたバナラが一番の重症かもしれませぬ」

俺は二人が大体の状況を理解して一人で思案するのを終えたタイミングを見計らい、再び口を開いた。

「セントジョーンズ卿、今後の対応についてももう少し話を詰めさせていただきたい」

「ふむ、今後の対応……かね？」

「ええ、ジュニパーベリー号の損傷に関してですが、外から見てもわかる大穴が船体のど真ん中にピンポイントに開いていたことなどから考えると、この事故が人為的に引き起こされた可能性もあります」

「なっ!?! 人為的に?! 一体、誰が……?」

「不明です」

はい、嘘です。

ダンディリオンとブラツディマンティスです。

「その場合、敵への対処も必要ですが、それ以前にご子息やジュニパーベリー号のクルーとの接触自体が困難を極めることになる。自分たちが狙われているとわかれば、彼らは身を隠すでしょうから」

「むう……」

「ですから、セントジョーンズ卿もそういった背景を想定して動いてください。この件に関しては、私も協力を惜しみません。ご子息とジュニパーベリー号の乗組員の行方を、こちらのルートでも探ってみます。バナラもいいよな？」

「ああ、もちろん」

チコリの件を話したこともあって、バナラはマーシユに関しては悪い印象が多いかもしれないが、さすがは主人公だけあって見捨てる選択はしなかった。

「そういうことです。我々は近いうちに楽団の仕事でスムーズ方面へ行くと思いますので、私はそちらから手を付けます」

しかし、俺がここまで積極的に協力を申し出たことで、セントジョーンズ卿も貴族だけあって何かを感じ取ったように顔を引き締めた。

まあ、普通なら何の見返りも無くここまでしないよな。

当然、俺もそれなりに要求はするつもりである。

「……グレイ君、君が協力してくれるのであれば、それ以上に心強いことは無い。よろしく頼む。それに、バナラ君を連れて来てくれたこともそうだが、君が提供してくれた情報も非常に有用な手掛かりになると思う。お礼と言ってはなんだが、何か私にできることは無いかね？」

「では、二つほどお願いが。一つはバナラの診察です。大型帆船の沈没に巻き込まれた拳句に砂浜に打ち上げられるという重大事故です。念のため、精密検査をお願いしたい」「うむ、お安い御用だ。もう一つは何かね？」

「ガールランド大学内の不穏な動きに警戒してください。近いうちに、ポールという画家が美術科の教授に就任するはずですが、彼は若く貧しい家を出で、そして才能がある。冤罪やら何やら、心無い嫌がらせを受けるでしょう」

「美術科の教授といえ、前任者が蒸発したという……。なるほど、あり得る話だ。教授のポストを狙っている者も多いと聞く。わかった、その件は私に任せたまえ。大学で不正が横行するなど、許すわけにはいかないからな。……それだけでいいのかね？」

セントジョーンズ卿は拍子抜けしたような表情だが、これ以上彼から欲しいものは無いさ。

電動の洗濯機は、実は既に買ってくれている。

清潔な衣類やタオルを大量に必要とする病院は、元々かなりのお得意さんだったりす

るわけだ。

セントジョーンズ卿はその場でバナラを診察してくれた。

頭痛などの症状に関する詳しい問診と触診、頭以外の部位にも事故の後遺症が無いか調べている。

現代でいうところの総合診療科に近い診察か。

俺が生きていた地球から百年ほど前となるこの世界では、色々と技術に限界がありそうだが、その割にはよくやってくれた。

まあ、自覚症状の無い疾患を事前に察知することは無理だが……。

CTもMRIも無いので、血腫なんかは無いことを祈るしかない。

とりあえず、バナラの体には異常が無さそうだとわかったところで、俺たちはそろそろお暇することにした。

マーシユの件で進展があつた場合は報告に来るので、できるだけハッピーガーランドを離れないように、少なくとも定期的に帰ってくるように言ってみたが、それも承諾された。

ここにもう用は無い。

しかし、部屋を退出しようとしたところで、セントジョーンズ卿は俺を呼び止める。

「グレイ君。少し、いいかね?」

セントジョーンズ卿の目線と表情で彼の意図を察した。

「どうやら、俺とサシで話したいようだ。」

もう遅いので長居するのは気が引けるが、向こうから言われた以上は仕方あるまい。

俺はバナラに先に行くよう伝えると、再び院長室のデスクの前まで戻った。

「その……君は、ナツメツグ博士の助手、ということでもいいのかね?」

「ええ、そうですが?」

今更、何を言っているのやら……。

「一つ聞きたい。君は……何故、私に協力してくれるのだ? マーシユは……その……」

……なるほど、そういうわけか。

確かに、ナツメツグ博士にしてみれば、セントジョーンズ一族には恨み骨髄かもしれ

ない。

マーシユというクソガキのせいで、セントジョーンズという名前のせいで、チコリと

ダンディリオンは不当な扱いを受けて人生を滅茶苦茶にされたのだ。

原作では、セントジョーンズ卿とナツメツグ博士の二人が関わるシーンは無かった

が、現実では犬猿の仲でもおかしくはない。

「事情は俺も把握していませんが、この件にナツメツグ博士は関係ありません。少なくとも

も、直接は」

「……………」

「俺は、できるだけ犠牲の少ない道を選ぼうと思っている。マーシユは排除の対象ではない。今はそれだけです」

登場人物を死なせないだけなら、恐らくそれほど難しくはない。

原作でも、ブラッディマンティスルートではダンディリオンもセイボリーも生存する。

ブラッディマンティスの最終兵器グランドファイナーレをナツメツグ博士たちと協力して撃墜することなく、ダンディリオンたちの企みを暴かなければ、二人はノーマルルートのように命を落とすことは無い。

エンディング後も普通に生存する。

しかし、その場合は確実に第二第三の脅威が世界を襲うであろう。

現実には、クリアから一年後の世界が永遠に続くわけではない。

戦い自体は避けられない。

俺は、ノーマルエンドを目指しつつ、可能な限りの登場人物を救おうと思っているのだ。

当然、マーシユも助けるリストに入っている。

彼のしたことは許されないが、それでもバナラたちの立場を考慮すれば、マーシユを見殺しにするという選択肢はありえないわけだ。

俺自身、マーシユには何の恨みも無いしな。

セントジョーンズ卿は俺の表情から何かを感じ取ったようで、ゆつくりと口を開いた。

「……恐らく、君が考えているのは最も困難なことだよ。自分にとって大切な者を最優先することと、冷徹に数を重視すること。そのどちらも満たすのは、自分の周りの人間だけに限っても、意外と難しいことなのだ」

「……それは、医師としての経験からの忠告で？」

「それもあるが、親としても、人間としてもだ」

少しばかり、ジンジャーを思い出した。

彼も経験豊富な年上として、俺にアドバイスをくれたっけか。

俺は口角を上げて軽く微笑み、踵を返した。

「年長者のアドバイスだ。心得ておきましょう。まあ、ご子息の件で協力することに関しては嘘ではないので、そこは信用してください。それでは」

56話 港町スームスームへ

マジヨラムが契約を取ってきた次のトロット楽団の公演先は、港町スームスームで行われる船の完成記念パーティーだ。

ドン・スミスという興行師に招かれ、俺たちは遊覧航海中の豪華客船『ウエストウインド号』の甲板で開催されるパーティーの余興として出演する。

豪華客船の上でやるコンサートということで、トロット楽団メンバーのボルテージも最高潮だ。

バジルは当然のことながら、コニーも珍しく高いテンションを維持している。

まあ、気持ちはわかる。

何も知らなかったら、俺まで年甲斐も無くはしゃいでいたかもしれない。

だが、残念ながら、俺はスームスームで起こるイベントのことを知っている。

トラブルが向こうからやって来ることは確定だ。

簡単に説明すると、ドン・スミスファミリーの若頭であるジェイクという男が、バナラを利用して八百長を画策するのだ。

奴はトロット楽団メンバーの命を盾にバナラを脅し、あの腰抜けジミーにわざと負けるように強要する。

結果的には、ドン・スミスの計らいでトロット楽団メンバーは何事も無く済み、ジェイクも拘束されたことで事件は一応の解決を見る。

このイベントでバナラはスームスームとドン・スミスファミリーの裏側に少し触れることとなるのだ。

ドン・スミスという人物は興行師などと言っているが、実際は裏社会に精通しているマフィアのボスみたいなものだ。

財を成した基盤がワインの貿易という意外に平和なものである辺り、某映画のマフィアのドンを参考に行っているのかもしれない。

あちらも表の稼業はオリーブオイルの輸入会社だったな。

ところで、このスームスームの八百長事件だが、有り体に言ってしまうとドン・スミスの部下ジェイクの反逆もどきであり、最終的にはジェイクが改心することで全てが丸く収まる。

ジェイク自身もドン・スミスに拾ってもらった恩を思い出し、一年後にはドン・スミスが広い心で彼を赦しファミリーに呼び戻す、というわけだ。

ぶっちゃけ、下手に俺が手出ししなくても、何も問題ないかもしれない。

もちろん、全てが原作通りに進むことを想定しての話だが……。

現実では、俺の存在によって改変される部分があるかもしれないし、何より俺が介入しないと詰む状況が無いとは言えない。

以前、コニーが占領されたネフロに向かおうとしたときの話は記憶に新しい。

俺が連れていかなかったら、コニーは未だにバナラと再会できなかったかもしれないのだ。

さて、どうするか……。

俺の立場やセントジョーンズ卿とのパイプを利用すれば、事前に安全策のための根回しをすることは不可能ではないと思うが、何気にスームスームのイベントは規模の大きい話だ。

やはり、現場を見てから決めた方がいいか。

少々、行き当たりばったりな気もするが仕方ない。

公演の日まで、俺はおとなしくロブスター亭で待機した。

無論、セントジョーンズ卿から聞いた話を楽団メンバーと共有することや、バナラがダンディリオンから預かった新曲『I Cry』の譜面をコニーに渡したかなどの確認は、出発する日より前に済ませたが。

さすがにライブ当日の朝に駅の改札で話す必要は無い。

ゲームなら当日ギリギリに渡してもコピーは曲に詩を付けて完璧に歌いこなしてしまおうが、現実ではそうはいかないだろう。

俺たちの練習にも時間が必要だ。

そして、スームスームへの汽車が出る当日。

俺たちがハッピーガーランド駅に集合するなか、やはりバナナはナチュラルに寝坊してきた。

「遅いよ！ 何してたんだよ」

開口一番にバナナをディスるバジルだが、原作通りの展開は望むところだ。

むしろ、バナナが時間通りに来ていたら、帰りに色々と修正しなければならなくなる。簡単にネタバレしてしまうと、ここでバナナが汽車に間に合わずビークルでヒバリ田園地帯の農家に寄ることで、ストーリー終盤で必要なイベントアイテムが手に入るのだ。

バナナには穀倉地帯を通ってもらわなければならない。

バジルを中心にガヤガヤと騒いでいると、汽笛が駅構内に鳴り響いた。

発進の合図ではないから、あれは乗務員を招集し、まもなく出発することを告げるための合図だ。

「もうすぐ汽車が出るよ。急ごう。駅員さん！ すいません、もう一台ピークルを貨物車に載せたいんですが……」

マジヨラムが呼び止めた駅員から返ってきた言葉は、やはり原作通りのものだった。「ピークルですか？ 申し訳ありません。もう貨物室がいっぱいでして……」

「えっ！ そうなんですか？ どうしよう……」

「まったく！ 君がもたもたしているから、こんなことになるんだよ！」

バジルはキャンキャンと騒いでいるが、俺は内心でほくそ笑んでいた。

これでバナラはピークルに乗って穀倉地帯を通りスームスームまで来ることになる。ダッドリーと遭遇して農家に寄ることになれば期待通りの展開だ。

「こうなったら、スームスームまでピークルで歩いて行くしかないんじゃない？」

「うくん、仕方ないな。君、悪いけどそうしてくれるかい？」

「でも、スームスームまでの道、知らないでしょう？ 私も一緒に行つて案内するよ」

俺は些か緊張気味にバナラの様子を窺うが、彼は淀みなくコニーの申し出を承諾した。

「うん、案内はコニーにお願いするよ」

「任せといて！」

よかった。

これでコニーの案内を断りセイボリーを指名しそうになった日には、俺はバナラにボデイブローをお見舞いするところだった。

「決まりだね。僕らは汽車で行くよ。それじゃあ、二人とも気を付けてね」

スームスーム行の汽車に乗り込み、バナラとコニーを除く俺たちトロット楽団一行は、同じコンパートメントを確保して思い思いの席に腰掛ける。

「マジヨラム、俺にも契約書類を見せてもらえるか？」

「ああ、いいとも」

俺は自然にマジヨラムを呼んで隣の席に誘導した。

これでバジルの隣に座るのはセイボリーだ。

せめて今だけは、バジルにいい思いをさせてやろう。

「(グレイ……!）」

バジルは俺を救世主のように見ている。

もつと崇めても構わんぞ。

「主催者は興行師のドン・スミスさん。今回、僕らが演奏する『ウエストウインド号』以外にも、客船や輸送船を数多く所有している街の名士だよ。それに、確か闘技場の支配人でもあるらしい」

「スームスーム全域を取り仕切る有力者ね」

「へえ〜」

マジヨラムとセイボリーの説明に、バジルは興味無さそうに相槌を打つ。

俺はマジヨラムから手渡された書類を見てみるが、特に妙な点は見つからない。

なるほど、興行師と名乗るだけあって、こういった仕事には抜かりが無いようだ。

裏稼業の連中が作った書類とは思えないな。

「そういうえば、グレイはドン・スミスさんのことを知っているのかい？」

「会ったことは無いが名前くらいはな。確か、ワインの輸入が本業だとか。海路での交易ルートの開拓には、間違いなく彼が一役買っているのだろうな」

「まあ、そうなの！ それで舶来物のワインがあんなに出回っているのね」

「ふうん」

ドン・スミスが裏社会に精通している話などできるはずも無いので、俺は当たり障りのない情報を提供した。

セイボリーはワインの話題に少し興味を覚えたようだが、バジルはまたしても興味なさげだ。

「あら、バジルにはまだお酒の話は早かったかしら？」

「ちよ！ セイボリー！」

「ふふつ、冗談よ」

あまり煽つてやるな。

こう見えてバジルには飲んだくれの才能があることを俺は知っている。

「ワインか……博士とピジョン牧場の連中への土産にいくつか確保するかな」

「いいわね！ 私も買いいに行こうかしら」

残念だが、セイボリーと一緒に買い物に行くのは勘弁だ。

あの街にはマーシユが居るので、彼女にそれを勘付かれるわけにはいかない。

何より、バジルの目がヤバイ。

「俺は量が多くなるから業者の方に注文することになると思う。バジル、セイボリーの

荷物持ち、手伝ってやってくれるか？」

「もちろん！ セイボリー、僕に任せてよ！」

「ありがとう。頼りにしてるわ」

そして、汽車に揺られること数時間。

俺たちは港町スームスームへ到着した。

駅を出て荷物を搬出し、各々のピークルに乗り込むと、俺たちは真っ直ぐ『ウエストウインド号』が停泊するスーム海浜公園に向かう。

「さすがにコニーたちはまだ来てないみたいだね」

ビークルの駐機場にバナラの「カモミール・タイプⅡ」が無いのを見てマジヨラムが呟いた。

「そのようだな。だが、『ウエストウインド号』のクルーや会場スタッフは居るだろう。現場の連中への挨拶は早めに済ませておくか」

「賛成だね。機材とかを運べるようなら先に設置してしまおう。コニーたちがいつ到着するかわからないからね」

ビークルを下りた俺たちは、マジヨラムに続いて停泊中の豪華客船に向かって歩いてゆく。

船から出てきた船員が俺たちを迎え、タラップを昇って船の甲板に出ると、すぐに船長やボーイ頭つばいスタッフがやって来てマジヨラムと打ち合わせを始めた。

最初の挨拶で、俺たちの仕事は終わった。

後はマジヨラムが迅速に処理してくれる。

セイボリーは遠目に見つめる船員たちに手を振ってファンサービスをしているが、俺とバジルは完全に手持ち無沙汰だ。

いや、バジルは船員たちと一緒にになってセイボリーを見ているから忙しいのか。

暇を持て余した俺は、軽く船の構造でも見学しようと思い、甲板や船着き場の辺りを歩いてみる。

すると、物陰から俺の方を見ている怪しい男たちを発見した。

雰囲気も服装も、どう見ても堅気ではない。

日本に居た頃の俺なら、確実に道を譲っている種族の連中だ。

「(ジェイクさん、あいつはヤバいつすよ)」

「(あの眼を見ましたか？ きつと何百人も殺してる……。俺らじゃ手に負えませんつて)」

「(いくら名の知れたビークル乗りだからって……)」

「(馬鹿かてめえは！ 腕利きの殺し屋が協力してくれんなら、俺たちにとってはラツキーじゃねえか)」

向こうも俺を警戒しているようだが、相手が相手なので、俺も些か緊張しながら聞き耳を立てつつチンピラどもに視線をやる。

もちろん、シオルダーホルスターの拳銃をいつでも抜き撃ちできる体勢で。

奴らの押し殺した会話でわかった。

チンピラたちの中心に居る白いスーツの男は、バナラに八百長を持ち掛けてくるドン・スミスファミリーの若頭ジェイクだ。

「(ジエイクさん。もしや、ドンの始末をあの男に?)」

「(なっ?! 馬鹿! 滅多なことを言うんじゃないねえ! あいつに持ち掛けるのは八百長の方だ)」

ジエイクはこちらに近づいてきそうな雰囲気だったので、俺は警戒をより一層強めてジエイクとチンピラたちを見据える。

右手はベストの襟に掛け、最短距離で拳銃を抜ける位置だ。

先ほどのセリフから察するに、八百長を持ち掛ける相手がバニラではなく俺に変わった可能性があるな。

それに……ドン・スミスの始末だと?

何だか、原作よりキナ臭くなってきた。

自然と彼らを見る俺の目は厳しいものになった。

「(っ! 殺される……)」

「……行くぞ」

「え、ジエイクさん……」

「(ハナからこつちを怪しんでやがる。あれは無理だ)」

しかし、ジエイクたちはそそくさと船着き場を足早に去っていった。

彼らは一度も振り返ることなく海浜公園を後にする。

戻ってくる様子も無ければ、付近に他の人間が潜んでいる様子も無い。

「ふむ……」

どうやら、こちらの警戒を勘付かれたようだ。

ターゲツトが俺に変わるのなら、それはそれでやりようはあるが、ゲームと展開が大きく異なるのは得策ではない気がするので、先ほどのジエイクを選択はありがたいかもしれない。

あの様子なら、ジエイクたちは八百長への協力をバニラに持ち掛けるはずだ。

「……ま、当初の予定通りか」

俺は原作通りの展開を想定した動きで問題なさそうだ。

……ドン・スミスの暗殺計画らしきもの以外は。

とりあえず、プランAの継続を決めた俺は、マジヨラムたちの居る船内に戻っていった。

57話 船上コンサート

バナラとコニーが到着したのは、既にステージのセットや打ち合わせも終わり、開演時間の近づいた夕方だった。

スーム海浜公園に「カモミール・タイプⅡ」を駐機し、二人は楽器と最低限の荷物を持って船の甲板に駆け込んでくる。

「あつ！ コニーが来たよ！」

「思っていたより時間が掛かったね。途中で何かあったのかい？」

マジヨラムの問いにバナラは未だに怒りの冷めやらない様子で答えた。

「ダッドリーっていうピークル乗りに邪魔されたんだ！」

「ダッドリー？ 僕、聞いたことがあるよ。とんでもない荒くれ者なんだって」

「そうかあ……災難だったね」

「どうやら、ダッドリーは原作通りハツピーガーランド近郊まで来ているようだ。」

鉄道はまだ復旧していないのでガラガラ砂漠以外にルートは無いはずだが、ダッドリーも腕自慢だけあって、ピークルさえ直ればデザートホーネット団を退けつつ砂漠を

渡るくらいいけないか。

「よし。じゃあ、早速練習しよう」

気を取り直したマジヨラムの声掛けで、楽団メンバーは各々の楽器を手に音合わせを始めた。

新曲『I Cry』の初お披露目だ。

練習通りにやることを意識しつつも、自然と楽器を持つ手に力が入る。

演奏の準備が一通り済んだところで、船着き場に設置されたリフトが稼働する音が聞こえた。

通常はビークルや大型機材の搬入に使うための仕掛けだが、今リフトから船に乗り込んできたのは明らかにクルーやスタッフではない連中だった。

彼らが、スームスームを取り仕切るドン・スミスファミリーだ。

一番後ろに立つスキンヘッドの大柄な男は、ドン・スミスのボディガード兼秘書官のような人物だったはずだ。

彼はタラップの手前にロープをかけ、その場で警備に立った。

もう一人の白いスーツを着たガラの悪い男は、昼頃にも船着き場に来ていたジェイクだ。

彼はリフト入口の横辺りの会場全体を見渡せる位置に立ったが、見たところ気もそぞろといった様子で、警備にしてはやる気が無い。

そして、孫娘のクラリスが押す車椅子でステージの前までやって来たドン・スミスは、独特の雰囲気を感じつつも穏やかに微笑みながら口を開いた。

「これはこれは……トロット楽団の皆さん。よく来てくださった」

「あつ、これはどうも。今回は、呼んでいただいて、ありがとうございます」

マジヨラムが代表してドン・スミスと挨拶を交わす。

彼は契約の段階で以前にスームスームまで足を延ばしており、ドン・スミス本人と面識があるのだったな。

そつが無いマジヨラムにしては、招待主のトップに対して随分と気安い言葉遣いに見えるが……まあ、マジヨラムなりにドン・スミスの気質を観察して、彼に一番好ましく思われる態度で接しているのだろう。

「いやいや。有名なトロット楽団が来るというので、街の皆も喜んでますよ。……それでは、素敵なステージを期待していますよ」

クラリスの押す車椅子はUターンし、ドン・スミスはステージを離れていった。「何だか、迫力のあるおじいちゃんだね……」

「この街の興行師のドン・スミスさんだよ。僕らを呼んでくれた人さ」

バジルの間の抜けた一言に、マジヨラムが改めて楽団メンバーにドン・スミスを紹介し、俺たちは音合わせを再開して最終確認に移った。

ステージの準備が整い、乗客が乗り込んでくるまであと少しとなった頃、俺は何気ない足取りでタラップの階段の前まで移動した。

しかし、そこで俺は、先ほどこん・スミスと共に乗船してきた強面のスキンヘッドの男に呼び止められた。

背丈は俺とほぼ変わらないが、筋肉や体格は俺以上で、立ち振る舞いにも隙が無く重心がぶれない。

明らかに、生身での戦闘のプロだ。

素手で殴り合えば、俺に勝ち目は無いだろう。

「まもなくお客様が集まり始まります。混乱を防ぐため、お通しできません」

「ああ、わかっているよ。お疲れ様。警備、よろしくお願ひしますよ」

「はい。こちらこそ、よろしくお願ひします」

しかし、穏やかで丁寧な口調で会話しつつも、強面のボディガードの視線は明らかに俺の胸元に向けられていた。

どう考えても、俺が首に掛けたサックスのストラップが気になるわけでも、彼がホモ

というわけでもない。

この男は、俺がベストの下にショルダーホルスターで装備した拳銃に気付いている。ドン・スミス一行が船に乗り込んできたときにも彼の視線は僅かに感じたが、その時には既に俺が武装していることを見抜いていたのかもしれないな。

さすがはプロだ。

因みに、ボディーガードの男のジャケットも、胸元の辺りが物騒に膨らんでいる。

見たところ、彼もショルダーホルスターで銃を携帯しているようだ。

恐らく、俺の四インチの38口径リボルバーより大型の銃を両脇に吊るしているな。

「俺はサックス奏者のグレイだ。あんたは？」

「……キャラウェイとお呼びください」

偽名かな……？ まあ、いいか。

俺は自然な足取りでキャラウェイの真横まで進むと、彼とすれ違うような位置取りで柵にもたれ掛かり、寛いだ体勢で船着き場を見下ろした。

馴れ馴れしい俺にキャラウェイは警戒の雰囲気強めるも、表情には決して感情を出さなかった。

「(と)ところで……あんたはドン・スミスの忠実なボディーガード、つてことでいいかい？」

俺の意図を測りかねているようだが、キャラウェイはすぐに頷いた。

こちらを信用しているわけではないだろうが、それでも内密の話であることは察して、彼も押し殺した声で返答する。

「……その通りです。命に代えてもドン・スミスをお守りするのが私の責務です」
「頼みがある」

キャラウェイは今度こそ胡散臭げな表情を浮かべたが、俺は構わず続けた。

今度はわざとらしく周りにも聞こえる声で。

「ちよいと相談なんだが……実は、土産に舶来物のワインが買いたくてね。結構な量になりそうだし、ピックアップで長距離を運ぶことを考えると、樽ごと購入するのもありかと思っているんだ。業者に心当たりとか無いかな？」

「……卸売りの者に話を通しておきましょう。闘技場の酒場で要件を伝えれば、担当者を出すよう手配しておきます」

「おお！ 本当かい！ ありがとう、助かるよ」

ボディーガードもこの話が本題ではないとわかっているようなので、次に俺の口から発せられる言葉に耳を傾けている。

「今夜はドン・スミスの傍を離れないでくれ。いつもより厳重に守ってやってほしい」
「……どういう、意味ですか？」

「(側近であるにもかかわらずドンのもとをコソコソ離れる奴など、幹部として失格どころか裏切りも同然。そう思わないか?)」

キヤラウエイの纏う雰囲気が先ほどより格段に鋭くなった。

俺は明らかにドン・スミスファミリーの内部に裏切り者が居ると言っているのだ。

キヤラウエイの立場からすれば、仲間と身内を侮辱されたとキレていてもおかしくはない。

しかし、この忠実なボディガードに警告しておくことを怠るわけにはいかない。

バナラが巻き込まれる八百長の強要の他にも、今回はもう一つ懸念事項があるのだ。

ジェイクの部下の話を小耳に挟んだ件だ。

奴らは、ドン・スミスの暗殺を計画している可能性がある。

ジェイクの氣質が原作と同じなら、本人がそこまで大それたことをやらかす可能性は低い、あいつの手下に関しては別だ。

ジェイクに付き従うチンピラには、ドン・スミスへの恩義や忠誠心など微塵も無いかもしれない。

もしも、ドン・スミスが跳ねつ返りに殺されるようなことになれば、八百長の件がきちんと処理されないだけでなく、今後のスームスーム全体の運命が捻じ曲げられる可能性もある。

「(グレイさん、あなたは……)」

「おっと、そろそろ舞台上上がらないと……。それじゃ、俺はこの辺で失礼するよ」

キャラウェイは逡巡の後に何かを言いかけたが、俺はわざとらしく手を振って船首の方へ引き返した。

これ以上の言葉を重ねても、逆に疑念を深めるだけだ。

俺はジエイクの裏切りに関して、客観的な根拠など示せないのだ。

あいつの部下たちの話をしたところで、信憑性など無いに等しい。

俺がキャラウェイの立場なら、まず身内の裏切りよりも他人のでつち上げを疑う。

とりあえず、ドン・スミスに最も近いボディガードに警告できただけでも十分だ。

「今度、飲みにも行こうぜ。(……面倒事が、全て片付いたらな)」

「……………」

俺はそのまま一度も振り返らずに、船首に並べた楽団メンバーのビークルから展開したステージに向かった。

ドン・スミスの豪華客船『ウエストウインド号』での船上パーティーは、トロット楽団のライブで大いに盛り上がった。

湾内遊覧を終えて港に戻ったころには、すっかり日が落ちていた。

新曲『I Cry』のお披露目も、他の曲目『Impossible』『In You
r Voice』の演奏も、全て恙無く終了した。

タラップから招待客が下船し、彼らは船着き場から各々のビークルや車で帰路につく。

セイボリーとコニーを主役にした手を振ってお見送りサービスも終了し、俺たちがステージを粗方片付け終わったところで、主催者のドン・スミスがこちらにやって来た。

「いや良かった。感動しましたよ」

「ありがとうございます」

ボーカルのコニーが代表して礼を述べた。

ドン・スミスは好々爺の仮面を張り付けたまま目を細め、楽団メンバー全員を見回しながら俺たちを労う。

「あなたたちに来てもらって本当によかった。気が向いたら、何日でも滞在してってください。私はこの街の闘技場の支配人もやっております。よかつたら、一度寄ってやってください」

さて……原作では、八百長騒動も今日中に終わり、明日にはスームスームを発つことができたはずだが、現実ではどうなるのかな？

今はまだ日も落ちたばかりだが、バナラが闘技場で試合に出て、ドン・スミスの介入で事なきを得て、シブレットとマーシユに会って……。

原作通りの展開だとしたら、今夜は忙しくなりそうだ。

「それでは」

クラリスはドン・スミスの乗る車椅子を反転させ、二人は下船していった。

強面のボディガードのキャラウェイは、いつの間にか音も無く二人の傍に接近しており、淀みない動作でリフトを準備してクラリスとドン・スミスを促している。

去り際にキャラウェイは一瞬だけ俺の方を見たが、そのまま三人は船着き場へと降りていった。

……原作と違う動きだな。

早めに引き上げたのは、俺の忠告の影響か？

「(さて、どうなることやら……)」

「ん？ グレイ、どうかしたのかい？」

「いや、何でもないさ。……ところで、マジヨラム。今回は当日入りで現場に直行だったから、宿泊先を聞いていなかったな。宿はどこを取っているんだ？」

「ドン・スミスさんのご厚意でホテルを用意してもらったんだよ。今夜はホテルブルー・マーリンで休もう」

「お、高級宿じやないか。ツイてるな」

「うわあ！ 楽しみだなあ」

「もう、バジルったら」

そして、俺たちは各々の楽器や機材やビークルを完全に下ろし、宿泊先のホテルブローマリーンのロビーを集合場所に、一時解散となった。

俺は自分のサックスの他にマジヨラムのドラムの一部を運ぶのを手伝い、一足先にタラップを降りて駐機場へ向かう。

【ジャガーノート】のシート下にサックスケースを積み、マジヨラムの【イエロー・ベア】の足元にバスドラムが入ったハードケースを置く。

マジヨラムの楽器にこれ以上の手出しは無用だろう。

ドラムは、自動車に乗っているときは貨物室に固定するので、ビークルに積むのは駅から会場まで運ぶ場合などの一時凌ぎに過ぎないが、それでもマジヨラムには自分の楽器の扱いに関してこだわりがあるはずだ。

そして、俺が一通り片付けを終えて『ウエストウインド号』の方を見ると、ちょうどバナラもタラップを降りてくるところだった。

58話 脅迫

「なあ、あんた」

バナラが『ウエストウインド号』のタラップを降りると、物陰から出てきた一人の男が彼を呼び止めた。

白いスーツを着たチンピラ風の男だ。

ジェイクだ。

ドン・スミスと共に乗船してきたジェイクのことはバナラも目にしていたが、こうして一般人とは異質の雰囲気を持つ部類の者に目の前に立たれると、今までに幾度も修羅場を潜り抜けてきたバナラといえど緊張せずにはいられない。

自然とバナラの手には力が入り、僅かに上半身を引いて身構える。

ジェイクはそんなバナラの様子に構わず、馴れ馴れしい態度で身を乗り出しながら言葉が続けた。

「聞いたぜ、あんた。キラールエレファント団と渡り合って、あのダッドリーも負かしたそうじゃねえか。……折り入って頼みがあるんだ。話だけでも聞いてくれ」

話だけで済むはずが無いのはバナラも何となく察してはいるが、特に遮ることはしなかったので、ジェイクは勝手に話し続ける。

「頼みつてのはな、あんたにビークルバトルに出てもらいたいんだ。……名の知れたあんたがおりやあ、皆あんたに賭ける。対戦相手が腰抜けの弱え奴なら尚更だ。そこで、オレがその腰抜けに賭ける。それであんたが負けてくれりやあ……わかるよな？」

「それは八百長……「しっ」」

鋭く警告するジェイクにバナラも言葉を止めた。

しかし、ジェイクも周りに人が居ないと確信しているのか、次の瞬間には開き直った。「まあ、わかりやすく言えば八百長だ。ドン・スミスはケチ臭くていけねえ。オレたちにもでろくに金を回さず、自分ばかりいい思いをしてやがる。あんたが負けてくれりやあ、莫大な金が手に入る。ドン・スミスの鼻をあかすことだつてできるぜ。どうだ？ やつてくれるか」

バナラは一瞬の逡巡すら見せずに首を横に振った。

「いやだね、八百長なんてしないよ」

ここまでのバナラの態度や表情から、ジェイクも彼の答えは察していたようだ。

ジェイクは全く動じることなく、鼻で笑って目を鋭く細める。

ドン・スミスやキャラウェイと比べれば、ジェイクの迫力など大したものではないが、

それでも生身での荒事に慣れていないバナラはいくらか気圧された。

「そうかい。でもあんた、いやだと言われてハイソウデスカとでも言うと思つたか？
あんたは断れないんだよ。断つたら、あんたの仲間にはあの世に行つてもらおう」

「何だつて!? 卑怯な!」

ジェイクは勝ち誇つたように歯をむき出して笑つた。

バナラの憤慨などまるで意に介した様子が無い。

「何とでも言いな。さあ、返事をしな」

「……………」

「まあいい。あんたには、どのみちやつてもらうんだ」

嫌らしく口元を歪めるジェイクに、バナラは何も言い返せない。

初めて目の当たりにした裏社会の人間による脅しは、ビークルに乗っていないなければただの少年に過ぎないバナラにとって、頭が真っ白になるのに十分な代物だったのだ。

バナラの脳裏には、真っ先にコニーのことが過り、次いで頼りないバジルのことが浮かんだ。

従わなければ、友人たちが殺される。

今のバナラには、それしか考えられない。

「それじゃあ、説明をしておこう。なあに、難しい話じゃねえ。対戦カードはオレがうま

いことやっておく。あんたは受付へ行くだけでいい。そして、バトルが始まったら、うまいこと負けるんだ。勝ったり引き分けたりすると、全てがペアだからな」

ジェイクは再度危険な雰囲気醸ししながら警告する。

「後で闘技場に来てくれ。もし来なかったら……わかっているな？」

またしてもバナラは沈黙を保ったが、ジェイクはそれを承諾と受け取り、上機嫌な表情で踵を返した。

「それじゃあ、頼んだぜ」

ジェイクが去った後も、バナラはしばらくその場に呆然と立ち尽くした。

ウミネコ海岸で目を覚ましてから、バナラは数多くの困難を乗り越えてきた。

コニーが危険な目に遭ったことも一度や二度ではない。

その度に、持ち前の決断力と行動力、それに僅かな期間ながら着実に積み重ねてきたピークルの技術を以って前に進んできたのだ。

しかし、今回ばかりは一筋縄ではいきそうもない。

卑劣な行為をまるで躊躇わないように思える裏社会の人間の存在もそうだが、楽団メンバー全員を人質に取られて不正を強要されることなど、バナラにとって初めての経験だ。

「そうだ、 그레이に……」

ようやく再始動したバナラは、覚束ない足取りでピークルの駐機場を目指し、荒事で最も頼りになると思われる人物を探し始めるのだった。

「悪いな……」

バナラが自分のピークルの方へ向かったのを確認し、俺は船着き場の暗闇から姿を現す。

先ほどバナラが『ウエストウインド号』から降りてくるタイミングで、俺はこつそりと船着き場の隅の暗闇に身を隠し、ジェイクとバナラの話の立ち聞きしていたのだ。

フラフラと歩きだしたバナラは、駐機場で俺の「ジャガーノート」を見つけると、キョロキョロと辺りを見回し、そしてひどく落胆したように肩を落とした。

恐らく、俺を探しているのだろう。

さて……どうしたものか？

バナラには、しばらくジェイクの言う通りに動いてもらいたい。

ジェイクの手下はバナラや俺たちトロット楽団のメンバーを監視しているはずだが、今回はドン・スミスの暗殺にまで話が及びそうなので、チンピラどもの状況もこちらで把握しておきたいのだ。

要は、監視のチンピラを探し出して拷問し、情報を引き出すつもりだ。

スームスームは奴らの庭なので、今回もなかなかリスキーな作戦になりそうだが仕方ない。

昼過ぎに見たジェイクの部下たちが居る場所は、監視対象であるバナラかトロット楽団メンバーの近くだろう。

どうやって搜索するかな？

どちらにせよ、俺が快適に動くためには、バナラにジェイクの目を引き付けてもらうのがよさそうだ。

今の内にバナラと話して方針を伝えるか？

いや、今こうしている間もジェイクの手下に監視されているかもしれないし、下手に色々吹き込んでジェイク側に仕込みがバレても面倒だな……。

そんな具合に思案していると、俺は後ろから声を掛けられた。

「あれ、グレイ？ どうかしたのかい？」

声の主はマジヨラムだった。

どうやら、片付けもクルーやスタッフへの挨拶も終わったようだな。

ドラムの残りのパーツを全て手に提げているので、このまま駐機場へ撤収するのだから。

「ああ、いや。何でもない。……マジヨラムは、真つ直ぐホテルに向かうのか？」

「うん、そのつもりだけど……あ、グレイはキャラウェイさんと飲みに行くんだっけ？」

「いや、今夜は彼も予定が埋まっているから……」

俺は咄嗟に閃いたことをマジヨラムに提案した。

「マジヨラム、俺はちよつと闘技場に行つてくる。多分、バナラも一緒だ。俺たちはその後でホテルに戻るから、今後の予定は今日の夜にまとめて伝えてもらえるか？」

「わかつたよ。今日はセイボリーとバジルも疲れているみたいだから、外出はしなと思う。ホテルブルーマーリンのロビーで待つてるね」

「すまん。時間を掛ける」

現段階では時間稼ぎに過ぎないが、楽団メンバーの安全に関してはこれでいいだろう。

高級宿は警備もしっかりしているはずなので、さすがに人目につくロビーでマジヨラムたちが害される可能性は低いはずだ。

ジェイクの手下は……バナラを監視している奴に接触するか。

マジヨラムと別れた俺は、視線をスーム海浜公園の入口の方へ戻す。

駐機場の方を見ると、バナラは俺を見つけるのを諦めたのか、「カモミール・タイプⅡ」に乗り込んでエンジンを起動させていた。

これからジエイクに言われた通り闘技場へ向かうのだろう。

俺はバナラがスーム海浜公園を出てしばらく道を進んだ辺りで【ジャガーノート】のエンジンをつけると、漆黒のボディを夜の街に溶け込ませるようにして、ゆつくりと追跡し始めた。

59話 情報収集 前編

バナラの「カモミール・タイプⅡ」は富裕層が住む中央地区を抜け、スームスーム駅を過ぎて労働者街に差し掛かった。

ここで、後をつけていた俺は、路地裏からバナラのビークルを窺うジェイクの部下を発見する。

昼間に見た連中の顔は覚えているので間違いない。

下層地区に自然に溶け込む容姿をした、猿のような顔を持つ小柄な男だ。

頑張つて顔を記憶しておかなければ、このドヤ街であいつを発見することはまず不可能だったな。

バナラのビークルがドヤ街を通過し、ポートモーターズに入ると、猿顔のチンピラは気を抜いた表情でタバコに火を点けた。

近くの壁に背を預け、完全に寛いでいる。

どうやら、バナラが闘技場へ向かったことを確認しただけで、彼の仕事は終わりのようだ。

LONEどころかガラケーすら無い時代とはいえ、不測の事態が起きなければ報告義務すら無い仕事を割り振られるチンピラとは……とっ捕まえても、何も有益な情報が出てこないかもしれない。

しかし、今はあの猿顔以外にジェイクの関係者と思わしき人間の影は無い。

「……行くか」

俺は、駅の近くに「ジャガーノート」を駐機してエンジンを停止しキーを抜くと、先ほどのチンピラが居る路地へと近づいて行った。

労働者や荒くれが闊歩するスームスームのドヤ街は、他の地区とは雰囲気まるで違う。

表通りに出れば、東にはスームスーム駅と中央地区へ至る道が、西には活気のある市場と船着き場を過ぎれば華やかな闘技場がある。

上流階級や余所者が足を踏み入れるのは、この辺りまでということだ。

路地に一步足を踏み入れた瞬間、俺の全身に鋭く粘り気のある視線が突き刺さった。

警戒と同時に値踏みするような不愉快な視線だ。

こちらから目視できる位置に居る連中のみならず、脇道の奥や壊れかけの窓の向こうからも何者かがこちらを見ているように思える。

確かに、ネフロの『ファツション・ロンド』で買ったこの仕立てのいい服は、スラムには似つかわしくない装いかもな。

幸い、俺はただの貧弱な小金持ちには思われていないようで、今のところカツアゲをしてくる者は居ないが、少しでも油断をすれば、一瞬で身ぐるみ剥がされるであろう。

長居は無用だ。

「くそつたれ……」

俺は近づく者が居たら即座に射殺するくらいのもりで、シオルダーホルスターの拳銃のグリップを常に握りながら歩を進めた。

早歩きで、しかし背後や死角からの襲撃に注意しつつ、先ほどのジエイクの手下が姿を消した辺りを目指し続ける。

そして、一本道の曲がり角に差し掛かったところで、俺はようやく目当ての人物を発見した。

「ん、どうしようかしらあ?」

「へへっ……オレに入られときゃ、後々得だぜ」

「でもお……ドン・スミスファミリーとか言われても、あんまピンとこないしい……。あんなたって、本当にそんな凄い人なお?」

「おうよ！ 何たってオレは次期若頭……いや、明日にはオレがファミリーを牛耳っているだろうな」

「え〜!? そうなんだあ！ 凄〜い」

猿顔のチンピラは娼婦を口説いていた。

次期若頭というだけでもなかなか盛つてらっしゃるが、こいつのビッグマウスは限界を知らないらしいな。みつともない。

娼婦の方も、見たところあまり売れているようには思えない風貌だった。

派手な化粧には清潔感など欠片も無く、身に着けている服やアクセサリーは俺が見ても安物だとわかる。

何というか……これがスームスームのドヤ街の実態か。

「ん?」

チンピラは何気なくこちらに振り向いた。

俺を視認すると、その表情は驚愕に変わり、最後には蒼白になる。

昼間に会っただけだが、向こうは俺のことを覚えていたようだ。

俺は躊躇なく発砲した。

猿顔のチンピラの武装や腕を俺は知らないからだ。

油断してこちらが撃ち殺されたら元も子もない。

咄嗟のこととはいえ、頭を撃ち抜かないだけの精神的な余裕くらいは、俺も持ち合わせていたが。

俺はシオルダーホルスタールから拳銃を抜き出し、両手でがっちりグリッブして照準をチンピラの右腕に合わせ、ダブルアクションで引き金を絞り落す。

銃口とシリンドラーの隙間から漏れたガスとマズルフラッシュが、一瞬だが路地裏の暗闇を照らした。

38口径弾は狙った通りチンピラの右前腕に着弾した。

これで奴は利き手で凶器を使えない。

チンピラは右腕を撃ち抜かれた衝撃でそのまま尻もちをつき、啞然とした表情のまま俺を見上げる。

「ひい……」

娼婦も呼吸困難を起こしたように息を浅くしながらヘナヘナと座り込んだ。

こんな街を根城にしても、目の前で人が撃たれて地面に血が流れる様子を目の当たりにする機会は多くないのだろう。

酸欠の金魚のようにパクパクと口を動かしながら、俺と撃たれたチンピラを交互に見続けている。

「う……あ……おぐっ！」

しばらくすると、徐々に状況を理解したチンピラは、撃たれた傷の痛みを思い出したかのように顔を歪めた。

騒がれたら面倒だ。

銃声がしたことで近くに居た無法者どもは一旦引いたらしく、今は俺に突き刺さる視線がほとんど無いように思えるが、それでも男が悲鳴を上げれば騒ぎが大きくなって面倒な奴が出てくる可能性がある。

今この縄張りのボスと揉めて時間を浪費するのはご免だ。

こちららはさっさとジエイクの手下から情報を引き出したいのだ。

俺は早足で二人に近づくと、這って逃げようとするチンピラの無事な左腕を踏んで動きを封じ、そのまま全体重を掛けた。

嫌な感触とともに鈍い破碎音がして、男の肘が砕けた。

「ギェ……っ！っ！」

猿顔のチンピラは悲鳴を上げようとしたので、先んじて側頭部を蹴り飛ばして黙らせる。

ウラジミールを追っていたブラッディマンティスの男のときと違い、今回はうまく気絶させられたな。運よく。

気絶させた男が装備していた武器は、ポケットに仕舞われていた粗末なナイフだけだった。

銃器の類は一切見つからない。

腰回りや足首だけでなく、袖の折り返しなども調べるが、カミソリの刃を仕込んですらいない。

どうやら、こちらが撃たれる心配は杞憂だったようだ。

俺は男の銃創に軽く止血を施すと、手足をワイヤーで拘束する。

「さて……」

「ひっ！」

再び声にならない悲鳴を上げられたことで、俺は横に座り込んでいる娼婦のことを思い出した。

俺がそちらに視線をやると、涙で化粧をボロボロにした女の顔が視界に飛び込んでくる。

股の間の水溜まりの発生源については、俺の口からは語らないでおこう。

「殺さないで！ あたいは、何も見てない……っ！」

耳障りな声で騒ぎ始めたので、俺はその女に銃を向けて黙らせた。

さて、どうしたものか……？

振った。

腰が抜けてなかなか立ち上がれないようだが、手を貸す気にはなれない。また騒がれるのがオチだ。

何とか立ち上がった女がヨタヨタと去っていったのを見送り、俺はもう一度周りを確認した。

こちらを窺っている者は居ないように思える。

警戒は続けつつ、俺は拳銃のシリンドラーをスイングアウトしてリロードする。

エジエクターロッドを押しして六発の弾丸を浮き上がらせると、先ほど撃発した弾を引き抜いて捨て、バラでポケットに入れていた38口径弾を補弾した。

「よし、行くか」

拳銃をホルスターに仕舞った俺は、グリップは握ったまま周囲を警戒しつつ、未だに意識を取り戻さないチンピラのベルトを掴んで持ち上げた。

六十キロに満たない小柄な男なので、片手でも簡単に運べる。

俺は捕獲したチンピラを手に提げたまま路地裏を歩き続け、ドヤ街のさらに裏へと歩を進めていった。

猿顔のチンピラを乱暴に地面に投げ出し、もう一度念入りにボディチェックを済ませ

た俺は、男の背中を蹴って喝を入れた。

眉を顰めるように苦悶の表情を浮かべ、やがて男は意識を取り戻した。

「うぐ……ハハハ……」

「お前の墓場さ」

朦朧とする意識の中、必死に状況を把握しようと努めるチンピラに、俺は拳銃をよく見えるように示す。

視界がはつきりすると、自分の鼻っ面に向けられた鈍く光る金属の塊に、男の表情はみるみる引き攣った。

次いで、顔は銃口から逃れようとした体勢のまま、目だけを横にやってスムーズスムーズの海を見る。

ここはドヤ街の裏道。中央地区と北地区を繋ぐ橋の下あたりだ。

ここで男を射殺しても、すぐに死体を海に放り込んで処理できる。

俺の言葉の意味を理解した猿顔は一気に絶望の表情に覆われた。

「助けて……俺が悪かった……あんたを利用して、オレは反対だったんだ……」

猿顔に精一杯の媚びる表情を浮かべて、チンピラは命乞いをする。

その拍子に傷が痛んだのか、男は脂汗を滴らせた。

どうやら、精神力は強くないようだな。

これは、もう少し脅せば完璧に従順になるだろう。

「安心しろ。今日の俺はライブが成功して機嫌がいい」

「っ！ じゃあ……」

「目を抉るのと皮を剥ぐのは勘弁してやろう。鼻を削ぎ落として歯を引っこ抜くだけだ。その後は、頭を撃ち抜いて楽に死なせてやるよ」

「ひい！ 許してください。殺さないで……」

地面に頭を擦り付けて懇願する男に、俺はさらに冷たく言い放った。

「よく聞け。お前の傷は急所こそ外れているが盲管銃創だ。患部の状態はひでえもんだったぜ。要は、放っておけば死ぬってことだ。可哀想になあ。ま、俺は医術にも詳しいナツメツグ博士の助手だから、治そうと思えば治せるがな」

実際には、銃弾は貫通しており止血くらいは施してあるので、放置しても死ぬ可能性は低い。

それに、俺に外科手術など不可能だ。

しかし、猿顔のチンピラに冷静な判断などできるはずもなく、縋るような目で俺を見上げてきた。

「お願いします！ 助けてください！」

「何故だ？ 放っておいてもお前は死ぬ。切り刻むのは俺の趣味だ。それ以上の労力を掛けて助けろだど？ お前はその対価に何を差し出せるんだ？」

自分で言っておいてなんだが、完全にサイコだな。

こういうのは、これつきりにしてもらいたい。

「オレの全財産を……」

「チンピラの端金なんぞに用は無えよ」

「な、なら……オレの女を自由にしてもらって……」

「おい、まともな材料を出さねえか」

「ひい！ すんません！」

このままでは埒が明かないので、俺の方から攻めることにした。

俺はベストのポケットからナイフを取り出し、男の目の前でチラつかせる。

こいつから奪ったものではなく、自前の良質なフォールディングナイフだ。

ヒルトは小さく上側には付いていないので、コンバット用ではなく作業用や解体用の刃物だが、脅しには十分だ。

「虫の居所が悪くなってきたな。とりあえず、片目いつとくか？」

「ひつ、そんな……」

「だが、俺はまだ機嫌がいいからな。頭の悪いお前さんに救済措置をやろう。俺の質問

に正直に答えたら、目ん玉は勘弁してやる」
「な、何でも喋ります」

60話 情報収集 後編

「まずは仲間の居場所だ。どこで何をしているか吐け」

「ジ、ジェイクさんは……あんたの仲間のバナラって奴と一緒に居るはずだ。八百長はあんたに持ち掛けるはずだったが、あのガキもビークル乗りとしては十分に名が通っているって……」

それは知ってる。

本来なら、俺が八百長の計画など知っているはずが無いが、猿顔はそのことまで頭が回らないようだ。

敢えて突っ込む必要も無いのでスルーしておく。

「他の奴は？」

「それは……」

猿顔が言い淀んだので、俺はナイフを逆手に握りなおすと、男の髪を掴んで刃を目に突き立てようとした。

「やめてくれっ！ ほ、他の奴らは、ドン・スミスを仕留めに行った」

……ついに俺の懸念が現実のものとなったな。

原作では、ジェイク一派が本当にドン・スマスを殺そうとする描写など無かった。

ジェイクの裏切りは悪ふざけが過ぎた結果だ。

事態が収束した後、ジェイクはドン・スマスを裏切ったことを後悔しており、最終的には赦されてファミリーに呼び戻されたことで、彼は改めてドンに忠誠を誓う。

さすがに暗殺者が実際にドン・スマスへ差し向けられる状況にはならなかったはずだ。

……いや、もしかしたら、原作通りの展開でも、ジェイクの手下は勝手に暴走し、裏で処理されていたのかもしれないな。

「ジェイクの奴は生ぬるいって……。折角、あんたみたいな殺し屋が来たのに、ケチな小遣い稼ぎで満足している腰抜けだって……。ドン・スマスが居なけりゃ、あいつは何もできやしない。そのままドンを殺した罪も擦り付けちまえばって話になって……。お、俺は反対したんだ」

どうやら、俺もジェイクの手下の暴走の要因になっているようだ。

ジェイクの非常識な悪ふざけが、本当にドン・スマスの命を脅かしかねない大事件に発展している。

昼間にこいつらの密談を立ち聞きしたときに懸念はしていたが、本当にこうなるとは

な……。

念のため、ボディガードのキャラウェイには、ドン・スミスの傍を離れないように伝えているが、それも絶対安全な策というわけではない。

「全員か？」

「え？」

「仲間は全員ドン・スミスを殺りに行ったのか？」

「あ、ああ。そうだ。三人ともな」

昼間にジェイクが連れていた手下は四人だった。

この猿顔の男の仲間が三人。

数は合うな。

こいつの言っていることが事実なら、トロット楽団メンバーの方に行った奴は居ないのか。

ジェイクは楽団メンバーを手下に監視させて、彼らを人質にバナラを八百長に協力させていたわけだが……。

こいつらは完全にジェイクの指示を無視しているようだが、考えようによつてはありがたい話だ。

ドン・スミスの方の対処は色々面倒なことになりそうだが、俺の手が届かないとこ

ろでマジヨラムたちを害される心配が無いからな。

「で、お前はこんなところで何をしていた？」

「オレは……アリバイのために……」

「アリバイ？」

「顔の効くバーに、俺たちが飲んでたことにしておいてくれって……」

どうにも猿顔の歯切れが悪い。

「それだけか？」

「……………」

猿顔は急に黙りこくった。

何か隠してやがるな。

こいつはバニラのビークルを見送った後、真っ直ぐにドヤ街に向かった。

娼婦を口説く以外にも、目的があるはずだ。

俺は躊躇なくナイフを男の傷口に突き立てた。

そのまま銃創を広げるように決る。

「ぎい!! 言うー! 言うー! 言うー! 敵対組織の奴に情報を流したんだ! それいつの動向も

確認しに来た」

どうやら、他の組織のチンピラを手引きして、ドン・スミスの始末に加担させる腹積もりらしい。

危なかった……。

暗殺者は合計四人だ。くそつたれ。

聞けば、その殺し屋に仕立てた敵対組織の人間をジエイクが手引きしたことにするらしい。

殺し屋とキャラウェイたちがやり合ったところに、猿顔の仲間が乱入して全員を殺し、そのまま漁夫の利を得る、という筋書きだ。

……アリバイ工作を鑑みるに、こいつらはボスの一大事に酒をかつ食らっていた設定のはずだが、そんな体たらくで上に行けるものなのか？ 謎だ。

しかし、あの強面ボディーガードのキャラウェイを含む多数のターゲットを、チンピラ三人だけで始末するというだけでも、なかなか無謀でお粗末な計画に思えるが、絶対に不可能な話ではない。

おもちゃのような小口径のデリンジャーでも、チンピラ全員が銃を持っていたら、ドン・スミスと側近たちがまとめてハチの巣にされることもあり得る。

それに、こいつが動向を監視しに来た殺し屋というのも、既に闘技場へ向かったそう

……行くしかないな。

ドン・スミスが消えるのはさすがに容認できない。

「よし、立て。闘技場の支配人室に行くぞ」

「か、勘弁してくれ……」

さすがの猿顔も首を縦には振らなかつた。

確かに、暗殺計画の結果がどうであれ、この男は粛清される運命だ。

ドン・スミス側が生き残れば謀反の主犯格として、こいつの仲間が勝てば俺に情報をペラペラと喋った裏切り者として。

「言っておくが、ドン・スミスは死なない。キャラウェイはお前たちの企みなどつくに気づいている」

「なっ!?!」

まあ、俺が警戒を促したんだけど。

それに、絶対にドン・スミスが無事に済む保証も無い。

しかし、この男は曲がりなりにもドン・スミスファミリーの人間だ。

キャラウェイの腕とボスの恐ろしさは、近しいが故に一般人よりも身近に認識している。

猿顔はマリアアの発作のように震え始め、冬でもないのにガチガチと歯を鳴らしながら顔を蒼くした。

「その敵対組織の殺し屋とやらの顔はわかるんだよな？」

「……ああ」

「なら、そいつを見かけたら俺に教える。お前の役目はそれだけだ。簡単な仕事だろ？」

「で、でも……」

「このままでは、どちらにせよお前は死ぬ。ドン・スマスにとつても、反乱勢力にとつても、お前は裏切り者だからな。俺に協力して暗殺を阻止すれば、少なくともドン・スマスは赦してくれるかもしれないぞ」

それに、役に立たないのなら、俺がここで撃ち殺して死体を沈めていく。

俺にとつて、この猿顔の命など何の価値も無い。

「……わかった」

俺の雰囲気から断ることは得策ではないと感じ取ったのか、男はノロノロと体を起こした。

ワイヤーは解いてやったが、こいつの両腕は使い物にならないままなので安全だ。

38口径弾で撃ち抜かれた右腕に肘を粉碎された左腕では、反抗してもまともな攻撃はできない。

「……………」

猿顔が言いたいことを察した俺は、上腕を縛ってから一応清潔なボロ布を再度傷に巻き付け、それらしい処置をしてみた。

運よく貫通とはいえ、ぶち込まれたのはホローポイント弾であり、そのうえナイフで挟られた傷の状態はひどいものだ。

血は止まったものの、猿顔は自分の腕の傷を直視してしまい、さらに表情を引き攣らせる。

「応急処置だ。これですぐに失血死することはない。すぐにはな」

このままでは死ぬと信じ込まされていた男は、僅かな安堵の表情を浮かべると、俺の促しに素直に従って歩き出した。

猿顔のチンピラの背中に銃を突きつけたまま、俺は闘技場に足を踏み入れた。

階段を上って二階からは入ると、そこは酒場となっており、仕事上がりの労働者や船乗りたちが酒のコップを片手にバカ騒ぎをしている。

「(どうだ?)」

「(いや、見当たらねえ……)」

猿顔は俺が背中に押し付けている銃口を気にしつつも、注意深く闘技場内を見渡して

答える。

「どうやら、二階には例の殺し屋はいないようだ。」

一階との吹き抜けになっているピークルバトルのスペースから下を覗くと、受付と選
手控室が目に入った。

偶然にも、ジェイクとバナラの姿を発見した。

腰抜けジミーも控室の隅に居るな。

「……そういえば、あいつはどうやってガラガラ砂漠を渡ったんだ？」

「まあ、いいか。」

ジェイクは受付の係員と話しており背を向けているが、バナラは俺の方に気付いた。

何かを訴えるような目でこちらを見続けているが、今はジェイクをぶちのめすよりも
ドン・スミスの方が優先だ。

俺は体をずらして猿顔に突き付けた拳銃がバナラに見えるように示し、軽く頷いた。

バナラがどこまで悟ってくれたかはわからないが、少なくとも俺が何も気づかず闘技
場に観戦に来たわけではないことは察してくれたはずだ。

今ジェイクに見つかるど厄介なので、俺は猿顔の背を銃口で突つつき、闘技場の奥へ
と促した。

「(支配人室へ行くぞ)」

「……………わかった」

猿顔を先に歩かせて、闘技場の奥まった場所にある階段を降りる。

原作と同じく、ここから支配人室へ行けるはずだ。

支配人室はビークルバトル会場をガラス越しに見ることができるとは、特等席だったはずだが、入口は地味なものだな。

「……………失礼します」

チンピラは傷の痛みにも顔を顰めつつも、いつもの流れでドアをノックしてから支配人室に入室した。

俺も彼に続いて開け放たれたドアから足を踏み入れる。

そこには、ある意味で予想通りの光景が広がっていた。

61話 鉛玉の応酬

「っー」

猿顔は息を呑んで俺の方へ振り返る。

俺は後ろ手にドアを閉めると、猿顔の後ろからひよっこりと顔を出して、支配人室の様子を見回した。

硝煙と血の匂いが充満していた段階で、それなりの惨状は予想していたが、実際に見てみると猿顔が蒼白になっているのも頷ける。

両手にリボルバーを握り部屋の中央に仁王立ちするのは、ドン・スミスのボディガードを務めるスキンヘッドの強面キヤラウエイ。

銃口をこちらに向けてこそいないものの、いつでも発砲できるよう自然に脱力した姿勢で、鋭い殺気を纏っている。

支配人室のバースペースには三人の……いや、三つの屍があった。
服装や血濡れの顔から、ジェイクの手下どもだということはわかった。

三つの死体は酒棚やバーカウンターに力無くもたれ掛かっている。

各々が数発の銃弾に体を貫かれており、どう見ても完全に絶命していた。

彼らの手の先には、射殺されて取り落したと思われるスナブノーズのリボルバーが転がっている。

この光景で、俺は全てを理解した。

ドン・スミスの暗殺を目論んだ猿顔の仲間は、見事にキャラウェイの返り討ちに遭ったわけだ。

ドン・スミスも無事だった。

部屋の隅で、相変わらず車椅子に座って両手を組んだ体勢で、無表情にチンピラたちの死体へ視線を向けている。

孫娘のクラリスも、些か表情が強張り顔面を蒼白にしているが、特に怪我は無いようだ。

「無事だったようだな」

俺が口を開いたことで、部屋の中に居る連中の視線がこちらに向けられた。

「おかげさまで」

キャラウェイは俺に軽く会釈をするようにして銃を仕舞った。

向こうが形式上とはいえ戦闘態勢を解除したので、俺も自分の拳銃をショルダーホルスターに戻す。

船上パーティーのとき、俺は今夜ドン・スミスが危険に晒される可能性をキャラウェイに仄めかしていた。

俺はドン・スミスの警護において有益な情報を提供したことになる。

キャラウェイの目には、夕方のような不快感や警戒心は無い。

まだ完全に信用しているわけではないだろうが、少なくとも猜疑を前提に接してくることはないようだ。

「……ほっ、助かった」

ドン・スミスと同じく部屋の隅に寄っていたバーテンダーは、安堵の息を漏らした。

キャラウェイが普通に話しているのを見て、俺が敵ではないと判断したようだ。

「いきなり銃を突きつけられて拘束されましてね」

彼は支配人室のバースペースを任されている渋いバーテンダーだ。

どうやら、猿顔の仲間のチンピラたちは彼を殴って気絶させ、バーカウンターの後ろに身を潜めて、ドン・スミスたちを射殺しようとしたそうだ。

結局は、ドン・スミスより先に入室したキャラウェイに察知され、そのまま撃ち合いになってお陀仏、と。

俺の忠告があつたとはいえ、この状況で暗殺者の存在を察知し、しかも至近距離で三人と撃ち合つて無傷で勝つとは……。

スキンヘッドのボディガード、マジパネエな。

何はともあれ、キヤラウエイに警告しておいたことも功を成し、ドン・スミスの暗殺はどうか食い止められたようだ。

「ジエイクは……本当にわしを裏切ったのか？」

微動だにしなかったドン・スミスは、僅かに顔を動かして俺が連れてきた猿顔のチンピラを見据える。

当然ながら、ドン・スミスは暗殺者たちがジエイクの手下だということに気付いていた。

ジエイク自身にそこまでのつもりは無く、本気でドン・スミスを暗殺しようとしたのは手下どもの独断である可能性が高いが、今ここで俺が口を出すことではないな。

それを調べるのはドン・スミス自身であり、俺も現実のジエイクがどういうつもりなのかは知らない。

鋭い眼光で射抜かれた猿顔は、失神こそ免れたものの、脚を震わせながらドン・スミスから視線を逸らす。

「あ……いえ……」

猿顔は俺の方に縋るような視線を向けたが、俺は冷たく無視した。

俺はドン・スミスなら赦してくれるかもしれないと言っただけで、こいつを助けてやる義理など無いのだ。

ドン・スミスは猿顔の腕の傷と俺を一瞬だけ見比べたが、ほつと息を吐くと自嘲するような表情で呟いた。

「最近、奴の少々目に余る言動は小耳に挟んでいた。トロット楽団の方々には何か良からぬことを企んでいるかもしれないとは聞いていたが……まさか、ここまで大それたことをするとは……」

どうやら、トロット楽団メンバーの方には、ドン・スミスも既に対応してくれていたようだ。

俺は曲がりなりにもドン・スミスの配下である猿顔を撃ってしまったので、何か落とし前を求められるかと警戒していたのだが、どうやらそういった類の話ではないようだ。

ドン・スミスはただ哀愁を湛えてゴヤク。

「育て方を間違った「ちよつと待て」む？」

会話の流れはそのままジエイク絡みの内容が続きそうだったが、俺はドン・スミスの言葉を遮った。

いい加減、本題に入らないとマズイ。

猿顔たちの始末は後回しだ。

再びこちらに視線が集まる中、俺はキャラウエイに確認した。

「キャラウエイ、倒した暗殺者はこの三人だけか？」

「……ええ、そうですが？」

そもそも、俺は四人のヒットマンの件でここに来たのだ。

猿顔たちが唆した敵対組織の人間の死体はその中に無い。

キャラウエイが暗殺者を全員倒したことに気を取られて言い出すのが遅れたが、肝心の外部からの暗殺者がまだ生きている。

黒幕のチンピラ三人の方が先に始末されているんじゃない話だが……。

二階の酒場の様子を鑑みるに、支配人室は防音設備がしっかりしており、銃声が漏れない。

キャラウエイとチンピラたちの銃撃戦を察知して、敵対組織の殺し屋が逃げた可能性は低い。

「話は後だ。もう一人来るぞ。こいつが唆した敵対組織のヒットマンが……っ！」

しかし、俺の言葉は突如として支配人室に轟いた銃声にかき消された。

閉め切った支配人室に鋭い火薬の炸裂音が木霊した。

閉所に反響する銃声はなかなか耳に響くものだった。

突然の銃弾の飛来に俺も心臓が縮み上がったが、着弾したのは俺でもドン・スミスでもなかった。

「お……」

驚愕の表情を張り付けたまま棒立ちで固まる猿顔。

彼は何が起こったのか理解できない様子で、そのままゆっくりと膝から崩れ落ちる。敵の凶弾は最初から俺が連行してきた猿顔を狙っていたのだ。

キャラウエイは銃声と同時に行動に移っていた。

地面を蹴って、ドン・スミスとクラリスの方へタックルするように身を投げ出す。

「ぐう」

「きや」

キャラウエイに突き飛ばされ、二人の要人は地面に押し倒された。

ボディーガードの仕事は敵を倒すことよりも警護対象を守ることだ。

普通に考えれば盾になるよりも敵を撃ち殺した方が確実に安全だと思うが、今回は唐突な襲撃でヒットマンの姿も見えていなかったのだ。キャラウエイは敵の排除よりも二人を狙撃から庇うことを優先しようだ。

しかし、俺が自分の身を犠牲にしても守らなければならない存在などこの場に居ない

ので、こちらは反撃を優先させてもらう。

反応自体はキャラウエイより僅かに遅れたが、俺も猿顔が倒れ終わる前には行動に移っている。

床に身を投げ出すようにして受け身を取りつつ、ソファアを遮蔽物にできる位置目掛けて転がり、シヨルダーホルスターから拳銃を抜く。

そのまま床に伏せた状態で、部屋の隅にあるクローゼットらしき棚に向かって、トリガーを六回引いた。

銃弾はあの棚の中から飛んできたのだ。

閉め切った部屋に、俺のリボルバーから発せられた炸裂音が反響する。

俺のS&W M10に似たりボルバーが使用する弾は、地球の基準で言えば38スぺシャル弾とほぼ同等の規格なので、それほど強力な弾薬ではない。

しかし、閉所での連続射撃音は相当なものとなる。

六発の速射でも耳がおかしくなりそうだ。

「あがつ」

俺がシリンダーの中の弾を撃ち尽くして銃声が止むと、クローゼットからはくぐもつた呻き声が発せられた。

向こうも俺に一発だけ撃ち返してきたが、猿顔から次のターゲットに狙いを切り替え

る余裕は無かったのか、弾は俺やドン・スミスから大きく逸れて床を抉っていた。

それに対して、俺の銃弾はクローゼット越しとはいえ、敵の体を確実に捉えたようだ。

「(イ)う……」

数秒後、クローゼットのドアが開き、品の無いチンピラ風の男が前のめりに倒れてきた。男が手に持った拳銃が床に落下し、カーペットが衝撃を吸収して僅かに鈍い音を立てる。

「(コ)いつか……」

危なかった……。

ヒットマンは最初から部屋に潜んでいたようだ。

チンピラ三人と違ってキャラウェイに察知されなかったあたり、隠密に秀でている殺し屋だったようだな。

俺は立ち上がると、スピードローダーで拳銃に六発の弾を装填しなおした。

この男で最後だと思うが、念には念を入れてだ。

一応、こいつがドン・スミスファミリーと敵対する組織の人間で間違いないか面通ししたいが、猿顔がくたばった以上はそれも無理だな。

「ひえ……」

同じ部屋にいたバーテンダーが軽く悲鳴を上げ、俺も釣られてヒットマンの方を見る。

既に致命傷を受けており、出血量も相当なものだが、彼の目は異常な力を以って猿顔を見据えていた。

奴の手元には既に拳銃が無く、キャラウェイも自分の銃を抜いているものの動いていないので、安全だとは思うが、俺も念のためヒットマンの男を注視しておく。

「……裏切り者が」

俺が弾丸をぶち込んだヒットマンの男は、猿顔の死体に向かって吐き捨てると、口から血の塊を吐き出して絶命した。

62話 一件落着

バナラの「カモミール・タイプⅡ」に襲い掛かるのは、腰抜けジミーの駆る「オリーブトータス」。

バナラのビークルはほとんど動いていないにもかかわらず、ジミーは度々アームパーツでガードを固めながら後退し、そして何故かへつぴり腰のような体勢で移動する。

「ひやあああああああああああ！」

ジミーは奇声を上げながらビークルを前進させ、アームパーツを稼働させてバナラのビークルに殴りかかった。

スラストアーを併用していないどころか、踏み込みと攻撃のタイミングも合っていない一撃だ。

アームパーツによる打撃の軌道も、「カモミール・タイプⅡ」のボディパーツをまとも
に捉えていない。

攻撃の前から声を上げているので、殴ってくるタイミングも丸わかりである。

既にSランク相当の技量を持つバナラにとって、避けるのは容易い。

しかし、バナラは長い逡巡の末に、コクピットへの打撃だけは回避しつつ、ジミーの攻撃をボディパーツで受けた。

「うわあああああああああ！」

「くっ……」

バナラはジェイクに脅されており、腰抜けジミーに上手く負けるよう指示されているのだ。

トロット楽団メンバーを人質に取られている以上、バナラはジェイクに従うしかない。

だが、バナラはジミーとの対戦で意外にも苦勞を強いられていた。

思ったより、機体の損耗が激しいのだ。

ラッキーパンチのクリーンヒットをもらったように見せかけようにも、腰が引けているジミーにはそもそも火力が無い。

しかし、ジミーもそれなりに長い期間ビークルに乗ってきただけあり、このようなへつぴり腰の攻撃を繰り返していても、駆動部へ強い負担を掛けずにビークルを動かし続ける能力はある。

一方的に攻撃を打ち込めるのなら、まともな武装の無いジミーの【オーリーブトータス】でも、いずれはバナラの【カモミール・タイプⅡ】を撃破することが可能だ。

とはいえ、あまりに棒立ちの体勢を続けて攻撃を受けるのも、バナラにとつては考え物である。

ゲームならそれでもよかったが、現実で不自然に無抵抗のまま攻撃を受け続ければ、その時点で観客も異変に気付く。

だが、接戦を演じようにも、バナラの攻撃を受ければジミーは一発でダウンしそうだ。決め手にならない攻撃を幾度も繰り返し受ける状況は、防御態勢を取り続けるバナラにとつて無駄な消耗として蓄積されることとなった。

「あああああああああああ！ バナラさん！ 何で来ないんですかあ!?!」
「ぐっ………ジミー………」

はつきり言って、ジミーの動きは隙だらけだ。

ジンジャーとの修行や実戦経験を積んできたバナラなら、今の打撃へのカウンターで三回はクローアームを叩き込める。

しかし、バナラはジミーの攻撃を機体の側面で受けるしかなかった。
「(グレイ……どうすれば……?)」

ジエイクは今も試合を観戦しながらバナラを監視している。

見張られている以上、下手なことではできない。

唯一の希望は、事態に気付いて何かしら行動を起こしていると思われるグレイだ。

試合の前、彼は確かにバナラへ目くばせをした。

ガラの悪い男に拳銃を突き付けたまま、グレイは闘技場の奥へ向かった。

しかし、結局は何も起こることなく、バナラはジミーとの試合に出る羽目になった。

グレイが無事かどうかもわからない。

今のバナラにできるのは、予想外なジミーの攻撃をコクピットに受けないよう気を付けることだけだ。

重機同士がぶつかり合うに等しいピークルバトルでは、一歩間違えれば操縦手が潰される。

相手が腰抜けジミーとはいえ、ピークルのアームが振るわれる以上、生身ではただの人間に過ぎないバナラは、当たり所が悪ければ命を落とす可能性もあるのだ。

「(くっ……僕は……っ!)」

ジミーの攻撃を耐え凌ぎながら、バナラは一瞬だけ自分を監視しているジェイクの方へ視線をやる。

この時はバナラも特に何かを期待していたわけではなかったのだが……彼の目には予想外の状況が飛び込んできた。

ジェイクは強面のスキンヘッドの男に、手を後ろに捻られて拘束されていたのだ。

そして、二人の周りを観客とは明らかに違う人間たちが取り囲んでいる。

周囲の人々が視線を注ぐのはドン・スミスだが、その中にはバナラが一縷の望みを託していた人物の姿もあった。

「グレイ……」

バナラの声が聞こえたのか、グレイはバトル会場の方へ振り向いて声を張り上げた。

「もう大丈夫だ！ 遠慮なくやれ！」

「っ！ わかった」

バナラの「カモミール・タイプⅡ」は急加速し、スラスターで円を描くように移動しつつ、一気に踏み込んでクロージャーームを振るう。

「うわあああああああああああ！」

まともに打撃を受けて吹き飛ばされたジミーの「オリーブトータス」は、バトル会場の金網に激突し、そのまま横転して崩れ落ちた。

ドン・スミスたちと軽く情報を共有した俺は、そのまま闘技場の二階の観戦エリアに向かった。

もちろん、キャラウェイを含むドン・スミスファミリーのメンバーと一緒に。

クラリスは何かを言いたそうにしていたが、ドン・スミスが共に来るように言うとう素直に従った。

……ドン・スミスやキャラウェイと一緒に居た方が安全なのはわかるが、そこら辺をきちんと説明してやった方がいいのではないかね。

マフィアのボスを祖父に持っているとはいえ、クラリス自身はただのお嬢様だ。

危険な目に遭って、さぞかし気が滅入っていることだろう。

しかし、今はそれどころじゃない。

ドン・スミスの暗殺は阻止されたが、奴らの上司であるジェイクの処理がまだだ。

俺にとつては、こちらの方が本題だ。

トロット楽団メンバーの居るホテルブルーマーリン周辺に、ジェイクの息が掛かった者が居ないことは、既に確認していた。

先ほど報告に来たドン・スミスの部下からの情報だ。

今回の騒動の原因で、残された人物はジェイクのみ。

奴はバニラを八百長に協力させて、呑気にバトルを観戦しているはずだ。

ドン・スミスたちもジェイクには手下の不始末の責任を追及しなければならないので、とりあえず俺たちはジェイクが居る観戦スペースへ向かうこととなったのだ。

闘技場の二階でジェイクを発見したので、俺たちは真っ直ぐ彼に近づいた。ビリヤード台の近くに居た連中は、突然ドン・スミスが現れたことに驚いて道を空ける。

しばらく唾然としていた連中も、穏やかじやない空気を察したのか、関わり合いを避けて散っていった。

ジェイクは薄ら笑いを浮かべてバナラとジミーの試合を観戦していたが、俺たちの姿を見ると一瞬で顔を蒼白にした。

「いや、これは……違うんすよ」

ドン・スミスの表情と雰囲気から色々なことを悟ったジェイクは、聞かれてもいないのに自分から言い訳をした。

当然、ドン・スミスは弁明など聞かない。

「悪ふざけが過ぎたな、ジェイク。お前にはもつと常識を押ししておくんだつたよ」

ドン・スミスは目を伏せると心底悲しそうに言葉を続けた。

「まさか、わしに殺し屋を差し向けるとは……」

「な、何だつて!?!」

ジェイクは手下の所業を知らないようで、激しく動揺していた。

まあ、マフィアの世界では「知らなかった」で許されることではないよな。

ところが、ジェイクは俺を睨みつけると、正面から掴みかかろうとしてきた。

「てめえか!? あることないこと」「おとなしくしてください」「ぐあー!」

俺がジェイクを張り倒すより早く、彼の後ろにはキャラウェイが回り込んでいた。

そのまま後ろ手に腕を取ると、ジェイクの関節を極めて捻り上げる。

あまりの激痛にジェイクは悲鳴を上げた。

殴る蹴るをせずに一瞬で拘束するのは、大した手並みだ。

「残念ながら本当だよ。お前の手下がドン・スミスの暗殺を目論んだんだ。他の組織の殺し屋まで手引きしてな」

俺の言葉だけではジェイクも信じられないようだが、ドン・スミスの顔を見ると全てが事実だと察したようで、キャラウェイのアームロックに抵抗するのを止めた。

「まさか……あの馬鹿ども、本当に……」

ジェイクはまだ状況が呑み込めないようだが、これ以上ここで騒ぐのは得策ではない。

ファミリーの幹部であるジェイクが何か不始末をやらかしたことからい、すぐに情報が出回るのであろう。

こうしてキャラウェイがジェイクを捕らえている場面を、既に多くの街の人間に見られているのだ。

野次馬根性を隠さず近づいてくることこそないが、今も大勢の闘技場の客が、こちらへ遠慮がちに視線を送っている。

ドン・スミスは一瞬だけ憐憫の情のようなものを顔に浮かべたが、冷たくキャラウェイに命じた。

「連れていけ」

ドン・スミスの命令を受けたキャラウェイは、無言で即座に指示に従い、ジエイクを促して闘技場の奥へ去っていく。

彼の運命は監禁か拷問か放逐か……。

原作では、一年後には赦されてファミリーに戻っていたが、今回はそう都合よく収まることは無いかもしれないな。

まあ、何はともあれ、これでバニラは八百長をする必要が無くなった。

バトル会場の方を見てみると、バニラも俺に気付いているようで、こちらを見ている。「もう大丈夫だ！ 遠慮なくやれ！」

「っ！ わかった」

バニラは力強く返事をし、ピークルを急加速させた。

どうやら、問題が片付いたことを理解してくれたようだ。

実力を出せれば、バニラが今のジミーに負けることは無い。

これで……終わったな。

「ふう……」

バトル会場から視線を戻して隣を見てみると、さらに老け込んだような表情のドン・スミスが、そつとため息をついていた。

ジミーとの試合を終えたバナラは、真つ直ぐ俺の方へ向かってきた。

俺の横に居るドン・スミスとクラリスを気にしつつも、辺りをキョロキョロと見回した。

「あの……ジエイクは？」

「すまなかつたね。トロット楽団の人たちは無事だ。心配しないでいいよ」

一瞬で好々爺の仮面を張り付けたドン・スミスがバナラに答える。

「ただ、あいつの手下が妙な真似をしないと限らない。そいつらの始末がつくまで、この街に居てくれ。私が責任を持って、トロット楽団を守るからね」

バナラはしばらく俺とドン・スミスの顔を見比べていたが、やがて全てが片付いたことを理解したのか、安堵の息を漏らした。

バナラの中では、俺がドン・スミスに直談判しに行つて、ジエイクの件に手回ししてもらったことでもなっているのだろう。

……意外と大変だったんだぜ。撃ち合いになったし。

「それでは、お休み。……ああ、グレイ君は少し残ってくれ」

クラリスが車椅子を反転させたが、ドン・スミスは俺を呼び止めた。

……まあ、このままハイサヨナラとはならないよな。俺は。

「バナラ、先に行つててくれ」

「わかつたよ」

バナラもジェイクの件が片付いて安心しているのか、即答して踵を返した。

「こつちに来たまえ」

俺はドン・スミスに続いて闘技場の奥へと足を運びながら、バナラの方を一瞥する。

バナラはやけに晴れやかな顔をしたジミーと言葉を交わすと、そのまま自分のピークルに乗り込んで闘技場を出ていった。

「借りが出来たな、小僧」

何のことを言っているのかと思えば、俺が殺し屋を倒した件だ。

彼が裏社会の大物であることを俺は既に知っているので、向こうも今更取り繕う必要は無いと思っているのか、態度は完全にマフィアそのものだ。

まあ、白々しく上流階級然とした会話を続けるよりは、俺も気楽でいい。

「そうかい？ しぶといあんだのことだ。俺が動かなくても、どうにかなったんじゃないか？」

実際、ドン・スミスはジェイクがトロット楽団メンバーに何らかの働きかけをすることを勘付いており、既に手は打っていた。

今回は偶然にも俺が暗殺者を仕留めることになったが、ドン・スミスの方でもキャラウェイ以外に部下を動かしていた可能性がある。

ジェイクが人様に迷惑を掛けるのを心配しておいて、自分が暗殺されかけるなど……。

ドン・スミスはそんな灯台下暗しをやらかす間抜けには見えないのだが……。

「……確かに、全くの無警戒だったわけではない。だが、警備の強化まではしていないかった。お前が居なければ、ボディガードともども殺されていた可能性は否定できない」

「正直だな」

「お前に言われたくはない」

なるほど、俺も今しがた自分の功績を誇張しなかったな。

普通のチンピラなら、ここぞとボスに恩を売って取り入ろうとする状況だ。

「それで？ お前の望みは何だ？ 理由も無くわしの命を助けるために奔走するなど、お前の気質からしてあり得まい」

ドン・スマスは俺に鋭い視線を向けて質問してきた。よく理解してらっしやる。

確かに、余程の理由が無ければ、裏通りを歩く連中とは関わるのすらご免だ。

「然るべき掃除を。ジェイクの側近だった四人は凶らずも始末されたが、他にトロット楽団メンバーを害する奴が居るかもしれない」

「言われるまでも無い。わしは責任を持ってトロット楽団を護ると言った。このドン・スマスに二言など無い」

これで安全策は整ったな。

絶対ではないが、スームスームでこれ以上の庇護は望めない。

しかし、ドン・スマスは疑いの眼差しを強めて俺を見据えた。

「正直に言え、小僧。わしに近づいた目的は、他にもあるのだろうか？ わしは借りを作るのが嫌いだ。お前には働きに見合う報酬を受け取る権利がある。お前の考える望み程度、すぐに叶えてやる」

「うーん、まあ……あると言えばあるんだけど……」

別に誤魔化しているわけではない。

一つ、ドン・スマスの協力を取りつけられたら好都合だと考えていたものはあるのだが、まだその話はできないのだ。

いや、概要だけなら言ってもいいのだが、キーパーソンにまだ出会っていないというか……。

やはり、実行に移すのは、原作と違っている部分などを確認してからでないとな。

しかし……「望みを叶えてやる」とは、随分と簡単に言質を取らせるものだな。

マフィア、向いてないんじゃないか？

「少し待ってもらってもいいか。明日には伝えられると思うから」

「ふん。よかろう。だが、あまり待たされると忘れるかもしれないぞ。わしらの業界に、絶

対の保証など無いのだからな」

口ではそう言っているが、ドン・スミスは必ず約束を守る。

……爺さんのツンデレとか、誰得だよ。

俺は苦笑いしつつも、ドン・スミスのもとを辞して、闘技場を後にした。

63話 再会 前編

俺が闘技場から出てしばらく歩くと、ちようど曲がり角からバナラがやって来た。

彼は先に出たので、真つ直ぐホテルに帰ったのかと思つたが……。

「バナラ、どうした？　ビークルは？」

「ああ、グレイ。ビークルは駅前に停めてきたよ」

バナラは明らかに俺と話すために戻ってきた感じなので、既に売り場が撤収している市場の片隅に寄つて場所を確保し、俺たちは話を続ける。

「きちんとお礼を言つてなかつたからね。本当に助かつたよ。ありがとう」

「おいおい……そんなことのために、わざわざ戻ってきたのか」

「……今回は、本当に危ないところだったから。グレイが居なかつたら、どうなつていたことか……」

まあ、原作通りにいかない部分で、色々と危ない橋を渡つたのは事実だ。

律儀なことだが、礼は受け取つておこう。

「……ジエイクは、どうなるのかな？」

「さあな」

ジェイクの手下は本気でドン・スミスの暗殺未遂をやらかした。

ジェイク自身に本気で親殺しをするつもりが無かったとしても、部下の不始末によるものだったとしても、責任の追及は避けられない。

対外的には八百長の話だけで終わりそうだが、ファミリーにとって奴の罪は原作よりも遥かに重いのだ。

あれを赦しては示しが見つからない。

さすがに、ジェイクが生きて戻ってくることは無いと思うが……。

ただ、この時代のマフィアの思考など俺には読めない。

最悪の場合、ジェイクが俺やバナラを逆恨みしてくる可能性もあるが、それに関しては今ここで悩んでも仕方ないことだ。

少なくとも、俺にとつて最も重要なキャラクターであるバナラと、この街の均衡を保つために必要なドン・スミスファミリーが、現時点で守られたことは事実だ。

イベントへの介入としては及第点ではないだろうか。

「あ、そうだ。もう一つ……」

一通り話し終えたところで、バナラは何かを思い出したように話題を変えてきた。

「ちよつと、気になることがあつて。闘技場へ行く途中で見たんだけど……あそこの家

にあるビークル、どこかで見たような……」

バナラが示す先に視線をやると、そこには薄汚いボロ小屋があった。

ドヤ街の中なら目立たなかったかもしれないが、どちらかというところとポートモーターズや倉庫に隣接した位置にあるので、かなり悪目立ちしている。

しかし、それ以上に特徴的なのは、レッグパーツが破損したまま小屋の傍に放置されているビークルだった。

まず、ボディパーツが耐水ボディMだ。

俺の「ジャガーノート」が装備するナツメツグ博士謹製のオリジナルパーツ耐水ボディLと違い、耐水ボディMは原作にも登場する純正品の規格だが、この国では珍しいパーツだ。

スームスームではそれなりに見るかもしれないが、ハッピーガーランドやネフロではほとんど見かけない。

俺の知り合いで使っているのは、ガーランド闘技場のAランクバトルのサフランくらいか。

彼女が搭乗する「ステイル・モラル」はビジュアル面を重視しているので、敢えて珍しいパーツを使っている可能性もあるが……。

さらに、ボロ小屋のビークルは水中機動を可能にするフロートバックパーツを装備し

ており、完全に海上戦に適応させたカスタムとなつている。

原作を知っている人間ならすぐにピンと来るだろう。

この小屋は、バニラが乗っていたジュニパーベリー号の船長キャプテン・シブレットの潜伏場所だ。

怪我を負つたマーシユもここで療養している。

置いてあるビークルはシブレットの愛機「グレートセーリング」だ。

どうやら、バニラのこのイベントに対するアプローチは、彼女のビークルを臆げに覚えていたことからのようだ。

「あの小屋に住んでいる人のビークルなのかな？」

「直接、聞いてみよう」

「え!? グレイ!?!」

バニラは俺の唐突は行動に驚いているようだが、俺は遠慮なく小屋の前まで足を進めた。

このイベントはバニラにとって重要だ。

何せ、シブレットやマーシユとの再会を通して、バニラは記憶を取り戻すのだから。

ここで立ち去る選択肢は無い。

慌てて付いてきたバニラを尻目に、俺はボロ小屋のドアをノックする。

しかし、返答は無かった。

小屋の中からは物音一つ聞こえない。

「どうやら留守のようだな。バナラ、出直すのでしょうか……」

「貴様ら、そこで何をしている？」

原作通りの遭遇だった。

俺たちに声を掛けてきた男言葉の女性。

彼女こそ、ジュニパーベリー号の船長キャプテン・シブレットその人である。

ピンクのシャツと赤茶のロングスカートの上に白いエプロンと、服装はごく普通の町娘のものだが、肩にオウムを乗せているのですぐにわかる。

姿勢には軍人っぽい矜持が滲み出ているが、顔は可愛い系なのがギャップだな。

身長は一般的な女性より僅かに高く見えるが、細身だからそう感じるだけであって、肩幅などはむしろ華奢だ。

「っ！ お前は……バナラ……！ 無事だったのか!？」

シブレットはバナラの方を見て息を呑んだ。

しかし、バナラにはシブレットの記憶が無いようで首をかしげている。

「……失礼ですが、どちら様ですか？」

「あ、……ああ。こんな格好では、わからんのも無理はないか。……私だ。キャプテン・シブレットだ。そんなことより、奥の部屋にマーシユが居る。早く顔を見せてやれ」

「っ！ マーシユ……」

バナラはマーシユと聞いて驚いて俺の方に視線を向けてきた。

セントジョーンズ卿と話してから、まだそんなに時間が経っていない。

いやはや……偶然とは恐ろしいものですな。

「友人との再会だろ。行つてこい」

「……うん」

バナラはあまり驚いていない俺を怪訝そうに見つめているが、俺がドアの方を促すと、頷いて小屋に入ってしまった。

「それで、貴様は何者だ？」

バナラが小屋の中へ去った後、シブレットは俺を鋭く見据えて詰問してきた。

船乗りの作法などわからないので、気楽な感じで挨拶しておく。

「初めまして、キャプテン・シブレット。俺はナツメツグ博士の助手のグレイ。バナラと同じトロット楽団のメンバーだ」

「トロット楽団？ ……そういえば、噂で聞いたな。バナラというトランペット奏者が、

新しくメンバーに加入したと。あいつのことだったのか……」

シブレットも街で色々と情報を集めているのだろう。

……本当に、花を売って船の再建費用を稼いでいるのかな？

まあ、今はそれよりも重要な話がある。

「キャプテン・シブレット。ジュニパーベリー号の件は俺も少し聞いている。話しておきたいこともあるので、とりあえず中に入れていただけけるかな？　ここだと人目が、ね

……」

「いいだろう」

マーシユの居場所をセイポリーやブラッディマンティスの息が掛かった者に知られるわけにはいかない。

俺は軽く小屋の周囲を見回し、シブレットに続いてボロ小屋に足を踏み入れた。

「(今まで、どうしていたんだい……?)」

「(わからない……砂浜で目を覚ましたら、記憶を失っていたんだ)」
隣の部屋から二人の話し声が聞こえる。

聞き覚えの無い方がマーシユの声だ。

扉の建てつけが悪く壁も薄いので、二人の会話はかなり明瞭に聞こえる。

立ち聞きをしてしまったっている状況に若干バツの悪い顔をしながらも、シブレットは俺

に尋ねてきた。

「バナラは、記憶を？」

「ああ。ジュニパーベリー号が沈没した際、バナラは海に投げ出されてウミネコ海岸に漂着した。その時のショックで、彼は記憶を失っているようだな」

「そうか……」

「因みに、砂浜で倒れていたバナラを助けたのが、俺の友人でトロット楽団のボーカリストのコニーだ。俺たちはその縁で知り合った」

異様に事情に詳しい俺をシブレットが疑う前に予防線を張っておく。

セントジョーンズ卿にもバナラとの出会いなどは話しているので、経緯の説明も慣れたものだ。

「ジュニパーベリー号のことを、バナラは覚えていたのか？」

「いや、記憶はかなり曖昧な部分が多い。ジュニパーベリー号の件を知っているのは、マーシユの父親のセントジョーンズ卿から話を聞いたことも理由の一つだろうな」

「なるほど、マーシユの父親か。やはり、息子のことを探しておられるのか」

シブレットは納得がいったように頷いた。

長い航海の間に、マーシユから父親のことが話題に上ったことくらいはあるだろう。

それに、マーシユはジュニパーベリー号で海外留学から帰るといふ手紙をセント

ジョーンズ卿に出している。

恐らく、手紙はジュニパーベリー号に乗ることが決まった後に、別の貨物船で送られたものなので、シブレットも承知しているはずだ。

彼女がセントジョーンズ卿を間接的に知っていてもおかしくはない。

「俺とバナラはセントジョーンズ卿からも依頼を受けている。彼もジュニパーベリー号が難破した情報は掴んでおり、我々もマーシユの捜索に協力することになった、というわけだ」

「ふむ、そうか。心配を掛けさせてしまったようだな……」

「今回のトロット楽団の公演場所がスームスームだったので、俺たちは運よくこの街に居合わせた。明日にはハッピーガーランドに戻るので、セントジョーンズ卿にはその時に報告しようと思っている。ただ、それまでこの街でマーシユや君たちが待機するのに……つと。バナラ、もう終わったのか」

ここで、マーシユと話し終えたバナラが部屋から出てきた。

思ったよりも早かったが、マーシユの消耗が激しく、長話ができないそうだ。

記憶の無いバナラのために、シブレットはジュニパーベリー号の事故当日の様子を語って聞かせた。

彼女が把握している内容も凡そ原作通りだ。

つまり、シブレットたちにとって事故の原因は全く不明というわけである。

クルーたちの状況も原作と変わらない。

マーシユは怪我の治療に専念し、ほかの連中も船の資材などを集めに奔走している。

「私もこうして、柄にも無い花売りをして、その資金を稼いでいる、というわけだ」

……それでどのくらい稼げるのだろうか？

花つていかががわしい意味では……ないよな？

まあ、シブレットなりに金策は色々あるのだろう。色々。

「グレイからも聞いたが、お前は今トロット楽団に居るらしいな。……人の運命など、わ

からんものだな」

シブレットは自嘲するように呟いた。

船とクルーを失ったことは、彼女のメンタルにとつても相当なダメージだろう。

それでもシブレットの表情には僅かな安堵が見える。

バナラが無事だったことを知れたことが、前を向くための大きな活力になったよう
だ。

強いな、この女キャプテンは。

「キャプテン・シブレット。先ほど、原因は不明と言っていたが、状況についてもう少し

詳しくわからないか？」

「……何か、気になることでもあるのか？」

「ああ、バナラから聞いた話だと、座礁したジュニパーベリー号は船体のど真ん中に大穴が空いていたとか？」

「ふむ……ジュニパーベリー号は帆船だが、補助動力として簡易的な内燃機関も搭載していた。燃料の積載量の問題で、メイン動力としては運用できないがな。異国では、常に石炭を用いた蒸気機関で駆動する蒸気船もあると聞くが……。機関室で大規模な爆発が起こったことを鑑みれば、そのような損傷具合でも何らおかしいことはない」

シブレットは座礁したジュニパーベリー号を見ていないので、冷静に分析して、俺に続きを促した。

バナラは俺の言わんとしていることに察しがついたようだ。

セントジョーンズ卿と会ったときにも説明したからな。

「ジュニパーベリー号は何者かの攻撃を受けた可能性がある。炸薬量を考えると、撃ち込まれたのは最低でもビークル搭載サイズの火砲だろうな」

「ほう……」

ジュニパーベリー号の沈没が人為的なものである可能性は、シブレットも多少なりとも考えていたようでそれほど驚かなかった。

しかし、冷静な表情とは裏腹に、シブレットは明らかに殺気を醸し出し始めた。

バナラはこの話を聞くのが二度目なので、真剣な表情で頷いてはいるが、取り乱した様子は無い。

俺はまだブラッディマンティスのことを口に出さなかった。

一瞬だけ迷ったが、今はまだバナラに彼らのことを伝えるのは早い。

彼らを明らかに悪党だと断じておけば、バナラが向こうに付く可能性が減るかとも思ったが、逆に潜入を試みるなどの軽率な真似をされて、かえって危険なことになるかもしれない。

そんなことを考えていると、シブレットは顔を上げて、鋭い目で俺を見据えて質問してきた。

「グレイ、参考までに聞くが……白いトロットビークルに心当たりはあるか？」

そういえば、ゲームでも船長室の航海日誌にこのことが書いてあったな。

事故の直前、海に浮かぶトロットビークルを見たよ。

白いビークルということは、間違いなくエルダーことダンディリオンの「ホワイトレクイエム」だな。

だが、俺が原作から事情を知っているとはいえ、エルダーがジュニパーベリー号の撃沈に係わった証拠など無い。

シブレットや部下たちが下手なことをしないと限らないので、悪いがこのことは話せないな。

「白のビークル？ それだけだと厳しいな。特に珍しくもないカラーリングだ。ビークルバトラードと、有名どころでハッピーガーランドのジーニアスが乗る「クレバー・ブレット」とエルダーの「ホワイトトレクイエム」。警察ビークルもこの国の標準型はホワイトグレーだし、高機動型の塗装も真っ白なものが多い」

「……そうか」

シブレットは納得したのか、再び目を伏せた。

64話 再会 後編

「状況を整理しよう。キャプテン・シブレット以下ジュニパーベリー号の一行は、船を沈められた挙句、何者かに狙われている可能性がある。敵は大型帆船を一撃で沈める能力を持っている。よほど強力な火砲を保有しているにせよ、機関室を狙い撃ちできるほど腕の立つビークル乗りを擁しているにせよ、とにかくそれだけの火力を持っているということだ。ヒントは……キャプテンが見たという白いトロットビークルのみ」

シブレットとバナラは一言も発さず、俺の言葉に耳を傾けている。

「キャプテンも何か強大な敵が存在している可能性を考慮して、こうして潜伏も同然の状態で暮らしていると思うが？」

「うむ、その通りだ。部下の中にも、あの事故を人為的な出来事と疑っている者が居るが、あまり大つびらに騒がないよう言い含めてある」

やはり、大勢の船員の命を預かる立場に居るだけあって、色々と気は回る女性だ。

「その方がいい。今はまだ、目立つ動きは控えるべきだろうな」

「わかっている。しかし、クルーたちのためにも、船の再建は続けなければ」

そこが問題なのだ。

シブレットたちは、このまま永久にスームスームの労働者として暮らすわけにはいかない。

「船の再建とクルーの保護には俺も協力しよう。あんたたちはバナラにとつても家族同然。俺自身が全員を雇うとかはできないが……この街の有力者にコネがあるので、そちらに打診してみよう」

「それは助かるが……有力者へのコネ、か」

シブレットの表情は微妙なものだ。

まあ、この手の申し出は、結構いい加減なものが多かったりするからな。

「ほぼ確実に実現すると思う。その爺さんには貸しがあるからな」

何を隠そう、俺がジュニパーベリー号のクルーたちの保護を頼もうと思っているの

は、あのドン・スミスだ。

命を救った貸しに対して船一隻規模の人間の保護。

この程度の対価を惜しむ奴ではないだろう。

ひよつとしたら、ジュニパーベリー号の再建にも手を貸してくれるかもしれない。

「船員の保護と船の再建資金。キャプテン、他に必要なものは？」

「そうだな……渡航許可証が要る」

出た。

イベントアイテムだ。

この渡航許可証なるものを取ってくるために、プレイヤーはここからウミネコ海岸まで戻ってまたスームスームまで移動するという、億劫な旅をこなすことになる。

ゲームのエリアで言えば、完全に端から端である。

長い道のりだ。

シブレットはバナラが渡航許可証という単語に首をかしげているのを見て説明した。「航海をするのに必要な許可証だ。通行手形と言えばわかりやすいか」

この時代背景で、誰が発行して誰がチェックするのか疑問だが、とりあえずは正規の船としてシブレットたちには必要なのだろう。

……再発行の申請ってできないのかね？

「それは今どこに？」

「船体が無事であれば、私の部屋——船長室にあるはずだ」

とりあえず、俺は真剣に考えた感を出して提案してみた。

「ジュニパーベリー号に戻ってみれば、バナラの記憶にもいい影響があるかもしれないな。ふとしたきっかけで、航海中のことを思い出すかもしれない。バナラ、渡航許可証

の回収は頼めるか？」

「ああ、任せてくれ」

バナラは即答で引き受けた。

実は、先ほどマーシユと会話をする中で、バナラの記憶が戻るイベントがある。

少なくとも、自分の生まれや気質に関しては思い出す。

現実でどこまで記憶が蘇ったかはわからないが……。

まあ、建前はそれなりに取り繕えばいいさ。

「そうだ。表に私の『グレートセーリング』がある。今はレッグパーツが壊れて動けないが……。そこから、耐水ボディMとフロートバックパーツを持っていくといい。それでビークルが水に浮くことができる。よろしく頼んだぞ」

そうだった。

原作では、このイベントで耐水ボディを手に入れるのだ。

スームスームなら店で普通に買えそうだが、シブレットが壊れた自分のビークルからパーツを譲るイベントは健在だった。

現実では、ゲームのようにボディパーツをホイホイ取り換えることはあまり無いのだが……まあいい。

取り外しは俺も手伝ってやろう。

「カモミール・タイプⅡ」への取り付けとエンジンの調整は、ナツメツグ博士に頼むとするか。

「さて……」

他に忘れていないことが無いかシブレットに確認し、俺は懐中時計を確認した。

まだ闘技場は開いているな。

「早速、ドン・スミスのところに行こう。話を通すのは早い方がいい。キャプテンは一緒に来てくれ」

「ああ、わかった。よろしく頼む」

「じゃあ、ちよつとキャプテンと出てくるから、バナラはマーシユを見てくれるか?」

「うん、大丈夫。気を付けて」

マーシユの居る小屋の留守をバナラに任せ、俺はシブレットと連れ立って闘技場へ向かった。

「ドン・スミス。貸しを返してもらいに来たぞ」

「ほう? こんな時間に非常識な……ふむ、なかなかの別嬪だが、引っかけた女を見せびらかしにでも来たのか?」

シブレットの表情が僅かに不快感を示した。

支配人室に来るまでの間、闘技場の酒場スペースを通ったときにも、シブレットは酔漢たちから舐め回すように無遠慮な視線を送られていたのだ。

俺が隣に居たのと、まだ深夜を過ぎておらず男たちに完全に酔いが回っていないなかったので、絡んでくる阿保は奇跡的に現れなかった。

しかし、悲しいかな。

美女を見たら視姦せずにいられないのは男の性なわけで……。

町娘の服を着ているシブレットは、ごく普通の可愛い女の子だ。

シブレットに鼻の下を伸ばしていた客の中には、ジュニパーベリー号の船員だった奴も居たようだ。

花売り娘の正体に気付いた彼らは慌てて表情を引き締めたが、本人にはきちんとはバレていたようで、シブレットは小声で罰則を検討していた。……強く生きろよ、平船員たち。

「いつまでも貸しを引き摺られたら、あんたも気が気じゃないだろ？ それより、紹介しよう。彼女は大型帆船ジュニパーベリー号の船長キャプテン・シブレットだ。」

「そうか。先ほどの無礼を謝罪しよう。すまなかつたね」

「いえ、慣れていきますので……こちらこそ、紛らわしい格好で失礼を」

すんなりと自分の非を認めたドン・スミスに、シブレットは一瞬だけ驚いた表情を見

せるも、すぐに落ち着きを取り戻して船長らしい矜持で対応した。

うん、二人とも仲良くしてください。

折角、俺が引き合わせただから。

「で、キャプテン。この爺さんが、闘技場の支配人兼この街の興行師兼ワイン貿易商の皮を被ったマフィアのボス。その名もドン・スミスだ」

ドン・スミスは不愉快そうに俺を睨んでため息を吐くが、俺は気にせず続けた。

「シブレット船長以下ジュニパーリーのクルーたちは、正体不明の敵に狙われている。そいつらの攻撃で船も沈められた。彼らは敵の追跡を躲しつつ船の再建を目指しているのだが……色々と便宜を図ってやってくれないか？」

「よかろう。わしの庇護下において不逞の輩から守り、船の建設を支援してやろう」

「頼む。あと……渡航許可証はやはり前の物があつた方がいいか？」

「ああ、新しく用意できないことも無いが、時間が掛かるぞ」

「わかった。回収してこよう」

取りに行くのは俺じゃないけど。

その後、ドン・スミスはシブレットと正式に船の建設などに関する契約を交わした。

ジュニパーベリー号Ⅱ世の完成後にスームスームを拠点とした貿易を引き受けるとか何とか言っていたが……シブレット曰く破格の条件だそうだ。

まあ、彼女がそう言うのなら問題ないだろう。

そして、契約書の片方を仕舞ったシブレットは、近くに居る部下を集めると言って、支配人室を出ていった。

シブレットが一度部屋を退出した後、ドン・スミスは俺の方を見ずに質問を投げかけてきた。

「それで？ 敵はどここの馬の骨だ？」

「正体不明だと言つたらろ」

「お前のことだ。もう目星はついているはずだ」

どうやらお見通しだったようだ。

最初の口ぶりからも、俺が敵の正体を知っていると確信しているようだったな。

「証拠は無いぞ」

「くだい。そんなものを必要と思うか。証拠など、大半は公権力による捏造だ」

さすがは裏社会の大物。

齒に衣着せないね。

これなら俺も遠慮なく言える。

「ブラッディマンティスだ。潤沢な資金と豊富な軍事力、それに並の盗賊団とは一線を

画す技術力を持っている。諜報の重要さも認識している厄介な敵だ」

「ほう、奴らか……」

「どうやら、ドン・スミスもブラッディマンティスの存在を知っているようだ。

もしかしたら、既に揉めたことがあるのかもしれないな。」

「水面下で活動してハッピーガーランドに根を張るほど、強かで危険な連中だ。今更だが、大丈夫か？」

「わしを見くびるなよ。小僧」

ドン・スミスは自信満々だ。

相手が相手なので少々心配だが、スームスームでこれ以上の庇護は無い。

引き受けてもらえただけでも上々だ。

ジュニパーベリー号の面々の件が一通り片付いたので、俺は優先順位としては二の次になる話に移った。

「ところで、これは貸し借りがチャラになったうえでの対等な取引の申し出だが……実は、ビークルバトラー志望の子どもが居てな。一人、引き取ってもらえないか？」

「……ちようど、未来のビークルバトラーの育成について考えていたところだが……」

「おお、そうか。そいつは重畳。その子は今も兄弟やシスターと暮らしているが、食べ物

どころか水にも苦勞するような場所に住んでいてな。あんたが呼び寄せてくれるのなら、願ったりかなったりだ」

「……………」

「何か不満か？ その子は貧しい孤児院から巣立てる、あんたは未来のピークルバトラーを発掘できる。お互いに得のある話だろ」

「…………ああ、不満だな。何でも見透かしたような顔をしておつて。気に食わん」

ドン・スミスは鋭くこちらを見据えているが、この爺さんに俺の事情を話す義理は無い。

俺がこれ以上のことを明かすつもりが無いことを悟つたのか、ドン・スミスは車椅子を机の方へ押すようボディガードのキャラウェイに合図した。

「ふん。今、招待状を認めてやる」

これで、廃屋のシスターのところからリックを旅立たせるための『ドン・スミスの手紙』は手に入った。

……………そういえば、クラリスが居ないな。

ドン・スミスの車椅子を押すのは、いつも孫娘のクラリスだったはずだが…………。

「いつものお孫さんが居ないが、どうした？」

「あんなことがあった後だぞ。寝ているに決まっておろう。…………おい、小僧。あの子に

手を出したら……」

「そんな気はさらさら無えから安心してくれ。あんたをおじいちやまとは呼びたくないからな」

ゲームでは、クラリスはいかがわしい店に出入りして夜遊びをしていた。

そこで話しかけると、普段のお高く留まった口調は一変しており、猫を被ってお澄まし顔を続けることでいかにストレスが溜まっていたか吐露する。

さすがに今日はドン・スミスの言う通り引き籠って寝ているのだろうが、一応仄めかしておくか。

「これは独り言だが……孫とはきちんと話すようにしろよ。親としてではなく、家族として、対等な人間として、な」

「……どういう意味だ？」

「さあな。生憎、俺はあんたの半分も生きていないし、子どもどころか結婚もしていない。ただ……子どもってのは、親の前でも取り繕うものなのさ。自然と親が喜んでくれるように振る舞う」

「……………」

ドン・スミスは押し黙ったが、彼なりに思うところがあつたのか、それ以上クラリスについて話すことは無く、そのまま招待状の続きを書き上げた。

俺が封筒に入った手紙を受け取ったところでシブレットが帰ってきたので、俺もそろそろお暇することとなった。

シブレットの後ろには屈強な船員が数人付き従っているが、彼らは先ほどシブレットが集合を掛けた部下たちだ。

ドン・スミスが早速マーシユを収容して治療する準備を整えてくれたらしく、彼らでマーシユを運ぶらしい。

シブレットはドン・スミスともう少し話を詰める必要があるのですが、俺は船員たちと一緒に小屋へ行くことになった。

「では、キャプテン。マーシユの父親にはこちらから伝えておく。ハッピーガーランドのセントジョーンズ卿だ」

念のため、改めてシブレットにマーシユの父親の名前を伝えておいたが、ドン・スミスが尋常でない速度で反応した。

「待て、小僧。セントジョーンズだと?」

「ああ、言っていなかったか。ジュニパーベリー号の船員の一人が、セントジョーンズ卿の息子だ。船が難破して行方不明になった息子を探していたから、近いうちに来るかな」

ドン・スミスは苦虫を噛み潰したような表情だ。

「貿易商として財を成した叩き上げだけあって、貴族は苦手なのだろうか？」

「人脈が出来るいいチャンスじゃないか。息子を保護してセントジョーンズ卿に恩が売れば、あんたの今後の商いにも色々と便宜を図ってくれるかもしれないぞ。持つべきものは特権階級の友人、だろ？」

「ぬう……」

セントジョーンズ卿と会えないとは言ってこないで、さすがに敵対しているわけはないはずだ。

精々、頑張って実りのある話に繋げればいい。

いいことをした。

この二人を引き合わせれば、街の経済も活性化するだろう。

俺は清々しい気分で踵を返した。

「あ、そうだ。もう一つ」

「まだあるのか？」

ドン・スミスは呆れ顔だが、俺にとっては重要な話だ。

「忘れるところだった。ナツメツグ博士とピジョン牧場の連中への土産に、舶来物のワインが欲しくてな。ピークルに積めるだけ積んでいきたいのだが、卸売り担当者に会わ

せてくれないか？」

ワインに関しては、ドン・スミスの計らいでロブスター亭に送ってもらえることになった。

65話 長い一日の終わり

闘技場を後にした俺は、マーシユの居るボロ小屋へ戻り、バナラと合流した。

「グレイ、どうなったの？」

「ああ、無事に済んだ。マーシユとジュニパーベリー号の面々は、ドン・スマスが保護してくれる。船の再建にも協力してくれるそうだ。俺たちは帰るとす「おお！ 本当にバナラじゃねえか！ 生きてたんだな！」るか……」

俺と一緒に来たシブレットの部下の一人が、窮屈そうに小屋の扉を潜るや否や大声で叫んだ。

ミゲールという船員で、原作にも登場したな。

確か、ジュニパーベリー号の副長あたりだったか？

チュートリアルステージでは、ジュニパーベリー号に忍び込んだバナラとマーシユをとつ捕まえ、ストーリーでもシブレットと会った直後にスームスームの闘技場に出場し始める。

「心配したんだぜ！ マーシユはあの通り重症、お前えは海に投げ出されて行方不明に

なっちまうんだからな！　ま、何はともあれ、生きててよかった！」

「うん、心配かけたね。……あの、マーシユがまだ寝てるから……」

「おっと、すまねえ」

さすがのミゲールもマーシユの体調のことには考えが及ぶようだ。

……できればもう少し早く声のトーンを落としてほしかった。

マーシユの名前を誰かに聞かれて、それがセイボリーやブラツディマンティスの耳に入りでもしたら最悪だ。

シブレットの側近にしては無神経に過ぎると思ったが、あの船では船長のシブレットが厳格さと冷徹さを担当しているのだろう。

ミゲールは気さくさや豪快さでクルーの息が詰まらないようにするタイプの副官のようだ。

まあ、ドン・スミスに保護を頼んだ以上、少し情報が漏れた程度では、マーシユも滅多なことにはならないだろう。

「それじゃ、グレイの旦那。俺たちは行くぜ。色々世話になったな」

「ああ」

ミゲールやシブレットの部下たちがマーシユを連れていくのを見送り、俺たちも小屋を出た。

「つと、帰る前に「グレートセーリング」のパーツを回収しないとな」

「あ、そうだったね。僕も手伝うよ」

「ああ、頼む。俺も初めて触るパーツだから、少し手間取るかもしれない」

「あれ、初めて？ でもグレイの「ジャガーノート」も耐水ボディじゃ……」

「俺の耐水ボディLはナツメツグ博士のオリジナルパーツだ。耐水ボディMは純正品にもかかわらず内陸では珍しい品だ。俺も触るのは初めてだよ」

「へえ、そうなんだ」

現実でボディパーツを取り換えるとなると、ゲームのようにはいかない。

ガワだけ被せなおせばいいというわけではないのだ。

エンジン系統や連結系まで壊さずに取り外さなければならぬのだから、なかなか神経を使う作業だ。

ゲームでは、ボディパーツの種類どころかサイズが違ってても機動力自体に差は無かったが、現実では重量の違いとエンジンの性質によって、ビークルの挙動は大きく異なる。できればバナラには新品の耐水ボディMを用意してやりたかったが、俺もこのことまで意識が及ばなかったので仕方ない。

いきなりボディパーツとエンジンの性質が変わってバナラも戸惑うだろうが、そこは

ぼちぼち慣れてもらおうしかないな。

何とか耐水ボディMとフロートを外した俺は、バナラに自分のビークルを取りに行かせ、「カモミール・タイプII」のバックパーツに耐水仕様セットを固定した。

「今日はもう遅いから、ボディの換装は明日以降だな。ハッピーガーランドに戻ってからもいいだろう。シティモーターズなら対応してくれるはずだ」

「そうだね。今日はもうホテルに帰ろう。コニーたちも心配しているだろうし」

俺も自分の「ジャガーノート」を取ってきてコクピットに搭乗しエンジンを起動する。交通量の少なくなった港町に、高出力エンジンの音が響き渡った。

「ようやく帰れるな」

「うん。長い一日だった……」

俺たちは今夜の宿泊先であるホテルブルーマーリンへビークルを走らせた。

富裕層が暮らす中央地区に入ると、薄暗いドヤ街の裏道とは比べ物にならない眩い街頭と窓から漏れる照明が目飛び込んでくる。

高級物件の立ち並ぶ地区のど真ん中まで進むと、ホテルブルーマーリンの看板が見えた。

駐機場にビークルを止め、着替えなど最低限の荷物を下ろしてホテルの正面口へ向かう。

そして、ホテルのロビーに入る直前、俺はバナラに質問した。

「記憶、戻ったのか？」

「あ、うん。自分のことは、ある程度……」

どうやら、航海中のことなど、一部にまだ戻らない記憶があるようだ。

外国や船の上でマーシユと話した内容など、覚えているものの方が少ない事柄もあるらしい。

難儀な話だが、これは地道にやっていくしかないな。

事故当時の状況に関しては、戻らない方が精神衛生上いいかもしれないが……。

「マーシユのことは、皆にはまだ伏せておこう。あの怪我だ。コニーたちと話すのはまた今度でもいい」

「そうだね」

本当は、セイボリーに知られたくないからですけどね。

マーシユの件については、いずれセントジョンズ卿とも話さないとな。

当然、ドン・スミスも交えて、彼の今後の保護に関して協議する必要がある。

……まあ、原作のようにゴールドーンの廃校に隠すのは却下だ。

あの場所は完全にブラッディマンティスに割れており、ストリー終盤でマーシユはコニーと一緒にまとめて攫われてしまう。

可能ならば、俺はコニーの方に集中して、マーシユはブラッディマンティスの件が片付くまでドン・スミスの所で保護してもらいたいのだが……。

それも、セントジョーンズ卿とのお話次第だな。

「あつ、帰ってきたね」

俺たちがホテルブルーマーリンのエントランスを潜ると、出迎えた楽団メンバーを代表してマジヨラムが声を掛けてきた。

本当に待たせてしまったな。

既に、日付が変わっている。

「すまん、遅くなった」

「本当にごめん」

「いや、大丈夫だよ。皆、思ったより目が冴えちやつてるみたいだからね」

「そうそう！ 僕なんてまだライブの興奮が冷めないよ」

俺とバナラの謝罪を軽く流したマジヨラムは、バジル以外のメンバーもこの場に揃っているのを確認し、俺とバナラに向かった言葉を続けた。

「僕らは明日の朝ハッピーガーランドに戻ろうと思うんだ。次の公演はまだずっと先だし……なんだったら、しばらく自由にしていいよ。グレイはナツメグ博士のところ

に戻るのかな？」

「そうだな。ハッピーガーランドで少し野暮用もあるが、その後はピジョン牧場に向かう」

「また砂漠か。大変だねえ」

呑気に他人事感を出すバジルの声に続いて、バニラが口を開いた。

「じゃあ、僕は用事が出来たから別行動するよ」

「そうか、わかったよ。僕らはハッピーガーランドのロブスター亭に居るからね」

バニラの用事とは、ウミネコ海岸でジュニパーベリー号を調べることだ。

原作なら、ここでコニーかセイボリーを遠出に誘うことができる。

コンプリート勢であれば、ここでしか行動を共にできないセイボリーを選ぶだろう。

だが、現実のバニラにそれをやらせるわけにはいかない。

道中、セイボリーに妙なことを吹き込まれて、バニラがブラツディマンティス側に付

いたら元も子もない。

おとなしくコニーと……と思っていたら、バニラは真っ先に俺に声を掛けてきた。

「グレイもネフロまでは同じ方向だよ。それに、僕もピートの手紙を届けにピジョン牧場には顔を出すし……一緒に行く？」

「どうやらバニラ君はグレイルートを選んだようだ……って、馬鹿か!？」

お前さんには助手席に乗るべきヒロインが居るだろう。

「いや、俺はハッピーガーランドでちよいとやることがあるからな。すぐに帰れるわけじゃない」

「そうなんだ。何か手伝うことはある？」

「いや、ほとんど俺の私用で……ああ、セントジョーンズ卿に会うときは一緒に来てくれ。マーシユの件を伝えに行くからな」

「あ、そうだったね。わかったよ」

「コニーを誘ったらどうだ？ 時間はあることだし、ついでに二人で遠出をするのもいいだろう。ちょうどミーム村の駅も完成している頃だろうから、見物に行ってきたらどうだ？」

「うん、そうだね。そうするよ。コニー……」

バナラはコニーのところに浮かれた足取りで近づいて行った。

しばらく遠目に二人の様子を見ていたが、どうやら原作通りコニーはバナラの誘いを快諾したようだ。

安心した俺は、そのまま階段を上がって寝室に向かおうとするが……。

「(あ、ジュウタン工場にも寄ってお姉さんの図面を渡さないと……)」

「(……お姉さん？ 誰なの?)」

「(ひっ……こ、コニー? どう、したの?)」

不穏な空気に振り返ってみると、刺すような雰囲気を感じ目からハイライトを無くしたコニーと、そんな彼女に気圧されて脂汗を流すバナラが目に入った。

後ろに聞こえていた声で状況は把握している

バナラの言う図面とは、イベントアイテム『自動機械機の図面』だ。

こいつをハヤブサジウタン工場に持っていくと、今まで職人の手で操作されていたマシンが機械化を遂げる。

その後は解雇された職人たちが各地に登場したりと……まさしくザ・産業革命のサブイベントである。

そういえば、バナラは闘技場に入る前にポートモーターズに寄っていたな。

原作でも、徒歩でポートモーターズの奥に入り、倉庫の隅に隠れている女性と話すと、この図面を貰うことができるので、そこら辺の状況はゲームと一緒か。

しかし、この件が原因で修羅場とは……。

やはり、思いがけないところにトラブルは潜んでいるものだな。

「(ねえ、バナラ? お姉さんって……誰?)」

「(っ!) い、いやその……)」

くっ……丸腰の非力な少女とは思えない迫力だ。

チコリの件から内向的な印象のあるコニーだが、バナラが絡むと相当アグレッシブになるな。

これは……俺が外堀を埋めてきたことが原因だったりするのかな？

さて、この修羅場においては他のメンバーも頼りにならない。

マジヨラムはただの痴話喧嘩に苦笑いしながら我関せずの態度を貫き、バジルはコニーの豹変ぶりに口を開けて固まっている。

セイボリーは……完全に気付かないフリをしてやがるな。

このままではコニーのヤンデレ化が待ったなしなので、俺は助け船を出すことにした。

「そうだ！ 忘れるところだった。バナラ、例の自動機織機の図面、俺にも見せてくれるか？」

「あ、えっ？ ……うん。これだよ」

コニーはかつて無いほど剣？な雰囲気で見ているが、ここで逃げ出すわけにはいかない。

俺はそれっぽい雰囲気装ってバナラの差し出した図面に目を落とし……なるほど、確かにわかりやすいな。

素人が見ても蒸気機関と機械機的设计図であることがわかる。

仕掛け自体も大して難しくない。

技術者に見せればすぐに組んでくれるだろう。

バナラが何の図面かすぐに理解したのも納得だ。

「……別に変なものじゃないな。異国で普及している全自動の機械機だ。構造はかなり単純だから、まとまった数の配備を前提としている品だろう。まあ、この国の中小企業に売り込めば、それなりの額で買い取ってもらえるんじゃないか」

「う、うん……」

当然ながら、図面の内容を説明したところでコニーの殺気は収まらない。

話を逸らすこともままならず、むしろ苛立ちが募っているようだ。

さっさと話を進めよう。

「確か、バナラにこいつを渡したのは、倉庫に潜伏していた怪しい女だったな？」

「そ、そうそう！ ビークルの整備のために寄った、ポートモーターズで……。この図面をあげるから、自分がここに居るのを内緒にしてくれって……」

事情を知り、コニーの殺気はようやく密度が薄くなってきた。

もう一押しだな。

「恐らく、その女は密入国者だろうな。祖国では特に戦略的な価値が無くありふれた物、

それでいて外国なら価値が付きそうな物を持ち込んだのだろう」

「そつか……。そんな大変な状況の人なら、申し訳ないことをしたかな。弱みに付け込んで巻き上げるみたいに……」

「別にいいんじゃないか？　恐らく、そういった手合いは価値があつて且つ軽い物を大量に持ち込んでいる。くれると言うなら貰つておけばいいさ。使い道もバナラの思う通りにすればいい。その女と二度と会うことも無いだろうし」

二度と会うことは無い。

この部分にピクリと反応したコニーは、見る見る機嫌が良くなつた。

先ほどまでの物騒な空気は霧散し、艶のある笑顔をバナラに向けている。

「なあんだ。そういうことなら、早く言ってくればよかつたのに」

「う、うん。ごめん？」

弁解の暇を与えなかつたのは、どこのどいつだか……。

何とか、修羅場ルートからのヤンデレ殺害エンドを回避した俺は、さつさと部屋に引き上げることにした。

今日はもう休ませてくれ、本当に……。

66話 依頼完了報告

スームスームでの公演が終わり、土産物を買って漁り、ハッピーガーランドに戻ってきた日の夜。

俺は休憩もそこそこにバナラをロブスター亭から連れ出した。

行き先は当然セントジョーンズ病院だ。

バナラは荷物の整理を終えたばかりで面食らっていたが、マーシユの件はさつさとセントジョーンズ卿に伝えた方がいい。

原作では、ここでマーシユの件に関してできることは、病院の受付看護師にマーシユを発見した旨を院長に伝えてくれるよう言付けるだけだ。

言付けを頼むか頼まないかで、後日セントジョーンズ卿と顔を合わせたときのセリフが多少変化したりするが、ストーリーには全く影響が無い。

原作で次に彼と会えるのは、どちらにせよピークルバトルトーナメントの試合の合間なのだ。

正直なところ、この時期に報告したとしても、現実なら情報漏洩のリスクを高めるだ

けの行為だ。

だが、今回はハツピーガーランドをできるだけ留守にしないようセントジョーンズ卿に伝えていたので、この段階でも直接会って話すことができるかもしれない。

不在なら、看護師には何も伝えず院長とのアポイントだけ取る予定だ。

その場合も、ビークルバトルトーナメント前にセントジョーンズ卿が帰ってくれば、早めに面会できる。

多少、セントジョーンズ卿への連絡が遅れたところで、マーシユのことはドン・スミスに任せているので安全上の問題は無いが、あくまでも依頼を受けた者としての姿勢の話だ。

前回と同様、バニラと連れ立って病院の入り口を潜り、一階の受付に近づく。

「あ、グレイ様にバニラ様」

偶然にも、カウンターに居た看護師は前に来たときと同じ人物だった。

俺たちの身分は滞りなく把握された。

バニラが重要な客であることは、既にセントジョーンズ卿から通達されているのだから。

今回はバニラが無視されることは無い。

「セントジョーンズ卿にお会いしたい。今、大丈夫ですか？」

「もちろんです。三階の院長室までお願いいたします」

向こうは俺たちがスームスームから帰るのを心待ちにしていたようだ。

ハッピーガーランド駅で出待ちしていなかっただけでも、セントジョーンズ卿にしてみれば控えている方が。

早めに来て正解だったな。

「ほ、本当かね?! この短時間で息子の居場所がわかったとは……」

「ええ、運が良かったのもありますがバニラのお手柄ですよ。彼がジュニパーベリー号の船長のピークルを覚えてなかったら、確実に見逃していたでしょうね」

院長室に通された俺たちがスームスームでマーシュを発見したことを伝えると、セントジョーンズ卿は俺たちに椅子を進めるのも忘れて鼻息荒く顔を近づけてくる。

今回ばかりは、彼も態度を取り繕う余裕は無いようだ。

まあ、ずっと行方不明になっていた息子の消息をようやく掴めたのだから仕方ないだろう。

俺に持ち上げられたバニラは少し居心地が悪そうだが、今回の件は間違いなく彼の功績だ。

無論、バニラがシブレットのピークルをスルーしてハッピーガーランドに戻りそう

だったら、どうにか理由をつけて一緒にボロ小屋を訪ねるつもりではあったが、その手間も省くことができた。

俺がシブレットのピークルやジュニパーベリー号の面々の所在を明確に知っているのは辻褄が合わない。

この件に関しては、バナラの記憶が手掛かりになったということを押し通すのだ。

「そ、それで！ マーシユはどこに!？」

「今はドン・スミスのもとで静養しています。ジュニパーベリー号のクルーたちは、彼の庇護を受けることになりましたので」

「ドン・スミスの?」

俺は頭に疑問符を浮かべるセントジョーンズ卿に、スームスームでの出来事を語って聞かせた。

もちろん、部下のチンピラが暗殺を謀ったことなどはボカした。

セントジョーンズ卿もドン・スミスがスームスームを裏から支配するマフィアのボスだということは知っているが、さすがに俺が内情を勝手に喋るのは憚られる。

外部の人間に謀反や暗殺者のことを知られるのは、裏社会の連中にとってはこの上ない屈辱かもしれないからな。

「平たく言えば、八百長事件やら何やら色々ゴタゴタがありました、俺がちよつとド

ン・スマイスに協力することになったんですよ。その縁で、ジュニパーベリー号の連中に便宜を図ってくれるよう頼みまして」

「ふむ、なるほど……君にも色々と手間を掛けさせてしまったみたいだね。ドン・スマイスがそこまで肩入れしてくるとは……」

セントジョーンズ卿はそれ以上の詮索はしてこなかったが、俺とドン・スマイスがそれなりに重大な事件で関わったことは勘付いたようだ。

「何はともあれ、本当に助かったよ。バナラ君、グレイ君。君たちにはいくら感謝しても足りない」

セントジョーンズ卿はスケジュール帳のようなものを軽く一瞥すると、すぐさま踵を返した。

間近の予定は全てキャンセルか。

「それでは、私は早速スームスームに……」

「ちよつと、お待ちください」

俺は慌ててセントジョーンズ卿を止めた。

「ん？ 何かね？ ああ、そういうえば報酬がまだだった……」

「いや、それは後でも構いません。それよりも、ご子息の保護に関してです」

セントジョーンズ卿は俺の雰囲気から深刻な内容だと見て取ったのか、表情を引き締めて俺に向き直る。

「あなたのこととは既にドン・ミスにもジュニパーベリー号の船長キャプテン・シブレットにも伝えてあります。ご子息に会いに行かれるのは問題ありません。しかし、ご子息をどこかに移動させようと考えているのであれば、少し待っていただきたい」

「……む」

セントジョーンズ卿は一瞬だけ呆けた顔をしたが、すぐに話を聞く態勢に切り替えて俺の顔を見てきた。

先ほどまでは、一刻も早くマーシユに会いに行くことしか考えていなかったようだが、言われてみればマーシユを避難させることに思い至つたらしい。

このままセントジョーンズ卿がスームスームに行き、マーシユと対面して少し落ち着けば、彼は間違いなくマーシユをゴールドーンに隠すことを思いつくはずだ。

それは避けなければ。

「参考までにお聞きしますが、どこか当てが？」

俺はゲームの知識があるので知っているが、そこまで見抜いているのは不自然なので質問してみる。

セントジョーンズ卿はしばしの逡巡の後に顔を上げて答えた。

「……すぐに思いつくのはゴールドーンだね。昔、私が建てさせた学校があるのだ。今は廃校になっていて誰も使っていない。マーシユを匿うのにうってつけだと思うが？」
やはり、俺の記憶通りだ。

原作でこの話を聞けるのはもう少し後になる。

渡航許可証をシブレットのところへ持って行ったときに、ちょうどセントジョーンズ卿もボロ小屋にやって来て、マーシユと再会した直後に出る案だ。

結論から言うと、最終的にゴールドーン村がマーシユの潜伏先であることはブラッディマンティスに割れてしまい、ストーリー終盤でマーシユはコニーと一緒に攫われる。

敵の搜索範囲内であることがわかってい場所からマーシユを行かせるのは得策ではないだろう。

「何か、問題がありそうかね？」

咄嗟のことだったが、俺はそれらしい言い訳を考えついた。

「セントジョーンズ卿。ご子息を狙う勢力に関して、俺も少し調べてみました。まだ推測の段階ですが、ドン・スミスから得た情報などと照らし合わせると……疑わしい組織が一つ」

「何と！ もうそこまで……！」

ドン・スミスは驚愕に目を見張った。

バナラも同様に凄まじい勢いで俺の方へ振り向いた。

まあ、この短期間で手掛かりが無い状態から突き止めたわけではないけどな。

「そちらでは、まだ何も？」

「マーシユを狙っている輩の存在が居るらしきことは私も確認した。ジュニパーベリー号を沈めたのも、その連中の仕業である可能性が高いこともわかった。だが、それが何者かは判明していない」

続きを促すセントジョーンズ卿に俺は結論を告げた。

「俺が睨んでいるのは、ブラッディマンティスです」

「ブラッディ、マンティス？ 名前はどこかで聞いたことがあるが……」

「まあ、一般人にはあまり知られていませんか。ハッピーガーランド近郊の盗賊団ですが、代紋を掲げて略奪に勤しんでいる連中とは少し毛色が違いますからね。強力なビークルを保有していますが、最近では専ら地下に潜ってハッピーガーランド全域に情報網を張ることに注力しているようです。盗賊というより、裏組織や秘密結社の類ですね」

「むう……そんなことに……」

唸るセントジョーンズ卿を尻目に、俺は本題を告げた。

「ハッピーガーランドの郊外も、恐らく北と東方面は奴らの勢力下です。ブラッディマンティスの機動ビークル『デリンジャー』をイワツバメの滝方面で見たことがありますし、ホトトギスの森の奥にも、森林の盗賊団のものとは違うタイプのビークルが展開しています。ゴールドーンにも奴らの目はあるでしょう」

原作では、何故かデザートホーネット団がゴールドーンにマーシユが居ることを突き止めていた。

ブラッディマンティスルートだと、プレイヤーはデザートホーネット団にアジトに赴き、頭領のノーラからマーシユの情報を受け取るという任務をこなすことになる。

砂漠の外で活動しない彼らが何故ハッピーガーランドの北を調べていたのか謎だが、何はともあれ、ゴールドーンは役に立たない。

セントジョーンズ卿の計画は破棄してもらわなければ。

「ゴールドーン村は、はつきり言つて寂れています。最近では旅好きな連中が温泉を目当てに訪れることもあるようですが、モツカラン鉱山の職員以外にほとんど住民も居ません。この状況はかなり都合が悪い。あれだけ規模が小さい村だと、少年一人を匿ってもらう動きだけでも相当な悪目立ちをします。逆に、ご子息の存在をゴールドーン村の連中にも気取られないよう潜伏させるのであれば、それこそ護衛すら配置できない」

「なるほど。それで、マーシユをゴールドーンへ逃がすのは得策ではないというわけか」

セントジョーンズ卿の言葉に俺は頷いた。

「ええ、スームスームに居る方が遥かに安全でしょう。あそこはドン・スミスファミリーの影響力が強い地域です。ブラッディマンティスも迂闊には手が出せないはず。しばらくは、彼のもとでジュニパーベリー号のクルーと一緒に保護してもらった方がいい」

セントジョーンズ卿はしばしの逡巡の後、顔を上げて答えた。

「グレイ君の言うことはもつともだ。今すぐにマーシユをゴールドーンへ送るのはやめておこう。しかし……いずれはそのことも考えなければなるまい。ドン・スミスやジュニパーベリー号の方々には迷惑を掛け続けるわけにもいかないからな」

確かに、このままではいつまでもマーシユの保護をドン・スミスに押し付けることになつてしまう。

それはお互いによろしくない話だろう。

セントジョーンズ卿の足を引っ張りたい連中は、彼を自分の息子すら守れない腰抜けと煽り始める。

ドン・スミスにしても、あまりマーシユを囲い込みすぎると、人質のように扱つていると見られかねない。

こういう憶測を並べ立てる連中は、数が少なくても声が大きい。

そうなつたら、二人を引き合わせるために動いた俺の計らいが水の泡だ。

ドン・スミスがマーシユを預かる期限は決めておいた方がいい。

とはいえ、ブラッディマンティスが壊滅するまでというのも無理な話か。

俺はバンピートロットの物語の本編が終了するまでに、近いうちにブラッディマンティスが崩壊することを知っているが、さすがにこれを根拠にはできない。

「ええ、それは俺も理解しています。ですから、例えば……ジュニパーリー号Ⅱ世の完成まで、ご子息はクルーたちと行動を共にする、というのはいかがでしょうか？ 今のご子息はただ船を失った船員の一人です。同僚と同じくドン・スミスの庇護下に居るのはおかしくないでしょう。建前としては」

「……ふむ、それなら問題ないだろう」

セントジョーンズ卿は一瞬だけ顎に手をやって何かを考えたが、俺の案を承諾してくれた。

これなら、しばらくの間マーシユはドン・スミスのもとに留まるので安全だ。

ジュニパーリー号の再建にドン・スミスの協力を取り付けたことで、船の完成が早まっている可能性はあるけどな。

まあ、その時はその時だ。

「ビークルバトルトーナメントの後になるかもしれませんが、俺たちも近いうちにジュニパーベリー号の連中のところへ顔を出します。ご子息のことに關しては、またその時に話しましょう」

「うむ、わかった。よろしく頼む。それでは、私は明日にでもスームスームへ向かわせてもらうよ」

セントジョーンズ卿はやはりすぐにスームスームへ向かうようだ。

感動の再会に立ち会えないのは、バニラにとつては残念なことかもしれないが、こちらの都合で延期しろなどとは言えないので仕方ない。

原作と違うのは、ドン・スミスがジュニパーベリー号のクルーたちと深く関わったことと、セントジョーンズ卿とマーシユの再会の予定を早めたことか……。

これだけなら特に影響など無さそうだが、この世界のトラブルの種は予想だにしないところに転がっているから油断できない。

まあ、何にせよ、渡航許可証を入手して再びスームスームに戻れば確認できる話だ。今は、目の前の雑用を片付けていこう。

「ああ、ところで……ポールの件はどうになりました?」

「おお、そうだったな。君から聞いていた通り、ポール教授に贋作の作製疑惑を掛けようとした連中が居た。ちやうど昨日のことだが、奴らに協力した大学関係者もろとも警察

に拘束された。もう少し詳しく聞きたいのであれば、秘書を呼ぶが？」
「いえ、それには及びません。この件に関しては、セントジョーンズ卿の手腕を信用して
いますから」

必要なことは聞いたので、俺はパニラを促して院長室を退出した。

67話 エレキギター開発の進捗

セントジョーンズ卿と面会した数日後。

俺が身支度を整えてロブスター亭を出ると、ちょうどバナラとコニーも外出するところだった。

バナラの「カモミール・タイプⅡ」には大荷物が積まれており、これから二人がガラガラ砂漠を渡る予定なのはすぐにわかった。

夫婦水入らずの旅への出発を、俺は笑顔で見送った。

軽い調子で俺に手を挙げて挨拶するバナラとは対照的に、コニーは何やらバツが悪そうな表情だったな。

セイボリー曰く、昨日のコニーはウキウキとした様子で砂漠の装束をトランクに詰めていたらしいが、まさかヘタレなバナラに業を煮やしたコニーが逆夜這いを……？

あり得るな。

再び砂漠を超えてネフロ方面へ向かうのならば、バナラたちはオアシスを通ることになる。

灼熱の太陽が沈み、冷え切った砂漠を進んでオアシスに辿り着いた二人は、そのまま情熱的なアラビアンナイトを……。

まあ、あの二人がくっつくのなら、俺としては大歓迎だ。

バナラが歪まなければ、今後のブラッディマンティスとの戦いは大分楽になる。

戦力的な面でも、楽団メンバーたちのメンタルの面でもな。

スームスームのときのような修羅場は……無いよな？

俺は不吉な考えを振り払うようにして、今日の用事を片付けにハッピーガーランド南地区へ向かった。

「よう、ジョージ。調子はどうだい？」

「お、グレイさんか。ぼちぼちだな」

ハッピーガーランドのビークル整備場であるシテイモーターズの二階。

階段を上ると気だるげな雰囲気の間仕立工が寛いでいるのが目に入った。

原作をプレイした人間なら、この場所で思い至るはずだ。

このジョージという男こそ、音楽会に革命を起こす人物であり、フェンネルの夢を叶えてくれる発明家だ。

フェンネルが求めるパワフルな音楽を実現するためのエレキギターは、このジョージ

が開発してくれるのだ。

「進捗は？」

「ああ、設計は一通り終わったよ。電源と駆動系以外は、もう試作品のパーツ作製を始めている」

俺はかねてからジョージにエレキギターの製作を依頼している。

原作では、フェンネルが電車を見て「あんなデカいものを動かせるのなら、どうにかしてギターに使えばスゲえことに……」くらいの着想で話が始まっていた。

バナラもその話を真に受けて、電気ギターをパワーアップという発想だけで、楽器店からジョージに行き着いて話を持ち掛けることになる。

さすがにそんな思いつきでまともなエレキが出来るわけがないと思い、このサブイベントは俺が担当しているのだ。

やはりというか、一瞬でエレキの設計から製作が終わるわけもなく、かれこれ研究には一年ほどの月日を費やしている。

そういえば、原作ではエレキの開発を終えるとジョージに作ってもらえるレッグパーツ『人脚ノーマルM強化型』の方が主語だった気もするな。

このパーツは整備場でいつでも開発できる『鳥脚ノーマルM強化型』の上位互換だ。どちらも通常使用のレッグパーツと比べてスラスタードアツシユの速度が格段に上が

る優れたものだが、『人脚ノーマルM強化型』は『鳥脚ノーマルM強化型』と変わらないスピードを持ちながら重量が上だ。

ボディパーツとレッグパーツの総重量で積載量が変わるゲームのシステム上、『人脚ノーマルM強化型』の方がより重量のある武器やブレストパーツやバックパーツを積めるのだ。

まあ、今の俺にとっては完全にエレキが主語だけだな。

そもそも俺の〔ジャガーノート〕のレッグパーツは既に『人脚ノーマルM強化型』なので、わざわざジョージに作ってもらう必要は無い。

俺はただフェンネルを驚かせてやろうと、彼に内緒でエレキの開発を進めてきたのだ。

あわよくば、電子楽器をより一層広く普及させようと思っただけ……。

まあ、俺は研究費を出すだけで、今のところジョージに任せきりだが。

因みに、ジョージの給料を含む研究費は、高級リンスの売り上げの一部で難なく賄えるものだった。

富裕層向けの消耗品は本当にボロい商売だな。

「それで、だ。 그레이さんが言ってた、音を電気信号に変えて半導体スピーカーで出すつ

てのは、理論上では可能だ。そつちも合間にいくらか試作してみた。試したんだが……」

当然ながら、最初に俺が提案したのは、原作で見たような小型エンジンと小型発電機を一体化させたギターではなく、現代のエレキのシステムだ。

ギターの弦にピックアップを付け、シールドで繋いだアンプから音を出すあれだ。

しかし、そちらの進捗は思ったより芳しくない。

「問題点は？」

「全部だな。楽器としての体を成していない。ギターから拾った音を音響機器から出す装置を試作してみたんだが、まるでダメだ。音階すらまともに対応しない。ギターの音をパワーアップさせる以前の問題だ」

どうやら、スピーカー自体がシールドの時点でクオリティが低すぎるらしい。

まともに音が出るアンプすら無いようでは、現代のエレキギターへの道のりは遠いな。

「そうか……やはり無理か」

「ああ、ナツメツグ博士でもなけりゃ、こいつは手に負えないね」

結局、ジョージが設計した原作通りのメカニズムのギターの方が早く完成しそうだ。

何故か、彼はゲームの中と同じく、ギターにエンジンと発電機を搭載して、生音自体

を直接的に増幅するエレキを発想したのだ。

バンピートロットの世界のエレクトリックバンドは、この方向で発展することが確定しているのかもしれないな。

俺が提案したピックアップ方式のエレキの研究も、今後の電子楽器の発展のことを思えば、無駄にはならないだろう。

「わかった。なら、まずはお前さんの設計したタイプで構わないから、そのまま研究を続けてくれ」

「……ああ！ 助かるよー」

俺がそう言うと、ジョージは一気に表情を明るくして笑った。

確かに、この状況ではいつ俺が愛想を尽かして支援を打ち切ったものではないのだから、ジョージとしても気が気でないだろう。

こちらにはナツメツグ博士が居り、いつジョージをハブにしても困らないのだから猶更だ。

まあ、今のところはジョージを切るつもりは無いけどな。

最終的には、俺が思い描いていたエレキも開発してほしいのだ。

ジョージには長く働いてもらわないと困る。

エレキの開発はジョージの設計したパターンで行うこととなったが、そうなることや
り問題はパーツの件だ。

音を増幅する装置をギターに直接取り付ける以上、やはりスクラップの再利用やこの
国で流通している品だけでは対応できない。

「車やビークル用のエンジンと発電機も試したが……まあ、結果はお察しだ」

確かに、ギターの弦に直接繋ぐ必要がある機器のエンジンが、車両用ではデカくて重
すぎるのは納得だ。

発電機はビークルや自動車のライト用のものでは、大きすぎるうえに出力が足りな
い。

逆にコンパクトにまとめることを諦めて、都市の電気経路から高出力の線を引こうに
も、変電系の技術が未発達なのでそれも厳しい。

路面電車と街灯には対応しているが、100V交流のコンセントなんて気の利いたも
のは、この世界には無いのだ。

「そんなジョージ君に朗報だ。こいつを見てくれ」

「つー、おい、これは……」

俺が取り出したのは小型発電機だ。

実は、スームスームから帰ってきた直後、俺は一度ヒバリ田園地帯に向かい、この小

型発電機を調達してきたのだ。

公演のためスームスームへ行く際、バナラはビークルに乗ってヒバリ田園地帯を通った。

バナラは農家には寄ったのでメインストーリーで必要なピートの手紙は手に入れていたが、確認したところ小型発電機は持っていなかったのだ。

小型発電機は田園地帯沿いの川に居る漁師から貰えるアイテムだ。

元々は小型のボートの動力源として調達した品らしいが、川に投棄されていたスクラップを片付けてやると、その報酬としてプレイヤーにこの小型ジェネレーターをくれる。

バナラはこのイベントを華麗にスルーしてやがった。

バナラがウミネコ海岸へ向かう前にこのことを聞き出せたのは不幸中の幸いだが、結局俺は慌ててスームスーム方面へビークルで向かい、この面倒なお使いをこなす羽目になったのだ。

とんだ二度手間だったな。

まあ、仕方ないか。

以前にも、田園地帯の川沿いまでは行ってみたことがあるが、その時は漁師に出会えなかったからな。

何はともあれ、俺はこうしてエレキの開発に必要なパーツを一つ手に入れたのだ。

俺は喜色満面で小型発電機を観察するジョージに声を掛ける。

「こいつも量産できるか？」

「え？ この発電機をかい？」

ジョージはより一層真剣な表情で小型発電機の内部構造を調べ始めた。

「……仕掛け自体はそう複雑な物じゃない。この国で普及している技術じゃないが、何度か試作すれば再現は可能だろう。部品も細かいパーツが多いが、その工場に図面を持ち込んで依頼すれば、ほとんど作ってもらえる範囲だな。素材も特に珍しい合金や魔法金属もなし、と。コストも問題ない」

さすがにジョージは現役の整備工だ。

俺もナツメック博士に色々と教わってはいるが、工場や製造業の事情などは知らない。

特殊な合金や魔法金属に関しても、ナツメック博士の工房では俺がダンジョンから採掘してきたものがあるので確保に困ったことが無く、継続的に仕入れた場合のコストにもそれほど詳しくない。

その辺りをジョージは正確にわかっているのだ。

それに……。

「ただ……今のところ参考がこの一点ものだけだからな。量産型を設計するのに、ちょっとばかり時間が必要だ」

何よりジョージは正直者だ。

小心者や見栄っ張りなら「すぐに作ります」とでも言ってしまうところだが、ジョージははつきりと時間が掛かると言った。

発電機の件も、俺がジョージに愛想を尽かしてナツメツグ博士のところに持ち帰ってしまう可能性を孕んでいるにもかかわらずだ。

やはり人間性は一緒に仕事をするうえで重要なものだな。

僅かなコストや時間をケチる案件でなければ、仕事は誠実な人間に頼みたいものだ。「時間が掛かっても構わん。金も出してやる」

「マジかよ!？」

「ああ。その代わり、最高のエレキギターを作ってくれよ。最初の製品が完成しても、お前さんにはエレキの改良と新型の開発を続けてもらうことになるだろう。言っておくが、ミュージシャンの楽器への要求は半端な物じゃないぞ。やれるか?」

「やる! やってみせる! グレイさん、俺にやらせてくれ」

「わかった、よろしく頼むぞ」

今回は、一年の研究期間と潤沢な資金をジョージに提供している。

きっと、完成するエレキは素晴らしいものになるはずだ。

シブレットから小型エンジンを貰ったら、そちらも早めに渡さないとな。

68話 砂塵のキャンバス 前編

数日間ジョージのエレキ開発に付き合い、電源系統の設計が一通り終わった次の日。今日の俺はハッピーガーランドの東門を出てイワツバメの滝方面へ来ていた。

目的地はイワツバメの滝の中流辺り、モズ川染草農家だ。

この農家はポールの実家である。

贋作疑惑にまつわる騒動で、ポールは一時的に実家に帰省しているのだ。

セントジョーンズ卿に聞いた通り、ポールを陥れようとした連中は、俺がスムーズムへ行っている間に軒並み逮捕されている。

予想通り、ガーランド大学の美術科の教授に就任したポールを快く思わない連中は、ポールを贋作画家に仕立て上げようとした。

原作では、ポールはそのまま教授を解任され、疑いが晴れるのは死んだ後というなかなか報われない結末だったが、今回は大学の不正に気を配るようセントジョーンズ卿に頼んでおいたので助かった。

騒動がポールを巻き込んで大きくなる前に、贋作事件の意図を引いていた連中は一網打尽にされたのだ。

ナツメツグ博士の関係者として後ろ盾がある俺がポールを推薦していたということも、彼が即解任という事態にならなかつたことに一役買っているかもしれない。

セントジョーンズ卿の部下は新聞社にも手を回していたらしく、妙な憶測が飛び交う前に、ポールは完全な被害者として街の住民に認識された。

因みに、記事は写真付きだ。

アーバン新聞社は、ポールのオリジナルの精巧な絵と、過去の有名画家の贋作としてポールが作成したことにされた絵を比べ、犯人たちの稚拙さを面白おかしく書き立てた。

この一件は、ある意味でポールの画家としての才覚をより一層ハッピーガーランドの住民に周知させることに役立つと言える。

事件後のガーランド大学のポールの授業は、教室に収まりきらないほどの学生が受講希望を出したらしい。

しかし、そんなポールは先日ガーランド大学の仕事を休み、忽然と姿を消した。

知名度が一気に上がり、一躍時の人となった直後の出来事だけに、大学側はそれなりの衝撃を受けたようだが、このポールの休職自体は正式に休暇を申請してのことだったうえに行き先も告げていたので、学生たちはそれほど動揺していない。

元より、ガーランド大学の美術科が、前任の教授が蒸発するような、ぶっ飛んだ場所

だという理由もあるかもしれないが。

賈作騒動で色々消耗したので少し休むだけ、リフレッシュしたらすぐ大学に戻ってくるだろう、といった程度の認識だ。

ポールのように優秀で学生から人気のある教授を解雇することは、大学側も考えていない。

学生たちの言う通り、俺も最初は休暇が終われば帰って来るだろうと思っていたので、敢えてポールを探しに行くことはしなかった。

今日の俺もピジョン牧場へ帰る前にちよつと顔を見せるつもりで、気楽にポールを訪ねる感覚で染草農家へ向かっていただけだ。

既に彼を陥れようとする脅威は排除されたのだ。

今後のポールは、誰にも邪魔されること無く、素晴らしい芸術品を生み出し続けるだろう、と。

この時は、俺もそう信じて疑わなかった。

染草農家を訪ねると、家の中から少しやつれた中年女性が俺を出迎えた。

俺が名乗ると少し驚いたような表情を見せたが、彼女はすぐに俺を家の中へ通した。

この人がポールの母親だな。

しばらくするとポールの父親と思わしき男もやって来たが、ポールは留守のようだが、俺にお茶を出したポールの母親は静かに口を開いた。

「あなたのことは息子からよく聞いています」

「ほう？ 彼は何と？」

「返しきれない恩のある方、自分の才能を見出してくれた恩人だと」

ポールは実家に帰ってから、家族に俺のことを子細に語って聞かせたようだ。

ネフロドで会ったときのことから、レイブン砦まで乗せたこと。

ポールが砂漠を渡るときに駱駝を回してやったことも、どうやら勘付いていたみたいだな。

当然、ガーランド大学の教授に推薦された背景に俺の働きかけがあったことも、本人には直接伝えていないにもかかわらず、ポールは知っていた。

「私たちからお礼を。あなたにはいくら感謝しても足りません」

「妻の言う通りです。我々では、画家になりたいというポールの夢を支援するどころか、大学すらまともに通わせてやれず……」

「ああ、いや……俺の方にもポールの絵が欲しかったという事情もありますので。そんなに感謝されることでは……」

二人して頭を下げるものだから、かえって居心地が悪い。

そういえば、ポールは金が無くて大学を中退したのだったな。

それが飛ぶ鳥を落とす勢いで出世し、今では一流の有名画家で大学教授。

数年に渡る長いスパンではないとはいえ、俺はネフロの無名時代からポールを支援し続けた。

この夫婦にとつても俺は恩人か。

まあ、正直なところ、彼らの経済状況で子どもを育てようとしたこと自体、現代の感覚からすると間違いだったと思われる部分もあるが。

そんなことを考えていると、ポールの母親は唐突に立ち上がった。

「グレイさん。息子からあなたに渡すよう言われている物があります」

ポールの母親が家の奥から出してきたのは、二枚の絵だった。

一つは原作にも登場した実家の風景を描いた『故郷』だ。

もう一つは……見たことが無い禍々しい絵だった。

時期的に、ガーランド大学を解雇された直後に失意の中で描き上げた『絶望』か？

原作では、地位も名誉も金も失ったポールが、オイルモレー工場のスクラップ置き場で飲んだくれているところで買い上げる品だ。

今回のポールは職を追われていないので、『絶望』は存在しないはずだが。

「この絵の題名は……『怪物』だそうです」

「怪物？」

俺が首を捻りながら絵を見ていたら、ポールの母親は説明してくれた

「今までのポールの絵とはまるで違うでしょう？」

「ええ、確かに」

「この絵は……ポールがうちに帰ってきた直後に描いた絵です。こんな場所に住んでいることもあって、私たちはポールが有名画家になっていることも大学の教授になっていることも知りませんでした。それがフラッと帰ってきたと思つたら、一心不乱にこの絵を描き始めて……」

聞けば、実家に戻ってきたときのポールの様相は酷いものだったらしい。

頬はさらにこけ、幽霊のように生気を無くして、一瞬ポールだとわからなかったほどだったそう。

そんなことになっていたとは……。

教授になって金はあるはずなのに、前に見てから数週間しか経っていないのにその有様とは、よほど贗作騒動の件が堪えたか。

「この『怪物』は、ハッピーガーランドと……そして、ハッピーガーランドの人々を描いたものだそうです」

「……なるほど。そいつは傑作ですな」

嫉妬と陰謀、権力と金、さらには周囲の人間の手のひら返しと、ポールはなかなか嫌なものを見る羽目になったようだ。

俺の名前による推薦とセントジョーンズ卿の勢力による援護があったから、彼は排斥されずに済んだ。

薄汚い争いに勝つことができた。

しかし、それでも純粋な芸術家に過ぎないポールにとっては、色々と堪えるものがあつたらしい。

この一枚の絵だけで、それは十分に伝わってくる。

「ということは……ポールはもう大学に戻る気は無いと？」

「いえ……息子は言っていました。数十枚の失敗作を積み上げて描き切ったこの絵に、ハッピーガーランドや大学で味わった汚いものは全て投げ込んだ。 그레이さんの恩に報いるためにも、これを最後の作品にするわけにはいかない、と」

「そうですか……」

はつきり言つて、そこまで自分を追い詰めてまで絵と向き合うことがポールにとって良いのか悪いのか、俺にはわからない。

ちよいと失敗したかな？

俺の目的は、非業の死を遂げた愛着のある登場人物を僅かでも救うことだ。

ポールを恩で縛って扱き使ってまで、彼の絵が欲しいわけではないのだ。

「それと、もう一つ重要なことを言っておりました」

一旦、思考を中断してポールの母親の言葉に顔を上げると、彼女はもう一枚の絵『故郷』を示していた。

「淀みを絵に持ち込むのは『怪物』で最後にする。しかし、今の自分にはグレイさんを満足させる絵をこれ以上描くことができない。もう一度、画家として奮い立つためには、一から自分を鍛えなおす必要がある。この『故郷』で初心は取り戻した。次は最も心揺さぶられた情景をもう一度描きに行こうと思う。ださうです」

「胸騒ぎがするのです。この絵を見ていますと……」

「え？」

視線を『怪物』の方に戻すと、ポールの母親はさらに言葉を続けた。

「ポールは二度と帰ってこないんじゃないかって……」

「おい、母さん！ 滅多なことを……」

「だって！ あんな姿になって戻ってきたのよ！」

ポールの父親は妻を宥めようとするが、かえって逆鱗に触れてしまったようだ。

「あなたなんて！ 帰ってきたポールとほとんど口を利いていないじゃない！」

「それは……」

見たところ、ポールの父親は口下手な男だ。

きつと、謀略に巻き込まれて疲弊しきつたポールに掛ける言葉が見つからなかったのだろう。

しばらくすると、ポールの母親も俺の存在を思い出したのか、取り繕うような表情で俺に向き直った。

「 그레이さん。 情けない話ですが、 私たちには息子が最も感動した情景が何かすらわかりません。 でも、 ポールの画家としての軌跡を近くで見ってきた 그레이さんなら……」

確かに、俺はポールの目的地を知っている。

彼が最も感銘を受けた風景といえば、砂漠しかない。

原作でも、最後にポールが訪れた場所は灼熱のガラガラ砂漠だ。

しかし、両親にも行き先を告げずにガラガラ砂漠へ向かうとは……やはり俺が介入した影響はあるようだな。

今回の件は、どうにも悪い方向へ傾いてしまった気がする。

セントジョーンズ卿への根回しでポールの立場と名誉を守ったにもかかわらず、ポール自身のメンタルはズタボロだ。

「グレイさん。息子を……ポールを助けてください」

俺は彼女の言葉にすぐに返答することができなかった。

ポールは既に砂漠へ向かってしまった。

何をどう言い訳しようと俺にミスだ。

ロクデナシの魔の手から救ったつもりで、結局は同じ運命を辿っている。

ここまで原作と同じなら、今から砂漠に向かったところでポールは……。

「お願いします……」

「わ、私からもお願いします」

ポールの母親に続き、父親までもがひれ伏すように頭を下げってしまった。

さすがに行っても無駄とは言えないよな……。

この段になって、まだ体裁を取り繕うことしか考えられないのが自分でも苛立たしい。

まったく、これだから日本人は……。

「……確約はできません。ですが、全力を尽くします」

俺は二人を立てさせて農家を出ると、すぐに「ジャガーノート」のエンジンを起動してハッピーガーランドへと進路を取った。

69話 砂塵のキャンバス 中編

ポールの実家を出た俺は、ロブスター亭の寢室から最低限の荷物だけ回収すると、そのままガラガラ砂漠方面へビークルを走らせた。

ハッピーガーランドの南西出口を潜り、起伏の激しい道を進んだ先が、砂漠の入口コンドル砦だ。

俺が砦に着いた頃には、既に日が落ちていた。

遅々として補修作業の進まない外壁エリアを抜け、デルロツチ貿易の本店と宿泊所のある場所まで進み、俺はそこでビークルを停める。

さすがに今から砂漠に出るのはご免だ。

明日に備えて今日は寝るか……と、思っていたら、デルロツチ貿易本店の方から口論のような声が聞こえてきた。

「(無茶言わんでください！ 今から砂漠に出るなんて……自殺行為ですよ)」

「(ですから！ 無理を承知でお願いしているのです！ 早く彼を見つけないと……。金なら出しますから！)」

片方には聞き覚えがある。

デルロツチ貿易の社長デルセンだ。

もう一人は知らない声だな。

何の気なしに声が聞こえる方へ足を向けてみると、デルセンともう一人の男が目に入り、二人もこちらに気付く。

「あ、あなたは！」

「お、おお。グレイさんではないですか。明日から砂漠を渡るので？」

デルセンと揉めていた男には見覚えが無いが、向こうは俺を知っているようだ。俺の表情からそのことを察したのか、髭面の男は自ら先に名乗った。

「私はテオドール。画商をしております。グレイさんのことは、ポールから聞いておりましたので」

なるほど。

彼がポールの絵に魅了されて原作では砂漠を超えてレイブン砦までやって来る画商テオドールか。

今回は俺がポールの件を色々と管理していたので、今まで顔を合わせる機会は無かったが、ゲームでは本当に世話になった人物だ。

何せ、ポールの絵の売買はテオドールを介して行えるのだ。

この世界では金に困っていないのでやってないが、ゲームではこのシステムを上手く利用すれば巨万の富を得ることができる。

ポールがガーランド大学の教授に就任して絵が高騰したら、今まで購入していた絵をテオドールに売り、解任されて絵の値段が下落したら買い戻し、ポールの死後はさらに絵が高騰するので売り飛ばし、という具合だ。

因みに、ゲームではこの方法を最大限に活用すると、約50万URを手にすることができる。

今の俺にとっては大したことの無い金額だが、ゲームではこれ以上に稼げるイベントは無い。

「それで？ これは一体何の騒ぎですか？」

聞けば、テオドールもポールを追ってここまで来たという。

ポールがいつかもう一度この砂漠とオアシスを描きたいと思っていることは、以前に本人から直接聞いていた。

先日、ポールが砂漠方面に向かったことを人伝に聞き、まさかと思つてコンドル砦まで来てみれば、画架を持った男が単身砂漠に向かったという話を聞いた、と。

原作通りの展開なので俺は驚かなかつたが、生身で砂漠に足を踏み入れるなどあり得

ないほど無謀な行動だ。

恐らく、ビークルを雇うとか駱駝を買うとかはハナっから頭に無いのだろうな。

今回は俺も出遅れているので、根回ししようが無い。

「迂闊でした。まさか、既にポールが砂漠に出てしまったとは……」

確かに、テオドールがポールに迫いついていれば、オアシスまでのビークルを手配するくらいはできただろう。

しかし、今となつては完全に後の祭りだ。

テオドールはせめてポールを搜索するため、デルセンに砂漠仕様のビークルを急遽出してくれるよう頼んだわけだ。

まあ、砂漠の事情を知っているデルセンにしてみれば、どう考えても引き受けられる仕事ではない。

ただ横断するだけですら危険なガラガラ砂漠に長時間留まつての人探し、ましてや夜に出発など、無謀を通り越して自殺行為もいいところだ。

先ほどの口論の経緯はそんな感じだ。

「確かに、ポールの描くオアシスの絵には私も興味がある。しかし、それとこれとは話が別だ。彼を死と隣り合わせの場所に放置するなど、決して容認できない。彼は……ポールはこんなところで死んでいい人間ではないのだ！」

「テオドールさん。私だって何も意地悪でビークルを出さんと言っているわけじゃない。夜の砂漠は危険すぎるのですよ。それこそ、私が今招集できるビークルと人員だけではどうしようもないほどに」

「しかしですね！」

「明日になれば、捜索隊も出せますから。もちろん、それなりの金額を頂くことにはなりません。他に方法は無いと思いますよ。少なくとも、我々にはねえ……」

テオドールはしばらく興奮していたが、やがて俺を真っ直ぐに見据えて口を開いた。

「……グレイさん。折り入ってお願いがあります」

彼の言わんとしていることは予想がつく。

テオドールを宥めているデルセンも、先ほどから俺の方に遠慮がちな視線を送ってきているからな。

デルセンの奴もこんな面倒事は俺に放り投げたいのだろう。

「ポールを探してきてくれないでしょうか？ Sランクバトラーで盗賊討伐において凄まじい功績を持つあなたなら、きっとポールを探し出すことも……」

やはり、そう来たか。

まあ、ポールの捜索自体は問題ない。

俺もそのつもりでここまで来たのだからな。

しかし、一つ問題がある。

「……一応、聞いておきます。それは、今から捜索に行け、ということまで？」

「はい……今から、です」

俺の問いに頷いたテオドールはさらに言葉を続けた。

「あなたのことは聞いています。ポールの絵に惚れ込んで、彼が無名の頃から、絵を買い上げるだけでなく、色々と便宜を図っていたらしいじゃないですか。ここはもう一肌脱いでくれないでしょうか？ 一刻も早くポールを……」

当然ながら、俺は夜が明けてから砦を出るつもりだった。

夜の砂漠が危険なのは俺にとっても同じだ。

まず視界が悪いので、接近する敵を感知しにくく、武器の照準を定めることにも困難が伴う。

急激な気温の低下で、集中力を欠く可能性もある。

何より、この界限を根城とする盗賊団にとって砂漠は庭、俺は一度横断しただけの余所者。

環境への適応度が違う。

この時間帯に砂漠をうろつくのは、敵の銃口の目の前に面を晒すのと同じことだ。

そういつたりリスクを吞んで今出発するメリットは、その僅かな時間の差でポールを助けられる可能性のみ。

俺はゆっくりと顔を上げて、静かにこちらを見据えているテオドールに問いかけた。

「テオドールさん、ポールは生きていると思いますか?」

「わかりません。有益な情報など何もありません。ただ、確実なのは……出発が早ければ早いほど、彼を救える可能性が高いということです」

俺の言いたいことを察したテオドールは即答した。

確かに、彼から希望のある情報が出てくるはずも無いか。

……いや、希望というなら、一つはあるな。

原作では、プレイヤールがオアシスに着くと、ちょうどポールは息を引き取ったところで、テオドールがポールのベレー帽と遺作の絵『最期』を渡してくる。

要は、テオドールは先に到着してポールを看取っているのだ。

原作通りの進みなら、彼は朝になってからポールの捜索に出発することだろう。

そのスケジュールだと、ポールを助けるのは手遅れになる。

しかし、テオドールを原作よりも早く出発させ、さらに機動力が高い俺の「ジャガーノート」に乗せて捜索を行えば、あるいは……。

「ですから、どうかお願いします」

俺は既にポールがオアシスに向かったことを知り、どこかでもう手遅れだと思い込んでいた。

テオドールの言う通り、諦めるのはまだ早いか。

……今夜は徹夜だな。

「デルセン社長。食料と水を調達してください。三人分、レイブン砦からの横断よりちよい多めで。今すぐに」

「は、はいー!」

「え? 三人?」

俺が居たことで、テオドールは完全に人任せにしようとしていたようだが、そうは問屋が卸さない。

「あんたも来るんだよ。ほら、早く助手席に乗れ」

最初は戸惑っていたテオドールも、俺が急かすと何とか役目を受け入れた。

デルセンから受け取った食糧物資をビークルに積み、既に静寂が支配するコンドル砦を後にする。

テオドールを乗せた俺の「ジャガーノート」は、闇に紛れるようにして静かに砂漠へと歩を進めていった。

「来たか」

「え……？」

コンドル砦を出て砂漠の中心部へ向かってしばらく進むと、早速と言わんばかりにこちらへ接近する存在を感じた。

テオドールは気づいていないようだが、俺の耳にはビークルの稼働音が僅かに聞こえる。

間違いなく敵だ。

無灯火でこちらの近くまで接近し、いきなり至近距離で包囲してくる作戦のようだな。

それにしても、やけにエンジン音が小さいな。

【ジャガーノート】もハイブリッドエンジンを搭載しているので出力の割に稼働音は小さいが、向こうの静音性能はそれ以上だ。

足音も二足や四足型のレッグパーツのものではないので、恐らくデザートホーネット団の『イエロー・ワズプ』ではない。

砂漠地帯には適していないが、車輪系のレッグパーツの可能性もある。

だとすると、敵はデザートホーネット団の『アース・ウインド』か？

「グレイさん、どこに……？」

「しっ」

俺はテオドールを制して黙らせると、「ジャガーノート」のライトを消した。

こちらはポールを搜索するためライトを点灯したまま移動していたが、このままではいいのだ。

「ふお」

俺は一度だけ横跳びにスラストーダッシュを噴射し、砂煙を巻き上げて先ほどまで立っていた位置から離脱した。

テオドールは急な機動に揺られて思わず声を漏らす。俺は人差し指を立てて静かにするよう指示する。

慌てて口を手で押さえたテオドールを尻目に、俺はビークルを微動だにさせず耳を澄ませた。

ライトを消した黒塗りの「ジャガーノート」を、街灯も無い夜の砂漠で視認するのは至難の業だ。

さらに、この世界の火砲の精度を鑑みれば、狙撃の可能性はほぼ無い。

先制されたとしても、敵は必ず接近してくる。

そして、俺が僅かなエンジンの稼働音から敵の位置を探っていると、ついに状況が動いた。

突如、エンジンの回転数を急上昇させる音とともに、こちらへサーチライトが照射された。

「どうやら、敵に先手を取られたようだ。」

「やはり、砂漠は奴らのフィールドか。」

「一足先に捕捉された。」

「索敵においては向こうが圧倒的に上だな。」

「そして、敵のビークルは俺の目の前を横切りながら砲声を轟かせた。」

「足場の悪い砂漠とは思えないほどの速度で移動しながらの流し撃ちだ。」

「ちっ」

俺は「ジャガーノート」をスラストターダッシュで横に滑らせると、敵のライトに向かってチェーンガンを乱射した。

「飛んできた砲弾はどうか躲したが、俺が放った銃弾も敵ビークルのサーチライトを吹き飛ばしただけに止まったようだ。」

「この距離で外すなど普通は考えられないが、こいつは今まで遭遇した敵の中で最高に」

弾を当てにくい厄介な相手だ。

走行速度もそうだが、何より不自然に急な加速と減速を繰り返す挙動が曲者である。しかし、逆光となっていた敵のライトを破壊し、こちらもブレストパーツのライトを点灯させたことで、敵ビークルの姿が露わとなった。

「やはり『アース・ウィンド』か……」

デザートホーネット団の新型機で、ヨットののような帆を装備した車輪駆動の高機動ビークルだ。

ゲームでもなかなかウザい敵だったな。

こちらは移動速度が大幅に制限される砂漠で、向こうはスイスイと滑るように移動し、火炎弾をポコポコと放ってくるのだ。

射撃武器はガトリングアームのような弾速が速いものでないと避けられ、レッグパーツが砂漠向きでないと近づいて殴るのにも一苦労だった。

設計思想はこの世界でもほぼ同じのようだ。

原作と違うのは、『アース・ウィンド』は運用次第で凄まじい奇襲性能を見せる点か。あの帆は飾りではない。

帆船と同じ理論で、完全な追い風でなくとも進行方向への推進力として利用できるよ
うだ。

武装も最低限に留めてボディを限界まで小型化して軽量化しているので、高速で移動できるのはもちろんのこと、エンジンの出力と稼働音も抑えられる。

エンジンの回転数を落とすか止めるかして、さらにライトを消せば、風のみだけで音も無く獲物に接近するハンターと化す。

実際に搭乗しているのが人間なのだから、こういった運用も思い付き実践してくるわけだ。

生半可なビークル乗りなら、『アース・ウインド』の機動力に見事に翻弄され、砂にレッグパーツを取られている間に、火炎弾の狙い撃ちを食らうだろう。

だが……【ジャガーノート】の性能を凌駕する相手ではない。

俺は『アース・ウインド』のкокピットにチェーングンの照準を合わせた

「ひっ……デザートホーネット団……」

助手席のテオドールは、スラスタードッシュの衝撃で突っ伏していた顔を上げると、視界に飛び込んできた新型の盗賊ビークルに悲鳴を上げた。

まあ、素人からすれば、過酷な砂漠を根城とする盗賊団ほど恐ろしいものは無いか。

「くそっ！ 失敗か……」

奇襲が不発に終わり逆にライトを吹き飛ばされた『アース・ウインド』の操縦手は、憎々し気に喉の奥から絞り出すような声で悪態をついた。

そのまま逃走を図るかのように思ったが……『アース・ウインド』に搭乗する盗賊は、一歩も引かない雰囲気醸し出している。

先ほどの攻防で向こうも俺の腕はわかつたはずだ。

普通なら、この時点で逃げるなり防御を優先した立ち回りになるのだが、玉砕覚悟でここまで戦おうとする盗賊は珍しい。

そんなに全力で執着される覚えは……普通にあつたわ。

ネフロからハッピーガーランドへ向かう際に、俺はデザートホーネット団の偵察部隊を派手に殲滅したのだった。

「仲間の仇だ。討ち取らせてもら「二度目は無い」っ！」

男は何やら口上を垂れようとしたが、俺は容赦なく『アース・ウインド』のкокピットに向かつてチェーニングを点射した。

前回は諸事情によりデザートホーネット団の盗賊の一人を見逃してやったが、今回は遠慮する理由など無いのだ。

何より、こいつは仲間の復讐のために俺をピンポイントで狙ってきた。

そんな相手の命に配慮してやるつもりなど毛頭ない。

кокピットを貫いたチェーニングの弾丸は、そのまま『アース・ウインド』のエンジン系統を破壊してマストをへし折った。

「なっ……ひい！」

敵の最大の武器である機動力を奪われた軽量ビークルなどいいのだ。

俺はスラストターダッシュで再度『アース・ウインド』へ接近し、火炎弾で迎撃することも忘れて悲鳴を上げる盗賊を、そのまま強化ブレードアームで叩き斬った。

70話 砂塵のキャンバス 後編

ポールの発見は予想以上に早かった。

戦闘終了直後は真つ青になって助手席から身を乗り出し吐いていたテオドールが、数十分後には回復してポールの影を探し始めたことも大きい。

思ったより役立たずではない。

テオドールは地形から絵になる風景を割り出してポールが通ったルートを予想し、俺は彼の言う通りに「ジャガーノート」を走らせる。

そして、砂漠の中心に位置するカワセミアオシスのすぐ近く、オアシスの全容が見える砂丘の上で、俺たちは倒れ伏すポールを発見した。

まだ夜が明ける前の出来事だった。

「ポール！」

俺がビークルを止めると、テオドールは助手席から飛び出してポールに駆け寄っている。周囲に敵影が無いかざつと確認し、俺も水筒を持ってテオドールに続いた。

「っ！ まだ、息があります！」

「よし」

テオドールの言葉に、俺も思わず安堵の表情を浮かべながらポールに近づく。少し顔が火ぶくれしているが、間違いなくポール本人だ。

俺は歩いて反対側に回り、テオドールが抱きかかえるようにしているポールの口に、静かに水筒の中身を注いだ。

中身は経口補水液——いわゆるORS——だ。

分量は水1リットルに対して砂糖を大匙4杯半と塩を小さじ半分。

以前、ネットで調べた作り方なので、これで問題ないだろう。

現代の市販のスポーツドリンクより糖濃度が低く電解質濃度が高いので、ポ○リやアク○リアスに比べるとかなり不味いが、本格的な脱水にはこの本物の経口補水液が適しているはずだ。

「ん……………ぐ……………」

いくらか口の端から溢したものの、ポールはしっかりと経口補水液を飲み込んだ。

上着を脱がせて軽く体を見ているが、細かい切り傷や痣だけで、それほど深刻な外傷は無い。

まあ、この状態でも手当てせず放置したら、破傷風や感染症にかかるかもしれないけどな。

後で傷口の洗浄と消毒をしておこう。

とにかく、俺たちはポールを救出することに成功した。

「テオドールさん。オアシスはすぐそこです。一旦、日陰までポールを運びましょう」「わかりました。よろしくお願いします」

ポールはテオドールが担いで「ジャガーノート」に乗せ、俺たちはオアシスで一夜を明かすこととなった。

しかし、二人乗りのビークルに三人はキツいな……。

「つ……………は……………?」

オアシスに到着し、テオドールと交代で仮眠を取った俺が食事の用意をしていると、ポールは目を覚ました。

ポールの手当てでは既に手持ちの救急箱と煮沸したオアシスの湧き水で済ませているが、長時間に渡って砂漠を彷徨い負傷した彼の消耗は激しい。

今日いっぱい起きないかと思っていたが……スープの匂いで覚醒したかな？

ポールは未だはつきりとしらない頭を回し、身じろぎするように俺たちの方を向いた。

「テオドールさん……それに、 그레이さん……」

「ポール！ 良かった……一時はどうなることかと……」

「おはようさん。業火には焼かれたみたいだが、地獄行きは免れたな」

俺の冗談は全くウケず、ポールは体を起こそうとした。

はずみで額に置いていた水で濡らした布が落ちる。

「う、つ……」

「おい、無理するな。今のお前さんは、脱水と怪我で全身ミイラぞ」

まともな準備もせず無計画に日中の砂漠を歩き続けたのだから、こうなるのも当然だ。

現代人の俺だったら、確実に体を壊しているだろう。

俺もある程度はこの時代に適応してきたとはいえ、砂漠は人間には過酷すぎる場所だ。

「ほら、こいつを飲め」

「……はい」

俺が経口補水液の入った水筒を渡すと、ポールは緩慢な動作で飲み始めた。

「ORSはまだあるからな」

ポールが経口補水液を飲み終え、俺は再び彼を寝かせた。

テオドルが汲んできてくれた水で別の布を濡らし、少し火膨れしたポールの顔を拭

いてやる。

俺たちにできるのはこれくらいだ。

ハツピーガーランドに戻ったらセントジョーンズ病院へ直行だな。

「落ち着いたらスープを食べ。夕食じゃなくて朝食になっちまったが」

「……すみません、 그레이さん」

「気にするな……と言いたいが、後でお説教だな。君の無謀な行いで迷惑を被った連中は大勢居る。少なくとも、ご両親には謝りに行くことだ」

俺が作ったスープをゆっくりと食べ終えたポールは、このような無謀な行いをした理由をポツポツと語り始めた。

今回のポールは地位も名誉も失って絶望した原作とは違う。

魑魅魍魎の薄汚い権力闘争に巻き込まれて神経を擦り減らしたとはいえ、ポールの名譽はセントジョーンズ卿の部下たちによって守られた。

しばらくはガーランド大学の美術科の教授として安泰だったはずだ。

それにもかかわらず、ポールは单身砂漠に向かい、オアシスをキャンバスに収めるための無謀な旅を試みたのだ。

俺もポールの言い分は気になるので、彼の言葉に耳を傾ける。

「あなたに……失望されるのが怖かったです」

「え？ 俺？」

ポールの言葉は思いがけないものだったが、彼の母親の言葉を思い出すと、妙に納得してしまった。

ポールは、今の自分では俺を満足させる絵が描けないと思っていた。

画家として自分を鍛えなおそうと思っていた。

そして、俺のために絵を描き続けようと思っていた。

これだけ聞くと、俺はポールを恩で縛って利用し尽くそうとするクズだな。

俺の意図はともかく、結果的にそうなってしまったのだ。

「あなたは…… 그레이さんは、僕への評価が一貫していたから……」

確かに、俺はポールの絵を彼が無名の頃から高い値段で買った。

しかし、それは原作を知っていたからだ。

高騰したらずぐに売り飛ばすことは考えていなかったものの、本当に俺がポールの絵を評価していたかといえれば怪しい。

いや、ぶつちやけ価値などわかっていない。

精々、家の玄関に飾るくらいしか考えていなかった。

俺が買ったポールの絵は、全てロブスター亭の部屋か自宅の物置に放置されている。

「ポール、この際だから正直に言ってしまうが……俺は絵画の良し悪しなどわからん。ナツメツグ博士じゃないが、まさに天は二物を与えずってやつだな。俺は……音楽以外の芸術はからつきしだ」

「俺は君の絵を見て評価したわけじゃない。君が評価されて出世することが、俺にはわかっていったんだよ」

「……………」

俺は自然とポールに色々と打ち明けていた。

こういう話はナツメツグ博士以外にはしたことが無い。

まあ、普通は未来や運命がわかるなんて話をしたところで、頭を心配されるのがオチだ。

案の定、テオドールは首をかしげている。

しかし、どうにも俺はここでポールと向き合うのを避ける気にはなれなかったのだ。端的に言ってしまうえば自己満足だな。

「軽蔑したか？ もつと言うとな……君が砂漠で危険な目に遭うのもわかっていた。死ぬ可能性が高いことを知っていた。それなのに、万全の対策を取らなかつたんだ。贋作の容疑を掛けようとした連中を排除すれば、全てが丸く収まると思っていた……いや、

言い訳だな。結局のところ、俺は救世主を気取って身勝手に君の命や運命を弄んでいただけだ。その結果がこのザマさ」

ポールは一切表情を動かさない。

怒っているのか、呆れているのか、とうとう俺の気がふれたと思っっているのか。だが、どう言い繕おうと、俺がポールの人生を狂わせたことに変わりはない。

全ては俺がポールのサブイベントに介入したことで始まった。

そして、絵画に精通している風を装って振り回した拳句、精神的に追い詰めてしまった。

色々と失敗した。

もう少し上手くやれば、最低限ポールが砂漠でぶっ倒れることは防げたはずだ。

それこそ、予め俺が砂漠行きのことを話題にしておけばよかったのだ。

危険だから一人で突っ走らないよう言い含めておけば、ポールが一人で無謀な挑戦に及ぶことはなかっただろう。

死にかけたのは勝手に砂漠へ出ていったポールの自業自得の部分があるとはいえ、俺が彼の人生の根本を歪めてしまったことは事実だ。

「軽蔑、するわけがない」

顔を上げたポールは強い目で俺を見返しながら口を開いた。

「僕は……あなたに何度も救われました。覚えていますか？ ネフロで初めて会ったとき、僕はパンを買うこともできなかったんです」

ネフロ公演の日の頬がこけたポールの姿は、今でも鮮明に思い出せる。

明らかに食えなくて痩せ細っていたポールは、自画像とネフロの風景画を数百円で売ろうとしていたのだ。

それでも、足を止めて彼の絵を購入する者は居なかった。

俺は二つの絵に1万と1000UR——11万円相当——を払った。

この世界の俺は結構な金持ちだ。

あの時、ポールに払った金額など、大したものじゃない。

しかし、ポールにとつては、比喻ではなく本当に救いの手だったことだろう。

底辺の貧乏人だったポールにとって、あの金額は夢のような大金だったはずだ。

「たとえば、グレイさんが僕の絵を転売して儲けるつもりだったとしても、あなたが無名の頃の僕を評価してくれたことには変わりない。僕が危機に陥る未来がわかっていたとか、そんな怪しい話は知ったことじゃない！ あなたは……恩人です」

「……君が愚直なまでに義理堅いのはわかった。しかし、今回の件は俺のミスでもある。上手く説明できないが……俺は君の行動を知っていて、その結果が齎す運命を正確に把

握っていた。君を支援すると決めていた俺がこの件を放置するのは、さすがに君の自己責任の範疇を超えている。どうかにかして止めるべきだったんだ」

「舐めないでください！ 僕は画家だ！ たとえ命を落とす可能性があったとしても、心に焼き付いたこの地の風景を描くためなら、迷わず砂漠に足を踏み入れる。思い立ったその時に。気力が充実している瞬間を逃すことなどしない。グレイさんが止められただとしても、きつと手を振り払って来ていたはずですよ」

ポールは頑固だった。

いい年をした大人だからとか、芸術家のパトロンがどこまで深く面倒を見るかとか、そういう次元の話ではない。

単純に、ポールを突き動かす画家の魂ソウルの問題だ。

「だから……グレイさんはまた僕を助けてくれた。それだけなんですよ」

ポールは強引に話を打ち切ると、俺に背を向けて自分の荷物を探った。

ロクに食糧も水も無いポールの手荷物、俺がビークルに乗せて一緒に運んである。

ポールはすぐに目当ての物を探し当てたようで、大きな絵画を取り出して簡単な梱包を解いた。

「オアシスの絵です。買っていただけますか？」

砂丘の上から見たカワセミオアシスの絵だ。

原作では、この絵はポールの遺作となり、題名も『最期』などというものだった気がする。

「完成していたのか？」

「はい。最後の力を振り絞って描き上げましたから」

絵には空白など一か所も無く、オアシス自体の描写もさることながら、どこまでも続く黄金色の砂地が、遠近法で見事に描き上げられている。

「……そんな力があるなら水辺まで行けよ」

「いやあ……絵を描き上げて歩き出そうとしたら、もう限界だったみたいでそのまま倒れちゃって……」

せめて、この額縁に絵をはめ込む分の労力を、這う方に回せばよかったのに。

いや、ポールは絵を完成させるまで止まらないか。

何とも……。

「間抜けな話だ」

「まったくです」

71話 帰り道、そして少し寄り道

ポールをハツピーガーランドまで連れ帰り、セントジョーンズ病院に担ぎ込み、テオドルに後のことを任せて俺は、ようやくピジョン牧場へ向けて出発した。

色々とゴタゴタしていたせいで、バニラとコニーより一週間近くは遅れている。

向こうは既にジュニパーベリー号の方も回り、渡航許可証も回収したかな。

ビークルバトルトナーメントまでの日数も残り少ないので、さっさとピジョン牧場へ寄って、ハツピーガーランドに戻らなければ。

俺は手近な荷物をスーツケースに詰めて「ジャガーノート」に積むと、またしても慌ただしくハツピーガーランドを後にした。

コンドル岩を抜けて三度ガラガラ砂漠へ足を踏み入れる。

今度はポールとテオドルは居ないので俺一人……ではなく、同伴するキャラバン型輸送ビークルが居る。

帰省の荷物が思った以上に嵩張ってしまったため、デルロッチ貿易に依頼して一台回してもらったのだ。

ドン・ミスから温度によって劣化しにくいワインが届いたのは良かったが、樽の数はどう見てもビークルのバックパーツに積める量ではなかった。

手紙には、セントジョーンズ卿と顔を繋いでくれた札も含めての品だと仰々しく書いてあったが……まあ、そこら辺はあまり深く考えないようにしよう。

そして、土産のワインだけでなく、ハッピーガーランドに来てから購入したボールの絵も一枚や二枚ではない。

これらの荷物を全て持って帰るには、とてもではないが汎用ビークルの「ジャガーノート」の積載量では間に合わないわけだ。

そんなわけで、俺はキャラバンを一台雇う羽目になった。

まあ、輸送ビークルが一台で済んだのは不幸中の幸いだつたな。

俺が居るので、他の護衛ビークルも必要ない。

しかし、いずれは自動で追従してくれる輸送ビークルが欲しいものだ。

この物理法則を無視しそうなスチームパンク世界においても、自律型の無人機器の開発は桁違いの難しさだろうが、何とかナツメツグ博士の存命中に手を付けられれば実現の可能性はある。

輸送ビークルを引き連れて砂漠を進んだ俺は、慣例通りカワセミオアシスで一泊し

て、ネフロ方面への入口であるレイブン砦へビークルを進めた。

途中、デザートホーネット団の『アース・ウインド』と『イエロー・ワスプ』の編隊に襲撃されたが、これは俺がノーダメージで処理した。

今回の敵は口を開く前に吹き飛ばしてしまったので、ビークル二台だけの難易度の低い獲物だと思ったのか、それとも俺に復讐することが目的だったのかはわからない。

……いや、このタイミングで襲ってくるということは、俺をピンポイントで狙ってきたのだらう。

面倒なことだ。

せっかくなので、敵ビークルの武装を回収する。

『イエロー・ワスプ』からはガトリング、『アース・ウインド』からは火炎弾を射出するランチャーだ。

輸送ビークルを雇ったことで『ジャガーノート』のバックパーツは空いているので、この程度の荷物を追加で運ぶくらいということはない。

暇なときにナツメツ博士の工房でバラして徹底的に調べてやる。

手間を掛けさせやがった礼だ。

このくらいの得はあってもいいだろう。

そして、俺たちは無事にレイブン砦に到着した。

砦に付いた頃にはとつくに昼を過ぎていたが、すぐに出発する予定だ。

ここにも宿泊所はあるが、わざわざ予定を遅らせてまで一泊したいほどの三ツ星ホテルではない。

バザーには少し寄った。

砂漠の近くだけあって普段は保存食の干し肉を主に扱っている肉屋だが、今日は珍しく生の牛肉があつたので二キロほど購入する。

熟成というほどではないが、いい感じに旨味が活性化している色合いだ。

ピジョン牧場ではきつとナツメツグ博士が腹を空かせているだろう。

早く戻つてこいつを食わせてやろう。

レイブン砦で軽く補給と買い物をした俺は、すぐに砦を出てアレハーテ丘陵へビークルを進めた。

デルロツチ貿易のビークル乗りは強行軍に少々げんなりした表情を見せたが、俺が払いのいい上客だということを思い出したようで、すぐに表情を引き締めて輸送ビークルのハンドルを握りなおした。

そして、アレハーテ丘陵のネフロ方面へと向かう道の途中で、俺は「ジャガーノート」を減速させて後続の輸送ビークルの方へ振り返る。

「ちよつと寄るところがある。待っててくれ」

「へい」

俺は返事をしつつも怪訝な顔をするピークル乗りを尻目に、ネフロ方面へと続く道の脇に逸れる。

そして、俺がピークルを駐機したのは、およそ人が住んでいるとは思えないボロ屋だ。いつぞやのシスターと子どもたちが住んでいる廃屋である。

廃屋に残る子どもはリックとロバートの二人。

二人のイベントはまだ完全に片付かないが、どちらにも進捗と言える話はある。

早速、シスターに報告すべく、俺はここに立ち寄つたのだ。

「ごめんください」

「はいー」

俺が廃屋の扉をノックしつつ声を掛けると、前回よりも元気なシスターの声が聞こえた。

久しぶりに見たシスターの顔は前回よりも血色がよかった。

さすがにこの短期間で体つきまでは変わっていないが、青白かった顔には幾分か赤みが差し、肌にも張りがあるように思える。

俺が渡した食糧と金で、少しはマシな飯を食ったようだな。

シスターが元気なのはいいことだ。

子どもたちにとって、彼女は母親代わりだからな。

元気と言えば、先ほどの返事がヤケに明るかったのは、俺の声を覚えていたからだそうだ。

男の声にすぐ返事をしてドアを開けるのは不用心だと思つたが、それなら問題ないかな。

「グレイ様、お久しぶりでございます」

「どうも。元気にやっていますみたいですね」

「はい！ これも主のお導きと……グレイ様、あなたのおかげでございます」

「いや、そんな大層なものじゃないですから」

まあ、その『主』とやらの面は是非とも拝んでみたいものだがな。

俺を盗賊ブークルの闊歩する山奥に置き去りにしたクソ野郎に、銃弾をしこたま撃ち込んでやりたい。

「金は足りてます？」

「もちろんです。前にいただいた分は十分の一も使っておりません」

それはそれで少し心配だな。

あの時に渡したのは1万URだから約10万円だ。

三人が一月暮らして、しかもその内の二人は育ちざかりの男の子で、それで使ったのが一万円足らず。

某番組の企画でも、使うのは一人で一万円だ。

いや、この世界の物価と食糧事情なら、三人が食うだけであればそんなに金は掛からないか。

最初に干し肉も一緒に渡したこともあるだろう。

「では、こちらだけ……」

「っ！ いけません！ これ以上いただいては罰が当たります」

俺は新たに金が入った袋を二つ渡そうとしたが、シスターは慌てて返そうとしてきた。俺は最初からシスターに説明した。

「いや、こいつは受け取っていただかないと困ります。生活費は大丈夫そうなんで、これは旅費だけです」

「旅費、ですか？」

俺は最初からシスターに説明した。

未来のピークルバトラを発掘したいというドン・スミスの手紙を読み終えたシス

ターは、ゆつくりと手紙を畳んで俺に向き直った。

「なるほど。リックをビークルバトラーに……」

「ええ、そちらは本人の希望とあなたの許可さえあれば、一発で話は決まります。まあ、鉄道が潰れているので、実際にリック君をスームスームへ送るのはもう少し後になりませんが」

「……………」

「ロバート君の件は、彼次第の部分もありますし、後見人などに関して先方ともう少し交渉しなければなりません、恐らく無事に話はまとまるでしょう。まあ、そちらも行き先はハッピーガーランドなので、移動はウズラ山トンネルが開通してからですがね」

「……………そうですか」

シスターの反応は薄い。

まあ、フローラの実績があるとはいえ、これだけの話をいきなり信用しろというものも無理な話か。

都合が良すぎる。

今まで母親代わりを務めてきたシスターとしても、色々と悩むところがあるのだろうか………と思っていたが、彼女から発せられた言葉は思いがけないものだった。

「驚きです。最初にグレイ様とお会いしてから、まだ一か月ほどしか経っていないのに、

もう二人目どころか三人目の里親まで……。本当に……。何てお礼を言ったらいいか……」

「どうやら、信用に関しては既に問題ないみたいだな。」

「言い訳の手間が省けるので、こちらとしては大歓迎だ。」

「こちらの事情には話せない部分も多いからな。」

「まあ、リック君の件には俺とドン・スミスとの間の事情もありますからね。そんなに感謝されるほどのことではないですよ」

「そうですね……。でも、フローラるときは、 그레이様には何の得も無いのに、ミツバチ園まで往復して、色々骨を折ってくださいましたよね。私は信じておりますよ。あなたは敬虔で慈悲深い神の使徒です」

「ただ、ここまで聖人扱いされると居心地が悪くなってくる。」

「猜疑心むき出しで接してくるよりはいいが、やはり宗教家と話すのは疲れるな……。俺がこそばゆさを感じていると、いい具合にこの微妙な空気を払拭する声が発せられた。」

「 그레이さん、解けました」

「お、そうか。見せてみる」

「 ガーランド大学の教授が頭を捻っていた数学の難問の写しを、先ほどからロバートに

解かせていたのだ。

内容は数ⅡBの範囲になる

俺も覚えている範囲だったので、答え合わせはできる。

ロバートの答えは……問題ないな。

俺の出した結果と同じだ。

彼の年齢で数ⅡBの問題が解ける人間は、当然ながら現代の日本でも少ない。

おまけにレベルの低い参考資料と、それすらロクに手に入らない居住地と経済事情。

そんな環境でここまでの知能を手に入れるとは、ロバートは間違いなく天才だ。

「これで三人、行き先は決まったな」

あとはハッピーガーランドに戻ったときに各機関へ話を通せばいい。

俺はロバートから受け取った解答用紙を仕舞うと席を立った。

「では、俺はこの辺で失礼を。鉄道が復旧したら、電報でも出しますので」

「もう、行ってしまわれるのですね……」

俺は廃屋を出ると「ジャガーノート」に乗り込み、コクピットで舟を漕いでいた輸送ビークルの操縦手を起こし、ピジョン牧場へとビークルを向けた。

7 2 話 ビジョン牧場へ帰還 1

ネフロの街の東側に回りワグテール溪谷を過ぎ、俺はようやく懐かしの第二の故郷ピジョン牧場へ到着した。

一か月ほど留守にしたが、牧場の様相は全く変わっていない。

メリー乳業の羊が所々で草を食む広大な牧草地も、比較的新しく建築されたピジョン牧場駅もそのままだ。

ミームー村方面への路線にも、見る限りトラブルは無いようだな。

「もつと！ もつとパワーを!! ウイリー!!!」

「これ以上は無理だよ、兄さん。高馬力エンジンを積むと、今度は機体が重くなるんだから」

オットーとウイリーのライト兄弟もどきは、相変わらず丘の傾斜を利用して羽根付きビークル「フラップフライヤー」を飛ばそうとしている。

今はちようど出力を上げたパターンを試している段階のようだな。

重量オーバーを無視して、Hサイズのボディに補助エンジンまで積み、羽ばたくパ

ワーを上げているのだ。

……原作と同じペースか。

思ったより「フラップフライヤー」の進捗は芳しくないのか？

「おや？ グレイさん。帰ってきたんだね」

「おお！ グレイの旦那！ 見てくれ、今度の「フラップフライヤー」はパワーを重視して……って、ぬわああああああアアア！ 落ちる!! 落ちるうううううううううう!!」

「ああっ!! 兄さん！」

……この二人に絡むのは後にしよう。

丘を上がった先に佇む歪な形の家が、我が師匠ナツメグ博士の工房にして、この世界における俺の自宅だ。

キャラバン型の運送ビークルを引き連れた俺は、「ジャガーノート」を先に工房側に寄せて、輸送ビークルを家の前に着けさせた。

「よし、到着だな。荷物を下ろしてくれ」

「へい」

ドン・スミスから買ったワイン——ほとんどはタダで貰った——とポールの絵を輸送ビークルから運び出し、とりあえずは玄関前に寄せて置く。

ついでに「ジャガーノート」のキャリアーに固定していたデザートホーネット団からの鹵獲品の武器も工房に運ばせる。

そうして家の前で引越し並の大荷物を整理していると、おもむろに家のドアが開いた。

「グレイ、ようやく帰ってきたの。……何じや、お前さんのビークルも砂塗れではないか」

これも一か月ぶりの顔だ。

我が師匠ナツメグ博士も、以前と変わらない姿を見せた。

元々が小柄なのでわかりにくいだが、特に痩せ細っていることも無いようだ。

前回のハツピーガーランド行きよりもナツメグ邸を長く留守にしたが、博士が孤独死していないようで安心した。

「ただいま戻りました。ナツメグ博士」

「うむ」

キャラバンビークルから荷物の積み下ろしが終わり、俺はデルロツチ貿易のビークル乗りにチップを握らせて追い返した。

かなり扱き使ってしまったが、数枚の銀貨を握り締めたビークル乗りは、鼻歌を歌い

ながら上機嫌で帰っていった。

仕事は結構キツかったはずだが、今のチップも含めた実入りを考えれば、俺の依頼は相当地に美味しい案件だったのだろう。

あの金は酒に化けるのか娼婦の懐へ消えるのか……。

そして、お土産に買ってきたワインを一旦家の中に入れてようと思っていると……今度はピジョン牧場の面々が押し掛けてきた。

おっさんどもは俺への挨拶もほどほどに、ワイン樽に群がって勝手に配分を決め始める。

オットーとウィリーには先ほど会ったので、俺が帰ったことを既に彼らが知っていてもおかしくはないが、さすがに来るのが早すぎないかね？

まったく、酒の匂いを嗅ぎつける能力だけは一人前な奴らだ。

どうにか、うちの分のワインを小樽で二つ分ほど確保し、強盗どもが帰った頃には、すつかり日も沈んでいた。

「さて……博士、夕食はもう済ませましたか？」

「いや、今日はまだじゃな」

「じゃあ、何か作りますよ。ちようど食べ頃の牛肉を手に入れてきたので」

「ああ、頼んだぞ」

ミディアムレアに焼き上げたステーキをテーブルに並べ、早速スームスームから持ってきたワインをグラスに注ぐと、俺と博士はどちらともなくナイフとフォークを手に取り食事始めた。

まずは一口と、切り分けた肉を口に運び咀嚼すると、程よい歯応えと肉汁が口の中で踊る。

日本のスーパーに百グラム千円くらいで売っている脂の味しくない肉とは違い、自然な赤身肉の旨味だ。

いい肉に敬意を表して、ソースは肉汁を重めのワインで解いて玉ねぎのみじん切りを煮詰めた、肉の味をそのまま活かすグレイビーソースである。

これがまた、ドン・スミスから貰った上質なワインとの相性が抜群だ。

俺とナツメツグ博士は、しばらく無言でステーキとワインを交互に口に運び続けた。本当に美味しい食事のときは、誰しも無口になるものだ。

特に香りまでご馳走になる料理はなおさらだろう。

開いた口から芳香が抜けて霧散してしまうのがもつたない。

そうして俺たちはしばらくの間はステーキを味わうことに集中した。

付け合わせのバイクドポテトと人参のグラッセも腹に収め、皿に残ったソースを粗方

パンに染み込ませて片付けたところで、ようやくナツメック博士が口を開いた。「そういえば、少し前にコニーとバナラが来たぞ」

バナラたちは砂漠から帰ってきてすぐナツメック博士に会いに来たらしい。

先ほど、博士が俺のビークルも（・）砂塗れと言った理由がこれだ。

【カモミール・タイプⅡ】はボディパーツを置換した直後なので、一度はナツメック博士に見てもらった方がいいと伝えておいたが、どうやらバナラは忠告通りに行動したようだな。

「バナラのビークルは少し見てやった。細かい傷の修理と砂埃の除去、それと……耐水ボディMの調整もな。そのスキトール湖に浮かべてみたが、特に問題は発生しなかった。ウミネコ海岸沖の難破船とやらを調べる程度なら、何も問題は無いはずじゃ」

「そうですか。ありがとうございます。こつちの方では珍しいパーツだったので、街の整備場のメンテナンスだけでは不安だったんですよ」

ナツメック博士は「ジャガーノート」の耐水ボディも設計しており、当然ながら公式パーツのことはしっかり把握しているので、博士が点検したのなら安心だ。

【カモミール・タイプⅡ】が沈んでバナラとコニーが溺れる心配は無いだろう。

それと、どうやら博士もジュニパー号のことをバナラから少し聞いたようだ。

説明する手間が省けたな。

「他に何か変わったことは？」

「おお、そうじゃ。もう一つあったな。ミームー村からマルガリータという若い娘がお前さんを訪ねてきたぞ」

「え!？」

思わず聞き返してしまった。

マルガリータといえば、ミームー村の船大工の女性だ。

ミームー村はトロットビークルのことすら知らない人間が多い僻地であり、当然ながら整備場や出張修理所など存在しない。

あの場所で唯一の修理と補給ができる設備が、船大工マルガリータの作業所なのだ。俺はこの世界で彼女と直接話したことは無い。

以前、スキートール湖の巨大魚こと『ディープアングラ』を撃破してミームー村へ行ったときは、彼女はその巨大魚を探しに出ており留守だったのだ。

「面識は無いと言っておったが……お前さんが把握しているということは、彼女も困難の多い生涯を送ることになるのかの？」

「いや、そういうわけでは……ただ、ミームー村の住民から彼女の名前は聞いていたの
で」

メインストーリーに係わる人物ではなかったが、マルガリータのことは普通に覚えていた。

それと、この世界ではまだ会ったことは無いが、ハッピーガーランドへ行くためにガラガラ砂漠へ向かう直前、ピジョン牧場から一旦ネフロへ向かう道中で、彼女が乗った馬車を見た記憶がある。

原作よりも美人に見えたが、係わりといえばそれだけだ。

「彼女は何でまたうちに？」

「お前さんに礼を言いたいそうじゃ。例のスキートル湖の巨大魚の件であろう。二年前にお前さんがミームー村へ来たときに言いそびれたから、と言っておった」

そういえば、ミームー村には『デーパーアングラー』を始末した後一回しか行ってないな。

ミームーまで汽車の運行が開始したのは数週間前なので、以前はビークルでスキートル湖を横断する必要があったのだ。

路線を敷く道はもつと前に整備されていたが、他の住民からトラブルがあったという話は聞いていなかったの、わざわざ向こうまで足を延ばすことは終ぞ無かった。

「そうですか。結構前のことなのに……何と言うか、義理堅いですね」

「うむ、いい娘さんじゃ。技術者としても一級品の才能を持つておる。トロットビーク

ルに触り始めたのがつい最近とは思えん。操縦の方はともかく、整備に関してはお前さんなど既に軽く凌駕しておるな」

「へえ……博士にそこまで言わせるとは大したものですね。……つていうか、よくそんなことわかりましたね」

「うちへ来たときに、少しビークルのことや整備のことを少し教えてやったからの。あの娘のビークル……「クラフトマンシップ」じゃったか？ 独学であれほどのカスタムができるとは、正直驚いたわい。今まで小舟しか作ったことが無いとは、俄かには信じられん」

「ほう、そんなことが……」

確かに、原作でもマルガリータは初めてトロットビークルを触るにもかかわらず、完璧に整備をこなしていた。

現実でもそれは変わらないらしい。

ならば、その時点でマルガリータには技術屋として天賦の才があることは確かだ。

この世界でも、ミーム村まで鉄道が運行を始めたのは本当に最近のことで、線路に沿った道が通れるようになったのも、それほど前のことではない。

それからビークルを買ったとすれば、マルガリータのビークル歴は精々が数か月……下手をすれば一か月そこそこ。

それで俺より整備の腕が上とは……。

「巨大魚を倒したお前さんと【ジャガーノート】にも興味があると言っておった。グレイ、次のビークルバトルトーナメントまでは暇じゃな。一度、ミームー村へ行つてくるといい」

「そうですね。そうします」

既に汽車が通っているので、もう湖をビークルで渡る必要は無い。

明日にでもミームー村へ行こう。

73話 ビジョン牧場へ帰還2

翌日、工房で砂漠の砂嵐と戦闘でくたびれた「ジャガーノート」のメンテナンスをしていると、ナツメツグ邸にバナラとコニーがやって来た。

「あ、グレイ。帰ってたんだね」

「こんにちは。グレイ、ナツメツグ博士」

一旦、作業を中断して、俺とナツメツグ博士は二人の方へ歩み寄る。

「やあ、お二人さん。ビークルの具合はどうだ？ 転覆しなかったか？」

「ああ、もちろんさ」

「うん、難破船もちゃんと調べてきたよ」

「そうか、それは何よりじゃな」

「どうやら無事に渡航許可証を手に入れられたようだ。」

しかし、今ジュニパーベリー号の調査を終えて戻ってきたところか。

俺より一週間近く先にハッピーガーランドを出たにしては、少し行動が遅いか？

しかし、それよりも気になるのがバナラの愛機「カモミール・タイプII」だ。

「そのガトリングアームは……」

「あ、これ。ノーラが売ってくれたんだ。デザートホーネット団の砦で、またコニーが歌ったときにさ」

「何だつて？」

バニラのビークルには、間違いなく純正品のガトリングアームが装備されていた。

俺のチェーリングガンと比べれば、精度と装弾数で劣り無駄に重量がある武器だが、ゲームでは間違いなく最強の遠距離武器だった。

それにしても……二人はもう一度デザートホーネット団のアジトへ赴き、演奏を披露したのか。

ゲームではそんなイベントも無かったが……。

ガトリングアームを貰うには、ゲームに登場する全てのダンジョンの全ての宝石、12種類をノーラにプレゼントしなければならぬ。

レイブン砦のヒンヤリ遺跡とゴールドーン廃鉱はともかく、ア・マモール神殿はスキートル湖に入口があるので、そこへ行けるのは耐水ボデイMを手に入れた後だ。

そういったプロセスをすつ飛ばして、普通に売ってもらえるとは……。

やはり、色々と変わるものだな。

しかし、バニラは少し気を付けた方がいい。

今はまだ大丈夫そうだが、他の女性の話題に関しては、一歩間違えればコニーの機嫌が急降下するぞ。

ゲームの方でノーラの宝石イベントを進めると、彼女は本当にバナラに惚れ込むからな。

「グレイ？ どうかした？」

「ああ、いや……砂漠では襲ってくるのに砦に着いた瞬間に友好的か、って思ってたな」

「襲われなかったよ」

「え？ マジ？」

またしても驚きの事実が発覚した。

ゲームでは、コニーを乗せていても、砂漠では普通に襲撃されたけどな……。

何より、俺は現実でもしつこく襲われた。

まったく、不条理な話だ。

「まあ、何だ。それなら少し時間が掛かったのも納得だ。今後の予定に響くほどでもないし、問題ないだろう」

「うん……でも、その後ネフロでは少しのんびりし過ぎちゃったかも。ごめんね、バナラも色々忙しいのに」

「それはいいさ。コニーはしばらくローズマリーさんと会ってなかったんだから。帰省

したときくらい、顔を見せてあげないと」

「うん。ありがとう、バナラ」

なるほど、コニーの家にも行っていたのか。

二人の仲は既にローズマリー公認ですか。

「ところで、今日はどうしたんだ？ ビークルは問題ないなら……何か忘れ物か？」

「あ、それもあるんだけど……これを見てもらいたくて」

バナラは「カモミール・タイプⅡ」のバックパーツを示した。

よく見ると、そこには少しだけ錆が浮いたビークルのアームパーツが積まれている。

ただのアームパーツではない。

トライデントアームだった。

ポセイドンが使うような三又の槍を高速で突き出す、強力な刺突タイプの近距離武器だ。

前チャンピオンのジンジャーが搭乗する「ブラックオデッセイ」も装備している。

「トライデントアームか。こいつはジュニパーベリー号から？」

「うん、船の残骸の中に放置されていたんだ。僕が使ってもいいかな？」

プレイヤーにとっても、こいつはありがたい武器だ。

ソード系とは挙動が違って慣れないうちは戦闘で使いにくい——特にフィールド戦——が、敵の動きを止めながら連続で刺突をぶち込み高DPSを叩き出せるので、タイムンのビークルバトルでは重宝する。

ゲームでもジュニパーベリー号の宝箱からタダで入手できるので、ミーム村のイベントをこのタイミングでクリアしないプレイヤーであれば、確実にビークルバトルトナメントに持ち込むだろう。

俺もこの武器をエンディングまで愛用していたことがある。

何にせよ、こいつをバナラが使うのならば、彼の戦力を大幅にアップすることができ
るはずだ。

ガトリングアームとトライデントアーム。

公式が薦めるデスマッチの組み合わせだ。

「そうだな、問題ないだろう。だが、一応パーツの稼働に問題が無いか調べて調整した方がいいかもしれない。博士、お願いできますか？」

「うむ、任せておけ」

「ありがとうございます」

バナラのビークルについては方針が決まったので、俺はもう一つの懸念事項へ水を向

けた。

「ところで、忘れ物つてのは？」

「あ、そうだった。砂漠から戻って来たときに、ピジョン牧場へはすぐ寄つただけで、その時エリツヒにピートの手紙を渡すのを忘れていて……」

バナラは予想外に重大な要件を忘れていた。

スームスームへ向かうときに通るヒバリ田園地帯で、プレイヤーはその農家に住む少年ピートからピジョン牧場のエリツヒに宛てた手紙を預かることになる。

これは一見ただのお使いイベントだが、この少年二人の文通を手助けすることが、ノーマルルトの最終決戦で非常に重要なフラグとなるのだ。

端的に言えば、エリツヒがピートから貰う紙トンビ——どう見ても紙飛行機——を見たナツメグ博士が飛行ビークルを完成させて、敵の飛行船へと乗り込む準備が整う。

今回は俺が居るので、紙飛行機くらいの着想は博士に与えられると思つていたのだが……事前にオットーとウィリーの「フラップフライヤー」の改良案として話してみたところ、反応はそれほど芳しいものではなかった。

もちろん、揚力に関しても図に描いて説明してみた。

世紀の天才ナツメグ博士がこれでも動けないということとは、このイベントは先回りすること自体が難しいのだろう。

それこそ、実際に飛行船『グランドファイナーレ』が飛んでいる姿を目の当たりにするとかな。

そうになると、ピートとエリツヒのイベントはすっかりこなしておいた方がいい。

まったく、やはりバナラは少し抜けているな。

「今ならエリツヒは牧草地に居るはずだ。行ってみるか」

「そうだね。あ、コニーはどうする？」

「一緒に行く」

うん、知ってる。

あなたが意味も無くバナラの傍を離れるわけが無いよね。

「じゃあ、博士。先にトライデントアームの点検をお願いします。換装の方は戻ってきたら俺がやりますので」

「ああ、任せるぞ」

博士に仕事を押し付けたわけではない。

部品の擦り合わせの確認などの細かい作業は博士が担当し、ピークルのパーツ交換などの力仕事は俺が片付ける。

役割分担だ。

メリー乳業の羊が思い思いに草を食む牧草地に、オットーとウィリーの弟で三男のエリツヒは佇んでいた。

彼は兄たちと違いビークルにはあまり興味を示さず、牧場の仕事を積極的に手伝っている。

年齢からは想像もつかないほど礼儀正しく、言葉遣いもそつが無い。

エリツヒの振る舞いが男の子として健全な状態かはともかくとして、三人の母親がそれを喜んでいるのは確かだ。

「あ、グレイさん。いらっしやいませ。ミルクですか？」

エリツヒはいつも通り丁寧に対応してくる。

相変わらず、エリツヒとは近所のおつさんと少年の間柄とは思えない堅苦しい商売の会話から始まるが、まあ俺が直接この子に頼むことといえば、搾りたてのミルクの調達くらいだ。

チーズはエリツヒたちの父親が管理しているし、羊を潰して肉を売ってもらうときも当然ながら年配組に声を掛ける。

「いや、今日は君に届け物があつてね」

「届け物……僕に、ですか？」

「うん、これだよ」

エリツヒの前に進み出たバニラは、ピートに一通の手紙を渡した。

便箋の裏側を見ると、エリツヒにも差出人がわかったようだ。

「あー！ ピートからだ！」

エリツヒは数少ない年の近い友人の手紙に、顔いっぱい喜びを浮かべながら慌ただしい手つきで便箋を開く。

珍しく年相応の表情だ。

エリツヒは広げた手紙を一度斜めに速読み、二回ほど最初から読み返したようだ。

読み終えた手紙から顔を上げたエリツヒは、改めてバニラへ向き直った。

「お兄さん、あなたがピートから手紙を預かって来てくれたんですね？」

「うん、前にヒバリ田園地帯の農家に寄ることがあったからね」

「そうでしたか。本当にありがとうございます。離れた場所に住んでいるので、ピートとはこうして手紙をやり取りできる機会も少ないんです」

確かに、この世界には伝書鳩と鉄道郵便くらいしか手紙の輸送手段が無い。

エリツヒが正規のルートでピートに手紙を出そうとすると、ハツピーガーランド駅までの郵送料にプラスしてヒバリ田園地帯までビークル運送料が掛かることになる。

数年前までは、ここからネフ口駅までの運送料も必要だったはずだ。

まあ、ピジョン牧場駅が完成してからは、牧場からハッピーガーランドまで直通で鉄道郵便が使えるので、少しはマシになったかもしれないが、それでも子どもの小遣いでそう頻繁に遠くへ手紙など送れるものではない。

そのことに考えが及んだコニーは、遠慮がちにバナラへ声を掛けた。

「ねえ、バナラ。私たちはもう少ししたらハッピーガーランドに行くでしょ。どうせなら、エリツヒのお返事も届けてあげてくれない？」

「そうだね。僕は一旦スームスームの方へ行かないといけないし。エリツヒ、ついでに君の手紙も運んであげるよ」

「うくん、お返しには僕からも手紙を書くというのもいいんですけど……」

エリツヒは少し考えこんでから、閃いたとばかりの表情でバナラを見上げた。

「そうだ！ どうせなら僕が作ったチーズをピートの家まで届けてくれませんか？」

この少年、なかなか遠慮が無いな。

まあ、原作通りではあるか。

ピートの手紙を渡したエリツヒから預かるのは、これまた大切なイベントアイテム『エリツヒのチーズ』だ。

お使いイベントは健在だな。

しかし、やはり現実ではゲームと同様には片付かない問題がある。

それは輸送の時間と経路の問題だ。

今ここでエリツヒのチーズを預かった場合、俺たちはそれを担いでガラガラ砂漠を渡らなければならぬ。

未だハッピーガーランドまでの鉄道は復旧していないのだ。

チーズが保存食とはいえ、この世界ではまともな密封などできないことには変わりなく、さすがに食い物をガラガラ砂漠を超えてさらにヒバリ田園地帯まで運ぶのは遠慮したいところだ。

運送のプロであるデルロツチ貿易のピークルをまた雇うことも考えたが、チーズ一つのために大騒ぎするのもな……。

この世界でも大切なイベントになる可能性が高いとはいえ、そこまで急ぐほどのことではない。

まあ、俺が先んじて博士に紙飛行機を見せて揚力について説明しても進展がなかったことから、紙トンビに対して懐疑的なものもあるが……。

「エリツヒ、さすがに今チーズを預かるのは無理だ。俺たちはピークルバトルトーナメントに合わせてハッピーガーランドへ戻る予定だから。すぐにヒバリ田園地帯へ向かうことはできない」

「そうですか……」

「ただ、もうすぐペンシル鉄道が復旧すると思う。恐らくトーナメント後になるだろうが、その時なら鉄道便で荷物を送れるはず……」

「わかりました！　じゃあ、早速準備してきます」

エリツヒは最後まで聞かずに家の方へと走り去っていった。

「あの……グレイ」

「ん？　どうした？」

後ろから遠慮がちに掛けられた声に振り返ると、頭に疑問符を浮かべたバナラの顔が目に入った。

「ビークルバトルトーナメント、って？」

「ああ、毎年開催される大規模なビークルバトルのイベントだ。全国から集めた8人のビークル乗りをトーナメント形式でぶつけ、勝った奴が前年度チャンピオンと対決する。まあ、距離の関係上、集まる奴はほとんどがこの地方のビークル乗りだが……。それよりも特筆すべきは、現ランクだけでなく最近の活躍や知名度にも重点を置いて出場者を選んでいる点だな。だから、新進気鋭のDランクやCランクが上位に行く可能性も大いにあり得る。トーナメントチャンピオンにはSランクのさらに上のKランクが授

与されるから、一攫千金も夢じゃない。因みに、今年は俺も出場する予定だ」

「うわあ、それは凄いね……」

バナラは完全に他人事のような反応だが、そうは問屋が卸さない。

「多分、君も出れるぞ。っていうか、空気が無くても俺とフェンネルが推薦すれば捻じ込める」

「え？」

「言ってなかったか？ 君の出場は決定事項だ」

「聞いてないよ！」

バナラは大声を出して慌てているが、まあ彼が出場するのは恐らく確定した運命だ。

俺は不安そうに顔面を蒼白にするバナラを尻目に、悠々と工房に戻っていった。

74話 ミームー村へ小旅行

バナラの「カモミール・タイプⅡ」の右アームをトライデントアームに換装し終えた俺は、予定通りミームー村へと向かった。

開通して間もない鉄道を使つての移動だ。

バナラとコニーも観光がてら一緒に来ている。

「凄い絶景だね」

「そうだね。小さい頃に乗つた遊覧船を思い出すよ」

同じコンパートメントのコニーとバナラの視線は、車窓に広がるスキトール湖の絶景に釘付けだ。

二人つきりにしてやりたい気がしないでもないが、さすがに知り合いをシカトして立ち去るのも変なので、俺は二人に窓側を譲つて通路側のシートでのんびりと寛いでいる。

「コニーもミームー村へ行くのは初めてなの？」

「うん、初めてだよ。去年あたりから噂は聞くようになったけど、それまでは名前も聞い

たことなかったからね。鉄道が開通したのだから最近だし」

今やミームー村へは汽車で直通だ。

水上ビークルを運用する盗賊と遭遇する心配も無く、湖畔を走る汽車で景色を楽しんでいれば、二時間後には自動でミームー村駅に到着である。

少し前まで耐水仕様のビークルで半日掛かっていたのが嘘のようだ。

「因みに、ミームー村まで鉄道を伸ばしたのはグレイだよ」

「え?!? そうだったの!?!」

バナラはまさかの俺の名前の登場に驚いてこちらを振り返った。

しかし、コニーの説明は端折り過ぎだ。

確かに、ミームー村までの路線を建設するために、『デュープアングラー』の始末からミームー村の資源調査と建築資材の確保まで、色々と根回ししてきたがそれだけだ。

俺が自ら陣頭に立ってクレーンを運転したわけではない。

「成り行きで開発を支援しただけさ。ちょうどスキートル湖に、巨大魚なんて言われて盗賊の潜水ビークルが出ていた時期でな。当時はピジョン牧場駅も建設途中で、そっちの工期にも影響が出そうだったから討伐したんだ。ミームー村へ路線を引くのを援助したのはついでだよ」

バナラは巨大魚ビークルに興味がありそうな様子だったが、端的に言ってしまうと、

このサブイベントは俺が掻っ攫ったようなものだ。

現実世界では、この時期にミームー村への開拓に着手して、すぐに路線を開通させることなど不可能であり、バナラも原作のサブイベント全てにこの世界で介入しているわけではないのは知っているが、それでも少し後ろめたい部分はある。

ナツメグ博士のレクチャーや長期に渡るジンジャーの修行など、色々とフォローはしているつもりだが、バナラから奪ってしまった経験がシナリオにどのような影響を及ぼすかはわからない。

果たして、今後の展開は……。

「(どうなることやら……)」

「ん？ 何か言った？」

「いや、何でもない。それよりも、だ。ミームー村は上質なトリユフの産地でもあるが、湖の魚もそれなりに名物でね。不漁でなければ向こうで食べられるはずだ。君たちもきつと気に入るだろう」

「へえ、それは楽しみだな」

「そうだね」

そして、汽車は崖を切り崩した湖畔を過ぎ、俺たちはミームー村へ到着した。

貨物車から降ろしたピークルに乗り、俺たちは村の居住区まで進んでピークルを駐機する。

湖畔の崖が切り崩され、村の中心に駅が建設されたとはいえ、ミームー村の様相はそれほど変化していなかった。

まあ、近代化されたといっても、ピークルと鉄道が持ち込まれたくらいだ。

そう大きく村の景色が変わるものでもないか。

「凄く長閑なところだね。あー！ 向こうに山羊が居るよ」

「本当だ。こっちは羊じゃないんだね」

そういえば、ピジョン牧場に山羊はほとんど居ないな。

肉の味は圧倒的に羊が上であり、乳やそれを原料としたチーズを作る場合も、基本的には羊の方が優れている。

しかし、山羊のチーズにも一部に美味しいものはあるので、ナツメグ邸でもたまにミームー村から仕入れているのだ。

せっかく来たのだから、今日も少し買って帰るか。

はしやぐバナラとコニーを見ながらそんなことを考えていると、横合いから俺に声を掛ける者たちが居た。

「ぐ、グレイさん!? こ、これはこれは！ 今日はまだどのようなご用で……?」

「おや、あんたはあの時の恩人さんじゃないか。よく来たね」

村長のマルローと……村の漁師のマツカートニーの奥さんだな。

当然、俺を歓迎していない慌てた声の方が村長だ。

「どうも、マルロー村長にマツカートニー夫人。用事はあるといえばあるのですが、今回は遊びに来たのがメインですよ。一応ね」

村長は俺が抜き打ち査察にでも来たと思っていたのだろう。

あからさまにホツとしている。

まあ、気が向いたら住民からアンケートでも取ってやるさ。

最近、村長が尊大な態度になっていませんか、村の収益の一部を着服している様子はありませんか、つてね。

今は小悪党を相手にしていても仕方ないので、俺はバニラとコニーの方を示して紹介した。

「こちらの二人は俺と同じトロット楽団のメンバーです。ボーカリストのコニー、それにはトランペット奏者のバニラ。マツカートニー夫人、ここの鮮魚料理を二人に食べさせてやろうと思ひまして……」

「ああ、任せときな。腕によりをかけて、最高の料理をご馳走するよ」

バニラとコニーは表情を輝かせた。

なかなか苦難の多い人生を送っている二人だが、こういう時くらいは思いっきり楽しんでもらいたい。

さて、バナラとコニーの方はこれでいいとして、俺も自分の用事を片付けなければな。俺はナツメツグ博士からマルガリータのことを聞いて、わざわざこの村まで出向いてきたのだ。

とりあえず、彼女の所在を確かめないとな。

「ねえ、ちよつといいかな？」

しかし、村長たちにマルガリータのことを聞こうと思っていたら、俺が口を開く前に後ろから呼び止められた。

俺は後ろから掛けられた声に振り返った。

この村では珍しい若い女性の声だったが、振り向いた俺の目に飛び込んできたのはまさに絶世の美女というに相応しい人物だった。

ラフなシャツに分厚い茶色の前掛けと服装は完全に作業着で、髪もざつと梳かしただけのようで化粧つ気も無い。

しかし、顔の素材の良さはこのゲームにおける美女の代名詞であるセイボリーにも負けていない。

そして、俺は彼女の顔に見覚えがあった。

以前、ミームー方面から来た馬車に乗っていた彼女を見ている。

「あんたが……グレイ？」

向こうは俺のことがわかつているらしく、真つ直ぐこちらに向かつてきて問いかけた。

「ああ、そうだ。君は船大工のマルガリータだな？」

「うん、そうだよ。この村の船は全部あたしが面倒見てるんだ」

彼女こそ、俺がミームー村を訪れた最大の目的だ。

数日前に、彼女はわざわざ俺の家を訪ねてきたのだ。

当然、俺は留守だった。

「君のことはナツメツグ博士から聞いたよ。先日は対応できなくて、すまなかつたな。ちようど、昨日の夜にピジョン牧場に帰ってきたものでね」

「いや、あたしの方こそ悪かつたよ。突然、押し掛けちゃつてさ。……でも、よかつたよ。ようやく、あんたに会うことができた」

こんな美人に追いかけられるのは悪い気はしないな。

しかし、ここで横合いから邪魔をする者が約一名。

「グレイさん、もしやあなたの……用件というのは……」

「ええ、彼女に会いに来たんです。だから、もう大丈夫ですよ」

追い払うような雰囲気ですと、マルロー村長もようやく悟ってその場を後にした。

因みに、マツカートニー夫人は空気を読んだのか、既にバナラとコニーを連れて立ち去っている。

気を遣わせてしまったな。

今度、彼女には何か差し入れを持ってこよう。

村長？ そんな奴は知らん！

彼のことはマルガリータも完全にシカトしていたが……まあ、今ここで事情を根掘り葉掘り聞くこともないだろう。

「ところで……君がうちを訪ねてきたのは『ディープアングラー』の件だったか？」

「そうだよ。あんたにとつては今更な話だろうけど、やっぱり直接お礼を言いたくてさ。本当に、ありがとうね。あの巨大魚にやられた連中のなかには、あたしの親戚の爺さんも居たんだ。あんたのおかげで、彼の無念を晴らせたよ」

先日、マルガリータがナツメツグ邸を訪れたことなどは博士から聞いていたが、彼女はこの件の礼を言うためだけにうちまで来たのだ。

本当に律儀なことである。

「あんたには早くお札を言いに行こうと思っただけ、あたしも自分のビークルを手に入れたのはつい最近なんだ。皆と一緒に荷馬車で買い出しに行くことはあつたけど、私用で寄り道するのも考えものでね……」

「いや、俺もミーム村には一度来ただけで放置状態だったからな。『ディープアングラー』の討伐にはこちらの事情もあつたことだし、気にしないでくれ」

「いや、そういうわけにはいかないよ。この恩はきちんと返させてもらおうから」

彼女は別に恩を売る対象じゃないんだけどな……。

ゲームのメインストーリーには関わらないはずの人物だが、まあ険悪な仲になるよりはマシか。

「そうだ！ お礼になるかはわからないけど、あんたのビークルを整備させてくれないかな？ いつでもタダで引き受けるよ。……まあ、正直に言くと、あんたのビークルに興味があるっていうのも理由なんだけどね。『ジャガーノート』だっけ？ 凄い性能のビークルだつて聞いたよ」

確か、ナツメッグ博士もこのことを言っていたかな。

マルガリータが『ジャガーノート』に興味を持っていると。

「ダメかな？ 簡単な修理と燃料補給くらいならできると思うんだけど……」

簡単な修理と燃料補給、か。

マルガリータは初見でビークルの整備をこなしてしまうほどの技術者で、今回はナツメッグ博士からビークルに関するレクチャーも受けている。

ほぼ確実に、並の整備士よりも質のいいメンテナンスを提供してくれるはずだ。

「願ってもないことだ。博士から君は筋がいいと聞いている。是非やってくれ」「本当!？」

「ああ。ただ、『ジャガーノート』は午前中にナツメッグ博士に整備してもらったばかりだから、今は特に修理する箇所も無いと思うが……。まあ、エンジンルームとかも開けて構わないから、好きに見るといい。あ、武装には注意してくれ」

「やったー！ ありがとう！」

いずれ彼女の整備が本当に必要な時が来るかもしれないから、今回は機関部の確認だけ先にしてもらえばいい。

俺は軽い調子でマルガリータにビークルの中身を見せた。

しかし……いざ実際に『ジャガーノート』を整備してもらうと、彼女はエンジンの燃料系統に僅かなバリエーションを発見した。

昔の自動車のキャブレターなどで偶に起こっていたアレだ。

マルガリータにエンジン内のカスを丁寧に取り除いてもらった俺は、整備したての

「ジャガーノート」を早速とばかりに運転してみる。

「驚いたな。俺はもちろん、博士も見逃していたのか……」

「どう？ 何か変わった感じはする？」

「うーん、普通に動かしただけではそこまでわからないかな……。だが、エンジン音と排気音は確実に今までよりスムーズで静かになった」

それに、いざ戦闘行動を取ってみれば、動きにも違いが出るかもしれない。

ふんだんに使ったミスリルのパーツとナツメツグ博士の設計によって、「ジャガーノート」のエンジンの整備性と信頼性はかなり高いので、こういった問題が起こることは稀だ。

しかし、マルガリータはそれを発見して対処した

やはり、彼女は一流の整備士だ。

この瞬間、俺の中でマルガリータは「ジャガーノート」を任せられる数少ない人物になった。

「そうだ、どうせなら今度はうちに来てくれないか？ ここよりもナツメツグ博士の工房の方が設備は充実しているはずだから、もし機会があったら向こうでも整備してもらいたい。もちろん、報酬は出すよ」

「え!? そっちの工房を使っているの!？」

「ああ、ナツメツグ博士もダメとは言わないだろう」

「行く！　すぐにでも行けるよ！」

「いや、今日は俺もこっちに泊まるつもりだから、すぐには……」

結局、マルガリータは明日俺がピジョン牧場へ帰るとき、一緒に工房へ来ることとなった。

75話 ナツメツグ邸にご招待

翌日、ミームー村の船大工マルガリータを我が家へ招待することに決まり、俺とバナラとコニーの一行は、一名の同行者を増やしてピジョン牧場へ向かうこととなった。

俺の「ジャガーノート」とバナラの「カモミール・タイプⅡ」に続き、マルガリータの「クラフトマンシップ」が汽車の貨物車に積み込まれる。

ここまで来て離れた席に座るのも変なので、俺たちはまた同じコンパートメントに腰を下ろした。

バナラとコニーも昨日の段階でマルガリータと会っているので、既に初対面のぎこちない感じは無い。

「ええ!? そうなの!?! あの村の船、全部マルガリータが造ったんだ。結構な数があつたと思うけど……」

「うん、何年か前は死んだ父さんのものもあつたけど、それも二年前の巨大魚の件で全滅。現役の船はほとんどがあたしのお手製だよ」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、私たちが昨日ご馳走になった魚も、マルガリータの船で

獲ったものなんだね」

「そうなるかな。まあ、実際に漁に出るのはマツカートニーとかの男衆だけだね」

特にコニーはすっかり打ち解けて、マルガリータと仲良く話している。

「でも、凄いなあ。女の人で船大工、しかもビークルの整備もお手のものなんですよ？
格好良いよねえ……憧れちゃう」

「いや……それを言うなら、コニーの方こそ人気の歌手なんだから、世の女性の憧れの的
でしょ。あたしみたいなガサツな女と違って、その……可愛いし……」

「ええ〜!？ そんなことないよお。マルガリータこそ美人じゃない。スタイルだつてい
いし、セイポリーにも負けてないよ」

「な、何言ってるのさ!？」

さすがにあの女子トークには入れないな。

肩身の狭い俺とバナラは、おとなしく野郎どもだけで話すことにした。

「バナラ、この後はどうするんだ？」

「二度、ネフロに戻るよ。コニーのお母さんとお隣さんにお土産を持って行くから」

今回のミーム村への旅行で、バナラとコニーは山羊のチーズを買っていた。

俺のおすすめのペコリーノ・サルドに似たチーズだ。

比較的、塩気が薄いので、ローズマリーの体調でも余程大量に摂取しなければ大丈夫

だろう。

チーズ自体は消化がいいので、病人にも向いている。

「もう特に急ぐような用事も無いし、また少しネフロでのんびりするよ。コニーもその方がいいだろうから」

「わかった。出発前の集合はコニーの家の近くでな。君はジンジャーの所で過ごすのか？」

「そのつもりだよ。……はあ、ビークルバトルーナメントか……。ジンジャーにも相談しないと……」

バナラはハッピーガーランドに到着した後のことを思い出して、またナーバスになってしまった。

まあ、ジンジャーのアジトで過ごすのなら、彼もバナラに何かしらの配慮はしてくれるだろう。

そういえば、俺は帰ってきてからまだジンジャーに会っていないな。
一度くらい顔を出さないと。

俺はネフロ方面のワグテール渓谷の入口でバナラとコニーを見送り、マルガリータを連れて自宅に向かった。

マルガリータの運転する「クラフトマンシップ」と連れ立って、俺は「ジャガーノート」を丘の上へ進める。

そして、いざ家まで来てみれば、工房の前には怪訝な表情をするナツメツグ博士が居た。

「……ミームー村から若い娘を攫ってきたのか?」

「何でそうなるんすか!?!」

縛り上げて俺の「ジャガーノート」に括りつけているならまだしも、マルガリータは自分のビークルのコクピットだ。

冗談にしてもひでえものだ。

「マルガリータにはここの設備を使って「ジャガーノート」を見てもらいたいと思いましたがね」

「ほう?」

俺はドヤ顔でナツメツグ博士に説明する。

「昨日、ミームー村で軽く「ジャガーノート」のエンジンを見てもらったのですが、彼女が僅かなバリエーションを発見して取り除いてくれましたね。駆動にそれほど影響のあるものはなかったのですが、エンジン音は明らかに違います。博士の言った通りでした。マルガリータは間違いなく超一流の整備士です」

「ちよつと！ 持ち上げすぎだよ……」

俺のシャツを指で摘まんで引つ張るマルガリータを横目で見ると、赤面しながら俯いていた。

ふむ……このアングル、いと素晴らしきかな。

気の強そうな大柄な美人が照れる姿は、いくら見ても飽きない。

「ただ、ミームー村の設備は貧弱ですからね。まあ、今まで車の一台すら無く木造船しか造つてなかつた村で、あれだけビークルの整備ができる時点で大したものだとは思いますが……。せっかく一流の技術者に会えたことですし、もう少しいい環境で細かい整備をしてもらえたらと思って、ここまで連れてきたんです。幸い、本人も乗り気ですしね」

ナツメツグ博士は俺の言葉を聞いてしばらく考え込んだ後、顔を上げてマルガリータに笑顔を向けた。

初対面だと分かりにくいのが、口角が上がっているの間違いない

「よかろう。ちようど、わしの研究も一段落しておる。ついでにマルガリータにはもつと色々教えてやろうかの。先日の簡単な講座だけでは、ビークルに関して余さず伝授したとは言い難いからな」

「え!?! いいんですか!?!」

マルガリータは食い気味に反応した。

まあ、確かにナツメグ博士の教えを直接受けられるということは、このネットの無い時代においては相当に贅沢な勉強だからな。

「ああ、もちろんじゃ。今後はミームー村でもピークルを整備する機会が増えるじやろう。何より、お前さんには生来の器用さと丁寧さがある。グレイと違ってな。埋もれさせるには惜しい才能じゃ」

悪かったな。

どうせ、俺は整備士としては並以下ですよ。

楽器や銃の扱いには不自由しないので、俺が特別に不器用というわけでもないだろうが、やはりエンジンルームの配線を弄るような細かい作業は苦手だ。

対象が「ジャガーノート」ならある程度の修理もチェーンガンの手入れも問題ないが、他のピークルだと応急修理が精一杯だ。

そういう意味では、俺に工作系の才能はあまり無いのだろうな。

少なくとも、天才クラスのマルガリータやナツメグ博士には遠く及ばない。

「教材はまず鹵獲品のピークル、次に「ジャガーノート」じゃ。一応、わしも後ろで見ておくが、まずは好きにエンジンを調整してみなさい」

「はー」

当然のように、俺が分捕ってきた盗賊ピークルのへそくりパーツは、湯水のように使

い倒される。

まあ、貴重な品でもないし、いいんだけどさ……。

「グレイ、お前さんはここでは役立たずじゃ。飯でも作っとれ」

「へいへい。それじゃ、マルガリータ。【ジャガーノート】をよろしく頼むよ。君に任せれば安心だ。パリを見逃す博士よりもな」

「さ、最善を尽くすよ」

「ふん！ お前さんもあと数年して老眼になればわかるわい」

俺はナツメグ博士の嫌味を軽く流して踵を返し、早速キッチンへ向かった。

「……とは言ったものの、まだ夕食の準備には早いよな」

既に昼は回っているがまだ日は高い。

ナツメグ博士とマルガリータがどれだけ工房に籠るかは知らないが、今からガチャガチャとやるからには、二人が腹を空かして出てきた頃には晩飯の時間帯だ。

俺はそれまで特に用事も無いので、数時間は暇になるわけだが……。

「しやーない。色々とするか」

昨日はミームー村に行ってしまった、一昨日は簡単にステーキを焼いただけで済ませたので、今日は少し時間を掛けてでも手の込んだ料理を作ることしよう。

それに、今日は客（マルガリータ）も居る。

伝統あるナツメグ邸のシェフ長として、俺はお客様を満足させられる料理を提供しなければならぬ。

「牛肉は半分以上余っているな」

普通なら、この時代背景の世界で生肉など何日も置いておけるものではないが、我がナツメグ邸には冷蔵庫がある。

二十世紀版の三種の神器に数えられた家電製品だ。

おかげで慌てて買い物に行かなくても、こうして客をもてなす料理の材料を確保しておける。

だが、今の食料事情は完璧とは言い難い。

「チーズと加工肉、瓶詰は在庫がどっさり。卵は昨日買った。香辛料と調味料は変わらず。ハーブは日持ちのする乾燥粉末のストックだけ。果物と生野菜は俺が居ない間も補充済み。根菜類は……お裾分けがあるな」

一昨日、牛肉を買ったときに他の食材も少し補充すればよかったな。

冷蔵庫があるとはいえ、今回は一か月ほど家を空けたので、博士一人で調理できない食材は基本的に残っていない。

だが、昨日のうちに卵を近くの農家から補充したので、俺が帰ってきたことを知った

ピジョン牧場の連中が、ついでに野菜類を分けてくれた。

状況は多少マシと言える。

「……ま、やってやれないことは無いか」

俺は早速、夕食の準備に取り掛かった。

まずは手間というか時間が掛かる煮込み料理から……と行きたいところだが、肉を切らないことには何も進められない。

俺は残りの一キロ余りの牛肉を前にしばし考え込んだが、大体の大きさの配分を確認すると包丁を握る。

一昨日のステーキよりは薄めの厚切りが三枚、残りは全て一口大に牛肉を切り分けた。

厚切りの切れには軽く塩コショウして味を馴染ませておく。

「さて、始めるとするかな」

早速、細かい切れの牛肉をフライパンでぎつと炒める。

全体的に肉の周りから赤みが無くなったら、取り出して鍋の方に投入した。

さらに、少し大きめにカットした人参と玉ねぎも鍋に入れ、水を満たして火にかける。

ここまででは日本に居た頃に何度も繰り返した手順だ。

当時の俺が使っていた肉は、こんな良質なブロック肉をカットしたのではなく、特売の切り落としか豚肉だったが……。

何はともあれ、勘のいい人ならもうお気づきだろう。

俺が作っているのは日本人の国民食カレーだ。

日本では、レトルトや市販のルーという偉大な発明により、カレーライスは身近でリーズナブルな料理という印象が強いが、この世界ではそこまで普及している家庭料理ではない。

かなり辛めの本格的なスープカレーっぽい料理は、レイブン砦周辺などの砂漠地帯では普通にあるけどな。

少なくとも、今ならまだ俺のビーフカレーはおもてなし料理として通用するのだ。

「よし、次だ」

今度はフライパンに玉ねぎを投入した。

そのまま時間をかけて餡色になるまでじっくりと火を通し、これも炒めておいたバターと薄力粉に合わせる。

続けざまの作業でなかなか面倒だが、市販のルーが無い以上は仕方ない。

これが手作りカレールのベースとなるのだ。

次は、バターのココとじっくり炒めた玉ねぎの甘味が合わさったルーのベースに、あ

らかじめ作っておいたカレーパウダーを投入する。

レイブン砦から仕入れた香辛料で、既にカレー粉は完成させている。

「お、いい感じだ」

トロミのあるカレールーがほぼ出来上がると、懐かしい食欲をそそる香りがキッチン全体に広がり、暴力的な香りが俺の鼻腔をくすぐった。

この香りは凶悪だ。

恐らく、すぐに工房の方まで届く。

もしかしたら、博士とマルガリータも匂いにやられて、早めに切り上げてくるかもしれない。

「少し、急ぐか」

鍋に浮いてきた灰汁を掬い取った俺は、手早くカレールーを流し込み、次の料理の準備へと移った。

大振りに切った方の牛肉は、既に塩味が馴染みコシヨウによつて臭みが抑えられている。

急いで小麦粉と卵とパン粉を用意し、深めのフライパンに油をたっぷり注いで火にかけた。

そして、どうにか工房の二人が出てくるまでに、ビーフカツの方も完成した。

「グレイ！ まったく、貴様という奴は……」

「いい匂い……」

ナツメグ博士はいつも通りの夕食の時間にマルガリータを連れてダイニングへやって来た。

まあ、あのカレーの芳香に中てられて、よく我慢した方ではないかね。

博士は忌々し気に文句を言っているが、あのまま作業に熱中させていたら、一時間単位で夕食を摂るのが遅れていてもおかしくなかった。

飯が冷めるのを防いでやったのだから、むしろ感謝してもらいたい。

マルガリータの視線はもう料理に釘付けだ。

俺は急いでサラダをテーブルに並べ、二人を椅子へ促した。

「ほら、早く席について召し上がれ。今日はお客様が居るので、豪華に牛肉祭りですよ」
残り物の処分とか言ってはいけない。

新鮮な牛肉は、少なくとも鶏や羊より高価で、うちの食料事情だと猪や鹿よりも貴重なのだ。

「ふむ、コートレットに……砂漠の香辛料を使ったスープか。なかなか美味い。香辛料の組み合わせの完成度が異様に高いの……」

ナツメツグ博士もパンに浸けたカレーを口に入れると、すぐに機嫌を直して料理に集中した。

即座にカレーのスパイスの使い方のレベルが高いことに気付く辺り、博士も大分グルメになってきている。

もう乾きものばかりの生活には戻れないだろうな。

そして、マルガリータはといえば……。

「美味しい……」

どうやら、かなり気に入ってくれたようだ。

しばらくの間、マルガリータは食欲をそそる香りの元であるカレーを味わっていたが、やがてナイフとフォークを手にとってビーフカツの方も口に入れた。

「っ！ 何これ!? 濃厚で、でもベチャつとしてなくてサクサクで……凄く美味しい!」

そうか……。

ミームー村も大分豊かになったとはいえ、少し前まではトロツトビークルの情報すら入らないような僻地の貧乏集落だったのだ。

魚のムニエルくらいはあったとしても、植物油を大量に使う揚げ物など縁の無い代物だったことだろう。

パン粉を使って衣を作る調理法も向こうには無さそうだ。

最近はトリュフの輸出などでミームー村の財政は潤っているが、それでも異質の文化が浸透するには時間が掛かる。

「気に入ったかい？ そいつは卵とパン粉を使った揚げ物だよ」

「へえ、そうなんだ……。不思議だね、パンが肉みたいな味になるなんて……」

「はい？」

マルガリータは何やら信じられないことを言い放った。

パンが、肉の味？

ビーフカツ全体がパンで出来ていると思ったのか？

「あ……ち、違う！ これだね！ この周りのサクサクがパン！」

「正解……」

「わかるから！ パンで包んで……えと……油で焼いて……」

慌ててビーフカツの断面を確認したマルガリータは、取り繕うように調理法を予想し始めたが……まあ、パンで包むとか油で焼くとか言っている時点でお察しだ。

味音痴というわけではないようだが、彼女が料理のりの字も知らないことは明らかになったな。

「なるほど……マルガリータは器用だが料理は苦手、と」

「に、苦手なわけじゃない！ 普段やらないだけで……」

はい、出ました。

メシマズ系女子がよく言うセリフですね。

「ふむ、コニーも昔そのようなことを言っておったな」

「ああ、そういえばそんな設定も……」

公式設定だな。

奇しくも、コニーの件も揚げ物絡みだ。

初期のコニーは『煮る』と『焼く』しか調理スキルを所持しておらず、料理本を渡す

と『揚げる』スキルを習得するという、何とも皮肉なシステムだった。

マルガリータにも料理本をプレゼントした方がいいか？

まあ、彼女には工作と整備の腕があるから、別にいいのではないかね。

博士の不用意な一言が追い打ちとなって、さらにヒートアップしているが。

「あ、あたしだって！ やろうと思えば料理くらい……」

「うん、大丈夫だよ。うちに来れば飯くらい食わせてあげるから」

「だ、だから！」

「カレーはまだあるよ。おかわり要る？」

「うう……要る」

うん、赤面する美人というのはいいものだ。

それにしても、今日はマルガリータの少し意外な一面が見えた一日だった。

76話 マルガリータの居る日常

翌日、俺の姿はまたしてもナツメグ邸の厨房にあった。

コンロもオーブンもフル稼働で、俺は先ほど完成して粗熱を取ったトマトソースを瓶に詰めている。

もう少しすれば、また俺はハッピーガーランドへ向かうことになるので、その前に家事を片付けなければならぬのだ。

洗濯と掃除はぼちぼち済ませているが、特に重要なのは料理である。

今日の三食だけでなく、消費された分の保存食なども同時並行で作っておき補充しておく必要がある。

さすがに燻製やソーセージを作っているほどの暇は無いので、瓶詰や焼き菓子のストックしか手を付けていないが、まあ次はそれほど長くは掛からないだろう。

うちの保存食が尽きるくらいの期間、俺が留守にしななければならない場合は……残念ながら、博士にはまたハードチーズと市販の干し肉の生活に戻ってもらうことになるな。

それに、何だかんだ言って、留守にする期間のストックよりも、俺が居る間に出す作

り立ての料理の方が重要だ。

ナツメグ博士だけでなく、今のうちにはマルガリータも来ているからな。

今日も数時間前には家の前に彼女の「クラフトマンシップ」が停まる音がした。

俺への挨拶もそこそこに、マルガリータは工房の方へ向かい、博士と何やら作業をしている。

俺の「ジャガーノート」が魔改造されているのか、それとも妙な発明品を作っているのか……。

少なくとも、日々「ジャガーノート」のメンテナンスというか改良が進んでいるのは確かだ。

それに関しては本当にありがたいと思っている。

俺の保存食作りも一段落して、オーブンの様子を眺めながら一息入れていたところで、マルガリータとナツメグ博士は工房から出てきた。

そろそろおやつの時間かな。

当然、準備はしてある。

俺はテーブルに置いてあった皿から虫よけの蓋を外し、冷蔵庫から冷やした紅茶を出してコップに注いだ。

そろそろ暑くなってきたので、飲み物は冷たい方がいいだろう。

「お疲れ様です、二人とも。お茶の用意が来ていますよ」

「うむ、すぐ行く。マルガリータは先に食べてなさい」

「はい！」

マルガリータはうきうきとした足取りでやって来た。

アイスティーのコップを置いた席へ促し、大皿の中身を彼女の皿に取り分けて渡す。

「ご機嫌なマルガリータはキラキラした目で皿を覗き込んでいる。」

「うわあ！ これも美味しそうだね」

「クロワッサンザマンドでございます。お嬢様のお口に合えばよろしいのですが」

「あはは！ お嬢様って何さ」

余り物とか言うなよ。

良質なバターと厳選した薄力粉で伸ばしてリキュールを加えたアーモンドプードル、これをたっぷり塗って焼いたクロワッサンに、おまけでカスタードクリームも注入してある。

まあ、専門店のアマンドクロワッサンなら、カスタードなどかえってアーモンドの風味の邪魔になるかもしれないが、俺のような素人が手作りするとなればこんなものだ。

それなりに食える程度には仕上がったと思うが……マルガリータの表情を見る限り

問題は無さそうだな。

大きめに切り分けたアマンドクロワッサンを次々と口に運び、幸せそうな顔で頬張っている。

「んん！ 甘くてバターの香りがふわつと鼻に……こんなに美味しいお菓子、食べたこと無いよ」

「そうか、気に入ってくれたか」

「うん！ これなら毎日でも……」

さすがに毎日ではカロリーオーバーかな？

いや、マルガリータは動くから大丈夫か。

整備士の仕事は長時間やるとなると結構な重労働だ。

むしろ、移動も何も全てピークルに頼っている俺の方がヤバいか。

……射撃訓練のついでに、筋トレの強度も上げるかな。

「あんたって凄いなだね。一流のピークル乗りで、楽器も演奏できて、料理も上手なんて

……本当、何でもできちゃうじゃない」

「いやいや、何でもは無理さ。現に、ピークルの整備や工作技術に関して、君の足元にも及ばない」

事実、ナツメツグ博士からそう言われてますからね。

「だから、俺に無いものを持っている君のことは尊敬している。来てくれて本当に助かってるよ」

「そ、そう？」

少し照れ臭そうだが、マルガリータは満更でもない表情だ。

別にお世辞というわけではない。

実際に、彼女が来てから「ジャガーノート」のメンテナンスが捗っているのだ。

ビークルの基礎知識に関しては未だに俺より一步劣るといふのに、感覚で駆動部の手入れをしてしまうのだから恐れ入る。

「ところで、ここの設備にはもう慣れたか？ 使えそうかな？」

「うん、もちろん。最高だよ、ここの工房は。ミームー村の作業場とは比較にならないね。整備場全体がトロットビークルの整備に最適な形で設計されてる。一人でもビークルの全ての箇所をメンテナンスできるように、アームやクレーンなんかの機材はもちろん、人間が立つ場所まで考えられてるんだ。本当に天才だよ。あれを作ったナツメツグ先生は」

ほう、俺はそこまで見てなかつたな。

さすがに本職の整備士は着眼点が違う。

「それにビークルのパーツや素材も大量にあるし……あ、そういえば、あの資材はあんたが盗賊から分捕ってきたって聞いたけど？」

「ああ、ほとんどはそうだな。傷が少ない状態で鹵獲できたビークルと、本拠地を襲撃して奪った整備用の物資が多い」

懐かしいな。

最初は盗賊団のボスのビークルを奪ってアジトの奴らを殲滅し、鹵獲したビークルを連結させて引つ張ってきたのだ。

あれ以来、俺は何度か近隣の盗賊を始末して物資を奪った。

ピジョン牧場周辺の治安もよくなるし、なかなか割のいい商売だった。

しかし、マルガリータの表情が妙に曇っているのが気になる。

目の前にはまだアモンドクロワッサンが残っているのに、彼女の手も止まっている。

「どうした？」

「ううん……ただ、ちょっと危ないかなって……」

そういうえば、マルガリータの居たミーム村の周辺に盗賊団は居ない。

まあ、地理状況を考えれば当然か。

鉄道の話が出る前のミーム村は、本当に物好きな商人が山を越えて来るくらいだと言っていた。

俺たちビークル乗りは盗賊と戦闘になることなど珍しくも無いが、荒事に縁の無い一般人にとっては恐ろしい話だろう。

コニーも長年ネフロに住んでいたはずだが、最近までキラーエレファント団を直接見たことは無かったそうだからな。

「そうだな。実際に盗賊と戦闘になれば、こちらが命を落とす可能性もある。ただ、やはり盗賊討伐は必要だね。牧場の安全を守るためには、俺や戦える人間がちよくちよく見回るしかないし、その気が無くても盗賊と遭遇したら倒さなければならぬ」

「……………」

マルガリータの表情はさらに沈んでしまった。

あれ、これは…………ひょっとして俺のこと心配してる？

「…………まあ、今後はほどほどにしておくさ。元々、資材の略奪が目的というより、ピジョン牧場周辺の治安維持が目的だったんだ」

「そう……………」

「ああ、それに美女が心配してくれるとあつては、無茶はできないからな」

「ほえ!？」

少し軽口を叩いてみただけだったが、マルガリータは真っ赤になってしまった。

「美女って…………あ、あたしい!？」

「他に誰が居るよ?」

声が裏返り、喘息の発作を起こしたように言葉を詰まらせるマルガリータ。

あれ、さすがに反応が激しすぎるな。

「バ、どど、どうかしてるんじゃないの!? あたしなんて……ガサツで、デカくて、ゴツゴツしてて……。コニーなんかと比べたら全然……。それに……（料理もできないし）」

ようやく絞り出したマルガリータの声は、普段のサバツとした佇まいからも、口いっぱいに料理を頬張って幸せそうな表情をする姿からも、想像がつかないものだった。

これはこれで可愛いが……ちよつと失敗したな。

村のアイドル的な人物なら、このくらいのセリフは聞き飽きていると思ったのだが……。

思ったより初心というか、免疫が無いようだ。

「あく、その……」

「グレイ、この改良型の内燃機関なんじゃが……む! お前さん、マルガリータに何をし

た?」

タイミンクの悪いことに、マルガリータが言葉を失って沸騰しているまさにその時、ナツメツグ博士がダイニングに入ってきてしまった。

蔑みと呆れの表情で俺を見据える博士への言い訳はなかなか苦労した。

マルガリータが回復するまでに少し時間が掛かったが、夕食のラムのローストが焼き上がると、彼女も意識を料理の方へ集中させた。

メリー乳業に漬してもらった上質なラムチョップに下味をつけてオーブンで焼き、ワインとバルサミコにミツバチ園のハチミツを加えたソースを添えたものだ。

難しい技術が必要な調理法でもなければ、ソースもそれほど複雑なものじゃない。

素材も良いので、不味いわげがない。

当然、博士にもお客様にも満足していただけましたとも。

そして、夕食を食べ終えたマルガリータは、そろそろお暇すると言って、表に停めてある「クラフトマンシップ」へと向かった。

今日は少し話し込んでしまったので、日は完全に落ちている。

話の内容は、つい先日に見処が立った、ビークルのエンジンの出力を改良するシステムについてだ。

普段から博士がコツコツと研究を続けている案件で、現行の汎用ビークルのエンジンの稼働をパワーアップする代物だ。

もちろん、劇的な大発見などではないので、俺の「ジャガーノート」のエンジンと比べれば、その性能の上げ幅など誤差のようなものだ。

ただ、この機関の設計図に関しては、一つ面倒事が存在する。

ノーマルルートでは話題に上ることすら無いが、この設計図はブラッディマンティスに狙われる。

ブラッディマンティスルートに進んだ場合、プレイヤーが設計図を盗み出すことになるのだ。

現実では、たとえばニラがノーマルルートに進んだとしても、誰か他のブラッディマンティスの構成員が盗みに来る可能性がある。

マルガリータの手前、あまり詳しく脅威に関してベラベラ喋りはしなかったが、とりあえずそれとなく盗人のことを伝えて、強盗への対策を強化することで話はまとまった。

「もう遅いけど、駅までで大丈夫なのか？」

「へーきへーき。ここまで来れば、あとは汽車に乗って帰るだけだから。村の駅から家までで事故ったりしないよ」

そうして、俺はいつも通りマルガリータをピジョン牧場駅まで送る。

彼女の「クラフトマンシップ」と並んで、「ジャガーノート」をゆつくりと歩かせた。駆動部の調子がどんどん良くなっている。

これもマルガリータにピークルを見てもらってからだ。

やはり、彼女をうちへ招いて正解だったな。

そんなことを考えていると、もう駅に着いてしまった。

「それじゃあ、気を付けて。これからは、遅くなった日くらい、うちに泊まっても構わないから」

「なっ……」

マルガリータはまたしても顔を真っ赤にして茹で上がってしまった。

「あ、あんた！ いきなり何言ってるの!？」

今回ののはさらにリアクションが激しい。

わたわたと振り払うような動作をして、自分の体を庇うように……あ、なるほど……。そういう意味で受け取ったのか。

「いや、その……」

「ま、まだ早いよー!」

「す、すまん!」

反射的に謝ってしまったが、別にうちに連れ込んでどうこうするとか、そういう意図で言ったわけじゃないんだけどな……。

ナツメツグ邸には空き部屋がある。

増築する前は、俺もそちらの部屋を一つ借りて住んでいたのだ。

予備のシーツは洗濯してあるので、空き部屋を臨時の客間として、彼女を泊めることはできるという話だったのだが……。

まあ、誤解を招くような言い方をしてしまったのは事実だ。

しかし、「無理」とか「嫌」じゃなくて「まだ早い」ってのは……。

「その……そういうのは、もう少し、お互いのことをよく知ってから……」

「え……」

「っ！… 何でもない！ じゃあね！」

マルガリータは逃げるようにホームへ走り去ってしまった。

俺はポツンと残され、彼女の姿を見送るしかなかった。

77話 出立の日

マルガリータがうちに出入りするようになって数日。

先日はあんなこともあったが、次の日には彼女は特に気にした様子も無くうちの工房を訪れた。

マルガリータは午前中に工房へやって来て、ナツメツグ博士にビークルや工学を教わり、俺の「ジャガーノート」やビークルパーツを弄り、一緒に食事をして帰ってゆく。

これもいつも通りだ。

偶に目が合うと慌てて視線を逸らされるが、まあ俺が変なことを言ってしまった結果なので仕方ないか……。

さて、ナツメツグ邸の食卓にも彼女の姿は大分馴染んできた頃だが……残念ながら、俺はもう発たなければならぬ。

そろそろビークルバトルーナメントが始まる。

バニラたちと約束した出発の日は今日だ。

「じゃあ、そろそろ俺は行きますので」

「真つ先に朝食を終えた俺は、博士とマルガリータに声を掛けて席を立つ。

ブルーベリージャムを乗せたりコッタチーズを味わっていたマルガリータは、一瞬だけ動きを止めたが、ふいつと顔を逸らして食事を再開した。

「そう……」

「すまないな。もう少し『ジャガーノート』を見てもらいたいのはやまやまだが、今年はピークルバトルトーナメントに出ないといけないのでね」

「……………」

ん？ そんなに『ジャガーノート』に触れないのが残念か？

まあ、俺としてもマルガリータに整備をしてもらうようになってから、エンジンの調子がめっちゃくちゃいいので、可能ならば付いてきてもらいたいが……。

しかし、俺の用事はピークルバトルトーナメントだけでは終わらない。

原作と同じ進み方なら、その後にウズラ山トンネルへ盗賊討伐に行き、スームスームまでジュニパーベリー号の渡航許可証を届けなければならぬ。

さすがに出会ったばかりの若い女性を、ガラガラ砂漠を渡ってスームスームまで連れ回すのは……。

それに、『ジャガーノート』が無くて、うちの工房には俺が鹵獲した盗賊ピークルとパーツが山積みだ。

当然のように、ナツメツグ博士は勝手に使い、マルガリータもそれに従う。

まあ、他に用途も無いし、いいんだけどさ……。

何はともあれ、二人が何やら怪しげな研究を続けるにしても、資材には事欠かないだろう。

【ジャガーノート】の不在はそんなに落ち込むほどのことではないと思うけどな……。

「（こやつは……）まあ、何じゃ。また砂漠行きとは大変じゃな。お前さんもコニーとバナラも」

「そうですね……。でも、それに関しては仕方ないですよ。トンネルの開通までトーナメントを延期することは無理ですし、キャプテン・シブレットが首を長くして渡航許可証の到着を待っています」

ゲームではスキートール湖からイワツバメの滝を飛び降りてハツピーガーランドへ向かうことも可能だが、現実でビークルに乗って滝壺に飛び込むなど正気の沙汰ではない。

そろそろ本格的に暑くなってきた時期なので、度々の砂漠行きはご勘弁願いたいところだが……仕方ないな。

他にルートがあるわけでもなし。

「じゃ、博士。食糧庫は前と同じように手配しておきましたので、適当に食べ繋いでくだ

さい（あと、研究室の例の設計図には注意を）」

「うむ、気を付けるんじゃないぞ」

設計図とは、先日も話したが、ブラッディマンティスルートでの任務で盗み出すことになる新型機関のあれだ。

バナラがノーマルルートに進んだ場合、この話はまったく出てこないが、その場合は別のブラッディマンティス構成員が盗みに来ることもあり得る。

警戒は促しておいた方がいいだろう。

念のため、実験工房の機動戦闘モードのメンテナンスも済ませてもらっている。

そして、俺は踵を返して工房に停めてある「ジャガーノート」のもとへ向かい……向かおうとした。

「ねえ……」

後ろから掛けられたマルガリータの声に振り向く。

やけに鋭く底冷えのする声だ。

あれ、デジャヴ……。

「シブレットって誰さ？」

何故か、マルガリータへの釈明でかなりの時間を食ってしまった。

出発直前に消耗したな……。

ピジョン牧場を出て一旦ネフロへやって来た俺は、久しぶりに駅近くの地下道へ赴いた。

原作より複雑な通路を進み、奥まった場所にある元は資材置き場と思わしきスペースまで辿り着いた。

元トーナメントチャンピオン・ジンジャーのアジトで、ネフロにおけるバニラのねぐらだ。

何だかんだで、今は下手な宿より快適な空間になっているので、バニラもここで生活が続いているようだ。

「ジンジャー、居ますか？」

「む、グレイか？ こっちだ」

ジンジャーは居住空間よりさらに奥の方で、愛機【ブラックオデッセイ】の整備をしていた。

【ブラックオデッセイ】には真新しい傷跡がいくつか増えている。

「どうも、ご無沙汰です。バニラは？」

「ついさつき出たぞ」

バナラは留守だった。

「どうやら、俺と合流する前にコニーを迎えに行ったようだ。」

「まあ、俺が出るのが遅かったからな。」

「マルガリータのせいだ。」

「いよいよか……」

「ええ」

ジンジャーが言うのは、当然ビークルバトルトーナメントのことだ。

「はつきり言って、俺はストーリーの先を知っているんで、このイベントが本当の最終決戦にならないことは知っているが、ジンジャーにとつては違う。」

「ジンジャー自身が王者として君臨し、地位を譲ることとなったビークルバトルトーナメント。」

「この大会でエルダーに勝つことに、ジンジャーは俺やバナラとは比べ物にならないほどの意味を見出していることだろう。」

「君もバナラも、今や私を優に超える強さを身に付けている。どちらがエルダーと戦うことになったとしても、勝てる見込みは十分にあるはずだ」

「ジンジャーはこのトーナメント直前でバナラのトレーニングに付き合わされたらしい。」

あの「ブラックオデッセイ」につけられた傷はそれが原因か。

「君はさらに先を見据えているようだが、今年のトーナメントでエルダーを倒せば、それがターニングポイントとなることは間違いないだろう」

「そうですね。少なくとも、奴がチャンピオンから陥落することには、大きな意味があるでしょう」

ダンディリオンはエルダーとしてピークルバトルトーナメントチャンピオンに君臨することで、ブラッディマンティスを運営し力を蓄えていた。

エルダーとしての知名度と地位を活用し、あらゆる人脈やスポンサーとなる企業と繋がりを持ち、資金や資材を調達していたのだ。

その結果が、原作の描写にもあった、あの小国に匹敵する軍事力と、大国にすら大打撃を与えられる兵器を開発する組織基盤だ。

少なくとも、飛行ピークルを開発して飛行船『グランドファイナーレ』に対処することのできななければ、この国は一方的に高高度爆撃を受けて焼き尽くされることになる。

俺がこの世界に転移してハッピーガーランドで活動する基盤を手に入れた時点で、ブラッディマンティスは既に俺や警察の情報網の外に居た。

絡め手は通用しない。

悲劇的な結末を回避するためには、エルダーの悪事を明るみに出し、『グランドファイ

ナーレ』を叩き落として、正面からブラッディマンティスを潰すしかない。

その第一歩として、エルダーをチャンピオンの座から引きずり下ろすのだ。

「ジンジャー、トーナメントが終わって、スームスームでの野暮用が済んだらまた顔を出します」

「ああ」

「それで……俺は砂漠を渡ってハッピーガーランドへ行き、スームスームにも寄るわけですから、またしばらくの間ピジョン牧場を留守にすることになります」

「……………」

回りくどい言い方になってしまった俺を、ジンジャーは黙って見つめて続きを促した。

「申し訳ないのですが……その間、メリー乳業とナツメッグ博士の周辺を少し警戒していただけませんか？」

「……エルダーに狙われているのか？」

「ええ、ブラッディマンティスの奴らが盗みに入る可能性があります」

ブラッディマンティスルートの場合、プレイヤーがこの任務をこなすことになる。

メリー乳業から羊をかつぱらい、ナツメッグ邸から最新の高出力内燃機関の設計図を

盗み出す。

正直、どちらもレベルが低い犯罪だ。

羊泥棒に関しては言うまでもなく、設計図の方も博士の研究の進捗のまとめみたいなもので、それほど劇的な発見があるわけではない。

「奴の……エルダーの指示か？」

「いえ、恐らく現場単位の事情でしょう。メリー乳業の方はやっていること自体がただのコソ泥ですし、ナツメッグ博士の方も狙われているのは少し効率を上げた内燃機関の設計図です。そこまで軍事的な意図は無いと思われれます」

所詮はちよつと改良したビークルのエンジン。

【ジャガーノート】のエンジンに遥かに及ばないパーツの情報で、ブラッディマンティスの戦力が大きく上昇するわけではない。

それよりも注意しなければならないのは、砂漠の決戦で使われる陸上戦艦『エビルタローン』と飛行船『グランドファイナーレ』だ。

この二つは別格である。

とはいえ、ブラッディマンティスのコソ泥を放置して好き勝手させては、ナツメッグ博士が危険に晒されることになる。

一応、博士には研究室の設計図を狙う者が居ることを伝えており、実験工房の戦闘

モードも準備してもらってはいるが、これだけでは万全の対策とは言えない。

やはり、それなりの戦力を用意して迎え撃ちたい。

ジンジャーが守ってくれば、ブラッディマンティスの下っ端くらい簡単に倒せるはずだが……。

「……私が奴らの前に姿を現すのは危険だ」

問題はこれだ。

元々が、ジンジャーはブラッディマンティスに狙われているから地下に潜っているのだ。

他に頼れる腕利きとえば、ネフロ闘技場の高ランクバトラーだが……無理だな。

「わかっています。ですが、他に頼める人間も居ません。トーナメントの時期は腕利きがハッピーガーランドへ行ってしまうので」

この時期でなければシュナイダーに頼むのも手だが、彼はビークルバトルトーナメントに出場する。

キラエレファント団の親分に金を積むことも考えたが、親分本人はともかくあの盗賊団と俺の関係は良くない。

それに、今うちにはマルガリータも出入りしていることだし、やはり一番信頼できる人間に頼みたいのだ。

「あなたに絶対の安全を保障することなど俺にはできません。ですが、エルダーとブラッディマンティスはもうすぐ大きく動きます。少なくとも、今年中には全ての決着がつくでしょう。奴らとの戦闘の局面として、この件はそれほど重要度が高くありませんが、今が踏ん張り時なんです。手を貸してもらえませんか？」

「……わかった。引き受けよう」

「ありがとうございます」

何とか、ジンジャーは俺の依頼を引き受けてくれた。

これで恐らくピジョン牧場は安全だ。

俺は安心してビークルバトルトーナメントとスームスームに向かうことができる。

しかし、キラーエレファント団のネフロ占領のときはともかく、今回の件を引き受けてくれたのは完全に俺を信頼してのことだ。

近々起こるブラッディマンティスとのガラガラ砂漠決戦、『グランドファイナーレ』の撃墜、エルダーことダンディリオンとの対峙。

最終決戦に向けてしっかりと備えていかなければ。

俺が介入したことで色々と変化はあるかもしれないが、この辺のブラッディマンティスの活動に関しては、今まで特に破壊工作をしてきたわけではないので、原作通り起こるとみていいだろう。

「こちらから危険に近づくよう頼んでおいてなんですが、やはりジンジャーのことを相手に知られないに越したことはありません。情報を持ち帰らせてはならない。ピジョン牧場に来たブラツディマンティスの連中は……皆殺しをお願いします」

「……ああ、言われるまでも無い」

そして、ジンジャーのもとを辞した俺は、約束通りバニラたちとコニーの家の近くで合流し、そのまま街の北西出口を出てガラガラ砂漠へと向かった。

78話 共に砂漠を超えて

約束通り、コニーの家の近くのパン屋『ネフロ・ベーカリー』の前あたりでバナラたちと合流した俺は、そのままネフロの街を出てレイブン砦方面へ向かった。

砦に着いた頃には既に日も傾いていたので、今日はこの宿泊所で夜を明かす。

宿泊所へ向かう前に、夕方のバザーでそれぞれ保存食を購入した。

飲料水はここで買うと無駄に高いので、俺もバナラたちもネフロで用意してきたが、食糧はバザーで手に入れることにしている。

明日、オアシスで摂る夕食の材料は用意してきたが、途中で遭難したり盗賊の襲撃で逸れたりする可能性がゼロではない以上、余剰の保存食は持っておいた方がいい。

そうなる、やはり砂漠に近い砦で買うべきだ。

うちにも干し肉や燻製くらいはあるが、本物の砂漠地帯に適した製法で出来ているかはわからないからな。

腐った干し肉で中るなど間抜けすぎる。

「相変わらず、凄い活気だね」

「確かに、この時間帯でも凄い人混みだ」

レイブン砦の店の配置はもう大体わかっているんで、俺は秒で買い物を買った。

二人はもう少しバザーを回るようだが……またコニーに何か貢ぐのかどうか知らないが、懐は大丈夫なんだろうな？

前回はバナラの甲斐性のためにダンジョンへ行く羽目になったが、今回はそのまでの時間的余裕は無い。

最悪、俺がこっそり貸すか……。

コニーが露店の方へ集中している隙に、俺はバナラに小声で確認してみた。

「で、色男くん。今回は玉切れになってないかね？」

「(玉……?)」

「(軍資金は大丈夫かね?)」

「あ、ああ。大丈夫だよ。前に来たときに、稼がせてもらった分がまだ残ってるから」
同じ会社の作品ネタは通じなかったが、今のところバナラの財政状況は心配ないようだ。

まあ、コニーが強請る物の内容にもよるが。

いや、彼女は直接おねだりしているわけではないのだが……。

「俺は先に宿泊所へ戻る。二人もあまり夜更かしせずに寝ろよ」

「わかったよ」

「おやすみ、グレイ」

自分のテントに戻った俺は、すぐにベッドで横にはならず、しばらくバナラを待つてみた。

幸い、その日の内にバナラが俺に泣きついてくることは無かった。

まあ、最終的にバナラはデルロツチ貿易支店で勧められたアクセサリーを買ってスツカラカンになったようだが……。

押し強い店員の「彼女さんにびつたりの一品が」から「よくお似合いです」のコンボに、コニーの満更でもない表情のフィニッシュで、有り金叩いたんだと。

俺も知っている店員なので、一応偽物ではないと思うけどさ……。

翌朝、俺とバナラとコニーはレイブン砦を出てガラガラ砂漠へと足を踏み入れた。

相変わらずの灼熱の大地だ。

常に日に焼かれながら長時間移動しなければならぬだけでも、日陰のあるレイブン砦内とは格段に違う過酷さだ。

以前バザーで買った砂漠の帽子クーフイーヤを被っていても、じりじりと体力が削ら

れていく。

バナラもカウボーイハットの下の顔にそれなりの疲労感を浮かべている。

コニーも以前と同じバナラがプレゼントしたエスニックな装飾のある砂漠の装束を着ているが、顔を火照らせながら手で日差しを遮っている。

……バナラが財布をひっくり返して買ったというのはあのイヤリングか。

「やっぱり、砂漠は暑いね」

「そうだね。コニー、無理しないでこまめに水分を摂ってね」

「うん……オアシス、まだかな……」

「もうすぐさ……」

何はともあれ、注意した方がいいな。

暑さで全員の集中力が落ちている。

現代のサバイバルの定石で言えば、日中は穴を掘って水を確保しつつ自分もタコツボで眠り、夜中に移動することが薦められる。

しかし、この世界の砂漠ではそうはいかない。

夜中の砂漠は危険すぎる。

こちらの視界が利かない状態で、デザートホーネット団から一方的に撃たれることになるのだ。

前にポールを救出しに行ったときに、そのヤバさは十二分に理解した。

日中なら『アース・ウィンド』による不可視の奇襲が無いだけまだマシだが、やはりこの砂漠の環境に慣れているという点で、砂漠の民であるデザートホーネット団の方が有利だ。

気を抜くわけにはいかない。

しかし……。

「来ないな……」

「え？」

頭に疑問符を浮かべてこちらを見るバニラに答えた。

「デザートホーネット団、襲ってこないな」

「あ、ああ。そうだね」

バニラは今思い至ったという様子で頷いた。

「おいおい、大丈夫か？ キャラバンの護衛で戦った相手だろ」

「ごめん、前回は襲われなかったから、つい」

確か、バニラはスームスームからウミネコ海岸に行く際に襲撃されず、デザートホーネット団のアジトにも再び寄ってきたのだったな。

「そういえば、そんなことを言っていたな。どういうことだ？ 元々、この辺りの盗賊と

いうのは、騎馬民族が小競り合いを繰り返していた時代の戦士の末裔だろう。本来は、敵対する氏族や侵略を目論む余所者を襲撃して略奪することを黙認された、海で言うところの私掠船の乗組員のような連中だ。盗賊行為を自発的にやめることは考えにくい
が……」

「うん、そこまでは知らないけど、ノーラも盗賊は先祖代々の生業だつて言つてた。でも、僕たちは襲われなかつたし、アジトに着いた後も歓迎してくれたし……そんなに悪い人たちじゃないのかもね」

バニラの言う通り、コニーたちを襲う気が無いならそれでいい。

盗賊稼業を休業しているのなら大歓迎だが、果たして本当にそうだろうか？

この世界は原作に即してはいるが、ゲームの描写だけが全ての世界ではない。

ダンディリオンとチコリの話以上にシリアスなことがある。

少なくとも、盗賊との戦いは全年齢対象のゲームでは描けない有様になることが大分だ。

決して優しいだけの世界ではないことは、俺も転移して二年余りの間によく理解している。

それに……。

「俺は襲われたけどな」

「ん？ 何か言った」

「いや、何でもない」

そして、俺たちは一度もデザートホーネット団の襲撃を受けることなく、カワセミアシスに到着した。

オアシスにビークルを停めた俺たちは、他のキャラバンが同じタイミングで来ても邪魔にならないように、一か所に固まって場所を確保した。

寝る場所はともかく、夕食は一緒に摂るつもりなので、一つの焚火を囲むようにして腰を下ろす。

早速、俺は今日のために持ってきた食材をビークルから下ろして準備に取り掛かった。

今日中に消費する前提で用意しているので、完全な乾き物ばかりではない。

ヨーグルトと塩コショウとカレー粉に漬けた鶏の手羽元、トマトソース、オイル漬けたブルーチーズ、といった具合に、砂漠地帯のキャンプとは思えないほど豪華な食材が並ぶ。

しかし、この世界における食材の密封といえは、基本的には瓶詰だ。

転移して二年ほど経つが、未だにプラスチックどころか缶詰の技術すら小耳に挟んだ

ことが無い。

瓶は重くて嵩張るので、こうしてアウトドアに食材を持ち出す際には些か不便だ。

ポリエチレン製のジップロックがあれば、一部はそれで済んだのにな。

「凄いね。そんな本格的な感じなんだ」

「ナツメッグ博士からグレイの料理は凄いつて聞いてたけど、私とは次元が違うよ……」
焚火に掛けたスキレット上でいい音を奏でるタンドリーチキンもどきを覗き込みながら、バニラとコニーは感嘆の声を漏らした。

前回の砂漠行きでは、俺はバニラとコニーとは別行動だった。

デルロツチ貿易に同行していたとはいえ、砂漠のキャラバンの護衛では、二人の食糧事情は決していいものではなかったことだろう。

硬い砂漠のパンと干し肉の晚餐か……。

若い者が可哀想に……。

まあ、その時の俺が一人で豪華なキャンプ飯を食っていたかと言われれば、そんなことはなかったけどな。

片っ端からデザートホーネット団をサーチアンドデストロイしていたわけだから、優雅なピクニックには程遠い状態だった。

当然、俺の食事や睡眠の質もロクなものじゃない。

あの時に比べれば、今日の夕食はどれだけマシなことか。

最初のおもてなし料理がアウトドアというのもアレだが……。

「そういえば、二人にご馳走するのは初めてか。まあ、所詮は野営飯だ。あまり期待しないでくれよ」

何を隠そう、保存食とはいえ、そろそろ消費期限がヤバそうな食材の処分も兼ねているからな。

このトマトソースは先日作ったものではなく、もつと前に作って備蓄していたものだ。

現代の缶詰やレトルトのような保存期間は望めない。

俺の留守に備えてナツメグ邸に食料の備蓄は必要だが、ひと月から数週間単位で消費していくしかないのだ。

「ほい、焼き上がったぞ。召し上がれ」

食欲をそそるスパイスの香りに、バニラとコニーは真つ先にメインのタンドリーチキンに手を伸ばした。

「これ、すつごく美味しいよ！ 香辛料がピリツとして、口の中に香りが広がって……」
「本当だ。コニーの言う通りだよ。それに皮もパリツとして、肉自体も美味しい」

「そうか、そいつはよかった。……うん、美味しいな」

砂漠で持ち歩くことを考えると、長時間に渡って漬け込むことはできなかったが、それでも十分に味は染みている。

前世に負けず劣らず、この世界でも手羽は安価だ。

調理法もさらに限られているので、ムネ肉やモモ肉に比べて需要が少ない。

脂が多いので頻繁に食卓に乗せるのは考え物だが、たまにはいいだろう。

タンドリーチキンと一緒に、酵母を使わない砂漠のパンで作ったブルスケッタを、交互に口に運ぶ。

温めなおしたトマトソースとオイル漬けのチーズを乗せただけで、味気ないパンが格段に食べやすくなっていった。

キャン普飯にしては上出来じゃないか。

「お母さんにも食べさせてあげたいな……」

「おいおい、そこまで大した料理じゃ……まあ、ローズマリーさんが回復したら、お祝いに持って行ってやるか」

「本当!? 約束だよ」

「ゴールドーンまで【ジャガーノート】に乗った俺が鶏肉を運ぶ絵面は、なかなかシニールだな……」

その頃には、ジップロックともう少しくオリティの高いクーラーボックスを完成させたいものだ。

まあ、ローズマリーなら、タンドリーチキンくらい、自由に動けるようになったら自分で作れるだろうけど。

レシピさえ教えれば、もしかしたら俺以上の完成度で焼き上げるかもしれない。

何せ主婦の年季が違うからな。

「それにしても、グレイは本当に料理が上手だね。これはナツメツグ博士が食事にうるさくなるのも頷けるよ」

しみじみと言うコニーに、俺もこの世界に来たばかりの頃のナツメツグ博士を思い出した。

出会ったばかりの頃の博士は「腹を満たせばいい」「病気になるなければいい」のコンボをぶちかましてきたものだ。

今ではすっかり美食家だが。

「前は違ったの？」

「うん、グレイが来るまではいつも食事は簡単に済ませてばかりだったから。お母さんも医者の不養生って言ってた」

「へえ、そうだったんだ」

昔のナツメッグ博士を知らないバナラには想像もつかない話だろうな。

「ねえ、ところでさ……」

コニーは唐突に口を開いた。

こちらをじっと見つめるコニーの視線に、思わず俺の食事の手も止まる。

「最近、マルガリータとはどうなの？」

「いや、どうって……」

突然の問いに、俺は答えに窮した。

「そういうえば、ミームー村に行ったときに、コニーとマルガリータは仲良くなっていたな。」

俺がナツメッグ邸にマルガリータを招いて、その帰りの汽車では俺とバナラが蚊帳の外にアウエーだった。

まあ、コニーにとつても、自分がネフロに戻った後の友人の近況は気になるものか。

「毎日のように工房に来ていたよ。博士からビークルについて教わりつつ、俺の『ジャガーノート』の整備もしてくれている。今ではすっかりうちの工房にも馴染んでいるな」

俺は食事の手を再び動かしながら答えた。

マルガリータも本業の仕事があるだろうし、俺としては暇な日に来てもらえればと思っていたのだが、予想に反してマルガリータは連日うちの工房を訪れている。

まあ、「ジャガーノート」のメンテナンスは手厚くやってもらったし、美人が毎日のように顔を見せてくれるというのは悪くないが。

「そういうことじゃなくて……」

「……夕食はマルガリータも一緒に食っていくからな。彼女もうちの料理は気に入ってくれているよ」

「いや、だから……」

コニーは呆れたようなため息とともに、一拍置いて言葉を続けた。

「……グレイは、いつマルガリータと結婚するの?」

「ぐヴオアツ!」

コニーの放った爆弾に、俺は盛大にむせ込んだ。

このタイミングで食わなきゃよかった……。

しかし、いきなり結婚で……色々すっ飛ばしすぎだろ。

何となく、コニーが色恋沙汰で詮索したがっているのはわかっていたが、まさかそこまで話が飛躍するとはな。

根掘り葉掘りなんてレベルじゃないぞ。

「いきなり何を……っ！ マルガリータから何か聞いたのか!？」

「え？ 別に何も聞いてないけど？ そもそも、ピジョン牧場で別れてから一度も会ってないし」

「それもそうか……」

思わず詰め寄ってしまった。

そして、思い出してしまった。

先日、マルガリータが帰り際に放った意味深な一言を。

それに、目が合うと慌てて視線を外し、真つ赤になりながら慚然とした表情でチラ見してくる姿も。あれは可愛かった。

俺は鈍感系主人公ではない。

マルガリータが俺にそれなりに好意を持ってくれていることはわかる。

しかし、俺と彼女はまだ出会って日が浅い。

向こうも俺の存在を話には聞いていたみたいだが、実際に言葉を交わしたのはつい最近だ。

マルガリータの言う通り、手を出すのはまだ早いだろう……。

……いや、別に常に下心満載で彼女に接しているわけじゃないけどさ……。

「俺もマルガリータと初めて言葉を交わしたのは、君たちと同じくつい先日だ。まだお互いのことをよく知らないから、結婚も何も無いだろう」

「でも、マルガリータが言ってたよ。『腕利きのビークル乗りって聞いていたから、もつと粗野で品の無い男を想像していた。でも、思ったより……』」

「より……?」

「ふふ、これ以上は内緒」

コニーは悪戯っぽく笑ってわざとらしく口を塞いだ。

ケラケラを笑った拍子に、バナラからの貢ぎ物のイヤリングが焚火を反射して光る。

おのれ、小娘……。

しかし、ミームー村に滞在したとき、女子部屋ではそんなトークが……。

「やっぱり、二人ともいい感じなんだね。安心して、グレイ。私たちも応援してるからね、バナラ」

「え、ああ。もちろんだよ」

「お前ら……」

何かを察したように生暖かい目を向けて来るコニーに居心地が悪くなり、この日はさっさと休むことにした。

79話 ビークルバトルーナメント 1

灼熱の砂漠を通り過ぎ、俺たちはコンドル砦に到着した。

相変わらず、デザートホーネットは影も形も無い。

一度も襲撃されること無く、ガラガラ砂漠を渡り切った。

本当に妙な話だ。

俺が連中の恨みを買ったことは間違いない。

俺一人で砂漠に出たときは散々突撃してきたくせに、バナラとコニーが居れば遠目に姿を見せることすらしない。

まるで忌避剤だな。

俺への復讐がバナラとコニーを巻き込むほどのことではない……というわけではないな。

驚くべきは、大勢の仲間を殺した俺への攻撃を中止するほど、バナラとコニーが奴らに親愛の情を抱かれていることか。

まあ、平和なのはいいことだ。

できれば、デザートホーネット団とは今後一切関わらずに済ませたいが……そういうわけにもいかないだろうな。

一番厄介なイベントが、もうすぐ砂漠を舞台に展開される。

ブラッディマンティスによる油田の占拠と解放のための戦争は、ガラガラ砂漠での総力戦に発展するのだ。

その時にデザートホーネット団がどう関わってくるか……まあ、そこら辺は今考えても仕方ないな。

とりあえずは目先のことに集中だ。

ハッピーガーランドの南西の門を潜ると、見覚えのあるピークルが近づいてきた。

長距離キャノンアームを装備した青いピークルだ。

フェンネルの愛機「ブルー・サンダー」だった。

「ようっ」

俺たちを見つけたフェンネルが声を掛けてくる。

こここの展開は原作通りだな。

まさかここまでピンポイントで同じイベントが起こるとは……。

「来ないのかと思っただぜ」

「いや、今年は出るさ」

フェンネルは俺を見て僅かに笑みを浮かべた。

以前、フェンネルには今年のトーナメントに出ることを伝えていたからな。

バナラも俺たちの会話を聞いて合点がいった様子だ。

「そうか、フェンネルもビークルバトルトーナメントに……」

「ああ、もちろん俺も出るぜ。……ところで、ダッドリーを見なかったか？ グレイが来たのなら、あとはあいつだけだ」

「見てないな。やはり時間通り来なかったか」

「まあ、あいつのことだ。ビビッて逃げたのかもしれない」

ダッドリーは正式に辞退を伝えずにすっぽかしたようだ。

「そこも原作通りだな。」

悪し様にダッドリーを罵ってはいるが、わざわざフェンネル自ら探しに来る辺り、面倒見がいいというか貧乏くじというか……。

「ちようどいいいな。フェンネル、ダッドリーが来ないなら枠が一つ空くだろ。バナラを推薦しないか？」

「ほう、そいつは名案だ。これ以上、ダッドリーの奴なんか待つてられん」

バナラはやはりといった表情で顔を強張らせている。

まあ、さすがに未知の強敵と続けざまに戦うのは怖いよな。

俺も原作の予備知識があるとはいえ、この世界で実際にやるビークルバトルはゲームとは違う。

現実にはHP制ではなく、一発でビークルが大破する可能性もあれば、コクピットに乗っている人間が負傷したり死んだりすることもあり得る。

俺だってバトルに出場するときは、それなりの恐怖と緊張感があるのだ。

戦わないで済むのならそれにこしたことはないが……俺もバニラもこの世界の動乱の中心に居る以上、そういうわけにはいかない。

それに、盗賊との戦闘に比べれば遥かに安全なビークルバトルを敢えて断らせる手は無いだろう。

「バニラ君、ビークルバトルーナメントは由緒ある素晴らしいイベントだ。この私とフェンネル卿の推薦を同時に受けるとは、非常に名誉なことである。再確認になるが……もちろん、参加するよな？」

「わ、わかったよ。どうせ、断れないんだろう……」

「去年まで出場を無下に断っていた奴がどの口で言うんだか……。まあいい、それじゃあエントリーの手続きをしよう」

颯爽と「ブルー・サンダー」を旋回させたフェンネルに続き、俺たちはガーランド闘

技場へ向かった。

「ところで、ビークルの調子が良さそうじゃないか」

「お、わかるか？」

「ああ、どこがと言われても困るが、何となく今までの【ジャガーノート】と違うのは感じるぜ」

「まあ、フェンネルの言う通りだな。最近、腕利きの整備士に出会ってね。ミームー村のマルガリータという女性だ。まだビークルに触り始めて日が浅いのだが、ナツメツグ博士にも認められて、今はウチに出入りしながら正式に指南を受けているところだ。俺の【ジャガーノート】も彼女がメンテナンスしてくれた」

「ほう、あの爺さんがまた新しく弟子を取るとはな……」

肝心のバニラの登録は、俺とフェンネルの二人の推薦があつたためか、滞りなく終了した。

俺とフェンネルは既に大会の運営から出場要請を受けて受領しているので、到着の報告のみで必要な話は済む。

これで試合前の手続きは完了だ。

そして、そのまま一回戦に……とはいかない。

原作では、ハッピーガーランドに入ったらフェンネルのイベントが起こってそのまま決勝までノンストップだったのが、現実ではそうはいかない。

こちらら砂漠を渡ってきてクタクタなのだ。

トーナメントの準備を済ませた俺たちは、ロブスター亭でたっぷりと惰眠を貪り、試合当日までのんびりと過ごして、しっかりと英気を養った。

少し早めに出てきて正解だったな。

待っている間にダッドリーが到着したら、バニラをトーナメントに捻じ込む手続きで面倒なことになるかと思っただが、やはり彼は直前になっても現れない。

ここは原作通りの展開になるようだ。

そして、トーナメント当日。

俺はバニラとコニーと連れ立ってガーランド闘技場へ向かい、控室でフェンネルと合流した。

「それじゃあ、頑張つてね。客席で応援してるから」

コニーは原作よりも近い距離でバニラを激励した。

緊張で顔が強張っていたバニラの様子がいくらか和らぐ。

単純なことだ……。

「フェンネルとグレイも頑張つてね」

「ああ」

「……………」

コニーは振り向いて俺たちにも声援をくれたが、フェンネルは答えない。

バナラは少し心配そうな様子を見せたが、当のコニーは特に気にすることなく踵を返して観客席の方へ向かった。

フェンネルは悪意があつてコニーを無視しているわけではなく、言葉が選べず返答に困っているだけだ。

俺はバナラが現れる前のトロット楽団でそれなりの時間を共にしてきたからわかるが、そりや事情を知らない人間からすれば困惑するよな。

「(やれやれ……) ほれ、二人とも。緒戦の予定だ。確認しとけ」

「……………ああ」

「うん」

俺は若干呆れながらも、闘技場の係員から貰ってきた対戦表の写しを二人に見せた。

生返事をしたフェンネルは自分の名前を確認し、バナラに向かって口を開く。

「さて、一回戦のお前の相手は……………」

「お久しぶりです。バナラ君」

横合いから掛けられた声に俺たちは振り向いた。

予想外の人物の登場に、バナラは啞然とした表情を見せる。

雰囲気の変わりようから、一瞬誰だか分らなかつたようだ。

そのことは相手も悟つたようで、改めて名乗つた。

「ジミーだよ。スームスームではどうも。君もトーナメントに出場するんだね。でも、

君なら当たり前か」

そう、腰抜けジミーがバナラの一回戦の相手だ。

いや、既に彼は腰抜けではない。

積極的に相手のビークルを掴みに行くグラップラーへと変貌しており、口調も自信に満ちている。

スームスームでの一件で皮むけたジミーは、この短期間でバトル経験を積み、ランクもCまで上げてきているのだ。

ビークルバトラー全体で見れば決して高ランクとは言えないが、最近の活躍が目覚ましく急激に知名度を上げつつある期待の新人。

まさにこの一攫千金の一大イベントにうってつけの存在だ。

「それじゃあ、行くよ。いいバトルをしよう」

そのままジミーは踵を返し、俺にも軽く会釈をして去っていった。

今までのオドオドと人の顔色を窺ってばかりだったジミーとは本当に別人のようだ。

「初めて見る奴だな……。でも、気を引き締めていけよ」

フェンネルに領いたバナラは、緊張した面持ちのまま「カモミール・タイプⅡ」に乗り込み、試合会場へと向かっていった。

「さて、俺も準備するかな」

トーナメントに出場するビークルバトルラーは全部で九人。

チャンピオンのエルダーに予選を戦う挑戦者が八人だ。

組み合わせはその都度発表されるので、選手は直前まで誰と当たるかはわからない。

当然、観客にもそこら辺は公表されていないので、究極のマッチメイクが実現するかどうかの期待を煽れる仕組みだ。

ゲームだと、バナラを操作するプレイヤーは一回戦でジミー、二回戦でフェンネル、三回戦の準決勝でシユナイダー、決勝でエルダーと戦うことになる。

大会の運営サイドではブロック表も決まっているはずなので、俺の一回戦の相手がフェンネルでなかった時点で、俺はバナラとジミーとフェンネルが居るのは別の、シユナイダーが居るブロックだ。

原作では描かれなかったフェンネルの一回戦の相手は……。

「やはり知らない奴だな」

「どれどれ……ほうバーナードか」

スーム闘技場のBランクバトルだな。

スームスームの警察官で、警察ビークルの高機動型カスタムに搭乗している。

そういえば、原作ではフェンネルが他の出場者についてネフロのシユナイダー以外は知らない奴ばかりと言っていたな。

バーナードはメインストーリーには関わらないが、普通にスーム闘技場で対戦できる選手だ。

フェンネルが知らないというのは……まあ、バーナードがビークルバトルに出始めたのは最近のようだし、彼がトーナメントへ参加するのも初めてなのだろう。

それならば、主にガーランド闘技場で活動し、バンド活動でも忙しいフェンネルが知らないのも無知は無いか。

「知ってるのか？」

「ああ、スーム警察の高速ビークル隊のエリートだな。ライセンスは格下だが、油断はするなよ」

「言われるまでも無い」

「ところで、今年の出場者はフェンネルも知らないビークル乗りばかりか？」

「そうだな……いや、ガーランド闘技場から出ている奴が俺とエルダーの他にもう一人居るな。ちょうど、お前の一回戦の相手に……」

フェンネルは対戦表の俺の欄を再度確認する。

「お前の相手はサフランか。俺と同じこの闘技場のAランク……なかなか厄介な相手だぞ」

フェンネルの言う通り、俺の一回戦の相手は“女帝”サフランことビスカスだ。

ヒモ野郎に騙されていた可哀想な女性で、彼女のサブイベントは諸事情によつて原作シナリオ開始前に俺が片付ける羽目になった。

リッキーの件以来、彼女とはあまり話していないが、こうして華々しく活躍しているのならもう大丈夫そうだな。

原作では、フェンネルが把握していなかった辺り、トーナメントには出場していないのだろうが、今回は腕を上げて着実に実績を積み上げているようだ。

そして、彼女とは緒戦で当たる。

……俺の最初の対戦相手はフェンネルではない。

そうなると、俺は二回戦でシュナイダーと当たることになるな。

彼との対戦は前回のネフロでの試合以来控えていたが、やはりここで衝突することになるわけか……。

そして、準決勝の相手がバナラかフェンネルだ。

……恐らくバナラになるだろうな。

彼は既にSランク相当の腕を持っており、装備もトライデントアームにガトリングアームと武装も十分だ。

何はともあれ、トーナメントの割り当ては決まった。

俺の一人目の対戦相手はサフラン、そして二回戦の相手はほぼ確実に一年ぶりのシユナイダーだ。

負けられない戦いだ。

俺は「ジャガーノート」の駆動チェックを入念に済ませ、自分の出番が来るのをじつと控室で待った。

80話 ビークルバトルーナメント 2

闘技場の係員から、俺より先に第一試合を終えたバナラとフェンネルの結果を聞いた。

二人とも、無事に緒戦突破だ。

俺も気を引き締めていかないとな。

準備は万端だ。

しっかりと休息を取って砂漠での疲れは癒しているし、「ジャガーノート」のメンテナンスも完璧である。

マルガリータの整備によって、俺のビークルは特にエンジンと駆動系に磨きがかかっている。

慣らし運転も牧場で十分に行った。

砂漠を渡ったことによる砂埃によるダメージは……一応、整備場で洗浄とオイル差しはしてもらったので、大丈夫と信じたいな。

「……………」

そろそろ俺の名前も呼ばれそうなので、こちらもビークルのエンジンを掛けておこう
と思いつきエンジンキーを取り出す。

しかし、俺がキーを捻ろうとしたところで、横合いから聞き覚えのある声が掛けられた。

「グレイ、少しいいかしら？」

「……ああ、大丈夫だ。久しぶりだな」

俺は一旦「ジャガーノート」から声の主へ意識を移した。

俺の目の前に現れたのは、露出度の高い衣装を纏った妖艶な美女……かどうかはわからない。仮面があるから。

まあ、仮面をつけていないときも、彼女は分厚い眼鏡を掛けていたので、素顔をはつきりと認識しているわけではないのだが……。

声を掛けてきたのは「女帝」の異名を持つAランクバトラーのサフランだ。

俺の一回目の対戦相手である。

以前、俺がリッキーをぶちのめした後、サフランはしばらくビークルバトルに出場しなかった。

その後はちよくちよく試合に出始めた話は聞いたものの、俺もトロット楽団の仕事な

どが忙しかったため、彼女と戦う機会は無かった。

噂では、以前より強くなったと聞いているが……。

「そういうえば、最近会ってなかったな。調子はどうだい？」

「ええ、おかげさまで、絶好調よ」

仮面越したが、前よりも血色がいいことがわかる。

初対面の頃は周りが目に入っていないような印象を受けたが、今はそのような刺々しい空気も纏っていない。

これは、リツキーのことに折り合いが付けられたことでいいのかな。

まあ、今更蒸し返す話題でもないが……そうなると何を話せばいいんだ？

「えくと……」

「あの人のことなら、もう大丈夫よ。確かに、必死に稼ぐ理由も勝敗にこだわる理由も無くなっちゃったけど。でも、私はこうしてビークルバトルを続けている。今は、自分のためにね」

俺が言い淀んでいると、サフランの方から話を続けてくれた。

近況についてポジティブな内容なのがあるがたい。

「不思議なものね。以前の私は、とにかく勝たなきゃ、条件のいいスポンサーの目に留まらなきゃ、IURでも多く稼がなきゃ、って思ってたのに……。リツキーと別れてから

の方が、勝率も格段に上がったし、スポンサーもさらに条件のいいところが契約してくれたし、稼ぎも良くなったわ」

「そうか。よかったじゃないか。今は稼いだ金も自分のために使えるだろ」

「ええ、贅沢すぎる悩みだけど、使いきれなくて困ってる。あ、それとね。最近、Sランクへの昇格も見えてきたわ」

「そいつは凄いな」

Sランクといえ、Kランクのエルダーを除いて、この地方では俺とシユナイダー以外に居ない最高ランクだ。

そこに手が届くところまで上り詰めるとは、サフランは相当な研鑽を積んだようだな。

きつと今のサフランは強い。以前よりも、原作よりも。

「グレイ、リッキーの件の後、私は物凄く努力した。あなたに比べれば、取るに足らないものかもしれないけど、それでも私なりに真剣にビークルバトルに取り組んできたわ」

「ああ」

サフランの努力に関してはよくわかる。

俺も長いことAランクを続けて、トーナメントではなく正攻法でSランクまで昇格し

た人間だ。

そして、サフランは一拍置いて言葉が続けようとして、急に俯いて言い淀んだ。

「あの、ね……だから、つていうのも変だけど……あなたには、そもそも関係のないことなのアレだけ……」

サフランは深呼吸してから、覚悟を決めたように口を開いた。

「もし、私が勝ったら……一つだけ、お願いを聞いてくれない?」

「おいおい。どうした? 改まって。困っていることがあるなら、別に条件なんか付けなくても手を貸すくらい……」

「大切なことなの! だから、お願い……」

「……そんなにヤバイ頼みごとなのか?」

結局、肝心なことを何も伝えられていないにも等しいが、サフランの雰囲気だけでも厄介な頼み事であることがわかる。

気軽に頼むことができない内容なのは明白だ。

さて、面倒なことになったぞ。

高い飯や酒を奢らされるくらいならまだマシだが、サフランの言うお願いとは、それ以上のもののような雰囲気だ。

さすがに殺しの依頼や国家反逆罪に問われるような仕事の片棒を担がされるのは勘

弁してもらいたいのだが……。

「べ、別にそんな重い負担を強いるものじゃないから。いや、重いといえば重いんだけど……」

そう言われると余計に気になる。

原作におけるサフランのイベントはリッキー絡みだけだったこともあり、彼女の言う頼みが無か全く想像がつかない。

「先に用件だけでも教えてくれないのか？」

「ふふっ、それはダメ」

サフランは悪戯っぽく笑ってはぐらかした。

いや、本当に困るんだけど……。

「即答はしかね「グレイさん！ サフランさん！ 入場の準備をお願いします」

そんな終着点の無い問答をサフランと続けていると、係員が俺とサフランの名前を呼んだ。

試合の時間が来てしまった。

サフランは俺との会話を打ち切って踵を返した。

「お、おい……」

「約束ですからね！」

一方的な念押しをして、サフランは愛機「ステイル・モラル」に向かう。

そのままこちらを一瞥することすら無く、彼女は入場用のリフトへビークルを進めてしまった。

試合前には呑気に話していたが、今を以て彼女とはライバル同士だ。

「まったく……」

俺は「ジャガーノート」のエンジンを起動すると、こちらも入場用リフトにビークルを乗り入れ、試合会場へとリングインした。

「……………わあああああああああああああ!!……………」

いつものガーランド闘技場の数倍とも思える音量の完成が響く中、俺とサフランは試合場へビークルを乗り入れた。

ゆっくりと視線が上がり、観客席の一部から徐々に試合場の全容が把握できる位置まで視野が移動する。

完全に地上に出たところで、強かな振動とともにリフトが停止した。

「うおおおおお! やつちまえ!!」

「グレエイ!! 蜂の巣にしちまええ!」

「叩っ斬れ!」

「「サフランさまあ〜!!」」

「たまんねえ!」

「俺の尻もウィップアームで殴ってくれえ!」

リフトを駆動させるパーツが鳴らす機械音は、闘技場全体に満ちる歓声にも簡単にかき消される。

盛り上がってくれるのは結構なことだが、一部にお近づきになりたくない連中の声が混じっているな……。

さて、気を取り直して正面を見据えると、対戦相手のビークルも俺と同時に姿を見せていた。

サフランの登場する「ステイール・モラル」は、範囲攻撃を可能とする強力な中距離武器ウィップアームを装備している。

ウィップアームは攻撃範囲が広く躲するのが困難なので、なかなか厄介な武装だ。

さらに、「ステイール・モラル」はレッグパーツが鳥脚ノーマルM強化型であるため機動力が高い。

しかし、サフランのビークルは左がノーマルアームで武装を持たず、他も装飾用の装備ばかりで、原作では特筆すべき脅威など無い相手だった。

ウィップアームの挙動は隙が大きいので、ガードするかダメージ覚悟で突っ込んで、

そのまま持ち上げて投げからの追い打ちを繰り返せば、基本的には削り切れる、

しかし、今俺の目の前に居るサフランのビークルは、明らかに俺の記憶とは別物だ。

ボディパーツが珍しい耐水ボディMであることと、派手なブレストパーツは変わらな
い……いや、マスクブレストの後ろには装甲が貼られているようだ。

風防パーツもウサギ耳の飾りはそのままだが、コクピット周りが少しゴツいな。

従来のパニールーフにプロテクター機能を追加したか。

何より一番の違いは、以前はウィップアームだけだった武装に加えて、左にスナイ
パーアームを装備している点だ。

そう来たか……。

スナイパーアームは弾速がそれなりに早く使いやすいので初心者プレイヤーに人気
の武器だが、原作のライバルバトルラーが一人も使っていない唯一の遠距離武器だった。

ボウガンアームは……セイボリーの「ワイルド・ストロベリー」が戦闘仕様するとき
使うのでノーカンで。

何はともあれ、ゲーム上でも使われたことが無い武器を装備した相手と戦うとな
ると、やはり緊張するものだ。

「ふふっ」

正面に見据えたサフランが仮面の下で笑ったような気がする。

そして、闘技場に試合開始を告げる号砲が轟き、俺たちは同時にスラストスターを利用したダツシユ移動でビークルを滑らした。

“ナツメツグ博士の右腕” グレイ 【ジャガーノート】
V S

“女帝” サフラン 【ステイール・モラル】

81話 ビークルバトルーナメント3 (サフラン戦)

サフランは開幕からカードを切ってきた。

スラストアーを噴射したダツシユ移動と急制動を利用して、不規則に遮蔽物の間をすり抜ける俺に、「ステイール・モラル」のスナイパーアームから放たれた弾丸が向かってくる。

新装備は隠し玉として使ってくると思ったが、いきなりの発砲だ。

少し面食らった。

スナイパーアームの弾薬の規格はガトリングアームや俺のチェーングアンアームと共通、それでいてフルオート機構を搭載しておらず連射が利かない。

火力に関しては言わずもがな、精度も俺のチェーングアンに劣る。

それでも、俺の愛用する火器と同じ高速弾が飛んでくる状況は、何よりそれを扱うビークル乗りがSランクも間近の腕利きともなれば、この試合が一筋縄ではいかないことを容易に想像できる。

それに、盗賊との戦いならば奇襲とアウトレンジからの一方的な狙撃でコクピットを

狙うことも定石だが、これはビークルバトルだ。

競技であり、ゲームであり、シヨールでもある。

早撃ち勝負をするつもりが無かった俺は、チェーンガンによる応射を思い留まり回避行動を取った。

「うおつとー」

サフランの放ったスナイパーアームの弾丸は「ジャガーノート」のボディすれすれの位置に飛んできた。

まともにヒットはしておらず、仮にボディへ被弾したとしても「ジャガーノート」の装甲であれば一発程度どうということはないはずだ。

しかし、それでも弾丸が自分のビークルに向かって正確に飛んでくるといふ状況はなかなかキツイ。

コクピットに当たれば、俺は車載火器の大口径弾で挽き肉である。

サフランは射撃武器の扱いにそれほど熟達しているわけではないはずだ。

それにもかかわらず、不規則な挙動をする俺のビークルにここまで正確な射撃をカメラしてくるとは……高ランクバトラーの肩書は伊達じゃない。

半端ない適応力だ。

一回戦から厳しい戦いになりそうだ。

「うふ……どうしたのお？ グレイ」

大岩の影にビークルを滑り込ませた俺を、サフランは嗜虐的な声で嘲笑った。

きつと彼女の顔は気味の悪い笑みで歪んでいることだろう。

あれは真性のドSだ……。

恐らく、ビークルに乗っているときだけ。

控室で話したときも彼女の自宅で会ったときも、サフランの印象は普通の女性だったが、ビークルバトルでは豹変するようだな。

「逃げ場は無いぞ〜！」

「そのまま我らの女王様の糧となるがいい〜！」

うるさい野次に続いて、鋭い風切り音が俺の耳に届く。

音の方向から迫りくる脅威を何となく察した俺は、大岩の陰から斜めにビークルの左アームを突き出し、トリガーを引いてチェーンガンを乱射した。

「っー！」

案の定、岩陰には「ステイル・モラル」の装備するウィップアームの先端が僅かに見えた。

しかし、遮蔽物の横から回り込んで俺を捉えようとしていた鞭は、すぐに軌道を変え

て引っ込んだ。

俺はチェーンガンで鞭を撃ち落とそうと試みたが、どうやら直前でこちらの発砲は察知されたようだ。

なかなかの反応速度だ。

「危なかつたわあ」

いつの間にか、「スティール・モラル」は俺をウィップアームの射程内に捉える位置まで接近していた。

ウィップアームは広い場所で効果を発揮する武器だが、サフランほどの熟練者になると遮蔽物を上手く利用してくる。

ゲームでも、こちらの射撃武器の直線的な攻撃はオブジェクトに着弾すると貫通せず消えてしまうにもかかわらず、サフランのウィップアームは攻撃範囲の広さゆえに横合いから直撃してくる、なんて現象がよくあった。

その一方的に攻撃を食らうシチュエーションが現実でも再現されてしまうのだから、今の状況は本当に厄介だ。

さらに痛いのは、ゲーム上のピークルバトルはHP制なので、どんなに強力な武器でも一発程度なら攻撃を食らっても大丈夫だが、現実では一撃でピークルがお釈迦に、もしくは操縦手が死ぬこともあり得る点だ。

ゲームにおけるサフランの攻略法は、ダメージを気にせず接近して投げて追い打ちをすることができた。

一発の攻撃が致命傷となり得る現実では取りづらい戦法故に、俺は簡単には攻撃に転じることができなかつた。

またしても死角から襲ってくるウィップアームを、俺はチェーンガンで迎撃した。

歪な挙動でこちらの弾幕を避けつつ接近してきた鞭の先端は、「ジャガーノート」を後退させることで躲したが、今度は遮蔽物から身を晒したところを見計らうように、スナイパーアームの銃弾が撃ち込まれる。

敵の射撃を回避しつつ、俺はまたビークルを反転させてウィップアームを撃ち落とし、破壊しようとするが、既に鞭は「ステイル・モラル」の右アームのウインチで巻き戻されていた。

「うふふ……あなたの魂胆はお見通しよ。何度も煮え湯を飲まされたから」
今までサフランと試合をしたことは何度かあるが、その時はこの戦法で一方的に倒せていた。

たとえ不利な位置に追い込まれても、ウィップアームを破壊するか、もしくは距離を取ってアームの可動部をチェーンガンで撃ち抜き機能を停止させれば、そこで決着だ。

ゲーム通りではないが、俺なりにこの世界におけるピークルバトルの定石と敵の動きを鑑みて見出したサフラン対策である。

しかし、サフランは強くなった。

同じ手が何度も通用する相手ではないことは、こうして身を以て思い知らされている。

少し奇策を講じるべきか……。

「ん？ 何を企んでいるのかしらあ？」

「ちっ、鬱陶しい」

俺が遮蔽物の陰でコソコソと動いていると、すかさずサフランはウィップアームを回り込むように飛ばしてくる。

エンジンが貫かれるのは避けたが、合金の鞭の先端は「ジャガーノート」のミスリル合金ボディに浅く傷をつけた。

こちらの姿は目視できないはずなのにこの正確さだ。

嫌になるな。

「つとと、これ……」

サフランのドS攻撃を凌ぎ、どうにか準備を整えた俺は、ゆっくりと「ジャガーノート」を反転させる。

稼働音と振動でサフランにも俺が動いているのは伝わったらしく、彼女が再びウィックプアームを構えるアームの稼働音が響いた。

「どうやら、こちらの動きに合わせて再び横合いからビークルの急所を狙う作戦のようだ。」

「うふふう……無駄よお」

「それはどうかな」

「っー」

次の瞬間、サフランは慌てて「ステイール・モラル」のスラスターを起動してその場を離脱した。

サフランが慌てて飛び退いた位置では、轟音と共に大きく土埃が舞った。

状況を見れば、明らかに大質量を持つ物体が投げ込まれたことがわかる。

徐々に埃が地面に落ちて視界が確保できるようになると、先ほど投げ込まれた物体の正体が明らかになった。

俺が遮蔽物越しに投擲したのは、試合場にオブジェクトとして設置されていた大岩だった。

命中していればサフランの「ステイール・モラル」はペシャンコになっていたことだ

ろう。

「っ！ しまった！」

「っラア！」

当然、これだけで終わらせるわけがない。

サフランが俺を見失った隙を突き、俺は【ジャガーノート】を横にスライドさせて、サフランから見て左手側に回り込む。

サフランはどうか俺の姿を認識して慌ててスナイパーアームで迎撃しようとしてきたが、俺が撃つ方が早い。

チェーンガンの銃弾は【ステイル・モラル】のスナイパーアームを付け根から吹き飛ばした。

サフランが放った銃弾は明後日の方向に飛び去る。

アームの器用さを利用してオブジェクトを投げつけるという戦法は、トロットビークルを用いた戦闘では珍しくない動作だ。

現代の車載火器を知っている身としては少しコスパの悪い動作に思えるが、武装を持たない一般ビークルでも可能な戦闘方法なので、意外と需要がある機能だ。

ビークルバトラーでは多くの者がアームパーツに装備した武装を主に使って戦うが、シユナイダーなどがこの機能を多用する。

彼は格闘戦仕様のビークルの出力を利用して、オブジェクトの投擲や相手のビークルにグラップル戦を仕掛けることを得意としているのだ。

大岩を投げ込んで視界を塞ぎ、同時に突っ込んで接近戦を仕掛ける戦法は、以前に俺も食らったことがあるシユナイダーの十八番だ。

俺は近距離戦を得意としているわけではないので、シユナイダーの戦術の一部だけをコピーさせてもらった。

「くっ」

サフランは苦し紛れにウィツプアームを振るってきたが、アームパーツを片方無くした状態では機体のバランスが普段と違っており、まともに踏ん張って狙いを定めることができない。

いつもより数段はキレが落ちる鞭の先端は、俺が振るった強化ブレードに簡単に斬り落とされた。

そのまま刃筋を立てるように意識してもう一度強化ブレードアームを振るえば、今度はウィツプアームの鞭部分が真ん中から切断される。

「あっ……このっ！」

武装を完全に奪った以上、最早サフランに勝ち目が無いことは本人にもわかっているはずだが、彼女は動きを止めることなく俺に向かってきた。

正直、今までのバトルでここまで粘ってきた相手はほとんど居ない。

ビークルバトルは競技であって殺し合いではないのだ。

一部の例外を除いて、ある程度のレベルのバトラーならば、お互いに危険なプレーはしない。

ルールではないが、良識の範囲で戦うことが暗黙の了解である。

「私は……負けるわけには、いかない!!」

サフランは既にまともな制御が出来なくなつたウィップアームを振りかざし、中ほどから切断された金属のワイヤーを「ジャガーノート」に叩きつけようと試みた。

正直、何が彼女をここまで突き動かしているのか定かではないが、このままでは色々マズい。

「悪いな」

「あつ……」

俺は「ジャガーノート」を斜めに後退させて「ステイール・モラル」から距離を取ると、チェーンガンを点射した。

損傷が激しくバランスが崩れていた「ステイール・モラル」には、サフランの腕を以てしても俺の弾丸を躲すほどの機動力は残されていなかった。

軽快な炸裂音と同時に徹甲弾が鋼のボディを抉る嫌な音が試合場に木霊する。

そして、俺がチェーンガンアームを下ろして戦闘態勢を解除したときには、エンジンを破壊されたサフランのビークルは動きを止めていた。

82話 ビークルバトルトーナメント4

俺のビークルバトルトーナメント一回戦は、無事に勝利で幕を閉じた。

審判の勝者を告げる声に続いて、試合場には歓声が響き渡る。

観客にとつてもなかなか見応えのあるバトルだったらしく、俺と対戦相手のサフランには惜しめない拍手が送られた。

斜に構えたところで、称賛を受けるのは気持ちいいものだ。

しかし、そんな俺のドヤ顔は一瞬にして凍り付くことになる。

「っ！ マズいっ！」

俺のチェーニングガンの掃射を受けて活動を停止した「ステイル・モラル」からは、ボタバタと黒い液体が流れ出ている。

どうやら、俺は誤って燃料タンクを撃ち抜いてしまったようだ。

普段ならこのようなミスはしないが、サフランの「ステイル・モラル」は前面が派手なマスクプレストで装飾されているので、燃料タンクの位置がわかりにくい。

おまけに、サフランが予想外の粘りを見せたために、些か慌てて制圧したことも原因

だろう。

あのままでは「ステイール・モラル」が爆発炎上しかねない。

「サフラン！ 早く脱出を……っ！」

「え……きやあ!!」

俺の声は、突如起こった眩い閃光と熱風にかき消された。

俺が放ったチェーリングの弾は、エンジンを撃ち抜いた際に電気系統も中途半端に傷つけていたようだ。

スパークの火花が燃料に引火したサフランのビークルは、足元から一気に炎に包まれた。

「サフラン！」

「だ、大丈夫、何とか……」

サフランのビークルは炎に包まれたが、幸いコクピットは無事なようだ。

トロットビークルは四メートルほどの高さを持つので、地面とレッグパーツで漏れたガソリンが炎上した程度なら、座席の人間にまで影響が及ぶことは少ない。

もちろん、弾薬ボックスや燃料タンクそのものを爆発させたら、ビークル全体が木端微塵で操縦手も挽き肉だが……。

そういう意味では運が良かったな。

見る限り、サフランは無傷だ。

しかし……。

「おい！ 早く降りろ！」

「あ、脚が……」

「マジかよ……」

最悪だ。

ビークルの操縦席が潰れて、サフランは脚を挟まれて身動きが取れなくなっているようだ。

交通事故の事例として聞いたことがある状況ではあるが、まさか実際に目の当たりにするとは、しかも自分が原因で起こるとはな……。

「！！」「サフラン様く！！！！！！」

「じよ、女王様がく！！」

「は、早く、係員を……」

「グレイの野郎……俺の飼い主様を……」

気持ち悪い観客の声を無視して、俺は「ジャガーノート」を加速させた。

そのまま一気に「ステイール・モラル」の目の前まで接近し、俺は強化ブレードア

ムを振るう。

狙いすまして放った斬撃は、「ステイール・モラル」の耐水ボディMの前面を大きく抉るように切り落とした。

そのまま露出したボディパーツの内部をアームで掴み、引き千切るように引つ張る。効率が悪いが、下手にこれ以上ブレードを差し込むとサフランの体を傷つけかねない。

何度か強引な解体動作を繰り返している内に、「ステイール・モラル」のコクピットは座席の周囲を歪ませるようにして広がった。

「グ、グレイ、あなた……」

「こっちに移れ！」

俺は「ジャガーノート」のボディを前面に傾けてサフランへ手を伸ばした。

最初は呆けていたサフランも、はっと我に返ったような表情で、必死に俺の腕を掴もうと試みる。

映画ならスリリング且つロマンチックな光景だろうが、現実でいつ爆発するかかわからない状態だと焦りと恐怖しかない。

俺が限界までコクピットから体を乗り出すと、どうにかサフランの手を掴むことに成功した。

そのまま「ジャガーノート」のアームで「ステイール・モラル」の分解を続けつつ、俺はサフランを潰れたコクピットから引き摺り出す。

不自然な体勢なので一人の重量を引き揚げるのは一苦労だ。

とはいえ、サフランの名誉と自分の見栄のことを鑑みると、それを口にするのはもちろん顔に出すのも憚られたので、俺は可能な限り表情を隠しながら腕を引いた。

そしてついに、サフランの足先が「ステイール・モラル」のコクピットから抜け出す。サフランはどうか俺にしがみつこうようにして、「ジャガーノート」のコクピットに乗り移ってきた。

「うおー！」

「きゃあー！」

ちょうどそのタイミングで、先ほどまでサフランが乗っていた「ステイール・モラル」から続けざまに炸裂音が響いた。

ビークル全体が爆発したわけではないが、燃え盛る火が原因でスナイパーアームの弾薬が誘爆したようだ。

俺は咄嗟にビークルを反転させたので、破片は「ジャガーノート」のミスリル装甲に弾かれており、コクピットの俺とサフランに被害は無い。

しかし、「ステイール・モラル」の弾薬ボックス周辺には大きく亀裂が入っており、操

縦席には破片が飛んでいる。

あのままサフランが自分のビークルに搭乗し続けていたら、彼女は大怪我をしていたはずだ。

「間一髪だな……」

「……………」

この段階になってようやく闘技場の係員が担架を持って駆けつけてきたので、俺はサフランのことを彼らに任せて「ジャガーノート」に乗って退場した。

闘技場の選手控室の隅にある救護所では、先ほど試合場から緊急搬送されたサフランが簡易ベッドに横たわっていた。

ビークルはズタボロの黒焦げだが、奇跡的に彼女は無傷だった。

潰れたコクピットで挟んだ脚も、少し打撲がある程度で入院は必要ないらしい。本当に運のいいことだ。

「負け、ちゃったか……」

サフランは天井を眺めながらポツリと呟いた。

当然、彼女が声を掛けた先は俺だ

何故か、本人の希望で俺はベッド上のサフランに付き添っている。休むだけなら俺は必要ないと思うけどな……。

まあ、仕方ない。

サフランの怪我と消耗の原因は俺だ。

二回戦まではまだ時間があるので、そのくらいの要望なら聞かせ。

「スナイパーアーム、全然当たらなかつたわ」

「まあ、年季が違うからな。俺はずっとチェーリングアームを使って戦ってきた。自分で言うのもなんだが、射撃技術には自信がある。付け焼刃で対策されて撃ち負けるタマじゃないさ。君はよくやったと思うよ。短期間であれだけ射撃武器を使いこなしているのだから大したものだ」

我ながら気の利いたことは言えていないと思うが、サフランは意外にも心から嬉しそうに穏やかな笑みを浮かべた。

仮面越しだが、雰囲気ですのくらいはわかる。

「……ねえ、グレイ」

「ん？」

「今日は……本当にありがとうね」

「さすがに目の前で丸焼きになりかけている奴を見殺しにはしないさ。ピークルバトル

は殺し合いじゃないからな」

「そうじゃなくて！」

サフランは強い口調で否定した。

「私……あなたが居たから、バトルを続けて「おい！ 大丈夫か!？」

俺はサフランを遮るように飛んできた声の方向に振り向いた。

現れたのはフエンネルだ。

後ろにはコニーとバナラの姿も見える。

「……まあ、お前なら無事に決まってるか。あんなもんで死ぬわけがないよな」

「心配したよ。いきなりビークルが燃え始めるんだもん」

「グレイ、大丈夫だったのかい？ 凄い炎だったけど」

三者三様のセリフに、俺は落ち着いて答える。

「ああ、何とかな。俺はびんびんしてるし、サフランもかすり傷だ」

「そうか。その様子なら、この後の二回戦も大丈夫そうだな」

「おう、問題ない」

どうやら、サフラン戦の後のビークル炎上騒動は、観戦していた連中から見るとかなりの重大故だったようだ。

俺は傷一つ無い五体満足でサフランも軽傷で済んだが、一歩間違えば命を落としていたかもしれない。

俺もサフランもそれなりに経験を積んだピークル乗りで、お互いに安全管理をきちん意識しているにもかかわらず、実際にはこれだけの事故が起きる。

それを思うと、盗賊との戦闘に比べればピークルバトルが遥かに安全とは言い切れないのかもしれないな。

とはいえ、今更やめるわけにもいかない。

緒戦から色々と面倒はあったが、俺の目標はトーナメントでエルダーを倒して奴をチャンピオンから陥落させることだ。

原作では、トーナメントの結果は大してストーリーに影響しないが、この世界でエルダーからチャンピオンの座を奪うことには相当な意味があるはずだ。

無敵のピークル乗りとしてのイメージを崩壊させ、確固たる地位として確立したものを破壊する。

それだけでも、エルダーの地位を利用した資金集めとブラッディマンティスの統率を妨害することになるだろう。

そして恐らく、奴を倒せるのは俺かバナラだけだ。

「しかし……【ジャガーノート】は凄いな。いや、もちろんお前の腕もそうだけだよ」
「いやいや、ナツメツグ博士とマルガリータのおかげさ」

俺はフェンネルの言葉に軽く答えた。

フェンネルにはエントリー前にマルガリータのことを話したし、バニラとコニーは彼女と面識があるので、三人とも特に反応はしなかったが……。

「……マルガリータ？」

唯一、マルガリータのことを知らないサフランから疑問の声が発せられた。

俺が口を開くよりも先にフェンネルが答えた。

「【ジャガーノート】をメンテした整備士だつてよ。凄え腕利きらしい。あと、グレイの恋人だったか？」

「(っ！)」

「いやいや！……まだ違うよ」

「(まだ……)」

サフランは何やらひどく驚いたような表情をしているが、俺はそれよりもフェンネルの言葉が気になった。

マルガリータがうちに来ていることは話したが、俺とのことなど何も……ああ、そういうわけか。

フェンネルが不可解そうにコニーへ視線をやったことから推測するに、あること無いこと吹き込んだのはこの小娘か。まったく……。

「そうなのか？ 聞いてた話じゃ……」

「ふふつ……まだ（・・）違う、ってただだよ。ね、バナラ？ 私たち、応援してるもんね」

「そ、そうだね」

「……なるほど。まあ、頑張ってくれ」

妖しげに目を輝かせるコニーに、フェンネルは少し呆れたようにため息をついた。

コニーの言うことを鵜呑みにされるのも考え物だが、興味なさげなフェンネルに弁解するのもお互いに疲れる。

面倒なことだ。

俺は一旦問題を先送りにして、簡易ベッドの上のサフランに向き直った。

「ところで、サフラン。さつき何か言いかけてなかったか？」

「……え？」

「フェンネルたちが来る直前に、何か……」

「な、何でもない！ し、試合前に話したとき、リッキーの件で助けてくれたお礼をまだ言ってなかったから……。だから……。ありがとうって……。そ、それだけよ！」

「……そうか、わかった。そういうえば、サフランが勝ったら聞いてほしい頼みってのは？」

「大したことじゃないから。忘れて」

「……………」

「忘れて」

「……サフランがそう言うなら」

強い口調と仮面の奥から向けられる鋭い目に気圧されて、俺は頷いた。

「コニーはまたしても邪悪な笑みを浮かべているが、一体何だと言うんだ？」

「さて、二回戦の予定は……」

俺たちはサフランを医療スタッフに任せて控室に戻り、コニーも再び観客席へ向かった。

そして、ちょうどビークルの格納スペースに戻ったところで、フェンネルが呟きに応えるように闘技場の係員が現れ、俺たちに二回戦の対戦表を渡してきた。

「ちょうどシユナイダーの緒戦も終わったようだな。」

「相手がどこの誰かは知らないが、原作通りシユナイダーは確実に勝利している。」

「次の相手は俺か。まさかお前と当たるとはな」

フェンネルは些か驚いたようにバニラと視線を交差させた。俺は知ってたけど。

「でも、お前とは一度やってみたかったんだ。楽しみだぜ」

バニラもフェンネルの熱い闘志を感じ取って力強く頷いている。

コニーとベッド上のサフランは完全に蚊帳の外だが、俺も今はそちらに構っている余裕は無い。

何故なら……。

「やはり、あんたと当たるか……」

俺の二回戦の相手は、“ネフロの英雄”の異名を持つ俺と同じSランクバトラーのシユナイダーだった。

予想通りとはいえ、やはり実際に対戦表を見ると自然と手に力が入る。

彼も研鑽を積んで以前より強くなっていることだろう。

接近戦仕様の高出力ビークルを駆る格闘戦のエキスパート。

一筋縄ではいかない相手だ。

83話 ビークルバトルーナメント5

トーナメントの一回戦が全て終了し、二回戦が始まる前の空き時間。

コニーが再び観客席へ向かい、フェンネルが自分のビークルのところへ戻った直後、俺とバニラのもとに来客があった。

「バニラ君、グレイ君」

声を掛けてきたのは、原作でも一回戦の直後に顔を合わせることになる人物だった。

「セントジョーンズ卿、いらしてたんですね」

「ああ、今年はグレイ君も出ると聞いていたからね。バニラ君も出場しているとは思わなかったが。何はともあれ、二人とも緒戦を突破したみたいじゃないか。おめでとう」

「どうも、ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

原作では、すぐにマーシユの件を口にしたセントジョーンズ卿だったが、今回は事前に報告が済んでいるので、バトルの方を話題にした。

まあ、ゲームではスームスームから戻ってきた直後はセントジョーンズ卿が不在で、

このビークルバトルトーナメントのイベントのときでないとコンタクトが取れないからな。

原作では、トーナメントの後によくセントジョーンズ卿はスームスームへ向かい、プレイヤーともシブレットとマーシユが居る掘っ立て小屋で再び顔を合わせることになるのだ。

今回は既に親子の再会は済んでいるはずなので、周りの目も気にせずマーシユのことを口にするほどの余裕の無さは見せない。

「ところで……もうドン・スミスとも会われましたか？」

「……ああ、もちろん。問題も解決したし、今後も友好的な付き合いができそうだ。非常に実りのある会談だったよ」

セントジョーンズ卿も俺の意図を悟ってマーシユの名前やジュニパーベリー号のことは口に出さずに答えた。

ブラッディマンティスの関与や奴らがハッピーガールランドに根を張っていることは伝えてあるので、整備士や他の選手の耳に情報が入るリスクを排除しているのだ。

ぐるっと見回したところエルダーの姿は無いが、警戒するに越したことは無い。

ガールランド闘技場には意外に死角が多く、そういった場所で選手とスポンサー企業のエージェントが密談をするのは暗黙の了解——当然ながら違法賭博の取引も行われて

いる——ではあるが、ブラッツディマンティスの関係者全てが相手となると話は別だ。

「そういえば、君たちも近々スームスームへ行くそうだね」

「ええ、野暮用がありますので」

「その件は私も聞いているよ。こちらにも近いうちにもう一度ドン・スミスのもとを訪れることになると思う。詳しいことはその時に話そうじゃないか」

「俺はそれで構いません。バナラもいいか？」

「うん、大丈夫だよ。トーナメントが終わったら、僕もすぐスームスームへ行く予定だからね」

こうして、セントジョーンズ卿との短い会談は終了した。

二回戦の第一試合はフエンネル対バナラの戦いだ。

試合開始時間も近くなったので、バナラは自分のビークルのところへ向かい、激闘に備えた。

俺も控室の「ジャガーノート」のところへ戻る。

そうすると、偶然ながら俺はある男と顔を合わせた。

「グレイ……随分と手こずっていたようだな」

「彼女も腕を上げていたからな。当然さ」

二回戦の対戦相手シユナイダーだった。

シユナイダーは試合の外で挑発や嫌味を放ってくるタイプでもなければ、他の選手に気の利いたことを言える性格でもない。

試合前にわざわざ向こうから会いに来た可能性はほぼ皆無なので、ここで遭遇したのは本当に偶然だ。

「シユナイダー……」

「……………」

シユナイダーは最早言うことは無いとばかりに沈黙を返した。
相変わらず無愛想な奴だ。

この男と話すと、俺の方が圧倒的に口数は多くなる。

「シユナイダー、『ネフロの英雄』はあんただ。俺もネフロ闘技場でSランクに認定されたバトラーだが、それだけであんたに取って代わることはできない」

「……………」

「だが、俺にも負けられない理由があるのでな。このトーナメントを譲るつもりはない」
「当然だ」

シユナイダーは相変わらず不機嫌そうな声で短く答えた。

言葉は少ないが意志は伝わってくる。

向こうもやる気は十分。

俺も闘志ははつきりと示した。

最早言うことは……いや、それだと二人して黙って踵を返すことになるな。

俺が喋るべきだろう。

「じゃあ、いいバトルにしよう」

「フン……」

微妙にジミーのセリフをパクッてみたが、シュナイダーは返事とも言えないような答えを残して歩き去った。

本当に、無愛想な奴だよ。

// 青い稲妻 // フェンネル 「ブルー・サンダー」

V
?????S

// バニラ 「カモミール・タイプII」

試合開始の合図と共に、会場には眩い閃光が交差した。

先手必勝とばかりに長距離キャノンアームを発砲したフェンネルに対し、バナラがガトリングアームを撃ち返したのだ。

空中で衝突したミサイル弾頭と大口徑の徹甲弾は、爆炎と共に大量の破片を辺りに撒き散らす。

フェンネルの駆る「ブルー・サンダー」の周辺には乱射されたガトリングアームの跳弾が乱れ飛び、バナラの「カモミール・タイプⅡ」の周りには長距離キャノンアームのミサイル弾の破片が降り注ぐ。

「ちっ！ グレイと同じ武器……いや、そっちが原型か」

バナラの使うガトリングアームはデザートホーネット団謹製のカスタムだが、チェーリングンガンに比べると性能は数段劣る。

精度に関しては言うまでも無く、機構が複雑なので堅牢性も低く、当然ながら重量も体積も嵩めば、取り回しが悪くなり弾薬の搭載スペースも小さくなる。

しかし、それでもゲームにおける最強の遠距離武器の威力は伊達ではない。

長距離キャノンアームを主兵装として備える遠距離戦型ビークルに搭乗するフェンネルとも、バナラはロングレンジで対等以上に渡り合った。

長距離キャノンアームに対して圧倒的な手数を持つガトリングアームの掃射は、確実にフェンネルを試合場のコーナーに追い詰めた。

発射速度に圧倒的な差がある以上、バナラが攻勢に出る時間が長くなるのも当然だ。バナラが放ったガトリングアームの弾丸によって、試合場にはフェンネルがダツシユ移動で「ブルー・サンダー」を滑らせた軌道をなぞる様に弾痕が穿たれている。

それでもこの状況で一発も被弾していないフェンネルは、さすがはトーナメントに出場するAランクバトラーである。

そして、バナラは攻勢を維持しつつも、タイミングを見計らったフェンネルによる長距離キャノンアームの射撃に合わせて「カモミール・タイプII」を急制動させ、横滑りにフェンネルの左側面に回り込んだ。

「っー」

「ブルー・サンダー」から放たれたミサイル弾頭がバナラから外れた位置に着弾し爆炎を撒き散らすのが、視界が悪い中でもフェンネルは敵の接近を目視した。

しかし、完全な遠距離攻撃型ビークルに搭乗するフェンネルには、そのまま近距離で迎撃する術は無い。

普段ならスラスターを噴射して距離を取るところだが、速度の乗っているバナラから逃げることは叶わない。

「そこだ……つて、うわ！」

「ふっ、甘えぜ！」

しかし、そのまま急接近してトライデントアームの刺突を繰り出そうとしたバナラは、突如として足元で起こった爆発に、慌ててビークルを退いた。

飛んできたのは「ブルー・サンダー」の左アームから軽快に流し撃ちされた砲弾だった。

フェンネルの主兵装である右アームの長距離キャノンアームの死角を突いた戦法は途中まで成功した。

だが、フェンネルもビークルバトルに出場する際にはそれなりに備えをしているのだ。

トロット楽団に所属していた頃の癖で、フェンネルは今でも普段はバックパーツにステージバックを装備しているが、バトルに出るときは補助エンジンを積んで出力を向上している。

さらに、左にも補助的に砲弾アームを装備しているので、副兵装も備えていることになる。

そして、フェンネル自身も十分に長距離キャノンアームの射撃間隔をカバーするように副兵装を活用する技術を習得していた。

余談だが、フェンネルも原作以上に腕を上げている。

その背景には、突如現れて一気にSランクバトルまで上り詰めたグレイの存在を意識していることもあるのだが、本人はそのことを知る由も無い。

距離を保った状態で一撃必殺の長距離キャノンアームを撃ち込みたいフェンネルに、ガトリングアームの手数と弾幕でダメージを与えてあわよくば接近してトライデントアームの刺突をお見舞いしたいバニラ。

序盤は両者一步も譲らない攻防を繰り返していたが、戦局は徐々にバニラに傾き始めた。

原因は、長距離キャノンアームの装弾数の少なさと、何と言っても着実に「ブルー・サnder」にダメージを与えてきたバニラの地力だ。

フェンネルもグレイに触発されて射撃技術とビークルの操縦の精度に磨きは掛けてきたが、バニラには一步及ばない。

バニラの「カモミール・タイプII」も爆風と破片で細かい傷は付いているものの、フェンネルの「ブルー・サnder」は既に何発かいい弾をもらってボディに穴が開き、ブレストパーツのバンパーも吹き飛んでいた。

このままでは、フェンネルはジリ貧だ。

じわじわと削られて、先に「ブルー・サンダー」の方が動かなくなることは明白である。

当然ながら、フェンネル自身もそのことを理解していた。

「おい！ バニラ！ 聞こえるか!?!」

「……………」

お互い遮蔽物で射線を切った状態で、フェンネルは声を張り上げた。

バニラははつきりと返事をしなかったが、フェンネルはお構いなしに言葉を続ける。

「このままじゃ罅が明かねえ。次の当たりで決着を付けるつてのはどうだ?」

「……………」

バニラは依然として答ええない。

フェンネルの気質を考えれば、これが揺さぶりや罠である可能性は低いが、それでも

軽々しく対戦相手の口車に乗るのは憚られた。

しかし、フェンネルにとってはここが正念場だ。

状況からして、一発逆転を狙って勝負に出るしかない。

一拍置いて、フェンネルは声に闘志を漲らせながら口を開いた。

「…………お前がどう思おうと、俺は今言った通りに動かせ。俺に勝ちたかったら、撃ち返し

てみる。行くぞ!」

「っー」

次の瞬間、フェンネルは言葉通り遮蔽物の陰から飛び出した。

バナラは僅かに出遅れたが、ビークルの損傷度合いの影響もあり、二人がそれぞれの武器を構えた時の状況は五分五分だ。

損傷度の大きい「ブルー・サンダー」は僅かに駆動部の動きが鈍っている。

しかし、ビークルの状態が万全とは言い難いなか、フェンネルは正確に長距離キャノンアームを放った。

熱源を感知して追尾する弾頭の性能と軌道を熟知した、完璧な照準での射撃だ。

「くっー」

強力な炸薬を搭載したミサイル弾頭がバナラの「カモミール・タイプⅡ」に迫った。

「ぐおー」

フェンネルの放った長距離キャノンアームのミサイル弾は、バナラのビークルに到達する中ほどの空中で爆発した。

状況から、フェンネルにもバナラのガトリングアームによつて撃ち落とされたことがわかる。

しかし、俄かには信じられないことだった。

格闘戦を展開することも視野に入れた闘技場はそれほど広くない。

一方的にアウトレンジから攻撃することが難しい以上、長射程の射撃武器を使うことによるアドバンテージも取りにくくなるが、近距離からの射撃が命中しやすいのも事実だ。

さらに、フェンネルほどの腕を持つピークル乗りが行う射撃ともなれば、回避や迎撃は困難を極める。

そもそも、長距離キャノンアームの弾を撃ち落とせるほどのピークル乗りや武器など多くない。

しかし、バナラはこの状況を逆手に取った。

グレイのチェーリングガンアームより劣る精度をカバーするために、敢えて近距離での射撃戦を受けて立ったのだ。

咄嗟の判断で前進しながらガトリングアームを乱射し、より命中率の高くなる近距離で撃つことで、見事に弾丸をミサイル弾に命中させたのだ。

これにはフェンネルも面食らった。

「なっ!?!」

さらに、フェンネルは驚愕を声に滲ませた。

長距離キャノンを装備した右のアームを見ると、接合部から火花を散らしながら

「不自然な動きを繰り返しているのだ。」

「先ほど、空中で撃ち落とされたミサイル弾の破片の影響か、右のアームの制御が全く効かない。」

「主兵装の機能が完全に停止してしまったのだ。」

「ふっー！」

「っー！」

「これを見逃すバニラではない。」

フェネルの「ブルー・サンダー」の動きが止まった隙を見計らい、バニラは「カモミール・タイプII」の右側に装備したトライデントアームを稼働させ、スラスターを噴射したダッシュ移動の前進に合わせて鋭く突きだした。

「カモミール・タイプII」のダメージもゼロではないが、「ブルー・サンダー」に比べれば軽傷なので、動作に影響はほとんど見られない。

「ぐう」

ビークルが強烈な打撃を食らった衝撃で、操縦手のフェネルも強かに息を詰まらせながら下を向いた。

衝撃で体が跳ねそうになるが、ハンドルを強く握って体勢を保つ。

「ブルー・サンダー」はノックバックで結構な距離を後退させられた。

「……………っ！」

顔を上げたフェンネルは未だに闘志の衰えない瞳をサングラスの奥からバナラに向けるが……マシンの限界に抗うことは叶わない。

ボディと駆動部を連結する部分の回線を破壊された「ブルー・サンダー」は、レッグパーツを折るようにその場に崩れ落ちた。

硬質な鋼鉄の塊が試合場の地面に落下する音が響き、バナラも勝利を確信する。

「勝った……」

最早、フェンネルのビークルにこれ以上の戦闘を続ける力は無い。

観客もバナラが勝利したことを認識し、一瞬の静寂の後、割れんばかりの歓声が闘技場内に鳴り響いた。

「「「わあああああああああああああ!!!」」」

「凄え!!」

「フェンネルに勝っちゃったぞ!」

「ルーキー万歳!!」

初出場の無名のCランクバトラー。

この数か月でバナラの名前はそれなりに有名になっていたが、まさかトーナメント常連のAランクバトラーに勝利するとは、多くの人間の予想を裏切った。

しかし、試合場で行われたバトルは、フェアで且つ見応えも十分な、まさに名勝負であつた。

誰も今のバトルに文句などつけない。

観客の全てがバナラに、そしてフェンネルにも惜しみない拍手を送つた。

「……ふっ、やるじゃねえか」

フェンネルの眩きは観客の声にかき消された。

84話 ビークルバトルトーナメント6 (シユナイダー
戦)

リフトが硬質な機械音を発生させながら俺の「ジャガーノート」を押し上げると、例によって普段より音量が大きめの歓声俺が出迎えた。

試合場に入場する俺を見据える視線は先ほどから痛いほど感じる。

まだ頭しか出していないのに……。

「待ってたぞお!!」

「シユナイダー!! 今度こそぶっ倒せえ!!」

「漢見せろやあ!!」

「グレエイ! 今回も蜂の巣にしてやれえ!」

「やっちまえ!!」

バニラとフェンネルの対戦は、俺の予想通り大幅に強化された原作主人公の勝利という結果になった。

バニラは二回戦を突破した。

次にバナラが戦うのは準決勝、原作ならシュナイダー戦だ。

ここで俺が勝てば、次のバナラの相手は俺が務めることになる。

その後は、勝った方がエルダーに挑む決勝戦だ。

俺はこれから二回戦。

まだ折り返し地点すら通過していない。

だが、この戦いが決して油断できるものではないこともまた事実だ。

「シュナイダー……」

「……………」

相変わらず不機嫌そうな表情で俺を見据える口数の少ない男は、この地方で唯一俺と

同格のライセンスを持つ男。

ビークル歴に至っては、向こうの方が圧倒的に先輩だ。

だが……負けるわけにはいかない。

今回も、俺が勝たせてもらう。

「……………よしっ」

俺はビークルのハンドルを握りなおし、開始の合図を待った。

“ナツメツグ博士の右腕” グレイ 【ジャガーノート】

V S

“ネフロの英雄” シュナイダー 【マキシマム】

「おおおおおおおおおおお!!!」

「ぬっ」

シュナイダーは開始の合図とともに飛び掛かってきた。

真っ直ぐに、何のフェイントも無く、左アームに装備したオリジナルのシールドを翳しながら突っ込んでくる。

コンマ一秒でも早く俺に到達して、近接攻撃をぶち込んでくる構えだ。

俺は即座にチェーンガンで迎撃したが、シールドアームSSに吸い込まれた数発の弾丸程度では、シュナイダーのタックルの勢いは止まらない。

そのままシールドバッシュの要領で、シュナイダーの【マキシマム】は激突してきた。いい選択だ。

インパクトの寸前に右の金棒アームでの攻撃に切り替えようものなら、その瞬間に俺のチェーンガンがシールドの隙間から機関部を撃ち抜いていた。

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

俺は「ジャガーノート」を半身にして相手の突進を捌きつつ、右の強化ブレードアームで軽く打ち払うようにして、シュナイダーのシールドバツシュをやり過ぎた。

しかし、距離を詰めたシュナイダーの攻勢の手は緩まない。

前のめりの突進体勢のまま、右の金棒アームを強引に叩きつけてきた。

俺も近接武器である強化ブレードアームを掲げて防御態勢を取る。

硬質な金属が打ち合わされる音が響き、殴り合いでお互いのビークルの動きはしばし止めるかのように思えたが……。

「くっ」

「ぬうう!!」

シュナイダーはそのまま「マキシマム」をさらに前傾させて重量を掛けつつ、ブレードごと「ジャガーノート」を押しつぶそうとしてきた。

さすがに無謀で無茶が過ぎる。

シュナイダーは格闘戦を得意とするビークルバトルラーなので、どれほど冷静に戦いを進めようと、ファイトスタイルには猪突猛進の気がある。

掴みかかり、投げ飛ばし、金棒でボコボコに殴るのが彼のスタイルだ。

だが、今日のシュナイダーはあまりにも無鉄砲だった。

「この野郎……離れろ、や！」
「っ！」

当然ながら、このようなごり押しで成す術なくやられる俺ではない。

俺は「マキシマム」のレッグパーツからボディへの接合部を狙って、チェーンガンに至近距離から乱射した。

さすがに俺の武装の火力を知っているシュナイダーだけあって、チェーンガンから放たれた弾丸はスラスタを用いたダツシユ移動で躲していた。

シュナイダーは大岩を遮蔽物として俺のチェーンガンの射線を切り、俺も同じ岩の反対側まで「ジャガーノート」を移動させて相手の出方を待つ。

お互いの姿は見えない位置だが、声は聞こえる距離だ。

「らしくないじゃないか」

「お前に、負けるわけにはいかない……」

若干の嫌味を込めた俺の言葉に対し、シュナイダーは自分に言い聞かせるように呟いた。

観客の声の音量が凄まじいなか、あまり声を通らないはずのシュナイダーの言葉は、はつきりと俺の耳に届いた。

先ほどの攻防、お互いに有効打は一発も入っていないが、僅かに俺が防戦寄りだった。俺とシュナイダーは今まで一度しか試合をしたことが無い。

俺のSランク昇格を賭けた、ネフロ闘技場での一戦。

あれが唯一の対戦だった。

一年半と少し……約二年前の出来事か。

そういう意味では、俺はシュナイダーの戦法に関しては最近の事情まで知らないわけだが……それでも先ほどの打ち合いがシュナイダーの本領とは思えない。

確かに、彼は接近戦に特化したビークル乗りだが、あくまでも冷静に立ち回り戦術を駆使するタイプであり、防御を捨てる猪突猛進型のファイターではない。

「お前……焦っているのか？」

「……………」

シュナイダーは無言だったが、俺には彼の考えが少し読めてしまった。

今年のトーナメントは初参加者が多く、一見したところシュナイダーたち古参のビークル乗りにとって有利だ。

ベテランに当たる確率が低いということは、普通は誰もがルーキー相手のイージーゲームと考えるだろう。

実力と実績を持つ選手が消耗せずに予選を突破できる可能性が高い。

だが、それは……一般的なぼつと出の新人が相手だった場合だ。今年の初参加者は事情が違う。

Sランク昇格が目前となった原作よりも力をつけているサフラン、原作主人公のバラ。

そして、トーナメント外ではあるが、シュナイダーにもエルダーにも勝利した経験のある俺だ。

少しでも選手の背景を知っていれば、例年よりも苛烈な争いになることは容易に想像がつかだろう。

だが、シュナイダーは定石通りの消耗を抑える戦法で来たのだ。

早期決着を狙って、強引に勝利をもぎ取りにきた。

しかも、俺相手に。

「舐められたものだな」

「……………」

上から嫌な気配を感じ、俺は「ジャガーノート」のスラスターを起動してその場を離脱する。

予想通り、シュナイダーの「マキシマム」が、大岩を飛び越えて上から襲ってきた。

轟音を発しながら地面に叩きつけられた金棒アームを視界の隅で捉えながら「ジャガーノート」を反転させた俺は、そのままチェーリングアームを持ち上げて速射する。

「っ！」

しかし、俺の発射した弾丸はほとんど「マキシマム」のボディを捉えることは無かった。

左のシールドアームで防御されたわけでもない。

シュナイダーは予め左のアームで掴んでいた鉄骨を投げつけてきたのだ。

「ぬっ……」

「おおおー！」

数発の弾丸のほとんどは空中で太い鉄骨を撃ち抜いて軌道を変え、「マキシマム」に着弾したのは一発だけだ。

ブレストパーツのスパイクを破壊されながらも、ビークルの機能に対してダメージの無いシュナイダーは、そのまま強引に俺に突っ込んできた。

再び接近戦に持ち込まれ、俺はまたしても強化ブレードアームでの防御を余儀なくされる。

「……舐めているのはお前だ」

「あん？」

火花を散らしながら合金の金棒と強化ブレードが競り合うなか、シユナイダーは不意に呟いた。

「俺は……いつも全力だ。優勝するために、エルダーを倒すために……全力で、最善を尽くす。その姿勢は何時いかなる時も変わらない。お前はトーナメントを見ていない」

「……やけに口数が多くなつたな」

俺はチェーンガンの銃口を最小限の動きで上げて「マキシマム」に向け、至近距離からレッグパーツを撃ち抜こうとした。

しかし……。

「無駄だ」

「おっ！」

チェーンガンを装備した「ジャガーノート」の左アームは、どういうわけかシユナイダーに抑え込まれていた。

よく見ると、「マキシマム」の金棒の柄が「ジャガーノート」の左アームの肘部分とチェーンガンの手前部分に嵌まっている。

先ほど、近接武器での罅迫り合いになった際に、上手いこと打撃部位の逆側を捻じ込んでいたようだ。

人間同士のアームロックとは違ったフォームだが、ビークルと武装の構造を上手く突

いた拘束技術だ。

さすがに接近戦のエキスパートだけはある。

片手でこちらの両手を封じられてしまった。

「グレイ……勝たせてもらうぞ」

シュナイダーは左のシールドアームSSを振り上げた。

武器としては然程の代物ではないが、回避もままならずコクピットを潰されれば俺もお終いだ。

だが……。

「気が早いぜ」

「往生際が悪い……っ！」

密着状態での超接近戦。

明らかにシュナイダーが有利なポジションだったが、先に体勢を崩したのは「マキシママ」の方だった。

「何?！」

慌ててハンドルを操作したシュナイダーは「マキシママ」をどうにか踏みとどまらせて俺と対峙しなおそうとするが、シュナイダーの表情は珍しくもさらに歪むこととな

る。

シユナイダーが一瞬だけ視線をやった「マキシマム」の右アームでは、主兵装である金棒アームが半ばから切断されていたのだ。

当然ながら、俺の攻撃のよるものだ。

強化ブレードアームで引き切るようにして、金棒を真つ二つにした。

ブレードアームはその名の通り片刃の曲刀なので、『叩き斬る』よりもこうした『切り裂く』使い方は理に適っているが、普段の戦闘でそこまで意識することは稀だ。

そもそも、人間が使う日本刀であっても、本来は打ち合いや強引に叩き斬る使い方も耐えうる事が前提である。

今回、武器の性質の差がここまで顕著に表れたのは、偏に材質の差だろう。

シユナイダーの金棒アームは市販品でただの鉄の棒。

それに対して、俺の強化ブレードは黒鉄とオリハルコン製のナツメツグ博士謹製のパーツである。

「くっ！」

【ジャガーノート】の左アームの隙間に挟まっていた金棒の残骸が、硬質な音を響かせて地面に落下すると同時に、シユナイダーは再び俺に向かってきた。

メインの打撃武器は失ったが、シユナイダーの戦意は衰えない。

俺のチェーンガンを警戒して横から回り込むように接近しながら、「ジャガーノート」に掴みかかってきた。

向こうは俺が後退しながらチェーンガンを撃つと考えたようだが……。

「っ！」

「ウラァー！」

俺は「ジャガーノート」を前進させて、鋭く機体によるタックルを放った。

またしても接近戦だが、完全にこちらが優勢だった。

「ぐっ！」

「ジャガーノート」の装甲プレストの衝突によって、「マキシマム」の機体全体を激しい衝撃が襲い、シュナイダーは息が詰まったように体を跳ねさせる。

ビークル同士の取っ組み合いの格闘戦に関して、俺はそれほど熟練しているわけではない。

チェーンガンアームを装備した「ジャガーノート」の真骨頂は、火力と精度を両立させた遠距離からの射撃攻撃だ。

しかし、トロットビークルは人型の機械ではあるが、自動車や重機の類に近い存在であり、移動手段としての用途を主に想定した乗り物だ。

当然ながら、人間のようない関節や筋肉を用いた複雑な動きは再現できず、取れる体勢

も限られている。

それ故に、アーム部分を用いた動き以外、特にボディパーツやレッグパーツの操作においては、熟練者であつても挙動に限界がある。

ビークルは蹴ることもしやがむこともできない。

しかし、レッグパーツは根本的な機動に直結する部位であり、生半可な足払いが効かない程度には安定性を持たせて設計されていることもまた事実である。

要は、距離感とアームパーツを駆使できなければ、ビークル同士の格闘は単純なぶつかり合いとなるのだ。

そして、接近戦において俺がシユナイダーに……【ジャガーノート】が【マキシマム】に完全に勝っている点は、パワーとウエイトだ。

ノーマルボディMに一般的なビークルバトル用のチューンエンジンを搭載する【マキシマム】に対し、高出力エンジンと小型補助エンジンを内蔵したLサイズボディの【ジャガーノート】。

力比べでどちらが有利かは明白だ。

「くっ……」

「逃がさん！」

さすがのシユナイダーも一旦退いて体勢を立て直そうとしたが、それを許すほど俺も

甘くない。

大き目のボディに似合わない加速度も、人脚ノーマルM強化型を装備する「ジャガーノート」の特徴だ。

俺はシュナイダーを直線で追いかけて、強化ブレードアームを振るった。

シュナイダーはブレードアームSSを上げてどうにか防御するが、勢いをつけて鋭く突き出された超合金のブレードは、盾の半分をズタズタに切り裂きアームの部分も半ば切斷しかけた。

特注の強化シールドとはいえ、チェーンガンの弾丸を何発も撃ち込まれたところに強化ブレードの斬撃を受けたら、こうなるのも納得だろう。

「ぐぬう……」

ここまで機体をやられたら自ら負けを宣言して試合を終えてもおかしくはないが、コクピットのシュナイダーは未だ闘志の衰えない目で俺を見据えている。

些かうんざりするが、俺にもこのトーナメントで勝たなければならぬ理由はある。

下手な対応をして、これ以上戦いを長引かせるのは得策ではない。

万が一、悪あがきの一発で「ジャガーノート」が明日に響くダメージを受けたら目も当てられない。

バナラとエルダーには可能な限り万全の態勢で挑みたい。

「悪いな」
どれほど僅かなパーセンテージであっても、リスクは排除させてもらう。

最後は素早く銃口で薙ぎ払うようにしてチェーンガンを掃射し、「マキシマム」のレッグパーツを破壊して、俺は因縁の対決に終止符を打った。

85話 ビークルバトルトーナメント7 (バニラ戦 前編)

ガーランド闘技場の選手控室で、バニラは一人深刻な表情で佇んでいた。

周りのことなど目に入らない様子で、自然と拳を強く握り、目の前の愛機「カモミール・タイプII」を見上げている。

「おい」

「……………」

「おい！ バニラー！」

「っ！ ……ああ、フェンネル」

若干、音量を上げたフェンネルの声で、バニラは弾かれたように反応した。

バニラは取り繕うように疑問を発する。

「えつと……………どうしてここに？」

「お前にぶつ壊されて「ブルー・サンダー」は修理中なんだな。どこかに行くにも遠出はできねえ」

「あ、ごめん……」

「冗談だ。元々、トーナメントは最後まで見る予定だ。もちろん、お前の試合もな」

「ぎこちない表情を浮かべるバニラを尻目に、フェンネルは近くの壁に背中を預けて寛いだ。」

「一体どうしたってんだ？ 俺に勝ったんだ。もつと自慢気でも……ああ、そうか。次の相手はグレイだったな」

「うん……」

俯くバニラから視線を外したフェンネルは、軽く天井を見上げて、バニラ的心情を代弁するように呟いた。

「相手が悪いな」

「……………」

あらためて言葉にされると、バニラも自身の考えをより明確に認識することとなる。

初めて出会ったときから、バニラにとってグレイは圧倒的な強者だった。

何度も救われ、そして何度も彼の強さを目の当たりにしてきた。

シラサギ河での『ドン・エレファント』戦、ネフロの野外ライブ襲撃、レイブン砦のヒンヤリ遺跡の探索。

ビークル戦だけに限っても、グレイは最も心強い味方で、最も高みに居る存在だった。

そんな人物が、今はライバルとして自分の前に立ちほだかっている。

「さっきのグレイの相手……シユナイダーはネフロのチャンピオンだ。この地方ではグレイ以外の唯一のSランクで、毎年決勝に進出してエルダーに挑んでいる。だが……」

フェンネルは一拍置いてから続けた。

「圧勝だったそうだ。グレイのな」

「圧勝……」

パニラもそつと噛み締めるようにフェンネルの言葉を繰り返す。

「接近戦でも子ども扱いってのは、さすがに言い過ぎだと思うが……少なくとも、ほぼノーダメージでシユナイダーに勝ったのは事実だ。前に対戦したときもグレイが勝つたらしいが……あのシユナイダーを完封とは、凄いか何とかそんなもんじゃねえ。シヤレにならねえ強さだぜ」

パニラはごくくりと喉を鳴らして生唾を呑み込んだ。

しかし、驚愕の情報はこれだけに留まらない。

「俺もいつかは追いついてやりてえと思ってるが、グレイの奴は正真正銘の化け物だ。知ってるか？ あいつ、ビークルの経験は俺より短いんだぜ。聞けば、初めてビークルに乗ったのはナツメツグ博士の助手になる少し前だったんだ。精々が二、三年つてところだろう」

「……そうなんだ」

数か月前にピークルに乗り始めたバナラに比べれば長いが、それでも驚異的なピークル歴の短さだ。

キャリアが短いということは、当然ながらまだ成長の可能性が残っているということになる。

事実、グレイ自身もバナラの成長を目の当たりにしたことで、今まで以上にピークルの腕を磨こうと試みている。

バナラの気分はさらにナーバスに傾くが……フェンネルはゆっくりと顔を上げると、はつきりとした口調で呟いた。

「バナラ、勝ちに行けよ」

「え？」

思わず、バナラもフェンネルの顔を間の抜けた表情で見返す。

「確かに、グレイはトーナメント参加者の中でも群を抜いた規格外だ。だが、あいつに勝てるんなら、マジでトーナメント制覇も夢じゃねえ。グレイはトーナメント外でエルダーに勝ってる。なら、グレイに勝てるピークル乗りがエルダーに敵わないなんて道理は無え。それに……」

「それに？」

「多分、あいつはお前に期待している。なんつうか……俺たちとは接し方が違うんだ。うまく言えねえが、お前のことを自分と同じレベルで戦える人間だと思ってるんじゃないか？」

「いや、僕は……」

首を横に振りつつも、フェネル言葉にはバナラにとつても思い当たる節があった。

記憶を失った状態でウミネコ海岸に流れ着いたバナラが、最初に知己を得たのはコニーとトロット楽団のメンバーたちだったが、その中でもグレイは特にバナラのことを気に掛けていた。

ナツメツグ博士やジンジャーと引き合わせ、ネフロでの生活とビークル技術の習得を手助けしてくれた。

危険な敵や状況から助けられたことは、バナラ本人が認識しているだけでも一度や二度ではない。

縁もゆかりもない自分に何故グレイがここまでしてくれるのか謎だった。

グレイ自身も自らの意図を語らなければ、バナラも彼の思惑を詳細に察することはできない。

しかし、フェネルの発した『期待』という一言は、思いのほかバナラにとつてしつくりとくるものであった。

思い返すのは、レイブン砦のヒンヤリ遺跡での会話だ。

コニーの理解者になってくれ、味方で居てくれ。

グレイは真剣な面持ちでバニラにそう告げた。

漠然とした表現で言葉を濁されても、グレイに何かしらのビジョンがあることはバニラ本人も臆げに気付いている。

少なくとも、この対戦の場で自身の鍛錬の成果を示すことは、最低限グレイに対して必要な姿勢のように思えた。

「ちよつと喋り過ぎた。ま、頑張れよ」

フエンネルは踵を返して立ち去った。

残されたバニラはフエンネルを見送ると、再び自分の愛機を見上げて向き合う。

バニラの拳は相変わらず強く握られたままだが、その表情には数分前ほどの焦りは無かった。

ピークルバトトーナメント準決勝。

この試合で、前年度チャンピオンであるエルダーに挑む選手が決まる。

決勝進出を賭けて戦うのは、俺とバニラだ。

このマッチメイクを予想していた人間はきつと少ないに違いない。

トーナメントが開催される前は、多くのビークルバトルファンが俺とシユナイダーの対決を期待していたようだ。

しかし、トーナメント表のブロックの関係上、俺とシユナイダーは二回戦で当たることとなった。

当然ながら、準決勝に進出するのはどちらか一人。

今回は、俺がシユナイダーを下す結果となったので、毎年決勝に進出しているシユナイダーは二回戦で敗退だ。

「グレエエイ！ やっちまえー!!」

「ルーキーもここまでだろー!」

「今度こそ当てる……!」

声援は圧倒的に俺に対するものが多い。

これは人気不人気の差ではなく、ランクと実績を鑑みての賭けによるものだろう。さすがに俺とパニラのマッチメイクでは、ほとんどのギャンブラーが俺に賭ける。

最近ではパニラも名が売れてきているが、それでもビークルバトルとしての評価は俺の方が圧倒的に上だ。

フェンネルに勝ったことで実力は証明したので、パニラを試合の組み合わせとツキだ

けで準決勝まで勝ち上がった三流と見る者は多くないだろう。

だが、金を賭けるとなれば、大多数の観客は堅実に勝つつもりで俺を選ぶ。

人間誰しも損はしたくない。

そうして、多くの人間の夢と希望と掛け金を背負った俺は、リフトに押し上げられて試合会場へとビークルを乗り入れ、原作主人公と対峙することとなった。

“ナツメツグ博士の右腕” グレイ 【ジャガーノート】

V S
“?????”

“バニラ” 【カモミール・タイプⅡ】

「っ！」

「むっ」

開幕、バニラはスラストスターを起動してビークルを横にダッシュ移動させながら、左のガトリングアームを発砲した。

人間が携行する銃器に比べると遥かに重厚な射撃音を発し、大口径の弾丸が闘技場内

にばら撒かれる。

俺はバニラとは反対方向に「ジャガーノート」を横移動で滑らせ、「カモミール・タイプII」の射撃を躲しながら、チェーリングアームを上げてこちらも発砲した。

大きく外れたガトリングアームの弾丸に対し、俺のチェーリングアの弾丸によつて穿たれた壁の弾痕の場所は、モロに先ほどまでバニラのビークルが居た位置だ。

しかし、お互いにダメージは受けず。

俺が射撃体勢を解いてバスの陰に隠れるのと同時に、バニラも間一髪ビークルを岩陰に滑り込ませた。

「まだまだっ！」

「おう！」

そのまま遮蔽物越しの睨み合いになるかと思いきや、バニラは息もつかせぬ連続攻撃を仕掛けてきた。

ビークルを反転させて大岩の陰から飛び出すと、バスの側面をガトリングアームの銃口でなぞる様に横薙ぎにし、次々と弾丸をぶち込んで制圧射撃をかましてくる。

しかし、決して長時間ビークル全体を晒しての乱射は行わず、不規則なリズムで射撃を中断しては、スラストでビークルを滑らせて遮蔽物の陰に身を潜めている。

挙動は少し大きく無駄な動きもあるが、なかなかスムーズな射撃だな。

察するに、俺のシューティングフォームを少し真似しているようだ。

さらに、俺のチェーニングガンよりも命中精度と集弾性に劣るガトリングアームの欠点を補うために、一回の点射で俺よりも長めにトリガーを引いて弾数がカバーしている。

バナラの奴はいつの間にか射撃武器の扱いも人並み以上になっていた。

さすがに原作主人公は一筋縄ではないかな。

それに、バナラの使うガトリングアームの弾薬は、俺のチェーニングガンと同じ規格だ。

ビークルの搭載火器は総じてサイズの割に精度が低く、貫通力も地球の同じサイズの火砲に比べれば非力だが、それでも機関砲の火力は侮れない。

装甲を貫通するほどではないが、何発かの弾丸は「ジャガーノート」に到達して硬質な金属音とそこそこの衝撃を齎した。

粉碎されたバスの窓からもガラス片が飛んできてビークルのボディを打った。

ビークルの稼働音を聞いているのか、バナラの天性の感覚なのかは不明だが、こちらの位置もある程度把握されている。

並のビークル乗りなら、釘づけにされたまま封殺されて、そのまま止めを刺されてお終いの状況だろう。

「っ！ く……」

そして、バナラはやはり驚異的なビークルバトルのセンスを持っている。

ガトリンググアームの制圧射撃の隙を突いて、俺もバスのスクラップの隙間からチェーリングンガンで撃ち返すが、パニラはすぐに遮蔽物の奥へ引っ込んでしまった。

俺はさらに別の岩陰から回り込んでパニラを捉えようと試みるが、向こうもこちらの進路と動きは把握しているの、「カモミール・タイプⅡ」の姿はすぐに闘技場に設置されているオブジェクトを盾にできる位置まで移動してしまう。

そうして、しばらく銃撃の応酬を繰り返している内に、俺の「ジャガーノート」の装甲プレストは端の方を数か所の弾丸に穿たれて凹み、パニラの「カモミール・タイプⅡ」もボディの一部が吹き飛びバツクパーツのキャリアーが大破する程度の損害を受けた。

「お、おい……ヤバいんじゃないか？」

「グレエエエイ!! 何やってやがる!？」

「まさか、あのルーキー……勝っちゃまわらないよな？」

「頼む……もう、軍資金が……」

俺とパニラが撃ち合いを続けるに従い、観客席からの声にも徐々に戸惑いや野次が混じるようになってきた。

その多くは、俺に対する不安や罵倒だ。

確かに、傍から見ればほぼ互角の射撃戦だ。

俺の勝利を確信して金を賭けた連中にとつては、ありがたくない展開だろう。実際は、ダメージも残りの弾薬もともにバナラの方が余裕は無い。

まあ、機体のダメージは装甲の性能の差もあるし、残弾数に関してはそもそもこちらが倍の弾数を携行しており武器の精度も高いので発砲数も少なくて済むという根本的な差があるが……。

このまま続けていれば、どちらにせよバナラの負けだ。

蓄積されたダメージに「カモミール・タイプⅡ」の機体が耐えられなくなるか、弾切れで終わりだ。

向こうもそれはわかっているので、バナラの攻撃はより小細工を弄するものへと変化し、ガトリングの掃射も多少距離を詰めながら行ってくる。

早めに決着を付けようとしているようだな。

腹の内を読まれているようではまだまだ……いや、俺とこれだけ長く戦えるだけでも凄いいことか。

「だが、甘い」

「っー」

景気良く撃ちまくるバナラを尻目に、俺は先ほどから準備していた次の一手に移った。

遮蔽物を越すようにバナラの方へ投げたのは樽だった。

闘技場の試合会場の隅の方に転がっているものだ。

バナラの射撃を躲しつつ、「ジャガーノート」のアームで手繰り寄せておいたのだ。

しかも、ただの木の樽ではない。

中には火薬がぎっしりと詰まっている。

もちろん、高性能爆薬の類ではなく演出用の火薬だが、それでも火種があれば景気よく爆発するので、コクピットの操縦手にとつてはそれなりに脅威である。

整備スタッフのために火薬入りの樽にはマークが書いてあるので、俺たちバトラーにとつても空樽と火薬入りの樽の区別は容易だ。

バナラも自分の近くに投げられた樽が火薬入りのものであることを悟り、とつさに「カモミール・タイプII」を翻す。

しかし、ビークルの挙動を仕切りなおしてその場から離脱するのに比べれば、アームを上げて発砲する方が早い。

俺が放った弾丸は正確に火薬樽を撃ち抜き、バナラの「カモミール・タイプII」の周辺を眩い爆炎に続いて煤と濃い煙が包んだ。

「うわー！……くっ……びんご……っ！」

バナラは周囲の視界をほとんど塞がれた。

さすがに火薬樽一つでこうはならないが、俺は投げ込む場所も考えていた。

火薬樽の爆発は、バニラの背後にあつた他の火薬樽も巻き込んで誘爆したのだ。

濃い煙と煤埃に囲まれたバニラは、先ほどまで俺が居た方向にガトリングを乱射した。

だが、それは悪手だ。

「おいおい……それじゃあ、当たるものも当たらんぜ」

「っー」

黒色火薬の爆発は俺の目からもバニラを隠したが、ガトリングアームのマズルフラツシユはバニラの間所を特定するのに一役買ってしまった。

バニラは背後から掛けられた声に驚愕しながら振り向いたが、その時には既に俺は強化ブレードアームを「カモミール・タイプⅡ」に向かつて振り下ろしていた。

86話 ビークルバトルトーナメント8 (パニラ戦 後編)

「ふん！」

「くっ！」

俺が振り下ろした強化ブレードアームの刀身は、ついにパニラの「カモミール・タイプII」に到達した。

お互いに強力な射撃武器を装備しているため、狭い試合会場にもかかわらず、バトルはずっと遠距離の撃ち合いに終始していたが、火薬樽を用いた目晦ましによつて俺は一気に距離を詰めることに成功した。

もちろん、俺の専門もチェーンガンを用いた遠距離戦だ。

シユナイダーのように至近距離まで接近することで有利になる状況は、俺にとってそう多くない。

むしろ、あらゆる局面に対応し数多くの武装を使いこなしてきたパニラの方が、俺よりも幅広いレンジでのバトルに対処できるかもしれない。

しかし、やはりビークルを用いた戦闘の経験値は俺の方が上だ。

必死になって距離を測りガトリングを撃ちまくっていたバナラに、今の奇襲へ対応しろというのは酷な話だ。

俺のブレードは、完全に不意打ちの一撃となって、バナラのビークルを破壊……するはずだった。

「ふむ……」

「っ！ ハア！」

俺の強化ブレードは「カモミール・タイプⅡ」のボディに到達していなかった。

強化ブレードの刃が食い込んでいるのは、金属製の三叉の槍の柄。

バナラは「カモミール・タイプⅡ」の右に装備したトライデントアームで、俺のブレードの斬撃を防御したのだ。

さらに、バナラはトライデントを強引に振じって引き戻し、鋭く突きだして反撃してくる。

「おつとお！」

「っ！」

直線的な刺突を躲した俺は、そのままカウンターの一撃を叩きこもうと試みたが、バナラはすぐにビークルを反転させて、遮蔽物を挟んで俺と向かい合う位置に移動し、一

巨戦いを仕切りなおした。

「驚いたな。手応えはあったんだが……」

「はあ、はあ、はあ……危ない……」

完全な不意打ちと思つた俺の一撃を、バナラは防ぎやがった。

トライデントアームは穂先の一部が欠けたようだが、それでも大した対応力だ。

「……強すぎる」

「それでもないさ」

「っ！」

横合いから掛けられた俺の声に対して、バナラは息を飲みながらビークルごと振り向いた。

無謀にも、そのままガトリングアームを振り抜くようにして俺に弾丸を見舞おうとしてが、すんでのところで思い留まり回避行動を取った。

「くっ……」

「おっと」

レッグパーツの一部に損傷を受けたバナラに、俺は続けてチェーンガンの射撃を食らわそうと試みるが、それは叶わなかった。

バナラはただビークルを反転させて一直線に逃げるだけでなく、次の行動に移る直前にガトリングをほぼ後ろ向きに発砲してきたのだ。

不自然な体勢での乱射も同然なので、当然ながら狙いは滅茶苦茶だが、それでもフルオートの射撃武器を撃たれば、放たれた弾丸の内の何発かは俺の近くを掠める。

俺は「ジャガーノート」を反転させて、遮蔽物の陰まで身を引いた。

ビークルを使った戦闘は、生身での銃撃戦とは違う。

どうしても重機サイズの乗り物を動かして火器を使う以上、拳銃の抜き撃ちに比べれば動きは遅くなる。

火力は人間が携行できる武器より桁違いに大きく、しかし鋼鉄の乗り物であるビークルの防御力は貧弱な人間の体とは比較にならない。

人間同士のコンバットシューティングなら、お互いに弾を避けるなどあり得ない動きだが、これがビークルバトルだ。

「ははっ！ やるじゃないか！」

「くうー！」

バナラはなおもビークルを滑らせながら必死にガトリングを発砲してくるが、動きは僅かに精彩を欠いている。

先ほど、俺のチェーンガンの弾丸をレッグパーツに受けたのが効いているようだな。

だが、それでも俺に一方的に仕留められないだけの動きは維持している。

この状況でよく粘るじやないか。

一方の俺は、バナラを追いかけながら僅かな高揚感を覚えていた。

これだけ力を注いだバトルは久しぶりだ。

強いバトルというだけなら、サフラン然りシユナイダー然り、バナラ以外にも俺の周りにはごまんと居る。

盗賊ビークルの中にも、強敵と呼ぶに相応しい存在は居た。

しかし、奴らにはそれぞれ攻略法があった。

多少、行き当たりばったりな状況でも。原作の知識とこの世界で培ったビークル技術と「ジャガーノート」の性能を以ってすれば、着実に相手を追い詰めて仕留めることができた。

ところが、バナラはこの段になっても俺に押し切らせない。

傍から見れば、今は俺がバナラを圧倒しているように見えるかもしれないが、実のところ状況はほとんど動いていないのだ。

バナラは……根性で耐えているわけでも、やけくそで最後の足掻きをしているわけでもない。

あくまでもダメージを抑えてチャンスをものにするために最善な立ち回りをしてい

る。

これを自然にできるあたり、バナラは本物の強者だ。

強いて言えば、一年半ほど前にトーナメント外で戦ったエルダーも、同じく多彩な戦術と幅広く高水準にまとまった能力を持つピークル乗りだったが、それも大分前のことだ。

気を抜けば反撃されてこちらがやられる。

バナラの戦いぶりには、俺にそう思わせるだけの何かがあった。

距離が詰まった拍子に、またしてもお互いに近接武器の打ち合い。

俺の強化ブレードアームの斬撃を、バナラはトラインデントアームで危うく弾いた。

機体の重量差の関係で若干こちらより「カモミール・タイプⅡ」のノックバックは大きかったが、バナラはその勢いを殺さず、ピークルのボディを捻るようにして至近距離からガトリングアームを発砲しようと試みた。

「ほっ」

「くっー」

俺は「ジャガーノート」の右アームを操作し、返す刀でバナラのガトリングアームの動きを妨害する。

ビークルの足腰の安定状態の差もあり、俺の方が一步先んじた。

破壊することは叶わなかったが、ガリガリと嫌な音を立てながら、「カモミール・タイプⅡ」のガトリングアームは銃口をこちらから外された。

「っと」

「このっ！」

お返しとばかりに俺も左のチェーンガンをバナラに向けるが、そこは向こうも読んでいたらしく、「ジャガーノート」の左アームはトライデントアームの横殴りによって弾かれる。

俺は間髪入れず右の強化ブレードアームを振るうが、バナラもこの危険な状況に身を置き続ける愚を犯す気は無く、彼は再び距離を取った。

ブレードを空振りした俺を尻目に、バナラはスクラップを遮蔽物にできる位置までビークルを退く。

またしても撃ち合いながらの様子見になるかと思いきや……決着のときは唐突にやって来た。

「っ！ しまった！」

遮蔽物から飛び出しながらガトリングアームの引き金を引いたバナラは、唐突に動きを止めて焦りの表情を浮かべた。

まだガトリングアームの弾は残っているはずだが、バニラの構えた武器が火を吹くことは無い。

俺も僅かに音を捉えたが、「カモミール・タイプⅡ」のガトリングアームから金属が不自然にぶつかり合うような音がした。

回転不良だ。

まだ弾は残っているはずなので、故障によるトラブルだろう。

俺のチェーンガンより複雑な機構をしている分、ガトリングアームはさらに繊細な精密機器だ。

先ほどの俺のブレードの一撃で、回転銃身の部品が撃発システムのどこかが傷ついたようだな。

ビークルバトルにタイムアウトは無い。

この好機を逃すつもりなど、俺にはさらさら無かった。

「あー！」

バニラは接近する俺を視認して慌ててビークルを退こうとしたが、さすがにこの逼迫した状況では才能あふれる原作主人公もミスを犯した。

数回トリガーを引いても反応しないガトリングに気を取られたバニラは、僅かに反応が遅れたのだ。

その結果、「カモミール・タイプⅡ」はレッグパーツを失うこととなった。

「うわあっ!」

俺のチェーンガンの弾丸が「カモミール・タイプⅡ」の右レッグパーツの接合部を半ば吹き飛ばし、向こうのビークルはガクツと傾く。

バナラは慌ててハンドルにしがみ付いたことで、どうにかコクピットからの転落は免れたようだ。

「くっ……まだだ!」

しかし、バナラはなおも勝負を捨てていなかった。

先ほど、チェーンガンを射撃するためにこちらも遮蔽物から飛び出したので、俺とバナラの距離はそれほど離れていない。

ビークルが正常なら、ワンステップで殴りかかれる位置だ。

しかし、射撃武器と脚を失ってこの距離では……。

「っ!」

「はあ!」

ところが、バナラは思いも寄らぬ行動に出た。

スラストスターを起動して無理矢理ビークルをこちらに突っ込ませてきたことまではいい。

しかし、バナラはそのまま真っ直ぐ殴りかかるのではなく、激突の直前にピークルのボディを大きく捻る様にハンドルを切ったのだ。

「カモミール・タイプⅡ」の右側は、破損したレッグパーツがさらに折れるように損傷し、さらに大きく腰を落とすような体勢になる。

俺はバナラの突撃に強化ブレードアームで対処するつもりだったので、「カモミール・タイプⅡ」は「ジャガーノート」の懐に潜り込んだ形になる。

そしてバナラは、そのまま下からトライデントアームを上に向かって突き上げてきた。

ボクサーのインファイトからのショートアッパーのような一撃だ。

「ぬおー！」

「グレエエエイ!!」

重厚な金属の塊同士が激しくぶつかる衝突音。

そして、強力なバネとレールで押し出されるトライデントアームの稼働音が重なり、試合会場からは一瞬音が消えた。

俺は目の前の光景にしばし言葉を失った。

「ジャガーノート」のコクピットの前には、下から斜めに突き上げられたトライデント

トアームの先端が飛び出している。

そう、目の前にだ。

ブレストパーツの前ではなく、俺のすぐ目の前だ。

「……マジかよ」

パニラが機体のレッグパーツの大破と引き換えに放ったトライデントのアップパーは、
【ジャガーノート】の装甲ブレストの隙間を貫通していた。

プッシュバンパーにも似た形状の装甲ブレストの、斜め横あたりから捻じ込まれたのだ。

これがミスリル装甲の【ジャガーノート】ではなくノーマルの汎用ビークルだったら、
もう少しトライデントの穂先が俺の方に来ていたら、俺はコクピットごと串刺しだった
かもしれない。

「だが、勝負あったな」

「ああ……僕の、負けだ」

パニラがコクピットに向けられたチェーニングを一瞥すると同時に、【カモミール・
タイプⅡ】は完全に動きを停止した。

俺が強化ブレードアームを引くと、【カモミール・タイプⅡ】はエンジンからももうもうと煙を吐き出す。

俺のブレードの剣先は、今度こそ完全に相手のエンジンを捉え、バニラのピークの動力を完全に破壊していたのだ。

誰がどう見ても俺の勝利だ。

装甲ブレストの隙間をぶち抜いたトライデントの一撃然り、こちらもそれなりにダメージを受ける結果となったが、最後に立っていたのは「ジャガーノート」だ。

長引いた戦いだっただが、これで決着だ。

今季のトーナメント最大の激戦だったことは間違いない。

バニラに、俺に……観客席からは惜しみない拍手と歓声が送られた。

そして、俺はコクピットで未だに顔が強張らせたままのバニラにゆっくりと声を掛ける。

「バニラ」

「うん」

「俺の勝ちだな」

「ああ。僕の方が弱かったから……負けただ」

「……そうだな」

バニラは間違いなく才能のあるピークル乗りだ。

短期間で高ランクバトラーを凌駕する実力を身に着け、トーナメント優勝するのも夢

ではないレベルにまで到達した。

しかし、それでも俺の方が一枚上手だった。

それだけの話だ。

「グレイ……僕も、頑張ってきたんだ」

「ああ、知ってる」

思い返すまでも無く、バナラはこの地に流れ着いてから相当な努力をしている。必死に生きて、ジンジャーとの稽古をこなして、何度も死線を潜り抜けてきた。

現代日本なら、17歳の少年が背負い込む苦勞ではない。

そんなバナラの軌跡を間近で見えてきたからこそ、俺はバナラの呟きに即答することができた。

「もつと、差は縮まったと思ってた……」

バナラはそつとため息をつくように呟いた。

力なく口元を歪ませるバナラを少し意外に思いながらも、俺ははつきりとした口調で答えた。

「俺もさ」

俺の言葉に、バナラは少し驚いたように顔を上げる。

不思議そうな顔をしているが、こつちも焦る場面はあったのだ。

俺は明らかなチート勇者でも無敵の戦士でもない。

原作知識とそれなりの射撃技術、あとは運よくビークルの才能を多少持っていたにすぎない。

決して、俺の強さがバナラたちと比べて異次元のレベルにあるわけではないのだ。

総合的な戦闘力では、実際に戦ってみれば、俺の方が一歩秀でていただけだ。

だから、俺ははつきりとバナラに告げる。

「俺もギリギリだった。特に最後のは、結構危なかった」

「グレイ……」

それだけ伝えると、俺は踵を返して試合会場を後にした。

今の言葉を聞いた直後のバナラの顔は見えていないが、俺は背中に力強い真っ直ぐな視線を感じていた。

87話 ビークルバトルーナメント9

「さすがはグレイだな。負けるのは仕方ねえ」

フエンネルはそれだけ言うど選手控室を後にした。

多くを語らず、バニラの返答も待たずに踵を返して階段を下ってゆく。

残されたバニラはしばし唾然とするも、やがて緩慢な動作でビークルの駐機スペースに視線をやった。

「はあ……」

当然ながら、そこには愛機の「カモミール・タイプII」は無い。

先ほどのバトルで大破したので、整備場に即入院だ。

準決勝のグレイ対バニラ戦は、今季トーナメントで最大の激戦だった。

一歩及ばず勝利を逃したバニラだが、怪我が無く五体満足なだけでも儲けものだろう。

しかし……。

「負け、か……」

負けても仕方ない。

フエンネルの言葉がバナラにとっても納得できるものだったことは事実だ。

グレイの強さは嫌というほど理解している。

武勇伝を人伝に聞いて、間近で見ると、そしてバナラ自身がそれなりのレベルのピークル乗りになったことで、グレイの強さをはつきりと認識してきた。

実際に試合をしてみれば、やはり今の自分の力では及ばなかった。

いつかは追いついてやると語ったフエンネルと同じく、バナラにとっても改めて間近の目標を意識する機会になったことは事実だろう。

しかし、先ほどのバトルを思い返せば、何か釈然としないしこりのようなものが、バナラの胸には確かに存在した。

「……………」

勝てる見込みは薄かった。

最後は半ば特攻のような攻撃を仕掛けて、それでも負けた。

だが、ジンジャーとの修行も含め、色々と研鑽を積んだことで、確実にグレイとの差は縮まっている。

それが決して驕りでないことは、グレイ自身も認めてくれた。

必死にやって来たことが認められれば、普通の人間なら誰しもが嬉しく思うだろう。

試合が終わってグレイと言葉を交わした直後は、バニラにも少々こみ上げるものがあつた。

しかし、今のバニラの心境の多くを占めるのは、決して前向きな感情ばかりではない。「悔しい、のかな?」

実際に言葉にしてみると、自分でも理解できない焦りのようなものの本質により近づいた気がする。

いざ敗北してみれば、「あの時こうしていれば」や「もつと食い下がれたのではないかな」などの考えが脳裏を過る。

勝てつこないなどと思いつつながら、頭の片隅では本気でグレイを攻略するための方策を検討していた。

準決勝の直前にフエンネルと話したこともあるが、バニラは自分自身でも確かにグレイに勝てる可能性を見出していたのだ。

「僕は……」

いつしか俯きながら考えに耽っていたバニラは、顔を上げて再び駐機場に視線をやつた。

相変わらず、そこには愛機の姿が無い。

ウミネコ海岸に流れ着いてから、常にバニラと共にあり、苦楽を共にしてきた愛用

ビークル。

ビークルが無かったら、今の自分は無い。

波打ち際で「カモミール・タイプⅡ」を拾わなかったら、こうして幾度も苦難を乗り越えて生き抜くことは難しかった。

そんな頼りになる相棒と共に全力で挑んだ。

最後はレッグパーツがボロボロになるほど無理をさせた。

勝つつもりでいた。

そして、敵わなかった。

どれほど言い繕おうと、バナラの試みが挫かれたことは確かだ。

おまけにビークルは大破した。

愛機の姿がそこに無いことが、そんなバナラの喪失感を増大させた。

しかし……。

「バナラ！」

振り向いたバナラの目に飛び込んできたのはコニーだった。

「コニー……」

「ねえ、大丈夫？ 凄い戦いだっただから、心配になって……」

思いがけないタイミングでコニーが現れ、バナラは些か慌てた表情を浮かべた。

そんなバナラの様子には構うことなく、コニーは彼に詰め寄って体の隅々までをマジマジと見つめる。

「怪我とか、無い？」

「うん、僕は大丈夫。ビークルは酷い有様だけどね」

「よかった……」

コニーはほつと胸をなで下ろした。

ビークルのくだりは耳に入っていないようだが、その程度のことにはバナラも気にならない。

心配を掛けたことは悪いと思いつつも、コニーが自分のために観客席を飛び出して控室までやって来たことには、若干の嬉しさを感じて頬が緩む。

「あの、さ……かつこよかつたよ」

「え？」

唐突なコニーの言葉に、バナラは啞然として顔を上げた。

「私は、正直ビークルバトルのこととかよくわからないけど……それでも、君が凄く一生懸命で、凄い試合をしたのはわかる。観客席から見てて、とても感動したよ」

コニーは真つ直ぐにバナラを見据えたまま続ける。

「ピークルバトルが危ないことには変わりないけど……でも、それが君のやりたいことなら、私は応援するから」

「……うん。ありがとう、コニー」

何だかんだで、大切な人の声援は一番の原動力だ。

深くは突っ込まず「応援する」の一言だけ。

しかし、友人以上の感情を抱いている異性の肯定的な言葉で、単純にもバナラは敗北によるショックを頭の隅へ追いやった。

「ねえ、次が最後の試合らしいけど、バナラも見るとね？」

「あ、うん。決勝戦だね」

「そうそう。凄いよねえ、グレイ。次の相手って、この国のチャンピオンなんだって。

あ、君の席は確保してあるから。行こう」

「……ああ」

そうして、コニーの掌で転がされるように、バナラは観客席の方へ誘導される。

しかし、コニーと連れ立って選手控室を後にしようとしたバナラに、横合いから声が掛けられた。

「もしもし、バナラさんですね？」

バナラを呼び止めたのは、仕立てのいい黒のスーツに片メガネを掛けた男だった。

見知った顔ではないが、装いや立ち振る舞いは、ハッピーガーランドのエリートビジネスマンや富裕層を連想させるものだ。

グレイに言わせれば、高そうな生地のマフラーや黒の手袋も相まって、完全にマフィアファッションだろうが……。

「申し訳ありませんが、少々お時間を頂けますか？」

男は一瞬だけコニーに視線をやりながら言った。

傍から見れば異様な光景だ。

人気バンドのボーカリストであるコニーに全く興味を示さず、剩え席を外してほしいと頼むなど。

バナラも最近ではそれなりに有名人とはいえ、まだまだコニーの方が知名度は高くスター扱いだ。

しかし、それも全くあり得ない話ではない。

例えば、目の前の男性がビークルバトルやビークルパーツ関連の企業の人間であれば、用があるのはほぼバナラだけだろう。

何せ、バナラはビークルバトルーナメント初出場で準決勝まで勝ち進んだ有望なビークル乗りだ。

「コニー、先に行つててくれない？　すぐに追いかけるから」
「うん、わかつたよ」

コニーも何となくビークル関係の話だとあたりを付けたのか、バナラに席の場所を伝えると、あつさりと彼を解放した。

「えつと……」

「なかなか見事なバトルでした。あなたの通り名は聞いたことがあります」

そして、コニーが去ると黒ずくめの男は早速とばかりに話し始めた。

バナラは些か戸惑つた表情を浮かべているが、そんなことはお構いなしに男は続ける。

「どうでしょう、我々の仲間になりませんか？　我々はあなたのような人材を求めているのです」

何の説明も無しに掛けられたのは勧誘の言葉だ。

落ち着いた口調とは裏腹に、男の話の展開は早い。

一拍置いたバナラは、まずは一番気掛かりな疑問を投げかけてみることにした。

「……あなたは、誰ですか？」

「これは失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は秘密結社ブラッディマンティスの参謀、コンフリーという者です」

「っー」

バニラは息を呑んだ。

ブラッディマンデイスに関しては、バニラは既に原作よりも深く知っている。

スームスームから帰ってきたときにグレイに連れられてセントジョーンズ卿と面会し、その時にグレイの口から聞いたのだ。

さり気なく仄めかすというには無理がある、グレイにしてはヤケにはつきりとした犯人扱い。

ほぼ断定に近い確信を持っているのだろうことは、あの時のバニラにも容易に想像がついた。

これもグレイの狙い通りだが、ブラッディマンデイスがマーシユを狙っている裏組織だということ、バニラはインパクトの強さゆえにすぐに思い出した。

「どうやら、我々のことは聞いたことがあるそうですね。我々には崇高な目的がありません。その実現のためには、あなたのような有能な人材が必要なのです」

コンフリーは相変わらず冷静に論ずるように言葉を続けるが、バニラは黙って聞くのが精一杯だ。

今、彼らが自分に接触する目的は何か？

マーシユのことを既に嗅ぎつけているのか？

グレイのことは何か関係があるのか？

必死に頭を働かせつつ可能な限り表情を動かさないようにして、バナラはコンフリーの言葉に耳を傾け続ける。

「興味がありましたら、中央通りの『ファッション・キドリ屋』に来てください。その試着室が、我々のアジトの入口になっています。……それでは失礼。必ず来てくれると信じていますよ」

しかし、コンフリーはバナラの様子には構わず、言うだけ言って踵を返した。

バナラの心情には全く気付いていないかのような振る舞いだ。

一方的な話の展開だったが、今のバナラにとっては解放感の方が大きい。

バナラは自然と握り締めていた拳から力を抜き、ほっとため息をつきかけた。

「ああ、ところで……」

「っ……何ですか？」

急に立ち止まり、振り返らぬまま口を開いたコンフリーに、バナラは息を詰まらせながらも反応を返す。

「あなたは……コニーと親しいのですか？」

「っ！」

コンフリーの投げかけた疑問は、バナラにとって予想外のものだった。

確かに、先ほどまでコニーと一緒に居たこともある。

普通なら他愛のない世間話の類で済む内容だろう。

だが、バナラにはブラツディマンティスに対する先入観と警戒がある。

コンフリーの言葉を軽く捉えることなどできなかった。

バナラは相手の意図を少しでも見抜こうと、緊張した面持ちでコンフリーの後ろ姿を見据える。

「……そうでした。あなたもトロット楽団の一員でしたね」

「……………」

しかし、コンフリーは自分で納得するとあっさり話を打ち切った。

あまりの反応の軽さに、逆にバナラはどう反応していいのか戸惑ってしまう。

「(さて……エルダー様の方はどうなることやら……)」

「え？」

「いえ、何でもありません。それでは」

コンフリーは唾然とするバナラに構わず、その場を後にした。

88話 ビークルバトルトーナメント10（エルダー戦）

「ついに来たか……」

俺は目の前の「ジャガーノート」を見上げながらポツリと呟いた。

いよいよ、ビークルバトルトーナメント決勝戦。

前年度チャンピオンのエルダーとの対決だ。

トーナメント外での対戦とはわけが違う。

俺にとってもブラッディマンティスとの対決の足掛かりとなる大きな一戦であり、ジンジャーやエルダー自身にとっては全てを賭ける試合の舞台だ。

厳しい戦いになるだろう。

「……よし」

我が愛機のコンディションは万全だ。

バナiraにやられたブレストパーツの損傷も、闘技場の整備士の手によって既に元通りである。

マルガリータやナツメツグ博士には及ばないが、彼らもプロの整備士だ。

特注のカスタム部分が多い機体でも、戦闘による外的な損傷をほぼ無いことにする程度には修理することができるとののだ。

そして、俺の現代の知識と天才ナツメッグ博士の技術力、そして超一流の職人マルガリータによる各パーツの微調整。

魔法金属をふんだんに使った素材によるアドバンテージだけでなく、「ジャガーノート」にはあらゆるビークル技術の粋が結集されている。

強敵との戦いへの備えとして、これ以上のものは無い。

これで負けたら本当に言い逃れができないな。

もしも試合で不具合が出たとしたら、それは俺のミス以外ではあり得ない。

「グレイさん、準備をお願いします」

「……ああ」

俺は係員の誘導に従い、エンジンを掛けた「ジャガーノート」をリフトに乗せて、最後の試合の会場に足を踏み入れた。

「いくぜ、ダンディリオン……いや、エルダー」

“ナツメッグ博士の右腕” グレイ 【ジャガーノート】

V S

“白い悪魔” エルダー 【ホワイトレクイエム】

開幕、号砲の合図で仕掛けた攻撃は、お互いに射撃武器による牽制だった。

エルダーの正体がどうだとか、この場では最早どうでもいい。

相手はダンディリオンではなく、エルダーで現統一チャンピオン。

それだけだ。

会場に足を踏み入れた瞬間から、俺たちはバトルに全ての集中力を注いでいる。

俺たちはほぼ同時に引き金を引いた。

試合開催中の闘技場にしてはヤケに静かな会場に、ピークル搭載火器の炸裂音が響く。

【ホワイトレクイエム】の長距離キャノンアームから放たれたミサイル弾頭と、【ジャガーノート】のチエーンガンアームから吐き出された機関砲弾は、空中で衝突して爆炎と衝撃波を巻き起こした。

煤埃のスクリーンが薄くなり視界が確保されたときには、俺もエルダーも既に同じ場

所には居ない。

エルダーはジグザグな軌道でスラストターダッシュを駆使して後退していた。

俺のチェーンガンとエルダーの長距離キャノンアームでは、弾数の面でこちらが有利なので、射撃直後の対応としてはそれで正解だ。

俺も定石に従い、チェーンガンを偏差射撃しながらエルダーを追う。

こちらが距離を詰めつつの射撃だが、エルダーのハンドル操作に合わせて不規則に高速移動する「ホワイトトレクイエム」は、すんでのところで全ての弾丸の雨を躲した。

「しっ」

「む……」

チェーンガンを速射しながら接近した俺は、エルダーのビークルに向かった強化ブレードを振り抜く。

定石通りの距離感の調整、そして淀みない動作での近接武器への切り替えだ。

ジンジャーの修行が活きているな。

しかし、エルダーも伊達にチャンプを張ってない。

こちらのブレードは「ホワイトトレクイエム」の右アームに装備された巨大なエクスカリバーアームで受け流される。

エクスカリバーアームはエルダーのオリジナルパーツで、俺の強化ブレードと同じく

魔法金属の超合金で作った剣を装備した近接武器だ。

通常仕様のビークル程度なら、バターののように切り裂く。

耐久力と切れ味はほぼ互角。

剣の大きさと質量は向こうが上、スピードと取り回しはこちらが上。

アドバンテージを活かそうにも、武器の性質の違いが明確であり、お互いそれを理解しているので、決定打に繋がる立ち回りは両者ともに取ることはできない。

俺が回り込んで斬りつけようとすればエルダーは刀身のサイズを活かして防御し、向こうが巨大な刀身でこちらを叩き潰そうとすれば俺の回避やブレードによる受け流しは確実に間に合う。

そうして、離れて接近してを幾度か繰り返し、俺とエルダーは遠距離も近距離も問わずに全力で攻撃をぶつけ合った。

「うお」

「凄え……」

「ほう……」

観客もこの決勝戦においては固唾を飲んで見守る者が多い。

声を失って見入るだけの試合であることはわかるが、野次も声援も飛んでこないとい

うのは選手として少し妙な気分だ。

だが……。

「ふっ！」

「っ！」

エルダーが新しい動きを見せたことで、戦況は大きく動いた。

お互いビークルには細かな傷が増え押し切るチャンスを探っていたタイミングで、エルダーは攻勢に移った。

強化ブレードとエクスカリバーの鏢迫り合いから、「ホワイトレクイエム」のエンジンをブレードで狙いレッグパーツにチエーンガンの銃口を向けようと試みる俺に対し、エルダーはエクスカリバーの剣先をコクピットの俺目がけて突き出してきたのだ。

俺は全身の毛穴から冷や汗を吹き出しつつ咄嗟に身を守る姿勢を取る。

ビークルの上下角を微調整しつつ、運転席の中で可能な限り体を低くすることで、どうにか巨大な刃を躲した。

「危ね……っ！」

しかし、エルダーのエクスカリバーは一向に引かれる気配がない。

それどころか、俺が頭を上げたタイミングで首を刎ねようとするかの如くエクスカリバーを横に振り、さらに頭を低くした俺を追うように刃の角度を変えてくる。

正直、巨大な剣の刀身が迫ってくる光景には、トラウマになりそうなほど恐怖した。
「くっ！」

「ぬ……」

どうにかスラスターを起動して「ジャガーノート」を後退させた。

しかし、無理な動作で密着状態から脱出したので、俺もそれなりの代償を払う羽目となった。

こちらのプロテクター風防は骨組みをぎっくりと切断されている。

俺は後退した勢いでチェーンガンを流し撃ちするが、エルダーはビークルを反転させると早々に遮蔽物の陰まで下がった。

「てめえ……」

「……………」

今回のエルダーの戦い方には、色々と狡い部分が垣間見える。

傍目には射撃武器と近接武器をフルに駆使して激戦を繰り広げているように見えるが、実のところ、エルダーは防御というより逃げに重きを置いているのだ。

だが、それ以上に俺を憤慨させたのは、執拗な操縦手狙いだった。

逃げに徹するのはまだいい。

だが、先ほどのコクピットを狙った攻撃は、偶然や勢いというにはあまりにも悪質だ。

エルダーは明確な殺意を以って俺を殺しにきている。

操縦席の俺をエクスカリバーで狙ってきた攻撃はほんの数秒間のことだったので、観客の全員がエルダーの意図に気付いているわけではなさそうだが、それでも見る人間が見ればわかる。

当事者は言わずもがなだ。

闘技場におけるビークルバトルでは、特に高ランクバトラー同士の試合では、安全への配慮に関してある程度の暗黙の了解がある。

その典型的な例が、コクピットへの攻撃は可能な限り避けることだ。

ビークルバトル自体が危険な競技であり、一歩間違えれば搭乗するビークル乗りは事故って死ぬ。

重機をぶつけ合い車載火器を撃ち合っているも同然なのだから、それも不思議なことではないだろう。

だが、仮に死者が出たとしても、基本的には死んだ方の負けとして処理され、殺した方にペナルティは無い。

とはいえ、ある程度の力量を持つ選手ならば、対戦相手を死なせることは滅多に無い。

ビークル無力化するのに効果的な攻撃箇所は、駆動の要であるエンジンやレッグパーツなどだ。

盗賊相手の実戦であれば人間を狙うことも往々にしてあるが、基本的にスポーツの環境であるビークルバトルではやらないのが普通だ。

明確な罰則は無いとはいえ、対戦相手を殺しまくっていればその選手評判は悪くなり、闘技場のルールでは裁かれなくとも司法やマスコミ関連で色々と面倒なことになる。

熟練者でチャンピオンのエルダーなら、そのくらいはわかっているはずだ。

彼はバトラーの中でも特に容赦なく相手を撃破することで知られているが、それでも対戦相手が死んだという話は聞いたことが無い。

原作でも、精々シユナイダーが病院送りになったことくらいだ。

それが、俺相手ではこの所業。

どうやら、エルダーは是が非でも俺をぶっ殺したいらしい。

向こうの長距離キャノンアームはもう残りの弾も少ないはずだが……さて、次は何を仕掛けてくるか。

遮蔽物から飛び出したエルダーは、別のオブジェクトの陰まで移動する間に、じつくと狙いを付けた長距離キャノンアームを発砲してきた。

俺も岩陰を縫うように「ジャガーノート」を滑らせて敵のミサイル弾の追尾を躲し、オ

プロジェクトと瓦礫の隙間からエルダーのビークルをどうにか捉えてチェーングンの点射をお見舞いする。

お互いに照準の正確さと射撃武器の威力を把握しているので、射撃戦では思い切った行動に出ることができない……と思いきや、エルダーは長距離キャノンアームを構えたまま急接近してきた。

「っー」

エルダーは俺から見て右から回り込み、そのまま俺と数メートルの距離まで近づいて引き金を引いた。

正気か!?

長距離キャノンアームの弾頭には炸薬が搭載されているので、至近距離で撃つたりしたら自分も爆発のダメージを受ける。

密着状態でこそないものの、どう考えても長距離キャノンアームはこの距離で撃つ代物ではない。

しかも、エルダーはきつちりとキャノンの狙いをこちらのコクピットにつけていた。

本来なら、長距離キャノンアームのミサイル弾はビークルエンジンの熱源を追尾するが、この距離なら誘導もクソも無い。

試合の勝敗だけでなく自身の安全よりも俺を殺す方を優先するということが……。

右から回り込まれているので、左アームのチェーニングガンでミサイル弾を撃ち落とす余裕は無い。

白塗りのビークル【ホワイトレクイエム】に搭乗するエルダーの仮面の奥では、冷酷な色を湛えた瞳が俺の【ジャガーノート】をはつきりと捉えていた。

だが……。

「ぐあー！」

至近距離から発射された長距離キャノンアームによつて、より大きなダメージを受けたのは【ホワイトレクイエム】の方だった。

衝撃波と破片を受けて、エルダーのビークルの前面には細かい亀裂が無数に入り、スパイクブレストEも棘部分が歪んでいる。

何より、爆炎と衝撃波の勢いで搭乗者のエルダー自身の意識が朦朧としている。

一方の【ジャガーノート】は、装甲ブレストは大きく損傷しているものの、他はミスリルのボディと右アームに傷がついている程度だ。

「ふう、危ねえ……」

「っ！…何故!?!」

そして、搭乗者のダメージもこちらの方が少ない。

俺はカウンターの諦め、ビークルのボディを上向きにして、装甲ブレストで長距離キャノンアームのミサイル弾を受けたのだ。

その際に若干前進したので、ミサイル弾はエルダーにより近い位置で爆発した。

右アームはコクピットを守るように掲げ、俺自身は横向きに伏せるようにしてコクピットで可能な限り身を低くした。

至近距離からの強力な対戦車兵器の直撃だったが、機体の防御力に物を言わせて全力で守りを固めたので、俺自身はほぼダメージを受けなかった。

逆に、エルダーは防御態勢を取っていないところに間近で長距離キャノンアームのミサイル弾が炸裂したため、より大きなダメージを受ける結果となったのだ。

「ちいー」

「野郎っ」

俺は動きを見せたエルダーにすかさずチェーンガンを発砲するが、この段になるとエルダーも体勢を立て直した。

スラストと鳥脚ノーマルM強化型レッグパーツを駆使したダッシュ移動によって、俺の放った弾丸を急所に受けることは免れる。

「しっー」

「ふんっ」

軌道を変えて再び接近してきたエルダーは、エクスカリバーアームを大きく振りかぶった。

大きく直線的に動いた結果、ボディパーツには何発か弾丸を受けたはずだが、怯む様子はない。

強引に押し切る気のようなのだ。

俺も黙って潰されるつもりは無いので、強化ブレードアームを上げてエルダーのエクスカリバーを受け止める。

ところが……。

「つつー！」

「もらった」

金属パーツが激しく軋む音を発し、「ジャガーノート」の強化ブレードアームは徐々に脅力を失った。

どうやら、先ほど長距離キャノンアームのミサイル弾を食らったときのダメージが、アームパーツにも蓄積していたようだ。

まあ、普通の装甲のビークルならアームとボディ半分はとつくに木っ端微塵になっただけなので、これでもよく持った方か。

こちらが劣勢なったことを悟ったエルダーは、さらに激しくエクスカリバーアームを

押しして、コクピットの俺を叩き斬ろうと試みる。

意地でも俺を殺すことに固執するわけか。

だが……そこまでだ。

「なぐっ！」

「……悪いな。そういう戦いなら、俺もイヤってほど経験してるんだ」

俺は強化ブレードアームを斜めにずらして受け止めていたエクスカリバーの力を流しつつ、ペダルを深く踏み込んで「ホワイトレクイエム」に突進する。

弾みでエクスカリバーの刃は「ジャガーノート」のミスリルボディを深く傷つけたが、エルダーも衝撃をモロに食らって息を詰まらせた。

万全の状態のエルダーなら対応したかもしれないが、既に「ホワイトレクイエム」も限界だ。

ダメージの蓄積したビークルでは、さすがのチャンピオンも俺のチェーンガンの近距離射撃を躲すことはできなかった。

「俺の勝ちだ」

「……………」

エンジンの中心部を撃ち抜かれた「ホワイトレクイエム」は、完全に機能を停止した。俺の「ジャガーノート」もエルダーの自爆にも等しい攻撃の数々でかなりの損傷を受

けたが、まだ十分動くことはできる。

闘技場の係員は俺の勝利を宣言した。

こうして、エルダーのトーナメント連覇の伝説は幕を閉じ、新しい統一チャンピオンが誕生した。

決勝戦が終わり、今季のピークルバトルトーナメントは全日程を終了した。

興奮冷めやらぬ様子の観客たちが闘技場を後にし、出場した選手たちも思い思いに帰路に就く。

そんな中、エルダーは選手控室に一人残って「ホワイトレクイエム」に修理を施し、駆動部の応急処置が終わったところでようやく顔を上げた。

「まったく……念のためセントジョーンズ病院で精密検査って……あつ」
「む……」

エルダーは横合いから聞こえた声に反応して振り向いた。

彼の目には、ちょうど救護所からげんなりした顔で出てきた女性の姿が映る。

妖艶な衣装に仮面をつけ、手には救護所で受け取ったと思わしき書類を持っている。

「……サフランか」

「お久しぶりです、師匠」

「……ああ」

サフランことビスカスにビークルバトルを教えたのはエルダーだ。

原作では、サフランのサブイベントで彼女自らが語り判明することだが、孤児で荒れた生活に身を落としていたサフランにエルダーはビークルバトルを仕込み、サフランも当初は彼の期待に応えるために努力していた。

しかし、エルダーは一度もサフランに素顔を見せることは無く、決して心を開くことは無かった。

そして、仲間や家族の愛情に飢えていたサフランはリツキーのようなクズに騙される、という経緯だ。

サフランとエルダーの間に会話が無くなって久しい。

いつしか、サフランもエルダーとは距離を取り、ビークルに関しても相談どころか内容について喋ろうともしなくなった。

グレイの存在によって今のサフランは色々持ち直しているところだが、それでもエルダーとの関係性においては何も改善は無い。

しかし、救護所から出てきたサフランに何の言葉も掛けず、手に持った診察書類に反

応すら示さないエルダーを見ていると、サフラン自身もそれを悪い傾向ではないと思つてしまう。

「……………あの……………決勝戦は……………」

「……………。(別の方法を考えなくては)」

サフランはどうか言葉を絞り出すが、エルダーは彼女の言葉など耳に入らない様子だ。

一瞬、サフランはエルダーが敗北に打ちひしがれているのかと思つた。

もしくは、既に来年のトーナメントへの対策で頭がいつぱいなのか。

エルダーは勝利に対して貪欲だ。

素顔さえ不明で謎の多いバトラーだが、一度でも彼と対戦したことがある選手は、皆その尋常ならざる勝利への執念を感じ取っている。

しかし、サフランの予想に反して、エルダーことダンディリオンの頭の中は、ピークルバトルとは全く別の内容で埋め尽くされていた。

そして、ゆつくりと顔を上げたエルダーは、仮面の奥の鋭い瞳でサフランを見据える。

「ところで、サフラン」

「は、はい」

「君はグレイと親しいのか？」

「え？」

サフランは思いがけない一言に一瞬だが唾然とした。

一見、エルダーの問いは、自分を上回る強者への興味、ライバル心や対抗心など、そういう類の意識によるものだ。

だが、人よりも長くエルダーを見てきたサフランは、そこにポジティブな意味は微塵も無いことを見抜いた。

エルダーからは何の感情も伝わってこない。

恨みや憤怒こそ表に出していないが、彼の異様な冷たさはサフランを戦慄させる。

そしてサフランは確信した。

決勝戦で感じたエルダーの異様な殺意。

あれは決して勘違いではなかったのだと。

エルダーはグレイに対して悪意しかない。

闘技場の外でグレイに危害を加えることを企てるかもしれない。

それを理解したサフランは、努めて冷静な口調で返した。

「……いえ、別件の仕事で少し話した程度です。プライベートの付き合いなどはありません」

「そうか。では、私はこれで」

「あ……」

それだけ聞くと、エルダーは踵を返した。

グレイの情報を引き出したかったのか、サフランとの繋がりを利用して何かをするつもりだったのか。

それを見極めることすら叶わない。

残されたサフランは、ただエルダーの背中を見送るしかなかった。

「やっぱり、あなたは……」

89話 祝勝会 前編

「え、皆様。本日はタダ酒目当てにお集まりいただき、誠にありがとうございます。突然のお声かけにもかかわらず応えていただいた暇人の皆様には、そのお気遣いのご足労に感謝の思いが絶えぬ次第ではございますが……まあ、あれですな。面子の多くが荒くれビークル乗りにシケた面の年寄りとは……わたくしの人望の無さを嘆く次第でございます」

ロブスター亭のレストラン内に笑い声と若干のブーイングが響く。

皮肉を交えて演説をキメる俺の姿はステージ上にあつた。

何度も上がっているステージだが、今日の俺のポジションはいつもの定位置ではなくボーカルマイクの前。

普段はコニーが立つポジションである。

しかも、今ステージ上に居るのは俺一人だけ。

他のメンバーと共に上がるのが日常だっただけに、何とも妙な気分だ。

「ま、何はともあれ、今日は無礼講で楽しませよう。それでは、皆様お手元のグラスを

お持ちください。ハッピーガーランド一のイケメンであるこの私のトーナメント優勝を、新生チャンピオンの誕生を祝いまして、乾杯！」

「「「乾杯!!」」」

俺の音頭に合わせて、会場の連中は声を揃えてグラスを掲げた。

そう、これは俺の祝勝会だ。

この街の知り合いを大勢招待しての大盤振る舞いだ。

最初は楽団メンバーとガーランド闘技場に居る顔見知りの選手を何人か誘うだけのはずだったが、どこから話が漏れたのか、あれよあれよという間に規模は数倍に膨れ上がった。

会場はロブスター亭のレストランを貸し切り、料理は隣の食料品店『ラッキー・フーズ』にも大量注文した。

酒はさすがにドン・スミスセレクションの品までは用意できなかったが、ロブスター亭のバーテンであるクリスが在庫をひっくり返してかき集めてくれた。

その結果、どこぞの貴族の誕生日会と見間違うくらいには豪勢なパーティーになった。

会場こそ一流ホテルの巨大ホールではないが、料理は下手な上流階級の遊園会を凌駕するクオリティだろう。

因みに、費用は全額俺持ちなのでトーナメントの優勝賞金が吹っ飛ぶ。

……まあ、いいけどさ。これくらい。

それに、闘技場以外の業界の人間も集められたので、各所へ足を延ばして話す手間が省けたと思えばいい。

……それにしては、高い出費だけだな。

「グレイ、優勝おめでとう。凄い試合だったね」

「さすがだね、グレイ。新聞の第一面にも載ってたよ」

「ほえ……あのグレイがトーナメントのチャンピオンか」

「この国で一番なんて、凄いわねえ」

「グレイ、おめでとう。決勝戦は僕も見てたけど、本当に手に汗握る戦いだったよ」

まずは最も親しい連中が俺の周りに集まる。

この会場で一番親しい連中といえは、やはりトロット楽団の面々だ。

コニー、マジヨラム、バジル、セイボリー、バナラがそれぞれ俺に祝いの言葉を述べた。

そして……。

「グレイ、今日のところはお前の優勝を祝つとくぜ」

脱退してからというもの、トロット楽団の人間とは意図的に距離を取っているようなフェンネルだが、今回はビークルバトル関連での祝い事なので、普通に招待に応じた。

楽団メンバーと積極的に絡まないのは変わらずだが……。

「ああ、ありがとう。予想外に派手なパーティーになったが、たまにはこういうのも悪くないだろう。普段、皆は客もてなす側ばかりだろう？ 今日楽しんでくれ」

「やった！ ご馳走だ〜！ ほら、セイボリーも行こうよ」

「そうね。せっかくのパーティーだし、楽しまなくちゃね」

セイボリーは主催者の俺に目で礼を言いながら、ドタバタと喧しいバジルに続いた。

「フェンネル、バナラ。お疲れさん。俺が今回当たったのはバナラだけだったが、とてもいい試合だった。来年の俺は決勝シードだから戦うのは一人だけだが……どちらが来ても気の抜けないバトルになりそうだ。挑戦を楽しみにしている」

「ああ、来年は俺がチャンピオンになってやるからな」

「うん。僕も負けてられないね」

改めてお互いの健闘を称え合い、バナラとフェンネルは各々のポジションに戻っていった。

フェンネルはファンキーな見た目の連中のもとへ……どうやら、今回はボッチではないようだ。

以前もフェンネルと話しているところを目にしたことがあるが、彼らがロックバンドのメンバーであるベンジャミンとフランクリンだ。

いずれエレキギターが完成したら、彼らともきちんと話さないとな。

バナラは当然ながらコニーに声を掛けた。

二人の様子は……けっ！

ちようど、バナラはコニーから料理の載った取り皿を受け取っていた。

そうですか。

バナラの皿に取り分けられていた料理は、彼の好物ばかりですか。

甲斐甲斐しく世話を焼くコニーに、バナラは照れた様子で礼を言いながら鼻の下を伸ばしている。

リア充爆ぜろ……と言いたいところだが、またコニーにマルガリータの件を突っ込まれそうだ。

触らぬ神に祟りなし。

俺はイチャつく二人にはこれ以上関わらず、まだ声を掛けていないメンバーに向き直った。

「マジヨラム、今回は世話になったな。君と『ラッキー・フーズ』のおかげで、テーブルの上が寂しいことにならずにすんだよ。急な注文ですまなかつたね」

「とんでもない。大口の取引はいつでも歓迎さ。母さんも喜んでいたよ。それに、僕もご馳走になつてるし」

「そうか。まあ、親御さんにもよろしく言っておいてくれ」

実際、マジヨラムは大食漢だ。

祝いの席ということで料理は多めに用意してもらったはずだが、マジヨラムの皿から消えてゆく料理の様子を見るに、残飯が出る心配は無さそうだな。

それにしても……食べ慣れた実家の味のはずなのに、随分と美味そうに食うものだ。テレビのある世の中だったら、食レポで引つ張りだこだろう。

一通り料理を腹に詰め込み、見た目の割に上品な所作で口を拭ったマジヨラムは、若干コニーの方を気にしながら口を開いた。

「(そういえば、今日ダンディリオンは?)」

「(ああ、それなら……)」

声を潜めて質問してきたマジヨラムに、俺はセイボリーを示す。

ちようどバジルは彼女の傍を離れているらしく、俺とマジヨラムの視線に気づいて意図を悟ったセイボリーはこちらへ寄つてきた。

「(ダンディリオン、今日は来れないみたいよ。ちようど仕事を立て込んでいるらしい

わ)」

「(そっか)」

俺はダンディリオンを誘うのをセイボリーに任せただ。

「(やっぱり、この街には……)」

「(どうでしょうね……でも、あの人と顔を合わせる事になると言えば、ちようどよかつたのかも)」

若干の悲痛さを滲ませたマジヨラムに対し、セイボリーは招待客のとある一団に視線をやりつつ答える。

彼女の目には僅かに険のある色が浮かんだ。

一瞬のことだったので、マジヨラムは気づいていない。

「(とところで、セントジョーンズ卿はグレイが招待したのよね?)」

「(ああ、お得意さんだからな。ダンディリオンもセントジョーンズ卿も呼ばないわけにはいかないから、俺も内心ひやひやしていたよ)」

セイボリーの言う通り、この祝勝パーティーにはセントジョーンズ卿も招待して
いる。

彼はトーナメントが終わったらすぐにスームスームへ行くのかと思いきや、俺が形式上の招待状を送ったら、本当にやって来たのだ。

まあ、既にマーシユとは再会できているので、心にゆとりがあるのだろう。ダンディリオンへの誘いをセイボリーに委ねたのはこういうワケだ。

彼女にセントジョーンズ卿が来ることを伝えておけば、当然ながらダンディリオンの耳にもそのことが入る。

そうなれば、ダンディリオンは確実に欠席すると踏んだのだ。

俺の立場上、ダンディリオンを誘わないわけにはいかない。

しかし、今ダンディリオンとセントジョーンズ卿が遭遇するのは避けたい。

原作では、この二人が直接絡むイベントは無いからな。

この世界で二人が相まみえる展開になつた場合、一体何が起きるのか分かつたものではない。

まあ、ブラッディマンティスの創設に始まる壮大な策略を鑑みれば、ダンディリオンが大つぴらに妙な真似をするとも思えないが……。

何はともあれ、セイボリーはダンディリオンの裏の事情を知っており、エルダー状態の彼とも普通に話せる立場に居るので、彼女に任せれば話は早い。

向こうも口裏を合わせやすいと思つてのことだったが、実際にその通りになつたな。

ありきたりな欠席理由に、深読みされてもハッピーガーランドへのトラウマというそれらしい事情がある。

俺はまんまと二人への義理を通しつつ今後の展開に影響するかもしれないイレギュラーを排除することに成功したわけだ。

「(それにしても……)」

「(ん? どうしたんだい?)」

ポツリと呟いたセイボリーに、マジヨラムは疑問を発する。

セイボリー他の招待客と話しているセントジョーンズ卿を見つつ首を傾げた。

「(セントジョーンズ卿、ヤケに楽しそうね。マーシユが行方不明になつて気が気でない状態かと思つていたけど……)」

そりや、マーシユとセントジョーンズ卿は既に再会していますからね。

そこら辺をセイボリーとダンディリオンがどこまで把握しているのかはわからないが、セイボリーが俺の前で敢えてシラを切つてこちらを観察している可能性もあるのだから油断はできない。

「(何か進展でも……)」

「ああ! セイボリー!! そんなところで何してるんだい!」

緊張感で重くなりかけていた空気は、突如現れた緑の闖入者によって霧散させられた。

そんなところとはご挨拶だが、今回ばかりはいいタイミングだ。

だが……俺とマジヨラムに険しい視線を送ってくるあたり、相変わらず面倒くさい奴だ。

「ちよつとね……バジルこそ、もういいのかしら？ さっきの子、あなたに夢中みたいよ」

「へ？ そ、そんなわけないって！ 僕のファンだっていうから……僕はセイボリーが最優先だよ！」

「そう、嬉しいわ。でも、ファンの子も大事にしなきゃダメよ」

「こんなちんちくりんにもファンが居るんだよな。」

まあ、腐つてもトロット楽団のメンバーで、ベースの腕は確かだ。

珍しく役に立ったバジルにセイボリーを押し付け、俺は足早にその場を後にした。

90話 祝勝会 後編

「ん？」

パーティー会場を少し歩いた俺は、周囲の招待客の視線の行先に些か違和感を覚えた。

この会場で最も男性の目を集めているのはセイボリーのはずだ。

バジルのみならず、あらゆる野郎どもが彼女の虜になっている光景は珍しいものではない。

しかし、今日は意外なことに、セイボリーに匹敵する数の視線を引き寄せる存在があるようだ。

俺も隣の男につられて会場の隅の方をしてみる。

「なるほど……」

そこには上品なドレスに身を包んだ肉感的な美女が居た。

セイボリーとは違うタイプだが、彼女も十二分に野郎どもを引き付ける要素を持っている。

あれは仕方ない。

「(彼女はいつたいい何者だろう?)」

「(一人でここに来ているということは、グレイ氏の知り合いじゃないか?)」

「(いやあ、何というか……)」

「(眼福ですな)」

「(美しい……)」

「(お、おい! こつちに来るぞ)」

おっさんどもの視線をまるで気にした様子がない美女は、俺に気付くところちらへ寄ってきた。

一瞬、頭にクエスチョンマークが浮かびそうになったが、辛うじて俺は彼女の顔を思い出した。

確かに、周りの連中の言う通り、俺の知り合いだった。

「グレイ、優勝おめでとう」

「ああ、ありがとう(……今日は、どっちだ?)」

「(ビスカスよ。人の目もあるから)」

「(わかった。)ビスカス、よく来てくれた」

サフランだった。

俺のビークルバトルーナメント一回戦の対戦相手だ。

闘技場では覆面をしているし、外でも分厚い眼鏡と帽子で顔を隠しているので、すぐにはわからなかった。

しかし……いつもとは雰囲気が違うな。

今日のサフランは野暮ったい作業服でもドS女王の衣装でもなく、クラシクなロングドレスに身を包んでいる。

当然、覆面も眼鏡もしていないので素顔だ。

今の彼女を闘技場のサフランだと見破る者は少ないだろうが、それでも豊満なボディラインと整った顔に多くの野郎どものゲス視線が集まる。

間もなく、彼女が俺の知り合いだとわかって納得した野郎どもの目は、徐々に羨望と嫉妬のものへと変わっていった。

面倒な……。

俺とサフランはそういう関係じゃない。

っていうか、あの歯ぎしりしている奴はセントジョーンズ卿の連れじゃないか。貴族の縁者が何をやっているんだか……。

俺の隣に立ってワインを一口飲んだサフランは口を開いた。

「それにしても……凄いパーティーね」

「そうか？ 割と庶民的なものだと思うけどね」

料理のクオリティと量はそれなりのものだと思うが上には上がある。

上流階級のなかでもさらに上層に位置する連中であれば、この辺りならリバーサイドホテルかステーションホテルを貸し切って、高級食材をふんだんに使った料理を並べさせるだろう。

それこそ、Sランクも間近になったサフランであれば、企業やら何やらとの付き合いで、もっとレベルの高いパーティーに出入りしていると思っていた。

しかし、サフランは「そうじゃない」と首を横に振った。

「ビークルバトラー、学者、芸術家、『本物』の貴族……各界のトップクラスの人間が一堂に会するなんて。お金があっても、名が売れていても、この面子は簡単に集められるものではないわ」

トップクラス、ねえ？

ロックンローラーに人見知り、ガーランド大学のマッドサイエンティスト、トロット楽団、セントジョーンズ卿とその関係者。

色々と残念な部分も多い連中だと思うが……。

「そんなもんかね？ 変人と暇人ばかりだから、こんなちっぽけな店の大したことない

集まりにも出てくるように思えるが……」

「……そういうスタンスで自然と人が集まるあたり、あなたには人を惹きつける力があるのよ」

それは俺を買い被り過ぎだ。

シユナイダーを呼ぶのは苦労したぞ、マジで。

俺は若干のこそばゆい感覚に苦笑いしながら話題を変えた。

「ところで、体調の方は大丈夫か？ 幸い、目立った外傷は無かったようだが……」

「ええ、ちゃんとセントジョーンズ病院にも行ってきた。検査でも異常は無いつて」

「そいつはよかった」

一応、サフランは正体を隠しているので、不用意にトーナメントなどの単語は出さな
いよう注意して話す。

「修理の目処は？」

「ほとんど総取り換えだけど大丈夫よ。あなたのほど一点ものの塊というわけではないし、何とかなるわ」

それでも、耐水ボデイムにマスクブレストやウィップアームなど、「ステイル・モラル」はかなり珍しいパーツで構成されているので、取り寄せには時間が掛かるだろう。

今更ながら、悪いことをしてしまったな。

「……ねえ、グレイ」

話の切れ目にサフランは少し迷うような仕草を見せてから口を開いた。

試合前にも何かを言い淀むような様子はあったが、異様に深刻そうな表情を鑑みるに、今度は別件のようだ。

色々と災難続きのようだが、今度は一体どうしたのだろうか？

「(エルダーの……ことなんだけど)」

「(あいつがどうかしたのか?)」

声を潜めるサフランに倣い、俺も周りに聞き取れない小声で囁く。

質問をしつつ、俺はサフランとエルダーの関係について思い出していた。

サフランはエルダーにビークルバトルを仕込まれた。

エルダーことダンディリオンがチャンピオンになったのは約4年前なので、二人はそれほど年も離れておらず、師弟関係が始まったのも大昔のことではないだろう。

だが、その数年の間に二人を取り巻く環境はめまぐるしく変化した。

エルダーはトーナメント連覇とブラッディマンティスの勢力を拡大し、サフランはエルダーから離れてリッキーに依存し始めた。

そして、俺という存在が一石を投じた。

サフランはリツキーの呪縛から解き放たれ、エルダーはチャンピオンの座から陥落した。

サフランがトーナメントに出場したことで、二人は久しぶりにまともに顔を合わせたはずだ。

恐らく、そこで何かがあつたのだろう。

サフランがエルダーに取り込まれて俺に敵対することはないと思うが……俺は彼女の言葉に耳を傾けた。

「……彼は、あなたとまともに戦うつもりはない」

サフランは悲痛な表情で呟いた。

「(フェンネルやバニラみたいに来年のトーナメントで正々堂々と戦うのは……無理だと思う)」

恐らく、サフランはエルダーが何か良からぬことを企んでいることに勘付いたのだ。

試合を観てエルダーの俺に対する明確な殺意を悟ったのか、エルダーがサフランを通じて俺の弱みでも探りに来たか。

サフランにとつてはシヨックだろう。

たとえエルダーとの溝が深まっていたとしても、兄のように慕っていた師が非道な真似をしている光景には心が痛むはずだ。

この話を教えてくれただけでも十分だ。

だから俺は、詳しい経緯を話し始める前にサフランを遮った。

「ああ、知ってる」

「え？」

俺は慎重に言葉を選んだ。

いくらサフランとはいえ、俺が転移者であることやゲームの世界云々は、軽々しく伝えることはできない。

「まあ、俺にも事情があるんでね。君とエルダーが師弟だったということも、エルダーが裏で色々と動いていることも把握している」

「(そう……)」

サフランは若干複雑な表情を見せたが、どちらかといえば安堵の雰囲気醸し出した。

これ以上、何かを伝えようとしてくる様子は無い。

「だが、忠告はありがたく受け取っとく。注意するよ」

「……うん」

俺が礼を言うと、サフランは軽く微笑んだ。

エルダーの話はこれでお終いだ。

あとは、俺とバニラが決着を付けるだけだな。

「それじゃあ、私はこれで……」

「あ、ちよつと待ってくれ」

サフランは踵を返して立ち去ろうとしたが、俺は彼女を呼び止めた。

「これは、断ってもらってもいい話なんだが……」

俺は近いうちに盗賊団のブラッディマンティスが大きく動く情報があること、この街とも派手に衝突する可能性が高いことを伝えた。

エルダーが裏で関わっていることまでは教えない。

「物資の調達、拠点の防衛、そして敵の殲滅……腕利きのビークル乗りが必要な場面は多いと思う。手を貸してもらえないか？」

「そうね……ビークルが直ったら、前向きに検討するわ」

「ああ、無理でなければ頼む」

戦争に引き込むことに若干の申し訳なきは覚えたが、これでサフランがガラガラ砂漠決戦で敵に回る可能性は低くなった。

戦場でエルダーと相まみえる展開にさえならなければ問題ないだろう。

……ならないよな？

付近の招待客に軽く挨拶して愛嬌を振り撒きつつ、俺は一組の夫婦？の近くで脚を止めた。

「よお、シユナイダー。それに、シルヴィアさんも」

「ああ……」

「グレイさん。お招きいただき、ありがとうございます」

「いえいえ」

彼を呼ぶのは苦勞した。

いや、引き留めるのに苦勞した。

トーナメント終了後、最低限のビークルの修理を終えたシユナイダーは、さっさとコンドル砦方面からネフロに帰ろうとしたのだ。

慌てて引き留めてパーティーへの参加を打診したが、案の定シユナイダーの最初の返答は「結構だ」の一言だった。

そんな他愛も無いことを思い出していると、シユナイダーは俺をじつと見据えながら口を開いた。

「グレイ、一つ聞きたいんだが……」

「ん？ 何だ？」

「ウズラ山トンネルの件……お前が片付けるのか？」

「……ああ、そのつもりだ」

シュナイダーを引き留める口実がこの件だった。

何せ、ウズラ山トンネルが通れない今、ハツピーガーランドとネフロ間の移動手段はガラガラ砂漠をビークルで超えるルートしか無い。

もちろん、トーナメント出場者であるシュナイダーにとっては、その程度は造作も無いことかもしれないが、鉄道が使えるのと使えないのでは負担は大違いだろう。

特に、同乗するシルヴィアの消耗は大きいはずだ。

だから俺は、ウズラ山トンネルの鉄道が間もなく復旧することを教え、それまではパーティーに参加してシルヴィアとハツピーガーランドを楽しむように伝えたのだ。

文句の一つも言わず「マキシマム」の助手席に座っていたシルヴィアも、都会でのシヨップिंगの誘惑には抗えないらしい。

シュナイダーはめでたく荷物持ちに転職だ。

その件で不満の一つでも言うのかと思ったが、シュナイダーの口から出た言葉は予想外のものだった。

「手伝うか？ トンネルの掃討」

意外にも、シュナイダーはこの件に関しては俺に感謝しているようだ。

不愛想で誤解を招きやすい男だが、シルヴィアを大切にするという点に関しては間違

いない。

そこまでならともかく、自ら協力を申し出てくるとは……以前より丸くなつたか？
さて、トンネルを占拠している盗賊団の討伐だが、シュナイダーの助力が得られるのであれば助かるのは事実だ。

閉所での戦いになる以上、接近戦のエキスパートであるシュナイダーは強力な戦力となる。

だが……。

「いや、気持ちはあるがたいが、あんたのピークルは修理が終わったばかりで、まだ本調子じゃないだろう。今回は俺と……バニラで片付けるつもりだ」

「そうか」

シュナイダーはただ一言そう言って沈黙した。

俺はシュナイダーとそれなりに付き合いが長いので、彼が普通に納得しただけだとわかつてはいるが、傍から見れば気を悪くしたかのような振る舞いだ。

シルヴィアもそこら辺に配慮したのか、改めて俺に愛想笑いをしつつ口を開いた。

「グレイさん、わざわざありがとうね。あなたから話を聞かせていただけかなかつたら、帰りに砂漠を横断する羽目になるところだったわ」

「……別に俺はそれでも問題ない」

「こらっ、あなたもちちゃんと感謝なさい」

シュナイダーの奴は口ではこう言っているが、シルヴィアを砂漠の横断に付き合わせてないで済むことは喜んでいるし、そのことで俺にも感謝の念を抱いていることはわかる。

……まあ、いいカップルじゃないか。お似合いだよ。

「いやいや、構わんよ。ところで、だ。シュナイダー、トンネルの件の代わりについてわけじゃないんだが、一つ頼みがある。もちろん、断つても構わない」

「何だ？」

これ以上リア充どもの掛け合いを見ているも仕方ないので、サフランのときと同じくこの先のイベントでの協力を要請することにした。

「近いうちに、大規模な盗賊団との衝突が起る可能性がある。場所はガラガラ砂漠だ」

「……あのデザートホーネット団とかいう奴らか？ お前と同じような武器を使う」

「いや、別の奴らだ」

砂漠を超えてネフロからやって来たシュナイダーなら、デザートホーネット団のことを知っているのも当然か。

「奴らとの決戦のときに、手を貸してもらえないか？ もちろん、暇だったらでいい」
「わかった。覚えておく」

シユナイダーは即答こそしなかったが、この様子ならほぼ確実に協力は得られそう
だ。

こうして、俺はまた強力なビークル乗りを一人スカウトすることに成功した。

「やあ、グレイ君。トーナメント優勝おめでとう。それと、今日は素晴らしい宴に招いて
くれた。感謝するよ」

「ありがとうございます。個人的な祝い事にご足労いただき恐縮ですが、楽しんでく
ださい」

シユナイダーと話し終わったタイミングで俺に声を掛けてきたのはセントジョーン
ズ卿だった。

祝勝会の招待客の中では一番の大物だ。

自然と周囲の視線は俺たちに注がれる。

「やはりエルダーの不敗伝説に終止符を打つのは君だったか。優勝の最有力候補とい
うのは間違いではなかったね」

「ええ、エルダー以外にも強敵は居ましたが、どうにか勝てました。今年はビークルの調
子も良かったんですよ」

「ここで、俺はセントジョーンズ卿にあることを伝え忘れていたことに気付いた。

「ああ、そうだ。この後なんですけど、俺とバナラは少しハッピーガーランドに留まることになりそうです。ウズラ山トンネルの件で……」

「ふむ……なるほど、な」

警察ビークル隊がウズラ山トンネルで壊滅したことは既に新聞にも載っている。

ここまで事態が表に出てくれば、警察や軍事行動に関わる機密を理由に俺たちがシャットアウトされるということは無いだろう。

公的機関の部隊がやられた以上、次に投入されるのは民間から募ったビークル乗りだ。

この世界のシステムやシナリオ的に、恐らくバナラや俺が関わらない限り、原作と同じ事件が解決する可能性は低い。

放置すれば、時間が経てば経つほど、被害は大きくなるだろう。

俺が自らトンネルの件を片付けようとしていることは、セントジョーンズ卿も悟っているようで、納得の表情を見せた。

「それが片付きましたら、改めて俺もバナラと一緒にスームスームへ行きますので」「わかった。では、私も君たちと一緒に行く。その時になったら声を掛けてくれ」

それではセントジョーンズ卿を待たせてしまう。

盗賊団の討伐自体には、それほど時間は掛からないだろう。

俺たちの役割は、トロツコに乗って、敵を殲滅して、そのままハッピーガーランド駅に帰ってくるだけだ。

しかし、手続きから戦闘の準備、報告と事後処理のことも含めれば、ゲームのように朝出発して昼には開通といった具合に片付けるのは無理だ。

ハッピーガーランドくネフフロ間の鉄道を復旧させるためには、俺もそれなりの時間と根回しの労力を割かなければならないだろう。

だが、当のセントジョーンズ卿はまるで気にした様子が無く笑顔で答えた。

「なに、構わんさ。君とバナラ君には本当に感謝しているのだ。それに、ウズラ山トンネルの復旧に関しては、ハッピーガーランド全体にとつても大事なことだ。私も見届けたい。それに……」

セントジョーンズ卿は一拍置いて続けた。

「私の口添えもあった方が、その後の手続きと復旧作業への移行もスムーズだろう。そのくらい協力させてもらおうよ」

「そうですか。では、お言葉に甘えて……」

俺とセントジョーンズ卿が話し終わると、付近に居た招待客の連中が続々と俺やセントジョーンズ卿のもとへ殺到した。

「どうやら、俺たちが話し終わるのを待っていたらしい。

こういったパーティーの場では、よほど親しい間柄を除いて、挨拶が一番地位の高い人間が話し終ってから、という暗黙の了解らしいが……。

セントジョーンズ卿の縁者や何故か来ている新聞記者などのほぼ仕事で訪れている人間はともかく、普段は傍若無人な印象を受ける大学の教授までこの慣習に従うとは滑稽だ。

貴族制度が表面上は廃止されても、やはりこういう部分に上流階級のしきたりは色濃く残っているのか。

俺はアーバン新聞社の記者を軽くあしらひ、大学の連中にはロバートの件とポールの件で少し話をして、俺はようやく解放された……と思いきや、そうは問屋が卸さない。

「あ、グレイ。ちよつといいかな？ 相談したいことが……」
バナラだった。

彼は真つ直ぐ俺に向かって近づき、僅かに周りを気にしながら声を潜めて囁いた。

「(実は、ブラッディマンティスのことなんだ)」

とびきりの爆弾に、俺は顔が強張るのを隠せなかった。

91話 ウズラ山トンネル 前編

祝勝会が終わった次の日、俺はロブスター亭のバニラが泊まる部屋を訪ねた。

「バニラ殿、そろそろ準備の方をお願いできますでしょうか？ はい」

「む、グレイ……」

腰の低い俺に対し、険のある表情を向けるバニラ。

拗ねたような雰囲気も醸し出しているが……悪いとは思うけどさ、男がやつても可愛くはないんだよな。

「シヨックだよ。まさか、グレイが僕のことをそんな奴だと思っていたなんて」

「だからすまんて……」

しかし、平謝りなのは仕方ない。

昨日は俺の対応がマズかったからな。

祝勝会でバニラが言っていたブラッディマンティスに関する相談とは、やはりコンフリーからの勧誘の件だった。

結論から言うと、バニラが敵側につく心配は杞憂だった。

話の内容は、自分がコンフリーの誘いに乗るふりをして、俺やガーランド警察でブラッディマンティスを一網打尽にできないか、とのことだった。

その作戦に関しては、地下アジトを殲滅したところでエルダーには辿り着けず、どうせコンフリーあたりは拠点を捨てて逃げ出す準備をしているだろう、ということでも却下になった。

だが、バニラ自身からこのことを相談されたときの俺は、一瞬だが彼が既にブラッディマンティスに取り込まれた可能性を疑ったのだ。

自分で誘導しておいてなんだが、バニラはブラッディマンティスがジュニパーベリー号を沈めたことを知っているのです、自発的に奴らに与する可能性は極めて低い。

だが、俺にはバニラがどちらのルートを取ったのか客観的に判断する術は無いのもまた事実だ。

言い訳としては、ゲームと違ってブラッディマンティス所属中は軍服が脱げないなどというシステムも無く、バニラの通り名なんてものは確認できないため……だが、そんなことを本人に説明できるはずもなく。

こういう時だけ無駄に勘のいいバニラは、俺が彼の離反の可能性を考慮していることに気付いてしまったわけだ。

「グレイには何か計画があるのかとは思っていたけど、まさか僕が船を沈めた連中に協力すると疑っていたとはね……」

「あの〜 怒ってらっしやる?」

「呆れてるだけだよ!」

キレてますやん……。

俺は小動物のように小さくなってさらに平謝りを続けるしかなかったが、やがてバナラは「はあ……」とため息をつく、俺に疑問を投げかけてきた。

「何で、僕がブラッディマンティスにつくと思っただの? 思えば、グレイは会って間もない頃からやけに僕を注視していたよね。妙に親切だったり、色々と世話をしてくれたり……それに、道を誤らなければどうか、敵側に付くのかなか……」

バナラは俺との会話の内容をかなり正確に覚えてるようだ。

どれも意識誘導的にさらつと言っただけなのにな。

「絶対におかしいよ。あんなに早い段階で、まるで僕の後がわかっていたかのようにお膳立てして……。単にピークルの才能を見抜いて、味方にしようと思っただけじゃないんだろ?」

「……………」

「何故、僕を疑うことになったんだい？」

一瞬、俺は全てを打ち明けようかと迷った。

俺が転移者であることなどは伏せても、ブラッドイマンティスの成り立ちとダンディリオンのことは話せる。

ダンディリオオンが黒幕で彼に同情してしまう可能性を鑑みれば、俺が今まで黙っていたこともバナラは納得してくれるはずだ。

何だかんだ、俺は自分より一回り年下のバナラたちトロット楽団の面々を子ども扱いしていたが、この世界において彼らは十分に大人であり、社会がそうさせたのか予想以上にしつかりとした判断能力を持っていた。

しかし、だからこそバナラに全てを話すことは憚られる。

俺はどうしてもこのバンピートロット世界をどこか遠い世界のことにように捉えてしまうことがあるが、バナラはそうではない。

唯一無二の現実世界、大切な人たちと今を暮らす世界だ。

事情を知った彼はダンディリオオンを助けようとするに違いない。

対して俺は、最低限ノーマルエンド通りの結末を迎えて、この世界を後の時代へと紡がなければならぬ。

俺も可能なら大団円を目指すつもりでいるが、正直に言って望み薄に多くを賭けられ

るほどの余裕は無いのだ。

だから、俺は正直（・・・）に応えた。

「……それは言えない。今は」

落胆されるかと思つたが、バニラの反応は予想と違つた。

バニラはため息とともに表情を緩めると、そつと口を開いた。

「そつか。大分、正直になつたね」

俺は一瞬間食らつたが、バニラは言葉が続けた。

「とりあえず、グレイが手段を選ばずブラツディマンティスを倒そうとしていることはわかつたよ。そのためなら、僕にあらぬ疑いをかけることも厭わない。でしょ？」

「ぐっ……」

ぐうの音も出ません。

「いい気分じゃないのは確かだけど、そこは僕自身が怪しい出自の人間でもあつたからね。仕方ないとは思つてる」

「えつとですね……私は何も悪意の元に黙っているわけでは……」

「いや、もういいよ」

苦しい言い訳に及ぶ俺を、バニラは手で制しながら遮つた。

一瞬、バナラが呆れているのかと思ったが、彼の表情を見るとそうでもない雰囲気だ。「言いたいことは全部言った。そっちにどんな事情があったとしても、僕はグレイにたくさん助けられた。それだけは間違いないから」

「……いいのか？ 油断させて利用するつもりだったかもしれないぞ」

「それでもだよ。この国に来てすぐの頃は、恥ずかしいけど本当に心細かったんだ。コニーに助けられて、マジヨラムやバジルと出会って、ローズマリーさんや隣のおばさんにもよくしてもらって、ジンジャーやナツメグ博士にお世話になって……本当に、皆のおかげで凄く助かった。でも、ネフロに知り合いは一人も居なくて、自分がこの誰かもわからなくて……」

バナラの声に徐々に熱がこもってくる。

「不安だった。先が見えなかった。本当に、怖かった。そんな僕を一番助けてくれたのは……グレイだから」

「……………」

そうだ。

俺も17歳の少年がそういう目に遭うことを知っていたからこそ、ピークルだけでなく生活面の支援もできる体制を整えてきたのだ。

打算もあつたが、細かい部分はやはり俺の元日本人としての仁義によるものだ。

バナラの様子を見るに、それは正しい選択だったように思う。

「だから……グレイのこと、信じるよ。僕にできることなら、全力で恩に報いる」
バナラは力強く宣言した。

真つ直ぐに俺を見据えるバナラに対し、俺もしつかりと頷き返す。

やはり、信頼の積み重ねは大事だ。

ほんの少し配慮で思い遣りは伝わる。

今回の件は、奇しくもそれを証明する結果となった。

「でも……」

「ん？」

「もし、グレイまでコニーを危ない目に遭わせるつもりなら……」

「いや、ないから！ それはない!!」

どうやら、コンフリーがコニーの名前も出して何かを仄めかしてきたようだ。

バナラにしてみれば、俺が彼女を餌として利用しないか心配なわけか。

信頼の積み重ねとか考えた途端に、随分な先入観じゃありませんこと？

即座に想いあたる時点でまあまあアウトな気もするが、今のところコニーを危険に晒すつもりは無いので、全力で否定した。

ただ……あの子は巻き込まれ体質だからな。

俺が介入したバンピートロットの歴史で、コニーがどのような目に遭うのか、正直なところ想像がつかない。

「どうだかなあ？ グレイはまだ情報を秘匿しているように思えるけど……」

「……黙秘します」

確かに、全てを話したとは言い難い。

意図的に伝えていない話はいくらでもある。

軽々しく全てを話すわけにはいかないが、これ以上嘘をつくのは憚られたので、俺は今回も回答を拒否した。

そんな俺に苦笑いを返し、バニラは立ち上がった。

「行こうか。今日はトンネルを占拠した盗賊団の退治だったね」

「……ああ。手を貸してくれ」

「もちろん」

俺とバニラがガーランド駅に到着すると、駅長と荷物搬入係のキースが出迎えてくれた。

「グレイさん、バニラさん。よく来てくださいました」

「あんたらが、トンネルを占拠したならず者盗賊団を倒してくれるんだってな。よろしく頼むよ」

既にセントジョーンズ卿が話を通してくれたので、話は恙無く進む。

今日、俺たちが出撃することも伝わっていたので、既に原動機付きのトロツコ二台も線路沿いに用意がされている。

修理機材や燃料弾薬の類も揃えてくれたらしい。

そこら辺はセントジョーンズ卿が資金を出して用意させたようだが……。

「至れり尽くせりだね……」

バニラは驚いているが、既にマーシュとの再会をお膳立てしていることを思えば、不思議ではないかな。

息子が見つかって心にゆとりがあり、ビークルの素材程度なら大した出費でもなし、彼なりに借りを返してくれているのだろう。

それに、トンネルが開通すればペンシル鉄道の株価が上昇する。

セントジョーンズ卿も鉄道会社の株は持っているはずなので、盗賊が片付けば彼も相殺以上の利益を得ることができるだろう。

だから俺たちは、遠慮なく整備場場で出撃前のメンテナンスをしてもらった。

それぞれチェーニングとガトリングアームの弾薬も満杯まで補充する。

俺の「ジャガーノート」の強化ブレードアームは……エルダー戦でエクスカリバーと打ち合ったダメージが刀身に残っているかもしれないが、これに関してはその辺の整備士でも自分でも手を出せない。

ピジョン牧場に戻ってナツメツグ博士に見てもらうしかないが……まあ、アーム駆動部の損傷はほぼ元通りに修理してもらったから、当面は問題ないだろう。

「トーナメント、見ましたよ。いやあ、優勝者のグレイさんが出張ってくれるのなら、もう勝ったも同然ですな。……もちろん、準決勝まで進出したバニラさんも頼りにしております」

駅長は俺たちのバトルを見たらしく、興奮した様子

若干、バニラがついで扱いな気もするが、まあ本人は苦笑しているだけで特に気にした様子も無いので構わないか。

「警察ビークル隊が全滅したと聞いたときは、どうしようかと思いましたが……。上の方からも、既に制圧後の後片付けと路線の確保を見据えて準備すると言われております。心配など無用かもしれませんが、どうかご武運を」

「どうも。期待に添えられるよう、やってみますよ」

気の早いセントジョーンズ卿の影響が少なからず出ているようだが、まあ早い分には問題ないか。

廃屋のシスターやエリツヒに連絡するのに、鉄道便が使えないのは不便だからな。もちろん、今回の討伐も手を抜けるものではないが……。

そうしている間に、トロツコの準備が出来たようだ。

「ようし、線路に載せるぞ」

キースの案内に従い、俺たちはビークルをトロツコに載せた。

出撃の前に、俺は後ろに連結されたトロツコに「カモミール・タイプⅡ」を乗り上げた相棒に声を掛ける。

「バニラ、敵はトンネル内部を完全に封鎖できる大型ビークルを使っているはずだ。警察ビークル隊が殲滅されたことから、制圧力と火力に秀でた武装を持っている可能性が高い。暗い閉所での戦闘になるから、いい感じに散開するのも難しい。遮蔽物も行動範囲も限られる中での射撃戦は避けられず、接近戦の準備も必要だ。油断するなよ」

「わかった」

バニラが頷いたのと同時に、線路の信号機の色が変わり、駅員たちがドヤドヤとこちらに集まってくる。

そろそろ出撃の時間だ。

「それでは出発！」

ほぼ総出で見送りに来てくれた駅の職員たちの敬礼に、俺たちも何となく返礼する。

そして、俺たちはゆったりと動き出したトロツコに身を任せ、盗賊団の占拠するウズラ山トンネルに向けて出発した。

92話 ウズラ山トンネル 後編(スチーム・ハムレット 戦)

「(グレイ……)」

「(ああ)」

ウズラ山トンネル内部にゆっくりとトロツコが侵入し、暗闇に目が慣れてくると敵の全貌が明らかとなる。

バナラの声に返答しつつ正面に注視すると、そこには俺の知識通りの巨大ビークル『スチーム・ハムレット』が居た。

上下の路線を封鎖されており、トンネルの逆側の光が見えない。

ならず者盗賊団にしては、なかなかの規模の巨大ビークルを建造したじゃないか。バンピートロットに登場するビークルはどれも秀逸なセンスの光るデザインだが、現実問題としては非効率な部分が散見されるものも多々存在する。

この『スチーム・ハムレット』もファンタジー的な発想を凝縮した典型的な例だが、現実では果たして……。

「ん？ はっはー！ またカモが来やがったー！」

「ここは通行止めだぜえ！」

「地味なビークルが二台……工事作業に来た奴らか」

「ちっ、シケてやがる。まあいい。有り金とビークルを置いていきな！」

こちらに気付いた盗賊の声を皮切りに、『スチーム・ハムレット』は動き出した。

二両の汽車を繋げてゴテゴテと拡張したような見た目通り、汽笛のような甲高い蒸気の音を轟かせ、火花を散らして線路を軋ませる。

左右の線路に載った車両には、それぞれ二基ずつの回転砲台が搭載されており、『スチーム・ハムレット』の起動と同時にこちらへ砲門を向けた。

この狭い空間で可動性の高い速射砲の制圧射撃だ。

警察ビークル隊も、砲弾の嵐と崩落するトンネルの建材の雨で、成すすべなく制圧されてしまったのだろう。

しかし、俺たちは敵の戦力を把握しており、向こうの武装も俺の原作知識と合わせて大体の予想がついていた。

「グレイ！」

「おう！」

当初の計画通り、俺とバナラは後退るようにビークルを滑らせ、迫りくる『スチーム・

ハムレット』から距離を取った。

「逃がすな！ 撃ちまく……うお！」

バナラは「カモミール・タイプⅡ」を後退させながら俺の横に出ると、ヘッドライトのハイビームで正面を照らし、トリガーを引きつばなしにしてガトリングアームを掃射した。

絶え間ない連射で大口径弾を浴びせるが、『スチーム・ハムレット』側の盗賊は身を隠したため、有効打は与えられていない。

「なっ……!? 軍用グレードの武装……戦闘用ビークルだと……」

「こいつら、ただのビークル乗りじゃねえ！」

「賞金稼ぎか!？」

「いや、俺たちの計画は漏れていない。この短期間で当局から懸賞金が掛かるとは……」

「畜生、もうしばらく稼げるはずだったのに……」

「構うこたあねえ！ ぶっ殺せえ!!」

「そうだ、怯むな！ 腕は大したことねえぞ！」

一見、バナラの行動は意味の無い無駄撃ちだ。

向こうもガトリングアームの火力に一瞬驚いたものの、ただの牽制の射撃と判断したのか、そのまま『スチーム・ハムレット』を進めてきた。

敵の砲台も既に砲撃態勢に入っている。

しかし、俺は慌てることなく「ジャガーノート」の体勢を安定させると、チェーングンアームのトリガーに慎重に指を掛けた。

「……いいぞ、そこだ」

「「「ゴア！」」」

次の瞬間、凄まじい爆発音とともに『スチーム・ハムレット』の砲台で閃光が生じた。

「あ、が……」

「馬鹿な……」

眩い閃光とともに炸裂した『スチーム・ハムレット』の砲台近くに搭乗していた盗賊たちは、全身を無数の破片で貫かれて絶命するか重傷を負うかして、バラバラと線路に投げ出された。

速射砲の弾薬が全て誘爆した砲台の影響で、別の砲台や奥の機関部にも結構な損害が出ているようだ。

何故、このようなことが起こったのか、原理は単純だ。

俺は砲身にチェーングンの弾を撃ち込み、内部の弾薬を炸裂させたのだ。

気分は戦車の砲口を撃ち抜いたシ〇・ヘイヘだが、これは砲口へ真っ直ぐ正確に弾丸

をぶち込む精密射撃が要求され、尚且つ薬室に砲弾が装填されているタイミングを完璧に狙う必要がある。

視界の悪い線路内で、目まぐるしく動く速射砲の回転砲台に対してやるものではない。

しかし、成功すれば効果は絶大な自信があった。

巨大ビークルとはいえ、狭いトンネル内で動くからには敵の大きさや装甲は制限される。

そこに高い制圧力を持つ重武装を搭載しているとなれば、弾薬が誘爆したときのダメージは相当な有効打になるに違いない。

結果は大成功なわけだが、今の一撃には入念な計画が必要だった。

バナラには予め、ヘッドライトとガトリングアームのマズルフラッシュで、俺の視界を確保するよう頼んでおいたのだ。

敵が砲撃を始める前に制圧射撃をカマせば、向こうの砲台は発射態勢のまま動きが止まり、弾薬を薬室に保持した状態を保つてくれる可能性も高い。

あとは、バナラのガトリングより高い精度を持つ俺のチェーンガンで、砲口を撃ち抜けば完璧だ。

……確実に成功する策ではないので、うまく行かなかった場合は普通に撃ち合う覚悟

もしていたが……。

初撃で大ダメージを与えられたことは僥倖だ。

「くそがつ」

「撃て撃て！」

犠牲者を出しながらも『スチーム・ハムレット』に搭乗する盗賊は残った砲台を駆使して俺たちを攻撃してきた。

さすがにトンネル内での大口徑砲の制圧射撃は強力で、崩落したトンネルの天井の破片などが落ちてくる。

あまり放置すると、トンネル自体の被害も大きくなりそうだな。

「畳みかけるぞー！ 一基ずつ、確実に潰せー！」

「了解！」

だが、手負いの巨大ビークルなど、何度も強敵を打ち倒してきた俺たちの敵ではない。トンネル内では俺たちも回避行動がとれないが、『スチーム・ハムレット』は線路上を移動する列車型なので、こちら以上に被弾を避ける術は無い。

俺とバナラは細かくサイドステップをする要領でビークルのスラスタを駆使し、的を絞らせないように立ち回りながら続けざまに機関砲の弾丸を浴びせる。

『スチーム・ハムレット』も線路上を後退して、引き撃ちで砲弾をばら撒くが、逃がす

つもりは無い。

そしてついに、砲台の奥に位置する機関部が吹き飛び、『スチーム・ハムレット』の第一形態（……）は破壊された。

「やった、か……?」

「いや、まだだ」

何ともテンプレなセリフを放つバナラに苦笑しつつ、俺は敵の方を示した。

予想通り、『スチーム・ハムレット』はガシャガシャとやかましい音を立てながらスクラップと化した前部を切り離し、今まで後部を守る装甲版として機能していた壁が勢いよく倒れてくる。

スクラップを散らしながら奥から姿を現したのは、上下の路線を両方とも塞ぐ幅の巨大な石炭車だった。

両端にはドリルのような巨大な鋭い刃が付いたクレーンが並んでいる。

「なっ!」

「第二形態だ。さっきの砲撃車が突破されても戦えるように、段階的に防衛線を張っているのだろう」

何ともファンシーな仕組みだが、トンネルに立て籠もる運用法を思えば、完全に無駄

なギミックとは断じられない。

鉄道会社にとつてトンネルは莫大な工事費を投入した貴重な財産であり、株主たちの意向を鑑みても、ウズラ山トンネルごと吹き飛ばして盗賊を排除するという選択肢はあり得ないからな。

そもそも、強力な対地攻撃が可能な爆撃機や巡航ミサイルの類は、まだこの世界に存在しない。

『スチーム・ハムレット』を排除するための攻撃は、ビークル部隊による強襲に限られる。

地球では兵器の火力が防衛力を圧倒的に超越したため重戦車ですらお役御免となったが、このバンピートロット世界においては巨大兵器の耐久力というのは決して侮れるものではないのだ。

そして、トンネル内という、どう考えても回り込んでのクロスファイヤをカマせない状況。

俺たちは敵の二段構え三段構えを正面から攻略することを強いられる。

考えてみれば当たり前のことだが、俺も実際に戦ってみて厄介さを痛感した。

なかなか、面倒な相手だ。

「うわっ」

「おっと」

急加速した『スチーム・ハムレット』は、そのまま俺たちを掬い上げる勢いで前進してきた。

俺たちは下手に流れに逆らわず、そのまま『スチーム・ハムレット』の石炭車にビークルを乗り上げる。

最悪、トンネルの外まで下がっても良かったが、後ろには鉄道会社から借りたトロツコもあるので、何となく潰されるのは気分が悪かったのだ。

俺たちはどうにかビークルの体勢を立て直し、石炭の山に落下して埋まるのを回避した。

しかし、次の瞬間、大型のクレーンアームが先端のドリルやボールの先端っぽい刃を振りかざし、次々とこちらに襲い掛かってくる。

「ふんっ！」

「せいー！」

叩きつけられたクレーンアームを俺が強化ブレードで受け流すのと同時に、バナラも逆サイドのクレーンの攻撃をトライデントアームで弾いた。

そして、バナラはスラスターの噴射を巧みに駆使してビークルを後退させた。

確かに、前に進めば石炭と資材を満載した貨車にビークルの足を取られるので、立ち回りとしては悪くない選択だ。

しかし、俺は構わず前進し、正面のクレーンアームを根本から強化ブレードで叩き斬った。

「ひ……」

返す刀でクレーンの操作席にブレードを叩き込むと、搭乗していた盗賊は悲鳴を上げる間もなく絶命する。

「くそっ」

「野郎っ！」

仲間が一人やられたのを見て、他のクレーンを操作する盗賊たちは激昂して俺を攻撃してきた。

クレーンアームはそれぞれに人員が配置されており、向こうの攻撃は原作のような単純な振り下ろしだけではないので、なかなか厄介だ。

横合いからアームを振り回すようにして叩きつけられた大型ドリルの刃を、正面から強化ブレードで弾いて防ぐ。

向こうにもそれなりの質量があるので、結構な衝撃だったが、この足場では回避もままならないので仕方ない。

だが、俺がチェーンガンのトリガーに指を掛けると、間髪入れずクレーンアームの根元に続けざまに弾丸が撃ち込まれた。

「グレイ！」

「ああ、大丈夫だ。助かる」

どうやら、バニラが援護をしてくれたようだ。

素早い状況判断で助かる。

そして、俺がクレーンアームを破壊しつつ奥まで進むと、目的の場所を発見した。

石炭車のクレーンに動力を供給する機関室と思わしきエリアは、石炭の山に隠れるように位置している。

原作のように、貨車の石炭に潜ったりはしないが、あそこが急所なのは同じと見て間違いない。

搭乗している人員も多い。

「死にさらせ」

「うげっ」

「ぐわあ！」

チェーンガンを横薙ぎにして連続で弾丸を撃ち込むと、近距離からビークル搭載火器の掃射を食らった盗賊たちは一瞬で挽き肉となった。

動力のバイパスに深刻なダメージを与えることに成功したようだが、ジェネレーターや計器類を吹き飛ばしたはずみで機関室が大きく炎上する。

「っ！ 下がれ」

俺はバニラを促し、急いで『スチーム・ハムレット』から離脱する。

炭塵爆発のリスクを思えば、今の攻撃は少し迂闊だったかもしれない。

幸い、爆発は起きず、『スチーム・ハムレット』の第二形態である石炭車は、全体の動力を制御できなくなり地味に沈黙した。

「これで……」

「ああ、次でお終いだろう」

原作通りなら、『スチーム・ハムレット』は三つ目の車両が駆動系を制御する機関車になっっている。

あれを破壊すれば、完全に撃破できるはずだ。

トンネル内の温度が徐々に上がっているが、俺は気を引き締めて敵の動きに注視した。

大破した石炭車を切り離れた『スチーム・ハムレット』は、ジリジリと後退を始めた。

「逃がすかっ」

「待て、バナラ」

「え……っ！」

正面から『スチーム・ハムレット』の機関車に突撃しようとしたバナラを、俺は慌てて制止した。

【カモミール・タイプⅡ】に急制動を掛けたバナラは怪訝な表情を俺に向けるが、この判断は正しかった。

『スチーム・ハムレット』の機関室辺りから、歯車やら何やら金属製の資材が次々と飛んできたのだ。

スクラップや金属片は結構な速度で飛んできたが、俺もバナラも回避行動を取ったので被害は出ていない。

「もっと後ろの資材持つてこい！ 蒸気圧縮回路のパイプを開放して、ありつたけ撃ち出すんだ！」

「試作品だが構わねえ！ 撃て撃て!!」

「奴らを止めろお！」

なるほど、所謂スクラップガンに近いものだな。

原作でも、『スチーム・ハムレット』の最終形態の攻撃手段は、巨大な歯車を飛ばしてくるというものだった。

さすがにゲームのように歯車がバウンドしたりはしないが、圧力をかけて飛ばされるスクラップの雨はなかなか危険だ。

ビークルはともかく、コクピットに食らえば俺たちは怪我では済まないだろう。だが……。

「最後の車両だ。徹底的に破壊するぞ。機関室を蜂の巣にしてやれ」

「ああ、わかった」

こちらとルール無しとの撃ち合いには慣れているのだ。

火器の括りにも入らない半端な飛び道具など、俺と「ジャガーノート」には通用しない。

それに、今回は凄腕のビークル乗りに成長したバナラも居る。

火力も立ち回りも完全にこちらの優勢だ。

俺たちは瓦礫も利用しつつトンネル内で巧みにポジションを移動し、絶え間なく敵に弾丸を浴びせ続けた。

バナラのガトリングアームと俺のチェーニングガンが喰る度に、『スチーム・ハムレット』側の盗賊は直撃弾でくたばるか破片で負傷するか末路を辿り、機関室の周囲からは不自然な蒸気や黒煙を吹き出す。

「そっ……」

そしてついに、俺のチェーンガンの弾丸は、機関室奥の蒸気バイパスの根本を捉えた。機関室のエネルギー系統のコアにビークル搭載火器を撃ちこまれては、さすがの巨大兵器も無事では済まない。

「おっと」

「うわー！」

爆炎とともに吹き抜けた白煙に次いで、『スチーム・ハムレット』のパーツが俺の「ジャガーノート」とバナラの「カモミール・タイプⅡ」を掠るように飛散してくる。

俺たちは破片から身を隠すようにしてコクピットに体を沈めた。

「バナラー！ 大丈夫か？」

「な、何とか……」

横目で確認したが、バナラの「カモミール・タイプⅡ」の損傷は軽微だ。

もちろん、ミスリルボディの「ジャガーノート」にも大した損害はない。

そして、蒸気と煤を含んだ黒煙が薄くなり徐々に視界が晴れると、線路上に『スチーム・ハムレット』の残骸が転がっているのが目に入る。

「やった、今度こそ……」

「ああ、完全に大破している。俺たちの仕事は終わりだ」

トンネル内はスクラップと瓦礫で滅茶苦茶だが、『スチーム・ハムレット』最大の障害

が排除された以上、復旧は時間の問題だろう。

すぐに鉄道会社の手配で清掃と安全確認が行われ、汽車は運航を始めるはずだ。
こうして、俺たちはネフロくハッピーガーランド間の交通網の回復に一つ貢献した。

93話 再びスームスームへ

翌日、俺とバナラはセントジョーンズ卿とともに、スームスームへ向けて出発した。今回のバナラは遅刻してこなかったため、予定通り駅に集合し汽車に乗つての移動だ。

車窓に映るヒバリ田園地帯の穀倉地を後ろに流しながら、列車はのんびりと進んでいく。

「ふむ……何だかこの景色にも懐かしさを覚えるな。君たちからマーシユのことを聞いて、既に何度かスームスームへ足を運んでいるはずなのにな」

「あゝ、何か申し訳ない。色々と立て込んでしまつて、結構待たせちゃいましたね」

「いやいや。トーナメントや鉄道関連のことなら、私にとつても利益のある話ばかりだったよ。それに、息子のことに關しても、君たちは誰よりも迅速に動いて結果を出してくれたうえに、今回の会談もマーシユのために足を延ばしてもらうわけだからね。感謝こそすれ、責める理由はない」

「そう言つていただけると……」

スームスームまでの道中、俺たち三人は同じコンパートメントで景色を見つつ雑談をして時間を潰す。

もつとも、話すのは主に俺とセントジョーンズ卿で、バナラは座席で必死に欠伸を噛み殺しているが……。

昨日の今日で午前中に出発なので、まだ眠いのはよくわかる。

仮にも盗賊の巨大ビークルという強敵と戦ったばかりなので、一日くらい休養してもよかつたのだが……セントジョーンズ卿とは、ドン・スマスを交えてマーシユの今後について話す約束をしている。

あまり待たせるのも悪いからな。

「今更ですが、ドン・スマスとはどうですか？」

「うむ、上手くやっているよ。印象としては、思ったよりも先見の明があり抜け目ない人だった、といったところかな。彼のことは人づてに聞いた話でしか知らなかったが、そこはお互い様だ」

決して手放しで褒めているわけではないが、セントジョーンズ卿の表情と声からは僅かに愉快そうな様子が垣間見える。

裏社会も含めて牛耳る成り上がりの大富豪と、代を重ねて名声と財力を維持する生粋の貴族……相性は悪そうに思えたが、そんなこともないようだ。

「ドン・スミスとは、今後のスームスームの医療に関して、色々と協力し合うことになったのだ。正直なところ、王都の下手な法衣貴族と会うよりも、実りの多い話ができる相手だったよ」

「ほう、それはそれは……」

俺が間に入っているとはいえ、セントジョーンズ卿はマーシユの件で借りを作っている立場だ。

ドン・スミスが自分に有利な条件を押し付けて、下手に話が拗れたら面倒だと思ったが……さすがに初っ端から揉めるような展開にはならなかったようだな。

お互いの利益になる話ができたら言うことは無い。

引き合わせた甲斐があったというものだ。

ある意味で、マーシユが繋いだ縁とも言えるか。

「ただ、我々が個人的に親しくなったことに関して、色々と邪推する輩も居る」

「あく……確かに、ここ最近は頻繁にスームスームへ足を延ばされていますからね」

ドン・スミスが裏稼業を仕切る成り上がりという時点で、セントジョーンズ卿が彼と交流することに関して突っ込んでくる連中は居るだろう。

そういう奴に限って、売国奴も同然の奴らに便宜を図ったりケチなチンピラを利用して不正な利益を得ていたりするものだが、ああいう手合いは自分を柵に上げて人の揚げ

足を取ることが生き甲斐だからな。

俺もこの世界でそれなりにビジネスをやって来て、ガーランド大学の連中なんかを目の当たりにして、それが嫌というほどわかってる。

いずれマージョウのことに勘付く連中も出てくるだろう。

当然、その中には本能的に人を貶める策ばかり考えているクズも混じっている。

人を巻き込んで詮索してくる奴、あること無いこと噂を流す奴、揺さぶりを掛けてくる奴、色々だ。

結局のところ、奴らの目的はセントジョーンズ卿の足を引っ張り、あわよくば口止めの名目でお零れに与ろうということなのだ。

そういう形振り構わない連中からブラッディマンティスに情報が渡る可能性も高いわけで、しかもどこで聞き耳を立てているかわからないのだから油断はできない。

現に今も……。

「……やはり目立つな」

「まあ、仕方ないでしょうね」

同じコンパートメントに座るなか、他の乗客から妙に注目を浴びているのは、決してジジイとおっさんと少年の三人組が珍しいからではないだろう。

自分で言うのもなんだが、この面子は皆が有名人だ。

スームスーム駅のホームに降り立った瞬間にも、周囲からは凄まじい量の視線が俺たちへ突き刺さった。

俺たちは妙な奴に絡まれる前にそそくさとビークルに乗り込み、スーム闘技場へと足を向けた。

「よお、爺さん」

「む、小僧……」

俺たち三人が闘技場の支配人室に足を踏み入れると、そこには予定通りのメンバーが集まっていた。

ドン・スミスに孫娘のクラリスにボディーガードのキャラウェイ、ジュニパーベリー号からはキャプテン・シブレットと副長のミゲール。

カウンター越しに立つパーテンは俺に軽く会釈をしたが、すぐに音声をシャットアウトして目の前のコップに集中した。

マーシユは現在ドン・スミスの手配したアジトで治療中のはずなので、ここには来ない。

そんなドン・スミスは最初に挨拶した俺に一瞬だけ鋭い目を向けたが、セントジョーンズ卿が居るのを見て佇まいを直した。車椅子だけだ。

「ようこそ、セントジョーンズ卿。毎度、大した持て成しもできませんが……どうぞ、掛けてください」

「ドン・スミス、度々お邪魔して申し訳ない。それと……息子の件、本当に感謝しています」

「何の。困ったときはお互い様です。いずれ、我々もセントジョーンズ卿のお力を拝借する 때가 来ますからな」

「ええ、もちろん。スームスームの交易拠点としての重要性は、私どもも重々承知しております。この街の医療の支えることができるのは、医師としても光栄ですよ」

ドン・スミスとセントジョーンズ卿は長つたらしい上流階級の挨拶を交わしているが、俺は遠慮なく空いているソファアに腰掛けた。

バナラがどうすべきか迷っているのです、俺の隣に座るよう促しておく。

おずおずと着席したバナラは遠慮がちにシブレットへ声を掛けた。

「あの……キャプテン・シブレット、マーシユは……？」

「おう！ 心配ねえぞ。あいつは順調に回復してらあ」

「ミゲール！」

「つ！ す、すんません」

「はあ………バカ騒ぎは論外だが、少し動ける程度には回復している。後で会ってい

け」

「あ、はい。それとこれ……渡航許可証です」

「おお、回収してくれたか。ありがとう、バニラ。本当に助かる」

ジュニパーベリー号の方も愉快的な連中だが、今日は事務的な話が盛りだくさんなので、さっさと本題に入りたい。

バーテンが俺たちに飲み物を出してきたタイミングで、俺は手を叩いて皆の注目を集めると、セントジョーンズ卿をソファアへ促しつつ口を開いた。

「さて……皆さん、自己紹介はさすがに要りませんか？ では、早速ジュニパーベリー号の皆さんとマーシユの今後について、予定を擦り合わせましょう」

「小僧、何故お前が仕切るのだ？」

「この後のブラッツディマンティスの出方を一番わかっているから、かね」

ドン・スミスは呆れた表情をしていたが、俺が開始早々に特大の爆弾を投げ込むと、一同は緊張感を強めて表情を引き締めた。

真つ先に俺の言葉に反応したのはキャプテン・シブレットだった。

「グレイ、どういうことだ？」

「キャプテン・シブレット、ジュニパーベリー号を撃沈したのは、ブラッツディマンティス

という連中である可能性が高い。それは聞いたか？」

「ああ、お前たちと別れた後、ドン・スミスから聞いた」

軽く視線をやるとドン・スミスは俺に頷いた。

俺が敢えてブラッディマンティスの名を最初に伝えなかったことにシブレットは気付いているかもしれないが、彼女自身も大っぴらに犯人を追う危険性は認識していたので、今更文句を言う気は無いようだ。

「俺も連中のことは独自に調べていてな。情報の詳細は省くが、ブラッディマンティスは戦争を起こせるレベルの武器や資材を集めている。投入された資金や労力のことを鑑みても、近々どデカいことをやらかすはずだ。キラーエレファント団のネフロ占拠以上のことを……」

具体的な話が出ていないからか、一同は続きを促すように俺に視線を向け続けた。

「恐らく、ライフライインの破壊レベルの攻撃を仕掛けてくるだろう。線路や高架橋の破壊、油田や穀倉地帯の占拠、ピークルパーツメーカーへの襲撃。考えられる例を挙げたらキリがないが……恐らく、油田だな」

「その、根拠は？」

セントジョーンズ卿は息を呑んで俺に疑問を投げかけてきたが、さすがにゲームの知識とは言えない。

「今この国の経済に一番寄与している代物で今後も成長が見込める領域、それはトロツトビークルと工業です。根幹にダメージを与えるなら、燃料を潰すのが手っ取り早い。そして、連中はデザートホーネット団と関りがあり、砂漠における戦闘のノウハウがある。以前ガラガラ砂漠でブラッディマンティスの巨大ビークルと遭遇したことがあります。撃破しましたが、非常に強力な機動要塞でした。砂漠のど真ん中の油田は、奴らにとつて格好の獲物でしょう」

簡単な説明だったが、俺が言うからには十分な根拠があると踏んだのか、皆真剣に聞き入っている。

「もう一つ厄介な話が。恐らく、奴らの次の動きはガラガラ砂漠の油田とハッピーランド近郊で決着が付くだろうが、それだけで奴らを壊滅できるとは思えない。連中の規模と装備は桁違いだからな。何なら、他にも大規模な戦力を動員した計画を進めていく可能性がある」

「小僧、お前は……ブラッディマンティスの企みを、全て阻止するつもりか？」

「いや、連中の計画を全て潰すのは、もう手遅れだろう。奴らは何年も前から実行に移す準備を整えてきた。資金も豊富だ。今の段階で攻撃を仕掛けても、地下に潜られるのが関の山だな」

ドン・スミスは面白くなさそうに口元を歪めたが、こればかりは仕方ない。

俺はセントジョーンズ卿に向き直った。

「で、この面子にとつてはこちらの方が本題ですが、連中はこの混乱に乗じてマーシユの情報収集と拉致にも本腰を入れてくる可能性が高い。大型帆船を沖合で襲撃して沈めてまで殺そうとしたのです。マーシユへの興味を失ったとは考えにくい」

「うむ、同感だ」

「奴らを壊滅させる術はあります。黒幕を引つ張り出し、向こうの戦力を悉く叩き潰し、言い逃れのできない犯罪で一斉に摘発する。だが、それにはあと何段階かの戦いが、時間が必要です。その間、マーシユを安全な場所で匿うことが必要になります。たとえば、居場所がバレても……」

「と、いうと？」

「連中の情報網は驚異的です。恐らく、ドン・スマイスが箝口令を敷いても、人里離れた山奥の小屋に匿っても、ブラッディマンティスはマーシユの居場所を探し当てるでしょう。かと言って、俺とバナラがいつまでもマーシユにぴったりくっ付いているわけにもいけません。マーシユが発見された際の迎撃ができない場所は、はつきり言って意味がありません」

ある程度のルートは見えているが、やることは山積みだ。

最終目標は、奴らが『グランドファイナーレ』を持ち出してきたところに介入し、ダン

デイリオンとセイボリーが表に出てきたところで倒すことだが、それまでにマーシユが攫われたり殺されたりしたら元も子もない。

俺はバニラたちと共に決戦の方を優先したいので、マーシユにばかり関わり合っているわけにはいかないのだ。

今回の会談では、少なくともマーシユを匿う場所と警備に関して、俺の手が無くても安全に機能する状態まで話を詰めたいところだな。

俺の言葉を聞いてドン・スミスは口を開いた。

「事情は分かった。要は、ブラッディマンティスと完全に決着がつくまで、簡単には手出できない守りの固い場所で、あの少年を匿ってもらいたいというわけだな？」

「ああ、その通りだ。そういう意味では、あんたの庇護下というのは、マーシユの保護に最適なわけだ。スームスームの街全域がファミリーの影響下にある、敵の存在を察知しやすい。外洋に面しており、内陸側も開けた穀倉地帯だから、奇襲を受ける可能性も低い。いざ街に突入されても、戦力は十分に指揮系統も明確だ。ドン・スミスファミリーの稼業故だろうが生身で戦える人員も多い」

「うむ、グレイ君の言う通りだ」

「なるほど、お前はあの少年を私のもとに留まらせることに妙に執着していたようだが、それが理由か」

セントジョーンズ卿も俺の評価に異論は無いらしく深く頷き、ドン・スミスも満更でもない表情を見せた。

「ああ、その通り。贅沢を言えば、ブラッディマンティスが完全に撃滅されるまで、マーシユにはドン・スミスの元に身を寄せてもらいたい」

「セントジョーンズ卿の移そうとした場所にも、既に敵の手が回っている可能性が高い、と聞いたが？」

「ゴールドーンは連中の縄張りに近い。護衛も配置できる環境ではないし、居場所を突き止められることも想定するとなると、お勧めできないな」

続けて、俺は釘をさすように言葉が続けた。

「だが、先ほども言った通り、ドン・スミスの元でマーシユを保護してもらったとしても、情報漏洩の危険がある。これに連なる問題は、単に敵の襲撃というだけに止まらないと思うが……」

「否定できないな。情報の秘匿の徹底という部分に関しては、我々にも確かに不十分なところがあるだろう。私たちは軍隊ではない。そして一番厄介なのは……半端な情報漏洩が原因で、私たちがセントジョーンズ卿のご子息を人質に取っているかのような曲解

が生じることもあり得ることだ」

「うむ、私もそこを懸念している。愚かな有象無象のことでドン・スミスに迷惑を掛けるのは申し訳ない」

皆の認識通り、問題はこれに尽きる。

しかし、何だかんだでスームスーム以上にマーシユの待機に適した場所つて、思い浮かばないんだよな。

「タイムリミットの認識を擦り合わせましょう。今は船の完成までマーシユを預かってもらう、という話になっていますね？」

「うむ、その内容でドン・スミスも引き受けてくれた。知己を得た彼らの船の完成を見届けるため。マーシユがここに残る理由として十分だ」

大分苦しい理由付けのような気がするが、セントジョーンズ卿がそう言うのなら、貴族的にも大丈夫なのだろう。

俺がいつくらいに船が完成する予定か尋ねると、ドン・スミスはシブレットに視線をやった。

「枠組みの建造はもうすぐ終わるだろう。ドン・スミスに手配してもらった資材は既に確保できているし、私の部下も集まり作業に加わっている。完成は時間の問題だ」

「マジか……」

思ったより早い。

原作ではエンディング時にはジュニパーベリー号Ⅱ世が完成しており、それまでの船の建設やクルーの描写まではされていなかったが……もしかしなくても、ドン・スミスの助力によるものだな。

これは、俺の根回しが裏目に出たかもしれない。

下手をすれば、ガラガラ砂漠決戦の前にジュニパーベリー号Ⅱ世が完成してしまう。

トロットビークル世界の製造力を甘く見ていたかな……。

「引き延ばしたいのか？」

「いや、ジュニパーベリー号の再建はキャプテン・シブレットたちにとって急務でしょうし……どうしましょうかねえ？」

普通に考えれば、マーシユの件とは関係なく、ジュニパーベリー号Ⅱ世をさっさと完成させた方がいい。

だが、そう都合よく事が運ばないのが現状だ。

マーシユが長くドン・スミスの元に留まれば、それだけ彼の情報を嗅ぎつけられる可能性が増え、特に理由も無くその状況が続けば、色々と邪推してあること無いこと吹聴する連中が出てくる。

セントジョーンズ卿に群がるクズさえ居なければと思うが……これも人の柵が成す典型的な面倒事だ。

「小僧、そのブラッディマンティスとの決着だが、お前の目算ではいつまで掛かる？」

「俺としては数か月の内に……できれば今年中に決着を付けようと思っている」

「できるのか？」

「多分な」

「そうか……」

ドン・スミスは目を閉じて考え込んだ。

俺の言葉も聞いて、彼も何らかの対策ができないかと考えているようだ。

しばしの逡巡の後、ドン・スミスは考えがまとまったのか、静かに口を開いた。

「進水式の予定を伸ばすことはできる」

俺は船舶や港湾のことにはそれほど詳しくないが、どうやらこの国の進水式は命名式を兼ねるものらしい。

雑に言えば、進水式まで終わらない限りその船は真に完成したとはいえないことになるわけか。

「スームスームでは、トロットビークルの更なる普及と産業の発展を鑑みて、交易路を拡

大することを考えている。輸送船もいくつか新造する計画が上がっており、大規模な交易艦隊を編成する予定があるのだ」

何気に重要な話だな。

この情報……株の取引で利用したら、インサイダーとかになるかな？

「一時的なものになるが、ジュニパーベリー号Ⅱ世を交易艦隊に組み込んでどうかないが、私の主導する交易に出張ってもらおう契約もあることだし、交易艦隊に参加するのは不自然ではなからう。艦隊の一員ならば、進水式は全ての新造艦が完成してから一緒に執り行う形でもおかしくない。どうだ？」

「確かに、それならマーシユがここに残る理由になりますな。たとえ詮索されても……世話になった者たちが旅立ちの準備を整えるまで、共に居て支援すると言えればいいだけのこと」

まあ、ある意味でマーシユの存在がセントジョーンズ卿とドン・スミスとシブレットたちを繋いでいるとも言えるか。

貴族たちの言い分ってのは、何が通って何がダメなのか、よくわからんな。

しかし、それでマーシユを引き続きスームスームで保護する大義名分となるなら言うことは無い。

「じゃあ、それで頼めるか？ キャプテンたちはどうだ？」

「異存はない。それでマーシユの安全が確保されるのなら」

「おう！ そうと決まったら、俺たちは一刻も早く船を完成させて、防備を整えなけりやな。バナラ、グレイの旦那、砂漠やら敵の本丸やらは任せませ」

「わかった」

「ああ」

思ったよりも話はあっさりとは決まったな。

セントジョーンズ卿は一同を見回して頭を下げた。

「ありがとう、シブレット君、ミゲール君。ドン・スミスにグレイ君とバナラ君も、息子のために……感謝する」

94話 セントジョーンズ父子

会談を終えた俺たちはマーシユが療養しているアジトにやって来た。

闘技場からそう遠くない街外れにある何の変哲も無い建物だが、ドン・スミスファミリーの構成員が所々に立ち周囲を警戒している。

少々、物々しい雰囲気だが、悪くないセンスだ。

既にマーシユと面会しているセントジョーンズ卿の案内で、俺とバナラはマーシユの部屋に足を踏み入れる。

「ん？ お父さん……」

ベッドから半身を起こしたマーシユがこちらを向いた。

「ああ、調子はどうだ？ マーシユ」

「大分いいよ。バナラも来てくれたんだね。……えっと、 그레이さん？」

各々の面子と言葉を交わしつつ、マーシユは俺を見て僅かに戸惑った。

そういえば、俺ときちんと顔を合わせるのは初めてか。

「ああ、俺がグレイだ。バナラの友人で、セントジョーンズ卿とも取引がある」

「うん、お父さんから聞きました。色々とお世話になったみたいで、ありがとうございませう」

ほぼ初対面だが、普通に礼を言えるじゃないか。

もちろん、ゲームの方でマーシユが猛省していることは知っていたが……。

「えっと、今日は……？」

「さつき、ドン・スミスたちと会合があつてな。今後のお前さんの予定に関して話してきたところだ。ついでに、バナラが回収した渡航許可証も引き渡し済んだ。無事にキャプテン・シブレットへ渡ったぞ」

「本当ですか?! よかった……。これでキャプテンたち、国に帰れる……」

落ち着いた様子で俺に疑問の表情を向けるマーシユに状況を説明すると、彼は安堵の表情を浮かべた。

そして、セントジョーンズ卿は先ほどの会談の内容をマーシユに説明した。

マーシユを当分スムーズスムーズで保護する計画を、ほぼ俺の立案として語っているところが若干アレだが……まあ、最初に俺がゴールドーンへの移送を却下したことに端を発しているあたり、間違いではないか。

話を聞き終えたマーシユは、ゆっくりと口を開いた。

「そっか……バニラも、皆も……凄く頑張っていたんだね。ボクが寝込んでいる間に……」

一言目から随分とネガティブな感じだが、マーシユは言葉が続けた。

「……ボクは、本当にダメな奴だね。皆に迷惑かけて、こんなときも役に立たなくて……」

「マーシユ、今は怪我を直すことを考えなくちゃ」

「そうだ、マーシユ。お前を心配する皆さんのためにも、今はとにかく早く回復に努めるのだ」

バニラとセントジョーンズ卿が各々の言葉で激励するが、響いた様子は無い。

マーシユは二人の言葉が聞こえていない様子でポツポツと語り始めた。

「僕は、調子に乗ってた。お父さんがお金持ちだから、自分は特別だって……。でも、全然そんなことなくて……」

恐らく、ガーランド大学時代のことだろうな。

マーシユは大学の音楽家に入学したが、そこでダンディリオン兄弟との実力の差を思い知らされ、彼らを僻んで嫌がらせをするようになった。

きつかけが何かはわからないが、少なくとも今のマーシユは自分の分というものを理解している。

「皆には、本当に悪いと思っっている。謝りたい……。でも、ダンディリオンとチコリには、何て謝ったらいいか……」

バナラとセントジョーンズ卿が口を噤むなか、マーシユは俺に向き直った。

「グレイさん。お父さんから聞きました。あなたがナツメツグ博士の助手だって……。何故、僕を助けてくれるんですか？」

このことは、以前セントジョーンズ卿にも聞かれたな。

俺はダンディリオンと同じナツメツグ博士の弟子。

普通に考えれば、セントジョーンズ一族には思うところがあるはずの存在だ。

……ここがバンピートロットの世界だと知ったとき、俺は何を思ったか？

正直、自分が生き延びるのに精一杯で、ナツメツグ博士の元に身を寄せてからも、武力と財力を確保することに明け暮れていた気がする。

確かに、何度もプレイした原作のストーリーで、俺は双方の事情を知っている。

だが、いざ自分がこの人間関係の渦中に存在して見れば、客観的に見ることでできない。

深く関わり過ぎた。

俺はナツメツグ博士の側の人間だ。

「悪いが、同情しているわけでも仁義のために助けるわけでもない。個人的な感覚でベストな展開を語るなら、お前さんがどこかで野垂れ死んでいた方がよかったかもな」

「ちよ、グレイー！」

バナラは俺の物言いに突っ込むが、俺は構わず続けた。

「俺にとつて、ナツメッグ博士は恩人だ。今の俺はSランク……Kランクのピークルバトラーで、セントジョーンズ病院とも大口の取引があつて、ビジネスもそれなりに手広くやつて成功しているが……俺が今こうして生きていられるのは、ナツメッグ博士のおかげだ」

思えば、博士はよく俺のような怪しい男を助けてくれたものだ。

あの人にはいくら感謝しても足りない。

「博士に出会わなかつたら、俺はどこかでヘマをして、くたばっていたかもしれない。もっと貧しく惨めな生活を送る羽目になっていたかもしれない。そして……」

俺はさらに言葉を続ける。

「ナツメッグ博士に救われたのは、ダンディリオン兄弟も同じだ。年下だが、ダンディリオンは俺の兄弟子になるわけだ」

「……だつたら、何故……？」

「もう、そんな次元で済む話じゃなくなっているんだよ」

俺はベストの襟を軽く開き、シヨルダーホルスタアの拳銃を示しつつ言った。

「俺がこいつでお前さんの頭を吹っ飛ばして、それで解決する話じゃないんだ」

ブラッドディマンティスの存在については、マーシユもある程度セントジョーンズ卿やシブレットから聞いているはずだ。

自分を狙う組織……構成員に自分を恨む人間が居るにしろ、誰かから頼まれているにしろ、心当たりはあり過ぎるだろう。

少なくとも、そいつらのせいでジュニパーベリー号が沈み友人のバナラが記憶を失った。

たとえ悪いのが船を沈めた連中だとしても、自分が周りの人間を困難に巻き込む発端となったことはマーシユ自身も嫌と言うほど認識しており、彼は唇を噛んで目を伏せた。

「目を背けるか？ まあ、それもよからう。セントジョーンズ卿の名前の効果は絶大だ。自身で何か言わなくても、ガーランド警察や周囲の取り巻きが忖度する。お前さんが何もしなくても、奴らと戦ってくれる連中は居る」

「っ！ ボクは……！」

「だが、これ以上逃げるのが嫌なら……向き合え。自分のしてきたこと、これから自分の周りで起こること……その全てと、向き合え」

「……………」

それだけ言うと、俺はバナラを促して部屋を退出した。

部屋を出ると、セントジョーンズ卿が俺を呼び止めた。

「グレイ君、ありがとう」

「? 何がです?」

「君が、言ってくれた。本来なら私が言うべきことを、私が言ってやれなかったことを……………」

未成年の少年に結構冷たく突き放すことを言った気もするが、セントジョーンズ卿に俺を責める様子は無く感謝を述べてきた。

そして、セントジョーンズ卿はゆっくりと嘯み締めるように語り始めた。

「この地域は……元々は独立国だった。ネフロ卿を始めそれぞれの街に統治者が居たが、やがて現在の王国に併合され一つの国に統一された」

そういうえば、そんな話もどこかで読んだか。

原作には……どうだったかな?

「名家と言われるその多くは、小国が乱立していた時代の領主一族の流れを汲む。別の見方をすれば、大国に征服され呑み込まれる過程で、偶然生き残ってしまった恥さらし

でしかない」

セントジョーンズ卿は言葉を続けた。

「旧貴族制の廃止は、ある意味で我々のような人間にとつてチャンスだったわけだ。家名の権威に依らない実力を証明する機会となったからな。だから、たとえ旧貴族の血筋の者であつても、今は滅多に貴族などと名乗らない。現在でも貴族を名乗るのは……王都に住まう生粋の王国貴族か、貴族時代以上に稼いで名声を得た者だけだ」

そういう意味では、セントジョーンズ卿は名実ともに貴族なわけか。

出自がはつきりしており且つ病院を経営するハツピーガーランドの名士だ。

しかし、セントジョーンズ卿は自嘲気味に笑った。

「私はマーシユに貴族の血筋であることを誇るのには愚か者だと教えた。自ら家族や下の者を養う力を持つてこそだと……。だが、それも歪んで伝わってしまったようだ。金持ちであることを誇る息子を、私は諫められなかった……」

セントジョーンズ卿の言葉が途切れたので、俺はふと気になったことを質問してみた。

「セントジョーンズ卿、医療を生業にしていることを鑑みても、あなたはかなり高貴な義務（ノブレス・オブリージュ）を体現する方のようなだ。こう言つてはなんですが、長男のマーシユに何故それが継承されなかったのです？ セントジョーンズ卿ご自身が言

えなくても、奥さんも口を出しそうなものですが……」

「妻は……マーシユを生んですぐに亡くなった」

「ああ、そいつは失礼を……」

「いや、いいんだ。言い訳にはならんからな。だが……私もどこかでマーシユに負い目を感じていたのかもしれない。マーシユが母親の愛を受けられないことに……」

それでも金持ちの家に生まれた以上、恵まれた環境の気はするけどな。

レベルの高い衣食住が確保され、一流の教育が効率よく受けられ、そのまま長期的に不労所得を得られる環境が整備されている。

生まれたときから勝ち組だ。

まあ、所詮は外野でしかない俺に全ての事情がわかる訳もないか。

「ダンディリオン君とチコリ君が亡くなったときも、私はマーシユの目を塞ぐことしか考えていなかった。だから、早急にマーシユを海外へ……。正直なところ、警察や司法が忖度するであろうことにも考えは及んでいたのだ。目を背けていたのは、私の方だ」

セントジョーンズ卿は俺の肩に手を置いてじっと見据えてきた。

「私は、父親として失格なのかもしれない。だから……私の代わりに必要なことを言ってくれた君には、本当に感謝している」

「よしてください。そんな口クなもんじゃないですよ」

俺は手を振りながら否定した。

「セントジョーンズ卿……俺にもね、事情ってもんがあるんです。俺は何としてもブラッディマンティスをぶつちめなければならぬ」

「うむ」

「そのためには、あらゆる手段を講じるつもりです。言つては悪いが、俺にとつてマーシユはトロット楽団の面々やナツメッグ博士より優先順位は低い。最悪、囮にすることも視野に入れています」

「……ふふっ」

自分の都合をはつきりと伝えたはずだが、セントジョーンズ卿は僅かに含み笑いした。

「何です?」

「そうは、ならんさ」

首を横に振つたセントジョーンズ卿はさらに言葉を続ける。

「マーシユを囮にするのは、君の最後の手段なのだろう? ならば、そのような状況には、まずならん」

「……随分な信用じゃないですか?」

「ああ、君が有能な人材であることは十分証明されているからね。それに、本当に悪意の

ある人間は、そのようなことを自分から言わぬものだ」

お気楽なことだ……。

まあ、下手に不信感を持たれるよりはマシか。

……さて、ここでの話は全て終わった。

少し話についていけなくなっているバナラを促し、俺はマーシユの隠れ家を後にした。

「グレイ」

「ん？」

セントジョーンズ卿と別れハッピーガーランドへと向かう汽車の中で、バナラは俺に声を掛けてきた。

「マーシユは……大丈夫だよね？」

「……ああ、最善を尽くした」

一瞬、知ったことじゃないとも思ったが、できるかぎりの対策はした。あれで『グラッドファイナーレ』へ攫われたら、もうどうしようもない。

「マーシユのことは心配ない。ドン・スミスは約束を果たす男だ」

「うん」

「だが……注意したいのはコニーのことだ」

「っ！」

バナラは俺の言葉に顔を強張らせた。

緊張感を漂わせるバナラに、俺はゆっくりと噛み締めるように説明する。

「主にビークルバトルーナメントを通してだが、ブラッディマンティスは既にバナラのビークル乗りとしての有能さに目を付けている。君がこちら側に付いている以上、敵はバナラを相当な脅威と見なすだろう」

「一番の脅威はグレイじゃないかな？」

「そうかもしれないが、俺の方は身内も皆それなりに戦えるからな。」

ナツメツ博士はビークル開発者だけあって、高ランクバトラーとの一騎打ちはともかく、並の腕自慢など工房ビークルで一捻りだ。

マルガリータもそれなりにビークルで戦えるし、ジンジャーに至っては元チャンピオンだ。

「バナラと最も親しい人間で、唯一まともな戦闘能力を持たないのはコニーだ。狙われる可能性が一番高いと思う」

少し苦しいこじ付けだが、バナラもいざ事が起こったときの重大さは実感できている

らしく、自然と拳を握り締めていた。

「きちんと守ってやれよ」

「ああ、もちろん」

力強く頷くバニラの肩を叩き、俺は再び車窓に視線を移した。

……今更だが、ゴールドーン行きが亡くなった以上、しばらく時間は空くな。

ブラッディマンティスの油田の占拠は避けられないだろうし、それまで何をしようか

……?

まあ、ハッピーガーランドのロブスター亭に戻ってから色々考えるか。

そろそろ鉄道も復旧するし、意外とやることはあるかもしれない。

「グレイ」

「ん?」

「マーシユ、一体誰に狙われているのかな?」

「……さあな」

95話 団欒

いつもと変わらないロブスター亭の朝。

俺が一階に降りると、店主のダステインがマジヨラムを呼び止めていた。

「マジヨラム、トロット楽団宛てに郵便が来てたよ。ほれ」

「ああ。ありがとう、ダステイン。……鉄道便か。仕事の依頼かも」

マジヨラムがテーブルに書類を広げると、他のメンバーたちもわらわらと彼の席に集まってきた。

「どどこどこ？ 次はいよいよ王都に進出かなあ」

「もう、バジルつたら……。でも、そろそろ大都市から依頼が来てもおかしくないわね。

この前のスームスーム公演では、遠方から来た人も遊覧船に乗っていたでしょうし……。コニーの歌声は他の街でも評判になっているはずだわ」

「そんな、セイボリーこそ……」

「僕もコニーの歌声は素敵だと思うよ。他の街に伝われば、きっと国中の人気者さ」

「ちよつと、バナラ……／＼／＼」

「あらあら、二人は相変わらねえ」

「ぼ、僕はセイボリーが一番素敵だと思っているからね！」

楽団の面々は相変わらずドタバタと喧しいが、そんな喧騒の中マイペースに書類を読み終えたマジヨラムが顔を上げた。

「残念だけど、大都会ではないかな。ミームー村だよ」

「んん？ ミームー村って、確かピジョン牧場の……」

「そうだよ。スキートル湖の向こう側の漁村だね。その村長のマルローさんって方から、コンサートを開いてくれないかって依頼が来たんだ。日取りは……今すぐでも大丈夫だって」

俺に顔を向けるバジルに、マジヨラムが説明した。

そうか……。

原作でもミームー村のコンサートイベントがあつたが、このタイピングで来るか。

ウズラ山トンネルの盗賊団が壊滅し、ネフロくハッピーガーランド間の鉄道が復旧した。

既に補修作業と安全確認は終わっており、今では普通に列車が運行している。

早速とばかりに、俺は鉄道便で廃屋のシスターとピジョン牧場のエリツヒに手紙を出

した。

シスターに出す手紙には、リックに持たせるドン・スマイス宛ての俺が書いた紹介状と、ロバートの名前が載ったガーランド大学の入学許可証を同封した。

エリツヒには鉄道便が復旧した旨を伝えたと、ピートに送りたいというチーズが俺宛てに届き、めでたくパシリに選ばれた俺は先日ヒバリ田園地帯へお使いに行ってきたところだ。

あのがき……運送費の節約に俺を利用するとは、なかなかいい根性をしてやがる。

因みに、原作にウズラ山トンネルのイベントの報酬は、ネフロくハツピーガーランド間の鉄道の復旧——ゲームシステム上、それだけでも十分な恩恵だが——と記念プレートが貰えるだけだが、今回は鉄道会社から謝礼金が支払われた。

謝礼金に関しては鉄道会社側からの忖度なのだろうが、重役クラスが一介のビークル乗りの機嫌を取ってくるだけでも、セントジョーンズ卿の名前の影響力が垣間見える。

まあ、セントジョーンズ卿が鉄道会社のケツを叩いてくれたおかげで復旧が早まったわけで、謝礼金も俺にとっては端金だがバニラにとってはいい小遣い稼ぎになったので、悪いことはないか。

何はともあれ、今はネフロ方面へ行くのに砂漠を渡る必要は無く、滞っていた物流も回復している。

「それにしても、随分と急な話だね」

「どうやら、以前から駅開通記念に何かイベントを催す計画はあったらしい。それが、駅の完成直前にトンネルが封鎖されて、立ち消えていたみたいだね」

「ああ、それでようやく鉄道が復旧したから、って感じか」

マジヨラムの説明にバジルは納得した。

確かに、原作では無理やりビークルバトルーナメント前に駅を開通させても普通に楽団を呼べるが、現実ではそうもいかないよな。

「他の街とも公演の調整はしているけど、予定が迫っているものは無いし……新曲の『Just shout it out』も出せるくらいには合わせられているね。僕はこの話を引き受けようと思う。皆はどうだい？」

「……ああ、俺の予定は大丈夫だ」

少し迷ったが、マジヨラムの提案に俺は頷いた。

原作のことを思い出せば、ここから世界は大きな脅威に見舞われ、ゲームのストーリーもエンディングに向けてほぼ一直線だ。

だが、今回はマーシユのことをドン・スミスに任せて早めに一区切りつけ、ブラッディマンティスへの妨害もジンジャーやファーガスンと協力して細々と進めて時間を稼いでいる。

どちらにせよ、ブラッディマンティスが動き出すまでやれることは無いので、今から一つ公演が入ったところで問題ないだろう。

全ての楽団メンバーがマジヨラムの案を承諾し、俺はさらに付け加えるように提案した。

「今回は時間もあるからな。ミームー村駅へ行くにはネフロとピジョン牧場も通ることだし……皆ついでにローズマリーさんとナツメッグ博士にも会っていくといい」

「そうだね！ お母さん、皆に会えたらきつと喜ぶよ」

「賛成だ。僕もコニーのお母さんの具合が気になるし、博士にビークルを見てもらおうかな」

「いいわね！ ローズマリー、元気にしてるかしら……？ それに、ネフロの街も復興が進んでいるだろうし、再建した博物館でも見に行こうかしら」

「あわわ……セイボリー、博物館なんて行くの？ そんな難しそうなところ……」

「決まりだね。今回はのんびりで行こう。でも、初めての場所だから当日入りは不安だ。公演の二日前くらいにネフロへ行つてゆつくりして……ミームー村には前日入りで。

皆、よろしくね」

そんなわけで、トロット楽団は再びネフロ方面へ赴くこととなった。

そして、あつという間にミームー村でのコンサート日が近づいてきた。

例によって、俺たちが汽車でネフロ駅に乗りつけると、俺たちを見つけたネフロの住民たちから歓声が浴びせられた。

今回はネフロの街での公演というわけではないが、以前のキラエエレファント団の襲撃のことも影響しているのだろう。

最前線でビークルを駆って戦ったトロット楽団の面々は、なかなか英雄扱いだ。

「あはは……何だか、こそばゆいな」

「バジル、頑張ったものね。危険な盗賊団を相手に、一步も退かずに戦って……皆、あなたのこと勇敢だっと思ってているわよ」

「ほ、本当!? セイボリーもそう思うかい?」

「ふふっ……」

セイボリーは曖昧に微笑んだ。

まあ……バジル君は早々に『ワイルド・ルースター』のミサイル弾に吹っ飛ばされ、大破していましたけどね。

そんなことを考えていると、コニーが俺たちを呼ぶ声が聞こえた。

「皆、何してるの? 早く早く!」

「うあつと! コニー……」

バナラの手を引きつつ手招きするコニーに従い、俺たちは彼女の家に向かった。

「お母さん」

「あら、コニー。お帰りなさい。ネフロに戻っていたのね」

「うん、ただいま。鉄道が復旧したからね」

「そうらしいわね。皆、忙しそうにしているわ」

家に中からコニーの声が聞こえるが、俺たちはまだドアの外で待機だ。

「こっちには、お仕事で？」

「そうなの。明日、ミームー村でライブなんだ。前に話したよね？ ピジョン牧場の湖

の向こうにある村で、最近になって鉄道が通ったところ」

「ええ、覚えているわ。あなたが買って来てくれたチーズ、美味しかったわね」

「うん、それでね……実は今日、楽団の皆も来てるんだよ」

「え？ 皆って……？」

ここでコニーは家の外の俺たちを呼んだ。

待つてましたとばかりに、俺たちはコニーの家へ順番に足を踏み入れる。

大所帯でゾロゾロと扉を潜る光景はなかなかシユールだが、とりあえず先頭の俺から家主に挨拶をしていった。

「お邪魔しますよ」

「こんにちは、ローズマリーさん」

「どうも、ご無沙汰してます」

「やつほー、ローズマリー！ 元気だった？」

「久しぶりね、ローズマリー」

それほど広くないアパートなので、室内はすぐに寿司詰め状態となった。

しかし、楽団メンバーには懐かしい顔も居たようで、ローズマリーは目を輝かせた。

「まあ！ 皆、久しぶりに……少し見ないうちに大きくなつたわねえ」

何だか年寄りっぽいセリフだが……楽団メンバーにしてみれば、こそばゆいだろうな。

原作でダンディリオンが言っていた通り、ローズマリーはコニーの母親というだけでなく皆の母親のようなものだ。

俺とバナラ以外の全員が彼女から音楽のイロハを教わっている。

「マジヨラムは何だか貫禄が出たわね。前にも増して恰幅が良くなつたような……」

「あはは、勘弁してください」

「セイボリーなんて随分と色っぽくなつちやって……」

「もう！ イヤだわ、ローズマリー。老けたってことお？」

「バジルは……そんなに変わってないわね。あんまりセイボリーに迷惑かけちゃダメよ」

「か、変わってない!? 嘘でしょ……」

そんな具合に、ローズマリーは懐かしい面々を見回して順に声を掛けていった。声が弾んでいるあたり、サプライズ的な登場の効果はあったようだな。

「——それでね、トーナメントの準決勝はバニラとグレイの一騎打ちになったんだ」

「で、最後はグレイが前年度のチャンピオンまで倒して優勝！ 祝勝会も凄かったんだよ。シユナイダーとか、凄い人がいっぱい来てさ！」

「ふふっ、そうなのね」

子どものようにはいしゃいで喋り続けるコニーとバジルに、ローズマリーは穏やかな表情で相槌を打っている。

狭いアパートの一室だが、それぞれ思い思いの場所に腰掛け、壁に寄りかかり、ローズマリーを囲むようにして談笑した。

そして、ハッピーガーランドに戻った後の出来事——主にピークルバトルトーナメント関連——の話が粗方終わると、ローズマリーは俺たちを軽く見まわして口を開いた。

「ところで……やっぱり、フェンネルは来ないのね」

「あ、うん……」

ローズマリーはフェンネルの脱退とそれに伴うバナラの加入の件を知っている。

「どうやら、スームスームからネフロ方面へ戻ってきた際に、バナラとコニーが色々と説明したようだ。」

喧嘩別れしたわけではないが、やはり今まで一緒にやって来た人間が離れてしまったことには皆思うところがある。

「えつと……ほら、フェンネルはああいう奴だから！ 『俺の音楽のために楽団を抜けたんだ』なんてカッコつけて言っちゃったから……その内、フラツと戻ってくるよ！」

「う〜ん……まあ、その可能性が無いわけじゃないわね」

バジルの苦しい取り成しとセイボリーの相槌で、再び部屋を静寂が支配した。

ローズマリーも僅かに悲しみを含んだ苦笑を見せたが、それ以上は何も言わなかった。

彼女も何となくフェンネルの音楽の方向性の違いについては気づいていたのだろう。

そして、あともう一人の足りない人物ダンディリオンについては、誰もが言及することを避けていた。

「あ、そうそう！ トンネルのことだけどね、これもグレイとバナラが盗賊団をやっつけて路線を復旧させたんだ。ね、コニー」

「う、うん。二人が盗賊退治に行つてたつて聞いたときは、びっくりしたけど……」

再び話し始めたバジルとコニーのおかげで、微妙な空気は霧散した。

俺たちは再び他愛のない話をして時間を過ごす。

そんな具合に談笑していると、扉をノックする音が聞こえた。

「ちよいと、ローズマリィ。随分と賑やかそうじゃないか」

「あ、おばさん」

「おやまあ！ こんな大所帯で……」

コニー母娘の隣人のおばさんが来たことで、ただでさえ狭いアパートの一室がさらに窮屈になった。

「へえ、今度はミームー村に……相変わらず、あんたたちは忙しいねえ。でも、大したもんだよ」

「いえいえ……今回はのんびりしている方ですよ」

マジヨラムは今回俺たちが来た理由を隣のおばさんに説明した。

「ネフロにはいつまで居るんだい？」

「明日にはミームー村へ向かう予定です。前日入りですから、そんなに急ぎではないのですが、その前にピジョン牧場にも寄りたいので……」

「そいつはまた忙しないね」

今回、ナツメツグ博士にはコンサートの件を伝えていない。

ミームー村へ向かう途中で汽車を降りライブに誘う予定だが、楽団メンバー全員で押し掛けるのは、ローズマリーのとくと同じく完全にサプライズだ。

そして、マジヨラムの話をしばらく聞いていたおばさんは、何か名案を思いついたような表情で口を開いた。

「よし、今日の夕食はあたしがご馳走してあげるよ。皆も食べていきな」

「えっ！ いいの!？」

「でも、この数は……」

「若いモンが遠慮なんてするんじゃないよ！ 大舞台を控えてるなら、しっかりと食べて力を付けなくちゃね」

手放しで喜ぶバジルとは対照的に、セイボリーはメンバーを見回して人数の多さを理由に断ろうとしたが、おばさんは強引に押し切った。

「ただ、この人数だと今ある食材じゃ足りないね。ちよつと遅めだけど、買い出しに行ってくるよ。マジヨラム、グレイ、手伝っておくれ」

「もちろんだよ、おばさん」

「はいはい、荷物はお任せを」

まあ、ガタイのいい野郎どもの出番ですわな。

唐突な思いつきに続いてどんどん話が進んでいく。

「よし、行くよ。あんたたちも、あんまり騒ぐんじゃないよ。まだローズマリーは病人なんだからね」

「は〜い」

能天気なバジルを尻目に、俺とマジヨラムはフライパンで追い立てるようにして指示を出すおばさんに従い、購入した大量の食材を家に運び入れる。

俺も下拵えを手伝い、二時間ほど後。

シチューや鶏のソテーやシラサギ芋の煮物などを中心に、いくつもの鍋を満たす大量の料理が完成した。

「ほれ、たんとお食べ」

「うわあ！ 凄い。いただきま〜す」

「もう、バジルったら……」

「んんっ！ 相変わらず、おばさんの料理は美味しいね」

「そうね。いつも、ありがとうね」

遠慮なく真っ先にフォークを伸ばしたバジルに続き、コニーも料理を頬張って舌鼓を打った。

ローズマリーは比較的あっさりしたもののしか口にしないが……この世界でも、きちんと回復するといいな。

因みに、フライパンおぼさんの料理は俺の感覚でもかなりハイクオリティだった。

正直、一世紀も前の料理の味とは思えない。

俺もナツメグ邸に住んで料理の腕は上がったはずだが、やはり主婦は年季が違うということがあるか。

「あ、バナラ、口元にソースが付いてるよ」

「え？ どこ？」

「待って、私が取ってあげるから……」

「わ、わっ！ こ、コニー、実のお母さんの前で……」

「ふふっ……ご馳走様ね、お二人さん」

「まあまあ！ 若いっていいわねえ」

「ええ、本当に……」

「ふむ、さすがに産地だけあって質が段違いだね。保存に向いているとはいえ、うちの店ではここまでのシラサギ芋は……」

賑やかな連中と囲む食卓に美味しい料理……こういうのも悪くないな。

……何故か、高い肉と調味料を俺が買わされたことは未だに解せないが。

96話 ナツメツグ邸の一コマ

翌日、ネフロ駅に集合した俺たちは、下りの汽車に乗ってピジョン牧場へとやって来た。

お世辞にも大きいとは言えないピジョン牧場駅のホームから、辺り一面を覆う牧草地へゾロゾロとビークルを進める。

「うわあ、ピジョン牧場ってこんなだったか。懐かしいなあ。いつ以来だろう?」

「博士に作ってもらったステージ装備、あれを最後にメンテナンスしてもらって以来じゃないかな」

「げっ! こんなボロボロになる前に、もっと早く見せに来て、怒られるかも……」

「ははっ、違くないね」

「バジルとマジヨラムの言う通り、彼らがナツメツグ博士に会うのは、本当に久しぶりだろう。」

「随分、ご無沙汰しちゃったわね。博士、元気かしら?」

「きつと、ご飯が不味い不味いってブーブー言ってるよ。行き倒れてたりして!」

「ここらここら。でも、確かに……最近、グレイがちよくちよく空けてたし、冗談抜きで困ってるかも」

セイボリーに反応したバジルとマジヨラムが好き勝手に言っているが……まあ、俺と出会う前の博士のさもしい食料事情は、楽団メンバーたち全員が知るところとなっていたからな。

だが、博士一人でも切って焼くだけの食材なら扱えるし、最悪は以前の食生活に戻ってもらうことも……何だか、本当に孤独死しそうで心配になってきた。

まあ、ピジョン牧場にはメリー乳業の連中なんかも居るから大丈夫だと思うが……。そんな会話をしながらナツメツグ邸へと至る丘に差し掛かると、ふとセイボリーが横に視線を向けた。

「? あれは……?」

つられて俺も顔を向けると、ピジョン牧場名物のおなじみの面子が居た。

「オットー兄さん、今度こそ成功しそうですか?」

「もちろんだ、我が弟よ! 今度の「フラップフライヤー」は空中制御に重点を置いた……らしい。ビークルを正しい姿勢に保つことができれば、間違いなくいける……つてウイリーが言ってるぞ」

「うん、まあ……兄さんはそれだけ覚えておけばいいよ」

オットーとウイリー……何だか、ピジョン牧場に帰ってくるたびに彼らを見ている気がするな。

珍しく三男のエリツヒも居るが、今は休憩中かな？

「さあ！俺たちの雄姿を、その目に焼き付けるがいい！行くぞつ、とうつ！つて、

のあ！前に羊が……ぶべっ!!!」

「ああつ、兄さん!？」

勢いよく「フラップフライヤー」を加速させたオットーは、跳び上がる直前に急ハンドルを切った。

彼らの実験場は牧場のナツメグ邸前の丘の傾斜だが、湖沿いは低めの柵があるだけの切り立った崖だ。

当然、あの場所でもバランスを崩せば、柵を突き破って……後はお察しだ。

「のおおおおおおおおおおおおおおお!!」

【フラップフライヤー】は見事に崖下へ落下した。

スクラップをぶちまける音に次いで、間抜けな噴出音とともに黒煙が上がるが……まあ、オットーがビークルの下敷きになっているわけでもなし、池ポチャもしていないので特に問題は無いだろう。

あいつならすぐに復活する。

「前にも増して、凄い人たちだね……」

マジヨラムの一言が全てを物語っているな。

あの兄弟がテストを繰り返すようになったのはそれほど前のことではないので、ご無沙汰の楽団メンバーとはそれほど面識が無いか。

「あれは、一体……?」

「大道芸人さ」

「……そう」

セイボリーは再び怪訝な表情を見せたが、俺はとくに気にした様子もないように装い、そのまま皆を促して丘を登った。

そして、俺たちは丘の上に佇む特徴的なフォルムの工房を隣接したナツメッグ邸へと到着した。

俺はナツメッグ邸の正面玄関の扉を開き、トロット楽団の面々を家に招き入れる。

そのまま家の中へと足を進めると、ちょうど休憩中らしきナツメッグ博士が目に入ったので声を掛けた。

「博士、ただいま戻りました」

「む、グレイ、帰って……おお、何じゃ!? お前さんたちも来たのか!」

俺の後ろのトロット楽団の面々を視認した博士は目を丸くした。

バナラとコニーはトーナメント前にも顔を合わせているが、バジルとマジヨラムとセイボリーは懐かしい顔ぶれだろう

「へへっ、今回はサブプライズだよ」

「どうも、ご無沙汰してます」

「お久しぶりです、ナツメツグ博士」

「おお、よく来たな。バナラとコニーも。まあ、座りなさい」

楽団メンバーがゾロゾロと部屋に入りテーブルを囲み始めるなか、俺はキッチンスペースに移動して飲み物を用意する。

帰ってきて早々に忙しないが、このキッチンは完全に俺のテリトリーだからな。

濃いめに淹れた紅茶を耐熱ピッチャーに移し、氷を満たしたコップに注いでゆく。

少し強引にアイステイーを作りながら、俺は窓の外に見える「クラフトマンシップ」を示して尋ねた。

「マルガリータ、来てるんですか?」

「ああ、来ておるぞ」

何故か眼鏡の奥にニマニマとした笑みを浮かべているが、気にしないことにしよう。

そして、ダイニングに居る人数より一つ多くアイステイーを用意したところで、工房と繋がる扉が開いた。

「ナツメツグ先生、お客ですか……あ、コニー！」

「マルガリータ！ お邪魔してまゝす」

「あら、あなたがマルガリータね。コニーから聞いてるわ。よろしく、セイボリーよ」

「あ、初めまして……うわあ、噂通り凄い美人さんだね」

「やだもう！ あなただつて素敵よ」

以前と変わらないマルガリータの姿があつた。

洗いざらしのシャツに作業用の前掛け、飾りつきの無い髪もいつも通りだ。

にこやかに挨拶を交わす女子たちに少しほっこりしつつ、俺はアイステイーを配つた。

ちやうど人数分びつたりだ。

そして、マルガリータの前にコップを置くとき、彼女は若干ぎこちない動作で俺を見上げてきた。

「……お帰り」

「ああ、ただいま」

俺が返答すると、マルガリータはフイツと顔を背けてしまった。

何か言いたげな表情だが……。

しかし、俺が口を開く前に、マジヨラムがミームー村での公演の話 시작했다。

マルガリータも自分の故郷の名前が出たことで、そちらの話に耳を傾ける。

そして、ナツメッグ博士も招待する旨が伝えられると、博士は嬉しそうに頷いた。

「そうかそうか。せっかくの誘いじゃ。わしも見物させてもらおうとするかの」

「やった！ 大歓迎だよ、博士」

バジルが喜びの声を上げるなか、コニーはマルガリータに向き直った。

「マルガリータも見に来るよね？」

「うん、そうだね。コニーの歌、あたしも聞かせてもらおうかな」

こうして、ナツメッグ博士とマルガリータはミームー村駅の開通記念コンサートに参加することが決まった。

あとは……メリー乳業はじめピジョン牧場の連中も暇な奴らを誘うか。

さつきは声を掛けそびれたが、ピートから預かった紙トンビをエリツヒに渡すついでに話しに行けばいい。

「……………」

「ん？」

ふとマルガリータを見ると、彼女は再び俺の顔をジッと凝視していた。

「もちろん、俺も出るぞ。サックスで全曲乗る予定だ」

「べ、別に！ そんなの、聞いてないし……」

マルガリータは口を尖らせて再びそっぽを向いてしまった。

「どうやら、見当違いだったらしい。」

「やけに冷たいが、何か気に障ることしたかな……？」

俺とマルガリータが微妙な空気になるなか、ナツメツグ博士が何かを思い出したような様子で口を開いた。

「おお、そうじゃ。お前さんたち、ピークルの手入れはちゃんとしとるか？ 久々に調子を見てやろう」

ステージバックやステージシールドアームはナツメツグ博士謹製のパーツだ。

街のピークル修理場ではオリジナルパーツの細かい部分は見てもらえないので、博士にメンテナンスをしてもらった方がいいだろう。

「バニラ、お前さんも色々とピークルを酷使しているだろう。ついでにそつちもメンテナンスしてやる」

「お願いします」

「うむ。ただ、今は工房の方がとっ散らかっておるのでな。ピークルは裏の資材置き場の方に回してくれ」

楽団メンバーの皆がビークルを移動させるため外へ向かうなか、マルガリータは俺の手を掴んで工房の方へと誘った。

「来て」

「どうした？」

何の気なしに、トラブルの有無を聞いた程度 of 感覚だったが、マルガリータは形のいい眉を顰めて険しい表情を浮かべた。

「……用が無きゃ、あたしと居るの嫌なの？」

「っー」

根は理知的な彼女にしては、ヤケに感情的に突つかかる物言いだが……彼女の顔を直視した俺は、思わず固まってしまふ。

マルガリータの顔に浮かんでいたのは、苛立ちとも嫌悪感とも悲しみともつかない複雑な表情だった。

吐き捨てるような声とは裏腹に、俺の腕を固く握り締めるマルガリータの手からは、彼女の本心が一瞬だけ垣間見えた気がした。

今日は結構なツンツンモードだったが、俺が知っているマルガリータの気質といえ……気が強くて、どこか抜けていて、斜に構えていて、素直じゃなくて……。

思えば、コニーやナツメツグ博士に対してはともかく、俺に対してだけはちよいちよいキツく当たってくる気がしていた。

本心とは裏返し of 行動をとってしまふとは何ともベタだが、さすがにこの状況で気付かないほど鈍感ではない。

本人はあまり意識していないようにも見えるが……マルガリータが放った一言は、俺が彼女の気持ちを理解するのに十分なものだった。

「まあ、いいよ。ほら、ピークル見せて」

しかし、俺がフリーズしている間に業を煮やしたマルガリータは、俺からキーを引つたくつて家を出ていってしまふ。

追いかけるようか迷っている内に、マルガリータは工房の整備スペースへ「ジャガーノート」を乗り入れてきた。

どうすべきか戸惑ったが、とりあえずは俺もマルガリータが居る工房へ向かう。

「大分、酷使したね。ミスリル装甲とはいえ、メンテナンスはしっかりしないと。駆動系もこの前調整したけど、念のため見ておくよ」

どうやら、「ジャガーノート」は博士ではなくマルガリータが診てくれるようだ。

よく見ると、工房には組み立て途中のピークルパーツやエンジンなど機器類が散乱している。

それほど珍しいものではないあたり、博士の研究に直接関わるものではなさそうだが……なるほど、そういうことか。

工房が散らかっている理由とは、マルガリータの勉強のためだったか。

俺が居ない間も、マルガリータはナツメツグ博士の教えを受けて研鑽を積んでいたようだ。

俺は気まずい沈黙に居心地が悪くなってきたが、マルガリータは黙々と作業を進めている。

スペースを確保した工房に「ジャガーノート」を搬入すると、脚立に登ってボディ周りとエンジン系統をチェックし始めた。

流れるようにエンジンの各部を調整していくあたり、もう完全に整備士としての技術や知識でも抜かれたな。

そうこうしている内に、マルガリータは「ジャガーノート」の調整を終えた。

あつさりしたものだが、一台のビークルの修理や調整に掛ける時間などこんなものだ。

特に、優秀な整備士が慣れた機体の手入れをする場合など、要する時間は一瞬だ。

「終わったのか？」

「あ、うん。一応ね……」

「そうか」

マルガリータの返答を聞いた俺は、立ち上がって彼女を真っ直ぐに見据える。

彼女は脚立の上なので、俺よりも若干目線が高い。

「あの、さ……」

「つ！ と、とりあえず応急的には……えっと……」

しかし、俺が口を開くとマルガリータは逃げるように捲し立て始めた。

慌てて顔を逸らすようにして「ジャガーノート」に向き直る。

「あ、武装の方は……チェーンガンには問題なさそうだね。軽い分解掃除と組みなおしだけでいいかもね」

「なあ」

「ブレードは本格的な打ち直しが必要だね。これは博士に頼んでもらってもいい？ あ

たしじゃ手も足も出ないよ。あと……」

「マルガリータ」

「……………何？」

距離を詰めて食い下がる俺に、マルガリータは面倒くさそうに顔を上げた。

話を遮られて機嫌を損ねたというより、取り繕っているような表情だった。

そして、彼女が黙々と作業をしている間に、居心地の悪い状態で待っている間に、俺の腹も決まっていた。

「君と居るの、嫌じゃないさ。できればずっと、傍に居てほしい」
「っ！」

迷った末に俺が選んだセリフがこれだ。

我ながら、過ぎた会話の内容を掘り起こして、随分とコミュ力が落ちている気もするが……極度の緊張状態においては、誰しもこんなものだろう。

だが、大切なことは、きちんと伝えた。

そして、息を呑んだマルガリータは、一瞬だけ不機嫌そうな表情を浮かべたものの、はつきりと答えた。

「……うん。あたしも、あんたと一緒がいい」

目を逸らしたマルガリータの顔がみるみる赤くなっていく。

だが、彼女の声ははつきりと俺の耳に届いた。

はぐらかさず真剣に向き合ってくれた。

横目で俺の方を窺う彼女の顔は、何とも美しく可愛らしくそそられる。

……これ、そういう意味と捉えて大丈夫だよな？

気まぐれとか、冗談とかじゃ……いや、不器用なマルガリータに限ってそれはないか。

「つて！ 何言ってるのさ！ 馬鹿じゃないの！」

そんなことを考えていると、マルガリータは俺を振り払うようにして捲し立てた。何とも短いデレだったな。

「なし！ 今のなし！ 大体、あんたは……っ！」

「危ない！」

次の瞬間、マルガリータは脚立の上でバランスを崩した。

俺を蹴飛ばそうとした動きが原因のようだが、だからと言って無視するわけにはいかない。

俺は慌てて転倒しかけた彼女を支えようと手を伸ばした。

いい香りがする。

オイルと煙の匂いに混じって、微かにシャンプーの香りが俺の鼻腔をくすぐった。目の前には顔を赤らめる絶世の美女。

腕を回して体を密着させている姿勢……前世の満員電車だったら、絶対に言い訳がでない状況だ。

そして、俺の左手には固めのシャツの生地越しにフニヨンフニヨンの感触が……。

「っ……………」

「す、すまん！ その……っ！」

俺は慌てて手を離れた。

しかし、次の瞬間、俺は更なる強烈な出来事に脳みその回線がショートしかける。マルガリータの顔が……とても、近い。

そして、俺の口元に柔らかく燃えるように熱い物体が押し付けられた。

「んんっ……」

「う、む……」

夢、じゃないよな？

マルガリータの方から、口づけを……。

唇に感じる柔らかさと熱は何とも強烈で、脳内の官能系が一気に刺激される。

「んっ……」

「……」

数十秒、いや数分はそうしていたか？

マルガリータはようやく俺から顔を離れた。

情熱的なキスだったが、技術など欠片も無かった。

唇を食るように合わせただけで、歯も当たった。

しかし……最高に幸せな感覚だ。

目の前の美しい女性の潤んだ瞳が、スツと通った鼻筋が、真つ赤に上気した頬が、軽くウエーブがかかった髪が、オイルが付着し少し荒れた手が……ぼつてりとした唇が、とても愛しい。

しかし、マルガリータは限界をばかりに目を逸らすと、俺を突き飛ばすようにして体を離れた。

「ほらー！ 邪魔だよー！ あんたは整備じゃ役に立たないんだから……さっさと出ていきな」

俺は成すすべなくマルガリータに工房を追い出された。

もちろん、腕力や体重の差からすれば抵抗はできたが、そんな気は起きなかった。

背中で扉が閉まり、内側からガチャッとカギがかけられた音を聞きつつ、俺は自分の唇を指先でなぞる。

「今の……」

何とも、現実感が無い出来事だった。

それから俺は、楽団メンバーと合流しミームー村に向かいライブの準備をしたわけだが、メンバーやミームー村の住民とどのような会話をしたのかよく覚えていない。

そして……翌日のミームー村での駅開通記念コンサートは、全く演奏に集中できなかった。

97話 油田占拠

伝書鳩が来たのは、ミームー村のコンサートが終わった翌日だった。

鉄道便ですらもどかしいほどの緊急事態。

差出人はガーランド警察のファーガスン警部。

この時期にナツメグ邸の俺宛てにきているあたり、内容は決まっている。

予想通り、ガラガラ砂漠の油田がブラッテイマンティスに占拠されたとの知らせだった。

ハッピーガーランドでは既に市民軍の募集が始まっているらしい。

俺たちも至急コンドル砦に来てほしいとのことだった。

俺はまずメリー乳業はじめピジョン牧場の面々に、ハードチーズなどの保存食の確保を頼んで回った。

近いうちに必要となるであろう食料物資の調達の準備を整えたわけだ。

続いて、トロット楽団メンバーを全員集め、事情を詳しく説明していく。

「ネフロ観光どころじゃなくなっちゃったわね」

「そうだね、まさかこんな事態になるなんて……とりあえず、僕たちもできることをしようか」

トロット楽団メンバーは一旦ハッピーガーランドに戻り、バジルとセイボリーはダンディリオンに今回の件を伝えに行き、他の面々はそのまま俺に同行して砦へ向かう運びとなった。

昨日の今日で忙しいが、緊急とのことなので、最低限の用事だけ済ませてハッピーガーランドに向かう手筈だ。

「では、今日中にハッピーガーランドに戻るとしよう。午後の汽車に乗るから、それまでに各自準備を整えておいてくれ。集合はネフロ駅の改札で。マジヨラム、すまんが切符の手配を頼めるか？」

「ああ、任せてくれ」

「頼む。……コニーはローズマリーさんに会っていけ。心配させないのは無理だろうが、せめて状況をきちんと説明しておくように。バナラも一緒に行つてやれ」

「うん。ありがとう、グレイ」

「わかった」

俺は最後にセイボリーとバジルに向き直つた。

「バジル、セイボリーを一人にするなよ。ネフロはまだ大丈夫に見えるが、市民生活の単

位で大きな混乱が発生すれば、ここも治安が悪化する。女性の一人歩きは危険だ」

「もちろんだよ！ セイボリー、いつでも僕がついてるからね」

「え、ええ。ありがとう、バジル。でも、無理しないでね」

本音はセイボリーを単独行動させたくないだけだが、バジルに働きを期待するものも……まあ、大つぴらに妙なことをさせないだけの効果はあるかな。

出発の直前、俺はといえば、地下道にあるジンジャーのアジトに来ていた。

慣れた調子で奥に声を掛けると、相変わらず髭面に飛行帽のジンジャーが姿を現す。

「グレイ、遅かったな」

「どうも。こつちも色々立って込んでしまつて……」

ミームー村でのイベントの直後にブラッディマンティスの件の知らせだ。

ガラガラ砂漠決戦の前に顔を合わせておきたいとは思っていたが、結局ジンジャーと会うのはハッピーガーランドに戻る直前となつてしまった。

「まずは、ビークルバトルトーナメントの優勝おめでとうと言つておこう」

「ありがとうございます」

どうやら、トーナメントの結果に関しては、既にジンジャーも情報を入力していたようだ。

俺が前年度の覇者エルダーを倒したことも知っていた。

「先にピジョン牧場の件を報告しようか。彼らが無事なのは知っているだろうが、詳細も気になるだろう?」

「ええ、お願いします」

俺がトーナメントやスームスーム行きで忙しくしている間、ジンジャーは約束通りピジョン牧場を守ってくれたようだ。

当然、ブラッディマンティスの連中は漏れなく返り討ちで、死骸は野鳥か野犬の餌だ。ナツメッグ博士の設計図には何事も無く、メリー乳業も泥棒が来たこと自体知りもしない。

さすがは元チャンピオンだ。

迅速で正確な素晴らしい仕事だ。

「さて、エルダーの件だ。奴の不敗神話は崩壊したわけだが……ブラッディマンティスはやはり動き出したか?」

「ええ、そのことで一つ重要な話が……」

俺はブラッディマンティスがついに油田の占拠に動いたことをジンジャーに伝えた。

案の定、ジンジャーはその件に関しては初耳だった。

ハッピーガーランドのニュースがネフロに届くまで、さらにジンジャーが情報を入力

するまでには若干のタイムラグがある。

本来なら、ジンジャーが油田の話を知るのは、もう少し後になっていたことだろう。

「君の予想と比べてどうだ？　連中の動きは」

「推測通りか……気持ち遅めくらいですね。ジンジャーが奴らを始末してくれたことも効いているでしょう」

「そうか。私の行いも連中への妨害工作にはなったか」

「ええ、改めて感謝します。俺の家族を守ってくれて、ありがとうございました」

頭を下げた俺は、さらに言葉を続けた。

「ジンジャー、あとは俺たちの仕事です。連中はガラガラ砂漠決戦と次の一手あたりに全力を注いでくるはず。ここからは俺たちに任せて、身を隠してください。このままアジトで息を潜めるか、どこかにガラを躲すか……」

「そうか。私はもうお役御免か」

若干、皮肉っぽい言い方だが、ジンジャーが本気で悪い感情を持っているわけでないことは俺にも分かった。

何だかんだで、彼とは結構長い付き合いだ。

そのくらいは読み取れる。

「全て片付いたら、またゆっくり話しましょう。一杯奢りますよ」

「ああ、楽しみにしておく」

そして、ジンジャーのアジトを後にした俺は、皆が待つネフ口駅に向かった。

改札に集合すると、楽団メンバーの面子の中には、コニー家の隣のおばさんも居た。

俺が疑問に思っていると、おばさんはこちらにジト目を向けてきた。

「あんたたちのお目付け役だよ。何だか、無茶しそうな雰囲気だったからね」

どうやら、コニーとバナラから油田の件と市民軍の募集の話を聞いて、俺たちに同行することを決めたようだ。

確かに、市民軍ではビークル乗り以外にもメカニックや医療従事者や炊事衛生係を募集しているが……何と言うか、即決だな。

まあ、今の段階でわかるのは、大規模な盗賊団との衝突になりそうだというところからだ。

コニーやトロット楽団の若い連中が心配になる気持ちもわかる。

「ああ、ローズマリーのことなら心配いらぬよ。うちの亭主も居るし、近所の皆にも声を掛けておいたからね。滅多なことは起きないだろう」

「うん……ごめんね、おばさん。迷惑かけちゃって」

「何言ってるんだい、コニー。困ったときはお互い様だよ。そんなことより、あんたたち本

当に無茶をするんじゃないよ。ならず者をとちめたいつて気持ちにはわかるけど、自分が怪我したり死んだりしちゃ元も子も無いからね」

おばさんは些か強引にマジヨラムの「イエロー・ベア」に同乗することを申し出たが、コクピットが狭くなりそうな……ゲフンゲフン。

そんなわけで、俺たちは約一名の同行者を増やし、ハッピーガーランドへと戻ることになった。

ダンディリオンの工房に赴いたバジルとセイポリーを除き、俺たちトロツト楽団の面々は、ハッピーガーランドからガラガラ砂漠へと至る場所にあるコンドル砦へとやって来た。

砦の中では、既に巨大な陸上戦艦『ロングシンフォニー』の建設が始まっている。

まだ枠組みすらできておらず、前世の戦艦や空母に比べれば小柄な部類に入らうが、近くで見るとなかなかに厳つい巨大兵器だ。

まだコンドル砦へと移動してきたバザーや志願兵の数は少ないが、既に砦は戦時中のような様相を呈している。

ガーランド警察から派遣されたピークル部隊が所々で警備に立ち、なかなか物々しい雰囲気だ。

忙しく動き回るキャラバンピークルをホクホク顔で眺めるデルロツチ貿易の社長デルセンだけが不釣り合いだな。

おばさんは早速とばかりに炊き出しの調理スペースに乗り込み、コニーも一瞬迷った後にバナラと二言三言交わしておばさんの後を追った。

そんななか、俺とマジヨラムとバナラに声を掛ける存在があった。

「やあ、よく来てくれたね」

市民軍の司令官に就任した、ガーランド警察のファーガスン警部だ。

ハッピーガーランドに住むマジヨラムとは元々面識があり、バナラもトンネルの盗賊団の討伐の際などに少し顔を合わせているので、ここに初対面の人間は居ない。

ファーガスンは早速本題に入った。

「グレイ君の忠告が現実のものとなったな。ブラツディマンティスに対する警戒、特に準軍事規模の戦力の配備と諜報の強化には不要論もあったが、今となっては早めに動けなかったことが悔やまれる。私もどこかで、そんな大それたことをする奴が居るはずないと、高を括っていたかもしれない」

「忠告ってほどじゃないけどな。連中の武器や金の動きを見れば、このくらいの革命じみた所業をやらかすことは予想に難くないだろう。でもまあ、ファーガスンのせいってわけでもないさ。国防や公的サービスの株主は上流階級の金持ちだ。セントジョーン

ズ卿まで動いてのこの始末であれば、最早どうしようもない話だろう」

「耳が痛いね」

フアーガスンに愚痴ったところで仕方ないので、俺は目の前に鎮座する戦艦に目をやった。

「市民軍つて割には、なかなか立派な装備じゃないか」

「ああ、陸上戦艦『ロングシンフォニー』だ。元々は砂漠地帯の制圧用に軍の決戦兵器として設計されていたものだよ。意欲のある技術者たちによつて、一部パーツは途中まで生産されていたが……全てを建造するには予算が足りず計画は放棄された。今回は街の防衛費と有志による援助で、建造計画の復活が決まったというわけだ。まあ、これを使わないで済むのなら、それに越したことはないのだが……」

何とも泥縄式だが、それでも原作よりはこちらの有利な状況を作っているはずだ。

ブラッディマンティスにはちよいちよい嫌がらせをしてきているし、エルダーもチャンピオンから陥落させたし、ピジョン牧場でのコソ泥計画もジンジャーによつて阻止された。

マーシユの方もドン・スミスの庇護を受けていることで、ブラッディマンティスは情報収集や攻撃に余計な労力を浪費しているだろう。

しかし、連中は原作のシナリオ通りに油田を占拠して見せた。

油断はできない相手だ。

「グレイ君、マジヨラム君、バナラ君。今の市民軍には何もかも足りない。ビークルも、物資も、人材も……君たちの力を貸してくれ」

「ああ、そのつもりだ」

「ええ、もちろんです。司令」

「僕も手伝います」

「ありがとうございます」

こうして、俺たちトロット楽団メンバーを加えた市民軍は、本格的にブラツダイヤモンドテイスとの戦いに突入した。

98話 市民軍

数日もすると、市民軍にはハツピーガーランドの住民を主とする多くの有志が集まっていた。

ピークル乗りは物資の輸送や建設作業の手伝いや警備、整備士は砦の修理場でピークルの修理や補給、それ以外にも炊き出しや軽作業に従事する人員が集結している。

セントジョーンズ病院からも看護師を始めとする医療スタッフが送られてきた。

司令部には、弁護士などの法律関係者やガーランド大学の有識者など、ブラツダイヤモンドと交渉を担当する連中が次々と出入りしている。

皆、それぞれ割り振られた仕事を積極的にこなし、ブラツダイヤモンドとの交渉および先頭に向けて着々と準備を整えている。

だが、そんな状況にあつても、文句を言うだけの連中と言うのは居るものだ。

今日も、ファーガスンのもとには大勢の市民が詰めかけていた。

「このままいつまでも燃料が手に入らなければ、再び馬車の時代に戻ってしまうよ！」
「ピークルが無かったら、私の商売も生活も成り立たないんだよ！」

「あなたがのんびりやっている間も、物価は上がり続けているのよ！」

ヒステリーじみた声を飛ばす着飾った連中を見回したファーガスンは、ゆつくりと口を開いて論じた。

「皆さん、焦ってはいけません。これまで私は和解交渉を進めてきたのです。しかし、奴らは返事を先延ばしにするばかりでした。どうやらその裏で、奴らは巨大な陸上戦艦を建造し、砂漠全体を掌握しようとしているようなのです。その後、ハッピーガーランドに攻め込んでくるという情報もあります」

「じゃ、じゃあなおさら！ ゆつくりしてられないじゃないか」

「そうです。しかし十分な戦力が無いままブラッディマンティスと戦うのは無謀です。今は陸上戦艦『ロングシンフォニー』を完成させましょう。負けてしまつては元も子もありません」

市民というか、燃料の高騰で大損をこいた投資家もどきの連中は、渋々引き下がり砦を後にした。

……好き放題言つておいて、市民軍に参加もしなければ物資や金銭の支援もしないんだな。

ファーガスンを見ると、眉間を抑えながらため息をついていた。

そこに、物資の管理責任者に就任したマジヨラムがやって来る。

「司令、どうかしたんですか？」

「ああ、皆焦っているようだ。血気盛んな市民は、今にも戦いたがっている」

それはどうかな？

連中は口だけだろう。

実際に見てみれば、奴らがどういう種族かは想像がつく。

働きのマジヨラムの爪の垢を煎じて飲ませてやりたいくらいだ。

よくよく思い出せば、マジヨラムは市民軍に参加してからというもの、皆で一番働いている。

物資の管理をして、輸送の仕事を割り振って、トロット楽団による慰問コンサートの話までまとめていた。

社畜の才能があるな。

そんなことを考えていると、マジヨラムは俺に水を向けてきた。

「どうしても、戦いは避けられないのかな？ このままだと、とんでもない数の犠牲が出てしまうよ」

「気持ちにはわかるが……まあ、望み薄じゃないか。ここまで大規模な計画を実行に移したんだ。連中もハナツから交渉に乗る気なんて無いだろう」

俺とマジヨラムがそんな会話をするなか、ファーガスンはただ険しい顔で黙ってい

た。

彼としても、部下や市民軍の無駄な犠牲は避けたいところだろう。しかし、それが状況的に難しいことは彼も重々承知しているはず。しばらくすると、ファーガスンは顔を上げて静かに口を開いた。

「……いや、まだだ。バニラ君を呼んでくれ」

炊き出し場でコニーの作ったサンドイッチを食べていたバニラは、慌ててパンを呑み込みながらやって来た。

先ほどまでのバニラはといえば、エプロン姿のコニーにデレデレとした表情を浮かべ、隣のおばさんが作った絶品ビーフシチューに目もくれず、コニーの料理を頬張っていた。

因みに、彼女のサンドイッチの出来は……何と言うか、作り手の腕前によって味が左右される料理でなくて幸いというべきか。見た目はともかく。

材料のチーズは俺が発注したピジョン牧場製だから、余程のひどい扱いをしなければ味は保障される。

まあ、バニラの奴はコニーの手料理に素材以外の美味しさも感じていたようだが……。

そんなバナラに、フアーガスンは淡々と用事を言いつけた。

「バナラ君、我々はこうして決戦の準備をしているわけだが、戦わずに済むのならそれ越したことは無い。だからもう一度、奴らと和解交渉を試みようと思う。君には交渉人の護衛をしてもらいたい。……これが本当の最後だ。交渉が決裂すれば、そのまま宣戦布告をもらうつもりだ」

重大な局面を迎えていることもあって、バナラは緊張で唾を呑み込みつつ準備に移った。

どうせ無駄足に終わることだし、そんなに緊張するほどのことでもないが……まあ、フアーガスンの手前わざわざ茶々を入れる必要は無いか。

そうこうしている内に、司令部の方でも交渉役の選定が終わったようだ。

「準備が出来たようだね。こちらが交渉人をしていただく、弁護士のクラインさんだ」
「よろしく。私の弁舌で、奴らを屈服させてみせますよ」

何とも自信満々なことで……。

そして、クラインを乗せたバナラの「カモミール・タイプⅡ」は砦を出ていった。

結果はわかりきっているが……まあ、俺も彼の帰りを待つか。

「最後通牒、か」

「ああ、そのようだな」

後ろから掛けられた声に俺は返答した。

「あれで片付くのか？」

「……まあ、十中八九ムリだろうな」

「何故だ？」

「こちらの要求は油田の占拠の解除と人質の解放、対価は金銭と恩赦くらいか？ それに対して、向こうの目的は石油利権の奪取とテロ行為そのもの。ハナツから交渉にならん。あんたもそう思わんか？」

「……そんなものか」

振り向くと、そこには予想通り傷のある仏頂面の筋肉質な男が立っていた。

ネフロのチャンピオン、シュナイダーだ。

俺の誘い通り、彼は市民軍に参加してくれた。

シュナイダーは申し分ない戦力を持つピークルバトラーだが、彼にはシルヴィアというパートナーが居る。

彼女にしてみれば、シュナイダーを戦地に送り出すなど、決して望ましいことではないだろう。

そのうえで俺の要請に答えてくれたことは、本当に感謝している。

しかし……相変わらず不愛想な奴だ。

「まあ、なんだ……改めて礼を言わせてくれ。市民軍に参加してくれたことは、本当に助かるよ」

「別にお前のためじゃない。ブラツディマンティスの件では、ネフロにも影響が出ている」

「こういう部分は変わらないな。」

まあ、頭を下げられて喜ぶタイプでないことは知っているので、俺はそれ以上の謝意を押し付けることはしない。

ふとシユナイダーの後ろを見ると、彼のビークル「マキシマム」が目に入った。

オリジナルのシールドアームに金棒アーム、遠距離武器の類は無い。

俺は「マキシマム」を一通り眺めてから口を開いた。

「戦場は広大なガラガラ砂漠になる。砦付近も遮蔽物が多い地形とは言い難い。開けた場所での運用であっても格闘仕様……相変わらず接近戦一筋か」

シユナイダーの表情は動かなかったが、意外にもはつきりと答えた。

「射撃武器はほとんど使えなかった」

「ん？ 遠距離戦の才能が無いと？」

「いや、金が無くて買えなかった。弾薬代で維持費が掛かる」

ああ、そういう……。

原作で見た話だが、彼は以前ムシヨにぶち込まれていたことがあり、出所して食っていくためにビークルバトルを始めたという経歴だった。

今のシユナイダーなら普通にスナイパーアームも長距離キャノンアームも買えるだろうが、それこそ遠距離兵装と縁が無い期間が長すぎたか。

軽口のもりが地雷にぶち当たったな。

「すまん、立ち入り過ぎたな」

「いや、構わん。……以前、俺は塀の中に居たことがあつてな。シルヴィアと出会ったのは——」

シユナイダーは珍しく饒舌だった。

原作で聞いた話だけでなく、シルヴィアとの馴れ初めやビークルバトルに関しても、彼のファンなら涎を垂らしそうな情報が出るわ出るわ……。

「何故、俺にその話を？」

「……さあな。自分でもよくわからん。ただ、来年のトーナメントのことを考えると、伝えておいた方がいい気がした。あと、お前から妙な憐憫の情を感じた」

俺が適当にわざと負けて、恵まれないシユナイダーにチャンピオンの座を施して譲るとでも？

まあ、俺にとってピークルバトル自体がそこまで優先度の高いものではない……
確かに、絶対に無いとは言えないな。

現実の世界はこの先も続いてゆく。

エンディングを迎えたからと言って、そこで時間が止まるわけではない。

もし、その先の俺の人生においてチャンピオンの称号が邪魔になるようなら、適当に他人に押し付けることを選ぶだろう。

……予防線を張られたか。

「ま、今はブラッディマンティスの件だ。色々と使い走りみたいなのも押し付けちまうと思うが……全部片付いたら、一杯奢るよ」

「期待しておこう」

ジンジャーにも酒を奢る約束をしたことだし、全て終わったら二人を引き合わせるかな。

シユナイダーが去ると、今度は別のピークル乗りが俺に近づいてきた。

「グレイ」

「ああ、サフラン。来てくれて、ありがとうな」

トーナメントで1回戦を戦ったサフランだ。

今日はまた妙な格好だな。

砂漠に近い場所だけあって、服は闘技場の衣装ほどの露出度ではないが、顔はいつも通りマスクで隠している。

まあ、「ステイール・モラル」を駆る以上、素顔を隠す覆面は必須か。

「えくと、大丈夫か？ ビークルは修理できたかもしれないが、トーナメントでは散々な目に遭っただろう。精神的な疲れとかさ……」

「大丈夫、心配いらないわ。……ふふつ」

サフランはマスクの奥で妖艶に笑った。

何かおかしかったのかと俺は内心首をかしげるが、サフランは少し寂しそうな雰囲気醸し出す。

「グレイはいつも私を心配してくれるわね。まるで、妹か娘みたいに……」

妹か娘、ね。

確かに、俺はサフランのことを原作の登場人物として見ていた。

サバイベントで報われない描写をされていた彼女を見て、少しでも役に立ちたいと思った。

あくまでも自己満足、メタ的な視点だ。

「リツキーのことなら、もう完全に吹っ切れたわ。寂しさも、疼くのも……自分ですれ

ば、紛らわすことはできるし」

「おいおい……」

こんな下ネタを言う奴だったか？

俺が驚いていると、サフランはぐつと前かがみになり、俺の顔を下から覗き込むようにして口を開いた。

「あなたこそ大丈夫？ あんまりいい顔つきじゃないわよ。恋人に会って来た方がいいんじゃない？」

「恋人って……あ……」

思い起こされるのは、ナツメグ邸の工房でマルガリータと交わした口付け。

デレは一瞬のことで、すぐにいつものツンケンしたマルガリータに戻ってしまったが、あの時の彼女の顔は忘れられない。

あの後は、結局までもに話せないままコンドル砦へ来てしまった。

このままでは……ダメだな。

そんな会話をしていると、コンドル砦の門が開いてバナラの【カモミール・タイプⅡ】が帰ってきた。

「おお！ どうだった？ 交渉はうまくいったか？」

「（申し訳ありません、司令。奴ら、最初から交渉に応じるつもりが無いようです。それ

と司令、あの話は本当でした。奴ら、巨大な戦艦を建造しています」

「(むう……!!) こうなつては、一刻も早く『ロングシンフォニー』を完成させなければ
!」

予想通り、ブラッディマンティスとの交渉が決裂したことを確認した。

いよいよ本格的に開戦か。

ファアガスンたちの会話を遠くに聞きながら、俺は顔を上げた。

「そう、だな」

「グレイ?」

俺はこちらを窺うサフランに向き直る。

「マルガリータに、会つてくるよ」

「……うん、そうした方がいいわ」

俺はサフランに頷き返し、マジヨラムの「イエロー・ベア」に向かつて叫んだ。

「マジヨラム! 俺はもう一度ピジョン牧場に行つてくる。向こうの食料物資は俺が引

き受けるから、君とバナラはハッピーガーランド近郊の輸送を優先してくれ」

「わかつたよ! 市民軍応援ライブの予定があるから、それまでに戻つてきてね」

そして、俺はハッピーガーランド駅から汽車に乗り、数日ぶりのピジョン牧場へと足を向けた。

99話 一時帰宅からの……

ピジョン牧場へ戻った俺は、まず物資の発注を済ませた。

発足から数日が経ち規模が拡大した市民軍は大食らいだ。

小麦も野菜も肉やチーズも足りない。

保存が利く食材を中心とした大量注文だが、用意できるのは明朝になるとのことだった。

ちようど帰って来たことだし、久々に今夜は自宅で寝るとしよう。

俺は日没を眺めつつ丘を登り、ナツメッグ邸の前に「ジャガーノート」を着けた。

家の前にはマルガリータの「クラフトマンシップ」が停まっているが、最近では彼女が来ているのも当たり前前となりつつある。

工房で真剣に作業をする彼女の姿を思い出しつつ、俺は家のドアを開けた。

「グレイか」

「あ、博士。ただいま戻りました」

ちようど玄関先から見える位置に居たナツメッグ博士が俺に声を掛けてくる。

俺はビークルから下ろした荷物を家に運び入れるが、こちらに注がれる博士の視線に違和感を覚え、動きを止めた。

何か言いたいことがあるようだ。

「あの、何か？」

「うむ、こんなときになんじやが……ローズマリーの確定診断が付きそうじや」

俺は一旦テーブルに座り、博士の話を聞く態勢となった。

「例の検査用の器具つてのが届いたんですか？」

「ああ。わし自身、まだ使い方が完璧には分かっておらんのでな。すぐに検査することはできませんが……近いうちに調べられるじやろう」

そいつは喜ばしいことじや。

だが、俺も明日にはコンドル砦に戻らなければならぬし、ローズマリーの検体採取に出張することはできないな。

ピジョン牧場の誰かにお使いを頼むことになるだろう。

「それでの……予想通り、排ガスや工場の煙によっておこる呼吸器の病だった場合、今すぐにローズマリーを移動させるべきかどうか。お前さんの意見を聞きたい」

「まあ、やめた方がいいでしょうね。今すぐつてのは」

俺の答えは博士も予想がついていたようで、それほど驚きはしなかった。

「理由はブラッディマンティスの件か？」

「ええ」

「何時になつたら、カタが付くんじゃ？」

「ガラガラ砂漠決戦は近いうちに終わります。交渉は決裂して、市民軍は宣戦布告を行いました。恐らく、数日中には砂漠地帯で総力戦になって決着が付くでしょう」

「いつもなら、ここら辺で納得するだろう。」

「しかし、今日の博士は妙に食い下がった。」

「強大な秘密結社が数年越しで計画した破壊工作……それが、すぐに片付くと？」

「そうです」

「お前さんの予想通り、事は進むと？」

「はい」

「ぬ……………」

ナツメグ博士はじつと俺の顔を見据えた。

何が言いたいのか量りかねるまま、しばらく時が流れる。

そして、博士はゆっくりと口を開いた。

「なあ、グレイよ。率直に聞くが……お前さん、ブラッディマンティスのことで、何かわ

しに隠しとりやせんか？」

「っー」

「お前さんの『原作の知識』やら『運命』やら、忘れたわけではないぞ。あのけつたいな謎に包まれた秘密結社に關しても、十分に知っておろう」

「……………」

「お前さんは何でも合理的にやる奴じゃ。金儲けを画策したときも、ビークルを強化するときも、バニラが来たときも……師であるわしを遠慮なく扱き使い、周りを上手く巻き込んで立ち回ってきた。しかし、ブラッドデイマンティスに關しては違う」

ナツメツグ博士はさらに言葉を続けた。

「お前さんのことじゃ。連中の目的や黒幕についても、既に調べはついているのじやろう。その割に、これほどの大事になっても、奴らのことでわしに何も相談しようとしな。何も語ろうとしない」

ナツメツグ博士は俺をじつと見据え詰問する。

「連中の背後には、一体何が……誰が居るんじや？」

黒幕はダンディリオン、そしてセイボリーも彼に協力している。

目的はチコリの復讐のため。

もちろん、この事実は最初から認識していた。

しかし……とてもではないが、ナツメック博士に話せる内容ではない。

いずれ知ることになる話だが、俺の口から伝えるのは無理だ。

「言っても、きつと信じませんよ」

「お前さんが荒唐無稽なことをほざくのは今更だろうに」

そいつは反論できないな。

言っても信じないというのも、結局は言い訳だ。

しかし、感情面はもちろん、合理の面でも博士に伝えられないのもまた事実だ。

覚悟なんて決められるものじゃない。

ダンディリオンのことを……こんな残酷なことを伝えたら、博士はきつとブラッディマンティスと戦えない。

「言えないのです。誰かが傷つくなんて軽い表現では、済ませることができません」

「ふん、随分と偉くなつたものじゃ。神にでもなつたつもりか。上から見おつて」

この一言には、俺も胸の奥で怒りを覚えた。

いずれダンディリオンの戦うことになるかと覚悟していた。

最悪の場合、俺が手を下すことも考えていた。

ブラッディマンティスとの決戦が近づき、その話も現実味を帯びてきた。

そして、この世界がただのゲームではないことも、俺はとつくに承知している。

「お言葉ですが、博士。俺もこの世界に転移して数年、トロット楽団メンバーや街の皆にはそれなりに愛着を持っています。そんな人たちを、最悪自分の手で殺めることになる俺の気持ち……!」

あんたにわかるか？

そう言いかけたが、ナツメツグ博士は俺を手で制した。

「わかった、もうよい。もう何も言わん」

「博士……」

「違う! お前さんを信じてやるよって」

意外な言葉に、俺は些か驚いた顔で博士に向き直った。

「……お前さんは多くのことを成し遂げてきた。お前さんのやり方が正しいと思うなら、そのまま最後までやり遂げてみるがよい」

そして、ナツメツグ博士は再び俺をじつと見据えた。

「しかし、覚えておけ。お前さんは孤高の救世主ではない。今となっては、守るべき家族も居るただの一人の男じゃ。このことは、ゆめゆめ忘れるでないぞ」

「家族……? ああ、はい」

「話は終いじゃ」

もし、俺がダンディリオンを殺したら、博士は俺を許してくれるだろうか？
どうするのが最善か……いや、あまり考えても仕方ないか。

所詮、俺は元社畜。

多くの人間に影響を及ぼす意思決定など、はつきり言つて無縁の人生だった。
そんな俺が……そう簡単に割り切れるものではない。

「博士」

「ん？」

「可能な限り、救います。でも、期待しないでください」

「……ああ」

それだけ言うと、俺はダイニングから退出し自室へと向かった。
着替えて……少し休むか。

明日にはまたコンドル砦だ。

「マルガリータ。お前さんの旦那が帰ってきたぞ」

工房へ向かった博士が、後ろでふざけたことを抜かしている。

そういえば、彼女とも話さないとな。

まあ、少し休んでからでいいか。

「(はて、どこに……?)」

ナツメツグ博士が何か言っているが、俺は気にせず自分の寝室の扉を開いた。

「っ……………」

自分の寝室に足を踏み入れた俺は、信じられないものを発見した。

視界に飛び込んできた光景は、何とも衝撃的で煽情的で……いやいや！

直視してはダメだ。

しかし、目が離せん！

「す……………す……………」

俺のベッドの上には、マルガリータが居た。

体を少し丸めるようにして横になり、俺の枕に顔を埋めるようにして静かに寝息を立てている。

何故、俺のベッドに居るのか、この時間から寝ているのか、前掛けが床に放り捨てられているのか……気になることは色々あるが、そんな話はこの際どうでもいい。

問題は、彼女のあられもない姿だ。

洗いざらしのシャツのボタンはほぼ全て外れて前が開けており、彼女の豊かな双丘様が際どい所まで晒されている。

分厚い生地地のジーンズは膝辺りまで下げられ、機能的な白い下着も丸見えだ。

何より、俺が最も目を疑ったのは、彼女の手が下着の中に潜り込んで……つと、イカ
ンな直視しては。

これは……うん、昨晚はお楽しみでしたね。お一人様で。

「んん……」

「っ！」

身を振ったマルガリータから発せられた声は、未だかつて聞いたことが無いほど甘く
妖艶なものだった。

恐らく、ほぼ無意識のことだろうが……ヤバいな。

このままここに居ては、俺の理性が持たない。

「……………」

俺は音を立てないように後退り、部屋を脱出しようと試みた。

ハプニングを狙うつもりなど微塵も無い。

しかし、こういう時に限って、運は妙なベクトルに味方をするものだ。

「あ、やべっ」

「っ！ 誰っ!?!」

今の季節は使わないためドアの近くにハンガーで吊っていた上着が、ドサツと音を立
てて床に落ちた。

肘を引つ掛けるという何とも間抜けなミスであるが、その音でマルガリータは飛び起きた。

しかし、誰って……俺の部屋なだけだな。

「あ、あんた！ もう帰って……っ！」

俺の姿を認めたマルガリータは、すぐに自分の恰好に思い至った。

慌ててシャツの前をかき合わせ、ジーンズを引き上げて太腿を閉じる。

どちらかというと、激しく動いた拍子に見えたものの方が多きが……。

「~~~~／／／」

「ははっ……」

マルガリータは顔を真つ赤にして俺を睨んでいる。

見てないフリというのは……無理だな。

俺は笑って誤魔化すしかなかったが、マルガリータは一瞬で顔を怒りに染めた。

「馬鹿っ!!」

「いや、俺の部屋……」

「うるさいっ！ 馬鹿！ 変態！ 覗き魔！ 強姦魔！ 死ぬっ!!」

「ちよ、おいおいおい！」

筆記用具や小物にライフル実包など、サイドボードの上に散乱していた物が次々と飛

んでくる。

マルガリータは近くにある物を目に付いた先から投げてくるので、俺は顔を手で庇うほかない。

「ま、待って……うおい！ さすがにレンチは投げるな！」

俺は額にぶち当たる拳銃弾に構わず、一気にマルガリータとの距離を詰めた。

さすがにあれを食らったら死ぬ。

俺も生身の体は普通の人間であり、「ジャガーノート」の装甲ボディとは違う。

俺は何とか彼女がレンチを持って振り上げた手首を掴んだ。

しかし、床を蹴って飛び出した慣性はそう簡単に消せない。

勢い余って、俺は彼女をベッドに半ば押し倒すような形になってしまった。

「っ……………」

「あつ、や、これは……」

マルガリータと目が合うと、射殺するような視線を向けられた。

やっちまったな……。

下には半裸の美女、俺は彼女に覆いかぶさり、その両手首を掴んで拘束している。

法的にも、週刊誌的にも、完全に俺が悪者の状況だ。

頬に掌の跡がついても、それこそレンチが来ても文句は言えない。

言い訳しつつも殴られることを覚悟した俺は、多少体を引いて身構えた。

「……………」

しかし……衝撃はいつまで経ってもやって来ない。

やがて、マルガリータの手からレンチが滑り落ちる。

ステンレス製の工具がボスツと音を立ててベッドのマットレスに沈むのと同時に、彼女の腕からも力が抜けた。

「あの……」

「っ……………」

恐る恐る声を掛けながら視線を向けると、マルガリータは体を起こしてそのまま俺の胸に頭を埋めた。

勢いよく胸にヘッドバットを食らったが、咳き込むのは我慢し、何とか彼女のことを抱き留める。

マルガリータは普段よりかなりナーバスなようだが、俺に何ができるといってもなく……。

やがて、マルガリータはポツリと呟いた。

「あんたも、戦争に？」

「……………」

「そんなに石油が大事？ ビークルが大事？（あたしより…………）」

マルガリータの言葉は全て聞こえているにもかかわらず、俺は何も答えられなかった。

彼女とはロクに話さず、俺はコンドル砦へ向かってしまった。

もう一度、きちんと話すために戻って来たというのに、このザマだ…………。

「何考えてんのさ…………。あんたは神でも救世主でもないってのに…………」
さつきも似たようなことを言われたな。

確かに、俺はドラゴンを殺せる勇者でもなければ、無限の魔力を持つチートキャラでもない。

原作の知識こそあるが、俺が死なない保証などどこにも無い。

マルガリータの気持ちもはつきりしている。

彼女は…………俺に危険な場所に赴いてほしくないと思っている。

親しい人間に命を落とすリスクがある行動を取ってほしくないと思うのは、誰にとっても当然のことだろう。

マルガリータがナツメツグ邸に来たばかりの頃も、彼女のそういった意識の片鱗は感じられた。

だが、俺は……。

考えれば考えるほど、反論材料は見つからない。

俺はただ彼女の髪を撫で続けることしかできなかった。

「本当に……馬鹿だよ、あんた」

「落ち着け」

「うるさいー」

俺がようやく発して一言は、鋭い怒声に一蹴された。

間髪入れず、マルガリータは俺を突き飛ばし、体勢を入れ替える。

今度はこちらがマウントポジションを取られる形になった。

彼女の服装は相変わらず乱れているので、見上げると色々と目の毒な部分が見界に入る。

しかし、当の本人には最早そのことを気にした様子など無い。

「うるさいよ……黙って……」

そのままマルガリータは俺の口に自分の唇を合わせてきた。

またしても彼女からだか、相変わらず貪欲で情熱的なキスだ。

言葉は少なく、言いたかったことの半分も言えていないが、お互いの気持ちを通じ合っていることを実感できる。

離したくない、少しでも深く繋がりたい。

お互い本能に近い部分でそれを察した。

そして、長い口付けを交わした俺たちは……そのまま溶けるように交わり、共に一夜を過ごした。

100話 コンドル砦で再会

翌朝、俺はここ数日で一番の心地よい目覚めを迎えた。

睡眠時間はむしろ短い方だが、コンドル砦の仮設テントとは比べ物にならない上質なベッドと……何より、筆舌に尽くしがたい行為に没頭し幸福感に包まれて眠ったことは、かつて無いほど爽やかな目覚めを齎してくれた。

そんな最高の時間を与えてくれた俺のパートナーは、今も俺の腕の中で静かに寝息を立てている。

穏やかで幸せそうな寝顔だ。

シートからはみ出している白い肩や腕には薄っすらと筋肉の形が浮いているものの、普段ランチを振り回している姿からは想像もつかないほど今は華奢に見える。

いつもの強気なマルガリータも悪くないが、こういう無防備な彼女もいいものだ。

しかし……初めてとは思えないくらい積極的だったな。

最初こそ痛みに顔を顰めていたものの、二回目からは完全にロデオ状態で、そのまま五回以上も……。

俺のことを想って一人でしていたことを鑑みても、彼女の性欲は結構強いようだ。これから大変そうだな。

「きゃっ……」

マルガリータの寝顔を眺めるのは楽しいが、いつまでもそうしているわけにはいかな
い。

俺は身支度をするため体を起こして立ち上がろうとした。

しかし……。

「んっ」

よく見ると、マルガリータが俺の手を掴んでいる。

少し肌が荒れ、爪の間に僅かに黒い汚れが入り込んだ、整備士の手だ。

このままではベッドから出られないので、俺は彼女を起こさないようにそつと手を外
そうとするが……何故かがつちり掴まれて外れる様子は無い。

「……………」

「……………」

いつの間にか、マルガリータの顔は反対側を向いていた。

上からじっと見つめると居心地悪そうに身じろぎするあたり、狸寝入りというやつだ
ろう。

だが、それをストレートに口にするほど野暮じやない。

「そうかそうか。モテる男はつらいねえ。そんなに俺を離したくないか……痛つ」

軽口を叩くと、マルガリータは俺の指を握り潰す勢いで強く手を握ってきた。

普段からビークルの整備や力仕事をしているだけあって、握力は結構強い。

「……そろそろ行かないと。石油とビークルと……仲間のために」

聞こえているはずだが、マルガリータは俺の手を離そうとしない。

より一層深く俺の手に指を絡め、キツく握りしめてくる。

「でも、どうすつかなあ？ 愛する女性がどうしても行くなつて言うなら……やめちゃうか？ 俺は身勝手で優柔不断な人間だからな。このまま戦いが終わるまで、爛れた生活に溺れるというのも悪くない」

「……………」

俺だって、好き好んで殺し合いの場に行きたいわけではない。

ここまで来れば、あとはバニラだけでもどうにかなるだろう。

元々、この世界のシナリオや原作キャラの運命に干渉したのも自己満足だ。

俺が自分で決めたことなどその程度、あとは成り行きと助けを求める声に応えてきただけだ。

大層な信条など何もない。

だから、今回はマルガリータに決めてほしかった。
些か卑怯な気がしないでもない

準備に掛けた労力や世間の勢いを考えても、ここで俺が離脱するという選択肢はあり得ないわけだが……結局は、彼女の気持ちも少しは慮ったという言い訳が欲しいだけだな。

しばらくすると、マルガリータは俺の手を離した。

いつの間にか、彼女は体ごと俺に背を向けている。

……そうか。行けってことか。

「ありがとう」

マルガリータはそっぽを向いているので頬へのキスは諦め髪を撫でようとしたが、俺の手は鬱陶しそうに振り払われた。

ツれないじゃないか……。

少し迷った末に、俺は素早く彼女の髪にキスをして、反撃を食らう前に寝室を後にした。

最低限の荷物を整理し身支度を整えた俺は、チーズ入りスクランブルエッグとトーストの簡単な朝食を用意した。

博士とマルガリータの皿に蓋を被せ、自分の分を急いで掻っ込むと、そのまま玄関へと向かう。

今日は早朝から物資の点検と貨車の積み込みなので、あまりのんびりしている時間は無い。

まあ、その原因が何かというと、明け方までマルガリータとの共同作業に没頭してしまったことが大きいのだが……。

「もう、出るのかの？」

「ええ」

「そうか」

ちやうどナツメグ博士も起き出してきたところだった。

交わす言葉は少ないが、話し合いは昨日の段階で十分にした。

俺はナツメグ邸のエントランスのドアノブに手を掛ける。

「あ、そういえば……」

「むっ？」

ふと気になったことを確かめるため、俺は博士に向き直った。

「マルガリータに何か言いましたか？」

「？ どういうことじゃ？」

「いや、何だか博士と同じようなことを言っていたので……」

お前は救世主じゃないとか何とかかな。

すると、ナツメグ博士はしてやったりといった表情で笑みを浮かべた。

「さあな。わしの口からは言えん」

「……昨日の意趣返しつすか？」

「かつつか、若いのお。今後は、時間帯には気を付けることじゃ」

……そういえば、マルガリータとは結構早い時間からおっぱじめてしまった気が……。

まあ、同居している以上、博士も気付くよな。

大方、マルガリータがあんなにナーバスだったのも博士の入れ知恵か。

それが彼女と距離を詰めるきっかけとなったことは否めない以上、恨み言を言うべきか感謝すべきか……。

迷った末に、俺はそれ以上の言及はせず踵を返した。

「じゃ、行つてきますんで。テーブルに朝食がありますから、食べてください」

「うむ、気を付けるのじゃぞ」

「ええ、もちろん。……大切な、家族が居ますから」

そして俺は、今度こそナツメグ邸を後にした。

後ろの方でナツメツグ博士の独り言が聞こえる。

「(何じゃ。今日の飯はちと手抜きじやの……)」

ハッピーガーランド駅に到着した俺は、事前に到着時刻を伝えておいた市民軍のビークル乗りと分担し、ピジョン牧場からの物資を市民軍の陣地に運び込んだ。

日持ちのしない食料を優先して輸送しつつ、俺自身の仕事は途中から盗賊対策が主となった。

シユナイダーやサフランと協力し、近郊に出没する盗賊ビークルを殲滅しつつ輸送ルートを護衛する。

「……なるほど」

「あら、早速……」

シユナイダーとサフランの二人と合流すると、何故か生暖かい目を向けられた。

まじまじと俺の顔を眺め、何やら勝手に納得している。

「おい、さつきから何だってんだ？」

「……いや。守る者ができたのは、いいことだ」

「そうね。随分と激しかったみたいね」

そう言つてサフランは俺の首元を示した。

何とも、妙なところで昨晚のことがバレたな。

俺は内心苦笑いながら、体の向きを変えてシャツのボタンを上まで閉めるが……サフランはツボつて笑い出した。

「ぶつ、あはははは！ 冗談に決まつてるじゃない。でも、よかつたわ。今のグレイ、ちよつと素敵よ。ね、シユナイダー」

「うむ……また一段、強くなつたように見える」

正直、マルガリータと結ばれて特に何が変わつたわけでもないと思うが、他人から見れば雰囲気やら何やらでわかるものなのかな？

しかし、この二人に茶化されるとは思つてもみなかった。

「くだらねえこと言つてないで、しっかり警戒してくれ。輸送ルート防衛は重要な任務だ」

「は〜い」

「ああ」

何とも居心地の悪い労働環境だったが、どうにか大きなトラブルに見舞われることなく、俺たちは輸送ルートの掃討を終えた。

やがて、俺が手配した物資が全て運び込まれると、マジヨラムから食料には大分余裕

が出来たことが告げられた。

とりあえず、俺の仕事は一段落だ。

そして、帰還したコンドル砦で夜を明かすと、ついにライブ当日がやって来た。

ライブ当日は、午前中から『ロングシンフォニー』の甲板上でステージの設営と準備に追われていた。

ステージ装備を展開した俺たち楽団のビークルを並べ、照明やマイクや楽器を設置する。

マジヨラムは物資の管理の仕事などもあり忙しいので、彼には自分のドラムの設置だけやってもらい、照明器具などは俺が担当した。

そうして、甲板上のステージを粗方準備し終わった頃、砦のハッピーガーランド方面の出入口が俄かに騒がしくなる。

気になって砦の入り口付近まで出向いてみると、そこでは久しぶりに見る顔がマジヨラムと話していた。

「やあ、 그레이」

「ああ、ダンディリオン。久しぶりだな」

ダンディリオンがこちらへ向き直り、俺たちはにこやかに挨拶を交わす。

相変わらず、気さくで穏やかな雰囲気だ。

壮大な復讐を画策していることなど、微塵も感じさせない。

バイオリンケースを握る手の指先に、僅かにオイルの汚れがあることだけが不自然だ。

「最近、ナツメッグ先生の様子はどうだい？」

「いつも通り、かな。いきなり妙な研究に没頭し始めたり、部屋を散らかしたままどこかへ行つちまつたり……」

「あはは、相変わらずみたいだね」

俺は不自然な態度にならないよう努めて、ナツメッグ博士の話題をさらに提供した。

「ああ。変わったところと言えば、前にも増して食事にうるさくなつたところか。最近では、俺が手抜きをすると見抜いてくるから、堪ったものじゃない」

「へえ、話には聞いていたけど……それは想像がつかないや」

「だろ？ 美食へのこだわりは、今じゃマジヨラムといい勝負だ」

俺が水を向けると、マジヨラムは妙に真面目くさった表情で返答する。

「いや、グレイ。僕は何でもおいしく食べることを信条にしているから」

「ははは！ マジヨラムも相変わらずのようで安心したよ」

そんな具合に談笑していると、周囲の連中の視線がさらに集まってきた。

まあ、当然か。

過去の事件はともかく、ダンディリオンが超一流のバイオリニストで最高レベルの楽器職人であることに変わりはない。

どうしたって注目は集まるだろう。

ファーガスンですら、ダンディリオンの演奏が聴けることを家族に自慢できるなどと
言っている。

少し居心地が悪くなった俺たちは、場所を移すことにした。

「向こうにコニーとおばさんも居る。案内しよう」

「ああ、頼むよ」

そうして俺たちが炊き出し場に近づくと、真っ先にコニーがこちらに反応する。

「あ……ダンディリオン」

「おやまあ！ ダンディリオンじゃないか！ 久しぶりだねえ」

「どうも、ご無沙汰してます。コニーも久しぶり」

コニーは最初ダンディリオンの姿を認めるとき微妙な雰囲気醸し出したものの、騒がしいおばさんが潤滑材となつて会話は続いていた。

そんな具合に時間が経つうちに、バナラの「カモミール・タイプⅡ」がコンドル砦に

戻ってきた。

バナラのビークルはステージ装備を持っていないので、ギリギリまで物資輸送の任務に出ているのだ。

バナラはマジヨラムの誘導でこちらにやって来た。

「やあ、ご苦労様」

ダンディリオンはバナラに向き直ると愛想よく挨拶を交わした。

「バジルがどうしてもって言うから来たけど……正直、僕は争いごとが苦手だね。それに、人前で演奏するのも久しぶりだから、緊張しちゃって……」

「またまた……期待してるよ、兄弟子殿」

「はは、勘弁してくれ」

「ふふっ」

俺の茶化しはそれなりに場の空気を和ませた。

そして、今度は砦の入口の方から甲高い声が響いてくる。

「ダンディリオン!! セイボリーが来たよー!」

軽い足音と共にこちらへ駆けてくるバジルに次いで、相変わらずけしからんロングドレスのセイボリーはゆったりとこちらへ歩いてきた。

彼女がダンディリオンと相對した瞬間に辺りは静寂に包まれる。

特に怪しい空気というわけではないが、まあ傍目から見ても美男美女の組み合わせだからな。

「ダンディリオン、来てくれてありがとうね」

「せっかくのお誘いだからね。久しぶりのステージで迷惑かけるかもしれないけど、よろしく頼むよ」

今回はセイボリーもバジルと同じくダンディリオンを呼びに行くメンバーだったので、久しぶりの挨拶はなしだ。

そして、最後にマジヨラムがやって来て、俺たちに声を掛ける。

「やあ、皆集まったね。いよいよだなあ」

確かに、そろそろ日も暮れかけて、いい時間帯だ。

どうやら、ステージの設営はマジヨラムが今しがた終わらせてきたようだな。

さすがに頼りになる。

「用意が出来たから、皆甲板に上がってよ」

「よし、行こうか」

「うわあ！ 楽しみだな！」

そして、俺たちは各々の楽器を手に『ロングシンフォニー』の甲板へ向かった。

まだ音合わせの段階だというのに、落ち着きが無いバジルは真っ先に駆けていき、背

中を押されたバナラが少しよろめいていた。

相変わらずのドタバタに、俺も少し苦笑しながらサックスを持って歩き出す。

「ほら、急ぐよ！ 早く行かないと始まっちゃう！ それにしても……コニーとダンディリオン、そしてセイボリー……皆揃つての演奏なんて、いつ以来だろうねえ」

「まさかダンディリオンの演奏がタダで聴けるとは……。わかつていたら、ウチで仕切らせてもらったのに……」

炊き出し場のおばさんやデルロツチ貿易のデルセン社長の声を横に流しながら、俺もステージへと上がった。

いつもの遠征先での立ち位置を踏襲しつつ、真ん中にはバイオリンを持ったダンディリオンが陣取る。

少し狭い気もするが、どうにか違和感の無いポジションで音合わせを終えた。

そしていよいよ、開演時刻を迎えた。

「準備はいいかい？」

ダンディリオンの合図でトロット楽団は演奏の体勢に入り、俺もストラップを装着したサックスを構えリードに口を付けた。

101話 開戦へ

『ロングシンフォニー』の甲板上で行った市民軍応援ライブは大盛況だった。

いつものトロット楽団に加えて、この国一番のバイオリニストの呼び声も高いダンディリオンが参加しての演奏だ。

皆が彼の奏でる深い音色に聞き入った。

ライブの興奮が冷めやらぬまま、ある者は酒を飲んで騒ぎ、ある者は和やかに談笑する。

そしてすっかり日も沈んだ頃、ライブ会場から撤収した俺たちは、炊き出し場やテントがある戦艦の裏あたりに集まっていた。

「ダンディリオン、今日のライブはどうだった？」

「久しぶりで凄く緊張したよ！ やっぱり、楽器を作ってる方が気が楽だねえ」

セイボリーの投げかけた疑問に対し、ダンディリオンは爽やかな笑みを浮かべて答える。

こんなことを言っているが、彼は十分現役だ。

俺はバイオリンを弾けないが、彼の奏でる音がブランクを感じさせるものでないことはわかる。

きつと、バイオリンの練習は今でも欠かしていないのだろう。

楽器工房を経営しつつも、エルダーとして活動しながらも、ブラッディマンティスを操りつつも……。

そんなダンディリオンは、先ほどから一言も発しないコニーに向き直って声を掛けた。

「そうだ、ローズマリーはどうしてるんだい？」

「前よりは随分元気になったわよ。ね、コニー」

「うん」

ダンディリオンが発した疑問にセイボリーが応えて促すが、コニーは上の空で返事をするだけだった。

コニーはまともにダンディリオンを見ようとしない。

体こそ彼の方を向いているが、どこか彼女の目の焦点は合っていないかった。

しかし、ダンディリオン本人はそのことを知ってか知らずか、俺の方へ視線を向けてくる。

……ああ、なるほど。

ダンディリオンや他の楽団メンバーに比べると、俺は楽器やビークル以外の部分でも博士の教えを受けた者として扱われている。

当然、医術などに関しても俺は人より詳しいと思われるわけだ。

まあ、この時代の平均的な人間よりは病態や生理学の知識もあるか。

「傾向としては悪くない。次の治療がうまく行けば、確実に回復に向かうはずだ」

「そうかあ……早く元気になって、またみんなで音楽ができるといいのにな」

当たり障りが無くポジティブ寄りの答えを返したが、ダンディリオンのセリフは変わらなかった。

ここで、先ほど俺たちに近づいてきたバナラが口を開く。

「今日、フェンネルは？」

話題は、こんな状況にもかかわらず顔の一つも出さない旧メンバーの件だった。

セイボリーとバジルはダンディリオンだけでなくフェンネルにも声を掛けたようだが、結果はこの通り。

「誘ったんだけど……もう、俺はメンバーじゃないから、って」

「フェンネルらしいな」

僅かに沈んだ声で返答するセイボリーに相槌を打つダンディリオンの言葉が響き、しばらくその場を静寂が支配した。

しかし、そんなしんみりした空気もすぐに緑の闖入者によってぶち壊される。

「なんだよ、僕も仲間に入れてよ！」

勢いよく走り込んできたバジルは、楽団メンバーを見回すと能天気と言葉を発した。

「へへへッ……でも、これでチコリとフェンネルが居たら、昔と一緒だね！ ……あ」

「バジル！」

バジルは慌てて口を塞ぎ、セイボリーも追い打ちをかけるように緑のチビを叱るが、既に大声で発せられた言葉は消えない。

ダンディリオンよりむしろコニーの方が、どんよりとした悲しみの空気を醸し出した。

「……いや、皆そんなに気を遣わないでくれよ」

皆の視線が泳ぎ気まずい雰囲気になるなか、ダンディリオンは俺たちを手で制して苦笑した。

当の本人にこう言われては、俺たちも頷くほかない。

「ハハッ……それじゃあ、僕は帰るよ。セイボリーはどうする？」

「……ええ、私もすぐ行くわ」

微妙な空気を払拭するように話を進めたダンディリオンは、続けてバナラに向き直った。

「今日のライブ良かったよ。……そうだ。よかったら、使ってみてくれないかな？」
ダンディリオンは先ほど自分がライブで使用していたバイオリンをバニラに手渡した。

俺はバイオリンを弾けないので、そこまで良し悪しがわかる訳ではないが……シンブルで、堅実で、使い手の力量に依存するが、幅広い音色の表現が可能なタイプの楽器だったように思える。

ダンディリオン自身が作製したもののようだが、恐らくナツメツグ博士の品を模倣しているのだろう。

自作品の中では、ダンディリオンのお気に入りバイオリンのはずだ。

そう簡単に手に入れられる品ではない。

それは申し出を受けたバニラ自身も何となく理解しているのか、若干緊張しながら受け取り屈託のない嬉しそうな笑みを浮かべた。

「皆、それじゃ」

そして、ダンディリオンは一人コンドル砦の出口に向け歩いて行った。

先ほど自分もすぐ帰ると言ったセイボリーはしばらく動かなかつたが……やがてダンディリオンが十分に遠ざかったタイミングで、少し屈みこんでコニーに声を掛けた。

「コニー……あなた、まだ気に掛けてるの？ 今のままだと、ダンディリオンが可哀そう

よ」

「うん、わかってる……。でも、実際に会うと、どうしても……」

「まだ、時間かかりそうね」

「ごめん……」

割り切れるものでないことは皆十分に承知している。

セイボリーもそれ以上は口にしなかった。

「私も帰るわね。皆、あまり無茶しないでね」

セイボリーが自分のピークルに乗って去っていくと、酒宴を催す連中の笑い声だけが空虚に砦に響いた。

こうして、コンドル砦の夜は更けていった。

トロット楽団とダンディリオンによる市民軍応援ライブから数日。

市民軍の陸上戦艦『ロングシンフォニー』がほぼ完成した。

主砲を5門にピークル部隊を出撃させる射出口が2つ搭載されているとは、ファーガスンの部下である市民軍兵士の言葉だが……最強の決戦兵器の名は伊達ではない。

俺が知っている現代の艦艇に比べれば火力や規模は劣るように思えるが、100m越

えの船体に強固な装甲を持つ要塞ともなれば、その迫力は圧巻だ。

泥縄式のポンコツとは思えない出来に、俺も少し驚いている。

これも作業班の士気の高さゆえかな？

俺がピジョン牧場方面から追加で食料を手配したこともあり、市民軍の物資はそれなりに潤沢だ。

何より、俺たちのライブが砦で働く人々に活力を与えたのは、最早言うまでもないだろう。

そして、戦艦『ロングシンフォニー』の完成のために必要となる最後のピース、市民軍の軍旗の輸送を託されたのは原作通りバナラだった。

沽券に関わる重要な仕事ということで、バナラは一瞬だけ不思議そうにこちらを見たが、俺には輸送路の護衛という仕事がある。

シユナイダーやサフランを始めとする、ちよつとおかしいピークル乗りたちを率いて、不届きな盗賊どもを掃討するのだ。

この段になると、群れるのを好まない一匹オオカミ気質のピークル乗りも砦にやって来ている。

義勇軍っぽい規律や雰囲気は好まないが、ただ暴れたいという力の有り余っている奴らだ。

不思議なものだが、俺はいつの間にか荒くれビークル乗りどもの現場監督のような立場になっていた。

まあ、ビークルバトルーナメントの優勝者である俺が適任というのはわかる。

フアーガスンにも言われたが、こういう手合いは実力のある上役から頼られると素直に働くものだ。

俺はひたすら元気が有り余っている荒くれどもに仕事を割り振り、「頼りにしている」だの「お前になら任せられる」だの声を掛け続けた。

こんな管理職まがいの仕事をするようになるとは思わなかったが、自分が忙しく現場で働かなくていいのは幸いか。

そんなわけで、軍旗はバニラの手によってハヤブサジュウタン工場から運ばれ、先ほどフアーガスンのもとに届けられた。

「おお！ 立派な軍旗だ！ バニラくん、よく無事に届けてくれた！ これで……我ら市民軍の陸上戦艦『ロングシンフォニー』の完成だ！」

感極まったような声を発するフアーガスンに、砦に居る連中の視線が集中した。

本人もいいタイミングだと思ったのか、市民軍の面々を見回すと演説を始める態勢になった。

「皆、聞いてくれ！ ブラッドディマンティスを討伐する準備は整った！ 明日の朝に砂

漠へ進攻する！ それまでに、各自準備を済ませておくように！」

こうして、俺たち市民軍の出撃準備は整った。

因みに、フェンネルもこのバーサーカー集団と一緒にシレッと砦にやって来た。

相変わらず、コニーとは一言も話そうとせず、炊き出し場にも近づかないが……出撃を待つビークルのなかでも「ブルー・サンダー」は結構目立つので、コニーもフェンネルの存在には気づいているはずだ。

まったく、二人とも……。

「市民軍つてガラじゃないが、ドンパチやるつて聞いたんでやって来たんだ。聞けば、シユナイダーとサフランまで参加しているそうじゃないか。ビークルバトラーとしちゃ見過ごせねえ。悪いが、活躍させてもらうぜ。後れを取るなよ」

何とも威勢のいいことだが……俺としては、仕事を減らしてくれるのは大歓迎だ。

「それはそうと、一つ質問があるんだが……ダンディリオンがこの砦に来たっていうのは本当か？」

「ああ、コンサートに参加してくれたんだ。俺たちと一緒に演奏していったぞ」

「そうか……」

「それがどうかしたか？」

「いや、争いごとが嫌いなダンディリオンが、こんな火薬臭いところに来るなんて、意外

だったんだ」

「ふむ、そうだな。バジルのゴリ押しがあったとはいえ、珍しいのは確かだ」

ブラッディマンティスのために自ら視察に来た可能性もあるが、今更そのことを言うても仕方ないな。

ダンディリオンの来訪を妨げるのは不自然すぎて難易度が高すぎる。

まあ、基地の様子を見られたところで、最終的には砂漠での総力戦になる以上、大して影響は無いだろう。

そして、翌日。

いよいよ出撃の日がやって来た。

「グレイの大將！ オレらはもう準備できてるぞ！」

「早くおっぱじめようぜ！ 隊長」

「へへっ……今宵のクローアームは血に飢えてやがるぜ」

完全にヤバイ種族と化した連中が、後ろから俺に声を掛けてきた。

警察用や軍用のビークルではなく、各々が自前の汎用ビークルに乗っていることから、彼らが民間から自発的に参加した荒くれビークル乗りだとわかる。

彼らは「ジャガーノート」のコクピットに座る俺を急かすが、俺はまだ動かない。

「ブラッディマンティスの奴らを……一人残らずぶつ殺してやる！」

「おいっ、まだなのか？」

「つて、何見てるんだい？ 旦那」

近くに居たビークル乗りたちが俺の視線を追った。

その先にあるものと言えば……。

「行くんだね……」

「うん」

「必ず……無事に帰って来てね」

「ああ、もちろんだよ」

「約束だよ！ 絶対に、破ったら嫌だからね！」

「約束する。君が待っていてくれるだけで、僕は強くなれるから」

「ああ、バナラ……」

指を絡めて密着し、まるで将来を誓い合うかのような雰囲気醸し出すのは、当然ながら主役カップルことバナラとコニーだ。

さすがに人目のある場所でそれ以上の行為には及ばなかったが、何とも強固なシールドを形成している。

呆れの視線を送る俺に続いて、後ろのビークル乗りたちの間には気まずそうな雰囲気

が流れた。

しかし、意外にもバナラに対するやつかみの視線は少ない。

コニーのようなアイドルのファンには、もっと過激な連中も多いと思つたが……まあ、あれだけ堂々と行く先々でイチヤついでいれば、二人の関係など周知の事実か。

俺はバカアップルどもから視線を外して、ピークル乗りたちの方へ向き直つた。

「さて、諸君。これからは食べ放題の時間だが……『ロングシンフォニー』の発進からピークル部隊の出撃までは、フアーガスン司令の指示に集中するように」

怪訝な表情をするピークル乗りたちを尻目に、俺は言葉が続けた。

「フアーガスンは正規の訓練を受けた士官だ。軍学を治め、戦艦の指揮もお手の物。戦局を見定めて、最適なタイミングで突撃命令を下せる。タイミングを外すと食いつぱぐれるぞ。シユナイダーとサフランが全部片づけちまう」

少し話を盛つたが、大多数のピークル乗りは俺の話に納得した。

フアーガスンへの期待を少し高め過ぎてしまったかもしれないが、少なくともこれで突出して馬鹿をやらかす奴は減つたと思われる。

あとは、戦いが始まってみないことには何もわからんな。

そして、いよいよピークル部隊の戦艦への搭載が始まつた。

コニーと甘つたるい空気を出していたバナラも自分の「カモミール・タイプⅡ」に搭

乗し、俺も「ジャガーノート」を『ロングシンフォニー』の甲板上に移動させる。

ぐるっと見回すと、マジヨラムの「イエロー・ベア」にバジルの「グリーン・リーフ」にフェンネルの「ブルー・サンダー」、シュナイダーの「マキシマム」とサフランの「ステイル・モラル」、他の志願兵たちのビークルも目に入った。

全ての人員がポジションについたところで、自分の士官用ビークルに搭乗したファアガスンは声を張り上げた。

「とうとうこの時がやって来た！ これより、油田を占領し市民の生活を脅かす憎きブラッディマンティスの討伐を開始する！ 家族や恋人、愛する人々を奴らの脅威から救えるのは我々しか居ない！ ブラッディマンティスを倒し、元の平穏な生活を取り戻すのだ！」

ファアガスンの整ったフォームの敬礼に続き、俺たち寄せ集めの義勇兵も見様見真似で砦の居残り組に敬礼する。

炊き出し場や事務方の返礼を受けながら、陸上戦艦『ロングシンフォニー』はゆつくりと動き出した。

ブラッディマンティスと市民軍の争いに終止符を打つ戦いが、今始まる。

102話 ガラガラ砂漠決戦1

岩の城壁が開け放たれ、『ロングシンフォニー』は砂漠地帯を走り出した。

「いよいよ始まるぞー」

高揚したファーガスの声に同調するかのようになり、『ロングシンフォニー』は一気に速度を上げて砂地を高速で滑走する。

巨大なホバーや推進装置の効果か、巡航速度はビークルとは比べ物にならないほど凄まじいものだった。

最高速での移動は稼働テストでは試せない内容だったが、この分なら実用性に問題はなさそうだ。

さすがは砂漠地帯での運用を前提とした巨大決戦兵器。

こいつを考えた奴は、デザートホーネット団の殲滅でも画策していたのかな。

しかし、そんなことを考えていると、俺たち市民軍の雰囲気を一気に緊張させる存在が砂漠に現れた。

「あれが……『エビルタローン』」

砂煙を上げながら接近してきたブラッディマンティス側の巨大陸上戦艦『エビルタローン』は、こちらの『ロングシンフォニー』とは逆側に舵を切った。

時計回りに円を描くように移動し続け、お互いに距離を測りながら睨み合う。

この距離と揺れでは、俺たちビークル部隊は何もできないので、戦局の判断は戦艦側に全て託された。

お互い敵艦を左舷に捉えたままじりじりとした時間が過ぎ、ついにファーガスの鋭い号令が轟いた。

「砲撃開始！」

一斉に稼働を始めた『ロングシンフォニー』の主砲は次々と砲弾を撃ち出し、応射する『エビルタローン』の砲弾も交差して、所々で爆炎と土埃が上がった。

大口径の回転砲台から放たれる砲弾はかなりの火力を持つ。

ゲームではそれほど意識しなかったが、実際に砲弾の雨に晒されてみると、その轟音と衝撃はなかなか迫力があるものだ。

特に『ロングシンフォニー』の左舷甲板に搭乗していた連中は間近で砲弾が炸裂していることもあって、爆音と破片に悲鳴を上げて居る者も居た。

「うおおおー！」

「ひっ！」

「情けねえ声出すんじゃねえ！ 何のこれしき……」

「くっそ！ 本当に大丈夫なんだろうな!？」

しかし、この世界における火砲は概して精度が低い。

艦砲とはいえ、火力はともかく射程距離と命中精度はお察しだ。

戦艦同士の砲撃戦ではお互いにほとんど有効弾を当てられないまま時間が過ぎた。

たまに嫌な軌道で甲板近くまで飛んでくる砲弾もあるが、それは俺がチェーンガンで撃ち落とした。

艦砲の砲弾は空中で歪な火花を咲かせるようにして霧散する。

防御としてそれほど意味のある行為ではないが、味方の士気を上げるのには役立つだろうだ。

「おおおおお！ 撃て撃て！」

「勝てるぞー!!」

砲手たちは俺が敵の砲弾を撃ち落として防いだのを見て、狙い通りやる気を出して射撃を続けた。

しかし、火砲の精度が悪いのは『ロングシンフォニー』も同じこと。

相変わらず、お互いの戦艦に有効打は与えられないまま、弾薬だけが減っていく。

そして、呼吸を合わせるかのように両者の距離が少し開いたタイミングで、ファーガ

スンは次の指示を出した。

「トロットビークル部隊出撃！」

ついにビークル部隊を投入しての戦闘が始まった。

『ロングシンフォニー』から主に警察出身の市民軍兵士が乗る『ギャロップ・タイプD』が次々と飛び降りると、それに呼応するように敵の『エビルタローン』からもブラッディマンティスの制式ビークル『ナイトメア』が飛び出す。

砂煙の中にビークルのヘッドライトが揺らめく光景は何とも不気味だが、ここまで来たらやるしかない。

「野郎ども！ 遅れるなよ。片っ端から撃破だ！」

「[[[[おうー]]]]」

俺の指示に野太い歓声で答える荒くれビークル乗りたちも砂地に降り立ち、『ギャロップ・タイプD』の隊列に並びながら突撃する。

トロット楽団メンバーのビークルも、防衛特化仕様のマジヨラムの『イエロー・ベア』を残して、皆が戦艦の甲板を飛び降りた。

こちらのビークル隊の先頭には、いち早くスラスターをふかして飛び出したシユナイダーの『マキシマム』が突出している。

彼は敵艦の砲撃を掻い潜るようにして敵ビークル部隊の真ん中に飛び込むと、一瞬で数台の『ナイトメア』を撃破した。

さすがは接近戦のエキスパート、初撃で凄まじい戦果だ。

「ふん……」

シユナイダーがスカした表情で——本人にそのつもりはないかもしれないが——金棒アーム構え直すと、ブラツディマンティス側の『ナイトメア』が続いて「マキシマム」に襲い掛かる。

向こうも仲間をボコボコに潰されて黙っているタマではない。

だが、そんなタコ殴りを許すほど市民軍側も甘くはなかった。

シユナイダーに追従するように敵の隊列に突っ込んだこちらのビークル部隊は、そのまま敵と激突し、勢いに任せて押し込み始める。

「うおらああああ！」

「ブチ殺せえ!!」

「くたばれ、盗賊が!」

「俺たちの街を滅茶苦茶にしやがって!」

ブラツディマンティス側のほぼ規格化された『ナイトメア』の集団と違い、市民軍側には警察ビークルこそ多いものの途中参加のビークル乗りたちが大勢参加している。

これが原作とは大きく違う部分だが、トロット楽団メンバー以外にもカラーリングや武装の違いが多数入り混じり、戦場は一種のカオスと化した。

荒くれどもの品の無さも相まって、各所でどちらが敵か味方かわからなくなりそうなビークル同士のぶつかり合いが勃発している。

敵側はほぼ『ナイトメア』一色で統一されているが……俺はともかく、一部で誤射は避けられないかもしれないな。

そして、本格的なビークル同士の衝突が始まると、見慣れたトロット楽団メンバーたちも奮戦しているのがわかった。

「ちっ、出遅れたぜ」

「そこだー」

「ぼ、僕だつてー」

フェンネルの長距離キャノンが密集した敵ビークルの集団のど真ん中に炸裂し、バニラはガトリンググアームを乱射しつつトライデントでの確に敵ビークルに止めを刺し、バジルもすり抜けざまに『ナイトメア』の駆動部をクローアームで叩き斬っている。

三人の連携もなかなかのものだな。

フェンネルの『ブルー・サンダー』は完全に遠距離特化型で、バジルの『グリーン・リーフ』は接近戦仕様とはいえ軽量化によって機動力を向上した機体のため耐久力が低い。

十分な装甲と遠距離近距離ともに強力な兵器を搭載しているのはバナラの「カモミール・タイプⅡ」だけであるため、前衛と後衛の両方で戦うバナラの負担が大きそうな編成だが……操縦者の技量——特にバナラとフェンネル——でカバーしている。

見た感じ、『ナイトメア』ごときに遅れは取らなそうなので、放置でいいだろう。

「よし、こつちも片付けてやるか、な！」

正確に狙いすましたチェーンガンの点射は、こちらの戦艦に横から回り込もうとしていた敵ビークルの燃料タンクを撃ち抜いた。

俺も『ロングシンフォニー』の甲板から降りて、「ジャガーノート」のスラスターを起動して敵のビークル部隊に突撃する。

そして、砲弾の雨の中、しばしビークルが入り乱れての乱戦が続いた。

「死ねえ！」

「……………」

正面に迫る『ナイトメア』は、俺に向かってアックスを大きく振り下ろした。

量産型戦闘ビークルでは機動力も操作性も「ジャガーノート」に劣る以上、機体の重量を乗せた力押しは悪くない選択だ。

だが……。

「ぐわっ」

馬鹿正直に打ち合いはしなかったが、俺は強化ブレードで鋭く反撃した。

相手のアックスの柄近くを切り落とし、返す刀で敵ビークルのエンジンを突き刺して無力化する。

『ナイトメア』が崩れ落ちるのを待たず、俺はスラスターを噴射する勢いで「ジャガーノート」のボディを当てて敵を正面に弾き飛ばし、もう一台の敵ビークルを巻き込んで転倒させた。

舐めてもらっては困る。

俺もシユナイダー対策を含め接近戦の訓練は積んでいるのだ。

ちやうど正面が空いたため、俺はビークルを前方に滑らせながら旋回し、周囲に居た『ナイトメア』二台にチェーンガンを流し撃ちした。

燃料タンクを撃ち抜いたことで敵ビークルが炎上したが、俺は最後まで確認せずにさらに「ジャガーノート」を半回転させる。

「なっ!?!」

俺が強化ブレードで後ろから迫るアックスを防ぐと、敵ビークルの操縦手は驚愕の声を漏らしたが、こちらら乱戦の状況には慣れているのだ。

全方位に神経を張り巡らすことなど最早当たり前だ。

動きを止めた目の前のビークルのコクピットをチェーンガンで撃ち抜くと、そのまま次の敵の対処に移る。

至近距離で密着していたため、俺が罅迫り合いをしている状況と見たのか、俺を仕留めようと発砲してきたブラッディマンティスのビークルが居たが……俺は危なげなくスラストで砲弾を躲すと、チェーンガンを応射して無力化した。

「がつ、やめ……」

「悪いな」

スクラップと化した目の前の『ナイトメア』を「ジャガーノート」の人脚ノーマルM強化型で踏みつけながら、俺は続けてチェーンガンを点射して敵ビークルの燃料タンクや駆動部を撃ち抜いていく。

こちらに土手っ腹を晒している目立つ深紅の『ナイトメア』などいい的だ。

砂嵐で燃料タンクやコクピットに照準を絞ることは難しいが、最悪エンジンや駆動部に甚大な損傷を与えれば、近くの市民軍側のビークルがタコ殴りにしてくれる。

連鎖的に、俺も味方が敵の大群を抑え込んでくれるおかげで、チェーンガンを自由に撃ちやすくなっていった。

そんな具合に狙撃を続けていけば、俺の撃破スコアもどんどん溜まっていく。

「あいつだ！ あの黒いビークルをやれ！」

「また一台やられたぞー！」

さすがに味方を次々と撃破されれば、ブラッディマンティス側も黙ってはいない。

一部のビークルの編隊は市民軍の警察ビークルを無視して俺に向かってきた。

敵艦の近くではシユナイダーとバナラが盛大に暴れているが、少なくともひっきりなしに俺を狙う敵も現れるあたり、今のところ撃破数は俺の単独トップかもしれない。

俺の武装は命中精度が高く射程距離も長いので、どちらかと言えば後衛寄りにポジシヨンを取っている。

土埃と砲弾の舞う戦場では、視界が悪すぎていつも通りの射撃能力は発揮できないが、敵は俺を討ち取ろうとやってくるので、近場の敵を殲滅するだけでも撃破数は順調に伸びている。

近づいてきた『ナイトメア』をまとめて強化ブレードで斬り捨て、俺は容易く敵の包囲網を突破して後退る敵ビークルにはさらにチェーンガンの弾を撃ち込んだ。

「退け！ 退くんだ!!」

「あいつはいい！ 手を出すな！」

さすがに突撃部隊を殲滅されては分が悪いことを感じ取ったようだ。

指揮系統に近い敵ビークル部隊は、徐々に俺から距離を取っていった。

さて、戦局はどう動くか……。

103話 ガラガラ砂漠決戦2

「グレイ！ 無事!？」

「ああ、問題ない」

「ジャガーノート」の後ろに背中合わせになるように滑り込んできたのは、サフランが駆る「ステイール・モラル」だった。

彼女がウィツプアームを振るうと、少し離れた位置に居た二台の『ナイトメア』がレッグパーツに深刻なダメージを受けて移動速度が低下する。

二台の『ナイトメア』はそのまま市民軍に参加するビークル乗りたちにタコ殴りにされて、稼働を停止した。

その後ろに居た『ナイトメア』は市民軍のビークルに襲い掛かろうと飛び出したが、俺がチェーンガンで燃料タンク辺りを掃射し、爆散させた。

「キリがないわね、ホント」

「ああ。だが、片っ端からやるしかない」

スナイパーアームで慎重に『ナイトメア』を撃ち抜くサフランに応えつつ、俺もチェー

ンガンで周囲の敵ビークルを掃射して潰してゆく。

サフランがウィップアームでまとめて薙いで動きを止めた敵を、俺がチェインガンの点射で止めを刺し、彼女が発砲している隙を突いて接近する『ナイトメア』はアックスアームごと俺が強化解ブレードで切り裂く。

俺とサフランはいつの間にかお互いの背中を預け合うようにして戦っていたが、敵を撃破する速さは加速度的に向上していった。

「こういう連携は初めてだけど……私たち、上手くやれてるわね!」

「ああ」

俺が相槌を打つと、サフランは口元に明るい笑みを浮かべながらペダルを踏んで「ステイル・モラル」のラスターをふかした。

お互い、ほぼタイムラグの無い自然な連携で左右から敵部隊に接近し、全方位から囲んで攻撃を仕掛けるようにして撃破していく。

「でも、本当にどうする? このままじゃ、お互いに犠牲が嵩んでいくだけよ」

「……………」

俺とサフランは連携して周囲の敵を次々と屠っていたが、敵の前線部隊はなかなか減らない。

弾薬はまだ十分余っているので、実際にはそれほど時間は経っていないはずだが、極

度の緊張下にあるためか、もう何時間も戦っているような気がする。

……この状況が続くのはよろしくないな。

こちらの集中力にも限界がある。

しかし、先に前線が崩壊したのはブラッディマンティス側だった。

ちょうどフェンネルが狙いすまして放った長距離キャノンアームが、『エビルタロンの』の甲板から飛び出しかけた『ナイトメア』に命中した。

完全に突撃体勢で前のめりになったところで先頭のビークルを吹き飛ばされ、敵のビークル部隊は一瞬だが混乱し圧力が弱まった。

「見たかー！」

「いいぞ、フェンネルー！」

そのチャンスを逃すバニラではない。

フェンネルよりも前に出ていたバニラは、そのままガトリングの乱射とトライデントの刺突で『ナイトメア』をまとめて撃破した。

さらにシュナイダーもバニラの「カモミール・タイプⅡ」に続いて前線を押し上げる。

「くっ、止めろ！ 奴らを止めろ！」

「困め！ 押し込むんだ！」

『エビルタロン』への接近を許したくないブラッディマンティス側は防衛体制を取

り、バニラとシュナイダーのピークルに『ナイトメア』が群がった。

しかし、この段になると展開を読んでいた俺もサフランと散開して最前線へ駆けつけている。

『ロングシンフォニー』は甲板で盾タンクと化しているマジヨラムと、遊撃で護衛をしているサフランに任せてきた。

『エビルタローン』の甲板上にはシュナイダーの「マキシマム」にキャノンの狙いを付けようとしている『ナイトメア』が居たので、俺は慎重にチェーンガンの狙いをつけて引き金を引いた。

既に十分に敵艦を射程内に捉えるまで接近しているので、ここで狙いを外しはしない。

「ごわっー！」

俺の放った弾丸は寸分変わらず敵ピークルの弾薬ボックスを撃ち抜いた。

爆発と破片に巻き込まれたことで、ブラッディマンティス側のピークルは『エビルタローン』の甲板上でもさらに一部がまとめて戦力を失う。

これでシュナイダーの正面はクリアだ。

「そのまま進めー！」

「む……」

目の前で敵ビークルが爆散し俺に視線を向けていたシュナイダーは大きく頷き、『エビルタローン』に向き直るとスラストターをふかした。

シュナイダーには何か策があり、敵艦の懐に潜り込みたがっていることは見て取れたので、俺は引き続き『エビルタローン』の砲台や周辺のビークルに牽制も兼ねてチェーングンを撃ちまくった。

そして敵艦の甲板上に躍り出たシュナイダーは、主砲が備え付けられた砲塔近くに【マキシマム】を着地させる。

「よし……」

珍しくシュナイダーは口元に笑みを浮かべた。

そして次の瞬間、『エビルタローン』の甲板上で眩い爆炎が辺りに飛び散った。

ブラッディマンティス側の陸上戦艦『エビルタローン』の甲板上で起こった爆発は、ビークル部隊が一瞬動きを止めて注目するのに十分な規模のものだった。

「うお！ 何だ……?」

「シュナイダーだ！ 【マキシマム】が突っ込んだぞ！」

「どうなったんだ!?!」

一見、敵艦に特攻したシユナイダーが爆発四散したかのような光景だ。だが、もちろん彼はそんな間抜けではない。

【マキシマム】は『エビルタローン』の甲板上で健在だ。

シユナイダーが使用した武器は、バックパーツの『エクスプロージョン』だ。

強力な爆弾を周囲にぶち撒ける一回使い切りのアイテムだったはずだが、ビークルバトルで使うような武器ではないため、俺もこの世界で実際に使われるのを見たのは初めてだ。

シユナイダーはさすがに愛用しているだけあって、使い方もタイミングも完璧だった。

『エビルタローン』の主砲がいくつか潰れ、船体の装甲にも所々大きな亀裂が入っている。

敵の武装はいくつか無力化できたうえに、内部へ攻撃を仕掛ける足掛かりとなる状況も作ることができた。

シユナイダーが突出して『エビルタローン』に到達したときは、普通に砲塔を殴ると思っただけに、戦果としては想像以上のものだな。

だが……『エビルタローン』を撃破するには至らないか。

本人にしてみれば、エクスプロージョンは囲まれたりや巨大ビークルと戦う羽目に

なったりしたときの切り札だろうが、巨大な陸上戦艦の耐久力はそれ以上だったわけだ。

まあ、バックパーツを丸々占領するサイズの爆薬とはいえ、ピークル一台で破壊できるほど巨大戦艦は甘くはないということだ。

「くっ……」

シュナイダーはスラスターをふかして後退った。

『エビルタローン』の無傷の砲塔が「マキシマム」を追い、次々と砲弾を撃ち出す。先ほどの一撃で、敵艦の砲術クルーはシュナイダーを集中的に狙い出したようだ。

「マキシマム」には遠距離兵装が無いので、エクスプロージョンを使い切った今、シュナイダーにまともな反撃の術は無い。

後退しつつ翳されたシュナイダーのオリジナルパーツであるシールドアームSSは、砲弾の破片を受けて所々が挟られている。

「シュナイダー、下がれ！ 野郎ども、制圧射撃だ！」

「……おう！……」

俺の指示で、一時的に混乱していた志願兵のピークル乗りたちは勢いを取り戻し、敵艦に近い位置に居る者たちは『エビルタローン』に砲弾や弾丸を浴びせた。

そして、すぐにまた目の前の敵ビークルとの取っ組み合いに戻ってゆく。

援護は一時のものだったが、シュナイダーが離脱する時間は十分にあった。

彼は敵の集団から抜け出るようにビークルを滑らせると、俺の近くまで戻ってきた。

「おい、無事か？」

「問題ない」

「……無茶しやがる」

言葉は少なかったが、シュナイダーに深刻なダメージが無いことは見て取れた。

戦闘を継続できると判断した俺は、周りを見回してシュナイダーと敵の位置をざっと確認する。

俺たちはお互いにカバーし合うポジションで並び、こちらに接近する『ナイトメア』の集団と対峙した。

「……で、どうするんだ？」

「ん？ 何が、だ！」

シュナイダーが張り倒して動きを止めた『ナイトメア』を横目で見つつ、俺はその後ろから迫る別の敵ビークルをチェーリングガンで撃ち抜いた。

俺が振り向きざまに別の『ナイトメア』のアームを斬り飛ばしダツシユアタックで弾き飛ばすと、既に最初の敵を始末していたシュナイダーが俺のお残しにも止めを刺して

戻ってくる。

まるでプロレスの連携技だが、自然にできるあたりが何ともシュナイダーの格闘スキルの高さを物語っている。

至近距離に詰めた敵ビークルのアームを掴んで捻るようにして拘束し、コクピットを金棒アームで叩き潰したシュナイダーは、こちらへ僅かに顔を向けて呟いた。

「このままでは、厄介なことになる……」

「……………」

確かに、シュナイダーの言う通り、戦況はそれほど良くない。

まだ前線が押し返されはしていないものの、市民軍のビークル部隊が敵艦に到達できないまま時間が過ぎ、『エビルタローン』の主砲によってもビークル部隊にそれなりの被害が出ている。

仮にこのまま状況が拮抗すれば、恐らく市民軍側が僅かに不利になる。

敵艦の射程内ということもあるが、何よりビークルの性能の差が看過できない。

お互いのビークル部隊の戦力は、ブラッディマンティス側はほぼ制式化された量産型戦闘ビークル『ナイトメア』で統一されているのに対し、市民軍側は一部にビークル乗りが自前で用意した汎用型も含まれるが半数以上を警察ビークルの砂漠仕様『ギャロツプ・タイプD』が占めている。

ハッピーガーランド警察には最新式の『ギャロップ』も配備されているが、そのほとんどが平地仕様である。

火力とシールドの性能こそ優れているものの、警察用の量産型として規格化されている以上、汎用性が低く砂漠対策の面で大きく劣る。

そんなわけで、市民軍に参加する警察官や兵士は主に『ギャロップ・タイプD』を引つ張り出して使っているわけだが……。

この機体……ファーストガスンや警察関係者曰く、先のデザートホーネット団の大規模討伐の際に活躍した機体もあるそうだ。

歯に衣着せず言えば、型落ちのボンコツだ。

はつきり言って、こちらの主力ビークルは性能的に『ナイトメア』に一段劣る。

原作とは明らかに違うが、こういうところが現実の恐ろしい部分だな。

「……一石を投じる必要があるか」

「？」

「シユナイダー、手を貸してくれ。まずはもう一度正面に突っ込むぞ」

「……ああ」

104話 ガラガラ砂漠決戦3

俺とシュナイダーが『エビルタローン』の正面に回ると、そこにはトロット楽団メンバーたちのビークルも居た。

バニラとフェンネルを筆頭に、相変わらず敵の『ナイトメア』集団を相手に大立ち回りを演じている。

「くそっ、もう弾が残り少ないぞー！」

「僕もだー！」

フェンネルとバニラの声がちちらにも聞こえた。

弾数の少ないフェンネルは節制していたようだが、それをカバーするバニラもついにガトリングアームの弾丸が尽きかけている。

俺のチェーンガンに比べれば携行弾数が少ないとはいえ、ガトリングアームは元々が装弾数の多い武器だ。

相当、撃つたようだな。

そして、俺とシュナイダーが群がる『ナイトメア』を弾き飛ばしながらバニラたちの

元へ到着すると、少し離れた場所から聞き覚えのある声が響いた。

「しまったー！」

「バジルー！」

バジルの『グリーン・リーフ』は、軽いボディの機動力を活かして何台かの『ナイトメア』をクロージャーームで撃破したが、ついには軽量タイプゆえの弱点を突かれてしまう。あいつのピンチというと、何となくネフロのキラエルフアント団襲撃を思い出すが、今回もなかなかヤバイ。

敵ビークルにダッシュアタックで弾き飛ばされた『グリーン・リーフ』が体勢を立て直す前に、バジルの正面にはアックスを振り上げた『ナイトメア』が迫っていた。

しかし……。

「あがー！」

今度もバジルが瀕死の重傷を負うことは免れた。

『グリーン・リーフ』の目前まで迫っていた『ナイトメア』は、コクピットごと操縦手を撃ち抜かれてその場で動きを停止した。

当然、敵を無力化したのは俺のチェーングンだ。

今回はミサイル弾を撃ち落とすより簡単だった。

「あ、ありがとう、グレイ……また、助けられたね」

「ああ、構わん。気にするな」

生返事をしつつ、俺はバジルのビークルをぎっと見まわした。

駆動がイカれるほどの損傷は受けていないが、先ほどの衝突のダメージは結構な傷を齎している。

少し危ないな。

「ボデイの損傷がひどい。戦艦まで下がれ」

「……わかったよ」

さすがにここで意地を張るつもりは無いのか、バジルはゆっくりとビークルを反転させると『ロングシンフォニー』の元へと戻っていった。

マジヨラムと行動を共にすれば、バジルも何とかなるだろう。

続けて、俺はこちらを見ていたバナラとフェンネルに声を掛ける。

「バナラ、戻るの少し待て！ フェンネル、少し距離において俺たちの後ろに。キャノンの準備を整えておけよ」

そして、シユナイダーに目配せした俺は、そのまま再び『エビルタローン』の甲板へとビークルを向ける。

【ジャガーノート】と【マキシマム】は並んで砂漠地帯を滑走し、敵ビークルの密集する最前線まで突撃した。

『エビルタローン』を守るように立ちはだかる『ナイトメア』の集団を前に、俺とシユナイダーはどちらともなく散開し波状攻撃を仕掛けた。

敵も大量に自陣営のビークルを撃破した俺たちが現れたことで、僅かに浮足立って防御態勢を取った。

俺は容赦なくチェーンガンを敵の燃料タンクに撃ち込みつつ、『ナイトメア』の数を減らしていった。

シユナイダーはとにかく敵の至近距離まで接近して殴りつけ、俺は時々ブレードを振りつつチェーンガンでの確に敵ビークルを始末する

そして、近くに居る敵ビークルがほぼ殲滅されたところで、先ほど簡単に打ち合わせた通り、シユナイダーに指示を出した。

「シユナイダー！ そいつを抑えてろ！」

「ああ」

「つぐ、何を……っ！」

この近くでは最後の生き残りとなった『ナイトメア』を、シユナイダーは金棒を絡めシールドアームSSで押さえつけるようにして拘束する。

さすがに格闘戦の専門家だけあって鮮やかな手並みだ。

「い、いぞ……」

「っ！」

俺はシュナイダーが動きを抑制している敵ビークルの後ろに回し込むと、狙いすましてブレードを振るった。

少し悪趣味な気もするが、これも一つの策のためと思い、俺は強化ブレードアームのレバーを慎重に操作する。

コクピットごと斬殺された操縦者の遺体とともに、『ナイトメア』の武装やアームパーツなど重い部分がガシャガシャと音を立てて落下した。

そして、アームを敵のビークルから離れたシュナイダーに変わり、今度は俺が『ナイトメア』の残骸を「ジャガーノート」のアームで持ち上げる。

「こいつを……あの射出口に」

「……………」

俺はシュナイダーほどビークル同士の接近戦や掴み合いに精通しているわけではないが、「ジャガーノート」のパワーは他の汎用ビークルを大きく凌ぐ。

コントロールはともかく、シュナイダー以上の力で投擲すること自体は可能なのだ。

「ふんー」

俺は両方のアームで『ナイトメア』を掴むと、スラスタの勢いも利用して敵を持ち

上げた。

周囲のビークル乗りからは何事かと視線を向けられるが、今は構っている余裕がない。

俺はアームパーツで掴んで安定させた『ナイトメア』の残骸を、そのまま空中に放り出した。

そして、放り上げた敵ビークルが『エビルタローン』の甲板を超えるくらいの高さに到達したタイミングで叫んだ。

「やれー！」

「むっ……」

シュナイダーはほぼ無言だったが、先ほど軽く説明はしていたので、俺の意図をはつきりと汲んでくれた。

空中に躍り出たシュナイダーは、接近戦の間合いのセンスを如何なく発揮し、空中で『ナイトメア』の残骸に体当たりして弾き飛ばす。

まるでバレーボールのトスからアタックのようなコンビネーションだ。

【マキシマム】のタックルの威力をまともに受けた『ナイトメア』の一部は、かなりの勢いで『エビルタローン』のビークル射出口に転がり込んだ。

傍から見れば、敵のビークル射出口を塞いで時間稼ぎをしているだけだが、これで計

算通りだ。

そのまま近くに散らばる敵ビークルの残骸から、燃料タンクやら弾薬ボックスやらを引っぺがし、シュナイダーと協力して同じ場所に投げ込む。

この段になると、敵も俺の意図に気付いたようだが、俺はさらに声を張り上げて指示を飛ばした。

「フエンネル！ あそこだ、ぶっ放せ！」

「っ！ おう！」

事前の説明もないぶっつけ本番だが、フエンネルもそれなりのキャリアを持つビークルバトラーだ。

突然のことも、射撃の正確さは健在だった。

「ブルー・サンダー」が放った長距離キヤノンのミサイル弾は、見事に『エビルタローン』のビークル射出口に蓄積された危険物の山に着弾した。

一瞬の静寂の後、視界がホワイトアウトしかける規模の閃光と衝撃が発生し、爆発の勢いで周囲に鉄の破片が乱舞した。

【ジャガーノート】のcockpitで姿勢を低くして衝撃と破片をやり過ごした俺は、敵の陸上戦艦『エビルタローン』に視線を戻した。

相変わらず巨大兵器の佇まいは健全だが、船体には大きなダメージを受けていることが見て取れる。

ビークル射出口がズタズタに破壊され、まさに満身創痍といった様相だ。

敵の弾薬や燃料をありつたけ再利用した破壊工作は、先ほどのシユナイダーのエクスポーションに劣らない威力を発揮したようだ。

艦橋や砲塔にもかなりの損害が出ており、今が畳みかけるチャンスだ。

「止めだ！ 突入するぞ。バニラー！」

「っ！ ああ」

俺は近くに居たバニラーに声を掛けると、「ジャガーノート」のスラスターを起動して素早く『エビルタローン』に上がり込んだ。

大きく抉れたビークル射出口と艦橋近くの亀裂にチェーンガンを撃ち込むと、中から人の呻き声が発せられる。

「おらっ！」

さらに、強化ブレードで亀裂の入った装甲を斬りつけると、爆発の圧力で大きく歪んでいた戦艦のボディは今度こそ大きく切り開かれ、中の様子が露わになる。

ブラッディマンティスの軍服を着たクルーと目が合い、連中が息を呑む声が聞こえた気がする。

「う、うわあああああああああ！」

「く、来るな！」

ブラッディマンティスの兵士たちは我先に艦の右舷へと殺到し、隔壁や扉を潜って逃げようと試みた。

銃で武装している奴も居るみたいだが、ざっと見たところ、反撃してくる度胸のある奴は居ないようだ。

俺は容赦なく後ろからチエーンガンの弾丸を浴びせてゆく。

バナラも穴が開いた場所を中心にガトリングアームを撃ちまくり、直接人体の撃ち込むことは躊躇しているが、戦艦内部を破壊することによって破片や倒壊した資材で乗組員に攻撃を加えていった。

「ひ、やめ……」

「あ………が……」

悪いが、これは戦争だ。

ここで勝たないと、さらに犠牲が増えてしまう。

バナラのガトリングアームはそろそろ弾切れのようだが、俺はさらに容赦なくチエーンガンを撃ちまくり、銃身が赤熱しそうなくらい弾丸を連射した。

そして、ついにこちらの弾丸は『エビルタローン』の燃料系統の配管を捉えた。

噴き出した炎は一気に広がり、艦橋や甲板も不完全燃焼の火に包まれる。

激しく炎上を始める『エビルタローン』を見て、市民軍側もブラッディマンティス側もこちらに視線を集中させた。

「つと……離れろ！ 皆、退避しろ!!」

俺は力の限り叫んでバニラたちに離脱を促した。

炎はさらに勢いを増し、さすがに状況が状況だったため、近くに居た市民軍ブラッディマンティス双方のビークルは機体を反転させてその場を離れようと試みる。

そして……。

「うおー」

「くっ……」

次の瞬間、『エビルタローン』の船体の中心で爆発が起こり、敵艦はパーツをぶち撒けて稼働を停止した。

黒煙を吐き出しながら艦体が崩壊を始めているあたり、完全に大破と言っている状態だ。

どうやら、砲塔下の弾薬庫に誘爆したようだな。

さすがにここまでのダメージを受けては、巨大な決戦兵器といえど戦闘継続は不可能だ。

既に『エビルタローン』の所々のハッチから、転がり出るようにクルーが退艦を始めている。

ブラッディマンティス側の旗艦が撃沈された事実は、瞬く間に戦場の双方の兵士に共有された。

「やった！ ブラッディマンティスの戦艦を破壊したぞー！」

「我々、市民軍の勝利だ！」

歓声を上げる市民軍とは対照的に、ブラッディマンティス側の兵士たちの間には悲壮感と混乱が広がっていく。

油田基地の方角へ逃げ出す者、その場で動かずに立ち尽くす者、ビークルを降りて降伏する者……それぞれの方法で、敗戦の現状を受け止めた。

そして、市民軍側の司令官であるファーガスンは、喜びに沸く俺たちに淡々と告げた。「よし、帰還するぞー」

あっさりとしたものだが、俺たちの目的は敵戦力の撃破と油田の解放であって、略奪でも虐殺でもない。

荒くれどもには少し不完全燃焼かもしれないが、あとは石油会社の技術者も合流した部隊が油田を掌握する段になっての話だ。

この状況に乗じてコンフリーやベルガモットあたりを確保できないものかとも考え

たが……こちらの戦艦やビークル部隊にも被害が出ている以上、深追いは危険だな。

 ガーランド警察の関係者が最低限のブラッディマンティス構成員を捕縛し、市民軍のビークルは砲塔と甲板の一部が破壊された『ロングシンフォニー』に乗り込み、俺たちはコンドル砦へと帰投した。

105話 家族のもとへ

コンドル砦の市民軍の本陣に帰還し、一通り負傷者の収容などが終わったタイミングで、ファーガスンは俺たちを『ロングシンフォニー』の甲板上に集めた。

一部のビークル乗りは帰ってしまつたが、残つた市民軍の兵士たちは皆晴れやかな表情で甲板にやつて来た。

「皆さん！ よく、戦つてくれました！ 我々の元に、油田を取り戻すことができました！」

演説を始めたファーガスンは、声を張り上げて称賛した。

そして、ファーガスンは俺とバナラの方へ向き直る。

「ありがとう、グレイ君、バナラ君。君たちの活躍なくして、市民軍の勝利は無かつたよ」
「どうやら、俺とバナラがツートップで第一功に近い扱いのようだが、それに不満を言う者は一人も居ない。」

『エビルタローン』に止めを刺したという意味では、フエンネルとシュナイダーも同じくらいの働きをしたと思うが……当人たちがさっさと帰ってしまった以上、仕方ない

な。

「それでは、皆さん！ 胸を張って、我が家へ帰りましょう！」

そして、市民軍の参加者たちは思い思いに散ってゆく。

ブラッディマンティスによる油田の占拠に対処するため集められた市民軍は、今をもつて解散だ。

慰労金も勲章もない。

報酬は……強いて言えば、戦時中の食事と弾薬およびビークルの整備は無料で面倒を見てもらえるくらいか。

思えば、何とも見返りの無い損な役回りだったな。

だが、それでも自分の街と生活を守るために、ハッピーガーランドの連中は戦うことを選んだ。

そして、一部の資産家もどきの連中は、この情勢と戦後の復興の勢いを利用して、また一儲けを企む……そうして、この世界は回っていくわけだ。

まあ、俺も戦後に台頭する金持ち連中を高級シャンプー・リンスや洗濯機の顧客に取り込めないか、油田開発の再開に便乗して余剰ガスの利用——現在はほぼガスフレアと化して無駄になっている——に食い込めないかを考えている辺り、ファーガスンに突き上げをカマしてきた連中を完全に非難はできないか。

そんな益体も無いことを考えていると、俺は後ろから声を掛けられた。

「何シケた顔してんのよ？ グレイ」

「ん？ ああ、サフランか」

サフランは相変わらず仮面と派手な化粧に普通の服という、妙な組み合わせの装いをしていた。

「ねえ、この後の打ち上げ、参加するわよね？」

「どうやら、市民軍に参加したピークル乗りやその他諸々で、街に繰り出し飲み明かす計画があるそうだ。」

まあ、市民軍自体は有志の持ち出しだからな。

戦いが終わってそのまま解散では、物足りないと思うのも仕方ないことだろう。

聞けば、俺の指揮下にいた荒くれピークル乗りたちも結構な割合で参加しており、何故かコニーの家の隣のおばさんも来るらしい。

「あゝ、すまんが今回は……」

「何よ。シュナイダーといい、フェンネルといい……ツれないじゃない」

一匹狼のシュナイダーにスカしたフェンネルは不参加あたり、まあ想像の通りか。バニラは残念ながら未成年、と。

俺は……安くは済まないであろう支払いが嫌なわけでも、ピークル乗り同士の繋がり

を軽視しているわけでもないが……今は一刻も早くピジョン牧場に戻りたい。

それだけだった。

「言っておくけど……今から下り線の汽車に飛び乗ったところで、ネフロで終点よ」

「……………」

サフランの言う通り、今から戻ってもネフロからピジョン牧場へはビークルで移動することになり、ナツメツグ邸に着くころには深夜か明け方だ。

妙に気を急いで行動する必要は無いか。

戦争は、終わったんだ。

「大切な人が待つてるのは知ってるけどね。その幸せ、少しくらい分けてくれてもいいじゃない?」

「わかったわかった。だが、始発に間に合う時間で俺は消えるからな」

「わかってるわよ。じゃあ、行きましょう」

俺は「ジャガーノート」に乗り込むと、今も再会の喜びとともに甘い空気を振り撒くバナラとコニーに一声かけ、サフランと連れ立って砦を後にした。

そのままビークル乗りたちが待つ酒場に向かい、派手な歓迎を受けつつ、俺もジョッキになみなみと注がれた酒を飲み干してゆく。

俺はそれほどアルコールを好むわけではないが、大仕事の後はヤケに美味しく感じるも

のだ。

そして、日付が変わったあたりから出始めた泥酔者を足蹴にしつつ、日が昇っても飲み続ける荒くれどもに一声かけ、俺はハッピーガーランド駅からピジョン牧場方面の始発列車に乗り込んだ。

因みに、支払いは最終的に数万URが飛んだ。

ほとんどはサフランが勝手に注文した酒の値段が占めているようだが……そのブランデー、俺はほとんど飲んでないんだけどな。

解せぬ……。

ハッピーガーランドからネフロを経由してピジョン牧場駅へ。

結構な時間を汽車に揺られてコンパートメントで転寝しつつ過ごした俺は、懐かしの我が家へと戻ってきた。

草を食む羊の群れ、相変わらず飛行実験を繰り返して墜落するライト兄弟もどき。

つい先日まで戦争中だったとは信じられない長閑な光景だ。

牧草地を過ぎて丘を登ると、やがて特徴的なフォルムの工房を隣接したナツメグ邸が見えてくる。

そして、家の前に「ジャガーノート」を駐機して荷物を下ろしていると、家の中からパタパタと足音が玄関に近づき、やがて正面扉が開かれた。

「ああ、帰ってきたね」

俺を出迎えてくれたマルガリータは軽い調子で声を掛けてきた。

コンドル砦に戻る前に会ったときと何一つ変わらない、いつも通りの彼女だ。

今は彼女の声を聞けることが素直に嬉しい。

彼女とは、随分と長く離れ離れになっていた気がする。

市民軍がブラッディマンティスに宣戦布告して、その後一度ピジョン牧場に帰ってきて、それからまだ数日程度しか経っていないはずなのに……。

だが、それも最早どうでもいい。

無事に戦争を生き延び、マルガリータと再会できた。

それだけで、十分だ。

「マルガリータ……」

「っー」

俺はそのままマルガリータを抱き締めようと近づいたが……何故か、手を伸ばすとスルリと身を躲された。

彼女の表情は普段より少し険しいものだったが……まさか、臭かったのか!?

確かに、戦争中は薄汚れた荒くれビークル乗りどもと行動を共にしており、最終決戦では砂埃と煤に塗れる羽目になり、昨日の夜はその薄汚れどもと一緒に飲んでいた。

とはいえ、体はきちんと拭いていたはずだが……。

「先生から話があるそうだよ」

「……………」

「どうやら、ナツメツグ博士の用件が優先らしい。」

「何だか肩透かしを食らった気分だが……戻ってきて早々に不満を言うのも考え物だ。」

「それに、砲弾の雨が降り注ぐ乱戦を切り抜けて、戦争が終わって、荒くれビークル乗りどもと飲み明かして、ようやくうちに帰ってきて……さすがの俺も疲れた。」

「ここはおとなしく家の上げてもらおうとしよう。」

「ああ、わかった。行くよ」

「うん、そうして」

「トランクを提げた俺のためにドアを開けてくれたマルガリータに従い、俺はナツメツグ邸の扉を潜った。」

「どうも、博士。ただいま戻りました」

「うむ、よく無事に帰ってきたの」

ナツメツグ博士はダイニングのテーブルで俺を待っていた。

話があるそうなので、とりあえずスーツケースを部屋の隅に置き、俺も席に着く。

俺の隣にマルガリータが座ると、博士は口を開いた。

「さて、お前さんも疲れておるじゃろうから、簡単に報告しよう。ローズマリーの確定診断がついた」

博士の話の内容は、大体予想通りのものだった。

決戦前にピジョン牧場に戻って来たときに、そんな話もしていた。

ようやく診断機器が届き、疾患を特定できる検査ができたとのことだ。

「長期的に呼吸器全体が蝕まれる病じゃ。長年ヤニを吞んできた年寄りに多い疾患じゃが、ローズマリーは元々あまり体が強い方ではなくてな。車やビークルや工場の排気ガスの影響を、人よりも強く受けてしまったようじゃ」

「では……」

「ああ、グレイの予想通り。わしの当初の診断通りじゃな。幸い、ローズマリーはまだ若い。今なら、空気の綺麗な田舎で養生すれば回復も見込めるはずじゃ。……話は終いじゃ」

ローズマリーの病気に関しては、原作と同じ状況で間違いないようだ。

地球の医療で言えば、疾患名はCOPDあたりかな。

多くの場合はタバコが原因なので、一番の治療は禁煙というのが一般的な認識だが……ローズマリーは非喫煙者だ。

この世界では、内燃機関を利用した自動車やピークルが最近になって一気に普及したため、質の悪い排ガスの濃度が急激に上がった。

加えて、ローズマリーは世間一般の人々よりも肺や気道粘膜が弱い。

排ガスが原因で非喫煙者が肺癌に罹った例もあつたはずなので、この疾患と原因の因果関係もあながち的外れなものではないだろう。

治療も、かねてから計画していた通り、ピークルや車が少ない田舎への隔離で決まりだな。

原作では、戦争の後すぐに実家に戻っていたコニーからこのことを聞かされるところから話が進むが……今のコニーはバナラとイチヤコラしている最中で、恐らく今もハツピーガーランドだ。

ローズマリーの移送はコニーも同行するだろうし、原作通りバナラに任せるとして……まずはローズマリー自身に診断結果のことを伝えるか。

「グレイ」

俺が今後の予定を考えていると、ナツメツグ博士は俺に声を掛けた。

先ほど話は終わりだと宣言した割に、博士は席を立とうとしない。

「何か忘れとりやせんか？」

「忘れ……？ ああ、ローズマリーさんのことなら、明日にでも俺がネフロに行つて伝えて……」

「違う。今はそれよりも大切なことがあるじやろう」

しかし、博士は若干苛立った様子で俺を遮つた。

ブラッディマンティスの件を今さら蒸し返すとも思えないし、あまり身に覚えが……。

すると、博士はため息をついて俺をねめつけた。

「まったく、お前さんは………まあ、マルガリータも素直じゃないからの。ここ最近の様子といたら、本当に見てられんものだったな。飯も喉を通らず、エンジンの調整ではミスを連発し、終いにはお前さんの部屋で毎晩すすり泣いておったぞ」

「ちよ、ちよつと！ 先生！」

マルガリータは慌てて遮ろうとしたが、博士は逆にマルガリータをねめつけて言葉を続けた。

「それだけではない。今回はグレイの奴も戦争が終わってすぐに帰ってきたが……一体、何日徹夜で待つつもりだったんじや？」
【ジャガーノート】の音が聞こえたときのお

前さんの喜びようといったら……」

俺は思わずマルガリータの方へ向き直った。

マルガリータはすぐに顔を背けられてしまったが、よく見ると彼女の目の下には隈が出来ている。

顔立ちの美しさと力強さもあつて彼女の美貌が損なわれることは無いが、こうして近くで見ると明らかに憔悴していることがわかる。

思えば、俺はあまりにも無神経だったかもしれない。

原作シナリオが佳境に入つて、世界が大きな混乱に見舞われて、介入するのに夢中で……。

挙句の果てに、まともにも相談することも話し合うこともせず、戦争に参加してきた。

本当に心配させてしまった……。

しかし、俺にはレンチまで投げようとするくせに、博士には何もしないのな。

「……何さっ」

俺がじつと彼女を横から見ていると、いつも通りぶつきらぼうな疑問が投げつけられた。

悲しい思いをさせたことを謝るべきか、心配してくれたことに礼を言うべきか……いや、違うな。

俺は椅子から立ち上がると、相変わらずこちらと目を合わせようとしないマルガリータを後ろから抱き締めた。

「…… ただいま」

他愛のない一言、謝罪でも感謝でもない軽い一言。

それでも、戦争から無事に帰ってきて、誰よりもマルガリータに言いたかった言葉だ。中身も重みも無い一言に、マルガリータは嫌味で返してくるものかと思つた。

しかし、彼女は何も言わず、体の前に回された俺の腕をしっかりと抱き込む。

そして、微かに口元を動かしたマルガリータから漏れた一言は、はつきりと俺の耳に届いた。

「……馬鹿」

シャツの袖を捲り上げた腕に少し熱を持った液体が垂れてくるのを感じたが、俺もマルガリータもしばらくこの姿勢を解くつもりは無かつた。

翌朝、自室のベッドで目覚めた俺は、心地いい腕の痺れと仄かに漂うオイルと花の香りにニヤけながらも、枕元の時計を確認した。

いつもの起床時刻より少し遅めだが、寝坊と言うほどでもない。

昨晚も……世間一般の夫婦以上の回数をこなしてしまつたが、どうにか俺の体力は大丈夫だ。

俺は隣のマルガリータを起こさないようにゆっくりと起き出そうとしたが……俺の心配を感じ取つたのか、彼女も欠伸をしながら顔を起こした。

「……………」

寝ぼけ眼のまま俺に微笑んだマルガリータは、そのまま二度寝するかのような体勢で俺の胸に頭を預けた。

気の抜けた表情といい、仕草といい、無防備に肌を晒した姿といい……可愛すぎる。

そんな彼女の髪を撫でながら、俺は本日の予定を告げた。

「今日はネフロに行くてくる」

一瞬、マルガリータの体がピクリと強張つたのがわかつた。

「また、危ないこと？」

「いや、ローズマリーさんに会いに行くだけだ。昨日、博士も言っていただろ？」

「なら、危ないのはその後だね」

敵わんな……。

確かに、ブラッディマンティスとの決着はまだついていない。

これから連中は『グランドファイナル』を持ち出して、先の戦争以上の騒動を起こし

てくる。

しかし、奴らに関してマルガリータが詳しく知っているわけもない。

予備知識ではなく俺の様子から色々察したのだろう。

俺がどう答えるべきか迷っていると、マルガリータはため息をついて横に転がり、俺の上から降りた。

そのまま俺の腕を避けるようにしてそっぽを向き、目を閉じて二度寝の態勢に入ってしまう。

何だか、彼女と一夜を共にした後は、毎回こんな感じになってしまうな。

「朝食を用意する」

俺は少し後ろめたさを感じながらそう宣言し、マルガリータの筋肉質だが柔らかい肩にシーツを掛けた。

ついでにキスしようと試みるが、これは防がれてしまった。

振り払うとまではいかないが、マルガリータは顔を背けて俺の唇を避けた。

ははっ……ご機嫌斜めか。

少し落胆しながら、俺は軽くシャワーを浴びてキッチンへと向かった。

キッチンで俺がフレンチトーストを焼いていると、ナツメツグ博士が起き出してき

た。

「おはようございます」

「うむ、おはよう」

軽く挨拶を交わすと、博士はテーブルに紙袋を置いて俺に示す。

以前から何度も配達しているローズマリーの薬だ。

「お前さん、今日あたりネフロロに行く予定じゃな？ 例の件を伝えるついでに、追加の薬も持って行ってくれ」

「わかりました」

「……対処療法もこれが最後になるといいの」

「……ええ、本当に」

ベーコンとほうれん草の炒め物をテーブルに並べつつ、俺は博士に頷いた。

そして、コンソメで溶いたジャガイモのポタージュをカップによそっていると、再度ダイニングの扉が開いてマルガリータがやって来た。

俺の後に彼女もシャワーを浴びたらしく、仄かに石鹸の香りが漂っている。

「紅茶でいいか？」

「うん」

マルガリータのカップに紅茶を注いでテーブルに置くと、俺も席に着いて朝食を摂り

始めた。

よくよく考えれば、マルガリータも交えて三人で朝の食卓を囲むのは、これが初めての気がする。

今までは、夜になるとマルガリータは自宅へ帰っていたし、初めて彼女がうちに泊まったときも俺は朝早くに出てしまった。

たかが朝食ではあるが……こういう平和な時間というのは、やはり尊いものだ。

幸せそうな顔でフレンチトーストを頬張るマルガリータを見ると、俺まで満たされた気分になってくる。

そんなことを考えながら食事を終えた俺は、ローズマリーの薬の袋を取って席を立つた。

「じゃ、行ってきますんで」

「うむ」

まずはお使いを済ませないとな。

これからまた忙しくなる。

「つと、出る前に燃料を……」

「満タンだよ」

「え？ うおつと！」

マルガリータの声に振り向くと、軽い金属音を発する物体が投げつけられた。慌ててキヤツチしたそれは「ジャガーノート」のキーだった。

……そういえば、ベストのポケットにキーが見当たらなかったな。

自室の机にでも置き忘れたかと思っていたが、マルガリータが持っていたのか。

「弾薬も補充してあるから」

マルガリータは言葉少なく告げると、俺から視線を外して食事に意識を戻した。

どうやら、俺が飯を作っている間に、彼女は「ジャガーノート」の整備を済ませてくれたようだ。

これが、献身的な妻の内助の功というものか……。

「ありがとう、マルガリータ」

「ふん」

ダイニングを退出する前に、俺はマルガリータの頬に軽くキスをした。

マルガリータは不機嫌そうに鼻を鳴らしたが、今度は俺の口付けを拒みはしなかった。

106話 裏方

「どうも、お邪魔しますよ」

「あら、グレイ。いらっしやい」

ネフロベーカーリー前に「ジャガーノート」を駐機した俺は、路地のアパート通りにあるコニーの家にやって来た。

扉をノックして挨拶しつつ部屋に足を踏み入れると、今日もベッドの上で読書をしていたローズマリーがこちらに振り向く。

こうして薬のデリバリーに来るのは久しぶりだな。

戦争が始まる前にも楽団メンバーたちとローズマリーを訪ねたが、ここに一人で来ることは最近あまり無かった気がする。

「こちら、お薬です」

「はい。いつもありがとうございます」

「いえいえ。体調は、お変わりありませんか？」

「ええ、たまに痰が絡むけど、前みたいに咳が酷くて眠れないということはないわ」

「それは何よりです。ああ、それとですな……」
「？」

「今日は、もう一つ博士から伝言がありました」

俺はピジョン牧場でナツメツグ博士から聞いた診断結果を、その場でローズマリーに伝えた。

博士の所見と今後の治療について聞いたローズマリーはしばらく真剣な表情で考え込んでいたが、やがて顔を上げて口を開いた。

「そうだったのね……。私自身、何となくビークルや車の煙を苦手には思っていたけど、本当にそれが原因で……」

「ええ、今回は確定診断です。薬と安静で症状の悪化は免れているようですが、ネフロの街では根治が期待できない。動いたら危険ということも無さそうなので、できるだけ早めに引越して療養を始めた方がいいでしょう」

恐らく、この段になって原作通りの治療が意味を成さない、なんてことにはならないはずだ。

「療養地は……工場などが少ない未開発の地域で、且つビークルや車の交通量が少ない場所がいい。ローズマリーさんご自身に、どこか当てはありますか？」

「そうねえ……」

一応、ローズマリーに聞いてみると、彼女は唇に手を当てて熟考した。

原作をプレイ済みの俺からすれば、わざわざ聞くまでもない話だが、俺から場所の提案までお膳立てするのも何か変だからな。

「私の生まれ故郷のゴールドーン村なら……あ、でも今はもう開発が進んでいるのかしら？」

「いえ、温泉施設の稼働は始まりましたが、鉱山の様子は相変わらずですし、観光資源としての規模はそれほどのものではありません。ピークルや製造業の排気ガスに関して、心配ないでしょう」

予定通りの展開に心の中で安堵しながら、俺は彼女の提案を支持した。

ローズマリーは窓の外に視線をやると、ほっと息を吐き出すようにして口を開いた。

「ゴールドーン、懐かしいわねえ。皆、元気にしてるかしら？ 何も無くて不便な村だったから、私以外にも大勢が外に出ちゃって……。グレイみたいな若い子には信じられない話かもしれないけど、電気どころかガス灯すら無い暮らしたのよ」

「ああ、そりやまた、遅しい話で……」

まあ、現代人の俺からしたら信じられない環境なのは確かだな。

俺が若いかどうかはともかくとして。

「久しぶりに帰ってみるのも悪くないかもね……。でも、コニーとは会いにくくなるかしら？」

「いや……。そんなことは無いと思いますよ。トロット楽団は主にハッピーガーランドで活動していますし、ゴールドーンまでピークルならすぐです。コニーもバナラのピークルでちよいちよい顔を出しに来るでしょう」

今更、却下されても面倒なので、俺は少し慌てて彼女の懸念を払拭するよう言葉を掛けた。

すると、ローズマリーは意外そうな顔で俺を見ると、何故かクスクスと吹き出した。

「どうしました？」

「ううん、何でも。ただ……。あなた自身は田舎暮らしを好まないのに、私がゴールドーン村へ戻ることは大賛成のようね」

自分の感情の起伏が見透かされたようで、俺は少し居心地が悪くなった。

さすがは年の功。

おぼさんの洞察力は侮れないな。

「あ、別に悪意があるとか疑っているわけではないのよ」

「わかってますよ。まあ、確かに……。俺にあの村で何十年も暮らせと言われても無理でしょうね。人間、一度便利な環境に慣れたら、なかなか生活水準を落とせるものではな

「い」

少し慌てた仕草で手を振るローズマリーに、俺は肩をすくめて答えた。

「治療のためとはいえ、若い女性をそんな未開地に送ることは、多少なりとも罪悪感がありますかね」

「あらあら……悪いけど、私は亡くなった主人に操を立てているから……ダメよ?」

口は災いのもととはよく言ったものだが、軽口のもりが何だか妙な曲解をされたな。

冗談だとは思うが、ローズマリーは年齢や健康状態の割に美貌は健在で、ボディラインも保っている方……って、いやいや!

キレて工具を投げつけてくるマルガリータを想像すると、本当に勘弁してほしく思う。

「それで……ゴールドーンへは、あなたが連れて行ってくださいるの?」

「いえ、荷物を運ぶだけなら俺の『ジャガーノート』でもいいのですが……この部屋を片付けて引越しの支度をして、さらに病人のあなたを移動させるとなれば、コニーに世話をしてもらった方がいいでしょう。運転手はバニラに頼むかもしれませぬ。まあ、そこは本人たちに話を通してからですな。どうせこの後ハッピーガーランドに戻りますし、俺が伝えてきますよ」

「わかったわ。よろしくお願いするわね」

そんなわけで、俺はハッピーガーランドのロブスター亭に戻ってきた。

マジヨラムに今後の楽団の予定を確認し、先日のローズマリーの件をバナラとコニーに伝えるためだ。

「お、大戦の英雄のお戻りだね」

「よしてください。そんないいモンじゃありませんよ」

「いやいや。市民軍を勝利に導き、石油を取り戻したって評判だよ。ああ、夜通し飲んでも潰れない酒豪だつて噂もよく聞くね」

最後のやつは明らかに戦後の打ち上げが原因だな。

そもそも、俺は他の連中ほど飲んでいないのだから、潰れるも何もないのだが……。

そんな具合に宿の主人ダステインとバーテンのクリスに茶化されていると、階段から降りてきたマジヨラムと顔を合わせた。

「あ、グレイ。帰ってきたね」

「ああ、マジヨラム。すまんかったな。ロクに声も掛けずに帰宅して」

「構わないさ。ピジョン牧場の皆も心配してただろ？」

「そうだな」

確かに、マルガリータは本気で俺のことを心配してくれた。

完全にこちらの都合でしかない話だが……こういうときはマジヨラムの大らかな人柄に救われる。

「二度手間でも申し訳ないが、次の仕事の予定を教えてくださいませんか？」

「ああ、大丈夫だよ。まだ皆にも順次伝えている段階だから。それで、次の公演の予定だけど……ハッピーガーランド近郊を中心に、いくつか依頼が届いているよ。延期になっていた記念セレモニーとか、新たに立ち上げられたピークル関連事業の記念式典とか……。石油ショックが終わって、ちょうど復興のご時世だからね」

さすがは楽団のマネジメント担当だけあって、既に次の仕事にも当たりを付けているようだ。

ただ、原作通りならば、ここからブラツディマンティスが『グランドファイナーレ』を持ち出してきて、事態は大きく動いていく。

「もう少し先の話だけど……連続で公演になるかもしれないから、準備はしておいて」
「わかった」

恐らく、何事もなくコンサートをできる状態にはならないのだろうな。

俺はマジヨラムの言葉に頷きつつも、この先のシナリオで発生するトラブルを思い起

こして頭を悩ませていた。

「じゃ、そういうことで」

「ああ。……そういえば、バナラとコニーは？」

「上に居るよ」

公演の予定を確認し終えた俺が肝心の二人のことを訪ねると、マジヨラムは僅かに苦笑しつつ答えた。

……なるほど。

シールド発生中か。

俺はマジヨラムに礼を言つて踵を返すと、些かげんなりしながら階段を上った。

コニーの部屋の前に到着してみると……案の定、中からはバナラとコニーの甘く囁き合うような声が聞こえてくる。

もちろん、不埒な行為の本番を致しているわけではないが……まあ、仮に二人の関係がそこまで進展していたとしても、マルガリータの件を鑑みると俺は何も言えない。

「ねえ、次の公演までまだ時間があるし……お母さんに会いに行きたいな」

「（ああ、いいよ。僕のビークルで送るから、一緒に行こうか）」

「（うん！ お願いね）」

「あ、でも……今はネフロへの鉄道も運航を再開しているし、わざわざ僕まで行くことは……」

「(……嫌なの?)」

「(え? そんな! 嫌じゃないさ。ただ……せつかくお母さんと水入らずなのに、邪魔しちや悪いかなって)」

「(邪魔じゃないよ! ……バナラも、ちゃんとお母さんに挨拶して)」

「(? あ、ああ……)」

「(それに……)」

「(ん?)」

「(君となら……また砂漠に行くことになっても平気だよ)」

「(コニー……)」

「(ネフロまで、また二人つきりだね)」

「(っ! そ、そうだね……)」

若いな……。

しかし、こんなAT◯イールド全開の会話をしているくせに、二人は唇を近づける様子も無く、ただ手を握り合うだけだ。

傍目から見れば、健全な節度あるお付き合いだろう。

……それを考えると、勢いでマルガリータを抱いてしまった俺の方が、墮落したクズな大人の典型か？

いや、実情はヘタレなバナラをコニーが完全に攻めあぐねているだけか。

これ以上待つてやつても状況は変わらなそうなので、俺は勢いよく部屋扉を開き、一向に進展が見えないバナラとコニーの世界に割り込んだ。

「そんな二人に朗報だ！」

「えっ、きやあー！」

「うわっ！」

俺が部屋に踏み込むと、二人は慌てて手を離れた。

うん、誤魔化したところで今更だから。

居心地悪そうに体を離す二人に構わず、俺は本題を切り出した。

「ローズマリーさんの確定診断がついた。治療の一環で、彼女を生まれ故郷のゴールドーンに移すことが決定した。以上！」

「えっ……」

「コニー、引越しの準備と移動中の世話は、勝手のわかっている君がやった方がいい。事の詳細は本人にも話してあるから、とりあえずネフロに戻って用意を始めてくれ。あとバナラ、荷物の整理や力仕事には男手があつた方がいいだろう。それに、ゴールドーン

ンまでの移送には運転手が必要だ。ついて行ってやれ」

「はは……また突然だね」

ざっくりとした説明だったが、バニラは快く了承した。

こうして二人のネフロ行きは俺がお膳立てする形で決定した。

さて……俺の方は、いよいよブラッディマンティスを本格的に迎え撃つ準備をしなければな。

裏方の仕事はなかなか忙しい。

107話 山狩り

「この辺りか？ ファーガスン」

「ああ、情報ではそうなっていたが……」

足場の悪い山の斜面で「ジャガーノート」を停止させると、俺は木々の間から狩猟で獲物を探す要領で辺りを見回した。

追従するガーランド警察のビークル部隊も、ファーガスンを筆頭に周囲に意識を割き始める。

敵影は見えずエンジン音なども聞こえなかったことで、俺たちは再びビークルを前進させた。

「それにしても、またこの場所に来ることになるとはな。トンネル関連ではロクなことが無かったから、懲り懲りなんすけど……」

「そういえば、ここを占拠した盗賊団もグレイ君とバナラ君で殲滅してくれたんだっかね」

そう、今日の俺はウズラ山に来ている。

ファーガスンたちガーランド警察の愉快な仲間たちと一緒に、ビークルで線路を辿って移動し、以前『スチーム・ハムレット』を撃破したトンネル近くまでやって来た。

さて、何故俺がこのタイミングでハッピーガーランドの街を離れ、朝からこんな場所に居るのか？

話は昨日の午後に遡る。

バナラとコニーがネフロへ向かった直後。

ロプスター亭の俺をファーガスンが訪ねてきた。

そろそろブラッディマンティスの動きとフクロウケ森の方を調べるため、出立の用意をしていたところだったが、ファーガスンのただ事ではない様子に俺は空の言葉に耳を傾けた。

「おお、グレイ君！ よかった、ハッピーガーランドに居たか！」

「ああ、ファーガスン司令……いや、今は警部に戻ったか。どうかしたのか？」
「手を貸してほしい」

余裕の無い表情でそう言うと、ファーガスンは矢継ぎ早に説明した。

「ウズラ山トンネル付近で盗賊ビークルの目撃情報があった。それも大編隊だ」

「何だって!？」

一瞬、トンネルを占拠していた『スチーム・ハムレット』の盗賊団の残党か第二陣がやって来たのかと思った。

しかし、目撃されたというビークルの特徴を鑑みると、どうやら敵の正体は別物のようだ。

「ブラッドイマンティスの『デリンジャー』に『ナイトメア』……それにデザートホーネット団の『イエロー・ワズプ』だと？ 確かか？」

「ああ、以前ガラガラ砂漠を訪れたことがある商人からの情報だ。あまりにも不自然な場所に出現したため、通報したそうさ。情報の確度は高いと思われる」

「……奴ら、列車でも襲うつもりか？」

「今のところ被害報告は無いが、この先はわからん」

俺はファーガソンの言葉を聞いてしばし逡巡し、そして顔を上げてさらに疑問を投げかけた。

「連中の狙いは?」

「不明だ」

「現金輸送車両や戦略物資を積んだ列車が通る予定は?」

「無い。公的には」

「……………」

少し気になる言い方だが、少なくともファーガスの権限でタッチできる範囲にそういった情報は無いようだ。

そうなると、やはりブラッディマンティスとデザートホーネット団の連合ビークル部隊の目的は、ただの列車強盗ではないというわけか。

もしかしたら、汽車を襲撃してバナラを排除しコニーを攫う気かもしれない……。

デザートホーネット団が砂漠の外に出てきたことは気掛かりだが、彼らもブラッディマンティスに強く言われれば断れないだろう。

「グレイ君、私は連中を殲滅するべきだと思う。過去の所業と残存戦力を鑑みれば、またとんでもないことをしでかす可能性は十分にある。それに、今は列車やペンシル鉄道に被害は出ていないが、いつ一般市民に牙を剥くかわからない」

「ああ、同感だ」

「だが、奴らは百台近いビークルの大編隊だ。ガーランド警察には街の警備やパトロールの仕事がある。市民からの有志を募るのも、戦争が終わった直後であることを思うと考え物だ。君にしか頼れないのだ」

ファーガスの言葉に俺はしばし考え込んだ。

相手が百人からの大規模な部隊ともなれば、少しでも頭数を集めた方がいい。

少なくとも、俺とファーガスンだけで山狩りに向かうなんてのは自殺行為だ。

言い方は悪いが、盾や囷になる連中が周りに居ると居ないのでは、危険度が段違いだ。

そうなるよ、今すぐに出撃するのは無理だな。

当然、俺がフクロウケ森に乗り込むのも遅れることになる。

しかし、この問題を放置する気にもなれない。

先のことに取り残されて、それでコニーとバナラが原作とは違うところで襲われては目も当てられないからな。

「……わかった。少しでも人員とビークルを集めて機動隊を編成してくれ。俺も討伐に参加する」

「ありがとう！」

こうして、俺たちは翌朝の日も昇らぬうちにスクランブルすることとなったわけだ。

ウズラ山トンネル付近の搜索を開始してから数時間。

すつかり日も高くなった頃、俺たちはついに目当ての存在と邂逅した。

「来たぞ」

「っー」

俺が静かに声を掛けると、フアーガスン指揮下の二十台ほどの警察ビークルの操縦手たちは、緊張で顔を強張らせながら身構えた。

警察ビークルはボディなどの基幹部分こそコスト削減を優先した量産型だが、大盾にランチャーと近接武器を搭載した防御主体の重装機でもある。

フアーガスンが厳選した戦闘部隊のパイロットも、比較的フィールドでの戦闘に慣れた優秀な警官たちなので、死角は少ない。

しかし……。

「ぐわっ」

「ちっー」

一瞬のうちに、先頭に居た警官の『ギャロップ』がガトリングに撃ち抜かれて大破した。

二方向からの集中砲火を浴びては、あのライオットシールドも役に立たない。

俺は即座に林に向かってチェーニングを応射するが……手ごたえは無かった。

敵の『イエロー・ワズプ』は既に移動している。

先ほど奴らが居た場所にビークルの気配は無い。

「野郎……うおー」

嫌な予感がしたので、俺はスラスターをふかして「ジャガーノート」をダッシュ移動で後退させた。

案の定、先ほどまで俺が居た場所に、逆サイドから発砲されたガトリングの着弾が通り過ぎる。

「奇襲だ！ 散れ！」

「「「はっ」「」」」

フアーガスンは的確な指示を下したが、それでも敵は一枚上手だった。

警官たちが遮蔽物を確保してビークルを下げる前に、さらに数台がガトリング弾を食らって損傷する。

もちろん、俺も林の中から煌めく敵のマズルフラッシュを狙って撃つが、なかなか敵を捉えられない。

「くそが！ ちよこまかと……」

一対一や広い場所での撃ち合いならば精度と射程の差で俺が有利に立ち回れるが、今回は完全に待ち伏せを食らった。

有効射程のアドバンテージを潰され、しかも、敵は視界の悪い林の中で次々とポジションを変えていくものだから、未だに俺の撃破数はたったの二機である。

警察ビークルより前に出て矢面に立ちながら応戦していてこのザマとは、まったく

シヤレにならない。

「あいつら……」

敵は明らかにデザートホーネット団の『イエロー・ワズプ』だが、どう見ても普通じゃない。

こんな日の高い時間帯にもかかわらず姿を視認させず的を絞らせない挙動に、警察ビークルを的確に無力化する正確な射撃。

彼らの庭である砂漠とはかけ離れた場所においてもこれだけの立ち回りができるのは、向こうは相当な精鋭を連れてきたようだ。

それに、先ほどチラツと見えた敵影……『イエロー・ワズプ』と似た造形だが、明らかにサイズとカラーリングが違う機体が居た。

あれは、間違いなく……。

「グレイ君っ」

慎重にビークルを進めつつ俺に声を掛けてきたのはファーガスンだった。

「このままではマズい。一度、撤退を……」

「ダメだ」

「っ！ 何だって?」

俺は林に向かってチェーンガンを点射しつつファーガスンに答えた。

「防御態勢を取らせろ。間隔を空けて俺に続き、キャノンで援護だけしてくれ」

「まさか……」

「ああ、俺が始末する」

正直、ここで敵を深追いするメリットはあまり無い。

既に敵は戦闘状態に突入したことから散開した。

再び集結して防備を整えるまでには時間が掛かるはずであり、鉄道が襲撃されるのを回避できただけでも十分だ。

そもそも、この時間なら、バナラとコニーは既にネフロを出発していてもおかしくない。

しかし……奴の存在はあまりにも気掛かりだった。

「(何故、『クリムゾン・ホーネット』が……)」

「グレイ君？」

「……いや、何でもない。出るぞ、掩護しろ！」

些か強引にファアガスを説得した俺は、チェーンガンで敵のマズルフラッシュ付近を狙いつつ「ジャガーノート」を林の中に飛び込ませた。

掩護射撃があるとはいえ、奇襲を受けた状態でここまで無鉄砲な突撃など、滅多にや

るものではない。

正直、あまりやりたくない戦法だ。

しかし、俺はここで退くつもりなど毛頭無かった。

敵のガトリングが何発かブレストパーツやボディに掠るが、ミスリル装甲なら耐えられる。

正面から受けた弾丸も何とか装甲ブレストで防ぎつつ、俺は木々の間からこちらを狙う敵ビークルに肉迫した。

「敵、接近！」

「くっ、何て奴だ……」

一番近い場所に居る『イエロー・ワस्प』はこちらにガトリングを向けるが、ここまで来ればこっちのものだ。

アームを持ち上げる動作に合わせて流すようにトリガーを引き、敵の駆動部に向かって数発チエーンガンの弾丸を撃ち込むと、『イエロー・ワस्प』は武器の狙いを付けることもままならず崩れ落ちる。

そのまま強化ブレードを振るってコクピットごとデザートホーネット団の構成員を仕留めて止めを刺した。

「おのれっ」

「ぬっ!」

敵も精鋭だけあって立ち回りの選び方は的確だ。

距離を詰められたら詰められたで、ある程度は接近戦も止む無しと判断して対応してくる。

もう一台の『イエロー・ワスプ』は俺の「ジャガーノート」を蹴り倒すように体当たりを敢行してきた。

こちらの射撃を封じて押し込み、そのままゼロ距離からガトリングで止めを刺そうという腹積もりだろう。

しかし……。

「なっ!?!」

「まあ、最善手だとは思っよ」

俺は「ジャガーノート」が半身になるように引いて、強化ブレードを敵ビークルのレッグパーツの支点に差し込み、最小限の動作で敵の駆動部を破壊した。

勢いあまって倒れ込んだ敵を、さらにスラスターを使ったダツシユアタックによる突進で張り倒す。

「ぐあー!」

敵の突撃をいなしてからの華麗な捌き技だ。

シユナイダーの真似というほどの完成度ではないが、彼も似たような立ち回りをしてきた記憶がある。

見様見真似だが、俺のカウンターは見事に決まり、敵のビークルはパーツをぶち撒けて大破した。

そもそも、操作性においても加速力においてもパワーにおいても、【ジャガーノート】と『イエロー・ワズプ』では隔絶した差がある。

いかに精鋭部隊といえど、この差は覆せないだろう。

「……よし、次だ」

そんな具合に、俺が矢面に立ちつつデザートホーネット団のビークルを続けざまに撃破していると、ようやく敵の砲火は目に見えて勢いを失ってきた。

フアーガスンたち警官隊も徐々に山林で遠距離砲撃型ビークルを相手取る戦闘に慣れ、犠牲を出しつつも数機の『イエロー・ワズプ』を撃破した。

そして、日も傾きかけた頃には、俺たち討伐隊は百機近い敵ビークルを撃破していた。

一方、その頃。

ロブスター亭のホールにて。

「何だよお…… ローズマリ、すぐに行っちゃったじゃん」

「仕方ないさ。ネフロのアパートを引き払って、完全に引越したからね。バナラとコニーが居るとはいえ、しばらくは忙しいだろう」

「ぶうー」

いかにもつまらなそうにテーブルに突っ伏したバジルは、マジヨラムの言葉にさらに口を尖らせた。

しかし、バジルは突如何かを思いついたようにガバツと起き上がると、表情を一変させて明るい声を上げた。

「あー！ でも、ゴールドーンなら結構近いし、ロブスター亭のライブにも呼べるかも！」
「やめておけ。排ガスが悪いんだろ。ハッピーガーランドに長く留まるのは良くない」

いつの間にか現れたフェンネルが、バジルに釘を刺した。
再びブルー垂れるバジルにマジヨラムは苦笑いしたが、フェンネルはそんな二人の様子に構わず、視線を外にやって口を開く。

「グレイの奴は、まだ帰ってないのか？」

「ああ、ファーガスン司令と一緒に盗賊退治だった」

「ようやく戦争が終わったってのに、よくやるよねえ」

何か用があったのかと聞くマジヨラムに対し、フェンネルは素つ気なく否定の言葉を返すと、再びあらぬ方向へ視線をやった。

そんな具合に、些か微妙な空気になるなか、バジルの口からふと疑問が発せられた。

「あれ？ セイボリーは？」

108話 紅い疾風 前編

「な、きさ……」

「うるせえ！ 死ねやー！」

驚愕の表情を浮かべてビークルを反転させようと試みる敵に対し、俺は無慈悲に強化ブレードを振り下ろした。

『ナイトメア』に搭乗していたブラツディマンティス社員は、アックスアームを持ち上げる間もなく絶命する。

俺はファীগスン率いるガーランド警察のビークル部隊と共に、林のかなり深いところまで足を踏み入れていた。

ここまで来ると、敵はデザートホーネット団だけでなく、ブラツディマンティスのビークルにも何度か遭遇し戦うことになった。

ほとんどが量産型の『ナイトメア』で構成された部隊であり、階級の高そうな奴は居ないため、片っ端から撃破して始末している。

情報収集はできていないが、徐々に敵を追い詰めているのは確実だ。

既に俺に奇襲を仕掛けてくるビークルはほとんど居なくなり、俺の攻撃への対処もできている。

敵は攻勢の勢いを完全に失い、狩る側から狩られる側に回った。

このエリアに潜伏できる機体の数を鑑みても、ほとんどの敵戦力を潰したとみていいだろう。

しかし……。

「グレイ君、そろそろ敵も殲滅しきったのでは？」

「粗方はな。だが、まだ奴（・）が残っている」

フアーガスの言葉も一理あるが、最初に少しだけ姿を見せたデザートホーネット団頭領の専用機『クリムゾン・ホーネット』が気掛かりだ。

あれ以来、奴はぱったりと姿を消していた。

既にデザートホーネット団のほとんどの戦力を削っているうえに、ブラッディマンティスのビークルもほとんど潰している以上、連中がここから何かできるとも思えない。

だが、デザートホーネット団の頭領ノーラがこんな場所まで出張ってきた理由は気になる。

原作には無かったムーブである以上、この件を放置することに関しては、どうにも喉

に小骨が引つかかったような違和感を覚えるのだ。

とはいえ、そろそろ日も落ちかけて視界も悪くなってきたので、俺としても早めに決着を付けたいところである。

「グレイ君、夜間の行動は危険だ。馬車の時代とは違うとはいえ、戦闘においては視界の悪さが命取りとなることもあり得る。それに、こちらの戦力の損耗も深刻だ。一度退いて、立て直すべきだと思うが」

「そうだな……………っ」

俺はピークルを近づけて囁くように進言してきたファーガスンに相槌を打とうとした。

しかし、俺の研ぎ澄まされた神経は近くの藪の奥に微かな違和感を覚えた。

ピークル乗りとしてやってきた経験なのか、それとも狩人として森で活動してきたことで身に着けた感覚によるものなのか……とにかく、俺は林の奥に息を潜める微かな気配を頭のどこかで感知した。

ファーガスンの声を上の空で聴きつつ木々の間に視線を巡らせていると、次の瞬間、俺の耳は明確な金属の接触音を捉えて全身から冷たい汗を噴き出させた。

「残念だが、そろそろ「伏せろ!!」っ！」

俺は「ジャガーノート」を急加速させ、ファーガスンをピークルごと突き飛ばした。

レッグパーツが纏れて横転するファীগスンに続き、俺もコクピットで息を詰まらせつつビークルを前進させてその場から離脱する。

直後、先ほどまで俺とファীগスンが居た場所をガトリングの掃射が薙ぎ払った。

「なっ!?!」

「危なかつたな……」

ビークルを立て直しつつ驚愕の声を上げるファীগスンの無事を確認し、俺は安堵の声を漏らした。

見事な奇襲を食らった。

敵の射撃は完全に直撃コースだ。

一瞬でも反応が遅れていたら、「ジャガーノート」のミスリルボディといえど蜂の巣になって結構なダメージを食らっていただろう。

「うおっとー!」

さらに続けて二連射でガトリングの着弾が接近してきたので、俺は半ば回転するようにビークルを滑らせて回避行動を取る。

「ちっ、躲したか!」

藪の中から発せられたのは、若い女性の声だった。

しかし、そんなことを気に掛ける間もなく、こちらの陣営は深刻な事態に陥る。

さらに幾度かガトリングが掃射され、俺は何とかやり過ごすことができたものの、警察ビークルはほとんどが無力化された。

ファীগアスの機体はエンジンの中心部を撃ち抜かれ、機能を停止した。

ギリ動きそうな機体も、よく見れば被弾しており、通常通りの戦闘は不可能だろう。

こっちの戦力はほぼ壊滅。

最悪、俺一人で逃げることも考えなければならぬが、敵がそれを許してくれるかどうか……。

「くそっ……」

俺は次の攻撃に備えてトリガーに指を掛けて迎撃の準備を整える。

敵は続けて発砲してくると思ったが……次の弾が飛んでくる気配は無く、山道を踏みしめるビークルの足音が近づいてきた。

俺は油断なくチェーンガンを構えて辺りを警戒しているが、神経を研ぎ澄ませても他の方向にビークルの気配は無い。

「(何だ……?)」

やがて、藪の中から敵は姿を現した。

シルエットは少し大振りな『イエロー・ワズプ』といったところだが、向こうが近づ

くにつれ吟味されたパーツや構造の差が明確に見て取れるようになる。

深紅の塗装に二門のガトリング、複座型のコクピット。

間違いない。

『クリムゾン・ホーネット』だ。

『クリムゾン・ホーネット』に搭乗する女性は、先ほどと同じ声で俺に向かって口を開いた。

「あんたが、ナツメツグ博士の右腕、かい？」

「ああ、そうだ。お前がデザートホーネット団の頭領ノーラだな」

「いかにも」

ノーラの外見は原作通り。

動きを阻害しないピンクのノースリーブに、アラブっぽい白いヒラヒラの付いた帽子にビークル操縦用ゴーグル。

オレンジの覆面で口元を覆っているが、目元を見ればなかなかの美人であることが窺える。

マルガリータが居なかつたら、宝石を貢いで口説き文句の一つでも発していたかもしれないが……ノーラは俺を鋭い目で見据えて殺気を滲ませていた。

「他の仲間は何？」

「全員、あんたにやられたよ。お目付け役で来ていたブラッディマンティスの連中もね」
辺りを見回しつつ疑問を投げかけると、ノーラは不機嫌そうに鼻を鳴らして答えた。
彼女の言葉を全て信じるわけにはいかないが、まあ結構な数の敵を撃破してきたから
な。

そういう意味では、彼女に睨まれるのも当然か。

「『ナツメツグ博士の右腕』グレイ……貴様に決闘を申し込む」

決闘で……もう少し平和な解決方法を模索しませんかね？

おまけにそっち二人だし。

しかし、ノーラは俺の様子に構わず、さらに険しい目でこちらを睨みつつ『クリムゾ
ン・ホーネット』のガトリングの操作レバーを握りなおした。

操縦席に座る男もハンドルに手を掛けて俺を見据える。

聞きたいことは色々あるが、今は答えてくれる雰囲気ではない。

彼女は……やる気だ。

「いぎ」尋常に、勝負！

裂帛の気合でノーラの口から吐き出された声に応じ、俺も【ジャガーノート】のストラ
スターペダルを踏みこんだ。

初手は俺の攻撃。

山の斜面の土を跳ね飛ばしながら「ジャガーノート」を横滑りさせ、俺はチェーイングンのトリガーを引いて敵目がけて弾丸を数発ほど発砲した。

さすがに早撃ち勝負では、こちらに分がある。

「くっ！・下がりな！」

「はっ」

手応えはあつたが、ノーラも一撃でやられるほどヤワじゃない。

ボデイに数発の弾丸を食らいつつも『クリムゾン・ホーネット』は後退し、大木を遮蔽物にしてビークルの半身を隠した。

今度はノーラの攻撃が飛んでくる。

クイックピークの要領でビークルを一瞬だけ飛び出させる動きと同時に、『クリムゾン・ホーネット』は二基のガトリングから弾丸を吐き出した。

「おっと」

武器の精度はこちらが上だが、山林は有効射程の優位を十全に活かせる環境とは言い難いうえに、ノーラもガトリング砲の扱いには慣れてる。

アウトレンジからの一方的な攻撃などできるわけもなく、こちらも正確な射撃を見舞

われた。

俺はスラスターを起動したダッシュ移動で藪の中へ引つ込むが、数発が「ジャガーノート」のミスリルボディを掠り、ガトリング弾に薙ぎ払われた俺の周りの木々がガサガサと音を立てて倒れる。

俺はさらに撃ち返そうとチェーニングを上げたが、踵を返した『クリムゾン・ホーネット』は長いレッグパーツで軽快に林の奥へと走り去った。

「……………」

損傷度、弾薬消費、搭乗者の精神疲労。

全てを鑑みると、今の攻防は僅かに俺が優勢だ。

「強い……………」

「そっちの腕も悪くないぜ」

俺は森林に木霊するノーラの声に答えたが、向こうからの返答は無かった。

俺たちはお互い遮蔽物の影にビークルを隠したまま神経を研ぎ澄ませ、そのまま散的に木々を挟んで弾丸を撃ち合った。

「ジャガーノート」も『クリムゾン・ホーネット』も手数と火力に秀でた強力な射撃武器を搭載しているため、この攻防では一度の失敗が命取りだ。

お互いになかなか本格的な攻勢に出ることができない。

「ノーラ様！ 3時に！」

「わかっているよ！」

『クリムゾン・ホーネット』の二人はこちらのビークルと接触した木々の音や動きを頼りに場所を特定し、ライトを照射しつつガトリングを放ってきた。

俺も向こうのライトの灯りを狙って負けじとチェーングンを撃ち返し、着実にダメージを与えてゆく。

こちらのボディにも何発かガトリング弾が掠り、何とも耳障りな音を立てた。

やはり、そう簡単には攻めきれない。

しかし、しばらくガトリング弾の応酬が続いていると、やがてお互いのビークルのアドバンテージと弱点の差が明確になってきた。

俺の「ジャガーノート」はミスリルの装甲ブレストに装甲ボディを搭載しているため、通常素材のビークルよりも耐久力に優れる。

一方、『クリムゾン・ホーネット』はガトリングを二基搭載しているため、こちらよりも手数と制圧力に優れる。

そして、最も明確な差といえば、「ジャガーノート」が一人で操作する汎用ビークルなのに対し、『クリムゾン・ホーネット』はパイロットとガンナーが別れた複座型のビークル

ルである点だ。

デザートホーネット団のビークルは、広大な砂漠で長距離を一気に移動するため、瞬間的な加速性能よりも最高巡航速度を重視した設計となっている。

運用としては、砂漠を駆けて標的に急速接近し、戦闘時には射手が砲撃に集中して大火力の掃射を見舞う戦術だ。

悪くない設計思想だが……あくまでも『クリムゾン・ホーネット』はキャラバンなど戦闘力の乏しい敵に飽和攻撃を仕掛けるためのビークルだ。

はつきり言つて、汎用ビークルほど小回りは効かず、タイマンには向かない。

ノーラは素早くて正確に操縦手へ指示を出しているが、やはり俺が搭乗する「ジャガーノート」を捉えるには至らないようだ。

当然、被弾率が両者で全く異なる。

時間が経過すればするほど、『クリムゾン・ホーネット』は損傷箇所が増えて動きが鈍っていったが、こちらは高い耐久力とマルガリータに調整してもらった足回りの機動力のおかげで然程ダメージを受けていない。

「ノーラ様！ エンジンが……」

「くっ……」

所々をチェーンガンに撃ち抜かれた『クリムゾン・ホーネット』は、もうもうと黒煙

を上げて稼働の限界に近いことを示している。

暗闇に包まれた山林地帯であることも相まって、敵はこちらの姿を完全に見失っているようだ。

このチャンス逃す手はない。

「っ！ 後ろだ！ 反転！」

「なっ!？」

俺は逆サイドから回り込み、辺りを警戒する『クリムゾン・ホーネット』が後ろを向いたタイミングで呼吸を合わせて飛び掛かった。

ノーラはギリギリでこちらの接近に気付いたが、俺を迎撃するには遅すぎる。

そもそも、『クリムゾン・ホーネット』は近接武器を装備しておらず、接近された時点で詰みだ。

俺はアームを操作して強化ブレードを薙ぎ払いつつ、『ジャガーノート』の装甲ブレストで押し潰すように『クリムゾン・ホーネット』に突進した。

『クリムゾン・ホーネット』は独自のレッグパーツを持つ大型ビークルだが、出力では『ジャガーノート』も負けていない。

吹き飛んだ衝撃で背面から大木にぶち当たった『クリムゾン・ホーネット』はさらにパーツを撒き散らし、搭乗していたデザートホーネット団構成員とノーラも潰れたコク

ピットに身体を挟まれて悶絶する。

そして、エンジンを強化ブレードに破壊された『クリムゾン・ホーネット』は機能を停止して、ついにその場に崩れ落ちた。

109話 紅い疾風 後編

俺は動かなくなった『クリムゾン・ホーネット』を前にしばらく周囲を警戒したが、手が接近しているような兆候はない。

確かに、他の仲間は全滅だとノーラは言っていたが……第二陣が待ち構えていると思っただけに、正直なところ拍子抜けだ。

「う、く……」

しばらくすると、『クリムゾン・ホーネット』の射手席でノーラが呻きながら顔を上げた。

上腕からは血を流しており、破れたシャツから覗く腹部には痛々しい痣が出来ている。

恐らく、飛び散った破片を受け、ピークルが吹き飛んだ拍子に体を叩きつけられたのだろう。

命に別状は無さそうだが、肋骨は持っていかれたな。
潰れたコクピットに挟まれ脚も負傷しているようだ。

腹部を押さえながら吐血している操縦手も結構な重症である。

「ノーラ、お前の負けだ」

「……………」

ノーラは答えない。

俺一人に全滅させられたことが余程ショックだったか？

確かに、討伐隊は俺以外の戦力がほぼ全滅で、敵側が優勢だった。

しかし、あくまでも『クリムゾン・ホーネット』は砂漠で運用する制圧用ビークルだ。

俺の「ジャガーノート」ほどオールラウンドに戦うことはできない。

もし彼女がガトリングアームを装備した汎用型ビークルの愛機「クリムゾン」を持ち出していたら……まあ、結果は同じか。

彼女は決して腕の悪いビークル乗りではないが、タイマンで俺に勝てるほどじゃない。
い。

よくよく考えれば、それは彼女もわかっていたはずだ。

デザートホーネット団の庭であるガラガラ砂漠で、俺は彼らのビークルを一人で片っ端から殲滅した。

俺と「ジャガーノート」の力は身を以て知っていたはずだ。

それなのに……。

「何故、こんな真似を？　こうなることは、わかっていただろうに」

「……………こうするより、ほかに無いんだ」

ノーラは弱弱しく吐き捨てるように呟いた。

何故、ウズラ山トネル付近で目立つ真似をしたのか？

何故、俺に戦いを挑んだのか？

そういつた問いを俺は言葉にして投げかけるが、ノーラは答えない。

だが、言っている内に、俺も一つ考えがまとまってきた。

「ブラッドディマンティスに強制されたか」

「……………」

苦々し気に表情を歪めるノーラの顔が全てを物語っている。

恐らく、彼女たちの目的は時間稼ぎ。

俺の足止めだ。

ちやうど今頃、ブラッドディマンティスはフクロウケ森の辺りで『グランドファイナレ』を停泊させて最後の攻勢の準備に入っている。

今現在の奴らの最優先事項は『グランドファイナレ』の整備および戦力の集結、そしてコニーの誘拐。

俺に邪魔されないために、こんな大掛かりな工作を行ったのだ。

そうでなければ、本来ガラガラ砂漠から出ないデザートホーネット団がこんな場所までやって来たことの説明がつかない。

結果としては、なかなか効果的だったと思う。

山林を利用して散発的に攻撃を仕掛ける作戦には、思ったよりも手間取った。

『イエロー・ワズプ』の編隊だけならある程度の敵を殲滅して俺は退いたかもしれないが、『クリムゾン・ホーネット』の出現が気掛かりでここまで深追いした。

「だが、惜しかったな」

まだ日が沈んでそう時間は経っていない。

この時間なら、十分にフクロウケ森へ先回りできる。

俺を完全に足止めするには、戦力が足りなかったようだ。

「さて……」

俺はノーラたちを拘束するため、ファーガスを呼ぼうとした。

しかし……。

「まだだ!」

「っ!」

『クリムゾン・ホーネット』のコクピットを見ると、獣のように歯を剥いたノーラが、俺を激しく睨みつけている。

「まだ……まだ終わっちゃいないよー」

ノーラの声に応じるように、操縦手の男はコクピットのレバーを操作した。

先ほどもで、うんともすんとも言わなかった『クリムゾン・ホーネット』は、バリバリと嫌な音を発しながら、ぎこちなく動き出す。

どうやら、補助動力で無理やり稼働させたようだ。

エンジン部は俺の強化ブレードで広く切り裂かれておりチエーンガンの弾丸も命中しているので、当然ながら『クリムゾン・ホーネット』はいつも通りのパフォーマンスを発揮できるはずもない。

しかし、『クリムゾン・ホーネット』は倒れ込むように突進してきた。

「くっー」

至近距離なので、さすがの俺も回避は間に合わず「ジャガーノート」の装甲ブレストで敵ビークルの車体を受ける。

激しい衝撃に一瞬息が詰まった。

そして次の瞬間、『クリムゾン・ホーネット』の射手席のノーラは操縦席を飛び越えるようにして「ジャガーノート」のコクピットに飛び移ってきた。

「はあっー」

「ぬおー！」

ノーラは【ジャガーノート】のブレストに掴まったまま、腕だけを支えに下半身を捻って蹴りを放ってきた。

俺も何とか左腕を揚げて防御したが、前腕に走った衝撃はとて小柄な女性が放ったとは思えない。

肋骨が折れているというのに、何て元気な奴だ！

「ナツクルで来な！」

「お断りだね」

ノーラは豹のように凄まじい勢いで俺に掴みかかってきたが、そんな挑発に乗るつもりは無い。

俺はノーラの手を拳で弾くように振り払うと、シオルダーホルスターのS & W M10を抜いた。

そのまま正面のノーラに拳銃の狙いを付けようとするが……。

「おおおおおおお!!」

「ぬぐっ！」

突如、激しい衝撃を感じて、拳銃を取り落としそうになった。

見ると、『クリムゾン・ホーネット』の操縦手の男が、操縦桿にしがみつくようにして

ビークルを前進させている。

俺がハンドドルから手を離れた隙に押し込まれるようなタックルを食らい、さすがの【ジャガーノート】も重さをモロに受けて転倒しかける。

「てめっ」

俺は慌ててチェーニングンを操作して『クリムゾン・ホーネット』の胴体に弾丸を十発ほど浴びせた。

さすがの大型制圧用ビークルも、これだけの大口径弾を受けては機能を保てない。

『クリムゾン・ホーネット』は今度こそ沈黙し、その場に崩れ落ちた。

「グレエエエエイ!!」

「ぐっ」

しかし、ノーラもこの状況を黙って見ていたわけではない。

ノーラは再び下半身を浮かすようにして蹴りを放ち、俺の右手の拳銃を叩き落した。

「はあ!」

「がっ」

さらに、ノーラの攻撃はここで終わらず、空中で腰を捻るようにして開脚すると、俺の首を挟むようにして脚を絡みつけてくる。

そのままノーラは全体重を掛けて体を横に捻った。

「うぐお!!」

どうにか体を引いて勢いを流し、首をへし折られるのは避けた。

しかし、こんな体勢ではビークルをまともに操作することなどできない。

【ジャガーノート】はバランスを元に戻せないまま徐々に横転していく。

そして、ノーラのプロレス技を食らった俺は、そのまま彼女と一緒にコクピットから投げ出された。

「ぐ、げほっ……くそったれ……」

ノーラのヘッドシザーズ・ホイップを食らった俺は、どうにか地面に衝突する前に受け身の姿勢を取ることに成功した。

服が土塗れだが、怪我は無さそうだ。

……危なかった。

あのまま頭を叩きつけられていたら、いくらコンクリートより柔らかい土とはいえ、普通にあの世行きだった。

「ノーラ、さま……うおおおおお!!」

俺が頭を振って立ち上がると、『クリムゾン・ホーネット』の残骸から這い出てきた操縦手の男がこちらへ向かってきた。

手にはコクピットから外れたレバーのようなものを持ち、そいつで俺をぶん殴ろうとしているようだが、さっきのノーラの格闘技に比べれば屁でもない。

俺は危なげなく反撃した。

「ぐえ」

体重を前方に乗せて足を突きだし前蹴りを放つと、俺よりウエイトが軽い男はいつも簡単に勢いを殺されて後ろにたたらを踏む。

俺はもう一步前進して、レバーを持った男の腕を掴んで抑えると、そのまま自分の肘を捻じ込むようにして男のこめかみにエルボーを放った。

「あげっ」

カエルのように地面に突っ伏した男は、頭から血を流して動かなくなる。

さすがに死んではないと思うが、結構な勢いで地面とキスしたな。

「やめろおー」

そして、俺がデザートホーネット団の男に止めを刺そうかと考えていると、後ろから軽い足音とともに鋭い怒声が浴びせられた。

振り向きざまに裏拳を振るうが難なく避けられ、俺の首に細いが筋肉質な腕が絡みつく。

飛び掛かってきたノーラは、俺の背中をよじ登り、そのままチョークスリーパーを掛

けてきた。

彼女は格闘技の達人。

締め落とされたら終りだ。

「ふ、ぬうー！」

俺は勢いよく体を揺すって後頭部で彼女の顔に頭突きを放ちながら、ノーラのチョークスリーパーを外そうと試みた。

彼女の肘の内側に右手を差し込んで腕を押し出しつつ、首の位置をずらして頸動脈を防護する。

ノーラはなおもしつこく俺の首を狙って締め技をかけてきたが、密着状態ならばこちらの攻撃も命中させやすい。

俺が鋭く肘を後ろに突き出すと、上手い具合にノーラの腹部を直撃した。

「あがあー！」

どうやら、先ほど肋骨が折れた場所と同じ位置にヒットしたようだ。

卑怯かもしれないが、手加減できる状況ではない。

俺はさらにバックブローを放ちつつ、上半身を振って背中の中のノーラを近くの木に何度もぶつけた。

「あ……………ぐ……………」

腹部へのバックブローと凹凸のある木に擦り付けられたことによるダメージで、ノーラはついに腕の力を緩め、俺の腹に回されていた彼女の脚も徐々に外れる。

俺はノーラの腕と首を掴んで上体を沈め、その勢いのまま彼女を投げ飛ばした。

「あぐうー！」

背中から木に叩きつけられたノーラは、鈍い音を立ててずると地面に倒れた。

「ぐっ……ゲハアー！ ハア、ハア……」

ノーラのチョークスリーパーを外した俺は、首を摩りながら荒い息をついた。

これだけ痛めつけられ、ノーラも起き上がらないだろうと踏んでいた。

しかし……。

「っー！」

ノーラは立ち上がった。

ピンクのノースリーブや臍脂色のズボンは所々破れて血が滲み、腹部はこの暗さでもわかるくらい内出血で変色している。

ビークルが大破した際の衝撃や先ほどの取っ組み合いを鑑みれば、背中も腹も腕も脚も、どう考えても無事ではないはずだ。

しかし、ノーラは全く闘志の失われていない目で俺を見据え、ファイティングポーズ

を取った。

「舐めるんじや、ないよ……」

ノーラは女性の中でも決して大柄な部類ではない。

セイボリーより身長は低く、骨格もマルガリータに比べると華奢だ。

精々、コニーと同じくらいの体格で、俺との体重差は二倍近い。

しかし、褐色の肌に包まれた彼女の四肢には無駄の無いしなやかな筋肉が付き、体型はまるで豹のように引き締まっている。

いざ格闘戦に備えて対峙すると、彼女の姿は一回り大きく見えた。

「しっ」

俺が左半身を前に出して構えると、ノーラは鋭く踏み込んでジャブを放ってきた。

体中に怪我していることを鑑みれば、ノーラの格闘能力は普段よりパフォーマンスは大きく劣るはずだが、それでも彼女の拳は鋭く俺の腕を打ち頬を掠めた。

「せい、やあー！」

裂帛の気合とともに、ノーラは左ローから左手の掌底、さらに右の前蹴りからの左後ろ回し蹴りを放ってきた。

ほとんどの攻撃はガードするか僅かに体を浮かせて後退して衝撃をやり過ぎしたが、最後に鋭く振り回された踵は危険なので、体を沈めて回避する。

「もらったあー！」

ノーラは俺の行動を読んでいたようで、鋭く地面を蹴ってジャンプすると、俺の顔にかけて膝を突き出してきた。

これは食らいたくなかったので、俺はガードを固めたダッキング体勢のまま体を横に振って、左のフックを放つ。

「うぐっ」

本来なら、体ごと飛び込む膝蹴りの勢いをこの程度のパンチで相殺できるものではないが、俺とノーラでは体重が違う。

俺のパンチは彼女を胸部から後ろに弾き返し、彼女の膝蹴りはギリ俺の顎に届かなかった

因みに彼女の胸部装甲は……うん、大きさも感触もマルガリータには遠く及ばないな。

もちろん、いくら褐色肌の美人でも、こんな凶暴な女は願い下げだが……しかし、よく考えれば、マルガリータの性格もお淑やかで大人しいとは言い難いか。

「ふっー！」

俺はそのまま攻勢に出た。

左ジャブを牽制に放ち、右のフェイントの直後、上半身を捻った勢いで右のローキック

クを放つ。

命中すれば、脚に結構なダメージを蓄積させられたことだろうが、そこは格闘技経験が豊富なノーラだ。

華麗な足さばきでクリーンヒットを回避され、俺のローキックは僅かに彼女のズボン
を掠っただけで空振りした。

続けて左ジャブに右のストレートを混ぜたコンボを放つが、これも彼女には難なく距離を見切られて躲される。

さらに踏み込んで、ミドルキックに続いて上から打ち下ろす左右のワンツーパンチを見舞うと、今度は肘辺りに腕を巻き付けられて嫌な予感がしたので、俺は慌てて腕を引き突き飛ばすようにノーラを押し退けて彼女と距離を取った。

「ちっ、しゅとい奴だよ……」

危ない……。

今のは下手に密着し続けていたら関節を極められていた。

ノーラと殴り合いを始めて、どのくらいの間時間が経ったことだろうか？

相変わらず、お互いに攻めあぐねている。

俺がパワーで押してぶん殴り投げ飛ばそうとすれば、ノーラは俺の腕や首を体全体で

巻き込んで体重を掛けてへし折ろうとしてくる。

逆にノーラが俺の腕に飛びついてサブミッションを仕掛けようとするれば、俺は彼女の体を片手で支えたまま地面に叩きつける。

泥臭い取っ組み合いを続けながら、俺たちは消耗戦に突入していた。

しかし、ある時を境に、ノーラの呼吸数が目に見えて増え、さらに彼女は脂汗を流し始めた。

「ハア、ハア、ハアア……く、まだ………つ」

格闘の技量では俺の遙か上を行くノーラだが、彼女の顔に浮かぶ疲労の色は急激に濃くなっていく。

……こうなった以上、俺の勝ちだな。

俺はそれほど格闘技の経験が豊富というわけではない。

体育の授業でやった柔道と、ジムで少しキックボクシングを習ってスパリングをしたくらいだ。

精々、初段程度の技術しか無いだろうが……それでも全くの未経験というわけではなかった。

この時点で、並の武道経験者との差は一気に縮まっている。

残酷な話だが、格闘で物を言うのはパワーとウエイトだ。

ド素人を張り倒すことに関しては、経験と技術による奇襲が一番有効だ。

しかし、少しでも格闘技の経験を積んだ者が相手となるとスピードやテクニクのみで圧倒することは途端に難しくなる。

要は、100kgの素人なら少し合気道を習った女性でも倒せるが、ヘビー級の格闘技経験者を軽量級がKOするのは余程の隔絶した技量の差が無ければ難しい、というわけだ。

何せ、格闘攻撃は刃物や銃弾と違い、継続的なダメージを与えることが前提である。

ボクシングのようなパンチのみのルールならまだしも、蹴りもグラップルもサブミッシヨンも飛んでくる状況では、多少スピードが勝ったところで全ての攻撃を躲すことは不可能に近い。

ダメージによる消耗も軽い方が圧倒的に大きい。

デカくて重い方が必然的に攻撃力も防御力も高くなるのは自明の理だ。

ノーラのサンボっぽい関節技も見事なものだったが、完全に逆関節を取られるのを防げば、そのまま抑え込まれることは体格的にあり得ない。

いや、もしかしたら普段はそれも可能だったかもしれないが、今の彼女は満身創痍だ。逆に、こんなボロボロの状態で俺とここまで殴り合えたこと自体が凄いな。

「はあ、はあ……………倒す……………こいつを、倒さないと……………」

「……………」

ノーラはなおも俺に掴みかかってきたが、彼女の手には最早ともな力は無かった。俺はノーラの襟首を掴んで重心を下げ、腰を押し込むようにして彼女の体を浮かせる。

そのまま彼女を投げ飛ばして地面に叩きつけると、それ以上ノーラが起き上がつてくることは無かった。

110話 砂漠の掟

デザートホーネット団の頭領ノーラを下した俺は、辺りを探して先ほど彼女に叩き落とされた拳銃を回収した。

ノーラは相変わらず起き上がる気配が無いので、彼女のことは一旦放置して「ジャガーノート」の所に戻る。

幸い、ビークルに深刻な損傷は無い。

愛機のコクピットに乗り込んだ俺はエンジンを再始動し、押し掛かっていた『クリームゾン・ホーネット』の残骸を押しつけながらレッグパーツを動かして、「ジャガーノート」を横転から復帰させた。

「フアーガスン！ ーここだー！」

俺は「ジャガーノート」のチエーンガンを空に向けて何度か発砲し、逸れたフアーガスンたちを呼んだ。

まるで俺が遭難したみたいだが、四の五の言っついていられる状況ではないので、ビークルのヘッドライトを点灯したままにして味方にこちらの位置を知らせる。

こんなことなら、フレアガンでも持って来ればよかった。

「う……………」

俺がビークルを降りると、ノーラも少し回復したのか、顔を上げて俺の方に視線を向けた。

もう殴り合いはご免なので、俺は少し離れた位置から彼女の眉間にS & W M10の銃口を突きつける。

「おい、妙な動きはするなよ」

「……………」

こちらを見据えるノーラの目には、何の感情も浮かんでいない。

やがて、彼女は視線を下げると、静かに口を開いた。

「これまでか……………」

「ああ、お前の負けだ。今回の件の経緯、ブラッディマンティスに関して知り得たこと……………洗いざらい喋ってもらうぞ」

「好きにしなよ。どうせ、もう終りだ。アタシも……………アタシの盗賊団も」

俺は若干の驚きを覚えながらノーラの顔を見た。

彼女は口を噤むと思っていただけに、少し意外な反応だ。

「やれるだけのことはやった。奴らは納得しないだろうけど……………もう、どうしようもな

いことだよ」

ノーラは完全に諦めきった様子だ。

友軍が全滅しても窮地に陥っても屈しない先ほどの気迫は、今の彼女の姿には微塵も無かった。

先ほどまで、あれだけしつこく粘り俺に挑み続けていたというのに……少し拍子抜けだ。

まあ、この期に及んで抵抗されるよりはマシか。

もう、こいつと殴り合うのはご免だからな。

「(おーい！ グレイ君！ そこかあ?)」

「こつちだー！」

林の中からビークルの足音に混じってファーガスの声が聞こえたので、俺はそちらに向けて声を張り上げて呼びかける。

しばらくすると、ファーガスは一番被弾が少ない警察ビークルで、俺の場所までやって来た。

「他の隊員は?」

「負傷者は一か所に集めて待機させている。幸い死者は出ていないが、動けないほどの重傷を負っている者も多い。無事な隊員たちを見張りに立たせてはいるが、まともに動

くピークルはこれだけだよ」

「わかった。早いところ、こいつの尋問を済ませてしまおう」

ノーラは宣言通りこちらの質問に素直に答えてくれた。

やはり、今回の件はブラッディマンティスの差し金で、目的は俺の足止めだ。

そのために、わざわざトンネル付近で派手に動いて俺たちを呼びよせ、山林に誘い込んで持久戦を挑んだらしい。

「君らは陽動だったわけか。一体、何から……？　ブラッディマンティスの奴らは一体何を企んでいるのかね？」

「さあね。アタシたちはただグレイの奴を南側に引き付けるよう言われただけさ。お目付け役でアタシたちと一緒に来てた奴らは鉄道や街の周辺も探ってたみたいだけど……詳しいことは知りやしないよ」

「そうか……」

ハッピーガーランド近郊の警備体制でも偵察していたのかな？

どちらにせよ、そこら辺の情報はノーラもこれ以上持っていないだろう。

「ああ、でも……」

「ん？」

ノーラは宙に視線を彷徨わせると、一拍置いて口を開いた。

「奴ら、ハッピーガーランドの北の方で何かしているみたいだね。向こうの司令部がどうとか言ってたよ」

「北か……」

ハッピーガーランド北西には、奴らがゲーム終盤で戦力を集結し飛行船『グラランドファイナーレ』を準備していたフクロウケ森がある。

間違いないな。

ブラッディマンティスは俺にフクロウケ森のことを嗅ぎつけられている前提で、ノーラを足止めに寄越したわけだ。

当然ながら、ノーラは『グラランドファイナーレ』の件を知るはずもない。

ファーガスンは他にも色々とブラッディマンティスに関することを質問したが、ノーラの口から特に重要な情報は出てこなかった。

「むしろ、グレイ自身の方が色々と奴らのことを知ってるんじゃないかい？」

ノーラが俺を顎で示したことで、ファーガスンもちちらへ視線を向けた。

もちろんファーガスンも『グラランドファイナーレ』のことなど知らない。

下手な嘘は良くないが、フクロウケ森に関して俺が最初から知っていたというのにも不自然だな。

「確かに、ホトトギスの森周辺でブラッディマンティスが動いているという情報があった。念のため、俺も調べに行こうと思っていたが、出る直前にファーガスンがロブスター亭に来たからな。向こうは後回しにしちまったが……やはり、ガセじやなかったか」

「なるほど……ブラッディマンティスはグレイ君の戦力と行動力を危険視して、本命から引き離したというわけか」

俺はあくまでも確証は無いというスタンスだが、ファーガスンも余計な猜疑心を働かせる気は無いようで、俺の話に納得した。

「とりあえず、ホトトギスの森方面に行ってみるしか無いだろう。連中の企みを暴くには、それが最も手っ取り早い」

「……そうだな」

ファーガスンは少し懸念が残るような表情をしていたが、最終的に俺の言葉に納得した。

肝心のブラッディマンティスに関する情報を粗方聞き終えたところで、ファーガスンはしばしの逡巡の後に口を開いた。

「ノーラ、もう一つ聞きたい」

「……………」

「何故、君たちはブラッディマンティスにそこまで従うんだ？」

「……………」

ファアガスの言葉にノーラは一瞬だけ顔を強張らせたが、目を背けるようにして沈黙を続けた。

「今回の状況や先ほどの話から、デザートホーネット団とブラッディマンティスが協力関係にあることはわかった。しかし、君たちは砂漠の盗賊団だ。それに、砂漠の外で狼藉は許されないと……その掟を破ることは許されないと聞く。それを曲げてまで……どうしてブラッディマンティスにそこまで肩入れするんだ？」

「っ！ アタシたちは……………」

ノーラは絞り出すように呻いたが、最後まで言葉を紡ぐことなく唇を噛んだ。

彼女たちは望んでブラッディマンティスに協力しているわけではない。

しかし、それを自らの口から言うのも辛いものがあるだろう。

ノーラは完全に口を噤む構えなので、俺はゆっくりと口を開いた。

「三年前だったか？俺がこの国に来る前の話だが……確か、ガラガラ砂漠で大規模な討伐作戦があったらしいな？」

「ああ、街と警察の上層部からのお達しで、盗賊団の一掃作戦が実施されたのだ。キャラ

バンを襲撃して物流を阻害する砂漠の盗賊団は、最優先の排除目標だった」

「その作戦が設定された背景は……あれか。五年前の件も影響しているのだろうか？」

「……うむ。当時、ガーランド警察は大きく評判を落としていたからな。否定はできない」

あの事件は、チコリに対して見て見ぬふりをした市民全員が加害者みたいなものだ。

しかし、一般市民にしてみれば、その責任は組織に……警察あたりに押し付けたいものだろう。

何にせよ、当時にガーランド警察はそんな針の筵状態をどうにかしようと考え、大規模な盗賊討伐という世間的にも受けがいい作戦に及んだわけだ。

結果は……世間からの評判で言えば大成功だ。

大勢の盗賊を検挙することに成功し、ガーランド警察は何とか面目を保った。

チコリの件に関しては街の人間たちにとっても都合が悪いので、蒸し返されることも無く、と。

「だが……」

フアーガスンは一拍置いてから苦々しい表情で言葉を続けた。

「実際の現場はひどい有様だった。双方の損害はかなりの数に上り、砂漠の商人など民間人からも犠牲が出た。寧ろ、我々警察が被害の拡大を助長していた感さえあった。ハッピーガーランド以外の住民ならお構いなしといった具合にな。そんな折、突如、上

層部から討伐隊の解散が言い渡されたのだ。ちょうど、最大規模の砂漠の盗賊団デザートホーネット団との戦いが佳境に入った時期だ」

ファーガスンは深く思案するように顎を撫でた。

「砂漠の深い場所で度々襲撃され、警察ビークル隊の犠牲が嵩んでいたのも事実。反対意見などほとんど出なかったが……今思えば少し不自然だったな。当時の上層部がマスコミ受けする功績に関して慎重な姿勢とは……」

「その意向にもブラッディマンティスの影響があつたのかもな。賄賂なり裏工作なり……」

「なるほど。では、彼女たちは……」

ファーガスンはノーラに視線をやるが、彼女はそっぽを向きばかりで何も答えなかった。

「ふん……」

ノーラは最後までブラッディマンティスに恩があり従っていることを実際に口にはしなかったが、彼女の苦々しい表情からは否応なしに要求を呑んでいることがはつきりを伝わった。

もしかしたら、構成員を人質にでも取られて脅されているのかもしれない。

まあ、仮にそうだったとしても、俺もそこまで面倒見ることにはできないが……。

「さて、問題はこいつをどうするかだが……」

「ふむ……」

今回の件、ノーラたちの作戦は自爆特攻もいいところだ。

掟を曲げて砂漠の外に進軍し、俺と大勢の警察ビークルを相手取り、山林という慣れない環境でのゲリラ戦。

仮に俺たちを倒せたとしても、砂漠の外にまで手を出し脅威と見なされたデザートホーネット団が、その後も警察の捜査網から逃げ続けられる確率は低い。

ただ破滅へ向かうだけの無謀な行いだ。

だが、ノーラはじめデザートホーネット団の連中がこんな行動に出た背景には、ブラッディマンティス存在があった。

デザートホーネット団が恩義によってブラッディマンティスにいいように使われていることは、ファーガスンも先ほどの話で理解しているだろう。

ファーガスンは職務に忠実な男だが、人並みに情もあり自分なりの正義感も持っている。

しかし、ガーランド警察がデザートホーネット団に煮え湯を飲まされ続けてきたのもまた事実だ。

彼らからすれば、頭領ノーラの捕縛を足掛かりに、徹底的にデザートホーネット団を潰したいと考えてもおかしくはない。

そして、俺にとつても……。

「……………」

基本的に、盗賊つてのは旅人やビークル乗りを殺して金を奪うクソツタレだ。

ビークル乗りにとつて、撃退した盗賊は殺すか警察に突き出すのが基本である。

次の被害者を出さないため、そして自分の情報が盗賊団に渡つて報復されるのを避けるためだ。

デザートホーネット団も砂漠を渡る商人やビークル乗りから散々略奪しており、その過程で死んだ被害者も一人や二人ではないだろう。

だから、俺もノーラの部下たちを遠慮なく殺してきた。

しかし……デザートホーネット団には既に俺の情報が十分に渡ってしまった。

最早、死人に口なし作戦は意味を成さない。

むしろ、一人でも多くデザートホーネット団の構成員を殺すたびに、奴らの俺に対する恨みは蓄積される。

それを思うと、ここでノーラを撃ち殺すことに意味など無ければ、彼女を警察に突き出して拘束するメリットも少ない。

デザートホーネット団にも復讐に及ぶ奴が少なからず居ることは、以前の『アースウインド』との通走で理解しているが、少なくともノーラはもう少し理性的だ。

そして何より、ノーラとデザートホーネット団は、バニラやコニーが友誼を結んだ相手だ。

……そうだ。

よくよく考えれば、俺がここまで原作シナリオのメンバーたちに関わったのは、愛着のあるキャラクターを少しでも救いたかったからじゃないか。

ならば、答えは決まっている。

「……俺も甘いな」

「グレイ君？」

悩んだ末に、俺は拳銃をシオルダーホルスターに戻して、ノーラに顎をしゃくった。

「行けよ」

「え……？」

「むっ……？」

ノーラもファーガスンも面食らった様子でこちらを見たが、俺はノーラに向かって言葉が続けた。

「森にはまだ生き残っている仲間も居るだろう。今から回収を始めて素早く逃げれば、日が昇って警察の後続が来る前にここを離れられるはずだ。砂漠という過酷な環境で生きてきたお前なら、ここからでも生きてアジトに戻るだろう」

「逃がしてくれる、つてのかい？」

「今回の件に関しては、司法取引つてことでいいだろう。お前はブラッディマンティスに関する有用な情報を俺たちに齎した。鉄道の襲撃は未遂の容疑の段階だし、俺らへの攻撃も情報提供でチャラにしてやる。他の犯罪に関しては知らん」

俺が視線でファーガスンに伺いを立てると、彼は些か難しい顔をしたが、やがて頷いた。

「今回は……我々は完全に役立たずだったからね。ほぼ一人で敵と戦い制圧したグレイ君がそう言うのなら、私たちに口を挟む権利は無い」

「すまん。あんたにとつては、犯罪者は皆等しく刑罰の対象かもしれないが……」

「なに、構わんさ。そのくらいの司法取引の権限は私にもある。それに、ここで彼女たちを拘束して連行しようにも……護送する警察ビークルが無いからな」

もしかしたら、俺が意外な対応をしたことで、ファーガスンは下手に手を出さない方がいいと判断したのかもしれない。

まだ、黒幕であるブラッディマンティスの件が残っているからな。

俺はノーラに向き直った。

「お前がブラツディマンティスとの同盟を裏切つて情報を漏らしたこと、それに過去の略奪行為の罪は消えない。精々、報復と追及に怯えて暮らせ」

「グレイ、あんた……」

「まあ、警察や敵対組織のことより、今のお前は頭領としての立場の方が危ういか。明らかに利の無い意思決定をして、部下を死なせて……仲間からの突き上げを心配した方がいいかもな」

「それはない。アタシたちは家族だ。アタシと共に来た奴らは、皆が死ぬ覚悟でついて来た」

「けっ、ひどいブラツク企業だ」

そして、俺とファーガスンが撤収の準備を終わらせたタイミングで、ノーラも自分の腹部や腕に応急処置を施し終えた。

気絶している『クリムゾン・ホーネット』の操縦手の男を背負ったノーラは、踵を返して林の中へと歩き出したが、ふと足を止める。

彼女は振り返らず、そのままの体勢で口を開いた。

「グレイ、礼は言わないよ。でも……この借りは必ず返す」

「結構だ。砂漠の掟だか何だか知らねえが…… てめえらの顔は二度と見たくねえ」

俺がそう吐き捨てると、ノーラは再び小走りに歩き出し、森の奥へと消えていった。ノーラがこちらを振り向くことは無かったが、僅かに見えた彼女の横顔には微かな笑みが浮かんでいるように見えた。

「さて、警部殿。一旦、ハッピーガーランドに戻ろうか。報告やら処理班の要請やら、色々やる必要があるだろう?」

「了解した。……君は、どうするんだ?」

「俺はこれから北に……ホトトギスの森に向かう」

俺の言葉に、ファーガスンは顔を強張らせた。

ビークル部隊を支援に送ることを検討しているのかもしれないが、今のガーランド警察にそんな余裕は無いはずだ。

まあ、重要度で言えばこちらの方がヤバイ話なわけだが、まさか『グランドファイナーレ』のことを俺の口から言うわけにもいかず、ましてや警察ビークルを引き連れていったところで解決するとは思えない。

「弾薬の補給だけさせてくれ。スナイパーアームやガトリングアームと同じ高速弾だ」

「ああ、警察署の整備場のものを使ってくれて構わん。私も予備の機体を調達したらすぐに君を追いかけよう」

「ああ、頼む」

111話 廃坑の街、そして最も厄介な敵

一方その頃。

ゴールドーン村を訪れていたバナラは、悶々とした時間を過ごしていた。

「ふん、ふん♪ in your voice♪」

「……………」

外傷や神経痛だけでなくリウマチや内臓疾患、果ては呼吸器疾患に不妊症にまで効果を持つという、最早ファンタジーとしか言えないレベルの神秘的な湯。

風情のある露店式の温泉施設は、ゴールドーン村にしては珍しく手入れの行き届いた造りだ。

仕事終わりの入浴としては最高に贅沢な時間だが、温泉に浸かるバナラにはそれを味わう余裕など全く無かった。

壁の向こうからは、鼻歌にしてはレベルの高い正確な音程の歌声が響いてくるが、それも今のバナラにとっては煩惱を掻き立てる燃料にしかない。

コニーは何気にスタイルが良く、普段の服装でも胸や尻になかなか女性らしい膨らみを持っていることがわかる。

オアシスではバナラも彼女の水着姿を目の当たりにしたが……今の彼女の装いはそれ以上に刺激的で無防備だということも察しが付く。

この薄い木の壁を一枚隔てた向こうに裸のガールフレンドが居るといふ状況。

これで落ち着けというのは、17歳の少年にとっては酷な話だ。

「くく♪ バナラ、そつちの湯加減はどう？」

「うえ!? あ、ああ……問題ないよ」

「くすつ、何それ〜? もっと寛いで楽しめばいいのに」

「う、うん……」

「話には聞いていたけど、まさかゴールドーンにこんな素敵な温泉施設があるなんて……ここを作ってくれたグレイに感謝だね」

「そうだね。こ、こんなちゃんとした造りになつてゐるなんて思わなかつたよ」

どうにか、コニーに言葉を返したバナラだったが、他に客も居ない二人っきりの空間ともなると、やはり意識しないようにするなど無理な話だ。

バナラは温泉に深く体を沈めながら、つい先ほどローズマリーの家で交わされた会話を思い出していた。

彼女を実家に運び入れ、荷物の搬入と掃除のため今日はバナラとコニーもこの村に泊まることが決まった。

自然とバナラも荷物運びなどの力仕事を手伝う流れとなる。

そのとき、ローズマリーは口を開いた。

「コニー、せつかくだから温泉に入っっていったら？」

「そうだね。掃除が終わったら入っってみようかな」

温泉施設の存在は三人とも以前にグレイから聞いて知っていたが、実際に見たのは初めてだ。

こんな時でもなければゴールドーンに来ることは稀な以上、ここで温泉を体験せず帰るという手はない。

バナラも宿を確保したら行っってみるかなどと思いつつ、黙々と荷物の梱包を解いていく。

「ね、バナラ」

「ん？ 何だい？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら声を掛けるコニーに、バナラは向き直った。

「覗いちゃダメだよ」

「っ！ の、覗かないよ！」

突拍子もないコニーの一言に、バニラは慌てて手を振って否定した。

心臓に悪い冗談だとばかりにローズマリーの方も窺うが、口元に手をやって反対側を向いた彼女の表情は確認できない。

「ふふっ……そうだよ。君は、私が悲しむようなこと、しないよね」
「も、もちろん」

「(でも、ちよつとくらいなら……)」

「え? 何か言った?」

完全に鈍感系主人公を地で行くバニラだったが、コニーは明るく微笑みながら首を振った。

「ううん、何でもない。ほら、早く掃除しちやおうよ。温泉が待ってるから」

「わ、わかったよ」

そんな二人の様子を見て完全に察したローズマリーだったが、当の本人たちはそのことを知る由もない。

バニラは口の中で笑うローズマリーに気付かず、コニーに言われるままに荷物を運び続ける。

居心地の悪い思いをしつつも、どうにか部屋の掃除を終わらせた。

「——ニラ、バナラ！」

「え！ あ……な、何かな、コニー？」

壁越しに響くコニーの声に、バナラは慌てて反応した。

ローズマリー宅での会話の記憶から意識を戻すと、さらにコニーの声が壁越しに聞こえてくる。

「私、もう上がるね。ちよつと疲れちゃって……」

「あ、そつか。今日は色々大変だったからね。お疲れ様」

「うん。君も夜更かししないようにね。明日、街に戻ったら、マジヨラムが次のライブの予定を立てているはずだから」

「ああ、そうだね。そうするよ」

コニーが立ち上がった際の水音にできるだけ意識を向けないようにしつつ、バナラも深く沈めていた体を起こして半身を湯から出す。

天井から吹き込む夜風で僅かに体が冷えたことで、バナラの思考は少し安定してきた。

「ねえ」

「ん？」

不意に壁の向こうから掛けられた真剣な声に、思わずバニラは女湯の方へ視線をやった。

しばしの沈黙の後、ゆっくりと口を開いたコニーの声が壁の向こうから響いた。

「君は……何があつても、私の味方だよね」

「え……コニー、何を言つてるんだい？ 当然じゃないか」

「そう……そう、だよね……」

唐突な問いに、バニラは怪訝な表情を浮かべながら返答した。

もちろん、コニーとは壁を隔てているので顔は見えないが、それなりに長く濃い付き合いから、コニーが深刻な表情を浮かべている様子をバニラは何となく感じ取った。

だから、バニラはしっかりと噛み締めるように言葉を続けた。

「ああ、約束するよ。僕はずっとコニーの味方だ。僕が必要なときは、君が辛いときは、ずっと傍に居る」

「約束……そっか……」

「そう、約束。僕が約束を破ったこと、あつたかい？」

「……そうだね。砂漠の戦いするときも、君は必ず帰ってくるって約束して、無事に帰ってきてくれたもんね。必ず、約束を守ってくれるもんね」

「ああ、そうさ」

些かおちやらけて自信満々に答えたバナラだったが、コンドル砦で人目も憚らずコニーと手を握り合っていたことを思い出し、僅かに頬を赤く染めた。

「でもね……」

「？」

不意にバナラの耳に届いたコニーの声は、深刻な響きを帯びたままだった。

一言でそれを察したバナラも真剣な表情でコニーの言葉を待つ。

「もし、君に本当にやりたいことがあるのなら、諦めてほしくない」

「……？ 僕の……本当にやりたいこと？」

バナラはコニーの言葉の意味を量りかね、思わず聞き返した。

「そう。私、君には本当に感謝してる。ウミネコ海岸に閉じ込められたときも、トンネル事故があったときも、砂漠で攫われたときも、フエンネルが楽団を辞めちやったときも、今回の引越しても……君にはずっとお世話になりっぱなし。君はいつも私を助けてくれた」

「……………」

「でも……私の事情で、君には何かを諦めてほしくない」

「そんなことは……」

時折コニーが見せる深い哀しみの表情。

彼女の言葉を聞くバナラには、そんな彼女の顔が鮮明に思い出された。

「(私は、そんな自由に生きるなんて……)」

「コニー?」

「つ! な、何でもない! ほら、ビークルバトルとか、ダンジョンとか……私にはあまりわからないけど、君はやりたいと思ってること、あるでしょ?」

「うん、まあ……」

コニーの独り言は微かに温泉施設内に響いたが、その内容がバナラの耳にはつきりと伝わることは無かった。

バナラは敏感に彼女の心理状態を感じ取っていたが、彼が口を開く前にコニーは明るい声に切り替えた。

「とにかく、今日はありがとうね。本当に助かっちゃった」

「いや、お役に立てたならよかった」

「じゃあ……お休み、バナラ」

「ああ。お休み、コニー」

無理やり打ち切られた感が無くもないが、バナラもそれ以上に突っ込むことはせず、コニーが浴場を退出する水音を壁越しに見送る。

そして、バナラも温泉を出ると今日の宿である『深山荘』へ足を向けた。

先ほどローズマリーの家で顔を合わせた宿屋の主人ダニエルに挨拶し、バニラはそのままベッドに潜り込んだ。

バニラの脳裏にはコニーの言動で気掛かりな点がしばらく過っていたが、長距離の運転と荷運びや掃除の疲れもあつたのか、すぐに視界は暗転していった。

しかし、不躰な闖入者はそんな事情など構いもしない。

深夜、ゴールドーンの静寂を破るピークルの音に、バニラは飛び起きた。

ガーランド警察署で最低限の補給を終えた俺は、そのまま街の北側出口を潜り、ホトトギスの森へ足を踏み入れた。

既に月明かりが辺りを照らしており、夜もすっかり更けている。

「……どうしても、俺を寄せ付かせたくないか」

ダンディリオンの楽器工房へと至る川沿いの道へ差し掛かったとき、俺の耳はこちらに接近するピークルの音を捉えた。

一台や二台ではない。

さすがにデザートホーネット団のときのような百近い編隊ではないようだが、レッグ

パーツの音からするとそれなりの数のビークルが近づいている。

「セイボリーでも来たかな」

しばらくすると、森の木々をかき分けるようにして、十数台のビークルが姿を現した。

『ナイトメア』に『デリンジャー』か。

標準的なブラッドエイマンティスのビークル部隊だな。

しかし、姿を現したのは予想とは違う人物だった。

カスタム型の『デリンジャー』に搭乗する黒スーツに片メガネの男は、俺を見据えてゆつくりと口を開く。

「あなたが来ると思いました、 그레이」

「お前か……」

現れたのはブラッドエイマンティスの参謀コンフリーだった。

ベルガモットに次ぐ立場にある、組織のナンバー2だ。

「こんな所で油を売っていいのか？ フライトに遅れるぜ」

「私の仕事は時間稼ぎです」

『グランドファイナーレ』を意識しての軽口だったが、コンフリーは柳に風と受け流した。

はつきりと時間稼ぎだと述べるあたり、彼は『グランドファイナーレ』に戻る気は無い

のか……。

殿に志願し命を賭して敵の足止めを担うタイプにも見えない。

と、いうことは……。

「見切りをつけたか」

「……………」

こいつは原作でも普通に生存し、元々ブラッディマンティスのアジトがあつた場所でもバーを開いて、エンディング後でも堂々と暮らしている。

密かに司法取引をしたのか、自分に関する情報を全て潰したのかは不明だが、組織の幹部であつたにもかかわらずお咎めなしで生き延びられるくらいには強かだ。

この男なら、早々にブラッディマンティスの落日を悟つて逃げ出す算段を整えていても不思議ではない。

しかし、コンフリーは沈黙を保つたままだ。

「俺の邪魔をせず、さっさと消えてくれるって選択肢は？」

「私が不用意に逃げれば、あなたは必ず私を追つて殺しに来るでしょう」

コンフリーは強かで厄介な男だ。

俺の中でも彼の脅威度はブラッディマンティスで一、二を争うレベルで高い。

殺せるチャンスがあるのなら、間違いなく殺すべき相手だ。

彼とは初対面のはずだが、向こうも俺がそういう見方をしていることを察している。

最早、お互いに無視できる状況ではないか……。

「あわよくば、手負いのあなたを始末できるかと踏んでいたのですが……甘かったようですね。デザートホーネット団には荷が重すぎたようだ。ところで、ノーラはどうしました?」

「彼女なら……っ!」

しかし、コンフリーの雑談に答えようとした俺は、慌ててペダルを踏みこんでピークルを後退させた。

直後、先ほどまで俺が居た場所に、林の中から火炎弾が降り注ぐ。

ブラッディマンティスの砲撃用ピークル『デリンジャー』の攻撃だ。

俺は砲台の稼働音に気付いて回避行動をとったため自身も「ジャガーノート」も無事だったが、着弾の衝撃で近くの山道沿いの崖の一部が崩落した。

「てめえ……」

「ちっ」

話で気を引いておいて横合いから不意打ちとは、何とも姑息な手を使いやがる。

そんなことを考えていると、コンフリーは再び手を振って味方に合図を送った。

すると、林の中からさらに敵の増援のピークルが姿を現す。

その数は十台ちよい……合計三十ほどのピークルが俺の「ジャガーノート」を取り囲んだ。

「また古典的な……」

「ご安心ください。私はこれ以上あなたと事を構えることを望みません」

「よく言うぜ……部下を捨て駒にして、自分だけ逃げるってか？」

コンフリーは答えず、ただ口元に冷たい笑みを浮かべた。

「総員、攻撃開始！」

コンフリーが俺に向けた『デリンジャー』の砲身から火が噴き出すのと同時に、俺もスラストアーを起動して「ジャガーノート」を滑らせつつ、チェーンガンを構えた。

1 1 2 話 ホトトギスの森は朱に染まり

コンフリーが鋭く手を振り下ろすと、俺を取り囲む『デリンジャー』の砲身が一斉に射撃態勢に入った。

それぞれのビークルが四つの砲身に火炎弾を装填し撃発する作動音を発したが、当然ながら敵が撃つのを待ってやるつもりはないので、俺はチェーンガンを横に振り抜くようにアームを操作し、指切りでトリガーを引いて流し撃ちした。

向こうは多砲身による制圧射撃に特化したビークルなので、俺の攻撃を避ける術は無い。

一連射で四台の『デリンジャー』に弾丸を撃ち込むことに成功し、砲身内部や弾薬庫を高速弾に貫かれた敵ビークルは爆散した。

しかし、俺を取り囲む『デリンジャー』の数は多い。

コンフリーの指示に忠実に従う彼らは、横で吹き飛んだ仲間にもくれず砲撃を開始した。

「おっと……っ！」

無事な『デリンジャー』がこちらに火炎弾を浴びせてくるのと同時に、前衛を担つていた『ナイトメア』の部隊が俺に迫る。

スラスタードッシュで砲弾の雨を潜り抜けた先でアックスを振り上げていた『ナイトメア』は、ビークルのボディごと俺に突進するように攻撃を仕掛けてきた。

「覚悟！」

「ふんっ」

「ぬお!？」

当然ながら、フェイントも不意打ちも無い見え見えのフルスイングなど、俺の操縦スキルと「ジャガーノート」のスペックなら簡単に避けられる。

お返しに強化ブレードの刃をエンジンに叩き込みつつ、後ろへ回り込んでいた『ナイトメア』のキャノンの弾薬ボックスをチェーンガンで撃ち抜いた。

「第二分隊！ 射撃開始！」

コンフリーの指示で再び『デリンジャー』部隊の火炎弾が迫ってくるが、こちらも大立ち回りを演じつつ激しく動いていたので、いつまでも敵の砲撃を食らう位置には居ない。

接近戦を仕掛けてくる『ナイトメア』の間を縫うようにしてビークルを滑らせ、横合いから刺し込むようにして強化ブレードやチェーンガンの弾を叩き込み、次々と敵機を

撃破していく。

さらに俺は、先ほど接近戦で仕留めた『ナイトメア』を【ジャガーノート】のアームで引つ掴み、横へ振り払うようにして正面に投擲した。

『ナイトメア』の集団のど真ん中に敵ビークルを放り込みつつ、俺はダツシユ移動を駆使して一気に後退し距離を取る。

目の前に味方の残骸が放り込まれたことで、敵の集団は一瞬だけ俺への接近の手を緩めた。

このチャンスに逃す手は無い。

俺はチェーンガンの狙いを残骸ビークルの燃料タンクにつけ、トリガーに指を掛けた。

砂漠の決戦で使った手と似ているが、誘爆でまとめて敵を倒せずとも、ちよつとした目晦ましにはなると踏んでの戦略だ。

しかし……。

「っ！ 散開！」

突如、コンフリーは緊急のオーダーを発令しつつ、『デリンジャー』の砲撃トリガーを引いた。

通常使用の『デリンジャー』の砲台よりも早い発射速度で火炎弾が吐き出され、【ジャ

ガーノート」のかなり近くに着弾し、俺は思わずビークルを引いた。思ったより正確な射撃だ。

「第一分隊！」

再び、装填が終わった『デリンジャー』部隊による砲撃。

続いてさらに火炎弾を装填し終えたコンフリーが、敵ビークルの残骸も利用しつつ砲撃を躲す俺に、さらに正確な砲撃を見舞ってくる。

もちろん、俺も応射して敵のビークルを三台ほど仕留めたが、こちらも回避行動にそれなりに注力している状況、一気に畳みかけることは叶わなかった。

なかなか粘るじゃないか……。

コンフリーの搭乗する『デリンジャー』は装填装置と撃発トリガーをカスタムし、火炎弾のリロード速度と発射速度を上げているようだ。

通常使用の『デリンジャー』よりも明らかに4発の砲弾を撃ち出す速度が速く、射撃間隔も短い。

後ろでコソコソしているだけかと思いきや、瞬間火力を向上させたゴリゴリの戦闘力スタムである。

デスクワーク担当の参謀と思いきや、それなりに戦闘の心得はあり、前線指揮能力も

確かだ。

思った以上に厄介な相手だった。

しかし、俺も着実に敵の数は減らしている。

「おらあ！ 次だ！」

「……………」

相変わらず冷徹な目で俺を見据えて砲撃を続けるコンフリーを尻目に、俺はまたチエーンガンで『デリンジャー』の弾薬ボックスを撃ち抜き、敵機を爆発炎上させた。

敵は散開してこちらを囲み、キャノンやアックスで俺を仕留めようと試みるが、砂漠の戦争を経験したこともあり、俺はさらに一对多の乱戦の腕に磨きをかけていた。

ゲーマーとしての経験が下地になっているのかは不明だが、一度コツを掴めばそれほど難しいことではない。

全方位へ神経を張り巡らし、どこから敵の攻撃が来ても撃ち返し、敵の連携する陣形の外に近い奴から倒せばいい。

既に敵ビークルの戦力は十を切り、敵の残存戦力はコンフリーを含めて数名のみとなっていた。

「どうする？」このまま全滅するまで続けるか？」

「……………ふっ、さすがですね」

コンフリーはビークルのハンドルから片手を離し、全身から力を抜いた。さすがにこのまま続けても勝ち目が無いことを悟ったのか、彼の纏う雰囲気も幾分か無念と哀愁を滲ませたものとなった。

肩をすくめたコンフリーは、俺に向き直ると周りの部下たちにも戦闘中断を指示した。

「降伏しましょう。さすがに分が悪い」

「……………どういふ風の吹き回し……………っ！」

しかし、コンフリーの意図を尋ねようとした俺は、またしても首の後ろをチリチリと荒い繊維で撫でられたような感覚を覚え、慌ててビークルを下げた。

同時に、乾いた炸裂音とともに「ジャガーノート」のミスリルボディの一部に軽い衝撃音が聞こえる。

……………うん、わかってたよ。

見てみると、林の中にライフルを構えたブラッディマンティスの制服の男が居た。

目立つビークルに搭乗せず、小銃で俺の暗殺を企んだようだ。

予め伏兵を潜ませておくなど、コンフリーの仕業以外ありえない。

とことん不意打ちが好きなのだ。

ビークル搭載火砲とは比較にならない豆鉄砲でも、直接コクピットの俺に命中すれば

普通に致命傷を負ってしまう。

自分でも銃の威力はよく分かっているだけに、今のはなかなか肝が冷えた。

そして、当然……。

「撃て！ 攻撃開始！」

「くっ……野郎っ」

俺がビークルを引いた拍子に、コンフリーの部下たちは猛攻を掛けてきた。

散開した『デリンジャー』が全弾撃ち尽くすとばかりに放ってくる火炎弾が降り注ぎ、『ナイトメア』はキャノンを撃つてそのままアックスを振り上げて突っ込んできた。

素早く狙撃手が居た辺りにチエーンガンを撃ち込み、生身のブラッディマンティス社員を大口徑高速弾で吹き飛ばしたが、敵のアックスがすぐそこまで迫っていたため俺は強化ブレードで敵の攻撃を防御する。

「……おい！ またこれか!!」

「あなた相手に警戒しすぎということはありません。二重三重に策を弄するくらいがちょうどいい……そのまま押し込んで、少し時間を稼ぎなさい！ 勝てる策はあります！」

「ちっ、面倒くせえ……ぬっ？」

だが、そんなことを部下に言いつつも、コンフリーは徐々に『デリンジャー』を下げ

ている。

時折、部下を掩護するように火炎弾を放ってくるが、何と云うか少し射撃精度が下がったように思える。

そして、彼が気もそぞろである理由については、すぐに察しがついた。

「あの野郎っ！」

コンフリーは徐々に包囲網を横にズラすよう器用に指示を出し、俺を崩落しやすい山道の端に追い込んでいる。

一瞬、最後の攻勢に出てくるのかと思つたが、コンフリーの意識が後方へ配られる割合が増えているように見えるあたり……あいつ、逃げる気だな。

俺をこの場所から一瞬でも切り離し、その隙に離脱する腹積もりだろう。

予想はしていたが、また器用な真似をしやがる。

「ぬう……」

すぐに敵の包囲網を突破して攻撃を仕掛けたいところだが、こちらも足場の悪い環境で奴の部下から捨て身の攻撃を受けているため、なかなか本格的な突撃に移れない。

少し厄介なことになった。

しかし、次の瞬間……。

「うおー！」

「っ！ 何が……」

突如、後ろの方から飛んできた大口径のミサイル弾が、俺の【ジャガーノート】の鼻先を掠めて飛び去り、そのままコンフリーの斜め前辺りに居た『デリンジャー』に着弾して機体を粉々に吹き飛ばした。

コンフリーのカスタム型『デリンジャー』はどうか回避行動をとったようだが、元々が小回りの利かない砲撃用ビークルであるため、爆風と破片で結構なダメージを負っている。

そして、援護射撃が飛んできた方向に俺が軽く視線を送ると、そこには予想通りの人物が居た。

「グレイ！ 大丈夫か？」

「っ！ ああ！」

青いボディに長距離キャノンアームを装備した射撃戦カスタムの汎用ビークル【ブルー・サンダー】。

現れたのはフェネルだった。

「助かった！ 後は任せろ」

「おう」

フエンネルの返答を聞き流しながら、俺は先ほどの彼の射撃で浮足立ったブラッディマンティスのビークル部隊に突撃した。

近距離での乱戦となったが、この状況では出力と装甲の質で遙かに勝る「ジャガーノート」が有利だ。

俺は次々と敵の残党ビークルを撃破して、徐々にビークルを前進させていった。

そして、ついに俺はコンフリーの搭乗するカスタム『デリンジャー』の目の前に到達する。

「くっ、何という……っ！　ま、待ちなさい！　私が死んだら……」

コンフリーのビークルは駆動系がイカれているようで、時間稼ぎの言葉を吐きながら懸命に操縦桿を動かそうと試みるも、ともに動く気配は無い。

今まで冷徹な表情を崩さなかったコンフリーの目には、確かな恐怖が浮かんでいる。

俺はそのまま止めを刺すため、強化ブレードを振り上げるが……。

「参謀をお助けしろ！」

「おおおお！」

先ほど武装と燃料チューブ辺りを切り裂いた『ナイトメア』二台が、エンジンに引火するのもお構いなしに、凄まじい勢いでこちらへ突っ込んできた。

そのまま「ジャガーノート」にタックルするような勢いで、こちらのレッグパーツに

しがみ付くようにしてコンフリーを庇う。

……正気じゃないな。

彼らの『ナイトメア』は最早ともに操縦が利く状態ではなく、機体もいつ爆発するかわからない。

コンフリーのためにここまで全力で食い下がる部下が居ることには驚きだが……今はそれどころではない。

「せめて……一撃入れて……逃げ……っ」

こちらが満身創痍の『ナイトメア』二台に組み付かれて動きが止まった隙に、コンフリーはどうかカスタム型『デリンジャー』砲塔を回転させて至近距離から「ジャガーノート」に砲弾を撃ち込もうとしている。

さすがにこれはマズい。

俺はフルスロットルでエンジンをふかし、ペダルを深く踏み込んだ。

「ふんっ！」

「があ」

「ぐはっ」

勢いよく飛び出した「ジャガーノート」は、取り付いたピークルを巻き込む形で一気に前進する。

さすがに駆動部やエンジンには無理が掛かったが、「ジャガーノート」の最大出力は通常の汎用ビークルを大きく凌駕する。

俺の戦闘スタイルだとあまり格闘戦の力比べをしないため実感しにくいだが、ナツメツグ博士謹製のハイブリッドエンジンと内蔵補助エンジンをフル稼働すれば、シユナイダーの「マキシマム」のような格闘仕様のビークルや大型ビークルをパワーで圧倒することも可能なのだ。

想定通り、スラストターを噴射する勢いを乗せたダツシユアタックを食らった二台の『ナイトメア』は、弾き飛ばされるように横転した。

コンフリーの『デリンジャー』も巻き込み、パーツをぶち撒けながら地面を転がり、川沿いの柵にぶち当たってようやく止まる。

やがて、折り重なるように倒れた三台のビークルの内の一台、先ほど俺に飛び掛かってきた『ナイトメア』は、ガソリンをぶち撒けながら炎上を始めた。

「くっ、脱出を「くたばれ」っ！」

コンフリーは往生際悪くもビークルから這い出ようと試みるが、それを許す気はない。

俺は横転している『ナイトメア』のキャノンの弾薬ボックスにチェーングンの狙いを付けると、トリガーを引き絞り十数発の弾丸を吐き出した。

直後、コンフリーたちのビークルは眩い閃光と爆炎に包まれ、続いて轟音と共にスクラップや土埃が舞い上がる。

うまい具合に、弾薬の炸薬を吹き飛ばしたようだ。

飛び散ったビークルの破片や木片がこちらにまで飛んできて、「ジャガーノート」のボディに当たって音を立てた。

「やったか……」

コクピットで身を低くして飛翔物を避けていた俺が顔を上げると、爆発で川沿いの柵は吹き飛び、土手が崩れ始めていた。

脆い補強しか施されていない土壁は、爆発とビークル三台の重さには耐えられなかったようだ。

補強パーツと地盤がガラガラと崩れて濁流に沈んでゆく。

そして、コンフリーたちのビークルの残骸も、ゆっくりと川の流れに落下した。

113話 合流

ブラッディマンティスのビークルが全て片付くと、フェンネルが俺の方へビークルを進めてきた。

「……相変わらず派手にやってるじゃねえか、 그레이」

「ああ、フェンネル。さっきは助かったよ」

「気にすんな」

フェンネルは些か居心地が悪そうに口元を歪めたが、さっきの援護は本当に助かった。

足場の悪い位置に追い込まれ、残り少ない敵の始末に手間取っていた。

最悪、コンフリーを逃がしてしまうところだった。

迅速に敵を殲滅できたのはフェンネルのおかげだ。

「ところで、こんな時間に街の外まで来るなんて……どうしたんだ？」

「……ローズマリーのところに、な。生まれ故郷とはいえ、住み慣れた街を離れて、女の一人暮らしだ。色々と物入りだと思つてよ」

「ブルー・サンダー」のシートを見ると、日持ちのする食品や菓子類や雑貨など、街でないと入手しにくい消耗品が積まれていた。

ローズマリーへの差し入れとしては、なかなか気が利いている。

フェンネルは斜に構えているようで、何気にこういう気遣いはできる男だ。

買い物で予想以上に時間を食ってしまったのかもしれないが、こんな夜更けにもかかわらず、訪ねるのを明日にしないあたり……何と言うか、一本気な奴だ。

「いざ街から出てみれば、爆発音が聞こえたんでな」

「なるほど」

「お前は……例の盗賊討伐の続きか？」

「ああ、ホトトギスの森でブラッディマンティスの動きがあるって情報が入ったからな。ファーガスンには警察署の方を任せて、俺は先行してこつちに来たんだ」

「そうか」

フェンネルは少し深刻な表情で何かを考えるような素振りを見せたが、ここに留まっても事態は好転しないので、俺は彼を先へ促した。

「フェンネル、俺もローズマリーさんの様子が気掛かりだ。今からでもゴールドーンへ行こう」

「ああ」

俺とフェンネルはホトトギスの森の山道を川に沿ってビークルを進めた。

周囲を警戒しつつ進むが、幸いブラッディマンティスの別動隊には出くわさない。

コンフリーの性格を鑑みれば、さらに二段三段構えの罟を仕掛けていてもおかしくない。この道を進むだけでもなかなか緊張する。

そして、ダンディリオンの楽器工房が見えてきた辺りで、俺たちはついに遭遇した。

「あれは……っ！ コニー！」

思わずフェンネルが声を上げて視線を向けた先に居たのは、ブラッディマンティスのビークル『ナイトメア』の編隊だ。

ちやうどゴールドーン方面からやって来たビークル集団の一台は、ボディにポールのようなパーツが突き立てられており、そこにはコニーが縛り付けられている。

見たところ、彼女は気を失っているようだ。

……原作では、睡眠薬らしきピンク色のスプレーを噴射して攫う描写があるので、コニーの命に別状は無いはずだが、そんなことは今のフェンネルにとって何の慰めにもならない。

「あいつら……待ちやがれ！」

「フェンネル！」

俺が制止する間も無く、フェンネルは飛び出した。

長距離キヤノンアームを構えた「ブルー・サンダー」は一気に坂を駆け上がる。

「っ！ 敵襲！」

「迎撃準備！ ターゲットを早く向こうへ！」

しかし、これだけ堂々と正面から突っ込めば、敵もこちらの存在を早々に察知してくる。

コニーを運ぶ『ナイトメア』を庇うように他のビークルが立ちほだかり、フェンネルに向けてキヤノンを発砲した。

逆にフェンネルは炸裂弾頭を持つ武装ゆえに、コニーまで巻き込む可能性を考慮して発砲できない。

「くそっ、どけえー！」

そうしている間にも、コニーを乗せた『ナイトメア』は川に掛けられた跳ね橋を渡り、フクロウケ森の方へさっさと進んでいってしまう。

俺も掩護したいが、この狭い山道だとフェンネルの後ろからチェーンガンを撃つのも一苦労だ。

さらに、間の悪いことに……。

「ふあ……何の騒ぎです……？ おや、 그레이さんにフェンネルさん？」

「トニオ！ 来るな！」

「え……うわっ！」

楽器工房からは、就寝中だったと思わしきダンディリオンの弟子トニオが出てきた。彼は呑気に寝ぼけ眼で俺とフェンネルに声をかけてきたが、『ナイトメア』の放ったキャノンの弾が工房の庭近くに着弾すると、ドアの前でひっくり返って尻もちを付いた。

「そこから動くな！ 頭を低く！」

「は、はい！」

流れ弾や破片が彼に飛ばないとも限らないので、俺は「ジャガーノート」を加速させて少々強引に前に出て攻勢をかけた。

敵弾の破片を少し食らったが、ミスリル装甲ならばこの程度は屁でもない。

チェーンガンで制圧射撃をしながら距離を詰め、どうにか回避も防御もできない狭く遮蔽物の無い山道を抜けると、そのまま『ナイトメア』に急接近して強化ブレードを振るう。

「ぐお」

「うわあああ！」

左側の敵機のコクピットを俺が撃ち抜いて無力化し、最後に後ろへ下がった『ナイト

メア』をフェンネルが長距離キャノンで撃ち抜き、俺たちは敵の足止め部隊の殲滅を終えた。

「トニオ、無事か？」

「あ、はい……………グレイさん、これは……………」

俺が声を掛けると、高床式の玄関アプローチの柵から身を乗り出したトニオが、恐る恐る返答してきた。

「ダンディリオンは？」

「あ、先生なら今日は出られています。大切な商談があるとかで、今夜は帰らないと……………」

今頃、ダンディリオンはグランドフィナーレに乗っているか、そうでなくとも近くに居ることだろう。

まあ、ダンディリオンが適当な外出理由を告げているだろうとは思っていたので、トニオの返答は予想通りだ。

俺は怪訝な表情をするトニオに向き直り口を開いた。

「トニオ、これからこの辺りで盗賊の掃討作戦がある」

「え……うちの近所で、ですか？」

「ああ、ガールランド警察も動いている事案だ。すぐに片付くとは思いますが、ならず者のビークルが逸れて街道近くに出てくる可能性はあるからな。さつきみたいに。今日のところは、外出を控えてしつかり戸締りをしてくれ」

「はい、わかりました。グレイさん、わざわざありがとうございます」

トニオは特に疑わず、俺の指示に従った。

エンディング後の彼を思うと、何とも言えない気持ちになるが、今ここで俺がネタバレをしても信じないだろうし意味も無い。

工房の中へ戻るトニオを見送った俺は、フェンネルの元へとビークルを進めた。

再びゴールドーンの方からビークルが近づいてくる音が聞こえてくる。

今度は編隊ではなく一台のものだ。

タイミングからしてその正体には察しがつくが、俺が口を開く前にフェンネルが声を荒げた。

「おい！ バニラー！」

慌て気味にビークルを走らせてきたのはバニラだった。

辺りに『ナイトメア』の残骸が散乱する状況に目を白黒させているが、フェンネルは

構わず詰め寄った。

「さつき、コニーを運んでるブラッディマンティスのビークルを見たぞ。あれはどういうことだ？」

「どうやら、攫われたみたいだ！」

「何やってるんだ!?! コニーのことを頼むと言っただろう！」

「……………」

フエンネルの言葉で状況を瞬時に理解したバニラは端的に告げる。

わかりきったことでも、いざ実際に耳にすると頭に血が上るのを避けられないのか、フエンネルはサングラスの奥で目を剥いてバニラを怒鳴りつけた。

しかし、ここでバニラを責めたところで仕方ない。

それはフエンネルも理解しているようで、それ以上の暴言や嫌味をバニラに浴びせることは無かった。

そして、ブラッディマンティスが撤退時に跳ね上げて封鎖していった橋に勢いよく向き直ったフエンネルは、「ブルー・サンダー」を旋回させて長距離キャノンアームの狙いを付ける。

しかし、俺はフエンネルを手で制して止めた。

「待て、二人とも」

「あ?」

「え……?」

フェンネルはイラついた様子で俺を見たが、俺の視線は山道の下に降りた方向を向いている。

微かに響くこちらへ接近するビークルの足音を、俺の耳は確かに捉えていた。

「(おおい!)」

ビークルの音に混じって搭乗者と思われる男性の声が山道に木霊すると、フェンネルとバナラも向こうの存在に気付いたようだ。

やがて、声の主は山道をビークルで上り切り、俺たちの前に姿を現した。

「おおい! グレイ君!」

「ファーガスン! どうしたんだ?」

新品の警察ビークルに搭乗しているが、明らかに慌てて息を切らしているファーガスンの様子に、俺はただごとではないと理解した。

「き、緊急事態だ……君に……って! 何だこれは!」

「ブラッディマンティスにコニーが攫われた。今から助けに行くところだ。それで、そっちは何があった?」

辺りに散乱するブラッディマンティスのビークルにファーガスンは驚愕したが、一呼

吸おいてから口を開いた。

案の定、彼が放った一言は衝撃的なものだった。

「スームスームのドン・スマスからグレイ君宛てに電報が来た。内容は……保護していたマーシユが攫われたらしい」

「何だって!?!」

聞けば、スームスーム沿岸に潜水艦型の巨大ビークルが現れ、街を襲撃したそうだと。潜水艦ビークルがブラッディマンティスのものであるということは、すぐに判明した。

当然、治安部隊が出動し、ドン・スマスファミリーとスームの街に停泊中の船舶が迎撃に当たった。

進水式が済んでいない『ジュニパーベリー号Ⅱ世』も緊急発進し、スーム沿岸では大規模な砲撃戦が繰り広げられたらしい。

だが、それと同時に、街の内部でもドン・スマスが所有する物件への襲撃が相次いだ。海の迎撃で人手と意識が割かれている間に、陸地でも電光石火の破壊工作。

ドン・スマスファミリーに成す術はなく、しらみ潰しにアジトや倉庫が襲われ、マーシユも見つかって連れ去られたそうだ。

何てこった……。

ドン・スマスの影響力が強いスームスームで守れば大丈夫だと高を括っていたが……

そうは問屋が卸さなかったか。

セントジョーンズ卿のゴールドーン案よりはマシだと思っただが、これに関しては俺のミスだと認めざるを得ない。

電報を寄越している時点で無事だと思うが、ドン・スミスファミリーや『ジュニパーリー号』の連中のことも気掛かりだ。

「待て、マーシユだと?」

「話せば長くなるが、スームスームで匿っていたんだ。……それで、マーシユはどこに連れてかれた?」

俺はフェンネルに一言で説明すると、再びファーガソンの報告に意識を戻した。

「奴らは小型の潜水艇ビークルに乗り換え、北の方の川を上って逃亡したらしい。スーム近郊から少し離れた山中の川だそうだ」

「そこを内陸に進んだ先は……フクロウケ森か?」

「その通りだ」

つまり、マーシユもこの先の『グランドファイナーレ』に監禁されている可能性が高い、と。

結局、原作通りの展開になっちまったな。

ドン・スミスを責めるわけではないが、俺の根回しが全てパーだ。

まあ、下手にマーシユの搜索で頓挫されて、ダンディリオンたちが尻尾を出さなくなってしまうたら、それはそれで困るが……。

今は、この状況からしつかりとノーマルエンドルートを目指すために、原作通りの戦いを切り抜けるしかないか。

「グレイ君、やはりこの森には……」

「ああ、奥にブラッディマンティスの拠点があるはずだ。そこで、何かドデカイことをやらかそうとしている。そうでなきや、ノーラを使って俺たちの目を逸らした理由に説明がつかない」

「確かにな……」

「話は終わったか。さっさとブラッディマンティスを追うぞ」

いい加減、俺たちの会話に焦れていたフェンネルは、苛立ちを隠すことなく俺たちに宣言した。

フアーガスンは慌ててフェンネルを止める。

「ま、待て、フェンネル君。グレイ君の話が本当ならば、この先はブラッディマンティスの本拠地なのだろう？ 奴らの軍事力は強大だ。不用意に踏み込むなど……」

「何だっというい！ 仲間を誘拐されて、黙ってられるかってんだ！」

フェンネルはファーガソンを一蹴した。

こういう時にブレない奴なのは、俺もよくわかっている。

そして、フェンネルは「ブルー・サンダー」の長距離キャノンアームを構えると、跳ね橋の根本の辺りを狙ってトリガーを引いた。

無誘導で発射された炸裂弾頭は跳ね橋の巻き上げ機構を破壊し、降りてきた橋が向こう岸とこちら側の土手を連結する。

これで、フクロウケ森と繋がるルートは確保された。

「行くぞー！ ついてこい！ コニーを取り戻すんだー」

さっさと鉄橋を渡ってしまおうフェンネルにファーガスンは戸惑っていたが、バニラは少し迷った末にフェンネルに続いた。

まあ、彼にとつてもコニーの奪還が最優先だからな。

俺はファーガスンに向き直った。

「敵の警戒は厳重だ。しかし、あれだけ派手に動いていた以上、今のブラツディマンティスははてんでこ舞いで人手に余裕が無い。応援を待つのもいいが、今なら少数で潜入した方が有利かもしれない」

「むう……致し方ないな」

こうして、半ば強引にファーガスンも引っぱり張っていき、俺たちは原作よりも二名ほど

多いメンバーで、コニーの奪還に向かう運びとなった。

114話 潜入！ グランドファイナーレ

先頭に立ってフクロウケ森に乗り込んだフェンネルに続き、俺とバナラとファーガスも橋を渡って森に足を踏み入れた。

原作よりも大所帯になってしまったが、幸い敵の見張りに発見されて警報を鳴らされるような展開にはならず、俺たちは順調に溪流地帯を抜けていく。

先ほど、俺とフェンネルの襲撃で何台かのピークルに損害が出ているにもかかわらず、ブラッディマンティスの警備は意外なほど緩い。

恐らく、彼らは湖に戦力を集中させているのだろう。

数名の襲撃者への報復より、今は『グランドファイナーレ』の稼働準備が優先だろうか
らな。

もしくは、スームスームからの追っ手を警戒して、そちら側の偵察と遊撃に戦力を割
いているか……。

時折聞こえる鳥の鳴き声と森に響くピークルの足音に些か神経をすり減らしなが
らも、俺たちはどうにか敵の本陣に辿り着いた。

そして、ブラッディマンティスの戦闘ビークル『ナイトメア』が集結している辺りの少し手前で、俺たちはもう一名の招かれざる客と対面する。

「よう、ダッドリー。こんなところで何してる?」

「フェフェ、フェンネル! それにグレイ! お前らこそ、どうしてここに?」

後ろから声を掛けたフェンネルに、ダッドリーは飛び上がるようにして反応した。

一応、彼なりに姿を隠してブラッディマンティスの様子を窺っていたようだ。

あの鈍くて粗暴なダッドリーが慌てふためく姿というのも新鮮だが、フェンネルは構わず言葉を続けた。

「知り合いがビークルに攫われたんだ。お前、見なかったか」

「ああ、コニーだろ? 見たぜ見たぜ。あの妙な建物に連れてかれたんだ」

ダッドリーは特に気にした様子もなく言い放った。

バニラは若干前に乗り出しながらダッドリーに質問する。

「妙な建物?」

「よく見ろよ、あのデカいの。湖の水面の上に建ってるんだ」

ダッドリーが示した方向に視線を向けると、確かにそこには『グランドフィナーレ』が鎮座していた。

ブラッディマンティスの最終兵器で、地球で言うところの飛行船だ。

もちろん、ダッドリーどころかバナラたちにも飛行船の知識など無いので、彼らはただ訝しげな視線を『グラランドファイナーレ』に向けるだけだ。

そんなバナラやフェンネルたちに向けて、ダッドリーは自信満々に語り出す。

「アレはきつと貯蔵庫だぜ。あの中にいくつもの木箱を大事そうに運び入れてるのを見たんだ。ブラッディマンティスはあくどい手口で莫大な金を貯め込んでるって話だ。それが、あの中にあるに違いねえ！」

飛行船の大部分は低比重気体を詰めた気嚢なので、あの中に大量の荷物を積むことは不可能なはずだが……彼がそんなことを知る由もない。

まあ、短絡的でおめでたい奴が考えそうなことだな。

自信満々に言い放つダッドリーにフェンネルは些か呆れを含んだ目を向けていたが、当の本人にはそのことに気付いた様子もなく、名案を思い付いたとばかりに俺たちに向き直った。

「お前ら、アレを分捕るのを手伝え。成功したら分け前をやるぜ」

ファアガスの前で堂々と言うあたり、なかなかダッドリーは頭のネジが飛んだ奴だが、俺からすれば話はうまい具合に進んでくれた。

ダッドリーの策に乗るフリをして、コニーを助けに行けばいいのだ。

俺は即座にダッドリーに返答した。

「乗った!」

「そうか、やるか! お前えならそう言うと思つてたぜ!」

「ああ、さすがはダッドリーだ。こんな儲け話を嗅ぎつけるとは、いいカンをしてやがる」

「がはは! だろっ?」

ビークルに乗ってなかつたら、ダッドリーは俺の肩を叩いてきそうな勢いだ。

きつと、今までの諍いのことなど、ダッドリーの頭からは綺麗さっぱり消えていることだろう。

そして、この段になると、フェンネルも俺の意図に気付いたようだ。

そういえば、原作ではここでダッドリーを煽てるのは彼の役目だったな。

フェンネルなら普通に合わせられる程度には頭も回るだろう。

「おお! そいつはいい話だな。なあ、俺たちも協力しようじゃないか」

「……そうだね。協力しよう」

フェンネルのアイコンタクトを受けたバナラもこちらの意図を悟つたよう的承诺した。

残るは、勢いで連れて来てしまったファーガスンだが、生真面目な彼が妙なことを言い出す前に、俺は先制して声を掛ける。

「ファーガスン、お前さんも安月給にはうんざりだろ？　ダッドリーの仕事が成功すれば一攫千金だ。もちろん、協力するよな？　な？」

「う、うむ……そうだな」

横目では話を合わせるように圧を送ると、ファーガスンも俺の雰囲気を感じ取ったのか、たどたどしいながらも首を縦に振った。

どうにか話はまとまったな。

「んんっ？　ぬうう……」

「どうした？」

鈍い獣の唸り声のような音を辿ってみると、ダッドリーが何やら唸っていた。

先ほど皆の同意を取り付けたことで、ここに居る全員で『グランドフィナーレ』を襲撃することが決まったわけだが……ダッドリーは何故か浮かない表情だ。

「ちいと数が多いぜ。この人数だと分け前が……」

……こんな馬鹿でも、割り算はできるんだな。

しかし、やる気になったダッドリーにへそを曲げられても面倒だ。

俺は努めて涼しい表情でダッドリーの懸念を否定した。

「なに、心配するな。ブラッディマンティスはここらで一番の金持ち盗賊団だ。この人

数で分けても十分な獲物になるさ。それに、ピークルの数が多くほど大量のお宝を持ち出せるだろ」

「おお! 言われてみりや、その通りだぜ。グレイ、お前え頭いいな!」

適当な言い方だったが、ダッドリーは簡単に言いくるめられた。

こいつが馬鹿で助かったな……。

そんな具合にダッドリーを乗せつつ、彼が妙なことを言い出さない内に俺は話し始めた。

「よし、それじゃあ計画を説明するぞ。なに簡単な話だ。まず、ダッドリーとフェンネルとフアーガソンの三人は警備をおびき寄せてくれ。奴らの注意を引いて、その後派手に暴れてくれればいい。その間に、俺とバナラで橋と内部を制圧する」

「おい、何でお前らが……」

ダッドリーはとりあえず暴言を吐かなければ気が済まないといった様子で、俺に突っかかってきた。

この展開は知っていたので、俺は冷静にダッドリーを煽てるセリフを吐く。

「ブラッディマンティスの奴らを引き付けるんだ。腕利き以外には任せられん」

「ふふん! なるほどな……じゃあ、しようがねえ!」

単純な奴だ……。

実際のところ、今回の人選の理由は、原作の展開に沿った形にしたのと、ビークルのカラーリングだけだな。

フェンネルの真つ青な「ブルー・サンダー」と、ダッドリーが乗る原色っぽい赤色の「レッドタランチュラ」は目立つ。

ホワイトグレーの警察ビークルに乗るファーガスンは言わずもがなだ。

黒塗りの「ジャガーノート」と地味な「カモミール・タイプⅡ」より、この三人には陽動を担当してもらった方がいいだろう。

シナリオ通りのフェンネルとダッドリーにプラスしてファーガスンまで居るので、いざ戦闘になったときの戦力も十分なはずだ。

そして、肝心の潜入組の方だが……俺は声を潜めて改めてバナラに計画を話した。

「バナラ、俺たちは隠密行動であの建物に忍び込む。見つからないように橋を渡って、正面の人間用のドアから建物内部に侵入しよう。邪魔な見張りは排除だ。俺が先行して敵を片付けるから、後ろを警戒しながらついて来てくれ。コニーとマーシュを助け出すぞ」

「(わかった)」

ゲームのバナラは忍び込んですぐに捕まってしまったが、今回は俺が居るので大丈夫だろう。

「フェネル、ファীগスン。聞いての通り、俺とバニラはビークルを降りて行動する。恐らく、そっちの援護には回れない。くれぐれも気を付けてな」

「ああ、そっちこそ気を付けろよ。コニーを頼んだぜ」

「うむ、あまり無茶はせんようにな」

ファীগスは気楽に言ってくれるが、ビークルを降りて戦うだけでも十分に無茶だ。

そんな具合に心の中で愚痴りながらも、俺は白兵戦の準備を整えた。

まずは、シオルダーホルスターのS&W M10を取り出してシリンダーをスイングアウトし、六発の38口径弾に不備が無いことを確かめ、ポケットのスピードローダーにも六発の拳銃弾がセットされていることを確認する。

護身用ならともかく、今回はこれでは少し心許ない。

俺はビークルのコクピットの収納スペースからスピードローダーをもう一つ取り出し、ベストのポケットに入れた。

これで拳銃弾は合計18発……現代のオートマチックなら、大体マガジン一本分だ。

これだけの弾数があれば、最悪撃ち合いになっても、ある程度は戦えるだろう。

続いて、鐳（ヒルト）が大きいめのハンティング用シースナイフを取り出し、ベルトに鞘ごと留める。

折り畳みナイフよりデカくて物騒な代物なので普段は携帯しないが、サバイバルナイフなどに比べれば小柄で軽量でありファイティングナイフに近い扱いができる武器だ。もちろん、ナイフファイトになる展開などご勘弁願いたいが、これなら静かに敵を始末するのにも使いやすいだらう。

サプレッサー付きの拳銃があればご機嫌だが、無い物ねだりをしても始まらない。

「よし、行くか」

準備を整えた俺が合図をすると、バナラたちは一斉に頷き行動を開始した。

俺とバナラがビークルを降りて少し離れると、ダッドリーたちは派手に騒ぎながらその辺の資材を警備ビークルの近くにぶん投げ、一斉に三方向へ散った。

他の盗賊団か酔っ払いの荒くれビークル乗りの襲撃と勘違いしたブラッディマンティスの警備兵たちは、罵声を漏らしながら彼らを追う。

そして、ならず者ビークルを演じてブラッディマンティスの警備を引き付けるフェネルたちを見送った俺とバナラは、そのまま湖畔の停泊所へと至る橋へと走った。

こちらは意外と警備が緩い。

橋には見張り台のような設備があり歩哨に立っている者たちも居たが、ほとんどは

フエンネルたちが起こした騒ぎに注目している。

そこら中に置かれた資材や見張り台の下に身を隠しつつ進めば、俺たちは特にブラッディマンティス構成員の目に晒されること無く『グランドフィナーレ』の入口近くに到達した。

〔待て〕

「っ……………」

飛行船のタラップ付近ではブラッディマンティスの兵士が見張りに立っていた。

原作では、こんな奴など居なかったが、都合よくゲーム通りに事は運ばない。

俺は握り拳をサツと上げてバニラに待機の指示を出すと、音を立てないように注意してナイフを抜いた。

足音を立てないようにゆっくりと歩を進め、敵兵に後ろから静かに近づく。

そして、相手との距離が数メートルに迫ったとき、俺は一気に地面を蹴って走った。

「ん? ぐえぼっ……………」

ブラッディマンティスの兵士はこちらを振り向こうとしたが、その前に俺は男の口を左手で塞ぎ、背中から心臓に向かってナイフを突き刺していた。

うまい具合に肋骨に阻まれること無く刃が通る。

しかし、完全に急所を捉えるには至らなかったのか、男は俺の腕の中で激しく暴れ始

めた。

「げい、あお……ひゅ……」

俺は男の背中からナイフを抜くと、さらに脇腹と胸を数回刺し、続けて喉を掻き切った。

殺しを楽しむ趣味は無いが、確実に殺すためには仕方ない。

特殊部隊員なら一撃で仕留めるかもしれないが、生憎俺は暗殺訓練を受けたプロなどではないからな。

「(武器は……ほぼ無しか)」

男が死んだのを確認した俺は軽くボディチェックをしたが、飛び出しナイフ以外に男が所持している武器は無かった。

どうやら、こいつは完全に下っ端の見張りだったようだ。

俺は男の服でナイフを拭って血を落とすと、死体を湖にゆつくりと落として沈める。環境にはよろしくないが、他に方法も無いので勘弁してもらいたい。

「(グレイ……)」

目の前で人が死ぬ瞬間を直視したバナラは若干顔が蒼い。

彼も戦争で人死にを見ているし、故意ではないにしても盗賊と戦って相手が死んだ経験くらいはあるだろう。

だがまあ、見ていて気分のいいものではないだろうな。

「(進むぞ)」

「(……ああ)」

俺がそう宣言して『グランドフィナーレ』の扉を開けると、バナラも気を取り直して俺に続いた。

飛行船内部に辿り着いた俺たちが最初に目にしたのは、ビークル並の大きさを持つ巨大な爆弾だった。

見るからに漫画チックな丸い爆弾で、これ見よがしにTNTと書いているあたりも原作通りだ。

しかし……その数は結構多い。

ハッピーガンランドが爆撃されないように、今から全て無効化するってのは……まあ、無理だな。

「(グレイ、こっちに梯子が)」

「(ああ、わかった。俺が先行する)」

そして、飛行船のゴンドラ部分の二階へ上がると、俺たちは目的の場所に到達した。

曲がり角には金属製の檻が設置されており、その中にはコニーが閉じ込められている

のが見える。

あとは見張りを静かに排除してコニーとマーシユを助け出せばミッション完了だ。
しかし……。

「っ！」「ニーー！」

「っ……」

俺の後ろからついて来たバナラは、思わずといった様子で小さく声を上げた。

そのまま脇目も振らずコニーの檻の方へと駆け出す。

俺は慌てて止めようとしたが、それは叶わなかった。

そして、次の瞬間……。

「おい、そこのお前！」

「あぐっ」

横の通路から突如出てきたブラッディマンティスの兵士はバナラの前に立ちはだかると、そのまま彼に掴みかかった。

胸倉を掴まれた小柄なバナラは、いとも簡単に壁に押し付けられ拘束されてしまう。

「いつの間に紛れ込んだんだ？ 怪しいや……いつ！」

しかし、ブラッディマンティス男の言葉は最後まで紡がれることは無かった。

足音を響かせて駆け込んだバナラの方に注視していたためか、見張りの男の意識は完

全にバナラへ向けられていたようだ。

俺という大柄な闖入者が居るにもかかわらず、彼はこちらに気付くタイミングが遅れた。

俺の存在を察知した男は僅かに顔を横に向けたが、その時には既に俺はシースナイフを抜き、男に飛び掛かるようにして右手を突き出していた。

「が、はっ! ……ぎゃ……っ……」

野生動物の骨をも断ち切る高品質な鋼の刃は、男の首を易々と貫き、頸動脈を切断して頸椎を傷つけた。

徐々に男の呂律が怪しくなり、バナラを掴んだ手からも力が抜けてきたが、俺はさらに確実を期すため続けざまに攻撃を繰り返す。

男の胸倉を掴んでバナラから引き剥がし、ナイフを引き抜きつつ男を自分の正面まで引き摺ると、俺はさらにバツ印を描くようにナイフを左右に振った。

アーマーも何も装備していない軍服の男は、胸部と腹部を深く切り裂かれて血を吹き出した。

「かひゅ……」

止めとばかりに相手の喉をナイフで薙ぐと、見張りの男は声帯から不気味な空気音を発しながら横に倒れた。

可哀想だが、下手に生かしておいて隙を突かれたり、応援でも呼ばれたりした日には笑えないからな。

「けほっ……グレイ、助かったよ」

「気にすんな」

俺が見張りの男の死亡を確認していると、バナラは喉を押さええて軽く咳き込みながら俺に礼を言った。

よくよく考えれば、この見張りの男は原作で『グランドファイナーレ』に潜入したバナラを発見し拘束したのと同じ人物だろう。

俺が介入しなれば、バナラはここでこいつに捕まる運命だったわけだ。

危なかったな……。

因みに、始末した見張りの兵士は、コルト・ディテクティブスペシャルに似た形状のスナブノーズの38口径リボルバーを持っていた。

俺の拳銃と同じ弾薬を使用する銃だが、銃身長が短いタイプだな。

死人には用の無い物なので、貰っておこう。

115話 銃身は赤熱し……

「……バナラ？ バナラなの!？」

「っ！ コニー！ 今行く!」

先ほどの騒ぎでこちらに気付いたコニーが声を掛けてくると、バナラはそのままコニーの檻へと向かった。

バナラは檻の正面に駆け寄り、鉄格子を掴んで中のコニーを覗き込む。

「コニー、大丈夫かい？」

「うん！ 大丈夫。……来てくれたんだね、バナラ」

「当たり前じゃないか！ 本当に……無事でよかった」

二人は感動の再会の真つ最中か。

普段なら口は出さないが、今は配慮してやる余裕など無い。

俺は武装解除した見張りの兵士の服をさらに探したが、彼は檻の鍵を持っていなかった。た。

近くに鍵を保管していると思わしき場所も無いし、他の方法で開けるしかない。

俺は敵兵の死体を物陰に押し込んで隠すと、コニーとマーシユが閉じ込められている檻の前まで移動し、バナラに向き直った。

「バナラ、鍵をこじ開ける……のは無理か。俺がやるから見張りに立て」

「ああ、わかった」

通路の入口に向かったバナラを見送った俺は、小さめの折り畳みナイフを取り出し、コニーの檻に付いている錠前の鍵穴に刃を差し込んだ。

それほど高度な錠ではなさそうだが、開錠道具どころか俺自身にピッキングスキルが無いので、なかなか手間取りそうだ。

せめて、器用なマルガリータが居てくれれば……。

「グレイも……助けに来てくれてありがとう」

「ああ。礼ならフェンネルにも言っておけ。敵の本拠地にもかかわらず、君を取り戻すために突入することを決めたのは、他の誰でもないあいつだ」

「そう、フェンネルが……」

コニーは俺に答えつつも、微妙に顔を曇らせた。

フェンネルが脱退した件もそうだが、彼女は物事をネガティブに捉えて自分を責めやすい傾向がある。

きつと、迷惑を掛けて申し訳ないとか何とか考えているのだろうか……まあ、そいつ

をケアするのはバニラの役目だな。

俺は引き続きコニーの牢の鍵と向き合った。

しかし、その時、隣の檻から発せられた声が部屋に響いた。

「その声……コニー？ コニーかい？」

「えっ……？ 誰？」

コニーは声のした方向に顔を向け、訝し気な表情を浮かべた。

声の主が居るのはコニーの隣の牢だが、檻の後ろや左右は金属の壁となっているため、彼女から隣の様子は見えない。

「ボクだよ！ マーシユだよ！」

「マーシユ!？」

鉄格子を掴むようにして身を乗り出すマーシユの声に、コニーは耳を疑うように驚愕した。

よく見ると、檻の中のマーシユは以前会ったときよりも怪我が増えていた。

ドン・スミスの協力もあって、せっかく療養していたにもかかわらずこのザマということは……例のアジトを襲撃され潜水艇で攫われたときに負わされた怪我だな。

なかなか踏んだり蹴ったりなようだ。

そんなマーシユは、隣に居るのがコニーであることを認識すると、唐突に謝り始めた。

「コニー、ごめんよ。昔のボクは、どうかしてたんだ」

「な……何よ、こんな時に……」

「ダンディリオンの才能が羨ましかったんだよ。貧乏なくせにつて……馬鹿だったよ……」

「やめてよ。今、君の話なんて聞きたくない」

「チコリは……わざとじゃ……いや、わざとだったかもしれない。あの時は……本当に……本当に、ごめん！」

コニーは突然のことに混乱しつつ拒絶の声を出す、マーシユは構わず、俺のことも目に入らない様子で言葉が続けた。

「赦してもらえとも思っていないけど……本当に……本当に、ごめんなさい」

相変わらず、マーシユは涙声で謝罪を繰り返すばかりだ。

しかし、ここに来て、コニーもただ俯いて拒絶するだけの態勢から、顔を上げて怒鳴るように言葉を返した。

「何よ！ さつきから！ 改心したから赦してくれって言うの!?!」

「そんなつもりじゃないよ。本当にボクは悪いと思ってるんだ……」

弱弱しいながらもはつきりと否定するマーシユはさらに言葉を続けた。

「一人で海外で生活してわかったんだ。皆の大切さが……。ボクはもう昔のマーシユじゃないんだよ」

勝手な言い分だ。

本人も理解しているだろうが、全てはマーシユ自身の都合であり、謝ることで勝手に自己満足しているだけだ。

人をいたずらに傷つけて殺しても何も感じないサイコではないことの証明にはなるだろうが、それが被害者にとって何の意味を成そうか？

人生が狂うほどの被害を受けた人間は、そう簡単には救われない。

加害者が排除されない限り、留飲も下がらない。

俺がコニーの立場だったら……きつとマーシユを許せないだろう。

きつとマーシユを殺そうとしただろう。

彼と同じように……。

「いいわよね。君はそうやって改心して変わったんだから。私だって……私だって変わりたいのに！」

しかし、コニーは皮肉っぽく吐き捨てつつも、その怒りはどこか自分へ向けられているようだった。

「あの時、チコリを誘わなかったら……あの時、時間通りに待ち合わせに行っていたら

！」

「……………」

「ずるいよ……君ばっかり謝って……」

コニーは決して全てをマーシユのせいにはしない。

全ての責任を他人に押し付けることができない。

だからこそ、割り切れないのだ。

全部マーシユのせいだと断じられるだけでも、相当楽になるはずなのに……。

これを人は善良と言うのであろうが、ある意味で損な性格だ。

「コニー……………」

悲痛な声に耐えかねたのか、バナラはこちらへ向き直ってコニーに声を掛けようとした。

しかし、今は鍵を開けて二人を助け出すことが先決だ。

それはバナラも理解しているようで言葉に詰まり、しばしの間室内には沈黙が流れ、俺が錠前を弄る金属音だけが響いた。

しかし、そんな居心地の悪い静かな状況も、一人の闖入者によって破壊される。

突如、バナラが背を向けていた金属扉が開かれた。

「おい、コンフリー参謀が戻られていない！ 偵察部隊を……」

「つー」

部屋に入って来たのは軍服を着たブラッディマンティスの兵士だ。

明らかにブラッディマンティスの構成員ではないバナラを視認して、男は驚愕に目を見開いた。

さらに、檻の前に俺の姿を認めた男は、慌ててホルスターの武器を取り出そうと試みながら、声を荒げて誰何する。

「き、貴様らー！ 何者……おがつー」

しかし、男の言葉は途切れ、代わりに喉の奥から潰れたような悲鳴を絞り出した。

敵がフラップ付きのホルスターから銃を取り出す前に、俺は咄嗟にナイフを放り出し素早くシオルダーホルスターからS&W M10を抜いて発砲していたのだ。

両手でがっちりとグリップをホールドし、男の体の中心を狙って二回トリガーを引く。

4インチのバレルから放たれた二発の38口径弾は、的確に男の胸部を抉り臓器を破壊したことだろう。

防弾チョッキも装備せずダブルタップを食らった以上、ダメージは確実に致命傷だ。

ブラッディマンティスの男は信じられないものを見たような表情を浮かべた直後、たたらを踏んで後ろ向きに崩れ落ちた。

「バナラ！ 無事か!？」

「だ、大丈夫!」

俺の問いかけにバナラは慌てて立ち上がりながら返答した。

俺が放った銃弾はバナラの肩口を掠めたが、彼に流れ弾を当てるようなミスはしていない。

敵にも、一発も撃たせなかった。

精々、驚いて尻もちをついたくらいで、バナラは五体満足だ。

しかし、船内は俄かに騒がしくなった。

金属の床を駆ける足音がそこら中の通路から響き始め、伝声管からは怒号と状況確認を求める声飛び交ってくる。

まあ、あれだけ派手に銃声を鳴らせば当然か。

間も無く、敵兵が大挙してこの部屋に押し寄せてくるだろう。

「何事だっ！ 格納庫、応答せよ!」

「ちっ、離陸させなさい!」

ベルガモットとセイポリーと思われる声も、伝声管を通して俺の耳に届いてくる。

厄介なことになったな……。

実は、コニーたちの檻の開錠はまだ全く終わっていないのだ。

情けない話だが、俺のピッキングスキルは全く発揮されること無く時間が過ぎ、とうとう敵と遭遇してしまったわけだ。

だが……ここまで騒ぎを大きくしてしまった以上、もう音に配慮する意味は無い。

「コニー、下がれ！」

俺はコニーを檻の奥の方へ下がらせると、彼女の檻の錠前に拳銃弾を三発撃ち込んだ。

38口径弾は現代の基準からするとそれほど威力のある弾ではないが、至近距離から何発も食らっては、何の変哲もない錠前が耐えられるわけもない。

ロック機構は吹き飛び、ゴツイ錠はバラバラに飛び散る。

そして、俺が鉄格子を掴んで引つ張ると、コニーの檻は簡単に開いた。

「バニラ、コニーを……っ！」

しかし、俺が最後まで言い終わる前に、『グラウンドフィナーレ』の船体が微細に振動し始めた。

やがて、ビークルのものとは比較にならないエンジン音が船内に轟き、火災報知器のようなベルまで鳴り始める。

「くそっ……離陸か」

もう時間が無い。

さつさとコニーとマーシユを助け出して飛行船を脱出しなければ……。

バナラがコニーの手を引いて檻の中から連れ出すのを横目に確認し、俺はマーシユの檻へと向き直った。

しかし……。

「っ！ こっこだ！ こっつちに来い！」

「あそこだ！ 侵入者が居たぞ!!」

先ほど撃ち殺した男が入って来たのと同じ扉から、今度は数人のブラツディマンティスの兵士が雪崩れ込んできた。

しかも、それぞれが拳銃を手に持ち武装している。

俺は咄嗟にS & W M10の銃口を上げて、先頭の兵士に向かって発砲した。

「がっ！」

「くそう！」

「奴を殺せ！」

「撃て！ 撃ちまくれ！」

俺の放った銃弾は敵兵の一人の顔を貫き致命傷を与えたが、当然他の兵士たちも黙っていない。

彼らは殺気だつてこちらに銃を向け引き金を引いた。

撃ち返したいところだが、俺は今ので六発目を撃つたので弾切れだ。

「そつちだ！ 隠れろ！」

「わっ！」

「きゃー！」

俺がバニラとコニーを半ば突き飛ばすようにして、マーシユの檻の後ろに押し込んだ。
だ。

俺も滑り込むように檻の後ろへ身を隠すと、続けざまに轟いた銃声とともに、近くの床や壁に拳銃弾が着弾する耳障りな金属音が響く。

射線は切れているものの、跳弾がこちらに飛んでこないとも限らない。

結局、撃ち合いだ。

何とも嫌な状況に陥ってしまった……。

俺はS&W M10のシリンダーをスイングアウトし、エジクターロッドを押して空薬莖を捨てると、ポケットから取り出したスピードローダーで六発の38口径弾を装填した。

シリンダーを戻して再び銃を構えた俺は、マーシユの檻を遮蔽物として背中をびつた

り付け、敵の銃火が止む瞬間をじっくりと待つ。

敵の銃声の重なり方が弱くなった瞬間から一拍置き、俺は素早く遮蔽物から身を乗り出して拳銃を構えた。

「……………」

ちょうど当たりを付けた場所に体を乗り出している敵兵が居たので、俺はその男の体の中心を狙って二回トリガーを引く。

俺は素早く体を引いて遮蔽物に身を隠したが、ターゲットの男が胸に弾を食らって横に倒れる姿を視界の隅で微かに捉えていた。

「くそおー！ 一人やられた！」

「野郎っ、ぶっ殺してやる!!」

ブラッディマンティスの兵士たちは、相変わらず次々と銃弾を撃ち込んでくる。

銃声から察するに、敵の数も徐々に増えているようだ。

今の敵の数は十人強といったところで、向こうにはオートマチックを所持している者も居る。

一人減らしたところで、どうにもならない。

人数でも武装でも完全に負けている以上、奴らを全員撃ち殺して脱出することは不可能だ。

「くっ」

俺は激しさを増した敵の制圧射撃に顔を顰めつつ、銃を握った手だけ遮蔽物から突き出して、ブラインドファイアで三発ほど発砲した。

残念ながら、今のは命中しなかったようだ。

「さて、どうするか……？」

後悔先に立たず……マジで白兵戦装備を充実させておくべきだったな。

こんなことなら、SMG（サブマシンガン）でも調達しておけばよかった。

せめてグレネードがあれば……。

しかし、そんなことを考えていると、突如『グラランドファイナーレ』が激しく揺れた。

「うおー！」

「なっ」

「きゃあー！」

俺の横で体を小さくするようにして身を隠していたバニラとコニーも、思わずと言った様子で声を上げた。

近くの窓の外を見ると、微かに明るくなってきた空に照らされる森が、徐々に下に移動している。

ついに、『グラランドファイナーレ』が上昇を始めたようだ。

「まずい……」

このまま上空に連れていかれたら、完全に逃げ道が無くなる。

こちらの武装は貧弱で弾も少ないので、この狭い船内で逃げながら戦っても必ず追いつめられる。

そうなれば、いずれはブラツディマンティスの兵士たちに包囲され、俺たちは全員捕らえられてしまうだろう。

俺がどうすべきか思索していると、俺たちが盾にしている檻の中から弱弱しい声が聞こえた。

「皆、ボクのことはいいから、逃げて」

「っ！… 何言ってるの!?!」

コニーは思わずと言った様子で叫んだ。

マーシユがわだかまりのある相手とはいえ、この状況で彼を見捨てて逃げるなど、彼女の良識からすれば考えられない話か。

しかし……。

「早く……このままじゃ、皆……」

「くっ……」

マーシユの絞り出すような声にバナラは悔し気に顔を歪めるが、この状況では他にどうしようもないのも事実だ。

ブラッディマンティスの兵士たちが放つ銃弾の勢いは未だ衰えることがなく、どうやらライフルを持ち出してきた奴も居るようだ。

俺たちが盾にしている遮蔽物は分厚い金属の檻なので、弾が貫通してくることは無い。

しかし、檻の正面に回ってマーシユを助け出し、尚且つケガ人の彼を担いで脱出するのは、さすがに無理ゲーだ。

そして、このまま時間が経てば経つほど、脱出は絶望的になる。

「……バナラ、コニー、下がれ」
「っ……」

俺は近くの窓に拳銃を向けると、トリガーを引いてガラスに38口径弾を撃ち込んだ。

「うわっ」

「きゃ……」

目の前で飛び散ったガラス片に、バナラとコニーは顔を背けつつ微かに声を漏らした。

幸い、高度はまだそれほど高くなかったので、気圧差で急激に窓から吸い込まれて外に放り出される心配はない。

そして、またしても拳銃のシリンダーが空になったので、二つ目のスピードローダーで弾を装填する。

これが最後の予備弾……敵から奪ったスナブノーズの六発を合わせて、残弾数は十二発だ。

……やるしかないな。

「二人とも行くんだ。俺が撃っている間にその窓から逃げろ」

「でも……」

「早くしろ。もう弾にも余裕が無い」

「……わかった。コニー」

「……………」

コニーは些か戸惑っていたが、覚悟を決めたバナラに促され、彼女は俯いたままコクリと頷いた。

バナラはコニーの手を取ったまま俺を力強い目で見据えてくる。

俺はバナラの視線に応えるように、フル装弾したS&W M10を握り直し、左手にも敵兵から奪った38口径スナブノーズを持った。

「よし、行け！」

俺は二人に合図を出すと、素早く遮蔽物から身を乗り出し、両手の拳銃を乱射した。

三発ずつの速射で放たれた銃弾は全部でたったの六発だが、二丁拳銃による制圧射撃だ。

現代の火器の基準からすれば非効率的な戦術だが、少なくとも小火器がボルトアクションライフルとリボルバー拳銃くらいしか無かった時代においては、こうして二丁拳銃を用いて瞬間的な高火力を出す戦術というのは普通に用いられていたものだ。

一瞬で至近距離に銃弾を立て続けに叩き込まれたことで、驚愕した敵兵は慌てて遮蔽物に身を隠した。

「死ねやあー！」

しかし、中には蛮勇を振るって攻撃に転じて来る兵士も居る。

箱の上から身を乗り出すようにして一人の兵士が自動拳銃を連射してきたので、俺は慌てて遮蔽物の影に引っ込んだ。

しかし、敵は堂々と姿を晒しているため、マーシユの檻の近くにある貨物の隙間からも奴の姿は丸見えだ。

俺は箱の隙間からS&W M10を突き出し、ゆっくりとトリガーを引いた。

うまい具合に額に38口径弾を食らった男は、血とあまり見たくない内容物をぶち撒けて絶命した。

「コニー、早く外に」

「う、うん……」

俺が再び遮蔽物に身を隠して視線を横にやると、ちょうどバナラがコニーの体を支えながら二人で船外へ這い出しているところだった。

まだ弾は残っているので、もう一度くらい援護できる。

俺は二度目の制圧射撃を行うため、遮蔽物から身を乗り出そうとした。

しかし、次の瞬間……。

「あ………」

「コニー!!」

突如、『グランドファイナーレ』の後部で爆発が起こった。

その衝撃で、コニーはバナラの手を離してしまい、不自然な体勢で湖へ落下してしま
う。

「くっ!」

バナラは迷わずコニーを追い、頭から水面へ飛び込んだ。

無茶をしやがる……。

二人とも、ケガをしなければいいが……。

「何だ!? 何が起こった!？」

「わかりません!」

「こ、攻撃です。地上のビークルから……」

「何だって!？」

「高度が下がっているぞ!」

「どうやら、誰かが『グランドファイナーレ』の後部エンジンを攻撃して損傷させたようだ。」

下に居る味方といえば、フェネルとダッドリーとファーガスンだが……あの中で空中の『グランドファイナーレ』を攻撃できる武装を持っている奴といえば、フェネルだ。恐らく、ドンパチで中の状況に気付いたフェネルが、飛び立つ『グランドファイナーレ』のエンジンに長距離キャノンアームをぶち込んだのだ。

まさかコニーの乗っている飛行船にそのような暴挙に及ぶとは思っていなかったが、中で撃ち合いが起こっている状況を見て取って、少しでも掩護するつもりでやったのだろう。

「う、わわ……っ!」

衝撃と船体が傾いたことで、俺から見える位置にブラッディマンティスの兵士が滑つて来たので、俺はそいつの体に左手の38口径スナブノーズの残弾を撃ち込んで止めを刺した。

スナブノーズのリボルバーは銃身の短さゆえに遠距離だと命中精度がかなり悪いが、室内戦の距離で三発も撃てば、使い慣れていない銃でも人体のどこかには普通に当たる。

俺は弾の切れたスナブノーズを捨てると、再び外に視線をやった。

エンジンを損傷した『グランドファイナーレ』は少しでも下降したものの、どうにか航行は続けられるようで、また高度を上げ始めている。

徐々に傾きも安定してきた。

「……………」

「グレイさん、行つてください」

俺がマーシユの牢に意識を向けると、向こうも何となくそれを悟つたのか、彼は俺に退くよう促してきた。

バナラとコニーを逃がすことには成功した。

しかし、こんな状況にもかかわらず、ブラッディマンティスの兵士たちは相変わらずこちらに発砲してきている。

混乱に乗じて錠を破壊してマーシユを助け出し、さらに彼を担いで逃げるなんて芸当は不可能だ。

しばしの逡巡の後、俺は立ち上がった。

「マーシユ、すまない」

俺は彼に詫びつつ、自分もバナラとコニーが脱出した窓に向かう。

俺に動きがあったことを察知したのか、ブラツディマンティスの兵士たちはさらに拳銃やライフルを発砲してきたが、俺はS & W M10から残りの弾丸を彼らに向けて適当に撃って吐き出すと、そのまま一目散に窓へ走った。

下を見ると、意外と遠い水面に少しビビったが、ここで時間を食っても状況は悪化するだけだ。

拳銃をシオルダーホルスターに仕舞い覚悟を決めた俺は、前世のテレビで見た災害時の飛び込み姿勢を思い出しつつ、湖の水面に向かって『グランドファイナーレ』から飛び降りた。

116話 生還

足から湖に飛び込んだ俺は、着水の衝撃を感じた瞬間に両手と両脚を大きく開いた。息を止めたまま両手両足で下方向に水を押し、どうにか浮上しようと試みる。

服が水を吸ったことによる影響か、プールで泳ぐときよりも動きが鈍く浮上に時間がかかって焦ったが、俺はどうか水面に顔を出すことに成功した。

「ぶはっ！ ふう、ハア、ハア、ハア……………ケホッ……………」

立ち泳ぎをしつつ、しばらく空気を貪っていると、やがて呼吸が安定してきた。

……………どうやら、無事に戻って来れたようだな。

銃弾は食らっておらず、水面に叩きつけられた際にも外傷は無い。

生きていることを実感し、体中の筋肉が一気に弛緩していくような錯覚に陥る。

辺りを見回すと、先ほどまで『グラランドファイナーレ』が停泊していたと思わしき栈橋が目に入ったので、俺は疲労の蓄積した体に鞭打ってそちらへ泳いでいった。

やがて、栈橋の先端辺りに地上組と先に脱出した面々の姿を発見した。

ダッドリーは山の向こうへ飛び去る『グラランドファイナーレ』を唾然として見つめ、

フアーガスンはバナラを、フェンネルはコニーを湖から引き上げている。

「おい！ コニー！ しっかりしろ!!」

コニーを引き上げたフェンネルは、突然騒ぎ出した。

よく見ると、棧橋に引き上げられたコニーは仰向けのままぐったりとしており、フェンネルは彼女の体をしきりに揺すっている。

最悪の事態が脳裏を過り新造が縮みあがった。

「フェンネル！ そこ、どいてくれ！」

バナラはフェンネルを押し退けるようにしてコニーに駆け寄った。

背中に手を回して体を起こし胸元に耳を当てる。

頸動脈にも手を当てて脈を確認したバナラは、次に口元に注目して呼吸を確かめた。

「心臓は……動いてる。息は……多分、水を飲んだんだ」

現代なら、運転免許の講習なんかで習う程度の内容だが、この時代にしては的確で迅速なバイタルチェックだ。

恐らく、『ジュニパーベリー号』で覚えたのだろう。

バナラが船員見習いのような立場だったことを鑑みれば、溺れた人間の救助法を船のクルーたちに教わっていても不思議ではない。

念のため、俺も棧橋から自力で這い上がり、バナラたちの近くへ寄った。

その時、コニーは体を跳ね上げながら激しく咳き込んだ。

「げほっ！ ごほっ、ゴホッ！ ……ごほっ……………ハア、ハア、ハア……………」

「コニー！」

「おい！ 大丈夫か！」

バナラはコニーの体を横向きに支えて水を吐き出させた。

気管に入った水の影響でコニーは体を丸めて悶えていたが、しばらくの間バナラが背中を摩つていると、やがて彼女は顔を上げた。

「……………う……………バナ、ラ……………？」

真つ先にコニーの視界に入ったのはバナラだ。

一番近い場所で体に触れているバナラを確認したコニーは、未だ粗さが残る呼吸のなかで、彼の名前を譚言のように呼んだ。

「……………助けて、くれたんだ……………」

「……………ああ」

至近距離から真つ直ぐに見つめられたバナラは、僅かに上気した頬に気恥ずかしさが垣間見えるが、コニーの声にはつきりと頷いた。

栈橋に座り込んだままの体勢だが、コニーはお構いなしといった具合にバナラに抱き着き、彼の胸元に顔を埋める。

「初めて会ったときと、逆になっちゃったね……」

「……そうだね」

バナラもそれに応え、コニーの後頭部に手をやって抱き寄せるようにし、そのまま彼女の髪を撫で始めた。

こんなずぶ濡れ状態で、ずいぶんとお元なこと……。

だが、あの銃弾が飛び交う危機的な状況から奇跡的に脱出した以上、多少周りが目に入らなくなる気持ちもわかる。

俺も……ここにマルガリータが居たら、抱き合つて生還を喜んでいただろう。

今はこうして生きて日の出を見てほっとしている。

大した特典も無く転生させられた恨みは消えていないが、今だけは神に感謝してもいいかもしれない。

しばらくイチャついていた二人だったが、やがて俺たちの視線に気づいたのか少しだけ体を離れた。

バナラはコニーの体を支えながら顔だけ俺に向き直った。

「グレイ、さっきは本当に助かったよ。見張りに発見されたとき、グレイが居なかつたらと思うと……」

「私からもお礼を言わせて。助けに来てくれて、本当にありがとう」
「……ああ」

バナラに続いて俺に感謝の言葉を述べたコニーはフェンネルに向き直った。

「フェンネルも、ありがとうね。フェンネルが率先してここまで助けに来てくれたって……」

「いや、気にすんな……」

コニーの言葉にフェンネルは齒切れ悪く生返事をした。

フェンネルにしてみれば、先ほどまでは生きた心地がしなかつただろう。

彼の射撃で飛行船からコニーが湖に落下し、引き揚げた彼女が気を失っている光景を目の当たりには……。

当然ながら、フェンネルは『グランドファイナーレ』が飛行船だということも、空を飛ぶ乗り物があることも知らない。

彼が長距離キャノンで『グランドファイナーレ』のエンジンを一つ吹き飛ばしたのは、本当に咄嗟のことだったはずだ。

俺たちが脱出する前に建物が飛び去ろうとしたため、彼は考え得る限りの方法を以つて止めようとしてくれたのだ。

正直、助かった。

あのまま高度を上げられていたら、俺はより高い位置から水面に叩きつけられて骨の一本でも折っていたかも知れない。

幸い、俺の被害は全身ずぶ濡れでシオルダーホルスターがお釈迦になっただけだ。

結果的に、全員がけがを負うことなく生還できた。

フェンネルからすれば色々と思うところもあるかもしれないが、今回の件は結果オーライということで納得してもらおうしかないだろう。

そんな具合に俺たちが話していると、今の今まで呆けた表情で空を見上げていたダッドリーが口を開いた。

「なあ、フェンネル……ありや、一体何なんだろうな……う。」

「俺が知るかよ。あんなデカい建物が飛ぶなんて、俺の想像を超えてる。この国であれを理解できそうなのは、ナツメツグ博士と……って、マズいぞ！ あの方向は……！」
フェンネルはぶつきらぼうにダッドリーに返答すると、サングラス越しに俺を横目で見てきたが……次の瞬間、息を呑んで声を荒げた。

コニーが助かったことで若干気を抜いていたフェンネルだったが、『グランドフィナーレ』の進路を認識したことで一気に緊張感を漲らせる。

当然、奴らが飛び去った方向はハッピーガーランド方面だ。

俺はこちらを向いたフエンネルに一つ頷き口を開いた。

「皆、もう動けるな。急いで街に戻るぞ。あの飛行兵器に関してまだ厄介な問題が残っている」

俺がそう言うと、バナラが深刻な表情で頷いた。

「そうだ。あの中には、まだマーシユが……」

「……………」

コニーは複雑な表情を見せたが、俺はバナラに一つ頷き言葉が続ける。

「ああ、それも懸案事項だ。だが……もう一つ差し迫った危機がある」

俺はフエンネルの方へ一瞬だけ視線をやり結論を告げた。

「ブラッディマンティスの連中は恐らくハッピーガーランドを爆撃する気だ。あの巨大な飛行物体から街中に爆弾を投下するつもりだろう」

「何だって!?!」

「グレイ君、どういうことかね!?!」

あまりにも重大な俺の想定に、フエンネルとファーガスンは驚愕の声を上げた。

『グランドファイナーレ』がハッピーガーランド方面に飛び去ったことから、ブラッディマンティスが何かを企んでいることはフエンネルも想像がついていただろう。

しかし、空から爆弾を落とされる状況など、さすがにこの時代の人間なら想像もつか

ないはずだ。

バニラも目を見開いて俺に視線を向ける。

「俺が連中ならそうする。あれだけの高度を飛べるなら、上空から大型爆弾を投げ落とすのが最も効果的な戦術だからな。当然、アレの格納庫に大量の爆弾が搭載されていることも確認済みだ」

「な、何という……」

続けざまの悪い知らせに蒼白になるファーガスンから一旦視線を外し、俺はフェンネルに向き直った。

「フェンネル、お前さんはこのまま街に戻って弾薬を補給したら、奴らが投下する爆弾を撃ち落としてくれ。向こうにはコンフリーが居ない……敵の厄介な参謀は排除済みだ。それに、フェンネルの一撃でエンジンを損傷している。今から街にビークルを飛ばせば十分間に合うはずだ」

「……わかった」

俺が振り向くと、ファーガスンもようやくやく正気に戻ってきたようで、真剣な表情で俺の言葉を待っていた。

「ファーガスン、あんたも街に戻って緊急配備を。戒厳令（マーシャル・ロー）でも何でも構わん。とにかく、街が砲撃を受けたときと同様の措置を取ってくれ。住民の安全が

最優先だ」

「うむ、私も同意見だ。そうするよりほかに無い」

最後に、俺はバナラに声を掛ける。

「バナラはコニーを連れてピジョン牧場へ。向こうに着いたら、ナツメツグ博士に状況を説明しておいてくれ」

バナラ自身も消耗しているが、コニーは誘拐された拳銃に湖で溺れかけた。

彼女の体調を鑑みれば無茶はできないと悟ったのか、バナラは素直に俺の指示に頷いた。

「ああ、わかったよ。…… 그레이はどうするの?」

「俺はな……」

一拍おいて、俺は湖の湖畔の方へ視線をやりながらバナラに返答した。

「ゴミ掃除だ」

バナラに続き、そこに居た全員が俺の視線を追う。

先ほどまで『グランドファイナーレ』が停泊していた辺りからは、ブラツディマンティスの制式ビークルである『ナイトメア』や『デリンジャー』がこちらへ向かって来るどころだった。

どうやら、俺たちをすんなりと通してくれる気はないようだ。

こちらに迫るブラッディマンティスを視認した俺たちは、棧橋を走ってビークルを駐機した場所に戻った。

それぞれが愛機のコクピットに滑り込むように乗り込み、俺も急いで「ジャガーノート」の運転席に飛び乗ってエンジンキーを捻る。

ずぶ濡れのまま乗り込んだせいでシートが水浸しだ。

……今日はどこんツイてない日だな。

それでも、愛機のハイブリッドエンジンは頼もしい馬力を感じさせる挙動で駆動部を稼働させながら、汎用のディーゼルエンジンとは一線を画す静かな唸り声をあげた。

やはり、ビークルは頼りになる相棒だ。

ノーラとの肉弾戦に、飛行船内での撃ち合いに……続けざまの戦闘で相当な消耗をしており、これ以上の殺し合いはご勘弁願いたいところだが、ビークルに乗っているとまだまだ戦えるような気がしてくる。

「よし、行くか……」

「おい、グレイ！ 待てや！」

しかし、俺がハンドルに手を掛けてビークルを出そうとすると、赤い塗装のビークルが虫型四足のレッグパーツを響かせ接近してきた。

ダッドリーだ。

先ほどもでは『グランドフィナーレ』という想像を絶する存在にただ呆然と立ち尽くしているだけだったが、どうやら混乱も収まってきたらしい。

そんなダッドリーは俺の横に並ぶ位置までピークルを進めると、苛立った様子で口を開いた。

「妙な空飛ぶ建物だの、爆弾がどうしただの……わけわかんねえことばっか言いやがって！ マジでイラつくぜ」

「……………」

「と……とん暴れねえと気が済まねえんだよ！」

ダッドリーはこちらへ接近するブラッディマンティスのピークル部隊を示しつつ、口から唾を飛ばして叫んだ。

てつきり、潜入した『グランドフィナーレ』から収穫が無かった件で嫌味を言っていると思ったが、意外な展開だ。

まあ、蒸し返されるよりは百倍マシか。

何だかんだ、ダッドリーはそれなりの腕を持つピークル乗りだ。

戦力が増えるのは助かる。

「よし、奴らは俺とダッドリーが引き受ける。バナラ、フェンネル、ファーガスン。一斉

に飛び出せ」

俺が若干振り向きつつ指示を出すと、バナラたち一行はビークルのエンジンをふかしながら頷いた。

左アームのチェーンガンを構えてこちらへ接近する『ナイトメア』に狙いを付けつつ、俺はダッドリーの声を掛ける。

「一番槍は譲つてやるよ」

「へっ、当然だ！ 遅れるんじゃねえぞ！」

ダッドリーが黒煙を上げながらエンジンをつかして飛び出したのと同時に、俺もペダルを踏みこんで「ジャガーノート」をダッシュ移動で滑らした。

そして、チェーンガンの銃口の延長線上に敵のビークルが吐いた瞬間、俺はトリガーを引き絞った。

117話 迫りくる脅威

「ダッドリー、後ろだ！」

「くっ……わかってらあ！」

正面から迫りくる『ナイトメア』と取っ組み合いをしていたダッドリーは、俺の警告に悪態を付きながら火炎放射アームを振り回した。

圧縮空気と共に吐き出された燃料にイグニッションで引火させ炎をばら撒けば、さすがの数に勝る敵も押し通ることはできない。

ブラッディマンティスのビークル部隊は一瞬ダッドリーの制圧射撃に怯んだ。

その隙を逃す手は無い。

俺は素早くチェーンガンの狙いを付けるとトリガーを引いた。

「そっだ！」

【ジャガーノート】のチェーンガンから放たれた弾丸はダッドリーの「レッドタランチュラ」のボディを掠め、『アリンジャー』の弾薬ボックスに着弾した。

当然、炸薬を撃ち抜かれた弾薬は暴発し、同じ弾倉内の弾薬を誘爆させる。

隊列のど真ん中で爆発が起こったことで、ブラッドディマンティスのビークル部隊は一気に勢いを削がれ始めた。

「オラオラアー！」

優勢な展開に勢いづいたダッドリーはさらに前に出て火炎放射器を乱射した。

被害は周囲の草木に引火したものの方が多そうだが……腐ってもダッドリーはビークルバトルーナメントに声が掛かるほどのビークル乗りだ。

『デリンジャー』の砲弾や『ナイトメア』のアックスが掠つても怯まず、強引に押し通るように敵ビークルを撃破していった。

「あと少し……もうひと踏ん張りだ」

「けっ、しやらくせえー！」

火炎放射をばら撒きながら左の砲弾アームを乱射したダッドリーは、さらに近くの『デリンジャー』にダッシュアタックを仕掛けると、そのまま近接武装を持たない敵の射撃用ビークルをアームで掴んで投げ飛ばした。

火炎放射アームと砲弾アームという遠距離用の武装にもかかわらず敵に肉迫していく戦法はどうかと思うが……それでもダッドリーの勢いとタフな戦いぶりに、ブラッドディマンティスは徐々に押されていく。

さらに、俺はダッドリーの後ろからチェーンガンでの確な射撃を見舞いつつ、孤立し

た敵ビークルは確実に強化ブレードで切り裂いて葬ってゆく。

一度こちらに戦局が傾けば、あとは完全なワンサイドゲームだ。

敵も巡回に出ていたと思わしき連中が戻ってきたが、数台のビークルが増援に加わったところでたかが知れている。

そして、朝日が山間をしつかりと照らし始めた頃、俺とダッドリー以外に動く者は存在しなかった。

「ダッドリー、生きてるか？」

「……当たり前だ」

傷だらけの「レッドタランチュラ」に声をかけると、不機嫌そうな声が返答した。

どうやら、ダッドリーは無事らしい。

ビークルはボロボロでダッドリー自身は疲労のピークに達しているようだが、あんな敵に囲まれた状況で大した怪我が無いなら儲けものだろう。

俺も……幸い、ビークルに深刻な損傷はなく、コクピットの俺自身も五体満足だ。

だが、疲れた。

連続でひどい戦いだった。

正直なところ、今の戦闘もグダグダだった。

相棒に背中を預けて戦うなんて綺麗なものじゃない。

ダッドリーはヒートアップして勝手に突っ走るわ、無駄に火炎放射を撃ちまくって敵に決定打を与えられないわ……。

もちろん、一人だけで戦うよりはヘイトが分散されるため有利に立ち回れたが、それでも ガラガラ砂漠決戦で共闘したサフランやシュナイダーと比べると、ダッドリーとのタッグは酷い有様だった。

連携ができていなければ、二人の殲滅力が都合よく何倍にも増幅される状況などあり得ない。

まあ、そんな状況にもかかわらずこうして敵を殲滅して生き延びることができた以上、結果オーライと言えなくもないか……。

しかし……しんどかったな。

そんなことを考えていると、ダッドリーはコクピット内部を乱暴に蹴り飛ばして悪態をつき始めた。

「くそおー！ 今日には散々だぜ。クソうぜえ連中に囲まれるわ、ピークルはボコボコになるわ、お前えらはしくじるわ……って、おい!!」

ダッドリーは何かを思い出したように勢いよく俺に振り向いた。

「お前、お宝はどうしたんだよ!?!」

……そういえば、『グランドファイナーレ』に潜入する目的はブラッディマンティスの財宝を分捕るという建前だったな。

ダッドリーのことだから、このまま普通に忘れられると思っていたが……そう都合よく事は運ばないか……。

しばしの逡巡の後、俺はベストのポケットを探った。

見張りの兵士から奪った飛び出しナイフを探し当てると、それを「レッドタランチュラ」のкокピットに放り投げる。

「やるよ。お前さんの総取りでいい」

「あ？ 何だこれ？」

キャッチしたナイフを弄びつつ、ダッドリーは訝し気に疑問を投げかけてきた。

若干の皮肉っぽさを込めて、俺は堂々と言い放つ。

「唯一の戦利品だ。他の見張りから奪った拳銃は捨てちゃった」

「……ふざけやがって」

ダッドリーは唾を吐きながら飛び出しナイフをкокピットのシートに叩きつけた。

「レッドタランチュラ」の助手席で跳ねる飛び出しナイフを尻目に、ダッドリーの表情が徐々に怒りに覆われてゆく。

しかし……意外にも、ダッドリーはどのまますつとした表情で黙り込んだ。

もっと嫌味や罵声が飛んでくると思っていただけに些か拍子抜けだ。
まあ、彼もボロボロの状態で喚く元気はないのかもしれない。

「おう、グレイ。待てや」

俺がビークルのハンドルを握り直し【ジャガーノート】を反転させると、ダッドリーが後ろから声をかけてきた。

若干の面倒臭さを感じつつも、呼び止められた俺はゆっくりと振り向く。

「てめえとの決着はまだ付いてねえ」

「……………」

「忘れんなよ。てめえをぶっ倒すのは、このオレ様だけ」

ダッドリーは損傷した【レッドタランチュラ】のコクピットでふんぞり返り、高々と宣言してきた。

……………いつから、俺はこいつの終生のライバルになったのやら。

知り合って一年も経ってないってのに……………。

俺は黙って踵を返しビークルを進めた。

「おい……………」

「知るかよ。今は血生臭い話なんざ考えたくもねえ」

デザートホーネット団に仕掛けられたゲリラ戦に、ノーラとの肉弾戦に、コンフリーの奇襲に、『グランドファイナーレ』格納庫での白兵戦に、ダメ押しの残党の掃討に……。続けざまの死闘で、さすがの俺も限界が近い。

今は一刻も早く、この血と漏れ出した燃料に塗れた一帯を抜け出したい。

「……まあ、来年のトーナメントはお前の挑戦を待っているさ、多分」

ダッドリーはまだ何か言うことがある様子だったが、俺は構わず「ジャガーノート」を溪流地帯に進めた。

ブラッディマンティスのピークルの残骸のあるエリアを抜けると、ホトトギスの森へと至る鉄橋が見えてくる。

そろそろ疲労がピークに達しているが、俺は体に鞭打ってハッピーガーランドへ進路を取った。

一方、その頃。

突如、空から接近してきた巨大な飛行物体に、ハッピーガーランドの街はパニックに陥っていた。

通りではビークルや車がクラッシュする事故が頻発し、普段は優雅に街を闊歩する市民も今は浮足立って建物内に逃げ込んだり空を見上げて騒いだりしている。

そんな喧騒の中、ファーガスンやバナラと別れガーランド闘技場で弾薬の補給を終えたフェンネルは、整備もそこそこに「ブルー・サンダー」を駆って街中へ飛び出した。

ガーランド闘技場の顔見知りの選手たちは何事かと驚愕するが、それに構っている余裕はない。

ベンジャミンやフランクリンと言った知り合いもステーションホテルから飛び出てきたが、鋭く屋内に非難するように告げると、フェンネルはビークルを加速させながら北の空を見上げる。

「っ……もう、あんなところまで来てやがる……」

街の北側の上空には、見紛うことなき『グランドファイナーレ』のシルエットがはつきりと浮かんでいる。

圧倒的な質量を持ち空を飛ぶ怪物級の存在に、フェンネルは思わずと言った様子で罵声を漏らした。

「くそっ！ 爆弾を落とすって……一体どこに……う？」

交通量が激減した駅前路上にビークルを進めながら、フェンネルは苛立たし気に辺りを見回した。

既にファーガソンの指示で迅速に展開を始めた警察、ピークルが、街の各所で巡回と住民の避難誘導を始めている。

しかし、各所で起こる混乱とガーランド警察に配備されたピークル部隊の頭数を鑑みるに、フェンネルを手伝う余裕が無いことも明らかだ。

もちろん、ファーガソンの指示を受けた警官たちは、巨大な飛行物体が爆弾を投下してくる可能性が高いことを聞いている。

だが、混乱下にある町で秩序の回復と住民の安全確保に手を割いている現状では、概要を聞いていたところでハッピーガーランドが直面している危機について正確に認識することすら難しい。

当然、フェンネルが爆撃への対応を手伝えと言ったところで無理というものだ。

「ちっ……俺がやるしかないか」

グレイは自分に爆弾を撃ち落とす役目を任せた。

自分はハッピーガーランドの命運を託されたも同然。

しばし逡巡しつつも、そう胸に刻み込んだフェンネルは、強く「ブルー・サンダー」のハンドルを握りなおすと、駅前広場の辺りからさらにピークルを進めた。

そして、駅前と商店街を繋ぐ橋の上に到達したところで、フェンネルは徐にピークルを停止させる。

この位置は現在の『グランドファイナーレ』の進路の真下であり、川沿いから飛行船の姿をはつきりと視認できるポジションだ。

ハッピーガーランドのちょうど中心であり、敵が街のどの方面を攻撃しようと、ここからならば素早く対処に向かえる。

現状における最善策としてこの場所で待ち構えることを選んだフェンネルは、ゆつくりと『ブルー・サンダー』の右アームを上げた。

「来やがれ……」

もちろん、この距離ではお互いの攻撃は届かないが、強敵と対峙する緊張感はひしひしとフェンネルの全身に伝わってくる。

長距離キャノンの砲身を上空に向けて構えたフェンネルは、静かに闘志を漲らせて、敵の一挙一動に注目するように神経を研ぎ澄ます。

そして、『グランドファイナーレ』から巨大な爆弾が駅前広場に向かって投下された瞬間、フェンネルは狙いを修正した長距離キャノンアームのトリガーを引いた。

118話 襲撃の後

俺がハッピーガーランドに到着する頃には、既に『グランドファイナーレ』は街の上空から飛び去った後だった。

空にはあの巨大な飛行兵器の姿は影も形も無い。

微かに聞こえる怒号から、辛うじて街が混乱状態にあることがわかるだけだ。

俺が城壁の出入り口を潜ると、慌ただしく街中を行き来するピークルの集団が目に入る。

所々でピークルや車が立ち往生し、建造物の一部が崩れて破片が道路に散乱している場所もあるが……思ったほど被害はひどくなかった。

原作では、爆撃を受けた直後のハッピーガーランドは、黒煙と煤に覆われて昼とは思えない様相を呈していたものだが……空は普通に晴れており、見た限り街の治安はそこまで悪化していないようだ。

もちろん、警察ピークルは依然として警戒態勢で街を巡回しており、所々で土埃が充滿し黒煙が上がっているが、既に土木用ピークルを中心にがれきの撤去や救助活動が進

められている。

以前、キラーエレファント団に襲撃されたネフロよりも損害は軽微に思えるな。

そんなことを考えていると、駅前方面から一台のビークルがやってきた。

「グレイ、戻ってたのか」

「ああ、今帰ってきたところだ」

現れたのはフェンネルだ。

彼には『グラランドフィナーレ』から投下される爆弾の撃墜という危険な役割を押し付けてしまったが、幸い「ブルー・サンダー」のボディに目立った傷は無い。

フェンネル自身も五体満足だ。

「街の損害は軽いようだな」

「ああ、どうにかな。最初に集中砲火を食らった駅前広場は、少しぶっ壊されちゃったが……爆弾は粗方撃ち落とした。駅や路線は無事だ。工場近くの燃料倉庫への攻撃も防いだけ。……本当に、お前の言った通りだったな。空から爆弾を投げ落としてくるなんてよ……」

「そうか……フェンネルが居てくれて助かったよ」

「……おう」

フェンネルはネガティブなことをあまり言わないが、嘘を付いたり話を誇張したりす

るタイプでもない。

この様子なら、死人も少なく主要施設への被害も少なく済んだことだろう。

フェンネルはしつかりとハツピーガーランドを守ってくれた。

……今回の件、俺一人では片付けられなかった。

俺一人で何人分もの仕事をこなした自信はあるが、それでもブラツデイマンティスの全ての動きを一人で封じることが不可能だった。

バニラが居なかったら、コニーを助け出すことは叶わなかったかもしれない。

『グランドフィナーレ』脱出後に追手に対処する必要があった以上、フェンネルが居なかったら街への爆撃も防げなかった。

今回は本当に周りの人間に助けられたな。

ジンジャーの言った通り、やはり一人の人間に過ぎない俺が全てを背負い込むことなど不可能だ。

「今、ガーランド闘技場のバトラーや街のビークル乗りが総出だけが人を救助してる。街の治安が落ち着いたら、順次警察ビークルも救助活動に回すそうだ」

「そうか……」

「コニーとバニラの奴はお前の言った通りピジョン牧場へ向かったぞ。博士には俺からも伝書鳩を飛ばしておいた」

至れり尽くせりだな。

さすがはフェンネル。

不器用で愚直なように見えて、面倒見がよく気の利くナイスガイだ。

そんなフェンネルは、一拍おいてから言葉が続けた。

「お前、これからどうするんだ？ あのデカブツはイワツバメの滝方面へ飛んで行っちゃ

まったが……あいつをどうにかしないことには、この先どうしようもないんだろう？」

フェンネルの言う通り、空中の『グランドファイナーレ』に対処しない限り進展は無い。

俺は空に向き直り口を開いた。

「ナツメツグ博士のところへ行く。準備が出来次第、奴らの飛行船に乗り込む予定だ。

マーシユのこともあるし、あれを放置したらマズいからな」

「そうか……」

もちろん、飛行船も永遠に飛んでいられるわけではないので、いずれ『グランドファイナーレ』は補給などのために地上に降りてくることになるだろう。

その隙についてピークル部隊で奇襲を仕掛け撃破するという手もある。

ぶつちやけ、空中戦という未知の戦場に飛び込むよりその方が安全だ。

しかし、このスチームパンクな世界、あの『グランドファイナーレ』が戦略兵器として

どれだけぶつ飛んだイカれ性能を持っているかわからない。

こちらが手を拱いている間にネフロやスームを火の海にされたら、それこそ目も当てられない。

だから、俺も腹は括っている。

原作通り、ピジョン牧場で飛行ビークルを完成させ、奴らとの最終決戦に臨む構えだ。

「フェンネルはどうする？ 一旦、こつちに来るか？」

「いや、この街では結構な数の知り合いが大変な目に遭っているからな。足取りの掴めねえ奴も居るから、今はここを離れられねえ。ベンジャミンとフランクリンも倒壊した建物に巻き込まれた奴らの救助に当たってる。俺もあいつらを手伝うつもりだ」

「そうか」

無理にフェンネルを引っ張っていく意味は無いので、俺は普通に頷いた。

「ここからフェンネルとは別行動だ。」

「お前もピジョン牧場に戻る前にロブスター亭に顔を見せて行けよ」

「ああ、そうするよ」

確かに、楽団メンバーや知り合いのことも心配だ。

あちこち回っているほどの時間は無いが、ロブスター亭なら荷物を回収がてら寄つてもいいだろう。

俺はフェンネルの提案を受け入れて、ハッピーガーランドの東地区の商店街に進路を

取った。

フェンネルと別れてしばらく、ビークルを進めると、見慣れたロブスター亭の建物と看板が目に入った。

定宿の建物が無事だったことに安堵しつつ扉を潜ると、カウンターに居る店主のダスティンとバーテンのクリスがこちらを向いた。

「おおー、グレイ！ 無事だったのか」

「ああ、よかった。フェンネルから無事だとは聞いていたけど……トロット楽団の皆も心配していたよ」

二人は一瞬だけ驚愕の表情を浮かべたが、すぐに満面の笑みで無事な再会を喜んだ。「どうも、心配をおかけしまして……この店も無事そうですね？」

「ああ。幸い、この辺りはブラッディマンティスの空飛ぶ巨大ビークルにほとんど攻撃されなかったんだ。駅前の方に比べれば、商店街は大分マシさ」

「盗賊団が空から爆弾を落としてくるなんて、一時はどうなることかと思っただけだね……」

先ほどもビークルで移動しながら見たが、商店街の被害は軽微だ。

道路には破片が飛んできたのか、車道にいくつか瓦礫が転がっていたが、建物の破損

はほとんど見受けられない。

フェネルからも少し聞いたが、『グランドファイナーレ』は駅前を一直線に爆撃してきたのか……。

恐らく、ダンディリオンのトラウマの場所を……まあ、そんなことは今考えても仕方がないか。

しばらくすると、ロブスター亭の二階から降りてくる二人の足音が聞こえてきた。些か慌て気味に階段から姿を現した二人は、エントランスの俺を見て驚愕に目を見開く。

「っ！ ああ！ グレイ！」

「よかった、無事だったんだね！」

降りてきたのは、バジルとマジヨラムだ。

無傷な二人の姿にもう一つ安堵した俺は、ゆっくりと頷きながら声を掛けた。

「ああ、見ての通り五体満足だ。二人とも、ケガは無いようだな」

「うん、僕は大丈夫。実家の店の方も無事だったよ」

「そ、そんなことより……大変だよ!! グレイ!!」

相変わらず落ち着きのないバジルは、素っ頓狂な声を上げながら捲し立てた。

「セイポリーが居ないんだ！」

俺は一瞬答えに窮した。

彼女の場所は明らかだ。

今、上空の『グランドファイナーレ』でブラッディマンティスの指揮を執っている。

「確かに、連絡がつかないのは心配だね。でも、フェンネルも知り合いを当たってくれて
いるし……」

「そうだな。彼女も駅前で救助や運搬を手伝っているかもしれないし、この混乱下では
すぐに接触できないこともあるだろう」

当然、セイボリーの正体のことを口に出すわけにはいかないので、俺はマジヨラムに
話を合わせてその場を凌いだ。

そして、俺はしばしの逡巡の後に、二人に向き直って口を開いた。

「とりあえず、あの飛行物体をどうにかしないことには始まらない。次にどこの街が襲
われるかわからないし、ハッピーガーランドに戻ってくるかもしれないから。連中が
次の襲撃に移る前に叩く必要がある」

俺が説明すると、二人は若干の間の後、深く頷いた。

「俺はナツメツグ博士と対策を練るために、一度ピジョン牧場へ戻る。二人も一段落し
たらうちに来てくれ」

「ああ、わかったよ」

「僕はもう少しセイボリーを探してから行くよ」

そして、ロブスター亭の自室から最低限の荷物を回収した俺は、そのまま【ジャガーノート】で駅まで移動し、運行を始めた下り線の汽車に乗り込んだ。

そして、コンパートメントの椅子に体を沈めた俺は、カバンは一応持ち込んでいたものの、着替える気力すら無くしてそのまま眠りに落ちた。

ピジョン牧場へ汽車が到着する頃には、既に日が傾いていた。

窓の外に響く汽笛の音で目を覚ました俺は、狭いコンパートメントで若干の窮屈さを感じながら伸びをする。

「つくう……！」

結構、寝たな。

まだ体に怠さが残っているが、先ほどまでよりは大分マシになった。

「ヤッ……」

荷物を持ってコンパートメントを出た俺は、ビークルを載せた貨物車両に向かい、【ジャガーノート】を下ろして駅を出た。

牧草地帯に出た俺はぐるっと辺りを見回してみたが、ピジョン牧場に異変は無い

もと変わらない長閑な様相だ。

一部の景色を除いては……。

「……………」

スキトール湖の向こうの上空には、巨大な質量と存在感を持つ飛行船がゆつたりと浮遊している。

原作通り、ハッピーガーランドを爆撃した後の『グランドフィナーレ』は湖の上空で待機しているようだ。

ゲームでは、いくら寄り道をしようが飛行船はスキトール湖上空から動かないが、現実には違う。

無駄に時間が過ぎれば、『グランドフィナーレ』はこの場所から移動し、次なる標的の街に攻撃を仕掛けるだろう。

こちらが攻撃を仕掛けるなら、奴らがピジョン牧場付近に居る今がチャンスだ。

「……………首洗って待つとけよ」

俺は空に浮かぶ強大な敵に一つ吐き捨てると、丘を登ってナツメツグ邸にピークルを向けた。

119話 我が家へ……

ナツメツグ邸のエントランスを潜ると、そこにはナツメツグ博士の他にバニラとコニーの姿があった。

俺がりビングに足を踏み入れると、三人は一斉にこちらに顔を向けた。

「あー！」

「グレイ！」

「ふむ、帰って来たか」

バニラとコニーはしきりに俺の身を案じる声を掛けてきた。

フクロウケ森からの撤退時に俺が殿を務めたこともあるだろうが、こんな状況で不安が募っていることもあるだろう。

俺が二人をどうにか宥め終わると、ナツメツグ博士はこちらに向き直った。

「話は聞いておる。あの中にマーシユが居るらしいな。ハッピーガーランドを空から攻撃するとは……何と恐ろしい機械じゃ……」

しみじみと呟いた直後、博士は俺とバニラのじつくりと見まわして疑問を投げかけた。

「フエンネルから来た伝書鳩にも書いてあつたが……お前さんら、あれに乗り込むつもりとな」

「そうですね。まあ、他の方法が無いわけじゃないですけど……。補給のために着陸した瞬間を狙うとか、山間部で待ち伏せをして長射程の火砲で狙うという手もあります。しかし、あの兵器の稼働時間や殲滅力の詳細がわからない以上、下手に手を拱いていると他の街がいくつも潰されかねません。早期決着を狙った方がいいでしょう」

「あれを野放しにするわけにはいかないし、マーシユを助けないと……」

「バナラは俺に追従するように頷いたが、しばらくすると自らの発言に戸惑いを覚えたようにフリーズした。」

もちろん、今になって怖気づいたわけではないだろうが、バナラはしきりにコニーを気にしながら謝罪の言葉を口にし始める。

「ごめん、コニー……。勝手に決めて……」

「ううん……。それが君の決めたことなら、私は応援するから」

まあ、コニーにしてみればマーシユのためにバナラが命を張るのは嫌だろう。

少なくとも、彼女がされた仕打ちを鑑みれば、仮にマーシユを見殺しにすることを選択しても責められない。

とはいえ、そういう思考自体がコニーにとっては自己嫌悪に陥る要因なのだろうが

……まあ、そこら辺のケアは俺の役目じゃないかな。

「それで、博士。あの飛行兵器への対処ですが……」

「うむ、こちらでも準備は進めておる。今、バニラのビークルと……」

俺は強引に話を切り替えるようにして博士に水を向けた。

しかし、博士が口を開いた次の瞬間、工房の扉が勢いよく開き俺の言葉は突然の闖入者によって中断された。

「博士え！ テストは……飛行テストはまだですかっ!？」

「僕らはいつでも行けますよ」

「くうう！ ついに……ついに俺たちの「フラップフライヤー」がっ!!」

「ああ、兄さん！ どうとう……僕たちの夢が完成する!」

ドタバタと騒ぎながらやって来たのは、飛行兄弟ことオットー&ウィリーだ。

相変わらず喧しい連中だ。

「うるさいよ！ ポンコツ兄弟！ ただ飛べばいいってもんじゃないんだ。こっちの準備が終わるまで、おとなしく待ちな!!」

「ひえ！ す、すみません！ 姐さん……」

「すみませんでした……」

彼らはしばらく俺の姿も目に入らないかのように騒いでいたが、後ろの工房の方から

轟いた鋭い声に一喝されると、一瞬で黙り込んだ。

もちろん、誰の声かは予想がつくので、俺は苦笑いしながら声の主が現れるのを待つ。しばらくすると、工房の奥からレンチを持ったマルガリータが出てきた。

眉間に皺を寄せて悪態をついているにもかかわらず、彼女の美貌が崩れることは無い。

これでまたベッドの上では可愛いことから、そのギャップが何とも……。

彼女の姿を見た途端、俺は体中の血が浄化されていくような何とも言えぬ安心感を覚えた。

そして、リビングに入ってきたマルガリータはやがて俺の存在に気付いた。

「あ……」

「ただいま。今回も無事に帰って来たよ」

俺の顔を見たマルガリータは、みるみる頬を紅潮させた。

照れて直視できないほど俺の顔がイケメン……というわけではなく、単にガサツで荒々しい姿を見られたことが恥ずかしいのだろう。

そんなことは今更な話なので、俺はマルガリータをそつと抱き寄せた。

「っ！ ちょっと……」

「今日は……本当に散々だったんだ。あと少しだけ、このままでいさせてくれ」

マルガリータは最初こそ俺を突き離そうとしてきたが、彼女の耳元でそう告げると、やがて抵抗は収まった。

普段なら、一言目はツンツンの罵声や怒声を飛ばしてくるものだが、今日は黙って俺の抱擁を受け入れてくれる。

剩え、マルガリータは俺の背中に腕を回すと、彼女の方から俺をしつかりと抱き締めた

「……しようがないねえ。まったく、世話の焼ける男だよ……」

相変わらず毒は吐いてくるが、背中に回された彼女の腕からは包み込むような優しさと温かさが伝わってきた。

擦り付けるようにして俺の胸に顔を埋めるマルガリータがとても愛しい。

後ろでポンコツ兄弟が「あんな凶暴な女性を……」だの「さすがはグレイの旦那」だの言っているが気にしない。

バニラは気恥ずかしそうに眼を逸らし、コニーは顔を手で覆いつつも指の間からしっかりとこちらを見ているが気にしない。

俺はそのまましばらくマルガリータの髪を撫で続けた。

「……さて、グレイも戻って来たことじゃ。改めて説明しよう」

俺たちがリビングの思い思いの場所に腰掛けると、ナツメッグ博士は俺たち話し始めた。

「敵の飛行機械は、今日の午後からずっと湖の上の空を漂っておる。グレイが言うには、彼奴らの稼働時間と残っている爆弾の量がわからない以上、ここで二の足を踏んでいる間に他の街を攻撃されたら敵わんとのことじゃが……わしも、その意見には賛成じゃ。捕らわれているマーシユのこともあるのでな。早めに攻め入るに越したことはない」

俺たちは博士の言葉に頷いた。

「だが、敵の機械は空を飛んでいる。あれを倒すには、どうにかしてこちらも向こうに攻撃を届かせる必要がある。否、マーシユを救出するには、あの飛行物体の内部に飛び込まなくてはならん。そこで……これじゃ」

ナツメッグ博士の促しで、マルガリータは作業台から持ってきた一枚の設計図をテーブルに広げた。

図面には、トロットビークルと複葉機を組み合わせたような画が描かれている。間違いはない。

原作で見た通りの、ビークル用の飛行装備だ。

「空を飛ぶのに必要なのは、パワーでも羽ばたくスピードでもない。大事なのは、翼の形だったのじゃ。空を飛ぶ用のパーツは三つある。ブレストパーツには『プロペラブレス

ト』、空中で前に進むためのパーツじゃ。バックパーツに『尾翼』、ビークルを空中で縦するのに必要じゃ。そして、アームパーツに『ウイングアーム』じゃ。これでビークルが空を飛ぶ」

原作通りの展開だ。

トロットビークルのパーツの規格だと、プロペラ機の部品はこの三つに分かれることになり、どれか一つでも欠けると空は飛べない。

「わしには……トロットビークルが空を飛ぶなど、どう考えても無謀としか思えんかった。 그레이が作った『カミヒコーキ』やら、お前さんたちの弟の『紙トンビ』やらだけではピンとこない部分も多かったのじゃが……いざあの飛行物体を見てみると、実感が湧くものじゃな」

なるほど、やはり視覚情報ってのは重要なんだな。

飛行ビークルのパーツに関しては、俺も若干先取りして開発を進められないかと思っていたが、どうにも進捗は芳しくなかったのだ。

俺は現代の飛行機に関する知識を持っているが、航空工学の専門家というわけでもなかった。結局は前倒しでの完成を断念することとなった。

だが、さすがはナツメツ博士。

ここにきて、答えに辿り着いてくれた。

そして……。

「飛行ビークルに関しては、以前グレイからも色々設計の提案が上がっておったから。『フラップフライヤー』の設計の改良案を軸に、以前から少しずつ開発には着手しておった。幸い、資材の方もグレイが拾ってきたものが潤沢にある」

「では、組み立ての方も……」

「うむ、完成したぞ」

マジか！

先ほど、飛行兄弟がテスト云々と言っていたが、本当に完成したんだな。

原作の一晩で飛行パーツを完成させたシーンでは「そんなバカな」と思ったが……さすがはスチームパンク。

現実のナツメグ博士はゲーム以上のチートかもしれない。

そして、俺たちはナツメグ博士の促しで工房の方へ向かった。

「見よ」

「おおー、これは……」

俺が整備場に足を踏み入れると、そこにはパーツを飛行装備に換装された二台のビークルが鎮座していた。

ウィリーとオットーの『フラップフライヤー』にバナラの『カモミール・タイプⅡ』は、

どちらも完璧に噛み合ったプロペラと尾翼とウイングアームがフルセットで装備されている。

二台とも既に飛行仕様になっているようだ。

原作では、「フラップフライヤー」を素材にしてバニラ用の飛行装備1セットを作るというカツカツの資源状態だったが、今回は2セット生産できたのか。

備えあれば憂いなし……色々と資材を集めておいてよかった。

「パーツの組み立てから換装まで……マルガリータが居てくれて助かったわい」
そうか……。

マルガリータも手伝ってくれたうえで、この進捗というわけか。

彼女には世話になりっぱなしだな。

「では……早速【ジャガーノート】にも同じパーツを……」

「いや、それは無理じゃ」

俺は若干前のめりになりながらナツメック博士に声を掛けたが、返ってきた答えは予想外のものだった。

資材が底を尽いたのかと思ったが、どうやら違うようだ。

「【ジャガーノート】は汎用型の原型をとどめないレベルのカスタムビークルだからの。

もちろん、通常の規格化したパーツを装備するのは問題ないが……飛行装備となると話は別じゃ」

「あ……」

そうか……。

確かに、俺の「ジャガーノート」はミスリル装甲の耐久力の割に軽いボディを持ち機動力も高いビークルだが、どちらかといえば重装備の部類に入る。

小型とはいえ高出力の補助エンジンと増設燃料タンクに追加装甲を搭載しているおり、あくまでも馬力と出力によつて加速力を保ちエンジン効率を改善することによつて低燃費を実現しているのだ。

小型の飛行機もどきにするには少々重量オーバーだろう。

しかも、弾薬ボックスなども大容量で配置箇所をカスタムしているため、特殊な装備を装着するには規格にも若干の修正を要する可能性がある。

ましてや、僅かな調整の差が悲劇を生みかねない飛行装備に適応させるとなれば……。

さすがのナツメツグ博士とマルガリータでも、そこまでの調整を一日二日ではできないか。

「ジャガーノート」は空を飛べない。

ということとは……俺は空中戦には何も手出しできず、オットーとバナラに全て任せることになるわけか？

一応、「フラップフライヤー」の分のパーツも完成させたことで、原作のようにバナラ一人で『グランドファイナーレ』に挑むことにはならず済んだが……。

しかし、そんな俺の様子を見たナツメツグ博士は、僅かに笑みを浮かべながら口を開いた。

「安心せい。お前さんの方もきちんと考えておる」

「と、言いますと？」

俺の疑問に答えるように、博士は工房の作業台の方を向いた。

120話 内助の功

「マルガリータ、あれを」

「はい、先生」

ナツメツグ博士の言葉に頷いたマルガリータは、工房の作業スペースから一抱えほどある長い油紙の包みを持ってきて、俺に無造作に手渡した

受け取った紙包みの中身は金属のようで、凡そ10kgほどの重さがある。

若干戸惑いつつも、俺は油紙を剥がした。

「っ！ これは……」

「弾薬はあんたの部屋にあったライフル弾を回収させてもらったよ」

彼女が渡してきたのは、全長1.2mほどのL M G ライトマシンガンだった。

全体のフォルムから察するに、地球の銃器で一番近いのはイギリスのルイス軽機関銃だな。

二十世紀初期の軽機関銃で、この時代の歩兵が一人で携行できる火器としては信頼性と火力に優れる銃だ。

撃発形式はフルオートのみで、発射速度は毎分約600発。使用弾薬は当時のイギリスの制式軍用実包である303ブリテッシュ弾。

同時期のアメリカで制式ライフル実包だった30—06弾より若干威力は劣るが、世界中で狩猟に用いられた撃ちやすいバランスのいい弾だ。

地球ではアメリカ市場向けに30—06弾仕様のもも生産されたいが……マールガリータ曰く俺のライフルの弾に合わせてあるらしいので、こいつは303ブリテッシュ弾仕様という認識でいいだろう。

そして最大の特徴は、銃身を覆う空冷ジャケット——マズルブラストで起こる空気の流れて銃身を冷やす仕組み——と、パンマガジン——銃上部に水平に設置し、発砲時に回転しながら次弾を装填する円盤型弾倉——だ。

第一次世界大戦期を代表する有名な銃だが、後の世代の汎用機関銃や分隊支援火器に比べれば、作動の確実性においても整備性においても火力においても数段劣る。

しかし、この銃はどうやら資料を参考に博士自身が作製したものらしく、銃身や機関部にはクロムモリブデン鋼やミスリルが使われている。

ならば、信頼性に関しては問題ないだろう。

せつかくの特注品である以上、無意味な銃身の空冷ジャケット——熱風を射手に向かわせるだけで、効果のほどが疑問——は省略してほしかったが……。

まあ、博士は銃器の専門家というではないので、そこは仕方ないか。

「さすがに飛行ビークル用の武装までは見繕えんかった。しかし、これならお前さんが扱えるじやろう?」

「ええ、確かに……」

「なら、お前さんは『フラップフライヤー』に同乗し、助手席からそれを撃ちまくればよい」

マルガリータが用意してくれた47連発の弾倉は2つ。

軽機関銃が唯一の対空兵器で弾も100発に満たないとは、少し心許ない装備ではあるが……俺も狩猟にしか使わないライフル弾を普段から何百発単位で保有しているわけではない。

丸腰の複葉機で突っ込み拳銃とボルトアクションライフルだけで戦うことに比べれば、この銃があるだけでも百倍マシだ。

マシンガンがあれば空の戦いを少しは有利に運べる。

しかし……。

「博士、本当にいいんですか?」

「……………」

「これは、紛れもなく人殺しの機械です。ただ、大量に人を殺すための……それだけの道

具だ」

チコリの件然り、機械が容易に人の命を奪うことは博士も痛いほどわかっている。博士にとって、人殺しの道具は忌むべき対象だ。

この危険な時代、たとえ自分たちの身を守るために必要とわかっているとしても、博士の感性からすると武器の類にいい思いは抱いていないだろう。

「ジャガーノート」のチェーリングアームの開発の際も、それなりの押し問答があったものだ。

それでもビークルに関連するパーツなら、まだ博士も融通が利く。

汎用ビークルが人々の生活を豊かにする未来を、ナツメツグ博士は誰よりも信じているからだ。

しかし、手持ち式のマシンガンとなると……。

自己満足の言い訳に過ぎないと言われればそれまでだが、これは博士自身のメンタルの問題でもある。

ところが、俺の心配をよそに、博士は俺の言葉を一笑に付した。

「ふん、そんなものは使い方次第じゃ。大切なものを守るためには戦わなくてはならないこともある。お前さんも常々そう考えておらう？」

「まあ……」

「それに、これを作ったのはわしではない」

俺は思わずマルガリータの方へ振り向いた。

そうか……。

この軽機関銃はマルガリータが作ってくれたものなのか。

もちろん、博士のノータッチというわけではないだろうが……きつと、彼女は俺の身を案じて、この銃を用意してくれたのだ。

飛行装備の組み立てやパーツ交換で忙しい中、ナツメツグ博士を説得して、銃のことを一から調べて……本当に頭が下がる思いだ。

「ありがとう、マルガリータ」

「べ、別に……そんなんじゃないし。ただ……あなたに死なれると困るから……」

赤面するマルガリータの横顔は何度見ても格別だ。

皆の手前、ここでこれ以上のセクハラをするのは避けたが、このお礼はベッドの中でじっくりと……。

しかし、俺の邪な思考は簡単に読まれたようで、マルガリータは膨れっ面で俺を睨むと工房の奥の方へ行ってしまった。

「……とにかく、作戦は決まった。俺とオットーは「フラップフライヤー」で敵の攻撃を引き付けつつバナラを掩護。バナラは飛行船に接近して突入し、『グランドファイナーレ』

を破壊するんだ。あのデカブツがどこに落ちるかわからないから、待機組も気を抜かず
に備えていてくれ」

俺がまとの一言を述べると一同は頷いた。

そうして作戦会議が終わる頃には、辺りもすっかり暗くなっていた。

スキートル湖上空には相変わらず『グランドファイナーレ』が浮遊しており、巨大な飛行兵器の姿を月明かりが妖しく照らしている。

出撃は明日の朝だ。

決戦に備えて、今日は一時解散の運びとなった。

バナラとコニーは、今夜はナツメッグ邸に泊まる予定なので、家主のナツメッグ博士がそれぞれの寝室として手配した空き部屋に向かった。

一部屋でいい気もするが……まあ、部屋数や寝具が足りないわけではないので、好きにすればいいさ。

「じゃあ、オットー。明日は頼むよ」

「おう！ グレイの旦那。ブラッディマンティスだか何だか知らねえが、ぶちかましてやろうぜ！」

「ウイリーも、明日は最終調整を頼んだぞ」

「ああ、最善を尽くすよ」

上機嫌なオットーと拳を合わせ、ウイリーと固く握手を交わすと、二人もナツメツグ邸のエントランスを潜り丘を下っていった。

さて、俺も休むか……。

飛行兄弟を見送り戸締りをした俺は、自室の方へと足を向けた。

しかし……。

「ちよつと、あんた。こつち来な」

突如、マルガリータは俺の腕を掴むと、そのまま俺を引き摺るようにして連行し始めた。

腕を拘束された俺は、そのままぐいぐいと手を引っ張られ、廊下を進んでゆく。

どこへ連れて行かれるのかと思っていたら……マルガリータは俺を蹴り込むようにして風呂の脱衣所に放り込んだ。

「ほら、さっさと脱ぎな」

「え……ああ」

今日はそういう趣向ですか……。

俺は覚悟を決めてシャツのボタンを外しながらマルガリータに近づいたが……マルガリータは俺の顔に勢いよくタオルを投げつけてきた。

「ぶへっ」

「違う!! 何考えてるんだい!? その服、薄汚れててみつともないから脱げって言ってるの!」

「……ですよね。」

「わかっていましたとも。」

「そんな色っぽい展開にはならないことくらい……。」

「そういえば……俺の服は昨日から着たままだ。」

「ノーラと殴り合って土に塗れ、『グランドフィナーレ』から湖に落下して……汽車のコンパートメントでも着替えるのが面倒で、結局そのままの恰好で帰って来てしまった。」

「鏡を見てみると……確かに、ズボンやベストはある程度乾いてはいるものの皺が寄り、シャツは所々に泥などの汚れが付着している。」

「俺はマルガリータに従い、ポケットの中身を出してベストを脱ぐと、シオルダーホルスターを外してシャツを脱ぎ上半身裸になった。」

「ホルスターを適当な棚の上に置き、脱いだ服をまとめて洗濯機に放り込む。」

「傷だらけじゃないか……」

「不意に後ろから声を掛けられたかと思うと、俺は背中にそつと手で触れられた感触を覚えた。」

マルガリータはいつの間にか俺の背後に移動しており、控えめな手つきで俺の体を探っている。

……言われてみれば、鏡の中の俺の上半身には所々擦り傷が出来ており、首回りも少し腫れていた。

ノーラにやられた傷だな。

満身創痍の小柄な女性が放つとは思えないパンチやキックを何発も貰い、ヘッドシザーズやらスリーパーホールドを食らったのだ。

そりゃ、このくらいダメージは受けるだろう。

しかし、顔の擦り傷や軽い腫れはともかく、服の下がこんな状態とは思わなかった。

放置して痛み出したら嫌だし、化膿したり感染症を患ったりしては目も当てられない。

「そのままじゃ汚いから、先に風呂に入ってきたな」

「ああ、そうするよ」

マルガリータは何も事情を聞かず、救急箱を取り出して俺を風呂場の方へと促した。

別に聞かれたくない事情があるわけではないが、わざわざ彼女の気遣いを無下にする必要もない。

俺は彼女の言葉に頷き、残りの服を脱いで洗濯機に放り込むと、そのまま浴室に向

かった。

時折傷にしみる水流を我慢しつつシャワーを浴びて汚れを落とした俺は、タオルで体を拭きながら浴室を出た。

脱衣所では、マルガリータが洗濯機を回しつつ応急手当の準備をしてくれているはずだ。

しかし、俺が脱衣所に足を踏み入れると……洗濯機の稼働音が聞こえない。

何かトラブルかと思いそちらを見てみると、マルガリータが洗濯機の前で背を丸め何やらゴソゴソやっていた。

「あの……マルガリータ?」

「……やっぱり」

何故か、彼女は俺が先ほど脱いだベストとシャツを握り締めている。

てつきり、俺の残り香でその気にでもなっているのかと思つたが……そんなおめでたい発想は、次にマルガリータが発した言葉に速攻で否定された。

「女の匂いがする」

「っ!」

底冷えするようなマルガリータの声に、俺の心臓は縮み上がり冷や汗が流れ落ちる。

全裸状態なので余計にわかりやすいが、アレも委縮するように縮こまっているだろう。

心当たりは……ある。

ノーラとは殴り合い掴み合いの肉弾戦になったのだ。

そりゃ、匂いの一つくらい付くだろう。

もちろん、彼女とは恋愛感情どころか色っぽい要素すら皆無なわけだが……。

しかし……ノーラとの戦いから丸一日近く経っているうえに、その後俺は湖に落下して全身水浸しになっている。

よくもまあ、匂いなどわかるものだな……。

そんなことを考えていると、マルガリータはゆつくりと振り向いて俺に感情も籠らない目を向けてきた。

「……あんた、これは一体どういうことだい？」

「ま、まあ……接触はしたかな？ 体中、隅々まで……って、待て待て！ そういう意味じゃない！ 誤解だ!!」

マルガリータは一瞬で俺との距離を詰めると、俺の喉元に両手を掛けて首を締めてきた。

彼女の筋力や握力は結構強いので、何気に危険な状況だ。

正直、殺気に至ってはノーラよりもヤバイ。

冗談の一つも許されないこと今更ながら理解した俺は、一瞬呼吸が止まりつつも慌てて弁明した。

「デザートホーネット団の頭領ノーラだよ！ あいつが敵側についてて、戦う羽目になったんだ。最後はビークルから叩き落されて殴り合いになった。この傷も、ほとんどその時に付いたものだ」

「ほんとんど？」

「ずっと出ずっぱりだったからな。そのあとブラツディマンティスの参謀率いる部隊と交戦して、『グラランドフィナーレ』……例の飛行船に潜入して、撃ち合いになって、窓を割って湖に飛び降りて……っ」

しかし、そこまで言ったところで俺は言葉を止めた。

いつの間にか、マルガリータは俺の胸に顔を埋め、嗚咽を漏らしている。
「っ……………う……………」

「すまん……………」

さすがにこの状況にあっては彼女の心情にも察しが付く。

俺からすれば、今回の件は武勇伝にも等しい話だ。

いくらこの世界に適應して生きていようと、思い出のゲームのキャラたちと一緒にス

リリングな冒険をしてきたような感覚は否めない。

だが、マルガリータは俺の背中にしてみれば気が気じゃないだろう。

ビークルバトルトーナメントとはわけが違う。

俺がしてきたことは、危険な状況下での殺し合い。

それだけだ。

「何で……あんたは………本当に……馬鹿だよ」

マルガリータは俺の背中に手を回し、固く抱きしめてきた。

絶対に逃がさないとばかりに、二度と離すまいとするかのように……。

「こんなケガして………無茶するんじゃないよ………」

「ごめん………」

俺は何とか言葉を絞り出してマルガリータに謝り、彼女を抱き締め返した。

ブラッディマンティスの戦略に、コニーの誘拐……シチュエーションを鑑みる限り、俺がやらなければならぬ状況だったのは確かだ。

しかし、何だかんだで年甲斐もなく浮かれていた部分があることは否定できない。

守るべきものが要る以上、より一層慎重に行動しないと……。

121話 大空へ

翌日、俺が自室のベッドで目を覚ますと、目の前にマルガリータの顔があった。

完全にマウントを取られた体勢に、俺は少しビビったが……やがて、彼女の手が俺の腹部の負傷箇所を探っているのに気付いた。

「あ、起きた？」

「ああ。おはよう、マルガリータ。……何してるんだ？」

「怪我の具合、どうかと思つてき。どこか、おかしなところは無い？」

俺はマルガリータの指示通り、体をゆっくりと動かして体調に異変が無いか確かめた。

消毒薬や軟膏を塗ってガーゼを当てた擦り傷からは既に痛みが消え、首回りの腫れや内出血も治りかけている。

四肢の動きは正常で、上体を起こしてみても眩暈や不快感は無い。

マルガリータの応急処置とたっぷり睡眠を取ったことで、俺のHPはほぼ完全に回復しているようだ。

「そっか……」

ほっと息を吐いたマルガリータは、そのまま俺の胸に顔を埋める。

しばらくすると、俺に体を預けたマルガリータは目を瞑って脱力した。

俺が回復して安心したこともあるだろうが……今日はいつにも増しておねむのよう
だ。

まあ、マルガリータも昨晚まで大忙しだったらしいからな。

このタイミングで二台の飛行ビークルを仕上げられたのは、彼女の功績によるところ
が大きい。

急ピッチの開発作業に、二台分のパーツ換装に整備に……おまけに、今朝は俺の体調
を心配して、普段より大分早く目が覚めてしまったのだろう。

彼女も相当消耗していたはずだ。

因みに……昨晚はマルガリータと例の所謂チヨメチヨメは致していない。

いつも通り同じベッドで寝ることは寝たが、それ以上の何かが無かったことは、しつ
かりとシャツを着込んだマルガリータの服装が如実に物語っている。

マルガリータ曰く、彼女も疲れており俺も怪我人だからとの建前だったが……夜中、
隣でモゾモゾと動く気配と荒い息遣いが聞こえたことは、心の内に仕舞っておこう。

「ヤッ……」

「ねえ、グレイ」

「ん？」

俺がマルガリータをベッドに寝かせて起き出そうとすると、彼女は拒否するばかりに俺の首に腕を回し、体を密着させた。

「もうちよつと、このまま……」

「……………」

「あんたも……疲れてるでしょ？」

「……………ああ」

今日は、これから『グランドファイナーレ』との決戦だ。

早めに飛行ビークルを整備して、早朝に奇襲を仕掛けたい。

だが、普段の強気な様子とは打って変わって、切なげに体を寄せてくるマルガリータと触れ合っている……世界の命運だの何だの、もうどうでもよくなってくる。

この誘惑を断ち切れる奴は男じゃない。

あと数分だけ……自分にそんな言い訳をしつつ、俺はマルガリータを抱き締め返した。

しかし……。

「よし。行くぞ、弟よ！俺たちの大空へ!!」

「ああ、マルガリータさんはまだ来てないけど……換装は終わってるし、別にいいでしょ。すぐに準備するよ」

窓の外に耳を傾けると、工房の方からガタゴトと物音が響き、聞き覚えのある声が伝わってきた。

朝っぱらから何をやっているのかと思えば、待ちきれずに勝手に「フラップフライヤー」を動かし始めているようだ。

飛行兄弟の声はマルガリータも耳にしたようで、彼女の表情はみるみる険しくなっていく。

「まったく、あの馬鹿兄弟は……」

「ははっ……」

俺から体を離れたマルガリータは、床に放っていた前掛けやツールベルトを拾うと、レンチを持って立ち上がった。

不機嫌なマルガリータの恐ろしさは身を以って知っているので、俺は乾いた笑い声しか出ない。

若干、飛行兄弟を不憫に思いつつ、俺もぎつと身支度をして準備を整えた。

S & W M10に六発の38口径弾を込め、シオルダーホルスターにぶち込んでシャ

ツの上に装備する。

革製ホルスターは水濡れで若干型崩れしているが、まだ使えないほどじゃない。

予備のズボンとベストをクロウゼットから出して着替えると、ベストのポケットには予備弾を六発ずつまとめたスピードローダーとバラの拳銃弾をありつたけ仕舞った。

そして最後に、マルガリータが新しく作ってくれたルイス軽機関銃と弾倉パンマガジンを持って、俺の準備は完了だ。

「……………」

「ん？ ……ああ」

ふと横を見ると、マルガリータが俺のすぐ傍までやって来て、こちらを上目遣いに見つめている。

この状況で意図を汲めないほど、彼女との関係は浅くない。

俺たちは、どちらからともなく顔を近づけ、唇を合わせた。

軽く啄むようなキスを交わし、そして体を離す。

昨晩は行為に及んでいなかったこともあり、お互い情欲の火が燻っているようにも思えるが……ここで踏み込んだら歯止めが利かなくなってしまう。

お楽しみは、しばらくお預けだ。

「行くか。俺たちが必要だ」

「……そうだね」

照れ臭そうに髪をかき上げるマルガリータにほっこりしつつ、俺は自室のドアノブに手を掛ける。

そして、俺たちは寝室を後にして、ダイニングで他の面子と合流した。

俺がキッチンで簡単な朝食を用意していると、ナツメッグ博士とバナラとコニーが統けざまにダイニングへやって来た。

玄関先からマルガリータに怒鳴られて、オットーとウイリーも縮こまりながらナツメッグ邸に入ってくる。

俺はとりあえず全員に紅茶を配り、ハード系のパンを切って、レバーパテやチーズにドライフルーツをテーブルに出した。

手抜きも手抜きだが、今は一刻も早く出撃の準備に取り掛かることが重要なので、とにかくエネルギーを補給して腹をある程度塞げばよい。

今回ばかりは、ナツメッグ博士も文句は言わない。

そして、しばらくするとメリー乳業はじめピジョン牧場の面々がナツメッグ邸にやって来た。

どうやら、オットーとウイリーに話を聞いて『グランドファイナーレ』撃退のために手

を貸してくれるらしい。

「オットー、ウイリー、我々にも何か手伝えることはないかい？」

「あんなのがいつまでも湖に居たんじゃ、こつちも商売あがつたりだよ」

「僕たちもできる限りのことをします。兄さんたちだけに全てを押し付けるわけにはいきません」

さらに、ミームー村からもマツカートニー夫人と数人が応援に駆けつけてくれた。

聞けば、昨日のうちにマルガリータが伝書鳩を飛ばしてくれたそうだ。

「悪いね、皆。こんな危険なことに巻き込まんじやつて……」

「何言ってるんだい。あの巨大な鳥みたいな機械は、うちらミームー村の住民にとっても脅威だよ。前の巨大魚のとき以上にね。それに……」

「？」

首をかしげるマルガリータにマツカートニー夫人はニヤリと笑って言葉を続けた。

「旦那のために何かしてやりたいって気持ちをよくわかるさ。家族を守るために戦うことを決めた男つてのは……危なっかしくも素敵に見えるものだからね」

「べ、別にあたしは……!」

「うちの亭主だつて、巨大魚のときは思わず惚れ直しちゃう威勢の良さだったからねえ。本人だつて怖かつたらうに『デカイ魚』ときで飯の食い上げになつてたまるか!」なん

て言つて……」

勝手に納得するマツカートニー夫人にマルガリータは慌てて抗議をするが、一度話し出したお婆さんはそうそう止まらない。

さらに、マルガリータが発しようとした声は、続けて口を開いたミームー村の面々に掻き消された。

「そうそう！ 外に嫁いだからつて、俺たちとの縁が切れたわけじゃないんだ」

「マインツの言う通りだぜ。それに、お前さんの旦那には、村ぐるみで前から世話になつてるんだ。オレらにできることなら何でも言つてくれ」

「あたしらも手を貸すよ。まあ、できることと言つたら、湖に落ちたときに備えて船を出すくらいだけどね……」

どうやらミームー村では、マルガリータは公然と俺の嫁扱いのようだな。

だが、男女の関係にまつわる話において、マルガリータは未だに素直じゃない。あまり突くとツンツンモードに移行してしまふぞ……。

しかし、最後にはマルガリータも若干俯きながら小さく礼を言った。

「その……皆、ありがとうね……」

「おう！ 気にすんな」

「あの空飛ぶデカブツをぶつちめてやろうじゃない」

そうして、ピジョン牧場とミームー村から応援にやって来た面子を加えた俺たちは、早速ナツメッグ邸の工房から「フラップフライヤー」と「カモミール・タイプⅡ」を搬出し、オットーとウイリーのガレージまで移動した。

見慣れない飛行用パーツを装備した二台のビークルに皆が注目するなか、ナツメッグ博士の指示のもとマルガリータとウイリーの二人は淡々と準備を進めていく。

ウイリーがウイングアームの開閉メカニズムを確かめ、マルガリータは露出しているボルトの一本一本にレンチを当てて締め具合やら何やらを確認している。

そして、エンジンや駆動部などのチェックが終わると、ピジョン牧場やミームー村の連中に手伝ってもらいながら足場を組み、ビークルを飛行兄弟のガレージの屋根に上げた。

ここから俺たちは飛び立ち、ブラッディマンティスの飛行船『グランドファイナール』に空から奇襲をかける。

湖側に向かってせり出した屋根は滑走路というには短すぎるが……そこはスチームパンクな異世界。

ナツメッグ博士とマルガリータ曰く、ビークルの加速力と推進力を使って飛び出せば、滑空するのに十分な設備らしい。

意外にも飛行兄弟がいい仕事をしているな。

今までの鳥型「フラップフライヤー」の設計思想だと、丘での飛行テストをクリアしない限り湖上には出られないので、ガレージの屋根の滑走路はずっと使われてこなかったようだが……飛行ビークルが完成したことで、ようやく日の目を見ることとなったわけだ。

「ふむ、向かい風はなく、風速も穏やか。離陸直後に煽られる可能性は低い。この様子なら、すぐにでも飛ばせそうじゃな」

俺も軽機関銃と予備のマガジンを持って屋根に上がると、ナツメツグ博士は風向きやら何やらを熱心に調べていた。

……いよいよ出撃か。

ゲームではぶつつけ本番の離陸だったが……俺はふと気になり、横のマルガリータに声を掛けた。

「テスト飛行はどうするんだ？」

「そんな暇あると思うかい？ 予備の機体も無いのに」

「おいおい……」

事もなげに言い放つマルガリータだったが、その内容はあまりにもファンキーなものだった。

彼女とナツメグ博士が丹精込めて整備した飛行ビークルとはいえ……今更だが、乗りたくなくなってきたな。

若干、胃に痛みを覚える俺を尻目に、マルガリータは顔を顰めて飛行兄弟の方を示した。

「まあ、凶らずも、飛行装備の稼働には問題ないことがわかったよ。こいつらが勝手をしてくれたおかげでね」

そういえば、この二人は早朝から「フラップフライヤー」を持ち出して何やらガチャガチャやっていたな。

聞けば、いつもの丘で「フラップフライヤー」の飛行テストを行おうとしたらしい。急勾配の下り坂を飛び降りるとは……複製機の飛ばし方としては明らかに間違っているな。

もちろん、マルガリータからすぐに止められたそうだが……いつもの墜落時の悲鳴が聞こえなかったあたり、一瞬で空中分解する可能性は排除されたわけか。

それでも心配は心配だが……。

「あはは……」

「で、でも、姐さん。パイロットとしては、少しでも早く操作の感覚を掴んだ方がいいわけです……いざ本番で墜落しても困るか……」

笑って誤魔化すウィリーに対して、たどたどしくも言い訳をカマすオットー。

予想通りの反応に俺は思わず苦笑いを漏らす……二人の言葉を聞いたマルガリータは目を剥いて怒鳴った。

「当たり前だよ！ グレイを乗せて事故ったら、ただじゃおかないよ！」

「は、はいいいいい！」

「肝に銘じます！ 姐御!!」

飛行兄弟は背筋を伸ばして敬礼でもしそうな雰囲気だが、俺からすればただただ感涙である。

そんな想いで整備してくれていたなんて……ピークルのパーツごとにマルガリータの愛を感じる。

ボルトの一本に至るまで彼女のデレが詰まっているのだ。

だが、次の瞬間、マルガリータは「ハッ」として俺の方へ視線を向けると顔をみるみる紅潮させた。

今更ながら、自分が口走った言葉を認識して恥ずかしくなっているようだ。

照れなくてもいいのに……。

バナラとオットーがそれぞれの愛機のコクピットから飛行装備をエンジン系統に同

期させると、二台の飛行ビークルはエンジンから低い唸り声をあげ始めた。

レックパーツによる駆動以上の出力を送り込まれたプロペラが回転し、スラスタ系から熱い排気ガスが吐き出される。

徐々に回転速度が上がるプロペラと、展開されたウイングアームのしつかりとした剛性は、ギミックを多用したメカニズムとは思えない逞しさだ。

今回、俺はビークルを操縦せず射手としての役割に徹するわけだが、やはりマルガリータが整備してくれたという事実があるだけで安心感がある。

そして、俺が「フラップフライヤー」の助手席から乗り出してルイス軽機関銃を構え、プロペラや主翼に弾が当たらない角度を確かめていると……バニラは「カモミール・タ イプII」のkokピットからコニーと深刻に話し合っていた。

相変わらず周りが目に入っていないようだが、どうにも茶化す雰囲気ではない。

「コニー、マーシユのことは……」

「うん、大丈夫……」

遠慮がちに声を掛けるバニラに対し、コニーは僅かに顔を逸らした。

お互いに歯切れが悪いようだが、コニーはポツポツと語り出した。

「私、目を背けたかった。時間が過ぎれば、どうにかなるものだと思ってた。でも……」

哀しみの表情を湛えたコニーは、一拍おいてから言葉が続ける。

「マーシユの姿を見たら……私もこのままじゃいけないんだな、って……」

「コニー……」

バナラもある程度は事情を知っているだけに掛ける言葉に迷っている様子だ。

しかし、俯きがちだったコニーは、やがて真つ直ぐにバナラを見据え、そして僅かに微笑んだ。

「だから……お願いします。マーシユを、助けてあげて」

「……わかった」

コニー自身、まだ心の整理などついていないだろう。

彼女がマーシユと再会したのはつい昨日のこと、まともに言葉を交わす暇もなく、そこから怒涛の展開で今に至る。

おまけに、このシチュエーションにおいてコニー自身に何かができるというわけでもなく……。

そんな、彼女はただバナラを信じて待つことしかできない状況で、これだけ前向きになれるとは……強い娘だ。本当に。

「バナラ、気を付けてね」

「ああ。行ってくるよ、コニー」

バナラはビークルのコクピットから力強くコニーに頷き、コニーもバナラに応えて穩

やかな笑みを浮かべた。

相変わらず、お熱いことで……。

「グレイの旦那！ 用意はいいかい？」

「おう!!」

そうこうしているうちに、出撃準備は完全に整ったようだ。

高まったプロペラ音の中で運転席から問いかけてくるオットーに、俺も騒音に負けな
いよう声を張って応える。

運転席のオットーがゴクリと唾を呑んでハンドルを握り直し、俺もルイス軽機関銃を
抱えたままシートノ端をしっかりと掴んで体を固定した。

不意に、こちらを見つめるマルガリータと目が合う。

「……行ってきな」

「ああ」

素っ気ないマルガリータの一言に俺が答えると、彼女はさつさとガレージの屋根を降
りて行ってしまった。

エリツヒや牧場の連中は微妙な表情でこちらを見ているが問題ない。

彼女の心意気は俺自身が一番よく知っている。

そしてついに、ナツメツグ博士からもゴーサインが出た。

「よし、今じゃー！」

ナツメック博士の合図で、バナラとオットーは続けざまにビークルを発進させた。

バナラの「カモミール・タイプⅡ」が簡易滑走路から飛び出すのに次いで、俺とオットーの乗る「フラップフライヤー」も一気に空中に躍り出る。

スラストーの加速で地面から「フラップフライヤー」のレックパーツが離れた次の瞬間、一瞬だけビークルのボディに受ける衝撃で俺は腹の底に響くような揺れを感じたが、オットーがハンドルを切って尾翼を調整すると、すぐに機体は姿勢を安定させ真っ直ぐな進路を取り始めた。

飛行ビークルの実験は成功だ。

「やったあー！ 飛んだあー！」

「おおおー！ 凄え!!」

「行けえ!!」

後ろのガレージの方からウイリーたちの歓声が聞こえてくる。

この日、世界で初めてトロットビークルが空を飛んだ。

122話 空中決戦！ グランドファイナーレ1

編隊を組んだ「フラップフライヤー」と「カモミール・タイプII」は、そのまま速度を上げて湖の上空に見えるグラントファイナーレへと進路を取った。

全速力での走行時を超える強い風が、コクピットと俺の座る助手席にも勢いよく吹きつける。

こういう時にオープンシートは不便だ。

普段、俺は視界の確保と何より着け心地の問題でゴーグルをあまり使わないが、今は贅沢を言っていられる状況ではない。

俺は念のため用意していたゴーグルを目に装着し、砂漠で砂嵐を防ぐのに使っていたスカーフを覆面のように巻いて口元も防御した。

「ひゃっほー！ 凄えぜ！ 本当に飛んでやがる！ 最高だあ!!」

「……………」

若干顔の蒼い俺を尻目に、オットーはハンドルを握ったまま大いにはしゃいでいる。

飛行モードが地上を走るより危険なのは間違いないので、もう少し操縦に集中しても

らいたい気もするが……まあ、彼のパイロット適正が高いことは認めざるを得ない。

離陸直後は風に煽られ不安定な振動があったが、今の「フラップフライヤー」は完全に風に乗っており、ほとんど揺れを感じない。

もし「ジャガーノート」を飛行仕様にしたとしても、俺ではこう上手くないだろう。

飛行訓練は別で必要になるはずだ。

「グレイの旦那、このまま突っ込むのか?」

「……ああ」

一頻り騒いだから俺に疑問を投げかけるオットーに応えていると、バナラは「カモミール・タイプII」のcockpitから若干の不安が混じった目を向けてきた。

俺はバナラに一つ頷いてから説明した。

「奇襲ができるのなら、それに越したことはない。だが、見ての通り上空に障害物は無く、おまけにこの時間帯だ。気付かれずに接近するのはまず無理だろう」

「確かにな」

オットーはcockpit前方に視点を固定したまま頷き、俺はさらに言葉を続ける。

「敵に見つからずに飛行船内部へ突入するのは無理でも……飛行ビークルは向こうにとつても計算外のはずだ。なら、一気に接近して決着をつけた方がいい。俺とオットー

は敵の砲台や銃座の攻撃を引き付ける。その間に、バナラはゴンドラに強行着陸してマーシユを助け出すんだ」

「おう！ 操縦は任せてくれ！」

「わかった！」

俺の立案した作戦とも呼べない策に二人は同意し、俺たちは最高速で風を切って進んでいく。

しかし……そんな具合に都合よく、手筈通りの展開になるわけではない。

俺たちが『グランドファイナーレ』に搭乗するブラツディマンティス構成員の姿を肉眼で見れる距離まで近づくと、敵の飛行船では怒号が飛び交い既にブラツディマンティスの連中が動き始めていた。

「っ！ 敵襲、敵襲!!」

「何だ、あれは!？」

「向こうも飛んでる……ビークルだぞ！」

「構わん！ 撃ち落とせ!!」

『グランドファイナーレ』に装備された砲台や銃座がこちらの方を向いた。

どうやら、簡単には接近させてくれないらしい。

原作では、コニーが隙を見て檻から逃げ助けを求めてきたが、けが人のマーシユでは

それも難しいだろう。

俺は「フラップフライヤー」の助手席でルイス軽機関銃を構えると、バニラとオットーの二人に聞こえるよう鋭く叫んだ。

「バニラ、散開だ! 無理はするなよ!! オットー、手筈通りやれ!」

「了解!」

「おう!」

『グランドファイナーレ』の砲塔と銃座から敵の攻撃が降り注ぐなか、オットーは巧みにハンドドルを操り旋回した。

急激に進路を変え風の上を跳ねるような不規則な挙動を取った「フラップフライヤー」に、敵はまともに狙いを付けられなかったようで近くにはほとんど砲弾が飛んでこない。

俺はオットーの操縦にリズムを合わせるようにして「フラップフライヤー」の助手席からルイス式軽機関銃を突き出すと、比較的大きな窓のついた砲塔の奥に向け引き金を絞った。

ただでさえ高速で飛行しており激しく振動している座席からの射撃だけあってほとんどの弾は銃眼を外れたが、こちらでも環境や姿勢を見越して若干長めにトリガーを引き

点射している。

フルオートで放たれた303ブリテイッシュ弾の数発は、『グラウンドファイナーレ』内部に飛び込み乗組員に命中した。

「がっ！」

「くそっ！ あいつ、小銃で撃ってくるぞー！」

バニラの「カモミール・タイプII」と「フラップフライヤー」のそれぞれを狙っていた敵は、徐々にこちらへ攻撃を集中させてくる。

向こうも遠距離からの直接的な攻撃手段を持つ「フラップフライヤー」を脅威と認識したようだ。

徐々に激しさを増す敵の砲火に、俺は最低限の反撃だけしてルイス軽機関銃を引つ込め、オットーも操縦席で姿勢を低くした。

この状況では撃ち返しても当たりそうにないし、制圧射撃ができるほどの弾数も無いので、無駄弾は使いたくない。

「おっと………旦那、一旦退くぜ！」

「ああー！」

俺がシートの端を掴んで踏ん張ると、オットーは素早くハンドルを切った。

ガクンと急降下した「フラップフライヤー」は重力を利用するように加速し、そのま

ま機首を上げて翼を風に乗せる。

弾幕の薄いエリアを縫うようにして敵の射線から脱出し、そのまま飛行船の下を潜り抜けるように飛び、スラストターの噴射で一気に加速して距離を取った。

「ひゅー! スリリングだぜえ!」

砲弾の炸裂と『グランドファイナーレ』の巨大な質量によって生み出される風圧で「フラップライヤー」の座席からは結構な振動を感じたが、どうやらノーダメージで敵の砲火の射程内から離脱したようだ。

こちらを狙う砲弾のほとんどが手前で湖に落下している。

オットーの操縦技術はさすがの一言だ。

飛行ビークルの操作系統——特にスロットル調節系など——は、そのほとんどが泥縄式にコクピットヘリンクさせた急ごしらえだが、オットーはその機能を十全に使いこなしているようだ。

やはり彼のパイロット適正には目を見張るものがあるな。

そして、当然バナラも俺たちの離脱に合わせて『グランドファイナーレ』と距離を取っていた。

さすがに今の攻防だけでは、そのまま内部へ突入するのは無理だろう。

「グレイ！ オットー！ 大丈夫かい!？」

完全に『グランドファイナーレ』の射程外まで離脱したところで、バナラは「カモミール・タイプⅡ」をこちらに寄せてきて「フラップフライヤー」と機体を並べた。

幸い、「フラップフライヤー」に被弾した形跡はなく、俺もオットーも無傷だ。

「ああ、何とか無事のようにだ。そっちは?」

「こっちも大丈夫だよ」

バナラの機体にも砲弾を受けた形跡はない。

お互いにノーダメージのようで何よりだ。

しかし……。

「どうだ? 近づけそうか?」

「難しいな……敵の数は多いし、攻撃も激しい。一筋縄ではいかないよ」

俺の軽機関銃では『グランドファイナーレ』にまともなダメージを与えられない以上、最終的には「フラップフライヤー」か「カモミール・タイプⅡ」で飛行船内部か本体を叩かなければならない。

現時点で突入が難しいようならば、一旦撤退して仕切り直すのも手だ。

ゲームならHPがゼロになっても最後にセーブした地点から再開できるが、現実ではそうもいかない。

だが、バニラは顔を上げると、力強い目でこちらを見据えた。

「強行着陸できそうな場所に目星はついている。あともう少しで、行けると思う」

冷静に状況を考慮しつつも、バニラの目に迷いはない。

そうと決まれば、やるしかないな。

俺の目配せを受けたオットーも力強く頷いた。

「グレイの旦那! もう一度行くぜ!」

「おう!」

再び散開した俺たちは、縦横無尽に飛行して敵のエイムから逃れつつ、捻じ込むように飛行船本体へ接近した。

バニラは逆サイドの銃火を攪乱しつつ、突入のタイミングを計る。

俺とオットーは変わらず敵の武装の制圧だ。

砲火を掻い潜り、砲塔や銃座に接近したタイミングで、俺はルイス軽機関銃を発砲し銃眼へ弾を撃ち込んでいく。

火力が圧倒的に足りないので砲塔や銃座そのものを破壊することは叶わず、中の乗組員もそうそう簡単には倒せないが……それでも徐々に敵の数は減らしており負傷者を出すことで士気も下げている。

「よしっ！ いい位置だ」

「おう！ 次、行くぞっ！」

俺もだんだんと飛行ビークルの上からの射撃の感覚を掴み、オットーもこちらの射撃の精度と距離の感覚を何となく理解し始めている。

それに、先ほどの接敵で敵の銃座や砲塔などの位置は大体把握できていることも大きい。

俺たち「フラップフライヤー」のコンビは、オットーの巧みな操縦で弾幕を掻い潜って接近し、俺の的確な点射で敵の銃座の内部に損害を与え続けた。

「あっちだ！ あのと二人乗っている方を落とせ！」

「くそお！」

そして、しばらく銃座への攻撃を繰り返していると、ついに敵の弾幕防御にも綻びが生じ始める。

数か所の武装が機能を停止するなか、残りの機銃や砲塔が「フラップフライヤー」を集中して狙い始めたのだ。

当然ながら、この状況で一方へ集中砲火をカマせば、もう一方への対処が疎かになる。もちろん、その隙を逃すバニラではない。

「フラップフライヤー」が敵の攻撃を引き付けながら曲芸飛行しているのを尻目に、バ

ニラの「カモミール・タイプII」は真つ直ぐにゴンドラの方へと突っ込んでいく。

「オットー、もつと高度を上げろ! 残りの銃座を狙うぞ!」

「わかつてらあ!」

ルイス軽機関銃のパンマガジンを替えてリロードしつつ、俺はオットーに指示を出した。

尾翼に数発の弾丸を受けつつも敵の攻撃を逃れた「フラップフライヤー」をオットーはさらに加速させ、下からほぼ垂直に『グランドファイナーレ』上部の砲塔へ急接近した。目立つ挙動に敵の攻撃が集中するなか、俺はすれ違いざまに一番近い砲塔の窓に銃弾を撃ち込み、飛行船内部の人間や操作系統にダメージを与えていく。

命中の確認はできないが、着弾した直後に砲塔の狙いが滅茶苦茶な方向へ向いたことから察するに、射手を負傷させることに成功したようだ。

そのまま機体を翻した「フラップフライヤー」は急降下して他の砲塔の攻撃から逃れた。

「さて、バニラの方は……ん?」

そんなとき、俺は『グランドファイナーレ』のゴンドラの方から聞き覚えのある声を響いた。

「お前たち!! 一体、何事だ……ぬおおおおお!!?」

今更ながら『グランドファイナーレ』のゴンドラから出てきたのは、ブラッディマンティスの総帥ベルガモットだった。

派手なスーツにカイゼル髭を蓄えて大男はいかにも悪の組織のボスといった出で立ちだが、「カモミール・タイプⅡ」と「フラップフライヤー」を見てただただ慌てふためく姿は、とても頼りになる指揮官には見えない。

「ト、トロットビークルが……トロットビークルが空を飛んでいる!？」

縦横無尽に『グランドファイナーレ』の周囲を飛び回る俺たちのビークルを見て、ベルガモットは口を半開きにして哑然としている。

あの無防備な様子なら簡単に制圧できそうだが、残念ながら今の「フラップフライヤー」の位置からだど軽機関銃の射程外だ。

「ひゅー」

そんなことを考えていると、ベルガモットの立つゴンドラの平坦なエリアに向け、バニラは翼を傾けビークルを寄せた。

どうやら、あの踊り場に強行着陸して中に突入するつもりのようなだ。

急速で接近する鉄の塊に、ベルガモットは腰を抜かして悲鳴を上げた。

しかし……。

「総帥!」

「奴を近づけるな!」

「くっ……」

さすがにバニラを脅威と認識したブラッディマンティス構成員は必死に迎撃を始め、
【カモミール・タイプⅡ】のボディに無数の弾丸を浴びせる。

激しい掃射を受けたバニラは一旦撤退を余儀なくされた。

「総帥! ……ここに居ては危険です!」

「ぬううっ……猪口才な! ……いいだろう。かかってこい! 私が相手をしてやるぞ!
! 司令室、上げえーい!」

そして、バニラが離脱したことで威勢を取り戻したベルガモットは鋭く命令を飛ばし、転がるようにゴンドラの内部へと駆け込んだ。

しばらくすると、『グランドフィナーレ』全体に油圧系の稼働音が響き、大型のレールシステムが作動を始める。

次の瞬間、飛行船のゴンドラは気囊部分をグルリと半周するように動き、飛行船の上部へと回った。

「おいおい……あの機能、本当にあるのかよ」

現実味の薄いビククリドツキリメカな挙動に、俺は思わずつぶやいた。

123話 空中決戦！ グランドファイナー2（ベルガモット戦）

飛行船の上部へ回転移動した司令室のゴンドラ部分を追って、俺たちはさらに高度を上げた。

相変わらず『グランドファイナー』の砲塔や銃座は「フラップフライヤー」と「カモミール・タイプII」を執拗に狙ってくるが、今は敵の本体を追うことが最優先なので適当に避けるだけに留める。

そして、飛行船の気囊を回り込むようにして上空へ出ると、またしても聞き覚えのあるダミ声が響いた。

「フハハハッ！ 来るがいい！ ハエのように叩き落してやるわ!!」

見ると、『グランドファイナー』のゴンドラ上の甲板——先ほどまでの底部——には、黄金の意匠が輝く悪趣味なビークルが鎮座していた。

大型のボディとレッグパーツに、これまた悪趣味な骸骨をデザインしたスカルプレス

ト・

武装はオリジナルのシールドアームにバズーカアーム。

ベルガモットの駆る「ゴールドキングダム」だ。

「死ねい! 雑魚どもが!」

「わっ」

「うお!」

ベルガモットは続けざまにバズーカアームを発砲してきた。

飛んでくるのは回転砲塔とは比べ物にならない大口径の砲弾だ。

ビークル搭載火器の威力は馬鹿にならないので、オットーもバニラも思わず回避行動を取った。

「バニラ! まずはいっつを倒すぞ! マーシユの救出はその後だ!」

「了解!」

「ワハハハハ! 食らえ!」

ベルガモットの高笑いと同時に発砲されたバズーカアームは、不気味な炸裂音とともに砲弾を吐き出した。

じつくりと狙い続けざまに放たれた大口径の砲弾は、鋭く空気を切り裂き「フラップフライヤー」の近くを通過する。

「ゴールドキングダム」は爆弾投下口を兼ねるハッチからリフトで機体を押し出し、ほとんどその場から動かさずバズーカを撃ちまくっている。

オットーとバナラは巧みにビークルを操り敵の射線を避けるが、機体のすぐ近くを砲弾が掠める風切り音は気持ちの悪いものではない。

何せあの大口径だ。

一発でも掠れば墜落は免れないだけに、俺の額から冷たい汗が流れ落ちる。

「フハッ、フハハハ！ どうした？ 手も足も出まい！」

「くそつ、気持ちよくなりやがって……」

向こうも足場は不安定なはずだが、上手いこと機体を固定しているようで、敵の狙いはなかなか正確だ。

さらに、よく見るとハッチの奥から「ゴールドキングダム」のバズーカアームに弾薬を供給する装置があるのがわかる。

敵の弾数は無尽蔵で、足場も確保されている。

対して、こちらは空中を飛んでおり、飛行装備にビークルのハードポイントを取られているため、火器は俺の軽機関銃のみ。

さすがに攻撃力が違い過ぎる。

二対一にもかかわらず、俺たちは苦戦を強いられていた。

「ふんっ! いい加減、落ちるがよい!」

「野郎っ!」

オットーがバズーカの砲弾を避け機体を安定させたタイミングに合わせて、俺も負けじとルイス軽機関銃をぶっ放すが……フルオートで撃ち込まれた弾丸はベルガモットのビークルにまともなダメージを与えることなく弾かれた。

さすがに大型のカスタムビークルだけあって、「ゴールドキングダム」は装甲が厚い。「ジャガーノート」の武装が使えればあの装甲も抜けるだろうが、無い物ねだりしても始まらない。

「無駄無駄っ!」

「くっ……」

俺はどうか敵に有効打を与えようとコクピットのベルガモットを狙うが、「ゴールドキングダム」の守りは固い。

掲げたシールドアームで303ブリティッシュ弾は防がれ、俺はまたしても無駄弾を使わされることとなった。

「っ……」

「ぬっ!?!」

もちろん、バニラもこの状況下でただ傍観していただけではない。

「フラップフライヤー」がベルガモットとやり合って目を引き付けている間に、バニラは逆サイドから回り込んでいた。

巨大な『グランドファイナーレ』の気囊の影から飛び出したバニラは、一度ゴンドラの司令室の上に出ると、そのまま飛行状態を解除して甲板に強行着陸した。

そして、「カモミール・タイプⅡ」は甲板上を滑るように移動し、近くの杭のような飛行船のパーツを引っこ抜くと、ベルガモットの「ゴールドキングダム」に向けて投擲した。

しかし……。

「小賢しいー！」

「うわっー！」

さすがに開けた空中で、完全な奇襲は無理だ。

着陸から投擲の動作の間にバニラの攻撃は察知され、彼の一撃はきつちりと対処されて不発に終わった。

ベルガモットはシールドアームで投擲物を防御すると、カウンターでバズーカアームを撃ち返す。

大口径の砲弾を受けた「カモミール・タイプⅡ」は吹き飛び、そのまま甲板から落下してしまった。

「バナラっ!」

俺は思わず「フラップフライヤー」の助手席から乗り出して叫んだ

このままでは、バナラの「カモミール・タイプII」は湖に落下してしまう。

しかし、バナラのビークルはどうか体勢を戻し復帰した。

「っ」

再び滑空を始めた「カモミール・タイプII」は、プロペラにもエンジンにもおかしな様子は無い。

どうやら、敵の砲弾はアーム部分で防御したようだ。

奇跡的に翼部分やプロペラブレストにはダメージが無かったらしい。

空中でウイングアームを広げて風に乗った「カモミール・タイプII」を見送り、俺はそつと安堵の息を吐き出した。

「ぬははははっ! あとはお前たちだけだな。死ねい!」

ベルガモットは再びバズーカアームを連射し始めた。

オットーは巧みにハンドルを操り機体を回転させて攻撃を躲し、俺もルイス軽機関銃で反撃する。

しかし、攻撃力の差は歴然だ。

バナラが離れたことで、「ゴールドキングダム」のバズーカアームはこちらを執拗に狙い、次々と砲弾を吐き出している。

徐々に押し込むように密度を増す大口径弾に、俺もオットーも些か後退気味だった。かと言って、ベルガモットの射線を逃れるために高度を下げれば、今度は別の砲塔に狙われるわけで……何気にジリ貧だ。

「グレイの旦那！ 早く倒してくれえー！」

「簡単に言ってくれる……っ！」

そして、ついに恐れていたことが起きた。

軽快にライフル弾を吐き出していたルイス軽機関銃は、突如ガチツと音を立てて沈黙したのだ。

俺はもう一度トリガーを引くが、軽機はうんともすんとも言わない。

「くそっ、弾切れだ……」

「な、何だつてー!？」

俺の一言にオットーは素っ頓狂な声を漏らした。

節約して撃っているとはいえ、今回持ってきた軽機関銃の弾は100発足らず。手持ちのフルオート火器としては明らかに心許ない弾数だ。

当然、最初の弾倉もとうに撃ち尽くしている。

「ど、どうするんだ、旦那〜!」

「黙って操縦しろ!」

俺は軽機関銃を手放すとショルダーホルスターからS & W M10を抜き、ベルガモットの「ゴールドキングダム」に向けて連射した。

続けざまに引き金を引くと、リボルバーの六連発シリンダーはあつという間に空になる。

「ハッハー! そんな豆鉄砲、効かん効かん!」

腹立たしいが、ベルガモットが余裕なのも領ける。

ただでさえビークルや大型機械に対してほぼ無力な303ライフル弾であつたが、拳銃の38口径弾のエネルギーはその十分の一も無く、しかも銃身の短いハンドガンからの射撃とあつてこの距離では命中率も低い。

俺の放った拳銃弾は半分がベルガモットのビークルを外れ、残りもボディパーツをほとんど傷つけることなく弾かれた。

「くそっ……」

拳銃弾とスピードローダーはありつたけ持つてきたが、それも残りは数十発ほど。

このままではいずれ落とされてしまう。

俺はシリンダーをスイングアウトして拳銃をリロードしつつ、『グランドファイナーレ』

を見て思わず歯ぎしりした。

「うわつと!」

オットーは思わず声を上げながらハンドルを操作し、「フラップフライヤー」を旋回させた。

どうやら、敵の砲塔が攻撃を再開したようだ。

こちらがベルガモットの砲撃を逃れ司令室から離脱したのに合わせ、『グランドフィナーレ』の砲塔はこちらに射角を取り砲弾を放ってきた。

高度を上げればベルガモットの砲撃に晒されるが下も地獄だ。

俺はしばらく回避行動を取るビークルの機動に身を任せて、投げ出されないようになしくシートに掴まっていたが……ふいに一つの案が脳裏を過り、オットーに向き直った。

「……オットー、砲塔に接近できるか?」

「何だつて!」

オットーは「正気か?」と言わんばかりに一瞬俺の方へ視線を送るが、俺はリロードした拳銃を構えて頷いた。

「一瞬でいい。砲口の近くを通ってくれ。やれるか?」

「……しゃあねえな。いっちょよ、やったらあ!」

「っ! 突っ込んでくるぞ! 迎撃準備!」

「撃ち落とせえ!」

鋭くハンドドルを切ったオットーの操作に合わせて旋回した「フラップフライヤー」は、そのまま真っ直ぐに『グランドファイナーレ』の砲塔へ接近する。

もちろん、そのままでは敵の砲弾の餌食なので、オットーは直前で大きく機首を下げた。

限界まで角度を取っての飛行で敵の射線を切り、さらに急上昇のタイミングに合わせてスラストを吹き、急加速と不規則な軌道で敵の狙いを攪乱する。

急降下する「フラップフライヤー」を追いながら砲弾を吐き出す『グランドファイナーレ』の砲塔は、徐々に照準の正確さを欠いていった。

もちろん、あまり高度を上げ過ぎればベルガモットのピークルから砲撃を食らうので、絶妙な高度を維持して敵の射角が取れない位置取りをしつつ動く。

「ぬううううう! 小癪な……!! お前たち、何をしておるか!」

司令室の甲板ではベルガモットが何やら喚いているが、さすがにこちらを追ってくるほど無謀ではないようだ。

オットーはそのまま敵の砲塔を攪乱して飛び続ける。

いつの間にか、バナラも浮上して、逆サイドから砲塔に近づき敵の狙いを分散させ攪乱していた。

理解が早くて助かる。

そして、ついに敵の弾幕の密度が著しく下がるタイミングが到来した。

「行くぜ！」

「おう！」

「フラップフライヤー」を急旋回させたオットーは、斜め上から一つの砲塔へ機体を急接近させた。

ガクンと機体のバランスを傾けると、重力に身を任せるように「フラップフライヤー」は下降し加速度をつける。

敵の砲口はこちらを追いきれないようで、明後日の方を向いたままだ。

「よし、いいぞー！」

「フラップフライヤー」がウイングアームを擦りそうな距離で砲塔の横を通過するなか、俺は助手席から目一杯手を伸ばし砲口へ向けて続けざまに拳銃を連射した。

この瞬間を待っていた。

かなりの近距離とはいえ、高速で飛行するピークルから不安定な体勢での射撃だ。

ほとんどの弾丸は狙いを外れ装甲に着弾し軽い金属音を立てたが……その内の一発

は、見事に砲口へ飛び込んだ。

そして……。

「ぬおおおおおおお!!」

【フラップフライヤー】が通り過ぎた後ろの方では、かなり大きい目の爆発音が起こり、ベルガモットの悲鳴が響いた。

振り返ってみると、先ほどギリギリまで接近した砲塔が炎上し、爆炎が司令室の甲板まで及んでいる。

狙い通り、敵の砲塔内の弾薬が破裂し誘爆したようだ。

半ば神頼みも含んだ運任せの乱射ではあったが、長きに渡り射撃武器を扱ってきたことで身に着けた俺の感覚も無駄ではなかったな……。

「旦那! 掴まれ!」

「っ!」

急旋回したオットーはそのまま『グランドフィナーレ』の甲板上に躍り出ると、またもや機体を勢いよく傾け急降下していく。

眼下には、爆発の衝撃でバランスを崩した体勢から復帰しようとしている【ゴールドキングダム】が見える。

操縦席のベルガモットはこちらを見上げたが、この状況ではどうすることもできない

い。

そして、「フラップフライヤー」を急降下させたオットーは、その体勢のまま一度ビークルの飛行モードを解除した。

「何イ……ぶべっ!?!」

機体全体を揺らす衝撃とともに、ベルガモットの押し潰されたような悲鳴が響く。

「フラップフライヤー」のレッグパーツが踏みつけるように「ゴールドキングダム」の上部に命中したのだ。

直線的な打撃ではないので、コクピットを破壊するほどの威力は無かったが、搭乗者のベルガモットは間拔けな格好でシート上を転がった。

制御が外れた「ゴールドキングダム」もレッグパーツを纏れさせるようにして転倒する。

「やったか!?!」

「フラップフライヤー」を飛行モードへ移行させてスロットルを上げるオットーは、思わずと言った様子で叫んだ。

それはフラグ……。

「おのれっ!」

「うひゃあ!!」

「ぐおっー!」

突如、鋭い衝撃が離脱態勢の機体を襲った。

横を見ると、「フラップフライヤー」のウイングが半ばから折れるように破損し、黒煙と火を上げている。

『グランドファイナーレ』の甲板では、ベルガモットの「ゴールドキングダム」が転倒状態のままバズーカアームを構えていた。

「どうやら、離脱する直前に砲弾を食らったようだ。」

「グレイ! オットー! つ……よくもっ!」

視界の隅にバニラの「カモミール・タイプII」が逆サイドから浮上して『グランドファイナーレ』に強行着陸し攻撃を仕掛けているのが見えたが、今は援護どころではない。

「わ、わ、わあああああああ! 落ちるう!!」

「オットー、伏せろ!」

「フラップフライヤー」はウイングアームから発火し、錐揉みしながら湖へ落下していく。

操縦席のオットーに指示を出しつつ、俺も拳銃をホルスターに仕舞ってシートの上端を掴んで頭を下げた。

オットーはどうか残ったエンジンとスラスターで機体の回転を弱めたが、急激に高

度を落としてゆく「フラップフライヤー」は止められない。

水色の湖面がどンドン迫って来る。

だが、被弾の直前、確かにバニラの振るったウイングアームの打撃はベルガモットの「ゴールドキングダム」に直撃していた。

あとは……主人公がどうにかしてくれるだろう。

そして、墜落の瞬間。

腹に響く衝撃と共に俺の意識は一瞬ホワイトアウトし、そのまま湖の水面に投げ出された。

1 2 4 話 黒幕

「ぶはっ！ げほ……おい、オットー。生きてるか？」

「……ぶへっ……おう、何とかな！」

水面に顔を出した俺は、立ち泳ぎしながら辺りを見回しオットーに声を掛けた。

返答があつた方を見ると、先ほどまで「フラップフライヤー」の操縦席に居たオットーも、手足をばたつかせながら水面から顔を出し空気を貪っている。

撃墜はされたが、人的損害はゼロで済んだようだ。

不幸中の幸いだな。

しかし、「フラップフライヤー」も軽機関銃も湖の底か……。

残念だが、諦めるしかないだろう。

「旦那、あれを……」

「ああ、やったようだな……」

オットーが示す方を見ると、『グランドファイナーレ』は鉄のパーツをばら撒きながら急激に高度を落とし、イワツバメの滝方面へ墜落していた。

どうやら、バニラは無事ベルガモットを撃破し、『グランドファイナーレ』の飛行機能を無力化したようだ。

空中でマーシユを助け出すことは叶わなかったが、何とかデカブツの撃破には成功した。

バニラも今頃は墜落地点だろう。

俺たちもすぐに向かわないとな。

「さて、一旦戻ってビークルを……」

「(おおい！)」

「(兄さあーん！)」

オットーを促し泳ぎ出そうとした俺は、ピジョン牧場の方から聞こえる声に振り向いた。

しばらくすると、ディーゼルのエンジン音とともに一隻のボートが近づいてくる。

船首には手を振るコニーとウイリー、船外機のハンドルを握るのはマルガリータだ。

そして、マルガリータの運転するボートは俺たちの近くまで来て停止した。

どうやら、俺たちが墜落したのを見て迎えに来てくれたようだ。

このモーターボートはミーム村で用意してくれたものだろう。

「ほら、上がって」

「ああ、助かる」

俺はマルガリータに礼を言つて、ボートの縁を這いあがった。

「兄さん、大丈夫かい？」

「おお、済まん、弟よ」

オットーの方もウィリーが手を貸して水から引き上げられている。

飛行兄弟は暑苦しくも無事に再会できたことを喜んでゐるが……俺がボートの席に体を沈めると、コニーは身を乗り出すようにして口を開いた。

「グレイ！ バニラは……？」

「ああ、向こうは無事だ。撃ち落とされた形跡は無かつた」

俺の言葉にコニーはホツと安堵の息を漏らした。

まあ、彼女にしてみれば気が気じゃないだろう。

あとで存分にイチャつくといい。

「う……ぐずつ……。ウィリー……俺たちの、「フラップフライヤー」が……！ うおおおとおおおおおん！」

一方、オットーは今になって「フラップフライヤー」を失つたことで項垂れ泣き始めていた。

そんな中、マルガリータは静かに口を開いた。

「あのデカブツが墜落したのは、向こうだね」

マルガリータの指示した辺りからは、もうもうと黒煙が上がっている。方向から考えても、間違いなく『グランドファイナーレ』の墜落場所だ。

俺はマルガリータに頷きつつ口を開いた。

「敵にもまだ戦える奴が残っているかもしれない。俺のビークルを……」

「ミームー村の連中に運ばせてるよ。マジヨラムとバジルも来て、手伝ってくれてる」
俺を遮るようにマルガリータは言葉が続けた。

「あたしらはこのままデカブツを追うよ。その方が早い」

「……わかった、頼む」

マルガリータは一つ頷いて船外機のエンジンを吹かした。

力強い唸りを上げて稼働したエンジンの推進力で、ボートは勢いよく水面を走り出す。

目的地までマルガリータが連れて行ってくれるので、運転は彼女に任せることにして、俺は武器の確認をしておこう。

シオルダーホルスターから拳銃を抜こうとすると、いつものようにスムーズにドロウできず途中で引っかかった。

どうにか強引に銃を抜き出したが、上質な革製ホルスターもここまで水を吸って型崩

れしては台無しだ。

これも帰ったら新調しないとな……。

先ほど撃ち尽くした拳銃をリロードするため、俺はベストのポケットを探るが……弾は見当たらない。

どうやら、「フラップフライヤー」から投げ出されたときに落としたようだ。

「ほら」

俺が項垂れ落胆していると、前掛けのポケットを探ったマルガリータは一掴みの金属を手渡してきた。

俺の拳銃に使う38口径弾だ。

「必要でしょ?」

「ああ。さすが、頼りになる」

どうやら、俺の部屋から拳銃弾を回収して持ってきてくれたようだ。

至れり尽くせりだな。

本当に、彼女には助けられてばかりだ。

「わ、我が翼は……ずびっ……海の藻屑に……うおおおーいおいおい!」

「ああ、兄さん! 泣かないで! きつちりと役目を果たして【フラップフライヤー】も喜んでくれるはずだよ」

海じゃなくて湖だけだな……。

オットーの男泣きとウィリーの慰める声がかましいが、マルガリータは軽いため息をつくとも無視してボートのエンジンを吹かした。

イワツバメの滝方面へと至る河口辺りまで行くと、墜落した『グランドファイナーレ』の残骸が見えてきた。

陸に接舷したボートから降りた俺たちは、バナラを探して歩を進める。

そして、気囊の残骸を回り込んだところで、大破したゴンドラの奥にバナラの「カモミール・タイプⅡ」を発見した。

「バナラー！」

コニーは真つ先にバナラのビークルへ駆け寄った。

振り向いたバナラは一瞬だけ笑顔を浮かべたが、その表情には焦りの色が見える。

「あ、コニー！　ちようどいいところに。ちよつと手を貸してくれ」
「え、うん。……あ」

バナラのビークルはアームパーツで近くの『グランドファイナーレ』の残骸を持ち上げていた。

その奥に居るのは……マーシユか。

「僕がビークルで抑えておくから、下のマーシユを頼む」

「……うん、わかった」

コニーは少し迷うような表情を見せたが、今は四の五の言っている場合ではないと判断したようで、体を低くして残骸に潜り込んだ。

そして、バナラがビークルで瓦礫をどかしている間に、コニーの肩を借りてマーシユが這い出てきた。

元々の怪我と墜落の衝撃でなかなかのダメージを受けているようだが、命に別状は無さそうだ。

運がいいな。

「あ……ありがとう、コニー」

掠れた声で礼を言ったマーシユは、そのまま疲労でその場にへたり込む。

バナラは慌ててビークルから降りマーシユの容体を確かめていたが、やがて彼の体に目立った外傷が無く呼吸も安定していることを確かめると、静かに安堵の息を吐きだした。

「コニー！」

しばらくすると、マジヨラムとバジルがやって来た。

どうやら、ミームー村からビークルで山道を抜けてここまで来たらしい。

彼らも事情は聞いていたようで、二人のビークルのバックパーツにはバニラの「カモミール・タイプⅡ」の武装が積んであった。

マルガリータとウィリーが早速とばかりにバニラのビークルから飛行装備を取り外し、パーツを換装しつつ応急修理を施していく。

俺の「ジャガーノート」はミームー村の人間が運んでいるそうだが……まだ到着しないか。

まあ、仕方あるまい。

バジルもマジヨラムも、世間一般の基準でいえば普通に腕の立つビークル乗りの部類に入る。

つい最近、ビークルを手に入れて乗り始めた連中とでは機動力も違うか。

「ジャガーノート」の運搬に多少の時間がかかるのは仕方ない。

少々手持ち無沙汰な気もするが……それならそれでやることもある。

「くそっ……何てことだ……。『グランドファイナーレ』が落とされるなんて……」

俺は先ほど『グランドファイナーレ』の残骸から這い出てきたベルガモットに向き直った。

見たところ、こいつも五体満足だ。

バナラに愛機の「ゴールドキングダム」を撃破され飛行船が墜落した割に、普通に元氣そうじゃないか。

「もうだめだ……。あの方に知れたら……。私は終わりだ……。！」

だが、頭は随分と錯乱しているようだな。

セイボリーも『グランドファイナーレ』に乗っているのだから、知れたら何もないだろうよ。

いかにも小物な振る舞いには多くのプレイヤーも拍子抜けしたことだろう。

だが、情けを掛けられる相手かと言われれば、そのようなことはない。

俺がゆつくりとベルガモットに向けて歩を進め近づいた。

「てめえには随分と世話になったな。死にかけて、ビークルを落とされて……。おかげでこっちはまたズブ濡れだ」

「え……。び……。？」

一瞬、体を震わせたベルガモットは、顔を上げて怯えた目をこちらに向ける。

「覚悟は……。出来てんだろうな？」

「ひいーっつ！ お許しをーっ!!」

殺気を隠さず睨みつけると、ベルガモットは揉み手をするような動作で許しを乞うた。

本人の気質は小物とはいえ、こいつには散々な目に遭わされた。

一発くらい殴つても罰は当たるまい。

だが、そんなことを考えていると……突如『グラウンドファイナーレ』の残骸の一部が弾け飛び、一台のビークルが飛び出してきた。

「っー」

「え、あれは……」

突然の出来事に皆が固まるなか、バニラはピンク一色のビークルを思わずと言った様子で二度見する。

そして、ピンク色のビークルは淀みの無い動作で左のアームパーツを上げると、こちらに武器を向けて構えた。

操縦席のプロンドをアップにした女性の目が鋭く光る。

「伏せろー！」

「きゃー！」

俺は思わずマルガリータを抱き寄せ、近くの『グラウンドファイナーレ』の残骸の影に飛び込んだ。

次の瞬間、俺が居た辺りの地面をボウガンアームの矢が襲う。

バリスタサイズの多段式のボウガンから続けざまに発射された金属の矢は、連続して

地面に突き立ち、俺が盾にした残骸にも命中した耳障りな金属音を鳴らした。

「マルガリータ！ 大丈夫か？」

「つ……ああ。何てことないよ」

俺は何よりも先に腕の中のマルガリータに声を掛けた。

突然のことで驚いたようだが、彼女に被弾した形跡は無く様子も普段と変わらない。とりあえず安心だ。

「ひいひいっ！」

突如現れたピンクのビークルを見たベルガモットは、またしても情けない悲鳴を上げている。

そして、コニーをはじめトロット楽団の面々が硬直するなか、ピンク色のビークルはゆっくりとベルガモットに近づき、操縦席の女性が口を開いた。

「まったく……何て情けないの。総帥が聞いて呆れるわ」

「……セイボリー？ セイボリーなの？」

コニーの信じたいものを見たような声が響いた。

俺は向こうの様子が気になり、拳銃を抜きつつゆっくりと残骸の影から顔を出す。……。

「うおー！」

「ふふっ……動かないでね、グレイ」

俺が遮蔽物にしている『グランドファイナーレ』の残骸に、再びボウガンアームが撃ち込まれた。

チラつと見えたが、髪を解いたセイボリーは武装を換装した「ワイルド・ストロベリー」のкокピットから降りず、こちらに鋭い視線を送っている。

どうやら、向こうは俺の銃を警戒しているようだ。

遮蔽物の影に釘付けにされて動けない俺を尻目に、セイボリーは淡々と語り出す。

「……そう。ブラッディマンティスを操っていたのは私」

「どうして？ 何のために……」

「理由なんかないわ。ただ、墮落したこの国を滅ぼしたいだけ」

コニーの悲痛な声にセイボリーは冷たく返答した。

「ワイルド・ストロベリー」の駆動音が嫌に大きく感じる。

「バナラ、グレイ……。フフッ……あなたたちには何度も邪魔をされたわ」

口調こそ穏やかだが、彼女との付き合いもそれなりに長いだけに、セイボリーの声には強烈な怒りが含まれていることがわかってしまう。

そして、セイボリーは激情を抑えつつも、静かな殺気を滲ませながら呟いた。

「でも……私を止めることはできないわ。……この国が灰になるまで」

トロッツ楽団メンバーが固まるなか、セイボリーはハンドルを握りなおした。

「ワイルド・ストロベリー」のレッグパーツが地面を踏ん張り再始動する音が響く。

「それじゃあね、みんな。私はまだやることがあるの」

「セイボリー!!」

立ち去るセイボリーにバジルが色々な感情の籠った声を投げかけるが彼女には届かない。

俺は「ワイルド・ストロベリー」に向けて拳銃を構えかけたが思い留まった。

拳銃弾などビークルに通用しないし、またボウガンアームを撃たれては敵わない。

火砲ではないとはいえ、バリスタサイズの機械弓で飛ばす金属製の大型矢は、人間など簡単に木っ端みじんにしてしまう威力があるはずだ。

「お願い! セイボリーの後を追って!」

「……セイボリーを説得するんだね」

「うん、セイボリーはあんな悪いことができる人じゃない! きつと何かわけがあるのよー!」

コニーの懇願にバナラは力強く頷いた。

マジヨラムの「イエロー・ベア」とバジルの「グリーン・リーフ」が運んできた武装

は、既にマルガリータとウイリーによってバニラのピークルに取りつけられている。

武器を換装した「カモミール・タイプⅡ」に飛び乗ったバニラは、すぐにエンジンを始動する。

「バニラ」

「？」

「任せたぞ」

「っ……ああー！」

助手席にコニーを乗せたバニラは俺に一つ頷くと、一気にアクセルを踏み込み全速力でセイボリーを追った。

1 2 5 話 追撃と包囲網

セイポリーを追うバナラとコニーを見送りしばらくすると、ミームー村の方から数台のピークルがやって来た。

その中には黒塗りの「ジャガーノート」の姿も見える。

「どうやら、俺の愛機を運んできてくれたようだ。」

「よお！ 待たせたな、グレイの旦那！」

「ああ、助かる」

「ジャガーノート」を運転しているのは、ミームー村の山羊飼いのマインツか。

礼を言つてピークルを受け取つた俺は、マインツと一緒にやって来たミームー村の男衆を見回して口を開いた。

「とりあえず、マーシユだ。命に別状は無いようだが、負傷と疲労は見ての通りこのザマだ。取り急ぎ、ミームー村の方で収容してもらいたい。頼めるか？」

「ああ、この少年だな。任せてくれ」

ミームー村の漁師マツカートニーは、マーシユを自分のピークルのシートに乗せ、踵

を返した。

マーシユは憔悴しているものの呼吸は安定しており、顔色も悪くない。

悪いが、今は彼のことは最優先事項ではない。

セントジョーンズ病院へ送るのは後回しになるが、とりあえずは村で療養してもらえばいいだろう。

「で、……いつだが……」

「ひい……」

ベルガモットは今も頭を抱えて震えたままだ。

こんな奴に苦勞させられたとは情けない限りだが……まあ、この期に及んで逃げられるよりはマシだな。

「この男は捕縛する。近場ならネフロ警察で身柄を拘束してもらってもいいが……とりあえず縛るか」

俺はマルガリータのボートにあつた予備の停泊用ロープを使い、ベルガモットの手足を縛つて簀巻きにした。

本当なら、両手足を銃弾でぶち抜いてやりたいところだが、マルガリータやバジルの前であまり残酷なことをするのは考え物だし、出血多量で死なれても面倒なので我慢する。

ついでにロープで猿轡も嘯ませてやろう。

嫌がらせではなく、移動中に騒がれると面倒だからな。本当だ。

……何故、ロープの繊維が一番荒い場所を使ったかつて？

さあ、知らんね。

「ネフロ警察には緊急配備を要請する。敵の黒幕はハッピーガーランドの水路からウズラ山トンネル沿いの水路に入り、最終的にはネフロの用水路からシラサギ川、ウミネコ海岸方面へ逃げるはずだ。網を張るには頭数が要る」

そして、問題は誰がネフロに行くかだが……俺はしばしの逡巡の後、「ジャガーノート」の動作チェックを終えたマルガリータに向き直った。

「マルガリータ、すまないが博士を連れてネフロ警察署に向かつてくれ。俺の名前を使つて……まあ、博士も居れば普通に話も通るだろう」

「わかったよ。任せな」

これで『グランドフィナーレ』周りの懸案事項は一通り片付いた。

残りは、セイボリーとそれを追ったバナラたちだが……。

「それで？ あんたはどうするんだい？」

俺はマルガリータの言葉にゆっくりと振り向いた。

彼女も既に俺の次の言葉は予想しているだろうが……今更、誤魔化すつもりもないの

で、はつきりと告げる。

「セイボリーを追う」

「ぼ、僕も行くよー!」

「僕も同行しよう。セイボリーのことは放っておけないしね」

バジルとマジヨラムは体を乗り出すようにして主張した。

二人が来ることは予想できていたので、俺は特に拒否しなかった。

俺とバジルとマジヨラムの三人でイワツバメの滝からハツピーガーランド方面に向かうことが決まったので、とりあえずベルガモットはマジヨラムの「イエロー・ベア」のバックパーツに乗せてロープで固定する。

お世辞にも快適とは言い難いシートだが、こいつには贅沢すぎるな。

そして、マルガリータは「ジャガーノート」の装甲ブレストを軽く叩き、俺に声を掛けた。

「異常なし! いつでもぶっ飛ばせるよ」

「……………ありがとう、マルガリータ」

さて……………もうひと踏ん張りだ。

撃墜されたりボウガンアームで撃たれかけたりして、最終局面は原作通り主人公のバニラに丸投げしつつあるが……………ここで退くわけにはいかない。

最後まで見届けなければいけない。

当事者として渦中に居続けなければならない。

これは……俺の物語でもあるのだ。

「待って」

【ジャガーノート】のボディに足を掛けコクピットに乗り込もうとすると、俺は後ろからマルガリータに呼び留められた。

振り向くと、マルガリータは勢いよく俺に抱き着いてきた。

間髪入れず、俺の唇に熱い物体が押し付けられる。

若干気圧されつつも情熱的なキスに応えていると、やがてマルガリータはゆつくりと顔を離れた。

そして、俺の目を真っ直ぐに見つめて口を開く。

「気を付けて」

「ああ！」

マジヨラムは視線を逸らし、バジルが顔を赤くしているが、今は何も気にならない。愛する人の温もりは、いつだって活力をくれる。

愛機に乗り込んだ俺は、後続の二人を促すと、最大トルクで【ジャガーノート】のエンジン音を吹かした。

俺とマジヨラムとバジルの三人は、イワツバメの滝から繋がるモズ川へ向けてピークを進めた。

モズ川の流域面積は広く下流では比較的穏やかな流れだが、巨大な滝から流れ落ちる水の量は凄まじく、その高低差は上から見ると圧巻だ。

「くそっ！　滝を飛び降りるとか正気か……!?」

ゲームでは一方通行とはいえ普通に使えるルートだったが、現実ではやはりまともな道ではないな。

滝壺に落下してひっくり返ったら、ピークルがバラバラになることもあり得る。

急いでいるとはいえ、とてもそんな無茶を試す気にはなれない。

俺たちも可能な限り川沿いから離れないようにピークルを進めるが、どうしても進むのにある程度の時間は掛かってしまった。

「セイボリー……」

「三人とも、どこまで行ってるんだらうね……」

「っ！　おい、あれを見ろ」

そして、ようやくハッピーガーランドの東部の入口近くまで到達したところで、俺は二人に向かって注意を促した。

川の下流辺りを見ると、そこでは水路の入口が滅茶苦茶に破壊されていた。

どうやら、城壁の一部をビークルの武装と体当たりで破ったようだ。

辺りには、建材やセイボリーの「ワイルド・ストロベリー」のものと思わしきピンク色の金属破片が所々に転がっている。

間違いなく彼女の仕業だ。

「これは……!」

「セイボリーだ!」

「……行くぞ」

「~~~~! ~~~!!」

「イエロー・ベア」のバックパーツでベルガモットが何やら騒いでいるが、俺たちは無視してビークルを前進させた。

セイボリーたちの通った痕跡を辿るように、そのままさらに街中の水路へビークルを進める。

そして、ハッピーガーランド東地区の商店街と西地区の駅前広場を繋ぐ橋辺りに到達すると、そこには大勢のハッピーガーランドの住民とビークルが集まっていた。

喧騒の方へ近づくと、水路に数台の警察や消防のビークルが降りているのが見えた。

その近くには、乗り捨てられたピンク色のビークルがスタボロ状態で黒煙を上げている。

見間違はずもない。

彼らを取り囲んでいるのは「ワイルド・ストロベリー」だ。

どうやら、セイボリーのビークルはこの辺りでバナラに撃破されたようだな。

「おお、グレイ君！」

「お前たち……！」

水路に降りていたビークルの中には、ファアガスの指揮用警察ビークルとフェネルの「ブルー・サンダー」の姿もある。

俺たちを見つけたファアガスとフェネルは、ビークルに搭乗したままこちらに近寄ってきて口を開いた。

「グレイ君、それに君たちも……。大変なことが起こった！」

「グレイ、マジヨラム。信じられないかもしれねえが……ダンディリオンだ。ダンディリオンの奴が、今回の件の裏で糸を引いてたらしい。あの空飛ぶ要塞もあいつの差し金だ」

二人は驚愕と混乱で所々言葉に詰まりながらも今の状況を説明してくれた。

水路を破壊しながら逃げるセイボリーはハッピーガーランドの街中でバナラに追いつ

詰められたが、そこへ「ホワイトトレクイエム」を駆るダンディリオンが割って入った。

ダンディリオンがチコリの復讐のため『グランドフィナーレ』でこの国を滅ぼそうとしていたことは、その場で本人の口から語られたらしい。

ダンディリオンと彼のビークルに乗り移ったセイボリーは、そのまま下流に逃げたそうだ。

当然、バニラとコニーはそのままダンディリオンたちを追った。

……原作通りの展開だな。

ダンディリオンが正体を現し、それがハッピーガーランド全体に知れ渡るイベントも、全てノーマルルートの通りだ。

この状況に至るまでのダンディリオンの細かな行動は、ゲームでも正確な描写が無かったため不明だが……『グランドフィナーレ』墜落の報を受けて、急いで楽器工房地下の「ホワイトトレクイエム」を持ち出してきたのかな？

もしくは……彼もずっと『グランドフィナーレ』に乗っていたとしたら、墜落直後に俺たちが到着するより先に現場を離れ、ハッピーガーランドで待ち構えていたか……。

まあ、俺が下手に介入する必要が無かったのは何よりだ。

そんな益体も無いことを考えていると、周囲の野次馬たちの声も自然と耳に入ってくる。

「ダンディリオンだって？」

「(でも、あれはエルダーの……)」

「(エルダーの正体はダンディリオンだったのか!?)」

「(彼はチコリの件を……)」

「(え、ダンディリオン？ 誰です？ それ)」

「(ん？ この街に来たのは最近か？ 彼はトロット楽団の……)」

「(あの子が、まさかこんな大それたことを……)」

「(あいつが『ブラッディマンティス』のボスだって!?)」

「(何と恐ろしい……!-)」

「黒幕はダンディリオンだったのか。テロを起こしたり街を爆撃したりしたのは……チコリの復讐が目的か」

「うむ……」

「ああ。どうやら、そういうことらしい」

俺はファアガスとフェンネルの説明を要約した。

ファアガスは重苦しく頷き、フェンネルは皮肉っぽく相槌を打つがその表情はどうか固い。

この段になると、マジヨラムとバジルも戸惑いから復帰し、真剣な表情を湛え始めた。俺は二人の様子も視界の隅で気にしつつ口を開く

「ファーガスン、ブラッディマンティスの総帥は捕縛した。こいつはぼちぼち尋問するとして……問題はダンディリオンだ。このまま放っておけば、奴は他の街や一般市民を攻撃し始めかねない。ブラッディマンティスの手札が『グランドファイナー』だけとは限らない以上、早急にダンディリオンを確保する必要がある」

「ああ。バナラの奴が追撃している間は、街の奴が犠牲になることはなさそうだが……」
「そうだな。いくらバナラ君が腕の立つビークル乗りとはいえ、彼一人に押し付けるわけにはいかん」

俺の言葉に二人は頷いた。

「奴は河口や分水嶺を破壊しながら水路を下っている。このまま川沿いに部隊を展開させて下流で追い詰めるべきだろう。ネフロ警察にもナツメグ博士経由で応援要請の話は通している。ファーガスン、寄せ集めでも構わないから機動隊を編成してくれ。できるだけ早く。俺たちもダンディリオンを追うぞ！」

「うむ。追跡部隊は既に招集している。集結までもう少し待ってくれ」

そう言うと、ファーガスンは数名の部下に指示を出してベルガモットを「イエロー・ベア」から警察ビークルに移し尋問を始めた。

一見、悠長な真似にも思えるが、ビークル部隊の編制に少し時間が掛かる以上、有効な時間の使い方だ。

そして、一通りベルガモットの供述を記録し終えたところで、重武装のビークルによる機甲部隊が集結する。

自分の指揮用ビークルに搭乗したファーガスンは、整列した機甲部隊に向き直り声を張り上げた。

「総員、間隔を開けて隊列を組め！ これより、我が部隊は水路を南下して逃走中の容疑者を追跡する。速度は市街地における進軍突入態勢を上限とする！ 瓦礫や友軍ビークルとの接触には十分に注意しろ！ ……グレイ君たちは後ろからついて来てくれ」
「わかった」

妥当なポジションだな。

ビークルを操縦する要領は、車の運転と然程変わらない。

普通に考えても、狭い通路を高速でかつ飛ばすのは危険だ。

ゲームでは百パーセント安全な自動スクロールでも、現実では事故って愛機をスクラップにする可能性もあるのだ。

トロット楽団メンバーも警察や軍隊と違って車列を組んでの行軍になど慣れていない以上、他より間隔を開けて後ろからついて行く方が安全だ。

「よし、行くぞ！」

ファーガスの合図で、俺たちは一斉に水路を南下し始めた。

126話 白い悪魔1

ペンシル鉄道沿いの水路はウズラ山トンネル近くを通過し、そのままネフロ上流の水脈に合流する。

バニラのガトリングアームの葉莖と、ダンディリオンのエクスカリバーアームでつけられたと思わしき壁の傷を追っていくと、俺たちはネフロの水路に到達した。

汽車やビークルの巡航速度では何時間と掛かる道も、戦闘機動なみの速度で突っ走ればあつという間だ。

もちろん、今回の行軍は真つ直ぐな道だから出来たことであり、そもそも水路のような狭い空間を高速で移動すること自体が危険なので、二度とやりたくは無いが……。

「全隊、停まれ！……一台ずつだ。慎重に通り抜ける」

案の定、建材で補強した水路の一部が破壊されており、辺りには瓦礫が散乱していた。そもそも、用水路はビークルが中を通り抜けることは想定されていないので、入口はなかなか狭い。

建築作業はビークルで行っているはずなので、探せばビークル用の出入り口も近くに

あると思うが、今は時間が惜しい。

「野郎……無茶しやがって……」

「セイボリー……」

悪態をつきながら出てきたフェンネルと、どこか上の空のバジルを最後に、俺たちはネフロの街にビークルを乗り入れた。

さらにしばらく進むと、ちょうど水路から上れる斜面のあたりに、人だかりができていた。

彼らの視線の先を追うと、街の外のシラサギ川へと至る水門が木端微塵に吹き飛ばされている。

「どうやら、ダンディリオンとバナラたちは既に下流へ向かったようだ。」

「うおー！ また来たぞー！」

「ん？ あんたら、警察か？」

「聞いてくれ。さつき、凄いい音がして水門がぶっ壊れたんだ」

「なあ、一体何がどうなってるんだ？」

水路に俺たちの姿を見つけた野次馬が俄かに騒がしくなり、やがてネフロ警察のビークルがやってきた。

ネフロ警察の指揮官とはファーガスンが代表して話した。

どうやら、既に緊急配備は始まっているようで、俺たちが水路から上がると街の外縁には続々と警察ビークルの部隊が集結していた。

ベルガモットはまたしてもファーガスンに引つ立てられて、ネフロ警察の指揮官からも厳しい追及を受けているようだ。

そんななか、こちらにもう一台のビークルが近づいてきた。

「皆、戻ったね」

「おお、フェンネルも一緒か！」

やって来たのは、「クラフトマンシップ」に乗ったマルガリータとナツメッグ博士だ。マルガリータは俺たちを見回した後、俺のところまで視線を止めて僅かに微笑んだ。

ほんの一瞬のことだったので皆は気づいていないようだが……少し優越感が出てしまふな。

そして、博士の方は俺の他にフェンネルの姿を認め、僅かに驚きの表情を浮かべている。

『グランドファイナール』の件ではフェンネルから伝書鳩をもらっていたはずだが、彼がここまで出張ってくることは博士にも予想外だったのかもしれない。

とりあえず、警察の方の準備はまだ終わらないようなので、俺は二人に向き直り礼を言った。

「マルガリータ、色々と手間をかけたな。助かったよ。博士もありがとうございませう」
「気にするんじゃないよ」

「うむ、今は一大事じゃからな。……それで？ 何がどうなっておる？」

「それが……」

ダンディリオンの件についてはフェンネルが話した。

俺はその場を見ていないので、まあ妥当なところだろう。

「何と……?!? セイボリーの件は聞いたが、まさかダンディリオンが……!」

「え……ダンディリオンって、確か……」

事の顛末を聞き終えたナツメツグ博士は「クラフトマンシップ」の助手席で項垂れるように頭を抱えた。

まあ、博士にとつてはシヨックなことに違いないだろう。

ダンディリオンがブラツディマンティスの黒幕だったなど、ましてや彼がチコリの復讐のためにそこまでしていたなど……。

淡々と説明したフェンネルも、意気消沈した博士には掛ける言葉が見つからない様子で、サングラスの奥から虚空を見つめて黙った。

マルガリータも俺や博士から断片的にダンディリオンの話は聞いているので、セイボリーに続いて俺たちに近い人間が槍玉に挙げられたことに戸惑っているようだ。

しかし、それでも時間は無情に過ぎてゆく。

やがて、合流したガーランド警察の機動隊を組み込んだネフロ警察のビークル部隊も準備が整い、出動の運びとなった。

そして、俺はマルガリータとトロット楽団の面々に向き直り声を掛けた。

「山道は俺が先行する。皆はファーガソンの部隊と一緒に、下の道から行け」

逃げるダンディリオンとセイボリーを追い続けバナラが辿り着いたのは、彼の物語の開始の地ウミネコ海岸だった。

河口の鉄格子を吹き飛ばして砂浜に出たダンディリオンは、ゆつくりと「ホワイトレクイエム」を反転させ追いついてきたバナラの「カモミール・タイプⅡ」へ向き直る。ダンディリオンとセイボリー。

長らく親愛の情を抱いてきた二人のあまりにも冷たく無機質な眼差しに、バナラも助手席のコニーも思わず身震いした。

「ウミネコ海岸……バナラ、君を始めて見たのもここだったな」

夕日を背に淡々と語るダンディリオンの目は、冷たくも妖しく輝いている。

バナラを見据える彼の目に宿るのは……狂気。

それ以外の表現が思いつかない。

そんなコニーに構うことなく、ダンディリオンはバナラに鋭い視線を送った。

「フフフ……。こんなことなら、あの時岩の下敷きにしておけばよかったよ」

「ダンディリオン……。それじゃあ……!」

「その時はコニー、君が居たからできなかった。……でも、同じ過ちはしないよ……!」

悲痛な声を絞り出すコニーに、微かにダンディリオンの表情が歪む。

しかし、次の瞬間には、ダンディリオンの表情は凄まじい怒りと殺気に支配された狂

人の顔へと変わった。

「さあ……。決着を付けよう、バナラ!」

右のエクスカリバーアームに左の長距離キャノンアーム。

二つの武装を振りかざしスラスターを吹かしたダンディリオンは、強化型レッグパー

ツの加速力も活かしてバナラに襲い掛かった。

長距離キャノンアームを発砲した「ホワイトレクイエム」は、射撃態勢の解除を待つ

ことなく淀みない動作の移行でスラスターを噴射した。

強化型の鳥足タイプのレッグパーツが加速の勢いで砂を撒き散らし、跳ねるような勢いで目標を追う。

初手から畳み掛けるような攻勢だ。

そして、大きく振りかぶったエクスカリバーアームの巨大な刀身が、長距離キャノンの爆風を避けたバニラとコニーに迫る。

「っ！」

「ぎゃー！」

バニラは素早く距離を調整し、エクスカリバーの刀身の根本へトライデントアームを差し込むようにして、ダンディリオンの斬撃を凌いだ。

ビークルを襲う衝撃に思わず助手席のコニーが声を漏らす。

「ダンディリオン……！」

「……ふんっ」

スイングの勢いを殺されたエクスカリバーアームは、鋼鉄の三又の槍の柄に僅かな傷をつけただけに留まるが……ダンディリオンは止まらない。

そのまま押し切るようにエクスカリバーの角度を変えて斬り上げ、返す刀で横薙ぎに刀身を振るう。

一撃一撃に、確かな殺気が宿っている。

アームパーツの可動域を限界まで活用し、ビークルのエンジンブロックをバターのよ
うに切り裂き両断する攻撃だ。

さすがのバナラもフルスイングを受けるわけにはいかず、スラスターを噴射してその
場を離脱した。

「はあー！」

「くっ」

距離を詰めたダンディリオンは執拗に「カモミール・タイプⅡ」にエクスカリバーで
斬りつけ、反撃する間を与えずにバナラを追い詰めていく。

斬撃のコンボを凌がれたら、今度は長距離キャノンアームの狙いをじっくりと付けて
「カモミール・タイプⅡ」の中心に向けトリガーを引く。

「ホワイトレクイエム」を駆りエクスカリバーアームを振るうダンディリオンのハン
ドル捌きに、一切の迷いは無かった。

バナラはガトリングアームの点射とスラスターによる高速移動で、牽制しつつ体勢を
立て直すしかない。

傍から見れば「カモミール・タイプⅡ」は防戦一方だ。

しかし、バナラもただ一方的にやられるタマではない。

彼もまた、攻防の中で着実に自身の攻撃を相手に到達させるための立ち回りをしてい

た。

「ふっ！」

「っ……」

タイミングを見計らい、バニラは一気に攻勢に出る。

ビークルを回転させる勢いでダンディリオンの長距離キャノンアームのミサイル弾を躲し、流れるような動作で左のアームを上げたバニラは、そのままガトリングアームの引き金を引いた。

高速弾の掃射で足元から薙ぎ払われるように制圧射撃を受けたダンディリオンは、思わずビークルを下げて後退る。

弾痕がなぞる軌道は蛇のような曲線を描き、「ホワイトレクイエム」の逃げ道を塞いで大岩と瓦礫に囲まれた空間に押し込んだ。

海岸のなかでもとりわけ足場の悪い場所へ追い込まれたダンディリオンは、踏み込んでエクスカリバーを振るうことも素早く距離を取ってキャノンを撃つこともままならない。

もちろん、その隙を逃すバニラではなかった。

「ハア！」

「っ……ちい！」

狙いすましたトライデントアームの一撃は、エクスカリバーアームの可動部を掠めた。

寸でのところでダンディリオンはビークルを後退させ回避に成功するが、足場の悪い環境下で攻勢に出られればなかなか反撃に転じられないのは彼も同じ。

形勢は逆転した。

一気に距離を詰めたバナラは、即座に武装を展開してダンディリオンに猛烈なラッシュを掛けた。

思い起こされるのは、ビークルバトルトーナメント決勝戦でのグレイ対エルダー戦。不規則なスラストターダッシュで高速で移動しながら射撃武器を発砲し敵の攻撃を避け、一瞬の距離が詰まったタイミングで近接武器を振るい致命的な一撃を叩き込み刃を打ち合わせる。

ビークルの稼働限界をぶっちぎるような高速機動と連続攻撃のコンビネーションの応酬は、まさにビークルバトルの頂上決戦を彷彿させる様相を呈していた。

「せいあー！」

「ぐ……」

そして、バナラの「カモミール・タイプⅡ」とダンディリオンの「ホワイトレクイエ

ム」の両者で手数勝負になれば、僅かにバナラ側に軍配が上がる。

何せ、巨大なエクスカリバーアームと、重量武器とはいえノーマルサイズの部類に入るトライデントアームでは、ビークルに掛かる重さが違う。

さらに、バナラの射撃武器は装弾数と連射力に優れたガトリングアーム。

ダンディリオンはどうかエクスカリバーを盾のように使いつつ強化型レッグパーツの加速力を活かして立ち回っていたが、徐々に追い詰められていた。

「(行ける……!)」

数合の切り結びと撃ち合いを経て、バナラはそう確信した。

ダンディリオンの……エルダーの動きはトーナメントの決勝戦で見た。

自分を下したグレイとの試合は、まさに最強を決める仁義なき死闘だった。

だが、今の「ホワイトレクイエム」は明らかにあの時より動きが悪いのだ。

当然ながら、グレイの駆る「ジャガーノート」よりも格段に弱い。

確かに、機動力の低下の要因は、瓦礫の多い砂浜という環境によるところが大きい。環境要因によるデメリットは、当然ながらバナラもその影響を受ける。

しかし、敵の動きが精彩を欠く状況において、バナラは常に活路を見出し優位に戦ってきた。

ビークル乗りの経験の少なさを、自身の反射神経や天賦の才をビークルの運動能力に

反映させることで補い、何より高い洞察力と適応力によつて、経験値やスペックで勝る相手を下してきたのだ。

「終わりだ！ ダンディリオン！」

お互い、フィニッシュブローの重さを孕んだ一撃を放ち、近接武器による打撃の応酬で機体が衝撃によるめくくなか、先に復帰したのはバナラの方だった。

相対する敵は不安定な態勢のまま。

このチャンスを逃す手は無い。

無駄のないフォームでガトリングアームを上げたバナラは、そのまま引き金を引き絞りフルオートで高速弾を〔ホワイトトレクイエム〕に撃ち込んだ。

ダンディリオンはエクスカリバーアームで防御するが、制圧射撃の要領で連続して撃ち込まれる弾丸に捉えられては、耐えることなどできない。

ビークルのボディ全体に無数の弾丸を食らった以上、いつ爆発炎上するかもわからず、普通ならその時点で勝負は付いているはずだった。

しかし……。

「なっ！」

「あう！」

突如、バナラの〔カモミール・タイプⅡ〕を鋭い衝撃が襲った。

突然の出来事に、助手席のコニーも思わず息を詰まらせる。

フルオートでガトリングを撃ち込んだバナラが僅かに緊張を解いた一瞬の隙を突き、ダンデイリオンは突進を繰り返し、バナラたちのビークルを弾き飛ばしたのだ。

それをバナラが理解したのは、どうにか機体のバランスを取り戻して横転を避け、続けて迫りくるエクスカリバーアームの斬撃を寸で避けた後だった。

「調子に乗るなよ……君は機械の力を借りているだけだ。君が強いわけじゃない……！」

127話 白い悪魔2

ダンディリオンの駆る「ホワイトレクイエム」は、バナラとコニーの乗るピークルに獣のように飛び掛かった。

所々、パーツが損傷して吹き飛び、エンジン系や燃料タンク周辺にもダメージを受けているものの、構う様子は無い。

引火の危険などまるで顧みず、ただ憎しみだけでエクスカリバーアームを振るう。

既に長距離キャノンアームの弾薬は底をつき、駆動部にもダメージが蓄積している。

それでも、ダンディリオンは一步も退かなかった。

「おおおおお！」

「ぐ……」

先ほどの精彩を欠いた動きから一転、「ホワイトレクイエム」は徐々に動作の移行にラグが無くなり、剣筋も鋭さを増していく。

的確な足運びで立ち回り鋭くエクスカリバーアームの斬撃を繰り出すダンディリオンの動きは、ピークルバトルーナメントの決勝戦以上の強さを発揮しているようにも

見えた。

あるいは、ダンディリオンのあまりに激しい怒りと殺意に気圧され、バニラがそう感じているのか。

少なくとも、今のダンディリオンは多少のダメージや損傷で止まる気配は無い。

ダンディリオンのピークルは既に損傷と消耗から万全とは程遠い状態になっているにもかかわらず、彼の攻撃はますます鋭さに磨きがかかる。

まさに、機械の性能ではなくダンディリオン自身の強さと意思によって、「ホワイトレクイエム」のエクスカリバーは振るわれている。

実際に相対するバニラも、コクピットから発せられるダンディリオンの殺気を通して、それをひしひしと感じ取っていた。

「しっ—」

「くっ……い—」

ピークルのボディをバターのように切り裂くエクスカリバーアームは、数々の死闘を潜り抜け生き延びてきたバニラにとっても十分に脅威だ。

一撃一撃の致命的な重さと圧倒的な手数と勢いを前に、バニラは徐々にダンディリオンに押されていく。

そして、明確な殺意を以って振るわれたエクスカリバーの一閃は、的確に「カモミー

ル・タイプⅡ」のkokopitt目掛けて放たれた。

バナラもここ最近の濃密な戦闘経験によって一種の勘を身に着けつつあるがゆえ、どうにか致命傷を受けることは避けるが……。

「っー！」

完全には躲しきれなかった斬撃がビークルのボディを捉え、甲高い金属の接触音が響く。

次の瞬間、「カモミール・タイプⅡ」のロールバーが吹き飛んだ。

改めて、強力な近接武器によって鋼鉄のビークルパーツが容易く破壊される光景を目の当たりにし、バナラの額を冷たい汗が流れた。

「ちっー！ しぶとい奴だ……！」

悪態をついたダンディリオンは、エクスカリバーアームを構え直すと、再びスラストアーを起動してバナラのビークルに飛び掛かった。

ビークルの損傷をモノともせず、ただ目の前の敵を叩き潰す。

彼の目にあるのはそれだけだった。

「っらあ！ どうだ!?! バナラあ!!！」

「っ……はあー！」

さらに数十合の打ち合い。

滲み出る狂気を湛え執拗に襲い掛かるダンディリオンに、バニラは時折カウンターを放ちつつも攻めあぐねていた。

もちろん、彼も戦略を用いて戦えない気質ではなく、封殺され余裕が皆無の状況というわけではない。

ダンディリオン側は射撃武器の弾薬が尽き、バニラのガトリングにはまだ残弾がある。

当然、その優位も十全に活かして戦っていた。

「死ねよー！ いい加減、死ねって!!」

「くっ……ダンディリオン……!」

徐々に両者の機体にはダメージが蓄積していく。

損傷の割合では「ホワイトトレクイエム」の方が若干不利といったところだ。

しかし、未だにダンディリオンに退く気配は一步も無い。

ガトリングアームの高速弾によってボディに穴が空こうが、駆動部の動きにトラブルが起きようが関係ない。

ビークルの稼働限界を無視したぶつかり合いは、既に意地の勝負と化していた。

「やめて……」

「っ……」

エクスカリバーアームの斬撃に軽くトライデントを打ち合わせ受け流すバナラの耳に、微かにコニーの声が響いた。

彼女も生半可な覚悟でついて来たわけではない。

少しでも戦うバナラの心を支えられるように、運転席のバナラが気を散らさないように……彼の傍に居て、彼のことを信じて、気持ちを支えることで一緒に戦ってきた。

それでも、思わず口をついて出たコニーの本音は、バナラの心臓を鷲掴みにするように押し掛かる。

「くっ、ダンディリオン……！」

「死ねえー！」

顔に狂気を漲らせて襲い来るダンディリオンは、そんなことはお構いなしとばかりにエクスカリバーで斬りつけてくる。

彼にはコニーの姿は見えていない。

ダンディリオンとバナラ。

大切な二人が戦い殺し合うことがコニーの目にどう映るのか、まるで考えが及ばないかのように……。

「馬鹿野郎っ！」

「っ！」

トライデントの柄で真正面から斬撃を受け止めたバナラは、自分でも驚くくらいの大
声で吠えた。

思わず奥歯を噛み締めながら目を見開き、彼もまた怒りのまま激情を刃に乗せるよう
にしてトライデントアームの刺突を放つ。

鋭い軌道で突き込まれた攻撃をダンディリオンが後退して躲すと、バナラの頭は冷え
僅かに戦略を思考する感覚を取り戻したが、ハンドルとペダルでビークルを操る彼の手
足は血が燃えるように熱を帯びていた。

「っ……ダンディリオンっ!!!」

後退するダンディリオンを追いかけたバナラは、「ホワイトレクイエム」のレッグパ
ーツを薙ぎ払うようにガトリングを乱射しつつ、エンジンブロックの中心を狙ってトライ
デントを突き出す。

再び、バナラの攻勢だ。

的確にダンディリオンのビークルの急所を狙うバナラの動きに最早迷いは無い。

これ以上、コニーを悲しませない。

ここで全てを終わりにする。

そんな思いを胸に振るうトライデントは、覚悟を決めてトリガーを引くガトリングは、「ホワイトレクイエム」のボディに軽くない損傷を与えていく。

一方、ダンディリオンがカウンターで放ったエクスカリバーアームの斬撃は、見事になされた。

「クソっ、何が……」

「おおお!!」

反撃を許さず、体勢を立て直す間を与えずに、バニラのトライデントアームの多段突きを繰り出す。

三又の槍の先端はダンディリオンのビークルの風防にヒットし、操縦席を掠めた。

続けて、銃口を流すように放たれたガトリングアームの高速弾は、精密なエイムをしていないにもかかわらず、吸い込まれるように「ホワイトレクイエム」のバックパーツである補助エンジンを捉える。

蒸気機関の一部がショートした小規模な炸裂音を背後に聞きながら、ダンディリオンは顔を顰めた。

「何だ、それは……!」

ダンディリオンの表情には戸惑いの色が浮かぶが、それもそのはず。

バニラは今の状況下において最適な立ち回りを行い、銃口に最短距離を描かせたに過

ぎない。

機動力もパワーも、ビークルの限界を超えてはいない。

だが、それこそバナラがこの愛機に乗り続けて身に着けた最大の技術だ。

バナラの「カモミール・タイプⅡ」はカスタムビークルではあるものの、機関部も外装も基本的に通常グレードのパーツで構成されている。

一部の例外を除いてほぼ店売りの品、いわばレア度というコモンかノーマルのパーツばかりというわけだ。

「ホワイトレクイエム」や「ジャガーノート」のようなSSRやレジエンダリークラスのパーツを多用したビークルとは違う。

しかし、それゆえバナラは環境や状況に応じて様々なカスタムを試し、あらゆる微調整や改良を重ねる経験を積んできた。

そして、全力で挑んだトーナメントでは、グレイに敗北した。

機体の性能差、操縦スキル、両方で負けた。

そんな中、バナラが編み出したのは、機体のパワーや機動力に依存しない、操縦スキルで勝つ戦法だ。

即ち、反射神経と五感によって、相手の操縦技術の限界の隙を突き、敵の攻撃を躲して自分の攻撃をヒットさせる。

ただひたすら戦闘機動の洗練。

それだけだ。

思えば、やることは他と変わらなかつた。

圧倒的な重量と火力を持つ大型ビークルも、

要は、汎用ビークルではどちらにせよ限界がある機体の性能ではなく、

どうすれば、自分の「カモミール・タイプII」で「ジャガーノート」と戦えるか、グレイに勝てるか。

それを考えて編み出した戦法と立ち回りの基礎は、確かにバナラの操縦技術に根付いていたのだ。

もちろん、グレイの「ジャガーノート」とダンディリオンの「ホワイトレクイエム」では装備や設計思想に差異があるが……それでもバナラの無駄を省いた単純な戦法は、どんな相手にも通用するという強みがある。

「っ……」

補助エンジンの機能を停止させられ、駆動系のバランスをさらに崩された「ホワイトレクイエム」は、徐々にダンディリオンの意図通りの動きを実現できなくなっていく。

機体を意のままに操るバナラに対し、自分の意図と機体の挙動のズレンマが広がるダンディリオン。

ダンディリオン側の動きのキレは、バナラとの攻防を交わすたび加速度的に鈍っていった。

そしてついに、バナラの攻撃はダンディリオンのピークルに甚大なダメージを与える一撃を決める。

鋭く突き出されたトライデントアームの一撃が、「ホワイトレクイエム」の左側の長距離キャノンアームの根元に突き刺さった。

完全に可動部に関節を捉えられたアームパーツは、耳障りな音とともに火花をスパークさせ、電気系統がショートしたことを物語っている。

間髪入れず、バナラがペダルを踏みこんでスラストを起動すると、「カモミール・タイプII」のボディで正面からダッシュアタックを食らった「ホワイトレクイエム」は後ろに吹き飛んだ。

弾みで、関節を破壊されていた「ホワイトレクイエム」の長距離キャノンアームは音を立てて千切れ飛ぶ。

強引に回避動作へ移っていた「ホワイトレクイエム」にとつて、それは最悪のタイミングでの出来事だ。

「ぐっ」

ダンディリオンの意思に反して、彼のピークルはバックパーツから岩に激突して倒れ

込み、レッグパーツもバランスを崩した。

横転寸前の「ホワイトレクイエム」は、最早バナラにとって的でしかない。

当然、バナラはさらに追い打ちを掛け、トライデントアームを突き出す。

エンジンブロックを狙った一撃は、咄嗟にダンディリオンがハンドルを切ったことで僅かに狙いを外したが、耳障りな金属音を立てながら「ホワイトレクイエム」前部のスパイクブレストに食い込んだ。

「ダンディリオンっ！」

「っ！」

助手席のセイボリーが咄嗟に手を伸ばし、コクピットのパネルを操作する。

緊急用の着脱装置が作動し、トライデントアームの捻じ込まれたスパイクブレストEはガシヤンと音を立てて「ホワイトレクイエム」の機体から外れた。

あのまま密着し続けていたら、どう考えてもダンディリオンがエクスカリバーアームを振るう前にガトリングを至近距離から撃ち込まれていただろう。

セイボリー間違いなく最適な判断を下した。

しかし、ダンディリオンはそんなセイボリーに感謝するどころか、目を剥いて声を荒げた。

「邪魔をするな！」

「つ…………ごめんなさい」

思わず身を竦めたセイボリーは、反射的に謝りつつも思わずダンディリオンの目を覗き込みそうになり、そして顔を背ける。

その様子は、「カモミール・タイプⅡ」のコニーとバナラの目にも、はつきりと映っていた。

「セイボリー！ もうやめて……………」

再び「ホワイトレクイエム」が後退しバナラたちと距離を取るなか、コニーは悲痛に叫んだ。

兄のように慕うダンディリオんと、甘酸っぱい恋心を抱くバナラ。

そんな二人が命を賭して戦うだけでも胸が張り裂けそうになるのに、さらにセイボリーまでも自分たちに冷たい眼差しと殺気を向けてくるなど、とても耐えられない。

戦いに夢中のダンディリオンには最早自分の声は届かないが、せめてセイボリーには……………。

そんな思いで放たれたコニーの言葉に、セイボリーは僅かに反応を見せたが、やがて彼女も険しい表情に戻り、そして皮肉っぽく微笑んだ。

「…………ごめんなさいね、コニー」

「っ……」

何度言っても届かない。

悲し気な、しかし全てを拒絶するような冷たい目に、コニーの心は今にも折れそうになる。

ほぼ無意識に、コニーは運転席のバナラに触れようとしていた。

それがバナラの集中に水を差す行為だと知りながらも、一分の隙が命を落とす状況だとわかつてはいるものの、どうしてもそうせずにはいられなかった。

しかし……彼女が大切な人の存在を確かめようとした試みは、達せられることは無かった。

「つきやあー！」

「コニーー！」

「っー！」

一瞬の脱力の後、バナラとダンディリオンは近接武器の応酬を交わし、ビークルのボディをぶつけ合う。

レッグパーツの踏み込みに合わせてトロットビークルの重量を転嫁し、突進の勢いに乗せて突っ込む、小細工など弄しないビークル同士の格闘戦における基本の動作だ。

しかし、そんな正面切つてのぶつかり合いのなか、バナラの横の助手席から甲高い悲

鳴が轟いた。

慌てて横に視線をやると、コニーが座席から投げ出されそうになっている。

一瞬の気の緩みか、体重が軽いからか……とにかくコクピット内での掴まり方が不十分だったコニーは、激突の際の衝撃で「カモミール・タイプⅡ」のブレストパーツ側に半身が落ちかけていた。

「ダンディリオンっ！」

「っ……っ！」

セイボリーの鋭い声が響いた瞬間、一瞬動きを止めていたダンディリオンはピークルのハンドルを握り直しエクスカリバーアームを振り上げた。

セイボリーが声を発した理由は定かではないが……ダンディリオンはやる気だ。

「っ!!!」

その時、バニラの頭の中で何かが切れた。

怒りではない。

激情とも言えない。

ただ、覚醒とした表現できないような感覚が脳裏を巡り、ほぼ無意識下でピークルのアームを操作する。

そして、バニラの視界内の景色が微かにスローモーションのような動きを見せるな

か、放たれたトライデントアームは「ホワイトレクイエム」のエクスカリバーアームの可動部に深々と突き刺さっていた。

「なっ!?!」

「……………」

ダンディリオンは驚愕の声を上げるが、それに構わずバニラは感情の籠らない目でガトリングアームを稼働させる。

右手はしっかりとコニーの手を掴みながら、冷たい殺意を以ってガトリングのトリガーを引けば、高速弾が至近距離からフルオートで吐き出される。

「うお!!」

「きゃー!」

大量の弾丸をボディに浴びた「ホワイトレクイエム」は、後方へ沈むように転倒した。自動制御装置の立ち上がり動作が試行されるが、エンジン系とレックパーツをほぼ大破させられたピークルに、最早立ち上がる力は無かった。

「ぐ……………」

ダンディリオンは慌ててハンドルを操作するが、彼のピークルはうんともすんとも言わない。

エルダーとしてピークルバトルーナメントのチャンピオンに君臨して数年。

ビークルや機械の存在を忌み嫌いつつも、ダンデイリオンは長きに渡りその性能と力に慣れ親しんできた。

ビークルの構造と仕組みを熟知しているだけに、既に愛機が限界を迎えていることを悟ってしまう。

「ダンデイリオン……!」

「っ……………くそっ」

励ましとも諭しとも取れるセイボリーの声が響き、ダンデイリオンは僅かに我に返ったように動きを止める。

今更ながら、彼はセイボリーの手が自分の腕を掴んでいることに気付いた。

共感し、同志となり、同じ目的のためずっと傍で支えてくれた人の存在に、ダンデイリオンは何を思っているのか……その答えは、長年彼を見続けてきたセイボリーにも最早わからない。

「……………行きましょう」

「……………」

そんな彼らを尻目に、もうもうと黒煙を上げるダンデイリオンのビークル。そして、ついに動かなくなつた。

1 2 8 話 野望の終焉 1

大破して黒煙を上げる「ホワイトレクイエム」から、ダンディオンとセイボリーは緩慢な動作で降りてきた。

憔悴したダンディオンを支えるようにして出てきたセイボリーはゆっくりと顔を上げる。

その視線の先に居るのは、「カモミール・タイプⅡ」から降り、彼らの身を案じるように炎上する「ホワイトレクイエム」を覗き込んでいたバナラとコニーの姿。

そして、一歩前に出たセイボリーは黒いドレスの装飾の内側を探ると、何か覚悟を決めたように強く口を結び顔を上げた。

「ダンディオン、逃げて」

「セイボリー！」

瞳に悲壮な覚悟を湛えたセイボリーの手には、金色に輝く小型の拳銃が握られていた。

その銃口はまっすぐバナラに向けられている。

コニーは思わず悲痛な声で叫ぶが、軽く視線を動かしたセイボリーは静かな殺気でコニーを牽制した。

「コニー、ダンデイリオンを見逃してあげて」

「セイボリー……」

邪魔をするなら、あなたでも容赦しない。

セイボリーの目は明らかにそう言っていた。

家族よりも固い絆で結ばれた相手に銃を向ける行為。

その覚悟のほどは、後ろのダンデイリオンにもひしひしと伝わっているようで、絞り出すように彼女の名前を呼んだ。

しかし、次の瞬間……。

「あ………」

「っ！」

乾いた炸裂音とともに、セイボリーの銃が弾け飛んだ。

それがビークルの武装ではなく小火器による狙撃であることはバナラにもわかった。

銃声の方へ視線をやると、海岸の崖の上に黒いビークルが見える。

そして、そのコクピットでは予想通りの人物がライフルを構えていた。

「グレイ……」

怨嗟とも落胆ともつかないセイボリーの声を皮切りに、ウミネコ海岸に四方八方からビークルが雪崩れ込んできた。

崖上、水路、街道への細道……その全てを重装備に警察ビークルが封鎖し逃げ道を塞ぐ。

海岸に突入してきた部隊のなかには、フエンネルの「ブルー・サンダー」やマジヨラム「イエロー・ベア」などトロット楽団のビークルの姿もあった。

そして、その場は完全に包囲された。

ネフロを出た俺は「ジャガーノート」を山道に乗り入れると、そのまま木々の間を縫うようにしてウミネコ海岸までビークルを飛ばした。

完全に街道を外れた、道というのも憚られるルートだ。

先行する俺はどうか「ジャガーノート」のパワーと機動力で山道を踏破していくが、後続の警察ビークルは斜面や足場の悪さに手間取っており、その距離は徐々に離れていく。

まあ、機体の性能と操縦者の技量が違えば、こうなるのも仕方ない。

普通なら、俺はざっと道を切り開いたらペースを落とす、後続を待つべきだろうが

……残念ながら、今は一刻を争う事態だ。

俺は警官隊に事故にだけ気を付けるようお願いし、海岸方面へ一直線にピークルを進める。

そして、密集する木々を抜け崖上まで進むと、俺は海岸を見下ろせる高台に到達した。

「あそこか……」

眼下の砂浜へ視線をやると、散乱する瓦礫や岩や空葉莢の奥に二台のピークルが見える。

一方はバナラとコニーの乗っていた「カモミール・タイプII」で、もう一つはダンディリオンとセイボリーの「ホワイトトレクイエム」で間違いない。

どうやら、既に決着はついているようで、ダンディリオンのピークルはズタボロの満身創痍な状態で黒煙を上げていた。

やがて、「ホワイトトレクイエム」からセイボリーとダンディリオンが出て来る。

そして、ダンディリオンより一步前に出たセイボリーは、例によつてバナラに拳銃を向けた。

「っ……」

結局、ダンディリオンはバナラが撃破し決着を付けてくれた。

最終決戦で俺の出番は無い。

だが……来てよかった。

まだ警察の狙撃手は到着しておらず、配備も万全ではない。

このままでは、ダンディリオンの逃走を許してしまう結果にも繋がりがねない。

……やはり、この物語には俺が必要なのだ。

俺は「ジャガーノート」のシートの後ろから狩猟用のボルトアクションライフルを取り出すと、セーフティを解除してトリガーのロックを外した。

「スウ……」

木製のフォアエンドをプロテクター風防のフレームに置いてライフルを安定させた俺は、スコープを覗いてセイボリーの銃に狙いを付ける。

少し距離はあるが……セイボリーの腕をビークルのチェーングンで吹き飛ばすわけにはいかないし、銃身を改良して精度を高めたこの銃ならやってやれないことはない。

俺は潮風と同調するようにライフルの銃身を流し、ターゲットに銃口がぴつたりと合ったタイミングで、静かに引き金を絞り落した。

「ッ」

鋭い炸裂音とともに銃弾が発射され、肩付けした銃床から強烈なキックを感じた瞬間、リコイルの跳ね上がりで俺はスコープ内の目標を失った。

若干焦り気味に銃を構え直し、再びセイボリーをスコープに捉えると……彼女は手を

抑えて蹲っている。

その近くには、小型拳銃の残骸と思わしきバラバラになった金色の破片が散らばっていた。

「ふう……」

どうやら、命中したようだ。

ライフルを使ったのも久しぶりだが……当たるものだな。

改良を手伝ってくれたナツメツグ博士に感謝だ。

やがて、ウミネコ海岸周辺に集結していた警察ビークルが姿を現し、海岸周辺の道を塞ぐようにしてダンディリオンたちを囲み始める。

いよいよ大掛かりな逮捕劇の始まりだ。

「ここは任せる」

「はっ！」

後ろから近付いてきた警官に一言告げ、俺は崖上のポジションを警察のビークル部隊に譲り渡した。

さて……俺は結末を見届けないとな。

【ジャガーノート】を砂浜に下した俺は、ビークルを降りて警官隊の包囲網の前まで進

んだ。

さすがにもうチェーニングをぶっ放す展開にはならないだろうが、念のためライフルは持っておく。

そうして、ダンディリオンと対峙する面々に合流すると、そこにはバナラとコニー以外にもトロット楽団メンバーが勢揃いしていた。

ナツメツグ博士とマルガリータも来ている。

俺の姿に気付いたバナラはこちらに向き直り、俺は静かに彼に頷く。

しばらくすると、警官隊の包囲網の後ろからベルガモットを引つ立てたファーガスンがやって来て、彼は警官隊を代表して口を開いた。

「そこまでだ！　ダンディリオン！　お前の企みは、全てこいつから聞かせてもらった」
縄で縛られたまま別の警官に突き飛ばされたベルガモットは、転ぶように海岸に膝をつき情けない声を出した。

「ダンディリオン様……もうダメだ……。観念しましょう……」

涙を流しながらへたり込むベルガモットに、既にブラッディマンティス総帥の貫禄は無い。

ファーガスンたちの追及がよほど厳しかったのか、それともセイボリーとダンディリオンの制裁にでも怯えているのか……。

だが、そんなベルガモットに対し、ダンディリオンはただ冷たく見下すような眼差しを向けると、声に静かな怒りを滲ませながら口を開いた。

「……………ここまで役に立たない奴だったとは。お前のようなクズを拾ったのは、僕の最大のミスだ……………」

ダンディリオンの声には確かな怒気が含まれているが、彼の目には何の感情も籠っていない。

まるで、ベルガモットのことなど、目に入っていないかのように。

俺たちの存在など、どうでもいいかのように……………。

「ダンディリオン！ 目を覚ましてくれ！」

バナラは思わずといった様子で叫んだ。

バナラにしてみれば、コニーの前でダンディリオンがこういった言動をすることが許せないのだろう。

ダンディリオンを実の兄のように慕ってきた彼女の気持ちを何も考えず、向き合おうともせず……………。

しかし、ダンディリオンは片眉を上げ心外そうに返答した。

「僕は正気だよ。……………どうかしているのは、この国の方だ」

ダンディリオンは言葉が続けた。

「皆口クに扱えもしないのに、機械の進歩を自分の進歩だと勘違いしている。僕は機械が……今の時代が憎かった。機械が無ければ、チコリはあんなことにならなかつた……！」

チコリの名が出たことで、コニーは俯いた。

きつと、彼女も駅前広場で起きた悲劇を思い起こしていることだろう。

そんな彼女を尻目に、ダンデイリオンはまるで感慨深いことを想うかのように喋り続ける。

「初めてトロットビークルに乗ったとき、直感したんだ。これは人を魅了する、悪魔の力だ。そして、こうも思った。この力があれば、チコリの仇を討てる。僕は機械の力に……いわば悪魔に魂を売ったのさ。この国を滅ぼすためにね」

「むう……」

正直、ナツメツグ博士には聞かせたくない言葉だ。

息子同然に手厚く面倒を見てきた子が、自分の一番弟子が機械技術にそのような感情を抱いていたなど……博士の心中を思うといたたまれなくなる。

普段の博士なら即座に否定するところだろうが、相手はダンデイリオンで理由が理由だけに、博士にも掛ける言葉が見つからない様子だ。

「それで秘密結社ブラッディマンティスを作ったのか」

「そうさ。機械の開発には技術を持った組織が必要だ。彼らに様々な機械を作らせ、技術を高めていった。『グラランドフィナーレ』を建造するためにね！」

バナラの言葉に返答したダンディリオンの顔は、徐々に狂気を帯びていく。

きつと、当時のダンディリオンも暗い高揚感で同じような顔をしていたことだろう。

「そして、『グラランドフィナーレ』が完成した。街に爆弾を落とすところまでは上手くいったが……」

ダンディリオンは額に手をやると、瞳の妖しい輝きはそのままに歯噛みしながら表情を歪めた。

「空飛ぶビークルか……。しかし、僕は諦めないぞ……！！」

顔を上げたダンディリオンはさらに言葉を続ける。

「あのビークルを改良し、大量に生産すれば、この国を一度に火の海にすることができると！」

常軌を逸した野望を語るダンディリオンの顔は、最早まともな人間のものではなかった。

恍惚とした表情で演説し、自らの言葉に酔うダンディリオンは、最早コニーのこともナツメグ博士のことも目に入っていない。

「フフフ……どうだ？ この計画は？ 『グラランドフィナーレ』よりも復讐に相応しい

！」

皆、何も言えない。

ダンディリオンの事情を知る人間も、心に同じ傷を持つトロット楽団のメンバーも、狂気を湛えたダンディリオンとともに目を合わせることもできなかつた。

だが、次の瞬間……。

「ダンディリオン！」

突如、響いた鋭い怒号に、俺たちは一斉に振り向いた。

声の方向を見ると、そこにはいつの間にか拘束を解いたベルガモットの姿があつた。

呼吸も粗く引き攣つた笑みを浮かべるベルガモットの手には、金色の小型拳銃が握られており、その銃口はダンディリオンの方へ向けられている。

「さんざんクズ扱いしやがって！ 思い知つぎいやああああああああつ！」

俺は躊躇なく撃つた。

シオルダーホルスターから抜いたS&W M10でベルガモットの右腕に鉛玉をぶち込む。

ホルスターが型崩れしているせいで若干ドロウに手間取つたが、この距離で狙いを外したりしない。

俺の放った銃弾は完璧にベルガモットの肘を捉え、骨ごと奴の関節をぶち抜き、金色の小型拳銃を弾き飛ばした。

「こいつ！」

「大人しくするんだ！」

「あぎやあああああ！　ぎいええ……腕が……私の腕があああああ！」

後ろでは、痛みに喚くベルガモットがバジルや警官隊に押さえつけられている。

ダンディリオンとセイボリーは……無事だな。

……正直、危なかった。

展開を知っているとはいえ、『グランドファイナーレ』撃墜後は色々と立て込んでいたの
で、ベルガモットの武装解除まで気が回らなかったのだ。

未然に防げたのは、あくまでも幸運によるものだ。

「フンッ」

そして、ダンディリオンはのたうち回るベルガモットにただ冷たい目を向けている。

助けてやったんだから感謝しろとまでは言わないが、あまりにも無機質で無関心な雰
囲気は、何とも不気味で近寄りたくない。

だが……今のうちに確かめておきたいこともある。

俺はそんなダンディリオンのポーズに構わず声を掛けた。

「ダンディリオン、一つ聞かせろ」

「……………」

返答は無かったが、俺は無視して言葉が続ける。

「何故、コニーを助けようとした？」

「え……………」

俺の言葉に疑問を発したのは、他ならないコニー自身だった。

彼女も俺の視線を追うようにダンディリオンを見るが、未だに反応は無い。

俺はトロット楽団メンバーの疑問の視線に応えるように再び口を開いた。

「コニーが誘拐されたのは、ちょうどマーシユと同じタイミングだった。グランドフィナーレによる爆撃による総攻撃が開始されたのは、その直後のことだったな。奴らは随分とコニーの確保に躍起になっていたようだ。それこそ、直接的な復讐の対象であるマーシユと同じくらいに……………」

「……………」

「恐らく、コニーを戦火に巻き込まないようにと考えたのだろう。『グランドフィナーレ』の中なら、少なくとも爆撃からは一番安全な場所だからな」

「(そういうえば、さつきも…………)」

ダンディリオンが相変わらず沈黙を続けるなか、俺の説明に真っ先に反応したのはバ

ニラだった。

彼にも何か思う機会があったのだろう。

そして、俺は静かに自分の仮説を告げた。

「お前……コニーに許してほしかったんじゃないのか？」

「っ！」

俺の一言に、ダンディリオンは微かに体を強張らせて反応した。

コニーはまだピンときていないようだが、ダンディリオンの反応を見るに凶星だろう。

「復讐に囚われ続けることを、肯定してほしかったんだろ？ 認めてほしかったんだろ？」

「？」

「何を馬鹿なことを……」

「それとも、本当にチコリの死の責任が彼女にもあると思っているのか？」

「っ……僕は……！」

ようやく反応したダンディリオンの口から出たのは皮肉っぽい否定の言葉だったが、さらに畳み掛けるように詰め寄ると、険しい表情で口を結んだ。

その場にいる全員がダンディリオンを静かに見守る。

今だけは、いつも喧しいバジルですら言葉を発しない。

だが、そんな静寂は一人の声によって破られた。
「違う！ 悪いのは僕だ！」

129話 野望の終焉2

現れたのはマーシユだった。

松葉杖をつき、反対の肩を父親のセントジョーンズ卿に支えてもらいながら、警察ビークル隊の後ろから前に進み出てくる。

彼はミームー村に收容したはずだが……後ろにマインツとマツカートニーのビークルが見えるあたり、村の連中と父親に無理を言つて連れて来てもらったのだろう。

そして、俺たちのところまで来たマーシユは、荒い息をつきながらもはつきりと謝罪の言葉を口にした。

「ごめん……僕の、せいだ。全て……」

「いや、私が悪かったのだ。私が、我が子可愛さにあんなことを……。ダンディリオン、君には謝つても謝り切れない」

マーシユに続けてセントジョーンズ卿も謝罪の言葉を述べる。

突然の二人の登場に、無表情のダンディリオンを除いて皆が驚きや戸惑いの表情を浮かべているが……二人は繰り返しダンディリオンに頭を下げた。

正直、どんな言葉を掛けるべきかわからず、誰も口を挟む気にはなれない。

だが、そんな中……一人、静かに動き出す者が居た。

「マーシユ……」

絞り出すように少年の名を口にしたのはセイボリーだ。

先ほどまで沈黙を保っていた彼女はゆっくりと顔を上げると、燃えるような怒りを湛えた眼差しをマーシユに向ける。

彼女の中で蘇る憤怒はやがて血走った眼から全身の震えに至り……そして、セイボリーは唇の端から血が滲むほど強く歯を噛み締めた。

「あ、ああ………あああああああああ！」

セイボリーは弾かれたように地面を蹴って飛び出すと、数メートル離れた砂浜に体ごと飛び込んだ。

セイボリーの唐突な動きに皆フリーズしているが……彼女の目線の先にあるのは、ベルガモットが落とした拳銃だ。

彼女の持っていた銃は俺のライフルで木端微塵になっただけなので使い物にならない。

そして、金色の小型拳銃を手にしたセイボリーは、素早く銃口をマーシユの方へ向けて引き金を引く。

「がっ！」

だが、息を詰まらせるような声を上げたのは、マーシユではなかった。被弾したのは……セントジョーンズ卿だ。

彼は咄嗟にマーシユを庇い、自分が一歩前に出ていたのだ。

太腿を撃ち抜かれたセントジョーンズ卿は、脚を抑えてその場に崩れ落ちた。

しかし、激情に支配されたセイボリーの怒りは収まらず、半狂乱になって拳銃を振り回しながら捲し立てる。

「お前が!! お前がダンディリオンを壊したの! お前さえ、居なければ……!」

セイボリーは再びセントジョーンズ卿に銃口を向けた。

もう彼女には、誰を撃つたのか、誰を撃ちたいのか、その判断もついてはいないだろう。

俺は一歩出遅れたことを後悔しながらも、彼女を止めようとするが……突如、俺が右手に提げた拳銃が誰かに引つたくられた。

「ツ……マーシユ!」

横を見ると、マーシユが俺の拳銃をセイボリーに向けていた。

マーシユは崩れ落ちたセントジョーンズ卿の上着を掴み後ろに引っ張りながら、もう片方の手で震えながら銃を構えている。

自分のせいとはいえ、さすがに父親が一方的に殺されるのは看過できないことだろ

う。

必死の形相で銃を向け合うマーシユとセイボリー。

そして……海岸に乾いた銃声が轟いた。

「え……」

「っ……」

銃声と同時にセイボリーは崩れ落ちた。

だが、撃つたのはマーシユではない。

銃弾が来たのはもつと後ろからだ。

慌てて振り向いた俺たちの目に飛び込んできたのは、警察官の一人が硝煙を上げるリボルバーを構えた姿だった。

「お前は……」

「っ！」

後ろから微かにダンディリオンの驚愕の声が聞こえてきた。

そんななか、俄かに騒がしくなった警官隊にファーガスンが怒号とともに指示を飛ばす。

「くっ、馬鹿者！ おい、あの二人を確保「違う！ ファーガスン、そいつだ！」え？」

俺はファーガスを遮るようにして、先ほど発砲した警官を示し叫んだ。

しかし、当然ながら警官隊とファーガスの戸惑いがこの短時間で収まるはずはなく、奴にはさらなる凶行を許してしまう。

先ほど発砲した警官姿の男は、銃を下ろさせようとした隣の警官を張り倒し、ダンデリオンにも銃を向け発砲した。

「ぐ……」

「つー！ まさか……」

「貴様……」

この段になると、ファーガスや周りの警官たちも気づいた。

あの男は警察官の恰好こそしているが偽物だ。

警官隊に紛れて潜入したヒットマンだった。

さらに、発砲した偽警官は続けてベルガモットに銃を向けようとしていたが……そこで男の体は銃弾に貫かれた。

「グウ……」

「……ファーガス」

見ると、ファーガスの手にした自動拳銃から微かに硝煙が上がっている。

俺がライフルを構えて発砲するより一瞬早く、ファーガスがヒットマンの男を撃ち

倒したのだ。

撃たれた偽警官は寝返りを打つように地面を転がったが、やがて諦めたのか手から力が抜け、拳銃を取り落とした。

「……まさか、こいつも『ブラッディマンティス』の人間なのか……?」

「ああ……十中八九、そうだろうな。口封じのために送り込まれた死刑執行人だろう」
「そうか……」

そして、現場が慌ただしく混乱するなか、胸の中心をファーガスンに撃ち抜かれた男は苦し気に声を絞り出した。

「げはっ……コンフリー様……申しわ、け……」

「……コンフリーは逃げたぞ。まったく……」

手引きしたのはあいつか……。

恐らく、コンフリーがこいつに指示を出したのは『グランドファイナーレ』が飛び立つ前、俺とコンフリーがホトトギスの森でやり合う前だろう。

当の本人はとっとと逃げ出す準備をしていたというのに、こんな置き土産まで残していくとは……まったく、厄介な野郎だ。

「ダンデイリオーン!」

「セイボリー！」

悲鳴のようなトロット楽団メンバーたちの声に、俺は慌てて振り向いた。

そちらへ視線をやると、バナラとコニーのみならず、全メンバーにマルガリータとナツメツグ博士まで、ダンディリオンとセイボリーのもとへ駆け寄っていた。

確かに、あのヒットマンはダンディリオンとセイボリーに発砲していた。

俺も慌てて皆の元へ駆け寄るが……その様相に思わず顔を顰めるのを止められなかった。

「ダンディリオン！ おい！ しっかりせい！」

「うわああああ！ セイボリー!!」

ダンディリオンとセイボリーは明らかに致命傷となる場所に銃弾を受けていた。

出血もひどい。

二人はナツメツグ博士の呼びかけにも、バジルの喧しい声にも反応しない。

「セイ、ボリー……」

「ああ……ダンディリオン……」

掠れた声でお互いの名前を呼ぶと、確かにその存在を感じ取ったように穏やかな表情を浮かべた。

もう、二人はまともに目も見えていないのかもしれない。

やがて、セイボリーはゆっくりと口を開く。

「…………ごめんなさい、ダンディリオン……。私……頑張ったけど……あなたの役に、
……立てなかった……」

悲痛な言葉だが、それとは裏腹に彼女の声にはどこか満足げな感情が垣間見える。

彼女の言葉がダンディリオンに届いているのかはわからない。

だが、セイボリーは構わず言葉を続けた。

「あなたと会えて……あなたが居るこの国に生まれて……あなたと同じ街で暮らせて
……幸せだったわ……」

そして、セイボリーは俺たちの方へ顔を向け、特にコニーを真っ直ぐに見つめ、苦し
気に口を開いた。

「……ねえ、みんな。ダンディリオンを、赦してあげて」

「え……?」

「ダンディリオン……こんなに苦しんでるのよ……。可哀想じゃない……」

思わず聞き返すコニーに、セイボリーはしっかりと目を向けて、懇願するように囁い
た。

今、彼女の目には俺たちの姿がどう映っているのか。

それを知る術は無く、俺たちの反応もきちんと伝わっているかはわからない。

だが、セイボリーはフツと穏やかな表情を浮かべて呟いた。

「よかった……」

「……セイボリー」

そして、ダンディリオンの彼女を呼ぶ声に、セイボリーは静かに満足そうに眼を閉じ、脱力した。

それ以上、二人の言葉を交わすことをせず。

もう、彼女の目は開かない……。

「コニー……」

弱弱しく、しかしはつきりとしたダンディリオンの声を通り、皆は彼の方へ向き直る。

一言一句、聞き逃すまいとするかのように、俺たちは彼の言葉に耳を傾けた。

「新しい……最後の曲だ……ゴホツ……よかったら……詞を付けて、くれ」

ダンディリオンが取り出したのは、折りたたまれたフルパートのスコアだ。

真新しい紙だが、その楽譜には微かに血が滲んでいる。

何故、ダンディリオンが最後にこれを持ち歩いていたのかはわからない。

野望が潰えることを予見していたのか、音楽家としてこれだけは手放せなかったのか

……だが、最早その真意を聞くこともできないだろう。

震える手で譜面を受け取ったコニーは、それをかき抱くようにしつつはつきりと頷

く。

そして、ダンディリオンも微かに満足そうな笑みを浮かべた。その顔には、最早怒りに満ちた狂人の片鱗は無かった。

「ツゴホッ！ げはっ、ゴフ……」

激しく咳き込むダンディリオンに、俺は思わずダンディリオンの体を傾け横を向かせた。

この方が血を吐き出しやすく、息が詰まりにくい。

「っ……いいんだ、グレイ……。どうせ……。もう、助からない……。くふっ……」

「ダンディリオン……」

俺の存在を確かに感じ取ってくれたダンディリオンの言葉に、思わず胸が痛む。

俺は……。こうなることがわかっていた。

ダンディリオンが止まらないことを知っていた。

最悪、俺自身が手を下すことも考えていた。

だが……。こうして志半ばで死へ向かうダンディリオンと接すると、自分の判断の全てを否定したい気分になって来る。

思えば、俺は彼に何もしてやれなかったな。

彼も思い入れのあるキャラクターには違いないのに、彼の気持ちも理解していたのに……。

「……楽器工房長ダンディリオン、国家反逆罪の現行犯で逮捕する」

そんななか、こちらへ近づいてきたファーガスンがダンディリオンに告げた。

彼も無慈悲なわけではなく、人柄を鑑みる限り逮捕数や検挙率のために手続きを急いでいるわけではない。

ただ、このまま野垂れ地にさせるような状況に対して、彼なりに思うところがあるのだろう。

しかし、ダンディリオンは緩慢な動作で顔を上げると、申し訳なきように懇願する。

「ケホ……すみません……もう少し待ってください。あの夕日が沈むまで……」

ダンディリオンの手が空中を泳ぎ、何かを掴むような動作をする。

まるで、大切なものを探し求めるかのように……。

彼の意図を感じ取った俺は、ダンディリオンの腕を自分の首に回し、肩を貸して立ち上がった。

「グレ、イ……?」

「……………」

俺はダンディリオンをセイボリーのところまで運ぶと、彼の体を砂浜に横たえた。

そして、セイボリーと肩を寄せ合うように並べ、お互いの手を握らせる。

今の俺に出来るのは……これくらいだ。

「ありが、とう……」

「……気にするな、兄弟子殿」

既にセイボリーの手は冷たくなっているかもしれない。

ダンディリオンの手に感覚は無いかもしれない。

だが、最後にダンディリオンは俺に礼を言い、穏やかな表情で目を閉じた。

そして、夕日が沈んだ後、ダンディリオンの手に手錠が掛けられ……二人の遺体が収容された。

警官隊が撤収作業を進めるなか、俺は微動だにせずウミネコ海岸の沖を眺めていた。

月明かりが照らす海面は静かに波音を立て、入り江には座礁したジュニパーベリー号

の残骸が見える。

先ほどまで、あれだけ派手な戦闘と殺戮があつたというのに、海の様子は至って穏やかだ。

「グレイ？ 何してるの？」

「ん……ああ」

俺は後ろから掛けられた声に振り向いた。

そこに居たのは、例のよつてマルガリータだ。

彼女の様子はいつも通り……彼女だけは、いつもと変わらない。

「……何か悩んでる？」

「……………」

俺は思わず言葉に詰まった。

兄弟子のダンディロンが犯罪組織の首領でセイボリーもその組織のナンバー2。

そして、二人が死んだ。

悲しいとか、そんな次元の話じゃない。

そして、できるだけ思い入れのあるキャラを救いたいという、俺の目的も……。

もちろん、そういうった事情をマルガリータは一切知らないわけだが……俺は何故か愚痴るように彼女に心情の一端を打ち明けていた。

彼女の言葉は、何故か俺の心の奥にスルツと入り込んでくるのだ。

「救えなかった……いくら処刑だからといって……」

物語のラスボスであるダンディリオン。

彼は常にチコリの復讐という戦いの中で生きてきた。

戦いの中で死ねたことは、極刑に処されるよりもいい死に様だったか。

セイボリーと一緒に逝けたことは、辛い別れを強いられるよりマシだったか。

だが、結局は救えずに……彼は死んだ。

そもそもセイボリーが死ぬのも、ノーマルルートだけのはずだった。

ブラッディマンティスを土壇場で裏切るルートなら、ベルガモットを倒して一連の事

件は解決だった。

もちろん、ダンディリオンとセイボリーの所業が明るみに出なければ、二人は水面下

で次の陰謀を実行に移すだろうし、バナラをブラッディマンティスに潜入させるなんて

真似もできやしない。

しかし……もつといい方法があったのではないか？

原作を知る俺なら、二人とも救う術があったのではないか？

終わってみれば、そんなことばかり考えてしまう。

「……ねえ、グレイ」

俺がしばらく沈黙を保っていると、マルガリータはツカツカとこちらに近づいてきた。

目の前で立ち止まったマルガリータは、ゆっくりと俺の首に手を回すと、艶のある笑みを浮かべて顔を近づけて来る。

そして……。

「ぐほっ！」

突如、胸を襲った衝撃に、俺は息を詰まらせながら悶絶した。

直前に見た光景は、顔を近づけるマルガリータが急加速して……どうやら、鳩尾にヘッドバットを食らったようだ。

何だか、前にも似たようなことがあったような……。

「すっかりしなよ！ あんたはもつと、飄々として、強がりで、抜け目なくて……自信に満ちた奴じゃないか！ いつもの余裕は、何でも見透かした感じは、一体どこ行ったんだい？」

「……………」

「今回は残念だったけどさ……あんたは原作の悲劇をいくつも阻止してきたじゃない」「まともに救えたのはポールくらい……え？ 原作……？」

頭上から掛けられたマルガリータの声に、俺は蹲ったまま反論した。

しかし、途中でマルガリータの言葉のおかしな点に気付いてしまう。

彼女は確かに原作と言った。

……どうということだ？

怪訝な表情で彼女を見つめていると、マルガリータは「しまった！」と言いたげな表情で口を押え、そして顔を背けながら呟いた。

「博士から、ね……」

「……そっか」

なるほど。

全て合点がいった。

マルガリータがヤケに訳知り顔だったり、俺のおかしな点に寛容だったりしたのは、そういった事情がある程度知っていたからか。

勝手に情報を漏らした博士はともかく……何故か俺の心はスツと軽くなっていた。

長年の悩みが一つ解決したような、しこりが取れたような感じだ。

俺は……どこかで彼女に拒絶されるのを恐れていたのかもしれない。

だから、あまり自分を語ったりすることはなく、全てを曝け出せない気がしていた。

だが少なくとも、俺の異質さに関してには彼女にとって問題ではなかったわけだ。

あまりにも軽いやりとりと彼女の反応に、何だか肩透かしを食らった気分だ。

しかし、姿勢を正したマルガリータは、俺を真っ直ぐに見つめるとはつきりとした口調で言葉を続けた。

「バナラから聞いたよ。グレイが居なかつたら、どうなっていたかわからない。あんたは恩人だつて。東の山岳地帯の盗賊のこともそう。あいつらが討伐されたおかげで、牧場もミームー村の連中も喜んでるじゃない。それに、巨大魚で死んだ村の奴らの仇も取ってくれて……。あれ以上放置されていたら、犠牲はもつと嵩んでいたからね」

「マルガリータ……」

「あんたが危ない目に遭うのは嫌だけど……それだけ、あんたは人を救ってきたんだよ。凄いことをしてきたんだよ。だから、もつと……誇りなよ……」

「……そうか。ディープアングラーをバナラから横取りしただけの価値はあつたな」

いつの間にか、マルガリータは俺の胸に顔を埋めていた。

……彼女には、色々と心配をかけてしまった。

だが、最後には俺の成したことを褒めてくれた。

今は……それだけで十分だ。

俺は彼女をそつと抱き寄せた。

そして、帰りの足が無い博士が痺れを切らして呼びに来るまで、俺たちはそのまま抱き締め合った。

130話 出航

ウミネコ海岸での死闘から数日。

俺たちの姿はスームスームにあった。

この街は少し前に『ブラッディマンティス』の潜水艇と強襲部隊に攻撃されたはずだが、その名残は港の数か所で行われている補修工事くらいで、波止場の各所では大量の漁船や輸送船が入りし荷物の積み下ろしが行われている。

数日前に大規模な戦闘に巻き込まれたとは思えないくらい、街の様相はいつも通りだ。

こんなに早く復旧が進むとは、さすがはスチームパンクなビークル世界だな。

そして……スーム海浜公園近くの停泊所には、再建されたジュニパーII世が堂々とした姿で鎮座していた。

ブラッディマンティスがマーシユを襲撃した際、新造されたジュニパーII号II世は防衛艦隊の先陣を切って迎撃に当たり、結構な損害を受けたと聞いているが……見たところ船体に目立った傷は無い。

「ほぼ新品状態じゃないか。ここまで修理するには、相当な資材と人手が必要だったはずだが……頑張ったな」

「当たり前だ。街の恩人たちをボロ船で追い出したりはしない。私を誰だと思っている？」

船を見上げつつ呟く俺の一言にツッコミを入れつつ現れたのは、この街の支配者であるドン・スミスだ。

相変わらず、無口（猫かぶり）な孫娘クラリスの押す車椅子で、偉そうに手を組んで不機嫌そうな表情を浮かべている。

まあ、ドン・スミスとスームスームにはブラツディマンティスとマーシユ関連で色々迷惑を掛けてしまったことだし、ここは少し下手に出しておくか。

「御見それしやした、ボス」

「ふんっ。虫唾が走るな」

相変わらず、口の悪い爺さんだ……。

そんなやり取りをしている間にも、スーム海浜公園には続々と人が集まって来ていた。

俺との付き合いが長い連中も居れば、ほとんど話したことが無い者も居る。

身分も、立場も、住む場所も、何もかもバラバラ。

ただ、全員に共通するのは……この短い期間でバナラと知り合い、決して少くない影響を彼から受けてきたことだろう。

そう、今日はジュニパーベリー号Ⅱ世の出航日……バナラを見送る日だ。

積荷の搬入作業を進めるジュニパーベリー号Ⅱ世の停泊エリアには、俺とドン・スミス以外にも大勢の人間が集まっている。

ピジョン牧場からはナツメグ博士にオットー・ウィーリー兄弟。

当然、マルガリータも俺と一緒にだ。

「まったく……随分と遠出をさせてくれたものじゃ。長旅は体に響くわい」

「ウィリーー！ この広大な海に爽やかな風！ 次はここで「フラップフライヤーⅡ世」を飛ばしたいものだな！」

「うくん、でもこの水深だと墜落したときの回収が大変……まあ、どうにかなるか！」
「ハア……懲りないねえ、あんたらも」

年寄りくさい文句をぶー垂れる博士も、空気の読めない飛行兄弟とそれに呆れるマルガリータも相変わらずだ。

そして、トロット楽団メンバーからはマジヨラムとバジル。

意外にも、フェンネルが顔を見せており、彼はタラップの影あたりで静かに一人佇ん

でいた。

「ついに出航か……。もう積荷の搬入もほとんど終わっているみたいだね。あとは船倉内の収納作業とビークルが乗り込むだけかな」

「バナラも中に居るんだよね！ どの辺かな〜？」

「おい……。あんまりはしやぐな」

腰抜けジミーに……。さらに、どこから聞きつけたのか、ネフロ闘技場の支配人ディーノまで居やがる。

「バナラ君、来年のトーナメントは来れるのかな……。う」

「う……。う……。ダメよ、泣いちゃ……。笑顔で、見送らないと……。ぐすつ……。うわぁーん！」

ジミーはともかく、ディーノと関わってもいいことは無さそうなので無視だ無視！

彼らの後ろには、控えめにマーシユも顔を出していた。

どこことなく居心地の悪そうなマーシユだったが、俺はディーノと目を合わせないようにしてマーシユに声を掛けた。

「マーシユ、セントジョーンズ卿の具合はどうだ？」

「ああ、グレイさん。父も大分良くなりました。まだ、しばらくはベッドで安静ですけどね。……。本当は、お父さんもバナラの見送りに来たかったみたいで、残念がっています

たよ」

「そうか。まあ、撃たれたのが脚だったのは、不幸中の幸いだな。しばらくは杖をつけて生活することになるだろうが、いずれは回復する怪我だ」

「そうだね……」

さらに珍しいところでは、デザートホーネット団首領ノーラにキラエエレファント団の親分まで来ている。

仕事柄、彼らが表に出てくることはまず無いのだが、今日は特別らしい。

しかし、二人の装いや振る舞いは対照的だ。

「何だい？ そんなに睨まなくなつて、もう余所様の街で妙な真似はしないよ。知り合いに挨拶したら、すぐに消えるさ」

「ガツハツハ！ グレイ、またバトルしようぜ！」

顔を隠して変装したノーラは、一見したところ単独で護衛も少し離れた位置に待機させており、街の中では目立たないように行動している。

それに対して、キラエエレファント団親分はいつも通りのアウトローな服装で、煽情的なお付きのメイドを二人侍らせ、堂々とスームスームに来たようだ。

警察とブラッディマンティスの両方に追われるノーラは当然として、このキラエエレファント団親分は豪胆というか型破りというか……。

何はともあれ、こんな具合にバナラと親交のある面々が集まりカオスな空間を形成しているわけだ。

立場も、彼との出会い方も、関係性もまちまちだが……皆バナラの旅立ちを哀しみ、応援し、笑顔で見送るために来ている。

「やあ、皆来てくれたんだね」

俺たちが思い思いに仲間内で喋りながら駄弁つっていると、やがて新生ジユニパーベリー号からバナラが降りてきた。

タラップを降り俺たちの前に姿を現したバナラは、波止場に集まる人数の多さに一瞬だけ目を丸くして頭を掻いた。

「仲間たちに挨拶してこいつって言われてきたけど……何だか、気恥ずかしいね。こういうのは……」

どうやら、ビークルの搬入作業などが一段落したタイミングで、キャプテンシブレットがバナラを休憩に入らせたようだ。

粋な計らいだな。

そして、バナラは周囲に群がる知り合い連中に適当に応えつつも、その視線はどこか落ち着かない様子で彷徨っていた。

「バナラ、本当に行つてしまふのかい？」

バナラを囲む面々が一通り挨拶を交わし終えると、マジヨラムが疑問を投げかけた。「うん。実は……前のジュニパーベリー号で僕たちの雇用契約があつてね。乗船料金の分は船で働いて返すつて話だつたんだ。アルバトロス港からこの国までの航海は数か月……真面目に働けばギリ足りるつて。でも、スームスームに着く前に船は沈んじやつたし、契約分には少し足りないね」

マジヨラムの質問にバナラは苦笑しながら頷いた。

これだけ聞けば、未成年の少年を騙してクソな契約を結ばせ、卑劣な搾取をしているような話だが……。

「確かに、僕も働き次第ではお父さんに顔を見せたらまたすぐ出発だと聞いたよ。ちよつとお金で解決できないか考えていたけど……」

「キャプテン曰く、契約の件はほとんどハツタリだつたらしいけどね。それでも言われなきや、マーシユはまともに働かなかつただろ？」

「うっ！ 否定できない……」

まあ、あの情に厚い船長なら、バナラたち相手にそんなアコギな真似はしないだろうな。

きつと、マーシユを親元に送り届けたら、そのまま船を下すつもりだつたに違いない。

事実、マーシユは今回の出航メンバーには入っていない。

「だけど、それならバナニラも前の契約にこだわる必要は無いんじゃない？ その時の船だってもう無いんだしき」

「うん、そうだね……。でも、僕は行こうと思う」

バジルのやや無神経な言葉に、バナニラは若干苦笑いを浮かべながらも、はつきりと宣言した。

バジルやディーノは「コニーを置いて……」だの「何故？」だの捲し立てているが、バナニラはどこか遠いところを見つめるようにしてから視線を正面に戻すと、噛み締めるように口を開いた。

「約束は大事だから。破っちゃいけないものだから」

「……コニーがそう言ったのか？」

「まあね……」

俺は思わず疑問をぶつけたが、バナニラはどこかはぐらかすように答えるだけだった。彼の表情を鑑みるに、きっと二人の間では砂糖を吐きたくなる会話が交わされたに違いない。

「おいおい、そんなことでコニーの嬢ちゃんを諦めるつてのか？」

「一回くらい、問題ないと思うけどねえ……」

ついには、ここまで黙っていた飛行兄弟まで口を出してきた。

早合点と暴走がお家芸のオットーに、お気楽でいい加減なウィリーは本当によくできたコンビだ。

「そうだね。口実だね。確かに、シブレットやジュニパーベリー号のみんなとの約束を破るのは……守れる約束すら反故にするのは、絶対にコニーも喜ばないと思う。でも、それだけで距離を取れるほど、僕にとってコニーの存在は軽くない」

「だつたら何でさ……」

バジルは若干ヒステリックな表情で俯ぐが、バナラはバジルを正面から見返すと、穏やかながら力強い声で言葉を紡いだ。

「思い出したんだ。外洋を巡るために、マーシユと一緒に船に潜り込んだこと。もっと広い世界を見てみたいって思ってたこと」

旅に出る系の話なんてのはありがちだが、このビークルによって漸く発展し始めた世界において、自分の周りというのはやはり狭いものだ。

大きく環境を変えなければ知ることができない国や大陸なんてのは、世界中にいくらかもある。

「コニーは……やっぱり諦めてほしくないって」

「そうか」

まあ、何にせよ、バニラとコニーの間にそういうやり取りがあったのだろう

正直、ただ辛いことを思い出さないためにお互い距離を取ろうって話なら、止めてやろうと思っていた。

ネガティブな理由で大切な存在を離れる選択をすると、大抵の場合は後悔するからな。

だが、どちらかに前向きな理由があるなら耐えられる。

俺のような根性ナシが定着してしまった人間はともかく、バニラたちはまだ若い。

時間は十分にあるはずだ。

バニラの出立は突然のことで、送別会どころか食事会すらまともに催すことができなかったが、せめて笑顔で見送ってやろうと思う。

それが、俺たち『ただの友人』に出来る唯一のことだ。

「ところで……」

俺はトロット楽団メンバーを見回して口を開いた。

「肝心のコニーは見送りにこないな。(呼んでもいない) デイノはいるのに……」

「あつ、僕探してくるよ!」

そう言うのと、バジルは波止場から勢いよく走り去った。

近くを見て来るつもりのようなのだが、心当たりなど無さそうなあたり期待はできないだろう。

「マジヨラムたちと一緒にじゃなかったのかい？」

「うん……何か用事があるとかで、出発は別だったんだ。どうしたのかな……？」

バナラは平静を装っているようだが、先ほどからちよくちよく視線を彷徨わせてソワソワとしている。

まあ、いくら決意をしたところで、ガールフレンドの姿が見えないというのは何となく不安なものだろう。

だが、そんな困惑と若干張り詰めた空気は、一人の男？によって盛大に破壊された。

「う、うう……」

「ん？ デイノー？」

先ほどまで済まし顔でバナラの門出を祝福するようなことを言っていたネフ口闘技場の支配人は、突如大粒の涙を流して泣き出した。

「うわあーん！ バナラちゃん！ 何で……何で行っちゃうのお！ 嫌よく……嫌あ……！」

彼が変人且つオネエなのは周知の事実だが、あまりにもオーバーなアクションに皆が啞然としてデイノーを見る。

特にノーラの目が異常に冷たい。

だが……ディーノのおかげでしんみりとした悲し気な空気は一気に霧散していた。

まあ、髭面のオツサンに縋りつかれたバニラは若干気の毒だが……。

「おーいおいおいおいおい！」

「ハハ……困ったね……」

しばらくすると、息を切らしたバジルが走って戻ってきた。

搜索の結果は、彼の表情を見れば聞かなくてもわかる。

「ダメだ！ コニー、どこにも居ないよ！」

「おかしいな……一体どこへ……？」

バジルの言葉に、マジヨラムは顎に手を当てて考え込んだ。

マジヨラムにしてみれば、最後にコニーと会わせてやりたいというのが個人的な想いであろうが……。

「そっか」

しかし、バニラは予想外にあっさりした表情だった。

微かに落胆の色は見えるものの、それほどコニーの不在を気に病んだ様子は無い。

「で、でも！ ちょうどよかつたんじゃない？ ここでコニーと会ったら、決意が揺らぐ

かも……。直前で『行かないで』なんて言われたりしてさ……」

言い方え……。

相変わらず、バジルは口を開くたびロクでもないことを吐きやがる。

「確かに、コニーの頼みは断れないからなあ……はははっ」

だが、バニラはバジルの言葉を軽く受け流し、屈託ない笑みを浮かべた。

惚気まで投下していくとは……なかなか、手強くなつたものだ。

そんな会話をしていると、やがて船のタラップの方から一人の女性が降りてきた。

「まもなく出航だ」

「はい、キャプテン」

ビシツとした船長服に身を包み、帽子を被つて直鞭を持ったキャプテンシブレットは、言葉少なくバニラに告げた。

一瞬で表情を切り替えたバニラは、背筋を伸ばしてシブレットに応える。

そして、バニラは俺たちの方に向き直ると、最初にあつた頃より幾分か遅しくなつた表情で口を開いた。

「皆、お元気で」

スーム海浜公園の停泊所を出航したジュニパーベリー号Ⅱ世は、やがて船首を外洋側へ向けると、蒸気機関の推進力を利用して徐々に加速していった。

あのまましばらく沖へ進み、外海でいい風を見つけたら帆を開くのだろう。

俺たちはしばらく洋上を行く船の後ろ姿を見送り、手を振っていた。

「行っちゃったね……」

船上のバナラたちの顔が見えなくなったあたりで、波止場に集まった面々は徐々に動き出す。

バジルの声を皮切りにして、俺たちは各々帰り支度を始めた。

物々しい連中が迎えに来たドン・スミス一行とは対照的に、ノーラはいつの間にか姿を消していた。

そして、マーシユやトロット楽団メンバーに軽く挨拶した俺は、マルガリータに声を掛けた。

「帰ろうか。俺たちの家へ」

「うん、そうだね」

俺たちは、どちらともなくお互いの手を取って歩き出した。

できればこのまま少しスームスームを観光でもしていききたいところだが……博士を放置するわけにもいかないか。

だが、いずれは彼女とどこかに出かけるのもいいかもしれない。

もう、忙しい闘いの日々は終わったのだから……。

「ん？」

「? どうしたの、グレイ？」

マルガリータは立ち止まった俺に反応し、同じ方向へ視線をやった。

その先にあるのは、市街地の中心から少し離れた位置にあるホエール岬灯台。

しかし、マルガリータには特に何も見つからなかったように僅かに首を傾げた。

「いや、何でも」

「そう」

俺の返答をマルガリータは特に気に留めず、俺の手を引いて再び歩き出した。

それ以上、俺が灯台の方を見ることもなかったが、問題ない。

確かに、灯台の入口辺りにピンクの帽子が見えたから……。

第3章 エンディング後

131話 結婚式1

寝ぼけ眼のマルガリータの頬にキスをしてベッドから起き出し、シャワーを浴びて身支度を整えた俺は、例によってナツメツグ邸のキッチンで朝食の準備を始めた。

スパニッシュオムレツとキノコのスープを用意しながら、ふと新聞を手にとってみると、先日摘発されたブラツデイマンティスの倉庫のことが載っていた。

第一面には警察ビークル隊が現場を制圧した直後の写真が掲載されており、ガーランド警察のフーガスン警部もコメントを寄せている。

「……大活躍だな」

『グランドフィナーレ』の撃墜とダンディリオンの逮捕により、ブラツデイマンティスによつて引き起こされた一連の事件は一応の解決を見た。

その後、ネフロおよびガーランド警察は各地にビークル部隊を派遣し、ブラツデイマンティスの残党狩りを開始した。

兵器保管庫、補給所、アジト、情報収集拠点……ありとあらゆるブラツデイマンティ

スに関連する施設を襲撃し、根こそぎ壊滅する勢いだ。

俺もファーガソンの要請で何度かブラッディマンティスの残党処理に同行し、アジトや倉庫の制圧に協力している。

……警察の上層部からすれば、俺が残党狩りに参加するのは面白くないだろうな。

今回の一件、最終局面でブラッディマンティスの陰謀を阻止したのは、『グランドフィナーレ』を落とした俺やオットーにナツメッグ博士……そして黒幕であるダンディリオンを倒したのは他でもないバナラだ。

少なくとも、ネフロやハッピーガーランドの警察が事件解決に直接寄与した部分は決して多くない。

何より、一連の騒動の背景にあつた思惑といえば、そこにあつたのはダンディリオンの悲劇と復讐。

マスコミも権力者も司法もハッピーガーランドの住民も……全員が目背けたい出来事だったことだろう。

警察が今になってブラッディマンティスの壊滅と実績アピールに躍起になるのも、それに阿るマスコミの姿勢にも、俺の個人的な感情面はどうあれ納得がいくというものだ。

とはいえ、向こうも俺のナツメッグ博士の直弟子という立場を鑑みれば、犯罪組織の

壊滅に協力しているこちらに下手なことは言えず、ファーガスンはじめ現場の人間が俺のビークルの腕を頼りにしているのも事実。

なかにはダンディリオンの所業を理由に俺やナツメック博士ひいてはトロット楽団メンバーを攻撃しようとした連中も居たようだが、そういう手合いはセントジョーンズ卿に封殺された。

現状、俺としては……ビークルと立場を最大限に活用し、ビジネス基盤や軍警察との信頼関係の構築を少しでも進めていくだけだな。

人脈イコール利益になるとは限らないが、経済的・軍事的な繋がりは上手く使えば自分を守る力になる。

妙な連中に手を出されないようにするためにも、セントジョーンズ病院との取引は続け、盗賊討伐と闘技場のバトルにもちよくちよく顔を出し続けようと思う。

それに、ブラッディマンティスの残党狩り自体も、何も悪いことばかりではない。

連中は莫大な資金力と情報網に物を言わせ、ビークルパーツだけでなく小銃や拳銃に至るまで、強力な軍用の武器をしこたま溜め込んでいるのだ。

俺は討伐作戦に参加しつつ、奴らの物資や武器をちよいちよい失敬してやった。

元より、大半の討伐作戦は民間の賞金稼ぎやビークル乗りも参加するだけあって、押収品の所有権は一部を除いて仕留めた者にある場合が多い。

余程の危険物や軍事機密に関わる代物でなければ、多少のちよろまかしは許されるし、警察としても追加報酬を要求されるより現物支給で満足してもらえる方がマシと
いったところだろう。

マルガリータは俺の討伐作戦への参加にあまりいい顔をしないが、珍しい品やパーツ
を持つて帰つて来れば少しは機嫌を直してくれるので、彼女が本格的にへそを曲げない
範囲で今後も小遣い稼ぎをさせてもらおうと思う。

あとこれは余談だが、ブラッディマンティスは脱獄計画も練っていた。

ダンディリオンは獄中からの逃走なども想定していたようで、ブラッディマンティス
のアジトからは護送ビークルのルートに関する情報が押収され、この国の各地の留置所
の構造と周辺の地形に脱走経路についても調べていた痕跡が発見された。

さらには陸路および海路による国外への逃走ルートや、国境付近の中継拠点の存在ま
で明らかとなった。

恐らく、ダンディリオンの企みが早い段階で明るみになる可能性、もしくはブラッ
ディマンティスの末端やエルダーとしての身分から出た情報が自分に紐づけられた場
合を想定してのことだろうが……正直、ダンディリオンがそんなネガティブな状況を想
像していたのは意外だったな。

チコリの復讐に囚われていたダンディリオンは、最早自分が破滅してもこの国を道連れにすることしか考えていなかったはずだ。

しかし……裏を返せば、今回の『グランドファイナル計画』が失敗したとしても、諦めずに再起するつもりであったと見ることもできる。

ある意味で、復讐に全てを懸けた彼らしい思考かもしれない。

ダンディリオンの執念とブラッディマンティスの技術力や規模を以つてすれば、逮捕されても死刑判決を受けた直後に逃走し、またテロや爆撃事件を起こしていた可能性も否定できない。

原作ではそこら辺の詳細がどうだったのかわからないが……もしこの世界だけの展開であつたのなら、彼がウミネコ海岸で命を落としたことで、第二の陰謀を阻止できたということになる。

俺が、ダンディリオンを死に追いやつたからこそ……最悪の展開を避けられた。あまり後味の良くない話だ。

「おはよう、 그레이」

「おはようございます」

しばらくすると、食堂にナツメツグ博士が降りてきた。

メインの皿がまだ完成していないので、とりあえずトーストとジャムを出して紅茶を淹れる。

「今日は……二人とも出るのだったな？」

「ええ、ネフロでドレスの注文をしに行くので」

何の話かといえば、結婚式の用意だ。

もうすぐ、俺とマルガリータの結婚式が執り行われる。

場所はここピジョン牧場で、近所の親戚と友人たちを招待し、神前式を挙げる予定だ。既にマルガリータとは一緒に暮らしているし、今更改めて式だの披露宴だのと言われると、少し気恥ずかしい気もするが……女性にとつては一生に一度の晴れ舞台だ。

当のマルガリータは恥ずかしくてツンツンな態度だが、花嫁やウエディングドレスへの憧れは年相応にあるようなので、本気で嫌がっているわけではないだろう。

それに、やはり男としてのケジメというか、そういう俺自身のプライドの部分もある。何だかんだ言っている内に、ミームー村やピジョン牧場のお節介なおばさんたちのお膳立てもあり、会場の準備も目処が立った先から式の日取りも決まった。

まさに外堀を満遍なく埋められている状況だ。

「……何か、すみませんね。こんな時に自分だけ……」

ダンディリオンとセイボリーがウミネコ海岸で亡くなった後、二人は国家反逆罪の有

罪判決を受けた。

所謂『被疑者死亡のまま書類送検』というやつに近いが、被告人が死んでいても明確な判決が下される点は、日本と違いなかなか容赦が無い。

判決が出たからといって何かメリットがあるわけでもないのだが……まあ、端的に言つて司法側の都合は、裁いたという事実が欲しいだけだな。

しかし……世間にはロクでもない連中が居るものだ。

二人と近しい関係にあつたトロット楽団の面々は、一部のクズに心無い言葉を掛ければ、強請りまがいの接触もあつた。

本来、賠償責任は当事者のみに帰属し、血縁者ですらその責を問われることは法的に無いのだが……あわよくば掠め取ろうというハイエナはどこにでも居る。

皆、ダンディリオンとセイボリーの件で傷つき憔悴している。

ここ数週間はなかなかハードな日々だった。

正直、自粛大好きな日本人としては、この時期の祝い事というのは若干気が引ける思いだ。

しかし、博士は俺の言葉に頭を振つた。

「いや。こういう時だからこそ、皆めでたい話に飢えておる。このタイミングでお前さんたちの結婚を祝うのは、あいつらにとつてもいいことじゃ」

「……………」

ダンディリオンたちの件で打ちのめされているのは博士も同じだ。

他の皆より大人だから落ち着いて見えるだけで、彼も深い哀しみに囚われていることに關して例外ではないのだ。

しかし、今はそんな年長者の言葉がありがたい。

博士の言う通り、少しでも陰鬱な空気を払拭することに役立つのであれば、俺たちが率先しておめでたいイベントを主催するのも悪くないな。

バナラを呼べないのは残念だが……。

「のう、グレイ……」

そんなことを考えていると、ナツメツグ博士は俺を真つ直ぐに見据えて口を開いた。

「マルガリータのこと、幸せにしてやるのだぞ」

博士の声には迫力にも近い有無を言わさぬ説得力があった。

工学系の学問を伝授されたマルガリータは、最早ナツメツグ博士にとって他人ではない。
い。

ビークルや機械に関する知識と技術を余すところなく教え込まれ、今や彼女は俺やダンディリオンに勝るとも劣らない愛弟子として目を掛けられている。

一番弟子のダンディリオンを失った悲しみを補完する意識もあるかもしれないが、そ

れでも博士のマルガリータに対する親心に近い感情は、それだけ強く彼女の幸せを願うものであった。

だから、俺も改めて覚悟を決める。

「ええ、もちろん」

「うむ……それでいい」

そんな会話をしている内に料理が出来上がり、俺の後にシャワーを浴びたマルガリータも食堂にやって来た。

俺はカットフルーツを添えたスパニッシュオムレツの皿をテーブルに並べ、スープと飲み物を全員に配り終わると、自分も食卓に着いて朝食を摂り始める。

「マルガリータ、食べ終わったら外出の準備をしてくれ。予定通り、今日はネフロに行くから」

「あ、うん……」

「大丈夫。頼れる大人に任せてあるから、君はおとなしく着せ替え人形になっていればいい」

「わ、わかったよ……」

マルガリータは若干引き気味というか落ち着かない様子だったが、いざ出発する段になると大人しく「ジャガーノート」の助手席に乗り込んだ。

1 3 2 話 結婚式 2

「思った通り……！ よくお似合いですわ」

「ど、どうも!?!」

「では、失礼して……」

あれよあれよという間に、あたしはグレイのピークルでネフロに連行され、途中で一人の中年女性と合流すると、そのまま洒落た服屋に放り込まれた。

この店は確か『ファッション・ロンド』。

グレイのスーツとかナツメツグ先生の礼装を仕立てた店だったはず。

ネフロの街で一番の高級ブティック？だ。

今日ここへ来た目的は、あたしの……ウエディングドレスの注文らしい。

正確な採寸のためとか試着サービスとか何とか言われて、普段着のシャツを脱がされ肩の露出したドレスを着せられたあたしは、店主の女性から体中にメジャーを当てられて隅々まで測られている。

「あらまあ！ お客様、とってもスタイルがよろしいですね。髪もこんなにお綺麗で

……。お客様の装いを貶すつもりはありませんが……。勿体ないですわ」
「……………」

作業着のセンスの無さを扱き下ろされるのはまだいい。

しかし、この年になって人の手で服を着せられたり、何より他人にベタベタと触られて褒めちぎられるこの状況……。

何と言うか……物凄く居心地が悪い。

「(それで、アクセサリー的な物も選んでほしいんですけど……。予算は特に気にしませんが、店主に任せるとロクでもない石を高値で売りつけられそうで……)」

「(任せな！ 若い頃のローズマリーにも引けを取らないくらい、あんたの嫁さんを立派に飾り立ててあげるよ!)」

パーティーションの向こうからは、グレイとおばさんの不穏なやり取りが聞こえてくる。

商店街の入り口で合流した彼女はコニーの隣人のらしく、今日はグレイの頼みで同行してくれたそうだが……。二人は話し合わせたかのようにあたしを店主の前に押し出すと、そのまま向こうで密談を始めた。

その間、あたしは一人仕切りの奥で、この女性店主の成すがままだ。

「(こちらのドレスでどこか窮屈な箇所はありますか?)」

「いえ」

「大変恐縮ですが……ここ最近で妊娠されたりといったことも、ごさいませんか？」

「い、いいえ！」

「失礼いたしました。では、サイズはこのままで仕立ててもよさそうですね。タイプはいかがなさいますか？ 華やかなプリンセスラインが人気ですが、お客様なら最新のAラインやエレガントなスレンダーラインもお似合いかと」

「えつと……」

ぶつちやけ、この女が何を言っているのかすら、よくわからない。

何か選べと言われているようだし、適当に決めていいのだろうか……？

しかし、あたしがしばらく何も言えないでいると、こちらへ戻ってきたコニーの隣人のおばさんが仕切りの横から顔を出し、店主に声を掛けた。

「この娘は背が高いから、スレンダーラインがいいかもね。でも、せつかくのオーダーで地味なものも勿体ないから……フレアとギャザーでゴージャスな感じにできる？」 あと、

ネットレスとかはゴールドでまとめる予定だから、そこは合わせておくれ」

「畏まりました。では……お連れ様の仰る通り、スレンダーラインで型紙の作製に入ろうと思いますが、よろしいでしょうか？」

「あ、はい」

「どうやら、問題は解決したようだ。」

「おばさんと店主のやり取りにあたしは領くだけで、全てが淀みなく進んでいく。」

「グレイがドレスを買ってくれろというのは素直に嬉しいし、自分ではロクにわからない服飾品のアドバイスをくれるおばさんの存在もありがたいが……この状況は何だかなあ……。」

「あ、そうそう！ そのドレスも気に入ったようでしたら、すぐにご用意できますからね。今ご注文いただければ、サイズ直しも本日中に終わらせて、そのままお持ちいただけるかと。もちろん、色違いもございまして……。」

「それより、生地の方を出してきておくれ。わかっているとは思うけど、今日はこの娘のウエディングドレスを仕立てに来てんだ。そっちが先決だよ。」

「畏まりました（チツ）」

「……やっぱり、おばさんに来てもらってよかった。」

「グレイから聞いてはいたけど、この店主は恐ろしい女だ。」

「……どうしたんだい？ 気分でも悪いのかい？」

「一礼した女主人が店の奥へ引つ込むと、おばさんはあたしの肩に手を置いて心配そうに声を掛けてきた。」

思わぬ誤解にあたしは若干の気恥ずかしさを感じながら慌てて首を横に振る。

「いい、いえ。ただ……こういう店はあまり慣れていなくて……」

「へえ、何となくグレイからは聞いていたけど……今どきの若い娘さんが珍しいねえ」

文明から隔離されたミーム村では、当然ながら洒落た服など縁が無かった。

基本的には、女衆の中で裁縫を得意とする者に仕立ててもらい、それを使い古すまで着る。

前掛けやブーツなども職人に頼むか自作する。

村長など一部の上役は行商人から買った上着を着ていたが、それも田舎の基準では上等な服という程度の話だ。

もちろん、書物や号外などで余所の街に煌びやかな服があることは知っていたが、実物を見たのはそれこそネフロ方面へ汽車で行けるようになってからだ。

当然『ファッション・ロンド』のような高そうな服飾店など、自分一人で入れるはずもない。

グレイやナツメグ先生に言わせれば、大都會の店には及ばない地元の服飾店らしいが……この内装と店主の洗練された装いを見ると、やはり自分のような田舎者は場違いな空間に思えてくる。

「そういえば、お前さんは職人だったね。確かに、それらしいっちゃらしいけど……今ま

で全く興味が無かったのかい？」

「そういうわけでは……」

あたしも女だ。

華やかな服には人並みに憧れもある。

しかし、普段身に着ける服に関しては実用性が第一。

あたしの場合、動きやすいシャツやズボンに、体を防護し且つ工具を吊るせる前掛けやベルトがそれに当たる。

その装いは、ナツメツグ邸に来てからも変わらなかった。

もちろん、グレイが清潔好きなこともあり、入浴と合わせて洗濯も今まで以上にこまめに行うようになったが……それだけだ。

別にグレイにも先生にも何も言われなかったし、あの家で暮らして仕事をするうえで何の支障もなかった以上、特に何も思うところは無かった。

そんなあたしの説明を聞いたおばさんは、呆れたような表情で頭を搔いた。

「ありやく……：……：そうなのかい。まあ、あそこはグレイとナツメツグ博士しか居ない男所帯だからね。牧場の連中も似たような気質だし、そういうのに気が利かなくても仕方ないか。だからこそ、グレイもあたしに頼ってきたんだらうけどさ……」

おばさんは一人で納得すると、ふと何かを閃いたように悪戯っぽい表情を浮かべ、こ

ちららに向き直る。

「じゃあ、今回はうんと高級なドレスを買ってもらうといいよ。グレイも金に糸目は付けないって言ってるからね」

「ふ、普通でいいです！ どうせ、そんな高いドレスなんて、あたしには似合わないから……」

しかし、尻すぼみになるあたしの言葉に、おばさんは頭を振る。

「あの店主だつて言つてたろ？ お前さんは別嬪なんだから、そういうのは勿体ないつて。もつと自信を持ちな」

「……／＼／＼」

同性にヨイショされる感覚というのは何ともむず痒いものだ。

相手がコニーにしろおばさんにしろ、都会の人間に見た目を褒められると心地良さより戸惑いと周りの目が気になってしまふのは、田舎者の性だろうか。

それに、この店の女主人の言葉など、それこそ営業トークつてやつだろう。

でも……。

「グレイは……喜ぶと思いますか？」

「間違いなくね。あの男はお前さんにベタ惚れだよ。愛する妻が自分のために着飾ってくれて、喜ばないわけがないさね」

おぼさんのストレートな肯定の言葉に思わず顔が赤くなる。

確かに、冷静なようでいてどこかお調子者のグレイなら、あたしがどんな服を着ても素直に喜び、歯が浮くようなお世辞と気障なセリフを並べ立ててくるはずだ。

屈託のない笑みを浮かべ、悪戯っぽい表情の奥であたしを舐め回すように見つめる、そんな彼の様子が目に浮かぶ。

っ！ もしかしたら、これから式以外でも色々……。

どうしよう……煽情的な下着とか、スケスケのエッチな服とか着せられたら……。

彼が望むなら叶えてあげたいけど……でも、恥ずかしいし、何だか悔しいし……。

「あの……何か手伝うことは……？」

「あ、あんた！」

ひよっこりと顔を出したグレイに、あたしは慌てて顔を背け体ごとそっぽを向いた。

あたしとしたことが……妙な想像に意識を取られて、彼の足音に気付かなかった。

今さらながら、先ほど店主に着せられたドレスは肩も背中も激しく露出していることを思い出し、おぼさんの後ろに飛び込むようにして体を隠した。

「お前さんは来なくていいんだよ！ それより、自分のネクタイをとつとと新調しな。嫁さんの晴れ舞台にコンサート衣装の使い回しなんて、皆に笑われるよ！」

「さ、さーせん」

「わかったら、さつきと行くんだよ！ ……まったく。これだから野郎どもってのは……」

恥ずかしさのあまり、おばさんには思わず情けないところを見せてしまった。

だが……グレイを早々に追いやってくれたことには感謝だ。

採寸のために着せられたこの際どい服も、今のあたしの顔も……到底、彼に見せられたものではない。

ウエディングドレスのデザインが大筋で決定し注文手続きも済ませたところで、あたしは漸く解放された。

何やかんや理由を付けられ、あの後も数着のドレスやフリフリの付いた服を着せられる羽目になったが……その都度おばさんは服の質と価格の釣り合いを見極めてくれたので、無駄なものを買わされずに済んだ。

しかし、今日は色々と疲れたな……。

これ以上、あの店主に絡まれても面倒なので、あたしは早々にいつもの服装に戻ることにした。

「ところで……式はピジョン牧場で挙げる予定だったね？」

「ええ」

「何でまたそんな場所で……ああ、確かお前さんがネフロ教会は嫌だつて言ったんだっけ？ そりやまた、どうして？」

思い起こされるのは、ネフロ教会の荘厳な内装と広さ、それに街の駅前広場の人通りの多さ。

そして、グレイは有名なミュージシャンでピークル闘技場の英雄。

あんな場所であたしたちの結婚式を執り行えば、どうなるかは火を見るより明らかだ。

「……だつて！ 恥ずかしいじゃないですか！ あんな立派な教会で、街中の皆に見られるなんて……！」

「何だい、勿体ない話だねえ。こんなに綺麗な花嫁だつてのに……。まあ、確かにこの街でグレイの結婚式を挙げるとなったら、ネフロの住民だけでなく他の街からも色んな連中が押し掛けてくるだろうからね。仲間内だけで祝うつても正解だよ」

そう言われると、些かグレイに申し訳なくも思う。

招待客のなかには彼と仕事上の話ある人たちも居るはずだし、何よりあたしの我が儘で面倒を掛けてしまった点は否定できない。

元より、結婚式みたいな騒々しいイベントを受け入れたのだから、ダンディリオンとセイポリーを失つて悲しんでいる彼を励ます意味もあつたのに……。

しかし、おぼさんは頭を振った。

「大丈夫。素直になれないのは、それほど悪いことじゃないさ。気恥ずかしきなんてのは、年を取ればとるほど定着しちまうものだからね」

「それって……」

思わず、おぼさんの方を凝視してしまったが、彼女は手を振って否定すると早口で捲し立てた。

「あたしのことはいいいんだよ！ ……グレイだって、そんなお前さんを可愛いと思ってる。そういうあんたの気質も含めて愛していると思うけどね」

「っ……」

あまりにも直球なおぼさんの言葉にあたしは俯いた。

「それより、マルガリータ」

「はい？」

「お前さん、グレイのどこに惚れたんだい？」

「えっ!？」

唐突なおぼさんの一言に、思わずフリーズした。

「あの男、つい最近まで浮いた話が全く無かったからね。それに、お前さんだって女だて

らに職人をやっていたからには、一人で生きていく心積もりもあつたんだろ？ そんなお前さんが外に嫁ぐことを決めた理由……是非とも聞きたいねえ」

「つ………」

真つ先に頭を過つたのは、毎晩彼と体を重ねるたびに味わっているあの感覚だ。

朝目覚めたときに感じる心地いい疲労……その奥で、体の各所に微かに残る、燻るような火照り。

もどかしさの中にも確かな満足感と暖かさがあり、自分の指で達するのは雲泥の差……つて、いやいや！

おばさんが聞いているのは、もっと前の段階のことだろう。

あたしは慌ててピンク色の記憶を頭から追い出した。

「あたしのこと……美女だつて言ってくれたんです」

「……それだけかい？ そんなの、お前さんなら言われ慣れているだろうに」

もちろん、おばさんの言う通り、あたしの容姿を褒めちぎる男はミームー村にもそれなりに居た。

あたしが父と同じ船大工の道に進んだときも、しつこく嫁入りを勧める年寄りとは対照的に、独身の男は理解がある風な言葉を掛けて機嫌を取った。

しかし、それはあくまでも村に若い女が少ないからだ。

都会なら——それこそコニーとか——もっと若くて可愛い女がいくらでも居る。

事実、鉄道が開通し外に出るようになってからは、村の男衆もあたしみたいなのがサツでデカイ女など相手にしなくなった。

しかし、グレイは違った。

彼はあたしが船やビークルを整備することを至極当然のように捉え、メカニックとしての腕を見込んで高性能な一点物の愛機を任せてくれた。

そのうえで、彼はあたしを女として見てくれた。

地位も金も力もあり、料理や音楽を嗜む洗練された男……そんな男から能力を評価され、女性としての魅力まで讃えられたのだ。

正直、靡くなと言われても無理だ。

「なるほど。いい男からストリート口説かれて、舞い上がっちゃったわけかい」

「べ、別にそういうわけじゃ……なくもないけど……」

「ふふっ……安心したよ。お前さんも、普通の女の子じゃないか」

「……／＼／＼」

改めて振り返ると恥ずかしいことだらけだが、グレイを本格的に意識した出来事といえば、やはりこれに尽きる。

「あの……このこと、グレイには……」

「はいはい。わかっているさ」

懇願するあたしを尻目に、おばさんはあしらう様に手を振った。

1 3 3 話 結婚式 3

数か月後、ついに結婚式の日がやって来た。

つい最近、マルガリータのドレスを注文していた気もするが……時間が経つのは早いものだ。

いつも通り、ナツメツグ博士の研究を手伝いつつ、トロット楽団の練習に参加して、フアーガソンの要請で盗賊討伐に参加して……そんなことをしていれば、数か月などあつという間だ。

俺は普段通り仕事をする傍ら、マルガリータとの結婚式に向け着々と準備を進めていた。

略式とはいえ、友人たちを呼んでウエディングパーティーを催す以上、それなりの下準備が必要だ。

とはいっても、式の大筋はお節介なおばさんたちが決めてくれたので、俺の仕事の大半は招待状をマルガリータとの連名で認めることだった。

当然、文書作成ソフトと書式テンプレートなんて便利な物は無い。

実際に出席するかどうかはともかく、形式上は招待しないとマズい相手も多いので、地味にこの作業が大変だったな……。

何はともあれ、出来上がったウエディングドレスも受け取り、手伝いの人員も確保できた。

当日は、オットーとウイリーのガレージを借りて仮の屋外式場を準備し、テーブルや椅子を屋外に並べて立食パーティー会場を設定する。

教会で式を挙げて披露宴もロブスター亭のような店に依頼すれば、こういうのは業者が勝手にやってくれるのだが……街ではなくピジョン牧場内で式を行うと決めた以上、こういうのも自分たちでやるしかない。

まあ、料理の準備はメリー乳業の奥さんはじめ、おば様方が引き受けてくれたので、それだけでも楽か。

「旦那！ ガレージのシャッターは閉めちまってるのかい？」

「ああ、俺たちが立つのは屋根の発射台だ。中は控室にさせてもらうから、扉は閉めてくれ」

「グレイさん！ テーブルは一か所に集めればいい？」

「そうだな……立食パーティーだから、基本は料理をまとめて置くテーブルがあればいい。ただ、座って食べたい客もいるだろうから、二卓だけ離してくれ」

こんな具合に、俺はオットーとウィリーの手も借りて、どうにか時間までにテーブルのセッティングを終わらせた。

因みに、マルガリータは早めに会場入りしたおばさんたちに連行され、控室代わりのガレージ内で今からドレスの着付けを行っている。

本人は「クラフトマンシップ」で機材の搬入を手伝うつもりだったようだが、さすがにおばさんの勢いとパワーには逆らえない。

そして、日も高くなる頃には、他の招待客もばらばら姿を現し始めた。

ミームー村やピジョン牧場の近所の面々に続いて、ネフロやハッピーガーランドからも親しい友人たちがやって来る。

俺は主催者として彼らを出迎えた。

「やあ、グレイ。結婚おめでとう」

「おめでとー!」

「おう、ありがとさん。マジヨラムもバジルも、よく来てくれたな」

「ここ最近、二人はどうも元気が無かった。」

マジヨラムは家業の手伝いもあるとはいえ、あまり積極的に練習を企画しなくなったし、バジルはここ最近ボーっとしていて、たまに連絡がつかない時もある。

だが、今日は二人とも生き生きとした表情だ。

やはり、博士の言う通り、めでたいイベントには誘ってみるものだな。

「最初は神前式の予定だが、その後は無礼講で宴会だ。二人とも楽しんでくれ」

「ああ、期待してるよ。楽しみだなあ」

「さすが、グレイ！」

食い物の話で静かにエネルギーがチャージされるマジヨラムに、単純なバジル……いつもの調子が戻って来たな。

何はともあれ、この二人が元気なのはいいことだ。

そして、次に俺の前にやって来たのは……。

「グレイさん、結婚おめでとう」

「……受け取れ、グレイ」

「ああ、ありがとう、シルヴィアさん。シユナイダーもわざわざサンキューな」

俺はシユナイダーが差し出した祝いの品を受け取りながら、出席してくれた二人に礼を言った。

「今日は素敵な催しに呼んでいただいて感謝しているわ。奥さんのウエディングドレス姿、楽しみにしているわね」

「ふん……」

若干のお世辞を含んだシルヴィアの言葉に、シュナイダーは興味なさげに鼻を鳴らした。

シュナイダーは相変わらずの不愛想だが、先ほど彼がくれた酒はそれなりに値が張るものだ。

そういう気遣いができるあたり、やはり彼は口より行動で示すタイプだな。

相変わらずなことだ。

そして、シュナイダーとシルヴィアのカップルが俺の元を去ると、続けて姿を現したのは……サフランだった。

「グレイ……」

「ああ、サ……ビスカス。来てくれたんだな」

「ええ、来たわよ」

俺は彼女の姿を見て、口に出しかけたリングゲームを引っ込めた。

ビークルに乗らず仮面も付けていない彼女は、高ランクバトラーのサフランではなくただのビスカスだ。

「戦争の後は色々あったけど、ようやく落ち着いたわね。何はともあれ、結婚おめでとう」

「ああ、ありがとう」

微笑を湛えて祝いの言葉を述べるサフランは、今までで一番美しく見える。

特に珍しいドレスを着ているわけでもないのに、変な話だ……。

そんなサフランは、絶妙な距離感で俺にギリギリまでにじり寄ると、微かに憂いを含んだ表情で俺を見上げてくる。

「もう……エルダーのこととか、油田のこととか……気にしないでいいんだよね？」

「ああ」

「……ようやく、グレイも安心して奥さんと暮らせるんだよね？」

「ああ……」

彼女もエルダーことダンディリオンの顛末を聞いて、色々と思うところはあつただろう。

そのうえで状況を自分なりに飲み下し、この俺たちへの心配り……彼女の人柄がよくわかるな。

しかし、妙にサフランの距離が近い……。

「ふふっ……ごめんね。奥さんに怒られちゃうわね」

しばらくすると、サフランは悪戯っぽい表情を浮かべて俺から離れた。

セクシー衣装を着ていない彼女にしては、ヤケに板についた悪女っぷりだが……サフランは軽く咳払いすると、改めて俺に向き直り口を開いた。

「奥さんのこと、幸せにするのよ。それとあなたも……絶対に、幸せになるのよ」
「……ああ。もちろん」

とことん男運が無かったサフランに言われると身が引き締まる思いだ。

彼女にも、この先いい出会いがあつてほしいものだが……。

しかし、俺はその言葉を直前で呑み込んだ。

その理由は、自分でもわからない。

「では、 그레이さん。記念画の方はお任せください。少し時間が掛かるかもしれませんが……」

「ああ、よろしく頼むよ。完成はいつでもいいから、好きなようにやってくれ」

「ええ、心得ました。最高の一枚を描き上げますよ」

ハッピーガーランドから駆け付けてくれたポールは、早速とばかりに画架イーゼルを立てて力メラまで用意し始めた。

俺たちの結婚祝いに一枚描いてくれるとは聞いていたが、簡単なスケッチかと思いきやフル装備じゃないか……。

まあ、本人からは非にと言われた以上、断るのも失礼だし、好きにさせておこう。

今やこの国で指折りの画家であるポールに肖像画を描いてもらえるチャンスなど、こ

の先二度とないかもしれないからな。

「(人間の立ち姿や服の細かい部分は、後から写真を見ながらも補強できる。重要なのは背景と表情。太陽に照らされた二人の全体像の雰囲気、何より幸せに満ちた表情を余さず捉えるためには、一瞬たりとも……)」

「ははっ……」

本格的な仕事人モードに入ったポールに若干苦笑いしながら、俺は踵を返した。

ふと、会場の隅へ視線をやると、また一人、見知った顔が目に入る。

会場の各所に集まり談笑する面々から若干アウエーで浮いている雰囲気の彼だが、俺は遠慮なくそちらに向かって歩を進めた。

「フェンネル」

「よお、グレイ……」

俺が近づくとフェンネルはこちらに手を挙げて挨拶してきたが、彼はどこか居心地が悪そうで落ち着かない雰囲気だった。

「どうした？ ……もしかして、忙しい時期に呼びつけちゃったか？」

「いや、そんなんじゃないねえ。……ただ、ピジョン牧場で式を挙げるって聞いていたから、てっきり内輪だけでやるものかと思っていたんだが……結構、来てるんだな」

まあ、ピジョン牧場がかって無いほどの人口密度になっているのは事実だが、これで

も俺の祝い事としては小規模な方だと思う。

ビークルバトルーナメントの祝勝会のときは、セントジョーンズ卿や大学の関係者やメディアなどで、初対面の連中も多く来ていたからな。

……それを思うと、優勝賞金でよく知りもしない奴らにまで飯と酒を奢る羽目になったのは、まあまあ腹立たしい。

そんな益体も無いことを考える俺を尻目に、フェネルはサングラスの奥から一瞬だけ鋭い視線を招待客の何か所に飛ばした。

その先に居るのは……マーシユか。

「……どうする？ 彼と話すか？」

「いや、その必要は無え。ダンディリオンとセイボリーのことだと思うところが無いわけじゃねえが……招待客の面子を考えると、俺みたいなのがあんまり出しゃばったことを言うのもな……」

首を横に振りながら、フェネルはトロット楽団メンバーの方へ軽く視線をやった。

楽団を抜けたことに対するケジメとしては些か頑なすぎる気がしないでもないが……まあ、これもフェネルなりに考えた末の結論だろう。

俺が何か指図することじゃないな。

「無理にとは言わないさ。式の後には料理と酒も出るから、適当に楽しんでくれ。まあ

……できれば、マジヨラムくらいには声を掛けてほしいけどな」

「……ああ、そうさせてもらうぜ。ありがとうよ」

フェンネルは口の端を軽く上げると踵を返した。

ニヒルな横顔が絵になるだけに、若干腹立たしい。

そして、フェンネルが俺の元から去ると、後ろから近づいてくる気配があった。

振り返ると、そこに居たのは先ほど話題に上ったマーシユだ。

「あの……グレイさん。結婚、おめでとうございます」

「ありがとう、マーシユ」

どうやら、フェンネルがあまり話したがっていない雰囲気を感じて、俺と話し終わるのを待っていたらしい。

「本当は、父がお祝いに伺う予定だったのですが、どうしても外せない用事があった

……」

「ああ、わかってるさ。……まあ、どちらにせよ、気にする必要なんて無かったんだけどな」

「……………」

一応、セントジョーンズ卿も結婚式に招待しているが、彼は仕事のスケジュールを理由に欠席した。

親しい間柄でも、仕事の都合がつかなければ、こんな辺鄙な場所まで来ることはできない。

事実、ファーガスンもジンジャーも欠席で、ドン・スミスも祝いの品だけ送ってきた。しかし、セントジョーンズ卿は……。

もしかしたら、内輪での祝い事と察して、トロット楽団メンバーやナツメッグ博士に配慮して来なかったのかもしれない。

もしくは、マーシユ一人で来させることに意味があるのか……セントジョーンズ卿の本当の意図まではわからない。

俺としては、来てくれても普通に歓待するつもりだったので、逆に極まりが悪い感じもするが……まあ、仕方がないな。

「セントジョーンズ卿にも、よろしく言っておいてくれ。ああ、それと……」
「？」

「式の後は無礼講で宴会だ。めでたい席に相応しくない話は、今のうちに済ませておくといい。一人一人のところを回る時間くらいはあるはずだ」

「……はい」

原作でも、マーシユは今まで迷惑を掛けた連中のところへ謝りに行ったのだったな。彼の贖罪の道はきつと険しいことだろう。

過去のマーシユの所業によって傷つけられた人間は数えきれない。

それに、マーシユがセイボリーに銃を向けたことも消えない事実だ。

それが父親を守るためとはいえ、結果的にセイボリーを殺したのが別のヒットマンの銃だったとはいえ……。

赦してもらえないかもしれない、罵声を浴びせられるかもしれない、表面上は許しても恨まれ続けるかもしれない。

だが、これ以上、俺が何かしてやれることも無い。

俺は静かに立ち去るマーシユの背中を見送った。

「グレイ、結婚おめでとう」

「……ああ。ありがとう、コニー」

いつもと変わらない明るい表情で祝いの言葉を述べるコニーに、俺はゆつくりと頷いた。

「やっぱり、二人は結婚したんだね。前からいい感じだったし、いつかそうなると思ってたよ」

「そうだな……。前は勝手に外堀を埋められているようで辟易したが……君たちが背中を押してくれたのは事実だ。おかげでいいパートナーと一緒になれた。礼を言うよ」

「ふふっ……どういたしまして。お似合いの二人だよ、本当に……」

そう言うと、コニーは表情こそ慈しむような笑顔のままだが、微かに寂しそうな雰囲気を感じた。

やはり、バニラが傍に居ないことは、彼女にとって決して小さくない。

「あく……今日は、わざわざ済まなかったな。ローズマリーさんの世話も忙しいときに……」

「ううん。最近はお母さんの具合も大分良くなってきたから。さすがにここまで来るわけにはいかないけど、式に出席できないのを残念がっていたよ」

「そうか……」

若干、無理やり話題を変えたが、またしても雰囲気は沈んでしまった。

何だか、コニーの周りだけ幸が薄すぎる気もするな……。

そんな暗い空気を払拭するかのよう、コニーは顔を上げて口を開いた。

「ところで、マルガリータは？」

「ああ、彼女なら……」

マルガリータは今、女性陣と一緒にガレージの中で着替えている最中だ。

俺も珍しくネクタイを締めて正装をしているので窮屈な思いだが……彼女の精神的な疲労は俺の比じゃないだろうな。

しかし、俺が返答する直前に、オットーとウィリーのガレージの入口の方から声が掛
けられた。

「あの娘ならもう準備できてるよ」

現れたのは、コニーの隣人のおばさんだ。

彼女は俺の方へ歩み寄ると、ガレージの方を顎で示した。

「行ってやんな。最初に花嫁姿を見るのも、夫の特権だよ」

1 3 4 話 結婚式 4

「マルガリータ、ここに……っ！」

「あ、あんたっ！」

控室代わりのガレージ内に足を踏み入れると、マルガリータは素っ頓狂な声を上げた。

この時間に俺が現れるのは予想外だったようで、彼女はひどく慌てた様子で椅子から飛び上がる。

コニーの隣人のおばさんの勧めるままに来てみたがわけだが……驚いたな。

マルガリータの姿を見た俺は、思わず言葉を失った。

「あ、その……悪かったね。あたしの我が儘で不慣れた式になっちゃって、着替えやら何やらで準備も手伝えないで……」

「……………」

硬直する俺に構わず、マルガリータは言葉を続ける。

「その代わりつてわけじゃないけど……片付けはあたしの「クラフトマンシップ」で

……つて、どうしたんだい？」

俺が一言も発しないのを不審に思つてか、マルガリータは怪訝な表情で首を傾げた。

どうしたも何も……。

「……女神だ」

「はえ!？」

俺が一言呟くと、マルガリータは間拔けな声で驚愕した。

マルガリータは口をぽかんと開けて固まっているが……純白のドレスを身に纏いふんわりとしたベールを被つた彼女の姿は、まさに天女や天使といった存在の頂点に君臨する、美の女神のようだ。

比較的タイトなシルエットのドレスは、長身でスタイル抜群なマルガリータの肢体をびつたりと包み込み、セクシーな曲線美を描きつつも決して下品に見せない。

上半身から腰回りのデザインは些か地味だが、スカート部分のフレアは上品に広がり華やかなギャザーが各所にあしらわれている。

ネックレスやイヤリングや髪飾りはやや派手めなゴールドでまとめているが、輝くように美しい彼女の顔立ちの前では、しっかりと引き立て役に徹している。

ドレスのデザインもアクセサリーも全て……マルガリータにぴつたりなチョイスだ。

普段、ラフな作業着ばかり着ているマルガリータがこういう服を身に纏うと、より一

層彼女の美しさが際立つ。

そして、何より……ベールの奥で頬を朱に染めるマルガリータの表情は、美しさを通り越して尊しささえも覚えるものだった。

「マルガリータ……」

「な、何だい………っ!」

ゆつくりと近づき、俺は跪いて彼女の手を取る。

「俺は世界一の幸せ者だ。こんな美しい女性が、妻になつてくれるなんて……」

「な、あ………!」

「いや、美しいなんて表現では足りない! 辞書に載っている全ての賛辞を君に送りたい。君以上に素敵な女性は居ない。ああ………それに……! 今日マルガリータは最高に輝いている! ドレスも、アクセサリーも、牧場に咲く花も、湖の景色も………君の前では全て引き立て役に過ぎない! ……俺は世紀末のアホだった。今までの俺は、君の美しさのほんの一端しか見えていなかった。何度でも言おう。君は本当に美し」「ば、馬鹿あ!」あべっ!!」

マルガリータは俺の顔に渾身の張り手を叩き込んだ。

手を振り払い、突き飛ばしたはずみとはいえ……攻撃力は結構なもので、俺の口上は途中で遮られる。

床にひっくり返る俺を尻目に、マルガリータは交差した腕で体を隠すようにしながら叫んだ。

「あ、あんた！　こんな時に何を言い出すのさ!？」

「ぐ……いや、嘘じゃない。美しく、聡明で、意志が強くて、包容力があって……君は本当に魅力的な女性だ。君と一緒にいる未来のために、俺は今まで過酷な世界を生きてきた。こんな世界に導きやがった神に唯一感謝することがあるとすれば……それは君と出合い結婚できたことだ!」

「だ、だからそういうのは……!」

それでも伝えなければという思いのもと俺が言い切ると、マルガリータの声は徐々に尻すぼみになっていく。

耳まで赤く染めたマルガリータは、涙目になって俯きもじもじと体をくねらせた。

我ながら、恥ずかしいことを真顔で言い続けた自覚はあるが……全て事実だ。

この世界に転移した当初は、スチームパンクの世界観と冒険に胸を躍らせつつも、何のチートもなしに放り出され死にかけてことで神を恨み、周りの人間も『愛着のあるキャラクター』程度の認識で、どこか現実味が無く傍観者のような意識を持っていた。

しかし、今は違う。

マルガリータと出会って、この世界に生きる彼女を大切な人間として認識した。

ただの一人の男として、彼女を愛した。

それを……せめて彼女にだけは、知って欲しかった。

「っ……………」

立ち上がった俺は、マルガリータに歩み寄る。

……こうして見ると、彼女も本当にただの可愛い女の子だ。

男勝りの職人で、作業着の似合う筋肉質な長身で、ビークル整備から荒っぽい力仕事までこなすパワフルウーマンだが……今の彼女からはそんな姿は想像もつかない。

目の前に居るのは間違いなくいつものマルガリータだというのに、変な話だ……。

「マルガリータ……」

「……………グレイ……………」

俺は目の前の美女にゆっくりと手を伸ばす。

マルガリータは僅かに後退るも、本気で俺を拒絶する雰囲気ではなく……俺の手が頬を撫でるに任せた。

そして……。

「うおっほんー！」

「っー！」

突然、ガレージの出入り口の方から、わざとらしい咳払いが響いた。

慌てて俺たちが体を離すと、先ほど会場に俺を呼びに来たコニーの隣人のおばさんが、ひよっこりとドアから顔を出す。

「大変結構だね。夫婦仲は良好のようで、何よりだよ」

「ど、どうも……」

「あう……／＼／＼」

しどろもどろに応える俺の後ろで、マルガリータは弱弱しい呻き声を出して沈黙した。

俯きつつも、マルガリータの手はしっかりと俺の服の裾を掴んでいる。

これ……可愛すぎるだろ！

そんな俺たちをおばさんは呆れたように一瞥すると、肩をすくめて口を開いた。

「ハア……。何はともあれ……嫁さんと協力して、しっかりとやっていくんだよ。……ナツメツグ博士のためにもね」

おばさんは言葉の途中でやや声のトーンを変えると、緩んだ空気を払拭するかのよう
に重い口調で付け加えた。

表情まで真剣なおばさんに、俺も思わず表情が引き締まる。

「ダンディリオンが死んじゃって、残った直弟子はあんた達だけなんだから。だから、絶

対に……幸せになるんだよ」

「ええ、もちろん」

「……はい」

今まで沸騰して固まっていたマルガリータも、最後はおばさんの言葉に深く頷いた。彼女にとっても他人事ではない。

ダンディリオオンとはほぼ面識が無くセイボリーとの付き合いも浅いマルガリータだが、俺やナツメツグ博士とは既に家族同然。

俺たちの感情の機敏くらいはよく理解している。

「グレイ……」

「……ああ」

俺とマルガリータはお互いを慈しむように頷き合った。

いつの間にか握り合っていた手からは、彼女の温もりがじんわりと広がっている。

彼女となら……これからも上手くやっていけるだろう。

そして……。

「おーい、お前たち。式の前に写真をだな……ん？ 何じゃ、妙にしんみりしおって

……」

知らぬは話題にされた当の本人ばかり……呑気な口調で入ってきたナツメツグ博士

に苦笑いしつつも、俺たちはノリ良く写真撮影に応じるのだった。

会場に戻った俺は、招待客に手を挙げて軽く挨拶しつつ、ガレージの屋根に上った。いつも「フラップフライヤーⅡ世」を離陸させている発射台には聖書台が置かれ、その奥には修道服の女性が立っている。

神父役を引き受けてくれた、いつぞやの廃屋のシスターだ。

シスターは俺が聖書台を挟んで向かいに立つと、静かに口を開いた。

「グレイ様は素晴らしい女性と出会われたようで……」

「ええ……おかげさま、で……？」

彼女の声はどこか寂しそうだ。

一瞬だけ鋭い視線で遠くを見据えるような雰囲気醸し出したが……気のせいかな。

「結婚式は、ただの儀式です。私どものような聖職者がお手伝いすれば、滞りなく執り行えます。でも、お祝いの言葉は……全て神より授けていただきます」

「？ はあ……」

あまりよくわからない言い回しだが、聖職者の言うことなので、俺はあまり深く考えず曖昧に頷いた。

そんなやり取りをしている間に、ガレージの横のドアが開き本日の主役が登場した。父親役のナツメツグ博士に付き添われたマルガリータは、純白のウエディングドレスを身に纏いブーケを持って姿を現す。

会場の視線は一齐に美しい花嫁へ集中した。

「綺麗……」

「ああ、いいもんだねえ……」

ゆつくりとバージンロードを歩くマルガリータの髪とベールは、穏やかな牧場の風に靡き幻想的な動きで波打つ。

思わずといった様子でコニーが発した声に続き、主に女性陣から感嘆の言葉が聞こえ始めた。

この牧場の景色と風の中で見るマルガリータも、先ほどガレージの灯りのもとで見た彼女とはまた違った美しさだ。

恥ずかしそうに招待客の方から視線を外しつつも会場の視線を独占するマルガリータは、まさに太陽も霞むほど輝いている。

「グレイ」

「はい……」

そうしている間に、マルガリータとナツメツグ博士はガレージの屋根に上ってきた。

俺が博士からマルガリータの腕を受け取ると、博士は発射台の端の方へ寄つて重々しく頷く。

そして、俺とマルガリータが寄り添うようにして聖書台の方へ向き直ると、シスターは慈しむように微笑み、聖書を開いた。

「愛とは——」

聖書を開いたシスターは朗読を始めた。

愛の教え……神父役である彼女から俺たちに贈られる聖句だ。

シスターが神に祈りをささげると、誓いの儀式へと移った。

「新郎グレイ。あなたは、マルガリータを妻とし……富めるときも、貧しいときも、健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、哀しみのときも……死が二人を分かつまで、愛し続けることを誓いますか？」

「誓います」

シスターはマルガリータに向き直り、俺と同じ内容で問いかける。

「新婦マルガリータ。あなたは、グレイを夫とし……富めるときも、貧しいときも、健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、哀しみのときも……死が二人を分かつまで、愛し続けることを誓いますか？」

「は、はい！ 誓います」

嘯みそうになりながらも、マルガリータははつきりと俺との愛を誓った。

いざという時には肝が据わっており頼りになる彼女だが、こういうイベントへの耐性の無さは筋金入りだ。

今はそんな彼女の様子さえ愛おしいが、当のマルガリータは不満そうに横目で俺を睨んでくる。

「指輪を交換してください」

俺はシスターの指示に従い、既に聖書台の上に準備してあった指輪ケースからやや小さな方のリングを手を取った。

マルガリータの左手に自分の手を添えて持ち上げ、彼女の薬指にダイヤをあしらったゴールドの指輪を着ける。

そして、マルガリータも微かに緊張が伝わる手つきで、俺の左薬指に指輪を押し込んだ。

「それでは、誓いのキスを……」

衆人環境の中で唇へのキスとは、マルガリータにとってはなかなかハードルが高そうだが……。

しかし、マルガリータはボールの奥から真っ直ぐに俺の目を見据えていた。

「……………」

彼女は決してこの手の状況を楽しめる気質ではない。

華やかな服や催しには年相応に憧れを抱いているが、やはり自分が主役として目立つことには若干の苦手意識が垣間見える。

しかし、今はそんな彼女が覚悟を決め、しっかりと俺に向き合っている。

彼女の心意気に応えないわけにはいかない。

マルガリータのベールを持ち上げた俺は、彼女の肩に手を置いて僅かに引き寄せると、そのまま唇を合わせた。

「ん……………」

「あ…………グレイ……………」

目を閉じて口元に意識を集中すれば、マルガリータの熱い唇と吐息の感触が伝わってくる。

何度も味わったこの感覚……微かに、夜の荒く激しい情欲が蘇るかのような感覚に陥る。

それはマルガリータの方も同じらしく、彼女の息も微かに乱れ頬が上気していた。

「ヒューー！ お熱いねー！」

「今年の冬は短そうねえ」

どのくらいの時間、そうしていたかはわからない。

だが、オットーとサフランに続いて会場から矢継ぎ早に飛んでくる野次に、俺たちは現実に引き戻された。

さらに……。

「っ……っ！」

「うぐお」

足元を感じた鋭い痛みに、俺は思わずマルガリータの肩を離れた。

見ると、マルガリータの踵が俺の足の甲をガツツリ踏みつけている。

間髪入れず、マルガリータは俺を突き飛ばすようにして距離を取った。

「(い、いつまでやってんだい!?)」

「(す、すまん……)」

どうやら、俺は彼女が動けないほど強く抱き締めていたらしい。

それは確かに俺が悪い……かな？

「(ご両人)」

「(っ!)」

シスターに声を掛けられ、俺たちは再び二人の空間から現実に引き戻される。

「コホン……兄弟たちよ。ここに二人が夫婦となったことを宣言いたします。彼らの旅

路に、神の祝福があらんことを！」

色々とグダグダだった気もするが、俺たちの結婚式は無事に終わった。

シスターの宣言を合図に、会場からは割れんばかりの拍手と歓声が飛んでくる。

お節介な野次、純粹に俺たちの幸せを願う声……なかには先ほどの俺たちの様子を揶揄う声も混じっていたが、不思議と羞恥心は無かった。

「マルガリータ……」

「(うん) ……コニー！」

「え……?」

俺が小声で呼びかけると、マルガリータは静かに頷き、かねてから決めていた通り持っていたブーケを会場に向かって放り投げる。

宙を舞ったブーケは、ポスツと音を立てるようにしてコニーの手に収まった。

突然のことにコニーは啞然としているが、マルガリータは悪戯っぽい笑みを浮かべて口を開く。

「次はあんた達の番だよ」

「マルガリータ……」

ガレージの屋根から降りた俺たちは、祝福する招待客にもみくちやにされた。

そして、会場の隅でウイリーが手旗のようなものを振ると、崖の裏から突如「フラッ

「プフライヤーⅡ世」が現れ、会場の上空に飛来すると空から紙吹雪をばら撒き始めた。マイペースでクレイジーな飛行兄弟にしては粋な計らいだ。

まあ、企画したのは二人の弟であるエリツヒらしいので、彼にも礼を言っておかないとな。

立食パーティーの始まった会場では、この日のために購入した酒類が大量に振舞われ、テーブルにはピジョン牧場とミームー村から手伝いに来てくれた奥様方の料理がズラリと並んだ。

招待客が思い思いに料理に手を伸ばし談笑するなか、俺とマルガリータは会場を巡り改めて友人たちに挨拶して回る。

何気にもこの作業が大変で、俺たちがご馳走にありつけたのはパーティーも終盤に差し掛かった頃だった。

あれ？ 俺たち、祝われる側じゃなかったっけ……？

まあ、俺たちの結婚式に関して一番大変だったのは、コニーの隣人のおばさんか。ドレスの注文から当日の着付けに料理の準備まで担当してくれた。

一応、手伝いに来たマダムたちには舶来ワインや新作のシャンプーリンスを渡しているが……おばさんには改めてお礼をした方がいいな。

「グレイ、君の音楽室のドラムを借りていいかい？」

「ああ、マジヨラム。別に構わないが……」

出席した友人たちも、俺たちの門出を目一杯祝い、宴を盛り上げてくれる。

マジヨラムとバジルは余興にトロット楽団の曲をインストルメンタルで演奏し、フェンネルもビークルからエレキを取り出しソロの新曲を披露した。

事前に話も通さずプロである彼らに演奏してもらうのは少し気が引けたが、マジヨラムは気にするなど言つて俺の音楽室から持ち出したドラムを陽気に叩き、バジルもそれに続く。

フェンネルも無言でエレキをかき鳴らしている。

「まったく、騒がしい奴らだぜ」

「ふ、ふっ……そうだね」

俺とマルガリータは手を繋いで寄り添い、いつの間にか始まったトリオのコンボに耳を傾ける。

そして、夕日が辺りを照らし始めた頃、いい加減しびれを切らしたナツメツグ博士が解散を言い渡し、宴会もお開きとなった。

後日、ナツメグ邸に運送業者のビークルが到着した。

梱包した大型の家具をバックパーツから下し、業者のビークル乗りに入れ替え作業も手伝ってもらおう。

「グレイ、何してるんだい？」

「ああ、ちよつとな……」

「これはこれは、奥さん。いやあ、いい買い物をしましたなあ」

「……？」

マルガリータは怪訝な表情で荷物の梱包を解く俺たちに視線を送った。

しかし、作業が進むにつれて、彼女の顔はみるみる赤くなっていく。

出てきたのは、今まで俺の寝室に置いてあったベッドよりも一回り大きいベッドだった。

通気性が良いふかふかのマットレス、枠も高級感がある木材で作られた『ハッピーファニチャー』から取り寄せた高級ベッドだ。

ニヤニヤ顔の業者にチップをやって追いついた俺は、ベッドと一緒に送られてきた商品説明の用紙を読み始める。

「ほほお……激しい運動をしても安心の耐久力、あらゆる営みに対応したキングサイズ

の広さ、とな？ 本当に素晴らしい買い物をしたな……」

「ば、馬鹿ア!!」

「ブゴォー！」

マルガリータの強烈なパンチが俺の顎にクリーンヒットし、俺は買ったばかりのベッドの上にひっくり返った。

彼女の羞恥と怒りは収まらず、俺はそのままマウントポジションで殴られ続けるが、やがて騒々しさに耐えかねて現れたナツメツグ博士の一喝により、俺は１라운드KO負けを免れた。

因みに、その日の夜の営みは……いつもより格段に激しく、時間も二倍ほど掛かった。広々とした肌触りのいい寝床の感触は、俺たちの幸せな時間を優しく包み込み……まあ、俺の逆転勝利というわけだ。

しかし、ベッドが変わるだけでこれだけ盛り上がるとは……いや、ただの口実かな。改めて、マルガリータと結婚したことを認識し、二人の愛の巣を整えたことに舞い上がってしまったのだろう。

翌朝、いつもなら起きている時間になってもマルガリータが口を利いてくれない理由は……彼女の名誉のために、寝不足なだけということにしておこうか。

135話 魅惑のスパイス 前編

ハッピーガーランドの東地区、商店街の北の端に店舗を構える『ハッピーベーカーリー』。

長年、この大都会の住民の腹を満たし続けてきた老舗のパン屋、それが私の店……少し話を盛った。

私がここに店を開いたのは十年ほど前の話。

この街の住民に私の味が受け入れられて本当によかった。

人も物も入れ替わりが激しいこの街でこういった商売ができるのも、ひとえに私の作るパンを求め続ける住民たちあつてのことだ。

今日もまた、近くに住む常連の少年が、昼時に日替わりサンドイッチを買っていった。

黄色のシャツを着た恰幅のいい少年は、いかにも食べるのが好きといった風貌で、家族のために大量のパンをまとめ買いしていくこともある。

彼の家もこの商店街に店を構えており、こちらも遠方の食材の調達などでは何度かお世話になった。

あの家族は、仕入れ先としても商品の売り先としても、ありがたい存在だ。

夕暮れ時になると、証券取引所やオフィスで働く勤め人が、売れ残りのパンを求めてやって来る。

ここ最近、毎日のように足を運んでくれる男も、今日は目当ての品が残っていたのか、機嫌のいい足取りで店を出て行った。

そうして、明日の仕込みを終える頃には、ほとんどの商品が店の棚から掃けた。

こんな具合に、近所の住民にも恵まれ、私の店の経営は順調だ。

しかし、そんな変わらぬ人気店の店主である私にも、最近は一つ悩みがあった。

翌日の早朝、前日に仕込んでおいたパンを焼き上げ開店の準備をしていると、店員のジョセフが口を開いた。

「店長、この前言つてた新作の件なんすけど……」

「おお、ジョセフ。何か思いついたか？」

陳列棚に並べる商品の準備をしながら、私は店員のジョセフの言葉に耳を傾ける。

「いえ……ただ、ドーナツの仲間みたいな甘いパンを他に増やすのは、難しいじゃないか
と思つて……」

「ああ、それは私も同感だ……」

そう、私の悩みとは、新メニューの考案についてだ。

うちは伝統的なクロワッサンやバゲットにドーナツはもちろん、昼食や重めの間食を求めるオフィス街や工場の従業員の要望にも応じ、具だくさんのサンドイッチも販売している。

どれも好評で、変わらず売れ行きが良好なのはいいのだが……些かマンネリというか、代わり映えのしない商品に飽きが来ているのだ。

毎朝、同じクロワッサンかバゲット……私自身の創作意欲はもとより、常連が違う味のものを求めるのも当然だろう。

そうなると、狙い目は味がプレーンの一種類しか無い割に女性人気がそこそこ高いドーナツ系の商品だと思ったのだが、これもまたそう上手くはいかない。

何せ、菓子パンは凝り出すとコストが際限なく掛かってしまう。

小麦こそ穀倉地帯が近いおかげでそれほど輸送費が掛からず仕入れられるが、やはり都会では何を買うにもコストが高く、甘味料やフルーツをふんだんに使うとなると、およそ普通のパンの値段では売れなくなってしまうのだ。

それに、どうしてもスイーツ類に手を出すと、本職の仕事には大きく劣る。

「私もよく知っているわけではないが、ケーキや焼き菓子に関しては専門店なんてのもあるからなあ……」

「あるつすねえ。最近では、ホテルのデザート並の菓子がカフェで食べられるとか何とか……街で若い女性が話してましたよ」

もちろん、ブリオッシュやデニッシュなど単純な甘いパンを売り出すという手もあるが、その程度でスイーツにうるさいマダムたちの胃袋を長期的に掴めるとは思えない。

それこそ数日間で飽きられてしまうだろう。

「やっぱり、総菜。パンつすよ。肉とか魚を挟んだ、ガッツリ食事になるパンしかないつす！」

「ううむ……しかし、それだとサンドイッチとの差別化がな……」

サンドイッチの具に使える食材もパリエーションは限られている。

結論の出ない難題は相変わらず私の頭を悩ませるのだった。

「いらつしやい」

そんな折、この店に一人の男性客が訪れた。

彼のことは私も知っている。

トロット楽団メンバーのミュージシャンで、現ビークルバトルーナメントチャンピオン。

ナツメツグ博士の助手も務めるグレイという男だ。

彼はこの街に住んでいるわけではないので、たまに来店する有名人という程度の認識だったのだが……今日はパンを買いにきたのではないと言う。

「これを見てもらえますかな」

そんな彼は、持参した包みをカウンター上に置くと、調味料らしき粉が入った瓶を私に見せた。

何でも、砂漠の商人から購入した香辛料だとか……。

瓶の口を開けて『ターメリック』とかいう黄色い粉の匂いを嗅がせてもらったが、なかなか刺激的な香りだ。

「これは……カレーってやつですかね？ こんな色と香りのスパイスを使った料理があると聞いたことがあるっす」

どうやら、ジョセフはこのターメリックを使った料理を知っているようだ。

思いがけないところからの知識に、私は少し彼を見直した。

お調子者で時折信じられないミスをするポンコツなのは事実だが……。

そんなことを考えていると、グレイ氏は各種スパイスの入った箱を私たちの前に押し出し、口を開いた。

「このスパイスで、新しいパンを作ってもらいたい。もちろん、庶民も手に取れる価格の品を……。完成すれば、この店の看板商品になり得ますし、長期的な大商いになるで

しよう。香辛料の仕入れルートの整備には俺も協力します。何ならマジヨラムの実家……その『ラツキーフーズ』にも一枚噛んでもらう。どうです?」

「ええっ!? いや、そんな……いきなり言われても……」

私は思わず首を横に振った。

彼のような大物にいきなり仕事を言いつけられて二つ返事で引き受ける度胸が無かったのもそうだが、この香辛料をどうやって使えばいいか見当がつかなかったのだ。

当然ながら、私もジョセフもカレーの作り方などわからない。

「カレーってのは、この香辛料を使って肉や野菜を煮込んだスープっぽい料理です。一応、カレー粉のレシピもお渡ししますので、プロのあなたがたならどうにかなるでしょう」

「いや、我々はパン職人であって料理人ではないので……今の状態ですと、ご期待に沿えることは難しいかと……」

そう伝えると、グレイは途端に不機嫌な表情になった。

しまった、対応を間違えたか?

正直、冷や汗が止まらない。

彼は喋り方こそ理的的で教養があるビジネスマンのようだが、その体格と眼光にはどこか底知れない威圧感がある。

何より、彼はビークルバトルーナメントのチャンピオン、荒くれビークル乗りの頂点に君臨する存在だ。

下手なことを言おうものなら、この店ごと吹き飛ばされかねない。

「(ゲームなら、ターメリックを売るだけで次の日には『カレーパン』が店に並んでいたのに……めんどくせえ。ただでさえ、結婚式の準備で忙しいってのに、何で俺がここまですなきゃならないんだ！俺はカレーパンをいつでも買えるようにしたいだけなのにな……)」

しばらく独り言を呟いて思索していた 그레이氏だったが、やがて彼は顔を上げると我々に向き直り口を開いた。

「仕方ない。……次の休日、付き合ってもらえますか？ カレーを ご馳走しますよ。他の面子の予定も聞かなければならないので、空いている日を教えてください。こちらで調整します」

「あ、え……」

「そりやいいっすね！ 店長、あのチャンピオンにご馳走してもらえるなんて、こんな名誉なこととは無いっすよ」

結局、私は 그레이の提案を断りきれず、彼の招待を受けることとなってしまうた。

数日後、私とジョセフはグレイ氏に言われた通り、同じ商店街の宿屋ロブスター亭に足を運んだ。

香辛料のいい匂いが立ち込める食堂には、宿の主人ダスティンとバーテンのクリスの姿が見える。

宿泊客のためにバゲットの大量注文を出してくれる彼らも、うちの大切なお得意様だ。

「やあ、パン屋のご主人にジョセフも。聞いたよ、新しいパンを作るための食事会……いや、会議だつて？ 楽しみだねえ」

「普段、料理を出す側の我々がご馳走になる側というのも妙なものが……ああ、適当に掛けてくれ。今、飲み物を用意するから」

どうやら、厨房で料理をしているのはグレイ氏本人のようだ。

食器の用意などでロブスター亭の面々の手を借りているらしいが、まさか彼自身がカレーを作つて振る舞うとは……：つきり、料理人にレシピを伝え作らせるものだと思つていた。

さらに、ネフロベーカリーの店主まで来ている。

地方のパン屋が何の用だと思ふ気持ちもあり、私は若干上から目線で彼に声を掛けた。

「これはこれは……遙々ネフロからいらつしやるとは……遠かったでしょう？」

「ああ、これはどうも。グレイさんから、旅費は出してやるから是非参加しろと誘われましてな」

遠回しな嫌味を柳に風と受け流された私は、思わず顔が強張るのを止められなかった。

田舎者のくせに生意気な……。

だが、私が口を開く直前、厨房の方からグレイ氏がひよつこりと顔を出した。

「俺としては、地元に近いネフロの方こそカレーパンを発売してもらいたいんですがね」

そうか、グレイ氏はネフロのピークルバトラーだ。

住んでいるのも、ネフロにほど近いピジョン牧場。

そういう意味では、私たちよりもネフロベーカリーとの縁が深いわけか……。

少々癪だが、下手なことと言わない方がいいな。

「さて、何はともあれ試食を始めましょうか。」

そう言うと、グレイ氏はダスティンとクリスに手伝わせ、我々のもとに数枚ずつのスープ皿を配った。

中身を見てみると、深皿を満たすのは茶色や黄色や赤色が混じったとろみのあるスープで野菜や肉が煮込まれた料理。

なるほど、これがカレーというものか。

「おお！ チャンピオン直々に……光栄っす！」

「その呼び方はやめてくれ……」

喧しいジョセフを尻目に、私は既に目の前の香しい匂いを発する料理に意識を奪われていた。

一通り試食会が終わり、私はスプーンを置くと思わず満足げなため息をついた。

グレイ氏が用意したカレーという料理は、どれも非常に美味だった。

鳥肉を使った甘みのある赤いバターチキンカレーに、野菜がゴロゴロ入ったポークカレー、ホロホロに煮込んだ牛肉の旨味が凝縮されたビーフカレーに、スパイスを強めに効かした少し癖のあるマトンカレー……。

一つ一つ、辛さも味わいも違い、香りも微妙に異なるのに、全てカレーというカテゴリーに入ると聞けばそれもまた説得力がある。

驚くべきは、砂漠地方の料理という一言では収まらない、スパイスの魅力を確立しながら素材の味を引き出しているその完成度だろう。

もちろん、肉や野菜の旨味が溶け出し凝縮したスープ？ルー？はパンにもよく合う。

さすがは稀代の天才ナツメグ博士の右腕と言われる人物といったところか。

そんな具合に私が感心していると、グレイ氏は我々を見回して口を開いた。

「さて……とりあえず、カレーつてのがどういいう料理か大枠は掴んでもらえたと思えますが……」

これだけ高度に完成した料理を出されて、大枠も何も無いと思うが……。

そんな私の内心に構わず、グレイ氏は言葉が続けた。

「見ての通り、カレーの味や作り方に厳密な決まりはない。もちろん、元々は定義があつたのかもしれないが……我々の手に入る食材で似たような料理を作るとなると、そのパリエーションは無限大です。スパイスの配合だけでなく、肉の種類や野菜との組み合わせにルーの粘度まで。さらには、宿や飲食店でスープや一品料理として出すか、パンに應用するか……」

言われてみれば、確かにその通りだ。

このスパイスの配合や味付けだけでも、あらゆる料理に應用できる。

まだ見ぬ新作パンの構想に頭を巡らせていると、グレイ氏は私とネフロベーカーリーの店主の方へ向き直った。

「パンに何かを挟むとか、汁物に浸して食べるとか、そういうのはどこの家庭でも普通に行ける料理です。皆さんには、専用の窯や大規模な調理設備を持っているからこそできる、相応のプロの技の詰まった商品を作ってもらいたい。そのためには、カレー自体も

ルーを改良して煮詰るなど、少し違う形で作り上げる必要もあるでしょう」

確かに、プロとして恥ずかしくないレベルのカレーを作るといふのは、しかも惣菜・パンに活かす方法を編み出すとなれば、その道のりは途方もないものとなるだろう。

だが、私はこの事実に関心が高揚感すら覚えていた。

初めて味わう素晴らしい料理に創作意欲が刺激されたことはもとより、彼の言う通り、うちの店にしかできないカレー・パンを作り出せば、確実に目玉商品となる。

そうなれば、当然ながらうちの売り上げも……。

「まあ、これ以上俺が先入観を与えてもアレなんで、あとは皆さんにお任せしますよ。ああ、今日の各カラーのレシピは全部教えますんで、メモを持って行ってください。それじゃ」

そんなことを考えていると、話を締めくくったグレイ氏は皿を片付け始めた。

今日の話はこれで終わりのようだ。

あとは……我々次第か。

私はジョセフと軽く頷き合うと、グレイ氏とロブスター亭の面々それにネフロペーカリーの店主に一声かけ帰路に就いた。

早速、試作を始めなければ……。

帰り際、ロブスター亭の厨房の方から微かに緊張した声が聞こえる。

「グレイ、あの黄色い粉のレシピは我々も貰えるのだろうね？」

「場所と設備を提供した代わりに……我々の仲間じゃないか」

「(カレー味のテルミドールでも出すので?)」

「どうやら、我々ベーカリー業界のみならずカレーブームが訪れそうだ。」

後日、ようやく完成したカレーパンの前に、私は大きく息をついた。

ここに至るまで、本当に長かった……。

グレイ氏に教えてもらったカレーはどれも素晴らしい料理だが、そのままのレシピではうちの店で使えない。

まず、水気が多すぎる。

パンの上に乗せることもできなければ、挟むこともできない。

皿状に成型したパンに注ぎ込むことも考えたが、客がその場で食べるのではなく持ち帰ることを考えると、零れる可能性がある形状は却下だ。

確実なのは、カレーの粘度を高め硬さを増す方法。

しかし、下手に煮詰めると焦げつき苦みが増してしまうし、ルーに小麦粉を入れ過ぎればせつかくの濃厚な香りと旨みの凝縮した味わいが台無しになってしまう。

この匙加減が大変だった。

そして、数十回に渡る試行錯誤の後、ついにちょうどいい固さのルーを詰め込み焼き上げたカレーパンが完成した。

しかし、ここでまた思いもよらぬトラブルが発生する。

「ジョセフ!! な、何をやってるんだー?」

「え?」

翌朝、ついにカレーパンが初めて店頭に並ぶ日。

ドーナツ用のフライヤーを見ると、そこには軽やかな音を立てながらプカプカと油に浮かぶ、褐色に染まったカレーパンが……。

何と、ジョセフがカレーパンをドーナツと間違えて、油で揚げてしまったのだ!

こんなものを15個も量産してしまうなんて……。

当然、客に売ることなどでできないが、捨てるのは勿体ないし、我々の賄いにするにもこれを食うのは……。

「こんにちは。……あれ。何だか、慌ただしいみたいだけど……一体、どうしたんです?」

「ああ、君か。ちょっと、厨房で手違いが……いや、何でもない。それより、ご注文は?」
ちやうど、黄色いシャツを着た恰幅のいい常連の少年が店を訪れたところだった。

近所の人間に店の不手際を知られるのは恥ずかしく、つい誤魔化してしまった。

しかし、彼の注文に応えてバゲットを包んでいると、ふと名案が思い浮かぶ。

「こいつはおまけだ。試作品だが、よかったら食べてみてくれ」

「うわあ！　ありがとうございます！　凄くいい匂いですね」

私が余分に包んだ揚げカレーパンをプレゼントすると、少年は明るい表情で喜んだ。

廃棄品を押し付けたようで悪いが、彼なら食べ物について悪いことは言わないし、試作品ということにすれば面目も保つ。

だが、そんな私の考えとは裏腹に、少年は店先で揚げカレーパンにもかぶりつく満面の笑みを浮かべていた。

もしや、本当に……。

！
そう思い、私とジョセフは揚げカレーパンを口に運び一口齧るが……何と言うことだ

くどそうな見た目に反して、信じられないほど美味しい。

ケガの功名とはまさにこのこと。

私は急いで残りのカレーパンを油で揚げるように指示し、店の陳列棚の一番目立つ場所にカレーパンを並べた。

結果は、当然ながら完売。

評判は口コミで広まり、うちのカレーパンを求めて一時は店先に長蛇の列ができたほ

どだ。

もちろん、売り上げも大きく伸ばすことに成功した。
ジョセフには特別ボーナスをやらないとな。

136話 魅惑のスパイス 後編

「お前たち、ちよつと出ていなさい」

「はっ、失礼します」

ドン・スミスが穏やかながら威厳のある声で命じると、彼の部下たちは一礼して部屋を退出し始める。

孫娘のクラリスとボディーガードのキャラウェイも、特に戸惑ったりすることは無く俺にも礼をして踵を返した。

そして……若干バツが悪そうに俺へ軽く頭を下げる、白スーツの厳つい男が一名。

顔見知りとはいえ、他人とボスを二人つきりにするとは……まあ、信用の証と思つておこう。

俺は目礼を返し彼らが部屋から退出するのを見送ると、ドン・スミスへ向き直つた。

「ジェイクを釈放したのか？」

「奴は騙されていた」

「ほう？」

「イズメラルダという女だ」

それだけ言うのと、ドン・スミスはやれやれとでも言いたげに首を振つてため息をつき、俺に向き直る。

「知らんか？」

「ああ、心当たりは無いと思う」

「計画を立てたのはその女だ。私がジェイクを冷遇していると吹き込み、金を奪つて二人で逃げようなどと唆したらしい。まあ、当の女はジェイクと添い遂げるつもりなど毛頭無かったようだがな」

何の話かといえば、例の八百長からのドン・スミス暗殺未遂事件だ。

ジェイクがビークルバトルの賭けを通じてドン・スミスを出し抜こうとした結果、警察まで介入する事態となり、剩えその混乱は敵対組織によるドン・スミス暗殺計画に利用された。

聞けば、ジェイクがこの暴挙に及んだ背景は、ドン・スミスがジェイクとその女の関係を認めなかったことに端を発しているとか何とか……。

もちろん、ジェイクにとって暗殺計画は予想外だったようだが、彼は一連の出来事の責任を追及されファミリーの若頭の地位を追われた。

イズメラルダ自身は、八百長事件が表沙汰になりジェイクの失敗を知ったときには、

さっさと逃げ出す準備を整えていたらしい。

まあ、端的に言つて、金目的でジェイクに近づいたということだな。

ファミリーの追手が彼女を確保したときには、既にジェイクの持ち物が根こそぎ売り払われた後だったと……。

「だから、あれほどやめとけと言つたのだが……当時のジェイクには何ら響くところが無かつたようだ」

「あく、その女つてのは……敵対組織の息が掛かつた奴だつたのか?」

「いや、口だけは達者というか、大風呂敷を広げるといふか……私の印象ではそんなところだな」

「なるほど……」

どうやら、ドン・スミス暗殺に関しては完全にジェイクの部下のチンピラの独断専行だつたらしい。

ケチなコソ泥女の計略に乗せられファミリーを裏切つたジェイクの軽率さはもとより、それが部下の離反とボスの暗殺計画に至るとはな……。

「皆がみんな、アホに振り回されただけつてことか」

「そうだな」

「それで危うく撃たれるところだつたとか……やつてらんねえな」

「ああ、まったくだ」

迷惑な話だ。

これだからマフィアってやつは……。

そんな俺の心情を知ってか知らずか、ドン・スミスはやや疲れた様子で口を開いた。

「一杯、付き合わんか？」

「……喜んで」

ドン・スミスの合図で姿を現したバーテンは、俺たちの前にルビー色のワインが満たされたグラスをサーヴした。

香りだけでも、そこらの安酒とは一線を画す代物であることがわかる。

「こちらはジエイクさんからです」

「……ジエイクの？」

俺は思わずバーテンに聞き返した。

彼に奢られる意味が分からず、俺はドン・スミスへ疑問の視線を向けるが……。

「私を襲撃者から救ったのはお前だからな。それについては感謝しているらしい」

「なるほど……」

どうやら、俺がヒットマンを仕留めたことへの礼だそうだ。

そういう意味では、ジエイクのドン・スミスへの忠誠心は本物か。

しかし……悪いのが女とはいえ、事件の首謀者で若頭という責任ある立場にあるジェイクをよく許したな。

原作よりも大事になったので、最早ジェイクには肅清される道しか残されていないと思っていた。

まあ、そういう器の広さこそ、ドン・スマスがボスであり続ける理由か。

ジェイクも完全に元の鞘とはいかないが、ドン・スマスが彼を許しファミリーに復帰させたことで、今では酒浸りだった生活からもどうにか脱し、彼は心を入れ替えて仕事に励んでいるらしい。

まあ、何はともあれ、丸く収まってよかったな。

俺としては、恨まれていないだけでも上々だ。

「ところで……」

「ん？」

「さつきから、その強い匂いを放っている袋は何だ？ 嫌がらせか？」

「おっと！ 忘れてた……」

俺はドン・スマスの示した紙袋を手に取り、中身を取り出した。

中年のパーテンに皿を出してもらい、褐色に染まったカレーパンを一つドン・スマス

の前に差し出す。

「もう冷めちまつたかもしれんが……最近、ハッピーガーランドで流行ってる食べ物だ。イチオシはこのパン屋で買えるカレーパンだが、似たような料理は宿なんかでも出し始めたな。一部では、軽くブームみたいになってるぞ」

「ほう……珍しい香辛料をふんだんに使っているようだな。これだけのものを都会で庶民が手に取れる値で売るとは……なるほど、お前が何やら根回しをしたわけか」

「ああ、砂漠の方で出回っている品だからな。そこら辺には……聞くも涙、語るも涙の話があるわけよ。……知りたい？」

ドン・スミスは些か面倒くさそうに表情を消したが、俺は構わず話し始めた。

ハッピーガーランドでカレーパンが発売されてからしばらく後。

俺は急遽呼び出したデルロツチ貿易の社長、デルセンの前に、血相を変えていた。

「何っ!? 香辛料の高騰が止まらないだど?」

「は、はいいい! 完全に品薄状態で、価格だけがどんどん上がっていますう!」

ハッピーガーランドとネフロでカレーパンを発売するにあたり、俺はデルロツチ貿易に香辛料の仕入れと卸売りを委任していた。

仕入れ資金は俺持ちで、利益の取り分はデルロツチ貿易が半分以上。

デルセンにしてみれば、降って湧いた幸運だろう。

戦争や復興の特需で成長したとはいえ、彼の会社では到底無理な規模の大商いだ。

何より、俺が金を出しているのだから、仕入れコストを持ち出す必要が無く、仮に失敗しても彼の懐は痛まない。

利益総取りではないとはいえ、お使いレベルの商取引の代理には過ぎた報酬である。

逆に俺としては、香辛料の仲買ごときで継続的にデカイ額を儲けようなどとは考えていないので、ちよつとした小遣い稼ぎ程度の認識だった。

カレーパンの流行りに始まり宿やレストランから香辛料の需要が増えたところで、供給が追い付けば徐々に値段は落ち着いてくるし、いずれはブームも終わる。

元より、香辛料の過度な価格高騰によるカレーの高級化を防ぐために、予め俺が一定量を確保して卸し、ほどほどの利益に抑えようとしていた側面もある。

それが、『ハッピーベーカーリー』の主人やマジヨラムの実家『ラツキーフーズ』から話を聞いて来てみれば、この有様だ。

俺は委縮するデルセンと彼の差し出した書類を交互に睨みつけた。

俺は商人ではないので普段の香辛料の生産量や輸入額などわからないが、取引量が加速度的に下がっていることくらいは読み取れる。

「何でこんなに供給量が減ってるんだ？」

「ど、どうやら買い占めを行った輩が居るみたいでして……その……収穫時期が先の農家のものまで……」

先物取引に近い手法か。

そういえば、昔似たような例で、収穫予定の穀物を予約するなんて話があったな。

不作の年に予約権が高額の仮想通貨みたく飛び交い、いざ収穫期を迎えてみれば稀に見る豊作で、商人たちは大損をこいたって結末だ。

「そういう奴も出るとは思っていたが……」

そこまで言つて、俺はある可能性に思い至り、デルセンに向き直つた。

「デルセン、お前もやったのか？」

「わ、私は……そんな、価格が暴騰するほどは……」

思わず、敬称も敬語も吹っ飛ぶほど言葉が荒くなるが、殴らないだけ上等だろう。

どうやら、デルセンは俺が任せた仕入れ代行では飽き足らず、自分でもポケットマネーを持ち出して香辛料の買い占めを行ったらしい。

「で、何で在庫が放出されないんだよ？ お前のところで現物を確保しておくように言つたはずだろ」

「それが……」

聞けば、デルセンのキャラバンが盗賊に襲われたとのこと。

香辛料を輸送する編隊を組んでいたところを急襲され、まるっと……。

欲張りすぎて、ピークルの機動力を落とすたうえに目立つ編隊を狙われ、肝心の商品を根こそぎ奪われたわけか。

呆れてものも言えんな……。

「デザートホーネット団か？」

「いえ、どうやらブラッドイマンティスだそうです」

不用意な買い占めによる香辛料の予想以上の高騰。

当然ながら、盗賊は美味しい獲物と見なし、香辛料の輸送ピークルを狙い集まる。

価格調整の意味も兼ねて俺が確保していた品物は、今やクソツタレの手の中。

最悪だ。

さらに厄介なのは、相手がブラッドイマンティスの残党という点だろう。

上層部の壊滅で散り散りになったロクデナシどもは、手を変え場所を変え略奪に勤しんでいる。

統率が取れていない寄せ集めは、個別の対処こそ楽な傾向にあるが、一網打尽にできない点ではある意味で手ごわい相手だ。

「で、お前は自分が被害に遭って目論見が外れたから、俺を頼ってきたわけか。自分の

キャラバンが無事だったら、高騰も放置する気だったろ？」

「そ、そのようなことは、決して……」

どうやら凶星のようだ。

ケチな小悪党そのままだな。

結果的に、香辛料の高騰は数週間で落ち着いた。

物資の価格暴騰と略奪に関しては、ガーランド警察のファアガスンも治安の悪化とブラッディマンティスの勢いが回復することを懸念しており、俺たちは再び残党狩りへ繰り出すこととなった。

案の定、これを機にブラッディマンティスを再興しようとする勢力も現れ始め、彼らは数か月前の一斉討伐のときに勝るとも劣らない激しさで抵抗したわけだが、数の暴力の前にはどうしようもない。

闇ルートで売買するための倉庫を摘発した際は、警察ビークル隊にも死人が出る規模の戦闘となったが、無事に制圧された。

そして、肝心の香辛料の供給はといえば、押収品を俺が一手に引き受け輸送ビークルを大量に雇い割り振ることで、どうにか出回り始めたわけだ。

転売禁止の契約書まで作って卸売りを続けるという、かなりの力技だ。

当初の慈善事業まがいの予定より利益は出たが、あまり続けると商人に恨まれるし、こんなこといつまでも関わっているわけにはいかない。

正直、この件からはさっさと手を引きたいが……まあ、次の香辛料の収穫と販売が正規のルートで始まるまでの我慢だ。

願わくは、俺の手を離れても街でカレーパンが買える状況が維持されることだが……まあ、卸先のパン屋たちは職人なので、騙されたりしない限り問題は起こさないだろう。一方、今回の仕事で大損をこいたデルセンはといえば……。

「あのう……一つ、ご提案が……」

「ほう？」

「何と言いますか、販売ルートに関してですね、はい……今回の高騰の影響を受けているのは主にハッピーガーランド方面ですありまして……」

「それで？」

「えつとですね……利益率を鑑みると、今後しばらくはネフロへの供給を一時中止して、主にハッピーガーランドへの卸しを優先したいと……ダメでしょうか？」

ダメに決まってるだろ、この野郎！

デルセンは必死に価格高騰を狙っているわけではないと弁明するが、大方物価の高い都会で自分の持ち分を売り捌きたいところだろう。

まあ、商人からすれば、安く仕入れて高く売るのが当たり前、少ない労力や回数で高級品をガツンと売って儲けたいと考えるはずだ。

そう思う気持ちはわかる。

だが、今回は商人が要らん欲をかけたせいで、俺も執行機関も迷惑しているのだ。

それも、需要に対して供給を絞るといふ、完全に中間搾取の割合を膨らますやり方で利益を上げる、誰も得をしないやり方だ。

百歩譲って、儲けた金で何か皆の利益になる事業でもやろうというなら別だが、こいつらにそんな崇高な目的などあるはずもない。

贅沢に飲み食いして、ギャンブルまがいの投資をして終わりだ。

「この事業の意義は、新たな食文化の確立と経済効果。庶民が手に取れる価格で日常的な食事に根付く品を供給し、盛り立てていくことに意味がある。取引の量が多いだけに、お前たちにも十分利益になっていると思うが？」

「うう……」

徹底的に撃破されたキャラバンピークルの修理費で赤字とはいえ、彼には高騰の前と同じ量の香辛料の販売を任せている。

俺の優しさに感謝してほしいくらいなのに、大袈裟な野郎だ。

「——つてなわけで、俺としては外国からの香辛料の輸入とハッピーガーランド・ネフロ方面への輸送を強化したいわけさ。またケチな商人が妙なことをし始めないようになるには、仕入先をいくつも持つに限るからな」

「なるほど、香辛料の高騰と彼奴らが勢いづいた背景には、やはりお前の存在があつたわけか」

そう言われると、俺が元凶で面倒事が起こつたような表現にムカつくが反論はできな

な。まったく、どうして自分の結婚式の直前にああいう面倒事に巻き込まれる羽目になるのか……。

ドン・スミスの嫌味を意図的に無視して、俺は言葉が続けた。

「ガラガラ砂漠周辺とまったく同じものは手に入らないかもしれないが、それならそれで好都合。寧ろ、舶来品なら高級品を代替できる可能性があるからな。そちらのルートでも早めに売り始めてくれると助かる」

「いいだろう。香辛料の貿易はこの街にとつても利益になる話だ」

そうして、スームスームでも香辛料の輸入と販売が始まった。

舶来品と海産物がこの街ならではのカレーが生まれる日も近い……かもしれない。

137話 地下にて

「いらつしやい」

「…………どうも」

ハッピーガーランドの東地区に店を構える『ファツシヨン・キドリ屋』。

この大都会の商店街でナンバーワンの呼び声も高い老舗のブティックに、俺は訪れていた。

もちろん、新しいスーツを仕立てに來たわけでも、マルガリータにお土産を買いに來たわけでもない。

店主の挨拶を適当に流した俺は、そのまま真つ直ぐ店の奥の試着室に向かった。

……少し前までは清掃中や故障中の張り紙などで人を遠ざけていたが、今は堂々として微妙に隠れ家っぽく『バー・ブラツデイマンティスはこちら』と掲示が出ている。

「……………」

ふと店主の方を見ると、わざとらしく視線を逸らしながらも、ソワソワと試着室の前の俺を気にしている。

以前、ここがブラッディマンティスのアジトへの入口だった時代も、この店は普通に存在していた。

当然ながら、店主も地下の事実を知っていた。

彼女がブラッディマンティスと金銭的な利害関係にあったのか、それとも脅されて口を噤んでいたのかは知らないが……まあ、今となってはどうでもいいことだな。

試着室の隠し扉から梯子を下りた俺は、そのまま地下道を進み突き当りのドアを開いた。

店内に足を踏み入れると、薄暗いホールにはビリヤード台が並び、店内の片隅に設置された小さなカウンタ―が目に入る。

ここが元ブラッディマンティスのアジトにして、現在の『バー・ブラッディマンティス』の姿だ。

悪名を逆手に取った観光スポットとして密かな人気を獲得しつつある店だが、その雰囲気は評判以上に独特だ。

メインホールはバーカウンタ―の規模に見合わない広さで、テーブル席に座る客のほとんどは鋭い眼光を持つ強面の男たち。

一部の人間が見れば、テーブルの男たちが捜査官であることは簡単に見抜ける。干ジェント

客を装い寛いだ姿勢をカムフラージュしながらも捜査員が目を離さないカウンター奥に居るのは、色合いは地味ながら高そうなスーツに身を包み片眼鏡を掛けた強面の男だ。

表向きはこの店のマスターだが、彼こそ元ブラッディマンティスの参謀にして当局の監視対象コンフリーである。

「……いらつしやい」

俺がカウンター席に座ると、コンフリーは僅かに顔を顰め、そして何かを諦めたような表情で心の籠らない歓迎の言葉を掛けてきた。

何故、彼がここに居るのかといえば、理由は簡単だ。

ホトトギスの森で俺に敗れたコンフリーは、爆撃の後ハッピーガーランドから逃走を図ろうとしたところで捜索の網に掛かり、そのままお縄となった。

今のコンフリーは司法取引で実刑こそ免れたものの、24時間フルで監視が付けられた状態でこのバーのマスターとして働き、行動は逐一記録され接触した人間の素性は徹底的に洗い出される。

地上の『ファッシュョン・キドリ屋』も常にどこからか当局に監視されている。

要は、元幹部であるコンフリーを囮にして、彼を頼る元ブラッディマンティス構成員のデータや関連する犯罪組織の情報を収集するのに利用しているわけだ。

いわば、警察の飼い殺しである。

「……全て、あなたの計画通りですか？」

俺が注文したウイスキーの水割りサーブしながら、コンフリーは苦々しい表情で問いかけてきた。

目の奥で俺を睨みつつも、滑らかな動作でグラスを押し出してくるあたり、マスターぶりも随分と板についてきたようだが……惜しいな。

氷が細かすぎる。

これじゃあ水割りではなくミストだ。

曲がりなりにも高級路線のバーで売っている以上、こんな雑に薄めた酒を出したら客はキレるだろうに……俺へだけの嫌がらせかな？

普段なら、コンフリーが相手ともなればネチネチと文句を付けてやりたいところだが……俺は黙ってグラスを傾けつつ答えた。

「まさか。ただのジャックポットさ」

はつきり言って、コンフリーを生け捕りにできたのは、幸運というかほぼ偶然の産物だ。

確かに、ファーガスンには事前に参謀コンフリーの存在を伝えていた。

警察は早い段階からコンフリーの動向を探り、彼の立ち回りに注視していたが……ま

さかそれだけで上手くいくとは思っていなかった。

正直、ホトトギスの森の戦闘現場からコンフリーの遺体が見つからなかったと聞いたときは、間違いなく逃げられたと思った。

爆撃の後、彼がハッピーガーランド付近に潜伏していたところから逃走途中で捕まえられるのは、本当に運が良かったとしか言いようがない。

「だが、それ以上にお前が間抜けだったということだな。いつも高みの見物の参謀閣下が、俺と直接やり合って負傷して、まともに動けなかったとは……」

「まったくもって、その通りですね」

「そう拗ねるなよ。今やお前は当局の協力者。この場所や監視が証人保護の側面も持っている以上、もしもガーランド警察の影響圏を外れた場合、お前に待っているのは……最早、言うまでもないな。律儀な死刑執行人つてのは、どこにでも居るものだろう」

「……一部の協力者を通じて、私が逃げるとは思わないので？」

「それが無理なのは証明されたら？ 確か、この前の香辛料の高騰とお前の元お仲間の起こした騒ぎに乗じて、逃走計画を練っていたらしいじゃないか。お前にはお粗末な計画だが、焦っていたにしろ何にしろ、刑期が伸びたのは確実だな」

「……………」

「ま、へそくりを持ち出して国外逃亡する計画は頓挫したかもしれないが、今やお前さん

も立派なカタギだ。安全なネグラと緩い職場が確保されている以上、捉え方によっては犯罪組織の幹部よりいい生活かもしれないぜ」

俺は黙りこくるコンフリーへの煽りを適当に切り上げると、グラスを傾けて薄い酒を飲んだ。

地下から世界を支配しようとした男が、今は地下に囚われ外に出ることも叶わない……こいつには散々煮え湯を飲まされたが、結末は皮肉なものだ。

俺がグラスの中身が半分ほど消費したところで、バーの入口の扉が開いた。

店内を見回したサングラスの男はカウンターに俺の姿を見つけると、若干気取った所作で手を挙げた。

「おう、待たせたな」

「いや、俺もちよつと前に来たところだ」

現れたのはフェンネルだ。

まるでデートの待ち合わせのようなやり取りになってしまったが……今日俺がここに来たのはフェンネルと話をするためでもあるのだ。

俺はコンフリーに注文を告げたフェンネルを席へ促すと、自分もグラスを持ってボツ

クス席の方へ移動した。

「最近、どうだ？ トロット楽団の方は……」

「端的に言って、ほぼ休業状態だな。バナラが外国に行つちまつて以来、残ったメンバーで何度か軽いパフォーマンスはしたが……正直なところ、今はロクに活動できていない」

「そうか……」

他愛のない話ながら、話を振ったフェンネルの方が些か難しい表情で顔を伏せてしまった。

今さら気を遣い合う間柄でもないので俺も率直に話すが、近況を思い返せばやはり俺たちの周りではネガティブな出来事が多い。

「あいつら、全然集まらねえのか？」

「ああ、マジヨラムは声を掛けているが、バジルはフラフラしているしコニーもあまり顔を見せなくなつた。それに……セイボリーはもう居ない」

「……………」

ダンディリオンとセイボリーを失い、皆が未だに喪失感から逃れられない。

皆それぞれ想いを噛み締め、忘れようと努め、はたまた現実逃避し……同じ哀しみを共有しているだけに、俺もマジヨラムも厳しいことは言えない。

そうして、トロット楽団は徐々にバラバラになりつつあった。

「確か……フェンネルも含めて最後に全員が集まったのは、俺の結婚式だったな」

「そういえば、そうかもしれないねえな」

「あれからコニーには会ったか？」

「ああ、少し前にゴールドーンでな。ローズマリーの家で顔を合わせた」

「この件は初耳だったので、俺は若干前のめりの姿勢でフェンネルに問いかけた。

「どうだった？ 彼女の様子は？」

「いつにも増して、明るい笑顔だったぜ」

「そうか……そいつあ、ちよいと心配だな」

「同感だ……」

彼女がチコリの件を引き摺り無理に明るく振る舞っていたことは、俺もフェンネルもよく知っている。

だからこそ、コニーに関しては接し方に多少の差こそあれ、同じような見方になってしまふ。

もちろん、彼女もそこまで心配されるほど子供ではないかもしれないが……フェンネルにとつてはずっと妹分のような存在だったこともあり、長らくゲームのキャラとして彼女を見てきた俺は言わずもがなだ。

そうなる、やはりコニーにはバニラの存在が必要だという結論に達する。バニラが傍に居ない今、俺たちがコニーにしてやれることは少ない。

そう考えると……今はまだ、楽団メンバーがお互い距離を置く期間でもいいのかもしれない。

マジヨラムは楽団から少し離れて家業に戻り、コニーはバニラとの再会を夢見てロズマリーとのんびり過ごし、バジルは傷心旅行も兼ねてフラフラして……そうして頭を冷やせばいい。

それだけで縁が切れて離散してしまうほど、俺たちの絆は脆くない。

「ところで……そっちの方は順調らしいじゃないか？ 『ブルーサンダース』の公演スケジュールは全盛期のトロット楽団並みの忙しさだろ？」

「いや……まだそこまでじゃねえさ」

俺は沈んだ空気を払拭するため話題を変えたが、フェンネルは頭を振った。

彼は謙遜するタイプではないので、返答の自身は単純な事実であろうが……何やら言いたい淀んでいる様子だ。

「……どうした？」

しばしの沈黙の後、フェンネルは顔を上げて口を開いた。

「今だから言うがな……俺がトロット楽団を抜ける決心をできたのは……グレイ、お前の存在があったからだ？」

「え？ 俺の？」

思いがけない一言に、俺は思わず間抜けな表情で驚愕した。

「もちろん、他人の存在一つで左右するほど、俺の意志が薄弱だったわけじゃねえ。そこは勘違いするなよ」

「ああ……」

確かに、原作でもフェンネルはトロット楽団を脱退し自分のバンドを立ち上げる。

それを思えば、どちらにせよ彼の離脱は避けられない運命だろう。

「お前と出会う前から、俺のやりたい音楽を実現するには、今のままの環境じゃダメだと思ってた。だが、ちょうどあの頃は……リーダーのダンディリオンも駆け出しで苦労して、チコリはガーランド大学で周りと上手くやれなくて……その矢先にあの駅前の件だ。あの時のコニーたちの様子は……。とにかく、どこかで俺が面倒を見てやらないといけない気分になってた。大して役に立ってもいねえのに、結局はズルズルと……」

フェンネルが新しい音楽を模索していたのは、チコリの死亡事故が起きる前からということか。

単純に計算して、五年以上はそうしたモヤモヤを抱えながらトロット楽団のギタリス

トを務めていたことになる。

彼の音楽に対する一途な情熱を思えば、あまりにも長い足踏みだ。

「それはやはり……ローズマリーさんやナツメツグ博士への恩義で？」

「そうかもしれないねえな。ローズマリーは何の身寄りもない汚えガキだった俺にギターを教えてくれた。ナツメツグ博士にダンディリオン……トロット楽団の奴らに引き合わせてくれた。ナツメツグ博士も俺にビークルを譲り、生きる術を教えてくれた。その恩を忘れたことは一度たりとも無え。だから、全く恩を返せない自分に、何もできない自分に余計イライラしてたんだと思う」

正直、フェンネルの口からこういう話が聞けるとは思ってもみなかった。

女々しい後悔や過去の振り返り方はしない奴だと思っていたが……何だかんだ、フェンネルは面倒見のいい奴だ。

厚い人情と音楽への情熱を併せ持つが故に、彼の中では激しい葛藤があったことだろう。

トロット楽団の脱退やコニーたちと距離を置くことは、門出や挑戦であると同時に仲間を裏切ったような気分にもなり、だからこそ自分を追い詰め後に引けなくなった。

そういう意味では、自分勝手になれない分、フェンネルは人並み以上に気苦労をしているということだ。

禿げないか心配だな。

「だから、何つうか……お前がトロット楽団に加入したのは、ちょうどいい機会だったのさ。お前みたいな先を見越して動ける、しかも面倒見のいい男が来てくれて……」

フェンネルは若干自嘲するように鼻を鳴らしたが、それも彼が見た目以上に気配りのできる性格ゆえだろう。

まあ、俺にしてみれば当初の予定通りなわけで、フェンネルの行動には特に悪感情を抱いてもいない。

寧ろ、都合よく彼の思考を誘導した気がする分、若干気が引ける思いだ。

それに……。

『ブルーサンダース』の活躍は喜ばしいことだ。俺もエレキギターやアンプ類の開発に関わっている以上、フェンネルたちの名が売ればこつちにも利益があるからな」

「そうか……」

「ナツメツグ博士も喜んでいるさ」

「……だといいがな」

そう言うと、フェンネルはクイツとグラスを傾け、ウイスキーのオンザロックを飲み下した。

ハードボイルドが絵になる男だ……。

そうして、俺がグラスの中身を干したところで、もう一人の待ち合わせメンバーが現れた。

「ジョージ、こつちだ」

「おー、グレイさん。フェンネルも、もう来てたのか」

俺は自分のおかわりと一緒にジョージの分の飲み物も注文し、彼を席へ促す。

シテイモーターズの整備工であるジョージは、俺が研究費を出してエレキギターの開発を任せている男だ。

彼は早速とばかりにケースの中身を出して俺たちに見せた。

「見てくれ。新型のオーディオ専用ケーブル『シールド』だ。グレイさんの言う通り、高音を伝達する回路を長めにして、高音域と低音域の伝達時間を揃え、太いサウンドを出せるように改良した。規格は前に渡したギターとアンプに対応している。試してくれ」
既に、ピックアップでスピーカーに出力するタイプのエレキも、ジョージは開発している。

フェンネルバンドでは小型エンジンと小型発電機で直接アコースティックギターのサウンドを増幅する電気ギターも使っているが、最近はこの地球式のエレキも徐々に導入している。

今回のアイテムも、フェンネルは気に入ってくれたようで、子どものようにウキウキとした表情を浮かべている。

「ああ。これでまた一段パワフルなサウンドを実現できる。新しい電気ギターと一緒に、早速使わせてもらおうぜ！」

そして、フェンネルは俺たちと最低限の会話を交わすと、新型のシールドを抱えて帰っていった。

俺もフェンネルのギターがどこまで行くのか楽しみだ

138話 母親と弟子

愛機「ジャガーノート」を駆りホトトギスの森を抜けた俺は、山奥の村ゴールドーンへとやって来た。

寂れた廃坑の街などと言われていたのは昔の話、今や温泉巡りの観光客で賑わう一大リゾート……と言いたところだが、この印象は以前からさほど変わらない。

ハッピーガーランドからビークルで行ける距離とは思えないほど、活気の無いど田舎だ。

今日も一組のカップルがマイナーな秘境の温泉巡りでやって来ただけと見える。

まあ、下手にビークルの車列が押しかけて来るより、ここの住民の健康にとつては今のままの方がいいかもしれないな。

そんなことを考えながら、俺は村の一番奥にある民家の扉をノックし、室内へ足を踏み入れた。

「お邪魔しますよ」

「あら、グレイ。いらっしやい」

黄色いエプロンを身に着けた家主のローズマリーはこちらを向いて微笑むと、再び目の前の鍋に視線を戻した。

彼女の前のキッチンストーブに掛けた鍋の中では、キノコと鳥肉の入ったシチューが煮込まれている。

「どうやら、食事の準備中のようだ。」

「ああ、そうだ。コニーから聞いたわよ。あなた、結婚したんですって」

「ええ、そうですね。報告が遅くなりましたが、同じナツメグ博士の弟子のマルガリータと一緒にしました」

一頻り鍋の中身を掻き回したローズマリーはお玉を置くと、こちらへ向き直り悪戯つぽい笑みを浮かべた。

「……いいのかしら？ 新妻を放って、女の一人暮らしの家へ訪ねてくるなんて」

「はははっ！ 心配ご無用です。若くて（・・・）、美人で、氣立てのいい嫁さんですから。俺が彼女を裏切るわけがないことは、向こうもわかってますよ」

「あらあら……あなたも言うようになったわね」

若干の嫌味を込めて強調したフレーズに、ローズマリーは微かに黒い殺気を放出した。

うん、これ以上煽るのはやめておこう……。

「何はともあれ、おめでとう。式には出られなかったけど、ここでお祝いを言わせてもらうわ」

「いえいえ、ありがとうございます。……それより、具合は大分よさそうですね」

「ええ、体の軽さは健康そのものよ。もう普通に動けるし。でも、薬はもう少し続けるのよね？」

「そうですね。こちらは予防の意味もありますので……。投与量は徐々に減らしていきすから、最終的には以前と変わらない生活ができるかもしれません。ただ一応、次の博士の診察までは、息切れや咳の悪化には注意して、勝手に服用を止めないように。念のため、発作治療薬の方も手元に置いてください」

「わかったわ」

「あとこれ、差し入れです」

「まあ！ わざわざありがとうございます。……あら、これはもしかしてカレー粉？」

「おや、もうご存じで？」

俺が紙袋の中身を取り出していくと、ローズマリーはスパイスの入った瓶に目を止めた。

今回、俺はピジョン牧場とミームー村のチーズや乳製品などをメインに持ってきた

が、やはり街でないと手に入らない品は外せない。

最近香辛料の価格も落ち着いてきたことだし、料理好きのローズマリーにはちょうどいいと思つたのだ。

しかし、いくらビークルの発達した世界とはいえ、文明から隔絶された場所に居るローズマリーが、最近出回り始めた香辛料を知っているとは……。

ふと、屑箱の方へ視線をやると、ハッピーカーリーの紙袋が見えた。

「なるほど、カレーパンは既に召し上がりましたか」

「ええ、フェンネルが持つてきてくれたの」

そういうところは、妙に気の利く奴だ。

トロット楽団メンバーとギクシヤクしながらも、ローズマリーへの気遣いは忘れないあたり、律儀というか不器用というか……。

「そうそう、フェンネルといえば……コニーから聞いたわよ。あなたの結婚式を機に、皆フェンネルと仲直りしたんですって？」

「いや、別に対立していたわけじゃないですけど……俺は普通に付き合いましたし、マジヨラムも……」

「わかつてるわ。どうせ、フェンネルが意固地になつていたのね。あなたやマジヨラムはともかく、バジルなんかはどう接していいかわからなかった。彼もそういうところは

相変わらずだわ……。きつと、未だに一言目は『俺はもうお前たちとは関係ないが……』とかでしょ？」

「まるで見てきたような言い様ですが……目に浮かぶようですね」

「まあね。伊達にあの子たちを長く見てきたわけじゃないから」

以前、どこかで聞いた気もするが、ローズマリーはコニーの母親というより皆の母親のような人物だ。

フェンネルも彼女にだけは頭が上がらないあたり、そこら辺はお見通しか。

「バジルにとっては、あなたの結婚式はフェンネルと向き合ういい機会だったかもしれないわね。あの子も妙に意地っ張りで拒絶しやすいところがあるから」

確かに、あいつは一度いじけると相当面倒なことになるからな。

喜怒哀楽といえばまだマシだが、状況によつてはまるでヒステリー……まあ、バジルの存在で陰鬱な空気が消し飛ぶことがあるのは否定しまい。

「その点、マジヨラムはしつかりしてるわね。斜に構えたフェンネルにも平然と声を掛けたに違いないわ」

まあ、彼は相変わらずだな。

マイペースというか、大らかというか……そういう気質に救われることもあるのは事実だ。

「でもね……」

ローズマリーは一点、険しい表情を浮かべると、ゆっくりと口を開いた。

「やっぱり、あの子たちにとつてもダンディリオンとセイボリーのことは軽くないわ」

「聞いてくれるかしら？」

俺が一つ頷くと、ローズマリーはダンディリオン兄弟やセイボリーとの出会いを語った。

歌手として活動しながら幼いコニーを育てていた頃、ナツメツグ博士が引き取り援助していたダンディリオンとチコリに出会ったこと。

博士からの頼みで二人に譜面の読み方など音楽の基礎を教えたこと。

ダンディリオンが博士の与えたバイオリンを瞬く間に弾きこなし、ガーランド大学へ推薦入学が決まったこと。

弟のチコリにもバイオリンの才能は受け継がれており、いずれ彼もダンディリオンと同じく音楽科で学ばせようという話になったこと。

そして、ローズマリーの歌声に惚れ込んだセイボリーが、自ら弟子入りを志願しに来たこと。

セイボリーがダンディリオンに惹かれていた事実には、ローズマリーもどことなく気

づいていたこと。

途中、孤児だったフェンネルとの出会いなどの話を挟みつつ、ローズマリーはダン・デイリオンとセイボリーを中心に、かつての子どもたちの様子を語った。

決して余裕のある生活ではなかったはずだが、充実した時間だったことだろう。

彼女の教えた子どもたちを中心に組まれた楽団は、徐々に知名度を上げ、いつしか有名なプロのバンドに並ぶ人気者となっていた。

ローズマリーが体を悪くし始めた後も、ダン・デイリオンは楽団を引き継ぎ、その卓越したバイオリンの腕で観客を魅了しトロッツ楽団の人気を決定的なものに押し上げた。

……そんな、忙しくも幸せな日々が彼女たちにはあつた。

それを壊したのがマーシユであることは疑いようもない。

だが、決定的な止めを刺したのは……。

「あ、別にあなたを責めているわけではないのよ。私もまだ完全に割り切れたわけじゃないけど、あのまま進んでもあの子たちが不幸になることに変わりは無かったから」

思わず硬い表情を浮かべる俺に、ローズマリーは慌てたように手を振った。

気を遣わせてしまったかな。

「ええ、大丈夫です。お気になさらず。ですが、俺も言い訳をするつもりはありません。

俺はこの街を……自分の生活と利益を守るために、ダン・デイリオンたちの野望をぶつ潰

しました。兄弟子を、友を……同じナツメグ博士に救われた兄弟を、この手で死に追いやったんです」

「……………」

「罵詈雑言くらいなら受け止めますよ。これでも、あなたの子どもたちより年は食ってますからね。『二人を止めてくれてありがとう』なんて言葉を期待するほど、おめでたい頭はしていません」

事の顛末に關して、マジヨラムやフェネルは決して俺を責めない。

それは彼らもブラッディマンティスと戦ったから、彼ら自身もダンディリオンやセイポリーと対峙するポジジョンに立ったからだ。

だが、ローズマリーは違う。

彼女はガラガラ砂漠決戦にも『グランドファイナーレ』との戦いにも参加していない。

俺も今更自分の選択や立ち回りを否定するつもりは無いが……どんな罪を犯そうが、非道な真似をしようが、母同然であったローズマリーからすればダンディリオンたちを全否定する気にはなれないだろう。

正直、俺が彼女に責められるのは仕方ないと思っっている。

俺はそれだけのことをしてしまったのだ。

そういう道を選んでしまったのだ。

しかし、ローズマリーはほっと息を吐くと首を横に振った。

「やめておくわ。そんな当たり方をしたら、私の方こそ大人げないもの」

「……ははっ。確かに、おっさんとおばさんの諍いは見苦しいですからな」

「言ったわねえ！」

口元は笑いつつも目を吊り上げたローズマリーは、俺の後頭部に片手鍋を振り下ろした。

寸でのところで躲したが、なかなか鋭い一撃だ。

マルガリータに比べれば華奢で非力な彼女も、この不便な田舎で水汲みから料理まで一人でごなしている以上、現代人よりは遥かに逞しい……桑原桑原。

そして、俺は何となしにお互い避けていたであろう話題に水を向けた。

「そうだ、肝心のコニーのことですが……」

「あの子なら大丈夫よ」

即答しながら、ローズマリーは油断した俺の足を鋭く踏みつけた。

鍋を持ち直す動作をフェイントに仕掛けて来るとは……根に持つタイプだな。

「ぐ……そうですか」

「ええ。あなたとフェンネルには感謝しているわ。でも、もう少し見守ってあげてくれないかしら？ あ、別にあなたたちの存在が邪魔になるというわけではないのよ。ただ

……あの人が一人でもしっかりと立てるように……その先でいざという時に支えてくれるのは、あなたたち二人じゃないんでしょ？」

俺がこの時期にローズマリーのところに顔を出したのも、何となくコニーの様子が気になっていたらだ。

かと言って、バニラの存在が無い状態で彼女に何と声を掛ければいいのかわからず……。

それはローズマリーも最初から承知していたことだろう。

まあ、彼女がそう言うのなら間違いあるまい。

……俺もフェンネルも揃って不器用な真似をしているみたいだな。

「わかりました」

「あ、そうそう……代わりについていうのもあれだけど、グレイに一つお願いがあるの。聞いてもらえるかしら？」

「何です？」

「トニオのことが少し心配なの。楽器職人に転向したダンディリオンに憧れて弟子入りして、まだそんなに経たないうちにあんなことになっちゃって……。色々頼んでしまつて悪いけど、もしよかつたら様子を見に行つてくれない？」

そういえば、彼とはしばらく会っていなかったな。

ガーランド警察が楽器工房の捜索に訪れたときには俺も同行し、事情が呑み込めない彼をどうにか取りなした覚えがあるが……トニオとはあの時に話したきりだ。

彼もまだ整理できていない思いなどはあるだろうが、この辺りで一度話してみてもいいかもしれないな。

「了解です。近いうちに……何なら、今日あたり行つてみますよ」

「お願いね」

わかつたから、俺の足を踏みにじるのはそろそろ勘弁してもらえないだろうか……。

ローズマリーの家を後にした俺は、その足でホトトギスの森の展望台へと向かつた。この先にあるのはチコリの墓、そして今はダンデイリオンとセイボリーも並んで眠っている。

以前は何度かチコリの墓参りに来ていたが、ダンデイリオンとセイボリーをここに埋葬してからはほとんど訪れていない。

もちろん、マルガリータとの結婚式の準備や細々としたトラブルのせいで忙しかつたのもあるが……また随分と脚が遠のいてしまったものだ。

「あ、グレイさん」

ビークルから降りると、俺は墓地の方から声を掛けられた。

現れたのは、偶然にもダンディリオンの弟子のトニオだった。

彼の足元の三つの簡素な墓には、それぞれ花束が添えられている。

「あなたもお墓参りに？」

「……ああ」

トニオは俺が手にしたゴールドーン産の地酒の瓶を一瞥し、微かに苦笑いした。

……別に、墓参りを口実に酒盛りをしようってわけじゃない。

ローズマリーに言われて急遽来たせいで、花束が用意できなかったただけだ。

若干、居心地の悪い思いをしながら酒瓶を空けた俺は、チコリ、ダンディリオン、セ

イボリーの墓へ順番に酒を掛けた。

ダンディリオンの酒の好みなど知らないし、死亡当時のチコリは十代前半だろうが

……まあ、構うまい。

そして、それぞれの墓に俺が冥福を祈り終わると、トニオが口を開いた。

「先日……押収品が返ってきました。聞けば、グレイさんが手を回してくれたとか……

ありがとうございます」

ブラッドディマンティスによる一連の事件が収束した後、ガーランド警察は捜査チーム

を編成し、首謀者であるダンディリオンの楽器工房へ搜索に入った。

工房の地下からは、ダンディリオンがエルダーとして闘技場に出場するのに際し、愛機の「ホワイトレクイエム」を彼自ら整備改良するのに使っていた施設が発見された。

もちろん、地下の搜索は原作の知識で整備場のことを知っていた俺の誘導に端を発するわけだが……案の定というか、その場所では「ホワイトレクイエム」の装備や技術書だけでなく、ブラッドイマンティスの技術開発に関する機密書類まで見つかった。

捜査チームにしてみれば、かなりの収穫でありお手柄だ。

原作では、一年後にバニラが訪れたときも、技術書や資料のほか「ホワイトレクイエム」まで丸ごと放置されていたが、やはりというか現実では全て押収の流れとなる。

そこで、俺はファーガスン経由で押収品の調査に協力するという名目のもと警察署を訪れ、「ホワイトレクイエム」のパーツをいくつか引き取らせてもらったのだ。

既に記録も取り終わった用済みの物品、しかも功績を立てるのに協力した俺の願いとなれば、彼らが無下にするはずもなく、無事にエクスカリバーアームは俺のものとなった。

地上の楽器工房の方からの押収品も、調査が終わり怪しい部分が無かったものは返還するよう頼んだわけだが……正直、そっちはついでだな。

ダンディリオンとトニオが守ってきた工房を土足で荒らしたようので気が引けたので、

せめてもの配慮として口を出したわけだが……まあ自己満足だ。

「それに関しては気にしなくていい。俺も……少し思うところがあつてな……」

「そう、ですか」

「ああ。それよりも、悪かったな。【ホワイトレクイエム】のパーツなんかも、本来ならそちらへ戻すのが筋かもしれないが……」

「いえ、私はビークルにはそれほど詳しくないので、 그레이さんが引き取るということなら何も」

まあ、トニオが強力なビークルパーツなど持っていたてもいいことは無いか。

下手に強力な武器や高級なパーツを持っていることがバレれば、ロクでもない奴が工房にやって来る可能性もある。

そんなことを考えていると、トニオは生気の無い表情で重々しい表情で口を開いた。

「ここに来ると……毎回、考えてしまうんです」

「……………」

「ダンディリオンさんは、何故あのような恐ろしいことをしたんでしょう？ あんなに優しくかった人が……一体、何がダンディリオンさんを追い詰めたのでしょうか？」

俺は何も答えられなかったが、トニオは言葉を続けた。

「復讐に生きて、ダンディリオンさんは本望だったのでしょうか？ それとも、弟さんの

仇を討てなかった無念に包まれて逝ったのでしょうか？ 私は……何一つ、先生のことを理解していなかったのかも知れません」

「独白するように問うトニオも、きつと答えなど求めていないだろう。」

「一つだけ確かなのは……ダンディリオンは最後まで復讐に執着し、そしてセイボリーを共に逝った。」

「それだけだ。」

「セイボリーの死と自分も銃弾を食らったことで目が覚め、穏やかに眠ったのか。」

「それとも、大切な存在を喪って打ちひしがれ、ただ諦めて静かに力尽きたのか。」

「今となっては、それすらも定かではない。」

「そう、ウミネコ海岸で彼の最期を看取った俺にも、最早わからないことだ。」

「……一杯どうだ？」

「……いただきます」

「俺はトニオにコップを差し出し、なみなみと酒を注いだ。」

「一気に呷ったトニオは強めの酒精に思わず咳き込むが、ヤケクソのようにコップの身を喉に流し込む。」

「ゴホッ……返杯を……」

「俺は飲酒運転になっちまうからなあ……。俺の分も飲んでくれ」

俺は「ジャガーノート」を軽く示すとトニオのグラスに再び酒を注ぎ、残りをダンディリオンとセイボリーの墓の前に零した。

生粋の酒飲みからすれば罪深い行いだろうが、お供えの残りを家に持って帰るのもな……。

何とも、締まらない話だが……。

「ま、今日は俺の奢りだ。浴びるほど飲めや、ダンディリオン」

「……………」

そんな俺を尻目に、トニオも酒を飲み干した。

まともな墓石も十字架も無い、ただ酒の染み込んだ土と簡易的な墓標があるだけの三つの墓は、何も語ることはない。

そして、空になった酒瓶を「ジャガーノート」の荷台へ放り込んだ俺は、トニオに向き直った。

「なあ、トニオ」

「はい」

「バイオリンを……一つ作ってくれないか？」

俺の言葉にトニオは微かに驚いたような顔をしたが、やがて表情を引き締めてこちらを見返した。

「それは、グレイさん用に？」

「ああ。ちよつと……弾いてみたいんだ。そつちの言い値でいい。期限も特に無いから、製作期間は君が納得するまでで構わない。だが、正直俺は弦楽器があまり得意じゃない。もしかしたら、すぐに音楽室の置物と化してしまうかもしれない。……それでも良ければ、作ってくれ」

俯いたトニオはしばらく考え込むような動作で沈黙した。

勿体ぶっているわけでもないだろうが、彼も今の状態でオーダーの仕事を引き受けるにあたっては、色々と考えるところもあるだろう。

しかし、最終的にトニオは俺を真っ直ぐに見据えると、はっきりとした口調で返答した。

「承りました」

今、彼に仕事を振ることがどのような影響を与えるかはわからない。

果たして、ローズマリーの期待に応えられたのか……それすらもわからない。

だが、トニオの目には先ほどとは比べ物にならない気力が宿っていた。

今は、それだけでも十分だろう。

そして、少し酔いが回ったトニオを工房に送り届け、俺はホトトギスの森を後にした。

139話 確執と隔意

バー・ブラッディマンティス。

元ブラッディマンティスのアジトという曰く付きで、ハッピーガーランドの地下に店を構える、知る人ぞ知る隠れ家的な酒場……。

そんな、モダンながら落ち着いた雰囲気の内店で、俺はかつて無いほど居心地の悪い空気を感じていた。

「ほう、なかなか洒落た店ではないか」

「で、でしよ〜？」

「まあ、元ブラッディマンティスのアジトと聞くと……酒が不味くなりそうだがな」
「……………」

ボックス席で俺の隣に座るナツメグ博士は、吐き捨てるように言い放った。

テーブルの上で鈍く光るキャンドルに照らされた空間は、張り詰めたような緊張感と重い空気に支配されているが、不貞腐れたような態度のナツメグ博士は明らかに機嫌が悪い。

一方、俺たちの対面に座るロマンスグレーの紳士は沈黙を保ったままだ。

「と、ところで！ あのマスターつてめつちや悪い奴なんすよ。ブラッディマンティスの元参謀で、数々の犯罪の首謀者。おまけに最後は自分だけ逃げようとして……今はこうして当局の飼い殺しで残党搜索の囷をやってますが、いつまた裏切つて当局の監視を振り切りテロを計画するかわからない極悪人です」

「なるほど……だが、グレイよ。世の中には、もつと悪辣な者たちが居るとは思わんか？
例えば、人を殺めながらその事実を隠蔽するとか……。子どもの行いとはいえ、自らの所業に向き合わせることもなく剩え無かつたことにしようなどと……他人も己も同じ。人”であることすら忘れたと見える。歪んだ特権意識のなれの果てじゃな」

「……………」

何でそういうことを言うかな！

まったく、これだから偏屈な爺というのは……。

まあ、正面の席の男がナツメツグ博士の言動に対して感情を乱さないのは、不幸中の幸いといったところか。

向こうまでキレルようだったら、さすがの俺にもどうしようもない。

何歩引いた立場を取ろうと、俺にとつてナツメツグ博士は恩人。

最終的にどちらの味方をするかと聞かれれば、間違いなく博士に付くからな。

そんなことを考えていると、先ほどまで若干迷惑そうにこちらを見ていたマスターとコンフリーが、こちらに近づいて来た。

「お客様、オーダーをどうぞ」

「……響21年、ハイボールで。あと若鶏の唐揚げ、ニンニクしょうゆ味な」

「畏まりました。ウイスキーのソーダ割りと肉料理ですね」

コンフリーは苦々しい表情をさらに険しくしたが、理性で抑え込むように軽く頭を下げるとカウンターの下がった。

慣れて風を装いやがって……次はさらに無茶難題を突き付けてやろう。

そして、さすがに何も進展のない状況に博士もしびれを切らしたのか、ため息をついたナツメッグ博士はようやく顔を上げ、正面の人物を見据えた。

「……それで？ そっちのお前さんは何の用かの？」

「ご無沙汰しております、ナツメッグ博士。本日は……」

「下らん挨拶はいい。……セントジョーンズ卿」

「失礼しました」

胸に手を当てて礼をする初老の紳士ことセントジョーンズ卿を、博士は冷たく拒絶した。

矜持の見える姿勢から一気に腰を折ったセントジョーンズ卿は、ナツメッグ博士に深

く頭を下げるが、博士は何も反応を示さない。

コンフリーへの無茶振りで若干のストレスは解消されたものの、視線を戻せば目に入るのは未だ険悪な雰囲気に支配された重々しい空間……ああ、胃が痛い。

バー・ブラッディマンティスで開かれた、ナツメツグ博士とセントジョーンズ卿の会合。

状況を見てもらえばわかる通り、今日この場をセッティングしたのは俺だ。

一応、建前的にはセントジョーンズ卿が俺たちを招いたということになっているが……セントジョーンズ卿には俺から事前に話を通して呼び出し、博士はハッピーガーランド方面に来る用事が出来たタイミングで適当な理由をつけて連れてきたのだ。

そう、この世紀の大会議が開かれた背景は、俺の惜しみない努力と綿密な計画に裏打ちされたものなのである。

話を戻すが……会合の目的は、犬猿の仲であるセントジョーンズ卿とナツメツグ博士を引き合わせ、最低限のコミュニケーションを取ってもらうため、といったところだ。

チコリの件に続いて、ダンデリオンのテロ行為。

お互いにダメージも負い目もある状況……傍から見れば、どちらかが死ぬまで終わらない復讐の連鎖に陥っている関係にも見えるだろう。

もちろん、この二人が表立って対立したり殴り合ったりしているわけではない。

二人ともいい大人なのはもちろん、どちらも国中に名の知れた著名人であり、取り巻きや信奉者の存在も多く抱える身。

自分だけでなく周りが下手な勇み足をやらかささないよう、お互いかなりの配慮をしている。

そんな背景もあり、俺はこの二人に対話の機会を設けることは、今後の関係改善に役立つと信じて疑わなかった。

……まあ、半分はノリで連れてきたというか、ついでというか、そんな感じだが。

何はともあれ、ちょうど二人が時間を取れるタイミングで引つ張つてくることのできた。

ホテルのレストランやカフェより内密の話に向けた会場も確保できた。

ところが……いざ蓋を開けてみればこの有様だ。

いい年の大人とは思えない頑なな姿勢の博士に、ロクな言葉も発せないセントジョーンズ卿……。

既に料理がテーブルに運ばれているにもかかわらず、二人ともなかなか皿に手を伸ばさない。

必然的に取り成し役となる俺は、ひどくギクシャクした二人の間で、まさに板挟み状

態である。

何でこうなるのやら……。

「はあく……博士、いい加減に機嫌を直してください。確かに、騙し討ちのような形で連れてきたことは悪いと思つていますけど……」

「別に構わんぞ。ローズマリーの診察がてらお前さんに付き合つて寄つただけじゃ。どうせ、すぐに帰る」

「……………」

にべもない博士の態度に、セントジョーンズ卿はまたしても沈黙するが、俺は言葉を続けた。

「俺の立場にもなつてくださいよ。マーシユのことを抜きにしても、俺とセントジョーンズ卿の間には、多額の金と利権で結びついたズブズブの利害関係があるわけですから……………」

「むむ……グレイ君、もう少し言葉を選んでくれないかね？」

セントジョーンズ卿は複雑そうな表情で俺の言い様に苦言を呈すが、嘘は言っていない。

それに、今は不平不満に付き合っている場合ではないので、言葉を続ける。

「今までの諍いや軋轢を全て水に流せとは言いませんから。とりあえず、今日は飲みま

しよう。おっさんは皆好きでしょ、飲みにケーション！」

「……………ふんっ」

ナツメツグ博士は不機嫌そうに鼻を鳴らしたが、どっかりと椅子に深く腰掛けたあたり、すぐに帰る云々は撤回してくれたようだ。

「で、今日の飲み代ですが……………そちらはセントジョーンズ卿持ちということだ」

「ああ、それは構わんが……………」

「さすがつす！ いやはや、ハッピーガーランド一の金持ちであるセントジョーンズ卿の奢りともなれば、高い酒が飲み放題！ 貴族の名にかけて、ケチなことはしないでしようから。ね、セントジョーンズ卿！」

「う、うむ……………」

俺は努めて能天気な口調で音頭を取り、二人のコップに追加の酒を注いだ。

まったく、ブラック企業から解放され異世界に来てまで、おっさんの酌をしなければならぬとは……………はあ、疲れる。

各々が一頻り喉を湿らせたところで、セントジョーンズ卿が口を開いた。

「ナツメツグ博士。改めて、私のしたことを謝らせていただきたい。あの時は、本当に申し訳ないことをしてしまった」

真面目な話題にシフトしたことで、俺が解した？緊張感が再び蘇り、張り詰めた空気が漂い始める。

「以前、グレイ君には話したのだが……あの頃の私は、息子を庇うことしか考えられなかったのです。息子を殺人者にしてしまったという思いと、あの子の精神的なダメージと、絶望と……とにかく、それしか頭に無かった」

「……………」

「チコリ君に対する街の住民の仕打ちも、その原因が私へ阿る同調圧力であつたことも、マーシユの件が一段落した後で知りました。いや、今更こんなことを言つても、何の言い訳にもならんが……」

確かに、マーシユがチコリをいじめていたことは、セントジョーンズ卿も把握してはたはずだ。

息子を叱責できないことはともかく、自身の影響力を認識していれば、自分にゴマを挿る勢力がどういふスタンスを取るかは想像に難くない。

マーシユのいじめに関してセントジョーンズ卿自身は、後々チコリとダンディリオンに何かしらフォローするつもりだつたのかもしれないが……それもあの事件で全て吹っ飛んだ。

全ての責任をセントジョーンズ卿に求めるのも、現代人の感覚からすると少し違う気

もするが……まあ、貴族つてのはそんなもんか。

「息子の言動も、全ては私の……」

「マーシユのことは、もういいんじや。子どものしたことと流すには、些か重大に過ぎるコトへと至つてしまつたわけじやがな……」

話がマーシユの所業に関する部分に差し掛かつたところで、ナツメツグ博士はセントジョーンズ卿を遮つた。

項垂れるセントジョーンズ卿を尻目に、博士はゆつくりと顔を上げて口を開く。

「……一つだけ、先にはつきりさせておきたいことがある」

そう前置きすると、博士はセントジョーンズ卿の顔を真っ直ぐに見据え、言葉が続けた。

「チコリが亡くなつた後、わしのもとにお前さんの縁者が現れた。聞いた話では、ダンディリオンのもとにも似たような輩が現れたと……あれはお前さんの差し金か？」

聞けば、彼らは持参したはした金と引き換えに、チコリの件を吹聴しないよう求めたそふだ。

その時には、既にハッピーガーランド中に事情は知れ渡つており、口を塞ぐも何も無い状態だつたはずだが……彼らからすれば、無い脳ミソで必死に火消しというか隠蔽工作を行つたつもりなのだろう。

傍から見れば、みっともないだけ……いや、チコリの件を解決済みとして話題にさせない意図は、市民にも伝わったわけか？

肝心なのは、それがセントジョーンズ卿自身の意思なのかどうかだが……。

「いえ。私もあとで聞かされたのですが……所要の措置というか、事態の収束のために、色々動いた者がいるようでした……」

まあ、予想通りだな。

セントジョーンズ卿も今更こんなことで嘘はつかないだろう。

配下の連中も、自分なりに親分の意思を汲んで、良かれと思つてしたころだろうが……まあ、言い訳にはならないな。

少なくとも、博士やダンディリオンたちは二重に苦しみ、遺恨を多く残した。

「意図したことではないとはいえ、私のせいであなたがたが更なる苦痛を受けたことは事実。私の与り知らぬところでも、似たような出来事は数多くあったことでしよう」

俺は当時の様子を実際に知っているわけではないが、チコリの件があつた直後、ハッピーガーランドの住民は少なからずダンディリオンへ悪意を向けていたはずだ。

司法然り、報道然り……他の住民も例外ではない。

残酷な話だが、彼らにも生活がある。

セントジョーンズ卿とマーシユ側に阿ることを選んだ以上、ハッピーガーランドの住

民は負い目と同時にダンディリオンに消えてほしいという想いを抱いたことだろう。

言うなれば、いじめの共犯扱いされるリスクを鑑みて、傍観者であった教師や同級生がこぞって弱い被害者を封殺しようとする状況に似ている。

ダンディリオンの気質（表の顔）から考えて、本格的に衝突することこそ少なかったかもしれないが、きっと各所で嫌な思いをし続けていたに違いない。

だが、それも今となつては、どうしようもないことだ。

その結果が、ダンディリオンの反逆とあの結末とは……笑えないな。

「さて、直近の出来事の背景が余さず明らかになつたところで……一つわしから提案がある」

一通り、情報のすり合わせを行い、認識のズレを修正し終わつたタイミングで、博士が口を開いた。

「セントジョーンズ卿、ここらで終いにせんか？」

「終い、ですか？」

唐突な博士の一言に、セントジョーンズ卿は疑問の声を発した。

思わず、俺もナツメツグ博士に怪訝な目を向ける。

「お前さんの息子が取り返しのないことをしてくれたのは、紛れもない事実。数々

の悪行含め、マーシユのやったことは消えはしない。もちろん、ダンディリオンがその百倍非道な所業をしたことは承知している。その件で、トロット楽団の皆が謂れの無い中傷を受けないよう、お前さんが心を砕いてくれたこともな」

「……………」

確かに、ダンディリオンの逮捕と死亡が報道された直後は、俺にもマジヨラムにもコニーにも色んな連中が寄ってきた。

取材と称するのはマシな方で、なかには貴族の物理的な排除を訴えるぶつ飛んだ奴らから、逆に反逆者の身内呼ばわりして罵声を浴びせたり金をせびったりしてくる奴らも居た。

少なくとも、組織単位でヤバイ奴らが押しかけて来るのを防いでくれたのは、他ならぬセントジョーンズ卿だ。

「今更、わしが恨み言を言っても始まらない。それにな……こうしてわしらが話す機会を設けるより前に、あの子たちはお互いと向き合い前に進もうとしている。お前さんも聞いているであろう？ ブラッディマンティスの事件の後、マーシユが何をしていたか」

「ええ、ちょうどグレイ君の結婚式の頃あたりから、一人一人謝りに行ったと……」

「ああ、わしのところにも来よったぞ。直接な」

「そうでしたか……」

そして、ナツメツグ博士は自嘲するようにため息をつき呟いた。

「自らの行いを心より悔い反省した若者に、さすがに罵声など浴びせられんからな。……今日の嫌味は、それも含めて今まで溜め込んできた分じゃ」

なるほど、あの子どももつばいまでに偏屈で嫌味な態度には、そういう意味が……決して立派な振る舞いではないが、その程度で今までの蟠りが無くなるわけでも恨みつらみが消えるわけでもない。

失礼な言い方だが、博士の年齢で一度臍を曲げたところから態度を改めるのも、容易なことではないだろう。

それでも、憤りや葛藤を飲み下すのは……全ては、ダンディオンを慕い自分を師事した子どもたちのためか。

俺には真似できないな。

「だから、この話の手打ちはわしの方から提案させてもらう」

「……よろしいので？ 伝統貴族ではないとはいえ、ナツメツグ博士もその功績によって王家から上級騎士に叙爵された身。自分からこの件に和解を仄めかせば、気に入らない者も多いのでは？」

確かに、セントジョーンズ卿の言う通り、チコリの件に端を発する一連の出来事にはそういう政治的な背景もある。

元より、チコリの件ではセントジョーンズ卿側へ司法や報道が阿ることで、旧貴族の特権や横暴といった面が強調され、それが一部勢力による旧貴族への反発をより強める結果となった。

ナツメッグ博士にしてみれば、チコリの件は引つ込みがつかない出来事だったわけだが……この二人の対立構造は、その縮図であり代理戦争的な側面もあつたわけだ。

ある意味で、知名度と立場のあるナツメッグ博士とセントジョーンズ卿がそれぞれの矢面に立ったことで、ハッピーガーランドの住民は当事者から一歩引いた立場を装い、平和を享受できたとも言える。

大袈裟に聞こえるかもしれないが、この世界では小さな火種が大きな混乱を齎すことは往々にしてあるのだ。

その均衡を破壊するとなると……。

「構わん。お前さんが、人として、親として、一人の男として誠意を尽くした以上、わしから言ううことは何も無い」

しかし、ナツメッグ博士は事もなげに言い放った。

まあ、博士からすれば立場やら政治よりも個人間での仁義の方が重要か。

俺も……正直、そこまで政治事情には興味が無い。

そんな博士に対し、セントジョーンズ卿は深々と頭を下げた。

「ただ、こちらが名誉に配慮した以上、金持ちのセントジョーンズ卿には格別のご高配を賜りたいものじやな」

「それはもちろん」

「ついでもついでだが、博士はセントジョーンズ卿に俺のビジネスへより一層強く協力してくれるよう言付けてくれた。」

復興からさらなる発展へ……技術開発とビジネスの可能性は無限大である。

「ビークルパーツに石油産業、新設される医療機関へさらに洗濯機が売れ、シャンプーリンスやジョージに任せた音響機器も需要が高まり……そこへセントジョーンズ卿との密接な協力関係があれば、うちは間違いなくウハウハだ。」

「それに、ナツメツグ博士の根回しで俺のビジネスへ特別な配慮をしたとなれば、セントジョーンズ卿へ不満や悪意を持つ連中の留飲も下がる。」

「とりあえず、事務的な話はまとまったな。」

「あとは当人たちの感情だが……そこは一朝一夕にはどうしようもないだろう。ゆつくりと、時間をかけて改善していくしかない。」

「グレイ君」

「宴もたけなわ、今後に関する話もまとまったところで、セントジョーンズ卿は俺に向

き直った。

「改めて、礼を言わせてくれ。君には、マーシユとブラツデイマンティスのことで随分と世話になったが、それだけでなく、こうして過去の蟠りに向き合う機会まで作ってくれた。本当に……ありがとう」

貴族として、立場のある人間としての言葉ではない。

彼との付き合いもそれなりに長いので、表情や気配からそこら辺もわかる。

若干のこそばゆさを覚えた俺は頭を搔くが……思いがけないところで、博士も口を開いた。

「わしからも礼を言う」

「え？」

思わず、俺は博士に驚愕の表情を向けた。

「……何じや？ 何かおかしなことを言ったかの？」

「ああ、いえ……」

咄嗟に、俺の口からは否定の言葉が出たが……まあ、おかしいわな。

偏屈で、頑固で、妙なところで子どもっぽい博士が、まさかこんな素直に礼を言うなんて！

……冗談はともかく、今日ここに連れてきた当初の博士は、最高に不機嫌だったから

な。

そんな俺の表情を読んだのか、博士はフツと苦笑いのような表情を浮かべ口を開く。「お前さんに促されなかつたら、わしがセントジョーンズ卿とまともに話すことは未来永劫なかつただろう。それで、今まで特に問題も無かつたからの」

自嘲するように口元を歪ませると、博士は言葉が続けた。

「だが、いつまでも立ち止まってはおれん。これからお前さんたちが作る時代に、年寄りの諍いは不要じゃ」

それだけ言うと、博士は黙って手元のグラスに目を戻した。

……もし、俺がもっと早くダンディリオンたちと出会っていたら、こんな結末にはならなかつたのだろうか？

原作の悲劇を、もっと根本から避けられたのか？

それとも、既にトロツトビークルの力を悪魔の誘惑と捉えていたダンディリオンは手遅れだったか？

それは最早わからない。

しかし、今はもう一つ……修復不可能なレベルに達していると思われたナツメツグ博士とセントジョーンズ卿の関係を、こうして一步改善することができた。

今日の出来事は、間違いなくこの世界の未来にとって悪くない選択となるだろう。

それだけでも、今は十分だ。

「改めて、乾杯しようかの」

「ええ、乾杯」

「うむ」

そして、俺たちは静かにグラスを合わせた。

140話 紅の美女

アレハーテ丘陵とガラガラ砂漠と境界線付近、切り立った崖に寄り添うようにして築かれた小さな町。

この地域を根城とする砂漠の民が住む居住地である。

すぐ近くに交易拠点として栄えるレイブン砦があるためか、この居住地には商業施設の類はほとんど無く、通りにもほほ地元の人間しか居ない。

建築様式こそ砂漠っぽい漆喰の壁が並んでいるが、町は閑散とした住宅地の様相だ。

「ハイ」が

街の中心部にある住居の前で、俺は「ジャガーノート」を停止させた。

軽く周りを見回し、手元の紙に目を落として住所を確かめ、再度顔を上げると目の前の建物へ視線をやる。

特に目立った仕掛けも装飾も無い、ごく普通の少し大きめな民家だ。

とてもではないが、俺を呼び出した彼女の隠れ家や拠点とは思えない。

「比較的、裕福な民間人の家を借りたようだな。銃眼も無ければ、伏兵を待機させる設備

も見当たらない……」

「ああ、人の気配はあるが、数は十人足らず。ふむ……罠の可能性は低そうだね」

「……油断するな」

俺の呟きに、後ろのジンジャーとシユナイダーが反応した。

今回、俺に同行している彼らもそれぞれ自分のビークルに搭乗しており、「ブラックオデッセイ」と「マキシマム」のエンジンが重厚ながらスムーズな排気音を響かせている。俺たち三人はしばらくその場で思案していたが……やがて、家の中から軽い足音が近づき、扉が豪快に開け放たれた。

「よく来たね」

現れたのは、デザートホーネット団の頭領ノーラだった。

正装なのか、ノーラは紅とピンクを基調としたドレスっぽい装束に宝石と金細工の付いたベールを身に着けているが、相変わらず小柄な体躯に見合わない鋭い気配を纏っている。

彼女は俺たちを一瞥すると、家の奥を顎で示した。

「ビークルは家の右手に空き地があるから適当に置いておくれ。さ、入りな」

そう言うと、ノーラはさっさと家の中へ引き返した。

「……行くう」

俺の促しにジンジャーとシュナイダーは頷き、俺たち三人はビークルを駐機すると、ノーラの待つ家の中へ足を踏み入れた。

話は数週間前に遡る。

ネフロの『ホテル・ジャコウジカ』の地下にある『バー・アフロディーテ』。

壁際のテーブルを確保した俺は、やがて姿を現したジンジャーとシュナイダーへ手招きし、三人で同じ卓を囲んだ。

顔馴染みのマスターに料理を注文し、先に運ばれてきた酒のグラスを手に軽く乾杯を交わす。

御大層な振る舞いも寒い音頭も要らない。

グラスの中身の半分ほどを一気に喉へ放り込むと、俺はジンジャーへと向き直った。

「さ、どんどんやってください。約束通り、今日は俺の奢りです。ジンジャーには色々骨を折ってもらいましたからね。そのお礼も兼ねてってことで」

「ああ、いただこう。こんなに落ち着いて酒を飲むのは久しぶりだ。……ふむ、この銘柄は聞いたことが無いな。頼んでも？」

「どうぞどうぞ。ブラッディマンティスが健在だった頃は、ずっと地下で不自由させましたからね。出所祝いみたいなもんです」

俺のブラックジョークにジンジャーは苦笑いを漏らす。実際に彼の居住環境を思えばあながち的外れではない。

もちろん、彼のアジトには俺が家具や家電を持ち込み、定期的に食料物資の差し入れもしていたが、それでも大つぴらに街を歩けず隠者のように暮らしていたことに変わりはない。

おまけに、少し前はブラッディマンティスの残党が活発に動いていたこともあり、ダンドイリオンの件が片付いた後も彼はしばらく目立たないように行動していたのだ。

それに何より……ここ数年を通して、彼には随分と世話になった。

俺とバニラの鍛錬に、ピジョン牧場の警邏とコソ泥の始末に……。

今日は是非とも鱈腹飲んで食って、今までのストレスを解消してもらいたい。

「シユナイダーも好きなものを注文してくれ。……正直、あんたは興味ないとか言っただけ、断るかとも思ったが……」

「ガラガラ砂漠決戦のとき、約束したからな」

「ああ、あの時は手を貸してくれて本当に助かったよ。いつもの店でなんだが、今日は遠慮なく飲んでくれ」

そう言うと、シユナイダーは微かに口角を上げて頷いた。

彼も……本来なら、俺に付き合っただけで危険な戦争に身を投じる義理は無かった。

大した貸しがあるわけでもなく、彼にも守るべきパートナーがいる。

彼がブラツディマンティスとの戦いに手を貸してくれたのは、あくまでも厚意によるものだ。

それを思えば、こういう謝意を示せる機会は大切にしないといけないな。

……とは思ったものの、ウェイトレスとして勤務するシルヴィアへ不愛想に注文を伝えながら、さりげなく彼女と熱い視線を交わすシユナイダーを見ていて、ついグレネードを投げ込んでやりたくなる。

既婚者になったとはいえ、いざリア充を目の当たりにすると爆発を願うのは条件反射のようなものだ……。

「それにしても……」

ふと会話が途切れたところで、シユナイダーが口を開いた。

彼の視線はジンジャーの方に固定されている。

「あんたが、伝説の前チャンピオンだったとはな」

「よしてくれ。今の私は、ただのしがない中年だ。トーナメント覇者の称号は、既にグレ

イのもの……エルダーのことが片付いた以上、未練は無いさ」

シユナイダーの眩きに、ジンジャーは頭を振ってまるで自分に言い聞かせるかのよう
に否定した。

しかし、彼の表情には明らかに迷っているような色が見える。

「でも、復帰の話は出ているんでしょ？」

「……まあな。私もそれなりにネフロの期待を背負っていた身だ。こんな田舎町から輩
出された統一トーナメントチャンピオン……復帰するとなれば話題性は十分、それなり
の待遇は期待できるだろう。しかし、今更なあ……」

そもそも、ジンジャーはダンデリオンという怪物の誕生に一役買ってしまったこと
から、ビークルバトルそのものと距離を置こうとしていた。

だが、彼の腕前は俺がよく知っている。

未だ高ランクバトラーの追隨を許さないオールランドな戦闘力と洞察力、俺やバナラ
が受けた指南の結果の鑑みれば指導力まで一流であることも疑いようがない。

正直、このまま腐らせるには惜しい人材だ。

どう話を展開するかしばし迷う俺だったが……ここでシユナイダーが口を開いた。

「お前なら十分現役でやっていける」

珍しくストレートに褒めるシユナイダーだったが、彼はお世辞や嘘を自然に言えるタ

イブではない。

それだけに信憑性があるというもの。

そういえば、二人を引き合わせて紹介したあと、軽く手合わせをしたとか聞いたな。

「少しでもやる気があるなら……俺とのエキシビジョンだけでも出てみるかい」

「そういう話なら俺も一肌脱ぎますか。まずはシュナイダーのスパーリングパートナーみたいなどころから始めましょう。それから、ジンジャーには新人バトラーへの指南を……」

「いや、私は……」

「今度はエルダーのときみたいな展開を心配する必要はありません。なんなら、俺とシュナイダーも戦術指南を受ける流れにしましょう。Sランクの先輩が二人も上に居る以上、そうそうルーキーがつけ上がることも無いと思いますよ」

「そこまで言うとは、ジンジャーは俺とシュナイダーの言葉に苦笑いしながら承諾の意を示した。」

「ははっ……そこまで言われては断れないな。グレイに付き合おうと、どうも全てが面倒な大事に発展しそうな気もするが……」

「ふっ、否定できない」

揃いも揃って失礼な奴らだ。

確かに、ブラッディマンティスとの戦いからダンディリオンとの決着では、ハッピー
ガーランドからネフロ全域を巻き込む大事になったが、それも原作のルートを踏襲した
からだ。

これ以上、そんな大事件は起こらない……と信じたものだな。

何はともあれ、ジンジャーの新しい就職先も決まったところで、俺たちは改めて乾杯
し、追加で頼んだ料理を時折口に運びながらコップを傾けた。

「あ、そうそう。面倒ついでに、二人には近々もう一件手を貸してほしい話があるのです
が……」

俺は手荷物のカバンから菓子折りほどの箱を二つ取り出すと、それぞれ一つずつジン
ジャーとシュナイダーの方へ押しやった。

俺の促しに応じ箱を軽く開いた二人は、中身を確認すると僅かに息を？み、緊張した
面持ちで俺に向き直る。

「これは……」

「……………」

二人の手元の箱には、それぞれルガーP—08に似た自動拳銃が一丁と8連発のマガ
ジンが二つずつ納められていた。

地球においては、初期の自動拳銃ながら非常に完成度が高い機構と良好な命中精度を

持ち、スマートな形状も相まって現代でも非常にファンが多い名銃だ。

何より特徴的なのは、二つに折れ曲がって伸縮する自動装填機構、所謂トグルアクションだろう。

もちろん、21世紀の基準からすれば火力も低く、耐久性や信頼性にかなり問題の多い銃だが……トグルアクションも口径9mmのリムレス実包も、この世界では普通に最新技術であり高品質の軍用銃の部類に入る。

因みにこの銃も、ブラッドダイヤモンドの残党が溜め込んでいた武器の一部であり、討伐作戦の押収品を俺が持ち帰りマルガリータに改修してもらったものだ。

「実は、デザートホーネット団の頭領と会談することになりましたね。さすがに一人でノコノコ行く気にはなれないんで、戦える人に同行してもらいたいなあ、と……」

俺の告げた内容に二人は揃って呆れたような表情を浮かべたが、こちらの頼みを断ることは無かった。

そんなわけで、ノーラの招待を受けた俺は、護衛のジンジャーとシユナイダーを伴い彼女の指定した会場を訪れている。

レイブン砦近郊の街の民家の一室で、席に着いた俺とノーラは純白のクロスが掛けられたテーブルを挟んで向かい合う。

緊張した空気のほか、ノーラは俺の後ろに立つジンジャーとシユナイダーを一瞥すると鼻を鳴らした。

「ふん、随分な警戒だね」

「それはお互い様だろう」

皮肉っぽく返しながら、俺もノーラの後ろで直立不動を決めている二人のデザートホーネット団員に軽く視線を送る。

建前上、彼らは見栄えのために侍らせる従者的な存在のようだが、もしもノーラの身に危険が迫れば、即座に懐の短剣なり拳銃なりを抜いて戦闘態勢に入るだろう。

ノーラ自身も、いざ戦いとなれば即座に俺をテイクダウンしにくるはずだ。

五体満足の彼女と生身で接近戦をする展開……想像したくもないな。

……別に、その後マルガリータに絞殺されかけたのがトラウマになっているわけではない。

とにかく、こちらも……俺の斜め後ろでは、ジンジャーとシユナイダーが冷静な表情を装いつつ、時折ベルトに挟んだ拳銃を指先で確認している。

最強クラスのピークル乗りに拳銃まで持たせて武装させ、しかしここは砂漠の民の庭

でデザートホーネット団のお膝元……これでも五分だ。

まあ、ここまで来た以上、今更悪い展開に頭を悩ませて仕方がない。

とりあえず、話を進めるか。

「先に聞くが、何故またこういう場を？ お前さんとの諍い？ は既に終わったはずだ。逃がしてやる代わりに、二度と面を見せるなつて話だったと思うが……」

「恩には報いなければならぬ。それが砂漠の掟だよ」

会談とは言ったが、要は今日の催しの主語は俺とノーラの食事会だ。

こうして堅気の家を借りて、一流の料理人を手配して、最高の飯と酒をご馳走してくれると言う。

先ほど、贈り物だと言って仰々しく渡された箱に満載の金銀財宝も、明らかに盗品であることに目を瞑れば、悪い気はしない。

しかしなあ……。

「悪いがこつちは信用できない。妙な真似をすれば、この腕利き二人が暴れるから……そこんところは忘れない方が身のためだ」

「ああ、勝手にしなよ」

少なくとも、ノーラに含むところがあるようには見えないが……俺も人を見る目に自信があるわけではない。

一連のブラッディマンティスの件やダンディリオンの野望も、原作を知っていたから対処できたに過ぎない。

彼女自身にそのつもりがなくなるとも、デザートホーネット団内部には未だに俺への恨みを抱いている奴も居るだろう。

油断はしない方がいい。

そんな思いを込めて、俺は軽く後ろのジンジャーたちに視線を送った。

「ところで……そっちの二人は、今日はあんたの配下つて扱いでいいのかい？ 残念だけど、あんたと同じ持て成しはできないよ」

「まあ、こっちも人数とかは事前に伝えてなかったからな。仕方ないさ。二人にもお土産くらいは貰えるんだろ？」

「ああ、用意させてるよ。義理場での序列はともかく……相手方の従者を全く持て成さないのは、それはそれで恥だからね」

一応、ジンジャーとシユナイダーは俺の護衛という立場なので、ここで一緒にテーブルを囲むことはできない。

ずっと立たせているのも申し訳ないが……まあ、お土産に期待しよう。

食前酒に続き、香辛料をふんだんに使った珍しい料理を口に運びつつ、俺たちの会談

は続いた。

皿が片付けられ、次の料理が運ばれるまでの合間を縫って、彼女の近況などを聞く。やがて、シナモン入りの氷菓子がデザートに運ばれる頃には、大体向こうの事情も理解した。

「なるほど……図らずも、俺はお前さんの地位を盤石にする手助けをしちまったわけか」「そういうことだね」

ノーラがブラッドディマンティスに協力していた背景には、過去に警察の討伐作戦から助けられた恩義に端を発し、その後も使い走りや強要され続けたことがある。

その結果、ウズラ山トンネル付近で俺とガーランド警察のビークル隊と激突し、警察ビークル隊に甚大な被害を出すも、ノーラ率いる襲撃部隊は俺に撃滅された。

俺はノーラを見逃し、生き残った団員を連れ帰ることも認めだが……砂漠の外で交戦し大勢の仲間を失った事実が消えない。

掟を破り同胞を死なせた責任を取るため、ノーラは自らを裁こうとした。しかし、何故か彼女が頭領の地位を追われることは無かった。

もしかしたら、負い目のある彼女を傀儡にしようとする勢力の思惑もあったのかもしれない。

まあ、俺の知ったことではないが……。

何はともあれ、その後ブラッディマンティスは壊滅し、これを好機とノーラは混乱に乗じて人質に取られていた仲間も取り返した。

警察と大立ち回りを演じて仲間を担いで帰ってきたうえに、誰もが救出を諦めた同胞を助け出した彼女は、名実ともに英雄扱いだ。

逆境を跳ね返しピンチをチャンスに変えた英断、彼女が歴代でも稀に見る偉業を残したことは間違いないが……ノーラはどこか浮かない表情だ。

「間抜けな話だよ」

「そうか……」

当然というか、ブラッディマンティスに止めを刺したのは俺とバニラなわけで、それは結果的にブラッディマンティスがデザートホーネット団を縛る鎖を断ち切ることに繋がった。

ノーラからすれば、俺は仲間を大勢殺した怨敵でもあるが、自分の地位を確立するのに尽力した——そんな覚えは無いが——立役者で恩人……。

今日の持て成しは、そういった事情に対する遠回しな礼も含んでいるというわけだ。

とはいえ……武人氣質なノーラにしてみれば、面白くないことだらけか。

身内の不和も、俺に精鋭部隊を壊滅させられことも、見逃されて生き永らえたことも、そんな俺にこういう形で礼をするのも……。

まったく、面倒なことだ。

「何だい？ 何か言いたいことでも？」

「いや……」

鋭くこちらを見据えるノーラから視線を外しつつ、俺は曖昧に答えた。

「……メインの鶏肉の煮込み料理は悪くない味だった。香辛料の使い方は元より、素材の活かし方も見事だ。ネフロでもハッピーガーランドでも通用するだろう」

「そうかい」

後に、デザートホーネット団の諜報部が運営するエスニック料理店がハッピーガーランドで開店することになるが、それはまた別の話。

141話 あれから1年経って……

「こんにちは。博士、マルガリータ」

「ん？ おお、コニーか！ よく来たの」

「あ、コニー！ どうしたんだい？ ビークルの手入れかい？」

いつも通り、ナツメグ博士の研究を手伝い家事をこなしていると、工房の方から聞き覚えのある声が響いた。

「どうやら、コニーが訪ねてきたようだ。」

「うん、ちよつと遠出したから、見てもらえるかな？ ……あ、グレイ。お邪魔してます」
「おう、ちようどお茶を淹れたところだ。ゆつくりしてつてくれ」

俺はオレンジ、ブドウ、リンゴ、パインなどのフローズンフルーツを浮かべたアイスティーをガレージに運び込み、コニーにもグラスを一つ渡した。

元は添え物のフルーツの余りを冷凍庫で保存していたものだが、こうすればグラス一つで華やかな間食っぽくなる。

交代でコニーの「カモミール・タイプ1」のエンジンをチェックしていた博士とマル

ガリータも、作業を適当なところで切り上げるとグラスを手に取り、紅茶で唇を湿らせ半解凍のフルーツをスプーンで掬い始めた。

「さて……ざっと見た限り、機体にそれほど負荷は掛かっておらん。特に荒い扱いもしていないようだしの。一応、レッグパーツの手入れだけしておくか」

「ついでにガワをちよつと弄るよ。そんな大したものじゃないけど、新しい設計の排気筒があるんだ」

「ありがとう。大切に使うね」

礼を述べるコニーに、マルガリータは奥の物置を示しながら悪戯っぽく笑った。

「構うことはないさ。どうせ、壊れることも想定済みの試作品だし、材料はグレイのヘソクリだからね」

あそこには、ポールから買った絵に、ブラツテイマンティスからの押収品に、ノーラから贈られた金細工の宝飾品なんかが無造作に積まれている。

最近はその彼女も遠慮がなくなってきたな。

まあ、特に用途は無い物ばかりだし、俺も中身を完全には把握していないし、金属資材は実用的に使ってこそだから、別にいいんだけどさ……。

そして、休憩を終えた博士とマルガリータは、早速とばかりに作業に取り掛かった。

ピークルの近くに工具や資材を集めた二人は、凄まじい手際の良さでパーツの換装と

メンテナンスを勧めていく。

こうなると俺にできることはほぼ無いので、大人しく工房から退出しコニーと雑談することにした。

「そういえば、遠出をしたって言うていたな。どこに行つてたんだ？」

「ゴールドーンだよ。お母さんの様子を見てきたの」

「お、そうなのか。どうだった？ ローズマリーさんの様子は？」

「もうすっかり元気。咳とかもしてないって」

「そうか。それはなによりだ」

前回の博士の診察でローズマリーへの投薬を止めたが、今や彼女はすっかり健康体だ。

山菜を採り、宿屋や鉱山へ食事を差し入れしつつ、ゴールドーンでゆったりとした暮らしを満喫しているらしい。

インフラの整っていない田舎での一人暮らしなど、俺には耐えられないだろうが、彼女が病に悩まされること無く穏やかに過ごせるなら何も言うことは無い。

「あ、それから……今日はこれからネフロに行こうと思うんだ。おばさんにも久しぶりに会つておきたいし……バジルも居るみたいだから」

「ああ、そいつはいい。……そういえばバジルの奴は最近ネフロ辺りをフラフラしてい

るらしいな。あいつ、ここんところ飲んだくれていてるみたいだが……大丈夫かね？」

「わからない……。でも、私で力になれることがあるなら、できる限りのことはしようと思うんだ」

「そうか……」

思えば、セイボリーたちが亡くなってから既に一年ほどが経った。

そう、あの時からもう一年だ……。

「……もうすぐバナラが帰ってくるな。ジュニパーベリー号二世の到着予定日は……今日か、明日あたりか？」

「うん、そうだね」

「ん？」

てつきり、喜びのあまりはしやぎ始めるか、落ち着きなくソワソワするかと思っていたが、コニーは特に動じた様子もなく微笑みを浮かべている。

俺は些か予想外なコニーの振る舞いに声を掛けようとしたが……寸前で言葉を呑み込んだ。

噂をすれば何とやらだが、コニーが訪れた次の日には、バナラがピジョン牧場にやって来た。

ナツメツグ邸のドアをノックする音に続き、玄関の方から懐かしい声が掛けられる。「やあ、グレイ」

「お、バニラ！ 帰って来たのか」

俺はキッチンを掃除する手を止めると、家の入口に姿を現したバニラに向き直った。ブラッディマンティスとダンディリオンの事件から一年……ついに、彼がジュニパーベリー号の航海を終えこの国に戻ってきた。

久々に見たバニラは、最後に見たときより幾分か遅しくなったような印象を受ける。それほど大きく変わったわけではないが、顔つきが僅かに引き締まり、背も少し伸びたか？

そして、家の外に見えるバニラの愛機「カモミール・タイプⅡ」は、しっかりと手入れされながらも細かい傷が増え歴戦の様相を呈していた。

やがて、俺たちの声が聞こえたのか、工房の方からナツメツグ博士とマルガリータも顔を出した。

「おお！ お前さんか！」

「しばらくぶりだね」

「お久しぶりです、ナツメツグ博士。マルガリータも久しぶり」

一年ぶりの再会だ。

色々と積もる話もある。

俺はバナラに椅子を勧めお茶を用意すると、ナツメツグ博士とマルガリータの三人で彼を囲むようにして雑談を始めた。

「どうだ？ 懐かしの母港の感想は？」

「いやあ……久々に戻ってきて、色々びつくりしたよ。スームスームは前に無かった建物が増えて一年前より発展してるし、ハッピーガーランドも見覚えのない店に結構入れ替わってたよ。マジヨラムの実家とかロブスター亭は変わってないけど、一年で随分と様変わりするものだね。あと、フェンネルが凄い楽器を使ってたね」

「エレキだな。一年前から開発はしていたが、あの時は色々と立て込んでいて、あまりそっちに注力できなかつた。今はフェンネルのバンドも軌道に乗っているから、今度見に行くといい」

「うん、そうするよ」

この国で暮らす俺たちには緩徐な変化でわからないかもしれないが、記憶にある町が一気に刷新されたバナラにしてみれば衝撃的なことも多い。

彼が居ない間の一年に新しく生まれた物もあるので、しばらくは色々楽しめるだろう。

「そうだ。ここに来る前に、ゴールドーンでローズマリーさんに会ってきたんだけど

……ローズマリーさん、すっかり元気になってて、びっくりしたなあ」

「ああ、最近は益々料理に凝り始めているらしい。何でも、料理本の出版とかの話も――」

そうして、バニラは帰国後に再会した懐かしい面々について語り、俺たちも最近は何ほど頻繁に顔を合わせなくなった楽団メンバーに思いを馳せた。

一頻り、バニラの軌跡も聞き終えたところで、それまで傾聴の姿勢だったマルガリータが口を開いた。

「ところで、バニラ。もう聞いているかい？ 最近、コニーもトロツトビークルに乗ってるんだよ」

「……へえ、初耳だな」

「旧式の「カモミール・タイプ」を愛用しておる。新車はぶつけるのが心配で中古を手に入れたらしいが、そんなに下手でもないの。もちろん、お前さんやグレイほどの才ではないが……」

そんな博士の言葉を聞くと、バニラは些か硬い表情を浮かべ何やら思案し始めた。

しばしの逡巡の後、顔を上げたバニラは俺に向き直る。

「グレイ、頼みがあるんだけど……」

「ん？ 何だ、改まって？」

一拍置いて、バナラは口を開いた。

「僕と……バトルをしてくれないか?」

俺は思わぬ展開にしぼし唾然とした。

思えば、バナラと正式に試合をしたのはビークルバトルトーナメントの準決勝の時以来……。

ダンディリオンとの死闘を乗り越え、厳しい航海を終え、この一年でバナラも色々な経験を積んできたことだろう。

きつと、彼は前より格段に強くなっている。

……だが、俺も足踏みをしていたわけではない。

今年もビークルバトルトーナメントは俺の王座防衛で幕を閉じた。

ビークルの細かな改良を施し射撃技術も向上させてきたフエンネルを準決勝で撃破し、戦術と技をより磨き上げてきたシユナイダーを決勝戦で下した。

俺も……そう簡単に負けるわけにはいかない。

「いいだろう」

バナラの挑戦を受け入れた俺は、家の表に停めた「ジャガーノート」のエンジンを始動させ、「カモミール・タイプⅡ」に搭乗するバナラと相對する。

マルガリータにナツメッグ博士、さらにどこから聞きつけたのかオットーやウィリー

まで見物するなか、俺たちの戦いの火蓋が切って落とされた。

「じゃ、僕はもう行くよ。お邪魔しました」

「ああ、またいつでも来い」

修理を終えた「カモミール・タイプⅡ」に乗り、バナラはナツメツグ邸前の丘を下つていった。

俺は彼に手を振って応えると、何の気なしに愛機「ジャガーノート」に視線をやる。右アームの強化ブレードを見ると、超合金の刃には数か所の刃こぼれが見受けられる。

正直、ここまでやられるとは思っていなかったな。

損傷箇所は局限しているとはいえ、ダメージの深さでいえば過去一だろう。

まあ……勝つには勝ったが。

「まったく！ 家の軒先であんな派手にやらかしおつてからに……バナラのピークルをほぼオーバーホールする羽目になるとはの」

「すみません。可愛い嫁さんにいいとこ見せたくて……」

「馬鹿なことやってんじやないよ！ 一体、誰が「カモミール・タイプII」を修理したと思ってるんだい！」

俺の尻を蹴飛ばしつつも、マルガリータは微かに頬を赤く染めながら顔を背けた。

いやはや……困ったね、本当に……。

彼女の機嫌は、生クリームたっぷりのおやつで取ることにしよう。

最近、脇腹の肉が気になるような素振りも見せるマルガリータだが……たまにはいいだろう。

そして、ネフロ方面へ向かうバナラの姿も見えなくなったところで、俺はふと口を開いた。

「エンディング後か……」

「ん？ 何か言った？」

訝し気な視線を向けてくるマルガリータに俺は向き直った。

「マルガリータ、ここからの未来は手探りだ。これから先、どうなるか……俺にはもうわからない」

「……………」

「シナリオも原作も無い。知識も、記憶も、運命もアテにならない。俺たち自身の力で、失敗しながら、道を切り開いていかななくてはならないんだ」

俺はマルガリータの目をしっかりと見据える。

彼女も俺の視線を正面から受け止めた。

「ずっと……一緒に来てくれるか？」

俺の問いにマルガリータは答えなかった。

だが、問題ない。

マルガリータがツンデレなのは知っているから。

マルガリータが誰よりも俺を愛してくれていることを知っているから。

マルガリータが……彼女が俺を思う気持ちは、合わさった唇の熱さが伝えてくれるか

ら。

ウミネコ海岸。

砂浜に打ち上げられた船の残骸と思わしき板に、一人の少女が腰かけていた。

ピンク色のビークルの足元を磯の小カニが横切っても、少女は微動だにしない。

ウミネコの泣き声も、押し寄せる波の音も、彼女は意に介さずじつと沖の方を見つめ

ている。

彼女の視線の先にあるのは、未だ座礁しつづける旧ジュニパーベリー号の残骸か、それとも瓦礫だらけの入り江から続く無限の大海原か……。

そんな少女に、一人の少年が声を掛けた。

「コニー……」

少年の呼びかけに、少女はゆっくりと振り向いた。

早朝のナツメッグ邸にて。

普段なら、マルガリータが二度寝を決め込み、俺ものんびり朝食の用意をしている時間だが、今日の俺は慌ただしく外出の準備を整えていた。

トランクに荷物を積み終わった俺は、我関せずと紅茶を飲むナツメッグ博士に声を掛け玄関に向かう。

「じゃあ博士。ちよつくら行ってきますんで」

「ああ、気をつけてな。今回は長く掛からんのか？」

「ええ。急遽入った仕事ですが、軽いイベントの余興なんで、長期のツアーみたいなことにはなりませんよ」

正直、急な話は勘弁してもらいたい。

だがまあ、マジヨラムから助っ人の依頼となれば、無下に断るわけにもいきませんわな……。

そんなやり取りをしていると、超特急でシャワーを浴びたマルガリータがダイニングに駆け込んできた。

「ちよつと！ ハッピーガーランドに行くならあたしも連れてってよ」

「わかったわかった。楽団のお披露目が終わったら、スイーツの店に案内するから、そうカリカリしないでくれ」

「やったね！」

「おお、そうだ。忘れておった。グレイ、電気式の精錬装置のサンプルをオイルモレー工場の担当者に……」

「はいはい、ついでにパシリをすればよろしいんですね」

取り急ぎ、速やかに解決すべきはマルガリータの爆発したヘアスタイルか……。

何はともあれ、俺はマルガリータを伴って予定ギリギリの汽車に飛び乗り、時間通りハッピーガーランドへ到着した。

列車のコンパートメントで髪をセットし直したマルガリータの手を引き、俺たちは口ブスター亭に歩を進める。

そして、ドアを開けると……マジヨラム、バジル、コニー、バナラの出迎えに続いて、客席のフェンネルがこちらへ視線を向けた。

「あ、グレイ。来てくれたんだね。マルガリータも、ようこそ」

「遅いよ」

「それじゃ、さっそくりハーサルを始めようか」

「そうだね」

「おい、早く始めろ。わざわざ聞きに来てやったんだ」

いつも通りのメンバーに俺はやや苦笑いをしながら譜面を取り出す、

「待たせたな。さて、一曲目は……see you laterか」

俺がピアノの椅子に座ると、マジヨラムもドラムチェアに腰掛け、バジルはウツドベースを支えて弦を確かめた。

コニーがギターを持ってボーカルマイクの前に立ち、バナラがダンディリオンお手製のバイオリンを構える。

そして、客席のマルガリータとフェンネルが見守る中、俺たちはハーサルを開始した。

「ねえ、みんな。一つ提案があるんだけど……トロット楽団のリーダーを——」

第4章 2プロローグ

1話 月日は巡り

秋も終わりに近づいたピジョン牧場の朝。

窓の外から聞こえる羊の泣き声と、メリー乳業の三男エリツヒの羊を追う声で、俺は目を覚ました。

カーテンの隙間から漏れる朝日に思わず瞼を閉じつつ、手元はほぼ無意識にベッドを探って、隣のマルガリータの存在を確かめる。

「ん……」

ふんわりとした長い髪感触を指先に捉えると、微かに鬱陶しそうな色を含みながらも、艶のある声が返ってきた。

目を開けて視線を下げると、当然ながらそこには昨晩も愛し合った美女が寝息を立てており、無防備に肩を露出し肌を晒していた。

毛先を弄ぶように彼女の髪を撫でつつ息を吸い込めば、微かにマシーンオイルの匂いが混じった魅惑的なフェロモンと花の香りが、俺の鼻腔を妖しく刺激する。

……相変わらず、マルガリータは朝に弱い。

まあ、毎晩のように平均3〜5試合ほどこなしていれば、それも不思議なことではないか。

ビークルバトルだって一日に連続で何試合もすることは稀なのに、彼女の無尽蔵のスタミナと食欲さと腰の強さときたら……。

「……………グレイ、……………」

夢心地のマルガリータは謔言のように俺の名前を呼びながら、ほぼ無意識に体をくねらせ俺に密着してきた。

……彼女のこういう姿を見ると、昨晚の情事の濃密さにもかかわらず体が反応してしまうあたり、俺も人のことは言えないか。

しばらく髪を撫でていると、やがてマルガリータは薄っすらと目を開けた。

眠そうな仕草をしながらも、彼女の手は何かを探すように伸びてきて、こちらの存在を確かめるように俺の体をペタペタと触る。

「おはよう、マルガリータ」

「ん……………おはよ」

彼女の耳元で声を掛けると、寝ぼけ眼のまま僅かに微笑んだマルガリータは、にじり寄るようにして俺の頬に軽く唇を触れさせた。

彼女はしばらく体を擦り付けるようにして温もりを楽しんでいたが、やがて安心したように脱力しそのまま二度寝の態勢に入ってしまった。

もう結婚して二年近く経つというのに、相変わらず彼女の魅力は俺を虜にして止まない。

ブラッディマンティスによる一連の騒動が収束しバナラを見送った後、俺はマルガリータと正式に夫婦となった。

改めてミームー村にはきちんと話を通し、略式だが結婚式も挙げた。

招待客はピジョン牧場とミームー村の人間の他、親しい友人たちが数名ほど。

オットーとウィリーのガレージの発射台の上で、神前式っぽく誓いの言葉を交わし見世物になるだけの簡単なお仕事だ。

神父役はいつぞやの廃屋のシスターが務めてくれた。

最初はネプロ教会を借りるつもりだったのだが、恥ずかしがり屋のマルガリータが断固拒否したため、その形に落ち着いたわけだ。

それでも、囁し立てるミームー村の連中を恨めしそうに睨みつけ、誓いのキスの場面では顔を真っ赤にして俺の足を踏みつけてくるあたり、彼女の免疫の無さは筋金入りだ。

夜に二人つきりだと、あんなに積極的なのに……。

何はともあれ、あの日以来マルガリータはずっとこの家で暮らしている。

一度、実家に荷物を取りに戻ったが、私物を纏めた後は自分の部屋を親戚の子どもに譲り、拠点は完全にこちらへ移した。

今の彼女の家はここなのだ。

俺と同じ家で過ごし、俺の作った飯を食い、俺と一緒に博士の研究を手伝い、俺と同じベッドで眠る……。

たまにミームー村の連中が船やビークルのことでマルガリータを頼って来るが、その時も彼らはナツメッグ邸の工房を訪れるようになった。

今では彼女の姿もすっかりピジョン牧場に馴染んだな。

工房の横で試作品の機械を博士と共に調整したり、飛行ビークルにイカれた改造を加えて盛大に事故るオットーとウィリーを博士と共に怒鳴り飛ばしたり……。

因みに、マルガリータと一緒に住むにあたり、家の居住区を増築することも検討したが、その話は結局流れた。

元々、俺が博士の助手になってここに住み始めた段階でナツメッグ邸は増築しており、部屋数やスペースは十分にあるからな。

何より、彼女の寝室は俺と同じ部屋だ。

要は『どうせ毎晩一緒に寝るのだから、家はこのままでもよくね?』ってことである。取り急ぎ、若干窮屈だったベッドだけ、もう一回り大きなものに新調することにした。例の、激しい営みにも耐えられる剛性が売りの、『ハッピーファニチャー』イチ押しの高級ベッドに……。

当然というか、俺が商品に付いてきた説明用紙を読み上げると、マルガリータの重いパンチが俺の顎を直撃したが……それも、今となつてはいい思い出だな。

まあ、何はともあれ、俺たちは晴れて夫婦になったわけだ。

指輪も送つたし、純白のドレスも着てもらつた。

普段のマルガリータはヒラヒラのスカートなど着ないし、指輪も作業の邪魔になると言つて部屋に仕舞いっぱなしであるが……。

たまに彼女が部屋に一人で居るところをこつそり覗くと……指輪を嵌めた自分の葉指をじっくり眺めてニマニマとしていたり、ドレスを抱き締めて顔を赤らめジタバタとしている姿を発見できる。

そんな愛する妻の姿を拝めた日には、ネフロの『ファッション・ロンド』の女主人にふんだくられた数十万URも回収できた気になるから不思議だ。

……つと、こんなことを考えているのが本人にバレたらタダでは済まない。気を付けよう。

まあ、浮気や不貞を疑われるよりはマシか。
ノーラのとときは、本当にヤバかったからな……。

シャワーを浴びた俺は、寝室に戻ると身支度を始めた。

未だ夢の中のマルガリータを尻目に、クローゼットから機能性の高い略式スーツを一式取り出す。

この服もネフロの『ファッション・ロンド』で手に入れてからずっと使っているので、随分と年季が入ってきた。

それでも生地は特に見苦しい煤け方をしておらず、裾や縫い目も簡単には解れてこないあたり、あのガメつい女店主も商品に対してはそれなりに誠実といえるか……。

俺はシャツを着た上に革製のショルダーホルスターを装備すると……サイドチェストから愛用のワルサーP38自動拳銃を取り出した。

シルバーマタリツクのスライドを軽く引いて、薬室にも9mm弾が装填されていることを確かめ、セーフティが掛かっていることをチェックし、拳銃をホルスターに収納し左脇の下に収める。

シングルカラムのP38の弾倉は八発装填できるので、薬室の一発と合わせるとこの銃は九連発だ。

シオルダーホルスターの右側には予備マガジンが二つパウチにセットされているので、俺は常に最低でも二十五発を携帯していることになる。

以前は、盗賊のアジトで手に入れた六連発の38口径リボルバーを使っていたが、ブラッディマンティスの飛行船『グランドファイナーレ』内で撃ち合いになったときは、その火力の低さゆえに随分と苦勞した。

いくら拳銃が緊急時の護身用に過ぎないとはいえ、いざという時に火力が足りないのは困るからな。

当然というか、このワルサー自体も、並の代物ではない。

元は、ブラッディマンティスの残党狩りの際に奴らの武器倉庫から手に入れた品の一つだが、後にマルガリータが改修してくれた最高品質の一丁だ。

俺が『グランドファイナーレ』で陥った状況を説明するが早いが、マルガリータは即座に俺用の自動拳銃を新たに見繕うことを決め、ワルサーの改良に取り掛かってくれたのだ。

性能に関しては……『グランドファイナーレ』との決戦の際には、飛行ビークル二台を整備する傍ら同時に軽機関銃を一丁組み上げてしまったあたり、マルガリータのガンス

ミスとしての腕は疑う余地が無いだろう。

事実、この銃に持ち替えてから結構経つが、今ではすっかり手に馴染み、俺の命を預けるのに不足の無い相棒となった。

元々、ワルサーP38は問題の多い銃である。

ドイツ製品らしく華美なデザインで、グリップ感が良く命中精度も良好。

しかし、耐久力や信頼性という点では、前任のルガーP08よりマシになったものの、さすがに発展途上の自動拳銃だけあり、軍用銃としてのスペックは決して高水準とは言えない。

例えば、P38のリコイルスプリングは、左右一本ずつスライドの内側に配置されており、後退したスライドを両側から細い二本のスプリングで前に戻す圧力を掛けている。

同時代の1911系や現代の自動拳銃では、銃身の下に一本の太いスプリングを内蔵するのが主流であり、この点でもP38は部品点数の多さと小さく細かい複雑な機構による耐久性の低下で、明らかに信頼性を損ねていることがわかる。

スライド自体も、上部を大きく削り取ってバレルを見せるデザインはともかく、いくつもの部品を組み合わせて複雑な形のカバーを形成している時点で、その剛性はお察し

……大戦末期の品が暴発でスライドを飛ばしまくったのも納得だ。

他にも、スライド上部のインジケータ―薬室に弾が入っているかどうかを示す機構――に、機関部の外から引き金と撃発装置を繋ぐトリガーバー。

余計な機能や露出した稼働パーツが故障のリスクを上げるとは、最早言うまでもないだろう。

極めつけは、フィーディングランプがほぼ平らな構造をしており、現代オートでは当たり前の給弾不良に対する備えが脆弱で、ラウンドノーズのメタルジャケット弾でも頻繁にジャムするという点だ。

もちろん、第二次大戦当時と現代の品では、9mm弾の形状も違うだろうが……それでも構造からして作動不良のリスクがあるのは否めない。

こんな具合に、無駄に多くのパーツを左右対称に配置し、複雑な機構をこれでもかと詰め込んだワルサーP38は、最初期のダブルアクションオートとして基幹メカニズムを確立した点はともかく、より洗練された精度と信頼性を持つ現代オートと比べると、どうしても見劣りするのだ。

一方、マルガリータによって魔改造された俺のワルサーP38は、形状こそ元の構造を踏襲しているものの、中身はほとんど別物だ。

まず銃身とスライドは、クロームモリブデン鋼にミスリルを配合した合金の削り出しだ。

研磨以外の表面処理を施していないためシルバーメタリックの色合いは若干目立つが、耐久力と耐熱性は量産品とは比べ物にならないくらい向上している。

さらに、機関部やトリガーバーなどの可動パーツも、ほとんどがミスリル合金製のものに交換されており、その耐久性と耐汚染性は飛躍的に上昇した。

材質でいえば、俺の愛用ビークル「ジャガーノート」のチェーニングガンと同等であり、はつきり言って護身用の拳銃に使用されるレベルの素材ではない。

内部構造でオリジナルから大きく変わった点はというと、まずファイディングランプの上部を延長してあることだろう。

スライドを引いて中を覗き込むと、銃身の後ろ側はやや張り出した屋根のような形になっている。

P38はじめ古い自動拳銃で多い、次弾を装填する際に弾頭が上向きにズレて起こるジャム……これに対応した設計で装填機構を改良することで、給弾の信頼性は大幅に上昇した。

ついでに、スライド表面上部のインジケーターも廃止だ。

きちんとした安全装置がある以上、そもそも拳銃は普段からチャンバーに弾を入れて

携行するわけで、それでも薬室の弾を確認したかったらスライドを少し引いて中を覗けばいい。

何はともあれ、これでP38の耐久性と信頼性の問題は概ね解決だ。

もちろん、ここまでしても完璧な武器になつたわけではない。

エキストラクターは相変わらず左側にあり、右利きの俺が撃つと目の前を空薬莖が通過することとなる。

これは、エキストラクターがトリガーバーやセーフティに干渉しない構造が、既に完成したメカニズムとして出来上がっているためだが……ここら辺を納得のいくまで改良するのは、さすがのマルガリータでも一朝一夕には無理だ。

グリップ底部のマガジンリリースも、現代で一般的な親指で操作できる位置にあるマガジンリリースボタンと比べると使いにくい。

マガジン容量はシングルカラムの八連発と、現代の自動拳銃なら装弾数はダブルカラムで十五発以上が当たり前という基準からすると、圧倒的に火力が足りない。

……とまあ、こんな具合に不満を言い始めたらキリがないが……今のところワルサーに文句はない。

そもそもこの世界では、9mm弾を使用する自動拳銃という時点で、火力と扱いやすさを兼ね備えた最新技術の部類に入る。

法執行機関や軍ですらリボルバーが現役である以上、自動拳銃と予備マガジンを数本所持しているだけでも結構なアドバンテージだ。

それこそ、この銃に持ち替えてから結構経つが、それから今に至るまでほとんど深刻な事態に直面していない以上、普段使いのキャリアウエポンとしては十分な備えと言えるだろう。

もちろん、この先の人生で……この先の『世界』でどのようなシチュエーションに遭遇するかはわからないが……その時はその時だ。

まあ、マルガリータはガンズミスとしても間違いない一流なので、いざ必要になれば臨機応変にびつくりどつきりメカを製作してくれるだろうと思っっているわけだ。

樂觀ではなく信頼と言ってほしいな。

「んう……！ ……朝……？」

俺が着替えと銃のチェックを終えた頃、マルガリータはベッドから起き出した。

枕元で身支度を整える俺を尻目にグースカ寝息を立てていた彼女も、そろそろ二度寝から覚める時間だ。

「マルガリータ、もうすぐ朝食だ。君もシャワーを浴びておいで」

「ん……」

寝ぼけ眼を擦りながら、一つ頷いたマルガリータは緩慢な足取りでシャワー室へと向かった。

彼女を見送った俺は、キッチンへ向かう前に、クローゼットからマルガリータの着替えを出し、脱衣所の棚の上に置いておく。

……一瞬、前に冗談半分で購入した際どいパーティードレスを置いてやろうかと思っただが、以前同じ試みをして失敗したのを思い出す。

あの時は、ドレスを完全無視でいつも通りの服装をしているマルガリータを見て落胆したものだ。

朝の弱いマルガリータなら、寝ぼけたまま用意された服を着てしまうかと思っただが……悪いことはできないね、まったく。

2話 愛機 前編

身支度を整えマルガリータを浴室へ送り出した俺は、早速キッチンで朝食の用意を始めた。

自家製のソーセージをフライパンで炙り、マスタードを添えてプレッツェルを温める。

スクランブルエッグには生クリームを惜しみなく投入し、ボウルには濃厚なヨーグルトをたっぷり満たした。

若干ドイツ風のメニューだが、マルガリータはザワークラウトが苦手なので、野菜はピクルスとサラダ、あとはフライパンに残ったソーセージの脂で細切りのポテトを揚げ焼きにしよう。

さすがに朝からビールを出すわけにはいかないので、飲み物はいつも通り紅茶とコーヒード。

「よし、そろそろ完成だな」

当然、クリームもヨーグルトも、ここピジョン牧場で酪農を営むメリー乳業製だ。

新鮮で質のいいミルクがいつでも買えるのは、この牧場に住む者の特権だな。

逆に、ピジョン牧場に専業のベーカリーは無いので、毎朝焼き立てのパンを手に入れるのは難しい。

簡単なスコーンやビスケットなら自家製でもいけるが、本格的なクロワッサンやブリオッシュとなると……そこだけは郊外に住むデメリットだな。

まあ、最近は飛行ブークルで朝早く出るオットーが、ついでに『ネフロベーカリー』に寄つてうちの分もクロワッサンを調達してくれることもあるが……。

そんなことを考えていると、ちょうどダイニングに一人の足音が降りてきた。

「おはようございます、博士」

「うむ。おはよう、グレイ」

テーブルの上座に腰を下ろした眼鏡の小柄な老人は、俺が淹れた紅茶のカップにゆっくりと口をつける。

彼が、トロットブークルの開発者にして、多分野に精通する世紀の天才。

この工房の主であるナツメグ博士だ。

着の身着のまま異世界に転移した俺を拾ってくれた恩人で、マルガリータの師匠でもある。

……思えば、俺が博士の助手になってもう四年以上は経つのか。

俺がこの世界に転移したのは、本編開始時の二年ほど前。

そこから本編エンディングを迎え、一年後の再会イベントを終え、さらに一年以上が経ち、もうすぐ季節は冬……俺ももう29になった。

時が経つのは早いものだ。

「ん？ 何じゃ？ 人の顔をジロジロ見よってからに」

「いえいえ。あ、ヨーグルトにはブルーベリージャムをどうぞ。目にいいらしいですよ。老眼に効くかはわかりませんが……」

「ふんっ、人を年寄り扱いしよってからに」

そう言いつつも、博士はヨーグルトのボウルにたつぷりのジャムを投入した。

アントシアニンはともかく糖分も取ることになるわけだが……まあ、健康が気になるのは俺も同じだし、今後は緑黄色野菜と青魚を今までより多めに取り入れるか。

そんな会話をしているうちに、俺の後にシャワーを浴びたマルガリータも食堂にやって来る。

洗いざらしのシャツに作業用の前掛けを身に着けた彼女は、微かに石鹸の匂いを漂わせながら俺の隣の席に着く。

こうして今日もナツメツグ邸の朝はのんびりとした朝食から始まった。

粗方ソーセージとプレッツェルを片付け、ヨーグルトに手を伸ばしたマルガリータは口を開いた。

「そういえば……今日だったよね？ あの二人が帰って来るのって」

何の話かといえば、バナラとコニーのことだ。

数か月前から、二人は揃ってこの国を離れていたが、久しぶりに帰ってくることになったのだ。

「あんた、準備はしてるの？」

「ああ。昨日、スームスームに確認したが、近くの海域で天候不良や船の遅れは出ていないそうだ。十中八九、今日中に到着する。迎えに行ってくるよ」

「ほう、もうそんな時期じゃったか」

去年の夏の終わり頃、バナラはジュニパーベリー号の航海を終えてこの国に戻ってきた。

コニーと再会し、その後は数か月ほど二人で国内を回ったり、トロット楽団を再結成してロブスター亭で演奏したりしていたが……年明けには、バナラは再度この国から旅立った。

今度はコニーも一緒だ。

春先には、俺とマルガリータの結婚一周年記念に軽く食事会でも開こうと思っていた

のだが、招待する間も無く二人は出立してしまつた

結婚記念日を大々的に祝うことにあまり前向きでなかつたマルガリータも、バナラたちを呼べないことに關しては随分と残念がつていたものだ。

その後も、旅先の二人から時折手紙は来ていた。

近況の報告だつたり、立ち寄つた街の情勢だつたり……一度現地のバイオリニストにナツメツグ博士を紹介したなんて話も書いてあつたな。

その数週間後、コニーの紹介状を持つたハレーという男が本当に現れたときは、俺も少し驚いたものだ。

バナラとコニーの二人は、近くの都市群をいくつか回り旅をしていたそうだが、春夏はずつとオリオンシティで過ごしていたという。

あそこはペガサス社のお膝元で、大規模なビークルバトルの大会が常に開催されている活気に溢れた街……居心地も良かったのだろう、

二人が出立して既に一年弱が経つた。

ゲーム本編エンディングの時期から過ぎた時間はもう二年以上……今年で二人とも19になつたか。

あの二人がのんびりとやっている間に、この国も色々と様変わりしている。

技術も経済もネットワークも……新しいものが増え、アップデートされてゆく。

浦島太郎状態の若者たちが一年近くの放浪を終えて帰って来るとなれば、出迎えないわけにもいくまい。

「本当はあたしも行きたかったんだけどね……」

「二人水入らずで、あちこち旅をして帰ってきたばかりだ。あまり大勢で囲むのなもの……。落ち着いたら顔を出すよう伝えておくよ」

「それがいい。長旅であ奴らも疲れておるじやろうて。グレイ、何か美味しい物でも食わせてやれ」

「ええ、そのつもりです」

そんな会話をしながら、俺たちはテーブルの上の料理を全て片付けた。

朝食にしては若干重めのメニューだったが、マルガリータはビークルの整備でよく動くし、博士も年の割には健康家なので、この程度のポリウムはまるで問題にしない。

そして、ダイニングの片付けと皿洗いを終えた俺は、早速ナツメグ邸のビークル工房は向かった。

駐機スペースに向かうと、一台の黒塗りのビークルが鎮座しているのが目に入る。

俺の愛機「ジャガーノート」だ。

元々は盗賊団からかつばらった機体で、ガワも中身もありふれた品だったが、俺の改造プランとナツメツグ博士の技術の融合により、超強力な戦闘ビークルへと変貌を遂げた。

まず、エンジンには摩耗に強く耐熱性に優れるミスリル製パーツを使用し、高出力のハイブリッド型機関を搭載している。

増設燃料ポッドに小型補助エンジンも内蔵した動力系はもちろん、人脚ノーマルM強化型パーツを筆頭とした足回りにも改良が加えられており、駆動系はスムーズ且つ低燃費で非常に強いパワーを発揮できる優れモノだ。

ボディはもちろんミスリル製の装甲を何重にも搭載したオリジナルの耐水ボディ。下手な武装では傷一つ付かないが、そのパワーや耐久性とは裏腹に軽量化にも成功しており、水上でも十分に運用可能な仕様となっている。

ブレストパーツは生存能力を高める装甲ブレスト、風防パーツにも操縦者を保護する機甲を施しているため、防御の方も抜かりない。

もちろん、武装は機動力と火力を両立するカスタム品だ。

右アームには、ダンジョン産の黒鉄とオリハルコンでパワーアップした、強化ブレードアーム。

細身の刀身ゆえの軽さと振りの速さを維持しながら、耐久性や切れ味は原作最強の近

接武器エクスカリバーアームにも引けを取らない。

銃身と機関部をミスリル合金で作ったチエーンガンは、ガトリングアームと同等の火力を維持しながら単銃身で装填機構も単純化したため、精度も信頼性も格段に向上し弾薬容量も二倍ほどに増えている。

……とまあ、ここまでなら、数年前に施した改修と変わらない。

コストを度外視し、魔法金属資源をふんだんに使い、ナツメツグ博士と協力して作り上げた一点物の機体は、まさに原作ブレイカーな規格外だが……トロットビークルが誕生してはや数十年。

大手企業が開発販売するビークルも、その基礎技術は着々と進化を続けている。

石油プラント技術の向上、飛行ビークル技術の登場、電気工学の認知……どれもここ数年の出来事だが、そうした世間の情勢は間違いなくビークル開発にも影響を及ぼした。

最近では、ビークル販売最大手の『ラズベリーリーフ社』がこれまでの「カモミール・タイプⅡ」型の機体を大きく値下げして、最新の「カモミール・タイプⅢ」を売り出したと聞く。

これがなかなかの代物で、量産型でも数年前の中堅ビークルバトラーのカスタム機体と変わらない運動性能を持ち、汎用パーツのバリエーションも大幅に増えたらしい。

さすがにコストの問題で、「ジャガーノート」を上回る火力と機動力と防御力を兼ね備えた機体はまだ普及していないが、それでもビークル製造工業のレベルは確実に上がっているわけだ。

そんななか、当然俺たちもただ手を拱いていたわけではない。

トロットビークルを発明した天才の名に懸けて、ナツメツグ博士は日々精力的に新しいパーツや機体部品の開発に取り組んでいる。

最近では、マルガリータも本格的に「ジャガーノート」の改良に参加しているため、俺の愛機の性能は益々向上していた。

まず挙げられるのは、何と言っても射撃武器のアップグレードだ。

「ジャガーノート」の左アームには、強力なガトリングアームの発展型ともいえる単銃身のチェーンガンが搭載されているが、マルガリータは空冷用のベンチレーションリブの形状を改良すると同時に、アンダーバレルに武装をもう一つ追加してくれた。

チェーンガンの精度や信頼性を損なわないだけでも大したものだが……追加された武器の規格は何と、長距離キャノンアームと同口径のミサイルランチャーだ。

小型化と短銃身化により長距離砲撃の正確性は若干低下しているため、一撃必殺という点ではフェンネルの「ブルー・サンダー」にやや劣るが、マルガリータは地味にレ-

ザー式と同調形照準補助装置も風防パーツに取り付けてくれたため、通常の交戦距離であれば何も問題ない。

バックパーツの増設弾倉なしでは純正の長距離キャノンアームより携行弾数は減るが、誘導弾や炸裂弾、特殊弾頭を撃てるようになったことは、大きなアドバンテージだ。乱戦時や面制圧攻撃を必要とする場面では、戦術の幅が広がるだろう。

因みに、チェーンガンやランチャーのフレームは、ミスリル仕上げの上にパーカーライジングの反射防止加工を施してあるため、強烈な火力とは裏腹に隠密性も兼ね備えている。

さらに右アームに装備する強化ブレードにもさらなる改良が施した。

つい最近になってマルガリータが完成させた高速振動装置を刀身に組み込んだのだ。まさか、バイブレーションソードが実用化するとはな……。

この機能を搭載したことで、強化ブレードはさらに攻撃力と切断力を増した。

最初の頃は、不規則な振動でアームの基礎部分に負荷が掛かり、「ジャガーノート」を何度も工房へ入院させるハメになったものだが……今はビークルのスクラップを連続で両断しても刃毀れることさえ無くなった。

……そういえば、高周波振動は切断速度が上がるだけで、切断能力そのものは刃自体の耐久力と切れ味に依存するため、切れないものが切れるようになるわけではないと聞

いたが……さすがにここまでのトントデモ兵器になってくると、俺にも理解が追いつかない。

スチームでパンクな『何か』があると納得するしかないな。

そももちろん、エンジン系や発電機も以前とは比べ物にならないほど性能が上がっている。

エンジンの回転や操作伝達系のラグが圧倒的に少なくなったことは、より操縦者の思い通りに機体を動かしやすくなったことを意味する。

これは、事故防止にも戦闘機動を取る際にも重要だ。

おまけに、最近ではマルガリータが調整した最新の電子制御系と改良型の駆動モーターによって、エンジンの超静音稼働と一定時間の完全電動駆動が可能となった。

一見、地味な改造だが、この機能の有無の差は意外と大きい。

可動音が静かになれば奇襲や攪乱がしやすくなるし、改良型の熱処理機構と電動駆動モードを合わせれば、疑似的なサーマルステルス状態——エンジンの熱源を追尾する火器から逃れることも可能となる。

現実性を使いどころの難しさは未だに課題だが、生存能力の向上には間違いなく一役買っている機能だな。

あとは、大容量のキャリアーWをベースに、展開式のステージや予備弾薬箱をモジユ

ラー化したバックパーツ。

さらに、助手席には昨今の電話の普及を鑑みて博士が開発した試作品の無線機を搭載している。

暗号化通信がまともに存在しない時代においてはなかなかのオーパーツだ。

あと、これは極秘の研究ということになっているが……【ジャガーノート】のкокピットには、アクティブ型の赤外線暗視装置も搭載されている。

観測スコープに赤外線投射器を取り付けた、暗視装置としては古い形式の代物だが、これがあれば夜間のビークル操縦の概念が大きく変わる。

ここまで行くと、さすがに兵器としてのレベルが高すぎて笑えないが……まあ、いずれは誰かが辿り着くものなので、そこら辺は博士も割り切ってくれているのだろう。

【ジャガーノート】がコスト度外視の一点物ビークルとはいえ、大企業の開発レベルを常に上回るパフォーマンスを実現できているのも、ひとえにナツメグ博士とマルガリータの協力あつてのことだ

何はともあれ、二人の信頼のもとこれだけの代物を預けられた以上、俺も半端な気持ちでビークルに乗るわけにはいかないな。

3話 愛機 後編

「あつ、グレイ。よかった、まだ居たね」

「ん？ どうした、マルガリータ？」

俺がクレーンを操作して「ジャガーノート」の装備を換装していると、マルガリータが工房の整備スペースにやって来た。

洗いざらしのシャツの袖を捲り、作業ズボンの上には溶接の火花も防げる分厚い前掛けを着用している。

そんないつも通りの恰好で現れた彼女は、クレーンの操作盤の前までやって来るとやぶつきらぼうな仕草で顎をしゃくった。

「また、飛ぶんでしょ？ 翼のチェックはあたしがやるから。あんたは武器の方を見ておきな」

「そうか……なら頼むよ。機体の整備は君にやってもらった方が安心だ」

俺も最低限のパーツ換装と応急修理はできるが、専門的なことはやはりマルガリータの手を借りるに限る。

特に、繊細な調整を要求される品を扱う際は、彼女に任せた方が安全だし作業も捗ることは間違いない。

俺はおとなしくクレーンの操作盤を彼女に譲った。

「それじゃ、ちやつちやと済ませるよ」

そうしてマルガリータの主導のもと、「ジャガーノート」の装備は普段の汎用戦闘仕様から一気にシフトチェンジし……両腕の武装つきアーム、装甲ブレスト、増設弾薬ボックス入りのバックパーツといった装備は全て取り外される。

そして、ほとんど裸になった我が愛機に装着されたのは……カスタム型のプロペラブレスト、ウイングアーム、そして尾翼バックパーツだ。

どれも、ナツメツグ博士が特別に拵えてくれた、「ジャガーノート」専用の飛行装備である。

二年前のブラッディマンティスとの決戦で、ナツメツグ博士とマルガリータはビークルの飛行用パーツを完成させた。

バナラの「カモミール・タイプⅡ」とオットーの「フラップフライヤー」はこの完成した飛行装備を使って戦いを挑み、見事ブラッディマンティスの飛行船『グランドフィ

ナーレ』を撃退したのだ。

しかし、その時の飛行パーツは、俺のビークルに装着できなかつた。

『ジャガーノート』は他のビークルと同じくあらゆるパーツを装備できる汎用機だが、オリジナルの武装や装甲で固めた重装備の機体をこれまた強力な特殊エンジンで動かす一点物のカスタムビークルゆえ、どうしても一部そのままでは使用しにくいパーツがある。

特に、飛行用装備のような絶妙なバランスを要求されるパーツは、機構が大雑把な汎用規格を無理やり装着して動かさうものなら、下手をすると空中分解する危険がある。

これは一点モノの癖の強いじゃじゃ馬機体なら、どうしようもないことだ。

そんなわけで、『ジャガーノート』の飛行実験はより慎重にテストを重ねると、博士とマルガリータの二人からお達しが出ていたのだ。

もちろん、俺も専門家である二人を差し置いて離陸を強行するほどアホではない。

二人が研究を進める間、俺は大人しく他の仕事を片付けたり、別の中古ビークルを飛行仕様にして低空を飛ばし操縦の訓練を積んだりした。

そうこうしているうちに、飛行ビークルの噂は瞬く間に国中へ広がり、ビークル製造の最大手ラズベリーリーフ社はナツメッグ博士と交渉し特許使用契約を結んだ。

現在は、汎用の飛行パーツが急ピッチで開発・製造されている。

もちろん、空を飛ぶのは普通に地上でビークルを走らせるのとはワケが違う。

事故の頻度も危険レベルも桁が違い、特殊な操縦スキルを要求されることもあり、飛行ビークルの数自体はそれほど爆発的に増えているわけではないが……それでも、最近ではネフロやハッピーガーランドにビークル用の飛行場が建設されている。

飛行装備の性能が安定し、安全性とパイロットの技術レベルが向上していけば、いずれ飛行ビークルはこの国の輸送網の中核を担うものとなっていくだろう。

うちの家計も特許料の支払いで潤うわけだ。

因みに、グランドファイナーレ戦で墜落した機体に代わる「フラップフライヤーⅡ世」を手に入れたオットー&ウイリーの飛行兄弟の近況だが……最近では、オットーが毎朝飛行ビークルを飛ばして、各地に牛乳を配達している。

地球で言う大戦後の郵便配達機の亜種みたいなものだな。

もちろん、オットーは空を飛ぶことに関して一日の長があり、その操縦スキルは傍から見ても疑う余地がない。

もちろん彼のパイロットとしての評判は高く、件の最大手ラスベリーリーフ社がテスト飛行をオファーし、自社製の飛行パーツをモニターとして提供してくるほどだ。

当然、飛行兄弟にも広告塔としてかなりの謝礼金が支払われている。

まあ、オットーたち兄弟からすれば、今まで実家のメリー乳業に穀潰し扱いされてい

たところからの、ようやくの脱却だ。

そもそも、オットーは空を飛べれば満足、ウイリーも大空を翔る【フラップフライヤーⅡ世】を弄れば大満足という、稀代の変人兄弟である。

趣味と実益を兼ねた仕事で儲けも期待できるとなれば、最近の二人が随分とご機嫌なのも頷けるだろう。

……とまあ、世間ではそんなことが起こっている間に、マルガリータと博士は更なる研究を重ね、いくつものパーツを開発調整しては試行錯誤し……そして漸く、この【ジャガーノート】専用の飛行パーツ一式を完成させたわけだ。

マルガリータの手により淀みなく装着されていくパーツを見ながら、俺はそつと呟いた。

「相変わらず、凄えメカだな……」

「そりやそうさ。何せ、あたしとナツメグ先生のお墨付きだよ。傑作に決まってるじゃないか」

俺の呟きに反応したマルガリータは、誇らしげな表情で胸を張った。

肝心の【ジャガーノート】専用の飛行装備だが……さすがに二人の天才技術者が多大

な時間と労力を掛けただけあり、その性能は投入されたりリソースを見事に反映している。

まず専用のプロペラブレストには、静音ローターで騒音とメカノイズを軽減した最新型の機関を搭載。

奇襲戦闘に対応した設計思想というだけでなく、そもそも機関への負荷を極限まで減らしているので、故障が少なく寿命も長い優れモノだ。

重要なパーツにはもちろんミスリル合金を使用しており、ボディの装甲ほどではないが、生半可な攻撃では傷一つ付かない耐久力を兼ね備えている。

エンジントラブル一つで簡単に命を落としかねないのが空の上だ。

プロペラ駆動パーツの信頼性は何よりも重要なので、この部位の耐久性は上げておいて損は無いが……これ、普通に企業で製造したらいくらぐらい掛かるんだらうな？

……うん、恐ろしいので試算はしないでこーう。

さらにブレストパーツ上部には、プロペラ同調式のヴィツカース機銃を2門装備している。

機銃の弾薬は俺のハンティングライフルと同じ303口径。

鋼鉄のビークルを撃ち抜けるほどの武器ではないが、操縦手や飛行ビークルの細かいパーツを狙えば、十分にドッグファイトを展開できる代物だろう。

展開式ウイングアームには、チェーンガンと同じ規格の弾薬を使用する機関砲が各一門、両腕で合計2門を搭載している。

こちらは砲自体がまだテスト段階なので、性能はそれほど期待できない。

とりあえず、チェーンガンと同規格の銃身と機関部、フルオート機構を組み込んだ小型砲はどうか完成させたが、ノーマルのチェーンガンアームとは設計の完成度も信頼性もまるで比べ物にならない。

当然ながら、空中での機銃掃射は地上で地に足が付いた状態で発砲するのは色々勝手が違うので、実際のドッグファイトでもともに命中するかも定かでない。

しかし、チェーンガンの弾薬規格が、重機サイズのビークルを確実にスクラップに出来る代物なのは確かである。

本格的に実用化すれば、飛行ビークルを瞬く間に撃破できる主砲となるはずだ。

あと、尾翼には大容量のカーゴスペースを確保した。

このカーゴにチェーンガンやブレードアームを積んでおけば、うちから街の飛行場に飛んだ後、その場で地上装備にすぐに切り替えられる。

まあ、一言で言つて……至れり尽くせりなシステムだ。

今やビークル一台で、文字通りどこにでも行ける。

「ふうー！ さして……」

そんなことを考えていると、作業を終えたマルガリータがシャツの袖で汗を拭い、俺に向き直った。

「こんなもんかね……。あんた！ 整備はできてるから、いつでも飛べるよ」

「ああ、こつちも機銃のチェックが終わった。ありがとう、マルガリータ。……じゃ、行つてきますんで。無線の周波数はナツメッグ邸に固定してあります。何かあつたらコールしてください」

「うむ」

「あんた、気を付けてね」

母屋のナツメッグ博士に声を掛けた俺は、マルガリータと軽くキスを交わし、ビークルに乗り込んだ。

普段は広い視界を確保するためあまり使わないゴーグルを装着し、万全の態勢でオットーとウィリーのガレージ屋上へ昇った俺は、アームパーツを操作して両腕のウィングを展開する。

そして、プロペラブレストの回転が最大トルクに至ったタイミングでペダルを踏み込み、発射台から「ジャガーノート」を離陸させた。

4話 再会

飛行仕様の「ジャガーノート」を飛ばしてスキートル湖上空に出た俺は、進路をイワツバメの滝方面に取った。

行き先はまずハッピーガーランドの飛行場だ。

本当なら、このまま直でスームスームに向かい、船着き場へバナラたちを迎えに行きたいところだが……さすがにスームスームでは、一般公開の飛行場は運営されておらず、街上空での飛行も原則禁止されている。

これは、スームが貿易拠点として栄える港町で、外海から人も物も大量に流れ込んでくるという性質上、仕方の無いことだろう。

街の表と裏を仕切るドン・スミスファミリーからすれば、船の積み荷を監視するだけでも大変なところに、さらに敵とも味方ともわからない飛行物体がそこら中を飛び回るのは勘弁してほしいというわけだ。

そんなことを考えていると、助手席の無線機に受信を知らせる表示があつた。

俺は受信機からマイクを外して手に取り、現代の基準からすると若干大型なトランス

ミッターを操作して呼び出しに答えた。

「はい、こちら【ジャガーノート】」

『グレイ、飛行ビークルの具合はどうじゃ?』

予想通り、通信の相手はナツメツグ博士だ。

まあ、無線自体がまだそれほど普及している技術ではないからな。

【ジャガーノート】の車載無線に掛けてくる相手は限られている。

「問題ありません。姿勢も安定してるし、エンジンや可動部にノイズも無い。マルガリータにいい整備だと伝えてください」

『うむ。お前さん自身にも、体の不調は出ておらぬか?』

「ええ、何も。まあ、強いて言うなら、少し寒いくらいで……」

飛行中、ビークルの風防パーツのガラス窓は、風除けのため普段より若干嚴重に閉じてキャノピーに近い状態になっているが、それでもこの季節の上空は少し冷える。

さすがにプロペラやエンジンから潤滑油が飛び散ることはないのも、俺はいつも通りの服装で運転席に座りハンドルを握っているわけだが……この先、もっと過酷な状況でビークルを飛ばすことになる可能性を思えば、フライトスーツは開発を進めた方がいいかな?

さすがに与圧服が必要になるのはもっと先だろうが……。

因みに、「ジャガーノート」の風防はガラス自体も特殊加工の防弾仕様で、ポリカーボネートを含む分厚い重層構造にして強度を上げている。

ビークル搭載サイズの武装はともかく、小火器なら命中してもまず撃ち抜かれることはないだろう。

さらに、表面には硬質ガラスをコーティングしているので、砂や小石を受けてもガラスに傷がつきにくいという優れモノだが……耐寒性を上げるためには、コクピットやキャノピーの構造にもまだ改善の余地があるかもしれないな。

『グレイ?』

「ああ、いえ、大丈夫です。……用件はそれだけです?」

『いや、もう一つじゃ。出先の用事が終わったら、「ジャガーノート」の計器データは全て持ち帰ってくれよ。高度と運転性の関連チェックも忘れるでないぞ』

「はあ、そういえば前にもそんなことを言っていましたね。着陸直後にメーター系をリセットしたら、二人してカンカンに……やつぱり、実地のデータがもつと必要ですか?」
『当然じゃ。飛行ビークルの運用データはまだまだ不足しておる。オットーは頼んでもロクな記録を持つて来んのでな……』

「あ、察し……。わかりました。今回は間違いなくお届けしますよ。アウト」

通信を終えた俺は、無線機を元に戻すとハンドルを握りなおした。

「ジャガーノート」専用の飛行装備が完成して、俺も飛べるようになったのはいいことだが、こうした雑用が増えたのは面倒だな。

しかし、汽車の代わりに飛行ビークルを使えば、移動時間は大幅に短縮されるわけで……飛行技術の発展のためなら、多少の手間くらいどうということはないか。

気を取り直して、俺は眼下に流れる透明な水面を眺めながら、風に乗るようにビークルを飛ばし続ける。

そうしてしばらく愛機を操縦していると、やがて俺はこの国最大級の都市であるハッピーガーランドに到着した。

「お、見てる見てる」

街の上空に近づくと、城壁近くの住民たちは次々とこちらへ意識を向けた。

一部の歩行者は脚を止め、パトロール中の警察ビークルの搭乗者も顔を上げて空を仰ぐ。

まだまだ飛行ビークルが珍しいこともあるだろうが……何より、グランドフィナーレの件があったから、ハッピーガーランドは空から飛来する物体をとりわけ警戒している。

何せ、この国で唯一、空からの爆撃を受けた街だ。

最近は大分マシになってきたが、以前であれば問答無用で通報されていてもおかしく

ない。

まあ、俺の「ジャガーノート」はビークルバトルーナメントチャンピオンとしても有名なので、城壁や各所から黒塗りのボディを確認できる距離まで下降すると、住民たちも警官たちも次々に警戒を解いていったが……。

若干の緊張感が残るなか、俺は真つ直ぐ飛行場へビークルを進め、そのまま淀みなく発着スペースに「ジャガーノート」を着陸させた。

飛行場で「ジャガーノート」を通常仕様に換装した俺は、そのまま真つ直ぐスームスームへ向かった。

整備場に預けた飛行パーツの代わりに、尾翼バックパーツのカーゴから取り出した装甲プレストに両腕の武装アーム、バックパーツには増設弾薬ボックスを装着する。

移動は汽車なので、道中で盗賊団と戦闘になる可能性は低いが、街中で万が一のことが無いとも限らないからな。

しかし、そんな俺の心配を笑い飛ばすかのように、汽車は景気よく汽笛を鳴らしながらスーム駅へ滑り込んだ。

ホームへ降り立つと、商業港と倉庫街の喧騒が聞こえてくる。

相変わらず、この街は賑わっているな。

古くから貿易港として栄えてきたこともあるが、街を取り仕切るドン・スミスファミリーは興行に熱心だし、最近ではセントジョーンズ卿の協力で医療機関なども建設されている。

ゴミゴミした港町なのは相変わらずだが、文明レベルは着実に向上しているわけだ。

もちろん、煌びやかな富裕層街とは裏腹に、労働者区域は一步路地裏へ入れば危険がいつばいだが……。

「さて……時間もちようどいいな」

ジャケットのポケットから懐中時計を取り出し確認すると、時計の針は既に昼を回っている。

ピジョン牧場からハッピーガーランドへは空路出来たとはいえ、途中で雑用を片付けたりしている間にそこそこ時間を食っていたようだ。

俺はブークルに搭乗すると、足早にスーム海浜公園へ向かった。

漁船や近隣の海路を繋ぐ交易船は大抵が倉庫街沿岸の港に停泊するが、長距離を航行する客船やクルーズ船は富裕層エリアに直結するスーム海浜公園沿いの船着き場に來ることが多い。

バナラとコニーの乗った船も、こちらに着岸することは確認済みだ。

とはいえ……まだ、到着の時間には早かったようだ。

帆船も現役のこの時代、視界の利かない夜中に入港しようとする馬鹿は居ないが、多少の遅れや時間のバラツキは避けられない。

ひとまず、俺はそれらしい客船が来るまで軽く昼食を取ることにした。

「おつ、グレイじゃねえか。食つてくかい？」

「グレイロか……そうだな、一つ貰おう。ドリンクもくれ」

「はこよ」

海岸線を南に移動すると、ちょうど顔見知りの店が出ているのを見つけた。

屋台から声を掛けてきた彼にホットドッグを注文し、立ったまま紙コップに口をつける。

気取らないファーストフード店だけあって、テーブルやパラソルなんて気の利いたものは置いていない。

「景気はどうだ？」

「さっぱりだな。宣伝は続けてるが、相変わらず客が付かなくてよ」

営業時間外のグレイロは、店の宣伝も兼ねてスーム闘技場のピークルバトルに出場しており、ランクは副業とは思えないAランク。

知名度は十分で、そもそも彼の店の店のホットドッグは安くて味も悪くないのだが……どうにも商売は上手くいっていない。

不思議なものだが……まあ、店主がこの見た目ではな。

あと、場所が悪いのもあるか。

ここは港の倉庫街よりも富裕層エリアに近い。

本来のターゲットである労働者たちの根城とは立地が街の反対側なので、朝食や昼飯を買いに来るには若干距離がある。

「ここなら競争の激しい港の一角でスペースを確保するより面倒が無え。金持ちの住処にポツンと空いた場所で、借り賃もそれほど高くねえときた。屋台を出すにはいい場所だと思ったんだがな」

「確かに、この辺りじゃファーストフードの需要はそんなに多くないか」

逆に富裕層の住民なら、それこそこんなイカツイ店主の屋台ではなく、高級レストランの接客と豪華なコース料理を求めらるだろう。

完全なミスマッチだ。

「最近、交易の活性化やら何やらで、新しく街に来た奴がちよいちよい寄ってきてくれるがな。このまま波に乗ってくれりや、言うことねえんだが……」

なるほど。

確かに、固定客が付かないのは厳しいよな。

グレイ口はビークルバトルで食えるからまだマシかもしれないが、店を潰して路頭に迷った者の話は枚挙に暇がない。

そういった輩が流れ着く先というのも、やはりというか北地区の労働者エリアことドヤ街だ。

グレイ口には悪いが、そういう意味ではここらの地域に投資しなくて正解だったかもしれない。

「……おっと、そろそろか」

そんな具合に、若干愚痴を交えた会話をグレイ口と交わしていると、やがてスーム海浜公園の船着き場に大型の客船が入ってきたのが見えた。

目的の船が到着しようだ。

俺はグレイ口に声を掛けて昼食のゴミを処理すると、スーム海浜公園の船着き場へ向かった。

入港してきた大型船は、船体を寄せて着岸すると、タラップを接続して乗客を次々に吐き出した。

続々と船から降りて来る乗客と迎えの人間で、船着き場は瞬く間に人でごった返す。

その傍らでは、船の乗組員や港の作業員が淡々と仕事を進め、積荷や客のビークルを手際よく船倉から下ろしていく。

しばらくすると、俺は若干密度の下がった人の波から目的の人物を見つけた。

赤とピンクを基調とした服装の可憐な茶髪の少女と、金髪の少年の組み合わせだ。

「バナナ、コニー！ こっちだ！」

「あつ！」

声を張り上げて呼び掛けると、先に俺の存在に気付いたコニーが隣のバナナの腕を引いて、人ごみを掻き分けるようにしてこちらへ向かう。

コニーに近づき声を掛けようとしていた男たちの視線が、一瞬だけ鋭さを増して俺とバナナへ突き刺さった。

そんなバナナはコニーに振り回されるような動きで、両手に大きな目の荷物を提げたままこちらへやって来た。

一瞬、コニーの分も荷物を持たされているのかと思ったが……あれは楽器ケースか。

ナツメツグ博士が渡したトランペットに、もう一方のケースにはダンディリオンから譲り受けたバイオリンが入っているのだろう。

「やあ、お二人さん。お帰り」

「うん。ただいま、グレイ。迎えに来てくれて、ありがとうね」

「久しぶり、グレイ」

人ごみを避け海浜公園の欄干沿いに寄ったところで、俺は懐かしい二人と挨拶を交わす。

バナラの言う通り、何だかんだ二人と顔を合わせるのは久しぶりだ。

バナラが帰ってきたのが、去年の夏の終わりから秋口にかけて……今年の初めから、二人はずっとこの国を留守にしていた。

時折、手紙はやり取りしていたが、思えば結構な期間を二人は放浪していたわけだ。

……初めて会ったときに比べると、バナラは随分と逞しくなったような気がするな。

「コニーも心なしか垢抜けたかな？」

「ん？ 僕たちの顔に何か付いてる？」

「いや、何でもない。……オリオンシティはどうだった？」

「楽しかったよ。歌のレッスンをしたり、現地の音楽に触れたり……有名な『レストラ
ン・シタガトロケール』にも行ったんだ。シチューもシラサギ芋のグラタンも美味し
かったなあ。あ、そうだ！ オリオン新聞つてところから取材を受けたの。担当の記者
さんがホテルの窓越しに話しかけてきてビックリしたよ」

「ああ、そんなこともあったね。……あと、盗賊団はどこにでも出るんだね。確か、ダー
クスコーピオンとかいう奴らだったかな。それと、僕たちは後で知った事件なんだけど

……ペガサス社の重役が逮捕されたんだ。何でも、裏で盗賊団と通じてピークルの販促に利用してたとか……。本社ビルで凄い戦闘があったらしくて、結構な騒ぎになっていたよ」

「どうやら、二人ともオフを満喫できたようだ。」

テンション高く楽しく気に語られる二人の話の話を聞いていると、やがてバナラの愛機「カモミール・タイプⅡ」が船からクレーンで下ろされてくる。

機体の基幹部分にそれほど変化は見られないが、いくつかのパーツが換装され、見慣れない整備の跡が確認できた。

「ペガサス社の提供だね。ハッピーガーランドのトーナメントに参加したこととか、こっちの国でSランクのライセンスを持つていることとか……。そういうのが考慮されて、無料でパーツを貸してくれたんだ。おかげで色々試せたよ」

向こうの闘技場では、レッグパーツを馬型四足に換装し、近接武器には現地製のスパイク鉄球、ガトリングアームの代わりに最新型のマシンガンアームを使っていたらしい。

完全に重装備の中距離戦闘に特化した要塞型だな。

今はレッグを汎用の二足タイプに戻し、近接武器もダンディリオンの「ホワイトレク

イエム」から引き継いだエクスカリバーアームを装備している。

しかし、射撃武器は単銃身のマシンガンアームを継続して使うようだ。

ボデイやエンジン系にも、ラズベリーリーフ社のものとは違う部品がいくつか混じっているのが見えた。

なるほど。

近接武器はデカくて重いが、射撃武器は軽量でフットワークを損なわない上手いカスタムだな。

駆動系もバニラなりに出力と機動力を向上させるいい感じのカスタムに仕上がっているように思える。

「そうか。色々見て、気に入ったパーツもあったみたいだな」

「ああ、スパイク鉄球とか四足はあまり合わなかったけど、このマシンガンアームはいい感じだよ。ノーラには悪いけど、旧式のガトリングより軽くて火力も同等以上だからね。信頼性とかはグレイのチェーニングに及ばないけど、悪くない品だと思う」

「なるほど……：ビークルも君も、強くなったんだな」

因みに、「カモミール・タイプⅡ」のブレストパーツは、今も昔も変わらずキラエレファントのボスから譲られたエレファントブレストだ。

聞けば、他の国でビークルバトルに出場する際も、ブレストパーツだけは換装しな

かったそうだが……やはりこれはバナラにとつてお気に入りなのだろう。

そんな無駄話をしている間に、バナラのピークルの積み下ろし作業が終わった。

俺は二人の荷物の積み込みを手伝い終わると、「カモミール・タイプⅡ」のкокピットに乗り込んだバナラとコニーを見上げて口を開く。

「二人とも、今回は長旅で疲れただろう？ とりあえず、今日はゆっくり休むといい。部屋を用意してある」

俺は礼を言う二人に気にするなど手を振って、電話で予約していた『ホテル・ブルー・マリーリン』の名前を告げた。

夕食はスペシャリテを二人分シエフに頼んでおいたが、部屋は一つだ。

キングサイズのダブルベッドは気に入ってくれるだろうか？

「じゃ、俺はこれで。落ち着いたら、ナツメツグ邸にも顔を出してくれ。博士とマルガリータも会いたがってる」

「えっ、もう行っちゃうの？」

俺は一緒に食事でもと引き留める二人の誘いを丁重に断り、自分のピークルに乗り込んだ。

さすがの俺も熱々バカップルの夜を邪魔するほど野暮ではない。

満更でもない表情でピークルを発進させるバナラたちを見送り、俺は「ジャガーノー

ト】のエンジンを掛ける。

「さて……日没までに帰れるかな？」

いくら赤外線照射器があるとはいえ、さすがに夜間飛行は無理ゲーだ。
日のある内にピジョン牧場へ着くよう操縦しないと。

5話 宵の口

夕暮れ時のナツメッグ邸のダイニング。

俺とマルガリータとナツメッグ博士は、揃ってテーブルの真ん中に鍋を囲んでいた。弱火にしたカセットコンロに掛けられたホーロー鍋では、白ワインで溶いた三種類のチーズが泡立っている。

そう、今日のメニューはチーズフォンデュだ。

「ほほう、美味そうじゃな」

「同じような料理はミームー村でもよく食べたけど……これは凄く豪華だね」

確かに、元々この手の調理法は固くなったパンをどうにかして少しでも美味しく食おうというものだからな。

しかし、当然ながらうちのフォンデュは一味違う。

ベースはオーソドックスにグリユイエール・チーズとエメンタール・チーズ、そこに青カビの風味が特徴的なブルー・デ・コース・チーズを加え、小麦粉を軽く塗した後、白ワインをたっぷり加えて火にかける。

焦がさないようじっくりと加熱してワインのアルコール臭さを飛ばした後、最後はブランドーを全体に掛け回して鍋ごと軽くフランベした。

当然、チーズは全てピジョン牧場産の厳選した品だ。

肝心の具材は、スイスの伝統に従ってパンだけとなると寂しいので、ソーセージやハム・ベーコン、軽くソテーした鶏肉に茹でたウズラの卵、ブロッコリーやパプリカにアスパラやジャガイモなどの温野菜、キノコ類も用意した。

もちろん、現代のチーズフォンデュにはシーフードも欠かせないので、スームスームから新鮮なエビとホタテを取り寄せている。

最近では冷蔵設備をバックパーツに搭載した輸送ビークルも普及してきたので、今までは海辺に住む人々の特権だった海産物も、こうして手に入れることができるわけだ。

「さ、チーズもいい感じに溶けたところで……二人とも召し上がれ」

「ああ。では、いただきますしよう」

「わっ、凄いトロトロっ。それにいい匂い……」

早速とばかりに料理に手を伸ばす二人を尻目に、俺は冷蔵庫の中からスパークリングワインを一本選んで栓を開けた。

ちよつとしたお祝いに保管していたロゼ・シャンパンだが、濃厚なチーズと幅広い具材に合わせるためのチョイスだ。

薄ピンクに色づいた発泡ワインを三人分のグラスに注ぎながら、俺も柄の長い金属製のフォンデュフォークに手を伸ばす。

定番のソーセージをフォークで突き刺し、トロけるチーズを絡ませて口に運ぶと、濃厚な旨みと芳醇なチーズの香りが舌の上に広がっていく。

そこに程よく冷えたシャンパンを流し込めば……弾ける炭酸の感触と鼻に抜ける上品な風味が、何とも幸せなマリァージュを形成した。

「うむ、美味い。このエビはワインで洗って臭みを抜いて、軽くボイルしたのか。なかなかイケるぞ。酒との取り合わせも悪くないの」

「んうー。美味しいー」

どうやら、グルメな博士の舌も満足させられたようだ。

マルガリータも楽し気にソーセージや野菜をチーズに潜らせ、次々と口に運んでいく。

シャンパンを楽しみながらちまちまと摘まむ料理は食べるのに時間が掛かるものだが、弱火のコンロに掛けられたチーズソースは常にゆつくりと加熱されているので、時折木ベラでかき回してやれば途中で冷えて固まることも無い。

因みに、フォンデュを加熱するカセットコンロの小型ボンベには、石油から抽出した液化ガスを充填してある。

天然ガス由来のメタンと比べ、石油由来のガスはプロパンやブタンの割合が多く比重は重めだ。

所謂、液化石油ガスと呼ばれる代物だが、この技術も比較的新しい部類に入る。

つい最近まで、灯油やビークルの燃料として使われるガソリン・軽油類はともかく、ナフサの抽出技術や石油精製の副産物として得られる可燃ガスの利用法はまともに研究されていないからな。

ガラガラ砂漠の油田に代表される石油採掘業者は、大量の石油資源をガスフレアにして無駄にしてしまっていたわけだ。

当然、俺やナツメツ博士がそのようなことを何年も放置しておくはずがない。

既に、ガス燃料の製造と普及計画、軽質ナフサ由来のプラスチック製品の売り出しは始まっている。

ビークル技術だけでなく、色々と人々の生活の根幹にかかわる技術も向上しているわけだ。

あと、これはあまり表沙汰にはしていない話だが……ガス燃料ビジネスにはデザートホーネット団も一枚噛んでいる。

とはいっても、盗賊団である彼らが直接仕事の一部を担っているわけではなく、ましてや非合法なことをしているわけでもない。

まあ、単刀直入に言つて……脱退した元団員やその身内が、ガス会社の従業員に収まつてゐるといふ話だ。

新しい産業が、諸事情により堅気の世界では生き難い連中の受け皿となる。

どこにでもある話だ。

おまけにちやうど、彼らには優れた地下水の採掘・貯留技術があり、天然ガス田の開発に手を広げる話も上がつてゐるので、彼らの存在は渡りに船だつたわけだな。

当然だが、一連の事業の立ち上げに携はるとともに初期資金を提供した俺は、既に結構な額を儲けることが出来た。

精製プラントやガス会社の株式を上場するにあたり、当然俺にも初期株は譲渡されてゐるので、新規公開分の確保のため一部を手放した売却益と手元に残した分の配当金で、俺の懐はかなり潤つてゐる。

デザートホーネット団の頭領とは色々と因縁もあつたが、今はこうしてビジネス・金銭的な繋がりが出来てしまつたわけだ。

まあ、この件に関しては、結果がきちんと人々の生活の豊かさに還元される側面もあるので、博士もそれほど問題視はしてゐない。

もちろん、技術や利便性の向上が一部の職を奪うこと、時代の変革によつて突如不幸の渦に吞まれる者が居ることは、いつの時代も変わらないが……。

「ま、そんなのは今さらか……」

「ん？ 何じゃ？」

「いえ……博士、もう一杯どうです？」

「ああ、貰おう」

「マルガリータは？」

「うん、ありがと」

そうして、俺たちはしばし豪勢な酒と料理に舌鼓を打った。

時折、スパークリングワインの炭酸とスツキリした風味で舌を洗いながら、チーズフォンデュの具材を粗方平らげ……最後の方に残ったチーズはミルクで伸ばし、リガトーニを投入して黒コシヨウを挽き、ベーコンクリスを散らしてカルボナーラ風のシメに仕上げた。

デザートには冷やしてカットした桃やマスカットを摘まみながら、残りのシャンパンを飲み干す。

若干、パーティーメニュー寄りの献立だったが、濃厚な料理と贅沢な酒に三人とも大満足だ。

俺はくちくなくなった腹を摩りながらベルトを緩め、シャンパンのアルコールで頬を火照

らせたマルガリータが肩にもたれ掛かってくるのを上機嫌で受け止める。

ナツメツグ博士も自宅では体面など気にしないとばかりに大きくゲップをした。

何はともあれ、今日の新作料理は大成功だったな。

このクオリティなら、うちのちよつとしたお祝いメニューの定番入りは決定だ。

同じフォンデュでもチーズの組み合わせは無敵大なので、今度はミームー村産のトリュフ入りゴーダ・チーズでも試してみるとするか。

あとは、少しカロリーが上がってしまうが、シーフードをフライにしてもチーズソースと合うだろう……。

そんなことを考えていると、ふと玄関の呼び鈴が鳴った。

「ん？ 誰じゃ、こんな時間に……」

既に夕食時も過ぎ、朝の早い牧場ではほとんど家が眠りについた時間帯。

博士の言う通り、普通なら来客がある時刻ではない。

俺は眠そうに肩にもたれ掛かるマルガリータをゆっくりと押し戻すと、億劫そうに立ち上がる博士を手で制止して玄関へ向かった。

右手には、先ほど部屋の隅のサイドボードに置いていた愛用のワルサーP38を握り、スライドを少し引いてチャンバーに弾薬が装填されていることを確かめる。

強盗や悪意のある来訪者の可能性が否定できないので念のため。

俺は拳銃を握ったまま慎重にドアを少しだけ開けて、隙間から外の様子を窺う。

「夜遅くに失礼。速達です」

どうやら、心配は杞憂だったようだ。

彼の顔には見覚えがある。

ネフロ周辺で運送依頼をよくこなしているピークル乗りだ。

とりわけ怪しい挙動も見られないので、俺は拳銃をズボンの腰に戻し、ドアを開けた。

「どうも。鉄道便か？」

「おう、グレイの旦那。そうだ。えーと……随分、遠方からみたいだな。ナツメツグ博士宛てだぜ」

運送依頼の書類に受け取りのサインをすると、ピークル乗りは軽く笑顔を浮かべて自分のピークルに戻り、坂を下りて行った。

こんな時間の速達依頼だ。

きつと配達料は割がいいのだろう。

受け取る側にしてみれば迷惑この上ないが……まあ、悪いのは送り主なので、彼に言っても仕方ないか。

「さて……」

受け取った小包を確認すると、確かに鉄道便の封がある。

最近は、鉄道に沿って電話線が設置されたことで、近隣の街との連絡では電話を使用することも増えている。

ステーションホテルに繋がれば大抵フエンネルとコンタクトが取れるし、マジヨラムの実家は電話注文を受け始めた。

電信線の配備も進んでいるので、各街の駅に併設された電信局に直接メッセージを送れば、その日のうちに本人へ連絡が届く。

鉄道便で手紙を送るのに比べて、汽車での輸送時間を丸々カットできるわけだ。

近頃は電報配達を専門とするビークル乗りも増えてきたこともあり、ゴールドーンのローズマリーにも割と気軽に連絡が取れるようになった。

とまあ、そんな具合に通信網は着々と整備されているわけだ。

もちろん、大きな荷物を送るには貨物列車と蒸気機関車の力が必要不可欠であり、そもそも電話の数自体がまだそれほど多く普及していないので、未だに伝書鳩や鉄道便は現役だが……。

「ん？ 便箋だけ？ 何でこんなものにわざわざガチガチの包装を……」

「グレイ、どうした？」

「ああ、博士。何か、変なのが来てたので、一応開けてみたのですが……マズかったですか？」

ちょうど、奥からナツメグ博士がやって来たので、俺は便箋を博士に渡した。

送り先の都合を無視した速達に、わざわざコストを掛けた輸送手段に見合わないペラ紙の組み合わせ。

怪しさ満点だが、とりあえず危険物でないことはわかっている。

怪訝な表情で便箋を受け取ったナツメグ博士は、中身にじつくりと目を通していたが……やがて、博士の表情は見る見るうちに険しくなっていく。

「ハア……」

眼鏡を外し、頭痛を堪えるように眉間を揉んだ博士は、うんざりした表情で俺に向き直った。

「グレイ、旅支度と船の手配を。王都行きじゃ」

「王都?」

「ああ。まったく、面倒な……」

すっかり酔いが醒めた様子のナツメグ博士は、再び不機嫌そうにため息をついた。

6話 召喚状

翌日、俺とマルガリータはナツメツグ博士から事の詳細を聞いた。

ベーコンエッグにトマトのサラダ、バイクドビーンズにカリカリのトーストを添えた朝食を摂りつつ、まずは昨日の速達について博士から説明を受ける。

「端的に言って、手紙の内容は王都からの召喚状じゃな」

意味のない仰々しい文章で八割が埋め尽くされた書簡は酷く読みにくいのが、要約すればそういうことだ。

名目としては……件の『グランドフィナーレ』によるハッピーガーランド爆撃、ブラツデイマンティスとダンディリオンの反逆について、ナツメツグ博士に王宮まで直々に説明しに来いということである。

王宮が授与した爵位（笑）やら肩書きやらを理由に、国王陛下の忠実な臣下であるナツメツグ博士には、説明と釈明の義務があるのだと。

「なるほど……しかし、今さらですか？ 『グランドフィナーレ』とブラツデイマンティスの件って、あれからもう2年以上は経っていますけど……」

少なくとも、額面通りに受け取る話ではない。

事情については既にガーランド警察含め政府機関からとつくに報告が行っているわけだし、その脅威についてもきちんとレポートされている。

今さらナツメッグ博士本人を呼び出して聞くことも無いだろう。

そのうえでわざわざ博士を呼びつける理由といえは……『グラランドファイナーレ』の飛行技術、その他ブラツデイマンティスの開発したテクノロジーについて、ナツメッグ博士に分析させて軍事転用し、それをこの国だけで独占しようという腹か。

政治的な意図や背景と考えれば、それが一番しつくりくる。

しかし……。

「あれ？ でも、先生。飛行ビークルはもうそれほど珍しいものじゃないですよね？」

グレイもオットーもあちこち乗り回しているし、都会ならもつとたくさん飛んでいるんじゃない……」

「うむ、マルガリータの言う通り、既に飛行技術自体は未知の代物ではなくなつた。他のブラツデイマンティスの軍事技術に関しても同様じゃ。もちろん、わしに兵器の研究をさせようという輩は大勢いるが……研究者なら、王都にも腐るほど居るでな。それこそ、己の地位と金のためなら何でもする奴らがの」

そうなるよ、やはり目的は他にあるのか。

わざわざ年単位の時間が経ってから蒸し返すあたりも怪しい。

しばしの逡巡の後、ナツメツグ博士は口を開いた。

「大方、ダンディリオンがわしの愛弟子だったことじやろうな」

「……なるほど。ダンディリオンの反逆罪を口実に、博士を糾弾すると?」

「向こうの出方次第ではあるが、そういうことを企みそうな輩は居る。わしの功績を邪魔に思う者、利用しようとする者は……心当たりが多すぎてさっぱりわからんの」

「そんな……」

なるほど。

悲痛な顔をするマルガリータには少し酷な話かもしれないが、所詮そんなものだろう。

ダンディリオンの件で謂れない咎をでっち上げて博士を責め立て『許してほしいか? 評判を落とされたくないか? なら利権を寄越せ』という具合か。

こじつけもいいたところだが、そういう厚顔無恥な奴らはどこにでも居るものだ。

そして、そういう類の連中は少しでも甘い顔をするとう味を占め『また寄越せ、もつと寄越せ』となるのが目に見えている。

「王宮から任命された爵位も役職も、わしには無用の物じゃ。返せと言うなら喜んで返してやるわい! だが……どちらにせよ、王都へは行くしかあるまいの。国王陛下から

のお達しとあれば、無視するわけにはいかんからな」

「わかりました。俺も護衛として同行ですね」

「うむ」

念のため、武装やビークルの装備は整えていくが、その他の脅威に関しては俺にできることは何も無い。

申し訳ないが、その王宮とやらに蔓延る魑魅魍魎の対処は、博士自身に頑張ってもらうしかないな。

もちろん、その過程で武力行使が必要なら、俺も当然ながら黙っているつもりはないが……。

「……ねえ、グレイ」

「うん？」

「あんたも、王都は初めてなんだよね？」

何となく重い雰囲気を感じ取ったのか、マルガリータは遠慮がちに俺に水を向けた。

「ああ、無いな。前にトロット楽団で『王都進出が〜』なんて話はあったが、結局叶わずじまいだ」

ブラッディマンティスによる油田占拠事件とガラガラ砂漠決戦が終わった後、マジヨラムは色々と公園の予定を立てていたようだが……それも、『グラントファイナーレ』の出

現と爆撃でご破算になった。

当然、マルガリータにも王都へ行った経験などあるわけも無い。

彼女は鉄道が出来まで村から出たことが無かったし、その後もネフロ近郊へ買い物に行くのが精々だ。

俺と結婚した後も、何だかんだで色々と仕事を立て込んで、結局今の今までこの地域を離れたことが無かった。

……それを思うと、俺は彼女に随分と不自由をさせたのではないだろうか？

旅行一つ連れて行ってやれない夫って……。

しかし、落ち込む俺を尻目に、マルガリータは努めて明るい表情で口を開いた。

「じゃあ、あんたにとっても初めての遠出だ。楽しみだね」

「あ、ああ……」

「たまには着飾って煌びやかな通りを歩くのも悪くないよね。あ、そうだ！ あたし、前から気になってた服があるんだ。王都の有名な店で売ってるらしいんだけど……一緒に買いに行つてよ。えっと、それから——っ」

まったく……彼女には敵わないな。

どうやら、気を遣わせてしまったようだ。

そつと肩を抱き寄せると、マルガリータはやや戸惑った表情を見せるも、やがて静か

に俺に頭を預けて抱擁を受け入れた。

「……そうだな。新婚旅行というには少し遅すぎる気もするが、せつかくの機会だ。面倒事は博士にぶん投げて、俺たちは大都会を楽しむとするか。君の美しい姿を王都の奴らなんぞに拝ませてやるのは、少し癪だが」

「……………」

頬を染めたマルガリータが脇腹を肘で小突いてくるが、彼女との結婚生活も長い。

俺くらしいのレベルになると、この程度のツンデレは最早ただのデレだ。

何はともあれ……色々と面倒事が付随する王都行きだが、せつかく遠方へ旅するならその内容は実りあるものにした方がいい。

博士には悪いが、楽しむべきところは楽しませてもらうさ。

皮下脂肪と筋肉を貫通した打撃属性のダメージに脇腹を摩りながら、俺は気を取り直してナツメグ博士に声を掛けた。

「ついでに色々と売り込んできますよ。首都ともなれば、見栄っ張りの旧家から成金まで、金持ちが多く集まっているでしょう。出発までに商品サンプルを用意します」

「お前さんは本当に商魂逞しいの……」

ナツメグ博士は肩を竦めたため息をつくが、新しいガスや石油製品以外にも俺の発案で開発された商品はたくさんある。

洗濯機や冷蔵庫は既に広く売り出しているため今さら都会へ売り込むまでもないし、フレイバー付きのシャンプルー・リンスなんかもとつくに広まっているので最早デカイ利益を生むほどの品ではないが……他にもまだ手札はあるのだ。

例えば、電気の普及に際して開発した電化製品——掃除機やエアコン等——に、最近ミームー村で余剰の漁獲資源を利用するため始めたサバ缶などの缶詰類。

いち早く王都への販路を確保して、新設する法人の初期株を受け取れば、それだけでも結構な利益になるはずだ。

「とにかく、主語は王宮からの召喚じや。お前さんたちもあまり浮かれるでないぞ」
俺は博士の言葉に生返事をしつつ、旅程と今後の展望に頭を巡らせていた。

そして、数か月後。

年が明け、冬も終わりに近づいたころ、俺たちナツメツグファミリーは漸く出立の準備を整えた。

王都へは、スームスームから長距離航海が可能な大型船に乗り、外海から運河を経由して行くことになる。

既に召喚状が届いてから大分経っているが、さすがに真冬は船が運河を通れないの

で、王都行きは雪解けを待つてからとなつたわけだ。

もう船の手配は済ませている。

あとは荷物を用意して港で船に乗るだけと思いきや……当然と言うか、心配性なよう
でいて天然なところもあるマルガリータと王都行きに乗り気でないナツメツグ博士の
コンビは、出発直前になつて慌ただしく準備をするハメになつた。

「マルガリータ、そつちの荷物は大丈夫か？ 整備用品とか全部〔クラフトマンシップ〕
に収まるか？」

「うん、多分何とか……。先生が言うには、向こうで調達できないのは、細かい道具がほ
んどどらしいけどね。でも使い慣れたのが無いのは困るし……」

「博士、重ね着用のセーターは持ちました？ まだ冷え込みの厳しい季節です。あまり
負担が掛かると、ご老体には厳しいかと……」

「人を年寄り扱いするでない！ ……そんなことより、お前さんの方は終わつとるのか
？」

「ええ、こつちはもう準備万端ですよ」

そつとSサイズの合成繊維のセーターを差しだしながら、俺は返答した。

俺の愛機「ジャガーノート」も含め荷物は全て船の貨物室に載せていくことになるが、
旅先に持つていくパーツはそれほど多くない。

武装はいつも通り高周波ブレードとキャノン付きのチェーングンに前面は装甲プレートで、摩耗しやすい銃身とボルトは予備を積んでおくとして、弾薬も少し余裕がある数を集んだ。

あとは最低限のバックパーツ交換モジュールくらいか。

この程度なら、多少無理をすればキャリアーバックにまとめて積載できる。

因みに博士曰く、王都上空は飛行規制が掛かっており、飛行許可はまず下りないだろうとのことなので、今回は飛行パーツはなしだ。

自分のビークルを飛ばせないのなら、わざわざ余計な資材で船の貨物スペースを圧迫する必要は無い。

あとは当座の着替えと身の回りの小物を詰め込んだスーツケースを、サックスのケースと一緒にビークルのコクピットやシート下に積み込んだ。

ワルサーの予備マガジンと9mm弾を少し多めにダツシユボードに収納し……念のため、マルガリータが作ってくれたスタンガンも持っておくか。

敵を殺さずに捕えたいときや、銃を失い殴り合いになったときの護身用だ。

こんなものに頼る機会など無いに越したことはないが……。

何はともあれ、俺の準備といえはこんなものだ。

俺も少し前までトロット楽団メンバーとして活動しハッピーガーランドや各地を行

き来していたので、旅支度には慣れている。

因みに、王都へ売り込む商品サンプルは、業者のビークルで船に搬入し運ぶよう手配を済ませている。

あれはさすがに自分たちだけで運ぶのは骨が折れる量だからな。

「ところで、お前さんたち……顔見知りには声は掛けたのか？　しばらくこの辺りを留守にすることになる。挨拶がまだなら、今日中に行つてくれることじゃ」

「ええ。つい先日、ミームー村の方には伝えてきました」

「俺もハッピーガーランドでマジヨラムとフェンネルには話してきましたよ。しばらくは二人もローズマリーさんの様子を見に行つてくれるそうです」

最近では、ほとんど健康体になったコニーの母親ことローズマリーだが、呼吸器に基礎疾患があったことはやはり無視できない。

今でも俺は定期的に様子を見に行っているし、ナツメッグ博士も薬は処方していないが、ちよくちよく健康によさそうなものを差し入れている。

まあ、今はコニーとバナラも帰つてきているので、そうそうヤバイことにはならないだろう。

どちらかといえば、ローズマリーの元を集まることで、フェンネルやコニーたちがいい感じに打ち解けて話せる機会になることを期待したい。

あの二人は、未だにどこかきこえない雰囲気が残っているからな……。

もちろん、付き合いが長いだけあつてお互いの氣質を理解しており、険悪な関係では全くもつてないのだが……。

最近、バナラがフェネルのエレキバンドに参加して、コニーもロックライブを見に来ることも増えているようだし、周囲がこれ以上世話を焼くことも無いと思うが……ま、ちよつとした年上からの気遣いだ。

そうこうしている内に、マルガリータの方も「クラフトマンシップ」のバックパーツをパンパンにしようにか準備が終わったようだ。

「よし、と。こつちも終わったよ。……王都、楽しみだね」

「ああ、夜景を空から楽しむことができなのは残念だが、他にも色々とする場所はあるさ。向こうに着いたらあちこち見て回ろう」

そんな具合に肩を寄せ合う俺たち夫婦を尻目に、ナツメツグ博士は終始憂鬱そうな様子だが、俺とマルガリータにしてみれば初めての長期旅行である。

しかも、行き先がハツピーガーランド以上の大都会で首都ともなれば、どうしても期待や興奮が先に立つというものだ。

「何度でも言うが、王都なんぞそんなにいい場所ではないぞ……中央の連中は見栄と虚

栄心で生きておる愚物ばかりなうえに、宮廷は人を見下すことでしか己の価値を確認できな^い魑魅魍魎が――」

ナツメツグ博士は相変わらずブツブツと文句を言い続けるが、いくらボヤいたところでスーツケースの中身は自動で収納されませんぜ。

そしてついに、出航の日がやって来た。

7話 船旅

前日入りしたスームスームのホテルで身支度を整えた俺たちは、レストランで朝食を済ませるとホテルをチェックアウトした。

今日はいよいよ王都へ向けて出発だ。

俺は「ジャガーノート」の助手席にナツメツグ博士を乗せ、マルガリータの運転する「クラフトマンシップ」と連れ立ってスーム海浜公園へ向かう。

既に漁船や市場関係の船は港を出払っている時間帯だが、沿岸にはまだかなりの客船が残っていた。

さすがに一般の乗客を漁師と同じタイムスケジュールで動かすわけにはいかないのだ、この手の客船の出航時間は午前中でも昼近くになつてからだ。

もちろん、現代の夜行フェリーのように、夜中に港を出るわけにもいかない。

障害物の無い広い外洋での航海ならともかく、港の近くで視界が効かないのは他の船や堤防との衝突リスクが上がってしまうからな。

そんなことを考えながらピークルを走らせ、大型の汽帆船が停泊する船着き場に到着

すると、俺たち一行を懐かしい顔が出迎えた。

「来たか。時間通りだな」

タラップを降りてきたのは、制服をビシツと着こなし、肩にオウムを乗せたいかにも海軍士官っぽい女性。

今回、俺たちが乗る大型船『ジュニパーベリーⅡ世号』の艦長……ではなく、艦隊司令のシブレットだ。

「ああ、キャプテン・シブレット……いや、今は提督アドミラルあたりか？ 司令殿」

「よしてくれ。資金が貯まり船は増えたが、私もまだまだ手探りでやっているところだ。過分な評価だよ」

ブラッディマンティスの件が片付いた後、シブレット率いる『ジュニパーベリーⅡ世号』は一年のテスト航海を終え、バナラが船を降りた後も次々と困難な航海を成し遂げた。

好事家が賞金を懸けていた珍品の調達に、ドン・スミスから直々に依頼された海路の確保、セントジョーンズ卿の協力で設立された医療機関への医薬品・物資の供給。

他の船や船団が事故や盗賊団との戦闘で消息を絶つなか、シブレットたちは数度の航海を通してスームスームへ大きく貢献し、各所から多くの信頼を獲得してきた。

交易艦隊として莫大な利益を得た元ジュニパーベリー号のクルーたちは、そのまま分

け前を手に引退した者も居るが、多くは船団に残り、余剰の資金で新たな船を手に入れて船団を組み、今も冒険や航海を続けている。

何はともあれ、今や彼女たちは多くの船乗りから尊敬を集める、成功者になったわけだ。

そして、今の艦隊旗艦『ジュニパーベリーⅡ世号』の艦長はといえば……。

「よお、グレイの旦那。聞いてるぜ。乗客つてのはあんたら一行だな」

「ああ。王都までよろしく頼むよ、ミゲール」

以前はジュニパーベリー号の副長だったミゲールだ。

彼もいつか自分の船を持つのが夢だと語っていたが、まさかシブレットからジュニパーベリー号を引き継ぐとはな……いかに筋肉馬鹿っぽい船員だった彼が出世したものだ。

そんなことを考えていると、隣のシブレットが口を開いた。

「事情は聞いている。高名なナツメッグ博士を王都へ送り届ける任、誠心誠意果たさせてもらおう。それと……グレイ。我が艦隊の栄達は全てお前のおかげだ。我々は受けた恩は忘れない。私の名において、安全な航海を約束する。お三方を間違いなく王都へ送り届けよう」

肩肘張ったシブレットの言葉に、ナツメッグ博士は些かうんざりしたような様子だ

が、生真面目なシブレットの気質は博士も理解しているので、そこは素直に礼を言った。「よおし！ グレイの旦那のコンテナは全て積み込みが終わったぜ。後はあんたらのピークルだけだな。さ、あとは俺らでやっておくから、客人は船室で寛いでいてくれよな」

そしてついに、俺たちは王都へ向けて出発した

重厚な蒸気機関の稼働音を響かせ、『ジュニパーベリーⅡ世号』はスームスームの港から出航した。

上甲板の方からは、乗組員がドタドタと走り回る音が床越しに聞こえてくる。

野太い声の指示出しや報告のやり取りのほか、時折警鐘のような音も聞こえてくるあたり、随分と忙しいみたいだな。

まあ、沖合に出るまでは、港を出入りする他の船とすれ違うことも多いので、色々と気を遣うことも多いのだろう。

出航直後に衝突事故など起こしたらコトだ。

しばらくすると、船はゆったりとした航行ペースに移行し、外海の波による規則的な上下運動が椅子の下から伝わって来た。

「おつ、エンジンが止まったみたいだ」

「ふむ、いい風を捕まえたようじゃな」

船倉の方から響くエンジン音が途切れたことから察するに、ここから外洋に出てしばらくの間は、燃料の節約のため帆を展開して風に乗って航行するのだろう。

最新式の内燃機関と改良型の補助帆を併せ持つ『ジュニパーII世号』なら、こうした器用な真似もできるのだ。

「波も変わったね。あたしは湖にしか出たことが無いから、話に聞いた程度だけ……こういう横波に耐えるためには、船体を覆う板材を——」

元々、船大工だったマルガリータからすれば、どうやら船の構造やシステムに興味津々のようだ。

マルガリータとナツメツグ博士は、喫水がどうか難しい話をしているが、残念ながらそこまで専門的な話になると俺はお手上げだな。

因みに、今回俺たちが寝泊まりする船室の方だが……乗り心地は思ったより悪くなかった。

大型のスーツケースを広げるのに十分な床面積はあるし、書き物用のデスクにクロゼットまで完備している。

少なくとも、前世で俺が住んでいた安アパートよりは遥かに豪華で快適だ。

『ジュニパーII世号』はあくまでも私掠船兼輸送船なので、そういう設備には期

待していなかったが、なかなかどうして立派なものじゃないか。

さらに、ナツメッグ博士に用意された部屋は一番広いVIP仕様で、テーブルセットに調度品も地味ながら洗練された物が揃えられている。

王都行きには文句タラタラの博士も、この居住環境には文句が無いらしい。

とはいえ、船には他の乗客も居り、必要以上の場所を占領するわけにもいかず、当然ラウンジのような気の利いた設備も無い。

そういった理由もあり、俺たちはこうしてナツメッグ博士の部屋に集まり入り浸っているわけだが……。

「ところで、お前さんたち。甲板の方には出なくていいのか？」

「ん？ 甲板つすか？」

「外海に出れば、視界に入るのは見渡す限り海面だけじゃ。引きで見るスームスームの景色を楽しみたいのなら、今の内じゃぞ」

「なるほど、確かに」

ナツメッグ博士の言葉に俺は頷いた。

肝心のマルガリータはあまり興味無さそうだが……。

「マルガリータ、マストや船の設備の方なら、君も興味があるんじゃないか？ 『ジュニパーベリーII世号』はあらゆる技術の粋を結集した最新鋭艦だ。それに、夜間の立ち入

りは安全上できないだろうし、これから航海が佳境に入ればクルーたちも忙しくなる。色々見学するなら今の内だろう」

「そうだね……そういうことなら、あたしも行こうかな」

念のため、俺はナツメツグ博士に向き直りそちらにも声を掛けた。

「博士は？」

「わしは夕飯まで寝ておる」

夕食までの腹塞ぎに焼き菓子を平らげ、俺の淹れた紅茶を飲み干したナツメツグ博士は、大きく欠伸をしてベッドへ横になった。

俺たちに気を遣ってくれたのか、はたまた王都行きが憂鬱過ぎてフテ寝を決め込むつもりなのか……まあ、せつかくの機会だし、俺たち夫婦は甲板デートと洒落込ませてもらうか。

余談だが、俺とマルガリータは夫婦なので、寝室は二人で一つだ。

部屋の内装は他の上級船室と変わらないが……何故か、俺たちの部屋はベッドだけやたらと豪華で大型のものが入れられていた。

これは……キャプテン・シブレットの気遣いか、もしくはミゲールの冗談か……。

どちらにせよ、頻繁に洗濯ができない船上において、ベッド上を大惨事にするのは論外だ。

そのくらいは、さすがの俺も心得ている。

だから、マルガリータ。

そんな恨めしい目で俺を見ないでくれ……。

船室から出ると、俺たちは上甲板をぐるつと一周するように歩き、船の設備を一つ一つ見て回った。

迫力のある三本のマストに、船体の真ん中から大きく突き出した煙突、ウインチやクレーンなど大型の作業機器。

俺にはよくわからないが、マルガリータはじつくりと船の設備や作業をしている人間を観察し、近くに居る船員にテンション高くあれこれと質問している。

俺は興味ない素振りを見せず、根気よくマルガリータに付き合うが……正直、気が気でない。

美しいマルガリータから楽し気に声を掛けられた船員は、皆一様に鼻の下を伸ばして相好を崩す。

どいつもこいつも紳士ぶっているが、ゴツイ顔を赤くして時折マルガリータの方へチラチラと視線を送っているのがバレバレだ。

俺も彼女に至近距離から見つめられると未だに同じ反応をしてしまうので、彼らの気持ちはよくわかるが……おい、調子に乗るなよ……！

てめえらはサクツと質問に答えて消えりやいいのだ……！

「なるほど。このサイズの船になるとそんな設備もあるんだね。勉強になったよ」

「へ、へい！ そりゃ何よりで……そ、それじゃ。奥さん、オレはこの辺で失礼を……。グレイの旦那も……っ」

俺の醸し出す剣呑な殺気に、マルガリータと話していた若いクルーはそそくさと立ち去った。

こつちから声を掛けておいて早々に追いやるとは、我ながら意味不明なことをしている自覚はあるが、彼女に群がる悪い虫を追い散らす方が先決なので仕方ない。

「ああ、ありがとね……って、もう行っちゃった。どうしたんだろ？」
「さあな」

マルガリータからすればクルーたちの行動は拳動不審にしか見えないゆえ、彼女は怪訝な表情で首をかしげるが、俺は努めて冷静にはぐらかした。

因みに、今日のマルガリータには寒さ対策のためモコモコのフリース生地ジャンパーを着せてきたが……正解だったな。

薄着だと、彼女の豊かな胸元のシルエツトがどうしても目立ってしまう。

美しい妻に野暮つたい装いをさせることには些か抵抗があつたが、他の野郎どもに見られるのに比べれば些細な問題だ。

それに、本人は機能性の高い服に大満足のようなので、まあ良しとしよう。

そんなことを考えていると、マルガリータは設計図やら意味不明な数字を書き込んでいたノートを閉じて、俺に向き直つた。

「さて、甲板で気になるのはこんなところだね。次は機関室とピークルの方を見たいけど……さすがに無理かな？」

「どうだろうな……。一応、この船のなかで最高レベルの機密に位置する代物だろうか……俺の方からシブレットかミゲールに頼んでおくよ」

「うん、ありがとね、グレイ」

そんな具合に、船内の探検が一段落した頃には、既に日が傾いていた。

「マルガリータ、そろそろ戻るか？ 結構冷えてきたし……」

「うん……もうちよつとここに居てもいい？ 夜間航行に移行してどんな感じになるのかも見てみたいし……。あんたは先に船室に降りててくれていいよ」

まだまだ冷え込みの厳しい季節。

俺は普段の略式スーツの上にチェスターフィールドのコートを羽織っているが、それ

でも船の上だと吹きっ晒しの冷たい潮風がキツイ。

一方、マルガリータは普段のシャツの上に起毛のジャンパーを着ているだけだが、まるで寒さが堪えた様子は無い。

彼女は漁業を生業とするミームー村の出身で、しかも元は船大工というだけあって、俺よりは格段に船上の風に慣れていているようだ。

風邪を引く心配はなさそうだが……ここにマルガリータを一人で放置するわけにはいかないな。

シブレットを除いたほとんどの船員は荒くれの野郎どもなので、絶世の美女であるマルガリータが一人で居れば、絡んだり下劣な誘いを掛けたりする輩が居るかもしれない。

仕方ない、俺も付き合おうとするか……。

「あ、そうだ！ 一つ忘れてたことが……」

「？ グレイ？」

せつかくの船旅だ。

隣には、この世で最も美しい我が妻。

となれば……アレをやるしかやるまい。

「マルガリータ、ちよつとそこに立ってみてくれるか？」

「え、ことう？」

「そうそう。それで、向こうを向いて腕を広げて……」

ワケがわからないといった表情をしながらも、マルガリータは素直に俺の誘導に従い、船首の欄干近くへ移動した。

緩やかにウエーブの掛かった艶のあるブラウンの髪が風に靡き、夕日を反射して彼女の美しさにさらなるバフを掛ける。

近くに居た船員がマルガリータを見て下卑た口笛を吹き鳴らす、俺はワルサーのグリップをチラつかせつつ睨みつけて、早々に奴を追いやった。

……よし、邪魔者は消えたな。

戸惑いながらも両手を広げるマルガリータを、俺は後ろからそつと抱き締める。

「ちよ、ちよつと！ この体勢は、さすがに恥ずかしんだけど……つ」

「いいから。もう少し、このまま……」

一瞬、マルガリータは居心地悪そうに身じろぎしたが、しばらく後ろから彼女の体を支えたまま密着していると、やがて抵抗は収まった。

眼下では、船首に掻き分けられた波が大きく飛沫き、力強い速力で前進する船の動きを物語っている。

映画では、確かヒロインが『飛んでるわ！』なんて叫んでいたが、今はそんなことど

うでもいい。

フリース生地のジャンパー越しに感じる彼女の体温が徐々に上がっていく。

戸惑いながらこちらへ振り向いたマルガリータの美しい瞳に、俺は思わず息を呑んだ。

「っ……マルガリータ」

「グレイ……」

どちらともなく顔を近づけ、俺たちはそつと唇を合わせた。

船体を打つ波の音も、時折船のどこかから聞こえる船員たちの声も、今の俺たちには関係ない。

雑音も何も気にせず、ただ愛しい人への想いを胸に触れ合う。

外出や遠出の多い俺に、博士の助手として相変わらず忙しい日々を送るマルガリータ。

盛り上がるには少々早い時間帯だが……こういうかけがえのない時間は、いつだって大切にしないと……。

「ヒューッ！ やるじゃねえか、旦那！」

「ケッ——、お熱いこって!!」

「こりゃ、ボイラーもしばらく用無しだな！ ヒックッ」

突然の横槍に、俺たちは揃って肩をビクつかせた。

どうやら、非番になったクルーが早速酒をかつ食らい始めているらしい。

無粋な奴らだが、ツカツカと歩いてきたシブレットに尻を棒で叩かれている彼らの姿を見れば、溜飲も下がるといふもの。

しかし、そんなことでは納得してくれない方が約一名……。

「っ——！！」

「あ……マルガリータ？」

強張った体を痙攣させながら、我に返ったマルガリータはゆっくりと俺に向き直る。

視線を下げると、頬を夕日より真つ赤に染め、恥辱の表情を浮かべるマルガリータの顔が至近距離に……。

「ば、馬鹿ア!!」

「ぬぶオええ!!」

的確に顎を撃ち抜いたマルガリータのストレートで、俺は危うく海に落下しかけた。危うく意識が飛びかけた俺を助けてくれたのは他ならないマルガリータ本人（とシブレット）だったが、その後で俺たちはこっぴどくシブレットに叱られた。

まあ、危険な欄干付近でドタバタやっていたことは事実なので、反論はできませんね。因みに……不謹慎は承知だが、ダブルベッドの件以上に恨めしい目で俺を見るマルガ

リータの表情は、
なかなかこそそるものだった。

8話 艦載ビークル

「——と、まあこんな感じだ。この船を再建して二年ちよい。他の立ち寄った都市でも色々と技術を取り込んで、近代化改修を続けているからな。ビークルや火砲だけじゃない。推進機関も格段に進歩してるぜ。あと……そのベントに繋がるピストン系には、航海先で手に入れた小型エンジン技術が使われていてな。別の国の技術者に基盤と適応できる仕掛けを作ってもらったんだが——」

「なるほどね、勉強になったよ。この補助動力機関は……この辺とかを小型化すれば、湖上で使う船にも応用できるかもしれないね」

翌日、船倉から少し移動したところにある機関室で、俺とマルガリータは船長のミゲールから船の機関部に関して説明を受けていた。

昨日、上甲板を見て回ったときに、マルガリータが機関部や艦載ビークルの方も見てみたいと言っていたので、俺はダメ元でシブレットとミゲールに頼んでみたのだが……何と、船長のミゲールが自ら俺たちを船内の各所へ案内し、『ジュニパーベリーⅡ世号』の装備やら何やらを解説してくれることとなったのだ。

俺たちがナツメッグ博士の身内であることを鑑みても、船長直々のツアーとは格別の配慮だが……彼も、砲撃用のビークルをカスタマイズして自分の専用機を作ってしまうくらいには、機械に精通しているオタクだ。

船の装備やビークルに関して説明するのは、全く苦にならないだろう。

船長が暇なのがいいことなのか悪いことなのか、俺には判断がつかないが……。

そんなミゲールの披露する話を、マルガリータは興味津々で聞いている。

普通の女性なら、こんなマニアックな話には即座に退屈してしまうところだろうが……彼女は彼女で生粋の技術屋だ。

寧ろ俺の方がチンプンカンプンでアウエーになっているな。

「ところで……今は最大船速じゃないんだよね？」

「もちろんだ。最近では船団を組んでるんでな。僚船を置き去りにしない巡航速度を保つちやいるが……この娘（こ）の本気はこんなものじゃねえ。初代ジュニパーベリー号とは速度も燃費も段違いだ。ブルーリボンに参加したら間違いなくぶつちぎりだぜ」

マルガリータの質問に自慢気に胸を張ったミゲールが答えると、機関室の方から凜とした女性の声が響いた。

「ほう、それは私の指揮する船が遅いと言いたいのか？」

「っ！ キャプ……司令……いやあ、その、そういうわけでは……」

「どうやら、シブレットも上甲板から降りてきたようだ。」

乗馬鞭のような指揮棒をピシッと鳴らしたシブレットに、ミゲールは思わずと言った様子で姿勢を正す。

「ロートルの女船乗りの艦隊指揮では、せつかくの最新鋭艦も泣くか。災難だな、キャプテン・ミゲール？」

「は、はは……まさか……」

最早コントだが……シブレットもミゲールも出世したとはいえ、二人の間に染みついた上下意識はなかなか拭えるものではないようだな。

しかし、冷や汗をかくミゲールとは対照的に、皮肉を放ったシブレットは不機嫌な口調ながらもどこか愉悅を含んだ表情をしている。

生真面目な印象が強いシブレットだが、最近はこういう冗談も言うようになったのか……。

もちろん、以前スームスームに漂着したときほど切羽詰まった状況ではないということもあるだろうが、何より付き合いの長いミゲールは彼女にとってそういうイジリができる数少ない相手なのだろう。

「ふっ……。マルガリータ、よければ、機関部と船体設計に関する資料の写しを進呈しよう。『ジュニパーベリーⅡ世号』は改修を重ねているゆえ、全ての情報を網羅できている

わけではないが……」

「え？ いいのかい？ そんなの、最重要機密だろうに」

「構わん。グレイからも、お前が優秀な技師であることは聞いている。我々の集めたものが意義ある研究の助けになるのなら本望だ。役立ててくれ」

いつの間にか、マルガリータとシブレットはすっかり打ち解けたようだ。

以前は、俺が不用意にシブレットの名前を出したことで、マルガリータからあらぬ疑いを掛けられそうになったこともあるが……二人とも、男社会で人一倍の努力をして技術を身に着け生きてきた女性だ。

ある程度の時間を共に過ごして交流すれば、色々と共感できることもあつたのだろう。

そんな二人を尻目に、俺はシブレットの攻撃から逃れてホツと安堵の息を吐いているミゲールに声を掛けた。

「ところで、この船に搭載しているビークルについても聞いていいか？ できればそっちも妻に見せてやりたいんだが……」

「あ、ああ。奥さんの整備の腕は聞いてるぜ。……そうだな、うちの船には砲撃戦用の射撃型ビークルと作業用の汎用ビークルがいくつかあるんだが、整備場にも入れるよう手配しておく。なんなら、少し弄ってもらっても構わないぜ。あの【ジャガーノート】を

世話してる腕利きの整備士ってんなら、間違いないだろう」

快く承諾してくれたミゲールの言葉をマルガリータに伝えると、彼女は殊の外喜んだ。

そして、俺たちはそのままの脚でビークルの整備ドックへ向かうこととなった。

船倉と同じ階層に整備エリアに到着すると、ミゲールは俺たちにビークル格納エリアを示した。

「見てくれ。これがうちのビークル部隊だ」

格納庫には俺たち乗客の持ち込んだ機体のほか、およそ10台のビークルが収納されている。

半数ほどは完全初期仕様の「カモミール・タイプII」に、砲弾アームを両腕に装備しただけのまさに砲台替わりといった出で立ちのビークルだ。

これは原作のチュートリアル……初代ジュニパーリー号に搭載されていた、バナラとマーシュが乗っていた頃のラインナップと変わらない。

まあ、簡単な作業のためのビークルなら装備自体は初期仕様でも問題は無いし、中古の旧モデルを使えばそれだけコスト削減になるからな。

だが、今回俺たちが目にしているビークルのなかには、バズーカアームやショットガ

ンアームなど、より強力な武器を搭載した戦闘ビークルもあるようだ。

こちらは新型の「カモミール・タイプⅢ」や、エンジン・駆動系もチューンアップしている機体も多い。

「大口径の火砲に制圧用の火力支援ビークルだ。この船には固定式の火器なんかも揃えているが……やっぱり、戦いの花といったらビークルだぜ！ 敵船の横っ腹にドデカイ穴を捨てるバズーカに、小舟なんざズタズタに引き裂いちまうショットガンも外せねえ」

「最近の海賊は、以前よりいい装備を揃えていることも多いからな。航路の安全の確保も私たちの仕事だ。船と積み荷を守るためには、我々もそれなりの戦力を整える必要がある」

因みに、この整備ドックから上甲板までは吹き抜けになっており、ビークルはリフトやクレーンで出入りができるようになっている。

敵の襲撃や砲撃戦になった際は、ここから必要な装備を整えたビークルが出撃するわけだ。

当然、機体を操るのはクルーの中でもビークルの操縦技術に長けた者が担当しており、この船はそこらの海賊なら容易く撃退してしまう戦力を持っていることになるな。

「あとは、作業ビークル用にクレーンアームを調達させた。固定式のクレーンとノーマ

ル仕様のビークルだけで荷物の積み下ろしをしていた頃と比べて、作業効率は段違いだ」

「もちろん、新製品の釣り竿アームも仕入れているぞ。備品はいくつか予備もあるから、グレイの旦那もよかつたら使ってみてくれよ。そして……」

これが本題とばかりに、ミゲールは一台の緑色の塗装のビークルに近づくと、ボディの装甲を叩きながら胸を張った。

「これが俺の愛機〔ネプトウヌス〕だ。元々は砲撃戦用のビークルのお下がりだが、そいつを色々改修して汎用の戦闘ビークルに仕上げたんだ」

およそ3年前、ウミネコ海岸沖で船を沈められスームスームに漂着したシブレット以下旧ジュニパーベリー号の面々は、街に身を隠しつつ再起を目指して活動を始めることとなる。

襲撃者の存在を鑑みればあまり大っぴらに活動することは避けるべきだが、クルーたちの陸での生活を成り立たせるためには先立つ物が必要で、労働やビークルを使った仕事で報酬を得なければならぬ。

何より、同時に船の再建資金も集めなければならぬわけで……そんな生活が、俺と出会いドン・スミスの支援が取り付けられるまで続いていたらしい。

当時の彼らは流れ着いたばかりで、何の後ろ盾も無い余所者だ。

見知らぬ地、それもあまり治安のよくない街で活動し、しかも資金を貯めて再起を図ろうというのであれば……それなりに危ない橋を渡ることもあっただろう。

そんななか、シブレットのビークルは大破して、マーシユの面倒も見なきやいけない状況。

まともな戦力として動かせる人員もごく僅かなので、そうなるとやはりビークルを操縦できるミゲールが、残った仲間を守るために強くある必要が出てくる。

彼が他のクルーと比べて一段上のビークルに関する知識や技術を持っているのは、そういう必要に迫られての部分もあつてのことというわけだ。

なかなかに世知辛い話だな。

「まあ、ビークルに関しちや……俺も腕には少し自信があつたんでな。副業も兼ねてスーム闘技場には何度か出場してたんだ。ファイトマネーでそれなりの装備を整えることもできた。どうだい？ いい機体だろ？ 何なら、ちよつくら中を見てくれてもいいぜ」

待つてましたとばかりに、マルガリータは「ネプトウヌス」の各部を点検し始めた。

彼女の腕前は俺の「ジャガーノート」の性能と合わせて既に広まっているので、整備を担当していたクルーたちもマルガリータの動きや手つきをじつと観察している。

「ふんふん……武装はきちんとメンテナンスされてるね。放水器の摩擦しやすいパーツは新しいものに換装してるし、モーター部分も整備が行き届いてる。いざつて時に錆びついて武器が使えないなんて心配は無さそうだよ。あと、ボディや外装の手入れもそれなりにしてるみたいだね。この水牛の角を象った飾りも、丁寧に磨いているみたいだし」

「お、バッファアローブレストのことかい。へへっ、いいだろう？ それもスーム闘技場でランクを上げて手に入れたんだ」

「そうかい。ただ……」

「？」

「アームの可動部が少しガタついてると、操作系の基盤がまるで調整されていないのが気になるね。整備は人任せで、細かい調整にもまるで気を配っていない、典型的な雑なビークル乗りの使い方だよ」

「うっ！」

言葉を詰まらせタジタジの顔で目を泳がすミゲールに、マルガリータはやや呆れた目を向けた。

「曲がりなりにも高ランクのバトラーなら、制御系の体感とのズレは致命的だつてわかってるはずだけどね……何なら、最近はあまり頻繁に乗ってないんじゃないかい？」

まあ、彼も『ジュニパーベリーII世号』の戦闘として多忙な日々を送っているからな。最早、彼もただのビークル乗りではいられない。

仕方ない部分もあるだろう。

「それに比べて……」

一方、シブレットの「グレートセーリング」は、マルガリータのお眼鏡にかなったようだ。

装備のグレードこそ砲弾アームにシールドアームとAランクバトラーにしては大分貧弱だが……ありきたりなパーツということは整備性が高いことも意味しており、また防御と射撃を繰り返す徹底してシンプルな立ち回りを想定したカスタマイズは堅実の一言に尽きる。

何気に、彼女のビークルは機動力を阻害しない程度に装甲のレベルを以前より一段更新しており、エンジン機関も新型モデルに積み替え、増設弾薬ボックスを装備していることから、地味に生存能力と継戦能力が上昇していることが窺える。

つまり今のシブレットなら、余程の強敵と遭遇した場合や特殊な状況下でなければ、防御を固めた体勢から粘り強く射撃を繰り返すことで、大抵の敵を確実に安全に各個撃破できるということだ。

「ほう、さすがに慧眼だな、マルガリータ。私の愛機の設計思想を、この短時間でそこま

で詳細に見抜くとは」

「そうだろうさうだろ。うちのカミさんは凄いな」

彼女が褒められるとつい俺まで嬉しくなる。

自慢したい気持ちを抑えられなかつた俺は、マルガリータを抱き寄せて髪を撫でるが……周囲の視線を気にするマルガリータは、頬を染めながらも俺の鳩尾に肘を打ち込んで距離を取ってしまった。

ぐっ……そんなに照れなくてもいいのに。

「と、ところで！ この船は飛行ビークルは載せないのかい？ 前にグレイがそんな事を言っていたような気がするけど……」

「ああ、確か艦載機と航空母艦運用だったか？ 実現すれば強力な兵器なのは間違いないが、まだ皆概要が理解できていないのと、何より誰が扱うのかという問題がな」

「なるほどね。確かに、飛行ビークルは扱いが難しいからね。戦いや偵察の前に海に落ちてるようじゃ話にならないか」

納得するマルガリータに頷き、シブレットは口を開いた。

「ふむ……ちようどいい、マルガリータ。航海中、私とミゲールの機体の改修作業を頼めるか？ 本艦の船団運営や戦闘行動についても資料をまとめて見せるゆえ、必要な機能の追加やメカニズムの強化・メンテナンスを頼みたい。平たく言えば、私たちの機体を

実験台に有用そうな発明を試作してほしいというわけだ」

「あ、ああ。もちろん、構わないさ。あたしも海上とか艦載式のビークルの運用には興味があるからね。色々試させてもらおうよ」

「うむ、お前になら安心して任せられる。運が良ければ、先ほどマルガリータの言った飛行ビークルの運用に關しても、何か着想に進展があるだろう。期待している」

俺を蚊帳の外にして、話はまとまったようだ。

腹を摩る俺を見るシブレットの目が、何だかミゲールを見るときのそれに近づいてきた気がするが……気のせいだろう。

『しょーもない』とでも言いたげな様子で肩を竦めたシブレットは、ふと何かを思い出したようにミゲールへ向き直った。

「ところで、ミゲール。もし私の艦隊指揮に不満があるのなら……：ビークルバトルで決着をつけるか？ 私に勝てたら、今の地位を譲ってやってもいいぞ」

「いや、勘弁してください……：ビークルの扱いで万全の司令に勝てる野郎が居ねえのは、よくよくご存じでしょうに」

「ふっ……まあ、バトル云々は冗談だ。私も艦隊司令として公然と下手な振る舞いはいはできんからな」

なるほど。

万が一、クルーたちの前で無様を晒せば、それこそ彼女の沽券にかかわるわけだ。彼女も既に色々と柵を抱える立場になってしまったな。

だが、そんなことを考える俺をシブレットは軽く一瞥し、目の前の愛機【グレートセーリング】を見上げた。

「だが……：：：：ピークルの腕が鈍っていいことはない。マルガリータの整備が終わったら、少し乗り回してみるとするか」

9話 釣りと襲撃者

「グレイの旦那！ 引いてるぜ！」

「っ、おっと！ ありがとうよ」

甲板に駐機した愛機「ジャガーノート」のкокピットで、ウトウトと舟を漕いでいた俺は、横合いから掛けられた船員の声で我に返った。

シートから体を起こし、即座にハンドルとアームの操作系を握りなおす。

普段は高周波振動装置つきの強化ブレードを装備している「ジャガーノート」の右アームパーツだが、今は巨大な伸縮式の釣り竿が装着されている。

金属製の外装を持ちながらも、粘性がある素材を芯に組み込んだ大型の釣り竿だ。

よく撓る複合素材の竿は、獲物の質量と海中へ引き込むような力に、激しく湾曲し軌むような音を立てていた。

「おおっ、今回も結構デカいぞ！ そろそろいい時間だからな。最後にもう一勝負と行こうか」

アームを操作しつつ、ピークルの機体越しに感じる揺れと反動に俺は思わず口角を上

げた。

釣り竿アームは試作段階ではあるものの、ビークルの質量とウインチを利用した大掛かりな仕掛けだけあって、コツさえ掴めば手釣りより確実に大物を釣り上げることができる。

前世なら、似たようなものがあってもただのネタ枠だっただろうが……

今日、俺は既に何匹か大物の魚を釣り上げており、その性能は完全に実証済みである。脂が乗ったブリやヒラマサやカンパチが掛かったときは、なかなかテンションが上がった。

スキートール湖で鱒を釣るのは、迫力からして雲泥の差だな。

そうこうしている内に、俺の釣り竿に掛かった魚は海面のすぐ下まで引き寄せられていた。

タイミングを合わせてビークルのアームパーツを持ち上げると、やがて海面から飛び出した獲物が水中起動を取れなくなったことで、釣り竿への負荷が一気に弱まった。そのままウインチを巻き上げ、大型の銀青色の魚体を甲板まで持ち上げる。

「——よっしゃ！ こいつは……ブリか。なかなかのサイズだ」

「いいねえ、締めとくぜ」

俺から獲物の魚を預かった船員の男は、早速とばかりにブリの鰓に手鉤を打ち込ん

だ。

急所を穿たれた魚は瞬間的に硬直し、尾鰭をビクビクと痙攣させながら息絶える。海の男だけあって魚の扱いには馴れており、さすがのお手並みだ。

【ジャガーノート】の隣に作業用ビークルを並べ一緒に釣りをしていた彼も、この数時間で大量の魚を釣り上げておりこれから面倒な魚の下処理が待っているわけだが……この手際なら大丈夫そうだな。

「さて……」

この後は、甲板に鍋やバーベキューコンロを持ち出して、非番のクルーや船内で知り合った他の乗客と一緒に獲れたてのシーフードを味わう予定だ。

日中、マルガリータは砲撃用・作業用ビークルの整備デッキに入り浸ることが多く、ナツメツ博士は無遠慮に声を掛けてくる他の乗客連中に辟易して船室に引き籠っているが……さすがに普段から俺の料理を口にしてはいる二人だ。

ブリシャブとヒラマサのたたきの匂いに気が付かないわけも無い。すぐさま上甲板の簡易調理場にやって来るだろう。

もちろん、木造船の甲板で火を炊くなど普通なら言語道断なので、俺たちはシブレットにしつこく注意を受けたが……まあ、近くにバケツの水と放水アームを装備したビークルを用意しているので、万が一の際にはすぐに消火できるから大丈夫……だと思おう。

何はともあれ、パーベキューの準備は船員たちがしてくるので、それまで俺は暇だな。

とりあえず、「ジャガーノート」の装備を戻すのに、整備場へ運び込んでおくか。愛機を適当に放置しようものなら、マルガリータにどやされる。

そんなことを考えていると、不意に甲板の端から声が上がった。

「漂流者だー!」

「左舷前方! ボートだぞ!!」

クルーによって漂流者発見の報が齎された直後、『ジュニパーベリーⅡ世号』は舵を切った。

乗組員の男たちはキビキビと動き、ロープ等や救助に必要な資材を運び、ドックで整備中のビークル隊も作業に駆り出される。

マルガリータとナツメグ博士が何事かと甲板に上がり、船団全体に進路指示を出したシブレットとミゲールも船の甲板の左前方にやって来た。

「漂流者の救助は商船の義務だ。災害による転覆、事故、海賊との戦闘……経緯は様々だが、水難から辛くも生き残った勇士を、我々は決して見捨てない」

「なるほど。さすがに無視して先を急げと言う乗客は居ないか」

「ああ、幸い我が艦に乗る客人たちは皆、施しの精神と情けを持つ紳士淑女の方々だからな。しかし……」

一瞬、シブレットの顔が険しく強張った。

甲板には、救助に向かうクルーだけでなく物見高い乗客たちまでわらわらと集まってくる。

一応、クルーたちは危険なので船内に居るよう乗客を説得しているが、どうしても一定数は話を聞かない連中が居る。

船上とは思えないフリフリの服に身を包んだご婦人たちは、やがて肉眼で見える位置まで近づいてきたボートを心配そうに見つめる風を装っているが、その表情はただただ同情の言葉を紡ぐ自分に酔っていた。

まあ、俺も乗組員ではなく乗客であることに変わりはないので、あまり偉そうに人のことを言えないが……。

しかし、そんな具合に他人事を決め込む俺に、シブレットは些か硬い声を掛けてきた。「グレイ。お前、銃は持っているな？」

「ん？ ああ、そりゃ拳銃は常に持ち歩いているが……」

そこまで言われれば、俺も何となくシブレットが緊張している理由に察しが付く。

要は、要救助者を装った海賊の可能性もあるわけだ。

シブレットが言う以上、その確率は決して低くはないのだろう。マルガリータとナツメツグ博士も様子を見に来たが、念のため二人には船室へ戻ってもらった方がいいな。

俺は若干表情が強張るのを自覚しつつも、シヨルダーホルスターの中のワルサーを握り、心強い相棒の存在を確かめた。

「おうい！ こつちだ、助けてくれ！」

「(ここだぞー！)」

やがて、漂流するボートから助けを求める声が響いて来た。

ボートに乗っていたのは、『ジュニパーベリーⅡ世号』のクルーと同じような肉体労働者風の男たちで、小さな船体にかなりの人数が犇めいている。

何と言うか、ムサイいな……。

「お前ら！ 大丈夫かつ!？」

「助けに来たぞー！」

「一体、何があつたんだ!？」

『ジュニパーベリーⅡ世号』の甲板から声を掛けるクルーたちに、漂流者の男たちは口々に事情を叫んだ。

何でも、数日前に漁船が転覆し、乗組員だった男たちは救命ボートで脱出してそのまま海上を流れていたらしい。

ちようどそこに、俺たちの船団が通りがかったというわけだ。

よくある話だ。

聞く限り、特におかしなところは無さそうだが……シブレットは船員たちの間から進み出ると、漂流者の男たちに声を掛けた。

「そうかそうか。今までよく頑張ったな。ところで……お前たちは随分と優秀な船員のようだな？」

一見優しい言葉を掛けているように見えるが、シブレットの声にはどこか含みがある。

疑問符を浮かべる一部のクルーや乗客を尻目に、シブレットは言葉を続けた。

「いや、なに……。船が転覆したにしては、お前たちは随分と身綺麗だと思つてな。ブーツも型崩れしていないし、服も濡れていない」

その一言で、両者は俄かにザワついた。

普通なら、シブレットの言葉通り、船の沈没後に迅速かつ最適な行動をとつた結果だと思ふところだろうが……取り繕いつつも明らかに慌てている彼らの様子は、俺やクルーに強い疑念を抱かせるのに十分なものだった。

素早くシブレットの意図を察したミゲール以下クルーたちは直ちに行動を開始し、救助作業のために出てきたピークル部隊も即座に体勢を変える。

俺も無言で【ジャガーノート】に乗り込み、そつとハンドルを握り込む。

そんななか、漂流者たちは口々に言い訳じみた言葉を並べ、早く助けろと怒り出す者も出始めるが……シブレットは落ち着いた様子で咳ばらいをした。

「いや、結構。諸君らの有能さはわかった。沈みゆく船からボート一艘で脱出し、今まで生き延びてきたことは称賛に値する。だが……一つだけ聞かせてくれ」

一 拍置いて、シブレットは言葉を続ける。

「その……お前たちのボートのすぐ下に潜水しているピークルは、一体なんだ？」
「っ！」

次の瞬間、漂流者の男たちは豹変した。

「クソっ！ 構わねえ、やれ!!」

「うおおおおおオオ！」

「畜生！ こうなりやヤケだ!!」

ボートの中に隠してあったと思わしき武器を手に取ると、一斉にシブレットたちへ銃口を向ける。

さらに、彼らは漂流者を装ったボートの下に仲間のビークルを待機させていたように、鋼鉄のコクピットとボディが次々と海面に顔を出した。

現れた数台のビークルは、防水キヤノピーに酸素ボンベのバックパーツを装備している。

どうやら、最近開発されたビークル用の潜水装備を使っていたようだが、あまり性能が高くないのかそれほど深くには潜れず気泡も大量に出るため、俺も途中で存在に気付いていた。

そんな漂流者もとい海賊の彼らは、開き直り一斉にシブレットの船団へ攻撃を仕掛けようとするが……しかし、その時には既に『ジユニパーベリーⅡ世号』のクルーたちも応戦を開始していた。

「撃てえ!!」

船の左舷に並んだビークル部隊は、シブレットの砲撃開始の合図で一斉に砲弾アームを発砲した。

大口径の砲弾が船の片舷からバラ撒かれ、海賊たちのボートとビークルへ雨のように降り注ぐ。

ビークルバトルの基準からすると、艦載ビークルの装備する砲弾アームは火力も精度も最低クラスの代物だが、それでも車載火器のサイズである。

近距離で十台近くのビークルから斉射を受ければ、当然、海賊たちの乗っている小さな木製ボートなどひとたまりも無い。

水柱を上げながら叩き込まれる放火のなか、着弾の衝撃と爆風で海賊たちのほとんどは海に投げ出された。

「う、うわああああああー！」

「ギエえー！」

当然、俺も既に戦闘準備を整えていたので、「ジャガーノート」の射撃装備を起動して甲板から撃ちまくる。

普段、近接装備の強化ブレードを装備している右アームは今は釣り装備で塞がっているが、左のアームパーツは普段のカスタムチェーンガンのままだ。

凄まじい連射で吐き出された高速弾は、木製ボートをズタズタに切り裂き、浮上していた潜水ビークル数台に穴を穿ち耳障りな金属音を残した。

完璧に整備された精度も連射性能も桁違いの機関砲は、それ一丁で『ジュニパーリーII世号』のビークル部隊の斉射に負けず劣らない火力を発揮している。

相変わらず、さすがの性能だ。

マルガリータ様様だな。

「よくも……くっつそー!!」

突如、海面に浮上していた潜水ビークルの一台が、フロートからスラスタを噴射し、空中に躍り出た。

粗方、敵は片付けたが、どうやらあきらめの悪い奴が居たらしい。

俺は遠慮なくトリガーを切り替え、空中の敵ビークルにチェーンガンのアンダーバルから長距離キャノンをお見舞いする。

小型化と短銃身化により、フルサイズの長距離キャノンより精度も弾道加速も劣る武器だが、それでも炸薬弾等を搭載した大口径のミサイルランチャーだ。

目標の中心を捉え炸裂したミサイル弾は、爆音とともに海賊の潜水ビークルのボディを粉々に破壊した。

「ま、待て！ 降参だギェー！」

「頼む、許して……あげッ！」

コクピットまで木端微塵になった仲間のビークルを見て、海賊たちの戦意はみるみるうちに萎んでいった。

元々が、船団相手に少人数で挑もうとした、分の悪い博打うちだ。

勝ち目が無いことを悟った彼らは、海中へ武器を投げ捨てて両手を上げた。

投降の声を聞き逃して、俺はさらに数人ほどチェーンガンである世へ送ってしまったが……やがて、シブレットの指示で生き残りの海賊たちは全て捕縛された。

こちらの被害はゼロ（弾薬消費のみ）で、敵は制圧済み。
やれやれ……これでようやく一件落着か？

10話 侵入者

海から引き揚げられ捕縛された海賊たちは、両手両足を縛られたうえで腰に縄を打たれ、『ジユニパーベリーII世号』の甲板に転がされた。

今はシブレット以下クルーたちの激しい追及を受け、奴らの身分や懸賞金、背後関係や仲間について徹底的に丸裸にされている。

一応、奴らにも意地やプライドがあるので、最初は簡単に口を割ったりはしないが、そこはシブレットたちも手慣れたものだ。

虚勢を張る者は時には暴力で立場をわからせ、とぼける者は役立たずとして処刑を匂わせ、適当な法螺を吹く者には『そんなに有名な悪党なら首だけ届ければ十分か』といった具合に、臨機応変に脅迫していく。

俺もナイフやワルサーをわざとらしく弄び、いい感じのタイミングで海賊たちに凄みを利かせた。

俺の愛機の火力は先ほど身を以って味わっているので、軽く残忍な笑みを浮かべて拳銃のセーフティを掛けたり外したりして弄ってみると、海賊たちは面白いくらい顔を

蒼白にした。

甲板の隅の方に居るマルガリータとナツメツグ博士が吹き出しそうだが、堪えてくれよ……。

……俺、そんなに演技下手ですかね？

「——よし、今日のところはこの辺でいいだろう。続きはまた明日以降とする。……お前たち！ こいつらを船倉にブチ込んでおけ！ 抵抗するようなら、サメの餌にしても構わん」

いい加減、俺も案山子の真似は飽きてきたところで、今日の尋問はお開きとなった。

この後は、日を改めて継続的に追い込みをかけ、情報を絞り出していくのだろう。

より嚴重に拘束されて連行されていく海賊たちをミゲールに任せて、シブレットはこちらに向き直った。

「すまなかつたな、 그레이。 ナツメツグ博士にマルガリータも、こんな危険な目に遭わせてしまつて……」

「いや、それは構わんよ。別に君たちのせいで襲撃が起きたわけじゃないんだ」

「うむ、ピークルを使つてあのようなことを企む連中は、どこにでも一定数出るものじゃ。運悪く遭遇することもあろう」

「海は広いし、仕方ないね」

しかし、シブレットは首を横に振った。

「いや、航路の安全確保は我々の責務でもある。そこに明確な自信を持っていたからこそ、私は自らの名において乗客の安全を保障した。約束を違えてしまったことは事実だ。謝罪させてくれ」

「そういうものか……」

まあ、こちらに明確な損害で発生しなかった以上、シブレットたちはよくやってくれたということでもいいだろう。

『ジュニパーベリーII世号』の面々は、きちんと襲撃者を撃退し乗客と仲間を守った。普段、国民の血税で飼われているくせに、市民を一切守らない現代の警察に比べれば百倍マシではないだろうか。

犯罪が起きた後で、罰金を課そうが、懲役刑を課そうが、その本質は官憲によるただのピンハネでしかない。

被害者が望むのは、あくまでも自分や遺族への補償、もしくは加害者の排除がなされなければ意味が無かろうに……客のニーズをまるでわかっていない。

いや、寧ろ、市民が自分たちにとって客であることから、完全に目を背けているのだろくな。

犯罪は誘発させた方がお得、ストーカーは殺人に発展してくれた方が美味しい……基

本的に、奴らの感覚はそんなものだ。

まあ、嚴重注意や警邏より犯人逮捕の方が、変質者より殺人犯を捕まえた方がポイントが高いのはわかるが……腐ったシステムだ。

そもそも犯罪を未然に防げなかった時点で警察の落ち度と言われても仕方ないはずだが、その感覚を持っている部署が公安以外にどれだけあることや……。

とはいえ、仕事のクオリティが報酬の減額や予算規模の縮小に繋がらない組織である以上、需要という概念を舐め腐るのは当然かもしれないな……。

それを思えば、軍との境目が曖昧なこの世界の警察ビークル隊はまだマシか。

彼らは治安維持を軍事行動に近い概念で捉え、少なくとも盗賊団の排除や街を守るために戦うことに疑問は持っていない。

「ん？ どうした、グレイ？」

「……いや、ちよつと嫌なことを思い出したただけだ」

俺は思考を切り替えると、シブレットに向き直った。

「ところで、ここの海上保安はどこを担当なんだ？ スーム近海では、海賊が出たなんて話は今日日聞かないが……」

「……ここは王都の海上警察の管轄だ。お前の言う通り、スームスーム周辺に比べると、海域の安全性や航路情報の整備は数段劣るな」

「あ、察し……」

前言撤回だ。

まともなのは一部地域の話で、王都の軍・警察は腐敗の温床らしい。

王侯貴族の手先として小遣いをもらい、市民には賄賂を要求して弾圧する。

そうなると、王都の警察はただただ武力を持った公立暴力団ということになるな。

ナツメツグ博士の評価が最悪な社会だけあって、今から心配だ……。

「……ま、今から余計な事ばかり考えても仕方ないか。海賊のことはシブレットたちに任せて、とりあえず上陸しても用心を「きゃああああアアア!!」っ！」

突如、船内に響いた甲高い女性の悲鳴に、俺たちは思わず顔を見合わせた。

甲板の下の方からは、男たちの罵声と壁や備品を叩くようなドタバタ音が聞こえてくる。

そして、徐々にこちらへ近づいてきた騒ぎの源は、しばらくすると上甲板に姿を現した。

「いやあ! 離して!」

「大人しくしろ! 暴れるんじゃないやねえ……っ、てめえら、近づくなよ!! この女がどうなってもいいのか!」

現れたのは、ズブ濡れの服を着た品の無い男と、後ろ髪を掴まれて金切り声を上げる女性だ。

どうやら、先ほどの海賊の生き残りが船に忍び込み、人質を取ったようだ。

恐らく、先ほど俺たちの斉射でボートと潜水ビークルが全滅した後、『ジュニパーリーⅡ世号』の船体の影に隠れてシブレットたちの搜索をやり過ごし、下層船室の窓あたりから船に侵入したのだ。

大方、こつそり仲間を助け出すことに失敗し、クルーに発見されて騒ぎになり、居直つて人質を取ったと……そんなとこだらう。

俺も海賊の顔などいちいち覚えていないし、シブレットたちも数が合わない分は戦闘でくたばって沈んだものと見なしていたが、少々油断していたな。

「オラツ、下がれ！　この女を撃ち殺すぞ！」

甲板に出た男は、大声で罵声を発しながら人質の女性を引き摺るようにして、銃を振り回し周囲を威嚇している

手鉤やら刃物やら銃やらを持った船員たちが男を取り囲むが、人質が居るため安易に攻撃は仕掛けられない。

俺も既にワルサーを抜いてセーフティを外し、男の頭に銃口を向けていたが……どうにも発砲の判断はしかねていた。

奴の銃は全長40センチほどの、ソードオフショットガン。

ダブルバレルの猟銃の銃身とストックを適当に引き切ったようで、グリップには雑にテープが巻かれている。

装弾数は二発と少なく、射程も精度も最悪だが、至近距離の殺傷力と攻撃範囲の広さは脅威だ。

暴発すれば危険な銃なので、こつちも迂闊なことはできない。

「ビークルを……よこせ」

一頻り騒いだ男は、俺たちに向かって呻くように要求した。

「聞こえねえのか！ ああ黒いビークルのキーを出せって言ってるんだ!!」

どうやら俺の「ジャガーノート」を奪って逃げるつもりらしい。

あるいは、あの機体があれば船団相手に形勢逆転できると思っているのか。

どちらにせよ、？めるはずの無い要求だ。

仮にこの人質の女性と引き換えでも「ジャガーノート」は渡せない。

マルガリータとナツメツ博士の技術の粋を結集したあの機体は、最早チート級の兵器だ。

こんな連中の手に渡ったら、それこそ両手の指では足りない数の命が奪われてしまう。

まあ、所詮は機械なので、俺も自分の命を危険に晒してまで守るつもりなどないが……少なくとも、この取引に応じる余地は無いな。

あの人質の女がどこの上流階級の娘かは知らないが、それこそ警官でも軍人でもない俺に彼女を守る義務など無い。

次なる被害の抑制と確実に且つ安全なクズの排除のためなら、彼女もろともハチの巣にするのも仕方ないことだろう。

悪いと思いつつも冷静に決断した俺は、ワルサーの銃口を男に向け速射の構えで引き金に力を掛けるが……。

「待ちな！」

突如、俺の横に居たマルガリータが声を張りあげた。

「な、何だ、てめえは……!?!」

「あのビークルの整備士だよ。あんたがご所望の……【ジャガーノート】のね」
群衆の中から進み出たマルガリータは堂々と宣言した。

海賊の男は面食らっているが、俺も彼女のまさかの行動にぶったまげている。

そんな戸惑いの空気が支配するなか、マルガリータは自分に集まる注目をまるで意に介さず、口を開いた。

「キーならくれてやるよ。だから、その子を離しな」

そういつて、マルガリータはポケットから「ジャガーノート」のスペアキーを取り出した。

そのまま、手に持ったキーを掲げて、マルガリータはゆっくりと男に近づく。

咄嗟のことで、俺もついマルガリータを止め損なってしまふ。

シブレットやナツメツグ博士も、人の命が今まさに危機に瀕している状況で、下手な口出しは出来ない状態だ。

「ほら、何ビビってんだい？ さっさと取りなよ」

「っ！ 舐めんな、クソアマ！ そいつをこっちに持つてこい!!」

後先考えない犯罪者を煽るのは感心しないが、うまい具合に男の意識はマルガリータの持つキーへ誘導され、周囲への警戒が疎かになっていた。

そうして男の目の前まで近づいたマルガリータは、顔を上げて真正面から男を見据える。

「交換だよ。その子を離しな」

「ぎげんなつ。命令するのは俺だ。……てめえもこっち来い！ 整備士なら、使い道もあるだろ」

そういつて、男は銃を持っていない方の左手で、マルガリータの腕を乱暴に引っ張つ

た。

女性としては大柄で力もあるマルガリータだが、それでも男の腕力で容赦なく掴みかかられた痛みで、やや体勢を崩しながら顔を擡める。

一瞬、俺は怒りで目の前が赤く染まったような感覚に陥るが、ワルサーの照準を意識してエイム感覚に集中することで、どうにか冷静さを保った。

そして……。

「あっ……」

男がマルガリータを引き寄せようとしたことで、先ほどまで髪を掴まれ引き寄せられていた人質の女性は、支えを失って転倒しかけた。

目の前で大きな動きがあれば、人の意識は自然とそちらへ向くもの……それは、今まさに極限状態にある海賊の男にとっても例外ではなかった。

短い時間だが、男のソードオフショットガンの銃口は確実にマルガリータや俺たちの方から外れた。

ややテンパった男の動きが硬直し、一時その場に静止する。

このチャンスを逃す俺ではなかった。

「伏せろっ」

「っ……い！」

俺はマルガリータに鋭く警告しながら、両手でグリップしたワルサーの引き金を絞り落した。

露出したバレルの先端からマズルフラッシュが煌めき、軽やかな9mm弾の炸裂音が海面に響き渡る。

銀色のスライドが後退し、チャンバーから空薬莖が排出され……次の瞬間には男の側頭部に弾痕が穿たれ、メタルジャケットの弾頭が貫通した反対側から血が噴き出した。

命中だ。

男のすぐ傍に居たマルガリータは、俺の合図で即座に人質の女性を押し倒しつつ甲板に伏せており、既に射線から完全に外れている。

念のため、俺は続けてダブルタップで男の胴体にも9mm弾を連続でぶち込んでおく。

続けざまの着弾の衝撃で、男は悲鳴を上げる間もなく甲板に崩れ落ちた。

男の手から滑り落ちたソードオフショットガンには一瞬ヒヤリとしたが、幸い暴発するようなことはなかった。

「確保！」

シブレットの号令でクルーたちは一斉に動き出した。

明らかに致命傷で男は即死のはずだが、万が一ということもあるので、念のため男は殺到した船員たちに囲まれて拘束される。

やがて、男が持っていたソードオフショットガンが確保されるとともに、男の死亡が確認された。

人質に取られていた女性も、マルガリータとシブレットが助け起こした後、知り合いと思わしき男性に付き添われて現場を後にする。

彼女はしきりにマルガリータに礼を言っていたが、当のマルガリータはどこか居心地が悪そうに頭を掻いていた。

「マルガリータ……」

ワルサーにセーフティを掛けてシオルダーホルスターに仕舞った俺は、マルガリータに向き直った。

真正面から彼女を見据えると、マルガリータはややバツが悪そうに眼を逸らす……俺としては文句の一つも言いたい気分だ。

正直、さつきのはかなりヒヤヒヤした。

結論からいえば、人質の女性にもマルガリータ自身にも何のケガも無く済み、特に被害も出さず犯人を仕留められたので結果オーライだが……俺個人としては、他人のため

に命を危険に晒すような行為は、美德とは思つても、家族や大切な人には絶対にやつてほしくない。

盗賊団と戦うのも、ピークルに重武装を施すのも、元はと言えば自分の身を守るためのものだ。

重ねて言うが、俺たちは警官でも軍人でもない。

見ず知らずの人間のために命を懸ける謂れは無いのだ。

そもそも、マルガリータの気質からしても、正義感で突つ走るようなタイプではない。

それだけに、今日のことは憤りよりも戸惑いが大きい。

そんな俺を尻目に、マルガリータはやや不貞腐れたように口を開いた。

「無茶をしたのは自分でもわかつてるよ。でも……あんたも人のことは言えないでしょ？」

「っ、それは……」

「勘違いしないでよ。あくまでも『ジャガーノート』のため。あの子を整備したのはあつただから、あたしにも責任があるの。だから……あんただけに戦わせるつもりはない。それだけだよ」

確かに、今まで彼女には心配を掛け通しだった。

俺が原作の知識を頼りに奔走するなか、マルガリータはいつもナツメグ邸で俺の帰

りを待つていた。

それこそ、ガラガラ砂漠決戦に『グランドファイナーレ』への突入など、ブラツダイヤモンドとの戦いでは彼女にも相当な精神的負担を強いてきた。

それを思うと、何も言えなくなつてしまふ。

「……ハアア、わかつたよ。でも、こういうのはこれつきりにしてくれよ。あんまり続くと、こつちの心臓が持たん」

「うん、ごめん……」

悪戯っぽく笑つて、マルガリータは俺の胸に軽く顔を埋めた。

いまいち本音に踏み込めていない気もするが、どうしてもある程度の理詰めで説得される引いてしまうのは、元日本人の性だろう。

夫婦なのにと思わなくも無いが、所詮はこんなものか。

しかし、ふとマルガリータの手元を見ると、俺はあることに気が付いた。

「マルガリータ、それは……？」

「ああ……これ？ あたしの道具箱の鍵」

先ほど海賊の男に「ジャガーノート」のキーだと言つて見せていたものだが……よく見ると、何の変哲もない南京錠のカギだ。

あのシチュエーションでマルガリータが偽物を出すとは思えず、てつきり俺も本物だ

と思つていたが……。

「おいおい！ もしあいつに偽物だつてバレたら……」

「大丈夫。その時はその時で、あんたが何とかしてくれるつて信じてたから」

まあ、確かに……あの男が偽物のカギを受け取つたのなら、ピークルに鍵が合わずテ
ンパつたところを撃つとか、別のチャンスも生まれたかもしれないが……それにし
ても、危険な賭けだ。

……まつたく、今日はマルガリータに振り回されつばなしだな。

だが、最後に俺の胸に深く顔を埋める直前、マルガリータの浮かべた含み笑いには、僅
かに彼女の本音が覗けたような気がした。

「まつたく、お前さんたちは……夫婦は似ると言うが、二人揃つて無茶をしておつてから
につつ。……おいつ！ 聞いたるのか!？」

11話 王都ナツメツグ邸

『ジュニパーベリーⅡ世号』で波に揺られること数日。

俺たちはついに目的地に到着した。

思えば、あつという間の航海だった。

見渡す限り海という環境は、確かに三日もすれば慣れてしまうものだが……俺にとつてもマルガリータにとつても船旅は初めてのことで、探せば色々と楽しむ術はあるものだ。

マルガリータと甲板を散策したり、サックスを吹いたり、釣り竿アームを装備したビークルで魚を釣ったりな。

……まあ、いくらスリリングとはいえ、海賊との遁走はもうご免被るが。

そんな具合に、俺たちが思い思いに船上で時間を過ごしている内に、『ジュニパーベリーⅡ世号』は外海から運河へ侵入した。

ここまで来れば、王都はもう目と鼻の先だ。

水門を抜けた船は、人工の水路を奥へ奥へと進んでいく。

元々は治水のために人の手でコツコツと整備したであろう分水嶺も、今や近代工業と作業ビークルの力により、直線と直角だらけの無機質なコンクリート張りだ。

途中、関所のような関門で、しばらく停船を求められたが……さすがにここまで来て水上に長時間留め置かれることはなく、船団代表のシブレットが渡航許可証を提示すると、あっさり通行許可は下りた。

そして、俺たちは予定通りに王都の船着き場に到着した。

「ほう、これが王都か……」

「凄いね」

霧が晴れ、朝の陽ざしに照らされた街並みを眺めつつ、俺とマルガリータ感嘆の息を漏らした。

話に聞いて通り、ハッピーガーランド以上の規模を持つ大都会だ。

大小さまざまな船舶が出入りする大規模な港に、住居や商業施設も背の高い凝ったデザインが目立つ。

沿岸部では商業港から市場らしきエリアにかけて今も威勢の呼び込みの音が響き、街の外縁には工場らしき大型の建造物がいくつも建ち並び煙突から黒い煙を吐き出している。

特に記念日やパレードがあるわけではなさそうだが、耳を澄ませば雑踏の奥から微かに楽器の音も聞こえてきた。

商業・工業・芸術……この街があらゆる経済活動の中心であることが、こうして外から眺めているだけでも明確に見て取れる。

「さすがは首都。産業の規模が桁違いだ。こりやあ壮观だな」

「車もビークルも凄いな数だね。あつ！ あそこのビークル、タイプⅢの新型ボディパーツだよ！ うちでは研究資材として取り寄せるのにも結構時間が掛かったけど、こつちでは普通に出回ってるんだね。やっぱり都会は違うなあ」

確かに、街を行くビークルの年代や質はピンキリだが、それでも最新型や凝ったパーツを装備した機体がちよくちよく目につく。

そのバリエーションの豊富さは、地方都市ネフロの比ではないだろう。

パトロール中と思わしき警察ビークルも、最新の近接武装である電気ロッドを装備している。

ナツメツグ博士は時代遅れの王政支配と歪な階級社会を徹底的にデイスっていたが……なかなかどうして、技術・文明は発展しているじゃないか。

「よし！ 接岸したぞ。錨を下ろせえ!!」

「総員、上陸準備！ 各艦、順次乗客の誘導と積荷の処理を開始しろ！」

そうこうしている内に、『ジュニパーベリーⅡ世号』も所定の位置に停泊し、連結されたタラップから次々と乗客を吐き出し始めた。

船倉ドックからうちの「ジャガーノート」と「クラフトマンシップ」が運び出されたのを確認し、俺たちも手荷物とトランクを持って、ここまで送ってくれたシブレットたちに礼を言い下船する。

あまりモタモタしていると、ナツメッグ博士に近づきたい輩が寄ってきて鬱陶しいところの上ないからな。

早速、出発するでしょう。

「ところで、博士。今回は宿の手配をしていませんが……どうしましょう？」

「問題ない。わしの屋敷がある。形式上の爵位とともに形だけ下賜されたものじゃが、普段は使用人に管理を任せておるでな。安心せい。お前さんたちの部屋も用意させてある」

そういえば、そんな手紙を博士が事前に送っていた気がするな。
なら、今日の寝床は大丈夫か。

「案内はわしがするよって。グレイは「ジャガーノート」を出すのじゃ。お前さんの商品サンプルとやらも、あとでうちに運び込むよう伝えておるからの」
「了解です。今、ピークルを回してきます」

船着き場を後にした俺たちは、早速ナツメツグ博士の案内で王都ナツメツグ邸へ向かった。

俺の運転する「ジャガーノート」の助手席に博士を乗せ、後ろをマルガリータの「クラフトマンシップ」が追従してくる。

俺は博士の誘導に従い、淡々とピークルを進めた。

道中、ルート沿いには興味深い店舗も多く、マルガリータもピークルのコクピットから辺りをキョロキョロと見回していたが……さすがに寄り道をしている時間は無いので、買い物はまた後日のお楽しみだな。

そして、中心街のさらに奥。

恐らく、貴族街であろうエリアに差し掛かったところで、博士は一軒の洋館の前で俺にピークルを停めるよう指示した。

「ここですか？　こりやまた随分と豪華な別荘で……」

「うむ、わしの趣味ではないがな」

目の前の洋館は、両隣のこれも貴族の邸宅と思わしき家より、数段は敷地面積の大きい豪邸だ。

外から見える庭には噴水と手入れの行き届いた植木が並び、その周りをぐるりと石垣

が囲み、鉄の門扉には洗練された装飾が施されている。

当然ながら、母屋の建築技法も優美なデザインだ。

質素で実用的なピジョン牧場のナツメツグ邸とは正反対の代物だな。

仰々しい縁取りの表札には確かにナツメツグ博士の名前が書いてあるが……本人の言う通り、これは博士の趣味じゃないだろう。

「叙爵して屋敷を与えることには、王室の見栄もあるからの。見てくれだけは派手な屋敷を押し付けてきたわ。とはいえ、血筋しか取り柄の無い輩からすれば、産業への功績だけで身を立てたわしが貴族街に拠点を構えることすら気に入らないようでの。その結果、場所は下級貴族街で、敷地だけは広いという、妙な代物を押し付けられてしまったのじゃ。もちろん、使用人の給料と維持費は名誉爵位の年金で賄っているが——」

……とりあえず、この王都ナツメツグ邸にも、色々複雑な事情はあるようだ。

何はともあれ、王都滞在中は俺とマルガリータもしばらくこの家に寝泊まりすることとなる。

館の使用人らしき男性が開けてくれた門扉を潜り、母屋裏手のガレージにビークルを駐機した俺たちは、早速先に立って歩きだしたナツメツグ博士に続き母屋に足を踏み入れた。

母屋の正面扉を開きエントランスに入ると、煌びやかな室内の様子が目に飛び込んできた。

玄関ホールは二階までの吹き抜けになっており、両側は幅の広い大理石の階段が設置されている。

天井には派手なガラス細工のシャンデリアが吊るされ、床も壁も当然ながら大理石張り、壁際にはいかにも高そうなインテリアが絶妙な間隔で配置されている。

さすがは貴族の邸宅だけあって入口から豪華絢爛だな。

まるで観光地の高級ホテルに来た気分だが……俺とマルガリータが家の中をキョロキョロと見回し呆けていると、階段の奥から年配の男性使用人がやって来た。

「お帰りなさいませ、旦那様」

「うむ、またしばらく世話になる。滞在は謁見が終わるまでじゃが、今回はわしの弟子たちも連れて来ておる。不自由はさせんでやってくれ」

「心得ております」

挨拶もそこそこに端的に用事を告げる博士へ、執事らしき壮年の男は落ち着いた様子で頭を下げた。

突然の来訪者である俺とマルガリータは些か申し訳ない気持ちになるが、どうやら俺たち夫婦の受け入れ態勢も準備万端らしい。

満足そうに頷いたナツメツグ博士は、俺たちに向き直り執事の男性を示した。

「聞いている通り、お前さんたちのことは家の者にも伝えておる。何かあったら、この……」

セバスチャンだろ？

「ミカエリスを頼るとよい」

そつちか……。

予想が外れた俺は内心ズッコケて間抜けな気分だが、そんな俺を尻目にミカエリスは俺とマルガリータにも恭しく一礼した。

「旦那様より、お二方のことは伺っております。さ、何はともあれ、皆さま長旅でお疲れでしょう。お部屋の方は既に準備出来ております。お食事の準備が整いましたらお呼びに参りますので、グレイ様とマルガリータ様もお寛ぎを」

「ああ、何かすいませんね。色々と手間掛けちゃって……」

「ど、どうも……」

「滅相もございません。お二人は旦那様の家臣も同然のお方。何なりと仰せつけください」

言い回しは若干仰々しいが、ミカエリスはテキパキと部下の使用人に指示を出し、俺たちを寝室へ案内した。

使用人一同がエントランスに集合しての歓迎の挨拶なんかも無く、あっさりとしたチエツクインだが、俺たち夫婦もナツメツグ博士も無駄な挨拶や勿体ぶった作法は好きじゃないので、こういう方がありがたい。

因みに、トランクなどの手荷物は、若い男性の使用人たちが部屋まで運んでくれた。

いつもは荷物を運んだり博士の身の回りの世話をしたりするのは俺の役目だが、ここでは従僕フットマンの仕事だ。

この環境に慣れ切ってしまうのも問題だが、使用人たちの仕事を奪うのも考え物なので、振る舞いには多少気を付けないとな。

館の使用人の案内で通された部屋は、天井の高い二十畳ほどの寝室だった。

壁や天井には凝った装飾が施され、窓際には高級な仕立てのデスク、部屋の真ん中には天蓋付きの大きなベッドがある。

例によって、俺たちは夫婦なので寝室は二人で一つの共用であるが、この広さと豪華さよ……。

正直、目がチカチカして居心地が良いとは言い難い環境に思えるが……意外にも、マルガリータは上機嫌だ。

スーツケースを整理する俺を尻目に、彼女はフカフカのベッドに腰掛け、軽く鼻歌を

歌いながら足をバタつかせている。

「ご機嫌だな。ここが気に入ったか？」

「まあね。田舎の空気も悪くないけど……でも、やっぱりこういうのにも、ちよつと憧れちゃうよねえ」

……確かに、ミーム村からピジョン牧場へと、マルガリータは嫁いだ先でも田舎暮らしだ。

ナツメツグ邸の居住環境は、俺の現代知識とアイデアに天才ナツメツグ博士の夜を惜しんだ研究により、地球の産業革命期どころか20世紀よりも一部は格段に進歩しているが……それでも、外を見れば牧草地と羊ばかりの、完全なるド田舎だ。

おまけに、よくよく思い返せば、俺はマルガリータを高級ホテルや旅行に連れて行つたことも無い。

遠出といつても、普段の俺たちの行動範囲だと行き先はハッピーガーランドが多く、その場合も大抵は定宿の『ロプスター亭』に滞在する。

スームスームへ行くときは『ホテルブルーマーリン』に泊まることもあるが、それでも港町の比較的高級なホテルというだけで……少なくとも、こうしたガちな貴族の邸宅には遠く及ばない。

そういう意味では、俺はマルガリータを僻地から連れ出して置いて、彼女に豊かな生

活を送らせてあげることが全くできていないのでは……。

「……どうしたの？」

「ごめんよ、マルガリータ。甲斐性の無い夫で……」

一瞬、ナツメグ邸をキンキラキンに改装してやろうかとも思った。

俺もそこそこ金は持っているんで、金銭的にはこのこと同じ部屋をピジョン牧場に捨てることは可能はず。

しかし、これだけの部屋を作るとなると、メンテナンスに手間が掛かり、それを維持するにはノウハウを持つ人材を継続的に雇う必要がるわけで……さて、どうしたものか？

そんな具合に本気で悩む俺を尻目に、マルガリータは肩を竦めてため息をついた。

「ハア……（あたしは後悔してないよ。あんたと結婚したこと……）」

「え？ 何て？」

「——っ！ 二度と言うもんか！」

頬を朱く染めつつも、マルガリータはぷいと顔を背けてベッドに潜り込んでしまう。

どうしても気になった俺は、これ幸いとマルガリータをベッドに押し倒し尋問を開始したが……結局、彼女が口を割ることは無かった。

やがて、夕食の時間ということで俺たちを呼びに来た使用人は、鳩尾に膝蹴りを食

らって悶絶する俺と赤面するマルガリータを見て、完全に何かを悟った様子でそつと扉を閉めた。

まあ、嫌な顔をされているわけではないし、特に問題は無いな。

その後、中年のメイド女性が、やけに頻繁にシート交換のチェックに訪れるようになった以外は……。

12話 商談と弊害

「——では、そういうことで。残りの契約書は作成が済み次第送らせていただきますので、詳細はそちらの法務の方とも検討してください。それと、先ほどまとめた件はくれぐれも願いますよ」

「もちろんですとも！ これだけ魅力的な品なら、間違いなく売れる。我が社の蒸気船を総動員してでも、海路を確保させてもらいますぞ。わっはっは！」

「これは頼もしい。ハハハッ」

数日後、俺は王都ナツメツグ邸の応接室で、上等な仕立ての服を着た恰幅のいいオッサンと談笑していた。

ナツメツグ博士が王都に來ていることが広まって以來、うちは続けざまの來客に見舞われている。

内容は、博士との会談の申し入れから、ほぼ命令のような呼び立てに、遠回しな接待のお誘いまで様々だ。

先触れとして使用人や雇われのピークル乘りに文を持たせてくる場合もあれば、直接

足を運んでくる者も居る。

謁見の日が決まるまでまだ時間があるので、目端の利く商人やフットワークの軽い下級貴族なんかは、この機会を逃さんとばかりに大挙して押し寄せているわけだ。

当然、全ての対応をナツメツグ博士一人ではできないので、どうしても博士本人が出張しないと非礼になってしまう相手以外は、俺やナツメツグ邸の使用人で分担して対処することとなる。

まつたく、これだから有名人は……。

まあ、来客への対応の中には、俺の仕事に関わる話に発展するパターンもあるわけで、そういった顔?ぎに博士の名前を利用してはいる以上、俺も文句は言えないか。

俺は顔見知りになった貴族や商会の人間に、掃除機やエアコン等の電化製品、サバの缶詰などの新しい保存食を売り込んだ。

成果は思ったより悪くない。

多くは金持ちの道楽として単発の購入だけに留まったが、なかにはアイテムの有用性とビジネスの可能性に気付き、生産や調達に一枚噛もうという意思を見せる者も居る。

また、海産物の長期保存を可能とする缶詰は軍需物資としての側面もあるわけで、軍閥の貴族の関係者やその手の品を扱う商売人は、その有用性にいち早く気付き長期の仕入れ契約を締結していった。

たつた今も、俺がオイルモーター工場に生産を委託しているエアコン部品の、海路による王都への輸出計画の話がまとまったばかりだ。

俺が対応した客の一人が、輸送船と倉庫を所有する大手商会の代表だったので話を振ってみたのだが、見事に大当たりだな。

「いやはや。まさか、軽ご挨拶に伺った折に、このような大商いのチャンスが舞い込んでくるとは。大変、実りある会談でした」

「こちらこそ。……今度は是非、エアコン部品の組み立て工場の件も、前向きに検討してもらえるとありがたいですな」

「はっはっは、それはもう……。ところで、ナツメツグ博士にもよろしくお伝えください」

愛想よく笑いつつも、さすがは王都で指折りの商会の代表だけあって、迂闊に言質を取られるような言葉を発しない。

普通に考えれば、電化製品の部品だけあつても意味は無いだろうが……組み立てて完成品を売るとなると、設備投資のコストや故障・不良品のリスク、さらには購入者からの不満を直接向けられる側面が出てくる。

状況次第では、完成品の製造と販売は他の会社にぶん投げて矢面に立たせ、自分たちは原材料の仲卸し的な位置に居る方が安全且つ確実だ。

恐らく、彼の頭の中ではそこら辺のリスクとリターンを何度も計算しているのだらう。

まあ、とりあえず販路は確保できたので、今日のところは満足しておくか。

こちらの取引相手は彼だけではない。

「もちろんです。……今日はすみませんね。本人が挨拶できませんで」

「なんのなんの！ 高名なナツメツグ博士がお忙しいのは、当方も承知しております。博士の右腕として名高いグレイ殿にお会いできただけでも望外の幸運ですよ。それに、子どもたちに自慢できます。何せ、貴殿は技術者として実業家としてだけでなく、ピークルバトラーとしても一流のお方ですからな！ そうそう、確か……王都に到着される直前にも、海賊退治をなさったとか？」

見え透いた世辞だが、こうして自然に相手を立てる話題を出せるあたり、彼が王都で商売を成功させた理由も何となくわかるというものだ。

そんなことを考えながら生返事をしていると、あまりおだてに乗らない俺の機敏を鋭く察知したのか、彼は一つ咳払いをして言葉を続けた。

「ところで、話は変わりますが……この後、よろしければ一杯ご一緒しませんか？ 中心街の北にいい店を知っているのですよ。いや、なに。お互い色々な仕事を抱えて忙しい身です。あなたとは分かりあえる部分も多いだろうと……。これを機会に、少しでも親

睦を深められればと思ひましてな」

なるほど。アツチの高級店が多いアレな地区ですね。わかります。

どう考えても話は商売から変わっていないが……大方、酒の席と綺麗どころの力で、こちらのより詳細な情報を引き出すか、俺の判断能力を鈍らせて自分に有利な話を進めるか……目論見としてはそんなところだろう。

本来なら、彼もナツメツグ博士本人との会談を希望していたわけだが、それが叶わないと分かった瞬間ターゲットを俺に変えたわけだ。

切り替えの速さ、思い切りの良さ、なかなかに強かな男だ。

さすがに、飲ませて抱かせて、スキヤンダルを握ろうとしているわけではないだろうが……まあ、この後の仕事とマルガリータを放置してそういう店で遊ぶわけにはいかないな。

「申し訳ない。少し仕事が立て込んでおりまして……せつかくのお誘いですが、またの機会と言うことで」

「そうですか……いやいや、失敬。そうでしたな。グレイ殿は愛妻家でいらっしやる。私は遠目に見ただけですが、あれほど美しい奥方なら、周りのご婦人が全て霞んで見えてしまうのも仕方ないでしょう。わっはっは！」

そうして、一頻りマルガリータを褒めちぎった男は、俺が本格的にイラつく寸前に応

接室を後にした。

「終わったか？」

来客の見送りを使用人に引き継ぎ、応接室へ戻ると、そこにナツメツグ博士がひよっこりと顔を出した。

生欠伸をしながらのつそりとやって来た博士は、普段着を着崩し、頭には見事に寝ぐせが付いている。

いかにも書齋で転寝をして今起きたと言わんばかりのご様子だ。

俺が真剣にビジネスの話を進めオッサンどもに気を遣っている間に、何とも呑気なことだが……まあ、仕方ないな。

博士は博士で、俺や周りの人間では代行できない仕事に忙殺されている。

「ええ、商売の話は一通り終わりましたよ。とりあえず、製品パーツの王都への持ち込みルートは固まりました。販売体制が整っても原材料が供給されないようでは片手落ちですが……この調子ならその心配は無さそうです」

「うむ、ご苦労だったな。そういう細々とした仕事は、わたしには性に合わん」

正直言つて、博士に商売と金の話は不向きだ。

『人の役に立つ』『人々がより豊かで便利な生活を』……そういう話で出した発明品の

生産許可が、結局は労働者の首切りと搾取に繋がり、後で話が違ふと揉めることも少なくなかつた。

まあ、その手のビジネスの話を持ち掛けてくる時点で、向こうも如何に人のアイデアを安く買い叩いて搾取とコスト削減のもと自分の取り分を増やすかを考えているのだから、当然と言えば当然なのだが……それで割り切れるほど、ナツメツグ博士という男は器用ではないからな。

やはり博士自身はどこまでいっても商売人ではなく技術者であり発明家、そして理想家だ。

搾取される側に回らなかつただけ、幸運かもしれない。

「いいんですよ。事業と経理を担当するのも俺の仕事の内です。俺に任せてくれれば、我がナツメツグファミリーは大儲け！うちの家計の安泰を約束しましょう」

「うむ……」

とはいえ……博士の言つた通り、貴族が支配する階級社会というのは思つた以上に面倒であることも、俺は実感しているわけで……。

今となつては冗談めかして話せることも多いが、いつもいつも先ほどの商会代表とのやり取りのようにすんなり話がまとまるわけではない。

『ナントカ様の血縁の血縁たるオレ様が宣伝してやるからタダで商品を寄越せ』と言

うのはまだマシンな方で、明らかにこちらが損をして金を奪われるだけの契約を押し通そうとしてきたり、何を根拠にしてか販売益の一部を継続的に渡すよう言ってきた貴族も居た。

彼らにとっては、農民も職人も商売人も、庶民は皆須らく自分に金や物を貢ぐ奴隷……取引の概念どころか、同じ人間を相手にしていることすらわかっていないのだろうか。

まあ、そんな屑どもの相手をする必要は度々あったが、概ね俺のビジネスは順調だ。今日の大口取引で生まれる利益は間違いなくひと財産だし、他にも細々とした販路の開拓が成功している。

俺が特許を所有するエアコンや掃除機などの家電製品が売ればその分ロイヤリティの支払いが増えるのはもちろん、俺が初期株を所有する缶詰業者の利益が上がれば俺の資産の価値が上昇するからな。

電気技術の発達に伴い今後間違いなく需要が拡大する分野で、先んじて一定の権益を確保することに成功したのだ。

金はいくらあっても困らないからな。

しかし……。

「……………」

「どうしました、博士？ 何だか機嫌悪そうですね……………」

唐突に眉を顰めた博士は、苦虫を噛み潰したような表情のまま顔を上げた。

「いや、お前さんに言っても詮無い事じゃが……………どうも気に食わんのでな。確かに、電気事業と電化製品の可能性はわしも重々理解しておる。お前さんの作ったエアコンやら掃除機やらが普及すれば、今まで貴族の特権であった豊かで便利な生活に近いものを、より多くの人々が享受できるようになるであろう。しかし……………」

仏頂面のまま、博士は言葉が続けた。

「一部の特権階級が富を独占することには変わらん。文明が進歩して新たな産業が生まれれば、この国も少しはマシになるやもと思つたが……………結局、得をするのは人を踏みつける側じゃ。金持ちは金持ちのまま、貧しき者は搾取されるのみではないか」

先日、発電所の視察をした辺りから、博士はずっとこの調子だ。

王都の電気事業の大株主だというナンタラ商会の何某社長の紹介で、俺たちは王都郊外にある発電所の施設を一通り見せてもらったのだが……………立派な内装や巨大な設備とは裏腹に、実状はなかなかの有様だった。

メイン通りから外れた裏道に繋がる搬入路では、多くの労働者やピークルが燃料や資材を延々と運搬している。

作業に従事するビークル乗りや労働者は、皆一樣に怒りを押し殺した表情をしており、その待遇に対する明確な不満が見て取れた。

そして……ボイラー室や排煙設備の周りでは、大人では入れない狭い隙間にハンチング帽を被った少年たちが潜り込み、部品の交換や清掃作業をしていた。

熱中症のリスクはもとより、数十トンの機械に潰されれば間違いなくお陀仏の危険な仕事だ。

特に、博士はこの児童労働に関して憤っていた。

ダンディリオンとチコリの兄弟はじめ、身寄りのない子どもたちを支援してきた事実が語る通り、博士は恵まれない子どもたちの境遇については殊の外敏感だ。

「ビークルの発明然り、蒸気機関の汎用化然り……良かれと思つてやったことが裏目に出るのは、これが初めてではないがの。だからと言つて、新たなエネルギー産業の発展の末路があつた有様では、今から気が滅入るわい」

「……電気事業そのものに最早希望が見出せないど？」

「そうは言つておらん。しかし、弊害の一言で済ませるには、些か犠牲が大きすぎるように思えるが？ せつかく新たな希望や機会が生まれても、多くの人々はそれを手にすることは叶わず、かつての支配者に奪われ続ける。ましてや、未来ある子どもたちがあつたような扱いを受けているようでは、わしがいい気分なわけがなからう。冷蔵庫やら洗濯

機やらの話以来、お前さんが口にしたアイデアを形にするのにわしもずっと協力している以上、無関係ではないからの」

「……………」

確かに、人道と倫理を是とする近代文明のなかで生きてきた俺も、この件には思うところが無いわけではない。

しかし……悲しいかな。

正直、俺にできることはあまりない。

仮に俺が、自身の影響力やナツメグ博士の名前を利用して、一部の会社に未成年者の雇用を禁じたところで、他の企業や勢力が余った子どもたちをより安く買い叩くのがオチだ。

もしも、国全体で児童労働を禁じる方向へ誘導できたとしても、その後はパンを買う金を稼ぐ手段すら無くした子どもたちが、より多く物乞いや変態の慰み者になって野垂れ死ぬだけだろう。

ある意味、それが自由競争の世界の常だ。

倫理や社会正義の概念が発達するのは、それこそつと文明が発達し皆が余裕ある生活を送れるようになってからのことだ。

しかし当然、博士もそこら辺の事情は理解している。

言い方は悪いが、博士はトロットビークルを生み出した張本人で、見方を変えれば、富を手にするのと引き換えに多くの労働者の職を奪い不幸にした男だ。

変革に伴う負の側面は、俺が言うまでもなく山ほど見てきているだろう。

近代文明と貨幣経済、倫理と善行の板挟みで、博士自身もずっと頭を悩ませてきたのだ。

そして、あのダンディリオンの事件か……。

「忘れたわけではない？ ああのベルガモットとかいうブラツダイヤモンドの総裁が財を成した株も、その価値が一体どこから来ているのかを」

「つ、それは……」

参ったな。

確かに、これでは博士の言う通り、俺も弱者から搾取する立場に回っただけだ。

俺のやり方が直接非難されているわけではないが、ここまで言われて思い至らないほど俺も鈍感じゃない。

新天地でのビジネスの成功に、少しばかり浮かれ過ぎていたかもしれないな。

「……しかし、それも悪いことばかりではないのかもしれない」

「え……？」

不意に口を開いた博士に、俺はやや間拔けな声で答えながら顔を上げた。

「石油利権の拡大に電器産業の台頭……お前さんが盛り上げた新たな経済は、薄汚い既得権益と搾取構造で塗り固められた張りぼてに、風穴を開けるだけの効果はあった。他ならぬこの王都を起点としてな」

何て返すべきか迷う俺に、博士はニヤリと笑って言葉が続けた。

「少なくとも、旧制からの貴族ではなく平民の商家が利権を掌握したことは、一歩大きな前進じゃ。宮廷貴族たちが、自分たちの与り知らぬところで大きな経済が動いていることに気付くのは、まだまだ先だろうて。その時に彼奴らがどういふ反応をするか見ものじゃの。だから、グレイ。この件は、お前さんの思う通りやつてみよ」

「いいんですか？ 不和を齎すだけの結果に終わるかもしれませんよ。かつてのダンディリオン以上に……」

「構わん。少なくとも、お前さんは……わしと共に歩める弟子だからの」

遠い目をする博士の脳裏には、間違ひなく、ちよつとした行き違ひで道を踏み外してしまつたあの兄弟子の姿が浮かんでいることだろう。

俺は博士を真つ直ぐに見据えて頷いた。

「留意しておきましょう」

「そうしてくれ。……もし、お前さんが目指す場所を間違えても、正してくれる人間は傍

に居るからの」

そう言いつて、マルガリータが作業をしている裏手のガレージへ視線を向ける博士の顔には、最早苦悩に囚われた表情は浮かんでいなかった。

13話 ガレージの語らい

「マルガリータ、居るかい？ 邪魔するよ」

「ん、ちよつと待つてて」

鉄骨造のガレージの扉を開け、雑多な資材に覆われた通路の奥の方へ声を掛けると、金属塊やスクラップの隙間からマルガリータの声が返ってきた。

一見ただの広い車庫に見えるこの作業場は、ナツメツグ博士が王都滞在中に使う研究スペースだ。

ビークルの整備用の設備から演算機器まで、大抵のものは揃っている。

作業机の上で何やら機械を弄っていたマルガリータは、金属パイプの棚越しにヒョイと顔を出すと、溶接用のフェイスガードを外した。

「お待たせ。あ、そうだがレイ、聞いてよ。この電子基板と歯車計算機を組み合わせたシステムなんだけど、あんたの言った通り小型化の話が——」

「わかったわかった。説明は後でちゃんと聞くから、とりあえずお茶の時間にしよう。ココアが冷めちまう」

勢い込んだところで話を遮られ、マルガリータはやや不満そうな表情を浮かべたが、俺がトレーに載せて運んできた攪拌棒付きのポットを見ると輝くような笑顔に変わった。

煤とオイルで顔を汚していても、彼女の太陽の女神のような美しさは微塵も損なわれない。

「ヤッ……」

俺は近くにあつたキャスター付きの椅子を引き寄せて自分もマルガリータの近くに腰を下ろすと、館の備品であつたこれまた高そうなカップにかき混ぜたココアを満たし、片方をマルガリータに差し出した。

執事のミカエリス曰く有名店のものらしいオレンジクッキーやバナナクリーム入りのマカロンをつまみながら、俺たちは熱いココアを啜る。

元々、博士が長時間籠ることも想定した研究室なので、ここには大き目の石油ストーブが設置されているが、それでも簡易的な鉄骨造のガレージの壁は母屋と違い断熱材が無く隙間風も容赦なく吹き込むので、この時期は結構冷える。

悴んだ手を解すようにカップを握りながら、マルガリータは体を縮めてホッと息をついた。

「それで？ あんたの仕事は順調なの？」

「ああ、こっちは問題ない。大口との契約も一通りまとまったし、電気事業に一枚噛む足掛かりもボチボチ確保できた。もちろん、細かいところはまだ詰めなきやいけないから、しばらくは来客の対応や外出先での商談が続くことになるだろうが……まあ、そんなところだ」

あまり長々と詳細を話してもマルガリータが退屈してしまうので、俺はざっと概要を告げると、彼女の方に質問を返した。

「君の方は？　博士から、色々な機械の解析やデータ作成を頼まれていただろ？」

俺の言葉に一つ頷いたマルガリータは、もう一口熱いココアを啜って一息つくくと、口を開いた。

「今は飛行船関連とビークル骨格の自律システムの資料をまとめてる。飛行船はもちろん『グランドファイナーレ』の小型化・低コスト化して実用レベルにするのが当面の目標。機械のスタンダードアローン制御の方は、汎用ビークルの姿勢制御と転倒からの復帰動作のシステムを発展させて、複合的な機動のオートメーション化を——」

なるほど、とりあえず詳細を聞くと長くなるのはわかった。
まずは忘れないうちに実務的な話しておくか。

「何か困ってることは無いか？　書類上の手続きとか、俺やナツメツグ博士の名前を使った方がいいものは、こっちにぶん投げてくれて構わないぞ？」

「今は……特に無いかな。あんたとナツメツグ先生のおかげで、大学と資産家主導の研究所からの資料がすぐに集まったからね。小型の試作品の方も作製は捗ってるよ」

無人制御のビークルも飛行船も、いずれ実用化され大量に配備されれば、間違いなく諸外国との軍事バランスに影響する。

王都の権力者もさすがにそこに気付かないほど馬鹿ではなく、この手の研究は完全に軍事機密レベルとなっているわけで、当初は思うように資料や資材が集まらずマルガリータも苦勞していた。

だが、それも王都に本社を置く企業から直接資料を取り寄せる話がつき、彼女の作業は格段に楽になったらしい。

貴族社会からは微妙な扱いでも、そこは稀代の発明家として国中に名が通ったナツメツグ博士の威光である。

そうとなったら、もう何も怖いものは無いな。

今、マルガリータとナツメツグ博士が本気になれば、それこそ王都の最新機密の軍事研究をぶつちぎって、文明レベルをオーバーシュートした兵器を揃えられるかもしれない。

「まあ、そんな感じで、あたしの方は気負わずにポチポチやらせてもらってるよ。どうせ、ナツメツグ先生もこんな技術をすぐに実用化して売り出すつもりはないんだから

さ」

「……………そうだな」

俺はマルガリータの言葉に頷いたが、心の中ではそこまで樂觀視する気分にはなれなかった。

人間の欲は果てしなく、それに付随する力への執着と実現の幅は、時に文明レベルを大きく飛び超える代物を生み出す。

あの『グランドファイナーレ』だって、元はと言えばダンディリオンの復讐に端を發し、彼個人の思惑と扇動によって生み出された代物だ。

いくら彼がナツメツグ博士の愛弟子として音楽だけでなく幅広い学問を伝授されてきたとはいえ、世界への恨みを原動力に博士の想像力を一時でも飛び越える技術に到達してしまったことは、何と言うか人間の恐ろしさそのものを認識するのに十分な出来事だった。

あと数年か、一年か、数か月か……そう遠くないうちに、マルガリータの手がける最新の研究の断片も、その対抗馬となる技術や製品も、間違いなく世の中に解き放たれていく。

それがこの激動の時代にどのような恩恵を、そしてどのような混乱を齎すのかはわからない。

ひよっとしたら、先日博士が気にかけていた発電所の労働環境問題に勝るトラブルに発展するかもしれない。

だが……その時はその時か。

俺はいつ何時でも家族を守り、友人たちを助けるために全力を尽くす。

この世界に転移してからずっとそうやって生きてきたのだから……。

「? どうしたの?」

「……いや、何でもない」

俺の苦笑交じりの返答に、マルガリータはやや怪訝な表情で首をかしげたが、再び甘いココアに意識を戻すとチョコレートの芳醇な香りと甘みに相好を崩した。

「あ、そうそう。別に困ってるって程の話じゃないんだけど……やっぱり、『人』の方は、ピジョン牧場やミームー村の方が心地いいね。この辺りの人間はどうもね……」

「ほう」

生粋の技術者にしては人当たりも良く、気さくで飾らないマルガリータは、ピジョン牧場のコミュニティでも早くに受け入れられた。

当然、ミームー村に居た頃も、彼女は多くの人から慕われ頼りにされてきた。

その手のトラブルでマルガリータが困ったという話は、あまり聞かないが……だとす

れば猶更、余程のことだろう。

さすがに、この王都ナツメック邸でマルガリータを軽んじる者は居ないが、ここは傲慢と特権意識が服を着て歩く階級社会。

ナツメック博士の実績すら一部の人々から軽んじられる街だ。

ここに来てまだ数日だが、俺の見ていないところで、彼女も相当嫌な思いをしたのかもしれない。

そんなことを考えていると、俺のやや剣呑な雰囲気を感じ取ったのか、マルガリータは若干慌てた様子で首を横に振った。

「いや、そんな深刻な事じゃないよ。この家も研究室も快適だし、メイドの皆もよくしてくれるから。ただ……少し外を出歩くと、変な奴に声を掛けられたことはあつたけどね？」

「ちよい待ち！ そりや、聞き捨てならんぞ」

初耳だ。彼女がそんなトラブルに巻き込まれていたなんて……。

俺はやや焦り気味に身を乗り出すが、マルガリータは事も無げに話し出した。

「二昨日の午後かな。あんたが博士と出かけている時間に、その工場まで頼んでいた資料を取りに行ったんだよ。そのとき、高そうな服を着た男に絡まれてね。『俺様の誘いを断るのか!? 使用人風情が生意気だぞ!』ってね」

「おいおい……」

恐らく、マルガリータは普段着のフリースジャンパーと作業ズボンで、擦り切れたハンチング帽でも被ってプラプラ出掛けたのだろう。

まあ、そうになると、彼女が整備場の下働きかその辺の工員に見えたとしても仕方ないが……それでも、マルガリータの美貌はどうしても男の目を引く。

きつと、その御曹司野郎も、マルガリータを都合のいいヤリ捨て相手に選ばうとしたのだろう。

……いかん、そう思うと無性に腹が立つてきた。

「ま、先生とあんたの名前を出したら秒で解決したけどね。何でも、その前日にあんたと顔を合わせてたんだって。確か——男爵とか何とか」

「あまり記憶に無いな。だが……覚えておこう」
記憶に残っていないということは、それほどの大商いではなかった相手ということだ。

なら、一人くらい消しても……。

「……あんた、悪い顔をしてるよ」

「おっと、悪いね。ちよいとよくない考えに囚われていた」

まあ、肝心の用件である博士の謁見がまだ終わっていないので、それまでは可能な限

りトラブルは避けておくか。

精々、そのナントカ男爵の背中を間違つて撃たないよう注意しておこう。

「あ、そうだ。最近、先生に言われて、こつちで新しく発売されたビークル装備についても傾向とか色々と分析してたんだけど……聞きたい？」

「ああ、一応聞かせてくれ。君や博士には及ばなくても、俺も技術者・開発者の端くれだ」「いいよ。まずは、長射程ミサイルや多弾頭兵器の方面が盛んになっている点だね。多分、飛行船とか飛行ビークルに対抗することを意識した武器の開発が、あちこちで促進されているんだと思う。あと、警察ビークルの電気ロッド以外にも、電気を利用したビークル武装の開発計画が出ているらしくてね。何でも、どっかの王族の主導で——」

14話 王都観光 前編

ある日の早朝。

王都ナツメッグ邸の朝食の席で、ナツメッグ博士から嬉しい知らせがあった。

「今日は休みじゃ。お前さんたちも自由にしておいでよ」

アホみたいに長い広間のテーブルの対面から、ナツメッグ博士はトーストを齧りつつ上機嫌で言った。

言葉少なく博士から告げられた一言に、俺とマルガリータも思わず口元が緩む。

ここどころ、俺も彼女もずっと忙しかったからな。

国王との謁見の手続き以外にもナツメッグ博士に持ち込まれる用事は多く、最近はかなり多忙を極めていた。

ビークル関連企業との商談に会食、貴族との面会に大学やイベントでの講演……。

当然、ナツメッグ博士の護衛兼運転手兼秘書である俺は、常に博士と行動を共にし書類作成からカバン持ちまで身の回りの雑務をこなすこととなる。

もちろん、個人的に電化製品の販路の開拓やビジネスの話も並行して進めていく必要

があるので、はつきり言って仕事漬けの日々だった。

一方、マルガリータも博士からこの地域でしか流通していないビークルパーツや新技術の解析・レポート作成の仕事を任されており、毎日忙しくガレージや博士の書齋で働いていた。

特に期限やノルマがあるわけではないが、技術者としてナツメツグ博士が満足するレベルの仕事をマルガリータ本人も目指しているため、彼女もなかなか忙しそうにしていたな。

そうして漸く、俺たちは夫婦共々忙殺されていたわけだが……いよいよ国王との謁見のため王城へ向かう日取りも決まり、俺たちも粗方の雑用が片付いたところで、ようやく休みを取れることになったわけだ。

「謁見は明後日じゃ。それまでお前さんたちもしっかり羽を伸ばしてくるといい」

「そうですね。じゃあ、お言葉に甘えて」

「ありがとうございます、先生」

そうして、俺とマルガリータは待望の王都観光に乗り出した。

「……それで何で銃砲店なのさ?」

「いやあ、何と言いますか……」

最初の目的地に到着した俺は、早々にジト目のマルガリータから詰問を受けていた。行き先のリストアップは万能執事ことミカエリスにお任せで、王都デートの日程を組んでもらった。

王都に到着してからそれなりの日数が経過しているとはいえ、中心街のビジネスエリアと工業地区以外、俺とマルガリータは全く以つてこの街の地理に明るくないからな。移動も普段なら自分たちでピークルを運転するところだが、たまの休日ということ、今日は人員運搬パーツを装備したピークルを一台雇っている。

ハイヤーを貸し切つてのデートとは、まさに御大尽だが……何故か、ミカエリスのリストを渡した運転手が俺たちを最初に連れてきたのは、商店街に店を構えるガンシヨツプだった。

俺もマルガリータも博士の助手の技術者ということで、ミカエリスなりに気を使った結果が、この実用一辺倒なチョイスなのだろうか……？

もちろん、俺はトロット楽団でサククス奏者を務めたミュージシャンであり、完全に理系に振り切つた二人に比べれば文系の分野にも明るいのだが……いや、あの執事のセンスはそれ以前の問題かもしれない。

「つたく。もうちよつと普通のデートスポットは思いつかなかつたのかよ……」

「当人は至つて真面目なんだろうね。あの人、冗談が通じるタイプじゃなさそうだし」
仕事は淡々とこなすが、ユーモアや感覚的な部分が問われると途端にポンコツになるタイプか。

有能だが思いもよらぬところに落とし穴がある人間は多い。

まあ、深刻な実害がないあたり、ミカエリスは大分マシな方だろう。

「……とりあえず、入ろうよ。いつまでもここに居ても埒が明かないし」

「ああ、そうだな」

何はともあれ、マルガリータがそこまで怒っていないようでは何よりだ。

物騒な看板と陳列棚に不釣り合いな洒落た扉を開き、俺たちはガンショップへ入店した。

銃砲店の品揃えは……まあ、普通だ。

ほとんどがダブルバレルのショットガン、鳥撃ち用の二連散弾銃で、拳銃はありきたりなりボルバーがほとんど。

ライフルの類も無くはないが、それもほとんどが競技用で、軍用や本格的な狩猟用のものは全くおいていない。

何と言うか……ラインナップに乏しいな。

しかも、どの銃も性能の割に高すぎる！

極めつけは、ほとんどのショットガンが、銃身やストック表面に余計な彫刻や派手な装飾が施されている点だ。

どうやらこの店は、実用的な武器を売る店というより、貴族のスポーツ用品店のようだな。

ミカエリス曰く、王都で一番のガンショップとのことだが、これはアテが外れたと言わざるを得ない。

マルガリータも特に興味を引く機構の銃が無いのがわかって、明らかに落胆の表情を見せている。

「お気に召しませんか？」

「ん？ ああ、どうも。すいませんね……」

気が付くと、ガンショップの店長？らしきスーツの男性が声を掛けてきた。

俺たちの食指が動いていないのを見抜かれていたようだ。

わざわざ店にケチをつけて揉めるつもりも無いのでつい謝ってしまうが、店長は愛想よく口を開いた。

「確かに、手前どもの商品は高貴な方向けの品物が多いですからね。お客様のように高性能な実用品をお求めの方からすると、ご不満もありますよう」

「いやあ……」

既にこちらの事情はお見通しのようだが、何となく言葉を濁してしまふ。

そんな俺に構わず、店長は言葉を続けた。

「恐縮ですが、私もガンズミスの端くれでして……実はこういつた商品もご用意しているのです。この街ではあまり需要が御座いませませんが、稀に高貴な方の護衛を務める方からのご要望で提供することも……」

「へえ、これは凄いいねー」

俺よりも早く、マルガリータが食いついた。

俺を押し退けるようにして体を乗り出すマルガリータの後ろから見てみると、店主が出してきた箱の中身はモーゼルC96によく似た拳銃だった。

店主曰く、フルオート機構を備えているらしいので正確にはモーゼルM712……いや、マガジンがノーマルの10連発であることを考えるとアストラM901あたりに近いのか？

この銃自体、軍ではかなり最新の部類に入る自動拳銃なので、そこへさらに尖ったカスタムを仕込むなど、なかなかの変態っぷりだ。

「ふーん、このサイズの拳銃に連射機構が付いてるなんて画期的じゃないか。それも、セミオート元々半自動の銃を切り替え式に改造して、こんなスムーズなメカニズムなんて……あん

た、相当な職人だね」

「恐れ入ります」

「ただ、これだけの発射速度を出すなら、ちよいと装弾数が足りないんじゃないかい？

ピークルの火器みたいに増設弾倉から引つ張るのは無理だろうけど、せめてこの銃把の前の弾倉を延長してやれば……」

「おお、何と！　そこに気付かれるとは、さすがですなお客様。ただ、この形状でロングマガジンにすると、ホルスターへの収納に難があります……まあ、元々コンパクトとは言い難い銃ではありますが、やはり火力とコンシールド性能はトレードオフになってしまいますな」

生粋の技術者であるマルガリータは、早速店主にあれこれと質問している。

磨き上げた技術を理解してくれるマルガリータの言葉に、店主は無表情を装うもどこか嬉しそうだ。

うん、それは構わないが……あまりうちの嫁さんにデレデレしなくてももらえるかな？　何はともあれ、俺も銃の性能に関して是一家言ある身だが、さすがに細かい内部機構の話になってしまうとちよつと付いていけない。

それに、やはり俺としては、銃に関しては武器としての実用性を先に意識してしまうため、いかに興味深い機構やロマンがあろうと、このモデルにはそこまで食指が動か

ない。

確かに、10連発でフルオート掃射も可能ということは、火力面では俺のワルサーP38に勝るが……さすがに普段から持ち歩くコンシールドウエポンとしてはデカすぎるからな。

火力、精度、信頼性を兼ね備え、取り回しが良く且つシオルダーホルスターで常時携帯するのに無理のないサイズ感という点では、この店にもマルガリータの作ってくれたワルサー以上の物は無いわけだ。

しかし……。

「うん、買うか」

「……よろしいので？」

俺の言葉に、店主は僅かに眉を上げた。

彼も職人ではあるが王都に店を構える商売人であり、使用者である俺のニーズにそこまでマッチしていない以上、このまま売り込むことが難しいことには気づいていたようだ。

まあ、そこは間違いないが、この銃には別の使い道もある。

「俺の普段使いにするかは未定だが……マルガリータの研究用には悪くないだろう。こ

「いつは君に預けるから、バラしてみるなり何かの参考にするなり、上手いことやつてくれ」

俺の言葉に、マルガリータは軽く微笑みつつ頷いた。

彼女なら、この銃をヒントに、さらに強力な携行火器やビークルの強化パーツを開発してくれるだろう。

そんな期待も込めて、この件はマルガリータに丸投げだ。

因みに……モーゼルの値段は驚くほど安かった。

本来なら、軍用のフルオート火器は民間用の猟銃などと比べて文字通り桁の違う価格帯のはずだが、やはりニーズの問題か。

まあ、傍から見れば店主の趣味全開のネタウエポン枠だからな。

「では、こちらでお包みいたします。……そうそう、王都内での拳銃の携帯には許可証が必要となりますので、ご注意ください」

「え？ そうなんすか？」

よくよく考えれば、俺はこの街での銃器の携帯についてよく知らなかった。

マズいな。つい、いつもの癖で、愛用のワルサーP38をシヨルダーホルスターにぶち込んだまま、その辺をプラプラ歩いてたが……。

そんなことを考えていると、店主は咳払いして言葉を続けた。

「ナツメッグ博士の関係者の方であれば、然程の問題とはならないでしょう。ご自身でお持ち込みになった拳銃については、特段見咎められることも無いかと。もちろん、王城の中などは別ですが……」

なるほど、王都でも多少の融通が利くくらいには、ナツメッグ博士の威光は健在か。しかし、この店主……俺たちが博士の身内だということに気付いていたんだな。

一応、お忍び？ 的な感じでプライベートのお出かけなのだが……。

銃器マニアが高じてガンショップを開いたと言わんばかりのオタクっぷりなのに、この店主もなかなか侮れない。

俺が一人で感心していると、店主は僅かに表情を引き締め言葉が続けた。

「ただ、当店で購入された拳銃を、堂々と振り回すのはご遠慮ください。どちらに正義があろうとも、問題を口実に高貴な方々に目をつけられてしまいますと、私どもの商売にも支障が出かねない次第です……」

なるほど、そこは腐つても貴族社会か……。

それにしても、この店長も随分とドライな物言いをするものだ。

こんな一等地で商いをしている成功者の割に、彼はさほど階級意識に染まっていない……というか、どこか醒めた目線でお高く止まった連中を見ている。

まあ、彼は貴族ではなく商売人なので、それも不思議なことではないが……意外な一

面
だ
っ
た
な。

15話 王都観光 中編

ガンシヨップを後にした俺とマルガリータは、再び人員運搬ビークルに乗って王都のメインストリートを移動した。

今度の行き先は、王都でも指折りの有名なブティックである。

前にここの春の新品——ピンクベージュのスプリングコート——が欲しいと、マルガリータが話していたアレだ。

その話題自体は、ダンディリオンの件で落ち込む博士と俺に、彼女が気を遣って出してくれたような気もするが……何はともあれ、ようやくデートらしい煌びやかなスポットだ。

ショーウィンドウには高そうなドレスを着せたマネキンが並び、建物自体も大都会の大店らしく凝ったデザインだ。

さすがは王都の表通りの服飾店。

店構えからして一味違う。

「さ、入るか♪」

「はいはい。今さら嫌とは言わないよ……」

ルンルン気分の俺とは対照的に、言い出しつぺのマルガリータはどこか諦めにも似た表情だ。

やはり彼女はこういう派手な気取った場所が苦手のように、何とも居心地悪そうに自分の服装などを気にしていたが……うん、まあ変ではないよ。

因みに、今日のマルガリータの服装は、普段と同じフリース生地ジャンパーと、下はお体裁とばかりに外出用の地味なスカートを穿いている。

一応、彼女のスーツケースには清楚系のワンピースと明るめの色のトレンチコートも入れておいたんだけどな……。

まあ、その分もここでオシャレな服を買えばいいさ。

「いらつしやいませ」

「お待ちしております。グレイ様にマルガリータ様ですね」

期待と共に店内へ足を踏み入れると、いかにもブランド物のスーツを着たコンシェルジュと仕立てのいいスーツスカートの身を包んだ女性店員が俺たちを出迎えた。

どうやら、ミカエリスが俺たちのデート行程に際して、既に来店の予約を入れていたようだ。

一瞬、彼の用意周到さに感心するが……後で聞いたところによると、この手の店は予約なしではまともに入店できないらしい。

何ともお高くとまっていることだが、まあ都会の高級ブティックならこんなものか。寧ろ、一見さんでも何でもお構いなしに対応するネフロの『ファッション・ロンド』が珍しいのかもしれない。

「お話は伺っております。まずは、当店の春の新商品のお求めと、奥様のイブニングドレスをお仕立てですね。採寸いたしますので、どうぞこちらへ」

「ええ、お願いします。……さ、マルガリータ。行つておいで」
「わ、わかっているよ」

俺に促されたマルガリータは、どこかぎこちない様子で女性店員の案内に従い、店の奥へ向かった。

ネフロの『ファッション・ロンド』でウエディングドレスを仕立てたときに、例の女店主から好き放題に着せ替え人形にされた影響で、彼女は未だにこういう店が少し苦手みたいだ。

しかし、俺からすれば、美しい妻が着飾った姿を見たいという人並みの欲望もあるわけです……哀れな犠牲となったマルガリータには、しばらく辛抱してもらおう。

その間、俺は彼女のドレスに合うアクセサリーや香水の類も適当に注文しておく。

当然、俺にはエキナセア——コニー家のお隣のおばさん——ほどの審美眼は無いで、この手の店でこんな買い方をすれば、会計の額はとんでもないことになるが……まあ、金はあるからな。

今さらコスパを気にしても仕方ないし、たまには散財も悪くないだろう。

あとは……俺の方も採寸だ。

「ダイナージャケットでございませぬ。まずはこちらから生地をお選びください」

素材はフィンテックスっぽい艶と重厚感のある生地。

フォーマルなデザインながら、二つボタンで動きを阻害しないシルエツト、ややゆとりのあるサイズ感で、夜服を仕立ててもらおうことにした。

一応、俺もセントジョーンズ卿はじめ金持ち連中とはそれなりに付き合ひのある身で、ナツメツグ博士の名代として格式ばった場所に出ることもあるので、ホワイタイ燕尾服とブラックタイタキシードくらいは用意しているが……あれもほとんど使う機会がないからな。

いざ着てみると間に合わせ感が凄い。

せっかくなので、俺も彼女と同じく王都の店で正装を調達することにしたのだ。

金額は……この際、考えないことにした。

「では、こちらで作製に入りますして、完成次第ご自宅の方に送らせていただきます。御品物の発送の時期は、奥様のドレスとご一緒でよろしいでしょうか？」

「……あつー！」

よくよく考えれば、ドレスや高級スーツの仕立てには、結構な手間と時間が掛かる。特にマルガリータのドレスは、逆立ちしても今日明日で完成するものではないだろう。

できれば、今夜のデイナーに着て行きたかったけどな……。

まあ実際、彼女のウエディングドレスだつて出来上がるまでに結構な期間を要したわけだし、そこはフアンタジーなスチームパンク世界でもどうしようもないか。

「仕方ないな……。ええ、それで構いません。ただ、我々もそんなに長く王都に居るわけではないので……船便になりますかね？」

「左様でございますね。お住いのネフロ周辺地区ですと……輸送船と運送会社のピークルを経由してのお届けとなりますな」

若干、俺のテンションは下がったが、今さら文句を言っても始まらないので、俺は注文書にサインをして料金を支払った。

もちろん、即金で一回払いだ。

分割だの後払いにしても、手数料が増えるだけだからな。

もしかしたら、この街の上流階級の間では、あとで使用人に届けさせるとか何とか妙な慣習があるのかもしれないが……さすがにそこまでは知ったことじゃない。

「あの……グレイト？」

「ん？ マルガリータか、どうし……っ！」

ふと、店の奥から掛けられた声に振り向くと、俺は思わず息を呑んだ。

恥ずかし気に小さくなりながら姿を現したマルガリータは、ファーつきの白のコートに、ブラウンのバケットハットをかぶっている。

コートのデザイン自体はオーソドックスで上品だが、銀と黒のコントラストが目立つファーがややワイルドな印象を与えており、洗練された肩や腕周りのフォルムは一段上の上質さを醸し出している。

服のカラーに合わせて選ばれた帽子も、色合いは地味なダークブラウンだが決して野暮ったさは無く、ブリムとの境目にあしらった黒のリボンは絶妙なサイズ感で、シツクな雰囲気壊さず華やかさを演出している。

頬を朱く染めて顔を背けるマルガリータの目が帽子の下から不安げに覗き、普段の強気な態度とのギャップに俺は何とも言えぬ庇護欲を刺激された。

「な、なんか言つてよ」

「いやあ、もう何と言うか……」

俺は若干上の空でマルガリータに答えた。

俺の頭にある21世紀基準のファッションセンスからすると、この装いは20世紀半ば以前の白黒写真でよく見た若干古めかしいデザインだが……これはこれで普通にありだな。

本来なら、女性の衣服のほとんどがエプロンドレスの延長みたいな型であるはずのこの時代。

バンパイロット世界では、各キャラクターデザインに依拠してかなり先進的な衣装も登場するが……この女性店員が仕立てたと思わしきコーディネートもなかなかモダンで、マルガリータの魅力をいい感じに引き出している。

美しい妻の姿に感激していると、マルガリータを俺の前へ促した女性店員は接客モードの愛想笑いを顔に貼り付けながらも、どこか自信あがりげな表情で口を開いた。

「いかがでしょうか？ こちらのコーデも、ただいま非常に人気の商品となっております……オーダー品ではございませんが、その分値段もリーズナブルになっております。それに、こちらでしたらサイズ直しの方もすぐに対応できますので……奥様もよろしければ、今日はこのまま着ていかれてはどうでしょうか？ 僭越ながら、今日はお二人にとって大切な日でございます。恐縮ですが、思い出となる日に相応しい装いの準備をお手伝いできればと……」

「買いでー！」

「即決っ!？」

マルガリータ本人は素つ頓狂な声を上げて……さすがにこれだけ完璧なコーディネートを見せられては、買わないという選択肢はない。

俺は仰々しい店員の言葉が終わるより先に、購入する旨を伝えた。

例によつて、この服も店員の言う『リーズナブル』とは、俺たちの感覚とはまあまあかけ離れた数値だったが……まあ、マルガリータがより美しくなるなら、決して悪くない買い物だ。

ブランド物の服の一つや二つ、買えないわけではないからな。

しかし、俺が料金を支払う横で会計の明細を見たマルガリータは、一気に夢から醒めたように顔を蒼白にした。

うん、確かに……改めて合計で見ると、個人の趣味や贅沢で使う金額にしては、些か度が過ぎている。

同じ額で中古のビークルが何台買えることやら……。

俺も自分の服なら実用性も加味して冷静に選べるが、どうにもマルガリータのこととになるといついつい財布の紐が緩んでしまう。

気を付けよう。

16話 王都観光 後編

ブティックを出た後、俺たちは続けていくつかのスポットを巡った。

輸入雑貨店で小物を購入し、オシャレな工芸品ショップを回って買い物を楽しんだ後は、カフェで紅茶とケーキを味わう。

さすがに王都の高級スイーツだけあり、見た目も味も一級品だ。

俺は無難に季節のベリーのフルーツタルトにしたが、マルガリータはかなり迷った末にオペラ——生地がナッツシユとコーヒ―・バタークリームを重ね、チョコレートで覆ったやつ——を選んだ。

もちろん、俺のタルトも少し切って分けてあげたが、マルガリータの視線は未練がまし気に表の看板に書かれたイチゴのミルフィーユとリングゴのシブーストを行き来している。

別に今日明日で王都を去るわけでもなし、また食べに来るか買って帰ればいいのにな……。

その後向かった王立博物館は、ネフロ博物館の数倍の規模で、展示品もなかなかに興

味深いものが多かった。

さすがは予算と規模が違うだけあり、旧生物の化石や古代分の発掘品、地球ではまずお目にかかれないファンタジーなオーパーツが選り取り見取りだ。

とはいえ、やはりこういう分野に関わる学者連中はピンキリのように、なかには何の根拠もなく完全に適当なことをほざいているだけの解説ボードもある。

特に、あの森羅万象を司る魔力の結晶とやらは、一体どこまで本気なのやら……。

そうして珍品を眺めながら最新の学問にフムフムした後は、中心街から少し外れた地区にある闘技場に寄り、中堅バトラーの試合を観戦した。

残念ながら、今日はチャンピオンが不在のようで、取り立てて迫力のあるバトルは見れなかったが……ネフロヤハッピーガーランド近郊では見かけない珍しいパーツを使うビークル乗りも居るので、いくつかの試合はなかなか新鮮だった。

因みに、闘技場の規模や内装は、ガーランド闘技場と似たり寄ったりだな。

ちよつと小耳に挟んだ情報によると、ビークルバトルのような野蛮な娯楽は、本物の王侯貴族は嗜まないらしいが……向こうの観客席の端に居る、帽子を目深に被ったお嬢さんは、所作からして明らかに貴族階級の子女だろう。

まあ、ドン・スミスの孫娘も一時期ガラの悪いところに入入りしていたし……そういった事情はどこも一緒か。

そして、日もとつぷりと暮れたところで、俺たちは夕食を摂ることにした。

有能執事ミカエリスが手配したのは、王都での指折りの夜景が見える高級レストランだ。

貴族街からほど近い場所の小高い丘の上、ちょうど下級貴族街から中心街を見下ろせる位置にあり、窓際のテーブルからは王都の景色が一望できる。

白を基調とした店内はもちろん清掃が行き届いており、ステージでは楽団が生演奏を披露している。

交響楽団らしくクラシックだが、無駄に長い歌曲や観劇より、俺もマルガリータもこういう方が好みだ。

「さて、料理の方はこの季節のおすすめコースをミカエリスが予約してくれたみたいだが……飲み物を選ばないとな」

「あんたに任せるよ」

テーブルに腰を下ろした俺は、燕尾服に黒の蝶ネクタイをしたウェイターを手招きし、メニューを受け取った。

マルガリータはこの手の店に來た経験がそもそも少ないので、チョイスを完全に俺にぶん投じている。

とはいえ、俺もそこまでワインや酒類に詳しいわけじゃない。

最近では、ドン・スミスとの交流などにより、少しは舶来ワインの知識も増えてきたが……それでも、俺にとってはまだまだ異世界の話だ。

ここは無難に行くでしょう。

「食前酒は軽くて口当たりのいい物がいいな……このシャンパンベースのカクテルを二人分頼む。あと、ワインは赤と白を一本ずつ、料理に合わせて選んでもらいたい。ソムリエを呼んでくれるかな」

マルガリータは若干呆気にとられた表情を浮かべていたが、こういうことは専門家に聞けばいいのだ。

客の満足度がチップに反映されるとなれば、ウェイターも気合いを入れてアペリティフを用意するし、ソムリエはワインのプロフェッショナルで且つ自分の店の在庫を熟知している。

やがて、アミューズの皿とともに二人分の食前酒をウェイターが運んできた。

軽くグラスを掲げて乾杯した俺たちは、一口サイズのカナッペ——具は魚卵の塩漬け、スパイスの効いたリエット、クリームチーズとドライのイチジクなど——を摘まみながら、微炭酸の泡が立ち上る冷たいカクテルで喉を潤す。

珍味の盛り合わせ的な要素の強い一皿だが、付け合わせのラディ・オ・ブル——葉

付きの生のラディッシュにバターを挟んだもの——は前世のフランスなら伝統的な食前のおつまみだ。

続けて冷たい前菜の皿が運ばれ、自家製のピクルスとハーブサラダにラタトゥイユの小鉢、十種の野菜とキノコのテリーヌ、砂肝とハツのコンフィ、贅沢にフォアグラを埋め込んだコンソメジュレ入りのパテ・アンクルートに舌鼓を打つ。

濃厚な海老のビスクを飲み干した後は、いよいよメインディッシュだ。

鱒に似た白身魚のグリルは、皮はパリツと、身はふつくらと、見事に焼き上げられていた。

ほろりと崩れる淡白な身質に、シャンピニオン・ソースの芳醇な香りと濃厚な味わいが絶妙にマッチしている。

口直しのシャーベットの後には、いよいよ肉のメインだが……今回は季節を意識したジビエということで小鳩のローストだ。

低温でじっくりと焼き上げた柔らかい胸肉に、コニヤックのソースのどっしりとした甘いと香りが素晴らしい一皿だ。

手羽や腿などの部位は皮の脂と肉の繊維の質感を意識して、燻製グリルでウエルダンに焼き上げているところが憎いじゃないか。

そして、適度なところでワインを切り上げた俺たちは、ナプキンを片付けデザートに

移った。

「ねえ、グレイ」

「ん？」

デザートの途中で、マルガリータは不意に口を開いた。

彼女の手元を見ると、大きめの皿に芸術的に盛られた数種のプチガトーに柑橘のソースが添えられた滑らかなパンナコッタが、まだほとんど手つかずで残っている。

甘いものに目が無い彼女が、この段階で皿から意識を逸らすとは珍しい。

「今日は……ありがとうね。本当に、凄く楽しかった。あんたと結婚したおかげで、あたしはこんなに豊かで楽しい世界を経験させてもらえた……」

「……急にどうしたんだ？」

意味深な言い方をするマルガリータに、俺は思わず疑問の声を上げた。

彼女がスイーツより意識を優先的に向ける事柄となると、相当深刻な内容の気がする。

彼女の言動から一瞬で考えを巡らせた俺は、そのまま続けて彼女に質問を投げかけた。

「もしかして、君もこの工業地帯や発電所のことを気に病んでいるのか？」

「うくん、そういうわけじゃないけど……。あたしにはナツメグ先生みたいに、恵まれない子どもたちをどうにかするとか、そんな力は無いし……。ただ、あたしも……。どっちかというと、向こう側だったから」

「いやいや、それは……」

思わず否定しそうになった俺だが、彼女の出身地であるミームー村のことを思い出し口を噤む。

「だって、そうでしょ？ あんたがミームー村に来て色々やるまで、あそこは文明から隔絶された僻地だったんだよ。それこそ、住民のほとんどがトロツトビークルを知らないくらいにさ。あんたと出会わなきゃ、あたしはずっと小船を弄って、漁の成果に一喜一憂して……。そのまま年を取って死ぬだけだったね。もし代わり映えのしない毎日に嫌気がさして街に出てたとしても、きつとロクなことにならなかつたよ」

マルガリータの整備士・技術者としての実力を知っている俺としては、その仮定を肯定する気にはなれないが、俺の反論を遮るように彼女は言葉を続けた。

「あたしだって馬鹿じゃないよ。あんたと先生の力が無かつたら、最新の技術やパーツに触れる機会すら無かつたことはわかつてる。それこそ『ジャガーノート』みたいなビークルを整備したり、新しいパーツを開発したりするのなんて、夢のまた夢だつたらうね」

「……確かに、君がその辺の整備場とかに就職していたら、その才能が見出されることもなく埋もれてしまっていたかも知ない」

「そうだね。一生うだつの上がない感じで、技術屋としても芽が出ず、腐っていたらうね。それどころか、もつと酷い目に遭っていたかも知ない……」

何だかんだ言つて、整備工もビークル業界も男社会だ。

自分たちよりセンスや能力に勝る女性をすんなりと認められるかといえ、それは決して簡単なことではない。

そもそも、何の後ろ盾も無く頼れる相手も居ない田舎から出てきたばかりの女性が、街で安定した仕事と収入を得るのは難しい。

地方出身の若い女性が悲惨な末路を辿った事例に関しては、俺もこの世界に移してから数えきれないほど見聞きしている。

いつの時代も、弱者を食い物にするクズというのはそこら中に居るものだ。

例外はビークルバトラーだが、それも高ランクバトラーとして成功できるサフランのような例は限られている。

確かに、マルガリータもビークルの仕組みに精通しているだけあり、「クラフトマンシップ」で盗賊から身を守る程度の技量はあるが……それもあくまでも最低限。

彼女のバトラーとしての実力はCとBランク程度。

ちよつとした選択とタイミングが違えば、マルガリータは遥かに貧しく辛い人生を歩んでいた可能性が高かつたわけだ。

「だから、あたしは本当に運が良かった。あたしとあの発電所の人たちの違いは、それだけなんだよ」

「……………」

返答に困る俺に、マルガリータはややおどけたように悪戯っぽい笑顔で再び口を開いた。

「そんなわけで、これでもあんたには感謝してるんだよ。あたしのこと、選んでくれてありがとう、つて」

「いやあ、それはこちらこそ……君みたいな素敵な女性と結婚できて、俺こそ世界一の幸せ者だよ」

俺はマルガリータのストレートな言葉に些か気恥ずかしさを感じながら頭を掻くが、自分の気持ちははつきりと言葉にして彼女に伝えた。

夫婦生活も長いと、思いの丈を伝え合うタイミングも少なくなってくるので、こういう機会は大事にしていきたい。

それに、自分から恥ずかしいセリフを言っておいて俺の返答に赤面するマルガリータの顔が見れるのも、普段は得難い貴重な光景だ。

「……時々、思うんだ。こんな幸せがいつまで続くんだろうって」

意味深なマルガリータの呟きだったが、どこか遠い目で夜景を眺める彼女の様子に、俺は野暮な質問を投げかけるのを思い留まった。

いつしか、ステージで演奏する楽団の演目は、スローでムーディな曲調のナンバーへと変化していた。

17話 謁見当日

ナツメグ博士が国王と謁見する当日。

俺は珍しく正装した博士を「ジャガーノート」の助手席に乗せて、王城へと向かっていた。

「こういうのって、普通向こうが迎えを寄越すもんだと思っていましたけど……」

「ふむ、まあ相手によつてはそういうこともあるじやろうが……しかし、今さらゴテゴテの馬車でこのメインストリートを移動したいと思うか？」

「ああ、そりゃ勘弁つすわ」

王都の表通りがすっかり舗装されているとはいへ、古風な石畳式の道路を乗り心地最悪の馬車などで走つたら、間違いなくケツが死ぬ。

ハイブリッド車と高性能ビークルに慣れた現代人の尻のヤワさを見誤つてはいけな
い。

「ところで……今日の俺は付き添いつて話ですけど、それはどこまでです？ さすがに謁見には同席できませんよね？」

「無論じゃ。陛下からの召喚に護衛を同席させるなど、最悪謀反を疑われかねんからの。恐らく、手前の部屋で待たせることになるじやろう」

「なるほど、了解です。……何か、俺が居る意味無さそうっすね。別室でしかもビークル無しじゃ、いざという時どうしようもないですよ」

「まあ、否定できんの。そもそも、お前さんの銃も王宮エリアの手前で預かる流れになるはずじゃ。ただ、わしもそれなりの立場がある身というだけあって、連れて歩く人間が一人も居ないというのも無作法と見なされるわけな。くだらぬ慣習じゃが、しばしの辛抱じゃ。黙って付き合え」

要は案山子か。

まあ、王城には警備兵やら軍隊やらが大量に詰めているので、何かトラブルがあれば彼らが片付けるだろう。

逆に、警備側の人間から奇襲を受けたら、こちらはどうしようもない。

そういう意味では、今日のフィールドで戦闘が起こつたら、どちらにせよ俺には何もできないわけだ。

「とにかく今日は、さつさと謁見を済ませて帰るに限る。周りの阿呆どもが余計なことを言い出す前に、陛下が妙なことに関心を持つ前にの。じゃから、グレイ。くれぐれも騒ぎを起こすでないぞ」

「ええ、そりやあもちろん。俺だつて、敵地のど真ん中で丸腰で戦おうとは思いませんよ」

「……既に敵地と言つておる時点で、あまりいい予感はせんがの」

王城の警備兵に従いピークルを駐機した俺たちは、門番に身元を確認された後に正面玄関から堂々と入場し、派手なタペストリーに彩られた総合受付のような場所で用件を告げた。

事務的な手続きに関しては既に話を通つてゐるらしく、担当の文官に人数とアポイントを確認されるだけで、その後はすぐさま王宮エリアへ移動となつた。

稀代の天才科学者ナツメツグ博士の威光……というには、文官のどこか人を見下した態度や周囲の物見高い視線が不快だが、さすがにこの段になつて面倒な足止めは無いようだ。

他の貴族からの珍獣を見るような目に晒されながら、俺たちは王宮侍女の案内で煌びやかなホールを横切り、王城の奥へ奥へと進んでいく。

……階段の踊り場から迷路のような通路にまで、高そうな美術品や絵画でいっぱいだ。

俺にそこまでの美術品の審美眼は無いが、雰囲気からして明らかにマトモな値段じゃ

ないことはわかる。

この調度品を揃えるだけでも、一体どれだけの国家予算が投入されたのだろうか？
仮にこれがすべて王家の所有物だとして、それを揃えられる彼らの資産はいかほどなのか？

何より、この国の経済規模に対して、王家の裁量で使える金額とは……？

疑問は尽きないな。

そんなことを考えている内に、俺たちは王宮エリアの入口に到着した。

「こちらで武器をお預けください」

銃器を持ち込めないことは既に博士から聞いていたので、俺は大人しくショルダーホルスターのワルサーP38を警備カウンスターの騎士に渡した。

一応、マガジンとチャンバーの弾は抜いてから銃本体を渡したが……あまり意味は無いかもな。

現代なら、冗談としか思われなような派手な赤い軍服に身を包んだ近衛兵たちは、皆それぞれ着剣したライフルを持ち、腰のホルスターにはリボルバーを提げている。

明らかに対人戦闘訓練を受けた彼らは、立ち振る舞いにも隙が無く、常にツーマンセルで周囲を警戒し不審者に目を光らせている。

ここから見えるだけでも、王宮エントランスに4チーム、階段上に2チーム……もし

も彼らが一齐に攻撃を仕掛けてきたら、俺と博士は成す術なくボロ雑巾と化すだろう。さすがに俺から取り上げた銃をその場で撃つてくることは無いにしても、彼らが敵になった時点でビークルも無く丸腰の俺は詰みだ。何とも居心地の悪い空間である。

武装解除され、応接室のような部屋に通された俺たちは、謁見の準備が整うまでその場で待つように告げられた。

……ここから、さらに待ちか。

この後に急ぎの予定は入れていないので、多少時間が押したところで然程の問題は無いが……。

「遠方から呼びつけて、武器を取り上げて、持て成しもせず待たせて……何様ですかね？」

「国王様じゃよ。向こうから時間を指定しておいて1, 2時間待たせることもザラじゃ。それと……もう一つ面白くない話があるぞ。わしが謁見室に入場したとして、陛下が現れるのはそのさらに数分後じゃ」

「……無駄では？」

「無駄じゃ。しかし、王族という生き物は、人を待つと死ぬらしいの。アレじゃ。『沽券

にかかわる』というやつじゃな」

「ハハッ……気が滅入りますね」

しかし、意外にも十数分ほど経ったところで、謁見の準備が出来たらしく博士が呼ばれた。

前回は1時間半待ちだったそうなので、今日は本当に幸運な方だろう。

「陛下がお待ちです。ご案内いたします」

機械的に案内を申し出る王宮侍女の態度とは裏腹に、思いのほか謁見がサクサク済みそうな様子に博士は上機嫌で部屋を出て行った。

「……さて、どうしたものかね？」

応接室に一人残された俺は本格的に暇になった。

身一つで見知らぬ場所に、話し相手も居ないこの状況……マジでやる事が無い。

紅茶とお茶菓子は王宮侍女が用意してくれたが、妙なものを仕込まれるリスクを思えば、手を付ける気にはなれない。

さすがの俺も英国諜報部の某スパイのように解毒剤など常に持ち歩いているわけもなく。

いかにナツメグ博士といえど、突発的に盛られた毒に対応してその場で中和剤を錬

成することなどできないからな。

この場では何も口にしないのが正解だろう。

銃の手入れでもして待つかと思つたが……肝心のワルサーを近衛兵に預けたのだつた。

「ハア……本でも持つてくればよかつたかな」

手持無沙汰になつた俺は、当てもなくフラフラと室内を歩き始めた。

とはいえ、殺風景な部屋にはほとんど見る物なんて無い。

ソファアーテーブルのセット以外、壁に風景画が一枚と窓際にローテーブルが設置されているくらいか。

「ん……？」

しかし、ふとローテーブルの方へ視線をやると、その上に新聞が置いてあるのを見つけた。

日付はちょうど今朝のものだ。

どうやら、俺たちの前にこの部屋を使った人間がここに置き忘れたらしい。

王宮の一室にも関わらず、清掃や整理が行き届いていないのはどうかと思うが……今はそれも都合だ。

ちようど今日は朝早くにナツメグ邸を出たため朝刊を読む間が無かつたので、あり

がたく借り受けよう。

拾った新聞で暇つぶしとは少し情けない気もするが、別に誰が見ているわけでない……。……。

「——ほう、『王都セントラル闘技場に新チャンピオン誕生！』由緒正しき王家の血を引く新進気鋭のビークルバトラーの謎に迫る！』ね……。」

第一面は芸能ニュースだ。

俺としては、このビークルバトルチャンピオンの機体の方が気になるが……そこまでマニアックな話は新聞には載っていない。

チャンピオンの生まれだの、家柄だの、経歴だの……本当にどうでもいいことばかりだ。

まあ、大手の新聞なんてどこもそんなものだろう。

パラパラと紙をめくってみれば、発電所関連の話が小さな記事で取り上げられている。……。

事業理念を語るナントカ伯爵のコメントが載っていた。

新世代を担う産業への支援と、労働者への手厚い保護ね……これを書いた記者が賄賂を貰っているならまだマシだが、本気で信じているなら一度眼科に行った方がいい。

一方、俺が手掛ける電化製品などに関して、まだ新聞に載るほどの話題性は無いよ

うだ。

知名度の低さを嘆くべきか、下手に注目を集めていないことを好機ととらえるべきか……。

そんな具合に、しばらく暇をつぶしていると、やがてナツメツグ博士が戻ってきた。

「グレイ、帰るぞ」

「おっと！ 早かったですね、博士」

新聞をたたみながら返答する俺に、博士は早速ネクタイを外しつつ上機嫌で口を開いた。

「略式の謁見で済んだからの。場所も謁見の間ではなく、陛下の私室の一つじやった。大方、高貴な方々（……）がわしの相手など片手間の面会で十分と、横槍を入れたのじやろう。ま、野次を飛ばすしか能の無い宮廷雀どもが居ないだけ、こつちとしては気楽だったかの」

なるほど、それで話がトントン進んだわけか。

内容も、国王の他愛のない話に博士が適当に相槌を打つだけで、本当に王都くんだけまで来る意味のない話ばかりだったとのこと。

てつきり、ダンディリオンの件や『グランドファイナーレ』のことで、妙な言いがかり

や無茶を言われたものと思っていたが……。

本当に、ただ時間と労力を取られただけだったな。

今回の一件、裏で糸を引いていたであろう国王の取り巻きや貴族連中にして、
博士を呼びつけて手間を取らせれば、その時点で嫌がらせは完了だったのだろう。

何とも下らない話だ……。

まあ、博士の機嫌が悪くないならそこは僥倖だ。

俺もこれ以上時間を無駄にしたくないし、さつさと銃を返してもらって立ち去るとし
よう。

「……そうじゃ、グレイ。今日の午後は、何も予定は入れておらぬな？ この後、寄って
もらいたいところがある」

「ええ、それは構いませんが……」

怪訝な表情を浮かべつつも承諾する俺に、博士は深刻な表情で頷き言葉を続けた。

「少し……付き合え」

18話 孤児院

博士の案内で「ジャガーノート」を走らせやつて来たのは、工業区と職人街の外れにある教会だった。

古めかしい石造りで、扉や窓枠は明らかに素人が手作業で直したことが丸わかりの、何とも質素な礼拝堂だ。

中心街にあつた派手な大聖堂とは似ても似つかない。

いい言い方をすれば質実剛健、悪く言えばみすぼらしい。

まあ、金の掛かつた煌びやかな教会はその時点で、現代人の宗教全般へ抱く感覚からすると、神の名のもとに搾取しまくる生臭にしか見えないわけだが……。

そんな寂れた教会だが、博士について建物の裏手に回ると、思ったより大きな庭が目に入る。

これまた簡易的な柵の内側では、中年のシスターと子どもたちが畑仕事や洗濯などをしていた。

なるほど、孤児院も兼ねているわけか。

「さあ、皆さん！　これが終わったら、夕食まで自由時間ですからね。皆で協力して片付けるのよ……あらっ？」

俺たちが柵の入口の辺りまで近づくと、シスターの女性がこちらに気付いた。

一瞬、俺の方へ警戒したような視線を向けてきたが、博士の姿を認めるとシスターは途端に笑顔になった。

「あらあら、まあまあ！　ナツメッグ博士ではありませんか！　王都にいらしてたのね。ほら、皆！　博士にご挨拶しなさい」

「二ッこんにちは、ナツメッグ博士！」

シスターの一声で、子どもたちが俺と博士の前にわらわらと集まってきた。

彼女たちの様子からして、博士はこの孤児院の人々に随分と慕われているようだ。

年長の子どもたちを筆頭にキツチリ帽子を取って挨拶するあたり、礼儀作法の躰けという側面もあるのだろうが、博士が皆から尊敬され感謝されているのがわかる。

ナツメッグ博士が恵まれない子どもたちに資金や色々な援助をしてきたことは俺も聞いており、トロット楽団の関係者以外にも博士を慕う者は多いが、王都でもこの扱いはさすがに予想外だったな。

「うむ。皆、元気そうで何よりじゃ。邪魔をして悪かったの。そろそろおやつ時間で

あろう。差し入れがあるぞ」

「「「ワアアア!!!!」」」

博士の目配せを受けた俺が手荷物から駄菓子の入った袋を取り出すと、子どもたちから歓声が上がった

ここに来る途中に商店街で手に入れたものだが、身寄りがなく教会で暮らす子どもたちにとつては、なかなか口にする機会の無い贅沢品だろう。

俺は小袋に包装されたお菓子を一人一人に手渡した。

さながら気分はサンタクロースだ。

そして、子どもたちの何人かは俺のことを知っていた。

「凄え！ ハッピーガーランドのチャンピオンだ！」

「うわあ、本物のグレイだあ！」

「あの黒いビークル知ってる！ 『ジャガーノート』だよ！」

どうやら、うちの地域で開催されるビークルバトルーナメントを知っている子どもも多いようだ。

王都から見れば、ネフロもハッピーガーランドも田舎だろうに、よくそんな知識まで仕入れているものだと感心するが……俺も王座を防衛するたびに取材は受けているので、各新聞には俺の写真も何度か載っているからな。

それに、ナツメツグ博士の援助を受けている孤児院なら、博士の助手である俺のことを知っていてもおかしくはないか。

「ねえ、チャンピオン！ トーナメントの話聞かせて！」

「盗賊団をいくつも壊滅させたってホント!？」

「ガラガラ砂漠決戦でも凄い活躍したんでしょ！」

早速、物怖じしない子どもたち——特に男の子——が、俺にビークルバトルや戦いの話を強請ってきた。

この展開も少しは予想していたが、さすがに子どものエネルギーには圧倒されるな……。

「後でな。それより、ナツメツグ博士にお礼を言っておきなさい。このお菓子は全部博士からだ。ああ、そうだ。食べる前に手はしっかり洗うんだぞ」

「「「はーいー」」」

そんな具合に、俺がどうにか子どもたちをいなしつつ菓子を配っている間に、博士はシスターたちにも改めて俺のことを紹介してくれたようだ。

最初は俺がビークルバトルだと聞いて、年少の子どもたちを後ろに庇いつつ遠巻きにしていた彼女たちも、博士の言葉でようやく決心がついたのかやや警戒しながらも控えめに挨拶してくる。

まあ、ビークル乗りの大半は礼儀もTPOも無い荒くれなので、この反応もある意味仕方ないか。

やがて、神父らしき老齢の男性まで表に出てきた。

「子どもたちへの温かいお心遣い、誠に感謝申し上げます。何も無い所ですが、今日はゆつくりしていただきます。ナツメツグ殿とグレイ殿に神のご加護があらんことを」

「これはご丁寧にどうも」

「うむ。せっかくの機会じゃ。茶でもご馳走になりながら、最近の様子を聞かせてもらおうかの」

教会の中に招き入れられた俺たちは、神父やシスターたちから孤児院の概要と近況を聞いた。

ここは元々、とある上級貴族の気まぐれで建てられた孤児院だ。

設立の経緯などは詳細に語られなかったが、聞けばこの孤児院が出来た当初よりナツメツグ博士は支援をしてきたらしい。

金銭的な援助はもちろん、建物の修繕の手配、本や文房具の差し入れ……決して裕福ではないが、博士をはじめとした有志の寄付などもあり、子どもたちはどうか文明的な暮らしを送れている。

最近の様子についても、ビークル開発や電気事業の活性化による好景気も影響して、以前より子どもたちの暮らし向きには余裕があるとのことだ。

小金持ちの数が増えれば、施しも手厚くなるし、働きの口も増えるからな。

小遣い稼ぎ程度のものだが、子どもたちが請け負う雑用やメッセンジャーの仕事は、それこそ慈善事業に近いものだったりする。

まあ、発電所や一部の工場などで、身寄りのない子どもが都合よく安い給金で危険な作業に使われていることは、博士の指摘する通り好景気に伴う明らかな弊害ではあるが……。

「念のため確認しておくが……子どもたちに危険な仕事はさせておらぬの?」

「無論です。そういった申し出は全て断るよう徹底していますし、私も常に目を光らせております。……とはいえ、そういった仕事を好んで引き受ける子たちが一定数居ることとは否定できませんね。特に、この孤児院の外のことに関しては……。何せ、新聞配達や邸宅の掃除よりも給金がいいですからな」

「所詮は小間使い、条件が良いとはいっても雀の涙程度だろうに……まあ、仕方ないの。お前さんたちがこの街の子どもたち全ての面倒を見れるわけでもなし、そこは言っても詮無いことじやろうて。とりあえず、ここの子たちに深刻な問題が無いようならよしとするかの」

博士にしてみれば、一刻も早く立ち去りたいであろう王都滞在の時間を伸ばしてまで立ち寄った孤児院だ。

メガネの奥でどことなく安堵の表情を浮かべているのは、俺の勘違いではないだろう。

「……そうじゃ。教会を出て行った子たちは、今どうしておる？」

「皆、元気にやっていますよ。そうそう、五年前にここを出た兄妹から手紙が届きましてね。今はビークルバトラーになって各地を回っているそうで、近々こちらにも顔を出すよ——」

博士は若干複雑そうな表情だが、まあこれもよくある話だな。

確か、フェンネルも博士から譲られた中古のビークルに乗り始め、そのまま食い扶持を稼ぐためにビークルバトルを始めていたはずだ。

それに……。

「グレイさん！ トーナメントの話聞かせてください！」

「チャンピオン！ どうすればそんなに強くなれるの!？」

途中、俺は子どもたちにしつこく強請られ、去年のビークルバトルトーナメントやエルダーとのタイトル戦の話を披露する羽目になった。

ビークルバトラーといえば、ビークルの運転以外に何もできない人間が最後に行きつ

くだの何だの、一種の3K的な扱いを受けることも多い仕事だが、成功すれば一攫千金だ。

ネフロのシユナイダー然り、高ランクバトラーともなれば街のヒーローになるわけで、そういった憧れも含めて子どもたちの進路の選択肢として根強い人気を誇るの自然だろう。

「……グレイ、そろそろ行くぞ。あと、話はほどほどにな。お前さんの武勇伝は子どもたちにも悪影響じゃ」

「はいはい。心得てますよ、博士」

そして、そろそろ日も傾きかけたという頃、教会をお暇することにした俺たちは「ジャガーノート」に乗り込んだ。

ナツメツグ邸への帰り道で、俺は助手席の博士に話しかけた。

「博士はこつちでも慈善事業をやっていたんですね。恵まれない子どもたちのために手を尽くしていることは知っていました。また随分と手広くやっている様子で」

「まあ。もつとも、王都や遠方の施設に関しては、最近はたまに寄付をして手紙で様子を知らせてもらう程度だがな。昔は、わし自ら子どもたちを引き取り、学問を伝授して独り立ちできるまで面倒を見ていたりもしたが、さすがに一人ではもう手が回らん。若

く志のある者たちを巻き込み、わしは高みの見物をしておるよ」

「またまた。里親とか住み込み先の斡旋とか、他にも色々支援してたんではよ？」

「うむ、それに教育もな。万人が平等な機会を得られるにはまだほど遠いが、法や技術を学べば生きる術は増える。生業にはせずつも、役に立つ場面も多いはずじゃ」

最近ではネフロやハッピーガーランドでも教会や有志の運営する学校が出来て、庶民の子どもたちも学べる機会が増えてはいるが……結局はそれも、教育という耳障りのいい言葉を通して、従順な兵士や労働者を効率よく生産するためのプロセスに過ぎない。

貴族階級による支配が資本家と富裕層による搾取に変わっただけで、本質は同じだ。一方、ナツメツ博士の教えは違う。

トロット楽団メンバー然り、マルガリータ然り……博士の薫陶を受けた者は皆それぞれフィールドで一角の人物へ成長し活躍している。

しかし……。

「……………」

「どうした？」

「いえ……ただ、博士はあの孤児院に随分と思いい入れがあるみたいですね？　ここはうちから距離があるし、おまけに博士の嫌いな王都のど真ん中。それなのに、あの施設を殊更気に掛ける理由は……いや、不快な詮索だったらすみません」

誰にでも、触れられたくないモノや事情はある。

自らの境遇に照らし合わせ、それがよくわかってしまう俺は、どこか歯切れの悪い聞き方になってしまいが……やはり気になるものだ。

いくら博士が熱心な慈善家とはいえ、俺やマルガリータ、それにトロツト楽団の関係者は特別だ。

何かしら琴線に触れるポテンシャルを見込んだ相手、もしくはタイミングや巡り合わせの問題で、どうしても人間関係に濃い薄いの差は出来てしまう。

はつきり言つて、博士が王都の特定の孤児院を特別気に掛ける理由がわからない。

そんなことを考えていると、博士は俺からファイと視線を外しつつ呟いた。

「あそこは……少々訳アリだからの」

「訳アリ?」

「気付かなかったか? あの孤児院の子どもたちは、他とは違う。身寄りのない子として教会に引き取られるまでに、紆余曲折あつた者も多いんじゃないよ」

そう言つて、博士は言葉が続けた。

「多くは、所謂『教会送り』というヤツじゃない。大店の跡目争いに脱落した一家の子から、王家の庶子の落とし種……あの子たちのルーツは大体そんなところじゃ。下層民の口減らしや商売女が産み落とした子に比べれば、いくらか境遇は複雑じゃろうて」

言われてみれば、確かにあそこの子どもたちはどこか雰囲気が異質だった。

子どもたちは皆サイズの合わない地味な服を着ているが、どこことなく身だしなみが整っており、立ち振る舞いにも品がある子が多い。

俺にビークルバトルの話を求めてきた子たちも、思いのほか礼儀正しかった。

博士が資金を援助したり手助けをしたりするからには、元々はもつと劣悪な環境にあつた施設を予想していただけに、不思議と悲壮感が無いあの子たちの様子にはどこか違和感を覚えていたものだ。

かと思えば、外面を取り繕いつつもどこか表情に深い影を落としている子が一人二人居たような気もする。

「連座で処刑するのは外間が悪い。しかし、二度と権力闘争の場に関わらぬよう支配階級に手が届く場所から遠ざけたい。あそこに居るのは、そんな醜い派閥争いの犠牲となつた子どもたちなのじゃよ」

なるほど……。

ということとは、あの孤児院と子どもたちは、ある種の監視下にあるわけだ。

場合によっては、その権力闘争の風向き次第で、後顧の憂いを断つために改めて暗殺対象にされる可能性も……。

そういった薄汚い政治の話に振り回される子どもたちを不憫に思い、博士は積極的に

支援しているわけか。

「あの子たちが平穩に生きていくためには、一刻も早くこの王都を……貴族の影響下を抜け出すのが一番じゃ。だからこそ、わしはあの子たちがここを離れても生きていけるよう気を配っている。……まあ、物乞いや下働きをしなければ食っていけないストリートの子どもたちに比べれば、わしが手を出すまでもなくそもそも恵まれているのであるが……」

「まあ、そこは難しい問題ですね」

「……グレイ。お前さんをあの孤児院へ連れていったのには、もう一つ別の理由がある。お前さんには、いつか話そうと思っていたことじゃ」

しばしの沈黙の後、ナツメツグ博士は再び口を開いた。

どこか話しづらそうな博士の様子に、俺は静かに頷いて続きを促す。

「実は……あそこはダンディリオンとチコリが育った孤児院なんじゃ」

「っ！ それって……」

「もつとも、チコリは幼過ぎて孤児院の記憶はほとんど無いようだったあの」

最後にぶつ込まれた衝撃的な事実、俺は思わず博士に向き直った。

脇見運転をするわけにはいかないので、慌てて視線を前に戻す。

「ダンディリオンは……初めて会ったときから、妙に洗練された子であった。芸術家らしくマイペースで、職人気質なようできて、それでどこか大人びた矜持がある。天真爛漫なチコリと比較してそう見えたこともあるが……どこか不思議な子どもじゃったな」

そういえば、フエンネルも以前そのようなことを言っていたな。

ダンディリオンもチコリも、自分と然程境遇は変わらないというのに、ヤケに上品で立ち振る舞いにも気品があったと。

酒の席だったこともあり、フエンネル自身の思い出補正として聞き流してしまった気もするが、どこか引つ掛かり記憶に留まっていた話だ。

「もしや……ダンディリオン兄弟も元は高貴な血筋だったり……？」

「生まれの詳細については知らん。わしもそこまで突っ込んだ事情は聞いていないからの」

「ダンディリオン当人は？」

「……さあの。じゃが、あ奴が自ら真実に辿り着いていた可能性は否定できん」

ダンディリオンがブラッディマンティスという巨大組織を操る立場に居た以上、自分のルーツに関しても独自に調べ上げていたことは十分にあり得る。

もしかしたら……ダンディリオンは機械や文明だけでなく、社会構造そのものにも恨

みを抱いていたのかもしれない。

自分と弟のルーツを奪った社会に、身勝手な都合で自分たちを振り回した政治・世界に、そうした営みを生み出す人類全体に、丸ごと復讐しようとする目論んでいたのか……？

しかし、今となっては、彼の意図は何もわからない。

志半ばで凶弾に倒れた、彼の気持ちなど誰も……。

「……何か、やりきれない話ですね」

「うむ……」

それっきり、ナツメツグ邸に到着するまで、博士は一言も口を利かなかつた。

19話 水力発電所

数日後のピジョン牧場のナツメツグ邸。

あつさりとう都を後にした俺たちは、再び『ジュニパーベリーⅡ世号』で波に揺られ、ピジョン牧場の我が家へ戻ってきた。

春の日差しと穏やかな風が牧草地を撫でるなか、俺たちはいつも通りの日常を過ごしている。

思い思いに研究や機械いじりをする博士に、それを補佐するマルガリータ。

俺もナツメツグ邸の家事をこなしながら、しばらく放置してしまつたビジネスに精を出していた。

家電の製造にシャンプルー・リンス類の販売、最近ではガス関連事業も規模が拡大し、色々と俺の仕事も増えているからな。

相変わらず忙しい日々だ。

「おっと、郵便が来ているな」

ちやうど午後の休憩中、ふと玄関前のポストをチェックすると、中に大型の封筒が

入っていた。

俺宛てなので、中身はビークルバトル関係か株式を保有するビジネスに関するものだろうと当たりをつける。

封筒を持ってダイニングに戻った俺は、ペン立てから取り出したペーパーナイフで封を切り、中の書類を取り出した。

「手紙、何だつて？」

テーブル上のクッキーを摘まみつつ書類に目を通してしていると、紅茶のカップを持ったマルガリータが俺の肩越しにひよっこりと顔を出した。

シトラスのシャンプーとマシンオイルの香りが仄かに鼻腔を擽る。

「——また出資の件だ。王都の方からまた何人か申し出があつたらしい。例の水力発電所だ」

「王都から？」

「またか。しつこいの……」

書類を畳んだ俺が端的に告げると、首をかしげるマルガリータとは対照的に、博士は大きくため息をついた。

今スキトール湖では、大型の水力発電所を建設する計画が進んでいる。

ちやうど流域が狭まるイワツバメの滝方面で、ダム式の発電設備を運用する計画だ。

今後の電力需要の拡大に際し、俺が以前から進めてきた事業だが……さすがに工事の規模が桁違いなので、一朝一夕に済むものではない。

当然、俺一人で完結できる話ではないので、資金集めから資材・建設ビークルの手配と、セントジョーンズ卿はじめ多くの人間を巻き込み、数年がかりで準備を進め、最近ようやく完成の目処が立ってきたところだ。

それが、今になって資金提供や支援を申し出てくるとは……。

もちろん、既に建設計画は折り返し地点を過ぎていたので、彼らが提案するのは主に初期株のまとめ買いと稼働後の運営資金の支援だ。

詰まるところ「何か、儲かりそうだからやっぱり出資する。新規公開株くれ」って話である。

「王都からつてのは……まあ、営業であちこち顔は売ったからだな。目端の利く金の匂いに敏感な連中なら、この事業で期待される利益にもすぐに気づくだろう。もちろん、理由はそれだけではないかもしれませんが……」

俺が軽く視線を送ると、博士はうんざりとした表情で再び溜め息をついた。

この事業は俺が音頭を取っている以上、ナツメッグ博士の肝煎りということになる。

そうとなれば、博士の王都滞在中に望ましい結果を得られなかつた諦めの悪い連中が、またしても何らかの妨害をしようと介入のチャンスを狙っている可能性もあるわけ

で……一部でも中央の介入を許す時点で、そのリスクは格段に上がる。

「……本来なら、喜ばしいことなんですけどね。新規事業への出資なんて、普通は望んでも得られるものではありません。それに、何だかんだ言つて、初期資本が増えればそれだけ進捗が良くなるのも否定できない事実なわけで……」

何せ、人も資材の量も桁違いの一大事業だ。

作業に関わる全員分の差し入れを工面するだけでも、莫大な金額が掛かる。

もちろん、途中で資金が枯渇するような無計画なことはしていかないが……投入資金が無視できない単位で増えれば……それこそ労働者に酒でも支給できる予算でも組めれば、作業効率は格段に上がるだろう。

何はともあれ、この件に関してはあまり申し出を突っぱねるわけにはいかない。

もちろん、下手に有象無象を関わらせると、支援どころか妨害に等しい干渉を受けることになるわけだが……多くの人間が俺の顔で出資を提案してくれている以上、そこに対してはある程度の配慮も必要だ。

まったく、人の柵というヤツは……。

「……村の皆が便利になるなら、あたしはいいと思うけどね。ミームー村の電力需要もこれでは解決するんでしょ」

「ああ、それは間違いない」

色々とかかることはあるが、この事業の根本的な意義はメリットばかりだ。

水力発電自体は非常にクリーンなエネルギーで、且つ発電量が多めで、設備の運用コストもそれほど高くない。

それに、発電所の建設に伴いこの計画では送電設備の改修・延長も計画しているので、当然ながらその恩恵もある。

主にネフロロ方面を中心とした送電線の再配備計画だが、当然その範囲にはミームー村も含まれているのだ。

今のミームー村では俺の後押しで余剰の魚介を使った缶詰工場も運営しており、製造業での電力需要を鑑みれば近場に大規模な発電所がある意味は大きい。

「だからこそ、この事業は絶対に成功させなければならぬ。……博士。どうせ何をして、一定数のクズは寄ってくるわけですし……ここはうちのカミさんの故郷のために、一つお力添えを頼みますよ」

「お願いします、先生！」

「ハアア……。仕方ないの……」

渋々頷いた博士に、俺は新しいお茶を注ぎつつ追加のクッキーを勧めた。

そして、数日後。

俺とナツメツグ博士とマルガリータは、スキートル湖とイワツバメの滝のちょうど境目あたりに訪れていた。

以前、ブラツディマンティスの『グランドフィナーレ』を落とした際に、ベルガモツトを捕縛し牙を剥いたセイボリーと対峙したあの場所だ。

この国最大の滝へと至る水路の上流とはいえ、切り立った崖の麓には既に多くの資材やブীクルが運び込まれている。

さすがに飛行ブীクルで着陸できるほど開けたエリアではないので、俺たちはミームー村を経由してマルガリータお手製の船で現地へ向かった。

俺の「ジャガーノート」とマルガリータの「クラフトマンシップ」はミームー村に置きっぱなしだが、今回は作業現場の視察がメインなので、ブীクルが無くても特に問題ないだろう。

現地でいきなり盗賊の襲撃でも遭わなければ……。

「あつ！ 一人とも、見て！」

崖から続く岩場を回り込んだところで、マルガリータの声に応じて視線を上げると、水路沿いに広がる大規模な建設現場が目に入った。

陸側には、切り立った崖に埋まるようにして、頑健なコンクリート造りの建造物がいくつも設置されている。

既に、ダムの大枠も完成しているようで、コンクリートと石垣に側面を補強された水路がイワツバメの滝方面へ続いていた。

当然、新たに設置された水門付近に積み上げられているのは、夥しい量の建築資材と配電装置……あれがダムの発電設備の要か。

少し前まで土砂崩れ対策すら怪しい場所だったのに、また随分と様変わりしたな。

「ふむ、思っていたより大規模な工事になっておるの」

「うわあ、凄いね！」

「王都の……中央の資金も入りましたからね。これからより一層、急ピッチで作業は進むでしょう」

その後、俺たちは工事の現場責任者など数名と面会し、各部署の進捗を確認した。

状況は……予想外に順調そのものだ。

中央から資金提供を受けることに決めた以上、少なからずネガティブな影響は出ているものと思つたが、作業に大きな遅れも無いし各部点検での異常も見られない。

どうやら、心配は杞憂だったようだな。

「とはいえ……全く問題が無いとは言えんの。元より、不安定な地盤を切り開いての大規模な工事じゃ。平地での建設とはわけが違うじやろう」

「ええ、高架線の設置と送電線の改修作業は、少し遅れ気味なようです。稼働テストのス

ケジュールも押していますし、しばらくは俺もそちらに手を貸した方がよさそうですね」

「あたしも手伝うよ」

当然、マルガリータの手もありがたく借りる予定だ。

ピークルへの負荷の大きい土木作業ともなれば、腕利きの整備士は一人でも多く欲しい。

「そうじゃな……グレイ、マルガリータ。お前さんたちはピジョン牧場とネフロ方面を中心に見ておけ。あつちは線路沿いに既に設置された送電線の改修が主じゃが、その分工事の範囲が広く駆り出されるピークル乗りや作業員も多い。修理の手は慢性的に不足するじゃろう。荒くれをまとめるのは……グレイ、お前さんの得意分野じゃな」

俺とマルガリータは揃って博士の言葉に頷いた。

「わかりました。こっちはお願いできますか？」

「うむ、ミームー村の方はわしが引き受ける。向こうは新しく作る設備も多いが、工事自体は小規模じゃからな。細かい設計直しや微調整なら、わしが居た方が捗るじゃろうて」

そんなこんなで、我がナツメッグファミリーも水力発電所関連の事業に全面的に手を貸す運びとなったわけだ。

そして、さすがは稀代の天才ナツメツグ博士と言うべきか……ミームー村方面の工事は、断崖絶壁と山々に囲まれた厳しい立地条件をもともせず、サクツと終了した。

夏前には、山道沿いに立派な高架線が建設され、缶詰工場をフルで稼働させられたのだから、さすがと言うほかない。

もちろん、俺とマルガリータの方も仕事は概ね順調だ。

追加の資金と潤沢な資材・消耗品が投入された送電線工事は淀みなく進み、この調子なら秋を迎える前にネフロへ繋ぐラインも完成するだろう。

ただ、一つだけ問題を挙げるとするなら……。

「おう、整備士さん！　ちとアームの調子が悪いんだがよっ」

「こつちもだ！　エンジンの様子を見てくれ。じつくりな……ヒヒツ」

ピジョン牧場からワグテール渓谷へ至る線路沿いでは、作業ビークルが不自然な列を成していた。

元々、ビークルでネフロへピジョン牧場間を移動する人々のために、組合が出張修理所を出している場所だが、今回の送電線工事に際しビークルの待機エリアが拡張され、並行して数台のビークルの整備が進められるようプレハブ造りのドックが設置されているのだ。

いかにも荒くれ労働者っぽいビークル乗りと作業帽を被った整備士が怒鳴り合うなか、一部のビークル乗りたちが鼻の下を伸ばしているように見えるのは……決して見間違えではない。

「はいはい！ ちょっと見せてみな……どこも悪くなつちやいないよ。ちゃんと可動域を確かめたかい？ そつちのあんたも、エンジンのせいにする前に無駄に吹かすのをどうにかしな！」

「へへッ……すまねえなあ」

「……もちろんだ」

この男くさい掃き溜めにおいて、美人で快活なマルガリータはどうしても野郎どもの目を引く存在だ。

二つの整備ドックを行き来して作業ビークルの修理をこなすマルガリータは、今は作業着の上着を脱ぎ捨て、白のタンクトップだけを身に纏った姿で暑さを凌いでいる。

後ろで軽く縛った髪の間から覗く項には薄っすらと汗が浮き、照りつける陽光の煌めきは何とも神秘的だ。

あの絶世の美女が俺の妻であることは誇らしいが……そのせいで用も無いのに整備場が集まるクソビークル乗りどもの多さに関して、閉口するしかない。

「ん？ あれは……っ！」

そんなことを考えていると、不意にマルガリータの方へ近づくと男が居た。

男は今まさに彼女がアームパーツを手入れしているビークルの持ち主らしく、自分の機体へやけにゆっくりとした動作で乗り込むと、上から下卑た表情でマルガリータの胸元を覗き込む。

あの野郎……！ 彼女が薄着なのをいいことに、ふざけた真似しやがつて！

「ぬふ……うぎやおええ！」

「おっと、悪いね。危ないから下手に乗り出すんじゃないよ」

しかし、コクピットから身を乗り出そうとしたところで、ビークル乗りの男の口から間の抜けた悲鳴が上がった。

よく見ると、マルガリータの手に持ったシリコンスプレーが、男の顔にガッツリ噴射されていた。

様子を見るまでもなく、あれは痛そうだ。ザマあ。

「よし、整備は終わりだね。ほら、行った行った！」

顔を押さえて悶えながら悪態をつく男に構わず、マルガリータはビークルを追い出した。

あれはわざとか天然か……。

どちらにせよ、俺がシメるまでなかったな。

そんなことを考えていると……マルガリータの視線が僅かに俺の方を向き、一瞬だけ彼女の口角が上がった。

さすがはうちのカミさん。敵わないな。

20話 強敵（とも）との闘い

夜のガーランド闘技場。

照明塔とアドバルーン^{アドバルーン}の電飾がバトル会場を照らすなか、俺はフィールドの反対側の青いビークルをコクピットから鋭く見据える。

滑らかにペダルを踏み込み、「ジャガーノート」の静音エンジンの回転を上げると、目敏く俺の動きを察知した対戦相手が長距離キャノンをぶつ放した。

「おっとー！」

「その戦術はお見通しだ。もう慣れたぜ」

サーマルステルスとビークルの静音性をフルに活用した回り込みにもかかわらず、放たれたミサイル弾は正確なポイントに飛来し、「ジャガーノート」の僅かなエンジン稼働熱をロックオンしてきた。

直撃と爆風を躲すため、緊急スラスタを吹かしビークルを滑らせたことで、こちらは完全に向こうの視界に姿を晒したことになる。

ブースト時の廃棄熱を狙い撃ちにされたら堪らないので、俺はチェーニングを点射し

ながら後退し、フィールド障害物の瓦礫の後ろへ機体を寄せた。

「フウ……危ねえ」

「ハッ！ 仕留め損なつたか。だが、それでこそお前だぜ」

俺の弾丸を躲しつつスクラップの影へ機体を滑り込ませた「ブルー・サンダー」のクピットで、フェンネルが僅かに口角を上げた気がする。

彼とのバトルも久しぶりだが……相変わらず、厄介な相手だ。

向こうは完全な遠距離特化のビークルで、手の内は知り尽くしている。

それにもかかわらず、攻めきれないこの状況……まあ、フェンネルもこの辺りでは名の知れたビークル乗りだ。

一筋縄でいくわけもないか。

夏の夜の蒸し暑さと観客の熱気で半屋外の闘技場は不快指数がやけ高いが、俺は目標を見失い明後日の方向で起爆するミサイル弾に冷たい汗を流した。

数回のすれ違いと砲火の交差の後。

徐々に少なくなる残弾を確認しながら、俺はビークルのクピットでボヤいた。

「……つたく。しばらくこの街を空けたんで、復帰戦を引き受けたが……安請け合いはするものじゃないな。面倒な相手だ」

「フツ、誉め言葉として受け取っておくぜ」

障害物越しに機嫌よさげな言葉を返してくるフェンネルに、俺はチェーンガンのブラインドファイアを見舞いつつ、カバー体勢から飛び出した。

そのままサイドスラストで回り込もうとすると……こちらが射線を確保して接近しきる前に、フェンネルの迎撃が撃ち込まれる。

爆発したような鋭い発砲音とともに見舞われた面制圧攻撃に、思わず俺は「ジャガーノート」のハンドルを切って回避動作に移る。

俺が盾にした車のスクラップにも数十発のバラ玉が撃ち込まれ、塗装の禿げかけたボディがズタズタに切り裂かれた。

最近、「ブルー・サンダー」の左アームに装備されたソードオフアームの攻撃だ。

猟銃の散弾とはワケが違う、手持ち式ならグレネードランチャー並の口径で放たれるキャニスター弾は、まともにパターンに捉えられればただでは済まない。

射撃装備にも関わらず精度が低く射程が短いというピーキーな性能だが、近距離で猛威を振るう強力な火器だ。

「くそつ、また厄介な武器を使いこなしやがって」

「ああ、思い切って装備を換装してみたが、大正解だったぜ」

元々、フェンネルのピークルは長距離キャノンアームのほかに、バトル時は左に砲弾

アームを装備していた。

火力と射程を併せ持つ代わりに速射性と取り回しに難がある長距離キャノンのサイドアーム的な運用だが……そもそも、フェンネルの戦法は完全な遠距離特化で且つ一撃必殺に重きを置いたものである。

立ち回りやフォームが常に長距離キャノンを急所にぶち込むことを意識している以上、毛色の違う武装を扱う際にもその影響は避けられない。

盲目撃ちに近い牽制射撃が関の山だろう。

後退時に最後っ屁のような二連射を放たれたところで、高機動且つ重装甲のビークルに乗る俺レベルのバトラーにとつては、然程の脅威ではないわけだ。

正直なところ、フェンネルは中口径の砲弾アームの特性を活かし切れていなかった。それがここに来て、この新兵器か……。

小型の射撃装備並の取り回しながら、近距離で絶大な威力を誇るソードオフアームの一撃は、まさしくフェンネルの戦法の弱点を完璧にカバーし得る代物だったわけだ。

しかし……。

「うおー！」

俺はフェンネルが隠れた遮蔽物の横にあるスクラップ目掛けて、左アームからミサイ

ル弾を撃ち込んだ。

新しい手札が切れるのは、こちらも同じだ。

今の「ジャガーノート」はチエーンガンの下にアンダーバレルの長距離キャノンを装備してしており、その分火力も大幅に増している。

一撃必殺の正確さや破壊力では、フルサイズの長距離キャノンアームを主兵装とするフェンネルに敵わないが、こうした炸裂弾による範囲攻撃や火力を底上げする運用に関しては、俺のキャノンも十二分にその役割を果たしてくれる。

飛び散る破片と爆風を避けて思わずビークルを発進させたフェンネルに、俺は追撃でチエーンガンの連射を見舞った。

さすがに遠距離戦を得意とするフェンネルだけあって仕留めきることは叶わなかったが、圧倒的な火力と弾幕の前にフェンネルは一時的に防戦一方となる。

制圧射撃のなか、正確な点射で吐き出された数発の弾丸は的確に「ブルー・サンダー」のボディへ弾痕を穿ち、各部の制御系にいくらかダメージを与えることに成功した。

「チー！ お前えこそ、ポン付け装備のくせにとんでもねえ真似しやがる」

「マルガリータのおかげさ」

体勢を立て直したフェンネルは素早くビークルをターンさせソードオフアームを発砲するが、既にカバー体勢へ移行していた俺は危なげなくキャニスター弾の雨を遮蔽物

に隠れてやり過ごす。

その後も、俺は執拗にフェンネルを弾幕で追い詰めた。

フィールドに設置された火薬樽を撃ち抜き、爆炎も駆使して「ブルー・サンダー」を追い詰めると、観客席からも猛烈な歓声が轟く。

もちろん、反撃とばかりに正確な軌道でミサイル弾を放ってくるフェンネルの攻撃で、俺の「ジャガーノート」のボディもミスリル装甲に少くない傷が付いたが、そこはやはり手数が違う。

機体のダメージと残弾・余力でいえば、状況は圧倒的に俺が優勢だ。

「くっ！ 相変わらず、正確な射撃だぜ」

「お前さんもな。こっちはヒートシーカーの誘導を躲すシステムを積んでるんだぞ。偏差撃ちでムリヤリ誘導範囲に絞り込んでくるとか、どんな砲撃スキルだよ」

皮肉交じりに健闘を称えつつも、口調には余裕が無い。

そろそろ終わりが近い。

僅かでもハンドル操作をミスれば、フェンネルのビークルは俺の弾幕に晒され途端にスクラップだ。

俺も一度でもミスを犯せば、途端にフェンネルの必殺の一撃で逆転される。

お互い、気の抜けないラウンドだ。

そして……決着の瞬間は突然訪れた。

サイドスラストスターでダツシユブーストを起動した「ブルー・サンダー」の動きが、一瞬だけ硬直するように鈍った。

度重なるダメージと酷使で、駆動系に負荷が蓄積していたのだろう。

「つー、チー！」

トドメとばかりに俺がアンダーバレルのキャノンを発砲すると、フェンネルも即座に危機を悟り回避行動に移った。

下手な軌道でミスイル弾を撃ち込んでも、小口径の弾丸より弾速が遅いこともあり、ソードオフアームで迎撃されてしまう。

既にフェンネルもそれくらいの芸当を軽くこなす程度には、新兵器のソードオフアームを使いこなしている。

しかし、当然俺も向こうの対処は読んでいた

レーザー誘導も駆使してキャノンミサイルの軌道を修正し……狙うのは「ブルー・サンダー」の右レッグパーツだ。

「くそっ、避けられねえ！」

さすがに不安定な体勢から、ソードオフアームの死角側には対処できなかつたようだ。

辛うじて防御態勢を取った「ブルー・サンダー」は、着弾の衝撃と爆風でたたらを踏むように吹き飛び、そのまま闘技場の壁にぶち当たった。

「つぐお！ ……………くっ」

コクピットのフェンネルは呻き声を漏らしつつもビークルを復帰させようとハンドルを操作するが、既に脚部が完全に大破している以上、彼に成す術はない。

壮絶な砲火の応酬の結果、軍配は俺に上がった。

この射撃戦、俺の勝ちだ。

やがてビークルの損傷度合いからフェンネルの試合続行が不可能と判断され、俺の勝利が宣告されると、フェンネルはやや肩を落としてハンドルを手放した。

「…………やるじゃねえか」

試合後、俺とフェンネルの姿は闘技場近くの酒場にあった。

ガーランド闘技場のバトラーがよく出入りしている、比較的リーズナブルな酒場だ。

俺もフェンネルも試合を終えてしばらくは愛機の修理待ちなので、その間の暇をつぶしにやって来たのだ。

お互い、今日の健闘を称え合い、乾杯して最初のグラスを飲み干したあたりで、話は

近況の報告へと移る。

「それで？ あつさり帰ってきたが、王都はどうだったよ？」

「まあまあだな。俺の仕事は上手いこと行つたし、マルガリータもそれなりに勉強になることがあつたようだ。だが……」

「ん？」

「それ以外は、取り立てて話のネタになることも無かつたな。普通に向こうの技術街を視察して、マルガリータと観光に出かけて……博士も形式的な謁見を済ませてきただけだ。何か特別なイベントがあつたわけじゃない。それに結局、研究機関の方からもお呼びは掛からなかつたよ」

特に、博士が懸念していたのは、飛行船や飛行ビークルの軍事転用計画に参加を強要されることだったが、その心配も杞憂だった。

まあ、今思えば、王都にも科学者やそれを支援する有力者や政治家はごまんといるわけで、彼らからすればナツメグ博士の介入は愉快なものではないだろう。

少なくとも、自分たちの派閥で功績や利権を独占したいなら、わざわざ博士に一枚噛ませるメリットは無い。

ある意味、いい具合に爪弾きにくれたわけだ。

おかげで然程の面倒事には巻き込まれずに済んだ。

「そうか。お前のことだから、てつきり向こうでもビークルバトルに出て、チャンピオンをぶっ倒してきたのかと思っただぜ」

「ははっ、さすがにそこまでの時間は無かったな」

王都までは、船旅を経ての遠出であったが、その滞在期間はかなり短いものだった。ナツメツグ博士たつての希望により、謁見の翌々日には俺たちは王都を後にしたのだ。

この地域とは違う文化に、技術文明に……色々と新鮮ではあったものの、一通り見る物を見てしまえば、あとはもう用は無い。

あれ以上無駄に長居して、どこぞの馬鹿にダンディリオンの件を蒸し返されてもつまらないからな。

それに……マルガリータもどこか貴族街の雰囲気息苦しさを感じていたようだった。

家名や爵位でマウントを取り合う慣習はともかく、すれ違う人間全てを見下していくスタンスの住民たちは、見慣れても好きにはなれない。

短期間の滞在ならともかく、長く住むにはちよいとストレスの多すぎる環境だ。

あの煌びやかな閉塞社会は、それこそたまの観光で行くくらいがちやうどいい街だろう。

そんな他愛の無いことを話している内に、土産話のネタも尽きてきたので、俺はフェンネルの近況に水を向けた。

「ところで、フェンネルこそ、俺が戻る頃にはもうランクを上げているものと思っただが……」

「おう。俺もちよいと前までそのつもりだったんだけどな……ここから昇格するには試合の数が少ないみたいだよ」

「ああ、なるほど。そりゃ、運が無かった」

最近のフェンネルは、自身がリーダーを務めるロックバンド『フェンネル&ブルーサーンダース』の活動が軌道に乗り、ミュージシャンとしてますます忙しい日々を送っている。

音楽活動を優先すればその分ピークルバトルに割ける時間が少なくなり、当然ながら一定の期間に出場できるバトルの数も減る。

そういった事情もあり、フェンネルは今もAランクのままだ。

バトラーランクの昇格には、やはりどうしても所属選手としての評価、即ち闘技場への貢献度なんかも加味されるからな。

「本業が順調なのは、喜ばしいことなんだろうが……」

「ああ。それに関しちや文句なんざ無え。お前とジョージに作ってもらった電気ギター

や音響機器のおかげで、俺たちもここまで来れたんだ。ミュージシャンとして、音楽を何より優先するのは当然の話だ。……仕方ねえさ」

とはいえ、フェンネルの実力やビークルバトルへの取り組みがSランクに相応しくないかといえ、そんなことはない。

俺と出会う前から、フェンネルは既に腕利きのビークル乗りとして名が通っており、3年前のトーナメントではバナラと激戦を繰り広げた。

フェンネル自身、ビークルバトルには相当熱心な部類に入るので、研鑽は全く怠つておらず、一足先にSランクへ昇格したサフランと比べても実力にそれほど差異は無いだろう。

キャリアも十分、知名度なんかも加味して、フェンネルの試合で動く賭け金などを鑑みれば……それこそ、彼の出る試合はガーランド闘技場の目玉と言つても過言ではない。

そういう意味では、運営がフェンネルのランクアップを渋るといふのはおかしい話だ。

「それに……」

「ん？」

「いや、何でもねえ。……とにかく、ランクの件はいいんだ。気にしねえでくれ」

まあ、フェンネル自身が割り切っている以上、俺がこしつく言い募る話でもないか。ちよつと釈然としない話だが……。

微妙な空気になってしまったが、俺が追加の酒と料理を注文すると、フェンネルも切り替えるように口を開いた。

「ところで、今年のトーナメントの件は聞いたか？」

「ああ。確か……冬に延期になったらしいな」

この地域では、毎年夏頃に開催されているピークルバトルトーナメントだが、今年の開催は年末ごろになるらしい。

俺も最近になって聞かされた話だ。

「何でも、コミッシヨナー側の事情とか聞いたが？」

「ああ、どうやらそうらしい。王都方面から派遣される委員会メンバーの到着が遅れているんだと」

「遅れ？ 何故に？」

「噂によると、船がトラブルってるらしいぜ。海賊の増加やら突発的な航路の変更やらで

「よ」

「なるほど、な」

トランプルの原因には俺も心当たりがあるが……とはいえ、選手側にとってはありがたい状況だ。

トーナメント常連の面子も、今年こそは出場メンバーに選ばれることを夢見ているビークル乗りも……そのほとんどが、例年通りのタイミングで開催される前提で予定を立てている。

機体の整備期間や季節に合わせた調整はもちろん、選手によつては他の仕事——場合によつては本業——の都合もある。

それが直前になつての開催延期……選手からすれば、いきなりそんな事を言われても困るだろう。

俺も今抱えている事業の状況次第では、今年は休場という判断に至る可能性もあった。

「つたく、これだからデケエ組織つてのはよ……。こつちには関係ねえ都合で、いつも人を振り回しやがる。別にどこのお偉いさんが来ようが、俺ら選手にとつちやどうでもいい話だぜ」

フェンネルにしてみても、この規模のスケジュールの狂いは容認できないものだろう。

遠方の公演と予定が被れば、それこそ彼は今年のトーナメント出場を見送るしかな

い。

まあ、海賊の件に関しては、俺も実害を受けた以上、同情の余地が無いわけでもないが……それでも元はと言えば、どこぞのお偉いさんを呼ぶだの何だの、余計なことをするからこういうザマになるのだ。

フェンネルの言う通り、今回のトラブルは運営側の都合に起因している。

委員会の幹部からは、バトラーの選抜基準をより公平にするためだの、判定に公正を期すためだの、色々と釈明があつたらしいが……だからといって全ての失態が正当化されるわけではない。

安全且つ円滑にイベントを執り行うのが彼らの仕事である以上、開催が遅れという不手際については全く弁護できないな。

「観客だつていい迷惑だぜ。毎年、トーナメントの時期に合わせてハッピーガーランド行きを予定していた奴らも居るだろうによ……」

「まあ……今はどこの闘技場もグダグダだからな。ライセンス規制緩和の影響もあるんだろう」

「違えねえ。近頃のバトルがマンネリ気味だからって、まったく妙なことばかりしやがつて……」

何だか、終業後に居酒屋で愚痴るおっさんサラリーマンじみてきたが、フェンネルが

これだけネガティブな恨み言を並べるのも珍しい。

こりや、相当頭にくてるな。

……まあ、どうせ俺も今日はハッピーガーランドに泊まりだ。

時間ならたつぷりある。

たまにはヤケ酒に付き合ってやるのも悪くないだろう。

そんなことを考えながら、俺が追加の酒を注文しようとしたところで、バーの入口が開き艶のある女性の声が聞こえた。

「お待たせ……あつ！ ちよつと、二人とも。もう随分飲んでるじゃない」

現れたのは、ガーランド闘技場に所属するSランクバトラー、サフランだった。

彼女は外出用のスプリングコートを羽織っているので、バトル時のエロ衣装より露出度は下がっているが、顔はいつものマスクで隠している。

まあ、ここは闘技場の関係者やファンが多く来店するからな。

下手に素顔を晒すわけにはいかないか。

「あゝ、悪いなサフラン。先に始めてるよ」

「何だ、来たのか……別にお前なんぞ待ってねえがな」

「ご挨拶ね、フェンネル。まったく、相変わらずなんだから」

不愛想なフェンネルにサフランは呆れたようにため息をついたが、特に気にした様子もなく軽く肩を竦める。

「ほら、私たちも混ぜなさい」

「どーぞどーぞ」

「……勝手にしろ」

愛想よく席を勧める俺とは対照的にフェンネルは相変わらずの仏頂面だが、色つぼく口角を上げたサフランはボックス席へ移動し俺たちを手招きした。

よく見ると、彼女は後ろに数人の男女を連れている。

なるほど、この人数はカウンターには収まらないな。

俺たちもボックス席に移動するとうしよう。

「さて、それじゃあ二人にも紹介するわね。今度、うちに新しく所属することになったバトラーたちよ。ジーニアスは本業が忙しくなつてなかなかバトルに出場できないし、スドウは流れ者でどこか行っちゃったからね。それに、エルダーも……」

思わず、彼の名前を口走りかけ、サフランは慌てて口を噤んだ。

俺たちはエルダーことダンディリオンの事情も、サフランが彼に師事していたことも知っているが、こんな場所で敢えて話題にするような内容でもないからな。

「とにかく、皆それぞれ期待の選手たちよ。仲良くしてあげて」

そんなサフランの言葉を皮切りに、まずは金髪 of 褐色ギャルが口を開いた。

「やつほー、グレイっち！ あーしはラベンダー。前は別の街の闘技場に居たけど、こっちの支配人にスカウトされて所属を移したの。サフランと同じセクシー路線でもっと若手のバトラーが欲しいんだって。ウケるよね。キャハハ！ あつ、そういえば……グレイっちの奥さんは整備士なんだって？ じゃあ、サフランは二号さん？ アハッ！ マジウケるんだけど！」

ウケねえよ！

何て不吉な事を言う女だ。

まあ、確かに……彼女のビジュアルならガーランド闘技場でもすぐに人気が出るだろう。

長身でスタイル抜群の金髪美人ときて、健康的な褐色肌を晒したハイレグの衣装も彼女の若々しい肉体の魅力を最大限に引き立てている。

とはいえ、サフランを露骨にオバサン扱いした件に関しては、仮面の奥から放たれる冷たい殺気が、この後の展開を物語っている。

ラベンダーの奴、次のバトルが終わっても無事でいられるといいな。

んで、二人目は……。

「拙者、コリウスと申す。グレイ殿のお噂はかねがね。この国最強の呼び声も高い方と

お会いでき、光栄の極み！ それと……貴殿は拳銃の名手であるとも聞いています。得物は違えど、武の高みを目指す志は同じ！ どうであろう？ 是非、拙者と生身での「死合」も……」

どうであろう……じゃねえよ！

見た目は騎士然とした穏やかそうな好青年だが、メンタルは完全に血に飢えた戦闘狂ときた。

こいつは下手に関わっちゃいけない類の生物だ。

そして、最後は……何故かこのスチームパンク世界において、現代風のセーラ服タイプの制服を着た少女だ。

「アヤミです。素敵なお姉さまを探してピークルで旅をしております。この闘技場には成り行きでしばらく所属することになりました。……ところで、グレイサン。アナタハ、サフランお姉さまのナンナノカシラ？」

……またキャラの濃い連中が集まったな。

まあ、何はともあれ、ガーランド闘技場に新しい風が入るのはいいことだ。

俺はネフロ闘技場出身の選手だが、ハッピーガーランドのトーナメント統一チャンピオンでもある。

何より、回りまわってこの国のピークルバトル業界が盛り上がるなら、俺としても悪

いはしないからな。

そんな具合に、サフランの音頭で俺たちは日付が変わるまで飲み明かした。

因みに、会計はサフランの巧みな誘導により、またしても俺持ちだったが……ラベンダーのザル具合はさすがに誤算だったな。

一晩の飲み代とは思えない額のユーロッチが飛んでしまった。

21話 飛行テスト 前編

スキートール湖、上空。

ハンドルに軽く手を掛け飛行ビークルのフラップを微調整していた俺は、湖の中心近くに差し掛かったところで無線機の通信ボタンを押した。

「こちら【ジャガーノート】。目標に到達した。マルガリータ、準備はいいか？」

『オツケー、こつちからは観測できてるよ。いつでもどうぞ』

「了解、攻撃に移る」

マイクを元に戻した俺は、鋭くハンドルを切って飛行モードの【ジャガーノート】を旋回させる。

安定した挙動から一気に翼を翻し、揚力の流れから離脱した機体は一瞬だけガクンと高度を下げた。

先ほどまで軽快な回転音を響かせていたプロペラブレストは、急激に上げられた出力に甲高いトルクで吠えた。

「距離、約二百……発射っ！」

照準パネルの中心に目標を捉えた俺はトリガーを引いた。

プロペラブレストに据え付けられた2門のヴィッカーズ機銃は、軽快な炸裂音とともに303口径弾を吐き出す。

プロペラを撃ち抜かないよう同調装置と連動させた影響で、発射速度は銃本来の回転数より若干落ちてしているものの、機関銃2門の火力は相当なものだ。

ヘリウム風船にぶら下げられた木製の的は、次々と着弾したフルサイズのライフル弾によつてズタズタに引き裂かれた。

「よし、次っ！」

機首を上げて急上昇しながら風船本体にも数発の機銃弾を撃ち込み、目標を完全に破壊した俺は、次なる標的に向かつて飛行ビークルのスロットルを上げる。

的は静止しているとはいえ、これは実戦を想定した訓練だ。

全ての空中標的を敵機であると想定し、向こうの射線が敵同士で交差するような位置取りを意識しつつ回避機動も交えて、より上の高度を取ってのを破壊していく。

こちらが攻撃を受けることは無いが、一歩間違えば事故りかねないアクロバット飛行はなかなかの緊張感だ。

「今度はこいつだ……発射っ！」

一旦、態勢を整えつつ機体を翻した俺は、まだ空中に残っている的に狙いを定めると、

もう一つの武装の射撃スイッチを押した。

次の瞬間、先ほどの機銃掃射よりも数段激しい振動を伴い、左右のウィングアームが唸る。

それぞれ主翼の半ば辺りに据え付けられた計2門の機関砲は鋭い轟音を発し、小規模な爆発のようなマズルフラッシュを煌めかせた。

使用する弾薬は、普段の地上歩行時には左アームに装備しているチェーンガンと同規格。

ビークルの鋼鉄のボディをいとも容易く撃ち抜く大口径の高速徹甲弾だ。

その威力は小銃弾とは比較にならない。

しかし……。

「ちっ」

当然というか、強力な連射砲ともなれば、リコイルの衝撃もそれ相応に強くなる。

見た目にも、弾道は先ほどの303口径機銃と比べ大きくバラけ、かなりの数の弾が目標に着弾せず明後日の方向へ飛び去った。

……思った以上に命中率が悪いな。

接近しつつ連射を続けられれば、機体両側の機関砲はどうか目標を捉えて粉碎したが、一つのターゲットを破壊するのに随分と無駄撃ちをしている。

試行錯誤しながら俺が空中の的を全て壊す頃には、結構な量の弾薬を消費していた。

「くそっ……」

『どうしたの？ グレイ、大丈夫？』

思わず罵声を漏らしていると、無線機からマルガリータの心配する声が発せられた。

俺の声が聞こえたわけではないだろうが、空中標的を全て破壊したにもかかわらず報告も動きも無いこちらの様子が気にかかり、連絡を入れてきたのだろう。

一呼吸おいて無線機に手を伸ばした俺は、努めて落ち着いたトーンで口を開く。

「ああ、問題ない。空中の目標は全てクリアした。次は対地掃射だな。ポイントに移る」

一通り、飛行ビークルの武装テストを終えた俺は、ピジョン牧場に帰投した。

丘の上にビークルを着陸させ、展開式のウイングアームを畳み、機体を通常機動モードへ移行させる。

プロペラの推力の慣性で数歩ほど歩みを進めた「ジャガーノート」は、ちょうどオットー&ウイリー兄弟の整備小屋の前で停止した。

レッグ駆動系のギアを落としてプロペラへの動力接続を切り、キャノピーのロックを解除しコクピットを開放すると、やがて外からマルガリータの声が聞こえてくる。

「おかえり、無事に戻って来たね」

整備小屋の方へ視線を向けると、ちょうど屋上の外階段からマルガリータが降りてくるところだった。

階段近くの木箱に双眼鏡とバインダーに挟まれた資料を置くと、マルガリータは早速とばかりに「ジャガーノート」の各部を点検し始める。

「こつちからも見てたよ。飛行モードも大分乗りこなしてるじゃないか」

「おう。整備士の腕がいいからな」

ストレートに褒める俺の言葉に軽く口角を上げたマルガリータは、作業の手を止めずそのまま俺に疑問を投げかけた。

「それで？ 何か気になることがあったみたいだけど……」

「ああ……普通に飛ぶだけなら問題ない。エンジンの調整もボディ周りの建付けも万全だ。ただ、武装の方は……いくつか課題が見えてきたな」

マルガリータは一つ頷いて俺に続きを促す。

「機銃の方はノープロブレムだ。発射速度も回転の具合も良好。プロペラを弾が掠めるなんてことも無い。同調装置の精度は完璧と言っていいだろう。だが……問題は機関砲だな。確かに、チェーンガンと同じ大口径を空中で、しかも2門同時に撃てるのは素晴らしい。命中すれば破壊力は抜群だろう。……命中すればな」

そこまで言うと、マルガリータも俺の言いたいことを察して顔を上げた。

「的は壊せてるけど使い勝手はよくない、ってとこかな。狙いにくかった？」

「ああ、ちよつとな。もちろん、地上でチェーンガンを撃つのと空中戦では、色々と具合が違うのは承知しているが……機体の揺れと視界のブレは予想以上だ。急降下して対地掃射するときも、普段の交戦距離の感覚からすると、大分地面に近づいて撃った。それでもこの有様さ」

肩を竦めながら、俺はマルガリータに先ほどの射撃成績を記入したデータ用紙を手渡した。

踏ん張りの効かない空中では、射撃時の反動はモロに機体に吸収されるし、ウイングを展開してアームを固定している状態では取れる体勢も限られる。

少なくとも、人体に近い構造故に可能な直感的な重心移動や、人の体という四肢にあたるアームパーツ・レッグパーツの反動を利用した体幹調整は、飛行中は事実上不可能だ。

そもそもプロペラ駆動で飛行している機体の揺れも相まって、直接照準の環境はすこぶる悪い。

当然、エイムが定まらなければ、さすがの俺もまともな射撃精度は発揮できない。

そうした状況は、先ほど俺が記述したデータからも容易に読み取れるわけで……一通り資料に目を通したマルガリータは、やや深刻な表情で眉間にしわを寄せた。

「確かに、あんたにしてはちよつと命中率が悪いかもね。……なるほど。あんたの腕でも、今の装備だとあまり遠射が効かないんだね。さすがに地面に衝突するような間抜けはやらかささないにしても、実戦なら敵に近づけば近づくだけ自分も攻撃されるリスクが上がるわけだし……有効射程は死活問題だね」

「ああ。この様子だと、現状大口径は接近戦向けだろうな。ドッグファイトの切り札にはなると思うが、弾薬のポテンシャルを鑑みると、せっかくの射程と精度がちと勿体ない気もする。まあ、そっちは俺の運用次第でもあるし、一旦棚上げでもいいとして……もう一つ心配なことがある」

「?」

首をかしげるマルガリータに、俺は一拍置いて言葉が続けた。

「機体への負荷だ。射撃時の機体の振動とアームパーツの軋みは、俺でも気になるレベルだったぞ。大口径の2門同時発射は、繊細な飛行装備にはまだちよつと過酷かもしれない」

「つ……それを早く言いなよー」

結局、マルガリータの意向で機関砲の本格的な運用は延期となった。

射撃テストも当分お預けだ。

ここ数年の俺のピークル乗りとしての経験から言わせてもらえば、この件がそこまで

深刻なダメージに発展する可能性は低そうだが……飛行ビークル自体がまだまだ発展途上の技術であることを言えば、当然の措置とも言える。

『飛ぶ』という行為そのものが、些細な事故から大惨事につながる危険を孕んでいるのは事実だからな。

寧ろ慎重すぎるくらいでちょうどいい。

それに……。

「ん？ どうしたの？」

俺の視線を感じ取ったのか、マルガリータは不意にこちらへ振り返った。

何だかんだ言って、機体のことは彼女に任せておけば大丈夫だ。

機関砲に改良を施すにしろ、ウイングアームの機構からアプローチするにしろ、彼女なら近いうちにまるっと片付けてくれるだろう。

ビークル関連の問題において、マルガリータが俺のフィードバックからきちんとシステマ的な解決法を導き出してくれることは、既に何度も実証済みだ。

「いや。とにかく『ジャガーノート』をよろしく頼むよ」

「ああ、あたしに任せておきな。あんたが安心して飛べるように、しつかり整備しておくからさ」

機体の点検が終わり、燃料補給と軽い修理を済ませたところで、俺は再び「ジャガーノート」に乗り込んだ。

「さて……それじゃ、もうちよつと飛んでくるかな」

「あれ？ また出るの？」

「ああ。空中機動であといくつかモニタリングしたい項目があつたら？ まだ日も高いし、今日中に終わらせてくるよ」

俺の言葉に納得し一つ頷いたマルガリータは、身軽に「ジャガーノート」のボディに足を掛けると、コクピットに身を乗り出した。

「わかった。気を付けてね」

「もちろん」

軽く口付けを交わし、マルガリータはやや名残惜しそうな眼差しを残して俺から離れる。

後ろ髪を引かれる思いだが、彼女が機体から十分距離を取ったことを確認した俺は、ペダルを踏み込んでビークルを加速させた。

そして再び、オットー&ウィリーの整備小屋から「ジャガーノート」は空へ飛び立った。

22話 飛行テスト 後編

「——よし、こんなもんか」

数時間後。

ミームー村上空あたりでビークルの姿勢を元に戻した俺は、マルガリータから預かった資料を眺めて、ホッとため息をついた。

垂直上昇に急降下、山間低空飛行にマニニューバ……リストアップされた項目の全て、どうか今日中にテストを終えることが出来た。

到達高度から各速度計器の数値、ビークルの挙動から機体各部の状態まで詳しくレポートに書き留めたので、マルガリータと博士の研究も進むだろう。

これで今日の仕事は終わりだ。

「ヤッ……」

そろそろ日も傾きかけている。

さっさと家に戻って夕食の準備を始めるとするか。

今日は遠出の予定が無いにも関わらず、随分と時間を食ってしまった。

せつかくのマルガリータと一緒に過ごせる貴重な日を余計な仕事で潰してしまった以上、何かしら埋め合わせはしないとな。

まあ、彼女の気質からして、ピークル関連の研究や仕事に対して、不平不満を言うとは思えないが、せめて帰宅後の家族との時間は大切にしたい。

もちろん、夜の方も……ムフフっ。

「……んっ？」

他愛の無いことを考えながら機体を旋回させ、帰りの連絡のため無線機のマイクに手を掛けようとしたところで……俺はふと地上に見覚えのあるピークルを発見した。

スキトール湖の湖畔、ピジョン牧場からミームー村へと至る線路沿いの道に居るのは……ボディを派手な赤色に塗装した虫型四足のレッグパーツが特徴的な重量級ピークル。

あれは……！

「ダッドリー!?!」

「っ！ てめえ、グレイ！ そんなところで何してやがる!?!」

思わずキャノピーを開放し、コクピットから顔を突き出して確認したが……間違いない。

相変わらず、あちこちで暴れて迷惑を掛けまくっている鼻つまみ者の荒くれピークル

乗りだ。

まだまだ数の少ない飛行ビークルに、ダッドリーは一瞬呆けた視線を向けていたが……向こうも【ジャガーノート】の黒塗りボディを見て、こちらの正体を察したようだ。静音エンジンと軋み音ひとつ立てないスムーズなメカニズムのプロペラ機構ゆえ、ダッドリーの喧しい喚き声はつきりと俺の耳にも届く。

「クソツタレ！ あの時によくも……降りてこい、この野郎っ!!」

「はい、喜んで……なんて言うと思うか？ 大体、どこに降りるんだよ？」

何だか、俺の顔を見てキレ散らかしているようだが……正直、心当たりが多すぎてわからんな。

性懲りもなくミツバチ園で暴れていたところを、アンダーバレルの長距離キャノン一発で吹き飛ばし、レッグパーツをスクラップにしてやったことか？

それとも、スームスームのバーで酔っ払って近くの船乗りたちと喧嘩していたところを、後ろからスタンガンで気絶させたことか？

どちらにせよ、俺からすれば喧しい害獣を黙らせただけの話だ。

然程の問題は無いと思うのだがな。（人間にとつては）

「オラアアア!! くたばれえ！」

さすがは単細胞。

どうやら、人間様の言葉が通じないらしい。

勝手にヒートアップしたダッドリーと武装を展開した「レッドタランチュラ」を視界に捉えながら、俺はハンドルを切って「ジャガーノート」を急旋回させた。

戦闘機動に移りつつ、俺はダッドリーのピークルに注視した。

相見える度に装備が変わり、武装のバリエーションが豊富なことで有名なダッドリーだが……今日の「レッドタランチュラ」は左にスパイク鉄球アーム、右にショットガンアームを携えている。

スパイク鉄球アームは鎖で繋がれたモーニングスターを射出する中距離武器、ショットガンアームは少し前に発売された制圧用の射撃装備だ。

連結往復型のスパイク鉄球アームに射程の限りがあることはもとより、大型キャニスターを発射するショットガンアームも複数のペレットが拡散する構造上、火力や攻撃範囲の広さと引き換えに正確な遠射が効きにくい武器である。

地上の重量級ピークルのダッドリーに対し、はるか上空を飛ぶ俺の「ジャガーノート」。

どう考えても、この距離で俺にまともな攻撃ができる手段をダッドリーは持っていない

いように思えるが……。

「死ねえええええええええ!!」

「っ!」

突如放たれた複数の飛翔物に、俺は思わず目を見開いた。

よく見ると、「レッドタランチュラ」のバックパーツが複数のハッチを開放し、次々とミサイル弾を射出している。

飛来する複数の弾頭は、中距離兵装のレンジを軽く飛び越え、間違いなくこちらへ迫ってきた。

「くっ!」

俺はエンジンを吹かして急加速すると、機体を翻してミサイルの軌道から外れる方向へ進路を取った。

生憎、フレアやチャフのような防御兵装までは、さすがの「ジャガーノート」といえど搭載していない。

すり抜けるようにして、数発のミサイルが機体のすぐ傍を掠め、明後日の方向へ飛び去る。

コクピットに届く不気味な噴射音に俺は思わず肝を冷やすが……。

「……………っ」

他の自動誘導兵器と同じく、あのミサイルはビークルエンジンの熱源を探知して進路を修正し追いかけるシステムのようなのだが、直前で躲かれてそのまま追尾を再開できるほどの性能は無いらしい。

努めてエンジン出力を上げず、揚力から脱出するようにして機体を翻し急降下すると、飛来するミサイルの大半は、こちらの存在を見失い、制御を外れて空中で爆発した。飛行ビークルが膨大な熱量を発するジェットエンジンを持たずプロペラ式であることも、思いがけずメリットとなった形だ。

「クソがつー！ 避けんじやねえ！」

「そいつは聞けない相談だ……おっと！」

俺の機体に命中した攻撃が無いことを知ると、ダッドリーは苛立った様子でさらさらに次々とミサイルを発射した。

軽口を叩いてみるが、俺もそれほど余裕は無い。

多弾頭ミサイル一つ一つの精度は、フェンネルの長距離キャノンなど比較にならないほどお粗末だが……それでも炸裂弾頭を搭載した対ビークル兵装の直撃を食らえば、いかに「ジャガーノート」といえどタダでは済まない。

そもそもあの兵装の設計思想自体、弾幕の飽和攻撃と爆炎や爆風による二次損害を期待した代物のようだ。

僅かでも空中でダメージを負うリスクを鑑みれば……いかにあの乱射魔ダッドリーがクソエィムといえど、気を抜くことなどできないな。

……そういえば、最近のビークル業界では対空装備の開発が盛んになってきているとマルガリータからも聞いた。

あのミサイルバツクも、飛行ビークルや飛行船へ対抗するために売り出し始めた製品だろう。

まさかダッドリーが、しかも俺との小競り合いに持ち出してくるとは思わなかったが……。

「オラオラオラあー！ さっさと落ちろ、この野郎っ！」

時間差で撃ち出されたミサイルは、不規則な軌道を描きながら空高く舞い上がり、そのまま勢いを殺さず俺の機体目掛けて突っ込んできた。

逃げの一手で、射線を切るようにミサイルの直撃を躲し続ける俺だが、今度の斉射は俺のビークルを包囲する軌道で放たれたようで、こちらの進路を前後から挟み込むように迫ってくる。

ダッドリーの野郎……アホの脳筋と思いきや、ビークルの操縦センスは間違いなく一流だ。

奴の思考能力自体は簡単な算数すらできないような有様で、その想像力や情報処理能力の欠如は奴が度々陥る自業自得な末路からも想像に難くないが、ことビークルを用いた戦闘となると、なかなかの適応力を見せることも少なくない。

まあ、それでもなきや、ライセンス未所持の無法者にもかかわらず、毎年のようにビークルバトルーナメントの出場オフアアが行くわけもないか。

俺も度々奴を撃破して戦闘不能に追い込んでいるが、一撃で決着がつくのは大抵不意打ちか、煽って冷静さを失わせたところをズドンッ、といった具合だ。

いざこうして正面切つての戦闘となると、しかもこちらの武装や行動が制限された状況下では、そう簡単に瞬殺できる相手ではない。

「死ねよ！ さっさとくたばれ!!」

おとと……今は奴の動物的な戦闘力に感心している場合ではない。

口から罵詈雑言を垂れ流すダッドリーは、ますますヒートアップしてミサイルを撃ちまくっている。

こちららも弾幕の間を縫うようにして急降下でダッドリーに近づき、上空からヴィッカーズ機銃の連射を撃ち込むが……残念ながら、「レッドタランチュラ」にはまるでダメージを与えた様子が無かった。

「ガハハハッ！ そんなもんが効くかよ、バーカ！」

「ちっ」

まあ有効射程外からの小銃弾など、ブークルの鋼鉄ボディ相手にはこんなものか。

さすがにコクピットを狙い撃ちできる距離までの接近を許すほど、ダッドリーも甘くはない。

再び打ち上げられたミサイルの雨に、俺は旋回を余儀なくされた。

さて……このままではジリ貧だな。

もちろん、実弾兵器である以上はミサイルの弾数にも限りがあるので、いずれダッドリーは上空への攻撃手段を無くす。

いかにこちらの機銃がブークル相手に火力不足とはいえ、迎撃される心配が無ければ、さらに接近して操縦席のダッドリーを直接狙うなり何なり、奴を一方的に翻る手段はいくらでも生まれるだろう。

しかし、このまましばらく防戦一方というのも、ある意味リスクキーだ。

向こうの弾が切れるまで、全ての攻撃を躲し続けられる絶対の保証など無い。

何より、奴の気質を鑑みれば、戦いが長引けば八つ当たりで近くの線路や送電線を壊すこともあり得る。

あの設備と事業に俺がいかほどのポケットマネーを突っ込んだかを言えば……多少のリスクは伴うが、早いとこ決着をつけるべきだな。

「ギャハハハ！ 逃げてみる、ボンクラア！ ……むっ！」

俺は地面と垂直に機体を立て直し、数秒ほど「ジャガーノート」を上昇させると、機体を急旋回させた。

加速の勢いをそのままに、敵の射線と相対する方向に進路を取る。

予想外の体勢に移行した「ジャガーノート」の動きはダッドリーも目敏く察知したよう、一瞬「レッドタランチュラ」の動きが硬直する。

それでも攻撃を止めることはせず、続けて放たれる数発の対空ミサイルの雨。

このままでは正面からミサイルの直撃を食らうコースだが……俺は尾翼や旋回系のフラップを固定しヨーイングを変化させぬまま、ウイングアームの動翼を制御して機体をロールさせた。

鋭く90度ほど回転した機体のすぐ横を、不気味な噴射音とともにミサイルが掠め後方へ飛び去る。

今ので大半の攻撃は回避した。

それでも直撃しそうなミサイルは、ヴィッカーズ機銃の掃射で撃ち落とした。

「なに、いいっ!？」

さすがにミサイル弾を直接機銃で破壊されたことはダッドリーも予想外だったよう

で、「レッドタランチュラ」のkokピットから驚愕の声が上がった。

俺も今のは若干ヒヤツとした。

間髪入れず、弾幕を一気に突破した俺は、そのまま角度を付けて機体を急降下させる。

その先に居るのは当然ながら硬直するダッドリーのビークルだ。

「お前はここで終わりだ、ダッドリー！」

「っ……上等だ！ 叩き落してやるっ!!」

我に返ったダッドリーは、俺の煽りに顔を真っ赤にしながら悪態を返してくる。

今日の「レッドタランチュラ」はショットガンアームとスパイク鉄球アームを装備しているが、ダッドリーは再びバックパーツの武装を起動させると、馬鹿の一つ覚えとばかりに再度ミサイルを発射した。

悪いが、既に間合いは詰めた。

この近距離では、旋回性能の低いミサイル弾は目標を追尾しきれず、寧ろ回避は容易となる。

俺はそのまま機銃掃射の体勢に入った。

「かかったな！ ぶわあーか！」

「……馬鹿はてめえだ」

一応、ダッドリーの奴もミサイルを躲されることは想定していたらしく、二段構えで

こちらにショットガンアームを発砲してきたが……その程度の反撃ならこちらも想定内だ。

敢えてスタンスを変えず正面から突っ込む【ジャガーノート】のボディに、大型のキャニスター弾がいくつか食い込んだ。

キャノピー付きの風防部にも大型の散弾が掠め、鋭い音を立てて強化ガラスに亀裂が走る。

念のため、ガラスが砕け散った場合を想定して顔を引っ込めていたが、どうやらその心配は無さそうだ。

そして、攻撃動作の直後でしばし硬直するダッドリーのビークルを視界に捉え、俺は機関砲の射撃スイッチを押した。

「ぬぐおおおオオオオオ！」

「くうー！」

猛烈な振動と共に吐き出される大口径弾の斉射に、ダッドリーのビークルは瞬時にスクラップと化す。

近距離からチェーンガンの倍の火力を受けたのだから、この末路も当然だろう。

ズタボロになって火を吹き出す【レッドタランチュラ】に口角を上げながらも、俺は即座にハンドルを全力で引き上げる。

急降下に伴い、ガタガタと不吉な振動音を俺の耳に届けていた【ジャガーノート】は、あわや墜落寸前。

ミサイルの雨をかい潜り最速で掃射体勢に移るためとはいえ、さすがに角度をつけすぎた。

「くそっ……上がれ！」

冷や汗を流しながらも、どうにか上昇の体勢を維持していると……やがて【ジャガーノート】はフワリと風に乗るように高度を上げた。

視界の角度が水平に戻ったことを確認し、エンジンの回転を緩めると、愛機は徐々に静音エンジンのスムーズな動作音を取り戻す。

ダッドリーが足場にしていた岩山のすぐ上を通過する形で、そのままより低い位置の湖面に進路を取ったことで、どうにか急上昇が間に合ったのだ。

「っ、ハアアっ……い！ 危なかった……い！」

大きく息をつき機体を安定させた俺は、機体の状態が再び巡航飛行に移るのに支障が無いことを確認し、再び安堵の息を吐いた。

眼下のダッドリーを確認すると、炎上する機体の横で地団太を踏み。空へ向けて悪態をつきまくっている。

ハッ！ いいザマだ。

あれでくたばらないとは、相変わらずゴキブリみたいにしぶとい奴だが、ピークルがクラッシュした以上、しばらくは悪さもできないだろう。

さて、今日は色々と散々な目に遭ってしまったが……何はともあれ、溜飲も下がったところで家に帰るとするか。

マルガリータと博士が首を長くして待っている。(主に俺の作る飯を)

気を取り直して、ハンドルを握りなおした俺だが……ふと重大なことに思い至り、顔面から血の気が引いた。

「……これは、マルガリータに怒られるな」

よくよく機体を見ると、シヨットガンアームの攻撃を受けて、「ジャガーノート」のボディの塗装は一部剥がれ落ち、キャノピーの強化ガラスに大きなヒビが入っている。

それに、大口径機関砲はしばらく試射も見送りという話があった先から、勝手に実戦投入して撃ちまくってしまった。

明らかな戦闘の形跡に、消費した弾薬……最早、言い逃れは不可能だ。

鬼の形相でレンチを振り回すマルガリータの姿を思えば、ダッドリーを呪わずにはいられない。

とどめのもうひと掃射をくれてやりたい気分だが、燃料の残量を確認した俺は渋々帰路へ就くのだった。

23話 射撃場 前編

ナツメツグ邸の裏手、山の中の屋外射撃場に俺とマルガリータの姿はあった。

射撃場とはいっても、森の少し開けた場所をビークルで整地しただけの簡易的なものだ。

地面には所々粗い断面の切り株が残り、付近にはノコギリアームで伐採した丸太がそのまま無造作に積み上げられている。

シューティングレンジの奥側に設置した弾止め用の土嚢は、地面を均した際に出た土砂を適当な麻袋に詰めて作った。

一応、銃や弾薬の置台も兼ねてテーブルセットは持ち込んでいるが、椅子に防水タプを掛けただけで、あとは完全に野晒しだ。

「ここも久しぶりに来たけど、相変わらず粗雑というか何とと言うか……。でも、的のギミックの方は頻繁に手入れしているみたいだね。回路もまだちゃんと生きてるし、配線もまとまってる」

「ああ、君の力作だからな。掃除の手間を惜しんで故障させたら目も当てられない」

一方、的の方は多種多様なバリエーションがあり、一部の標的は電動のレールや土台で回転する仕掛けがついている。

木の壁やパーテーション、ドラム缶などの遮蔽物に動体標的が乱立するエリアは、ここがサバゲーフィールドだとしたら大分凝った代物だ。

適当にガラクタを撃って遊ぶだけなら、端材やスクラップを的にすればいいし、ライフルの照準調整ゼロインなんかも、大木にターゲット用紙を釘で留めれば事足りるが……やはり実戦形式のコンバットシューティングに勝るトレーニングは無いからな。

せっかく俺の射撃訓練のために、マルガリータがあれこれ工夫して機械を用意してくれたのだ。

そりやあもちろん、大切に扱いますよ。

そんな具合にドヤ顔をキメる俺に、マルガリータは僅かに訝しむような視線を送ってきた。

「それで？　こんな所までわざわざあたしを連れてきた意味は？　設備のメンテナンスなら、もうあんた一人でもできるでしょ？」

「まあまあ、そう言わずに。たまには夫婦水入らずも悪くないだろ？」

「……………ふん」

完全に誤魔化しだったが、肩を抱き寄せる俺の手を鬱陶しそうに振り払ったマルガ

リータは、僅かに紅潮した顔を背けた。

強いてこの問題を挙げるなら、射撃訓練をする度にいちいち山中まで移動しなければならぬ手間だな。

小火器による周辺被害はビークル火砲より格段に少ないとはいえ、さすがに牧羊地の近くで銃を撃ちまくるわけにはいかないからな。

それに、家の地下や隣接する場所に防音の屋内射撃場を作るとなると、どうしても確保できる直線距離が限られてくるので、ライフルや機関銃を撃つには物足りない。

牧場エリアから少し外れて、ある程度まとまった広さの土地が必要になると……必然的に、場所は普段俺がシカやイノシシの狩場に使っている山林——土地の所有者はナツメツグ博士——になるわけだ。

だが、そもそも俺たちの足は悪路をもともしないビークルであり、肝心の銃や弾薬も「ジャガーノート」に積み込んで運べるのだから、そのくらいの労力は妥協すべきだろう。

いつもビークルで移動してばかりで、少し運動不足な気もするし……。

「ん？ 何か言いたいことでも？」

「い、いやあ、別に！」

最近、若干ポリウムが増えた気がしないでもないマルガリータの尻周りから、俺は

慌てて視線を外した。

普段、ビークルの整備でよく体を動かしているマルガリータも、近頃は研究で度々引き籠ることもあって、さらに何年も俺とナツメグ博士の美食に付き合えば……まあ、それなりに肉は付く。

もちろん、ムツチリなマルガリータも悪くないと思うが、以前の筋肉質で引き締まったお尻も……ねえ？

俺が彼女を運動がてら射撃訓練に誘った理由は、さすがに気取られるわけにはいかない。い。

「と、とにかく！ 最近、代わり映えのしない毎日で、君も退屈してるだろ？ たまには気分転換がてら、射撃という貴族の遊びに興じるのも悪くないんじゃないかと思ってるな」

「はいはい。ここまで来たんだし、今日のところは付き合っただけよ」

そうして、いつも通り運転席のシートの後ろから銃器を取り出した俺は、テーブルの上に弾薬箱と一緒に並べシャツの袖を捲つて的に相対した。

マルガリータも口ではぶー垂れながらも、一応自分の護身用に所持している38口径リボルバーをケースから取り出す。

そして、ポリユームのある髪を結ぶのも面倒とばかりに大振りのハンチング帽に押し

込んだマルガリータは、俺から視線を外しながらそつと囁いた

「……別に嫌なわけじゃないよ。あたしの整備した銃や仕掛けが、あんたの身を守るのに役に立っているかは気になるしね」

嫁ちゃん……！ 邪な心が9割だった俺を許しておくれ……。

最初に手に取ったのは、リー・エンフィールド・ボルトアクションライフルだ。

19世紀末に開発された銃でありながら非常に優れた設計で、地球ではイギリス軍での退役後も民間では狩猟用として広く普及していた。

この銃も元々はピジョン牧場の引退した狩人の爺さんから譲り受けた品で、俺は徹底的なオーバーホールとアキュライズを施し、ナツメツグ博士謹製のスコープを装着して、普段は鹿狩りやイノシシ狩りに使用している。

装弾数は同系統の銃と比べると多めの10発。（同時代の他のボルトアクションは大抵5連発だ）

着脱式の10連マガジンを備え、5発の303ブリテイッシュ弾をまとめたクリップを上から押し込むことでも装弾できる。

ボルト操作時に必要な回転角度が約60度と浅い——他は大抵90度——ことも相まって、速射力に関しては後年のウインチェスターM70やレミントンM700系と比

較しても勝るとも劣らない性能だ。

さすが、世界三大ボルトアクションの称号は伊達じゃない。

まあ、歩兵の標準装備としては、その後一般化したセミオート／フルオート射撃が可能な自動式ライフルに取って代わられたが……。

「——っ」

フォアエンドをテーブルに据え、一つ目のマガジンが空になるまで100ヤードの距離で射撃してみると、十発の弾痕は直径約1インチ以内に収まった。

ちやうど1MOAを下回る、米軍の狙撃銃の規定をギリ満たす性能であることを示している。

もちろん、特殊部隊のスナイパーチームなどでは、狙撃銃に0.5MOA以下の精度を要求しているところもあるが……本来、軍用銃として設計されたライフルであることを鑑みれば2MOAでも上出来と言えるだろう。

それに、この銃の弾薬は軍用のメタルジャケット弾の弾頭をやすりで削って鉛を露出させたものを使っている。

弾頭の先端にも錐で穴を空けた簡易的なホローポイント弾だ。

着弾後に鉛の弾頭が広がり組織を大きく破壊するため殺傷力が高い。

対人用に限定するならともかく、強靱な野生動物をいい状態で仕留めるためには、一

撃の威力は必要不可欠だからな。

地球でも、20世紀のディア・ハンターたちが弾代を安く上げるため同じ手法を使っていた。

本来、弾の先端を真鍮で覆うという工程が必要になる分、ホローポイントやソフトポイントよりメタルジャケットの方が製造コストは高い。

しかし、軍需物資の払い下げ品となると話は違ってくる。

戦時下の軍の弾薬需要ともなれば、民間の狩猟用はもとより警察・法執行機関の二丁ズを大きく上回る。

おまけに前世では、ハーグ陸戦条約の『不必要な苦痛を与える兵器の使用禁止』という建前のもと、軍用銃におけるフル・メタルジャケット弾以外の使用が禁止されていたため、大戦中には極力低コストでメタルジャケット弾が大量に生産され、戦後はその余剰品が安価に民間へ放出されるのだ。

俺も以前はローディングキットでライフル弾を自作したりしていたが、この世界でも結局のところ放出品を購入した方が手間もコストも低いことに気付き、こうして軍用弾の再利用に切り替えたわけだ。

当然と言うか、精密射撃用にロードした弾ではないうえに、弾頭にも適当な改造を加えているので、その精度はお察しレベルなわけだが……まあ、俺は別に1000ヤード

射撃の大会に出るわけでもないので、少なくともハンティング用途をメインとして考えれば、今日の射撃スコアも十分すぎる命中率だ。

しかし……。

「……少しズレてるな」

「そっう？」

俺の横でリボルバーを適当に撃っているマルガリータには差異が微妙過ぎてわからなかったようだが、そのまま200ヤード、300ヤードと的を離して撃ってみると、若干だが弾痕のバラツキの中心はターゲットの真ん中よりやや右下の9点圏に寄っていることがわかる。

俺の記憶が確かなら、前回撃った時のグループピングは全てセンターから10点圏内に位置していた。

もちろん、銃の照準は射手の体調や気候によっても変わるものだが……この差は何かしらメカニズム上の相違が生じたと考えるべきだろう。

もちろん、銃身はオーバーホールに際し少し値が張る新品に交換しているし、機関部はオイルストーンで擦り合わせた後も定期的にメンテナンスを行っている。

内部機構の経年劣化でないとすると……問題は他のアキュライズ処置に生じた故障か？

念のため、マガジンとボルトを抜き、ライフルをざつと分解してみる。

「ああ……これか」

銃身をストックから外したところで、俺はフォアエンド付近から若干擦り切れたフェルトの切れ端を取り出した。

木製のストックは気温や湿度によって変形する恐れがあるため、できるだけ銃床との接触面を減らしつつ銃身を支えられるよう、間にフェルトを挟んでいたのだ。

さすがに布の劣化はどうしようもないので、俺はフェルトを新しいものに交換すると、ライフルを組み立て直し再びゼロインを行った。

その後、2箱ほど弾薬を消費しボルトアクションライフルを置いた俺は、次の銃を手にとった。

凡そ10kgほどの重量に、円盤を乗せたような形の47連パンマガジン。

リー・エンフィールドと同じ303口径弾を使用するLMG、ルイス軽機関銃だ。

「そいつも気に入ったかい？」

「ああ、もちろん」

以前、マルガリータが作ってくれたルイス軽機関銃は、オットーの「フラップフライヤー」に同乗して『グランドフィナーレ』に戦いを挑んだ時に湖に落としてしまったが、

同じものを彼女がまた拵えてくれたのだ。

いや……厳密に言えば、同じではない。

前のLMGは飛行ビークルの整備と並行して用意したため、間に合わせのコピー品であつたが、あの後数回の試射と改修を繰り返し、以前とは別物に仕上がっている。

具体的に改善点を上げるなら、機関部の撃発機構のスムーズ化、ボルト周りの精度向上、放熱カバーの省略だ。

作動メカニズムに難があり故障の多い銃だったことは明確なので、マルガリータはずっとリガー周りを改修し信頼性を向上させた。

また、オープンボルトゆえに構造の簡略化による耐久力の強化と放熱効果は期待できるが、その分汚れや異物が侵入しやすくなり故障のリスクが上がるため、パーツ同士の噛み合わせをタイトにしつつ機関部周りの外装には簡易的な閉鎖機構が追加されている。

ボルトキャッチと排莖口から僅かに出っ張った金属のカバーはその一環だ。

銃身を覆う円筒状のジャケットは、発射時のバックブラストを後ろ側に誘導し、気流を利用して銃身をより素早く冷却することを目的としたものだが……その効果は正直眉唾で、寧ろ熱風が射手の顔に吹き付けるといふ本末転倒な代物だったので、こちらは完全に廃止だ。

そんな具合に、前回よりも確実に使いやすくなったLMGを100メートルほど離れた金属製の向けフルオートで連射してみる。

ルイス軽機関銃にセミオート機構は無い。

「よし、いい感じだ」

本体ごと回転しながら弾薬をチャンバーに送り込む47連発のパンマガジンが空になる頃には、金属製のスクラップを組み合わせて作った標的が、二つほどズタズタになっていた。

周囲の樹木には数発ほど外した無駄玉により弾痕が穿たれていたが、途中で点射に切り替えてからは全て目標に命中している。

さすがに弾をばら撒くことを目的とした武器だけあり、リー・エンフィールドライフルほどの精度は望むべくも無いが、オープンボルトのLMGであることを思えば十分な結果だろう。

そのままさらに遠くの的を狙っても、弾倉一つ分の連射で10人は倒せるであろう火力を発揮している。

予想以上のスコアに俺はご満悦だ。

「ひゅく、さすがの火力だな」

「派手にやったね。あの的はもう交換しないと……」

一方のマルガリータは、フルオート機構に改修したモーゼルc96を動体標的のギミックに向けて一頻り撃つと飽きてしまったようで、銃をテーブルに置いて椅子に座ると退屈そうに足を組んでいた。

因みに、LMGに使う303ブリテイッシュ弾は、ハンティングライフルと違い特にホローポイント化はしていない、ノーマルの軍用フル・メタルジャケット弾だ。

さすがにマシンガンで野生動物を撃つバカは居ないし、人間に対して使うならメタルジャケットでも十分だからな。

仮に弾が貫通しても、当たりどころが悪ければ普通に死ぬうえに、ライフル弾の直撃を食らって戦闘力を失わない人間など居ない。

まあ、とはいえ……俺がこの銃を使う機会などそうそう無いだろう。

重火器としては明らかにチェーングンの方が火力は勝り、そもそもフルサイズのライフル弾を使うような交戦距離なら、それこそビークルに乗って戦った方が安全且つ確実だ。

俺が手持ちの銃器を必要とするのは、あくまでもビークル非搭乗時の護身用としてなわけで、LMGを持ち出すシチュエーションなどそれこそ「ジャガーノート」が使えず大勢の敵と相対したとき……そういう状況に陥らないといいな。

不吉な想像を頭から追い出しつつ一頻りルイス軽機関銃の射撃を終えた俺は、空に

なつた予備マガジン10個ほどに補弾すると、ガンケースにひとまとめにしてビークルのシートの後ろへ収納した。

備えあれば憂いなしってやつだ。

24話 射撃場 後編

ライフルとLMGを片付けた俺は、続いて9mm弾の弾薬箱を取り出した。

俺の護身用火器といえば、マルガリータがミスリル等をふんだんに使つてカスタムしてくれたワルサーがまず挙げられるが……今はシートの下に同じ規格の拳銃弾を使用する短機関銃サブマシンガンも隠し持っている。

八十数センチの全長、木製ストックにドラムマガジン。

これもマルガリータの作品で、スオミK P / — 3 1 と P P S h — 4 1 の中間のようなデザインのSMGだ。

元々、旧ソ連のPPSh—41——バラライカやマンドリンとも呼ばれる——は、冬戦争でフィンランドへ侵攻した際にフィンランド軍から鹵獲したスオミK P / — 3 1 をゲオルギー・シユパーギン技師が解析し設計したもので、構造や外観が似ているのは当然だろう。

もちろん、軽機関銃的な運用も期待されたスオミK P は、信頼性や精度の高さと引き換えに重量が嵩み、近距離の制圧火力を補うため開発されたシユパーギン短機関銃は、

軽く製造コストが低い反面精度は悪いなど、設計思想からして両者には若干の違いがあるが……。

で、肝心の俺の短機関銃の方はといえば……木製ストックの握り心地とレシーバーの上側に位置する排莖口、銃身の放熱カバーの角ばったフォルムはシユパーギン寄りだが、口径は9mmで内部機構もスオミSMGに近い。

要は、操作性と軽さ、信頼性と命中率の高さを兼ね備えた代物ってことだ。

弾倉は71連のドラムマガジンのほか、32連発のボックスマガジンもいくつか用意している。

スオミの71連弾倉は構造が複雑なドラムマガジンにしては珍しく信頼性の高いことで有名だったが、やはり大容量のドラムマガジンは重く嵩張るからな。

リロード時の動作においても、普通のボックスマガジンの方が扱いやすいのは明白だ。

そこら辺の規格を鑑みると、どうもこの銃はドイツ軍が鹵獲品のPPSh-41を改造しMP40の弾倉と9mm弾を流用して使えるようにしたMP41(r)に近いか。

SMGと聞いてまず大型拳銃サイズをイメージする現代の感覚からすると、かなり古い型の銃だが……それでも数十発の弾をバラ撒いて複数人を相手に制圧できる連射兵器の存在は、手元にあるだけでも心強い。

以前、『グランドファイナーレ』に拳銃一丁で潜入したときは、本当にギリギリの戦いを強いられたからな。

あの時はマジでSMGやアサルトライフルを用意していなかったことを後悔した。いざという時、この銃があれば頼りになるだろう。

まあ、最善なのは以前のように生身で敵地のご真ん中に潜入し銃撃戦をするハメにならないことだが……こればかりは運次第なので何とも言えないな。

そんな具合に、かつての苦い記憶に思いを馳せながら、俺はSMGのストックを肩付けして、じっくり目標に狙いを定め、トリガーを絞り落した。

ライフルなどに比べれば遥かに火薬量の少ない拳銃弾を、短機関銃の分厚いレシーバーや銃身を通して発射しているので、銃声は思いのほか小さい。

「っ！…今の、当てたの？」

何の気なしに狙った100メートルほど先の木片は、初弾から綺麗に撃ち抜かれ、オガ屑を散らしながら粉碎された。

さすがにこの結果には、銃の製作者であるマルガリータも驚いたようだ。

彼女も技術者として人並み以上には銃や火砲の知識がある以上、拳銃弾でこの距離の目標を正確に撃ち抜くむずかしさは、重々承知している。

とはいえ、拳銃より遥かに長いSMGの銃身から放たれた9mm弾は、その分ガス圧

の推進力を多めに受けつつ弾道も安定するため、普通に拳銃で撃った時よりも射程や威力が向上するのだ。

さすがにオーブンボルトで弾をばら撒くことを主目的にした銃だけあり、後年のアサルトライフルとほぼ変わらない撃発機構のMP5シリーズほどの精度は出ないが、それでもマルガリータお手製のSMGは100m程度の距離なら普通に精密射撃もこなせる性能を持っていることがわかった。

「さすがだね」

「いやいや、君のガン・スミスとしての腕がいいからさ。マルガリータが丹精込めて作ってくれた銃があれば、この程度軽い軽い」

「何言ってるの。ライフルならともかく、腕が良くなきゃ短機関銃でそんな芸当できないのは、さすがにあたしでもわかるよ」

俺の煽てに冷静な反応を返しつつも、マルガリータは僅かに頬を染めながら微笑んだ。

続けて俺は、短機関銃のセレクターをフルオートに切り替え、20m〜50m辺りに設置した的を銃口でなぞるように掃射する。

ドラムマガジンの分も銃本体の重さがあるので、思ったほど銃身は跳ね上がらない。

71連マガジンを撃ち尽くし、前進したまま止まったボルトを引いて薬室を開放する

と、連続射撃の熱が籠った機関部から僅かに白煙が立ち上る。

短機関銃からマガジンを外してレンジの方に目を向けると、先ほど狙った的の大半は粉々になっていた。

拳銃弾の射程や威力・貫通力が低いとはいえ、これだけの火力なら十人の敵も相手取れるだろう。

フルオート掃射を前提とした人体目標の有効射程は、大体150mくらいか。上出来だ。

「……………」

「? グレイ、どうしたの?」

短機関銃をテーブルに置いた俺は、疑問を発するマルガリータに曖昧な表情を返すと、シオルダーホルスタールから愛用のワルサーP38を抜いた。

標的のほとんどが壊れたので、そろそろ新しい物に交換しようと思うが……撃ち漏らしの一部を残したままにするのは何となく気持ちが悪い。

ターゲットに対してほぼ真横を向いた状態で銃を握った右腕を伸ばし、古典的な片手射ちのスタンスを取った俺は、セーフティを解除したワルサーの引き金をゆつくりと絞り落す。

軽い炸裂音と手首を蹴り上げるような反動の後、俺が狙った木片はど真ん中を撃ち抜

かれて宙を舞った。

SMGより銃身が短いため銃声は先ほどより若干激しめだ。

「っ！」

そのまま続けてトリガーを引くと、俺の放った9mm弾は狙った標的に面白いように命中した。

近い距離に並べた木片はもちろん、50mを僅かに超えると思わしき位置にある短い角材も、高速弾の鋭いパンチを受けて宙を舞う。

これも研鑽の賜物と言いたいところだが……ミスリル合金をふんだんに使用してマルガリータがカスタムしたワルサーは、拳銃とは思えない恐ろしい精度を発揮する。

この世界の火砲は総じて精度が低めだが、この俺の相棒は前世の射撃競技にも使えるレースガンレベルの性能だ。

「まっ、こんなもんか」

「っ——」

全弾命中という結果に上機嫌で拳銃のマガジンを交換していると、マルガリータの息を呑むような音が微かに聞こえた。

その後、残った9mm弾を全て消費する勢いで、CQBエリアの的を撃ちまくった。

実際の撃ち合いを意識した、タクティカルリロードや銃のスイッチングも交えた簡易的な戦闘射撃訓練だ。

遮蔽物から可動ギミックで次々と姿を現す人体標的に、目にも止まらぬ速さで短機関銃から弾を撃ち込んでいく。

時折、短機関銃を下ろして、シオルダーホルスターから抜いたワルサーに持ち替え、素早いスイッチングを意識しつつ効率よくターゲットの中心に弾をぶち込んだ。

移動ターゲットの操作はマルガリータにお任せだ。

そんな具合に、いつも通りの訓練メニューをこなした俺は、普段の平均より二回りほどのスコアでコンバットシューティングのトレーニングを終えた。

「……次は君もどうだ？」

「え？ あたしも？ いや、遠慮しとくよ」

「そう言わずに。ちよつとだけ。な？」

何度かしつこく勧めると、マルガリータは渋々といった様子で俺の短機関銃を手にとった。

俺のように本格的な戦闘訓練は積んでいないとはいえ、彼女も決して運動神経は悪くない。ええ火器の構造なんかはよく理解しているので、銃を撃つ姿はそこそこの様になっている。

それに、何だかんだ短機関銃をフルオートで撃ちまくってれば、彼女も銃をぶつ放す快感を徐々にわかってきたようで、腰だめに構えたSMGのマガジンを慣れた手つきで交換し、体を捻るようにして9mm弾を掃射し近くの木製ターゲットを薙ぎ払った。せつかくなので、現代の射撃技術をベースとしたコンバットシューティングも少し覚えてもらおう。

カバ―体勢からのクイックピーク、姿勢を低くした状態から素早いインステインクト射撃と……もちろん、手取り足取り指導させていただきましたとも。

そして、銃のクリーニングを済ませて射撃場の後片づけを終える頃には、既に日が落ちかけていた。

「――ああ、疲れたあ！ でも、たまにはこういうのも悪くないね。あんたが銃にこだわる理由が、ちよつとわかった気がするよ……つて、もうこんな時間っ!? 大分、遅くなったね」

「そうだな。そろそろ帰るか。博士も腹を空かせているだろうし、早いところ飯にしよう」
因みに、その日の夕食の献立は、ナツメック博士たつての希望で、以前にも作ったミラノ風カツレツだった。

上質な仔牛の肉を叩き、チーズをたっぷり混ぜた衣を塗してバターで揚げる、高カロリーで濃厚な料理だ。

マルガリータも気に入ってくれたようで何よりだが、せっかく運動した意味が……。

数日後、ナツメグ邸にて。

博士の研究室で軽く仕事の打ち合わせをしていると、開けっ放しのドアをマルガリータが軽く叩き、俺たちの意識を自分へ向けさせた。

「グレイ、電話だよ。ネフロ闘技場の支配人から」

「え？ デイリーノだって？」

予想外の名前にいささか面食らいながらも、俺はマルガリータに電話を取り次いでくれた礼を言い、固定電話のあるダイニングへ向かった。

外したまま台の上に置かれている受話器を手に取り耳に当てる。

「もしもし」

『あつ、グレイ！ もうっ！ やつと出たわね！ いつまで待たせるのよう！』

聞き覚えのあるオカマ野郎の声が響く。

相変わらず、電話越しでも喧しい奴だ。

もういい加減、あいつのキンキン声にもハチャメチャな言動にも慣れてきたので、俺

は億劫な空気を隠しもせず事務的に用件を尋ねる。

「どうしました？ 何かトラブルで？」

『大変なのよ！ とにかく、一刻も早く闘技場に来てちようだい!! 一大事よつ! (ガチャツ)』

あいつ……言うだけ言つて、一方的に切りやがったな。

掛け直しても、ディーノからこれ以上のまともな情報は得られないだろうし……仕方がない。

明らかに厄介事の予感がするが、向こうも俺の所属するネフロ闘技場のトップという立場のある人間だ。

面倒だが、無下にはできないか……。

俺は博士とマルガリータに急遽外出することを伝えると、「ジャガーノート」のキーを手に取りナツメツグ邸を後にした。

25話 ネフロ闘技場支配人デイーノの憂鬱

ネフロ闘技場の支配人デイーノから急な呼び出しを受けた俺は、愛機「ジャガーノート」を飛ばしてワグテール渓谷を抜けると、ネフロの街へ入りそのまま闘技場へ向かった。

最短ルートで来たので、時間はまだ昼前だ。

これだけ早く来てやれば、デイーノの奴も文句はあるまい……いや、そもそも朝っぱらから人を呼びつけるあいつが非常識すぎるわけなんだが……。

「ハア……」

あの喧しいオカマ野郎と会うのは憂鬱だが、ここで文句を言っても始まらないので、俺は早速闘技場の搬入口を潜った。

ビークル用の通路を進むと、その先から直接繋がる地下のビークル格納庫兼選手控え室へと出る。

ちやうど試合の合間の休憩時間らしく、控え室には顔馴染みのバトラーたちが揃っていたが……居るな。騒ぎの元凶も。

「あ〜〜〜んっ!! もうお終いよお〜! こんなんので一体どうすればいいのおお
おとお!!」

「そうねえ……でも、仕方ないわよ。そういうこともあるって」

「……………」

頭にキンキン響くオカマ声に俺は思わず顔を顰めた。

闘牛士のような派手な服とカイル髭のディーノはいかにも伊達男といった風防だが、あれでガちなゲ○というのだから……人間つてのはわからんものだ。

若干、困ったような表情でディーノを宥めるように相槌を打っているのは、普段は一階のメインカウンターを担当している受付嬢か。

時折、噂されている、あの二人が男女の関係という説は……ないな。

ディーノの奴は生粋のホモだ。

因みに、他の選手やスタッフは、ディーノがこの調子なのはいつものことと言わんばかりに、軒並み無視を決め込んでいた。

まあ、それが正解だ。

支配人が選手控室で愚痴ったり大騒ぎをする方がおかしい。

「あ〜…………お取込み中失礼。支配人、俺をお呼びと聞いたが……」

「ああっ!! グレイっ! 来てくれたのねえ! 待ってたわあん!」

猛烈な勢いでこちらに駆け寄って来るディーノは、そのまま俺に飛び掛かるようにハグをカマそうとしてきたが、すんでのところで躲した。

勢い余って「ジャガーノート」のレッグパーツに顔から突っ込みかけたディーノは俺に恨めし気な視線を向けるが、こっちだって咄嗟にカウンターパンチをぶち込むのをどうにか思い留まったのだ。

文句を言われる筋合いは無い。

「……で、どうしたんだ？」

「どうもこうも無いわよ！ もう、ネフロ闘技場はお終いだわあ。どんどん寂れて、お客も入らなくなつて、借金で首が回らなくなつて……アタシはクビよっ！ 最後はきつと甘い言葉で近づいてきた酷い男に騙されて、捨てられて……オヨヨヨヨヨ！」

「ああつ、泣かないで……。きつと、 그레이さんが何とかしてくれるわよ」

若干の愉悦を含んだ声で無責任なことを言い放つ受付嬢を、俺は恨めし気に睨んだ。
もう帰つていいか……。

「あゝ…… 그레이。支配人があの調子なので、私から説明しよう」

「ああ、ジンジャー。お願いしますよ」

ちようどいいところに助け船を出してくれたのは、元ビークルバトルーナメント

チャンピオンのジンジャーだ。

今はネフロ闘技場に復帰しており、通常試合のほかエキシビジョンや訓練教官もこなしている。

最近では、潜水用ビークルパーツの広告塔として、大口の契約を結んでいたはずだ。俺やシユナイダーと並ぶ数少ないSランクバトラード。

「端的に言つて、経営状態の悪化だな。この闘技場の財政はかなり……芳しくないらしい」

そんな内部事情を一選手でしかない俺やジンジャーに把握されるあたり、どうなんだと思わなくもないが……まあ、最早周知の事実か。

正直、今の闘技場は斜陽産業だ。

かつては、ビークルバトラードといえば町の守護者で英雄、子どもたちのあこがれの職業ナンバーワンだった……電気事業や新しいエネルギー需要、汎用ビークルのモデル刷新その他諸々の好景気によって、昨今のハッピーガーランドおよび周辺地域の経済は大きく様変わりしている。

それはネフロ近郊、そしてビークル産業全般も例外ではない。

経済活動が活発になり治安維持にも力が入れば、街の近くで短絡的に盗賊行為に及ぶアホは減る。

強力なビークルが民間のビークル乗りにも普及すれば、その分襲う方のリスクも増大するので当然だ。

「盗賊団の襲撃が減って、バトラーが以前ほど英雄視されなくなったと?」

「ああ、助けを必要とする事件が無ければ、所詮ビークル乗りなど荒くれの労働者に過ぎない。何せ、誰かを守る機会が無いのだ」

そういえば、少し前に顔見知りのビークル乗りから、今は盗賊狩りや護衛より速達や雑作業の方が稼げるなんて話も聞いたな。

開拓や産業革命の時代において、需要の絶対数という意味では、間違いなく『壊す』よりも『作る』仕事の方が多い。

後世でクローズアップされるかどうかはともかくとしてだ。

しかし……。

「別に盗賊団が無くなったわけじゃない。件数は減っても、その分キヤラバンルートや街道沿いから離れた場所で起きる襲撃事件は深刻さを増している気がしますけどね。戦闘の一件当たりの規模が大きくなれば被害も増える。旧式のビークルやパーツの値下げは、大量の戦闘ビークルを配備するハードルを大きく下げちまったし、基礎性能の向上や整備性の充実が利になるのは襲撃する側も同じでは?」

数か月前にも、俺は王都行き客船で随分と手の込んだ大規模な襲撃を受けた。

経済活動の規模の広がり、に秩序の管理が追い付かなかった結果がアレだ。

とはいえ……。

「身近な脅威が感じられなければ、人は簡単に危機そのものを忘れ去る。ブラッディマウンティスの爆撃からもうすぐ3年……。今のハッピーガーランドの飛行ビークルに対する呑気な構え様はどうだ？」

「それは確かに」

正義を可視化するのに不正義の存在は必要不可欠だからな。

悪と戦う以上にわかりやすいヒーロー像は無い。

「……話を戻すが、闘技場にとつて何より痛いのは規制緩和だろうな。護衛や討伐の仕事をするのに、以前はバトルランクが共通の指標だったが、今ではそれも変わりつつある。最近では、資本家や商社主導で討伐隊が組まれてビークル乗りが集められることも珍しくないらしい」

昔はライセンス保有者や護衛付き以外では入場制限が掛かっていたアレハーテ丘陵方面も、今では自由に出入りできるようになった。

あそこはネフロと油田・ガス田を繋ぐ重要な輸送ルートだからな。

人や物の移動の円滑化のためには仕方無いことではあるが、ある意味これもビークルバトルライセンスの『特別感』を失わせた。

「結局はブランドか……」

「我々もそれで食っているからな」

少なくとも、闘技場が街で唯一の娯楽だった時代は、もうとつくに終わっているのだ。少くとも、闘技場が街で唯一の娯楽だった時代は、もうとつくに終わっているのだ。美食、美術、音楽……ありとあらゆる芸術が、多様な形を以って市民の生活に浸透している。

そのうえで、ジンジャーの言うようにピークルバトラーの現実に則した活躍と市民の目に映る機会が無いとなれば……そりゃ、衰退するのも納得がいくというものだ。

「旧来のファン層は？　ピークルバトル自体はともかく、選手個人に根強い支持者がいると思いますが」

「イザベルは結婚を機に引退した。シラサギ芋農家の彼も、本業を優先するため、今はほとんど出場していない。ルーニーはネフロ消防隊から異動になった、一応栄転だそう。キラールエレファント団の首領は……彼がきまぐれなのは言わずもがなだ。……私と君とシユナイダーを除いて、残っているのはチャツキーくらいだよ」

「あちゃ……まあ、この手の延命はどちらにせよ一時凌ぎにしかありませんけど……」さらに、聞けば闘技場の収益は全盛期の半分くらいまで落ち込んでいるらしい。

ひどいな……。

さすがにそこまでとは思っていなかった。

「それに……」

「おいおい、まだ何か？」

「いや、これは君に言っても仕方無いことかもしれないが……今のネフロ闘技場は少し異常だ」

俺は黙って続きを促した。

「ハッピーガーランドのような大都会でもないのに、Sランクが3人……これを異常と言わずして何と表現する？」

確かに、俺とシユナイダーとジンジャーのSランク組を除いて、今この闘技場に所属しているのは万年Dランクのチャッキーと新人のみ。

所謂、中間層が欠如している状態だ。

それは、マツチメイクから闘技場における各選手のキャラクター、所謂ブランドイングにも大きく影響するわけだが……ちよつと待てよ。

何だかんだ言って、俺も今年で30歳。

年齢に対してビークル歴は短い方だが、数年に渡ってトーナメントチャンピオンの座を防衛していることを思えば、俺も間違いなくベテラン勢に組み分けされる。

「……俺も最早ロートルか」

「フツ、何を今更」

俺のボヤキをジンジャーは愉快そうに鼻で笑った。

まったく、失礼な奴だ。

これでも三人の中では俺が一番若いぞ。

そんな具合にどうでもいい方向へ思考が逸れた俺だが、ここで唐突に割り込んできたキーキー声に現実へ引き戻された。

「ちよつと、ジンジャー！　笑いごとじゃないわよ！」

鼻息荒くこちらへやって来たディーノに、ジンジャーも思わず苦笑しながら後退って距離を取る。

今の今まで存在を忘れていたが、元々はこの要請で闘技場を訪れたのだった。

「お願いよ、グレイ〜！　このままでは、ネフロ闘技場も閉鎖になってしまおうわっ！　何か、広告になって、利益も出て、ピークルバトル業界全体が盛り上がる手を考えて〜！」

無茶を言いやがる……。

そんな都合のいいアイデアがポンポン出てくるものか。

しかし、ため息をつく俺とは裏腹に、ジンジャーも真剣な表情で俺に向かって言葉を続けた。

「私からも頼む。このまま私たちの過去の栄光に縋り、業界全体が寂れるに任せるのは、さすがに新人バトラーが可哀想だ。それに……」

「ん？」

「(ディーノは……あれでも後ろめたい思いはあるんだ。少なくとも今までは、我々に闘技場の経営状態について愚痴ったりすることは無かった。今回のことでグレイに頼るのも、彼なりに悩んだ末のことだろう)」

最終的にジンジャーの取り成しもあり、結局俺は首を縦に振るしかなかった。

「——とは、いったものの……」

闘技場を後にした俺はひとりごちた。

ネフロ闘技場の宣伝、選手個々人のブランディング……そして、ビークルバトル産業全体の衰退対策か。

他人事ではないとはいえ、何とも面倒な話だ。

「……………ふむ」

とはいえ、正直俺も最近のネフロ闘技場の環境には、それなりに違和感を覚えていた。ジンジャーの言う通り、所属する主力バトルラーの半数以上がSランクで、後は新人も含めてDランクばかりというのは、些か行き過ぎだ。

低ランク同士のバトルなど、大抵はグダグダな泥仕合になるわけで、一種のウケ狙い

だ。

もちろん、フレツシユなルーキー同士の戦いというものも、場合によっては観客の心を掴むことが往々にしてあるものだが……少なくとも、日頃の会場のメインイベントとなるクオリティを安定して発揮することはできない。

かといつて、俺たちSランクと新人をマッチメイクすれば、それこそエキシビションや教練のようになってしまいかねないからな。

逆に、俺やシユナイダーなどのSランク同士の試合も、必ずしも盛り上がるとは限らない。

高ランク同士の戦いは、高性能なビークルと高度な戦術を駆使したハイレベルな試合となるが、その分だけ洗練され過ぎてしまうというのは口さがない評論家の言うところである。

俺がチェーングンを連射し長距離キャノンで障害物を吹き飛ばすのも、シユナイダーが壮絶な剣戟を披露するも、ある意味でもうお約束である。

端的に言えば、これも一種のマンネリ、爆破しか能がない某古い刑事ドラマのような印象を与えるのだ。

要は、中間層が居ないことで、ギリギリの順位の変動や新進気鋭のバトラーの大きな躍進が見られないのだ。

……問題の要点は整理できているが、全く以つて、どこから手を付けていいのかかわからない。

少し安請け合ひしすぎかな。

「(いらつしやいませ!)」

「(チャールズ! バーガーを1つくれ!)」

「(こつちはサンドイツチを2個ちようだい)」

いつの間にか警察署を過ぎ、俺はネフロ南地区に来ていた。

ネフロベーカリーの前あたりで立ち止まり、ベストのポケットから懐中時計を取り出し見てみると、時刻はもう昼過ぎだった。

……今日のところは、俺も昼飯はネフロで済ませるか。

家の方でも、既にマルガリータとナツメグ博士は食事を終えている頃だろう。

バナナマフィンの残りとコンフィチュール、冷蔵庫には作り置きの子エパースパイがあるの、食い物が無くて困ることは無いはずだ。

さすがに温め直すだけなら二人にもできる。

「ありがたいございました!」

「おう! また来るぜ!」

「じゃあね、シエリル」

ふと、先ほどから威勢のいい声が聞こえる店の方へ視線を向けた。

『ネフロベーカーリー』の向かいの駐機場が随分と賑わっている様子だが……まず目に入るのは『ネフロバーガー』の看板。

旧式のトラックを改造したと思わしきキッチンカーでは、若い夫婦が忙しく客に料理を提供している。

……そういえば、この店もいつの間にか出来ていたな。

原作では、気の弱いチャールズという男が勝気な女性シエリルに恋慕し、彼女に振り向いてもらうために始めた店だ。

チャールズの得意分野である料理を活かし逞しさアピールをするという計画で、シナリオ通りの展開なら、テキパキと店を切り盛りするチャールズは見事にシエリルの心を射止めるわけだが……どうやら、無事二人はくっ付いたようだ。

店を開くにあたり、バナラがキラーエレファント団に潜入し入手した料理のレシピが、新作料理のアイデアとして役立つ流れだったが……俺はこの立ち上げにタッチしていない。

もしかしたら、バナラが原作通り手を貸していたのかもしれないな。

見たところ、昼時は客足が絶えないくらい繁盛しているらしい。

『ネフロベーカーリー』でカレーパンか総菜パンでも買おうと思っていたが、今回はここにしてみるか。

「いらっしやい！ ……おやつ、あなたは！」

直接の面識は無いはずだが、向こうは俺のことを知っているようだ。

今更気になることでもないの、俺は挨拶もそこそこにメニュー表へ視線をやった。

店名の通り、イチオシはハンバーガーのようだが、ラインナップは随分と手広いな。

ロールキャベツにステーキ、コロツケなどの揚げ物も扱っているらしい。

原作でも、レシピの内容によって店で扱う料理の内容が変わる仕様だったが、システム的に両立できなかつた品まで並んでいるじゃないか。

「最初は、ハンバーガーのパテを焼く鉄板があるのだから、ステーキの注文を受けていた程度だったのですが……リクエストにお応えしているうちに、どんどんメニューが増えてしまつて」

「本当よ。あなた、手際の良さは凄いんだけど、たまに考えなしのところがあるから」

「ははっ……すまないな、シエリル。でも、君が手伝ってくれるおかげで、この店も順調に繁盛しているよ」

まあ、何だ……この店もネフロの食文化も、一歩ずつ確実に前進しているのは何よりだ。

とはいえ、この二人……。

人目も憚らずイチヤつくのは……うん、自分も気を付けよう。

俺もマルガリータも身に覚えがあり過ぎる。

「注文いいかい？」

「はい」

「それじゃあ、ハンバーガーを一つと、あとこのミニロールキャベツのスープを頼むよ」
ついでに新メニューのカレーコロッケをいくつか包んでもらいお土産を手に入れた俺は、「ジャガーノート」に乗り込み帰路に就いた。

26話 夏の休息1

そろそろ夏も終わりがけとなったこの時期。

気怠い午後の陽気のなか、上の空でおやつの準備をしながら俺はふと口を開いた。

「何か忘れてる気がする……」

冷蔵庫からピッチャーごと冷やしておいたアイスコーヒーを取り出し、氷を入れた三人分のグラスに注いでいく。

博士の実験室からパク……拝借してきた新品の分液漏斗で淹れた水出しコールドブリューコーヒーだ。

さすがに専用の器具を取り寄せることまではしなかったが、それでも挽いたコーヒー豆に一滴ずつ水を浸透させ、じっくり時間をかけてエキスを抽出するという過程は再現できる。

味の違いは期待できるはずだ。

これのために豆もやや苦みとコクが強い品種に変えてみた。

初の試みだが、いつものドリップコーヒーより透き通るダークブラウンの色合いは、控えめな香りと相まって成功を予感させるには十分な美しさだ。

キューブ氷がグラスの壁面に当たる音を聞きながら、俺はテーブルの博士とマルガリータにアイスコーヒーをサーブしていく。

考え事をしていても、ここ数年に渡ってこなし続けてきた家事の動作に淀みは無い。

「何だったかな……?」

「闘技場の件か? 確か、ピークルバトル産業の存続が云々とか言っておったの」

「いや、そんなどうでもいい話ではないです」

「どうでもいいって……あの支配人、電話じゃかなり深刻そうだったけど」

独り言にしては大きい俺の声に、博士は目の前のバナナジェラートを口に運びながら返答した。

マルガリータは俺の物言いに一瞬だけ呆れ顔を見せるも、彼女の意識もまたジェラートに散らしたピスタチオクランチをスプーンで寄せるのに集中している。

まあ、二人の薄い反応からして、大した用事ではなさそうだが……。

「——っ! 思い出した! 一大事じゃないかっ!」

仕方なしに、俺も自分のジェラートに取り掛かり、アイスコーヒーに口を付けたところで……俺は唐突に思い至った。

思わず椅子を蹴って立ち上がると、二人が一体何事かと視線を向けてくる。

「今年はまだバーベキューを一度もしていないじゃないか!」

俺の言葉に博士とマルガリータは啞然とした顔を見合わせ、次いで俺に向き直ると、二人の表情は呆れのものへと変わった。

妻と師の冷めた視線が俺に突き刺さるが、今は説明や説得をしている時間も惜しい。急いでジェラートを掻き込んだ俺は、勿体ないと非難の目を向けてくるマルガリータを尻目に、すぐさまスケジュールを確認した。

そんなわけで、我がナツメツグ・コーポレーションは社員一同、急遽バーベキュー大会を開催する運びとなった。

前倒しで雑務と仕事を片付け、休日をねじ込むスケジューリングを強行した俺は、しばし博士とマルガリータからクレームを受けたものの、どうにか手筈通りに全員の暇な日程を重ねることができた。

数日前から用意は始めていたので、大半の準備は終わっている。

炭も湿気ていないし、しばらく物置に仕舞われていた網と鉄板も洗い直し、蓋つきの大型バーベキューコンロも異常が無いことは確認した。

会場は家のすぐ近く、スキトール湖を望める高台——ちようどオットー&ウィリーのガレージの辺り——で開催する予定なので、設備もすぐに運び出せる。

この距離なら運搬にピークルを使うまでもない。

飲み物も前日からしつかりと冷やした。

そして当日……。

あとは……火を熾して、料理して、楽しむだけだ。

うん、当日もなかなかやる人が多いね。

「屋外で肉を焼いて食う楽しみはわからんでもないが……やはり、準備がちと面倒じゃない」

「本当ですよ。それに何も、こんなクソ暑い時期にやらなくてもねえ……」

「何をおっしゃいます!! バーベキューは夏に外でやるからいいんでしょうがー」

椅子やパラソルや食器を用意しながらぶー垂れる博士とマルガリータに俺は力説した。

もちろん、秋にやるバーベキューも悪くない。

収穫シーズンで新鮮な食材が出回るのを待てばメニューの選択肢も広がるうえに、真夏に比べて虫も少なく、熱中症のリスクも低下する。

寧ろ、肌寒い時期に直火で暖を取りながら熱々の料理を頬張るのも、アウトドアの醍醐味だ。

しかし! 敢えて言おう!

炎天下の屋外で設営し、火熾しに料理にと忙しく動き、肉が焼き上がり……そこに

待ちきれず流し込むビール!

これ以上の極楽があるかね?

「そう思うなら、こつちも手伝つてくれよ、旦那。ただできえ面倒くさいんだぜ」

「ハア、ハア……人使い荒いよ」

力説していると、オットー&ウィリーが水を差してきた。

オットーは大型の蓋つきコンロとは別に用意したU字型のコンクリートブロックで大量の炭の点火作業を進め、ウィリーはひたすら薪を割って俺の元へ運んでいる。

薪割りが重労働なのはずがな。

着火はガスバーナーで行うとはいえ、大量の炭に満遍なく火を纏わせ、不完全燃焼の赤い炎が無くなり落ち着くまで面倒を見るのは、なかなか骨が折れる作業だ。

もちろん、どちらも本来バーベキューの主権者たる俺の仕事ではあるが……。

「悪いな。こつちはこつちで忙しいんだ」

俺はウィリーに運ばせた薪を大型コンロにぶち込み、ひたすら肉を焼いていた。

蓋の隙間からもうもうと湯気を吐き出す、ゴツイ金属製の大型バーベキューコンロ。

今回、我がナツメツグ家の開催するバーベキューパーティーは、本場アメリカ式(笑)の本格派だ。

小型コンロでちまちま薄切り肉を炙る焼肉モドキとは迫力からして違う。

もちろん、肉がデカければ火が通るのに時間が掛かる。

凝った彩りや調理法に拘れば、さらに時間や手間を要するのは当然だ

決して、一番面倒な作業をポンコツ飛行兄弟に押し付けたわけではない。

……因みに、何故この二人がうちのバーベキューに参加しているのかというと、たま「フラップフライヤーⅡ世」のメンテナンズでナツメツグ博士の工房を訪れていたからだ。

この日は牛乳配達もテストパイロットの仕事も休みだと聞いていたので、渡りに船とばかりに、俺は二人を口車に乗せ……楽しいイベントにお誘いしたというわけだ。

決して。決して、食材を余分に買い込み過ぎて、消費に困ったからではない。

「つだあああああつ!! さすがに限界だぜ、旦那! 俺が蒸し焼きになっちまう」
「ぜえ、ハア、はああ……ま、薪はもう十分でしょ?」

音を上げるオットーに促されコンクリートブロックの中を覗くと、ほとんどの炭が赤くいい感じに色づいていた。

炭の上に手を翳してみると、熱源からは結構な距離があるにもかかわらず、じんわりとした温かさを掌に感じる。

この手の作業に慣れているわけでもない素人の力技にしては、悪くない出来だろう。ウイリーの方も、既に暖炉だけでひと冬越せそうなほどの薪がコン口の横に積み上

がっている。

「よし、これなら大丈夫だ。二人とも、お疲れさん」

「ふい~~~~~!」

「じゃあ、飲み物を出してくるか。……オットー、そっちの炭は焼き鳥用のコンロに移してくれ。積み方には気を付けるよ。均等な火力で、長時間燃焼が持続するよう慎重にな。あと、ワイリーはしばらく大型コンロの方を見ていてくれ。ちょうど中の薪も少なくなっている頃だ。ついでの補充を頼む」

「ひえ~~~~~!?!」

「グレイ」

「おつ、サンキュー」

マルガリータが渡してくれた瓶ビールを受け取った俺は、早速とばかりにテーブル上の栓抜きに手を伸ばした。

炎天下の過酷な作業で、お預けはもう限界だ。

栓抜きをビール瓶の上部に引つ掛け、テコの要領で軽く持ち上げると、小気味よいポーンという音を立てながら金属製の蓋が飛ぶ。

調子に乗って少し強めに栓を飛ばしたため、褐色の瓶の口から真っ白な泡が溢れ出

す。

予め水を満たした金属バケツで瓶ごと冷やしておいたので、中身はキンキンだ。

「おつとつと……それじゃ、乾杯！」

「うむ、乾杯じゃ」

俺の音頭で、博士たちも各々手に持った瓶ビールを一気に呷った。

咽頭感覚を麻痺させる冷感。

次いで、炭酸の心地いい刺激と、ジンツと染み渡るような冷たさが喉の奥を通り抜ける。

「——くうう！ 美味え！」

「ふはっ！ ああ美味しい！」

「ふうう……効くのう」

「んくおおおお！ こいつはたまらん!!」

「ング、んぐ、ゴツ—— だあく、生き返るよ！」

瞬く間に瓶の中身の大半を飲み干し大きく息をついた俺に続き、マルガリータと博士も満足げなため息を吐いた。

火熾しと薪割りを担当したオットー&ウィリーは、間髪入れず二本目の瓶に手を伸ばし、自前のツールナイフやテーブル上の栓抜きで慌ただしく蓋を開け、続けざまにビー

ルを飲み干している。

「皆かなりのペースだが、小瓶なので立て続けに何本か空けたところで、さして酔いは回らないだろう。」

「さて、それじゃ早速、メインを召し上げれ」

「わっ！ 凄いな……」

俺がバーベキューコンロの蓋を開け放つと、マルガリータが歓声を上げた。

シンプルに塩コショウを振っただけのTポーンステーキ。

金串に刺してシユラスコっぽく仕込んだ肩ロースやモモ肉。

各種ソーセージにバーガー用の特製ハンバーグ。

薪の火でガンガン焼いてワイルドな焦げ目を纏った肉の山は、暴力的に胃を刺激する匂いを放っている。

「ささ、熱いうちにどうぞ」

「待つてました！」

真つ先にやって来たマルガリータにほっこりしながら、彼女の皿に適当にシユラスコを盛つてやり、博士とオットーとウイリーにも串ごと掴んだ肉の塊を渡していく。

いい感じに焦げ目がつき湯気を上げる肉塊は、それだけでもテンションが上がる。

小皿に入れたオリジナルレシピのバーベキューソースが全員に行き渡ると、各々が思

い思いの方法で料理を味わい始めた。

「熱っ、ホフツ！」

「ほっほっ……これは、たまらんな。むっ！ こっちのソースも悪くないではないか……」

「ハフツ、んぐ……最高だぜ、 그레이の旦那！」

「熱ちちっ！ ここにビールを流し込むと……——美味あ！」

豪快にシユラスコにかぶりついたマルガリータが、思わずといった様子で熱さに喘いだ。

博士は俺が毎年改良を重ねている各種バーベキューソースを片っ端から試している。

オットーは一心不乱に肉を咀嚼し、ウイリーは両手にそれぞれフォークと瓶を持ってソーセージとビールを交互に味わい。

皆、満足そうで何よりだ。

俺も早速シユラスコを口に運ぶ。

比較的、歯ごたえのある部位にもかかわらず、ふっくら焼き上がった肉塊は予想よりも遥かに容易に繊維が解けた。

荒々しい薪の香りが付いた焦げ目に、甘めのトマトベースのバーベキューソースを垂らし口に運ぶと……これまた最高としか言いようがない。

「ふむ……まあ、味で言えばプライムリブの方が上じゃな。しかし、たまにはこのような荒っぽい焼き方の肉も悪くはない。バーベキューソースの安い味も妙にクセになるのう」

「この腸詰めもジューシーで美味しいよ。あつ、これにもバーベキューソースが合うじゃない」

そうだろう、そうだろう。

あまりにも酒が進む味に、ついつい俺も二本目のビールに手が伸びてしまう。

バケツ内の氷は半分ほど溶けかけているが、あとで足せばいいか。

うちには大型の製氷機があるので、氷は使い放題だからな。

……つと、そんなことを考えている内に、網の上が大分寂しくなってきた。

大掛かりなバーベキューをやる割には少人数ではあるが……日頃からビークル整備や力仕事をこなしているマルガリータに、博士も年齢の割に健啖家だし、何よりオットー&ウィリーの兄弟は飛行ビークルのパイロットと整備士というこれまたハードな職業だ。

この程度の量など難なく平らげてしまうだろう。

追加の肉を網の上に並べながら、俺はやや急ぎ目で次なる料理の用意を始めた。

「さ、Tボーンも切り分けましたよ。次はスペアリブとチキンも焼いていくんで」

27話 夏の休息2

夕日がネフロの街方面に沈み、辺りが薄暗くなつてからも、バーベキューパーティーは続いていた。

一通り肉とバーガーを味わい、飲み物もビールからワインや水割りに変わり、そろそろ大盛り肉の消費ペースも落ちてきた頃合いで……どこから聞きつけたのか、ピジョン牧場の面々がやって来たのだ。

メリー乳業の関係者と近隣の暇人どもは、早々に仕事を切り上げて飯と酒をタカリに来やがったわけだ。

奴らも最低限ラム・チョップと新鮮なチーズを持ち寄つてくれるだけの常識はあつたが……おかげで、こっちはバーガー用のパテとパンズを追加で用意する羽目になつた。

まったく……。

「おーい、 그레이！ こっちのソーセージは全部焼いちまつていいのかい？」

「ああ、ご自由に。面倒だから、そっちは勝手に焼いて勝手に食つてくれ」

「おーい、 그레이の旦那。ステーキはどうした？ せっかく、特大のローストビーフを

食えると期待してきたのによ」

「もう無えよ。チキンならまだあるだろ。骨付きの方から早めに食え」

予想外に大規模な催しになってしまったが……まあ、余分に用意しすぎた足の速い食材を処分できたと思えばいいか。

これで、我が家の食卓がしばらくキーマカレーとチキンコンフィだらけになることは避けられた。

そんなことを考えながらも、俺は新たに準備を整えたフィラデルフィア・チーズステーキを手早く仕上げ皿の上に並べてゆく。

鉄板で炒めた薄切り肉と玉ねぎを濃厚なチーズソースと一緒にホーギーロール——コツペパンのアメリカ版的なもの——に挟んだ、ポリウム満点の一品だ。

厳密には、パンは伝統的なホーギーロールではなく、ネフロベーカーリーのフランスパンを切ってバターを塗ったものだが、これも十分美味しいので問題ないだろう。

貰い物の数種のチーズをブレンドして溶かしたソースも、濃厚な肉と香ばしいパンの味によく合うはずだ。

「さて、こんなもんか……んじゃ、ここは任せますんで」

「はいよ。作り方はわかったから、あとはうちらで引き受けるよ」

大皿二つ分ほどのチーズステーキを作り終えた俺は、コンロをメリー乳業の女将さん

たちに譲り焼き場を後にした。

まだ満腹には程遠い奴らも居るが、向こうは向こうでソーセージや肉を自分で焼いてパンに詰め即席のホットドッグやバーガーを作って勝手にパクついているし、いざとなれば女将さんたちが追加のチーズステーキを作ってくれるので放置でいいだろう。

熱源から距離を取り一息ついた俺は、自分用に確保しておいたバゲット3分の1サイズの小さなチーズステーキを齧った。

既に腹の空き容量はあまり余裕も無くなっているが、このくらいのサイズならまだ美味しく食べられる。

固めのバゲットにトロトロのチーズソースと牛肉の繊維が合わさった食感を楽しみ、そこへ冷たいサングリアを流し込むと……得も言われぬ美味さだ。

因みに、このサングリアは俺の自家製で、あまり好みではない貰い物のワインにオレンジとレモンを漬け、砂糖とブランデーをぶち込んだだけの簡単なものだ。

単純で甘口な仕上げにしたのが功を奏したようで、濃厚でアメリカンな料理によく合う。

ドン・スミスお墨付きのワインに慣れてしまうと今更酸味のキツイ安ブドウ酒など飲む気が起きないが、これはこれで悪くないな。

ミニサイズのチーズステーキを平らげ、自家製サングリアを飲み干した俺は……今度は地面に直置きしたコンクリートブロックの方へ向き直った。

U字型ブロックの中には、最初にオットーが点火した炭がまだ残っている。

焼き鳥用のコンロでは、先ほど皮、せせり、モモ、レバー、ハツ、砂肝、セギモ、キンカン、ボンジリと……大量の鶏を焼いた影響で、炭は脂とタレの焦げた独特の匂いを纏っているが、こちらの予備の炭はまっさらな状態だ。

幸い、熾火はまだ保たれていた。

これなら使えるな。

「む？　また鶏を焼くのか？」

「ねね、グレイ。それは？」

U字ブロックに予備の網を乗せ準備をしていると、ナツメツグ博士とマルガリータがこちらへ寄って来た。

俺の行動パターンをよく理解している二人だけあって、早速嗅ぎつけてきたか。

出来上がってからののお楽しみと適当に言葉を濁しつつ、俺は予め用意していたマシユマロを串に刺し、網の上に並べていく。

均等に焼き目が付くよう細かく串を回転させていると、徐々にマシユマロは砂糖の焼けた甘い匂いを漂わせ始める。

肉に火を通すわけではないので、表面をカリツとさせる程度に焦げ目を付ければ十分だ。

「じ——」

「……しようがないな。ほら」

「ありがと。……はふっ！ おいひい」

わざとらしい擬音と視線に耐えかね、焼き立てのマシユマロを肩越しに差し出すと、俺の首に腕を回して後ろからしな垂れかかるようにしていたマルガリータが、ひよつこり顔をだして先端のマシユマロをパクついた。

熱々のマシユマロに喘ぐ彼女に串をそのまま渡し、俺は残りの焼きマシユマロを二枚のクッキーに手早くサンドしていく。

マシユマロとクッキーの間に小さく割った板チョコも入れれば、それだけでバーベキュー定番のデザート『スモア』の完成だ。

「ほほう。熱したマシユマロを使った菓子か。これはバーベキューならではの品じゃない」

「ええ。俺の故郷発祥のものではないですが、本場では定番でしたね。せっかくコンロと炭を用意したんだから、最後まで利用しないと」

料理と呼べるかも怪しい、ひどく簡単な工程で出来るスイーツだが、こういうのは何

故かテンションが上がるんだよな。

特に子どもは——もちろん、甘いものに目が無いマルガリータも——大好きだ。

俺はマルガリータと博士にも完成品のスモアを渡し、ついでにこちらへ遠慮がちな視線を向けていたメリー乳業の三男エリツヒも呼び寄せて熱々のデザートを勧める。

「ありがとうございます、 그레이さん」

「おう。よかつたら追いチョココ……追加のチョコソースも使つてくれ。そのまま絡めてもいいし、こうやって上から掛けても美味しいぞ」

「うわあ！」

末っ子にもかかわらず兄たちよりしつかり者の印象が強いエリツヒだが、こうしてスイーツに目を輝かせているところは年相応だ。

マルガリータにも小鍋で溶かした追いチョコソースを小皿に多めに注いで渡してやる。

残りのスモアは、適当にデザートのカットフルーツと一緒に皿に盛っておけば、各々勝手に食べるだろう。

今しがた甘い匂いに釣られてやってきたご婦人たちも居るので、これもチーズステキと同じく足りなければ自分たちで追加を作るはずだ。

甲斐甲斐しく年下の子どもたちにスモアを配るエリツヒの姿を横目に見ながら、一仕

事を終えた俺はゆつくりとテツキチエアに腰掛けた。

「ふう〜」

キャンバスの背もたれに体を沈め、ようやく訪れた平穏にホッと息をついた。

俺も肉やパテを焼きながら自分の分はしっかり食っていたが、こうも大所帯に押し掛けられてしまうとはやはり調理の方が忙しくなってしまう。

間に合わせとはいえ、あの人数の腹を満たすだけの料理を用意しなければならぬ以上、どうしてもそれなりの手間と時間が掛かるからな。

こちらにも相応に消耗するのだ。

「ふつ、相変わらずマメなことじゃ。結局、お前さんがてんてこ舞いになっておるではないか」

「お疲れ様、グレイ。はい、これ」

「ま、性分なんで仕方ないですよ。……ありがとう、マルガリータ」

呆れた様子の博士に生返事をしながら、マルガリータが差し出してきたアイスティーを受け取る。

ビールやサングリアによって蓄積したアルコールにより体が水分を欲しているのか、さっぱりしたソフトドリンクがやけに美味しく感じる。

普段は健康のために酒は飲んでも控えめを心掛けているが、今日は何かと理由をつけて鯨飲してしまった。

おまけに夏のバーベキューというモロにアウトドアなイベントで、人一倍調理をこなしていれば自然と喉も渴き酒も進むというものだ。

「あゝ……何だか、眠くなってきたな」

「フフツ、ちよつと飲みすぎたみたいだね」

デツキチエアの端に横向きに腰掛けたマルガリータは、自分の飲み物を膝の上に置くと俺の方へ向き直り軽く微笑んだ。

夕暮れの空に見上げるコンロの火に照らされたマルガリータの笑顔は、普段から彼女のことを見慣れている俺でも思わずゾクツとするような美しさだ。

夕日は人の顔を可愛く見せる効果があるなどと聞かすが、マルガリータに限ってはそんなものなど必要ないらしい。

「(っ……ちよつと!)」

「おつと! ……ダメですか」

とはいえ、ここぞとばかりの彼女を抱き寄せようとすれば、さすがに恥ずかしがり屋のマルガリータだけあってすげなく振り払われてしまう。

彼女の酔いも浅くはないはずだが、残念ながら羞恥心が薄まるには程遠いらしい。

牧場の連中に囃し立てられるのは今更だし、最早気にする必要など無いと思うがな……。

仕方なしに、酔い覚ましのアイステイーを引き続き飲みつつ、軽く彼女の手を握るだけで我慢するが……まあ、こうしてマルガリータの赤面した横顔を見ながらのんびりするのも一興か。

丘の上から一望できるスキトール湖の眺めも悪くない。

湖の景色はうちの窓から見えるので、今更物珍しさも有難みもさして感じはしないが……いや、そういえば、最近この湖にも新しい光景が加わりつつあるのだったな。

スキトール湖のど真ん中に位置する人口建造物。

建設用クレーンの先端やコンクリートの土台の端から航空障害灯を光らせているあれは、例のイワツバメの滝方面の水力発電所計画にいつの間にか便乗して建設が進められていた水上ガス採掘プラットフォーム、所謂ガス田だ。

「そういえば、あそこもいつの間にか建設が進んでいたね。まだ着工して間もないだろうに、もうプラントが出来上がってるよ」

俺の視線の向く先を察して、マルガリータが話を振ってきた。

「ああ。まさか、うちの近所で天然ガスが採れるとは……」

「灯台下暗しじゃな。しかし、何より驚くべきは……あの事業に彼奴らが囃んでいない

ことかの」

博士の言う『彼奴ら』とは、デザートホーネット団と所縁の深いガス会社のことだ。ガソリンや灯油以外の石油資源を余すところなく利用するため、俺とナツメツグ博士の主導で始めた新技術ビジネスだが、地下水の採掘や貯留技術を流用するためノーラの伝手で元デザートホーネット団の構成員や身内を雇ったことに端を発している。

現在では、LPガスを含む新たな石油資源であるナフサ関連の製品は、採掘から精製・販売に至るまでほとんど彼らの手によって流通しているのだ。

ところが、件のスキートル湖水上プラントの運営に関しては、俺や例のガス会社は一切タツチしていない。

プラントの建設から内部設備の導入まで、全て王都の何とかという会社の主導で行われているのだ。

「珍しいことじゃな。お前さんが完全に出し抜かれるとは」

「ええ、何せ予想だにしませんでしたからね。俺が天然ガスの話なんかを小耳に挟んだのは、もう建設会社の入札も済んだ後ですよ」

言い訳に聞こえるかもしれないが、例のガス会社もスキートル湖で天然ガスが採れるという話には懐疑的だった。

実際にここまで設備の建設が進んでいる以上、それは事実なのだろうが……まあ、俺

も彼らも人間である以上、思いも寄らない見落としなど往々にしてあるものか。

「おまけに、この手の先行きが不明瞭な事業に初期から積極的に投資しようなどという者が現れるとは」

「そうですね、それこそ王都の金持ち連中なんて……。水力発電所するときも、結局外部からの資本が入ったのは、稼働計画までほぼ目処が立った時期だったし」

「まあ、嗅覚のいい連中つてのはどこにでも居るものです。俺たちが王都へ行つたときにも、一部の連中はグイグイ接触してきたじゃないですか。それこそ、水力発電所の件は順調に進んでいますから、他にも新世代のエネルギーに積極的に目を付ける奴が出てきたのかも」

とはいえ、ここまで徹底的に利権を攫われるのは些か予想外だったな。

採掘から流通販売に至るまで、全て俺たち抜きで抱き込まれるとは。

もちろん、周辺の土地の取得や建設資材の融通に際して、俺もセントジョーンズ卿もいくらか噛んで美味しい思いはしているのだが……。

「酔狂な奴も居たものじゃ」

「ええ、まったくとく」

何はともあれ、あの一大工事が終わるまでスキトール湖でのレジャーもお預けだ。

新型の釣り竿アームを試そうと思っていたのに残念だ。